現代日本文學全集
XXIII

岩野泡鳴集
上司小劍集
小川未明集

改造社版

杉浦非水裝幀

岩野（上）上司（中）小川（下）三氏と岩野氏の原稿「おせい」の署名及びその第十七枚

「泡鳴・小劍・未明集」目次

岩野泡鳴集

上司小劍集

小川未明集

岩野泡鳴集

序

泡鳴氏の人及び藝術

岩野泡鳴氏は明治大正の我が文壇に於て、巨大なる足跡を遺した文學者の一人である。作家としては其の作品の量に於ても質に於ても、恐らく第一位を占むべき、決して第二位に落すべからざる人であらう。

泡鳴氏は尤も多く小說に力を注いだし、作品の量も非常に多い。從つて藝術家として人としての泡鳴氏を知るには、何と言つても其の小說を讀むのが便利であらうが、しかも歐洲近代の藝術論を、夙くから手に入れて、我が文壇に紹介したことも亦忘るべからざる業蹟の一つである。アーサア・シモンズの『表象派の文學運動』などは、當時に於ては藝術論の尖端を行つたもので、今も猶その恩惠を蒙つてゐるものが頗る多いであらう。

素と泡鳴氏は詩人で、野口氏や蒲原氏と共に、當時の詩壇に於ける一方の驍將であることは、私が茲に贅するまでもない。私は詩の批評は出來ないから、單に氏の小說だけについて推奬の勞を執りたいと思ふが、氏の劇作と共に、その詩も亦印象派或は象徵主義の藝術で、奔放熱烈な、氏の刹那主義的な情感を表現するに於て、他の追隨を許さゞる、氏特得の自由大膽な作風を發揮したものと言つて可いであらう。鬱迭の素朴な、どつしりした彫刻をでも見るやうなのが、恐らく氏の藝術の手法で、氏の思想感情を盛るには、それが最も適當なものであつたのは言ふまでもない。氏の藝術論に於ける確乎たる主張は、氏自身の學問と體驗から生れ出たもので、その主張を行るに當つては、直情徑行一歩も讓らないところがあつた。さうした態度は氏の場合には多少損であつたかも知れないが、その自信の強いことと鬪志の熾んなことは、亦氏の大きさ高さを成してゐるものであらう。

「耽溺」といふ氏の最初の小說は、私が當時最も感服したものの一つだが、表現法に氏特得の生彩があつた。それに續いた「斷橋」から晚年の「お清の失敗」に至るまで、作品の數は非常に多い。どれを讀んでも氏の生命が吹きこまれてゐる。作品によつては頗るヒウモアの要素に富んだものもあるし、社會的な傾向を帶びたものには、諷刺的な要素を多分にもつたものも鮮くはない。刹那主義の擁持者であつた氏は、戀愛事件に於て、屢々世間を驚かしたが、政治的社會的な歷史上の出來事についても、氏特有の批評的態度でアイロニカルに書いたものが、可なり有つたやうに思ふ。氏はさう云ふ客觀的な事件を取扱ふのに、頗るビビッドな表現法をもつてゐた。これは氏に藝術家としての優れた敏感性があつたからで、氏の感覺の烙爐へ入ると、何ものも泡鳴式な生彩を帶んで來たものである。

氏は正しく國家主義者であつた。日本人主義であつた。氏は人一倍獨創を尙んだ。そして亦或る程度まで獨創家であつた。氏の藝術はもつと高く買はれても可いものだらうと思ふ。多分さう云ふ時期も來るだらうと思ふが、繪具が少し生だと云ふやうな點では、多少割引をされてゐるのかも知れない。しかし繪具の生なところに氏の刹那主義を行つた印象派風の藝術の生命があるので、いつの場合でも氏の繪具には想像以上の細密な感覺が生きてゐる。泡鳴氏のやうなのが、矢張り眞實の藝術家ではないだらうか。

昭和五年三月

德田秋聲

耽溺

一

僕は一夏を國府津の海岸に送ることになつた。友人の紹介で、或寺の一室を借りるつもりであつたのだが、たづねて行つて見ると、いろいろ取り込みのことがあつて、この夏は客の世話が出來ないと云ふので、またその住持の紹介を得て、素人の家に置いて貰ふことになつた。少し込み入つた脚本を書きたいので、やかましい宿屋などを避けたのである。隣りが料理屋で藝者も一人かかへてあるので、時々客などがあがつてゐる時は、隨分さう〴〵しかつた。然し僕は三味線の浮々した音色を嫌ひでないから、却つて面白いところだと氣に入つた。

僕の占領した室は二階で、二階はこの一室よりほかになかつた。隣りの料理屋の地面から、丈の高いいちじくが繁り立つて、僕の二階の家根を上までも越してゐる。いちじくの青い廣葉はもろさうな物だが、之を見てゐると、何となくしんみりと、氣持ちのいい物だから、僕は芭蕉葉や青桐の葉と同様に好きなやつだ。而もそれが僕の仕事をする座敷から直ぐそばに見える。

それに、その葉かげから、隣りの料理屋の綺麗な庭が見える。燈籠やら、いくつにも分岐した敷石の道やら、瓢簞なりの池やら、低い松や柳の枝ぶりを造つて刈り込んであるのやら、例の箱庭式はこせついて厭な物だが、掃除のよく行き屆いてゐたのは、これも氣持ちのいい事の一つだ。その庭の片端の僕の方に寄つてるところは、勝手口のあるので、他の方から低い竹垣を以つて仕切られてゐて、そこにある井戸――それも僕の座敷から見える――は、僕の家の人々もつかはせて貰ふことになつてゐる。

隣りの家族と云つては、主人夫婦に子供が二人、それに主人の妹と藝者とが加はつてゐた。主人夫婦は極お人よしで家業大事とばかり、家の掃除と料理との爲めに、朝から晩まで一生懸命に働いてゐた。主人の妹――名はお貞――と云ふのが、昔からのえら物で、そこの女將たる實權を握つてゐて、地方有志の宴會にでも出ると、井筒屋の女將お貞婆さんと云へば、なかなか幅が利く代り、家にゐては、主人夫婦を呼び棄てにして、少しでもその意地の惡い心に落ちないことがあると、意張りたがるお客が家の者にがなりつく様な權幕であつた。

お君といふその姪、乃ち、そこの娘も、年は十六だが、叔母に似た性質で、――客の前へ出ては内氣で、無愛嬌だが、――とんまな兩親のしてゐることがもどかしくツて、もどかしくツてたまらないと云ふ風に、自分が用のない時は、火鉢の前に坐つて、目を離さず、その長い頤で兩親を使ひまはしてゐる。前年など、かかへられてゐた藝者が、この娘の皮肉の折檻に堪へ切れないで、海へ身を投げて死んだ。それから、急に不評判になつて、あの婆さんと娘とがゐる間は、井筒屋へは行つてやらないと云ふ人々が多くなつたのださうだ。道理で餘り景氣のいい料理店ではなかつた。

僕が英語が出來るといふので、僕の家の人を介して、井筒屋の主人がその子供に英語を教へてくれろと頼んで來た。それも眞面目な依頼ではなく、時々西洋人が來て、應對に困ることがあるので、「おあがんなさい」とか、「何を出しませう」とか、「お酒をお飲みですか、ビールをお

飲みですか』とか、『藝者を呼びませうか』とか、『大層上機嫌です、ね』とか、『またいらつしやい』とか、さういふことを專門に敎へてくれろと云ふのであつた。僕は好ましくなかつたが、仕事のあひまに敎へてやるのも面白いと思つて、會話の目錄を作らして、そのうちを少しづつと、二人がほかで習つて來るナショナル讀本の一と二とを讀まして見ることにした。お君さんとその弟の正ちやんとが每日午後時間を定めて習ひに來た。正ちやんは十二歲で、病身だけに、少し薄のろの方であつた。

或日、正ちやんは、學校のないので、午前十一時頃にやつて來た。僕は大切な時間を取られるのが惜しかつたので、いい加減に敎へてすましてしまふと、

『うちの藝者も先生に敎へていただきたいと云ひます』と云ひ出した。

『面倒くさいから、厭だよ』と僕は答へたが、跡から思ふと、その時から既にその藝者は僕をだまさうとしてゐたのだ。正ちやんは無邪氣なもので、

『どうせ習つても、馬鹿だから、分るもんか？』

『なぜ？』

『こなひだも大ざらひがあつて、義太夫を語つたら、熊谷の次郎直實といふのを熊谷の太郎と云うて笑はれたんだ――あ、あれがうちの藝者です、寢坊の親玉。』

と、そとを指さしたので、僕もその方に向いた。いちじくの葉かげから見えたのは、しごき一つのだらしない寢卷姿が、楊枝を銜へて、井戶端からこちらを見て笑つてゐる。

『正ちやん、いい物をあげようか？』

『ああ』と立ちあがつて、兩手を出した。

『はふるよ』と、しなやかにだが、勢ひよくからだが曲るかと思ふと、黑い物が飛んで來て、正ちやんの手をはづれて、僕の肩に當つた。

『おほ、ほ、ほ！ 御免下さい』と、向うは笑ひくづれたが、直ぐ白い　ばを吐いて、顏を洗ひ出した。飛んで來たのは僕のがま口だ。

『これはわたしのだ。さツき井戶端へ水を飲みに行つた時、落したんだらう。』

『あの狐に取られんで、まア、よかつた。』

『可哀さうに、そんなことを云つて――何といふ名か、ね？』

『吉彌と云ひます。』

『歸つたら、禮を云つといてお吳れ』と、僕は僕の讀みかけてゐるメレジコウスキの小說を開いた。

正ちやんは、裏から來たので、裏から歸つて行つたが、それと一緖に何か話をしながら、家に這入つて行く吉彌の素顏を鳥渡のぞいて見て、餘り色が黑いので、僕はいや氣がした。

二

僕はその夕がた、あたまの勞れを癒しに、井筒屋へ行つた。それも、角の立たない樣にわざと裏から行つた。

『あら、先生！』と、第一にお貞婆さんが見つけて、立つて來た。『こんなむさ苦しいところからお出でんでも――』

『なアに、僕は遠慮がないから……』

『まア、お這入りなさつて下さい。』

『失敬します』と、僕は臺どころの板敷きからあがつて、大きな圍爐裡のそばへ坐つた。

主人は尻はしよりで庭を掃除してゐるのが見えた。おかみさんは下女同樣な風をして、廣い臺どころで働いてゐた。僕の坐つたうしろの方に、廣い間が一つあつて、そこに大きな姿見が据ゑてある。お君さんがその前に立つて、頻りに姿を氣にしてゐた。疊一枚ほどに切れてゐる細長い圍爐裡には、この暑いのに、燃木が四五本もくべてあつて、天井から[illegible]木で釣るした

鐵瓶がぐら／＼煮え立つてゐた。
「どうも、毎度、子供がお世話になつて」と、爐を隔てゝ僕と相對したお貞婆さんが改まつて挨拶をした。
「どうせ、丁寧に敎へてあげる暇はないのだから、お禮を云はれるまでのことはないのです。」
「この暑いのに、よう精が出ます、な、朝から晩まで勉強をなさつて！」
『さうやつてゐなければ喰へないんですから。』
「御常談を――それでも、先生は外の人と違つて、遊びながらお仕事が出來るので結構で御座ります。」
『貧乏ひまなしの譬へになりませう。』
「どう致しまして、先生――おい、お君、先生にお茶をあげないか？』
　そのうち、正ちやんがどこからか歸つて來て、僕のそばへ坐つて、今聽いて來た世間のうはさ話を出す。お君さんは茶を出して來る。お貞が二人の子供を實子の樣に可愛がり、また自慢するのが近處の人々から嫌はれる一原因だと聽いてゐたから、僕はそのつもりであしらつてゐた。
『どうも馬鹿な子供で困ります」と言ふのを、
「なアに、ふたりとも利口なたちだから、おぼえがよくツて末賴母しい」と、僕は讃めてやつた。
「おツ母さん、實は氣が鬱して來たんで、一杯飮ましてもらひたいんです、どツかいい座敷を一つ開けてもらひませうか？』
「それは有難う御座ります」と、お貞はお君に目くばせしながら、
「風通しのええ二階の三番がよかろ。あすこへ御案内おし。』
「なアに、どこでもいいですよ」と、僕は立つてお君さんについて行つた。煙草盆が來た、改めてお茶が出た。
『何をおあがりなさいます」と、お君のおきまり文句らしいのを聽くと、僕が西洋人なら僕の敎へた片言を試みるのだらうと思はれて、何だか厭な、小癪な娘だといふ考へが浮んだ。僕はいい加減に見つくろつて出す樣に命じ、卷煙草をくはへて寢ころんだ。
　先づ海苔が出て、お君が鳥渡酌をして立つた跡で、ちびり／＼飮んでゐると二三品は揃つて、そこへお貞が相手に出て來た。
『お獨りではお寂しかろ、婆々アでもお相手致しませう。』
「結構です、まア一杯」と、僕は盃をさした。
　婆さんはいろんな話をした。この家の二三年前までは繁盛したことや、近頃は一向客足が遠いことや、土地の人々の薄情なことや、世間で自家の缺點を指摘してゐるのは知らないで、勝手のいい泣き言ばかりが出た。やがてはしご段をあがつて、廊下に違つた足音がすると思ふと、吉彌が銚子を持つて來たのだ。けさ見た素顏やなり振りとは違つて、尋常な藝者に出來あがつてゐる。
『けさほどは失禮致しました」と、しとやかながら冷かす樣に手をついた。
「僕こそお禮を云ひに來たのかも知れません。』
『かも知れませんでは、お禮にたりますまい！」
『いや、どうも――それでは、ありがたう御座ります」と、僕はわざとらしくあたまを下げた。
「まア、それで、あたい氣、すんだ、わ。』
　吉彌はお貞を見て、勝利がほに扇子を使つた。
「全體、まア」と、はじめから怪幻な樣子をしてゐたお貞が、「どうしたことよ、出し拔けになぞ見た樣で？』
「なアに、おツ母さん、けさ、僕が落したがま口を拾つてもらつたんです」といふと、その跡は吉彌の笑ひ聲で說明された。

『それでは、いッそだまつてをれば儲かつたのに。』
『ほんとに、あたい、さうしたらよかつた。』
『生憎銅貨が二三錢と來たら、如何に吉彌さんでも驚くだらう。』
『この子はなか〳〵慾張りですよ。』
『あら、叔母さん、そんなことはない、わ。』
『まア、一つさしませう』と、僕は吉彌に猪口を渡して、『今お座敷は明いてゐるだらうか？』
『叔母さん、どう？』
『今のところでは、口がかかつてをらない。』
『ぢやア、僕がけさのお禮として玉をつけませう。』
『それは濟みませんけれど』と云ひながら、婆アさんが承知のしるしに僕の猪口に酒を酌いで、下りて行つた。

三

『お前の生れはどこ？』
『東京。』
『東京はどこ？』
『淺草。』
『淺草はどこ？』
『あなたはしつッこいのね、千束町よ。』
『あ、あの溝溜の樣な池があるところだらう？』
『おあいにくさま、あんな池は迅くにうまつてしまひましたよ。』
『ぢやア、うまつた跡にぐらつく安借家が出來た、その二軒目だらう？』
『しどいわ、あなたは』と、ぶつ眞似をして、『はい、これでもうちへ歸つたら、お孃さんで通せますよ。』
『お孃さん藝者萬歲』と、僕は猪口をあげる眞似をした。
　三味を彈かせると、ぺこん〳〵とごまかし彈きをするばかり。面白くもないが、僕は醉つたまぎれに歌ひもした。
『もう、よせ〳〵。』僕は三味線を取りあげて、脇に投げやり、『おれが手のすぢを見てやらう』と、右の手を出させたが、指が太く短くツて實に無恰好であつた。
『お前は全體いくつだ？』
『二十五。』
『うそだ、少くとも二十七だらう？』
『ぢやア、さうして置いて！』
『お父さんはあるの？』
『あります。』
『何をしてゐる？』
『下駄屋。』
『おッ母さんは？』
『藝者の桂庵。』
『兄さんは？』
『勸工場の店番。』
『姉さんは？』
『ないの。』
『妹は？』
『藝者を引かされる筈。』
『どこにつとめてゐるの？』
『大宮。』
『引かされてどうするの？』
『その人の奧さん。』
『なアに、妾だらう。』
『妾なんか、つまりませんわ。』
『ぢやア、おれの奧さんにしてやらうか？』と、からだを引ッ張ると、『はい、よろしく』と、笑ひながら寄つて來た。

四

　翌朝、食事をすましてから、僕は机に向つてゆうべのことを考へた。吉彌が電燈の球に『やまと』のあき袋をかぶせ、はしご段の方に耳をそば立てた時の樣子を見て、もろい奴、見ず轉

の骨頂だといふ厭氣がしたが、然し自分の自由になる物は、——犬猫を飼つてもさうだらうが——それが人間であれば、如何なお多福でも、一層可愛くなるのが人情だ。國府津にゐる間は可愛いつてやらう、東京につれて歸れば面白からうなどと、それからそれへ空想をめぐらしてゐた。

下座敷でなまめかしい聲がして、段々二階へあがつて來た。吉彌だ。書物を開かうとしたところだが、まんざら厭な氣もしなかつた。

『田村先生、お早う。』

『お前かい?』

『來たら、いけないの?』ぴツたり、僕のそばにからだを押しつけて坐つた。それツきりで、目が物を云つてゐた。僕はその頭をいだいて口づけをしてやらうとしたら、わざとかほをそむけて、

『厭な人、ね。』

『厭なら來ないがいい、さ。』

『それでも、來たの——あたし、あなたの樣な人が好きよ。』

『商賣人?』

『ああ、商賣人。』

『どんな商賣。』

『本書き商賣。』

『そんな商賣がありますもんか!』

『まア、ない、ね。』

『人を馬鹿にしてイるの、ね』と、僕の肩をたたいた。

僕を商賣人と見たので、また厭氣がしたが、他日わが國を風靡する大文學者だなどと威ばつたところで、かの女の分らう筈もないから、茶化すつもりでわざと顏をしかめ、

『あ、いたた!』

『うそ〳〵、そんなことで痛いものですか!』と、ふき出した。卦算の鎚の子をおもちやにしてゐた。

『一體どうしてお前はこんなところにぐづついてるんだ?』

『東京へ歸りたいの。』

『歸りたきやア早く歸つたらいいぢやアないか?』

『おッ母さんにさう云つてやつた、わ、迎へに來なきやア死んぢまふッて。』

『おそろしいこッた。然しそんなことで、びくつくおッ母さんぢやアあるまい。』

『おッ母さんはそりやア〳〵可愛がるのよ。』

『獨りでうぬぼれてやアがる。誰がお前の樣な者を可愛がるもんか? 一體お前は何が出來るのだ?』

『何でも出來る、わ。』

『第一、三味線は下手だし、歌もまづいし、ここから聽いてゐても、ただきやア〳〵騷いでるばかりだ。』

『ほんとうは、三味線はきらひ、踊りが好きだつたの。』

『ぢやア、踊つて見るがいい』とは云つたものの、ふと顏を見合はせたら、しつッこいと思はせない爲め、まぎらしに仰向けに倒れ、兩手をうしろに組んだまま、その上にあたまをのせ、吉彌が机の上でいたづらをしてゐる横がほを見ると、色は黑いが、鼻柱が高く、目も口も大きい。それに丈が高いので、役者にしたら、舞臺づらがよく利くだらうと思ひ附いた。鳥渡斷つて置くが、僕は或脚本——それによつて僕の進退を決する——を書く爲め、材料の整理をしに來てゐるので、少くとも女優の獨りぐらゐは、之を演ずる段になれば必要だと思つてゐた時だ。

『お前が踊りを好きなら、役者になつたらどうだ?』

『あたい、贊成だ、わ。甲州にゐた時、朋輩と一緒に五郎、十郎をやつたの。』

「――さぞこの尻が大きかつただらう、ね。」「うしろからぶつと、

『よして頂戴よ、お茶を引く、わ』と、僕の手を拂つた。

「お前が役者になる氣なら、僕が十分周旋してやらア。」

『どこへ、本郷座？ 東京座？ 新富座？』

『どこでもいいや、ね、それは僕の胸にあるんだ。』

『あたい、役者になれば、妹もなりたがるにきまつてる。それに、あたいの子――』

『え、お前の子供があるんか？』

『もとの旦那に出來た娘なの。』

『いくつ？』

『十二。』

『意氣地なしのお前が子までおッつけられたんだらう？』

『さうぢやアない、わ。青森の人で、手が切れてからも、一年に一度ぐらゐは出て來て、子供の食ひ扶持ぐらゐはよこす、わ。――それが面白い子よ。五つ六つの時から踊りが上手なんで、料理屋や待合から借りに來るの。「はい、今晩は」ッて、澄ましてお客さんの座敷へ這入つて來て、踊りがすむと、「姉さん、御祝儀は」ッて催促するの。小癪な子よ。芝居は好きだから、あたいよく仕込んでやる、わ。」

吉彌は直ぐ乘り氣になつて、いよ〳〵さうと定まれば、知り合ひの待合や藝者屋に披露して引き幕を贈つて貰はなければならないとか、披露にまはる衣服はこれ〳〵かかるとか、かの女も寢ころびながら、いろ〳〵の註文をならべてゐたが、僕は、その時になれば、どうとも工面してやるがと返事をして、先づ二三日考へさせることにした。

五

それからといふもの、僕は毎晩の樣に井筒屋へ飮みに行つた。吉彌の顏が見たいのと、例の決心を確めたいのであつたが、當人の決心が先づ本統らしく見えると、直ぐまた僕はその親の意見を聽きにやらせた。親からは近々當地へ來るから、その時よく相談するといふ返事が來たと、吉彌が話した。僕一個では、また、或友人の劇場に關係があるのに手紙を出し、から〳〵いふ女があつてから〳〵だと、その缺點と長所とを誇張しないつもりで一考を求め、遊びがてら見に來てくれろと云つて置いたら、ついでがあつたからと云つて出て來てくれた。吉彌を一夕友人に紹介したが、もう、その時は僕が深入りし過ぎてゐて、女優問題を相談するよりも、二人ののろけを見せた樣に友人に見えたのだらう。僕よりもずッと年若い友人は、來る時にも『田村先生はゐますか』といふ樣な調子でやつて來て、歸つた時にはその晩の勘定五圓なにがしを拂つてあつたので、氣の毒に思つて、僕は直ぐその宿を訪ふと、まだ歸らないと云ふことであつた。どこかでまた燒け酒を飮んでゐるのだらうと思つたから、その翌朝を待つて再び訪問すると、もう出發してゐなかつた。僕は何だか興ざめた氣がした。それから、一週間、二週間を經ても、友人からは何の音沙汰もなかつた。然し、僕は、どんなに難局に立つても、この女を女優に仕立てあげようといふ熱心が出てゐた。

六

僕は井筒屋の風呂を貰つてゐたが、雨が降つたり、餘り涼しかつたりする日は沸たないので、自然近處の錢湯に行くことになつた。吉彌も自分のうちのげ立つても夕がたなどで、お座敷時刻の間に合はないと云つて、錢湯に行つてゐた。僕が行く頃には吉彌も來た、吉彌の來る頃には僕も行つた。別に申し合はせたわけでもなかつ

たが、時々は向うから誘ふこともあつた。氣が附かずにゐたが、毎度風呂の中で出くはす男で、石鹸を女湯の方から貰つて使ふのがあつて、僕はいつも厭な、にやけた奴だと思つてゐた。それが一度向うから餘り女らしくもない手が出て、

「旦那、しやぼん」といふ聲が聽えると、てツきり吉彌の聲であつた。男はいつも女湯の方によつて洗つてゐた。

　このふたりは湯をあがつてからも、必らず立ち話だ。男は腰巻一つで、うちはを使ひながら、湯の番人の坐つてゐる番臺のふちに片手をかけて女に向ふと、女はまた、どこで得たのか、白い寒冷紗の裏つき西洋寢卷をつけて、そのそばに立ちながら涼んでゐた。湯あがりの化粧をした顏には、ほんのりと赤みを帶びて、見ちがへるほど美しかつた。

　外にも藝者の湯入りに來てゐるのは多いが、いつも目に立つのはこの女がこの男と相對して、ふざけたり、笑つたりしてゐたことである。はじめはこの男をひいきのお客位にしか僕は思つてゐなかつたが、石鹸事件を知つたので、これは僕の戀がたきだと思つた。否、戀がたきとして競爭する必要もないこ、吉彌が女優になりたいなどは眞ツかなうそだと合點した。急に胸がむか／＼として來ずにはゐられなかつた。その樣子がかの女には見えたかも知れないが、僕は之を顏にも見せないつもりで、いそいでお服をつけてそこを出た。しまつたと後悔したのは、出口の障子をつい烈しくしめたことだ。

　けふは早く行つて、あの男またはその他の人に呼ばれないうちに、吉彌をあげ、一つ精一杯なじつてやらうと決心して、井筒屋へ行つた。湯から歸つて直ぐのことであつた。

『叔母さん。』僕もここの家族の云ひならしに從つて、お貞婆アさんをさう呼ぶことにしたのだ――

『けふは今から吉彌さんを呼んで、十分飲みますぞ。』

『毎度御ひいきは有難う御座いますけれど、先生はさうお遊びなさつてもよろしう御座いますか？』

『なアに、かまひませんとも。』

『然し、まだ奥さんにはお目にかかりませんけれど、おうちでは獨りで御心配なさつてをられますよ。それがお可哀さうで。』

『かかアは何も知つてませんや。』

『いいえ、先生の樣なお氣質では、つれ添ふ身になつたら大抵想像がつきますもの。』

『よしんば、知れたツてかまひません。』

『先生はそれでもよろしからうが、私どもがそばにゐて、奥さんにすみません。』

『心配にやア及びません、さ。』景氣よくは應對してゐたものの、考へて見ると、吉彌に熱くなつてゐるのを勘づいてゐるので、旦那があるからとても駄目だといふ心をほのめかすのではないかとも取れないことではない。また、一方には、飲むばかりで借りが出來るのを、若し拂はれない樣なことがあつてはと心配し出したのではないかとも取れた。僕はわざと作り笑ひを以つて平氣をよそひ、お貞やお君さんや正ちやんと時間つぶしの話をした。吉彌がまだ湯から歸らないのをひそかに知つてゐたからだ。

『吉彌は風呂に行つてまだ歸りませんが――もう、歸りさうなものだに、なア』と、お貞はお君に云つた。

『もう、一時間半、二時間にもなる』と、正ちやんが時計を見て口を出した。

『また、あの青木と蕎麥屋へ行つたのだらう。』お君が長い顎を動かした。蕎麥屋と聽けば、僕も吉彌に引ツ込まれたことがあつて、よく知つてゐるから、そこへ行つてゐる事情は十分察し

られるので、いいことを聽かしてくれたと思つた。然し、この利口ではあるが小癪な娘を、教へてやつてゐるが、僕は內心非常に嫌ひであつた。年にも似合はず、人の缺點を橫からにらんでゐて、自分の氣に食はないことがあると、何も云はないで、親にでも強く當る。

『氣が強うて困ります、』とは、その母が僕に曾て云つたことだ。まして雇ひ人などに對しては、最も皮肉な當り方をするので、吉彌はいつもこの娘を見るとぷりぷりしてゐた。その不平を吉彌は度々僕に漏らすことがあつた。もつとも、お君さんをさういふ氣質に育てあげたのは、もとはと云へば、親達が惡いのらしい。世間の評判を聽くと、まだ肩あげも取れないうちに、箱根の或旅宿の助平おやぢから大金を取つて、水あげをさせたといふことだ。小癪な娘だけに段々燒けッ腹になつて來るのは當り前だらう。

『あの青木の野郎、今度來たら十分云つてやらにやア』と、お貞が受けて、『借金が返せないもんだから、うちへ來ないで、こそこそとほかでぬすみ喰ひをしやアがる！』

子供はふたりとも吹き出した。

『吉彌も吉彌だ、あんな奴にくッついてをらなくとも、お客さんはどこにでもある。――あんな奴があつて、うちの商賣の邪魔をするのだ。』

さう思ふのも實際だ。僕が來てからの樣子を見てゐても、料理の仕出しと云つてもさうある樣には見えないし、あがるお客はなほ更ら少い。たよりとしてゐたのは、吉彌獨りのかせぎ高だ。每日夕がたになると、家族は團燒裡を取りまいて、吉彌の口のかかつて來るのを今か今かと待つてゐる。

やがて吉彌はのッそり歸つて來た。

『何をぐづぐづしてをつたんだ？ 直ぐお座敷だよ。』お貞はその割り合ひに強くは當らなかつた。

『さう。』吉彌は平氣で返事をして、爐のそばに坐つて、『いらつしやい。』僕に挨拶をしたが、まるめて持つてゐた手拭としやぼんとをどこに置かうかとまごついてゐたが、それを爐のふちへ置いて、『一本、どうか』と、僕のそばの卷煙草入に手を出した。

その時、吉彌は僕のうしろに坐つてゐるお君の鋭い目に出くはしたらしい。急に險相な顏になつて、

『何だい、そのにらみざまは？ 蛙ぢやアあるめいし。手拭をここへ置くのがいけなけりやア、勝手に自分でどこへでもかけるがいい！ いけ好かない小まッちやくれだ！』

『一體どうしたんだ』と、僕が鳥渡吉彌に當つて、お君をふり返ると、お君は默つて下を向いた。

『あたいがゐるのがいけなけりやア、いつからでも出すがいい。へん、去年身投げをした藝者の樣な意氣地なしではない。死んだッて、化けて出てやらア。高がお客商賣の料理屋だ、今に見るがいい』と、吉彌は頻りに力んでゐた。

僕は何にも知らない風で、かの女の口をつぐませると、それまでわくわくしてゐたお貞が口を出し、

『まア、えい。まア、えい。――子供同士の喧嘩です、先生、どうぞ惡からず。――さア、吉彌、支度、支度。』

『厭だが、行つてやらうか』と、吉彌はしぶしぶ立つて、大きな姿見のある化粧部屋へ行つた。

七

『お座敷は先生だッたの、ねえ、――あんなことを云つて、どうも失禮』と、吉彌は三味線を以つて這入つて來た。

『……』僕はさッきから獨りで、どういふ風に油をしぼつてやらうかと、頻りに考へてゐる

たのだが、やさしい聲をして、やさしい樣子で來られては、今まで胸にこみ合つてゐたさまざまの忿怒のかたちは、太陽の光に當つた霧と消えてしまつた。

『お酌』と出した德利から、心では受けまいと定めてゐた酒を受けた。然し、まだ何となく胸のもつれが取れないので、碌に話をしなかつた。

『おこつてるの？』

『……』

『ええ、おこツてゐるの？』

『……』

『あたい知らない、わ！』

吉彌は赫と顏を赤くして、立ちあがつた。そのまま下へ行つて、僕のおこつてゐることを云ひ、湯屋で見たことを妬いてゐるのだと云ふことが若しも下のものらに分つたら、僕一生の男を下げるのだと心配したから、

『おい、おい！』と命令する樣な強い聲を出した。それでも、かの女は行つてしまつたが、まさかそのまま來ないことはあるまいと思つたから、獨りで酌をしながら待つてゐた。果して銚子を持つて直ぐ再びやつて來た。向うがつんとしてゐるので、今度は僕から物を云ひたくなつた。

『どうだい、僕もまた一つ蕎麥をふるまつて貰はうぢやアないか？』

『あら、もう、知つてるの？』

『へん、そんなことを知らない樣な馬鹿ぢやアねい。役者になりたいからよろしく賴むなんどと白ばツくれて、一方ぢやア、どん百姓か、肥取りかも知れねいへツぽこ旦つくと乳くり合つてゐやアがる。』

『そりやア、あんまり可哀さうだ、わ。あの人がゐなけりやア、東京へ歸れないぢやアないか、ね。』

『どうして、さ？』

『ぢやア、誰れが受け出してくれるの？　あなた？』

『おれのはお前が女優になつてからの問題だ。受け出すのは、心配なくおツ母さんが來て始末をつけると云つたぢやアないか？』

『だから、おツ母さんが來ると云つてるのでせう――』

それで分つたが、おツ母さんの來るといふのは、女優問題でわざ〳〵來るのではなく、青木といふ男に受け出されるそのかけ合ひの爲めであつたのだ。

『あんな者に受け出されて、やツぱし、こんなしみツたれた田舍にくすぶつてしまふのだらうよ。』

『おほきにお世話だ、あなたよりもさきに東京へ歸りますよ。』

『歸つて、どうするんだ？』

『お嫁に行きますとも。』

『誰れが貴さまの樣な者を貰つてくれよう？』

『憚りながら、これでも衣物をこさへて待つてゐてくれるものがありますよ。』

『それぢやア、青木が可哀さうだ。』

『可哀さうも何もあつたもんか？　あいつもこれまでに大分金をつぎ込んだ男だから、なかなか思ひ切れる筈はない、さ。』

『どんなに馬鹿だツて、そんなのろまな男はなからうよ。』

『どうせ、おかみさんがやかましくツて、あたいをここには置いとけないのだから、たまに向うから東京へ出て來るだけのことだらう、さ。』

男はそんなものと高をくくられてゐるのかと思へば、僕はまた厭氣がさして來た。

『お嫁に行つて、妾になつて、まだその上に女優を欲張らうとは、お前も隨分ふてい奴、さ。』

『さうとも、さ、こんなにふとつたからだだもの、かせげるだけかせぐん、さ、ね。』

「ぢやア、もう、僕は手を引かう」と、僕は坐り直した。『青木が呼びに來るだらうから下へ行け。』

『あの人は今晩來ないことになつたの――そんなに云はないで、さ、あなた』と、吉彌はあまえる樣にもたれかかつて、『今云つたことはうそ、みんなうそ。決心してイるんだから、役者にして頂戴よ。おツ母さんだツて、あたいから云へば、承知するに定つてる、わ。』

僕は、女優問題さへ忘れれば、恨みもつらみもなかつたのだから、かうやつて飮んでゐるのは惡くもなかつた。

吉彌はまた早くこの厭な井筒屋を拔けて、自由の身になりたいのであつた。何んでも早く青木から身受けの金を出させようと運動してゐるらしく、先刻も亦青木の云ひなり放題になつて、その代りに何かの手筈を定めて來たものと見えた。おツ母さんから一筆青木に當てた依賴狀さへあれば、あすにも樂な身になれるといふので、僕は思ひも寄らない僞筆を賴まれた。

八

青木といふのは、來遊の外國人を當て込んで、箱根や熱海に古道具屋の店を開き、手廣く商賣が出來てゐたものだが、全然無筆な男だから、人の借金證書にめくら判を押した爲め、殆ど破產の狀態に落ち入つたが、この頃では多少回復がついて來たらしかつた。今の細君といふのは、やツぱり、井筒屋の藝者であつたのを引かしたのだ。二十歲の娘をかしらに既に三人の子持ちだ。はじめて家を持つた時などは、井筒屋のお貞（その時は、まだお貞の亭主が生きてゐて、それが井筒屋の主人であつた）の思ひやりで、臺どころ道具などを初め、所帶を持つに必要な物は殆どすべて揃へて貰ひ、飯の炊き方まで手を取らないまでにして世話して貰つたのであるが、月日の經つに從ひ、この新夫婦はその恩義を忘れたかの樣に疎くなつた。お貞は、今に至るまでも、このことを云ひ出しては、輕蔑と惡口との種にしてゐるが、この一二年來不景氣の店へ、近頃最もしげ〳〵來るお客は青木であつたから、陰では惡く云ふものの、面と向つては、進まないながらも、十分のお世辭をふり撒いてゐた。

青木は井筒屋の米櫃でもあつたし、また吉彌の旦那を以つて得々としてゐたのである。然しその實、苦しい工面をしてゐたといふことは、僕が當地へ初めて着した時尋ねて行つた寺の住職から聽くことが出來た。

住職のことはこの話にさう編み込む必要がないが、兎に角、渠は僕の室へよく遊びに來た、僕もよく遊びに行つた。醉つて來ると、隨分面白い坊主で、いろんなことをしやべり出す。それとなく、吉彌の評判を聽くと、色が黑いので、土地の人はかの女を『おからす藝者』といふことを僕に云つて聽かせたことがある。之を聽かされた日、僕は、歸つて來てから吉彌にもつと顏をみがく樣に忠告した。かの女の黑いのは寧ろ無精だからであると僕には思はれた。

『磨いて見せるほどあたいがうち込む男は、この國府津にやアゐないよ』とは、かの女がその時の返事であつた。

住職の知り合ひで、或小銀行の役員をつとめてゐる田島といふものも、亦、吉彌に熱くなつてゐることは、住職から聽いて知つてゐたが、この方に對しては別に心配するほどのこともないと見たから、僕も眼中に置かなかつた。吉彌を通じて僕に會ひたいと云ふことづてもあつたが、僕は面倒だと思つてはねつけて置いた。且つどうも當地にとどまる女ではないし、また歸つたら女優になると云つてゐるから、女房にしようなどいふ野心を起して、つまらない金は使は

ない方がよからうと、渠に忠告してやれと僕は住職に勸めたことがある。一方にはそんなしをらしいことを云つて、また一方では僞筆を書く、僕のその時の矛盾は――あとから見れば――甚しいもので、もう、殆ど全く目が暗んでゐたのだらう。

吉彌は、自分に取つては、最も多くの世話を受けてゐる靑木をも、あたまから見くびつてゐたのだから、平氣で僕の筆を利用しようとした。それを以つて綺麗に井筒屋を出る手つづきをさせようとしたのは翌朝のことであるが、さう早くは成功しなかつた。

僕が晝飯を喰つてゐる時、吉彌は僕のところへやつて來て、飯の給仕をしてくれながら太い指にきらめいてゐる寶石入りの指輪を嬉しさうにいぢくつてゐた。

『どうしたんだ？』僕はいぶかつた。

『人質に取つてやつたの。』

『おッ母さんの手紙がばれたんだらう――？』

『いいえ、ゆうべこれ（と、鼻をゆびさしながら）に負けたんで、現金がないと、さ。』

『馬鹿野郎！　だまされてゐやアがる。』僕に僕のことでも賴んで出來なかつたものを責めるやうな氣になつてゐた。

『本統よ、そんなにうそがつける男ぢやアないの。』

『のろけてゐやがれ、おめえはよッぽどうすのろ藝者だ。――どれ、見せろ。』

『よッぽどするでせう？』拔いて出すのを受取つて見たが、鍍金らしいので、

『馬鹿！』僕はまた叱りつけたやうにそれをはふり出した。

『しどい、わ。』吉彌は眞ッかになつて、恨めしさうにそれを拾つた。

『そんな物で身受けが出來る代物なら、お前はそこら當りの達磨も同然だア。』

『どうせ達磨でも、憚りながら、あなたのお世話にやアなりませんよ――ぢやア、これはどう？』帶の間から小判を一つ出した。『これなら、指輪に打たしても立派でせう？』

『どれ』と、ひッたくりかけたら、

『いやよ』と、引ッ込めて、『あなたに見せたッて、けちをつけるだけ損だ。』

『ぢやア、勝手にしやアがれ。』

僕は飯をすまし、茶をつがせて、箸をしまつた。吉彌はのびをしながら、

『ああ、ああ、もう、死んぢまひたくなつた。いつおッ母さんがお金を持つて來てくれるのか、もう一度手紙を出さうか知ら？』

『いい旦那がついてゐるのに、持つて來る筈はない、さ。』

『でも、何とやらで、いつはづれるか知れたものぢやアない。』

『それがいけなけりやア、また例のお若い人に就くがいいや、ね。』

『それがいけなけりやア――あなた？』

『馬鹿ア云へ。そんな腑ぬけな田村先生ぢやアねえ。――おれは受け合つて置くが、お前の樣に氣の多い奴は、結局ここを去ることが出來ずにすむんだ。』

『いやなこッた！』立ち上つて、兩手に膳と土瓶とを持ち、『あとでいらつしやい』と云つて二階の段を降りて行つた。下では、『きイちやん、御飯』と呼びに來たお君の聲がきこえた。

九

その日の午後、井筒屋へ電報が來た。吉彌の母からの電報で、今新橋を立つたといふ知らせだ。僕が何氣なく行つて見ると、吉彌が子供の樣に嬉しがつてゐる樣子が、その擧動に見えた。僕が圍爐裡のそばに坐つてゐるにも拘らず、殆ど之を意にかけないかのありさまで、ただそは

そはと立つたりゐたり、――少しも落ちついてゐなかつた。
　そこへ通知してあつたのだらう、青木がやつて來た。爐のそばへ來て、僕と家のものらに鳥渡挨拶をしたが、これも落ちつきのない樣子であつた。
『まだお宅へはお話してないけれど、けふ私がいよいよ吉彌を身受け致します。おッ母さんがやつて來るのも、その相談だから、そのつもりで、吉彌に對する一切の勘定書きを拵へて貰ひませう。』
　から云つて、青木が僕の方を見た時には、僕の目に一種の勝利、征服、意趣返し、または誇りとも云ふべき樣子が映つたので、ひよッとすると、僕と吉彌の關係を勘づいてゐて特に金づくで僕に對してこれ見よがしの振りをするのではないかと思はれた。
　さらに氣をまはせば、吉彌は僕のことに就いていい加減のうそを並べ、うすのろだとか二本棒だとか、燒き餅やきだとか云ふ嬉しがらせを云つて、青木の機嫌を取つてゐるのではないかとも思はれた。どうせ吉彌が僕との關係を正直にうち明す筈はないが、實は全く青木の物になつてゐて、かげでは、二人して僕のことを迂濶な奴、頓馬な奴、助平な奴などあざ笑つてゐるのかも知れないと、僕は非常に不愉快な感じた。
　然し、不愉快な顏を見せるのは、燒き餅と見えるから、僕の出來ないことだし、出來ないと云つても、全くこれを心から取り除くことは爲し得なかつた。之を耐へ忍ぶのは、僕がこれまで見せて來た快濶の態度に對しても、實に苦痛であつた。然し、その當面の苦痛に直ぐ取れた。と云ふのは、青木が直ぐ立ちあがつて、二階の方へ行つたからであるが、立ちあがつた時、かたはらの吉彌に目くばせをしたので、吉彌は僕を見て顏を赤らめたまま青木の跡について行つた。
　僕は知らない風をしてお貞と相對してゐた。
『まア、吉彌さんも結構です、身受けをされたら』と、僕が煙草の煙を吹くと、
『さうだらうとは思つてをつたけれど』と、お貞は長煙管を強くはたきながら、『あいつもよッぽど馬鹿です。なけなしの金を工面して、吉彌を受け出したところで、國府津に落ちついてをる女ぢやなし、よしまた置いとかうとしたところで、あいつのかみさんが承知致しません。そんな金があるなら、先づうちの借金を返すがええ。――先生、さうでは御座りませんか？』
『そりやア、叔母さんの云ふのも尤もです、然し、まア、男が惚れ込んだ以上は、さうしてやりたくなるんでせうから――』
『吉彌も馬鹿です。男にはのろいし、金使ひにはしまりがない。あちらに十錢、こちらに一圓、うちで渡す物はどうするのか、方々からいつもその尻がうちへまはつて來ます。』
『歸るものは歸るがええ、さ。』そばから、お君がくやしさうに口を出した。
『馬鹿な子ほど可愛いものだと云ふけれど、ほんとうにまたあのお袋が可愛がつてをるので御座ります。』お貞は僕にさも憎々しさうに云つた。『あんな者でも、をつて呉れれば事がすんで行くけれど、をらなくなれば、またその代りを一苦勞せにやならん。――おい、お君、馬鹿どもにお銚子をつけてやんな。』
　お君は、あざ笑ひながら、臺どころに働いてゐる母にお燗の用意を命じた。
　僕は何だか吉彌もいやになつた、井筒屋もいやになつた、また自分自身をもいやになつた。
　僕が歸りかけると、井筒屋の表口に車が二臺ついた。それから降りたのは四十七八の肥えた女――吉彌の母らしい――に、その亭主らし

い男。母ばかりではない、おやぢもやつて來たのだ。僕はこらへてゐた不愉快の上に、また何だか、おそろしい樣な氣が加はつて、そこ〳〵に歸つて來た。

一〇

吉彌は、よもや、僕が度々勸め、かの女も十分決心したと云つたことも忘れはしまい。よしんば、親が承知しないで、その決心――それも實は當てにならない――をひる返すことがあるにしろ、一度はそれを親どもに話さないことはあるまい。話しさへすれば、親の方から僕に何とか相談があるに違ひない。僕の方に乘り氣になれば、直ぐにも來さうなものだ。いや、若し吉彌がまだ僕のことを知らしてないとすれば、青木の來てゐるところで話し出すわけには行くまい。あいつも隨分頓馬な奴だから、青木のゐないところで、鳥渡兩親に含ませるだけの氣は利くまい。全體この話はどうなるだらうと、いろ〳〵な考へやら、空想やらが僕のあたまに押し寄せて來て、ただわく〳〵するばかりで、心が落ちつかなかつた。

窓の机に向つて、ゆふがた、獨り物案じに沈み、見るともなしにそとをながめてゐると、暫く忘れてゐたいちじくの樹が、大きなみづ〳〵した青葉と結んでゐる果とを以つて、僕の勞れた目を醒まし、勞れた心を導いて、家のことを思ひ出させた。東京へ歸れば、自分の庭にもそれより大きないちじくの樹があつて、子供はいつもこツそりそのもとに行つて、果の青いうちから、竹竿を以つてそれをたたき落すのだが、妻がその音を聽きつけては、急いで出て來て、子供をしかり飛ばす。そんな時には、お父さんの名が引き合ひに出されるが、僕自分の不平があつたり、苦痛があつたり、寂しみを感じてゐたりする時などには子供のある妻は殆ど何の慰めにもならない。一體、わが國の婦人は、外國婦人などと違ひ、子供を持つと、その精魂をその方にばかり傾けて、亭主といふものに對しては、ただ義理的に操ばかりを守つてゐたらいいと云ふ考へのものが多い。それでは、社會に活動しようとする男子の心を十分に占領するだけの手段または奮發(僕は之を眞に生きた愛情といふ)がないではないか? 僕は僕の妻を半身不隨の動物としか思へないのだ。いツそ、吉彌を妻にして、女優問題などは斷念してしまはうかと思つて見た。

さうだ、さうだ。今の僕には女優問題などは二の町のことで、もう、迅くに、僕といふ物は吉彌の胸に融けてしまつてゐるのではないか? 決心を見せろとか、何とか、口では吉彌に强く出てゐるが、その實、僕の心はかの女の思ふままになつてゐるのではないか? いツそ、かの女の思ふままになつてゐるくらゐなら、六ケしい而もあやふやな問題を提出して、吉彌に敬して遠ざけられたり、その親どもにかげで嫌はれたりするよりか、全く一心をあけて、かの女の眞情を動かした方がよからうとも思つた。

僕の胸はいちじくの果よりもやはらかく、僕の心はいちじくの葉よりももろくなつてゐたのだ。

ふと浪の音が聽えて來た。泳ぎに行つて知つてゐるが、長くたわんだ、綺麗な海岸線を洗ふ浪の音だ。サツと云つては押し寄せ、すツと靜かに引きさがる浪の音が遠く聽えた。それに耳を傾けると、そのさツと云つて暫く聽えなくなる間に、僕は何だかたましひを奪はれて行く樣な氣がした。それがそのまま吉彌の胸ではないかと思つた。

こんな下らない物思ひに沈んでゐるよりも、暫く怠つてゐた海水浴でもして、すべての考へを一新してしまはうかと思ひ附き、先づ、あぐ

んでゐる身體を自分で引き立てゝ、さん〴〵に肘を張つて見たり、胸をさすつて見たり、腕をなぐつて見たりしたが、やツぱり氣が進まないので、ぐんにやりしたまま、机の上につツぷしてしまつた。

『おやツ！』かしらをあげると、井筒屋は大景氣で、三味の音、すると同時に、吉彌のうは氣な歌聲がはツきりと聽えて來た。僕は青木の顏と先刻車から出た時の細大婦の姿とを思ひ浮べた。

二

その夜はまんじりとも眠れなかつた。三味の音が浪の音に聽えたり、浪の音が三味の音に聽えたり、丸で夢うつつのうちに神經が冴えて來て、隨分苦しくもあつたし、また何物かがあたまの心をこづいてゐる樣な工合であつた。明け方になつて、いつのまにか勞れて眠つてしまつたのだらう、目が醒めたら、もう、晝ぢかくであつた。

枕もとに手紙が來てゐたので、寢床の中から取つて見ると、妻からのである。云つてやつた金が來たかと、急いで開いて見たが、爲替も何も這入つてゐないので、又何とも讀む氣にもならなかつた。それをうツちやる樣に投げ出して、床を出た。

楊枝を銜へて、下に行くと、家のおかみさんが流しもとで何か洗つてゐた手をやすめて、

『先生、お早う御座ります』と、笑つた。

『つい寢坊をして』と、僕は平氣で井戸へ行つたが、その朝に限つて井筒屋の垣根を這入ることがこはい樣な、おツくうな樣な――實に、面白くなかつた。顏を洗ふのもそこ〳〵にして、部屋にもどり、朝晝兼帶の飯を喰ひながら、妻から來た手紙を讀んで見た。僕の宿つてゐるのは藝者屋の隣りだとは通知してある上に、取り殘して來た原稿料の一部を僕が度々取り寄せるので、何か無駄つかひをしてゐると感づいたらしい――もつとも、僕がそんなことをしたのはこの度ばかりではないから、旅行每に妻はその心配を豫想してゐるのだ――いい加減にして切りあげ、歸つて來て吳れろと云ふのであつた。

僕も、馬鹿にされてゐるのかと思ふと、歸りたくならないではなかつたが、然しまた吉彌のことをつき止めなければ歸りたくない氣もした。樣子ではどうせ見込みのない女だとは思つてゐても、どこか心の一隅から吉彌を可愛がつてやれといふ命令が下る樣だ。どうともなる樣になれ、自分は、どんな難局に當つても、消えることはなく、却つてそれだけの經驗を積むのだと、初めから燒け氣味のある僕だから、意地にもわざと景氣のいい手紙を書き、隣りの藝者にはいろいろ世話になるが、情緒のある女で――とは、そのじつ、うそツ鉢だが――お前に對するよりもずツと深入りが出來ると、妻には云つてやつた。

その手紙を出しに行つた跡へ、吉彌はお袋をつれて僕の室へあがつてゐた。

『先生、母ですよ。』

『さう――おツ母さんですか』と、僕は挨拶をした。

『お留守のところへあがり込んで、どうも濟みませんが、娘がいろ〳〵お世話になつて』と、丁寧にさげたあたまを再びあげるところを見ると、心持ちかは知らないが、何だか青々しいつら附きである。からだは、その娘とは違つて、丈が低く、横にでぶ〳〵太つて、豚の體に人の首がついてゐる樣だ。それに、口は物を云ふたんびに横へまがる。病の爲めにさう引きつるのだとは、跡でお袋みづからの說明であつた。

これで國府津へは三度目だが、なか〳〵いいところだとか、僕が避暑がてら勉强するには持

つて來いの場所だとか、遊んでゐながら出來る仕事は結構で羨ましいとか、お袋の話はなかなかまはりくどくつて僕の待ち設けてゐる要領に鳥渡這入りかねた。

吉彌は、ただにこ〱しながら、僕の顏とお袋の顏とを順番に見くらべてゐたが、退屈さうにからだを机の上にもたせかけ、片手で机の上をいぢくり出した。そして、今しがた僕が讀んで納めた手紙を手に取り、封筒の裏の差出し人の名を見るが早いか、鳥渡顏色を變へ、

『いやアだ』と、はふり出し、『奥さんから來たのだ。』

『これ、何をします！』お袋は體よくつくろつて、『先生、この子は、ほんとうに、人さまに失禮といふことを知らないで困るんですよ。』

『なアに。』僕は受けたが、その跡はどうあしらつていいのだか、鳥渡まごついた。止むを得ず、『實はこと、僕の方から口を切つて、若し兩親に異議がないなら、してまた本人がその氣になれるなら、吉彌を女優にしたらどうだといふことを勸め、役者なるものは——とても、云つたからとて、分るまいとは思つたが——世間の考へてゐる樣な、またこれまでの役者身づからが考へてゐる樣な、下品な職業ではないことを簡單に説明してやつた。且、僕がやがて新らしい脚本を書き出し、それを舞臺にのぼす時が來たら、俳優の——殊に女優の——二三役は少くとも拵へて置く必要があるので、その手はじめになるのだといふことをつけ加へた。

『そりやア御もつともです』と、お袋は相槌を打つて、『そのことはこの子からも聽きましたが、先生が何でもお世話して下さることで、またこの子の名をあげることであるなら、私どもには不承知なわけは御座いません。』

『お父さんの考へはどうでせう？』

『私どものは、なアに、もう、どうでもいいので、始終私が家のことをやきもき致してゐまして、心配こそ掛けることは御座いましても、一つとして賴みにならないので御座いますよ。私は、もう、獨りで、うちのことやら、子供のことやらをあくせく〱してゐるので御座います。』

『そりやア、大抵なことぢやアないでせう。——吉彌さんも少しおッ母さんを安心させなきやア——』

『この子がまた、先生、一番意氣地なしで困るんですよ。』お袋は念入りに口を動かして、さも性根なしとののしるかの樣子で女の方を見た。『何でも私に寄りかかつてゐさへすればいいと思つて、ただッ子の樣に來てくれい、來てくれいと云つてよこすんです。』

『だツて、來てくれなきやア仕方がないぢやアないか？』吉彌はふくれッ面をした。『おッ母さんが來たら、方をつけるといふから、早く來いと云つてやつたんぢやアないか？』

『おッ母さんだツて、いろんな用があるよ。お前の妹だッて、また公園で出なけりやアならなくなつたし、さう〱お前のことばかりにかまけてはゐられないよ。半玉の時ぢやアあるまいし、高が五十圓か百圓の身受け相談ぐらゐ、相談つくでも方が附くだらうぢやアないか？　お前よりも妹の方が餘程氣が付いてるよ。』

『ぢやア、勝手にしやアがれ。』

『あれですもの、先生、ほんとに困ります。これから先生に十分仕込んで頂かなければ、丸でお役に立ちませんよ。』

『なアに、役者になるには年が行き過ぎてゐるくらゐなのですから、いよ〱決心してやるなら、自分でも考へが出るでせう。』

『きイちやん、しッかりしないといけませんよ』と、お袋はそれでも娘には折れてゐる。

『あたいだッて、たましひはあらア、ね。』吉彌は僕の膝に來て、その上に手枕をして、あた

いの一番好きな人』と、僕の顔を仰向けに見あげた。

僕はきまりが惡い氣がしたが、お袋にうぶな奴と見拔かれるのも不本意であつたから、そ知らぬ振りに見せかけ、

「お父さんにもお目にかかつて置きたいから、夕飯を向うのうなぎ屋へ御案内致しませうか？　おッ母さんも一緒に來て下さい。』

『それは何よりの好物です。――ところで、先生、私はこれでもなかく苦勞が絶えないんで御座いますよ。娘からお聽きでも御座いませうが、藝者の桂庵といふ仕事は、並み大抵の人には出來ません。二百圓、三百圓、五百圓の代物が二割、三割になるんですから、實入りは惡くもないんですが、あッちこッちへ驅けまはつて買ひ込んだ物を註文主へつれて行くと、あれは善くないから取りかへてくれろの、これは惡くもないがもッと安くしてくれろのと、間に立つものは毎日氣の休まる時が御座いません。それが田舍行きとなると、幾度も往復しなけりやアならないことが御座います。今度だッてもこの子の代りを約束しに來たんですよ、それでなければ、どうして、このせちがらい世の中で、ぼんやり出て來られますものですか？』

『代りなど拵へてやらないがいいや、あんな面白くもない家に』と、吉彌は起きあがつた。

『それが、ねえ、先生、商賣ですもの。』

『そりやア、御もつともで。』

『で、御承知でせうが、青木といふ人の話もあつて、けふ、もう、直きに來て、いよく の決着が分るんで御座いますが、それが定らないと、第一、この子のからだが拔けませんから、ねえ。』

『さうですとも、私の方の問題は役者になればいいので、吉彌さんがその青木といふ人と以後も關係があらうと、なからうと、それは問ふところはないのです』と、僕の言葉は、まだ金の問題には接近してゐなかつただけに、うはべだけは、兎に角、綺麗な物であつた。

『然し、この子が役者になる時は、先生から入費は一切出して下さる樣になるんでせう、ね』と、お袋はぬかりなく念を押した。

『そりやア、さうですとも。』僕は勢ひよく答へたが、實際、その時になつての用意があるわけでもないから、少し引け氣味があつたので、思はず知らず、『その時ア私がどうともして拵へますから、御安心なさい』と附け加へた。

僕はなる樣になれといふ氣であつたのだ。

お袋は、それから、なほ世間話を始める、その間々にも、僕をおだてる言葉を絶たないと同時に、自分の自慢話があり、金はたまらないが身に絹物をはなさないとか、作者の誰れ彼れ(その芝居ものと僕が同一に見られるのを頗る遺憾に思つたが)はちよくく遊びに來るとか、商賣がらでもあるが國府津を初め、日光、靜岡、前橋などへも旅行した事があるとかしやべつた。

そのうち解けた樣な、また一物ある樣な腹がまへと、しやべる度毎に歪む口つきとが、僕にはどうも氣になつて、吉彌はあんな母親の拵へた子かと、またく厭氣がさした。

一二

もう、ゆふ飯時だからと思つて、僕は家を出で、井筒屋のかど口から鳥渡吉彌の兩親に聲をかけて置いて、一足さきへうなぎ屋へ行つた。うなぎ屋は筋向うで、時々行つたこともあるし、またそこのかみさんがお世辭者だから、僕は遠慮しなかつた。

『おかみさん』と、這入つて行つて、『けふはお客が二人あるから、ね。』

『あの、先刻、吉彌さんからそれは承つて居ります』と、おかみさんは襷の一方をはづした。

『もう、通知してあるのか？　氣の早い奴だ、な

ア』と、僕は二階へあがりかけた。

おかみさんは、どうしたのか、あわてて僕を呼び止め、いつもと違つた下座敷へ案内して、

『暫くお待ちなさつて――二階が直ぐ明きますから。』

『お客さんか、ね』と、僕は何氣なくそこへ落ちついた。

かみさんが出て行つた跡で、ふと氣がつくと、二階に吉彌の聲がしてゐる。藝者が料理屋へ呼ばれてゐるのは別に不思議はないのだが、實は吉彌の自白に據ると、ここのかみさんが竊かに取り持つて、吉彌とかの小銀行の田島とを近頃接近させてゐたのだ。田島は之が爲めにこの家に大分借金が出來たし、また他の方面でも負財の爲めに頸がまはらなくなつてゐる。僕が吉彌をなじると、

『お金こそ使はしてはやるが』と、かの女は答へた、『田島さんとほかの關係はない。考へて見ても分るだらうぢやアないか、奥さんになつてくれいツて、若しなつて國府津にゐたら、あツちからもこツちからもあたいを懈打ちにする人が出て來るかも知れやアしない、わ。』

『お前はさう方々に罪をつくつてゐるのか』と、僕はつツ込んだことがある。が、兎に角、この地にとどまつてゐる女でないことだけは分つてゐたから、僕の疑ひは多少安心な方で、既にかの住職にも田島に對する僕の間接な忠告を傳へたくらゐであつた。然し、その後も、毎日または隔日には必らず會つてゐる樣子だ。かうなれば、男の方では段々燒けツ腹になつて來る上、吉彌の勘定通り、ます／＼思ひ切れなくなるのは事實だ。それに、或日、吉彌が僕の二階の窓から外をながめてゐた時、

『ちよいと、ちよいと』と、手招ぎをしたので、僕は首を出して、

『なんだ』と、大きな聲を出した。

『靜かにおしよ』と、かの女は僕を制して、『あれが田島よ』と、小聲。

成る程、鳥渡小意氣だが、にやけた樣な男の通つて行くよこ顏が見えた。男ツ振りがいいとは豫て聽かされてゐたが、色の白い、肌のすべすべしてゐさうな男であつた。その時、僕は、毛穴の立つてゐるおからす藝者を男にしてしまつても、田島を女にして見たいと思つたくらゐだから、僕以前は勿論、今とても、吉彌が實際かれと無關係でゐるとは信じられなくなつた。どうせ、貞操などをかれこれ云ふべきものでないのは勿論のことだが、青木と田島とが出來てゐるのに僕を受け、また僕と青木とがあるのに田島を棄てないなどと考へて來ると、ひいき目があるだけに、僕は旅藝者の腑甲斐なさをつくづく思ひやつたのである。

その田島がてツきり來てゐるに相違ないと思つたから、僕はこツそり二階のはしご段をあがつて行つた。八疊の座敷が二つある、そのとツ附きの方へ這入り、立てかけてあつた障子のかげに隱れて耳をそば立てた。

「おツ母さんは、ほんとに、どうする氣だよ？』

『どうするか分りやアしない。』

『田村先生とは實際關係がないか？』

『また、しつこい！――あつたら、どうするよ？』

『それぢやア、青木が可哀さうぢやアないか？』

『可哀さうでも、可哀さうでなくツても、さ、あなたのお腹はいためませんよ。』

『ほんとに役者になるのか？』

『なるとも、さ。』

『なつたツて、お前、直きに役に立たないツて、棄てられるに定つてるよ。その時アまたお前の厭な藝者にでもなるよりほかアなからうぜ。』

『そりやア、あたいも考へてまさア、ね。』

『そのくらゐなら、初めから思ひ切つて、おれ

の云ふ通りになつて吳れよ。』

田島の話は、見す轉藝者を馬鹿にしてゐる樣な口調ながら、まんざら全く浮薄の調子ではなかつた。また、出來ることなら吉彌を引きとめて、自分の物にしたいといふ相談を持ちかけてゐたらしい。殊に最後の文句などには、深い呼吸が伴つてゐる樣に聽えた。その可哀さうぢやアないかは、青木を出しに田島自身のことを云つてゐたのだらうが、吉彌は何の思ひやりもなく、大變強く當つてゐた。かの女の淺墓な性質としては、もう、國府津に足を洗ふのは——果してけふ、あすのことだか、どうだか分りもしないのに——大丈夫と思ひ込み、跡は野となれ、山となれ的に樂觀してゐて、田島に對し若し未練がありとすれば、ただ行きがけの駄賃として二十圓なり、三十圓なりの餞別を貰つてやらうぐらゐだらう。と、僕には讀めた。

『あたい、ほんとうはお嫁に行くのよ、役者になれるか、どうだか知れやアしないから』などと、かの女は云はないでもいいことをしやべつた。

『どういふ人にだ?』

『區役所のお役人よ——衣物など拵へて、待つてゐるの。』

僕は隣室の狀景を想像する心持ちよりも、寧ろこの一言にむかッとした。之が果して事實なら——して『お嫁に行くの』はさきに僕も聽いたことがあるから、——現在、吉彌の兩親は、その定つた話をもたらしてゐるのだと思はれた。あの腹の黑い母親のことであるから、それ位のたくらみは為かねないだらう。

『どうせ、二三十圓の月給取りだらうが、そんな者の嚊アになつてどうするんだ?』

『お前さんの樣な借金持ちよりやアいい、わ。』

『馬鹿ア云へ!』

『子供の時から知つてる人で、前からあたいを貰ひたいッて云つてたの——月給は四十圓でも、お父さんの家がいいんだから——

『家はいいかも知れないが、月給のことはうそだらうぜ——然しだ、さうなりやア、おれ達アみな恨みッこなしだ。』

『ぢやア、さうと定めませうよ。』吉彌はうるささうに三味線をじやん〳〵引き出した。

『よせ、よせ!』と、三味線をひッたくつたらしい。

『ぢやア、もう、歸つて頂戴よ、何度も云ふ通り、貰ひがかかつてゐるんだから。』

『歸すなら、歸す樣にするがいい。』

『どうしたらいいのよ?』

『かうするんだ。』

『いたいぢやアないか!』

『靜かにせい!』この一言の勢ひは、拔き身を以つて這入つて來た强盜ででもあるかの樣であつた。

『……』僕はゐたたまらないで二階を下りて來た。

暫くしてはしご段をとん〳〵おりたものがあるので、下座敷からちよッと顏を出すと、吉彌が便所に這入るうしろ姿が見えた。

誰れにでもああだらうと思ふと、今更らの樣にあの粗い肌が聯想され、僕自身の身の毛もよだつと同時に、自分の心が既に毛深い畜生になつてゐるので、その銳い鼻がまた別な畜生の尻を嗅いでゐた樣な氣がした。

三

田島が歸ると同時に、入れ代つて、吉彌の兩親が這入つて來た。

『明きましたから、どうぞ二階へ』と、今度はこのかみさんから通知して來たので、僕は室を出て、またはしご段をのぼらうとすると、その兩親に出くはした。

『お言葉にあまえて』と、お袋は愛想よく、『先

「はい、そろつて[illegible]したよ。」

「さア、おあがんなさい」と、僕はさきに立つて[illegible]の奥へ通つた。

おやぢ[illegible]、お袋とは違つて、人のよささう[illegible]、その代り甲斐性のなささうな、いつも[illegible]ぶらぶらして遊んでゐればいいといふ様な手合ひらしい。男ッ振りがいいので、若い時は、お袋の方が惚れ込んで、自分のかせぎ高をみんな男の賭博の負けにつぎ足しても、なほ他の女に取られまい、取られまいと心配したのだらうと思はれる。年が寄つても、その習慣が直らないで、矢ッぱりお袋にばかり世話を燒かせてゐるおやぢらしい。下駄の臺を揃へるのが仕事だと聴いてはゐるが、それも大して骨折るのではあるまい。（一つ忘れてゐたが、お袋の來た時には、必らず僕に似合ふ下駄を持つて來ると云つてゐたが、そのみやげはない様だ。）初對面の挨拶も出來かねた様なあり様で、ただ窮屈さうに畏つて、申し譯の膝ッこを並べ、尻は少しも落ちついてゐない様子だ。

「おとつさんの風ッたら、ありやアしない。」お袋が斯う云ふと、

「おりやアいつも無禮講で通つてるから」と、おやぢはにやりと赤い歯ぐきまで出して笑つた。

「[illegible]か、おくづしなさい。御遠慮なく」と、僕は先づ膝をくづした。

「お父さんは」と、お袋は却つて無遠慮に云つた、「さア、下駄屋に生れて來たんだよ、毎日、あぐらをかいて、臺に向つてればいいんだ。」

「さう馬鹿にしたもんぢやアないや、ねエ」と、おやぢはあたまを撫でた。

「御馳走をたべたら、早く歸る方がいいよ」と、口調も違つてゐる。

をかしくないのは僕だけであつた。三人に酒を出し、御馳走を供し、その上三人から[illegible]されてゐるのではないかと疑へば、このまま何も云はないで立ち歸らうかとも思はれた。まして、今しがたまでのこの座敷のことを思ひ浮べれば、何だか胸持ちが惡くなつて來て、自分の身までが今へきたない毛だ物になつてゐる様だ。香ばしい[illegible]の匂も、僕の鼻へは、かの、特に、吉彌が電燈にやまとの袋をかぶせた時の薄暗い室の、薄暗い肌のにほひを運んで、われながら箸がつけられなかつた。

僕の考へ込んだ心は急に律僧の如く精進潔[illegible]にとぢ込められて、甘い、樂しい、愉快だなどいふあかるい方面から、全く遮斷された様であつた。

ふと、氣がつくと、[illegible]ゐない三人は遠慮もなくむしや〳〵やつてゐる。僕は、また、猪口を口へ運んでゐた。

「先生は[illegible]」と、お袋は[illegible]を取り直して、「ちッとも、おあがりなさらないぢやアア御座いませんか？」

「いや、やつてゐます――まア、一杯、どうです、お父さん」と、僕は銚子を向けた。

「もう、先生、よろしう御座いますよ。うちのは二三杯頂戴すると、あの通りになるんですもの。」

「然し、まだいいでせう――？」

「いや、もう、この通り」と、おやぢは今まで辛抱してゐた膝ッこを延ばして、ころりと横になり、「ああ、もう、かういふところで、かうして、お花でも引いてゐたら申し分はないが――」

「お父さんは直きあれだから困るんです。お花だけでも、先生、私の心配は絶えないんですよ。」

『さう云つたッて、ほかにおれの樂しみはないから仕やうがない、さ。』

『あの人も矢ッぱし來るの？』吉彌がお袋に意味ありげの目を向けた。

「ああ、來るよ。」お袋は輕く答へて、僕の方に

向き直り、『先生、お父さんはもう歸していいでせう？』
『そこは御隨意になすつて貰ひませう。――御窮屈なら、お父さん、おさきへ御飯を持つて來させますから』と、僕は手をたたいて飯を呼んだ。
「お父さんは御飯を頂戴したら、直ぐお歸りよ」と、お袋はその世話をしてやつた。
僕は女優問題など全く撤回しようかと思つたくらゐだし、こんなおやぢに話したッて要領を得ないと考へたので、いい加減のところで切りあげて置いたのだ。
飯を獨りすませてから、獨りで歸つて行くのらくらおやぢの姿がはしご段から消えると、僕の目に入れ代つて映じて來るまぼろしは、吉彌の所謂『あの人』であつた。ひよツとしたら、これが乃ち區役所の役人で、吉彌の歸京を待つてゐる者――たゞ〳〵花を引きに來るので、おやぢのお氣に入りになつてゐるのかも知れないと推察された。

一四

その跡に殘つたのはお袋と吉彌と僕との三人であつた。
『この方が水入らずでいい、わ』と、お袋は娘の顏を見た。
「青木は來たの？」吉彌はまた母の顏をぢッと見つめた。
「ああ、來たよ。」
『相談は定つて？』
『甘く行かないの、さ。』
『あたい、厭だ、わ！』吉彌は顏いろを變へた。『だから、しツかりやつて頂戴と云つて置いたぢやアないか？』
「さう無氣になつたッて仕やうがない、わ、ね。おッ母さんだッて、抜かりはないが、向うがまだ險呑がつてゐりやア、考へるのも當り前だア、ね。」
『何が當り前だア、ね？ 初めから引かしてやると云ふんで、毎月、毎月妾の樣にされても、成りたけお金を使はせまいと、僅かしか小遣も貰はなかつたんだらうぢやないか？ 人を馬鹿にしやアがつたら、承知アしない、わ。あのがらくた店へ怒鳴り込んでやる！』
「さう、目の色まで變へないで、さ――先生の前ぢやアないか、ね。實は、ね、半分だけあす渡すと云ふんだよ。」
「半分ぐらゐ仕やうがないよ、しみッたれな！』
「それがかうなんだよ、お前を引かせる以上は青木さん獨りを思つてゐて貰ひたい――』
『そんなおたんちんぢやアないよ。』
『まア、お聽きよ』と、お袋は招ぎ猫を見た樣な手眞似をして娘を制しながら、『さう來るのア向うの順ぢやアないか？ 何でもはい〳〵ッて云つてりやいいんだア、ね。――「そりやア御もつとも」と返事をすると、ね、お前のことに附いて少し疑はしい點があると――』
『先生にやア關係がないと云つてあるのに。』
「いいえ、この方は大丈夫だが、ね、それ――」
『田島だッて、もう、疾くに手を切ッたつて云つてあるよ。」
『畜生！』僕は腹の中で叫んだ。
「それが、お前、燒き餅だア、ね』と、お袋は、實際のところを承知してゐるのか、ゐないのか分らないが、そらとぼけた樣な笑ひ顏。『つとめをしてゐる間は、お座敷へ出るにやア、こッちからお客の好き嫌ひはしてゐられないが、そこは氣を利かして、さ――ねえ、先生、さうぢやア御座いませんか？』
「そりやア、さうです』と、僕は進まないながらの返事。
『實は、ね』と、吉彌はしまりなくにこつき出し

て、こんなことがあつたのよ。このお座敷に青木さんがゐて、下に田島が來てゐたの。あたい、兩方のかけ持ちでせう、上したの燒き持ち責めで困つちまつた、わ。田島がわざと跡から攻めかけて來て、燒け飮みをしたんでせう、醉ッぱらッちまつて聽えよがしに歌つたの、「青木の馬鹿野郞なんかんて。」青木さんは年を取つてるだけにおとなしいんで、さきへ歸つて貰つた、わ。」

から話しながらも、吉彌はたッた今あつたことを僕に知つてゐるとは思はないので、十分僕の氣を許してゐる樣子であつた。僕は、吉彌とお袋との鼻をあかす爲めに、すッぱり腹をたち割つて、僕の思ひ切りがいいところを見せてやりたいくらゐであつたが、しみッたれた男が二人も出來てゐるところへ、また一人加はつたと思はれるのが厭さに、何のこともない風で通してゐた。

「そんなことのない樣にするのが」と、お袋は僕に向つた、「藝者のつとめぢやア御座いませんか？」

「大きにさうです、ね。」僕は斯う答へたが、心では、「藝者どころか、女郞や地獄の腕前もない奴だ」と、卑しんでゐた。

「あたいばかり責めたッて、仕やうがないだらうぢやないか？』吉彌はそのまなじりをつるしあげた。それに、時々、かの女の口が歪む工合は、お袋さながらだと見えた。

『まア、すんだことはいいとして、さ』と、お袋は娘をなだめる樣に、「これから暫く大事だから、よく氣をおつけなさい。――先生にも賴んで置きたいんです、の。如才は御座いますまいが、青木さんが、井筒屋の方を濟ましてくれるまで、――今月の末には必らずその殘りを渡すと云ふんですから――この月一杯は大事な時で御座います。お互ひに、ね、向うへ感づかれない樣に――」と、僕と吉彌とを心配さうに見まはした樣子には、さすが、親としての威嚴があつた。

『そりやア勿論です』と、僕はまた答へた。僕は棄てッ鉢に飮んだ酒が十分まはつて來たので、張り詰めてゐた氣も急にゆるみ、厭なにほひも身におぼえなくなり、年取つた女がゐるのは自分の母の如く思はれた。また、吉彌の坐つてゐるのがふら／＼動く樣に見えるので、恰も遠いところの雲の上に、普賢菩薩が住してゐるやうで、その醉ひの出た爲めに、頰の白粉の下から、ほんのり赤い色がさす樣子など、如何にも美しくッて、可愛らしくッて、僕の十四五年以前のことを思ひ出さしめた。

僕は十四五年以前に、現在の妻を貰つたのだ。僕よりも少し年上だけに、不斷はしッかりしたところのある女だが、結婚の席へ出た時の妻を思へば、一二杯の祝盃に顏が赤くなつて、その場にゐたたまらなくなつた程の可愛らしい花嫁であつた。僕は、今、目の前にその昔の妻のおもかげを見てゐた。

そのうちにランプがついたのに氣がつかなかつた。

『先生はひどく考へ込んでいらッしやるの、ね』と、お袋の言葉に僕は樂しい夢を破られた樣な氣がした。

『大分醉つたんです』と、僕はからだを橫に投げた。

「きイちやん」と、お袋は娘に目くばせをした。

『しッかりなさいよ、先生。』吉彌は立つて來て、僕に酌をした。かの女は僕を、もう、手のうちにまるめてゐると思つてゐたのか、ただ氣儘勝手に箸を取つてゐて、お酌はお袋に殆どまかしッ切りであつたのだ。

『きイちやん、お彈きよ――先生、少し陽氣に行きませうぢやア御座いませんか？』

吉彌のじやん／＼が始まつた。僕は聽きたく

もないので。
「まア、お待ちよ」と、それを制し、「まだお前の踊りを見たことがないんだから、おッ母さんに彈いてもらつて、一つ僕に見せて貰はう。」
「否、踊らないですもの」と、吉彌は、僕を見て、膝に三味をのせたままでからだを僕にひねつた。
「……」僕は年の行かない娘が踊りのお稽古の行き歸りにたもとを振れる時のやうすを聯想したから、「おぼえてゐる物をやつたらいいぢやないか？」
「だッて――」と、またからだを振ると同時に、左の手を大心の方に行かせて、暫く言葉を切つたが、――「こんな大きななりぢやア踊れない、わ。」
お前のつもりになつて、さきほどは、僕が、かの女のます〳〵無邪氣な樣子に引き入れられて、思はず出した言葉だ。
「そういふ註文は困る、わ。」吉彌は答へる樣にお袋をながめた
「ぢやアー」と、お袋は娘と僕とを半々に見て、「私に彈けなくッても困るから、やさしい物を一つやつて御覽。――『わが物』がいい、氣は持つてることにして、さ。」三味線を娘から受け取つて、調子を合はした。
「まるで子供の踊りだ、わ。」吉彌ははにかんで立ち上り、身構へをした。
お袋の聲はなか〳〵しッかりしてゐる。
「わか、ーアもつーすと」の歌につれて、吉彌は踊り出したが、踊りながらも、
「何だかきまりが惡い、わ」と云つた。
そのはにかんでゐる樣子は、今日まで多くの男をだまして來た女とは露ほども見えないで、清淨無垢の乙女がその衣物を一枚々々剝がれて行く樣な優しさであつた。僕が畜生とまで嗅ぎつけた女にそんな優しみがあるのかと、上手下手を見分ける餘裕もなく、僕はただぼんやり見惚れてゐるうちに、「待つゥ身にイ、つらーアさ、置きィごたーアつ」も通り拔けて、終りになり、踊り手は疊に手を突いて、しとやかにお辭儀をした。斯うして踊つて來た時代もあつたのかと思ふと、僕はその頸ッ玉に抱きついてやりたい程であつた。
『もう、御免よ。」吉彌は初めて年增にふさはしい發言をして自分自身の膳にもどり、猪口を拾つて、「おッ母さん一杯お駄賃に頂戴よ。」
「さア、僕が注いでやらう」と、僕は手近の銚子を出した。
『それでも』と、お袋は三味を橫へおろして、『よく覺えてゐるだけ感心だ、わ。――先生、この子がおッ師匠さんのところへ通ふ時ア、困りましたよ。自分の身に附くお稽古なんだに、人の仕事でもして來た樣にお駄賃を呉れいですもの。今以つてその癖は直りません、わ。何だといふと、直ぐお金を送つて呉れい――』
「そうねだりやアしない、わ」と、吉彌はほほゑんだ、
「……」また金の話かと、僕はもうそんなことは聽きたくないから、直ぐみんなで飯を喰つた。

一五

お袋は一足さきへ歸つたので、吉彌と僕との差し向ひだ。かうなると、こらへてゐた胸が急にみなぎつて來た。
『先生にかうおごらして濟まない、わ、ねえ』と、可愛い目つきで吉彌が僕をながめたのに答へて、
「馬鹿！」と一聲、僕は強く重い鬱忿をあびせかけた。
「そのこはい目！」暫く吉彌は見つめてゐたが、「どうしたのよ」と、かほをしがめて僕にす

と、月が座敷中にその光を擴げてゐる。おもてに面した方の窓は障子をはづしてあつたので、これは危險だといふ考へが浮んだ。こなひだから持つてゐた考へだが、――吉彌の關係者は幾人あるか分らないのだから、僕は旅の者だけに、最も多くの恨みを買ひ易いのである。いつ如何なる者から闇打ちを喰はされるやも知れない。人通りのない時、よしんば出來心にしろ、石でもはふり込まれ、怪我でもしたら詰らないと思ひ、起きあがつて、窓の障子を塡め、左右を少しあけて置いて、再び枕の上に仰向けになつた。

心が散亂してゐて一點に集らないので、眼は開いたページの上に注がれて、何を讀んでゐるのか締りがなかつた。それでもぢッと讀みつづけてゐると、新らしい事件は出て來ないで、レオナドと吉彌とが僕の心をかはる〴〵通過する。一方は溢れるばかりの思想と感情とを古典的な行動に包んだ老獨身者のおもかげだ。また一方はその性情が全く非古典的である上に、無神經と思はれるまでも心の荒んだ賣女の姿だ。この二つが、まはり燈籠の樣に僕の心の目にかはるがはる映つて來るのである。

一方は、燃ゆるが如き新情想を多能多才の器に包み、一生の寂しみをうち籠めた戀をさへ云ひ現はし得ないで終つてしまつた。その生涯は如何にも高尚である、典雅である、純潔である。僕が家庭の面倒や、女の關係や、またさう云ふことに附隨して來るさま〴〵の苦痛と疲勞とを考へれば、いッそのこと、レオナドの樣に、獨身で、高潔に通した方が幸福であつたかと、何となく懷しい樣な氣がする。然し、また考へると、高潔でよく引き締つた半僧生活は、十數年前、既に、僕は思想と實驗との上で通り拔けて來たのだ。そんな初々しいことで、現在の僕が滿足出來ないのは分り切つてゐる。僕の神經はレオナドの神經より五倍も十倍も過敏になつてゐるだらう。

から思ふと、また、古寺の墓場の樣に荒廢した胸の中のにほひがして來て、そのくらい空氣に、吉彌の姿が時を得顏に浮んで來る。そのなよなよした姿のほほゑみが血球となつて、僕の血管を循環するのか、僕は筋肉がゆるんで、がッかり疲勞し、手も不斷よりは重く、足も常よりは倦怠いのをおぼえた。

僕の過敏な心と身體とは荒んでゐるのだ。延びてゐるのだ。固まつてゐた物が融けて行く樣に、立ち据わる力がなくなつて、下へ〴〵と重みが加はつたのだらう。墮落、荒廢、倦怠、疲勞――僕は、デカダンと云ふ分野に放浪するのを、寧ろ僕の誇りとしようといふ氣が起つた。「先驅者」を手から落したら、レオナドはゐなくなつたが、吉彌ばかりはまだ僕を去らない。かの女は無努力、無神經の、ただ形ばかりのデカダンだ、僕等の考へとは違つて、實力がない、中味がない、本體がない。から思ふと、これも亦厭になつて、僕は半ばからだを起した。さうすると、吉彌も亦僕の心眼を往來しなくなつた。

暑くッて堪らないので、無やみにうちはを使つてゐると、どこからか、「寛にして頂戴よ、」といふ優しい聲が聽える。然しその聲の主はまだ來ないのであつた。

一六

僕が強く當つたので、向うは燒けになり、「ぢやア勝手にしろ」といふ氣になつたのではあるまいか？ それなら、僕から行かなければ永劫に會へる筈はない。會はないなら、會はない方が僕に取つてもいいのだが、まさか、向うはさうまで思ひ切りのいい女でもなからう。あの馬鹿女郎め、今頃はどこに何をしてゐるか、一つ探偵をしてやらうと、うちはを持つたまま、散

歩いてら、僕はそとへ出た。

井筒屋の店さきには、吉彌が見えなかつた。寢ころんでゐたせゐもあらう、あたまは重く、目は充血して腫れぼッたい。それに、近頃は運動もしないで、家にばかり閉ぢ籠り、――机に向つて考へ込んでゐたり――それでなければ、酒を飲んでゐたり――ばかりするのであるから、足がひよろ／＼してゐる。涼しく吹いて來る風に、僕はからだが浮きさうであつた。

でこぼこした道を踏みしめ、踏みしめ、僕は歩いてゐたが、街道を通る人かげはすべて僕の敵であるかの樣に思はれた。月光に投げ出した僕の影法師も、僕には何だかおそろしかつた。

成るべく通行者に近よらない樣にして、僕は先づ例のうなぎ屋の前を通つた。三味の音や歌聲は聽えるが、吉彌のではない。ゐないのか知らんと、ほかに當てのある近所の料理屋の前を二三軒通つて見た。そこいらにもゐさうもない樣な氣がした。

青木の本陣とも云ふべきは、二三町さきの里見亭だ。渠は、吉彌との關係上初めは井筒屋のお得意であつたが、借金が嵩んで敷居が高くなるに從つて、かのうなぎ屋の常客となつた。然し、そこのおかみさんが吉彌を田島に取り持つたことが分つてから、また里見亭に轉じたのだ。そこでしくじつたら、また、もう少しかけ隔つた別な店へ移るのだらう。はたから見ると、段々退却して行くあり樣だ。吉彌の話したことに據ると、青木は、渠自身が、

『無學な上に年を取つてゐるから、若いものに馬鹿にされたり、また、自分が一生懸命になつてゐる女にまでも謀叛されたりするのだ。』と、男泣きに泣いたさうだ。

或時など渠は、思ひ物の心を試さうとして、吉彌に、その同じ商賣子で、ずッと年若なのを――吉彌の合ひ方に呼んでゐたから――取り持つて見よと命じた。吉彌は平氣で命令通り向うの子を承知させ、青木をかげへ呼んでその旨を報告した。

『姉さんさへ承知ならッて――大丈夫よ。』

『……』青木は、然しさう聽いて却つて之を殘念がり、實は本意でない、お前はそんなことをされても何ともないほどの薄情女かと、立つてゐる吉彌の肩をしッかりいだき締めて、力一杯の誠意を見せようとしたこともあるさうだ。

思ひやると、この放蕩おやぢでも實があつて、可哀さうだ。吉彌こそそんな――馬鹿々々しい手段だが――熱のある情にも感じ得ない無神經者――不實者――。

かういふことを考へながら、僕も亦その無神經者――不實者――を追つて、里見亭の前へ來た。いつも不景氣な家だが、相變らずひッそりしてゐる。ゐさうにもない。併しまたこッそり乳くり合つてゐるのかも知れないと思へば、急に僕の血は逆上して、あたまが燃え出す樣に熱して來た。

僕は、數丈のうはばみがぺろ／＼赤い舌を出し、この家のうちを狙つて卷き附くかの樣な思ひを以つて、裏手へまはつた。

裏手は田圃である。ずッと遠くまで並び立つた稻の穗は、風に靡いてきら／＼光つてゐる。僕は涼風の如く輕くなり、月光の如く形なく、里見亭の裏二階へ忍んで行きたかつた。然し、板壁に映つた自分の黒い影が、どうも、邪魔になつて堪らない。

その影を取り去つてしまはうとするかの樣に、僕はこは／＼一まはりして、また街道へ出た。

もとの道を自分の家の方へ歩んで行くと、暗いところがあつたり、明るいところがあつたり、ランプのあかりがさしたり、電燈の光が照らしたり、――その明暗幽照にまでも道のでこぼこ

が出來て——ちらつく眼鏡なしの近眼の目さきや、あぶなッかしい足もとから、全く別な世界が開けた。
忙しさに立ち働いてゐる黒い影は地獄の兵卒の如く、店々の軒さきに一樣に黑く並んでゐる荒物、青物、野菜などは鬼の持ち物、食ひ物の如く、——僕はいつの間に墓場、黄泉の塞どころを嗅ぎ當ててゐたのかと不思議に思つた。
たま／＼、鼻唄を歌つて通るものに會ふと、そこからして死んだものらの腐つた肉のにほひが聽かれる樣だ。
僕は、——たとへば、伊邪那岐の命となつて——死人のにほひがする薄暗い地獄の勝手口まで、女を追つてゐる樣な氣がして、家に歸つた。
時計を見ると、もう、十時半だ。然し、まだ暑いので、床を取る氣にはならない。仰向けに倒れて力拔けがした全身をぐツたり、その手足を延ばした。
そこへ、何物か表から飛んで來て、裏窓の壁に當つてはね返り、ごろ／＼とはしご段を轉げ落ちた。迷ひ鳥にしては、餘りに無謀過ぎ、餘りに重みがあり過ぎたやうだ。
ぎよッとしたが、僕は直ぐおもて窓をあけ、
『……』誰れだ？ と、いつものやうな大きな聲を出さうとしたら、下の方から、
『靜かに／＼』と、聲ではなく、ただ制する手振りをした女が見える。吉彌だ。
僕は直ぐ二階をおりて外へ出た。
『……』まだ何も云はなかつた。
『びツくりして？』先づ、平生通りの調子で小だはりのない聲を出したかの女の醉つた樣子が、なよ／＼した優しい輪郭を、月の光で地上にまでも引いてゐる。
『また青木だらう？』
『いいえ、これから行くの。』
『ぢやア、早く行きやアがれ！』僕はわざとひどくかの女を突き放つて今夜も駄目だとあきらめた。
『もう一ついけませうか？』かの女は今一つ持つてゐた林檎を出した。
『……』僕は默つてそれを奪ひ取つてから、つか／＼と家に這入つた。

一七

その後、吉彌に會ふ度毎に、おこつて見たり、冷かして見たり、笑つて見たり、可愛がつて見たり——こツちでも要領を得なければ、向うでもその場、その場の商賣振り。僕はお袋が立つ時にくれ／＼注意したことなどは全く無頓着になつてゐた。
東京からは、もう、金は送らないで妻が附け半分の厭みッたらしい文句ばかりを云つて來る。
僕はそのふくれてゐる樣子を想像出來ないではないが、入りもしない反動心が起つて來ると同時に、今度の事件には僕に最も新らしい生命を與へる戀——そして、妻には決して望めないの——が含んでゐる樣にも思はれた。それで、妻にしても藝者をつれて歸るかも知れないが、お前達（親にも知らしてあると思つたから、暗にそれをも含めて）には決して心配はかけないといふ返事を出した。
僕があがるのはいつも井筒屋だが、吉彌と僕との關係を最も早く感づいたのは、そこのお君である。皮肉にも、隣りの室に忍び込んで、すべてを探偵したらしく、あつたままの事實を並べて、吉彌を面と向つていぢめたさうだ。
吉彌は之が癪にさはつたとかで、自分のうちのお客に對し、立ち聽きするなどは失禮ではないかとおこり返したさうだが、そのいぢめ方が不斷の樣に陰辨慶的なお君と違つてゐたので、

『あの小まッちやくれも、もう年頃だから、燒いてるんだ、わ』と、吉彌は僕の胸をぶつた。

『まさか、そんなわけぢやアあるまい』と、僕は答へた。

然し、それから、お君は英語を習ひに來なくなつたのは事實だ。

僕も、これが動機となつて、いくらかきまりが惡くなつたのに加へて、自分の愛する者が年の若い娘にいぢめられるところなどへ行きたくなくなつた。また、お貞が、僕の顏さへ見れば、吉彌の惡口をつくのは、あんな下司な女を僕があげこそすれ、まさか、關係してゐるとは思はなかつたからでもあらうが、それにしては、知つた以上、僕をも下司な者に見下すのは知れ切つてゐるから、行かない方がいいと思ひ定めた。それで、吉彌を呼べば、うなぎ屋へ呼んだが、飲みに行く度數がもとの樣には多くなくなつた。

勉強をする時間が出來たわけだが、目的の脚本は少しも筆が取れないで、却て讀み終つたメレジコウスキの小說を縮小して、新情想を包んだ一大古典家、レオナドダギンチの、高潔にして而も恨み多き生涯を紹介的に書き始めた。

或晩のこと、虛心になつて筆を走らせてゐると、吉彌がはしご段をとん／＼あがつて來た。

……『何も云はず直ぐ僕にすがり附いてわツと泣き出した。餘り突然のことだから、

『どうしたのだ？』と、思はず大きな聲をして、僕はかの女の片手を取つた。

『……』かの女は僕に片手をまかせたままで暫く僕の膝の上につツ伏してゐたが、やがて、あたまをあげて、その喰はへてゐた袖を離し、『青木と喧嘩したの。』

『なアんだ』と、僕は手を離した。『乳くり合つたあげくの喧嘩だらう。それをおれのところへ持つて來たツて、どうするんだ？』

『分つてしまつた、わ。』

『何が、さ？』僕はとぼけて見せたが、青木に嗅ぎつけられたのだとは直覺した。

『何がツて、ゆうべ、うなぎ屋の裏口からこツそり這入つて來て、立ち聽きしたと、さ。』——では、先夜、僕がゆうべの青木になつたのだ。また、うはばみの赤い舌がべろ／＼僕の目の前に見える樣だ。僕は之を胸に押さへて平氣を裝ひ、

『それがつらいのか？』

『どうしても、疑はしいツて聽かないんだもの、癪にさはつたから、みんな云つちまつた——あなたのお世話にやならないツて。』

『それでいいぢやアないか？』

『ぢやア、向うがこれからのお世話は斷ると云ふんだが、いいの？』

『いいとも。』

『跡の始末はあなたが附けて呉れて？』

『知れたこツた』と、僕は覺悟した。かういふことにならないうち、早く切りあげようかとも思つたのだが、來べき金が來ないので、ひとつは動きがつかなかつたのだ。然し、もう、かうなつた以上は、僕も手を引くのをいさぎよしとしない。僕は意外に心が据つた。

『もう少し書いたら行くから、さきへ歸つてゐな』と、僕は一足さきへ吉彌を歸した。

一八

やがて井筒屋へ行くと、吉彌とお貞と主人とが圍爐裡を取り卷いて坐つてゐる。お君や正ちやんは何も知らずに寢てゐるらしい。主人はどういふ風になるだらうと心配してゐた樣子、吉彌は存外平氣でゐる。お貞は先づ口を切つた、

『先生、飛んだことになりまして、たア』と、飽くまで事情を知らない振りで、『あなたさまに御心配かけては濟みませんけれど——』

「なアに、からなつたら、私が引き受けてやりまさア。」
「濟まないこッて御座いますけれど——吉彌が惡いのだ、向うをおこらさないで、そッとして置けばいいのに。」
「向うからほじくり出すのだから、仕やうがない、わ。」
「もう、出來たことは何と云つても取り返しのつく筈がない。すッかり私におまかせ下さい。」と、僕は男らしく斷言した。
「然し」と、主人が堅苦しい調子で、「世間へ、あの人の物と世間へ知れてしまつては、藝者が賣れませんから、ねア——また出來ない樣なことがあつては、こちらが困るばかりで——」
「そりやア、もう、大丈夫ですよ」と、僕は輕く答へたが、餘りに人を見くびつた云ひ分を不快に感じた。
　然し、割り合ひにすれてゐない主人のことであるし、またその無愛嬌なしがみッ面は持ち前のことであるから、思つたままを云つたのだらうと推察してやれば、僕も多少正直な心になつた。
『どうともして」とは、實際、何とか工面をしなければならないのだ、『必らず御心配はかけませんが、青木さんの方が成り立つてゐても、今月一杯はかかるんでしたから——そこいらの日限は、どうか、よろしく』と、念を押した。
「それは勿論のことです。』主人は鳥渡にこついて見せたが、また持ち前のしがみッ面に返つて、「青木があの時揃へて出してしまへばよかつたに、なア』と、お貞の方をふり向いた。
「あいつがしみッたれだから、さ。」お貞は煙管をはたいた。
『一杯飲まうか？』もう分つたらうと思つたから、僕は、吉彌を促し、二階へあがつた。
「泣いたんでびッくりしたでせう？」吉彌は僕と相向つて坐つた時に斯う云つた。
「なアに。』僕は吉彌の誇張的な態度をわざとらしく思つてゐたので、澄まして答へた、「お前の目玉に水ッ氣が少しもなかつたよ。」
　硯と卷紙とを呼んで、僕は飲みながら、先輩の某氏に當てて、金の工面を頼む手紙を書いた。
その手紙には、一藝者があつて、年は二十七——顔立ちは良くないし、三味線も甘くないが、踊りが得意（これは吉彌の云つた通りを信じて云ふのだ）——普通の婦人とは違つて丈がズッと高く——目と口とが大きいので、仕込みさへすれば、女優として申し分のない女だ。且、その子供が一人ある、また妹がある。それらを引き入れることが出來る望みがある。失敗は豫め覺悟の上でつれて歸りたいから、それに必要な百五十圓ばかりを一時立て換へて貰ひたいと頼んだ。その全體に於て、さきに劇場にゐる友人に紹介した時よりも熱がさめてゐたので、調子が冷靜であつた。無論、友人に對する考へと先輩に對する心持ちとは、また、違つてゐたのだ。ただ、心配なのは承知して呉れるか、どうかといふことだ。
『もう、書けたの？』吉彌は待ちどほしさうに尋ねた。
『ああ」と、僕の返事には力がなかつた。
僕は寢ころんでがぶ〳〵三四杯を獨りで傾けた。
「あたいも書かう」と、吉彌が今度は筆を取り、僕の投げ出した足を尻に敷いて、肘をつき、頻りに何か書き出した。
　僕は手をたたいて人を呼び、まだ起きてゐるだらうからと、印紙を買つて投函することを命じた。一つは、そこの家族を安心させる爲めであつたが、若し出來ない返事が來たらどうしようと、心は息詰る樣に苦しかつた。
「……」吉彌も亦短い手紙を書きあげたの

を、自慢さうだ——

『どれ見せろ』と、僕は取つて見た。

下手くそな假名文字だが、漸とその意だけは通じてゐる。さきに僕がかの女のお袋に尋ねて、吉彌は小學校を出たかといふと、學校へはやらなかつたので、僅かに新聞を拾ひ讀みすることが出來るくらゐで、役者になつてもせりふの覺えが惡からうと答へる。すると吉彌がそばから、

『まさか、絶句はしない、わ』と、答へたのを思ひ出した。

『しばらく御ぶさた致し候。まづはおかはりもなく、御つとめなされ候よし、かげながら祝し居候。さてとや、このほどよりの御はなし、母よりうけたまはり、うれしく存じ候。』

てツきり、例の區役所先生に送るのだと分つた。『うれしく』とは、一緒になることが定つてゐるのだらう。もつとも、僕はその人が承知して女優になるのを許せば、それでかまはないとも考へてゐたのだ。

そのつづき、——

『ちかきうちに私も歸り申し候につき、くはしきことはお目もじの上申しあげさふらふ。かしく。きくより。』

菊とは吉彌の本名だ。さすが、當て名は書いてない。

『馬鹿野郎！　人の前でのろけを書きやアがつた、な。』

『のろけぢやアないことよ、御無沙汰してゐるから、お詫びの手紙だ、わ。』

『母より承はり、うれしく』だ——當て名を書け、當て名を！　隱したツて知れてらア。』

『ぢやア、書く、わ。』笑ひながら、『うは封を書いて頂戴よ』と云つて、かの女の筆を入れたのは『野澤さま』といふのである。

僕はその封筒のおもてに淺草區千東町〇丁目〇番地渡瀨（これは吉彌の家）方野澤樣と記してやつた。かの女はその人を子供の時から知つてると云ひながら、その呼び名とその宿所とを知つてゐないのであつた。

『……』さきの僞筆は自分の爲めに利益と見えたことだが、今のは自分の不利益になる事件を含んでゐる代筆だ。僕は、何事も成る樣になれといふつもりで、苦しい胸を押へてゐた。が、表面では、さう沈んだ樣には見せたくなかつたので、からかひ半分に、『區役所が一番戀しいだらう？』

『いゝえ』吉彌はにツこりしたが、口を歪めて、『あたい、矢ツぱし青木さんが一番可愛い、わ——實があつて——長く世話をかけたんだもの。』

『ぢやア、僕はどうなるんだ？』

『これからは、あなたの』と、吉彌は僕の寢ころんでゐる胸の上に自分の肩までもからだをもたせかけて、頸を一音づつに動かしながら、『め——か——け。』

十二時まで、僕等はぐづついてゐたら、お貞が出て來て、もう、時間だから、引きあげて吳れろといふ頼みであつた。僕は、立ちあがると、あたまがぐら〳〵ツとして、足がひよろついた。あぶないと思つたからでもあらう、吉彌が僕を僕の門口まで送つて來た。月のいい地上の空に、僕等が二つの影を投げてゐたのをおぼえてゐる。

一九

返事を返して置いた料理屋の女將から、一室のおもな一人には話して置いた、その他のことは僕の歸京後にしようと、漸く云つてよこした。これを吉彌に報告すると、かの女はきまりが惡いと云ふ。なぜかとよく〳〵聽いて見ると、若

ーその一座に這入れるとしたら、数年前に東京で買はれたなじみが、その時とは違つて、そこの立派な立て女形になつてゐるといふことが分つた。よく〳〵興ざめて來る藝者ではある。

それに、最も肝心な先輩の返事が全く面白くなかつた。女優に仕立てるには年が行き過ぎてゐるし、一度藝者をしたものには、到底、舞臺上の練習の困難に堪へる氣力がなからう。寧ろ斷然關係を斷つ方が僕の爲めだといふ忠告だ。僕の心の奥が絶えず語つてゐたところと寸分も違はない。

然し、僕も男だ、體面上、一度約束したことを破る氣はない。もう、人を頼まず、自分が自分でその場に全責任をしよふより外はない。

からなると、自分に最も手近な家から探つて行かなければならない。で、僕は妻に手紙を書き、家の物を質に入れて某の金子を調達せよと云つてやつた。質入れをすると云つても、僕自身のは既に大抵行つてゐるのだから、目的は妻の衣服やその附屬品であるので、足りないところは僕の父の家へ行つて出して貰へと附け加へた。

妻はからなるのを豫想してゐたらしい。實は、僕、吉彌のお袋が來た時、早手まはしであつたが、僕の東京住宅の近處にゐる友人に當てて、金子の調達を頼んだことがある。無效であつた上に、友人は大抵のことを妻に注意した。妻は、また、之を全く知らないでゐたのは迂濶だと云はれるのが厭さに、先づ以つて僕の父に内通し、その上、血眼になつてかけずりまはつてゐたかして、電車道を歩いてゐた時、子を抱いたま、ずんでのことで引き倒されかけた。

その上の男の子が、どこからか、「馬鹿々々しいわい〳〵」といふ言葉をおぼえて來て、その頃、頻りにそれを繰り返してゐたさうだが、妻は、それが今回のことの前兆であつたと、御幣をかついでゐた。それもだもだといふのは、僕が東京を出發する以前に、漸く出版が出來た『デカダン論』の爲めに、僕の生活費の一部を供する英語教師の職をやめられかかつてゐたのだ。

父からは嚴格ないましめを書いてよこした。直ぐさま歸つて來いと云ふので、僕の最後の手紙はそれと行き違ひになつたと見え、今度は妻が、父と相談の上、一人で出て來た。

僕が、あたまが重いので、散歩でもしようと玄關を出ると、向うから、車の上に乳飲み兒を抱いて妻がやつて來た。顏の瘦せが目に立つて、色が眞ッ青だ。僕は、これまでのことが一時に胸に浮んで、ぎよッとせざるを得なかつた。

「馬鹿ッ！——馬鹿野郎！」車を下りる妻の權幕は非常なものであつた。僕が妻からこんな下劣な侮辱の言を聽くのは、これが初めてであつた。

「……」餘ッぽどのぼせてゐるのだらうから、荒立ててはよくないと思つて、僕はおだやかに二階へつれてあがつた。

茶を出しに來たおかみさんと妻は普通の挨拶はしたが、おかみさんは初めから何だか濟まないといふ樣な顏つきをしてゐた。それが下りて行くと、妻はそとへも聽えるやうな甲高な聲で、なほ罵詈罵倒を絶たなかつた。

「あなたは色氣狂ひになつたのですか？——性根が拔けたんですか？——うちを忘れたんですか？　お父さんが大變おこつてらッしやるのを知らないでせう？——」

「……」僕は苦笑してゐる外なかつた。

『こんな兒があつても』と、かの女は抱き兒が泣き出したのをわざとはふり出す樣に僕の前に置き、『可愛くなけりやア、捨てるなり、どうなりおしなさい！』

「……」これまで自分の子を抱いたことのない僕だが、餘りおぎやア〳〵泣いてるので手に

取りあげては見たが、間が惡くッて、あやしたりすかしたりする氣になれなかつた。

「子どもは子どもで、乳でも飲ましてやれ」と、無理に手渡しした。

「ほんとに、ほんとに、どんな邪魔がついたのだらう、人にから心配ばかしさして」と、妻は僕の顏を睨む權利でもあるやうに、睨み附けてる。

僕も、——今まで夢中になつてゐた女を實際通り惡く云ふのは、不見識であるかの樣に思つたが、——それとなく分る樣な言葉を以つて、首ッたけ惚れ込んでゐることではないことを説明し、女優問題だけは僕の事業の手初めとして確かに甘く行く筈に云つて、安心させようとした。妻はそれをも信じなかつた。

兎に角、妻は家、道具などを質入れする代りに、自分が人質に來たのだから、出來るつもりたら、歸つて、僕自身で金を拵へて來いといふのである。で、僕は明日一先づ歸京することに定めた。

それにしても、今、吉彌を紹介して置く方が、僕のゐなくなつた跡で、妻の便利でもあらうと思つたから、——また一つには、吉彌の今後の行動を監視させて置くのに都合よからうと思つたから、——吉彌の進まないのを無理に玉をつけて、晩飯の時に呼んだ。料理は井筒屋から取つた。互ひに話はしても、妻は絶えず白眼を動かしてゐる。吉彌はまた續けて恥かしさうにしてゐる。仲に立つた僕は特に前者に、時に後者に、同情を寄せながら、三人の食事はすんだ。妻が不斷飲まない酒を二三杯傾けて赤くなつたので、「やけ酒だらう」と冷かすと、東京出發前も、父の家でさう心配ばかりしないで、ちよッと酒でも飲めと云はれたのをしほに、初めて酒と云ふ物に向つて見たと答へた。

僕は、妻を床につけてから、また井筒屋へ行つて飲んだ。吉彌の心を確かめる爲め、また別れをする爲めであつた。十一時頃、歸りかけると、二階のおり口で、僕を捉へて云つた、

「東京へ歸ると、直ぐまた浮氣をするんだらう?」

「馬鹿ア云へ。お前の爲めに、隨分腹を痛めてゐらア。」

「もツと痛めてやる、わ。」吉彌は僕の肩さきを力一ぱいにつねつた。

妻のところへ歸ると、僕のつく息が夕方よりも一層酒くさい爲め、また新らしい小言を繰りかへされたが、僕があやまりを云つて、無事に濟んだ。——然し、妻のからだは、その夜、半ば死人のやうに固く冷たい樣な氣がした。

二〇

その翌日、吉彌が早くからやつて來て、そばを去らない。

『餘ッぽど悋氣深い女だよ』と、妻は僕に悪口を云つたが、「奥さん、奥さん」と云はれてゐれば、左程惡くもない樣子だ。いろ／＼うち解けた話もしてゐれば、また二人一緒になつて、僕の惡口——妻のは鋭いが、吉彌のは弱い——を、僕の面前で云つてゐた。

『長くここへ來てゐるの?』

『いいえ、去年の九月に。』

「はやるの?」

『ええ、どこでもきイちやん／＼て云つて呉れてよ。』

『さう』と、あざ笑つて、『はやりッ子だ、ねえ。——いくつ?』

『二十七。』僕はこれを聽いて、吉彌が割合に正直に出てゐると思つた。

『學校は這入つたの?』

『いいえ。』

『新聞は讀めて？』

『假名をひろつて讀みます、わ。』

『それで役者になれるの？』

『そりやアどうだか分りませんが、朋輩同志で舞臺へ出たことはあるのよ。』

二人はこんな問答もあつた。

僕は、歸京したら、ひよツとすると再び來ないで濟ませるかも知れないと思つたから、持つて來た書籍のうち、最も入用があるものだけを取り出して、風呂敷包みの手荷物を拵へた。

遲くなるから、遲くなるからと、度々催促はされたが、何だか氣が進まないので、まアいゝ、まアいゝと時間を延ばし、――夕飯を過ぎ、――また晩飯を喫してから、――出發した。その日あたりからして、吉彌へ口のかかつて來ることがなくなつて來たのだ。狹いところだから、直ぐ評判になつたのであらう。妻を海岸へ案內しようと思つたが、それも吉彌が引き受けたのでまかしてしまつた。

僕の東京の住家は芝區明船町だ。そこへ着いたのは夜の十時過ぎ――車を歸して、締つてゐる戶をたたいてゐると、家の前を通り過ぎた人が一人あつて、それが跡もどりをして來て、

『義雄かい？』僕の父であつた。

『只今歸りました』と、僕はあわてて、少しきまりが惡く答へた。けふは歸つただらうと、それとなく、わざ〳〵見まはりに來たところなのだらうから、父も隨分心配してゐるのかと、僕のからだが縮みあがつた。が、『まア、お這入んなさい』と、戶が明くのを待つて、僕は父を座敷へ通した。

妻が殘して行つた二人の子供のいびきが、隣りの室から聽えてゐる。

僕が茶を命じたら、

『今、火を起しますから』と、妻の母は答へた。

『もう、茶は入りませんよ、お婆アさん』と云つて置いて、父は僕に對して頗る嚴格な態度になり、『今度のことはどうしたと云ふんだ？』

『……』僕は少し心を落ち着けてから、父の顏を見い〳〵答へた、『このことは何にも聽いて下さんな、自分が苦しんで、自分が處分をつけるつもりですから。』

『さうか』と、父は僕の何にも云はない決心を見て取つたのだらう、『ぢやア、もう、けふは遲いから歸る。あすは早速うちまで來て貰ひたい。』

かう云つて、父は歸つて行つた。

妻が痩せたのを聯想するせゐか、父も痩せてゐた樣だし、今、相對する母もまた頰が落ちてゐる。僕は家族にパンを與へないで、自分ばかりが遊んでゐたやうに思へた。

僕の書齋兼客室に這入ると、書棚に多く立ち並んでゐる金文字、銀文字の書册が、一つ〳〵にその作者や主人公の姿になつて現はれて來て、入れ代り、立ち代り、僕を責めたりあざけつたり、讚めそやしたりする。その數のうちには、トルストイのやうな白髯の老翁も見えれば、メテルリンクのやうなハイカラの若紳士も出る。ヒュネカの如き活氣盛んな壯年者もあれば、ブラウニング夫人の如き才氣當るべからざる婦人もゐる。いづれも皆外國または內國の有名、無名の學者、詩人、議論家、創作家などである。そのいろんな人々が、また、その云ふところ、論ずるところの類似點を求めて、僕の交友間のあの人、この人になつて行く。僕は久し振りで廣い世間に出たかと思ふと、實際は暗闇の褥中にさめてゐるのであつた。持ち歸つた包みの中からは、嚴肅な顏つきでレオナドがのぞいてゐる。

神經の冴え方が久し振りに非常であるのをおぼえた。……ビスマクの首……グラドストンの首……曾て戀しかつた女共の首々……おやぢの首……憎い女人どもの首……鬼女や瀧夜叉の首……こんな物が順ぐりに、あを向け

に寢て覺めてゐる室の周圍の鴨居のあたりをめぐつて、吐く息さへも苦しく又賴母しかつた時だ——『鬼よ、羅刹よ、夜叉の首よ、われを夜伽の靈の影か……闇の盃盤闇を盛りて、われは底なき闇に沈む』と、僕が新體詩で歌つたのは！

さまざまの考へがなほ取りとめもなく浮んで來て、僕といふものがどこかへ行つてしまつた樣だ。その間にあつて、——毀譽褒貶は世の常だから覺悟の前だが、——かの「デカダン論」出版の爲めに、生活の一部を助けてる敎師の職（僕は英語を一技術として敎へてるのであつて、その技術を金で買ふ樣に思つてる現代學生には別に師事されるのを潔しとしないを、妻の聽いて來た通り、やめられるなら、早速また一苦勞がふえるといふ考へが、強く僕の心に刻まれた。

然し、その時はまたその時で、一層奮勵の筆を以つて、補ひをつけることが出來ると、覺悟した。

すると、また、心の奧から、國府津に逆る金はどうすると尋問し出す。これが最もさし迫つた任務である。然し、それも亦、僕には、殘忍なほど明確な決心があつた。

それが爲めに、然しわが家ながら、他家の如く窮屈に思はれ、夏の夜をうちは使ふ音さへ遠慮勝ちに、近頃にない寂しい徵宵の後に、やッと、待ち設けた眠りを貪つた。

二

子供の起きるのは早い。翌朝、僕が顏を洗ふ頃には、もう、飯を濟ましてゐた。

『お歸りなさい』とも、何とも云はないで、輕蔑の樣子が見える樣だ。口やかましいその母が、のぼせ返つて、僕の不始末をしやべるのをそばで聽いてゐたのだらうと思はれた。

僕が食膳に向ふと、子供はそばへ來て、つッ立つたまま、姉の方が、

「學校は、もう、來月から始まるのよ」と云ふ。吉備を今月中にといふ事件が忘れられない。

弟の方はまた、

「お父さん、いちじくを取つてお呉れ」と云ふ。

いちじくと云はれたので、僕はまた國府津の二階住ひを冷かされた樣に胸に堪へた。

『まだもう少し食べられないよ』と云つて、僕は携へて來た土産を分けてやつた。

妻の母は心配さうな顏をしてゐるが、僕のことは何にも尋ねないで、孫どもが僕の留守中にいたづらであつたことを語り、庭のいちじくが熟しかけたので、取りたがつて、見てゐないうちに木のぼりを始め、途中から落ッこちたことなどを云ッ附けた。子供は二人とも厭な顏をした。

「お母さん、簞笥の鍵はどこにあります？」僕はいよいよ殘忍な決心の實行に取りかかつた。

「知りませんよ」と、母は曖昧な返事をした。

『知らない筈はない。おれの家をあづかつてゐながらどんな鍵でもぞんざいにして置く筈はない。』

「實は大事にしまつてあることはしまつてありますが、お千代が渡してくれるなと云つてゐましたから——」

「千代は私の家內です、そんな云ひ分は立ちません。」

「それでは出しますから」と、母は鍵を持つて來て、そッけなく僕の前に置き、臺どころの方へ行つてしまつた。

僕は簞笥の前に行き、一々その引き出しを明け、おもな衣類を出して見た。大抵は妻の物である。紋羽二重や鼠縮緬の衣物——繻珍の丸帶に、博多と繻子との晝夜帶、——黑縮緬の羽織に、寶石入りの帶止め——長濱へ行つた時買つたまま、しごきになつてゐる白縮緬や、裏つ

き水色縮緬の裾よけ、などがある。妻の他所行き姿が目の前に浮ぶ。そして昔の懐しいかをりまでが僕の鼻をつく。

『行つて來ますよ』といふ外出の時の聲と姿とは、妻の年取るに從つて、段々引き締つて威嚴を生じて來たのを思ひ出させた。

まだ長襦袢がある。――大阪の或藝者――中年增であつた――がその色男を尋ねて上京し、行くへが分らないので、暫く僕の家にゐた後、男のゐどころが分つたので、おもちやの樣な一家を構へたが、つれ添ひの病氣の爲め收入の道が絕え、窮したあげくに、この襦袢を僕の家の帳面を以つて質入れした。その後、二人とも行く方が知れなくなり、流すのは惜しいと云ふので、僕が妻の爲めにこれを出してやつた。少し派手だが、妻はそれを着て不斷の沈み勝ちが直つた樣に見えたこともある。

それに、まだ一つ、ずツと派手な襦袢がある。これは、僕等の一緒になる初めに買つてやつた物だ。僕より年上の妻は、その時からぢみな作りを好んでゐたので、僕がわざ〳〵若作りにさせる爲め、買つてやつたのだ。今では不用物だから、子供の大きくなるまでと云つてしまひ込んであるが、その色は今も變らないで、燃える樣な緋縮緬には、妻のもとの若肌のにほひがする樣なので、僕はこツそりそれを嗅いで見た。

『今の妻と吉彌とはどちらがいい?』と云ふ聲が聽える樣だ。

『無論、吉彌だ』と、云ひ切りたいのだが、心の奧に誰れか耳をそば立ててゐるものがある樣な氣がして、さう思ふことさへ憚られた。

兎に角、多少の價うちがありさうな物はすべて一包みにして、僕はやとひ車に乘つた。質屋をさして車を驅けらしたのである。

友人にでも出會つたら大變と、親しみのある東京の往來を、疎く、氣恥かしい樣に進みながら、僕は十數年來つれ添つて來た女房を賣りに行くのではないかといふ感じがあつた。

僕は再び國府津へ行かないで――若し行つたら、ひよツとすると、旅の者が土地を荒したなど云ひふらされて、袋だたきに逢はされまいものでもないから――金子だけを送つてやることに初めから心には定めてゐたので、直ぐ吉彌宛で電報がはせをふり出した。

三

國府津では、僕の推察通り、僕に對する反動が起つた。

さすがは學校の先生だけあつて、隣りに藝者がゐても寄りつきもしない、なか〳〵堅い人であるといふのが、僕に對する最初の評判であつたさうだ。が、段々僕の私行があらはれて來るに從つて、吉彌の兩親と會見した、僕の妻が身受けの手傳ひにやつて來たなど、あること無いことを、狹い土地だから、直きに云ひふらした。

それに、吉彌が馬鹿だから、のろけ半分に出たことでもあらう、女優になつて、僕に貢ぐつだと語つたのが、土地の人々の邪推を引き起し、僕はかの女を使つて土地の人々の金をしぼり取つたといふ樣に思はれた。それには、青木と田島とが、失戀の恨みから、事件を誇張したり、捏造したりしたのだらう、僕が橫濱に逃げたのなら、僕を呼び寄せた坊主をなぐれといふ騷ぎになつた。僕の妻も危險であつたのだが、はじめは何も知らなかつたらしい。吉彌を案内として、方々を見物などしてまはつた。

僕が出發した翌日の晩、青木が井筒屋の二階へあがつて、吉彌に、過日與へた小判の取り返し談判をした。

『男が一旦やらうと云つたもんだ!』

『わけなくやつたのではない!』

『さん〴〵人をおもちやにしやアがつて――貰つた物ア返しやアしない！』

『何だ、この薄情女め！』

無理に奪ひ取らうとする、取られまいとする。追ッかけられて、二階の段を下り、化粧部屋の口で、とツつかまると、男は女の帯の間へ手をつッ込む。さうさせまいと悶いても女の力及ばずと見たのだらう、『おやア、やるから待ちやアがれ！』身づから帯の間から古い貰金を取り出し、『えゝツ、拾つて行きやアがれ』と、はふりつけ、『畜生、そんな物ア手にさはるのも穢はらア！』

僕の妻は丁度井筒屋へ行つてゐたので、この芝居を、壇のそばで、家族と一緒に見たと云ふ。

『もう、二度とこんな家へ來やせんぞ』と、青木は投げられた物を手に取り、吉彌をにらんで歸つて行つた。

『泥棒ぢぢい！』

吉彌は片足を一歩踏み出すと同時に、あごをも餘ほど憎らしさうに突き出して、くやしがつた。その樣子が大變をかしかつたので、一同は云ひ合はせた樣に吹き出した。かの女もそれに釣り込まれて、笑顔を向け、壇のそばに來て座を取つた。

藥罐のくら〳〵煮立つてゐるのが、吉彌のむしやくしやしてゐるらしい胸の中をすツかり譬へてゐるやうに、僕の妻には見えた。

大きな臺どころに大きな爐――くべた焚木は燃えてゐても、風通しのいいので、暑さはおぼえさせなかつた。

『けちな野郎だ、なア？』お貞は斯う云つて、吉彌を慰めた。

『横つらへ投げつけてやつたらよかつたのに』と、正ちやんも吉彌の肩を持つた。

『きイちやんの樣子ツたら、なかつた』と、お君が云つたので、一同はまた吹き出した。

『どうせ、あたいが馬鹿なんですから、ね。』吉彌は横を向いた。

『一體どうしたわけなの？』僕の妻は仲裁的に口を出した。

『呉れたもんを取り返しに來たの。』

『あまりだますから、おこつたんだらう？』

『だまされるもんが惡いのよ。』

『さう？』妻は自分の夫もだまされてゐるのだと思つてきまりが惡くなつたが、直ぐ氣を變へて、冷かし半分に、可哀さうに、貰つたと思つたら、おほ損をした、わ、ね。』

『ほんとに』と、吉彌も笑つて、『指輪に拵へてやらうと思つてたら、取り返されてしまつた。』

かういふ話をしてゐるうち、吉彌のお袋が一人の女をつれてやつて來た。吉彌は僕の方も亦出來なくなるかと疑つて、淺草へ電報を打つたので、今度はお袋が獨りでやつて來たのだ。つれた女は藝者の候補者だ。

お君が一座の人々をぎろ〳〵見くらべてゐるところで、お袋にお貞と吉彌とから事情を聽き、また僕の妻にも紹介された。妻も亦お袋にその思つたことや、將來の吉彌に對する註文やを述べたり、聽き糺したりした。期せずして眞面目な、堅苦しい會合となつた。お袋は不安の狀態を愛想笑ひに隱してゐた。

その間に、吉彌はどこかへ出て行つた。あちらこちらで借り倒してある借金を拂ひに行つたのである。

主人がその代りに會合に加はつて、

『もう、何とか返事がありさうなものですが――』

『さうです、ねえ』と、僕の妻は最終の責任を感じて、異境の空に獨りぼツちの寂しさをおぼえた。僕は、出發の當時、井筒屋の主人に、直ぐ、僕が出直して來なければ、電報で送金すると云

つて置いたのだ。

先刻から、正ちやんもゐなくなつてゐたが、それがうちへ驅けつけて來て、

『きイちやんが、今、方々の拂ひをしてをる』と、注進した。

「ぢやア、電報がはせで來たんでせう。」と、僕の妻は思はず叫んだ。

「そりやア、いかん、呼んで來ねば」と、主人は正ちやんをつれて大いそぎで出て行き、やがて吉彌を呼び返して來た。

「かはせが來たんですか？」と、妻はおこつた樣子。

「えゝ」と、吉彌はしよげてゐた。

『ぢやア、さう云つて吳れないぢやア困ります、わ。』

「出してお見」と、主人が仲に這入つて調べて見ると、もう、二三十圓は拂ひに使つてあつた。僕が直接に逆つたのが失敗なのだ。

それから、妻と主人とお袋とで詳しい勘定をして、僕の宿料やら、井筒屋へ渡す分やらを取つて行くと、吉彌のだらしなく使つたそとの借金ぐらゐはなほ拂へるほど殘つた。然し、それも僕のうなぎ屋なぞへ拂ふ分にまはつた。

「お客さんの分まで拂ふのア馬鹿々々しい、わ」と、吉彌は自分の金でも取り扱ふ樣なつもりでゐた。

僕の妻は、そんなわけの物ではないといふことを——どんな理由でだか、そこまでは僕に報告しなかつたが——說き聽かせ、お袋に談判して、吉彌のそとの借金だけはお袋が引き受けることにして、直ぐ淺草へ取り寄せの電報を打たせた。

二三

その晩、僕の妻のところへ、井筒屋から御馳走を送つて來たし、またお袋と吉彌と新藝者とが遊びに來た。

『あなたはどこにお勤めでしたの？』とは、お袋が異樣な問ひであつた。

『わたしはそんな苦勞人ぢやア御座いませんよ』と、僕の妻は顏を赤くして笑つた。「そりやア、これまでにも今度の樣なことがあつたし、またいろんな藝者をつれ込んで來られたこともあつたから、その方では隨分苦勞人になつた、わ。』

「ほんとです、ねえ、私も若い時は隨分そんな苦勞を爲せられましたよ。今では、又、子供の爲めに苦勞——世間では、娘を藝者にして、親は左うちはで行けると申しますが、こんな働きのない子ばかりでは、どうして、どうして、却て苦勞は絕えません。」

かういふ話があつてから、吉彌とお袋とは歸つた。まだ青木から餞別でも貰はうといふ未練があつたので、渠を呼び出しに行つたのだが、渠は逃げてゐて、會へずにしまつたらしい。

妻は跡に殘つた新藝者——色は白いが、お多福——からその可哀さうな身の上ばなしを聽き、吉彌に對する憎みの反動として、その哀れな境遇に同情を寄せた。東京からわざ〳〵やつて來て、主人には氣に入りさうな樣子が見えないのであつた。

この女から妻は吉彌の家の狀態をも聽き、僕の推知してゐた通り吉彌の歸るのを待つてゐる男（それが區役所先生の野澤だ）があつて、今度もそれが拵へてやつた新調の衣物を一揃へお袋が持つて來たといふことまで分つた。引かされるのを披露にまはる時の用意になるのであつたらう。

「田村さんの奧さんに會ひたい』といふ人が、突然やつて來た。それが例の住職だ。

かう〳〵、かういふ事情になつてゐるところを、僕が逃げたといふので、その代りに住職に復

讐しようと、町の俠客連が二三名動き出したのを、人に賴んで、漸く推し靜めて貰つたが、
『いつ、どんな危險が奥さんにも及ぶか分りませんから、今晩急いで歸京する方がよろしからう』との忠告だ。
僕の妻は子をいだいて靑くなつた。
吉彌のお袋の出した電報の返事が來たら、三人一緒に歸京する約束であつたが、さうも出來ないので、妻は吉彌の求めるままに少しばかり小遣を貸し與へ、荷物の方づけもそこ／＼にして、僕の革鞄は二人に託し井筒屋の主人と住職とにステイションまで送られて、その夜東京へ歸つて來た。
『憎いのは吉彌、馬鹿者はあなた、可哀さうなのは代りに行つた藝者だ』と、妻は泣いて僕に語つた。
その翌日から、妻は年中堪へに堪へてゐたヒステリが出て、病床の人となつた。乳飲み兒はその母の乳が飲めなくなつた。その上、僕等二人の留守中に老母がその孫どもに食べ過ぎさせたので、それも亦不活潑に寢たり、起きたりすることになつた。
僕の家は、病人と瘦せッこけの住ひに變じ、赤ん坊が時々熱苦しくもぎやア／＼泣くほかは、お互ひに口を利くこともなく、夏の眞晝はひッそりして、なまぬるい藥のにほひと陰鬱な空氣とのうちに、僕自身の汗じみた苦悶のかげがそッくり湛つてゐる樣だ。かうなると、浮薄な吉彌のことなどは全く厭になつてしまつた。
僕は獨り机に向ひ、最も不愉快な思ひがして、そぞろ慚愧の情に咽びさうになつたが、全くこの始末をつけてしまふまでは、友人をも訪はず、父の家にも行くまいと決心した。
全く放棄されたこの家はただ僕一人の奮勵如何にあるのだが、第一に胸に浮ぶ問題は、
『この月末をどうしよう？』
而もそれがこの二三日に迫つてゐるのだ。

二四

あわてたところで、駄目な物は駄目だから、先づ書きかけた原稿を終つてしまはうと、メレジコウスキの小說縮寫をつづけた。
レオナドの生涯は實に高潔にして、悲慘である。語らぬ戀の力が老死に至るまで一貫してゐるのは云はずもあれ、渠を師とするもののうちには、師の發展のはか／＼しくないのをまどろッこしく思つて、その對抗者の方へ裏切りしたものもあれば、また、師の人物が大き過ぎて、惡魔か聖者か分らない爲め、迷ひに迷つて縊死したのもある。また、師の發明工風中の空中飛行機を――まだ乘つてはいけないとの師の注意に反して――熱心の餘り乘り試み、墜落負傷して一生の片輪になつたのもある。そして、レオナドその人の國籍もなく一定の住所もなく、きのふは味方、けふは敵國の爲め、ただ勞働神聖の主義を以つて、その科學的な多能多才の應ずるところ、築城、建築、設計、發明、彫刻、繪畫など――殊に繪畫は渠をして後世永久の名を殘さしめた物だが、殆ど凡て未成品だ――を平氣で、あせることなくやつてゐる間に、後進または弟子であつて又對抗者なるミケランジェロやラファエルなどに壓倒されてしまつた。
僕はその大エネルギと絕對忍耐性とを身にしみ込むほど羨ましく思つたが、死に至るまで古典的な態度を以つて安心してゐたのを物足りない樣に思つた。デカダンは寧ろ不安を不安のままに出發するのだ。
こんな理窟ッぽい考へを浮べながら筆を走らせてゐると、どこか高いところから、
『自分が耽溺してゐるからだ』と、呼號するものがある樣だ。またどこか深いところから、
『耽溺が生命だ』と、呻吟する聲がある。

いづれにしても、僕の耽溺した狀態から遊離した心が理窟を捏ねるに過ぎないのであつて、僕自身の現在の窮境と神經過敏とは、生命のある限り、どこまでもつき纏つて來るかの樣に痛ましく思はれた。

筆を改めた二日目に原稿を書き終つて、之を某雜誌社へ郵送した。書き出しの時の考へに從ひ、理窟は何も云はないで、ただ紹介だけにとどめたのだ。これが今月末の入費の一部になるのであつた。

その夕がた、もう、吉彌も歸つてゐるだらうと思ひ、現に必要な物を入れてある革鞄を淺草へ取りに行つた。一つは、かの女の樣子を探るつもりであつた。

雷門で電車を下り、公園を拔けて、千束町十二階の裏手に當る近所を、云はれてゐた通りに探すと、渡瀨といふ家があつたが、まさか、そこではなからうと思つて通り過ぎた。二階長屋の一端で、狹い、古い、きたない、羅宇や煙管の住ひさうなところであつた。かのお袋が自慢の年中絹物を着てゐるものの住所とは思へなかつた。然し、ほかには渡瀨といふ家がなささうだから、跡戾りをして、その前をうろついてゐると、――實は、氣が臆して這入りにくかつたのだ――

『おや、先生』と、吉彌が入り口の板の間まで出て來た。大きな丸髷すがたになつてゐる。

『……』僕は敷居をまたいでから、無言で立つてゐると、

『まア、おあがんなさいな』と云ふ。

見れば、もとは店さきでもあつたらしい薄ぐらい八疊の間の右の片隅に僕の革鞄が置いてある。之に反對した方の壁ぎはは、少し低い板の間になつておやぢの仕事場らしい。下駄の出來かけ、桐の用材などがごつちやり放しになつてゐる。八疊の奧は障子なしに直ぐに居間であつて、そこには、ちやぶ臺を据ゑて、そのそばに年の割り合ひにはあたまの禿げ過ぎた男と、でツぷり太つた四十前後の女とが、酒をすませて、御飯を喰つてゐる。禿げあたまは長火鉢の向うに坐つて、旦那振つてゐるのを見ると、例の野澤らしい。

僕はその室にあがつて、誰れにもと卽かず一禮すると、女の方は丁寧に挨拶したが、男の方は氣がついたのか、つかないのか、飯にかこつけて僕を見ない樣にしてゐる。

吉彌はその男と火鉢をさし挾んで相對し、それも、何だか調子拔けのした樣子。

『まア、御飯をお濟ましなさい。』から、僕が所在なさに勸めると、

『もう、すんだの』と、吉彌はにツこりした。

『おツ母さんは？』

『赤坂へ行つて、ゐないの。』

『いつ歸りました？』

『きのふ。』

『僕の革鞄を持つて來て呉れたか、ね？』これはわざと聽いたのだ。

『あすこにある、わ』と、指さした。

『あれが入用だから、取りに來ました。』

『さう？』吉彌は無關係なやうに長い煙管をはたいた。

こんな話をしてゐるうちに、跡の二人は食事を濟ませ、家根屋の持つて來る樣な梯子を傳つて、二階へあがつた。相撲取りの樣に腹のつき出た婆アやが來て、

『菊ちやん、もう濟んだの？』と云つて、お膳をかたづけた。

如何にも、もう吉彌ではなく、本名は菊子であつた。かの女は男の立つた跡へ直り、煙管でおのれの跡をさし示し、

『こツちへお出で』といふ御命令だ。

僕はおとなしくその通りに住まつた。

二階では、例の花を引いてゐる樣子だ。
『あれだらう？』僕がかう聽くと、
『さうよ』と、菊子が嬉しがつた。
馬鹿な奴だとは思つたが、僕はもう未練がないと云ひたい位だから、物好き半分に根問ひをして見た。二階にはおやぢもゐるし、他にまだ二人ばかりゐる。跡からあがつた――それも晝頃から來てゐたといふ――女は、淺草公園の待合〇〇の女將であつた。
菊子の口のはたの爛れはすツかり直つた樣だが、その代りに眼病の方がひどくなつてゐる。勤めをしてゐる時は、氣の張りがあつたのでまだしも病毒を抑さへてゐられたが、張りが拔けたと同時に、急にそれが出て來たのだらう。井筒屋のお貞が云つた通り、果して梅毒患者であつたかと思ふと、僕は身の毛が逆立つたのである。井上眼科病院で診察して貰つたら、一二箇月入院して見なければ、直るか直らないかを判定しにくいと云つたとか。
かの女は黒い目鏡を嵌めた。
僕は女優問題に就ては何も云はなかつた。
十二三歳の女の子がそとから歸つて來て、
『姉さん、駄賃お呉れ』と、火鉢のそばに足を投げ出した。顏の厭に平べツたい、前齒の二三本缺けた、鳥渡見ても、愛想が盡きる子だ。菊子が青森の人に生んで、妹にしてあると云つたのは、乃ち、これらしい。話ばかりに聽いて想像してゐたのと違つて、僕が最初からこの子を見てゐたなら、ひよッとすると、この子を子役または花役者に仕上げてやりたいなどいふ望みは起らなかつたばかりか、吉彌に對しても亦全く女優問題は出なかつたかも知れない。今一人、實の妹を見たかつたのであるが、公園藝者になつてゐるから、そこにはゐなかつた。
『先生がいらツしやるぢやないか？　ちやんとお坐り。』から菊子が云つたので、子は澁々坐り直した。
『けいちやん、お前、役者になるかい？』
『あたい、役者たんか厭だア』と、けいちやんと云ふのがからだを搖すつた。
僕は菊子がその子をも女優にならせるといふ約束をこの通り返り見ないでゐても、それを責める勇氣はなかつた。

二五

『さア、やるから遊んでお出で』と、菊子は二錢銅をはふり出すと、けいちやんはそれを拾つて出て行つた。
菊子も僕を置いて二階へあがつた。
二階では、――
『さア、絶體だ。』
『出る、出る！』
『助平だ、ねえ――？』
『降りてやらア。』
『行けばいいのに――赤だよ。』
『そりや來た！』
『こん畜生！』
ぺた〳〵と花を引く音がしてゐた。
菊子がまだ國府津にゐた時、僕をよろこばせようとして、
『歸つたら、うちの二階が明いてるから、隔日に來て、あすこで、勉强なさいよ』と云つた、その二階がいつもあの樣なのだらう。見す〳〵墮落の淵に落し入れられるのであつた。未練がないだけ、僕は今却て仕合せだと思つたが、また、別なところで、俺等の知らないうちにああいふ社會に這入つて、ああいふ惡風に染み、ああいふ樂しみもして、ああいふ耽溺のにほひも嗅いで見たい樣な氣がした。僕は掃き溜めをあさる痩せ犬の樣に、鼻さきが鋭敏になつて、飽くまで耽溺の目的物を追つてゐたのである。
やがて菊子が下りて來て、

「お父さんは お花に夢中よ」と云ふ。まだ多少はしをらしいところがあつて、ちよツと顔を出せとでも云つて來たものらしい。會ひたくないと云つたのだらう。僕は、かのうなぎ屋で、おやぢが『こんなところでお花でもやれば』と云つたのは、僕をその方へ引き込まうとして、僕の氣を引いて見たのだらうと思ひ出された。

『なアに、どうせ僕は花はしないから――』

お袋はゐないし、おやぢは僕を避けてゐる。婆アやも狭い臺どころへ行つて見えない。

一昔も過ぎたかの樣に思はれる國府津のことが一時に僕の胸に込みあがつて來て、僕は無言の恨みをただ眼のにらみに集めたらしい。

『あのこはい顔！』と芳子は眞面目にからだを竦ませたが、病んでゐる目がこちらを見つめて、やにツぽくしよぼついてゐた。が、僕にもそのしよぼ附きが移つておのづから目ばたきをした時、かの女は絳絹の切れを出して自分で自分の兩眼のやにを拭いた。

お袋がいづれ挨拶に來るといふので、僕はそのまま辻車を呼んで貰ひ、革鞄を乘せて、そこを出る時、

『少しお小遣を置いてツて頂戴な』と云ふので、僕は一圓札があつたのを渡した。

『二度と再び來るもんか！』から、僕の心が胸の中で叫んだ。

僕が荷物を持つて歸つたのを見て、妻は褥の中から頻りに吉彌の樣子を聽きたがつたが、僕は之を説明するのも不愉快であつた。

『あの位にしてやつたんだから、義理にもお袋が一度は來るでせう――?』

『さうだらうよ。』僕はいい加減な返事をした。

『吉彌だツてさうでさア、ね、小遣を立てかへてあるし、髢だツて、早速髷に結ふのに無いと云ふので、借してあるから、持つて來る筈だ、わ。』

『目くらになつちやア來られない、さ。』

僕の返事は煮え切らなかつたが、妻の熱心は「目くら」の一言に飛び立つ樣にからだを向き直し、

『えツ！ もう、出たの?』と、問ひ返した。

吉彌の病氣はさうひどくないにしても、罰當り、業さらしといふ敵愾心は、妻も僕も同じことであつた。然し、向うが黴毒なら、こちらはヒステリ――僕は、どちらを向いても、自分の耽溺の記念に接してゐるのだ。どこまで沈んで行くつもりだらう?

『まだ耽溺が足りない。』これは、僕の焼けツ腹が叫ぶ聲であつた。

革鞄をあけて、中の書物や書きかけの原稿などを調べながら、つくづく思ふと、この夏中の仕事は――いろんな考へを持つて行つたのだが――ただレオナドの紹介ばかりが出來たに過ぎない。それも、今月中の喰ひ物の一つになつてしまふのだ。最も多望であつた脚本創作のことなどは、殆ど全く手がつかなかつたと云つてもいい。

學校の方は一同僚の取り爲しで甘く納まつたといふ報告に接したが、質物の取り返しにはここ暫く原稿を大車輪になつて働かなければならない。

僕は自分の腕をさすつて見たが、何だか自分の物でない樣であつた。

二六

その後、四五十日間は、學校へ行つて不愉快な教授を爲すほか、どこへも出ず、机に向つて、思案と創作とに努めた。

愉快な問題にも、不愉快な疑問にも、僕は僕そツくりがひツたり當て嵌る氣がして、天上の果てから地の底まで、明暗を通じて僕の神經が流動瀰漫してゐる樣だ。すること、爲すことが夢か、まぼろしの樣に輕くはかどつた。その

癖、得たところと云つては、數篇の短曲と短い小説二三篇とである。金にしては何ほどにもならないが、創作としては、よしんば望んでゐた脚本が出來たとしても、その脚本よりかずッと傑作だらうといふ確信が出た。

僕のからだは、土用休み早々、國府津へ逃げて行つた時と同じ樣に衰弱して、考へが少しもまとまらなくなつた。そして、僕が殘酷なほど滅多に妻子と家とを思ひ浮べないのは、その實、それが思ひ浮べられない程に深く僕の心に喰ひ込んでゐるからだといふ氣がした。

『ええッ、少し遊んでやれ！』

かう決心して、僕はなけなしの財布を懷に、相變らず陰鬱な、不愉快な家を出た。否、家を出たといふよりも、今の僕には、家をしよつて歩き出したのだ。

虎の門そとから電車に乘つたのだが、半ば無意識的に淺草公園へ來た。

池のほとりをぶらついて、十二階を見ると、吉彌即ち菊子の家が思ひ出された。誰れかそのうちの者に出會すだらうかも知れないと、あたりに注意して歩いた。僕はいつも考へ込んでゐるので、外へ出ても、こんなにそは／＼しい歩き方をすることは滅多にないのだ。

菊子はたうとう僕の宅へ來なかつた。お袋も亦さうであつた。ひよッとすると、菊子の目が全くつぶれたのではないか知らん？　或はまた野澤も、金がなくなつた爲め、足が遠のいてゐはしないか？　また、かの女は二度、三度、四度目の勤めに出てはゐないか？

かう云ふことを思ひ浮べながら、玉乘りのあつた前を通つてゐると吾妻橋の近處に住んでゐる友人に會つた。

『どこへ行くんだ？』

『散歩だ。』

『遠いところまで來たもんだ、な。』

『なアに、意味もなく來たんだ。』

『どッかで飲まう』と、いふことになり、つれ立つて、奧の常磐へあがつた。

友人もうす／＼聽いてゐたのか、そこで夏中の事件を問ひ糺すので、僕は或程度まで實際のところを述べた。それから、吉原へ行かうといふ友人の發議に、僕もむしやくしや腹を癒すにはよからうと思つて、贊成し、二人はその道を北に向つて車で驅けらした。

翌朝になつて、僕も金がなければ、友人も僅かしか持つてゐない。止むを得ず、僕がゐのこつて、友人が當てのあるところへ行つて取つて來た。

『滑稽だ、ねえ？』

『實に滑稽だ。』

二人は目を見合はせて吹き出した。大門を出てから、或安料理店で朝酒を飲み、それから向島の百花園へ行かうと云ふことに定つたが、僕は千束町へ寄つて見たくなつたので、先づ、その方へまはることにした。

僕は友人を連れて復讐に出かける樣な意氣込みになつた。もつとも、酒の勢ひが助けたのだ。

朝の八時近くであつたから、まだ菊子のお袋もゐた。

『先生、濟まない御無沙汰をしてゐまして――一度あがるつもりですが』と、挨拶をするお袋の言葉などには、僕はもう頓着しなかつた。

『菊ちやんの病氣はどうです？』僕は敵の本陣に切り込んだつもりだ。

『あの通り、段々惡くなつて來まして、ねえ』と、お袋は實際心配さうな樣子で、『入院しなけりやア直らないさうですが、それにやア毎月小百圓は入りますから――』

『野澤さんに出してお貰ひなさいな』と、僕は菊子に冷かし笑ひを向けた。

『さう旨くも行きません、わ。』かの女も笑つて目鏡を片手で押さへた。

その樣子が可哀さうにもならないではないが、僕は友人と共に、出て來た菓子を喰ひながら、誇りがほに、昨夜から今朝にかけての滑稽の居殘り事件をうち明けた。禮を踏まない渡瀬一家のことは、もう、忘れてゐるといふことをそれとなく知らせたかつたのだ。すると、お袋が、それを悟つたか、悟らなかつたか、

『もう、先生、居殘りは困ります、ねえ。私共も國府津で困りましたよ。先生はいらッしやらない、奥さんはお歸りになつた、これと私とでどんなにやきもきしたか知れやアしません、わ。』

「然し、まア、無事に濟んだから結構です」と、僕は飽くまで冷淡だ。

「どうして、先生、私の方は無事どころぢやア御座いませんの。あれからと云ふものは、毎日毎日、この子の眼病の話で、心配は絶えやアしませんよ。』まだ僕の同情を買はうとしてゐるらしい。

『いい氣味だ!』僕の心は、然し、かう云つてよろこんだが、考へて見ると、僕の家には、妻も亦重い病氣にかかつてゐるのだ。菊子の病氣を冷笑する心は、やがて又僕の妻のそれを嘲弄する心になつた。僕の胸があまり荒んでゐて、——單純な僕自身もあんまり疲れてゐるので、——精神上のまよはしや、たわいもない言語上のよろこばせやで滿足が出來ない。——同情などは藥にしたくも根が絶えてしまつた。

僕は妻のヒステリを以つて菊子の毒眼を買ひ、兩方の病氣を以つてまた僕自身の衰弱を土培つた樣なものだ。失敗、疲勞、痛恨——僕一生の努力も、心になぐさめ得ないから、古寺の無緣塚をあばく樣であらう。ただその朽ちて行くにほひが生命だ。

から思ふと、僕の生涯が夢うつつの樣に目前にちらついて來て、そのつかまへどころのない姿が、而もひた〳〵と、僕なる物に浸り行く樣になつた。そして、形あるものはすべて僕の身に緣がない樣だ。

僕の目の前には、僕その物の幻影よりほか浮んでゐない。

『さア、行かう』と、友人は僕を促した。

『これから百花園に行くんです』と、僕も立ちあがつた。

『冷淡! 殘酷!』から云ふ無言の聲が僕のあたまに聽えたが、僕はひそかに之を辯解した。若し不愉快でも菊子のにほひがなほ僕の胸底にしみ込んでゐるなら、厭な菊子のにほひも亦永久に僕の心を離れまい。この後とても、幾多の女に接し、幾度かそれから來る苦しい味をあぢはふだらうが、僕は、その爲めに窮屈な、型にはまつた墓を掘ることが出來ない。冷淡だか、殘酷だか知れないが、衰弱した神經には過敏な注射が必要だ。僕の追窮するのは即座に效驗ある注射液だ。酒の如く、アブサントの如く、そのにほひの強い間が最もききめがある。そして、それが自然に壓迫して來るのが僕等の戀だ、あこがれだと。

から云ふことを考へてゐると、いつの間にかあがり口をおりてゐた。

「どうか奥さんによろしく」と、お袋は云つた。菊子は、さすが、身の不自由を感じたのであらう、寂しい笑ひを僕等に見せて、なごり惜しさうに、

『先生、私も目がよけりやア お供致しますのに——』

僕はそれには答へないで、友人と共に、「左樣なら」を凱歌の如く思つて、そこを引きあげた。

(明治四十一年八月)

ぼんち

一

『ほんまに、頼りない友人や、なア、人の苦しいのんもほッたらかしといて、女子にばかり相手になつて』と、定さんは私かに溜らなくなつた。

づん／＼痛むあたまを、組んで後ろへまはした兩手でしッかり押さへて、大廣間の床の間を枕にしてゐるのは、ほんの、醉つた振りをよそほつてゐるに過ぎないので。

實は、あたまの心まで痛くッて溜らないのである。

藝者も藝者だ。氣の利かない奴ばかりで、洒落を云つたり、三味をじや／＼鳴らしたり、四人も來てゐた癖に、誰れ一人として世話をして呉れるものがない。

『ええッ、こツちやもほッたらかして往んだろかい』と、心が激して來た。

渠は實際何が爲めにこんなところへ來たのかを考へて見た。夕飯を喰べてから、近頃おぼえ出した玉突をやりに行くと、百點を突く長さんと八十點の繁さんとが來てゐた。

長さんはさすが上手で、繁さんの半分も行かないうちに勝つてしまつた。

定さんは上手な人に使うて貰ふ方がいいと思つて棒を持ちかけると、横合から繁さんが出て來て、

『わたいとやりまひよ――。よんべはわたいが負けて敷島を散財したさかい、今晩はなか／＼負けまへん。』

『わたいも負けまへん。』

『ほたら、ビールだッせ。』

『よろしゆおます。』

定さんは持つた棒を置いて、翡翠の輪が付いた胸の紐をはづし、鐵色無地の紹羽織をぬぎ棄てた。そして白紹に墨色の形を染めた襦袢の兩袖を折り返し、絹立萬筋の越後縮を紋紗の角帯で結んだ腰を後ろの方へ突き出し、生眞面目な顔を緣のそばへ持つて行つた。目をぱちくりさせながら、ねらひを定めて、棒を二三度しごく度毎に顔が自分の手とさき玉とを往復するその樣子が如何にもをかしいと云つて皆が笑つた。で、長さんが默笑をつづけながら椅子を離れて來て、

『そないなこツちや明きまへん。』そして定さんの尻を押して右へ寄らせ、そのからだの据ゑかたとねらひの付け方とを教へた。

兎に角、弱い方から突き始めるのが規則だと云ふので、定さんから突き始めたが、最初の一突きも、そのやり直しも當らなかつた。三回目にうんと突いた玉は當つたが、ただの一發だッた。

『ちよッ！』定さんはわれ知らず舌打ちをして、長さんを見た。

『占め、占め』と叫んで、繁さんはねらひ寄つた。

『しッかりせんと負けまッせ。』長さんは親切らしく應援をした。

『負けたかて、よろしゆおまツさ。』から云つて、定さんは最初からの不成績を身づから辯護してゐたが、それでも最初の勝負には勝つた。

それから、然し、二回つづけて失敗した。そしてどちらからも、負けた度毎に朝日ビールを一本づつ明けた。

二回つづけて勝つたものが滿足さうにコップを傾けてゐるのを見ると、殘念で〳〵溜らないので、定さんから進んで今一回を要求して、また見事に負けた。渠はつひに往生して、一息しながら、四本目のビールが半分になるのを見てゐた頃、松さんが這入つて來た。

『またけたいな奴が來よつた』と思つた。定さんから見ると、松さんは身なりが餘りよくない上に、亂暴肌の男なのが氣になつた。

『さア、ぼんちの散財だッせ』と、繁さんは連勝を誇りがにコップを新來者にさし出した。

『ふン』と、松さんは不滿足さうに手を出してコップを受けた。渠は既に一杯機嫌の顏をしてゐた。

『ビールやあきまへん、なア。』

『けど、なア、わたいが續けて三番勝ちましたのんや。』

『ほたら、ぼんち』と、松さんはあけたコップを下に置き、『わたいと一番七十で行きまひよか？』

『そりや無理だす。』長さんは定さんの肩を持つて呉れるやうに

『松さんも八十で行きなはれ。』

『ええツ、負けたろ！ その代り、なア』と、棒尻を床にとんと突いて、――その響を今思ひ出すと、定さんのあたまへは一しほぴんと來るのである、『寶塚だッせ、寶塚。』

『そりや面白い。』繁さんも側から贊成した。

『ぼんち、しッかりやんなはれや。』長さんが云ひ添へたのに力を得て、定さんは一生懸命になつた。

『そないに目の色まで變へんかてええやないか』と云つて、松さんは憎いほど落ち付いてゐた。二點、五點、七點、十點と身づからの聲で數へながら、渠は、定さんが三回もから棒を突き、二回二點と三點を取つたうちに、あがつてしまつた。

『さア、寶塚や、寶塚や！』松さんは小躍りして喜んだ。渠は長さんと繁さんとに頻りに何か耳打ちをしてゐたが、やがてうち揃つてそこを出た。

『わたいも行けまへんか』と、ボーイが云つたが、定さんがそんなに大勢は迷惑だと云ふ顏をしたので、他のもの等が遠慮して引ッ張らなかつた。

『あの時、いッそのこと、皆をことわつてしもたらよかつた』と定さんは考へて見ても、跡のまつりで仕方がない。

江戸橋から市中の電車に乘つたが、松さんは景氣よく大きな聲を出して、相生にしようか、菱富にしようかと皆に相談してゐた。

いづれ酒を飲む場所のことだらうから、他の人々の手前、こツそり相談すればいいのにと、定さんには何だか晴れがましく思はれた。が、松さんは人前もかまはず嬉しさうににこ付きながら、づか〳〵と渠の腰かけてゐるところへやつて來て、渠の意向を聽いたのである。渠は自分のおごりだから結局自分のさし圖を他のもの等が受けるのだと思つて、少々得意になつたと同時に、どこがいいのやら一向勝手が分らないのを恥辱であると思つた。そして、おど〳〵した。ビールも飲まなかつたのに顏に少しほてりをおぼえながら、暗にどこがいいのだと尋ねる目附きを松さんに向けた。

でも、松さんはそは〳〵してゐて、定さんの心持ちを判じて呉れなかつた。脊は低いが、酒樽に辨慶縞の浴衣を着せ、その腰に白縮緬の兵兒帶をしたやうなからだを釣り革にぶらさがらせ、車臺のゆれる通りにゆれながら、

『おい、どッちやにしよう？』

『……』定さんはこの時ほど恥かしいことはなかつた。溜りかねて座席から立ちあがり、

人々に聴えないやうに松さんの耳もとへ口を持つて行つて、『どッちやがええ？』
『そりや菱富の方が――』と、松さんは自分のよく行く方の名を云つた。
『ほたら、その方にしまひ。』
『わたいの通りだッせ』と、また大きな聲をして松さんは他の友人を返り見た。
定さんはどちらに決つたのかを不圖おぼえ落したが、その聲で自分等の祕密を人の前であばかれたのをひやりと感じて腰をドろした。すると、松さんはつづけて渠を見おろし、
『藝子は四人と決つたぜ。』
『藝子までも』と反問しようとしたが、口には出なかつた。そんなものまで懸けたのぢやアないと云ひたかつたのだが、豫て一度は呼んで見たいと思つてゐたものが呼べると考へると、嬉しさと恥かしさとに先づからだがすくんでしまつた。それに、行く人數だけ呼ぶのだとすれば、自分にも一名當るのだから、自分はその當つた女とどうすればいいのだらうと云ふことに考へ及んで、身ぶるひをした。

二

梅田から郊外の箕有電車に乘り換へる前に、松さんはそのそばの郵便局から今行くからそのつもりでゐて吳れいと云ふ電話をかけた。
『さすが、松さんや、なア。』定さんは、かう心で感心しながら、遠距離二十五錢の電話料を出してやつた。
その頃には、もう、長さんや繁さんの顏にも醉ひが十分に出てゐた。それでも、最も多く目に立つほどはしやいでゐたのは松さんばかりで、どこかで飲んだ下地があつたので腰がふら〳〵してゐるにも拘らず、電車の中を別々に離れた長さんのところや繁さんの前へ渡つて行つて、何か面白さうに度々耳打ちをしてゐた。そのあげくが定さんの隣りへ腰をおろして、その肩に痛いほど――實際、痛かつたが――抱き付いた。そして、わざとだらうと思へたほど醉つた振りをして、
『おい、こら、ぼんち』と、定さんをゆす振り、渠の鼻のさきへ熟柿のやうになつた圓顏を、ぬツと突き出した。『あんたにも、なア、ええ女子を世話してあげまッせ。』
定さんはそれが恥かしかつた。目をそらして、きよろ〳〵と誰れとも知れない隣りの人や正面の人を見た。そして、さう云ふ人々が若しうちの人や出入りの男であつたら、直ぐおやぢや姉さんに知れてしまふだらうに――と。
『おい、ぼんち、心配するな、大丈夫や。』松さんはただ無上にはしやいでゐて、長さんや繁さんが襦袢の肌ぬぎになつたのを見て、
『おらもやつたろ』と云つて、同じやうに肌をぬいだが、襦袢を着てゐなかつたので、直肌であつた。
『肌をお入れ下さい、規則ですから』と、車掌にやツつけられて、松さんがすご〳〵肌を入れたのは、定さんには氣味がよかつた。
松さんはなほしつこく定さんの肩に取りすがつて見たり、低い齒の向う附き利久をはいた足さきで空を蹴ッて見たりしてゐたが、そこには落ち付けないで、定さんの向う側の席へもどつた。その時、渠はどうした拍子か、――見てゐた定さんが思ひ出してもをかしくなるのだが、――自分の脱いで置いた麥藁帽子と隣席の人のとを取り違へ、隣席の人の被つてゐた帽子をその人のあたまから取つて自分のあたまへ上せた。
『どうした？』東京口調で怒つた隣りの人は、それを突差の間に奪ひ返した。
松さんも自分の失敗に自分でびツくりしたのか、失敬しましたとも何とも云はず、腰をあげ

て、自分の帽子がその脇にころがつてゐるのを探し取つた。そして默つて再びそこに腰をかけ、手なる帽子を——失敗の時と同じ手早さで——あたまに上せた。

　他の友達は二人ではツはと笑ひながら、何かしやべり合つてゐたので、それに氣がつかなかつた。が、多くの乘客は東京辯の怒り聲がした方へすべての注意を向けた。中には、その時の樣子を見てゐたので、思はず吹き出したのもある。

　松さんは獨り興ざめた顏をして、席をまた定さんのそばに移し、

『暑い、なア』と云つた切り、窓から外をのぞいた。

　同じ側の乘客でまたわざとらしく吹き出したものがあるが、定さんは——をかしいとは思ひながらも——笑ふだけの餘裕がなかつた。

『四人の料理に四人の藝子や。なんぼかかるやろか？　ふところには、そないに仰山錢持つてやへんのに。足らんだけは、電話でうちへ云うて、助さんに持て來てもろたらえゝ。』こんなことを考へながら、何だか嬉しいやうな、おそろしいやうな、賑かなやうな、悲しいやうな氣分に往來せられて、行くさきばかりが急がれた。で、松さんと一緒に無言で外を眺めてゐると、電車が切つて進む涼しい風がほてつた顏に當つて、からだの汗臭いのをも吹き拂つて呉れる。

　新淀川の鐵橋を渡る時など、向うに焚い松をともして漁でもしてゐる光が水の上にきら〳〵と映つて、玉突屋などではとても見られない涼しさであつた。

『もう、鮎が取れるのんや、なア。』

『さうだツしやろ。』

　こんなことを小さな聲で語つてるうちに、十三驛も過ぎてしまつた。

　大阪の方の空がぼうツと赤くなつてゐるのが見える。あの下にうちの者や好きな女子等が、殊に、隣家の靜江さんも住んでゐるのだ、な、——そして、その空が車の向きで隱れて行くのを追ふ爲めに、定さんは窓から首を出した。そのとたん、頑固なおやにでも太い棒を以つて毆られでもしたやうに、渠のあたまをいやと云ふほどがんとやつ付けて行つたものがある。

『あぶない！』松さんの手がいつのまにか定さんのあたまをさすつてゐた。

『何や、何や？』長さんも、繁さんも、松さんの聲に驚いてやつて來た。

『あたまを柱で打ちやはツたのや。』

『怪我しやへんか？』

『したか知れへん。』松さんは定さんの無言で押さへてゐる手を無造作に押し除けて、そのあたりを方々圓く撫でて見た。

『てんごうすな』と、定さんは云つてやりたいほどであつた。

『異狀はありませんか？』車掌もやつて來て、見舞ひを云つた。

『えらいこともないやうだす。』松さんはこの場合、かう云つて置かなければ、目的地へ行けないと思つたのだらうと、定さんは跡になつて考へられた。

『あの時直ぐ引ツ返して大阪病院にでも行たらよかつたのに——今では、もう、手後れか知れへん。』考へて見ると、今にも自分の死が近づいてゐるのではないかと思はれる。押さへてゐるあたまが段々張れぼツたくなつて來るやうで、その張れぼツたいのは、頭蓋骨の碎けた間から、腦味噌が溢れ出たのではなからうかと。

三

　兩手で押さへてゐても、づん〳〵あたまが痛む。が、世話役の松さんは少しも思ひやつて呉れない。おのれぱかりがえらさうな風をして、

長さんや繁さんを番頭でもあるかのやうに取り扱ひ、來てゐる藝者を皆までわが物にして、『おい、ぼんち、不景氣に何ぢやい、しツかりしなはれ』もあきれてしまふ。

『寶塚へ行たら、醫者に見てもろたらえゝ』と云つたではないか？　それを、終點で下りると全く忘れてしまつて、直ぐ酒だ、藝子だとさわぎ出した。

玉突には負けたが、一體、これは誰れのおごりだ？　皆おれの財布を當て込んでゐるのぢやアないかと定さんは憤慨すると同時に、あの時、電車の窓から首を出さなかつたらよかつたにと云ふことを祈禱のやうに繰り返してゐるのである。

電柱と云ふものは、電車軌道の兩側に立つてゐるものとばかり思つてゐた。ところが、さうでない場所もある。

『この邊と螢ケ池とは、柱が眞中に立ツとりますから、お顔を出すとあぶないです』と車掌が説明した。

定さんはそれを知らなかつた。

なぜまたこんなところへ來たのだ？　首を出さなければよかつた。いや、電車に乘らなければよかつた。いや、玉突で懸けなければよかつた。と、から云ふ風に考へを繰り返して見ても、柱に衝突した事實は取り返しの付けやうがないので――

定さんはあの時驚きと痛さとをぢツと辛抱して、窓を背にして席にもたれたまま、

『何ともおまへん』と苦笑したが、膝の上に置いて見た兩手がおのづからあたまへ行つた。すると、松さんは、

『痛いか』と聽いた。

『そないに痛いことありやへん』と云ふつもりで手を膝におろし、首を左右に振つたが、いつのまにか又手を上へやつてゐる。

『痛いか』と、また同じことを松さんが聽いた。

『そないでもありやへん』と答へた切り、うるさいので、手をおろしてゐようと思つても、直ぐまたそれがあたまに行くのである。

ぢツとしてゐると、その痛みに堪へ切れなかつた。直ぐそばに立つてゐる眞鍮柱にあたまをもたせかけ、ひイやりする氣持ちに痛みを忘れようとして見ても、自分の呼吸が迫つて來る。からだをねぢつて額を窓の枠に押し當てて見ても、いのちが縮こまつて行くやうだ。が、今から歸りたいと云ふやうな弱音も男として云ひ出せない氣がした。

『馬鹿だ、なア』と云ふ東京人の聲が車臺の隅から聽えた。また、見える限りの乘客等は、すべて目を見張つて、あざけりの顏をこちらに向けてゐる。

定さんは内と外とから押し苦しめられて、水の中から息をしに出た時のやうに、恥ぢも構はず、すツくりと立ちあがつて見たが、まだしも自分の家の隣りの靜江さんがここにゐないのを大丈夫だと思つた。飛んでもない、あの子にこんな失敗を見られたら、こちらの人と同じやうに冷遇し出して、樂しみにしてゐる云はず戀も全く物になるまい。

が、自分の意中をまだ云はず語らずのうちに、こんなことで死んでしまふのは詰らないとも思つた。

そのとたん、電車が不意に大ゆれがして、足をすくひかけられた。同時に、くら〳〵と目まひがして、あたりかまはずつッ伏してしまつた。

尋常に進行してゐる電車の響に背中が痛いのを感じて、再び氣が付いた時は、定さんは松さんの太つた膝の上につッ伏してゐるのであつた。その上に松さんは兩肱で頬づゑを突いてゐたらしい。それが痛くて重苦しい感じを與へた。

『苦しい、置いて呉れ』と云ふやうに背中をゆすると、松さんはその固く重みのある兩脇を離れさせて、兩の平手を載せた。が、なほ人臭いあツたか味が定さんの鼻のあたりに付いてゐた。
　渠は母の懐ろを出て以來、人のにほひをかう近く嗅いだことはなかつた。
「これが静江はんの膝やつたら、なア」と思ひ及ぶと、この刺戟があるだけでも松さんを懐かしい氣持ちがした。男は男で、女でないにせよ、かうして、いつまでも抱かれてゐたいものだと。
　で、かうした姿勢のまま、定さんは兩手をあまえたままに柔かにあたまへ持つて行つたら、松さんもその手の行つたところを撫でて呉れながら、
『ソリヤキコエマセヌーデンベヱサン』と語つてゐたが、やがて定さんの耳もとへ口を寄せて、
『しツかりしなはれ、な、行たら、女子を抱かせてやるさかい、なア。』
　低い聲ではあつたが、定さんはそれが人に聴えたらとあわてた。そして、その聲の下から俄かにからだを起して見た。すると、松さんの隣りにゐる人が眞面目腐つた顔をしてこちらを見つめてゐた。で、定さんの手がまたあたまへ行つた。
　松さんは然しそんなことには頓着なく、その座をつるりと抜けて、先刻から筋違ひの所へ移つて腰かけてゐる長さんと繁さんとの間に行つて、どツかり腰をおろし、窓の方に靠れたまま、先づ長さんを首に手をかけて引ツ張り寄せ、何か耳打ちをした。すると、長さんは松さんの手を振り切つて、
「知りまへん」と逃げ、目じりを下げて松さんを横目に見た。次ぎに又松さんは繁さんにも同じ耳打ちをして、だらしない笑ひを呈せしめた。
「ぼんち大明神やさかい、なア」と叫んで、松さんはベツたりと背を窓の方にもたれさせ、ただにこ〱とそら嘯いて、また利久下駄の兩足で空をかたみ代りに蹴ツてゐた。
　いづれ、呼ぶ女の話だらうと定さんは推察して見ないふりをしてゐたが、渠も渠等のと同じ樂しみを心に畫いてゐればこそ、あたまの痛くて苦しいのをも辛抱して行くのであつた。

四

『けど、お父さんやお母はんに知れたら、どないしよゥ？』
　この疑問は、定さんには、おそろしいよりも恥かしいのであつた。
『長はんとこで泊めてもろた云ふとこか』とも考へて見た。が、『いかん、いかん。往んでから醫者を呼んでもろたら、直ぐ白状せんならん。』
　最終電車に乗り後れて寶塚に泊つたと云ひ爲して置かうかとも思案して見たが、
『そや〱、電話をかけて、あの助さんに錢持て來い云はんならんのや！』跡で調べられたら、『藝子遊び』したと云ふ化けの皮が剝げてしまふ。
『けど、あの時は、まだここまでせツぱ詰つてをらなんだ』と思ふと、定さんの心には、二度目に氣が遠くなりかけた時のことが浮んだ。
　ぢツと堪へて、自分の目をどこか一ケ所に据ゑてゐようと思つても、その目から先きに動いて行つて、からだを靜かに落ち付けて置くことが出來なくなつた。右を向いて見た。左を向いて見た。坐つて見た。また腰かけて見た。孰れにしても、結局は、手があたまへ行つて、行つて――
『人がおだてたかて、かまへん』と決心して、自

分の手の行くままにして見たが、それも亦その儘では續いてゐなかつた。
　まだしも電車が進行してゐて吳れれば、多少でも氣がまぎれてゐるが、あの石橋の分岐點で、さきの箕面行き電車に故障が出來、自分等の車臺が二十分ばかり進行を停止した時は、自分の呼吸もそこに全くとまつてしまふのではないかとまで思へた。
　やッと動き出したが、今度は、また、動き出した電車その物までが自分の苦しい呼吸をしてゐるやうに思はれて、定さんは今夜おぼえようとする藝者買ひの天罰を、前以つて、ここに受けてゐるのだと感じて來た。
「石橋で下りたら、よかつた。」から思へば思ふほど、息が詰るやうで——
　そのうち、池田停留所へとまつた電車は發車した。と同時に、もう、辛抱がし切れなく、一時も早く下車したくなつた。で、先づ立ちあがつて、よろ〱しながら、松さんの前へ行つて、皆を驚らせないやうに、先づ、渠に相談して見た。
『わたいだけ下りまひよか？』
『どこで？』松さんは、ぢッと、おどかすやうな怖ろしい目付きをして見せた。『こないな淋しいとこで下りたかて、どないしなはる？』
　定さんはこの反問にいぢけた。默つて、睡いときのやうに重くなつた上目蓋をあげて、ちよッと松さんを見返したまま、またしぶ〱ともとの席へもどつた。そして、てれ隱しに窓の外を見ると、池田の小蘭山と云はれる五月山の麓に、ちらほら涼しさうな光が見え、電車はぐわうぐわう響きを立てて、猪名川の鐵橋を渡つてゐるのであつた。
『ここまで來たら、なア』と、繁さんも松さんに贊成するやうに、
「梅田へもどるよりや、先きへ行た方が近おまッせ。』
『そないし給へ、そないし給へ。』長さんも亦ぞんざいに口を添へて、ぐた〱したからだを窓へもたせかけた。
『人の苦しいのんも知らんと！』から目に云はせて友を見た。あたまの痛いのは、もう、全く自分一個の問題だと分つて來た。一番親切だと思へた長さんまでがこの場合の相手にもなつて吳れなかつた。まだ皆目は淺いが、玉突で知り合になつた友人は友人だのに、揃ひも揃つて、たツた三十點の初歩者をばかり喰ひ物にして、ただおのれ等の樂しみをしたらいいのかと云ふ、僻みも出た。
「何をしなはる」と云ふ角立つた聲が聽えたので、定さんは注意をその方に向けた。
「濟んまへん。」から云つて、松さんは自分の下駄の片あしが渠の正面にゐる客の足もとにころがつたのを拾ひに行つた。
「阿呆かいな」と心で叫んで、定さんは松さんを初め、長さんや繁さんの至つて冷淡なのを聯想し、「わたいは死にかけてんねんで」と云つてやりたかつた。
　我慢すればするほど、刻一刻に死が迫つて來るやうな氣がして來た。で、花屋敷を通過して、段々目的地へ近づいたのを知りながら、待ちかまへた——やがてこの電車から救はれるが早いか、他のもの等はうッちやらかして置いて、自分は自分で、どんな醫者でもいい、醫者と云ふ名の付くうちへころがり込まうと。

五

　淸荒神の梅林や竹藪の暗い蔭を出て、涼しく開けた夜の空氣に、新溫泉のイルミネションが山と山との間を照らして、ぱッと皆の目を射始めた。
『さア、寶塚の終點や！』から思つたら、然

し、張り詰めてゐた精神が忽ちゆるんだので、定さんは意識がぼうッとなつた。空氣の外、さへぎる物もないのに、溫泉裝飾の電光が見えなくなつた。そして電車の中も、自分のからだも、殆ど全く眞ッ暗に暗い。

『腦味噌が早やわたいを死ぬ方へ引ッ込むのんやないか？』ふと、總身に身ぶるひを感じた時、どんと電車のとまつた反動が來て、定さんはあたまのづん／＼するわれに返つた。

『どなたも終點でございます。お忘れ物のないやうに。』

『來たぞ、來たぞ！』から他の三名は爭つて、立ちあがつた。そして定さんをせき立てた。が、渠は立つて渠等の手にがツくりと取りすがるより外に力が出なかつた。

『お醫者はん――呼んで――欲しい！』

『醫者がおまツしやろか？』賴りなげに云つて皆を見まはしたのは繁さんだ。

『おまツしやろ、こゝでも仰山人の來るとこだツさかいな』と云つて、長さんは車臺の出口へ集つた人のどれかに聽いて見ようとした。

『おまツさ』と、車掌は氣の毒さうに言葉を引き取つて、醫者の家のありかを說明した。

『おましたかて、――先きへ行てから呼んだかてえやないか？』松さんは叱り付けるやうに促した。

他の乘客等が憎々しさうに松さんの顏を見たり、冷笑するやうに定さんの樣子を熟視したりして出て行く跡から、定さんは重苦しいからだを松さんと長さんとの肩にもたせかけた。そして改札口を出てから、餅菓子屋の角を曲り、氷屋と食道樂との向ひ合つた電燈が明るい道を殆ど夢中で步いて、相生樓に突き當ると、

『あ、何でもここや』と安心しかけた。が、なほ左の方へ引ッ張られて、その隣りの門へ這入つた。

『お出でやす』と云ふ男や女の揃つて出したのが見える聲が、定さんにはどこかの遠い一齊射擊の音のやうに聽えた。そして脊の低い樽男が眞ッさきにわざとらしく大股に足をあげて、式臺をあがつて行くのが、定さんの目に朦朧と映つた。その時、渠は長さんと繁さんとに助けられてあがつて行つた。

にこ／＼して出て來た女中に松さんは先づ聲をかけた。

『おい、お菊、また來たで。』

『ようお出でやす！』お菊と呼ばれたのが笑つて、わざと大きな聲を出した。『顏見たら、來たのんは分つてまッさ――なア、旦那』と、かの女は長さんにとも繁さんにとも付かず念を押した。

『何をぬかす』と云つて、松さんは女の首に取りすがつた。

『いやア』と大きく叫んで、女は渠の手をふりもぎつて身をかはした。そして渠がまたさし延べた手をぺたりとうち拂つて、にらみ付けながら、『いたづらッ兒！ やんちやはん！』

媚かしい東京語や大阪言葉と綺麗な姿とに、定さんは姉のことを思ひ出した。そして自分の、あの姉でも、男に冗談を云はれると、こんな眞似をするのであらう、自分の隱してゐる慾望も、して見ると、遠慮には及ばない、かまふものかと、目の光までが俄かに明るくなつた。

『おい、ぼんち、大事ないか？』松さんがふり向いたので、

『大事ない』と笑つて見せた。

『ちッとア勢ひようなつたやうや、なア――おい、繁はん、大いに飮まう。』

『飮まいでかい、な？』

『あんたもしッかりしなはれ。』長さんの肩をぐいと引ッ張つて、

『玉突に勝つたんやないか？　今となつては、ぼんちがいや云うても、わたい等が承知しまへん。なツ、繁はん。』

『もツとも、もツとも！』

『どうや、ぼんち、そやないか？』

『……』定さんはただ苦笑をしてゐる。

『大事ない云うたやないか？　ぼんち』と、跡戻りをして來て、相手の肩をぽんと叩いた、『しツかりしなはれ！　わたいは醉うてゐやうでも、醉うてやへん。これからまだ／＼飲みまツせ。』

『……』

『返事しなはれ――ええか？』

『よろしゆおます。わたいも飲みます。』

『面んろい、面んろい！』松さんはまた皆のさきへ立つて、わざと大股に歩いた。

長さんも繁さんも、元氣づくと同時に、定さんから手を放してしまつたので、定さんは獨りで元氣をふり起し、苦しまぎれにや／＼笑つて見せながら、皆の跡から廊下を進んだ。

が、お菊は渠だけが様子が違つてゐるのを見て、踏みとどまり、

『あんたはん、どないしなはつた――そないに青い顏して？』

定さんは何か云つて人並みの相手にならうと思つたが、矢ツ張り苦笑の間にただにや／＼してゐる外なかつた。

『こいつは、なア』と、松さんが跡戻りして來て、『電車の柱であたまを打ちやはつたんや。』

『まア、あぶのおました、なア。』

『けど、案じたことやおまへんやうや』と長さんもふり返つて、浮付いた調子だ。

『大事おまへんか？』

『……』定さんは、うんと首をたてに振つたが、その首を振つただけでからだがふら／＼した。

『先生呼んで來まひようか？』

『そないなことせんかて』と、松さんはまた先きに立ちながら、『藝子はんが來たら、ようなりまツさ。』

『大事ないのんなら、よろしゆおますけど、なア。』から心配さうに云ひながら、女は定さんの背中に手を持つて行つて、渠の羽織の退け衣紋になつて、而も左の肩からはづれさうになつてゐるのを直して呉れた。

その時、定さんの鼻に、後ろの方から、女のしみ渡るやうなにほひがした。鬢附けのにほひもまじつてゐるやうだから、あたまに結つた髮のにほひだらうとは思へたが、それを渠には女その物の慣れ慣れしさと離れて考へることが出來なくなつた。

六

眞ン中を大きな菱形に張つた天井の電燈の下へ來た時、定さんは直ぐころりと横になつて、兩手であたまを押さへてゐた。

『しツかりしなはれ、ぼんち』と、定さんの上に馬乘りになつて、兩手で肩のところを押し付けた。

『痛い、痛い！』定さんはあたまから手を放して、その兩手で疊に力を持たせながら、からだをひねつて、上の重みから免れようと藻がいた。

『弱い奴ちや、なア。』松さんは立ちあがつた。そして他の二人の方に行つた。二人は温泉道の松並木が風に少しゆられてゐるのが見える手摺のそばにあぐらをかき、全く肌ぬぎになつて、巻煙草に火をつけたり、扇子を使つたりしてゐた。で、これも亦直肌ぬぎのあぐらになつて、『どうやろ、なア、ぼんちがあんまり惡いやうなら、ぼんちだけ、どこぞ靜かなとこへ寢さして置こか？』

『それもよろしゆおまん、なア。』繁さんはから

答へて、開いた扇子をばた〳〵使つた。
『けど、なア、まア、醫者に見てもろたらどうや――どもなつてをらなんだらええが――』長さんは定さんの方を見て、早くさうせいと促す樣子をした。
『そや〳〵、見てもろていかなんだら、ぼんちだけに菓子はん見せたげへんのや。』から云ひながら、松さんはまた定さんのそばへやつて來た。
定さんは聽かない振りをして聽いてゐたのだが、三人が三人ともなぜ自分をから退け物にしようとするのか分らなかつた。
ここへ梅田から電話をかけた料金も、定さんの財布から出した。往復の電車賃も同じ財布からだ。それだのに、あたまが碎けたかも知れないほどの目に會つた渠をそばに置いて、車中ででも渠等ばかり面白さうにさわいでゐて、渠の苦しみを少しも思ひやつて吳れる樣子は見えなかつた。そしてここへ來ると、直ぐ、松さんを初め、おのれ等が身づから出し合つて散財するかの樣に幅を利かせて、『菓子を見せたらん』とは何のことだ？　渠等は渠の金でおごつて貰ふのだが、おごり主が不意の怪我をしたのを幸ひにして、その分迄も渠等だけで占領してしまはうとするのかとも、定さんは考へて見た。
『氣の小さい奴等や、なア――わたいかて、部屋住みかて、大けえあきんどの息子や。一旦はずむ云うたら、ちツとのことは惜しみやへん。その代りわたいも一緖に仲間入りさして貰ふ。』
から憤慨した心を起したが、渠の分に當る藝者には、仲間の年順から云つてもきツと一番若いのが來るのにきまつてゐる、と、渠はふいとほほゑみの目を明けた。そして松さんがそばに坐つてこちらをにこ〳〵見てゐるのに出會した。
松さんは、定さんの樣子を、痛いのを胡麻化して苦笑してゐるものと見た。
『こら、ぼんち』と、定さんの手を押しのけるやうにしてあたまを無造作に撫でてやりながら、
『どうや、痛いか？』
『……』定さんは、から亂暴に取り扱はれても、そばに來て貰ふのを寧ろなつかしいやうな氣がして目に淚を湛へたが、返事にかぶりを振つた切りだ。
『醫者を呼ばんかてええか？』
『……』矢ッ張り無言でうなづいた。
『ほたら、置きまひよ。』松さんはこちらを見つめてゐた長さん等の方へ顏を向けて、その方が餘ほど面倒でないと云ふ風をした。
『ええかいな、見て貰はんかて』と、長さんが心配さうに立つて來た。
『本人がええ云うたら、ええやないか？』
『けど、なア、惡いやうなことやしたら、いかんよつて』と云ひながら、長さんも坐つて、定さんの額に手を置いて見たり、また、來ようとする藝者に關する想像が血管にまはつて脈搏を強く打つてゐる、定さんの手首の脈を取つて見たりした。
定さんは却つてそれをうるさくまたわざとらしく感じた。そして松さんよりも長さん等の方がそんなことをして、わざとにも仲間を外させようと強ひるのではないかと云ふまはり氣を持つた。
『痛おまッか、ぼんち』と、爺さんが緣端から聲をかけたのには返事をしなかつた。
そこへお菊が茶を運んで來た。先づ三人集つてるところへそれを分配してから、爺さんの方へ持つて行つたが、それから定さんが橫にまるまつてゐる背中のところに坐つた。定さんのいらいらしてゐる神經には、やアはりと香ばしい風が當つたやうで、渠はおのづからからだが縮みあがつた。

『惡おまん、なア、痛うては。』
『痛うない云うてまッさ。』
『けど、なア——』
「痛うないことはないやうやけど」と、長さんは定さんのどこを見るともなく明けてゐる目を見詰めながら、「醫者よりや藝子はん見たいのんやろかい？」
『そやない！』定さんは顏を赤らめて、淡泊さうに、荒襄した。そして長さん等の方から寢返りしたとたん、今度はお菊と顏を向き合はせたので、急いで目をつぶつて、あたまへまはしてゐた兩手の肱で額を蔽つた。
「藝子はん見せたら、直りまッさ」と、松さんはわけもなく云つて、緣の方へ離れて行つたのを、定さんは目で追つて、呼ぶなら早く呼べと命令したかつた。
そして、
「どもないか、ほんまに」と、長さんがまだ心配さうに背中へ手をかけてゐたのをも、早く離れて呉れればいいと思つた。どうせ若し病人として世話をして貰ふなら、渠等のやうな毒性のものでなく、この『ねえはん』にして貰ふ。さうしたら、藝子などは來なくてもいいのだが——
『ぼんち』と、手を肩に置いてお菊に呼ばれたのが、誰れにさう呼ばれたのよりも胸に滲みた。「どうだす、先生呼んで來まひよか？」
「もう、ええ云うてたら、ええやないか」と、松さんは叱るやうな聲だ。そして團扇を大きくあふぎながら、『早う酒を持て、酒を持て。』
『は、はア——殿の仰せに從ひまして』と、お菊はわざと畏まつた樣子をした。
『芝居だッか』と眞顏で云ひながら、別な女中が浴衣を持つて來た。
『兎も角も、皆はん、お着かへやしたらどうだす』と、お菊が注意したので、緣がはのものが先づそのつもりになつた。
『あんた、着かへまッか』と、長さんが定さんに云つた。
『ほんまに、大事おまへんか？』また、お菊が聽いた。
『うん。』から、定さんは答へなければならないやうな氣がしてしまつた。が、その實、お菊と云はれるこの女だけになつたら、醫者を呼んで貰ふやうに賴むつもりであつたのである。
さうもしたいが、また藝子も見たい。
かまへん、かまへん、成るやうに成れ」と、私かに決心して、定さんも起きあがつた。そして、長さんの後ろで、帶を解き始めた。おのづからしがんで行くその顏をお菊に見られないやうにして、橫向きでかの女に衣物を脫がせて貰ひながら、「長はんも、繁はんも、羽織も着ず、見ッともない風をして來た、なア」と考へた。

七

定さんはこの料理屋の浴衣に着かへるのが珍らしさ、嬉しさに、元氣をふり起した。そして皆が『藝子、藝子』ばかり云つてるさもしさに、白分ばかりはさうでないぞと云ふことを見せて、さッき恥かしかつた時の意趣返しでもしてやるつもりで、新温泉へ這入つて來ようと云ひ出した。
「偉さうなこと云やはる。」松さんはかう一言のもとにはね付けて、煙草盆のそばに浴衣に改まつたあぐらをかいた。
「およしやす、新温泉など、當り前のお湯やおまへんか？」
『それにせい、いつでもまた行けまッさ。』から云つて、長さんや繁さんも進まないで、ただ立つてゐた。
それではやめようと、直ぐ素直には云へなかつた、何となく、自分の位をおとすやうな氣が

して。で、少しむツとして鐵色モスリンの帶をしめながら、
『ほたら、わたい獨り行て來まひよ。』
『ぼんち』と、松さんは一層強く出て、『なんで、そないな無理云ひなはんのや？　あんたが行たら、皆ついて行かんならん。そないな世話やかさんかてえゝやないか？』
『うちのお湯にしときなはれ』と、お菊も口を出した。そして笑ひながら、『うちのんも新溫泉だッせ。』
『ほたら、置きまひよ。』から云つて、松さんの方をぢッと見た、あたまのづきん〳〵痛むのを辛抱して。それでも、渠の云ひ分には、定さんも腑を落ちつけた。
そして皆でざッと一あびしてから、膳に向つた。暑いからとて、皆わざと緣へならんだ。松並木に最も近い隅の柱を境にして、その右の板の間に長さんから松さん、左のに繁さんから定さんだ。定さんの方の列は、丁度、誰れかの山水の三幅對を懸けて、大きな松の植木鉢をあしらつた床の間に、疊をへだてて、さし向つてゐた。
『今晩は』と、入り口の襖の明きから手をついたものは、誰れも誰れも、まとゐの遠いのに驚いた。裾を曳きながら、
『とうない遠方だす、なア』と云つて來たものもあれば、
『威があつて、なか〳〵あんた方のねきへは寄れまへん』と、わざと座敷の眞ン中につッ立つてゐたものもあつた。定さんには、それが面白いことを云ふものだと思へた。來た中で、勘七と云つて、薄藍の濃淡で龜甲形の出た紋羽透綾を着たのが、最も年若らしかつたが、それが松さんのそばへ坐つて、渠にばかりべちや〳〵しやべくり出した。そして、
『旦那、こなひだのお方どないしやはりました』とか、『裸か踊り、おもしろおました、なア』とか云つた。
『おれも一つ今晩踊つたるぞ。』松さんは直肌の腕で腕まくりをする眞似をして、元氣を附けてゐた。
『あんたはよう知つてなはる仲だッか？』から、繁さんが聽いたのに答へて、
『そやとも、なア』と、松さんは勘七を兩手で引き寄せて、『なか〳〵わけのある仲やもん、なア。』
『よろしゆおました、なア』と、かの女は押さへられた肩をすくめて身をのがれ、笑ひながら、くづれた膝を整へ、元の通りに坐り直した。
『わたい等もそないなりとおまん、なア』と云つて、長さんはさがつた目じりで自分のそばの藝者を見た。
『合うたり、叶たりだッか？』それが氣まづい顏をしながらも答へた。そして定さんにさへ珍ころめいたと見える目鼻を動かして、『わたい〆子と云ひます、どうぞよろしう。』
『今から、もう、妥協しやはるんや困りまん、なア。』から云つて繁さんも話の相手を求めた。すると、渠のそばにゐたのがまた涼しい聲で、
『旦那、妥協やおまへん、ラッキョウだッせ。』
『こりや、やられた。』繁さんは箸で摘んで口へ持つて行きかけた薤のやうな物を宙にまごつかせた。
松さんは相變らず勘七ばかりを相手にして、惡口を云ひ合つたり、叩き合つたりしてゐた。
定さんのそばには、初めに坐り後れた婆々ア藝者で、顏も皺くちやな『愛助ねえちゃん』と呼ばれるのが來てゐた。渠が何の洒落も云へない上に、手をあたまへ持つて行つたり、目をぱちくりさせたり、顏をしがめたりしてゐるので、かの女も渠にとツ付くすべがなく、ただ渠の猪口が一二度明いた時、その跡へお酌をしただけで、

他のもの等の話に調子を合はせてゐた。
渠はその藝者のふけた顔と、一番遠い場所にゐる松さんのそばの子の膝に透いて見える桃色とを時々見比べながら、何だか勝手が違ふやうに思はれた。
『年から云うたかて、松さんがあの子を取るわけがない――また、誰れを取ると云ふことかて、錢を出すわたいが決めたらえゝやろ』と、私かに不平を起した。
然し定さんの目的の勘七は、『わしが國さ』と今一つ渠の分らない物とを踊つてから、他のお座敷へ貰はれて行つた。それを渠は鳥渡行つたので、また來るのだらうとも思つたが、出て行つた時の挨拶振りでは、もう來ないのだらうかと失望し始めた。然し、あからさまにそれを誰れに尋ねて見ようと云ふ氣は、出さうと思つても出せなかつた。
折角張り詰めてゐた精神がその場にゆるんで來て、またあたまの痛みを盛り返し、それへ堪へられなくなつた。そして醉つた振りをして立ちあがつた。
『どこへ行きなはる、ぼんち？』松さんは皆と同時に定さんの方を見て、かう詰問した。
『どこへも行きやへん』と答へて、床の間の前へ行つて、床に横たへた紫檀の敷木を枕にした。
渠が『思ひ切つて歸つたろかい』と激したのはこの時だ。

八

『あんたはん、弱をおまん、なア』と云つて、例の愛助が落ち付いた聲でくゝり枕を持つて來て呉れたが、それも直ぐ皆の方へ行つてしまつた。そして、三味を鳴らして、
『さア、お歌ひやし、な』と云つてゐる。それに付いて、松さんが都々一を二つ三つ續けて歌つた。すると、繁さんが二上りだと云つて、『隅田のほとりに』とか、何とか云ふのをやつた。
『ほたら、わたいもやりまひよか』と云つて、長さんも何かやつた。
松さんがまたやり出した時、一方では繁さんとそのそばの藝者とが何とか云ふ拳を始めた。そして繁さんが二三度負けた。
『おい、京八、おれと來い、おれと。』松さんががさつな調子でちよいは、とん／＼などやつてゐたが、俄かにやめて、鼻で物を嗅ぐ音をわざとらしく大きくさせて、『臭い、なア、何ぢや？　ヨードホルムのかざや。あんた、瘄毒だツか？』
『あほらしい』と、京八と云はれたのが涼しい聲で怒つたやうに叫んだ。
『けど、なア、くさいやないか？』
『くさいかて、瘄毒と決つたわけやおまへんがな。』
『あツちやへ行きなはれ。病人は病人の世話なとしなはれ。』
『看護婦だツかいな』と、愛助が口合ひを入れた。
『負けたさかい、そないな毒性云うて――なアねえちやん』と、京八は笑ひながら立ちあがつて、『わたいかて、女子一匹、へん、精神がありまツさ。』
『えろおまん、なア』と、〆子がその方を見あげた。
『そないにおこんなはんな』と、松さんは猪口の酒を吸つた。
『おこりやへんけど、なア――』
『ノウ／＼、おこるべし、おこるべし』と、愛助がけしかけた。
『ぼんちはどこぞ惡いのんだツか』と云ひながら、京八は定さんの方に足を運んだ。
『うん』と、松さんが答へて、『どたまを電車の柱にぶつけたのんや。』

『ほんまに？』と、松さんの方にふり返つて、『どい、いたまりこぶしもない――』

『洒落なはんな』と、松さんは云つたが、愛助にも聽かれて、定さんのことを殘酷な言葉で説明し始めた。

定さんは枕の上で、兩手であたまを押さへたまま、賑やかな方に向いてにや〳〵しながら、目を明けたり、つぶつたりしてゐたが、

『なア、ぼんち』と云はれて苦笑の目を明けた時、赤い蹴出しがちらと見えたかと思ふ間もなく、太さうな膝が渠の肱さきに坐つた。鈴さんのそばで鈴のやうな聲を以つてラッキョウの洒落を云つた女で、この女ばかりが裾も曳かず、廂髮に結つて、奧さん然と地味なお召を着てゐるのは、どうしたわけだらうと思はれた。それが皆に聽えるやうに言葉をつづけて、『すり傷にかてヨードは付けまツさ――きのふ、家族溫泉へ行て、手拭で腰んとこをすりむいたのんや。』

『あやしいもんや――新溫泉の家族風呂は、なア』と、松さんが追窮したのに、愛助が調子を合はせて、

『そりや、さま〴〵なすりむき方もおまツさかい、なア。』

『そや〳〵！』〆子もそれに贊成した。

『ええ人があんまり綺麗にしてやらうとおもたんやろ』と、長さんも口を出した。

『よかつた、なア』と、京八はわざと嬉しさうに手を叩いた。

『へーえ』と、入り口の外で女中が返事をした。

『違ひまツせ、こツちやのことやし』と、愛助が向うへうち消して、こちらでわざとらしくふき出した。

京八は首をすくめて、定さんににツと笑つて見せた。定さんも苦さうにだが、にツこりした。そして、ぷんと鼻さきへにほつて來る藥のにほひを、却つて香水か何ぞのやうにやさしいものと感じて、そのにほひの主となら、この痛みを分けて、一緒に死んで貰つてもいいと云ふ氣になつた。

『痛おまツか』と云つて、やはらかい手を肩に置かれた時、渠の姉よりも別嬪と思へた顏を下からぢツと見詰めて、涙に目をしよぼつかせながら、それでもかぶりを振つた。

九

外からも、二三ケ所三味や歌の聲が聽えてゐる。

明け放つた廣間へは、さツといい風が入つて來た。

『おう、ええ風や、なア』と云つて、京八が定さんのそばを立つた時は、再び皆のものの歌さわぎが始まつてゐた。

渠の好きな子までが浮かれ出して、松さんの踊るかツぽれに合はせて、『沖の暗いのに、サツサ』などとやつてゐる。

定さんも寂しい氣がまた一しほ引き立つて來た。手をあたまから放して起きようとしたが、重い石で押さへられてゐるやうなので、再び枕の上に肱枕をした。

『どないせい、死ぬのんや。死ぬのんなら、うちの者を呼んで叱られるよか、こツそり思ひ切り樂しんで、跡の勘定だけをうちの者にさせたかてええ。』

から考へては見たが、渠をそそる樂しみとは歌でもない、酒を飲みたいのでもない。

松さん等のさわぎがどこか遠くの方で聽えるやうな氣持ちになつて來た時、定さんには電燈で明るいが然しひツそりした小間で――而も呼べば直ぐ母も姉も來るやうな安全な、然しひツそりした小間で――好きな女の膝に抱かれて、自分の死んで行くそのありさまが浮んでゐた。

が、それも暫時のことで、渠が實際の痛みを堪へる爲めに目を堅くつぶつてゐるのをおぼえると、
「おい。ぼんち』と云ふ松さんの聲が最も近くにして、『不景氣に何ぢやい？　ちよつとお出なはれ、相談がある。』
　定さんはふら〳〵するからだを踏みこたへて、松さんについて、廣間の人々の返り見る視線の範圍を出た。そして便所への道の廊下に立つた。
『どないするのんや、寝てばツかりゐよつて？』
『……』青い顏に、ただ口びるのさきをとがらせて顫はせながら、松さんの醉ひの出切つた赤い顏を見詰めた。
『歸る云うたかて、もう電車がありやへんで。』
『わたいかて、歸る氣やない』と、不平たツぷりにまた口をとがらせた。
「それで占めたもんや」と云ふ風に ほくそ笑みて、松さんは低い聲をつゞけた。「ほて、女子はどないしよう？』
『さう來てこそ順當や』と心に云はせて、定さんは全く得意になつた。そして自分の女を選べと云ふことだと合點した。でも、特に低い聲をして、云ひにくさうに答へた。

「あの――さツきに――歸つた子がえゝ。』
『ひえ！』と、松さんはあきれてわざと跡ずさりした。『まだそないなこと聽いてやへん。あの、なア、藝子を往なそか？　じやこ寢さそか？　それとも、來とるのなり、別なのなりを皆で別々に取ろか？　それを相談するのんや。』
『わたい、知りまへんが、な、そないなこと。』
『ぷツ』と、松さんは堪へかねて、押さへてゐた笑ひを吹き出した。そして廣間の入り口へ行つて首を突き出し、「おい、ぼんちや勘七さんに惚れてやはる！』
『うそや、うそや！』定さんはわれ知らず入り口から飛び込んで、その脊の高いからだをつツ立てた。そして酒の醉ひが加はつて一しほ痛むあたまを兩手でかかへながら、胸に溢れる恥かしさを眞顏になつて胡魔化した。「そないなこと云やへん。』
　愛助は〆子と顏を見合はせて、冷笑し合つた。
『まア、きなはれ。』松さんは今度は定さんの手をぐツと引いて、つれ出した。
『人氣役者は矢張り遊びまん、なア。』定さん等二人に聽えるのを憚らず、〆子がここにゐない朋輩を羨むやうに から云つたのには答へないで、愛助は笑ひながら叫んだ。
『わたいではどうだす、お乳をたんと飲ませてあげまツせ。』
『は、は」と、繁さんは笑つた。
『ちち、いゝ、ははだん、なア」と、また京八の口合ひだ。そして首をすくめて、『わたいかて、どうだす！』
「みな、あのぼんちの散財だツか？」愛助は生眞面目になつて長さんに聽いた。
「ぼんちが玉突に負けたおごりや。」
「負けた上に、又散財だツかい、な――ええぼんちやのんに、なア。』
　こんな話が聽えるのをすべて冷かしだと見て、定さんは聽かないふりをしながらも、困つたことを云つてしまつたと思つた。そして大きな目を見ひらいて、相手をただ見つめてゐた。
『あの子は、なア』と、松さんも眞面目腐つて、「わたいの聽いたところでは、毎晩旦那があつて、あかんのやさうや。』
「ほたら、もう、ええ」と云ひ切つた。そして今の失敗を回復したやうな氣がして、元の場所へ戻り、またどたりと身を横になげた。何だか松さん等が默つて勘七を歸したのがうらめしい。かの女がいけなければ、京八をと云ふ下心が

あつて、一刻も早く樂にこのからだを介抱して貰ひたい外、何も願ふところがない。が、この場合、何ごとでも云ひ出せばまた失敗を重ねるかも知れないので、尋常にあたまが痛むから早く死の床へ入れて吳れいとさへ口に出せなくなつた。そしてぶり返して來たやうに痛む痛みを堪へる爲めに、床の間の方へ寝返りして、胸の中では獨りあせつて、

『やけ糞や、このままここで死んだれ』と云ふ無言の叫びをあげた。

一〇

『ほたら、もう、歸りまひよか？』長さんは先づ興ざめた聲を出した。定さんが御機嫌を失つたと見たやうすだ。

『電車がおまッかいな？』繁さんは進まなささうだ。

『もう、大阪へはおまへんが、な。』から云つて、愛助は落ち付きを失つて來たのを隱して、細い銀煙管で煙草の火をつけてゐる。

『何のこッちやい、わたいにはわけが分らん。』松さんも皆の不興に釣り込まれて、『ぼんちも男やないか。一旦はずむ云うたら――』

『はずんでるやないか』と、定さんは後ろ向きのまま口をとがらかせた聲でこぼした。『けど、わたいは大怪我をしたのんや。』

『怪我したもんが、勘七でもないやないか？ ぼんちはわが勝手ばかり云うて、――來やへんもんは無理やないか？』

『無理やない』と云つて、こちらへ勢ひよく向き直り、『ほたら、松さんに怪我人の世話がでけまッか？』

『わたい、看護婦やおまへん。』

男も女も一度期にわッと笑つた。定さんはまた反對に寝返りして、

『笑ひたい人はもッと笑ひなはれ！』

『ほたら』と、松さんは定さんの機嫌を取るやうに優しくなつた。

『どないしよ云ふのんや？』

『あんた等は勝手にしなはれ、わたい醫者を呼んで貰ひまひよ。』

『醫者！』松さんは今更らのやうに驚いたが、他の友人に氣の進まない相談をかけた。『ほたら、醫者を呼んでもろて、――わたい等は皆でじやこ寝しまひよか？』

『さア』と、長さんが確答しかねたのを見て、

『なんの、お錢の心配は入りやへん――どッちや道、ぼんちの持ちにしまッさ。』

『それもよろしゆおまッしやろが、なア』と、繁さんもどッち付かずの様子だ。

『君も、お錢の心配は入りやへんで。』

『けど、なア』と、長さんがそれを受けて、『ぼんちの工合が分らんと――？』

『そやさかい、醫者を呼んで貰ふ云うてるやないか？』

『呼んで見てから、また相談したらどうや？』

長さんはなほ心がもぢ付いてゐた。

『ほたら、この人達に濟まんやないか？』から云つて松さんは藝者の方を返り見て、『あんた等の都合はどうや、な？ たとひ十二時過ぎてからの線香代は、わたい等で受け持つことになつても、あんた等には割前はかけまへんで。』

『どうも恐れ入ります』と、愛助は松さんの冗談を受け流して、他の子どもの顏を見た。そして暫く目話をしてゐたが、誰れもどうと口に出すものがなかつたので、かの女がまた代表者のやうになつて答へた。『さしつかへない子だけは、なア。』

『そりや、さしつかへたら仕やうがおまへん――京八さんはどうや？』

『さア――』

『さア』と、松さんもかの女の返事を眞似して、

興ざめた座をつくろひながら、『〆子はんはどうや？』

『さアーー』

『こりや、あかん。』松さんはてれ隱しにあたまを掻へた。すると、愛助が、

『ぼんちの眞似だツか？』

男達はそれにつれて煮え切れない笑ひを擧げた。

そこへお菊が出て來て、京八を貰つて行くことになつた。かの女は丁度よかつたと云ふ風で身がまへを始め、他の皆に挨拶してから、定さんの背中のところで腰を下げ、渠の顏をのぞくやうにして、

『ぼんち、さいなら。』

『……』

『さいならーーおこツてやはるのんや。』

『おこツてやへん、ゐてて欲しいのんや』と答へたかつたのだが、定さんは言葉に出しかねた。そしてこのまま死んだら、あれにもこれにも、二度と再び逢ふことが出來ないのにーー『をつて呉れたらええのんに、なア』と云ふ訴へが私かに胸一杯になつた。

『今夜死ぬ。きツと死ぬ。せめて死ぬまでゐてて呉れ！』から喉もとまでは來ても、聲に出せなかつた。そして自分のからだが獨りぼッちの寂しい闇に壓搾せられて、その結果としての如く、目から自然に、とめ度なく、涙がほど走つた。

そして、心の奥まで浸み込んだヨードのにほひと涼しい聲の足音とを追つて耳をこッそりそば立てながら、自分の家は何でも不自由のない大商人だと云ふことが、この場合、女どもに認められてゐないのを絶望的に殘念がつた。

松さん等が話して呉れたらいいではないか？ 一言耳うちして呉れたらいいではないか？ 金はいくらでも貰つてやるから、一晩だけとまれ、一晩でこの男は死ぬのだから、と。

思ひやりのない友人達だ、なアーー自分に容易く女を與へてやると約束したのは初めからうそで、ただそんなことを出しにして、おのれ等の勝手な飲み喰ひをしようが爲めに、自分を怪我させてまでここまで引ッ張つて來たのだらうと云ふ恨みと失望とが、心のうちで段々太いあたまをもち上げて來た。

同時に、またかう云ふ疑ひが起つたーー藝子と云ふ者は、皆の云ふ通り、慾でその身を賣るのではないか？ 今晩に限り、さうした樣子が見えないのは、松さん等のやうな風體の惡い人間と一緒に來たのでか知らん？

『何にせい、賑はしい夢のやうに一緒に來とつたかて、順々に影のやうに消えて行くのんやーーそれも、美しい方から』と考へると、もう默つてばかりゐられなくなつた。

『さいなら』と、また例の涼しい聲が遠くの方で響くのが聽えた。すると、定さんの目の前には、はツきりと、先刻這入つて來た時の、この家の門前門内の樣子が見えた。さツさと歸つて行く奧さん風の藝子ーー庭掃除や下駄番の男衆ーー多くの女中ーーその中から、最もいいにほひのしたお菊ーー最初に歸つてしまつた薄桃色の藝子ーー赤い色ーーヨードホルムーー『さいなら、おこツてやはるのんや。』

かう云ふ影や言葉などが、その瞬間に一度期に定さんを襲つて、渠の神經を高ぶらせた。渠の全身には、あたまの痛みと同志打ちをする、何だか知れない強い力が遠慮なく勃興した。そして、恥かしみの薄らいだ脇腹の間から、

『どないな女子でもええ』と云ふ聲が出た。この時、愛助がわざとさり氣ないふりをして、

『もう、十二時だツせーーわたい等はどないしまひよ？』

『そや、なア』と、松さんが受けて、『どうや、

ぼんち?』

『……』定さんは、それでも、暫く返事が出來なかつた。が、これを最後に藝子どもがみな歸つてしまふのでは困る。胸がただどぎまぎした。渠はあたまから手を離し、思ひ切つて皆の方へ寢返りした。そして、松さんが疊の上で愛助のそばにあぐらをかいて、こちらを見てゐるのに尋ねた、『じやこ寢たら、何だす?』

『わツ、はツ、は』と、繁さんと長さんとは緣がはでまだ[illegible]に向つてゐながら、一度に笑つた。二人とも箸を持つたままで、こちらを見てゐた。

『何がをかしい――いやしい奴ちや、なア』と、定さんは心で云つたが、おもてにはただいやな顔をした。

『あの、なア』と、松さんはほほゑみながら、小學校の先生を思ひ出させるやうな口調で、『皆と、なア、藝子はんも一緒に並んで寢るのんや、――但し、なア、手も足も出すべからずだッせ。』

『結はへときまほかい、なア。』愛助が無駄な口を出したのにつれて、〆子も亦笑ひながら、

『わたい等の方が結はへられたら往生や、なア。』

『そないな詰らんこと置きまひよ!』

『は、は、は、は』と、他の皆が揃つて笑ひを擧げた。

二

定さんは皆が自分を馬鹿にしてゐるのだと見て、ぷり〳〵怒つた。そしてそれを反省して見る餘裕もないほど、あたまの痛みが辛抱し切れなくなつて來た。想像にせよ、うその影にせよ、それが目の前にちらついて、隱れた慾望をそそつて呉れる間は、何となく痛みのもたせ柱があるやうであつたが、その柱も亦渠のあたまにぶつかつた柱であつたのが溜らなく殘念だ。

『二重の衝突!』から云ふ考へに思ひ及んだ時、定さんの女に對する情が全くあたまの痛みに變つて、腹のどん底まで通つて、からだ中を煮えくり返す。そして、一座が互ひに興ざめて默つてゐる廣間を、あたまをしツかり兩手で抱いたまま、ころげ廻つて泣き叫んだ。

『醫者を呼んで呉れ! 醫者を呼んで呉れ!』

松さん等は渠を少しでも落ち付かせようと努めて、酒の醉ひは全くそこ退けになつてしまつた。

藝者どもはまた魂消てしまつて、皆そこ〳〵に引きさがつた。

碁を打ちに行つてまだ歸らないと云ふ醫者を探し當てて、店のものが連れて來た。そしてそれに病人の云ふ通りあたまのいやに張れぼツたい容態を云つて、よく診察して貰ふと、

『もう、手後れやさかい』と獨り言のやうに云つて、顔を青ざめて、病人の寢かされてゐる小部屋を出て行つた。

それでも、皆は醫者が何か取りに行つたのだらうと思つた。で、定さんのまはりを取りまいてゐる友人や、店のかみさんや、お菊、その他の女中は、心配の餘り、別に言葉を出さないでゐた。

『うん、うん』とばかり、定さんは呻つてゐる。

やがて醫者が手に持つて來たコップの物を定さんに飲ませた。が、定さんは半分ばかり飲んでからそれをつツ返し、苦しさうな聲で、

『水は――入らん――藥を』と云つた。

醫者はこの言葉を聽いてをののき顫へた。が、それをまぎらせる爲めに、そのしがめ顔に苦い笑を帶びて、かみさんを見あげた。かみさんは、膝を突いてのしあがりながら、そこで窺いてゐたのである。かの女の心配さうな顔と渠の苦笑とがぶつかつた時、渠は別に手當ての仕

やうがないと辯解する口調で訴へた。
『あたまの鉢が碎けて、病人の云ふ通り、腦味噌が外に出てるやうやさかい、なア――』
『えッ！』かみさんは、腰をぬかしたやうにべつたりと坐つて、今更らの如く醫者の顏を見詰めた。
『矢張りそれか、なア』と、定さんには自分の想像してゐるところが事實らしくなつた。そしてしッかり目をつぶつたまま、初めて實際に自分を危篤だと考へた。そして、また、玉突のたッた三十點がいのち取りのゲームであつたかも知れないことばかりを悔みに悔まないわけに行かなかつた。『でも、人にただの水など飲ませて――こないなへぼ醫者の云ふことなどまだ分りやへん』と云ふ心頼みもあつた。そして、
『よう、まア、その間辛抱でけた、なア』と、醫者がてれ隱しに感心して見せたのが幽かに聽えた。すると、お菊の聲もした。
『きついぼんちや、なア。』
『わたいかて、男や』と、定さんは訴へかけても口には出なかつた。涙はほろ〳〵と枕の上にこぼれた。そして、それを隱す力もなく、――今しがたまでのあまい夢の、赤い色や親しいにほひの名殘りを思ひ浮べて見た。

「ぼんち」と、松さんが呼びかけて、『しッかりしてなはれや、大阪へ電信も引いたんやし、ええ醫者もおこすやうに云うたさかい、なア。』から力づけられた時には、もう土地の無方針な醫者もゐなかつた。多くの女中もゐなかつた。そしてそこにゐるかみさんや友人等の顏も見えないほど、定さんは『死にとむない』ばかりの痛みと後悔とにもだえて、おのれの愚かであつたことを責めた。
「馬鹿だ、なア」と電車の隅から、あの時聽えた東京辯が憎いほど思ひ出された。誰れに向つても助けを呼ぶことさへ、もう、手後れになつたと云ふやうな心細さに押し詰まつた。
そして、はたからなだめ賺すものがあるのをかまはないで、ただ、頻りに、
「早う、姉さん――おかアはん――お父さん」とばかり待ち受けてゐた。

（明治四十五年七月）

わがゆらぎ

暗き日 と 明き夜 は、今、
きぬごろも 受けつぐ けはひ
一日 の 物もひづかれ、
さし引き は 空しき 袖か。
堀端 の 枯葉やなぎ の
ちからなく さやぐ ゆふぐれ。
その さやぎ 胸に 渡りて、
わが心 いづれ の 影ぞ。
水ぞら を さへぎる 枝か、
水の面 に 黑める 幹か。
暗き日 と 明き夜 は、今、
目まどひ や 胸 の くるめき。
たそがれ は 迫り來りて、
われ のみ の ゆらぎ ぞ 殘る。

（『闇の盃盤』より）

人か熊か

『お竹、お竹!』

民藏は磯の香がする寢どこを拔けて出た女房に向つて、優しみを帶びた然し底ぢからのある聲をかけ、自分も飛び出した。二人とも晝も夜も同じ筒袖の綿入れを着てゐる。そしてかの女が下駄をひツかけて外へ出ようとするに追ひすがり、押しつけるやうに、『なぜそんなに逃げるのでい』と云つて、かの女の太くはち切れさうな手を取つて引ツ張つた。が、その大きなからだはがんとして巖のやうに動かなかつた。

くすぶつたランプの光に、渠は自分の眼が燃えてゐるやうに思へた。これを見た爲めであらう、お竹はからだにも似合はない優しい見えをして、

『でも、不斷とは違つたからだぢやアねえか、ね?』

『旦那のだらう?』

『またそんなこと!』

『ぢやア、來い』と、にらみつけて、再び片手でぐいと引ツ張つたが、同じやうにその力がこたへなかつた。改めて兩手をかけようとした時、

『こんなに氣分が惡いのに』と云ふ顏へ聲になつてその亭主を突ツ放した。渠は一間ばかり砂土間をよろめいて、壁代用の板圍ひにどんとぶつかつた。小柄だが、これも巖乘な男のぶつかつた勢ひで、その圍ひ板の外からざツとうちつけた釘がゆるんで、その板のうちの一枚の末が外の方へはじけ出た。渠はそこへ丁度はさまつて尻餅をついたのであつたが、待ち受けてゐたやうに吹き込む樺太海岸の寒い空氣には氣が付かなかつたほど怒りに熱してゐた。

『畜生! この女!』から叫んで立ちあがるが早いか、そばに積んである干し蟹を一つ兩手に取つて投げつけた。まだよく乾いてゐない蟹は兩わきの足を全體にひらいて、六尺四方もあるおほ蜘蛛か何かのやうに飛びかかつたが、お竹はこれをそらしてしまつた。そして口をとんがらかせて、

『旦那に知れたら、おこられるぢやアねいか?』

『なに、くそ!』今一つうまく投げたと渠は思つたが、かの女はこれを片手ではねのけた。その拍子にばりりと甲良が碎けた音が聽えた。かの女はなほ訴へるやうに、

『そんなことをして、さ!』

『かまふもんけい!』また一つ投げて置いて、渠は鐵の蒸籠のかさなつてゐるそばの、出齒庖丁が五六個集まつてるところへ急いだ。

お竹はふるへ上つて、手ばやく入り口の輪かぎをはづし、戸をあけて外へ飛び出した。民藏もそれを追ツかけて行つたが、手に持つた庖丁の刃よりも鋭い月の光が、砂地にひねこびて生えた灌木の間を照らしてゐる。そしてその光までがからツ風となつて吹きまくつてゐるのかと思はれた。

蟹の鑵詰めを製造するかたはら試みに干し蟹をやつて見ようと云ふ林田旦那の考へに從ひ、蟹を干し始めたのは、つい、三四日前からのことだ。ところが、きのふの晩、この地では山のおやぢと云つてる熊が出て來て、この小さい製造場のまはりをうろつき、外に干して置いた蟹をみんな喰つてしまつた。

技師の林田旦那でも、まだ東京に殘つてる資本主の代理で來てる勇さんでも、その他の手つだひ人でも、すべてけさになつて、これを聽いただけでさへふるへあがつたのだもの！　うすッぺらな板一枚の圍ひで、假製造場の家と云ふ家でもない中で、實際に、人間の赤ん坊じみた啼き聲とぼり〳〵蟹を甲良ごと喰ふ音とを聽いてゐた時の怖ろしさ！　息を殺して二人でひや汗をかいてゐた。

外の喰ひ物が盡きても、なほ夜明けに近づかなかつたら、熊は人間のにほひをかぎ付けて、强盜のやうに戸を破つて這入つて來たのかも知れない。

この恐れを抱き合つた二人は互ひに胸の動悸の烈しくなつてゐるのをおぼえながら、互ひに物が云へなかつた。

「夜が明けてるぢやアねいか」と云つて、お竹が頭をそらせて手をゆるめた時は、生き返つたやうな嬉しさではね起きた。そして戸をあけると、海上から襲つて來てゐるガスの爲めに、周圍は殆んど全く見えないが、板圍ひの根もとに列べてあつた干し蟹が全く無くなつてゐるばかりでなく、生蟹のむき殼のやがて燒かれて肥料灰になるのまでが隨分目に立つほど減つてゐた。

『みな喰つて行きやアがつたぞ』と、民藏が後ろへふり返つた時にお竹も直ぐあとへ出て來てゐた。

『ひどい奴ぢやアねいか？』から云つたかの女は、まだ怖ろしいものがあるかのやうに、こはごはそとをのぞいた。

『もう、大丈夫でい。』

『さうか、ね？』

『こら、足のあとがあらア。』

『え、え』と聲を顫はせて、お竹は逃げようとした。

『馬鹿野郎！　おめいは弱い馬と同じだア、足あとに竦んで――足あとに口があるけい？　爪があるけい？』

『そりやアさうだが――まだ近處をうろついてるか知れやアしねい。』

『見ろよ』と、下を向いてゆび指しながら、『砂の掘れてるのを。』

『あ、ここにもある！』お竹も腰をかがめた。そして『ここにも、あすこにも』と、跡を追ひ始めた時は、その聲をばかり濃く立ち込めたガスの中に聽きながら、民藏はかの女より二三間山手の方へ行つてゐた。

『味を占めて、また今夜來やアがるぞ。』から云つてあと戻りしかけたが、頻りに熊の足あとを一つ〳〵追つてこちらへ近づくぽッとした女房の影の、身幅の狹い裾がひらけたところから太つた足くびの方がはッきりと彼の目に映つたので、ふと全身の血が涌いたのをどうしようと立ちどまつた。

兎に角今一度一寢入りしなければ、民藏はけふの仕事が――このガスの樣子では、海はきッと午前八九時頃から穩やかに晴れるから、忙しくなるのを――できないと思つた。そしてねむい目を無理に精神で明けてゐながら、あッたか味の殘つてる寢へ這入つたが、從つて來たお竹がどうもいつものやうに從順でなくなつたのに腹が立つた。その前夜、嚴密に云へば、もう前々夜には徹夜して他の人々とも一緒に蟹の皮をむいたので、喧嘩と云つても、いつもの通り、ただ仕事を急がせる上のことであつたが、前々夜（實は前々々夜）も矢張りけさと同じやうな狀態であつたのに思ひ及んだ。そして自分の女房は自分以外のものの種を宿したのぢやアないかと疑つてぶつたり、蹴たり、泣かせたりしてゐるうちに、旦那と勇さんとに戸を叩かれた。

お竹は、這等主人筋に對して濟まないことをしたと云ふやうに詫び、あわてて戸を明けた。

渠は直ぐ半身を起したが、その時は、もう、近海にガスが晴れたのだらう、眞ッ赤な太陽が山から海の上にまぼしくない光を投げてるのが見えた。

『さう朝寢をしちやア困るぢやアないか』と、旦那はどちらへとも附かずに叱つた。

『それ、御覽！』お竹は亭主が褥の上につッ立てゐるのをふり返つて、ブリキや鑵をのせた棚に手でからだを支へながら、『だから、わたしが早く御飯を焚かなけりやアと――』

『默れ！』民藏はいきなりかの女の枕をつかんで、『この女』と、かの女に投げつけた。

『よせ』と、旦那は、もう、奥の方へ進んでゐたが、その時兩手でうまくそれを受けとめて、『朝ッぱらから夫婦喧嘩などア！』

『畜生！　おのればかりがいい兒にならうとして！』

『全體、お竹があんまりがさつに口やかましいからよくない。それに、姙娠してから、氣分が違つたせゐか、一層やかましくなつてるんだ。』

『それを、旦那』と、かの女はむきになつて、訴へるやうに、『うちのがあんまり下らねいことを云ふぢやア御座いませんか――旦那の秤だらうなんて？』

『默れ、冗談でい！』民藏はあわてて、恥かしさうに顏を赤くした。

『冗談なら冗談で、人を蹴たり、ぶつたりしねいでもいいぢやアねいか？』

『おのれが不埒だからでい！』

『何オ不埒だと云ふんだ？』旦那もちよッとむッとして、『自分達で子供を拵へて置きながら、おれのせゐにするなんて、蟲のいいことア眞ッ平だぜ。如何におれが女好きでも、まだお竹のやうなおかめにやア手を出したことアない。』

『しどい、わ、旦那も』と、かの女は仕方なしのやうに笑つた。

『それ見ろ、誰れにでも手めえなんぞアおかめの標本でい。』

『ぢやア、そッちはひよッとこだらう。』

『ぶんなぐるぞ！』

『よせと云やアよせ』と、旦那は民藏のはだしで驅け出しかけたのを取り押さへて、『何んと云つてもお前は女房のおほ力にやアかなはないんだから。』

　民藏には、旦那を初め、他の人々からいつもさう云はれてゐるのが男の恥辱だと思はれた。で、人のゐる前では、一層、女房に對して目に立つやうに殘酷な言葉を浴びせかけたり、刃物三昧をして見せたりした。そしてお竹がそれを本氣に受けてへらず口を聽くのが一層こちらの癪にさはつた。

『けれども、どッちも正直者だから』と云つて、旦那や勇さんも信用して呉れ、夫婦も亦、『この人々の爲めなら』と、不斷は一生懸命に働いた。

　おそろしい夜中を過したことも、民藏は自分の口から一つの手柄をでもしたやうに語つて聽かせた。

　お竹も急いで、大きな蒸し釜のつぎにできてゐる、石と土とで圍まれた釜の中を焚きつけながら、亭主に負けない調子で熊の話をした。

　旦那や勇さんが身ぶるひしたのは、その時である。

　その日は果して大漁であつた。晝少し過ぎまでに、漁夫の船々は孰れも背中の甲良だけ剝き取つたおほ蟹を澤山海岸へ運んで來た。

　月夜には如何に大きな蟹でも、身が瘦せて半分ばかりしきやないやうになるが、船に釣りあげてもそのままに活かして置くと、どうしたも

のか、刻々に中身がそげて行く工合が、その月夜の痩せと同様で、みんなに秋の戀ひ路の處女の姿を偲ばせたので、

『身を切る思ひにやア何だッて痩せて行かア、ね』と、民藏は酒落を云つた。

『氣の利いたことを云やアがる』と、隨分おしやべりな旦那も機先を制せられて、その時二の句が出ないで蒸し釜の湯の加減を見た。

鑵詰めの事業には技師として十年の經驗を持つ林田の旦那さへしッかりしてゐれば、この製造場は如何にちッぽけでも、樺太一の仕事ができると、關係者等は皆信じてゐた。渠は經濟上の考へが乏しかつたので、たとへば、每日二百匹の蟹があれば手一杯だのに、その倍も買ひ込んで、半分は腐らせてしまつた。資本家の代理として來てゐる勇さんはこれに氣が付いて注意を與へたが、年が若いので相手にせられなかつた。尤も、干し蟹をもやつて見ようとし出したのは、勇さんの注意があつてからのことではあるけれども――。

『旦那は腕と氣まへがえい』と云ふ二つの評判を兼ね備へてゐたので、林田さんは事があるたんびに仕あがつた鑵詰めを方々へ贈り物にした。

兎に角、體に多少の相違はあるが、大小をつきまぜて、平均一匹に付き、マオカに出れば二十錢以上もするのを、八錢で數へた。その數へ役はいつもお竹で、製造場へ運ぶのが民藏のつとめだ。それを旦那や勇さんが手つだつた上で、今度はいつもの通り、十數名の手傳ひ男女と製造場の責任者等とが一緒になつて手足の皮をむいた。そして片ッぱしから蟹の肉を圓い鑵に詰め、それを鐵の蒸籠にのせて、百五十度にも煮え立つた蒸し釜に入れた。

六ケしいのは、旦那が一手でするガス拔きの手加減だが、それも見てゐれば段々とおぼえて行つたので、民藏はわけの無いものだと思つてゐるのだ。そのあとはガスを拔いた穴をハンダでふさぎ、鑵の銹びどめにニスをぬればいい。旦那ができた品物を船に乘せて、七里さきのマオカの問屋へ行つた留守などに、渠はよく勇さんと話し合つたものだ。

『もう、林田さんがこのオタトモにゐなくッても、われ〳〵ばかりでやれますぜ。』

『そりやア、今少し經驗したら、ねえ』と、勇さんも答へた。

この仕事さへおぼえて置けば、まかり間違つても、この樺太三界ででも喰ひはぐれはないと云ふつもりで、民藏は女房と共にけふも一心に働いたので、百五十箇ばかりの鑵詰めが午後の七時頃までに仕上つた。

別目的の爲めに取り殘した生乾の蟹を、

『またおやぢに喰はれちやアつまらないから』

と、すべて場內へ入れさせてから、旦那は手傳ひの男女を解散した。それから、內輪のものばかりで勞働の酒を汲みかはして別れた。

それまでは、民藏も女房のことなどは忘れてゐたのである。

今、月の光に吹きさらされながら、民藏が目を据ゑて自分の女房を追ッかけるその心のうちには、い、つはりの爲めにからだの工合が違つてゐるのだと云ふかの女の申しわけなどは受け取れなかつた。

『なぜこんなに俄かにおれを嫌ふのだらう？　おれを嫌ふばかりでなく、なぜこんなに熊のやうに黑ッぽい夜中をかうしておれから逃げるのだらう？』この疑ひは渠を導いて、『てッきり別に男があるに違え無い』と云ふことに燃え立たしめた。『五年も一緒に添つてゐながら、欲しい欲しいと云つてた子供がなかつたぢやアねいか？　どうせ、もう、子供がねいんだらう、どこかで一人貰つて來ようかとまで云つてたぢやア

ねいか? 東京で、一人可愛らしいのがあつたから、それとなくかけ合つて見たら、魚屋なんかへやるのはいやだと云はれたとぬかしたぢやアねいか? それに、畜生! こんな寒いところへ來て、厚い氷を叩き割つて製造場の土臺を据ゑた時から、おのればかりが働きものゝやうに口やかましく意張りくさつて、へん、子供! 畜生――畜生!』

こんなことを考へたのは、走つてゐる間の一瞬間であつた。渠はあたまばかりが走つてゐるやうに躍起となつて走つてゐたが、若しおやぢが今夜も來るとすれば、もう、その時だと氣が付いた。すると、自分の身ばかりではなく、お竹のからだをかけがひのない大事な品物だと思ひ出した。

女郎屋もなく飲み場もなく、村中の家を九軒數へて見ても女の數よりは男の數の方がずツと多いこのオタトモで、今、女房が喰ひ殺されでもしてしまつては、わざ／＼苦勞をしに來た甲斐がないやうだと、ぴたりと足の驅けりをとめた。そしてお竹に優しい聲をかけて呼び戻さうとした。が、かの女がなほ一生懸命に驅けてゐるのを見ると、どうも胸の怒りが一層承知しなくなつた。

その時、渠は或濕地の眞ン中に來てゐた。澤山のあやめが、晝間なら濃い紫に見えるに相違ないその花を咲き揃はせて、いばらの間にすツすと立つてゆらいでゐる。それを一直線に踏み越えて、お竹は、もう、向うの山路へさしかゝつた。

『畜生!』またむか／＼して來たので、渠も向う脛がとげに引ツかきむしられてひり／＼するのをも構はず、矢鱈にずん／＼進んで行つた。

が、どうも怖ろしいものがやつて來るやうな氣がしてならないので、それを自分並びにかの女から避ける爲め、『畜生、畜生』を聲に出し始めた。と云ふのは、喇叭代りのつもりだ。聽いたところに依れば、こなひだ、樺太廳の巡邏船に乘つて、第一部長がこの西海岸を巡視するついでに、アラコイの山奧へ入り込み、その山林を露領時代に濫伐したその跡を見た時、熊よけの爲めに、汽船の汽笛に故障があつた時の代用喇叭を持つて行つて吹かせたさうだから。熊は人のけはひを知れば向うから逃げるものだ。

谷あひの道は道と云ふ形もなく、矢張り、一面に濕地ばかりだ。民藏が見おぼえのある草には、先づ、花はあぢさゐの如く葉は芍藥の如きニヲ、アイノの食料になるサクや百合、アツシの纖維を供するいら草並びに誰か袖、蝦夷菊、金ぼうげなどらしいのに觸れた。なほ進むと、泥柳、いたどりなどがゆらいでゐるのが見えた。

しよツちう、同じもので邪魔をするのは、地べた殆ど一面に生えてゐる木賊だが、それのさきや根もとが渠の脛に觸れてむづがゆくまた痛いので、渠は片手でその痛いところを撫でて見た。ぬる／＼したものが手に感じたので、その手を立ちどまつてゐる自分の顏の近くへ持つて行つた。が、あたりに自分の脊よりも高い款冬や水芭蕉の蔭がさして、たゞ黑かつた。けれども、その蔭をよけて、月の光にぢかに照らして見ると、自分の血であつた。

ぎよツとして、たゞさへひるみかけた心が一層ひるんでしまつた。

『おい、いゝ加減にして來い、來い』と、つい、口に出たのに對して、おほ款冬の澤山立ちふさがつた間から、女房の姿は見えないで、息詰んでゐるやうな聲ばかりがした。

『いやだい!』

『ぢやア、勝手にしやアがれ!』

渠はこの棄てぜりふで歸り途へ向いたが、これと同時に、かの女に害を與へる氣がないのを知らせる爲め、手に握りつめた庖丁を成るべ

く音のしさうな方を選んで投げ棄てた。その庖丁はかたはらの款冬の葉の一つの上にばさりと乘つて輝いたが、その葉の一方がかた向いて、輝くものが見えなくなると、またその下の葉でばさりと云つた。そしてそのあとには、特別な音や聲は何ものからもしなかつた。

今更らの如くおぢけ付き、寒け付いて、民藏は歸途を夢中で濕地やすな地を渡つた。製造場が見え出した時、その裏手に何か黑い影がかすかにあるのでぎよッとして足を踏みとめた。そして息を殺して、そッとすかして見てから、

「なアに――」と安心した。井戸がはに置かれた大きな石であるのを思ひ出した。

自分達がこの場所をきめた時、先づ第一に必要な飲み水を汲みあげる井戸を掘らなければならなかつた。初めからをとこ氣を出して味方になつて呉れ、今でも旦那や勇さんを寢とまりだけさせてる番屋の家は遠い。つい、十數間ばかり隣りに同業者の製造場はあるが、けちな根性から、その井戸を共同にさせることを拒絶した。こちらは業腹の餘り、みんなで力を合せて、これ見よがしに氷の上を掘つた。幸ひにして、五六尺掘りさげただけでいい水が出たが、井戸がはなどは、ほんの小さい石を集めて圍つただけにした。あんまりあッ氣ないからと云つて、旦那の云ひ付けに從ひ、近い山路から一つおほきな石を皆でころがして來て、物を置く臺に、井戸のふちへ据ゑた。

『その石を熊と見たのは、おれも餘ほどゆうべから意氣地なしになつてゐやアがる！』から身づからあざけりながらも、月の光の中にどこからか黑い物が見えて來さうで仕方がない。

去年の今頃なら、東京では、もう、「ああ、暑い暑い」と云つてるところを、どうだ此の寒い風は！　渠はからだにおぼえる顫へを夜中の寒さのせゐにしてしまつて、薄氣味惡い周圍を見なかつた。急いで片足の裾をまくしあげて、その方の足を草履のまま石の上にのせた。そして繩つるべで水を汲んで、ざアとその膝から下にかけた。ひり〳〵としゆんで、一面に痛かつた。

それを二三度ふつて水を切り、また次ぎの足を洗つてから、兩手で裾を持ちあげながら、明けッ放してあつた戸口へ這入り、ぴしやりと音がするほど強く戸を締めた――女房が、もう、近くまで戻つて來て、この音を聽いたに相違ないと思つた。

『明けてお呉れ――明けてお呉れ』と云ふやうな聲が渠の心の中にしてゐた。が、渠は、人の横ッつらを張り倒すやうな勢ひで、板壁の手ぬぐひ掛けにかけてある手ぬぐひを二つとも右の手にかッ浚つた。そして今しがた女房を目がけて投げた干し蟹の一つをわざと遠慮なく踏みつぶして、寢どこのはじの床板に行つて、腰をかけた。ここばかりは、粗末だが板を張つて、その上に蓙を敷いてある。

つい、ほんの、そこだが、――云つて見れば、濱邊から直ぐつづきのところだが――渠は、樺太の山と云へば、きッと長い一の字を思ひ出すのだ。一つには、どんなところだらうと云ふ好奇心に驅られて東京から連れて來られたのだが、宗谷海峽を過ぎて、陸が見え出してからと云ふもの、船は、直線に北へ、北へと向つて進むに拘らず、マオカに達するまで、樺太の山は低い、細い、黑い線を引いて附いて來たに過ぎなかつた。而もマオカからなほ北へ、露西亞領まで行つても、ずッとこの通りだと云ふ。

『莫迦に長い一の字ぢやアねいか』と、渠は上陸する時女房を返り見て笑つた。

その一の字の一部なる山の空氣を少しでも吸

つて來たせゐか、不斷はあまり氣にとめなかつたにほひを鼻のさきで嗅ぎ分けることができた。冷たく磯くさいのは干し蟹のそれだ。ぬくいやうに生ぐさいのは蒸し釜や蒸籠のそれだ。それらにまじつて、渠は兩方の足の脛からぷつぷつと吹き出る血のにほひを嗅いだ。

『ひどいことをさせやアがつた、な』と、獨りでぶり／＼怒りながら、兩足のひどいところを各々手拭でしばつてから、渠は褥の中へその身を投げ入れてあを向けになつた。

すると、さツきから氣にしないでもなかつた腰のあたりも、矢張り、ひり／＼してゐる。手を持つて行つて見ると、矢張り、血が出てゐる。お竹が渠をつき飛ばしたあのときに、かこひ板が一枚はづれたのであつたから、拔けた釘のさきで引ツかいたのにきまつてゐると思つた。けれども、結局、いつも自分の鼻からにじんで出る血が足と腰とから出るに過ぎない。釘やいばらの傷ぐらゐは渠自身に取つて何でもなかつた。それに、自分がこれほどなら、自分の女房は一層血だらけになつて歸つて來るだらうと想像せられた。それが自分の今の氣ぶんには却つてよく釣り合つて――

血は拭いてもやらう、嘗めてもやらう――それにしても、『あけてお呉れ』が一向にやつて來ない。

ゆうべ、足跡を殘した熊に對して二人でしたやうに、ぢツと息を詰めて、そとに人の足音が聞えはしないかと聽き澄ましてゐると、神經は月夜のやうに冴えて、目の前にちらつくのはただ暗い影だ。ところが、渠の考へとは反對の、太陽が――輝く物ではなく、血の塊りのやうにただあかい玉が――沈む方向を、海が遠く靜々と鳴つてゐる。買ひ込む蟹の數とは違ひ、もう何度數へても數へ切れないほど多數の牡熊が、たッた一匹の強い牝熊を取りッこして、かみ合ひ、呻り合つてゐるやうに、あとへあとへと追ひ重なつて、ゆるいけれども絶え間のない響だ。

聽いてゐると、渠の寂しい心も根柢からぐらついて亂れた。そしてその遠鳴りの響は段々と近い地べたを傳つて來て、つひには渠の體内の蒸し釜へ這入つた。すると、渠には煮え立つやうに荒れ狂ふ男性の力がみなぎつて、あら削りの板家根の家根裏がランプの光に動悸を打つてゐる。

如何に小さいとは云へ、男一匹には餘り狹くもないこの製造場が、渠の息をするにも苦しいほどぼうツとのぼせてゐた。

『もう、二度と再び喧嘩なんかしないで、可愛がつてやるぞ』と、渠はその時ばかりは決心した。

何だか襟もとがむづ／＼して來たので、手をやつて見ると、毛じらみに似て、まだ腹が大きくなつてゐないダニが一匹つかまつた。芥子粒の周圍に足が生えたやうな物だ。

『こんな畜生』と云はないばかりに、渠はこれを力強く捻りながら、女房の箱枕のころがつてたのを引き寄せ、それを横にしてその上で爪で押しつぶした。ぴちと云つたのは小氣味よかつた。

考へて見ると、山で『畜生、畜生』と云つてゐた時、渠の顏のおもてへぱら／＼と何だか小さい物が落ちて來た。その時仰ぎ見たら、丁度あたまの上に根松の枝がさし出てゐた。あれもダニであつた。

ダニはおもに根松の枝などにわいてゐて、血に饑ゑてゐるので、動物くさいものがその下を通ると、それを目がけてきツとぱら／＼と落ちる。それが風の都合で款冬の葉やいたどりの根に落ちて、そこでも亦、動物の血を待つと聽いてゐる。

『山に行くなら、鹽を嘗めて行け』と云ふまじなひじみたことが樺太や北海道にはあつて、それでもなほ取りつく以上は、必らず裾から這入つて、からだの上へ〳〵と這ひのぼり、最初に行き當つた毛穴に喰ひ込むのだ。が、股引きやシャツのおもてをのぼるものは、すべて頸すぢへ出て來るさうだ。

この話を聽いて知つてる民藏は、總身の毛穴がすべてそんなものに見舞はれてゐるかのやうに感じられて、眞ツぱだかになつてしまつた。そして先づその直肌を砂の上ではたいた。それから、冷氣に顫へながら、シャツと股引きとの裏おもてを調べて見た。

『こんな物にも、をすめすがある！』、比較的に大きなめすが二匹と小柄のをすが一匹と發見せられた。これで大丈夫だとは思はれたが、渠は再びそれを身につける必要を感じなかつた。よく振つて、衣物だけを着て、もとの通り仰向けにころがつた。

雨傘にすればできるほど大きな款冬の廣葉と太い柄とがかさなり合つてる山のことを思ひ浮べながら、

『まだうろついてるのか、なア』と、渠は小言らしい獨り言を云つた。そしてマオカ、ラクマカ、オタトモ、ノダサン、クシュンナイ、トマリオロなどと、樺太の珍らしい地名を諳誦してゐたが、ふと、また、いゝおやぢのことが氣になつた。

まさか、つづけざまにも來やアしまい。と云つても、北海道では、喰ひ物がない時は、二三十里もさきから平氣で海岸へ出て來て、夜の明けないうちにもとの穴へ歸ると云ふ。そんな勢ひぢやア溜つたものではない。

この長いばかりの島では、西海岸のオタトモから東海岸まで、直徑たツた十里內外だと云ふではないか？　いゝおやぢの足では、この兩海岸を一晩中に二度も三度も襲つて來ることができよう。

『お竹もお竹だ、餘り大膽過ぎる――いい加減に歸りやアいいのに、なア！』

渠の心では、待ち受けるものが二つあるやうな氣になつた。

かの女さへゐれば、たとひいゝおやぢは來ても、もう、ゆうべのやうにはいぢけてゐない。今度さくり、さくりと云ふ足音がすりやア、どこかの節あなから、二人で一緒にこツそりのぞいて、どんなに大きな奴か見てやらう。

それにしても、お竹のおそいのはどうした？

『あんまりじらせ過ぎらア！　あんまりいゝまはしを取り過ぎらア！　へへ』と、獨りで笑つて、品川か吉原かでのふられた夜のことになぞらへて見たが、實際は、渠の息詰まるやうな氣持ちは直せなかつた。

『外に行くところはない、きつと林田旦那のところだ！』から云ふ疑ひが過ぎ行く刹那毎に確かめられて行つた。

おのれのかみさんは連れて來ないで、人の女房を盜みやアがるのか？

あんな旦那は旦那としても、そのそばについてる番屋のおや方や勇さんが、なぜまた一言の注意もこちらへして呉れない？

あの女がまた業腹だい――近頃いやアに人に突ツかかつて、度々喧嘩を吹ツかけてゐたのは、今夜のやうなことをしほに、あッちへとまりに行く手であつたのだらう。

どいつも、こいつも、おれの敵だ！　おれのかたきだ！　おれをわざ〳〵樺太三界まで連れ出して來て、こんな不自由な目に會はしやアがる！

『よし、怒鳴り込んでやらう』と起きあがつて見たが、渠の兩足は、ちんばを引かなければなら

ないほど、こはばつて痛みをおぼえ出した。
『畜生！』から叫んで、わが身でわが身を投げて、牀の上に不恰好なあぐらをかいた。そのとたん、家の中をのぞいてゐるものがあるのぢやアないか知らんと、渠は怪しんだ目つきで板圍ひを見まはした。
「お竹は歸つてゐるのだ！ 歸つてゐても、おれを恐れて中へ這入れないのだ！ さうなのだらう、さうなのだらう」と云ふ風な心の聲にそそられて、また氣を換へた。そしてこツそり戸口へ出て行き、こツそり戸をあけて見た。そして戸口の左右をうかがつたが、なんにもゐない。
おれの出る氣はひを知つて、隱れたのぢやア――と、ひどく痛い方の足を引きずりながら、おづ／＼と空しく製造場の周圍を一まはりした。
無念の爲めに、渠の心は一しほ煮えくり返つた。
井戸端で拾つた石を以つて、例の、外れた圍ひ板の釘を――さツきから氣にたつてゐたので――打ちつけることをしたのはしたが、これと同時に、渠の殘つてた母が去年死んだ時のことが浮んだ。
お竹を生んだ父親と渠の叔父とがやつて來て、萬事の世話をして呉れた。――死亡屆のことやら、火葬場のかけ合ひやら、墓地の選定やら、お寺さま、依賴やら、金のことまでも。――その晩に遲くなつて、いよ／＼母の死骸を入れた棺桶の蓋に釘を打つたが、あたりがしんと寢靜まつた中で、かな槌の音ばかりが何だかいやアに物凄く響いた。渠はそれと似た感じをこんなところへ來て聽かうとは思ひも寄らなかつた。
何だか思ひ切つて來た東京が、再びなつかしくなつて來たので、母の幽靈か何かが迎へに來てゐるのではないか知らんと考へられた。と同時に、山のおやぢの恐ろしさが見えない影か形かになつて、この近處を通つてゐるやうな氣がした。そして靜かにしてゐれば、無事にどこか他の方へそれて行つて呉れるものを、この音の爲めに、わざ／＼こちらへ呼び寄せはしないかと思ふと、男性として張り詰めた怒りの勢ひも段々いぢけてしまつた。
とん／＼！ とん／＼、とん！ 初めは何の氣なしにやつたものが、終りに近づくに從つて逃げ出すかまへになり、そして最後のとん／＼を渠は半ば夢中で終らせて、目をふさぐやうにしてうちへかけ込んだ。
『ふて腐り女！ けだ物にでも喰はれてしまへ！』から、ぶつ付きながら、渠は旦那と勇さんとから預かつてゐる酒に行つた。そして樽口から直にがぶ／＼と滿足するだけ飲んで、無理に眠つてしまつた。

……どこの海でだか分らないが、初さん、粂さんなど云ふ漁夫と共に自分も月夜に蟹を釣つてゐる。
月夜だが、蟹の身は痩せてもゐない。そしていづれも一丈半もあるおほ蟹で――而も仕事にめんだうな甲良が附いてゐないのだ。
『こんなに大きい、而もそれでゐて仕事に便利な奴なら、マオカまで行かないでも、二十錢から二十五錢にやア買つて貰へようが――』と、初さんか粂さんかが云つた。
「まア、さう云ふなよ、オタトモでの相場はオタトモでの相場ぢやアねいか」と、自分は笑ひながら渠等をなだめるやうに云つた、「それにしても、甲良のない便利な蟹はどこにゐるのだらう？』
『おれの生れた北海道には、まアをらん、なア』と、初さんは答へた。
『樺太でも』と、粂さんは眞面目に、「おれは見

たことがない。」
『ぢやア、ここはどこの海か、なア？』から自分が聽き返した時、向うの方に英國かどこかの白い軍艦の碇泊してゐるのが見えた。左右には、いろんな形の蒸汽や艀舟がゐた。そして自分等も大きな汽船に乘つてゐる。——横濱のはと場が見える。
「おい、民さん。」から云ふのは、自分等を見送りに來た勇さんの兄さんであつた。『しツかり賴むよ。林田や勇吉は私の身うちだが、君に行つて貰ふのは餘ほど君の働きを買つてるのだから、ねえ。」
「そりやア、旦那」と、自分は手くびの裏で鼻を撫であげて、「見てゐて貰ひませう、人一倍働いて見せます。』
「わたしがついてる以上は」と、お竹も口を出した、「決してなまけさせませんです。」
ふうはりと世界が持ち上げられたかと思ふと、樺太が一の字に浮いてゐる。やがて日本海峽が露西亞人を分取りする根據地であつたと云ふ海馬島が見えて來た。矢張り蟹の罐詰めのさき驅けなる禮文島、前尻島が見えて來た。やがてまた小樽の港があつた。
不思議だ、なア——これでは跡もどりをしてゐるのだ……と思ふとたん、横ッ腹がひどくかゆかつたので目がさめた。
『おい、おい！』旦那がきのふのやうに意張つた聲をして戸を叩いてゐる。
『畜生！』民藏はかう低い聲を出したが、これが旦那に向つて云つたのか、それとも、また、自分の身を喰つてゐた蟲に云つたのか、自分でもはツきり分らなかつた。兎に角、自分が思はずその横ッ腹から爪のさきに引ッかけたのは、小指のさきほどに圓くなつてるダニであつた。
『畜生！』また、かう云つて、そのダニをお竹のまくらの底で床の端へ押しつぶした。
その時、旦那は戸を蹴破つて這入つて來たが、あとに從つて來るおとなしい勇さんまでがふくれッ面を見せてゐた。
「お前等は、どうして、かう」と、旦那は怒つて早口に、『毎朝、毎朝、なまけるやうになつたのだ？——こんなに蟹を踏み付けなどして！』
「へん、蟹などア何でもねいや」と、民藏は褥の上にあぐらのまま、横向きに鼻であしらつた、「どうしても、かうしても、そッちの胸に聽いて見りやア分る！」
「何だと？」
『……』民藏は一思ひに刃物三昧をしてやらうかと云ふ怒氣を押さへて、默つて旦那をにらみ付けた。
「そのけだ物のやうな目つきは何だい？』
『こッちがけだ物ならそッちもけだ物でい！』
「全體、どうしたと云ふんだい？」
「……』民藏は旦那の餘りに落ちついてゐるのを一層ねたましくなつて、前後を忘れかけるほど氣が込みあげた。『す、す、直ぐ、によ、によ、女房を返せ！」
『お前の女房がどうしたと云ふんだ？』
『お、おれに聽くまでもねいや。』
『ぢやア、お竹がゐないのか？』
『し、知れたこツてい！』民藏は横向きに力を入れてからだをふつたが、旦那を旦那として見れば、控へ目の自分が半ば訴へるやうな氣持ちになつた。そして大つぶの涙が二三滴走り出た。そして、わッと泣き聲をあげて、横にあを向けの兩眼を、外見もかまはず、頑固に握つた手の手くびの裏で押し拭つた。
「馬鹿だ、なア——それで、あんな男のやうな、でぶ／＼女をおれが引ッ込んでゐたと云ふのか？きのふ云つた通り、如何におれだッて——」と旦那が笑つて勇さんを返り見たのを、民藏がまたちよッと仰ぎ見て、多少の安心なし

るしを與へられた。そして、
『ぢやア、外にどこにゐるんだらう』と云ふ疑ひに轉じた。
　林田を初め、勇さん、民藏、この三名の責任者は別々に手わけをして、心當りを探したが、お竹はどこへも行つた樣子がない。
『きツと、山で喰はれたのだらう』と云ふことになつた。これが搜索の爲めに集まつて來たものには、初さんと云ふこの製造場專屬の漁夫親子もあつた。番屋の親かたや下働きもあつた。デメン取りの男どももあつた。初さんが長い櫂を持つて來て笑はれた外は、みんな手に手に銃か、棒か、庖丁か、大きなナイフか、アイノの持つマキリかを用意してゐた。
『いゝ、おやぢは晝間出てをらん筈ぢやが、若し出會うたら、なア、みんなで取りまけよ。して、なア、あいつは人に飛びかかる前に、一度立ちあがるものぢやで、その時がつけ込みどころぢや』と、番屋の親かたはアイノ氣取りで皆に注意を與へた。
『そりやア、出會はないとも限らないから、ね』と、林田旦那は親方の言葉をやはらげた。
『しかし』と、初さんが受けて、『熊を退じるのはわれ〳〵の目的ぢやない。さし當り、お竹さんを探し出せばえいのだらう。』
『どうも皆さんに濟みませんが、ぢやア、民藏が案內致しますから。』旦那はかう云つて、民藏をさきに立つて進ましめた。
　勇さんとデメン取り數名とは、腹の減つた時の用意に、皆の食料として、製造場で仕あげた鑵詰めを澤山運んだ。
　やがて熊の跡を發見したと叫んだものがあるので、民藏もあと戻りして見たが、あやめやいばらの押しひしがれたばかりで、これは自分がゆうべ倒れた時に殘した跡であるらしかつた。
　水芭蕉が二三本、根から折れてゐるところで、皆はまた立ちどまつたが、そのあたりにも別にそのしるしらしい足あとはなかつた。
　民藏はゆうべのダニが落ちたところを認めながら、そこを默つて通り越してしまつた。
『ロスケの奴らはひどいことをしてをつたのぢや、なア』と云つて、切り倒したままにたつてる多くの椴松や蝦夷松の枯れ木のことを云つてるらしかつたのは、番屋の親方である。
『でも、さすがに』と、旦那が答へた、『タモや、アカダモや、白カンバのやうな、いい木材は切つてない。』
『ロスケの斧にや手に合はなかつたんだろ』と、デメンの一人が應じた。
『全體、道と云ふ道は附いてゐない。』
『そりや無論、いゝ、おやぢか栗鼠か貂か小鳥の外に、通る必要がないから、さ。』
『さう云や、トマリオロからマオカへ歸つて來た人の話に、いゝ、おやぢが栗鼠を追ひかけて、椴松の幹をかけあがつた爪の跡を見て來たさうぢや。』
『あすこでは、今、石炭運搬の輕便鐵道を敷く爲めに、山道を切り開いてる筈ぢや。』
『石炭も儲からうけれど、大きな熊の皮を一つ欲しいな。』
『こなひだ、樺太廳の役人がナヤシのロスケから大きな奴を四十兩で二枚買うたさうぢや。』
『そりや、まだ本當に製してない奴だらう。』
『ナヤシでは、熊の皮よりやア貂の皮の取り引きが盛んだ』と、番屋は語り出した。『毎年、冬になると露領から、――アレキサンドルあたりからも、――貂取りのロスケや皮商人がやつて來て、何枚でも買うて行かア、な。その時は露國の貨幣が安くなる時節で、一ルーブルは實際一圓十錢の價うちがあるのだが、それがたツた九十

錢で通用する。函館へ持つて行きやア、少くとも一圓八錢には交換して呉れる。さうしてナヤシでは、ビールが今頃では三十錢ぢやが、越年期になると、七八十錢に騰貴する。』

『えい商賣ぢやないか。』と、漁夫の初さんは答へた、『少し元金がありやア、ビールを持つて行つて、その交換をやつたら。』

『けれども、正月頃になると、ビール壜がぽんぽん破れてしまふんぢや、この邊よりやアずツと寒さがきついから。』

『そりや閉口ぢや。』

『なアに。』と、旦那が笑ひ聲を出した、『親かたはいつもあんなことを云つてるが、うまく人をおだてゐるの、さ。さア、やつて見ろと云はれちやア、逃げる方だらうて。』

『は、は、はツ！』多くの人々が聲を揃へて笑つた。

民藏はそれを聽きながらも、話の仲間に這入らなかつた。あんなことばかり話し合つて、皆はそも／＼何しに進んでゐるのだと責めてやりたかつた。それから、一番さきに立つて、一言も口を出さず、獨りで頻りに左右を探索しながら、雜草の間をかき分けた。

鶯が方々で鳴いてゐる。あかはらと云ふ鳥が鈴蘭の花を喰はへて飛び出した。

アイノが箭にぬり付ける毒を根から取ると云ふブシ(とりかぶと)の花が、如何にも毒々しいむらさき色を以つてあちら、こちらに咲き揃つてゐる。當り前の山百合は勿論、また小さい黒百合の花もところ／＼に見える。

もう、疾くに濕地は盡きて、渠は地盤のぼくぼくした山林の間にあつた。內地の山に於けるやうな、眞土の如きは全く見られない。そしてロスケが無制限に木を伐り取つた結果、あたりに相持ちの木がなくなつて、風の爲めに、幹の弱い部分が折れてゐるのもあるし、そツくり根から拔け倒れてゐるのもある。根が淺い上に、地面がぼく／＼してゐるからだらうと思はれた。

『樺太だツて、どこだツて、同じやうにできたんだらうが、なぜから大きな木がないのだらう。』と、旦那の聲がする。

『もツと奧に行きやあるさうぢや。』と、番屋は答へた、『それにしても、何邊も大きな山火事があつてそれが而も二年も三年もつづいたのもあつたさうぢやで、――何にせい、雪の下をぷすぷす燃えて、火事がその翌年にまで渡るのぢやから堪らん。松が燃え盡きた跡へ白カンバが生える。白カンバが燒けたら、熊笹が出る。熊笹と來ちや、もう、木は生えん。それにこの頃ぢや、安く拂ひ下げて貰ふ爲めに、わざと火をつけるものまで出て來た。かうしてしまひにや、この樺太も全く禿山になつてしまふだらう、さ。』

『切れるだけ切らせばいいぢやアないか？』

『それ、さ――鰊や秋鯵だツて、さうぢや。下らん制限や規則なぞやめて、取り盡せるだけ取り盡させて呉れりやいいのぢや。』

『蟹にやアまだ規則がない。』

『やがてできるだらうよ、けち臭い役人どもだから、なア。』

『あ、栗鼠ぢや、栗鼠ぢや』と叫んで、デメンの子が一人、民藏よりもさきへかけ出した時は、民藏は松のまばらに生えた、あまり雜草もない傾斜地を踏んでゐた。

『鰊なんかどうでもいい！　俺もどうでもいい！』から心に云はせて、渠はお竹の姿ばかりを思ひ浮べてゐた。そして何千年か以前からの木の葉や枝や枯れ木などが積み重なり、積み重なつて、ほんの、腐つたばかりのやうで、まだ固まつてゐない地盤の底から、ひよツこりとかの女がにこついて出て來るいたづらではないのか？　海を離れて、今度は、山が自分に生きて來た。

渠は山を踏んでゐるのか、山が渠のからだに添つてゐるのか、どッちとも分らなくなつた。睡眠不足のあたまが、ふら／＼と熱しあげて來て、ぼく／＼した地盤が見えない女の力で自分をふうはりと空にはね返すやうだ。

それが而も手のやうに、足のやうにあッたかい力であつて、自分をその熱に包んだ。ふと、きたなくさい氣がした。渠は今の話を心で繰り返して、

「火事だ！　火事だ」と叫びたくなつた。このあたりの地盤の底には、今でも、去年からの雪や氷の下を這つて來た奇妙な山火事が、一面に火の手をまはしてゐるやうだ。

「おい、民さん。」旦那の呼ぶ聲である。「さうずん／＼進んだッて仕やうがないぢやアないか？　少しは皆さんに休んでもいただかなきやア――」

「……。」民藏は無言で後ろを向いたが、棒のやうにつッ立つた。そのかたはらにブシと何だか分らない草との花が咲いてゐた。雇ひのちよかちよかした子は、直ぐかけ付けて、綺麗なブシの花へは手を觸れないで、分らない草の黄花をむしり取つた。

「何だか氣持ちがよくなつたやうだぜ」と、旦那は云つた。

「もう、この邊でも」と、番屋は知つた振りで、「オゾンの臭ひがします、わい。」

「山の氣とでも云ふんだらうか、ねッ。」

「まア、さうぢや、な――內地なら、深山の樹木が吐く濃い酸素ぢやさうだ。」

「まア、諸君、休んで呉れ給へ」と、旦那が云つた時は、旦那も番屋も既に谷合ひを見おろせるところの地べたに腰をおろしてゐた。

獨りで無言な民藏も、オゾンとやらを吸ふ爲めだらう、心の筋肉までにぴん／＼と元氣が付いて來たのをおぼえたが、既に已に張り詰めてゐた胸は一しほそれが爲めに息苦しく、蒸し苦しくなつた。

「どうした、民さん」と、初さんは煙草入を腰から拔き取りながら、渠が下の方で皆の方を向いて立つてゐるのを見た。「さッぱり元氣がないぢやないか？」

「さすがに」と、番屋は、自分のそばにゐる下働きの肩からオペラグラスを外しながら、「オタトモ一等の剽輕ものでも、なア――」

「女房がゐないので、しよげ切つてらア」と、旦那は無造作に笑つた。

民藏はちよッと皆の方へ目をあげて微笑したが、「は、は、は」と、小さい連中にまで笑はれたので、直ぐまた下を向いた。

「こりやア、どう考へても、喰はれてしまつたんだぜ。」

「骨だけでも見えないか、なア」と云ひながら、番屋の親方は目鏡を當てて方々を見まはした。

民藏は、然し、そんなことをして見ても見えるわけがないと思つた。女房は、もう、渠の心中にばかりあつた。

自分で用意して來た握り飯を喰ひ始めたものがある。

煙草ばかり吹かしてゐるものもある。

なほその上の方へ探しに行つたものもある。

林田旦那が勇さんと民藏とに命じてひらかせた罐詰めを、皆が半ば以上も喰つてしまつた時、

「皆來い、皆來い」と、上から頓狂に叫ぶ聲がしたので、いづれも緊張した氣を振ひ起して驅けあがつて行つた。

低い雜草の踏み敷かれたところがあつた。熊の足跡もあつた。

人間の足が一本、ひどくいばらにひッかかれた跡の血がこびり付いた儘、つんと、うは向きに突き出て、あとのからだは地下に埋められて

ゐた。

『ひどいことをしやアがるおやぢだ、なア』と、番屋は少からずこちらの女房をあはれむやうに叫んだ、『人間を馬か何ぞに思やがつて！』

『どうしてこんなことをしたんだらう？』

『北海道では、よく馬が斯うされる――假りに埋めて置いて、今夜また取りに來るつもりぢや。』

『して見ると、民さんの夫婦喧嘩は夜あけに近かつたんだ、な。』

『太陽の光はありがたいものぢや』と、感心したやうに初さんは云つた、『畜生までが惡いことを中止するのぢや。』

『なアに、はふつて置けば、また夜になつて取りに來らア、な。』

『賢いやうでも、馬鹿ぢや、なア。どうせ自分が穴まで歸るついでなら、持つて行きやアいいのに。』

『そこがまだしも仕合せであつたのだらう、さ。』

いゝおやぢと云つても、まだアンコのやうなものであつたらう、如何におほ女だからツて、お竹一人ぐらゐを思ひ切つて運んで行けなかつたのは、などと云ふ評議が足のまはりを取り巻いたもの等の間に行はれたが、氣持ち惡がつて誰れ一人としてそれに手を掛けるものはなかつた。

「……」民藏ばかりは天に向つて向き出しの足をぢッと見入つて、「こんなに肥えてゐたのか、なア」と思つた。直ぐそれを逆に土の中から引き出さうとしてちよッと自分の手をかけた。そして自分ばかりはこの四五日前から、殊にをとゝひから、止むを得ずこらへ〳〵てゐた鬱忿がさきに立つた。

「……」はたのものらの不思議さうに、こちらを默つて見てゐるのが、渠には邪魔であつた。

「みな歸れ」と、渠はわれながら俄かに憤りをおぼえて、威猛高に命令した。

「どうして歸るんだい」と、暫く經つて旦那は皆に氣がねしたやうにこちらを叱つた、「親方を初め、初さんや皆にわざ〳〵探してもらつて置いて！』

「どうしてでもいい、歸れ！』

『お前はこの二三日どうかしてイるぜ――けさだツて、おれにつけ〳〵當りやアがつて！」

「當つたら、どうしてい」と、兩手の拳に男性の力を籠めて、じり〳〵と押し寄つた。

「……」旦那はおとなしくからだを引いて、『せめて今夜だけでも、みなにお通夜をして貰はなけりやアならないのに――？』

『お通夜もくそも入るもんけい！』

『そんな可哀さうなことア、おれがさせない。』

「おれの女房はおれの女房でい、おれが勝手にすらア。」

暫く二人は云ひ合ひをしたが、番屋の親方が仲に這入つて呉れた。

「民さんとしては、女房がどんなになつてるか分らないところを人に見られたくないのぢやらうから」と云つて。で、皆があとでまた一緒になつてお竹を一先づ海岸まで運んで歸つて呉れることにして、兎に角、暫くの間、こちらの云ふ通り、皆はここを遠ざかることになつた。

民藏は獨りになつてお竹を土から引き出してからも、臆病などろ棒のやうな目つきをして、先づきよろ〳〵と、皆が見えぬところまで行つてしまつたか、どうかを注意して見た。

再び皆がそこに集まつた時には、民藏はお竹の死體を仰向けに衣物の裾も整へて、佛さまのやうに横たはらせてあつた。

氣丈な女が敵と大分に格鬪したかして、額の皮をひツかきむしられて赤い肉がうら返しに出てゐるし、兩方の手もひどい傷で血だらけだ。
『可哀さうに、なア』と云つて、旦那はその肩から胸のあたりに殘つてゐるぼそ〳〵した土をふり拂つて呉れた。
『ひとり死んだのがふたり分ぢやから、なア』と、親方も銃を肩にしたまま悲しみを見せた。
『どう云ふ風に引ツかいたのだらうか、あの額は』と、勇さんは眞面目に聽いてゐた。
『おやぢもおツそろしいもの、さ、な』と、初さんはぢツと見つめてゐた。
『亭主を嫉つた報いだア、ね。』民藏はから云つて、もう顏いろが和らいでゐた。いつもの冗談まで云ひながら、死體を自分の肩にかついで皆と一緒に山を下つた。そして、道々、『道理でゆうべ夢の見がよくなかつた』などとも語つた。
ラクマカまで坊さんを呼びにやつても、どうせ間に合はないことが分つてるので、知り人が集まつて互ひに念佛をそれ〴〵に唱へることになつた。

二人の寢る場所であつた床の上に死人を寢かせ、その枕もとにビール箱をひツくり返して臺となし、その上に蠟燭やら線香やらを置いた。樒の代りに、泥柳の葉やイタヤもみぢの枝を取つて來て、ビール壜にさした。
そして或人がお經を讀むのが上手なおかみさんをつれて來たので、それに讀んで貰ふことにした。かの女は死人の枕もとに坐り、どんぶりの中へ灰を盛つて線香のけむりを立てさせてあるその前に向つて、坊さんのするやうに手を度々合はせ、暫く口のうちでもが〳〵と何か云つてゐた。そのそばに民藏はちやんと坐つて、膝に兩手を置いて頸を垂れた。そして考へた、自分が殺したも同然だが、海であんまり蟹の甲良を剝がせるのが祟つて、自分のかはりに女房が山で額を剝がれるやうになつたのではないかと。
そんな緣喜をかつぎ始めると、今までさうでも無かつた風がそれが爲めに急に吹き始めたやうで、海の遠鳴りがどこか、から、暗い影のちらつくところへ、自分を大きなはさみでさいなみに引ツ込んで行く氣がする。
ひよツとすると、お竹が見た熊とは、何千匹かの集まつたおほ蟹の幽靈ではなかつたらうか？
渠は自分の手にかけた鑵詰めやら干し蟹やらのありかを思ひ浮べて、自分の周圍にも、もう、そのおそろしい影がさしてゐるやうであつた。
その時、渠は經讀み女のなか〳〵上手な阿彌陀經に釣り込まれてゐたのだ。
どうした拍子にか、あまり澤山イタヤを盛つてあつた壜が倒れた。それを、床の端に腰かけてゐた人が元の通りに立て直して呉れたが、死人が少しもびつくりしなかつた樣子を見て、民藏は俄かにむせび泣いた。
『もツともだア、ね――もツともだア、ね』と、をんな連は言葉に出して同情して呉れた。
『まア、一杯飲めよ。もう、泣いても、わめいても、駄目ぢやで、なア。』こんなことを云つて、をとこ連の間から、茶碗をあけて渠にさしたものがある。初さんであつた。そして民藏が片手で淚を拂ひながら受けた茶碗へ、勇さんはなみなみと酒をついで呉れた。
渠のほかの飮み手は皆、鑵詰めの蟹をさかなに、段々醉ひがまはつてゐた。
『泣くだけ泣いてやるのもいい、さ。』旦那は主人らしい態度を皆に見せて、『民藏も、これまで、さん〴〵女房をいぢめ拔いたから、ねえ。』
『なアに』と、番屋の親方が應じて、『民さんの

いぢめるのは可愛がつてをつたのぢや。」

「そんな可愛がられ方ぢや、女が困る、なア」と、同性仲間を返り見た婆アさんがある。

民藏も多少醉つて來たので、冗談半分にきのふのダニのことをおほ袈裟に吹聽して皆を笑はせたり、死人のさん〴〵な惡口を云つて、そんなことはけふだけでも云ふなと戒められたりした。

他の二ケ所の製造所の人々も、けふの仕事を終つて、ちよツと顏を出した。そしてけふも大漁であつたことを旦那に自慢らしく話してるのを聽いて、渠は旦那に向つて、

『惜しいことをした』と口に出した。

『仕かたがない、さ』と、旦那も負け惜しみを表する顏つきをして答へた。

夜がふけてから、人の顏は大分入れ代つたが、お通夜をしようとする人數は晝間よりも增してゐた。

けれども、民藏は再び熱い男性の力をばかりおぼえ始めた。そして皆にまた何と云はれても構はず、先づ經讀み女に歸つて貰つた。

それから、關係の薄い男女を歸した。

殘つたのは旦那と勇さんと番屋の親方と漁夫の初さんとであつたが、から云ふ人々にも亦命令的に歸れと告げた。初さんの外は、『またか』と云ふ顏つきはしたものの、異義は唱へなかつた。

初さんは醉ッ拂つて居た。管々と同じやうなことを繰り返して、いつもの馬鹿正直一方から、隨分世話になつたお竹さんだに依つて、今夜だけはどうしてもお通夜しなければならないと頑張つた。

『民さんには民さんの思はくもあるのだらうから』と、旦那や親方がこれをつれ出さうとしても、なか〳〵承知しなかつた。

『歸れと云ふに、この野郞！』

目をけはしくして怒つてた民藏は、この正直者を床の上から引きずり下ろした。

『ぢやア、歸る！　歸る！』これも怒つて草履を穿かうとするのを、民藏は待つてやる暇も我慢できなくなつてゐた。そして渠はからだ中にみなぎつて來る蠻力にまかせて初さんをぐん〳〵戶の外へ突き出した。

（大正二年十月）

眞赤な太陽

單調子な　樺太の　海岸に　獨り
立つて　考へて　ゐると、
夕かたの　浪さへ　僕を　招いて　吳れ
ない。
後ろの　草山には、無言で、ガスが　か
よつてしまふ。
目の前　には、靜かな　海が　廣がつて、
矢ツ張り、ガスの　中に　隱れて　行く。
そこに、光線を　剝ぎ取られた　太陽が
眞ッ赤な　色を　して、
淺い　べに茶碗を　浮べて　ゐる。
接吻！　といふ　ことが　思ひ出された
が、
僕は　愛する　婦人に　遠ざかつて　來
て、
その　愛婦に　棄てられた　樣に　寂し
く　なつた。

（『悲のしやりかうべ』より）

毒薬女

一

「おい、あの婆アさんが靈感を得て來たやうだぜ。」

「れいかんツて――?」

「云つて見りやア、まア、神さまのお告げを感づく力、さ。」

「そんな阿呆らしいことツて、ない。」

「けれど、ね、さうでも云はなけりやア、お前達のやうな者にやア分らない。――どうせ、神なんて、耶蘇教で云ふやうな存在としてはあるものぢやアない。從つて、神のお告げなどもないのだから、さう云つたところで、人間がその奥ぶかいところに持つてる一種の不思議な力だ。」

「そんなものがあるものか?」

「ないとも限らない――ぢやア、ね、お前は原田の家族にでもここにゐることをしやべつたのか?」

「あたい、しやべりやせん――云うてもえいおもたけれど、自分のうちへ知れたら困るとおもで。」

「でも、あいつは、もう、知つてるぞ、森のある近所と云ふだけのことは。」

「森なら、どこにでもある。」

「さうだ、ねえ」と受けて、義雄はそれ以上の心配はお鳥に語らなかつた。無論、千代子が或形式を以つて實際お鳥を呪ひ殺さうとしてゐるらしいことも、お鳥には知らしてない。たださへ神經家であるのに、その上神經を惱ましめると、面倒が殖えるばかりだと思つてゐるからだ。

が、お鳥も段々薄氣味が惡くなつたと見え、日の經つに從つて、義雄の話を忘れるどころか、ありありと思ひ出すやうになつたかして、つひにはまた引ツ越しをしようと云ひ出した。もし知られると、今までにでも、云はないでいい人にまで目かけだとか、恩知らずだとか、呪ひ殺してやるだとか云つてゐるあいつのことだから、わざと近所隣りへいろんな面倒臭いことをしやべり立てるだらうからと云ふのである。

然し、この頃お鳥はおもいかぜを引いてとこに這入つてゐた。近所の醫者を呼んで毎日見て貰ふと、非常に神經のつよい婦人だから、並み以上の熱を持ち、それがまた並み以上に引き去らないのだと說明した。その上、牛込の病院に行けないので、一方の痛みも亦大變ぶり返して來た。

かの女は氣が氣でなくなつたと見え、獨りでもがいて、義雄にも聽えるやうに、

「何て因果な身になつたんだらう」と、三疊の部屋で寢込みながら、忍び泣きに泣いた。おもての方の廣い、然し向う側の森から投げる蔭をかぶつた室――六疊――には、憲兵が三人で自炊する樣になつてゐた。

義雄は同じ家にゐる憲兵等に物も云ひかはさなかつたが、毎日、書間からお鳥の看護に努めた。同時に、自分もひどい痔に惱んだ。

重吉からの返電は來ず、東京に殘つてゐる重吉の女房に問ひ合はせると、北海道の方をまはつてゐると云ふのであつた。義雄はまだ鑵詰事業の手初めも出來ないのが、無聊の感に堪へなかつた。

丁度、その時、我善坊の方へいいハガキが屆いた。

「龍土會例會――一、時日――一、場所――

一、會費――右御出席の有無〇〇區〇〇〇町〇〇番地〇〇〇〇方へ御一報を乞ふ――年月日――幹事――』と、印刷摺りにしてある中へ、それ〲必要な文字を入れたハガキであつた。

龍土會と云ふのは、おもに自然主義派と云はれる文學者連を中心としての會合で、大抵毎月一回晩餐の例會を開くことになつてゐる。幹事は二名づつのまはり持ちで、この月には田島秋夢と今一名渠と同じ新聞社にゐる人の名が出てゐた。

義雄はこの會の最も忠實な常連の一人でもあるし、友人どもの顏も暫く見ないし、印刷を終つた自費『新自然主義』がいよ〱世間に出た當座の意氣込みもあつたことだし、喜んで出席することにした。そしてお鳥が、その日になつてもこちらの痔が惡くなるにきまつてるから止めて呉れろと頼んだのも承知しなかつた。

中の町から檜町の高臺にあがると、麻布の龍土町である。そこの第一聯隊と第三聯隊との間に龍土軒と云ふ佛蘭西料理屋がある。そこが龍土會の會場であつた。

義雄はそこに一番近いので、午後六時にはかツきり行つた。が、まだ誰れも來てゐない。

ボーイを相手に玉を突いてゐるうちに、人がぼつり〲集まつて來た。そのうちの一人が玉場へ飛び込んで來て、

『どうだ、久し振りで負かさうか？』かう云つて直ぐキュウを取つた。例の歌詠みから株屋の番頭に轉じた男だ。『然し、ねえ』と、かの永夢軒に於ける義雄の失敗を持ち出して來て、『また電球をぶち毀すのは眞ツ平だぜ。』

『あれはどこの玉屋へ行つてもおほ評判ですぜ』と、そばにゐたそこの主人が少しおほ袈裟に笑つた。

『もう、大丈夫だよ。』まじめ腐つて答へながら、義雄も臺に向つたが、いろんなことが氣にかかつて、もろく勝負に負けた。

『よせ〱』と呼びに來たものもあつて、義雄も二階にあがつた。渠を見るのは近頃珍らしいので、皆が話をしかけた。

『君の著書をありがたう』と挨拶するものもある。

『あんな短い紹介だが、取り敢へず新刊紹介欄に載せて置いたよ』と云ふものもある。

『耽溺はどうなるのだらう』と、こちらが現代小說にやつた作のことを云ふものもある。

『君の女はどうした』と、ぶしつけに聽くものもある。

『顏の色が惡いが、過ぎるのだらう』と、穿つたつもりでからかふものもある。

『また痔が惡くツて、ね、閉口してゐるのだ。』

『ぢやア、酒はやれまい』と、慰め顏に質問するものもある。が、渠はかた一方の耳がまだよくないので、左の方から云はれた言葉を度々聽き返したり、聽き落したりした。

やがて椅子が定まつて、日本酒の德利がまはつた。

秋夢は幹事だから末席にゐる。渠は鋭い皮肉な短篇小說で名を出した人だが、外に、『破戒』を書いた藤庵がゐる。『生』を書いた花村がゐる。劇場のマネジャーを以つて任ずる內山がゐる。また外國新作物の愛讀者で、司法省の參事官をしてゐる西がゐる。その西が紹介した農商務省の山本といふ法學士がゐる。株屋の番頭がゐる。工學士の中里がゐる。麹町の詩人がゐる。琴の師匠の笹村がゐる。漫畫で知られる樣になつた杉田がゐる。或出版店の顧問、雜誌の編者等もゐる。

かう云ふ人々の中にあつて、いつも渠等の談話を賑はすのは田邊獨歩であつたが、今年の六

月に肺病で死んでしまつた。餘り出席はしなかつたが、矢張り、會員であつた眉山は、獨步の死ぬ少し前に自殺した。

眉山の自殺してから間もなく、茅ケ崎海岸の獨步の病室で、

『この龍土會の會員の中で、誰れが眉山の次ぎに死ぬだらう』と云ふ話が出た。

『無論、田村の狂死、さ』と、毒舌家の病人は笑つて、『あいつが生きてるうちに、おれは死にたくない。』

さう言はれるほど、義雄も隨分毒舌の方であるし、それをあとで聽いた渠は曾て獨步の思想をまだ舊式だと批評したことがあるのを思ひ出したりしたが、今夜は甚だ勢ひがない。酒は平氣で人並みに飲んでゐたが、持病のむづがゆく且痛むのを頻りにこらへてゐた。

花村は『鳥の腹』と云ふのを文藝倶樂部に出した男を捕へて、あの小說は描寫でない、下手な說明だ、きはどいところがあるのは構はないが、說明的だから、それを人に强ひるやうになつてゐる、挑發的だと云つて、發賣禁止になつたのも止むを得まい、などといぢめてゐた。

藤は、或新聞記者に向つて、謙遜らしく、人生の形式的方面をどう處分してゐればいいのだらうと云ふやうなことを質問してゐた。

西は内山や中里と共に頻りにイブセンやメタリンクやストリンドベルヒの脚本を批評し合つてゐた。

かう云ふ別々な話がいつまでも別々になつてゐないで、互ひに相まじはり、長い食卓のあちらからも、こちらからも、機の梭が行きかふ樣になつた時、義雄はその意味を取り違へたり、ただやかましい躁音が聽えたりする瞬間もあつた。それが如何にも殘念で、この耳だけに關して云つても、もう、これ等の人々と自由に話し合ふ資格がなくなつたのかとまで思つた。

『田村が乙に澄ましてゐやアがるので、今夜は少し賑やかでない、なア』と、株屋の番頭の云ふのが聽えた。『色をんなを持つと、ああおとなしくなるものか、なア？』

『けふは、何故と云はれても、しやべる氣になれないのだ。』かう云つて、義雄は笑つたが、自分のいつも特別に注意を引くから〳〵笑ひも、それと好一對になつてゐる麴町の詩人の羅漢笑ひと云はれるのに壓倒された。

そして、花村の耳も鼻も目も内臟も、どこもかも健全で、而も巖乘な體格が何よりも羨ましくなつたと同時に、獨步の死んだ時、茅ケ崎へ集まつた席で、義雄は自分が花村に向つて、君は僕等すべての死んだあと始末をして、誰れよりもあとで死ぬ人だと云つたことを思ひ出した。

次の忘年會大會の幹事を義雄も引き受けた龍土會の歸りには、おも立つた人々よりも一時代あとの若手連が二三名、麴町の詩人と共に付いて來た。が、中の町の隱れ家へは連れ込むことをしたくなかつた。と云ふのは、自分の痔が果して酒の爲めに非常に不氣分になつた上に、お鳥がうん〳〵呻つて寢てゐるのを思つたからで、而もそれがたツた三疊のきたない部屋だもの――自分等の辨當を運ぶ辨當屋のある角で、渠等と無理に右と左にわかれた。

例のどぶを渡つて、戶を明けると、今夜は斷つてあつたので締りはしてなかつたが、醉つてゐるのと早く横になりたいとの爲めの荒ちからで、自分の引き明けた戶はがらりと大きな音を立てた。

『お歸りですか』と、下のかみさんが、炬燵をしてある奥の方から聲をかけた。

『あ、只今』と答へて、渠は自分で戶締りをしてから、あがり段をあがつた。

あたまの上には、無學、無趣味、無作法、卑

俗で、話と云へば、賤業婦の噂ばかりの憲兵連がゐるのを思ひ出した。

上にも下にも、こんな毛だ物同様の野蠻人種が籠つてゐるほら穴より外に、義雄は自分の眠るところもない今の狀態を考へて見た。

『吾人の頭腦は銀河に浴し、吾人の兩足は地獄のゆかを踏む』と云ふエマソンの警句が浮んだ。が、若しこのおほ袈裟な口調で自分の考へを發表すれば、地獄のゆかをも踏み破つて、而も天上に須佐之男の暴威の雄たけびをやつて見たいほど絶望的だ。

『こんな腐つたからだ！　こんな死獸のたいを借りたやうなからだ！　こんな多くの惡病氣の問屋をしてゐるやうなからだ！　ひよツとすると、耳や鼻や痔は何物かの梅毒から來てゐはしないかと疑はれるからだ！　ええツ！　こんなからだはどうでもなれ』と、義雄は二階へあがつてから、自分で自分を投げ出した。

『どうしたの』と、お鳥はその重たさうな首を枕からもたげた。『お酒が惡かつたのだろ――だから、あんなに行くなと云うたのに。』

渠は默つて返事もしなかつたが、ほツこりと迫つて來る女のにほひを嗅いだ。渠には、鼻も亦右の方しか役に立つてるここに自分の苦痛の僅かに嗅ぎ分けるこのにほひが、今のところ、たツた一つの慰めだ。この頃は、外のどぶの惡臭も氣にならなくなつた。この部屋へあがつて來るまでの陰氣臭いことも、さう神經を惱ませなくなつた。その代り、お鳥のこの臭ひがどう嗅ぎ直して見ても、義雄には××臭くなつた。そのくせ、別にわき香か何かのやうにいやな感じを伴つてゐるのではないが――。

それでも、なほ、千代子の痩せて冷めたさうなところよりも、夜は、梅が香を包んでゐるやうに、此あツたかい臭ひのするところがいいのである。渠はこの臭ひがしないと、却つて寂しい、寂しい氣持ちになつた。

お鳥がまた別にかぜの醫者を呼んでゐるのに、義雄がまた耳に通ふほかに他の醫院を訪ふのは、自分で我慢してゐた。そして、隔日に行く學校へは缺勤屆を出した。が、堪へ切れなくなつて、或る肛門病院へ行つた。そして注射をして貰つたのが、藥の利き目でか、一層不氣分を増した。

『あたいにこんな二重の苦しみをさせるから、その罰で自分もうへした二重の病氣になつたは何かの怨靈が挈押し止めようとしてゐるのしない――許して呉れ』

と云つて、義雄はそれをお鳥の氣休めに供し、その實、自分が苦しいのにかの女の看護までをしてやらなければならない面倒を少しでも避けるやうにした。

二

『おかアさん！　おかアさん！』

義雄はぎよツとしてあたまを持ちあげた。お鳥が死んだ母親を呼んでゐるのである。

病人を見ると、あを向いて、目をつぶつたまま、久し振りの優しい微笑を浮べてゐる。

炬燵の火も消えた眞夜中、しんとして、鼠一匹騷がない。消し忘れた置きランプの光に、時計のちくたくばかりが明らかに響く。

その時計のこまかい確かな刻み――それが渠の痛みを全身に傳へる血脈にめぐつて、刻一刻、快樂と思へた夢が羽ばたきをして過ぎ行くのがありありと見える。

ふと、その過ぎ行く快樂の夢を米國の浪漫的詩人アランポーが歌つた『おほがらす』の姿にして見た。レノアと云ふ世に亡き乙女を戀して、

『あはれ、冴やかに　吾れは　覺ゆ　寒き
師走の　夜中　なり、

炭の　燃えさし　離れ離れ　床に　その
　影　落してき。
吾は　頻りに　朝を　待ちつ、無駄に
　求めて　わが書　より
借らん　と　せしは　憂さ　の　晴らし』

であつたところへ、『何を痩せ魂、鄙び魂の不吉怖鳥「古鳥」の鳥類の惡魔か分らないやうな眞ッ黒なおほ鴉が闇の外から飛んで來て、書齋に備へつけられたパラス彫像の肩にとまつた。そして愛婦の今と同樣ノーモーア、『またもなし』と語つた。

それは失戀と云ふ物を地上に引き据ゑて見たのだが、英國の畫家詩人ロセチの「昇天聖女」に、

『昇天　聖女　の　身を　傾けて
憑りしは　黄金の　天津横木。
まなこは　深みて、一しほ、海の
平らに　靜める　それに　勝り。
その手に　持ちしは、小百合を　三個、
髮なる　きら星　數は　七つ。』

とあるのも、つまり、これは失戀を天上に祭りあげたに過ぎない。

ワルツ ホイトマンにも同じ系統の『搖り籠から』があり、義雄自身にも長い詩篇『三界獨白』中の『常盤の泉』があつて、矢ッ張り、若々しい戀の失敗を地上なり、天上なりに引き据ゑ、祭りあげてゐたのが思ひ出された。

然し現在の狀態はどうだ？

空想のでも、天女や戀人なら、まだしも――架空のでも、おほ鴉やアラバマから來たと云ふ鳥ならまだしも――義雄は身づから××だと思ふものを介抱してゐるのである。

無論、世に神聖な戀愛などはない――あつても、ただの空想で、現世に活動する人間の糧にはならない。が、曾ては聖愛などを――その時から、肉的に見てだが――歌つたことがある渠は、今更らのやうに今昔の感無しにはゐられなくなつた。

××の熱病人に、殆んどあらゆる病氣の問屋！　渠は、から思つて、ます〳〵絶望的な蠻勇氣を出した。

『死にたくはない――今、一度、この女を完全なからだに返して、その全身の愛を本統に自分に捧げさせて見ないぢやア置かないぞ。それからなら、自分が死んでもいい、また、破れ草履を棄てるやうに、この女をすツぱりおッぽり出してもいい。』

から考へて、渠は片手で自分の痛みの個所を押しこらへながら、熱に疲れてよく眠つてゐるかの女の二つの病氣の、直つた上の樂みを想像した。

しんとした、そとには何物かが窺つてゐるやうだ。渠はこツそり罪惡でも犯してゐるやうにまたぎよッとした。

『おかアさん！』と、輪郭のぼやけた一聲に、この僅か三ヶ月間に痩せの見えて來た顏の微笑がまだ浮んでゐる。

また、夢を見てゐるのらしい――この飽くまでも見飽きぬ妖態！

試みに、そのあツたかい胸から、渠は自分の一方の腕をのせてゐたのをやはらかに外すと、かの女は逃げるものを追ふやうに、兩の手を空しくさし延べた。が、直ぐそれを引ッ込めたかと思ふと、やがて、

『あア、ア、ア――！』頼りなげに又苦しさうにもがいたあげく、半身をがばりともたげた。が、あたりをじろ〳〵見渡して、『畜生！　殺すぞ』と云ひながら、再び枕に就いた。

ひどい熱になやんだあとの疲れで、眠りはまだこの恨みの深い人を纏つてゐると見えた。直ぐいびきをかき出した。そして、そのぐう〳〵

云ふ響きが、おもて座敷の憲兵どものと何の遠慮もなく競爭を始めた。

　みじめな人生の裏家住ひ――から云ふことが義雄のあたまに浮んだ。こちらのいびき家は、然し、相變らずうなされてゐると同時に、からだの筋肉が痙攣を引き起す前のやうにびく〳〵動いてゐる。

『鳥ちやん――鳥ちやん！』

靜かに呼んで見たが覺めようともしない。あを向けに吐く白い息と横向きに吐く白い息とが交叉した。渠は考へた、呼び起して、覺めた自分と同じやうに苦痛を感じさせるよりも、いツそのこと、死ぬまで斯うしてゐさせる方がまだしも功德かも知れない。且、自分に對しても、やき〳〵面倒を訴へないでいいと。

　若しこちらが昔の人のやうに十五六歲で結婚をしてゐたら、これくらゐの總領娘があつたかも知れない。無病息災であつたきのふは、駄々も捏ねたし、泣いて無理も云つた。が、その可愛さは、もう、なくなつた。

　過ぎ去つた快樂は現在の自分を滿足させるに足りないのに、矢ツ張り、こんなところにこびり付いてゐるのは、宿無し犬が掃き溜めの汚物に飢ゑをつなぐと同樣、ここに自分の苦痛の必然な餌じきを求めてゐるのだ。

　から思ふと、渠には女の方も亦さうではないかと云ふ考へが起つた。この頃、かの女は非常に愛着を增した。少しでも男を自分のそばから離れさせまいとする。が、それは男を先づそとに見えない心臟や肺のあたりからがつ〳〵とかじつて、つひにはその全身をかの女の病熱と衰弱との喰ひ物にしてしまふのではなからうか？

　自分の戀も純潔でなければ、お鳥のも亦利害を混濁してゐると見ながら、ランプの光に獸性が目覺めて、二つの肉その物の腐爛して行く姿を心のまなこに見詰めてゐる。そしてこちらの手あしに女の存在を知らせるのは、こちらがかの女に分つた毒血のあツたかみである。

　このまま死んで、腐つて、骨になつたら――？さうだ、その時は、

『二つのしやりかうべ！』恨みもない、執着もない、全く關係のないあかの他人だと渠は考へた――そして、また他人の寢ごとは却つてはツきり聽えるものだと誰れかが云つたことを。

　寢てゐる病人はまたうなされ出したが、今度は何かの怨靈が磐石の重りを以つて息の根を押し止めようとしてゐるのを、四苦八苦のもがきで逃げようとするやうなありさまがあり〳〵と見えた。兩うでを空に開いて、

『あアー！　あアーア、ア、ア！』と叫んだ時は、怨敵の姿も見えたかのやうに、義雄は三たびぎよツとした。かの女は目をきよろりと開けてこちらの驚いた顏を見た。

『何か云うた？』ぼんやりとほほ笑んでる。

『うなされてゐたよ。』

『さう――夢を見て、苦しかつた。』

『……』義雄はただかの女の顏を冷やかにのぞき込んで、この寒い深夜のどこかそとを想像して見た、千代子が神社か大木の蔭で藁人形の釘を打つてゐたのではないか知らん。

三

『熱の方は大分えいやうになつた。依つて、あすからでも、また牛込の病院へゆこか。』

『無理をしても惡いが、なアー　おれも然し痔の方は少し辛抱出來るやうになつたから、また耳の療治にせツせとかよはうかと思つてるのだ。』

『こんな二人までも苦しい目に會ふのはをかしい――あたいの寫眞が一つ我善坊に置いてあるから、自分の寫眞と一つにして、あいつがそれ

を五寸釘でも打つてやせんだろか？』
『まさか、ねえ』と、こちらは何げなく見せて、
『よしんば、そんなことをしたところで、お前とあいつとの間に無線電信でもかかつてゐなけりやア、通じる筈がない、さ。』
『でも、さうして人を呪ひ殺した奴が田邊に一人あつた。』
『そりやア、自分を呪つてると云ふことを傳へぎきでもしたから、神經に負けて、われとわが身を殺したの、さ。』
『でも、自分はあいつに靈感が出て來たと云うたぢやないか？』
『それはちよツとさう思つただけで——きツとそれだとは思つてゐない。』
『では、若し感づいて、ここへやつて來たらどうする？』
『今まで來なけりやア、もう、大丈夫分りツこはないの、さ。』
　かう云ふ話があつた時は、義雄とお鳥とが大工の家を體よく斷られて、假りにその隣りの辯護士のおやぢとその妾とがその間に出來た一人の子と共にゐる家の二階へ移つてゐた。同じ間取りの、同じ裏二階の三疊敷だ。
　そこの細君が矢ツ張り女房のある人と一緒になつてゐると云ふ事實は、同じやうな事情にあるお鳥をして少しその神經を休めさせた。
『隣りの人が云うてたが、もとはあのおやぢさんの息子の家で下女をしてをつて、おやぢさんの子を孕んだのださうや——見ツともない女だらが？』
『見ツともないとしても、からだは無病息災だ。』斯う義雄が答へたのには自分の持ち物の方には面倒くさい病氣がとツ付いてゐると云ふ不平も含めた。
『自分が惡いのぢやないか？』とお鳥はこちらを睨み付けた。
　そこのおやぢと云ふのは、自分の息子が辯護士の若手として羽振りがいいのを自慢した後、義雄と同國だと分つた嬉しさに、
『わたしも、同じやうな事情で、息子と同居してをる妾アさんがやかましいのに困つてをりますので、あなたのことも豫て人ごとには思うてをりませんでした』と云つた。
『なアに、あり勝ちのことですから』と、こちらは笑つて輕く受けたが、こんな死にぞくなひのおやぢなんかの同情は少しもありがたくないと思つた。
　義雄の耳は一向にはか〴〵しくないのもまどろツこしくて溜らないのだが、痔の方がよくなつて來たので、學校の冬期試驗をやりにも行くし、段々氣力も恢復した。
　すると、自分の身に纏ひ付いたすべての面倒を早く振り切つて、早く樺太の事業に對する計畫に直進したくなつた。

　自分の耳も面倒だ。いとこの重吉が此の方からこちらの電報に對してまだ便りのないのも面倒だ。病人のお鳥も面倒だ。然し最も面倒なのは、夫婦に關する法律の規定と父の遺言とを楯に取り、我善坊の家にがん張つてゐるヒステリ女である。
『人を呪へば穴二つだ——早くあの千代子がくたばつて來れりやア』と云ふ願ひが、義雄の胸を絶えず往來してゐた。ところが、意外にも、死んで呉れたのは千代子でなく、かの女が里にやつてあつたのを取り返した赤ん坊だ。
　龍土會の忘年會が、義雄と長谷天香といふ批評家との幹事で、午後五時から烏森の湖月であると云ふ日の晝過ぎであつた。彼が本郷の耳科醫院へ行つた歸りに、中の町の中通りを耳ばかり氣にして通り過ぎてしまひ、裏通りの隅にある例の辨當屋と反對になつたかどから出る

と、今その辨當屋から出た千代子の姿が目に這入つた。
目は落ち込んで、頰はげッとこけて、顏全體に血の色とては少しも見えず、五六間程を隔てて見たところでは全く憂ひと呪ひのおも影であつた。
たツた僅かのあひだ見ないうちに、身體までが實際にあんなに影の薄い幽靈になつてしまつたのかと思はれた。
羽織りや着物は不斷着のままで、こちらには氣が付かず、下向き勝ちに歩いて、そのかどをお鳥のゐる方へ曲つた。
「たうとう嗅ぎ付きやアがつた」と思ひながら、直ぐ義雄はインバネスの袖で頰をこするふりをして、向うの横町へ逃げ込んだ。
義雄は千代子を避けたのを誰れにも知られたくなかつた。その足で辻ぐるまに乘り、龍土軒の玉突場へ行つた。
が、氣になつて、玉が當らないので、二階へ移つて洋食を二皿ばかりやりながら、曾てここへお鳥を連れて來たことを思ひ出した。
『洋食などいやぢや。』から云つて、お鳥がわざとらしく兩手を袖の中へしまつてゐるのを見てこちらは喰ひ方を知らないのだと推察した。そして、そばに來てゐたおかみさんの手前もあることだから、こんな田舍者をいい氣に可愛がつてゐると思はれないやうに、
『まア、いやでも喰べさせてやるぞ』と、向うの皿の肉を自分のナイフで切つてやりながら『こいつは好き嫌ひが多くツて困るのですよ』と云つた。
何ぼくど〳〵しい千代子でも、もう、歸つてしまつただらうと思はれる頃、義雄はそこを出て、中の町へ向つた。然しまだ闇に野犬のしツぽを踏みはしないかと云ふやうな氣持ちで、おそるおそる假寓のどぶをまたいだ。
すると、直ぐ下の女が出て來て、鬼の首を取つた手がらばなしをでもして聽かせるやうな待ち受けた樣子で、
『今しがた、奥さんが見えましたよ。』
『さうですか』と、わざと平氣ではしご段をあがらうとした。
「何だか、お子さんがヂフテリヤで危篤だから――」
『えツ！』渠ははしごの第一段にかた足をかけたまま踏みとまつた。
下の女は言葉を續けて、
「芝の慈惠病院の隣りの東京病院へ直ぐ來て下さいとおツしやつて、お歸りになりました。」
「さうですか、ありがたう」と答へて、渠はお鳥の藥臭い寢どこへ行つた。
『來たよ』と、かの女は半身を枕からもたげて、こちらを恨めしさうに見た。
『何が？』
『あいつが、さ。』
『さうか？』枕もとに坐つて、そ知らぬ風はして見たが、心のうちはかき亂されてゐた。第一、どうしてここを嗅ぎ付けただらう？ 靈感などと云つても當てになつたものぢやアない。さきに、森のある近所などととぼけたのも、誰れかに聽いて知つてゐたのかも知れない。或は、また、先月の龍土會の歸りに麴町の詩人がそばまで來たから、あの男から大體の見當を聽いて來たのだらう。また、あんたに影が薄かつたのは病兒の看護に疲れたのに相違ない。それにしても、自分自身で出て來たのを見ると、子供はたとひ危篤だとしても、こちらが全く可愛がつてもゐないので、向うも焼けを起して來たのだらう。
から考へると、千代子の身の周圍を司なり與

味づよく纏ひ付いてゐたこちらの不思議な幻影や、可なりおそろしく想像してゐた呪ひの魔力や、罵倒しながらもかの女の子煩惱を取り柄として子供のことは委せ切りにしてあつた安心、などは全く消えてしまつた。が、きツと、かの女とお鳥とはまた云ひ合つてゐたのだと思つたので――それでわざと三時間ほどもよそへまはつてゐたのだが――その面倒くさい報告を聽かせられるのがいやであつた。

『また喧嘩したのだらう？』

『喧嘩などしやせん。』

『ぢやア、あがらなかつたのか？』

『さう、さ。』

『……』それぢやア、まだしもよかつたと、義雄は多少氣を落ち付けた。

『でも』と、かの女は言葉を續け、『隣り近所へ入らないことまでしやべつて行つた。見ツともなくて、もう、ここにもをられませんぢやないか？』

『どんなことを云つたのだ？』

『どんなことツて――』お鳥がふくれツつらをして語つたのに據ると、千代子は先づ辨當屋に當りを付けて這入り込み、そこでこちらのゐどころを確かめ、そこを出てからお鳥のもとゐた大工に行き、またその隣りの蒲團屋にまでも行つて、お鳥に關することを洗ひざらひしやべり立てたのである。お鳥は、また、下の女から、それを聽かせられ、氣になつて溜らないので、寢床から飛び起きて、千代子のまはつたさきを自分も一々まはり歩いて、自分の辯護をすると同時に、向うの惡口も吹き立てて來たさうだ。

『どいつも、こいつも仕やうのない女どもだ、なア。』

「でも、皆がをかしな人だ、目ばかりきよときよとさせて、聽きたくもないことをわざわざしやべりに來て、と云うてゐた。」

「お前も行つたのぢやアないか？』

『あたいのはあとのことぢや――然し』と、お鳥は餘ほど讓歩してやると云ふ態度で、『子供が病氣なのは可哀さうだから、行つておやり。』

「そりやア、行くが、ね――」考へて見ると、第一子（女であつた）もヂフテリヤの苦しみに枕もとの小ランプを攫まうとしながら死んだ。第三子（男であつた）も同じ病氣であつたが、母に抱かれながら、なぜこんな苦しい目に會はせるのかと云ふやうな目附きを殘して死んだ。第一子の時は初めての子でもあるし、二年二ケ月も生きた記念があるので、殘念に思つたが、第三子は自分からの子として二度目の死でもあるし、たツた九ケ月をさう抱きもしなかつたから、惜しくはなかつた。今回の赤ん坊に至つては、見たことさへ稀れな上に、どうせまた死ぬのだらうと思ふと、全く愛着が起らない。

それでも、子が死んだら、またその死骸の處分はしなければならないし、今夜は龍土會もあることだし、お鳥が成るべく早く歸つて來て吳れろと賴むにも拘らず、

「今夜はどうか分らない」と云つて、義雄は二階を下りた。そして下でそれとなく聽いて見ると、千代子は大變な權幕で、意張つて上り込まうとしたのだが、お鳥の病氣で寢てゐると云ふのをかこ付けに、下の人が氣を利かせてあがらせなかつたので、

『わたしも、そんな病人なんか相手にしても詰りませんから、では、歸ります』と、千代子は飽くまでも負け惜しみを云つたさうだ。

それに、入院したのは赤ん坊一人と思つてゐたら、さうでなく生き殘つてる四人の子供をたツた一人除いたあとのすべてがその病院の厄介になつてゐるのだと分つた。

車を驅けらした時は、もう、四時過ぎで、ど

こでもあかりをつけてゐた。

東京病院の受け附けに驅けつけて聽くと、赤ん坊は既に息を引取つたと告げられた。そして、次女の富美子は普通の病室に、三男の知春は隔離室に這入つてゐることが分つた。

義雄は　弟の葬に桐ケ谷の火葬場へ行くつもりで、直ぐ支度をして來いと云ふ使ひを出してから、先づ知春の室に行つた。すると、千代子が一人附き添つてゐて、所天を責めるに最もいい口實を得たと云はぬばかりの權幕だ。かの女は自分の混亂した忿激と愁傷とをまぶたの落ち窪んだ目に漲らせ、而も自分は亡兒の魂に從つて既に地獄か墓の底までも檢閲して來たやうなつよい暗い光を顏ぢうに現はして、

『あなたのおかげで、わたしも兒どもの死に目に逢へなかつたぢやアありませんか？』

『そりやア、知れ切つてらア、ね。』義雄はかの女に毒々しく見せたほどわる度胸をきめ込み、睨み付けながら、『おれの隣り近處へまでも、わざわざ入らざらんおしやべりをしてゐやアがつたからだ。』

『おしやべりをしないで、どうします？　あんな女のことは、一切合切しやべり立てて、隣り近處へ顏向けの出來ないまでにしてやるんだ。』

その聲で、眠つてゐた兒が目を覺した。そして、父が一方の枕もとにゐるのを見て、びツくりしたやうに身をのり出し、他の一方にゐる母の膝にしがみ付いた。

『それもよからう、さ──また引ツ越させるだけのことだ。』

『どこへ逃げたツて』と、かの女は兒にそのまま蒲團をかけてやりながら、『このわたしの前ぢやア隱れおほせませんよ。』

『現在、けふ、あの辨當屋から貴さまが出たのをおれは見たのだ。面倒だからはづしてしまつたのだ。』

『さう──』千代子は意外だと云つたやうにぽかんとした。が、負けてゐないで、また語を繼ぎ、『然し、清水の居どころは當つたぢやアありませんか？』

『原田かどこかで云つてもらやア、當るのは當り前だ。』

『いいえ、そんなことア──あすこへは云つてなかつたぢやアありませんか？』

『ぢやア、麹町で聽いたのだらうよ。』

『あの方だツて、知りやアしません。』

『貴樣が口どめされてるの、さ。』

『あんなこと！　あなたは餘つほど疑りツぽいの、ねえ。』

『そんなことアどうでもいい』と、義雄は千代子の强情を押し付けたつもりになつた。が、今の應對で以つて見ると、かの女は中の町であんなおしやべりをして歩いたやうに、どこででもこちらの知り合ひでかの女も會つたことがある人のところへは、この狂態を以つて吹聽しに行くらしい。原田へ度々行くのは勿論のこと、もう、麹町の詩人へも行つた樣子だ。

思ひ出すと、かの麹町の詩人が我善坊の家へ遊びに來た時、千代子はこちらのゐる前でこちらの不行狀を詩人に訴へた。然し、

『そりやア、然し、男子のことだから』と、から麹町が答へたので、

『あなたまでがそんなことを』と叫んで、かの女は詩人をいきなり突き飛ばした。すると、同じやうに神經質の詩人は非常に氣を惡くして歸つた。

それを見ても、誰れも千代子をまじめには相手にしまいが、意地惡くでも出て、こんな狂人じみた女のおほ袈裟な言葉を釣り出し、それを根據にまたこちら自身の平生を人が世間に廣告しては甚だ以つておほ迷惑だ。

『實に困つた女だ――その歩いたあとをお鳥がまた云ひ消して廻つたのも尤もだ』と、渠は考へて見た。

『わたしは、どうしても』と、千代子はなほその言葉をさし控へようとはしない。『どうしても、この神さまの力で、あなたの不身持ちが直るまでは、あなたと清水とがどこへまた隠れたツて、その隠れ場所を探し出してゐないぢやア置きません。あなたがたに隠れおほせる氣があるなら、わたしにも探し出す力があります。』

『さうなら、さうとして置け――だが、今回も葬式に宗教上の儀式は使はせないぞ。』

『そんなことア御勝手におしなさい――また、さう云ふだらうと思つてたんですから。』

義雄はもと耶蘇教信者であつた。そして、その教へを脱する頃になつて、千代子の方が信者になつた。が、かの女も今では變挺な陰陽學に凝つてしまつた。今年の父の葬式は父の信仰に從ひ佛式でやつたし、一昔以上前の第一子の時は、千代子の望みにまかせて耶蘇教式であつた。が、第三子の時は滋賀縣の大津で無式で濟ませた。その次ぎが今回のだが、渠としては死んだものは既に無も同然だから、ただそのまま土から土、闇から闇へ葬つてしまふつもりだ。

『死んだものなんか、掃き溜めへはふり投げて置いてもいい位のものだ。』

『どうせあなたが死ぬ、死ぬと云つてたから、あの子もその通り死んだのでせうし、うちには誰れも人情にあつい人がゐないのだから――あなたは色をんなのところばかりへ入り浸りになつてるし、馨さんは馨さんで、人の頼んだこともして呉れないで、勉強もしずに、どこかほつき歩いてばかりゐるし。おッ母さんはおッ母さんで、まだお父アさんの一周忌も來ないうちに、娘の方へ逃げて行つた癖に、よこした手紙には、五尺も雪が降るところで寒いから、また歸りたい――も、ないものだ。』

こんな繰り言を千代子が云ふのを、義雄は聽くやうな、聽かないやうな振りで、自分の心には、どうせ死ぬなら、何も分らない空體の時に死ぬ方がいい、人生の味ひが分つて、悲痛に悲痛を重ねて來ると、却つて未練が多くなるものだ、と云ふやうなことを考へてゐると、にこ〳〵した看護婦が病院の命令を受けてやつて來て、早く死體を引きとつて貰ひたいと云つた。

『今に人が來ますから、それまで待つて下さい』と、義雄は素直に答へた。が、さツきから病院の人々の死者並びにその家族に冷淡なのを怒つてゐたところだから、『どうせ傳染病は家へ引き取ることが出來ないのでせう』と、からかつて見た。そして、その看護婦に頼んで、會をやつてる湖月へ少し遲くなるからと云ふ理由の電話をかけて貰つた。

『まア、兎も角、死んだ兒の顔でも見納めに見ておいでなさいよ。』から千代子が勸めたのにも意地を張つて、義雄は何か反抗の意味を云ひ返さないではゐられなかつた。

『血の氣のなくなつた顔などア、手めえのを見てゐりやア十分だ――手めえマイナス氣ちがひイクオル死だ。子供は目をつぶつて、口に締りがなく、土色をして固くなつてるだらうが、そんなものも、もう、何度も見飽きてらア。』

千代子の妹がきのふまで來てゐたが、家の方の世話が忙しいので、代りに専門の看護婦を雇つて附き切らせてあると云ふ富美子の病室へは、義雄は行く必要がないと思つた。

富美子のはその祖父の死因と等しく腎臓が惡いのであつて、ヂフテリヤではなかつた。が、知春のはまだ小さいだけに死んだ子のが殆んど同時に移つたのである。義雄は、若し自分に梅毒氣味があるとすればその毒に於いて父のを遺

傳したと思つてゐるし、富美子は父その祖父の腎臟を受けたたし、知春は父その兄弟の病氣に傳染したのだ。然しこの知春のは手後れでなかつたから、注射が利いて、――まだ熱は去らないが、――咽喉のひゆう〳〵云ふのは直つてゐた。

「もし生の悲痛に堪へるだけの活氣がないとすれば、こいつも今のうちに死んだ方がましだのに」と考へながら、義雄は知春の隔離されてゐるその室で、千代子から死んだおちイさんからして後妻の妹に手を出しかけた程だから、その惡い報いが子や孫にまでも來たのだと云ふやうな繰り言を聽かせられたがらも、それを聽き流してゐた。かの女は病兒の無理をなだめて眠らせるやうにしながら、切りもなくいろんな不平を漏らしてゐた。

やがて義雄の弟がやつて來たので、死骸に付き添つて桐ケ谷へ行かせることにし、今夜はそこの火葬場の茶屋へとめて貰ひ、あすの朝、骨拾ひをして歸るやうに命じた。

「とめて呉れるか知らん」と、馨はいやさうな顏をした。

「おれが前に經驗があるから、云ふのだ。」

「では」と、しぶ〳〵承知したので、義雄は渠に火葬の手續き證の出來てゐたのなどを渡した。

人夫の代りに呼んだ車夫も來たと云ふので、知春の室には看護婦を殘し、千代子もしを〳〵として、義雄等と共に出て來た。

死人の置き場が別に隔離室の建物のはづれに建つてゐて、田村の赤ん坊のほかに今一つの棺があつた。いづれにも、別々に蠟燭がともしてある。線香の立つてゐる粗雜な土皿もある。

二名の看護婦が何か艷ッぽい聲をあげてきやツきやッと笑つてゐたが、義雄等の這入つて來たのを見て、急にしをらしい態度に改まり、火をつけたまま手に持つてゐた線香を棺の前の香皿にさし、

「南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛」と不慣れらしい聲で合唱した。

「たうとう死んでしまつて」と、千代子は棺を見詰めながら、「あんなに親が骨を折つて介抱したのに――憎らしい！」

「そんなことを云つたッて、死人にやア聽えやアしない。」から云つたこちらの顏を、二名の看護婦はおそろしさうにふり返つて見た。渠自身もまじめになつてる自分の顏にはあごひげが三分ばかり延びてるのが自分の手ざはりで分つてゐた。この數日を剃るひまさへなかつたのだ。

「くるま屋」と、渠は怒鳴り付けるやうな聲で、――「これを乘せるのだ。」

「へい。」車夫はおづ〳〵棺に手をかけたが、輕いので、造作もなくその肩で運んだ。

先づ馨が乘り、それから霊込みへ白い布をかけた棺を乘せたのを見て、通りかかつた醫員が立ちどまり、

「何ですか、それは？」

「棺です」と、義雄はきつい、尖つた聲で答へた、分り切つてるぢやアないかと云はないばかりに。

「御注意までに申しますが、ね、知れると車は警察でやかましいのです。」

『ぢやア、これで包んでおやりなさい』と、千代子は自分の卷いてゐた絹の肩掛けをこちらへ渡した。醫員はそれを見て默つて本館の方へ行つてしまつた。

一番長く――と云つても、きのふの夕方から――看護した若い婦人が一人、義雄等と共に裏門まで車に附いて來た。

「殘念だ、ねえ、もう、これッ切りかと思ふと――」

『お氣の毒でした、わ、ね。』
『桐ケ谷だよ。』義雄が念を押すと、
『へい』と、車は駈け出した。
歳の暮に近いさむ風がそのあとをひゆう／＼云つてゐのに義雄は氣が附いた。
千代子はすすり泣きをして、袖を目に當てた。こちらも胸が一杯になつたが顏を反むけて、愁ひの色を隱した。そして、氣を無理に持ち直して考へた、死に行くものは自分に關係がない——亡父でも、自分に殘して呉れたのは、ただ梅毒もしくは痔と僅かな財産だけだ——千代子も死ね、お鳥も死ね、入院してゐる二名の子も死ね、さうしたら、最も冷たい雪や氷の中へでも、自由自在に自分の事業をしに行けると。
『さうだ。どうしても、わが國の極北へ行かなければならない——でないと、あいつ、意志が弱いのだ、爲る／＼と吹聽ばかりして、何も着手しない、と、云ふ友人間のそしりを脱する事が出來ない。』
千代子の言葉に據れば、一昨日、重吉も樺太から歸つて來て義雄に會ひたいと云つてるさうだ。
渠には、いよ／＼この自分の事業により、やがて、自分のこれまでの失敗と不評判とを取り返して自分の同時にまた全人的發展なるところの社會的發展をも實現することが出來ると云ふ希望が輝いた。
『今晩は歸つて來なさるでせう、ね。』から千代子が聽いたのを振り向きもせず、渠は自分が幹事の忘年會が湖月で多くの藝者などをまじへて賑やかに飲んでゐるありさまを想像しながら、
『どうか分らない』と、乃ち、お鳥にも告げて來たのと同じ言葉を繰り返して、電車の乘り場へ急いだ。
渠はそれほど、萬事を投げ出してまでも、友人仲間に孤立してゐる自分の意氣込みを發表したかつたのである。

四

よそほつてまで見せるいつものむツつりとは少し違つた氣分で、義雄は自分の物だが、最も好かない家へ出かけて行つた。然し下宿屋田村の玄關をあがると、直ぐ女房の千代子に出くはしたので、いつもの通りまたむツつりした氣が起つて、物を云ひかけたくも無かつたが、強ひて顏を和らげた時は、棒立ちに立ちどまつてゐた。
千代子も立ちどまつて、冷やかな笑みを示した目をぢツと所天に投げた。そしていきなり、
『珍らしくにこ／＼してらツしやいますが、何か面白いことでもありますか、ね？』
『……』これで、もう、渠は素直に出られなくなつてしまつた、腹のどん底に用意してゐた聲を腹一杯に出して、『金が入るんだ——三圓だ！』
『へい——』かの女はきよとんとして、所天の突然な太い大きな聲を出した顏を見守つてゐたが、飛び出たやうな眼をわざとらしく横に反らして、『お金なんかありません！』
『何！　こなひだ渡したのが、もう、無くなつたわけは無い！』
『あれは』と、また向き合つて、『うちの暮しに入ります——お客さんが立て換へて呉れいと云つても直ぐ困るぢやアありませんか？』
『下宿人に金を立て換へるときまつてやアしない！』
『あなたは御自分のうちの商賣を御存じないのですよ。』
『商賣はお前が勝手にしてゐるのだ、おれは別におれの仕事がある！』

『ぢやア、あんな目かけなどに夢中にならないで、せッせとその仕事をすればいいでせう――下宿屋は、ね、亡くなられたお父アさんが、やめてしまふのも惜しいからわたしにしろとおッしやつたのですよ！』

『だから、勝手にするがいい、さ。おれは兎に角、今、音樂會に行く金が入るんだ。』

『ふン』と、かの女は鼻で受けて、横を向き、『きのふの新聞に在つた音樂倶樂部でせう――ありません！』

『よし！』から云つて、渠は鳥うち帽をかぶつた儘、つか／＼と、家族の居間へ這入つて行つた。

『あなたは』と、かの女はついて來て、『泥棒して行く氣です、ね。ぢやア、お待ちなさい、わたしが出しますから。』

『おれのうちの物を』と、つッ立つて勢ひを見せ、『おれが出すのに、何が泥棒だ？』

『だッて』と、一生懸命な口答へをするやうに口をとんがらかして、『箪笥をこはされるだけでも詰りませんから、ね、この家だッて、もう、抵當に這入つてゐますよ。』

『知れたことだ、今度の樺太の事業の爲めにやア、家どころか、家族やおれ自身をも犧牲にするかも知れないんだ。』

『あの女におだてられてでせう――』

『手めえにおれの心が分るものか？』

『分つてますとも！』

『ぐづ／＼云はないで、出せ！』

『樺太の事業だつて、成功するか、しないか、分るものぢやアない――きのふだッて、二百圓よこせの電報が來たのを届けたのに、どうするんだらう……』

『どうするも、かうするも、おれの考へだ。』

『あなたはおれ／＼とお云ひなさいますが、ね、若し失敗したら、うちのものをみんなどうする氣です――かつゑさせても構はないのでせう』などと云ひながら、千代子は引き出しをあけて、札を三枚出した。『ほんとに馬鹿々々しい！』

『出せ』と、引ッたくつて、『うちなんざアどうでもいいんだ！』

『そんなにあの女が――』

『いつも云ふ通り、ね』と、あごを突き出して、『おれは女の爲めに狂つてるんぢやアない！』

『狂つてるぢやアありませんか？　ちッともうちにゐつかないで――』

『おりやア手前をいやなんだ！』

『いやでもなんでも、家内は家内ぢやアありませんか？』

『だから、早く自決しろと云ふんだ！』

三人の子供はおづ／＼しながら、一緒に室をのぞいてゐるので、女房のくど／＼云ふのを相手にしないで、義雄は飛び出すやうに家を出てしまつた。

その頃、義雄は、芝公園に接する或片側道の粗末な二軒長屋の一方の二階へ、お鳥を移してゐた。

一度も二度も居場所を隱して歩いたが、魔のさすやうに發見せられるので、たうとう大膽になつてしまつた。樺太から事業上の電報などがいつやつて來るかも知れず、また、新聞雜誌の寄稿依賴者があつた場合――これが本來の職業であるから――ゐどころが分らないのも困ると思つて、自分の家に近いここに決めたのである。

お鳥は最初これを非常に反對した、

『また、やつて來て人に恥ぢをかかすのぢや。』

『もう、決してをどり込まないと誓はせてあるのだから。』

『分るもんか、あの氣違ひが！』

『來たら、蹴倒すだけのこと、さ。』

時々、皿におかずやら、一人前のおはちに五もく飯やらを、子供が好意らしく屆けて來ることがあるが、お鳥は口に入れたことがない。

『毒が這入つてるかも知れへん。』

『まさか――』

『まさかと云うたツて』と、かの女は口びるを左右に引き張り、歯の間に少しつばををどらせ、『それだけまだ向うを信じてるんぢや。』

『信じるも、信じないもないぢやアないか』と、微笑しながら、『死ねばもろともだア。』

『あたい、まだ』と、眞面目くさつて、皮がたるんでくしや〳〵した顔の中から男を見詰めて、『あんな婆々アに殺されたうはない。』

『おれも死にたかアない。』かう、からかひ半分にあしらひながら、義雄は、家から屆けて來たものがあると、いつもみんな自分獨りで平らげた。かの女には、それがおのれを馬鹿にしてゐるとしきや思はれないやうであつた。

かの女は一日物を云はないことがある。義雄はまたそれをいいしほにして、急ぎの原稿を書きつづけた。

障子をあけると、向うは、もう、公園の一部で、烏が澤山集まるので烏山と名の付いた森が見える。この森と家の建つてる側との間の道幅は廣いが、少し傾斜があつて、上では直角に曲つて、水道溜め場のある方に導く。その角を曲つて來る人の姿が見えると、『旦那さまや奥さまや、お助けでございます』をやり出す乞食が、こもを敷いて毎日のやうに、丁度、この二階の正面に出てゐる。

『また云うてる』と云つて、お鳥はよく障子のあはひからのぞいた。親子はいかにも哀れみをこふやうな樣子で往來の男女を拜んでゐるが、人通りがちよツとでも絶えると、子は、

『何かたべたい、なア』と云つて、足を投げ出し、横になつて天をながめたりする。

『それ、それ』と親に注意されると、急に拜みの卑劣な姿勢に返つて、向うから見え出したものを見ない振りで見ながら、再び物乞ひの聲を張りあげる。

『あの子面白い子だ――あたいも何かたべたい、なア――』

『おやア、またあすこのあんころかい?』

かう云はれてかの女が機嫌を直すこともあつた。義雄はそれにお付き合ひしながらも、執筆を絶つたことはない。その乞食親子とこの書齋代用の二階とを舞臺にして、自分の事ではないが、自分が先驅者の一人であつたと思ふ詩界に於いて、落伍者となつた架空の一詩人を點出し、その無自覺な努力をしてゐるところを以つて、或る方面に對する諷刺をした小説が出來たのも、この叫びである。去年、苦心して書いた長編『耽溺』が今年の二月に或雜誌で發表せられてから、渠は小説を書かうと云ふ確信が强くなつてゐたのだ。でも、いろんな雜誌や新聞から依賴して來るのは、多くは評論の方で、それに次いでは、まだ、渠としては、もう、興が去つてしまつた詩である。かう云ふ依賴を渠はすべてこの二階で受けた。

『お助けでございます』が始まると、お鳥はきツと障子のそばへ行つた。そして御成門の電車停留所の方から傾斜をのぼつて來る男があると、どの男を見ても、先づ義雄の客ではないかと思つた。

『違てた』と、失望した樣子で、『うちへ來るんかおもたら。』

『東京にやア、人は多くゐるから、ね。』

『でも、きのふ、あの加集に似た人が通つた。』

『お前あいつを好きだ、ね――?』

『誰れがそんなこと云うた!』かの女は足ぶみして怒つた。机に向つてる男を見おろして、『あんな輕薄な奴、あたい嫌ひぢや!』

『おれも嫌ひだが、ね、小學時代の友人でもあるし、いろんな口聽きとして役に立つやうだから——』
『そりや自分の勝手やないか——あたい知らん！』
　そしてまた上から下りて來る女があると、かの女は先づ義雄の女房ではないかと——あれは綿服主義だとか云つていつもきたないなりをしてゐるが、立派さうな風の、若いのを見ると、また、女優ではないかと思つた。
　この上を拔けたところに、帝國女優學校の假教場があつて、そこへお鳥も這入らうとして義雄にかけ合つて貰つてるし、またその用意に三味線と踊りとを稽古してゐるのであつた。
　義雄とお鳥との間に出來た最初の約束はそんなことではなかつた。
　かの女が一たびその故郷なる紀州に歸るまで在學して卒業した或裁縫學校へ再び入學し、一二年間その高等科を修めさせることであつたが、裁縫などよりも琴の師匠にでもなる道を開いてやらうとしてゐるうちに、義雄自身の直つてしまつた或病氣を急激に受け繼いだが爲め、殆ど半年ばかりは病院通ひで經過してしまつた。
『もう、さう苦にならんさかい、最早何かの稽古にやつてお吳れ』と、かの女が云ひ出した頃には、かの女に對する渠の一度冷めかけた愛情が再び回復してゐた。そして渠は、多少の慾目が手傳つてゐるとは身づから思ひながらも、既に二人まで失敗した女優養成を今一度かの女にやつて見ようと考へ付いた。それに、やがては自分も事業上一時は樺太へ出向かなければならないので、かの女をどこかへ——金錢上の責任は持つとして——託して置くやうにする必要もあつた。
『どうだ、女優になつて見ちやア？』
『そんなもの、いやぢや！』
『何も顏を赤くしないだツていいぢやアないか？——三枚目ぐらゐのところぢやア、牛耳が取れるかも知れないぜ。』
『三枚目たら——？』
『……』義雄はその日それに對する返事をしなかつたが、かの女がさう云ふことに對して有する恐れだけは、每日のやうに努めて取り去つてしまふやうにした。そして、顏のことは云はないで、歲がもう三四年若かつたら三枚目にも、第一流の花形にも行けたにきまつてるが、それにしても脊が高いのは女優として一つのいい武器だとも話した。
　六疊敷きの、外に向つたところに小さい一閑張りを置いて、その上で義雄が筆を走らせてゐるそばへ來て、かの女は片ひぢを突いて橫になり、黃の勝つた中形矢絣りの廣島銘仙の綿入れの、太く時色の衽の出たところを、足袋の親指でさはりながら、云ひにくさうに、
「あたいでも成れるだろか」と聽いたこともあつた。
『お前の決心一つ、さ。』
「決心したッて、成れないこともある。」
　かの女は、それでも、頻りに獨りで鏡に向ひ、自分の顏をいろんな風に映して見る日がつづいた。
『大分乘り氣になつて來た、な』とは考へながら、義雄は後ろ向きにそ知らぬ風をして、友人なる有名な背景畫家の大野がいつか云つたことを思ひ出した。
『あいつア馬鹿だぜ——少し足りないぜ。』
『そりやア、君のやうに藝者や苦勞人ばかり見て來た目にやア、ね——ありやアまだほんの、田舍ものだ。土のにほひが拔けてないのだ。』
　この問答があつたのは、大野が義雄とお鳥とを招待した或るうなぎ屋の二階で、お鳥が便所

に立つた留守の時だ。かの女が澄ましてもとの座に返つたところで、大野は醉眼でかの女を小娘か何かのやうにのぞき込みながら、

『可愛い、ねえ。』

『ふん』と、かの女は自分の顏をしやくつて、眼を横に反らせた。これはかの女が誰れに對しても冷かされる時などにする表情だ、が、自分は餘ほど得意でゐるのだな、と義雄はいつも推察が出來た。けれども、こんな時ほど女の顏の缺點をさらけ出す時はないと渠には見えてゐるので——兎角、太い横じわが三筋寄り勝ちの額の下に、青みがかつた眼の玉が動き、あまり高くない鼻が擴がつて、その下で大きな口が、一文字に引ける。意地の惡い表情の變化が豐富に出來ると思はれるのは、ただこの口がある爲めにだけだ。

『それにしても、もツと都會馴れなけりやア、ねえ——』

『田舍ものなら、田舍ものになれる——では、女優にしておくれ』と、かの女が云つたのは、それからまた二三日あとのことだ。

女優學校へ傍聽生とでも云つたやうな入學の交渉は、校長が旅興行にまはつてゐるので、返事はそれで歸るまで得られないのであつた。

その校長がわが國では有名な女優であつて、年中どんな忙しい生活をしてゐるのかも知らないお鳥は、不在で分らないと云ふ返事を聞いただけで、それが體のいい斷りではないかとあやぶんだ。

『そんなに心配するなよ、どうせ何事も手筈が延び／＼して來たのぢやアないか？』

『だから、早う何かさせて呉れたらえいぢやないか？』ぢツと、また、睨むやうにして、『樺太のことと云うたら、——何でも自分のことは——火の付くやうに騷いでる癖に、あたいの事となつたら、いつでも平氣でぐづ／＼させて置く！』

『ぢやア、下のお婆アさんに先づ三味線でも習つてゐるがいい、さ。』

『そんなら、早う賴んでくれたらえいぢやないか？』

『さう意地惡く云ふなよ。』義雄は、かの女が餘ほど情の籠つた時の外はおだやかに出ず、どことなく皮肉なやうな、いぢけたやうな物の云ひ振りをするのを、社會一般から見て不自然な狀態に置かれてゐるのを忘れない爲めだと受け取つてゐる。渠は、どうせ、今の妻は離別する時があると思つてゐるので、お鳥に對しても、時には『やがておれは女房が無くなるのだが』とも語つた。さうかと云つて、いづれ來るべき本妻離別の時となつて、お鳥のやうな女を正式の妻に直さうとは夢にも考へてゐない。

『本妻にして呉れ、して呉れ』が、子供が母に何かをねだるのを見てゐるのと同じやうに、渠にはうるさかつた。

それには、毎日かの女のあたまを何か一つのきまつたことに占領させて置く必要から、さきには、義雄が何年か以前に使つたヴイオリンを持つて來た。すると、かの女は獨りでどうやらかうやら調子に辿り付いて、田舍で歌を聞きおぼえたストライキ節などを云はせるやうになつた。で、三味線もいけないことはなからうと云ふことが分つてゐた。

義雄は自分の家から、繼母が殘して逃げて行つた古い三味線を、千代子の反對を受けたにも拘らず、ひツたくつて來たのである。それが毎日一度は、渠の坐つてる下から、ぺこん、ぺこんと聞えた。同時に、またかの女は近所のちよツとした踊りの師匠へ通つたので、二階の片隅では、しよツちう、五十錢であつらへて貰つたとか云ふ花やかなあふぎが擴げられたり、閉ぢられたりした。

『清水さん、お稽古をしませう。』から本統のお師匠さんらしく呼びかけられて、お鳥が三味線を持つて下りて行つた時、義雄は客の加集泰助に對して二百金の周旋を頼んでゐた。

渠はこの客に對して信用を置かなくなつた。と云ふのは、不斷から輕薄な性質であるばかりか、その本職のやうにやつてる周旋が一向依頼通りに運んだことがない。家を抵當にするからと云つて、去年から頼んであつた事業費引出しの件も、たうとう意外の方面から突然に出來た。去年の歳末に迫つて子供が三人揃つて入院し、一人は死んだ騷ぎの時も、加集はたうとう工面し切れなかつたので、義雄は自分の足かけ七年間勤めた商業學校の英語教師を、どうせ辭職するのであつた豫定よりも、三ケ月早く辭職し、その退職金を十二月三十一日と云ふ日に受け取つたので、僅かに年を越えることが出來た。

けれども、今回は、もう、二進も三進も行かなくなつたので、またこの加集を呼び寄せたのである。柄でもないと云はれる事業に於ける兵站部を勤める爲めに、技師や弟以下に後れてまだ居殘つてる義雄ではあるが、から早く金の追求が來るとは豫期しなかつた。もつとも、その用意としては、地方の或都會の水道建設費二百萬圓を外資に仰がせることにして、渠の先輩で今コンミションマチャントをしてゐる人に話し込み、市の責任者の依頼狀を待つことにまで運ばせたが、これは勸業銀行が出すから外資を仰ぐなと云ふことになつて、渠の奔走は無駄になつてしまつた。

また、渠の玉突仲間なる或罐詰問屋の主人へかけ込んでも見たが、少くとも第一回の製品を見ないうちは、商賣の法則として、金の融通が出來ないと云はれた。

家を二重抵當にするか、餘ほど好意ある人から信用貸しを仰ぐか、この二つの道しきやなかつたのを、この客は今度は、どこをどう甘く立ちまはつたのか、信用で借りられさうだと云ふ話を持つて來た。

『ぢやア、頼む。』

『然し金のことだから、君も十分に責任を負うて呉れんと――』

『そりや、無論、約束する期限までにやア――』

『おい』と、今まで何となく下へ氣を取られてゐた加集が、俄かに『下手くそぢやや、なア。』

『ふ、ふん。』義雄も客について又苦笑ひをした。

お鳥は『今も昔は』を習つてるが、三味線がびつこのやうに歩いてるらしい。

『まだ聲を出せないのか？』

『出せば出せるだらうが、下の婆アさんを半分馬鹿にしてゐるから、いけないの、さ。』

『無論、あの婆アさんかて』と、時々、加集に關西辯が出るのはお鳥と同じやうで、『上手だと云へん。それに、五十づらをさげて、薄化粧をして、若い亭主に燒き餅を燒く奴だから、なア。』

『清水に聞いたのだらう――けれども、ね、如何に緣日商人だからッて』と、義雄は額の廣い、頰のこけた顏に、鋭い眼を眼鏡の裏から光らせながら、『さう馬鹿にするものぢやアない、さ――お互ひに好き合つてゐるのだから。』

『よく夫婦喧嘩をすると云ふぢやないか？』

『そりやア、また、出來心からだらう、さ。』

『君等と反對だぜ、女が五十で、男が三十四では。』

『僕はさう年を取つてやしないぢやアないか？』

『いや、さ、年の割り合ひがよ――あいつは二十二ぢやさうぢやないか？』

『欲しけりやアやるよ、僕が樺太へ行つちまや

ア。』實際、義雄はその金を空鑵料に換へ、それを持つてあつちへ行かなければならないのだ。そしてその後のお鳥は、都合によれば、どうなつてもいいと思はないこともない、から金の融通に困つてる時は、殊に。

『君の病氣の身がはりなんて』と、加集は反抗の樣子を見せようとしたが、顏に多少の釣り込まれた色が見えたのを、義雄は私かに、『馬鹿な野郎だ』と認めた。

『聲をお出しなさいよ、聲を！』下の婆アさんの年に似合はない涼しい聲がした。

『出さないぢやア、いつまでも出ませんよ。』

『ナダイムスメノー』低く、然し氣取つてるやうな――

『やつてる、やつてる！』加集は背廣の洋服に圓まつて、その場にわざとらしくひツ繰り返つた。

義雄が音樂倶樂部の入場費を自家から强奪したのはその日で、――渠が不愉快な心持ちで戾つて來た時、お鳥が同倶樂部へ伴はれて行く用意を濟まして、義雄の机に橫ずわりにもたれ、むろ咲きのにほひ菫を頻りに鼻に當ててゐた。渠の友人なるアメリカ歸りの或客がかの女へ贈り物に持つて來た小鉢で、『あの人はなかなかハイカラだ』と云つて、かの女はその客が歸つたあとまでも喜んだものだ。そして義雄の想像では、かの女がこれまでに餘ほど得意に感じたことはたツた三つだ――第一は、かの女の寢物語りから知つたことだが、さきの所天なる小學教員に、紀州でまだほんの同僚であつた時、自分の寫眞を要求せられたことだ。第二は去年の夏、義雄に伴はれて甲州へ行つて、初めて溫泉のお客さまとなつたことだ。そして第三が、乃ち、この贈り物を受けたことだ。

『あたい、あの人好ツきや』と、かの女はじらし半分に云つた。

『でも、ね、お前のお望み通りの獨身者ぢやアないよ。』

『獨身者でなかつたかて』と、負け惜しみに、『自分のやうなおぢいさんではない。』

今も亦じらしてゐるのだと思はれるので、義雄はそんな興には乘りたくなかつた。坐らないで、そしてかの女の正面には向つてるが、暫く物を云はなかつた。そして長く反り返つたうは髭をいぢくりながら、曾てかの女が怒つて、その髭をひツ張つた時の痛さを思ひ出してゐた――まだ痛みが殘つてるやうだ。

かの女はこれでもか、これでもかと云はないばかりに、紫の花の上に自分の鼻を突ツ込み、ふん〳〵、ふん〳〵嗅いで見せてゐた。が、根負けをしてか、目だけで見あげて微笑した。

『さア、行かう。』

『でけた』と、疑問的にくびを優しく動かしてから、いきなり訴へるやうに、『あの加集の奴、好かん！』

『…………』

『あたいに、こなひだから、いやらしいことばツかり云うて！』

『いいぢやアないか』と、とぼけた振りで、『向うがお前を好いて吳れりやア？』

『では』と、花の鉢を兩手で持つて、すわり直した膝の上に置き、男の顏をうは向きに正視して、『あたいを取られてもえいか？』

『うん。』ふと、さうして吳れりやア、こんな面倒はなくなると云ふ氣が出て、『それもお前の決心一つだ。』

五

『念の爲めに聞いて置きますが、な。』音樂倶樂部の幹事の一人杉本博士の聲だ。

『この會では、正當な婦人でなければ出入りさせないことになつてゐますが、君はあの婦人に

關係はないでせう、な？」
「關係！』義雄は、同倶樂部の演劇研究部へ鶴子と云ふ女をモデルに入れる爲め紹介しにつれて行つた時のことを思ひ出してゐた。無論關係はなかつたが、その時考への中にあつた痛いところを突かれたので、それを隱す爲めにわざとらしく胸をそらせた。

こんな思ひ出に冷汗をかく氣がして、義雄は今夜の演奏會を小さくなつて見渡すと、あの夜、あの女や渠と共に、三味線につれて新工風の國風舞踏の一なる、『木曾の御嶽さん』を稽古し、トコセ、キナヨ、ドン／＼と云ふかけ聲などを擧げたりした連中は、すべてあちらこちらの椅子に陣取つてゐる。渠の早く目に付いたのは、博士――某銀行の頭取――某富豪の息子で、義太夫に上手なもの――常任幹事の細君――踊りのモデルなる濱野孃――。

義雄は、演奏藝術に對する純粹な感興によりも、寧ろ周圍の人々との關係に醉つてしまひながら、有樂座の下の眞ン中ごろで、通り道に接する椅子を、自分と並んで占領してゐる女が、さきに演劇のモデル志願を他の或理由でたツた一日で斷念したあの女のやうな美人でないのを、田舍ものじみてゐるのを、誰れにも見られたくなかつた。が、いづれも美しい女連が先づ見のがさなかつた。

「田村さん、田村さん！』常任幹事の細君が廊下で義雄を捕へて、「あなた、今晩は、奥さんと御一緒？』

『え――』

『譃でせう』と、濱野孃は、細君と目くばせしながら、踊りの時のやうにからだをしなやかに動かせた。「それで、この頃は不勉强、ね――トコセキナヨも、富本も。」

『……』どうしておれの女房でないのを知つてるだらうと思つた時、ふと千代子が曾て、同倶樂部の素人試演會があつた時、――その時、けふも來てゐる理學士が研究の爲めに習つてる踊りのうちに『保名の狂亂』を踊つたが、――義雄の紹介も待たないで、いつもの出しや張り根性で、勝手に杉本博士に面會し、うちのがいつも御厄介になりましてなどと入らざらん挨拶をしたのに思ひ及んだ。あの時見てゐたに相違ないと氣が付いたが、ただ二人の美しい衣物の着こなしや、からだのしなやかさにいい感じを與へられながら、何げなく、「どうせ僕にやアどツちも駄目ですから、ね。」

「駄目ツて』と、細君があまえるやうに品をして、「稽古おしなさいよ――あたし大分富本が進みました、わ。」

「あすからでも、つづけて入らツしやいよ。』

『もう、僕にやア興味がなくなつたのでせう。』かう云つて、渠は樺太に於ける事業に對する誇りを私かに胸に踊らせた。

『どうです、田村君、あの歌澤は？』番組の第四が終つてから、博士は義雄に立ち話をした。「富士の白雪などは最も面白いぢやアありませんか？』

「ちよツとひねくれて、含蓄があるやうなところが、ね、お宅で初めて聽いた時から面白い物だと思ひました。」

『さうでした、な、君は歌澤再興者の一人です。』博士のかうした自信を交へた誇張的な挨拶も、この流派の再びあたまをあげて來た當時であつたから、義雄には不愉快ではなかつた。

番組第五の長唄『綱館』が六左衞門等の絃で進行中、伊十郎が例の通り自慢らしく大きな音を立てて鼻をかんだのが、つい癖になつた爲め、氣を變へようとして席を立つた。すると、義雄は出口に近い一番後ろの、誰れもゐない一列の椅子の一つに腰かけて、黑い羽二重の羽織りを着た千代子が、痩せこけた顏から兩の眼を飛び

出させるやうにぎろ〳〵させて、こちらを見てゐるのに出くはした。

『こいつだ、な、お鳥を何かの手段で呪つてると云ふのは！』直ぐにもなぐり付けたかつた。が、あたりにこの會の內輪に屬する連中がゐるので、からだ中にみなぎる怒りの顫へを微笑にまぎらせ、そツとその前の椅子に行きながら、成るべく小さな聲で、『お前も來たのか？』

『お目出たうございます！』

『……』渠は吹き出したかつたが、かの女の多少は遠慮してゐるらしい聲が、持ち前の癇性を運んで、ぴんと甲かな聽衆の耳に響いたと思はれたので、この演奏會のレコード破りをやつたやうな申しわけ無さを感じた。

『あなたばかりがいいことをして』と、こちらばかりに恨めしさうな目を注いで、『うちのものはどうするんです？』

濱野孃や常任幹事の細君がじろ〳〵こちらを見てゐた。義雄は腰をかけたでもなくかけないでもなく、かの女に向つて椅子の背にもたれてゐるのに氣が付いた。

なほいつものやうな事を千代子が云つてるので、義雄は默つて廊下へ出てしまつた。が、かの女はついても來なかつた。

ふら〳〵歩きながら、暫く氣を落ちつけて見ようとしたが、どうしても義雄の怒りと不面目な氣とが直らなかつた。

『千代子が來てゐるから、きツと面倒が起る。直ぐ歸れ』と、名刺の裏へ鉛筆で書き付け、案內の女に託したら、

『隣りのお方が取つてしまひました』と云つて、歸つて來た。

渠が扉に付いてるガラス窓の羅紗をあげて、のぞいて見ると、渠の席へちやんと黑い羽二重の紋付きがかけて、メリンス無地の牡丹色の被布と並んでゐる。そこばかりが見すぼらしいやうに思はれて、お鳥をつれて來るのではなかつたと後悔された。せめて被布が道行きで、道行きがメリンスなどでなく、且、都會じみた柄であつたらいいのに——かの女がいい氣になつて着てゐるのを幸ひに、何も新調してやらないのも、あんな下らない病氣の爲めに、かの女の病院通ひの入費がかさんだ爲めだ。

『馬鹿々々しい！』渠は自分で自分を非難しながら、別な扉から這入り、夫婦で來てゐる大野のそばに行き、渠に廊下へ出て貰ふやうに賴んだ。

『僕もさツきから』と、大野は酒くさい息を吹きながら、『何か事件が起るぞと云つてたのだ。困つた、ねえ。』

『兎に角、君が行つて何とかこの場だけは無事に濟ませて呉れ給へ。』

『何でも君の細君を一先づ外へ出して、なだめるんだ、ねえ。』

『ぢやア、賴む！』

義雄はまた扉の窓からのぞくと、新式な洋服を着た紳士然たる友人が聲をひそめるやうに千代子の顏に近づいてゐると、かの女は何か云つて、つんけん〳〵と顎をあげてゐるのが見える。氣遣ひ聲がここまで聽えるやうだ。

やがて大野は出て來たが、

『駄目、駄目！』首をふりながら、『相變らず分らない、ねえ。おれの云ふことなんか、田村の友人だから、信じないツて。』

『困る、なア。』

『今夜こそ逃がさないで、方をつけると云つて、——ちやんと片手で』と、大野は口を結び、目を据ゑ、ちから強く握つた右の手を出して見せ、『向うの袂をやつてゐるよ。』

『仕やうのない奴ぢやアないか？』

『それもいいとして、さ、一方も亦大膽ぢやアないか？　見ツともなく袂を握られながら、ど

うせ來たのだから、わたしもおしまひまでゐませうツて。』
『おい、君！』義雄は堪らなくなつて、『今一度二人を呼び出して吳れ給へ――どんなことが起るか知れないから。』
『いやな役割だが、ねえ』と云ひながら、大野はまた這入つて行つたが、ぷり／＼怒つて出て來た。『もうはふッとけ、はふッとけ――バーに行から。』

六

　東洋軒の二階でビールを飲みながら、大野は義雄を冷かしたり、慰めたりしたが、義雄の耳にはそれが碌に這入らない程であつた。
　そのうち、長唄が濟んだかして、がや／＼と食堂へ這入つて來たものがある。その間に常任幹事もまじつて來て、心配さうに二人に聽いた。
『どうしたのです？』
『實は、ねえ、』と、大野が受けて、手短かにこのことのわけを話したので、義雄はそれにつづいて、
『どうもあなたに濟まないやうなことがあつてはと思つて――どうだ、大野君、幹事の權利であの二人を追ひ出して貰はうか？』
『それにも及ばない、さ、おしまひまで聽きたいと云つてるし、僕からもこの場では必らず間違ひをすなと云つてあるから。』
『云つたッて、氣違ひが分りやアしない。』
『心配するにやア及ぶまい、あの樣子ぢやア、一方が惡く云やア、剛々しいから、無事に受けてるよ。』
　最後は呂昇の柳だが、義雄は勿論、大野もそれを聽く氣にならなかつた。が、ビールに飽いた頃、もう終りが近からうと見に行つて見ると、「必らず草木成佛」のところで、語り手の一特色なるほがらかなラ行音が直ぐ義雄の耳に這入つた。
　渠は大野夫婦の席の後ろの方から、お鳥と千代子との樣子を私かに注意してゐたが、はねをばかりが急がれる神經のいら／＼する奧には、どうでもなれ、あの二人がどんな芝居をするか見てやらうと云ふやうな落ち付きもあつた。
『自分だけが早く出てしまへばわけアないぢやアありませんか』と、どこからとなく無言の聲が注意して吳れた。それが正面の二重舞臺の、敷きつめた赤い毛布の色が、背後の金屛風に反射してゐる、その中央に据わつた赤い房が二つ下つた見臺のあたりからであつたやうにも聽えた。
『どうせ燒けッ腹だ』と、渠も亦無言で答へた。そして花でも降つて來さうな音樂に滿ちた空氣を、最後に於いて、出來るだけ澤山吸ひ込んで置かうと努めた。
　大野の細君の靜子がちよッと振り返つてこちらを見た。その所天と同じやうに役者じみた所があつて、ちよッと微笑して見せるのにも、その圓く肉づいた頬ッぺたにまで表情が溢れてゐる。この女だ、姉よりも妹の方が眞面目だと義雄が批評したのを人づてに聽いて、わざ／＼「不眞面目生」と稱して愛嬌ある手紙を渠によこしたのは。それから親しく行き來するやうになつたが、渠は、かの女の妹の眞面目腐つて田舍じみた傾向あるに反し、靜子は藝人じみても可なり垢ぬけした精神があるのを好みして、かの女を自分等の集まる或詩人會へつれて行つたこともある。
　あれはかの女が大野と結婚する一二年前のことであつた。世間では、大野より以前に義雄はかの女と關係があつたと云つてる。それでさへ詰らないと思つてるのに、この男女がいよいよ結婚するとなつて、大野が先妻を虐待すると

云ふごた〳〵の時、義雄が大野の先妻に同情したところから、またそれにもきたない關係があつたと大野がはの女人等に云はれた。靜子からは、また、かの女と大野との間を圓滿に成立させる責任があるやうに頻りに云つてよこして、義雄に訴へるやうな又渠の態度に抗議するやうな言葉があつた。

實際、大野と靜子との手を握らせたのは——洋畫家たる大野の或特別な畫にかの女自身をして適當なモデルを供せしめる爲め——義雄の所爲である。

『僕は、然し、結婚しろと云つて紹介したのではなかつた。』から、義雄は靜子に語つたことがある。それは、然し、甚だ未練らしい言葉だと、渠自身も思つた。その時であつた——渠は、かの女と大野とが關係の途中で中たがひをしたのを仲裁する爲め、大野を日比谷公園の松本樓に待たせて置いて、靜子をそこへつれて行つたのは。

大野は既に大分醉つてゐた。その上また義雄とビールやヰスキを重ねてから、そこを出ると、電燈のちらつく樹かげで大野はふら〳〵と倒れかけた。靜子は、

『あぶない』と叫んで、抱きとめようとしたのを、

『大丈夫です』と、身づから踏みとまつて、大野は太い樹の幹に片手を支へた。義雄はこれを見て、

『相變らず芝居をやる男だ』と思つた。

靜子をまかされた義雄は、かの女と共に急いで赤電車に乘つたが、車中から窓の外へ今喰つた物を吐いた。渠の背中をかの女はさすつてゐた。そしてかの女は電車から下りると、藥屋を叩き起して寶丹を買つた。

靜子姉妹は新派に屬する日本畫家で、女二人の腕でその母と靜子の先夫の子とを養つてゐた。

義雄は寶丹を飮ませられ、暫時その家に寢かせられた。やがて車が來て、それに乘つた時、またへどを吐いた。

こんな記憶の間から『母の柳』が引かれて行く後ろ姿を義雄はまざ〳〵と見た。すると、『田村さアん、田村さアん』と云ふ女の聲が青山あたりの電車の窓から聽える。

さうだ、あれは、義雄の友人なる某漢詩人が有名な事件で殺されたその葬式の掛り員として、義雄等が人力車を列ねて青山に向ふ途中のことであつた。靜子が妹と一緒に九段行きに乘つてゐて叫んだのださうだが、義雄は後にかの女から、

『すまアし込んでゐて、一向氣が付かないんだもの』と、聽かせられた。かの女がまだ大野との間に親しみも何もなかつた時のことだとは云へ、その場の情熱に燃えると、前後もかまはず、

『何て向う見ずの女だツたらう』と渠は思ひ出して、獨り微笑をもらした。

そして段々と自分の神經が舞臺の氣分に一致して來たと思ふ時、惜しいやうに幕が下つた。

どや〳〵と聽衆が出て行くあとから、廊下の外の石段の上で、義雄と靜子とお鳥と千代子とが落ち合つた。

千代子はお鳥の袂を片手でしツかり握つてゐる。

『見ツともないから、よせ?』と、義雄はあたりへ聽えないやうに云つた。

『よう御座います』と、これはまた皆にも聽えるやうに、『わたしの勝手です!』

お鳥は何も云はないで、微笑にまぎらせてゐようとしてゐる。

『うちのはどうしたんでせう、ねえ』と、靜子は首を延ばして方々を見まはした。

『僕が見て來ます。』義雄は殆どがらんどうになつた聽衆席をのぞいて見たり、廊下をあちらこちら行つたりした後、便所のそとのところで大野が巡査と何か云ひ合つてゐるのに出くはした。

『そんな誤解をされちやア、僕は實に迷惑します。』

『誤解ぢやアない、實際ではありませんか?』

『馬鹿なことを!』

『馬鹿とは何だ?』

『どうしたんだ、君?』義雄はそこへ口を出した。

『なアに、ね』と、大野はふり向いて、怒りの爲めに聲まで顫はせて、『僕が君の細君に接吻をしてゐたと云ふんだ。』

『そりやア間違ひです――實は、ちよツとした事件の爲めに――』

『まア、君、云はないでも濟むことは云はないでもいいんだ――野暮くさい誤解を解きやア。』

『何が野暮くさい?』巡査が赤い顔をしてゐるのは、息の臭ひで、義雄には、酒を飲んでゐると思はれた。

『まア、君』と、巡査をなだめるやうに、『僕が僕の妻に用があつて言づてを頼んだので――そんな野暮は云ひ給ふな――君は酒を飲んでるぢやアないか?』

『おれは決して醉つてをらん!』

『醉つてないかも知れないが、飲んでるのは事實でせう、顏に現はれてるから。』

『おれだツて、茶の代りに酒ぐらゐは飲む。』

『飲むのは御勝手ですが、それが爲めに云ひがかりを云はれちやア――』

『何が云ひがかりだ?』

『實際、僕がこの友人に對してすまないことになるのですから。』

『風俗壞亂だ――兎に角、警察署まで行つて貰はう。』

『何が風俗壞亂だ――馬鹿々々しい!』大野はから云つて、巡査をにらみ付けた。

靜子がいつのまにか後ろへ來てゐたが、

『あなたの爲めに』と、泣き出しさうな顏をして義雄に向ひ、『こんな詰らない目に會ふのだ、わ。――さア、行きませう』と、大野の上衣の末を引ツ張つた。

『また風俗壞亂だぞ』と、大野は押さへた聲で叫んだ。

『馬鹿なことを云ふにも程があるぢやアないか』と、義雄は巡査にも聽えるやうに靜子に云つて、皆と共に建物の外へ出た。

晴れた夜で、夜ふけの寒い風が星々の光をちらつかせてゐた。

『事件は何でもないのですから』と云ひながら、倶樂部の常任幹事もついて來て、當の巡査をなだめてゐたやうであつたが、義雄は巡査がなほうるさく從つて來るのを見て、

『もう、あなたがついて來るにやア及びますまい。』

『何だ、警察まで來なけりやならん。』

『馬鹿を云ふな!』大野もまたむきになつた。

『貴さまは醉つてるんだぞ!』

『貴さまとは警官に向つて無禮だぞ!』巡査も少し身がまへをして、『おれをそんなに馬鹿にする氣なら、鐵拳を喰はせて見せる!』

『う、う、う、なぐるなら、なぐつて見ろ!醉ツ拂ひの警官に、人民をなぐる權利があるなら、なぐつて見ろ!』

『手出しをすりやア、おれも承知しないぞ!』義雄も大野の勢ひにつり込まれて、腕がむづむづしてゐた。

『まア、さう手荒いことは云はないでも』と、幹事が云つてるところへ、別な巡査がやつて來て、この二人で兩方を引き分けた。

巡査が去つてから、幹事は云つた。

『有樂座で歡待しないからと云つて、あの巡査がその鬱忿をこちらへ漏らすのだから、たまりません。』

『不都合極まる』と、まだ大野は納まらなかつた。

『いろんなことが起つて、すみませんでした』と、義雄は幹事に詫びたが、あらゆる面目を失つてしまつた氣がした。

見まはしたが、三名の女はいづれもそこにゐなかつた。

數寄屋橋から日比谷公園に至る道で、女どもの後ろに追ツ付いたが、靜子が昂奮した口調で早口にお鳥に物を云つてるのが聽えた。

『だから、ね、早く田村さんと別れるやうにおしなさい――どうせ、いつか、棄てられるにきまつてますから。』

『……』

『ね』と、のぞき込むやうにして、『分りましたか？』

『……』お鳥が高いあたまを少し頷かせるのが見えた。

『あなたも』と、靜子はちよこ／＼千代子のかはにまはり、『あまりひどいでせう？』

『何がひどいのです！』千代子はその方へ向いて、顎に力を入れながら、『わたしが賴みもしないことを持つて來て、大野さんがぐづ／＼云つたのです。』

『馬鹿を云ふな！』義雄も默つてゐられなくなり、つか／＼と出て行つて、妻と、それから今の巡査とに對して押さへてゐた忿怒を一緒にして、この言葉と同時に、かの女の横ツつらを思ひ切りなぐつた。

『そんな野蠻なことを――』靜子はとめようとした。

『おれが貴さまを追ツ拂ふやうに大野君に賴んだのだ！』

『おほきなお世話です――かうしてつかまへてる以上は、うちまで引ツ張つて行つて處分を付けます。警察へでも、どこへでも突き出してやる！』

『あなたも少しお考へなさいよ、田村さんの――』

『考へた上のことですから、ね！』

『わたし、もう、知らん！――田村さんは女をみんなおもちやにしてしまはうとするのです』と、靜子は立ちどまつて泣き出した。すすり上げながら、『そんな人でもなかつたのに！』

義雄は引き入れられるやうな感じがして、かの女の姉妹と直接に行き來してゐた時のことを今一度親しく思ひ浮べさせられた。そばへ行つて、

『兎に角、ねえ、奧さん、これから大野君の家へ行つて、あいつによく以後こんなことをしないやうに話して貰ふつもりですから。』

『兎に角、奧さん』と、大野も千代子をなだめるやうに、『これから僕の家へいらツしやい。』

『わたし、不贊成です！』靜子はからだを振つて、その所天から一歩を退いた。『田村さんのやうな人は、もう、來て貰ひたくありません！』

『貴さまにそんなことを云ふ』と、大野はおもおもしい聲を出して、『權利があるか？』

『わたしだツて、大野さんのところなどへちツとも行きたかアありません！』

『默れ！』義雄は妻の言葉を制してから、友人に向ひ、『君まで夫婦喧嘩をしちやア困るぢやアないか！』

『あいつが獨り勝手な横暴なことを云やアがるから！』

『ぢやア、わたしはあなたの家庭をおいとま致します。』

『勝手にしやアがれ！』

『そんなことを云ふなよ、君。』
「なアに」と、大野はまた巡査に向つた時のやうに怒りの聲を顫はせて、力づよく、『生意氣なことを云ヤアがる！』
お鳥はただ默つて、何かの機を見てゐたのだらう、この時、さきを握られてゐる自分の袂を兩手で摑んで、うん—うん—うんと云ふやうに、左右に三度振つたかと思ふと、それが千代子の手から離れた。
『あんなことをしましたよ』と、千代子は甘えるやうに義雄を見あげたので、渠はいやで／＼ならない妻がまだこッちに賴る氣があるのだと知つて、自分も逃げ出したくなつた。
靜子はその家路とは反對の電車に乘つた——曾て義雄がかの女と一緒にそこから乘るが早いか、窓からへどを吐いた方角へだ。
お鳥はその脊高い眞ッ直ぐなからだをそと輪に運んで、靜子とは反對の方へずん／＼行つてしまふ。その歩き方は持ち前だが、これを後ろから見るたびに、かの女のまだ本統に直らない下の病を義雄は思ひ出さずにはゐられないのであつた。
『今夜は、おいやでせうが、ね、どうしても離れませんよ』と云つて、千代子は渠がかの女から綿服主義にさせられてゐるそのごつ／＼した羽織りの袂を握つた。
『今、僕が逃げたら』と、言葉を英語に換へて、『こいつが君の重荷だから、ね——君、先づ電車に乘り給へ。』
『君ア色をとこだよ。まア、やさしくついて行つてやり給へ。——僕はもッと醉ひのさめるまで散歩する。』
『ぢやア』と、邦語に返つた、『失敬するよ。』
『僕のワイフは、實際、飯田町へ歸つたのか、なア？』
『大丈夫、君の方へまはつて行つたの、さ——どいつも、こいつも、おどかしやアがつて！』
『わたしは一生懸命です、おどかすの、おどかさないのなど云ふさわぎぢやアありません！』
『默れ！人をさわがせたぢやアないか？』
『まア、奥さん、お靜かに』と、大野は少しうつ向きになり、兩手をうは向きに、低く擴げて、一歩を退いた。
『また芝居をしてゐる。』義雄はから思ひながら、『ぢやア、失敬するよ。』
『おれは獨りぼッちだ、なア。』
大野は投げ出すやうに云つて、力なささうにつッ立つた。多くの街燈から落ちる光が混亂して、渠の姿を舞臺の脚燈が反對にうへから照らして、明暗の光をそれに集めたやうに見えた。そして電車の響きさへ丁度途切れて、相變らず外套が欲しいやうな寒い風が吹いてゐた。
『失敬』と、今一度義雄は大野の方に向いたまま云はなければならなかつた。
大野は軍人のやうな直立の姿勢に直り、右の手を横額のところまであげ、ゆッくりした、低い、沈んだ調子で、同じく、
『失敬』と云つて、靴の底で少しつま立つと同時に、首を前方へ傾けた。

七

義雄は千代子に引かれて、電車通りを、公園のふちに添つて歩いてゐたが、あの鶴子の爲めに遠のくやうになつた倶樂部の連中に、またこんなことがあつた爲め、又と再び會はせる顏がないかのやうな恥辱に滿ちて、一言も口を聽かなかつた。
かの女も亦胸が張り詰めてゐるのを、その息づかひに現はした。かの女が月が滿ちた時に、よく苦しさうな息づかひをしたが、そのやうに肩で息をしてゐるのが、義雄によく分つた。
公園を外れようとするところにある交番の前

へ來ると、かの女はその方をじろ〳〵見ながら、獨り手に巡査の立つてる方へ義雄を引ッ張つてゐるのであつた。

　義雄は踏みとまつた。それが渠の袂の長さ一杯にかの女をこちらへ引いたわけになつたので、その手ごたへでかの女は氣がついたやうだ。

『わたしはどうかしてゐるやうだ。』から、かの女は獨り言を云つた。

『訴へてどうなるんだ』と、義雄は極さげすんだ意味を心ばかりで叫んだ。この氣違ひ女め！　何を仕出かすかも知れやアしない！　が、撒いてしまふ折もうまく見つからない。人通りは少いが、少くとも、一人や二人は絶えなかつた。

　橋を渡つて芝區へ這入ると、直ぐ友人なる辯護士の家があるので、そこへ立ち寄つて話をつけ、今夜はおだやかに別れようかとも考へた。が、大野に迷惑をかけたのを思ふと、重ねて友人を騷がせるでもなかつた。

　成るべく人通りの少い横町などをえらんで引ッ張られて行つたが、

『きやッ』とか『恨めしや』とか、今にもこの女が變化になつてしまひはしないかと云ふ氣持ちが、渠のかの女を度々いぢめて來た記憶から、おそろしいほどに浮んで來た。不斷憎み飽きて、殴り飽きて、またと見たくはない顏を見て、一度でもいやな氣を重ねるでもないと、渠は出來るだけそッぽうを向いてゐた。

『年うへなばかりに増長して！』これは、もう、思ひ出したくもない。今の結婚法が改正せられ、男女どちらかの申し立てを裁判所で受理して、兎も角も訴訟を成立させることが、當分、望めるやうにならないとすれば、ただ〳〵この、自分には既に死骸の、女を早くどこかの闇へ方づけさせて呉れる願ひばかりだ。

　愛宕下の通りを横切り、櫻川町の大きな溝わきを歩いてる時、物好きにその中の黒い水たまりを人の門燈の光にのぞいて見た。そして、ふと、死んだ實母があか金の足つきだらひに向ひ、おはぐろを付けてゐるのを、自分はそのわきで見てゐたことがあたまに浮んだ。きたないやうだが、身に滲み込むやうなにほひで、黒い物から出るのか、それとも、吐き出されたそれを受けるあか金から出るのか、分らなかつた。

　ここのはただの溝のにほひに違ひないが、おどんですえ腐つた物の發散する分子がぷんと鼻さきへにほつて來ると、何だかかな臭い氣がして、母が新らしく生き返つて來さうに見える。

『All or nothing ——生でなけりやア、死だ！』

　この間に讓步はない！　妥協はない！　人間その物の破壞は本統の改造だ——改造はそして新建設だ。ぶッ倒されるか、ぶッ倒すか——そこに本統の新らしい自己が生れてゐる！　渠はから答へながら、面倒な物を引きずつてゐるにやア及ばない——いッそのこと、握られた袂を、あの、柔術を習つたと云ふお鳥の手を試みて、わけもなくふり切り、千代子を轉がし込む氣になつてゐた。

　溝の黒い水のおもてが暗くなつた。——そのまたうへが闇になつた。——自己の周圍がすべて眞ッ暗になつて——自己も、尖つた嗅覺のさきにをどみの垢がくッ付き、からだ中がひやりとしたと思つた。すると、反對に手ごたへがあつて、

『どうするつもりです、わたしを！』

『……』渠の身の毛は全體によ立つてゐた。

『なアんだ、夫婦喧嘩かい！』から云つて、黒い影が他方の路ばたを通り過ぎた。もう、十二時を越えたと思はれるのに、矢ッ張り、人通りが絶えない。

『……』かの女は、さッさと、反對の側へ引

ッ張つて道を進みながら、『人を水に投げ込まうたッて、そんな手は喰ひませんよ。』

『……』

『それこそ馬鹿げ切つてる！』

『……』渠が逃げようとして、ちよッと踏みとまると、かの女も直ぐ電氣に觸れたやうに手の握りを固めて、こちらをふり向いた。

『殺さうたッて、逃げようたッて、駄目ですよ、直ぐおほ聲をあげて、誰れにでも追ッかけて貰ひますから、ね！』

渠は答へもしないで歩いた。

避けて來た交番だが、西の久保通りの、廣町角にあるのは、どうしてもその前を――而も挨拶して――通らなければならないのであつた。父の生きてた時、家へも來て、いつも顔を見おぼえてる巡査がゐる交番だ。

千代子がここで本統に出來心でも起したら大變なので、その交番の手前で義雄はおのれの袂をふり切つた。

『おまはりさん！』かの女は實際に甲高い聲を出した。

義雄は自分が水をあびせかけられたと思つて、つッ立つた。幸ひに人力車の響きが通つた爲め、向うへは聽えなかつたやうだが、渠は再び袂を握られてゐた。

何げないふりをして通る二人を、顔を知らない巡査がゐて、怪しさうに見詰めてゐた。

若し今の聲が聽えてゐても、こちらが發したのだと思はせない爲めにと、義雄は、ふと、その向う側のそば屋へ這入る氣になつた。千代子もあとからはしご段をあがつて來た。

『こんなところで喰べるくらゐなら、いッそ今一つ向うの、いつもうちで取るとこへ行けばいいのに。』

もう、自分の物だと思つたのか、かの女の聲は以前よりも落ち付いてゐた。が、義雄は一層いや氣がさして、無言でぐん／＼まづい酒をあふつた。

二三杯ででも赤くなると云はれる酒が、例外に飲んだ今夜に限り、大して顔に出たとは思はれなかつた。

家に歸ると、直ぐ、千代子の母――もう、疾に這入つてゐた――を書齋に呼びつけ、

『不都合極まる女だから、千代子をけふ限り引き取つて行くやうにして下さい！』

『義雄さんはいつもさう云ふことをおッしやいますが、ね、子供があるのにそんなことは出來ますまい？』

『子供などアどうでもいいんです――そんな呑氣なことぢやアありません！』

『またどう云ふことがあつたのか、聽かないぢやア分りませんが、ね――』

『みんなあなたのことから起つたのぢやアありませんか？』千代子も傍へ來て、いやな眼をぎろつかせる。

『貴さまなどの出しや張る幕ぢやアない！』今まで默つて押さへてゐた心中のもや／＼が一時に、ここだと云はないばかりに迸つて來た儘に、渠はおのれの妻が裏店のかかアか何かのやうに、燒けぼッ杭じみた行爲に出た不埒を述べた。苟も表面だけはまだ亭主たる者を――そしておだやかに離婚しようと云つても、分らないで、承知しない癖に――その亭主を多くの公衆の前で侮辱したのだ！　分つた母なら、この申しわけに、直ぐ娘をつれて出て行くべきである！　精神的には、もう、どッちからも、夫婦でないと云ふことを證據立つたことになつてゐる。

『さうおッしやると、あなたに濟まないやうですが、ね――この娘がこの頃何だかいら／＼してゐるのは、云つて見れば、まア、病氣なんで

すから、ね。』
『そんな氣違ひ病人は、母として、直ぐ引き取つて行かなけりやアなりますまい！』
『そんなことも出來ません、わ。』
『出來ますとも！　巣鴨へでも、どこへでも、つれてゆきさへすりやアいいのです――あとの始末はゆッくりお母さんとわたしとで出來ることです。』
『困つたことになりました、ねえ』と、母は娘の方へふり向いて、『この娘もあんまりわさ〳〵して、落ち付かないからいけないのですが――』
『でも、ね』と、千代子は母に頓着せず、『あなたが好きで、わたしを一緒に車に乘せてここへつれて來たのぢやア御座いませんか？』
あれはまだ二人乘りの人力車が深川あつた時代だ。そしてこの女も二十四五の若盛りであつた。或友人の紹介で尋ねて行つたのが緣となり、間もなく、たうとう約束までしてしまつたが、その友人があとで義雄に向つて、『結婚しろと云つて紹介したのではなかつた』と云つたのを思ひ出すと、丁度、義雄が大野の今の細君に向つて云つた同じやうな言葉と意味は違はなかつたのだ。
かの女は小石川の方で、人の二階を借り、自炊をしながら、昼は小學の教員を勤め、夜は或音樂講習所の生徒であつた。今の狀態とは違つて、おも長の上品に艶々しい顏に、姉のやうな優しみを帶びて、その着物の着こなしさへ、他の田舍出の女學生などとは違ひ、如何にもしなやかな姿に義雄は引かれた。そして三つ下の義雄ではあるが、渠が當時他の一人の女を思ひ思つてはね付けられた失望を全く取り返すことが出來た。
渠は芝の我善坊から、毎夜のやうに、電車もなかつた丸の内の寂しい道をてく〳〵歩いて、江戸川のほとりまで通つた。そしてそこから、直ぐ、築地の或西洋人のところへ、日本語を教へに且讃美歌改正の補助に――それが渠の毎日の仕事であつたに――出かけたこともある。
『深川の叔父さんが、あす、わたしを引き取つて行くさうですよ』と、女があわてて告げたその晩に、義雄は非常手段として女を車に乘せ、かの驚きながらも寛大であつた父の家へつれて來たのである。
『そんなことは十五年も、二十年も昔のことだい！』
それから、妻子をつれて田舍の中學教師にもなつた。文學專念の爲めに、東京の場末で貧乏な暮しをつづけたこともある。子供は六人も出來て、三人は死んだ。去年父が亡くなつたので、父の家業を千代子に引きつがせたが、その年末にはいろんなことで非常な困窮をした。
『みんなあなたのせゐですよ、色氣違ひのあなたのせゐですよ』と疊みかけて、千代子はあまり喜びもせず、かの退職金――大晦日に都合して貰つた――三分の二を手にした。
義雄はその他の三分の一を以つて、お鳥と共に、氷川の森かげに於いて、新年を籠城したのであつた。けれども千代子はなほ自分へ義雄の愛が返ると思つてゐるのか、かう云つて叫んだ――
『昔のことだツて、今のことだツて、このわたしにやア、變りはないのです！』
『現に』と、渠は坐つた膝にまで力を入れて、『婆アになつたぢやアないか？』
『そりやア五人も六人も子供を産んだのですもの！』
母は當り前のことを云つてると云ふやうな顏つきをしてゐた。
『何かと云やア子供、子供と云ふ！　それよりも自分自身のことをもツと忠實に考へて見ろ！』

今の女の心持ちも知りやアがらんで！』

『ぢやア、あんな清水鳥のやうなものが今様美人ですか？』

『清水などア本統の問題ぢやアない！　人のことなどにやア口出ししないで、手前のざまを見ろ！』

『どうせ、あなたの云ふ若々しいものにやア、今更らなれません、さ。』

『手前は、お母さんと同樣、ずツと時代に後れたうじ蟲だから、さう思へ！』

『これでも、武士の――』

『またか、よせ！――武士の娘だらうが、なからうが、活き〳〵した女の精神が死んでゐらア！』

うじ蟲と云はれたのを母も怒つたのかして、

『わたしもあなたの御厄介にはなつてゐますが、ね、まさか、そんな物ぢやアないつもりですよ。』

『どうせ分らないのだ！　分らないものがゐるところにやア、おれの家もないのだ――勝手にしろ！』

われを忘れたやうに叫んでゐたので、俄かに醉ひが發して來た。義雄はそこへ倒れた。隣りの寺の庭にある池から、時々緋鯉のはねる水音がして、急に靜まつた深夜の靜けさを破るのが聞えた。そして渠は、子供の時、あの鯉を釣つて、寺の和尚と自分の父とにひどく叱られたことがあるのを思ひ出してゐた。

阿彌陀經を借りに行つたら、直ぐそれを坊さんになりたいのだと思つて、何なら增上寺の管長へも紹介しようと云つた、あの世間知らずの、然し柔和な和尚も死んだ。これと親友であつて、いろんな世間話を共にした父も、和尚年來の素志であつた本堂新築の工事の音を羨ましさうに聽きながら死んだ。自分の子供も、前後三人まで死んだ。女房も自分には死んで、もう、形骸ばかりだ。お鳥なるものも、その本體の半分か、四半分しきや自分に活きてゐない。

『自分を去るものはすべて形骸だ、否、死だ！』

そして自分自身も亦死ぬ時があらうと云ふ考へに及んだ。既に已に過ぎ去つた自分の半生が、その死と同樣に空であつた。――虛であつた。――無であつた。――理想とか、運命とか云ふ形式的概念、外存的思想などが出て來る餘地さへもない。今、この身に具體してゐる慾望ばかりが、闇夜に於ける燈臺の光のやうに僅かに唯一のいのちだ。

今や義雄には樺太の事業に全心全力を注ぐのがそのいのちである。早く、もツと金が欲しい！　同時に、また、よく自分を理解して呉れる女が欲しい！

ぞく〳〵と寒く、そして息詰るこの醉ひの苦しみはやがて又この現在の煩悶の苦しみであつた。

ばちり！　ばちり！

水面に踊りあがる大きな緋鯉の姿が、締め切つた室に倒れた渠の肉眼に見えて來て、渠のつき詰めた思想に正しい合の手を添へて呉れるやうだ。

『おれは兎に角生きてゐる！』

『また、何か』と云はれたので、渠は千代子がまだそこにゐたのに氣付いた、「考へ込んでるんでせう――さツき逃げて行つた清水のことでも？』

『……』無に歸したことを再び思ひ起させられるのがいやさに、起きあがつて、『下らないことは云ふな』と、眞面目に叱り付けたかつたが、からだが利かなかつた。

千代子の何かにのぼせて來たやうな息使ひが烈しくなつてゐる樣子が、ちらりと見えただけである。

『以後は、ね、義雄さん』と、母もまたゐたのであつた、『かう云ふことのないやうにわたしからも云つて聽かせますから、けふのところは、あなたも、どうか、勘辨してやつて下さいませ――久し振りのお歸りぢやア御座いませんか？』こんなことを云ひながら、母は、押し入れから、渠の何ケ月か觸れたこともない蒲團を出して、洋書の背皮文字が金色や銀色に輝いてる二つの大きな書棚の前に擴げた。

然し、その夜も、それッ切りで、義雄は、暫く經つて障子をあけに來た千代子を、一歩も、この昔から書齋兼用の寢室であつたところへは入れなかつた。

八

末の男の子は、父と云へば、恐れて少しも獨りでは近よらない。

うへの子二名は、父のことを母がいつも馬鹿だ、馬鹿だと話してゐるのを聽いてゐるので、父のそばへ來ても何にも云はず、半ば下げすむやうな目を見張つてゐる。義雄はもとからこれを知つてゐた。

で、翌朝、遲く起きると、直ぐ、何にも云はず、その家を出た。

お鳥は二階の眞ン中で、だらりと足を投げ出し、そッぽうを向いて眩まくらをしてゐた。

不手腐つてる、な、と義雄は思つたが、今までおさらひをしてたかして、三味線がそのわきに横たはつてゐる。

かの女が挨拶しないので、渠も默つてその後ろの方に坐つた。圓いニッケルの置き時計ばかりがちやき〳〵云つて、五分か六分を過ぎた。

『もう、別れさせて貰ふ！』かの女は半身を起して、こちらにねぢ向け、目で義雄をにらみ、足は投げ出したままだ。『相當の手續きをして吳れ！』

『手つづきも何も入るものか？』渠はわざとゆツくりして、『別れるなら、直ぐにも別れよう、さ。』

『では、病氣を直ぐ直せ！』

『そりやア、仕かたがないと諦める、さ、これまで隨分金をかけてもまだ直らないんだから、ね。』

『誰れがもとぢや――お前の外にありやせん！』

『今更らそんなことア云つても駄目だ――お前の好きなやうにするがいい！』

『でも、ええ氣になつて、引ツ張られて往たぢやないか？』

『いい氣でもなかつたの、さ。』

『せめて――けさ――早くでも』と、また例の荒い息使ひになつて、『歸りやええのに！』

『おれが寢坊なのはお前も知つてるぢやアないか？』

『場合が違ふ！――ふん！　あたいが紀州を出て來たのが惡かつたんや』と云つて、再び向う向きにぶツ倒れた。そして渠の豫期通りにすすり泣きになつた。

山出しも同樣な癖に、紀州を出て來たのが惡いのは、義雄は初めからさう思つた、無論のことだと。さきの亭主――それも本統の亭主であつたか、どうだか、分らないが――に棄てられたか、若しくは本人の云ふ通り自分からそれを見限つたかして、もツといい人に引ツかからうと云ふ野心から、東京へ出たのだ。そして碌でもない炭屋の亭主――義雄の家の筋向うだ――にくツ付いて見たり、神田にゐる國のものだと云ふ人の、そしてちよツと同居した家の細君に疑はれて追ひ出されて來たり――それでゐて、こツちの本妻に立ち直らうとするなどとは以つての外だ。

若し女優になれるとしたら、それだけでも

仕合はせを與へられたのではないか？　多少ぬけたやうなところがあるのに――その癖、神經が過敏で――ちよッと熱でも出ると、直ぐうは言を云ふ。

『お母さん、お母さん、あア、ア、アーアッ』など と云つて、目をさますことは氷川の方にゐた時は一番烈しかつたと思はれたが、この頃では、またその習慣が回復して來て、夢に見た母の姿を、枕もとに起きあがつてまでも見まはす樣子をする。

『おい、何をしてゐるんだ』と、義雄が注意するのに初めて氣が付き、

『また、何か云うた？　お母さんが來た筈ぢやのに』と、眞面目くさつて微笑してゐる。

義雄はそんな時に、度々、わざとではないかと疑つて見た。が、あかりの蔭に橫たはつたかの女の、地肌のなめらかな白い顏が、引き締つて、靑いやうに、綠のやうに、また紫のやうに見える時は、××でないかと云ふ疑ひを初めて起したのを今でも忘れないに拘らず、虛僞か眞面目かのやうな問題はいつも〳〵消えてしまつた。そして朝になつて、かの女のまづいたるんだ顏を見る度に、自分は廣い野原の眞ン中に狐からすツぽかされたやうな不興に落ちた。

『死んだと云ふものが二度と再び出て來るものか、ね』と、たま〳〵云つたことがある。『よくお前のおやぢが出て來ないものだ！』

『親さへ生きてて吳れたら、あたいもこんなことになりやアせん。』

『無論だらうが、ね、それでも本人の心がしッかりしてイないと――』

『だから』と、からだを振り、『あいつを追ひ出せと云うてる！』

『そりやアお前のある無しにやア關係しないでも、ね。』義雄は成るべくうそを云はないで通りぬけたかつた。

それがかの女には渠の煮え切らない證據に見えるので、そんな時に泣いて渠を威し付けようとしたこともある。そしてその末には、さきの亭主が去年一度歸つて來て吳れと云ふ手紙をよこしたに對し、返事をやらなかつたのを悔い、國であのつらかつた別れをしたあとで、まさかの時はこちらも死ぬつもりで、醫者なる兄の藥局からアヒサンを一服盜んで來てゐることを白狀した。

時には、義雄もこの神經がつよい女がどんなことを仕出かすまいものでもないと心配した。かの女は今も、泣き倒れてゐながら、

『あいつを追ひ出さなければ、あたいは死んでしまふ』と云つた。そんな時には渠はかの女に仕込んでやる仕事の話でもして、氣を轉じさせる外はないと思つた。

が、けふはまだ起きツぱなしであるので、

『兎に角、おれは飯を喰ひたい、ねえ。』

『まだ喰べないの――?!』かの女は俄かにまた半身を起した。そして面倒臭さうに顏をしかめてこちらをぢッとながめてゐたが、『今下の人が、もう直きお晝だと云うてたのに――なんにも無いよ』と云つた時は、全くその顏がやはらいでゐた。

かの女は渠の食膳に茶づけの給仕をしながら、ゆうべ、大野の細君が義雄の惡口を澤山云つたのを、かの女自身の恥辱であつたかのやうに訴へた。が、渠はそれを少しも氣にかけなかつた。

烏山にからすがア〳〵云つてる聲にまじつて、櫻の咲いてゐる道ばたから、例の乞食の『お助けで御座います』が聽えてゐる。

その日、お鳥が踊りの稽古に出ると、義雄は或新聞の日曜附錄に賴まれた論文を書きあげてしまつた。それから義雄が外出したあとへ、

加集來助が尋ねて來たが、あがつてかの女と話しながら、暫く待つてゐた後、また來ると云つて出たさうだ。

義雄は愛宕下町の大野の家へ行つて見たのであつた。が、主人はゐなかつた。何だか、不斷のやうにづか〴〵あがつて行きにくいやうな氣がして、細君を呼んで貰つた。

なか〳〵出て來なかつた。それでも出て來た時は相變らずにこ〳〵してゐた。が、どこか澄ましてゐるやうなところが渠の目に付いた。

『今お稽古をしてあげてるのよ。』

『さうでせう、ね』と、先づ渠は云ふより外に仕かたがなかつた。この夫人も、畫を敎へてゐるばかりに、矢張り、自分の女房のやうに、敎員然たる、云ひ換へれば、人に對して誰れにでも子供あつかひをする風が滲みて來たのを、渠は發見したのである。『ゆうべは、どうも、失敬しました。』

『あなたの奧さんも隨分、ねえ――？』

『あいつア、もう仕やうがないのです。』

『あなただツて、さうでせう――もう、いや』と、つツ立つたまま、からだを振つて、『あなたのやうな人が來るのは！』

『さう云はれるだらうと思つたのです』と、渠は苦笑しながら、『ですが、ねえ、まア、そんなことは云ひツこなし、さ――どうせ、大野君がゐなけりやア歸りますから。』

『さう――失禮、ね。』かう云つて、かの女は障子をしめにかかつた。

『畜生！』と云ふやうな淡い憤慨心を懷いて、義雄は、ついその近處の玉突屋へ行つた。渠とも長らくこの遊びの仲間にたつてゐる有名な金貸しが來てゐた。この人は、もと、歐米へまでも出かけて宗敎の腐敗してゐるのを、實見して歸り、一種の自己發明の耶蘇敎を傳へるには、外國人の補助などを仰いでゐちやア駄目だ、先づその費用たる金を自分で拵へなけりやアと云ふ考へを以つて、金貸しになつた。この動機が丁度、義雄の唯一の先輩たる人がコンミションマチャントになつたと同じなので、渠は初めのうちは多少の尊敬を以つて接してゐた。が、義雄の別な友人なる辯護士や會社員と大きな花を引いたり、惡辣な高利貸しとなつてゐるのを知るに至つて、もう、既に金ばかり欲しがるあり勝ちな平凡人に過ぎなくなつてゐると侮辱するやうになつた。さきに家を抵當に資本を貸せと交渉して見たのも、――どうせ出來なかつたが、――義雄は向うに一つも同情などは乞はないで、あり振れたアイスとしてであつた。けれども、丁度この人が獨り來合はせてゐたので、

『どうだ、負かしてやらうか、ね』と、義雄はキュウを取つた。

『今ちよツと途中で電話をかけに來たのだから。』かう云つて、渠は袖さきのカフスを直し、手袋をはめ始めた。

『さうか――こなひだの連勝をどうして與れるのだ？』

『また、今度だ。』

『わたしとやりませう』と云つて、ボーイが出たが、どうも義雄は氣が乘らなかつた。いつもなら、出ると直ぐ親しい感じを起す青羅紗の玉臺や、こち〳〵云ふ紅白象牙の玉などが、渠の目にもあたまにも、散らけて遠いところにあるやうに感じられた。

三度に勝負まけをして、渠はキュウを置いた。

『どうも、晝間は氣が締まらないで駄目だ。』

そしてお鳥の二階へ歸ると、やがて大野正則がやつて來た。

『もう、醉つてるのか？』

『例の、ね、書き割りの監督に行つてたの、さ――いつまで寒いと云ふのだらう？』

『君と一緒に濱町で日がさめると、意外のおほ雪であつたのも、こんな時候であつたよ。』

『さうだ、なア』と云ひながら、大野は少し離れて坐つてるお鳥を見て、『どうだ、御機嫌はいいか、ね？』

かの女はほほ笑んだが、横を向いた。

『君の細君も無事のやうぢやアないか？』斯う義雄が受けた。

『だが、ね、君の細君にかぶれて、僕のもゆうべから變だよ――君にも何かいや味を云つたさうだが、あいつも感情家だから、ねえ。』

『まア、いい、さ、僕の事情のやうなものぢやアないんだから――僕も』と笑ひながら、『けさ、やツと逃げて來たよ。』

『君が惡いんだよ』と、大野は片手を下向きに火鉢の少し上に浮けて、それを上下すると同時に幾度も首を小刻みに動かした。

『役者のやうな眞似ばかりする』と云つて、お鳥は渠を初めから嫌つてゐるのである。今もこの樣子を、憎しみを帶びて見詰めてゐるのに氣が付き、

『いや』と、渠は恐れ入りましたと云ふやうなお辭儀をして、『お鳥さんがいらせられたのでした、な。』

『ふん』と、また横を向いて。

大野は話題を轉じて、畫家の社會、殊に劇場の書き割り畫家の社會に、卑劣な人物が多いことなどを憤慨し始めた。

『畫家社會ばかりぢやアあるまいよ』と、義雄は答へた。『形式家のまだ勢力ある現代では、どの社會にでも、新らしい思想を體現し得るものを除いちや、みんな僞善者でなけりやア卑劣家ばかり、さ。』

『大きにさうだ――君も蟹の鑵詰めなどに熱心するのをやめて、お互ひにしッかり戰つて行からよ。君は詩人、僕は畫家ぢやアないか？』

『さうだ、ね』と、義雄も答へた。が、戰ふのは自分一個の力にあるので、如何に親友でも、自分と共に自分の自覺するだけのことを實行するものはないのだと思つた。落ち付いて、腹の底から出る聲で、『然し、僕は、この場合、どうしても、あの事業をやらなければならない――背水の陣を張つてる樣なものだから、ね。』

『それもさう、さ、な。』

『あたい、行て來る、わ』と、お鳥は立ちあがつた。

『ぢやア、勝手にしなよ！』義雄はつッ放すやうに答へた。もと、二人で二階を借りてゐた氷川の家の細君――と云つても、一老人に對する下女あがりの妾――が手紙をよこした。前にかの女が勝手に賴んで置いた勤めの口だとは云つてるが、何か渠に對する反逆をたくらんでゐるのかも知れないと思つたので、その手紙を見せろと迫つたのは今しがたのことだが、どうしても見せようとしなかつた。見せないのはこれまでにも度々あつたことで、身うちからのらしいのもさうしてどこかへ隱してゐた。『叔母さん、うちのお父さんはどこにゐるのでせう』と、義雄自身の子が云ひさうな子供のハガキも、義雄はかの女の留守にこッそり机の引き出しを探した時に、ふと發見したのであつたが――

『どこへいらせられますか、奧さんは？』

『……』

『どうせ、めかけの口か、さうでなけりやア、下らない電話交換手ぐらゐの話にきまつてらア、ね。』

『なんでもええ！』お鳥はぷり〳〵して階段を下りて行つた。

格子戸の明く音がしてから、大野は障子のあはひから外をのぞいた。再び座に着いてから、

『よせよ、おい、あんな女！』
『僕だッて――その時機を見てゐるんだ』と云つて、義雄はゆうべのさまを思ひ出した。逃げよう、逃げようとして、たうとういやな巣まで引ッ張つて行かれた。お鳥の關係に於いても、あのかな臭い溝をのぞき込むやうな場合にまで立ち至つたこともある。
『僕が今度は君の眞似言を言つて、しッぺい返しをする樣だが、ね』と、大野も靜子と結婚する、しないの騷ぎに、義雄が一時大野のもとの細君の方に肩を持つた時の言葉を持ち出して來て、
『よッぽど細君の方がいいぢやアないか？』
『情ないことを云ふなよ。僕はもッと〳〵新らしい生活をやりたいんだ。』
『それも君の說だから惡い事もなからうが――まア、あんなへたなラシャメンじみた女はペケペケ！』
『だから、どうせ雨方ともやめ、さ。』
大野は、それから、芝居の興行と脚本作者の立ち場とを妥協的に論じ、座の方はどこへでも關係をつけるから今日の見物に分る程度の新らしい脚本を書けと、頻りに義雄に勸めた。
が、義雄はいづれ脚本は書くが、そんな妥協的態度で、とても、自分等の考へるやうないい物は書けるものぢやアないと答へた。
義雄は、大野につれられてビールを飲みに行き、暗くなつて歸つて見ると、加集が來て、下の老細君と二人で話をしてゐる。
渠等二人が二階へあがると、加集は云つた、
『あの婆アさんは話好ッきやぜ。』
『さうだらう、亭主がいつも遲くでなけりやア仕事から歸らないから、その間は獨りでぼつねんとしてゐるんだ。』
『田村さんは淸水さんにばかりくッついてて、一向下りて來ませんと云うてたぜ。』
『まさか、そんなお相手も出來ないぢやアないか？――そして、君にお鳥を貰へと云はなかつたか、ね？』
『……』加集はちよッと赤い顏をしたが、『そんなこと云やせん。』
『それぢやア、僕も安心だが、ね』と、義雄はわざと冷かしを云つて見た。
『ゆうべ』と、下から機嫌を取るやうな風に出て、『活劇があつたさうぢや、な――？』
『誰れに聽いた？』
『淸水にも、我善坊でも。』
『よせ、下らない！』から云つて、義雄はこんな男に詳しいことも、短いことも聽かせるに及ばないと思つた。しやべる奴もしやべる奴なら、聽いた奴も、面白さうにここから又我善坊へ出かけるには及ぶまい！ これも、自分に雨方の女に對する若しくはどちらかに對する眞實の愛がないからだらう――若しそれがあらば、こんなぐら〳〵した、ふた股膏藥じみた男の出入は禁止する！
『肝腎の用はどうしたい、きのふの――？』
『二三度行て見たが、いつも留守でまだ會へん。』
『ぢやア、その方をもッと熱心にやつて吳れたらいいのに。』
『やるよ、心配しないでも』と、笑つてゐる。
『何の爲めにぶら〳〵してゐるんだ』と云つてやりたかつた。
格子が明いて、締まつたやうだ――
『淸水さんですか』と云ふ婆アさんの聲がした。
二人の眼は、見えない階下の方へばかり向いてゐた。
『ええ。』
障子が靜かに明いた――
『寒かつたでせう――？』
障子が靜かにしまつた――

『そんなに寒いことも――へ。』

　はじご段が靜かにとん、とん、とん――義雄の耳には、お鳥のいつも人前ではなか〳〵をかしい程氣取つてるその樣子までが聽えて來る。去年の暮れに買つてやつた細長い鶴の毛ショールを二つに折つて、これを片手に持つたかの女が現はれた。

　いつもにないほど、にこ〳〵、にこ〳〵してゐる。

『やア、女優さんのお歸りか？』から、あぐらをかいて見あげてゐた加集が云つた。

『馬鹿！』忽ち恥かしさうに顏を赤くしてにらみ付け、坐りもしないで、『馬鹿！――早ら往んで吳れ！』

『そないに』と、ちよツと口をとがらせたが、加集のます〳〵輕薄笑ひの心を加へたのが義雄に讀めた、『おこらんでもえゝぢやないか？』

　そして義雄はこのありさまを見て、却つてかの女の外出事件に逢つたこともなかつたのを感づいた。

九

　とンと強く叩きつける煙管の音がして、

『わたしを何だと思つてるんだよ！』

『……』

『假りのおめかけや、たまに旦那に來て貰ふ圍ひ者ぢやアないかよ！』

『……』

『お前の女房だ位は分らない野郞でもあるまい！』

『分つてらア、な。』

『それに何だツて、うちを明けるのだよ？』

　義雄は朝飯をしまつてから、机に向つてゐたのだが、下のこの怒鳴り聲に耳が引ツ張られてゐた。また一騷ぎあるだらうとけ、婆アさんのゆうべの心配しかたで豫期してゐた。お鳥はけさも何だか慰めを云つて聽かせてゐるやうであつたのに――

『仲間のつき合ひだから、仕かたがない、さ。』

『つき合ひ、つき合ひツて、幾度あるのか、ね？　そんなつき合ひは斷つてしまひなさいと云つたぢやアないか？　碌にかせぎもしないで！』

『うへの先生でもやつてることだア、な。』

『先生がお手本なら、直ぐ、けふ限り、わたしが斷つてしまふよ。』

『斷るなら、斷るがいいが、ね。』

『生意氣をお云ひでない！』

　義雄は自分の女房より一段どころか、二段も三段もうへを行く女もあるのだと思つてゐるのだ。

『何が生意氣でい――これでも貴さまを年中喰はせてやつてらア！』

『喰はせるだけなら、ね、犬でも喰はせるよ！　米の御飯が南京米になり、南京米が麥になり――』

『何だ、この婆々ア！　見ツともねいことを云やアがつて！』

『なぐるなら、なぐつて見ろ！　働きもない癖に！』

　取ツ組み合つて、あツちの障子に當り、こツちのから紙にぶつかりしてゐるやうであつたが、大きな女のからだが疊の上に投げ飛ばされるやうな音がした。

『婆々ア女郞め！』

『殺してやるから、さう思へ！』

　臺どころの方でがた〳〵云はせてゐたが、またとツ組み合が始まつたらしい。

『おい、行つて見ろよ』と、義雄はお鳥に云つたが、

『あたい、おそろしい』と、ちひさくなつた。

　渠が下りて見ると、婆アさんをねぢ倒して、そのさか手に持つてゐる出齒庖丁を亭主がもぎ

取つたところであつた。
「どうしたと云ふんです、ね？」
「あの野郎がまだ目をさまさないから」と、婆アさんはからだを起し、「今、根性をつけてやらうとして。」
『どッちが」と、立つたまま荒い息をして、「腐つた根性でい？」
『手前に――きまつて――らア、ね」と、これも息を三度につきながら、立ちあがり、長火鉢の座に行つた。そして義雄に、『どうか――火の方へ――お近く。」
亭主は、庖丁を臺所の方へ投げてから、婆アさんとさし向ひの座についた。そして、
「あり勝ちの夫婦喧嘩ですから、どうか惡からず」と云つて、若いが、こんな場合だけに血の氣の失せたやうな顏で笑つた。
義雄には、この男がこんな老母のやうな女を女房と思つてゐられるのが不思議なほどであつた。ずツと若い時からのくツつき物なら知らず、まだこの二三年來の慣れ合ひだと聽いてるので、ただいろんな好きずきもあるものだと思つた。
『まア、喧嘩をするにも及ばないでせう。」
『濟んで見りやア」と、眞面目な顏つきで亭主を見ながら、「馬鹿々々しいことですが、ねえ。」
『あは、は」と、亭主は笑つて見せた。
「女と云ふものは思ひ詰めりやア、われながらおそろしいものですから、ね――まア、先生も御用心なさいましよ。」
『十分用心が必要です、ね」と、ただほほゑんでゐた。
『わたしが先生の奧さんなら、をどり込んで殺してしまひますが、ね――まだあなたのは、教育もおあんなさるでせうから、おとなしく控へていらッしやるんです、わ。」
「さうでもないのだが――」かう云ふ人々が望む教育なるものが、今日のやうぢやア、これを與へるものの方針に非常に間違つたところのあるのを、義雄はどこかで訴へたくッてならないのである。「斯うすべからず」の消極概念が殆ど教育界全部を占領し、『斯うすべし」がまた、ほんの形式にばかりとどまつてゐて、有識者と云はれるものが凡て、如何に嚴格でも、また如何に熱心らしくあつても、空に他を教へようとして、少しも自己の實行如何を反省しない！　何のことはない、法律と教育とで以つてわが國人は自由なるべき人間本能の誠實を、わざわざ、無意義に制限せられてゐるばかりだ！
たとへば、結婚と云ふ形その物が道德でも實質でもない。實質が既に違つた以上は、その形の破れて新たまるのを認める法律が必要だ。同時に、また、婦人から云つて見れば、くツ付き物が離れた場合にそこに獨立する精神や生活法がいつも具備してゐるところの教育を、不斷から、與へられてゐなければならない。お鳥のやうなものやこの婆アさんのやうな、身を棄てて低い生活に安んじられるものは、寧ろどんな教育でも入りはしないとしても、中流生活の婦人が無教育ではない癖に獨立生活的教育の素養がないのは、わが國の發展を害する最も大なる缺陷の一つで、自分が千代子に苦しめられてゐるのもそれが爲めだと思つた。
『どうせこんなことを云つたツて分らない」のだから、義雄は再び、もう喧嘩はしッこなし、さ」と云つて、二階へあがつた。
晩春も、もう、過ぎようとする或日の正午前のこと、お鳥は小さい聲で歌ひながら、三味線を獨りざらひしてゐた。
義雄は机に向ひ、鳥の啼き聲も乞食の哀訴も聽えなかつた。
が、ふと、自分の耳を疑はせるやうなことを

叫んでるものがある。女のやうだ――否、自分の妻のやうだ――

『あなた、少しうちへ歸つて下さらないと困るぢやアありませんか？　うちばかり明けて――うちがどうなつても構はないと云ふのですか？　子供だツて、云ふことを聽かないで――あなたがゐないぢやア、どうすることも出來ないぢやアありませんか？』

『馬鹿！』渠は私かに應じて立ちあがつた。そして肉眼の力をふさいでゐたいやうな豫期をしながら、障子のすき間から下をのぞいて見た。

道ばたに並んでる櫻の枝々からは、昨夜の雨に打たれた殘りの花びらが、まだおもたさうにひらり、ひらりと落ちてゐる。その中を、かの女のあを向いた顏だけ見えたが、段々とあとずさりして下の方まで姿を現はしながら、なほ叫びつづけてゐる――

『困りますから、早く歸つて下さいよ。子供が云ふことを聽きません！　どうか、お願ひですから、歸つて下さい！　ほんとに、おねが――！』

がツくりと倒れかけた――櫻の一つの根もとに敷かれた乞食のこもの端に、はき物のかかとが引ツかかつたのだ。

『お助け』をやめて、ぼんやり仰いでながめてゐた親子が、「あは、は」と笑つた。

が、それをじろりと一瞥して、かの女は僅かにからだを踏みこたへた――

『お願ひだから、ちよツとでも歸つて下さい！』

『阿呆ぢや、なア』と毒々しく云つて、いつのまにか後ろへ來てゐるお鳥の手が、義雄の背中にとまつて渠に顫へを傳へてゐた。

「旦那、見ツともないぢやアありませんか？』下の婆アさんもいやな顏をしてあがつて來て、から云つた。

『なアに』と、婆アさんを叱り付けるやうに、『うツちやつて置け、置け！」

「あなたはいいとしても、わたしのうちで困ります、わ。』

「あなた、聽えませんか？』

「また、云うてる！」お鳥は婆アさんにどうしようと云ふやうな樣子を見せた。

「わたしが兎も角下へ通して置きませうか？」

『さうです、な、――どうか』と、お鳥の聲も息詰つてるやうだ。

「あなた――あなた――ゐないのですか？」

又窺いて見ると、『聽えませんか、ゐないのですか』とをめいてるその前を、職人體の男と女學生とどこかの夫人が別々にじろ〳〵見返りながら通つて行く。乞食の哀訴はそれらに對してしなかつたやうである。

がらりと格子戸が明いた――

『奧さん』と、婆アさんの激してゐるやうな強い聲がして、『まア、こちらへお這入りになつたらどうです、ね。」

『ほんとに、困つてしまふ！』千代子はづかづかとこちらへ歩き出した。

「あたい、知らん！」から云ひ放つて、お鳥は裏の方へ向つた窓ぎはへ行き、横向きに窓の眞ン中の柱に身をもたせかけた。

義雄は、おもて窓に向つた自分の机に對して、坐つた。

格子戸が、がたりと荒々しく締つた――玄關の障子がまた荒々しく締つた――

「二階でせう。」

『へい――』

どた〳〵、どたと荒い音があがつて來た。

『どうしたんです、ね、あなた！』

「……」

「子供達が云ふことを聽かないで、仕やうがないぢやア御座いませんか？』

『……』

『聴えないのですか？』

『……』

『つんぼですか？』

『……』義雄が、ふと、悪かつた一方の耳も先づ直つたらしいのを思ひ出してゐると、かの女はつづけて、

『たとひかた〲〵の耳はまだ直らないとしても、一方は聴えるでせう？』

『……』

『返事をおしなさい！　子供が――』

『黙れ！　子供は、ほんの、かこつけで、貴さま自身がだらう？』

『……』千代子は、所天が突然ふり向いて瞰む鋭い眼の力を受けて、灰色じみた顔色をちよッと赤くした。

　義雄は、かの女が小指一本ででもさはれば倒れさうな足もとで、段をあがつたところからこちらを見詰めてつッ立つてゐるのを、一歩でも近よらせないと云ふ勢ひを見せて、

『して、子供のことぐらゐを處分出來ない女だから、馬鹿だんな！』

『さうは行きませんよ――』

『よせ！』

『父親があるのに留守ばかりぢやア――』

『おれは、ね』と、分らせるやうに念を押して、『手前のゐるやうな家にやア父でもない！　所天でもない！』

『馬鹿をお云ひなさんな！』

『分らず屋！』義雄はそれッ切り横を向いて、そ知らぬふりになつて考へた――おれは、妻に對してもこんなことをこれで三度もやらせて置くだけが、まだ弱い――妻も矢ッ張り、その後ろに來てゐる婆アさんと同樣、全く自分の所謂無教育無自覺だと。けれども心のうちで、『若し少しでもあいつに理解力があつたら、それを緒口にして、おだやかにあの狀態を改造して行かせるのに！』

『どッちが分らず屋だ』とつぶやきながら、かの女は二三歩お鳥の方へ行つて、『あなたもあなたでせう、うちが困るぐらゐのことは氣が付かないことアないだらう！』

『……』

『自業自得で因業な病氣にかかつて、さ、入らないおかねまでつかはせたんですよ！――その衣物だッて、拵へて貰つたんだらう！――あすこに掛つてる白い首卷きだッて、買つて貰つたんだらう！　圍ひ者氣取りで、三味線など彈いて！』

『……』

『さア、わたしの出るところへお出なさい！』

『何をする！』と、お鳥が云つた。

　義雄が胸おもく張り詰めてゐる怒りを動かして急にふり向くと、お鳥の廣島銘仙の袂を千代子が取り攫んだのを、攫まれた方がふり切るところであつた。同時に、お鳥は訴へるやうな目をこちらに向けてゐた。

『どこへ出るんだ！』渠は飛び込んで行つて、『この氣違ひ婆々ア！』

『婆々アでも、何でも、出るところへ出たら、分ります！』

『自分で行て』と、お鳥も負けない氣で、『巡査のやうなものに笑はれて來い！』

『笑はれるのはお前さんですよ！――あなたも』と、千代子は義雄を返り見たが、鋭いにらみを避けるやうにして、『こんな見すぼらしいとこにゐないだッていいでせう？』

『何をぬかす！』渠は思ふさま千代子の横つらをぶつた。

『そんな手荒いことは』と、婆アさんがとめようとした時は、千代子は既に横ざまに倒れてゐた。

『ぶつなら、いくらでも御ぶちなさい』と、案外けふはおとなしく起きあがつて、「警察へ出れば分るのですから。』

『そんなことを、奥さん、云ふものぢやアありませんよ。あなたも恥ぢなら、旦那さんにも恥ぢでせう？』

『恥ぢも何もかまふものですか？』

『さう無茶苦茶になつちやア、あなた――まア、下へ來て、氣を落ち付けなさいよ、旦那さんや清水さんには、わたしからまたよく申しますから。』

義雄もお鳥も他の二人の樣子をばかり見つめてゐた。

婆アさんの片手に背中を押されて段を下りかけた千代子が、こちらをちよツと恨めしさうにふり向いて見た時、かの女の少し前に反つた大きな前齒に血が付いてるのが見えた。

『早く引ッ越すんだ！』から云ひ放つて、渠はどうせ行くべき北へ行くことを思つたのだが、お鳥はさうとは知らず、

『それがえゝにきまつてる、さ。』

一〇

毎日のやうにやつて來る加集だが、その引き受けた要件を一向はか取らせて呉れないので、義雄も亦棄て身になつて、よく方々の玉突屋へ通つた。

耶蘇教あがりの高利貸しとも勝負した。文人の辯護士や會社員やアメリカ歸りの無職者とも勝負した。さう親しくもない官吏や年若い銀行員等とも勝つたり、負けたりした。

多少でも名の知れてゐる文學者と云ふので、知らない人々までが面白半分に、渠の周圍にはいつも集まつて來た。

「田村さん、蟹の鑵詰とかはうまく儲かりますか』など云はれて、義雄は一生懸命にやつてゐる勝負の腰を折られたこともあるが、

『まだその時節にはならないのです』と答へながら、遠く離れたキン玉を力一杯出して取らうとしたが、一方のに當つて一たびコシンに這入り、それから自分の玉は縱に二たび往來して、なほその餘力がフロクになつた。

「あは、は、は！」見てゐるものは一切に笑つた。

『でも』と、義雄も微笑しながら、『當つたのは當つたのだらう。』

『さうきつく突いちやア、象牙の玉でもこはれますよ』と、女ボーイも口を出した。

『こはれたら、辨償するだけのこと、さ。』

『然し當ることは善く當る！』から感心したやうにささやくものもあつた。

こんな時には、義雄も額を油ぎらせるほど調子づいてゐるのである。そして夢中になつた時突きかたが普通の正しい姿勢と違ふので、それがおのづから渠の一特色となつて他人への愛嬌の種となつた。渠はこれを別に頓着しなかつた。

或をんな文人が西洋料理を計畫しかけた時、

『田村さんなら、實費で通すから常連をつれて來て下さい、ね』と云つた。

「そりやアよからう――あなたの爲めなら、廣告屋の代りにもならう」と、渠は冗談半分に答へた。この計畫は立ち消えとなつた。

ところが、今回加集が一人の、玉突屋を開業したいと云ふ人――これが金を貸さうと云ふのだ――に紹介して置くと云つて、義雄を京橋へつれて行つた。

『おれに常連を頼むは、眞ッ平だぜ。』

『ええぢやないか、二百圓が出來さへすりや？』

この人は義雄も知つてる或文學者の弟で、新らしく手を出した出版業をこの頃大抵に見

限り、築地橋のそばの或家の二階を借りて、年らへの、何だか分らない女と同棲してゐるのであつた。よく〳〵おなじやうな人間にぶつかるものだと、義雄は考へた。

『僕も大切な金で』と、主人がおも〳〵しい氣分になつたのを義雄は見とめて、おのれもその氣分を解したと思つたが、『加集君の紹介でもあるし』が、渠に聽かされては、力のぬけた言葉であつた。『また、これから君にも交際して貰ひたいので、加集君にも話した通り、現金が近々歸つて來さへすれば、君の爲めになるのなら、融通してあげてもよいのです。』

『無論、僕の事業費に追加が必要なのですから。』

『それは加集君からよくうかがつてゐますし、君の事業の有望なのも分つてますが――この急場さへ切りぬけたら、あとはどうでもええと云ふやうな――』

『そんな無責任はしません!』

『無論、君のことだから――然し信用貸しですから、念の爲めに申して置くのです。』

義雄はあツちの季候では、この頃やうやく蟹が取れ出すので、六七月となつて收穫の絶頂に達し、八月の半頃までで一先づおしまひになるのだから、先づ九月一杯に返却する約束なら、決して苦しいことはないことなどを説明した。

『然し僕は君の兄さんの文學には反對で、よく攻撃の矢も向けたが――それに關係を及ぼして貰つちやア困りますが、ね――』

『第一、兄とは別に關係のない金ですから――』

『さうなら實に結構です。』

三人はそれから近所の玉屋へ行つたが、義雄は他の二人の敎へ手であつた。

渠は玉を突きに出さへすれば、どうしても夜の十一時か十二時でなければ歸らなかつた。

お鳥はこれを怒つて、いつもさきに蓐へ這入つてゐた。

『おい、お嬢さん、どうしたい』などと、一杯機嫌でそのそばへ坐ると、向うを向いてるまま、そら寢をしてゐることもある。そして突然こちらを向いて、

『あたいを大事にしないからぢやないか?』

渠は、ランプの光が直接にかの女の顏に當たらないやうに、その方へ、原稿紙の半切れを笠に張つて日隱しをしたその蔭を向けるのであつた。

『閨中美人!』そして××ぢやアないかの疑ひは、もう、ほんの、形式的に、渠のあたまにくツ付いてゐた。

或夜、風の氣味だからいつもより早く、九時頃に義雄が歸つて來たら、女はちよツと出て來るからと云つただけで、明るいうちに外出したままださうだ。

『どこへいらしツたんでせう、ね?』

『さア――』

『もう、お歸りなさいませんでは、ねえ――』

『さア――』

『女おひとりぢやア、この頃ア物騷ですから。』

『なアに、あいつのことだから、また引ツかきむしるなんかして――』

『うふ』と、婆アさんは笑つた。きのふ、女房にしろ、しないと云ふ喧嘩をして、義雄が首ツ玉のところをかきむしられたのを、かの女は思ひ出したらしい。『あのお方も氣のきついお方です、ね――今どきの若い方ですから――でも、まだあなたの奥さんのはうが餘ツぽどいいぢやア御座いませんか?』

『さうですか、ね?』いい加減にあしらつてから、長火鉢のそばを離れ、二階にあがるが早いか、あかりを付けて戸棚をあけて見た。退屈が心

配したやうなことではなく、女の荷物はそのまま殘つてゐる。
その代り、またそれ以上の心配がわれ知らず浮んだ。
『まさか――』と、打ち消しながらも、あの時を――あの、千代子がここへ躍り込んで來た時を――思ひ出さずにはゐられなかつた。千代子が歸つてから、女はまたあいつを早く追ひ出せとせがんだ。義雄はさう容易に法律が許さないと云つて聽かせた。――お鳥は、すると、負けてゐるからぢやないかと突ツかかつた。いや、さうぢやアないと抑さへ付けた。――そのあげく、女はむツとしてしまつて、何も云はないで出て行つた。義雄はせい／＼したつもりで、散步に出た。長くも留守にしてゐられない用があつたので、何げなく、烏山へ登つて見ようと云ふ氣を起した。毎日、毎日、障子をあけさへすればさし向ひになる山だが、これまで登つたこともなかつたのだ。
すると、この山の、あツち側の急傾斜に瀕したところで、女がこツちの來たのも知らず、松の枝に自分の細帶を結びつけ、その出來た輪につかまつて、今にも首をかけようとしてゐた。
渠はそのそばへ驅けて行つて、憎く／＼しいほどに怒罵の聲をかけた、
『何をする！』
『死ぬ！　死！』女は渠の手をふり切らうとした。そして泣き聲になつて、『どうせ――みなに――こんなに恥ぢをかかされて――お母さんにも、兄さんにも濟まん！』
『何も死ぬにやア及ぶまい――』どうせ、こツちに對しちやア、もう、半ば死んでゐるのだから、ね、とまでも云ひたかつた。また一方には、申しわけに死ぬのは、申しわけをしなかつたと同樣ではないか？　生にばかり執着する渠には、これほど無責任なことはなかつた。さう云ふ心のうちで、『馬鹿だ、なア！』
『實際、死ぬ氣であつたのか？』と、義雄はあとになつて尋ねて見た。
『さう、さ！』
『ぢやア、なぜ兄から盜んで來てゐると云ふそのアヒサンで死なない――もう、棄てたのか？』
『あれはもツと大事な場合でなけりやア――』
『二度も三度も死ねる氣かい――うそを云つてらア。』
から云ふ對話もあつたのを思ふと、然し、また、今夜は、うちにゐないだけ、何も事件がありさうでない――まさか外で毒藥を服用しようとは！
渠は風邪の熱を出さうとして、水を大きなコップに三四杯飲み、獨りで寢どこを敷いて、そこへもぐり込んだ。
寢苦しいので、右を向いたり、左を向いたり、うつ伏しになつたりしながら、渠は女の歸りを待つた。――
お鳥は、おれに身をまかせる前に、ちよツと朝鮮人へ目見えに行つたことがあるぞ！　然しあれは仲働きの候補で、いやだから一日でよしたと云つた。
質屋の隱居のめかけでいいなら、十圓の口があると、桂庵から聽いて來たこともあるさうだ。
おれのところへ來てから、病院通ひの外は、さう獨りで出步いたことはない。
『どうせ、あたいは日かげの身だ――恥かしうて、うか／＼外へも出られん』と云つてゐた。――
渠は苦しいので左を向いた。
『けれども、どうせこんな身分でゐるときまつたら、お前のやうな貧乏人は相手にしやせん。』――ひよツとすると、ああ云ふつもりで、

何かの野心を起したのぢやアなからうか？
　あの氷川の森かげの下女細君、あれがそんな風な口をかけてゐるのぢやアないか知らん？一度手紙が來てから、よくあすこへ行きく〜する。――
　渠は右を向いた。
　今夜も亦あすこなら、高が知れてゐる――が、――あいつは、二三軒の口入れ屋を歩いた經驗がある。いざとならば、今度は大膽にその暖簾をくぐれよう――？
　現に、この隣りの桂庵婆アさんも、こなひだ、變なぞをかけたと云つた。あの婆アさんは、おれのおやぢの生きてる代から、おれのうちへ出入りしてゐたのが分つた。して見ると、今は逃げて去つた繼母がまだゐる時、繼母がお鳥を第一に紹介した口入れ屋はこの隣りであつたらう。
『下らないことを――』と自分で云つて、また寢返りした。
　繼母を愛してゐた父は死んだ――その葬式はまだその時生きてゐた隣りの和尚さんに頼んだが、おれはどんな形式で以つてでも宗教家の手で葬られたくない。これはおれの主義だ――まさかの時の爲めに、おれは千代子にも、お鳥にも云つて聽かせた、おれがおれを去る時は、決しておれの主義を恥かしめるなと。
　宗教――形骸ではないか？たとひ宗教心――はあるとしても、却つて宗教その物にはない。生その物に執着する努力を宗教心と云ふなら、刹那々々の實生活がそれだ。今のおれの苦悶が即ち宗教心だ。――
　いつのまにか、渠は、仙臺の耶蘇教學校にゐる時、松島へ行つて度々獨禪をしたことや、中學教師をしてゐる時、毎土曜日から日曜日にかけて比叡山へ登り、いろんな經文を調べたことなどを思ひ出してゐた。すると、自分の義兄の幼時からの遊び仲間であつて、自分の尊敬してゐた比叡山の僧で、十五年も山中の行をしたものが、行を終へて下山すると直ぐ、村の女の爲めに墮落したと云ふ記憶が伴つた。
　然し實際は墮落ではない、人間として當り前になつたのだ！――
　渠はうつ伏しになつた。
　何だか、から――寂しいやうな――身輕になつたやうな――サツぱりしたやうな――足かけ二年を初めて獨り寢をしてゐるのであつた。
　どこかの嚴粛な教會で讃美歌の聲とオルガンの音とがよく揃つて、その中へ惡念や惡物が何もかも消えて行くやうな――どこかの靜寂な本堂で蠟燭の光が眞ッ直ぐに燃えて、永劫の聲が聽えるやうな――そんな氣分にもなつた。
　今一度女や事業を遠ざけて、世外の人になつても見たい――が、――或山の荒廢した堂内で一夜を明かした時、おれは狸でも狐でも出て來て呉れた方がいいと思つた。周圍の山林を吹きまくる風が唯一の親しい物であつた。が――その――その風は何だ？矢ッ張り、今感じた永劫の聲だ――讃美の歌だ！
『形を以つて形を追つてゐたのだ。』まだく〜そんな低級な自分ではない――自分には少くとも一種の哲想がある。否、その哲想を自由に具體化した生活がある。これはいつかは小說にも表現して見なければならないと思ふと、直ぐ又ほんの筆さき專門の作家や世の雜輩連の雜評に對して、今から用意した侮蔑の念が浮んだ――渠等は哲想のテツの字も分らないのだ、まして哲想を自由に具體化した人物の描寫をやと。
　渠は又あを向けになつたが、左右に觸れるべきやはらか味の物はなかつた。そして自分のからだ中があせばんでゐるばかりが感じられた。
　然しこの病氣に苦しみ、女に苦しみ、事業に苦しみ、自分自身に苦しむ自分その物の熱とあせの

臭みとが、この場合、一番懐かしかつた。

がら〱と車の音がした。

下の障子や格子戸があいて、婆アさんが外へ出た樣子だ。

義雄も知つてる通り、かの女は、亭主が十一時から十二時までに歸りさへすれば、緣日商人の職業上當り前なので、喜んで出迎へるのである。そして、丁度可なりの傾斜を登つて來なければならないので、坂の中途まで行き、一緒になつてその荷車を押すのだ。

『今夜はどうだ、ね？』

『あんまりいいこともねい――もう、締めても――』

『まだ清水さんが歸らないんだよ。』

『へい――珍らしいことだ、なア。』

燗酒のにほひが實際にして來た。

錢勘定の音がちやら〱するにつれて、婆アさんが一心に銀貨と銅貨と、二錢銅と一錢銅とをより分けてゐるのが見えるやうだ。

渠は熱苦しくなつたからだをまたうつ伏しにして、

『あれでも渠等け滿足して生活して行けるのだが――』と考へてゐた。

直ぐこの隣りが切り開かれて、電車道になるのだが、まだ手がつけられてゐないので、電車の響きは遠くにばかり聽えてゐる。が、下では、もう、あかりを吹き消すけはひがした。

神田から御成門までの切符代が無かつたのか、惜しまれたのかして、曾ては、その間を歩いて、夜中の一時半頃に我善坊へ歸つて來たこともある女だが、一緒になつてからは、こんなに遲くまで留守にしたことはない――と、から思ひながら、渠は額を枕の切れに當てて、油あせを拭きつけた。

嫉妬のほむらがからだ中にみなぎつてゐたのであつて、闇の中にも、壁に垂れた鬱金木綿の三味線胴や、衣紋竹にお鳥のぬけ出した不斷着などが見えるのがいやさに、堅く目をつぶつてその目を枕に押し伏せた。

『けふも、おれの留守に來やアがつたと云ふ加集の奴、たうとう物にしたのぢやアないか？』

渠はもツと早くかの女を斷つ筈であつたのだと悔んだ。

二

女優志願の件も、本人の柄が向くまいと云ふことで、話の緣は切れたのだが、義雄はこれをお鳥にはツきりとは告げなかつた。告げると直ぐ、また裁縫學校へ入れて吳れがうるさいにきまつてゐた。

學校に入れるどころではない、お鳥その物とも、どうせ手を切つてしまふのだと、義雄は思つた――その時期は、樺太へ出發する時で、その後は、こちらに治療の責任ある例の病氣その他に就いて何と云つてよこしても、もう、返事をしなければいい。ただ可哀さうだから、返してやりたいのは、あの質物で――事業の先發隊の用意の金をすべて持つて行かせたあとで、直ぐ、なほ追加の空鑵材料を送つた時、金に困つてゐたのを見て、案外にも、お鳥は自分の所有物を提供して多少の手助けをして吳れた。その所有物の中には、母のかたみだと云ふ桐に鳳凰か何かの縫ひをした玉子色の繻子の帶や、水淺黃の奉書紬の裾に濱千鳥の縫ひある衣物などもある。この衣物、この帶を締めて、今年の一月元旦に、かの女は自分と共に並んで寫眞を取つたが、如何にも野暮臭い花嫁が現はれた。

『兎に角、あの品だけは、どうしても、出してやるよ』と、義雄は時々念を押した。

『あたいをさへ可愛がりやア、あんな物はやる、さ』と、お鳥は、不斷その品ばかりを心配してゐ

るにも拘らず、平氣で云つたことがある。
『まだ、ね』と、輕く受けて、『おれの一身を田舍婆々アのかたみ位でふん縛ることは勿體ないよ。』
『では、直ぐに質屋から出して來い』と、かの女は怒つた。
あれを出してやらうか、それとも暗に手切れ金のつもりで新らしい衣物を一つ買つてやらうか、どッちを選ばうかと考へる日が義雄に來た。
『おい、何か衣物を欲しいことはないか、ね？』
『買うて呉れる』と、かの女は急に喜んでやはらかに首をかしげたが、『では、セルが欲しい。』
その日、義雄は不時に這入つた原稿料をふところにして、かの女と共に白木屋へ行つた。二階は棚浚ひの爲めに賑はつてゐて、かの女は一方の端から他方の端まで熱心に見て歩いても、買ひたい物が澤山あつて、豫定額の中をどれで滿たせばいいのか分らなくなつた。
『どれにしよ』と、のぼせ加減にかの女はあとについて來た義雄を返り見たが、渠はかうして別れることばかり考へてゐたので、ただ腫れ物をそッとして置くやうな氣で返事をした、
『どれでも好きなものを買へばいいだらう。』
『……』かの女は、渠をふり棄てるやうにして、反對の側に足を運ばせたので、渠は椅子に腰かけて、圓テブルの上のマチを取りあげた。
そして去年の暮の大晦日に、粗末なのだが、蒲團を一組買ひに出た時のことを思ひ出してゐた。案外安く買へたのが愉快であつたので、その餘勢で麻布簞笥町の通りを赤坂の新町まで古道具屋や夜店などをひやかして歩き、古物の火鉢を約束したり、火ばしや餅あみを買つたり、――そしてそれがまかつたり、添へ物をさせたりするのが面白さに、入らない物まで値切つて見た。
『そんなに使たら、あとで困るぢやないか』と、お鳥の方から注意をした。が、それでもなほ、自分には、いろんなこざ〳〵した物を買ひながら、店から店を渡る興味が盡きなかつた。
そして自分とお鳥とは、共に兩方の手に持ち切れないほど、日常の必要物や化粧品や食物の皮包を持つてゐた。
『けふの氣分は、然し、丸で違ふ』と、義雄はわざとゆッくり煙を吹きながら、お鳥を初め、多くの婦人連がちよこ〳〵と屈んでは歩み、歩んでは屈み、順ぐりに同じ切れをいぢつては行く樣子を傍觀してゐた。
『ちよッと來てな』と、お鳥はあわただしく顏をしかめて呼びに來た。そして義雄が立ちあがると、あたりに人がゐるのも構はず、渠の袂をぐッと引ッ張つて、『ちッとも一緒に見て呉れへん――人に買はれてしもたらどうする！』
かの女は急いで白羽二重の夏帶地ばかりかかつてゐるところへ行き、その一つの端を攫んだと思ふと、一人の女の後ろを越えて、また向うにある一つの端を取つた。そして引き締つた笑がほで、
『どッちがええだろ？』
中に圍まれた女は、直ぐその下からくぐり出て、お鳥にちよッといやな目付きを投げた。
義雄は、かの女をしてぐづ〳〵と人の邪魔をさせて置くにも及ぶまいと思つたので、わけも無く自分の方のをあごを以つて示し、
『これがいいだらう』と、尤もらしく答へた。で、かの女は他方のを放したが、かの女の手に殘つたのには、竹に雀の墨繪が書いてあつた。
『では、これと下で見たセルとにしよか？』
『ぢやア、さうしなよ。』
渠はこの二つの品に半襟を一つ加へてやり、これが代金を拂つてから、食堂で木原店の汁粉を取り寄せた。

二

お鳥が最終電車に間に合はないほどの時刻に歸つて來たことが、今一回あつた。そして矢ツ張り、前回と同じやうに、氷川の森蔭の細君のところへ行つてゐたのだ。そしてあの人がいろんなおどけた話をして歸さなかつたものだから、つい、また遲くなつたと申しわけをした。そしてまた、あの人がこッちを引きとめてゐたのは、亭主の留守が寂しいからであつたのだから、あのいやな白髮ぢぢイが歸つて來ると、人を直ぐ出て行けと云はないばかりにあしらつたと、訴へるやうに報告した。

けふ、初めて縫ひ上つたセルを着てゐるのをちらと見て、義雄はかの女がこれを見せびらかしに行つたのだ、な、と分つた。が、前回に於いて、既に女の夜遊びを懇々戒めて置いた言葉を破つたのを憤り切つてゐたので、何等の返事をもする氣にならなかつた。

かの女が義雄の枕もとに坐り、不斷通りの笑がほを見せたのを、渠は枕の上から睨み付け、おほきな聲を――下への遠慮の爲め――押しつぶすやうにして、

「馬鹿」と一喝した。「あんな女の相手をしてイて、うちをどうするんだ！」

「……」見る〱顏色を變へて、「うちなどありやアせんやないか？――そんなに可愛けりやア、早うあいつを追ひ出して、あたいを本妻にせい！」から云つて、かの女は力一杯に義雄を蒲團の上から兩手で突きのめした。

「……」義雄は返事をしないで、あを向いたまま、目をつぶつた。そしてこの女も駄目だ、かの千代子も駄目だ、また、父の遺産をすべて投げうつた事業も、あと僅か二百金の出來ない爲めに、すッかり時期を逸してしまふかも知れないと思つた時、寂しい、寂しい氣持ちが胸に迫つて、熱い涙が一滴自分の頬に傳つたのをおぼえた。

あかりを吹き消した音がしてから、直ぐだ――

「妻にして吳れ、妻にして吳れ」と、いつに無くこは張つたからだを、幾度も、かの女は義雄に投げつけた。「して吳れんと、殺すぞ」とも威かした。

それでも義雄は目を明けず、口も開かなかつた。うと〱と眠りに入りかけた頃、蒲團の一端が引ッ張れたのに氣が付いて、目をあけると、――いつのまにか枕もとに置いたランプがともされてゐて、――お鳥は褥をぬけ出で、蒲團の裾に當る押し入れの、賤やまな板を入れてある方の唐紙を靜かにあけた。

光があたまで遮られてゐるのを幸ひ、見ない振りで、細目に目をあけて、かの女の横顏を見ると、かげのせゐか、低い鼻まで鼻筋がくッきり通つてゐるやうに目を据ゑて、押し入れの中をのぞき、右の手に出齒庖丁を取り出した。

一度はぎよッとした爲めに、ねむ氣は全くさめてしまつたが、

「なに、くそ！」再び目をつぶつた。そして子供の時、空想的に望んで見たことが、今、多少の事實となつて來たと考へた。自分を「ぼんさん、ぼんさん」と云つて、よく菓子を吳れたり、下駄の鼻緒を直して吳れたりした、あの船乘りのかみさんだ。他に土方の男が出來た爲めに、亭主をくびり殺さうとした時、亭主が氣が附いてはね起きると、枕もとに出齒庖丁もあつた。その翌晩は船が大阪にとまる順番であつた。そしてその翌々晩に、歸つて來て、渠は前々夜に何事もなかつたかのやうに、毒婦の室に入つた。義雄はこんな大膽なおやぢになつて見たいと、おぼろげにだが、思つたことがある。「手切れの口實にはいい機會が來た」と覺悟して、渠は出來

るだけ息をゆるやかにしてゐた。

お鳥はソッと坐つたやうだ。その裾の下から押し出された空氣が、生あッたかく鼻を掠めて、一種のにほひがあつたのに、義雄は今更らのやうな氣がした。

自分には、これがかの女をいやになる心の條件の一大原因であるとも思はれた。

蒲團がめくれたかと思ふと、やがてひイやりした物が輕く、義雄の左から右の方へ、その喉の上を横切つた。

『さうだらう、威かしに過ぎない』とは口に出さないで、するりと顏をかの女の方から遠ざけて起き上り、『なによウする!』

『殺してやる! 殺してやる!』

その時は、もう、出齒は義雄の手に在つた。そして暫く、二人は無言で、睨み合つてゐた。

お鳥は下へおりて行つた。下の臺所へ他人の刃物をでも取りに行つたのかと心配してゐると、便所の戸を明ける音がした。

義雄は明けッ放しの押し入れから鰹節削りの小刀を取り出し、机の上のナイフと持つてゐた庖丁とを合はせて、自分の寢てゐた側の敷蒲團の下に隱した。そしてかの女と入れかはりに便所に行くふりをして下におり、臺所を探して見ると、下の人の使ふ庖丁はあつたので、これをいつもの位置とは違つてちよッと氣がつき難いところに置いた。渠があがつて來たら、かの女は渠の机のあたりにまご／＼してゐたが、また押し入れへ行つて、頻りに何かを探し始めた。

『ナイフも小刀もあるものかい』と、心に語りながら、義雄は堅い物を脇腹の横に避けて、それでもこれを少し押さへるやうにして、もとの通りに横たはつた。

渠がその翌朝の十時頃に目をさますと、平生の通り飯の支度は出來てゐた。が、二人は無言で食事を終つた。

それからも、義雄は無言で新聞を讀み、便所に下り、また衣物を着かへた。そして書き終りかけの長篇評論の原稿と共に、四五册の參考書をすッかり引きまとめて、風呂敷に包まうとしてゐると、お鳥は離れた方の窓下で足を投げ出し、片肱を突いて自分の裾から出た桃色ネルの端とこちらとを見比べながら、少しも小だはりの無い聲で云つた、

『どこへ行くの?』

『……』義雄は、もう、これッ切りこの座敷へあがる必要はないと決心してゐたので、返事もしたくなかつた。

『ええ、どこへ行くの?』その聲は一段と優しくなつてゐた。

『……』

『默つて行くなら、あたいも行く』と、異樣な顫へをさへ帶びて來た。

『來たッて仕やうがない、さ』と、止むを得ずこれに應じて、うそは云ひたくなかつたが、『原稿料を取りに行くのだから、ね。』

かう云つて包みをかッ淺ふやうにしてこれをかかへるが早いか、立ち上つてはしご段の下り口まで行つた。

『ちよッと待つて』と、お鳥は息をはずませて起きあがつて來て、義雄の袖を握つた。そしてそッと段の下の方をのぞいて見てから、もとの窓ぎはの方へ義雄を無言でぐん／＼引ッ張つて行き、窪んで青みがかつた眼で、ぢッと力強く命令するやうに渠の顏を見詰め、かの女は先づその白い幅ッたい顏をのぼせさせてゐた。

一三

『向うの愛情が熱して來ただけに、却つて始末に終へ難いのだ』と、義雄はその日加集の宿にかけ込んで、お鳥のことを訴へるやうに語つた。

そしてかの女と手を切る爲めの奔走をして貰ふやうに頼んだ。――質物は金が出來次第出してやること、病氣は直るまで改めて治療させてやること、この二ケ條を條件として。

加集は喜んで引き受けた。そして直ぐお鳥のところへ出かけた。もう、くッ付くなり、何となりしろと、義雄は心を落ち着けて、渠の留守二階で、渠の自炊兼用の机に向ひ原稿の續きを書いてゐた。

すると渠は間もなく歸つて來た。手には馬肉の新聞紙包を持つてゐたが、

「えらいおこりやうだで、なア」と云ひながら、その包みを投げ出し、また背廣のポケトから正宗の二瓶を出して、義雄のそばにあぐらをかいた。

『また馬肉かい？』

『うん――うまいぢやないか？』

義雄は去年癆病で苦しんだ頃、この肉が藥になると聽いて頻りに喰つたことがある。

そして加集は能くそのお相伴をしたのであつた。

「おこつてるッて？」

『丸ツ切り、あいつア氣違ひぢや、なア。』

「おこつたッて、仕かたがないぢやアないか？」

『おれに、お前のやうなものは仲へ立つて貰はん云やがつたぜ。』

「ぢやア、どうすると云ふのだ？」

『直接に話を付ける云うた――おれのうちに隱れてるに違ひない云うて、こはい顏でにらみ腐つた。』

「ここを知る筈アなからう――？」

「無論だ――自分で自分のからだをひツかいたり、君の雜誌を引裂いたり、あのざまを君に見せたかつたよ。」

『うツちやつて置く、さ。』

『歸りに下の婆アさんにさう云うたら、あいつも失敬なやツちや、丁度いいからおれに貰つてやれと、さ。』と笑ひながら、「馬鹿にしてやがる！」

「……」義雄はちよツと加集の顏色を見たら、何だか得意さうであつた。どうともさせて置くがいい、さ、――おれだツて、もう、二度と再び喉を出しちやアゐられないから、ね。』

「今度こそ、見つかつたら、ひどい目に會ふぞ。」

「ふ、ふん」と、義雄も心配さうに笑つた。

「然しやつて來る氣づかひは無いし、なア」と、加集は立ちあがりながら、『まア、一杯やろか――久し振りだ。』

この時、がらりと下の格子戸が明いて、女の聲がした。義雄は身の毛がよだつた。

加集は拔き足して行つて、下り口から下をのぞいてゐたが、

「なんぢやい」と、棄てぜりふで云つて、にこにこ戻つて來て、「廣告摺りを取りに來たんぢや――美人やで。」

義雄はちツぽけな一私人の印刷屋の二階にゐるのに氣が附いて、ふと窓の外に目を遮り、家根から通りへ傾いてゐる大きな横看板の裏を見た。そしてこんな家の主人を相手に何か共同の發展をしようとしてゐる友人の、大して望みありさうでもない努力を戒める氣になつた。

『晩飯にやア早過ぎるが』と云ひながらも、二人は自分等で拵へた食事を始めようとしてゐる時、加集への訪問客があつた。

「鶴田君ぢやで」と、加集は肩をすくめて義雄を見た。そして低い聲で、「あの金が出來たんなら、うまいが、なア。』

飛び下りるやうにして迎へに行き、加集はこの鶴田と云ふ築地橋そばの人をも仲間に加へた。

『お約束の金は』と、鶴田はちよツと義雄に改

まつて云つた、「いよ〳〵近々戻つて來ますから。」

「さうすれば、僕も」と、義雄の心では、その嬉しさよりも、寧ろお鳥の追跡を避けることが出來るのを、この場合、一番の幸ひだとして、「出發が直ぐにも出來るのです。」

食事が終つてから、三人は玉突に出かけた。

そしてその夜は、義雄は加集と共に加集の二階へ歸つて來て、二人で一組の蒲團を引ッ張り合つて眠つた。

翌朝義雄が目を覺ました時、もう、加集は昨夜斷つてゐた通り、外出してゐなかつた。そして下の時計が十時を打つのを數へたが、自分は起きる氣にならなかつた。―若し人間が人間を忘れ、自分が自分をどうでもいいとならば、家が人のであらうが、仕事が自分に迫つてゐようが、このまま斯うして、自分が寢飽きるか、人が追ッ拂ふかするまで、ぐッすり寢つづけてゐたいものだと。

渠は仰向けにからだを延ばして見た時、これまであくせくと考へたり、働いたりして來たことの結果をすべて吐き出すやうなあくびを一つした。そして自分が持つて來た書物を座蒲團で卷いた枕の方へ無意味に兩眼を流れ出で、兩方のもみあげのあたりを傳ふ、生ぬるい淚じるを手の平で押しぬぐつた。

また、うと〳〵して見たが、直ぐまた目が覺めた。下の印刷屋の格子戸が度々明いたり、締つたりする忙しさは、自分のあたまで通つて來た之までの忙しさと同じやうだと思つた時、今度格子戸を明けるのが若しお鳥であつたらどうだ？　うか〳〵してゐて、なまなか柔術知りの女に寢込みでも襲はれたら？

兎に角、渠は思ひ切つてはね起きた。さうして下で顏を洗つてから、近所の牛乳屋へ新聞を讀みに行つた。樺太のカラの字だけにでも注意を集めるやうになつてゐる渠は、或新聞に、あちらの罐詰製造の景氣が今年はよかりさうだと書いてあつたのを見ては、微笑しないではゐられなかつたが、誰れもかれもと小資本の製造所が出來て、その競爭の結果、原料なる蟹の價段があがるばかりだとあつたのには、少からず心配の念をいだいた。もう五月の半ばを過ぎたのだ、これから大切な六月一杯にかけて、早く效果を擧げさせなければ――

午後の五時頃まで待つてゐると、「暑い、なア」と云つて、加集は歸つて來た。「二千五百圓の宅地をあの○○に」と、國から出た先輩の名を擧げ、『買はせようとしてるけれど、なか〳〵買はんて――ついでに、またあいつのとこへ寄つて來たが、なア、ゐなかつたで。おれのうちを搜してるのぢや、なア。ゆうべもおそくまで留守にして、歸つて來ると、直ぐ君のヴァイオリンも三味線も皆たたき毀したさうぢや。」

「いッそのこと、あいつのからだもたたき毀れたら、胸拔けがするア、ね。」

「きつう、おこつてるんぢやで――おッそろしいぞ、あいつのことだから――鼻にえらい皺を寄せて、きのふも殺す云うてたから、なア。」

この時、下の格子戸が明いたやうであつたが、

「加集さんはをりますか」と、靜かに氣取つた聲がしたのは、確かにお鳥だ。

『たうとう來やアがつた』と、義雄は低語したが、その調子が引き締つてゐたのを身づからもおぼえた。それから少しのぼせたやうに調子がぐらついて、「どうして分つたらう？」

『加集さん、お客さんですよ』と、下のかみさんがうは付いた聲をかけた。

「へ――さア」と立ちあがつたが、義雄の方をふり返り、「不思議ぢやが、――君は、まア、早

く歸れよ。』

義雄も急いで、机の硯箱とそばの書物とをまとめて、風呂敷に包んでゐる時、お鳥は加集のあとから歸つて來た。

とツつきの三疊の間から、おもての六疊へ這入つたところに突ツ立ち、悲しみを忍ぶやうな、そして火照り、堪へ切れないやうな顏をして、かの女は義雄を睨み下ろした。

『どうして、また、分つたのだ?』義雄は頰のびくびくし出した顏にわざと笑ひを湛へさせて、下から見あげた。疊の縦の長さほどは距離があつたが、若し飛びかかつてでも來たらと云ふ用意に、右の方を立て膝にしてゐた。

『畜生!』かの女は叫ぶ一言して、全身の力を籠めたやうにからだを振つた。

『さう、さ――お前も畜生なら、おれも畜生、さ、然し、ねえ、向うを荒立たせないつもりで言葉を優しくして、おれの方はよく分つた條件を加集君まで持ち出してあるのだぞ!』

『あんな者の云ふことなど聽かんよ!』

『ふ、ふん』と、加集はかの女の正面に當るところにあぐらの片膝を抱いて、にやり／＼笑つてゐた。

『逃げたいでも、直接に話をきめる!』

『こんな場合に、お前とおれとでかたを付けるなんて、出來るものか?――兎に角、おれは加集君にまかせてあるから、ね。』ちよッと加集を見て立ちあがりながら、『僕は失敬するよ。』

『では、おれがいなくてもよく云ふから心配するな。』

『逃げないでもええ!　云ふことがある!』まだ睨みつづけてゐて、かの女の息は迫つてゐた。

『おれは、もう、二度とお前の顏を見たいとは思はないよ。』かう云つて、次の間へ行かうとした時、かの女は忍び切れなくなつて、兩手を圍ふて飛びかかつて來た。

『何をする!』義雄は本氣みをかかへない右の方の手でかの女の右の手くびを握りとめた。見れば、方式通り、拇指を中にして他の指でそれを固めてゐるが、こんな用意をしたにも似合はず、少しも力が這入つてゐなかつたので、『まだおれに手頼る氣でゐる、な』と感じた。そして强くふり放さうとしたのを加減して、形ばかり勢ひよくふり放した時、自分の手と女の手とが逆につるりとすべり合つたので、その肌のすべッこさが惜しめた。

が、時の勢ひがあと戻りをさせなかつた。全く未練の無いやうな強さを見せて、障子を締め切り、ずん／＼下へ下りた。

自分の締めた障子が明くのを恐れたが、そんなけはひは無かつた。

采女町と木挽町四丁目とを継續してゐる通りで、ここの印刷屋の横町を拔けると、直ぐ木挽橋へ出られた。義雄は通りの方へ歸つて行くのを、二階から加集に見られるのもあんまり面白いものではないと思つて、直ぐこの横町の細い溝板を渡つて、三十間堀のふちへ出た。

あとからお鳥が追ッかけて來はしないかと云ふ恐れにばかり追はれて、おづ／＼と急いで橋のきわまでは來たが、いよ／＼これを渡らうとする時になつて、どうしても足が進まなかつた。追ッかけて來るものが無いだけ、寂しいやうな氣がして、二足三足戻つても見た。が、思ひ切つてまた一二歩踏み出して橋の方へ進んで、ぴたりと立ちどまつた。この時は、もう、加集に對する嫉妬の念が胸一杯に充ち滿ちて、あたまがぼうとまでしてゐた。

『若しや、けふ、あいつが立ち寄つた時、お鳥にこと更らに自分の住所を知らせて置いで、直ぐあとからやつて來いと云つて置いたのではなからうか?』堪らないほどもや／＼して來た胸

を押さへて、渠は跡もどりをした。
印刷屋の格子をあけて締めた時には、自分の女房を寢取られてる現場を見た心持ちも斯うだらうと思へる程、義雄のあたまに血がのぼつてゐたのをおぼえた。
印刷機械の一部や印刷紙などを積み重ねてある間のはしご段を、づか／＼とあがつて行つて、三疊と六疊との間の障子をすツと明けた。注意したつもりのが、あまり勢ひよく明いて、柱にぴたりとあたつた。
『どうした』と、加集も多少びツくりして眉根をあげたのが、左右に引ツ張れて、ゆるい八の字に見えた。が、先刻と同じところに、同じやうな坐り方をしてゐた。
お鳥は、然し、横になつて、加集が車に乘る時に使ふ膝かけをその上にかけてゐた。
『燒けになつて、愼しみを失つたのか』と云つてやりたかつた。「いや、おれと別れたら、直ぐ困ることは知れ切つてるから、加集の意を迎へるつもりだらう」とも思つた。
かうなれば、もう、嫉妬よりも侮蔑の氣が勝つて來て、義雄は多少心を落ち付けた。
『なアに、ね』と坐り込み、『矢張り、僕が直接に、おだやかに、云つて聽かせた方がいいと考へ直したから――』
『もう、云うて入らん』と、お鳥の上の膝かけが動いた。
『お鳥さんも大分わかつたやうだから、今少し氣を落ち付けさせる爲め、――少し――休むやうに僕が云うたんぢや――僕も君の友人だから、君の爲めになるやうに計るによつて、なア、心配するな。』
『ぢやア、矢張り君に頼んで置くとしよう』と云つて、また立ちあがつた。もう、渠はどちらにも未練らしく言葉をつづけたくなかつた。
そこを出て、再び溝板の横町を通り拔け、木挽橋を渡り、竹川町で品川行きの電車に乘つた。多少すツとして輕い氣持ちになつた時、さツきから左の腕にかかへてゐる書物の重さをおぼえた。
『どこへ行つて仕事をするつもりだ？』かう云つて、自問自答をして見たが、どうしても自分の我善坊の家へ歸る氣にはなれなかつた。
宇田川町で電車を下り、御成門の方へ一直線に急ぎ、またの電車線を横切つて、自分がきのふまで陣取つてゐたところに行つて見た。が、そこへもあがる氣がしないので、格子を這入つたところの疊に腰かけて、それと無くお鳥の昨夜來の樣子を聽いた。
婆アさんが迷惑がつた顏つきをして、昨夜のあり樣を――加集にも同じ調子で語つたと思はれるやうに――語り、
『ゆうべ初めて分つたのですが、ね、あんたおそろしい方は、もう、眞ツ平です、わ――燒けになつていつこの家へ火付けをされないものでも無いのですから、ねえ――わたしも夜おそくまでたツた獨りでゐるものですもの、いざと云ふ場合にやア、女一人でどうすることも出來ません、わ、ね。』
「まさか、そんなことも――」
『いいえ、あなた、どうして――清水さんもまだあなたに未練があるやうですが、あなたもまだ思ひ切れないのでせう？』
『僕は、もう、大丈夫ですよ。』
『尤もそれが奧さんの爲めです、わ、ね――清水さんのやうな方は、あなたもさん／″＼もて遊んだのでせう、もう、あの、加集さんにくツ付けておやんなさいよ、大した代物でもないぢやアありませんか、ねえ。』
『どうとも勝手にさせますとも！』
間代は既に今月中拂つてあるので、それ以後

自分の責任は無いからと云つて、善雄が立ちかけると、婆アさんは思ひ出したやうに、ゆうべ、我善坊の千代子がやつて來て、相變らずやきやき云ひながら、弟が病氣で入院したと云ふ樺太からの電報を見せたことを告げた。

それでも渠はこの坂を向うへ越える氣になれないで、再び御成門の方へ引ッ返した。

『自分の家が無くなつたのだ！　そして例の金が揃はないぢやア、弟の生命もどうなることか分らない！』

から心に叫んで、久しく行き絶えてゐた濱町の怪しい家へこの夜を明しに行くと決心した、そこで小仕事に短い原稿を書いて、本夜の費用にすればいいからと。

一四

翌朝、獨りになつてからまた一寢入りしたが、起きて近處の錢湯に行つて歸つて見ると、ゆうべから頼んで置いた使ひが歸つてゐて、或雜誌社からの稿料が來てゐた。費用を拂つて、なほ大分に殘りがあつた。

電車に乘る前に、朝昼兼帶のちよッとした食事を濟ませ、竹川町で下車して加集のところへ行つて見ると、渠は外出してゐなかつた。

また電車に乘つて三田の薩摩ッ原で下りた。渠は、罐の製造に必要なので釜を拵へさせたところを思ひ出したからである。

あの時、鑄釜なら、價段も安くて、どこにでもあつた。然し時によると熱湯の勢ひで破裂することがあると云ふので、鐵をうち鍛へさせることにした。

大人の手でも殆ど二かかへもあらうと云ふ圓みの、その高さは脊延びをして中をのぞくほどの釜であつた。その蓋口は密閉して熱湯の壓力をしッかりさへるだけの强さがあり、釜の横へ出して、また、その壓力測量機がついてゐた。

いよ／＼出來あがつたと云ふので、湯の代りに水を一杯に滿たせ、强壓力なポンプを以つてその上にまた水を送ると、壓力測量機の針がくる／＼とまはつた。その機械の根を締めて、また一段の力を與へると、今度は釜と蓋との密閉部から、水が多くの細い線となつて吹き出し、あたりにゐる人々の顏となく、胴となく、裾となく、ちよッとの間にずぶ濡れにしてしまつた。あまり廣くもないおもて庭を逃げまどつた人々でも、こちらでポンプの手をゆるめた後までも、飛ばッ尻を喰つてゐた。

沸騰點以上なほ四五十度の熱と同樣の壓力をかけたのであつたが、これではまだいけないと云ふことになり、密閉部の工合をもッと緻密に直させた。

そんな釜を厚い鐵板から鍛へあげさせたのである。それを、自分の身が形作られて行くやうな氣で、鍛工所へ見に行くのを善雄は毎日の樂しみにしてゐた。

とんかち！　とんかち！　とんかち！　そして赤くなつた鐵が段々に延びて行く。そして又延びて行くと同時に、半圓形になつて行く。

これを見て、初めて、渠は實際にどんな形の物であるかを想像し得たが、二つの半圓形の厚板がまだ全圓に合はされないうちのこと、自分はお鳥の二階に歸つて、晝間の工場であまりに目を見疲れさせた爲めに早寢をしたことがある。そして自分が熱鐵の板端に圍まれて、ぐん／＼と締め上げられた苦しみの夢を見た。

とんかち！　とんかち！　とんかち！　と云ふ音が遠く聽える氣がして毎朝目をさまし、食事が濟むと直ぐまた出かけた。

やがて兩半圓は會合した。そしてその會合部は、上から下まで、多くの大きな鋲を以つて固められた。そして又その鋲の個所々々も、

一たび熱せられて、打たれて、そして鍛へられて、釜の中の一部になつてしまつた。

それに瘤が出来た。また、茸が出来た。そして其れはアミーバがその形態を整へたやうにとんかちの音に別れた。

が、その音は今や自分の中にも微かに響いてゐた。

とんかち！　とんかち!!　とんかち！　鐵工所の門前に近づくほど、足の歩みが急かれて、その音が段々と明らかになつた。

門が見えると、渠は飛び込んだ。すると、また同じやうな釜が一つ出来あがつてゐた。

『そりやアどこ行きかね？』

『これですか』と、知り合ひの職工が答へた、『これは蟹の方ぢやアごわせん――どこか東京近在の註文です。』

『何に使ふのだらうね？』

『さア――旦那も、どうです、今一つ發展しちやア？』

『うまく行きやアね』と、義雄は微笑した。あちらがうまく行けば、この秋から朝鮮へ行つて、すつぽんの罐詰をやる計畫と研究とも出来てゐた。

そこを出てから、また行く先に迷つた。

愛宕町の大野を思ひ出したが、あの有樂座以來何だか興がさめてゐて、行く氣にならなかつた。

で、佐久間町の辯護士なる友人を久し振りで尋ね、玉突やら晩餐やらを一緒にしてから、再び加集のところへ行つて見た。が、午前からあの女と一緒に出た切りまだ歸宅しないと云ふ下宿のおかみさんの話なので、ぢやア、ゆうべはとまつたのかと聞くと、さうだと答へた。

ゐなければ待つてゐようともしてゐたのだが、果して察のぢやうなるこの事實が分つたので、待つのも馬鹿々々しくなつた。

で、時計を出して見ると、もう十時に近かつた。これからでは、もう、ゆうべのところへ行くより仕方が無かつた。

その翌朝、また小天宮前から電車に乗り、竹川町に下りて、性懲りもなくまた行つて見ると、果して加集はゐたが、義雄を見て不安さうな顏つきをした。義雄にはわざとお鳥のことは聽かずに、直ぐ金の話をした。

『どうだい、鶴田君は至急運ばせて呉れないか、ねえ？』

『さう迫いても仕やうがありやへん――外へ融通してあるのだが、今月末に返る云うてるのやさかい、なア。』

『ぢやア、そッちで少し都合が惡いから、今一ケ月待つて呉れいとでも云つて来られりやア、鶴田もそれツ切りだらう――？』

『そんなことは無い筈ぢや――それよりや、君の方が九月一杯に返せんと、僕までが面目ないで。』

『おれの方は大丈夫だよ――然し大丈夫、大丈夫ぢやア』と、義雄は少しどきまぎするのをさう見せないやうにして、『あいつを物にしたのかい？』から云つて、この點を突きとめさへすれば、もう、お鳥と手切れ條件の一つたる治療條件には御免を蒙らうと云ふ下心があつた。

『そんなことがあるもんか』と、輕く反らせようとした加集の顏には、どこかぼんやりしたやうな、とぼけたところが見えたと、義雄には思はれた。義雄がわざとらしくにやりとしてゐるのに對抗したやうに、『そないに疑ふなら、今度轉宿させるところへ行て見よか？』

『行かうとも！』

『では、早う行かんとかち合ふで――けふの午後二時頃に移つて行く筈ぢや。』

『どこだい？』

「八丁堀の電車通りの裏手ぢや。」

「さア、行かう」と、義雄は立ちあがつた。「おれも二度とは直接に會ひたくないから、ねえ。』

『會うてたまるもんかい、僕の君に對する奔走が無駄になつてしまふぢやないか？』

治療代はこツちで出し、本人はそツちで占める——そんな都合のいい計算は人間その物の十露盤上には無いぞと、義雄は云つてやりたかつた。

加集が道々話したに依ると、お鳥が渠の居どころを知つたのは渠が義雄に紹介した或書生のハガキが殘つてゐたからであつて、かの女はその書生を尋ねて、加集のところを知つたのだ。

二人は櫻橋で電車を下り、堀に添つて東へ入り、右へ曲つた通りへ來た。

一間ほどの窓格子の眞ン中に、一尺四方ばかりの額ぶちがかかつてゐて、その中に桃太郎や天狗やあかんべいいなどの繪が書いてあつて、そのまた右に「百面相」と云ふ横長の看板が出たところがあつた。その格子に「明間あり」の紙札が張つてあつたのを、加集はいきなり破り取つた。そして義雄を返り見て、低い聲で、

『ここぢや——失敬な奴ぢやないか、まだ札をはがしとりやへんのや、手附け金を取つてる癖に！」

『……』義雄は默つてちよツと苦笑ひしたが、その金だツて、こちらがお鳥に自分等二人の日常費として來月十五日までの分を渡してある、その中から出したにきまつてると思つた。

この百面相の窓格子のはづれと、どこかの倉との間に、一間四方あまりの空地があつた。そこにけち臭い氷屋の屋臺店が張つてあつた。

そのよし簀のかげに這入り、

「今日は」と、加集は聲をかけた。そして窓の奧から婆アさんが一人、横の濡れ縁のところへ出て來たのに向つて、「まだ來ませんか？』

『ええ、まだ——』

『もう、おッつけ來るでせう——君、この二階だよ」と、屋臺店の奧を高くゆび指した。

下は物置になつてゐるが、雨ざらしの大工ばしごを登つて見ると、六疊敷の座敷があつた。壁や天井裏はすべて新聞紙を張りまはしてあり、大きな大黑を書いた去年の柱ごよみと、石版摺りの美人繪とが壁に向ひ合つてゐる。通りに向つた方は、家に付いてあがり口を取つたあとが一杯に窓で、そのそとに二三の盆栽を並べた臺が、日よけの爲めに掛け垂らしたよし簀から透いて見える。

その簀の一端をあげて、義雄はそとへ出もしなささうなつぱをしようとしたら、その下に氷店のあんこが伏せてあるガラス蓋が目にとまつた。で、渠は顏を引ツ込めて、奧の片隅の高い小窓のそとは何であらうかと思つてのぞいて見ると、隣りの押し迫つた屋根の上であつた。

『わざ〳〵ひどい所を探したものだ、ねえ。」

「でも、安いよつて、なア——いくらだと思ふ？」

『いくらだツて、もう、おれア——』

そこへ二十四五の小綺麗なかみさんが茶を持つてあがつて來た。

『御主人はゐますか』と、加集はかの女に聲をかけた。

『けふは、〇〇の宮さんのとこへ招待されまして、つい、先刻出ましたが——』

『百面相ツて』と、義雄はまだ何のことか分らなかつたので、『どんなことをするのです？』

『をかしい藝人で』と、かの女は愛想笑ひをしながら、『ほんの、道樂が高じてこんな商賣をすることになつたのださうです。』

『きのふ、本人が』と、加集は得意さうな顏つきで、『どこか呼んでくれる宴會でもあつたら、世話して呉れと云うてた。』

『そりやア何だか面白さうな仕事でせう、ね』と、義雄は笑ひながら。
『いえ、ほんの、道樂で――』
『藝が面白いよりや』と、加集が受けて、『本人が面白さうな人間ぢやて。』
『さうだらう、ね――そして氷の方もあなたのうちで――？』
『へい――』
『おい、一つやろか？』
『さア――』と、義雄は應じかねた。喉が渇いてゐて、こんな應對をしてゐるのさへ舌がくッ付き氣味であつたのだが、第一に何だかきたならしいやうな氣がした。第二に、また、ここにぐづぐづしてゐられなかつた。『來ないうちに出ようぢやアないか？』
『では、おかみさん。』加集も立ちあがつて、『來たら、よろしう賴んます。』
それから電車通りへ出て、二人は氷を飮んで別れた。

一五

義雄はかかへてゐる長篇評論の結末を書かなければ、自分自身のその日、その日をささへる金にさへ困るにきまつてるのだが、落ち付いて書く場所がなかつた。
この原稿を依賴した社へでも遊びに行つて見ようかと考へたが、まだ書きあげないのを持つて遊びに行つたとて、無責任としか見られないのにきまつてゐた。
渠はふと大野を訪うて見たくなつた。そしてその細君とも話をして、いよいよ清水と手を切つたことを報告したくなつた。
で、愛宕の塔下へ訪ねて行つたが、生憎、大野は留守であつた。細君はゐるとのことだが、子供達がぎやアぎやア云つてゐるのが聽えたので、――子供と云ふものはその聲だけでも聽くさへ、義雄にはいやなので――あがる氣にはなれなかつた。
轉じて四谷へ行き、或婦人の獨身者を訪問した。この婦人は渠を冷かし半分で、
『なぜあたしを口說いて見なかつたの』と云つたことがある。
『どうせ口說いたッて、物にならうとは思へない人だから、ね』と、渠は眞面目に答へた。そして今日まで二人の交際は少しの氣まづさも無く續いて來た。渠には、今更らの如く、かう云ふ交際が却つて無事で而も懷かしみもあるものであつたことが分つて來た。
かの女が某華族の夫人と共に催した或慈善音樂會に於いて、渠は一場の演說をしたこともあつた。かの女の家でかの女と婦人論を爭つて、その母親に喧嘩してゐるのではないかと思はせたこともある。かの女の紹介で、何物であるかまだかの女にも分らない或美人――實際の美人であつた――を訪ねて行つて、その生活の樣子を探つて見たこともある。かの女が玉突屋營業のレストランをやつて見ようと云ふ出來心を起した時、無駄であつたが、いろんな助力を與へたこともある。
そんな關係で、渠が清水鳥と云ふ女に熱心になつてゐたことも、かの女は渠から聽いてよく知つてゐた。が、渠がいよいよ樺太へ出發する折は、そのお鳥を預かつて吳れないかと賴んで見た時、これは三ケ月ほど前のことだが、
『そんなきたならしい病氣の人なんて、あたしいやです、わ』と、かの女は半ば怒つて、はね付けた。それでも渠はこの婦人には當り前の返事だと思つて、惡い氣はしなかつた。
『もう、この婦人しか無い、今の自分の心持ちを持つて行きどころは――その、いつもの忠告通り、女と手を切つたことをうち明け、叱られて、笑はれて、半ば同情の言葉を得て、二三時

間だけでも、自分の落ち付きどころを借りて見よう、と、玄關の格子戸を明けたのであつたが、母親なる人が出て來て、こゝも亦あての人の留守であるのを報じた。そしてこの老母が先づ旅の話を持ち出して、

『いつ、あなたはお立ちになりますか、ね？』

「もう、四五日中だと思ひます」と、義雄はわけもないやうに答へた。

人や自轉車の行きかふ間をよけながら、渠は全く途方に暮れた。

あまり好きでも無い酒を呼ぶ爲めに、肉屋やバーに這入る氣もなかつた。

「今一度お鳥の新居へ行つて見よう！」から云ふほんの氣が僅かに渠の心を占領したのは、渠が四谷見附けを這入り、麹町八丁目近くまで歩いた頃であつた。

渠がまた八丁堀へ行つた時に、もうお鳥は離れの六疊敷をかたづけて、角火鉢にかけたゆき平の下を吹いてゐた。

渠は、先刻の若いかみさんが火をかいてゐるのにちよツと挨拶して、はしごをあがつて行き、半ばそのからだを現はした時、自分はこはい顏をしてゐる筈であつたが、つい、笑みを漏らした。

かの女も亦こちらを返り見て、にツこりとした。そして常にさへ珍らしかつたほどの優しみと嬉しみとを籠めた目付きで、こちらを見つづけた。

『このざまはどうだ！』から、平生と違はない態度で云つて、渠はかの女の大きな廂髪の上にたかつた灰を指のさきで輕く拂つてやつた。それからそのそばにあぐらをかいて、「どうだ、御機嫌は？」

『知らん！』から云つて、かの女は渠のからだを兩手で突き飛ばした。片手を後ろに突いた渠が、何とも云へなくなつて、眞面目な顏であぐらに直つたのを、かの女は前とは丸で違つた顏でにらみ付けて、

「衣物を買うて呉れたおもたら、手切れの爲めやなんて、加集に云うて――死んでお呉れ、あたいも死ぬさかい！」

「うん」と、横へ向いてはづしながら、「死ぬのは、いつでも死ねるよ。おれなどア、どうして生きて行くかが眞底からの問題だ。」

『お前だけ生きたら、ええのだろ――あたいをどうするつもりや？』

「捨てる神があれば、ね」と、渠は今度はかの女を冷やかに見て、「また拾ふ神もあり、さ。」

「神などありやアせん」と、かの女は目で渠を遠ざかるやうな色を見せた。

『ぢやア、加集をどうしたんだ、あの晩にとまつて――また、その次ぎのゆうべもだらう？』

『そんなことはない！』熱心にこちらを睨んで、訴へるやうに、「ゆうべうちで寢ようとしたら、あの婆々アがあがつて來て、早く立ちのいて呉れ云うた位ぢやないか？　どうせ出るにきまつてゐたさかい、さう云うてやつたら、變な顏をしたけれど――人を棄てたり、人に恥ぢをかかせたりして！』情なさそうにべそをかいた。

「そりやア、お前が分らないから、さ。」

「そツちやが分らないのぢや――誰れが、いつまでも、おかけなどになつてゐるもんか？」

「さうして、何かい、加集の足かけなどになつたのか？」

「そんなことは無い！」かの女は怒つたやうに膝に力を入れて、疊にぶつけ、[illegible]くちやにして見せた。

「その顏が、お前の見えすいたうその手だよ――もう、ちやんと、おれにやア分つてるのだから、ね。」

『……』かの女は眞顔になつて目を少し落して、義雄の讀みかける視線を避けたが、また見あげて、あまえるやうに、『そんなら、何で來た？　歸つて貰ふ……』

『ふん――こんな詰らない部屋でも、ねえ、おい、前金を拂つたに相違ない以上は、おれが借り主だらうぜ。』

『では』と、かの女は尋常な顔になつて、『人を棄てたりせんでもえゝぢやないか？』

『然し、ね』と、義雄はわざと落ち付き拂つて、卷煙草を袂から出しながら、『お前とおれとは、もう、もとの通りにやア行かないよ。』

『どうして、さ？』かの女に、不思議さうに。

『二人の間には、第一、出齒庖丁が這入つた。』

『……』

『それから、加集が這入つた。』

『そんなことは無い』と、また顔をしかめた。

ゆき平がぷう／＼吹いてゐたので、かの女はその蓋を取つた。飯が煮えたのだ。

『誰れの爲めに焚けたのだ、ね――おさしつかへは御座いますまいか？』

『丁度えゝとこぢやさかい』と、かの女は渠の冷かしには頓着せず、ゆき平をおろして、『何か買うて來か？』

『さうだ、ねえ――』と、義雄は手を懷ろに入れかけた。

『お金はこツちにもある――けふも、あんまり癪にさはつたさかい、あの婆々アから間代の五日分だけ取り返して來てやつた。』から云つて、かの女は喜んでゐた。

かの女は町に正宗一本とかれいを一尾と買つて來て、晩ごしらへが出來た頃、加集が案内もせずあがつて來た。

『來てるのか、君』と、渠は間の惡いやうな顔をして立つた。

『ああ。』義雄は、食膳代用の机に向つたまま、惡びれずに返事をした。『おれにやア、行くところも、ゐるところも無いんだ、――まア、一緒に一杯やらう――坐り給へ。』

『僕も一本あるぞ』と苦笑しながら、ポケットから取り出したのをしほに、義雄と相對して腰をおろした。そしてからだを横にして、瓶を女の方につき出し、『お鳥さん、これもついでにつけてお呉れ。』

『……』かの女はちよツとふり返つたが、取り合はなかつた。

『あれから、なア、また○○の』と、先輩の名を擧げて、『とこへ行て來たんぢや――銀行家なんて、なか／＼けちんぼで、なア。』

『二千五百圓の宅地とかでかい――まア、つがふ』と、義雄は加集と自分との猪口に出來た酒を注いだ。

渠はお鳥に命じて、加集の持つて來た正宗をも燗しろと云つたが、かの女はそれに手をつけようともしなかつた。

『まア、さう嫁はんで』と、加集はかの女のつんとそツぽうを向いてる横顔を見た。渠の目には、これまでに見せたこともない劍があつたと、義雄には見えた。

『おやア、おれが燗をしてやる、さ。』義雄はから語つて、火鉢へ行つた。

渠は半ば加集に後ろを向けてゐたが、加集がじろ／＼とお鳥を見て、かの女の顔色を讀まうとしてゐる樣子が、自分の近眼鏡の裏に寫つた。

その夜、加集もいろんな世間話をして、いつまでたつても歸らうとはしなかつた。

義雄はまた、このいきさつがどうなることだと、心を据ゑて、半ば傍觀氣を起してゐた。

お鳥だけはじれ／＼してゐて、加集に歸れと云ふ素振りばかりを見せた。

「でも、まだ君に取り消してない。」
「ぢやア、今僕が取り消すが、君の二三日來の奔走は實にありがたかつた。」かう云つて、一つあたまを無器用に下げた。
「如何に友人間でも、君はおれを馬鹿にしてるよ――僕だツて、一日とほかのことで奔走すりや、それだけ金になるからだぜ、君の爲めだおもて、この二三日棒に振つてるぢやないか？」
「然し君はその報酬は得てゐると思ふが、どうだ？」
「さう云はれると、たま――」加集は言葉を中止して、お鳥が二人を少し離れて後ろ向きになつてゐるのを横目に見た。
『あれは、たとひ』と、義雄はかの女を見ずに、「――も分らない無智同樣の田舍者としたところが、兎に角まだ娼婦や何かでは無い。それを――」
『さう云はれると、僕も――然し君の爲めに手を切らせる一つの手段としては！』
「いいや、そんなことは、今更ら、意味もない申しわけだ。僕は、だから、何も君のこの二三日のことを責めるのぢやアない！」
『然し――』
「それとも、友人間のことを金にする氣かい？」
『……』加集は暫く默つてゐたが、決心の色を見せて、「どうせ、君がそんな不都合をするなら、金にしたる！」
「よし」と、義雄も坐り直して、「いくらの口錢を出せばいいのだ？　その代り、またあの女にも要求があるだらうから、ね。」
「……」
「僕は豫め云つて置くが、あの女をまたこれまで通りにするか、それとも矢ツ張り手を切るか、それは君にもあの女にも受け合はれないのだ。が、あいつの處分はどッちとも僕自身がすることにきめたのだ。」
「さう云はれると、――僕も――實に――心――苦しい。」加集はその背を壁にもたせて、女と義雄とをどッちにも横目で見るやうにして、「實は、もう――僕あうちへもまつたし、大森の砂風呂へも一緒に行たし、――」
義雄はこれを聽いて、くわッとのぼせた。想像と推斷とでは、既に分つてゐたことだが、本人の口からかう當てつけられて云はれると、あたまにのぼせて、からだがびイやりしてしまつた。そして今までのぐわん張り方が馬鹿々々しくなると同時に、この女をわれからかばふのが、女にも笑ひの種になつてはすまいかと思はれた。ゆうべのありさまだツて、自分がただいい氣になつてゐたに過ぎないのかも知れず、女が加集にむごく當つたのも却つて反對の意味があつて、加集が馬鹿の爲めにこれを理解し得なかつたのだとも取れ出した。
『おい、ちよツとこッちを向け！』かう、義雄はお鳥に叫んだ。が、かの女は向きも返事もしなかつた。「おれは若しお前を處分するとしても、今加集が云つた事を土臺にすれば、おれの方はずッと責任が輕くなるのだ――返事をしろ、お前の口からも事實だと！」
「……」かの女は矢張り無言で、少し仰向き加減にそッぽうを見てゐるらしく、然しからだは全體に顫へてゐるのが見えた。
義雄はこれを見て、あの鳥山でかの女が經驗しかけた時のありさまを思ひ合はせ、如何に憎い女でも、再びあんな眞似はさせたくなかつた。
渠はどう自分の身を處していいか、ちよツと度を失つた時、加集は勝ち味な聲で、
「兎も角、僕が一時あの女を預かるのが順當ぢや！」
「預かれるなら、預かつて見ろ！」まだ實際の

好意があるのをかの女にも分らせる爲めに、『君が預かるのは、どうせおもちやにする爲めだらう――？』

『うんにや――』加集は義雄のこはい目を避けて、かの女の方に向き、『僕だつて、男ぢや――君ぐらゐの世話はする！』

『これまでの僕ほどでは、もう、いかないよ――今のさし迫つた問題は、あの女を生かすか、殺すかの問題だ。君が本氣で獨り者だから、少くとも、一生愛してやるか、僕が本氣な同情でかたをつけてやるか？　如何に馬鹿だツて、あいつも、もう、そこまで突き詰めてゐる樣子だからね。』

『そんなことを君に受け合ふ必要はない！』

『君は途中から逃げようと云ふのだらう――？』

『……』加集はただぢツと、半ば横目で、義雄を見つめてゐた。

『さア、もう僕はどツちでもいい！』義雄は決心した樣子で他の兩人を見まはして、『僕はこの場合愍情は拔きだから、あの女の意向一つにまかせるが――その前に、一つ、僕がしツかりと事實の念を押して置く必要がある。――おい』とまたお鳥を呼び、『加集との關係を白狀しろ！』

『……』

『返事しろ！』

『……』

『どうしてもしないと云ふのなら、今一つ聽くが、ね、お前は一時おれに來るつもりか、または加集に行く氣か、どツちだ？』

『……』

『顫へてゐるのは、自分のしたことを後悔してゐるのかい？　それとも、おれを恐ろしいのかい？』

『……』

『うそを云つてたから、返事が出來ないのだらう――面倒だから、今一度だけ聽くが、ね、これで僕は永久にお前と會はないことになるかも知れないのだぞ！』から云つて、義雄は言葉を切り、お鳥の前をわざと苛々しく通つて、原稿の包みを手に取りあげ、もとの座に來て立つたまま、『返事が出來ないなら、返事をしない方で聽くが、ね――加集がおれに代つて、お前をおもちやにしようとするのだが、その方がよければ返事をしないがいい！』

『……』

返事が無いので、義雄は、自分のかの女に對するこれまでの待遇に對して、かの女からゆらべとけさとに全くしツぺい返しを喰はせられたものと見た。そしてまた一段とくわツとなつた。

『加集！　ぢやア、君にまかせた』と云つた聲さへ、耳からでも出たやうになつて、一度期に忿懣の情が顏に燃えあがつた。

我がからだの中心を失ひかけたほどそそくさと下り口まで行つた時、

『まア、待つて』と云ふ聲がして、自分の袂が引ツ張れたが、今や加集に語つた言葉に免じても、女々しく再び坐りも出來ない氣がして、

『放せ、もう、これツ切りだい！』捉られた袂をふり拂つた。さうして女が足もとにばツたり倒れた音を耳にとどめて、はしごをそと向きに急ぎ下り、下駄を引ツかけるが早いか、屋臺の後ろからかみさんが驚きの目を見張つてゐるのにちよツと間の惡い挨拶をして外に飛び出した。

一六

『まア、待つて』が氣になつてはゐたが、待つてやつて、拜み倒されてもそれまでのことだ。

『お前』の代りに、『あなたには』などと初めて改まつた言葉を使つて、これまで大層世話にはなつたが、今となつては、加集にも義理があ

出た。

我善坊を下つて西の久保の通りに出で、やッと辻ぐるまを見付けて、渠は手に提げた革鞄を車の蹴込みへ投げ込んだ。

額や脇の下の汗を拭き／＼、くわッくわと照る太陽の下を走らせると、すッと輕くなつた自分の世界は却つて自分の世界でないやうに思へた。日は輝いてゐても、この數ケ月來、滅多に心の晴天を仰いだこともなかつた渠には、あんまり明るい光の中を半ば自分が失はれて、取りとめも付かない。

先づ心から落ち付けようと、自分のからだの住ひを車上で正して見た。すると目の前を横切つた一人の男の子が自分の總領息子の年輩であつた。

『かいるが鳴くから、かアいる』と云ひながら、ゆふ方よく外から歸つて來たものだが、或時自分の今乘つてるやうな車に轢かれて、手と足とを怪我した。若しあの時頸か胸かをでもやられたのであつたら――渠は自分の身になつて、ぞッとして目をつぶつた。

すると、その子等の母がおど／＼と落ち付きもなく、しやりからべにまで痩せこけて、子供を叱つたり、暮しのことを心配したりするありさまが見えて來た。あの婆々アじみて――こんなことは、もう、考へたくもないので、目を明けた。

若い婦人がからだの曲線を衣物のいい着こなしに表はして、顏を蝙蝠傘で隱して行く。すると、お鳥はあれからどうしたらう――自分には、もう、全く傍觀的にだが、今一度行つて見てやらうか知らんと考へられた。

これに、また、「まア、待つて」がからみ付いて來て、かの女の死んだざまが見たくなつた。若し死んででもゐて呉れりやア、自分も自分の關係を憚らず天下にさらけ出し、かの女のどうせ死ぬべきものであつたこと、並に自分がどの點まで責めを負ふべきかを公表して、あとは誰れにでも勝手な判斷をさせてやる！

『然し、死ぬなんて――まさか――』あの加集さへあの場にゐなかつたら、かの女も手を擴げてもツと芝居をしただらう。自分も亦もツとかの女の心をゑぐつてただらう。

若い女を飽くまで試みるのも面白かつただらうにと云ふ氣になると、あの時滔々としやべつたことが前後の取りとめさへ無かつたことを思へて來た。

「二十歳をたツた二つばかり越えたに過ぎない女の爲めに、――おれもどうかしてゐたのだ！やり直しだぞ、お鳥！待つてゐろ」と、力を入れて心に叫んだ。「お鳥――お鳥！お鳥、お鳥！」

「さう足を踏みしめては困ります」と、車夫は走りながら後ろをふり返つた。まだあの女に迷つてゐるのかと云はれたほど、義雄は顏を赤くして澄まし込んだ。

新橋停車場前の或休憩所に車を降り、荷物をそこに預けて置いて、電車に乘つた。

氣が引けながらも、加集がゐたらいよ／＼一喧嘩をする覺悟で行つて見ると、下の主人が今お鳥の室から出て、はしごを下りるところであつた。

『こいつ、また、おれ達の遺利を奪ふ氣ででも――』義雄はむかッとした時、

『おう、旦那』と、主人は嬉しさうに下り立つて、「今、あなたのお宅へ使ひを出しましたのですが、な――どうも、本人の云ふことがはッきり分りませんので――」

「どうかしましたか？」義雄はうッて變つて自分の世界が開けたので肩身が廣くなつた氣がしたが、同時に「やッ付けた、な」と合點して、俄

かに胸さわぎがし出したのである。

『まア、どうぞこちらへ――只今、やツとお休みになれましたから。』

から云つて主人が導くままに、義雄は百面相の客間へ通つた。

『アヒサンをやつたのぢやアありませんか？』

『えツ、そんな毒藥を！』主人はびツくりした聲を擧げると同時に、胸を反らせて左の手を輕く後ろの疊へ突き、そツちへ引ツ張れたやうに眼と口とを傾けた。そして下くちびるを少し受け口にして見せたが、直ぐもとの通りに直つて、『わたしは、また、御酒をめしあがり過ぎたのかと思ひましたが――』

『まだ醫者に見せませんか？』義雄は氣が氣で無かつた。

『いや』と、主人は彼の様子を見て、わざとらしい落ち付きを見せて、『御心配にやア及びません――もう、一時間も前に來ましたから。然し、そばに一升德利が出てゐたので――』

『ありやア、醬油入れでした。』

『それに、大層吐きましたから、な――多分、酒を飲み過ぎたのだらうツて、醫者は下劑をかけて歸りました。』

『そりやア、丁度いい思ひ付きでしたらう。』義雄はから云つて、この、想像には描いてゐたが、いよいよ事實と聽いては一たび突然に驚かれた事件を、まだ物足りないやうな氣がした。

これまでにも、かの女の留守、留守に、度々かの女の荷物を探して見た。一つは、他の男からの手紙でも來てゐはしないかと思つてだが、次ぎに、それよりも重大な理由は、國を出る時から用意してゐると云ふこの毒藥の有無であつた。どうしても見付からないので、うそを云つてるのだとも思つた。また知り合ひの醫者などに、それと無く、これを飲むとどんなきき目があるか、どんな結果を呈するか、など云ふことを聽いてゐたのだ。

『分量が多過ぎて、却つて吐いてしまつたから、助かつたのでせう。あの藥は死ぬにも度合があつて、多いと吐きますから――また少しづつなら、健康劑になつて外國婦人などにはこれをわざわざ、使用するものがあつて――たとへば、宴會とか舞踏會とかへ行きます、ね、少しづつやつてゐると、そのききめがいつか現はれて、ぼうツとその顏がほんのり櫻色になるさうです。』

『道理で』と、主人は、はたと膝を打ち、『眞ツ赤にのぼせてゐました。酒の醉ひだと思ひ違へたのも、無理はないでせう。妻が氷をかいてゐましたら、どんと倒れたやうな音がして、二階でうんうんうめく聲がしたと御らうじろ。わたしがあがつて見ると、それでせう――うちのものまでが皆七顚八倒でしたぜ。』

『そりやア』と、義雄は微笑にまぎらせて、『おさわがせしました、ね。』

『全體、あのお方はどうした人です』と、主人に尋ねられ、

『實は、これこれ』と、義雄はそこの老母も出て來た前でありの儘をぶちまけ、『からなつちやア、僕が少くともそれが直るまでは、看てやらなけりやアなりますまいよ。』

『人助けでさア、ね。』主人はまた胸を反らすやうにした。『加集さんには御名刺は戴きましたが、何だかちやらツぽこばかり云つて――あんな人は』と、鼻をつまむ眞似をして顏をしかめた。

『いや、さらまで薄情でも無いでせうが、ね。』

『それが、あなた』と、うち消すやうに首を一つ和らかにまはして、襟を拔け衣紋にして、『御失敗のもとぢやアありませんか？』

その様子も聲も、丸で、女がお客にあまえ

てゐるやうだ。
「なアに、失敗と云ふわけでもないのでせう、ね、ただ僕がまだあの子に愛情が殘つてゐて、思ひ切れなかつたのが惡いのでした。」
「それもさうでせうが、な、女なんかいくらもありまさア――わたしのうちにでも、抛り出しさへすりやア、直ぐあとが二人も三人も待つてまさア。
『これは惡くもない家柄ですが、ねえ』と、老母がそばから、「道樂の爲めに、好きで、こんな商賣をしてゐますんで――」』
『百面相ツて、どう云ふことをするのです？』
『なアに、わけアないもんですが、な。』かう云つて、主人は次ぎの間から古行李を引きずつて來て、その中からいろんな面やら道具やらを見せ、何でも手早く早變りをして、一人でいろんな人物になつて見せるのが藝だなどと說明する間にも、素顏にちよツと物を當てると、ひよツとこになつたり、おかめになつたりした。
『ただの鼠ぢやアあるめい』と、いつの間にか男之助になつたかと思ふと、面をちよツと裏返して、仁木彈正になり、卷き物を喰はへ、『ふ、ふ、ふ、ふ』と笑つた。そして、これが○○の宮さん、○○○の宮さんのお氣に入りだから、ありがたい――どうか、あなたも御吹聽を願ひます。」
　馬鹿にされたやうな氣をして、その室を出て、義雄は二階へ行くと、お鳥は起きただけ、枕の上に、こちらに向けて、氣だるさうに、
「來たの」と云つた。
「たうとうやツつけた、ね！」
「……」かの女は顏をそむけた、涙聲で、「どうせ生きてゐられへん！」
「おれに棄てられてか？」義雄は冷然とそのそばに坐つた。
「……」向う向きにただ頷いた。
「そして又加集に棄てられてだらう――？」
「……」何の返事もなかつた。が、すぐ一と獨り言のやうに、「死にたい、すりやええのぢや！」
「さうだ、死にさへすりやア、おれが又加集でも呼び付けて、墓地の奔走をさせ、おれも尋常に見送つてやつたのだ、ね、死にそくなつたんぢやアまた問題が起るぞ。」
「起るも起らんも無い――あいつは、あたいが、わざと、世話が出けるかどうかで念を押してやつたら、返事が出けなかつたさかい、追ひ返してやつた。」
「それ見ろ――誰れにだツて見限られらア、ね。」渠はかの女の精神が、もう、大丈夫正氣になつてゐることを認めた。で、語法を一歩進めて、「おれだツて、もう、友人の手を付けたものを、二度とは、可愛がれないよ――たとひ、お前の決心は精神に於いてお前を潔めたものと許してやつても、ね。」
「可愛がつてなど貰はんでもええ！」
「うん、さう諦めてゐさへすりやア、おれはまた一肌拔いで、お前の處分を付けてやつてから出立するよ。」
　かの女は向うを向きツ切りであつた。なんにも喰べたくないと云ふ上に、からだの自由が利かなかつた。
　渠はかの女の便器を求めに行つたり、自分の食物を用意したりして、ゆふ方になつた頃、加集がのツそりやつて來た。
『また君ア來てるか？』ぷりりとして立つてゐる。
「君こそ來るに及ばないんだらう！」義雄は、火鉢にかけた物の下をあふぎながら、横ざまにねめ付けた。
「君も男子だらう――あれだけはツきりと僕に委託して置いて！」

「そりやアおれから云ふことだぞ――どうして僕アおれのその委託を正直に實行しない？ この病人の樣子を見ろ！」義雄は頸でお鳥の方を示して、「毒をあふいで死にそくなつてるぢやアないか？」

「……」加集もかの女の寢姿を見やつて、ざツくりと來たやうであつたが、見る〲惡人のやうな相を顏に描いて、立つてるからだを固めた。「貴さまアこれツ切りおれをあの女に近よせないつもりだ、な？」

「さうだ――僕自身がその權利を、けさ、抛棄したのだ！」

「おれだツて、若しやとおもてやつて來たのぢや、人情は持つてらア――この二三日、大事な時間を棒にふらせやがつて！」

「口錢が欲しけりやア金でやる――友人呼ばはりはすな！」

「畜生！」から叫んで、加集は義雄の横ツ腹を蹴つた。

「なに、くそ！」義雄は立ちあがつて、加集を力一杯に壁の美人へ突き飛ばした。みしりと云つて、張り子板の音がしたので、僕は下の人々に氣かねする氣になり、――また横たはつてゐる女の爲めをも思つた。

で、勢ひを盛り返して來た加集の爲めに、義雄は組み敷かれて、また二三度方々を蹴られた。が、こちらの手出しはさし控へた。

「壯士を二三人つれて來て、おれは貴さまとあの女とにあやまらせてやるぞ！ 待つてやがれ！」

加集はこちらを尻目にかけて、はしごを下り始めた時、義雄は言葉で追ツかけた、――

「貴さまのやうな奴が、ね、自分の色女をおしまひにやア賣り飛ばすのだぞ！」

「賣り飛ばされるやうな女ぢや！」

「……」

「弱蟲！」から云つて、お鳥は加集が行つてしまつてから、顏だけをこちらに向けた。「あたいが起きてたら、あいつを締めあげてやるのに！」

「……」お前の爲めを思つて負けてゐたのだとは、心で云つたが、義雄には正直に發言出來なかつた。

一七

心配してゐるほどでも無く、加集は押し寄せても來なかつた。然し義雄は下の家族にも注意を與へて再び渠が來ても、あがらせるなと命じた。

室の入り口なる半間のひらき戸へ、うち側から輪かぎがかかるやうにして、義雄は毎日、毎夜、かの女の看護をした。そしてその傍らで書きかけの原稿を書き終つたし、また或新聞社へ行つて、樺太からあちらの通信をすることを引き受ける相談をも整へた。

二三日のうちに、お鳥のからだも段々自由が利くやうになつて、これまでとは打つて變り、義雄に對する情が忠實でこまやかになつた。そして、質物を出す話を渠がし出した時、

「あんな物はいつでもええ」と云つた。

義雄はまたかの女に對して、まだ望みありさうにそツとして置いたかの女優志願は、その實駄目であつたのだからとうち明け、かの女が近頃になつて寫眞屋になりたいと云ひ出した志望を容れ、その方の學校へ入れてやる手續きなどをした。

「これで、兎に角、お前との最初の約束は實行出來る、ね。」

「學校がきまつても、金がつづかにや駄目ぢや――」かの女は下のかみさんを思ひ出したかして、「下のは、な、色女であつたのが、かみさんを追ひ出して這入つたんやさうや。」

征服被征服

一

『どうせ僕は妻子に絶望した者でありますし、またその絶望の結果が不慣れな事業をやつて失敗したものでありますから、決して贅澤は申しません。向らの婦人さへ承知すれば、直ぐ夫婦も同樣になつていいし、またほんのただ同樣して僕の話相手だけになつて貰つてもいいのです。ましてそれが向うの人をその苦しい境遇から救ひ上げるわけになりますなら』と喜んで、耕次は自分の紹介者なる婦人とその母親との許しを得て、近藤澄子を初めて訪問したのであつた。

耕次としては、最後の思ひ出にと思つて試みた事業の失敗の爲めに、自分のあたまもからだも沈んどからツぼになつてゐた。獨りで當てもなく北海道に放浪してゐて、つい、こなひだ、東京へ歸つて來たのだ。が、北海道では、あの無秩序ながらに活氣のある大きな世界に觸れてゐながら、無一文の爲めに爲すこともなくぶらついてるやる瀨なさを、薄野遊廓の或賤しい女の爲めに僅かにまぎらすことができてゐた。東京から來て、わざ〳〵そんなことをする物好きと、事情を知らぬ人々にはあざけられたが、自分としては意地にも東京へ歸りたくもなくなつてゐたし、さりとて北海道に落ち付くだけのたづきも發見されなかつた。もう、このまま野たれ死にをしてもかまはないと云ふ氣になつてゐた。云はば、絶望と燒けッ鉢とが自分のいのちであつた。そしてこの狀態が自分のしげ〳〵通ふ女から與へられる多少の誠實によつて慰められてゐたのである。もう、直きに年が明けると云ふかの女を――年が明けたら、直ぐ――自分の事業さきなる樺太へつれて行つて、共に生き死にのあらかじめ保證できぬ越年をして見ようとまで思つてゐた。

けれども、萬事がぐれて來た爲め、それさへもできなくなつて、早く來る雪と分り切つた無一文とに追はれて、東京に歸つたのがやッとのことであつた。からだの神經衰弱のうへにも亦自分の精神までが衰弱の極に在つた。自分はさきに東京でかち得てゐた立ち場をさへ無くなつたものと信じて、自分の生活をまた初めからやり直さなければならぬ身であると思つた。從つて、何よりもさきに欲しい異性の話相手にはその美醜と貴賤とを問ふまでの資格を持つてゐないものと諦めてゐた。

別に訴へるところもないので、自分の舊友なる房子と云ふ婦人を訪なふと、そこで幸ひにも澄子なるものゝあるのを聽き込んだ。

『今の婦人としてはなか〳〵の活動家で――婦人の政治結社加入禁止の解除運動を、つい、ことしの春まで、五六年間つづけてましたが、今は社會から遠ざかつて、引ッ込んでゐます。思ふ男の爲めに一旦自殺までしたほどですから、正直な人なことは分つてませう』とのことであつた。

『……』思ひ出すと、渠は樺太に於いて自分のかた手間に通信を引き受けてた一東京新聞の三面記事に、何とか云ふ社會主義婦人が男の無情を恨んで鎌倉海岸の海に身を投げたが、漁師に救はれたと云ふことが出た。それから、また引き續いてその本人なる婦人がその新聞に投書して、その事件の辯解のやうなものを發表

した。決してわたしは社會主義ではない、然しその男のことは今でも思つてる、と。大膽若しくは正直な女もあるものだとその時寧ろ感心したが、澄子が乃ちそれであつた。渠は自分の精神が疲れ切つてゐながらも、尚ほそれに對する好奇心からして自分の元氣をふり起したのであつた。『僕の力で救へるものなら色をんなにするなり、獨立した婦人文學者に仕立てるなりして、お互ひの爲めになつて見ませう』とも友人に誓つた。

そして明治四十二年十二月の一日に、友人紹介の名義を以つて、初めて、渠は獨りで澄子を訪問した。かの女の住まひは赤坂新町の幽靈坂を下つて行つたところの裏長屋で、――そこに達した時はわれ知らずこちらの心が淋しくなつてゐた――三軒ならんだそのどん詰まりであつた。二間しかないその奥の六疊に据ゑた長火鉢に向ひ合つて、かの女はこちらをあしらつた。

『そりやア、ね、いてふ返しにでも結はせて縮緬の着物を素はだに着せて御覽なさい、そりやア美人ですから』と紹介者なる房子さんが云つたのを、義理の儲け物だと思つてたが、それはこちらの豫期に反してゐた。なすび縞の色に褪めかすりが這入つたお召し――と云つても、縮らしい――の書生羽織りを着て、手を火鉢のふちにかけて下向きがちな――然し、どちらかと云へば巨大な――顏は、自殺までしかけた程精神を使つた者としては釣り合ひに肥えてゐて、さう美人らしくもなかつた。そして見ッともないやうに肩ッたい。その上、時々、

『ほ、ほ』と、わざとらしく笑ひながら、こちらを下からのぞく顏の眼にはしろ眼が勝つてゐる。それが少しこちらの感じに添はなかつた。『あなたのお作は初めてこんなだかと云ふのを拜見致しました、――奥さんやお子さんがおありになるのに、どうしてあんな氣ぶんになつてゐられるか、それを聽いて見たいとただそれだけ思ひまして、一度お目にかかりたいと房子さんに申しましたことがございますが、それはその時のほんの出來心で申したのでした。』

『そりやア出來ごころなら出來ごころでもかまひませんが、ね――あなたがあんな綴り形式的な道德眼で見てしまつたのぢやアありませんか？』そちらだッて、妻のある男を愛してゐたのではないか？ 然し、斯う答へた、――

『さうでもないでせうが――』

『…………』渠はかの女をまだ人の手まへをつくろふ俗見のある婦人と見てしまつた。

『人間が眞實に生きようとする場合、時には普通の道德心をぶち破らなけりやアならないことがありますよ。それは何も無道德になると云ふわけぢやアない。ただの習慣道德を眞實の生活につり合ふやうに改造するのです。』

『そりやアあたしにも不贊成はございませんが、ね――』

『無論、あなたにも、少くとも最後の御經驗が證明してゐませう』と云つて、渠はかの女とその思ひ男との關係を話した。渠の知つてたところでは、かの女が思ひ合つてた男にも妻子があつたのだ。中野と云つて或通信社の政治掛りだが、それがさきに或新聞社の編輯長をしてゐた。そしてかの女もその新聞にゐた。その時代から殆んど十年間、渠とかの女とは戀仲であつた。が、その人並み外れたまじはりは最後に破綻を來したのであつた。

かの女の投身記事が新聞に出ると、房子さんは中野を一度呼び寄せて、

『あなたは、まア、ひどいことになさいましたね』と、取りすがらんばかりにして泣いたが、中野は不誠實、親切や溫厚な人物にも似合はず、

『わたしの知つたことではなかつたのです』と云つたさうだ。渠に限らず、誰れがまた世に死

ぬのを承知してゐるものがあらうでう。かかる
場合の答へとしては實に冷淡であつた。こちら
が見ても、それには、だから、渠の申しわけなさ
のまごつきも加はつてゐただらう。けれども、
また、渠の本心が矢ッ張りそこにあつたと云へ
ようか? なほ續いて斯う白狀したさうだ、「近
藤さんが餘り度々わたしの細君に會はせと強迫
するものですから、わたしは止むを得ず申しま
した、別にそれほどの罪もないのに妻を離婚す
ることはできませんと。』
『……』耕次は會はぬうちから澄子に肩を持
つやうになつてたので、中野なる者のその場に
なつての冷淡、と云ふよりも初めからの意氣地
なしを心からあざけつた。妻と離婚してもいい
と云ふ覺悟もなしに、なぜ他の女を戀してゐた
のだ? いや、妻の外にまた女を持つことそれ
事は必らずしも惡いことではないが、かかる特
別な行爲に對する態度としてなぜ妻にも公然と
納得させ、女にもその分にとどまることをしッ
かり教へなかつたのだ? 世間へ手まへばかり
思つてたあまり振れた時としては、きッと、そこ
にその兩方に對して多少の不正直な胡麻化し
があつたに違ひない。だから、また、女の方にし
て見たところが、そんなあまり振れた弱い男に五
年間もいい氣になつてゐたのが馬鹿だ。その結
果が――あとで何と云つて辯解して新聞紙上に
公表したところで――全くうまうまと裏切られ
たことになつてゐるのは、當り前である。同情し
て云へば氣の毒だが、惡く見れば自業自得てきめん
だ。だから、――!
『お澄さんもお澄さんで、なんて未練がましく
も不見識だらう、一旦自分を棄てた男のところ
へ死にそこなつてきた訪ねて行くなんて!』と、
厚子さんも[illegible]情を漏らしてゐるのだ。
『……』耕次には、然し、それほど熱心と云へ
ば熱心、馬鹿と云へば馬鹿な女に、接近して見
るのも樂しみになつてゐた。『あなたがこれッ
切り社會を引ッ込んでしまふのは餘り意氣地が
ないでせう。どうです、一つ、生活ぶりを一新
して文學者にでもなつて見る氣は出ませんか』
と忠告した。
『一つ、[illegible]、一度見ませうか、ね、あたしはこれま
で新聞や政治の方にばかりあたまを突ッ込んで
をりましたので、軟文學の方には關係が疎かつ
たのですが――』
『さう軟文學、軟文學と云つたッて、俗物ども
には夢にも分らない重大な使命が文學にはある
ものですよ。』新聞屋からまた小學教員になつ
たが、事件以來遠慮してただ自分のうちで英語
を――それも恐らく初歩の英語を――人に教へ
始めてゐたと云ふばかりの婦人を、渠は異性と
異性たる以外のことでさう尊敬を拂ふ氣にはな
れなかつた。
が、自分はこの場合、不美人でも無學者でも
かまはない、一人の異性の必要を感じてゐたも
のだから、この點から、若し澄子が自分の思ふ
やうになればこれほどもッけの幸ひはないと私
かに考へた。けれども、まだ自分の來意をうち
明けるまでには至らなかつた。ただ、自分のや
つて來たこと、妻と事實上は既に三年間絶縁し
てゐるが、妻の同意がない爲めに戸籍の上の離
婚だけは成立してゐないこと、その間にめかけ
同様の女もあつたが、その女も[illegible]までやつ
て來たのでしまひに手を切つたこと、藝者買ひや
女郎買ひもしたことがあるが、これから生活を
やり直して、しッかり立つて行かうと云ふこと、
などを、正直にうちあけて別れた。

二

『さう何もかもいつてしまふかたも少いです、
ねえ』と、かの女は氣[illegible]をまぜて笑ひながら云
つたッけ――それに對して、

『ぢやア、あなたのはさうでなかつたのですか』と、渠は突ツ込んだ。

『ええ――極卑怯な小心な人でしたから。』

『……』渠にはかの女の答へが房子さんの見てゐたところに一致してゐると思はれたのである。割り合ひにかの女も正直であるやうに受け取れた。こちらが自分の持ち前の強みを以つて押して行きさへすれば――さうだ！　この自分らの間際に得た印象で、頼もしく思ひ浮べつつ、もう、自分は思ふ壺へ入つたかのやうに喜びながらも、二三日は無理に自分を遠慮してゐた。

『いづれ文學者にならうと決心がつきましたら、こちらから御返事を申し上げます』といふのであつたが、五日目にはもう待ち切れなくなつて、再び訪問に出かけた。午後の三時頃で、格子戸のところに、きたない身なりの老人がゐて、丁度、そのかついで來たらしい納豆や酒のかすの荷を天秤と共に狭いおもて土間へしまひ込んでるところであつた。

『……』はて、な、違つた家か知らんと思つたとたん、渠はその奥から出て來た房子を見た。[illegible]、留めて假りにもこんな男の世話になつてゐるのか知らんと、ちよツといやな氣がしたが、かの女とその男とに對して私かに顔を赤めたがら、『おさしつかへはありませんか？』

『ええ、ちッとも。どうか――』かの女は終始別に違つた顔も見せてゐなかつた。

『……』渠は悪いものがゐたとに躊躇してゐると、

『さア、どうかおかまひなく』と、老人がからだをよけて呉れた。

『ぢやア、御免をかうむります』と思ひ切つて、渠はつかつかとあがり込んだ。そして例の火鉢をさし挾んでさし向ひになつたが、先日とは丸で違つて、堅くるしくなつてゐた。

『……』か、女もこちらの様子を察したらしく、『あれは父でございます。不斷にはそこに住んでをりますが、時々來て呉れるんでございます。物好きに納豆なんか賣つてまして、ね。』

『さうですか？』渠はさう聽いて少し安心したが、この日自分が持つて來た言葉を云ひ出す氣にはなれなかつた。『例の決心がつきました』などと、暫らく文學の話をしてから、『いづれまた明日參ります。少し僕からの要件を申し上げたいのですが――』と云つて、いとまを告げた。

その翌日、渠はかの女に今一度自分の家庭の事情を説明した。それによると、自分は事業の爲めに抵當に入れた持ち家を抵當から出すことはできないが、それでもそれを妻子に與へて置けば、こちらが仕送りをしないでも彼等の日常生活はらくにできて行く筈になつてゐた。妻子は自分を敵の如く悪く思つてゐるが、自分も妻子等を見てゐたくなかつた。うち明けて云へば、歸京後、もう一週間もうちに寝起きしたが、一度だッて妻に接觸はしてゐない。自分は別に家を持つ必要がある。そして家を持てば、書生の時代とは違つて、自炊もできないから、ひとりは世話をして呉れる婦人が入る。それには、房子さんのところでの話では、房子が丁度都合いいのであつた。自分はかの女を女中代りなどと輕い物に見ないが、その代り、時を見て夫婦同様になつて貰ふかも知れぬ。いや、それを承知して貰ふまではあらゆる全力を擧げて口説くかも知れぬ。が、紳士の體面を守るから、誓つて暴力は用ゐない。そしてそれ位の教養は[illegible]に自分の[illegible]を信じてゐる時代に、多くの婦人と交際して來てゐるから、かの女も安心して來ていいと付け加へた。

『ですから、どうです、一つ――僕はざッくばらんに申しますが――あなたが僕を色をとこに

するか、僕があなたを色をんなにするか、ピッちとも氣が向けばかまはないつもりで、先づ一緒に住んで見て呉れませんか？』つまり、第一は、同棲、第二に、夫婦の實際――。

『さうです、ね――』かの女は微笑しながらもまじめになつた。『餘り突然のことで――』と、突き出たひさし髪の下からしろ眼がちで以つてこちらを見上げて、而も年増らしい落ち付きを以つて、『ですが、その――北海道へまでもあなたを追ひかけた人はどうなすつたのです？』

『……』義雄はそこにかの女に少くとも同棲するだけの氣がないでもないのだらうと分つた。『それは、もう、御心配にやア及びません。すツかり手を切つたのですから。』

『でも――』

『いや、實を云ふと、僕に一日後れてまた出京したのですが、僕を別な男に乗り換へた證據の電報があやまつて僕のところへ達したので、それを封じて送つてやりました。それで全く關係が絶えたのですから。』

『實は、あたしの方にも問題がないでもありませんのですが、ね』と云つて、かの女が語つたところによると、或紳士で、而も金のある若い紳士で、結婚をして呉れるなら、自動車をも備へて、大抵の物質慾なら滿足させてやると申し込んだのがある。そしてかの女もあらかた承知して置いたのだが、一つ面白くないことには、結婚の時期を今半ケ年ばかり待つて呉れろと云ふのだ。それも純粋な止むを得ない理由ならいいが、さうではなく、かの女が今のところまだその事件と不評判とを世間におぼえられてゐるから、必らず男の親族どもから反對が出るにきまつてゐるからと云ふのだから、その世間體を遠慮する氣が、かの女から見れば、男の心として大して頼母しくもなかつた。且つ、その結婚で滿足を得られるのは物質慾ばかりで――それも失戀の反動作用として思ひ切り贅澤をして見るのだとすれば面白くないこともないが――失つた戀の痛みを別に恢復できるわけのものでもなかつた。その上、そのやらせると云ふ贅澤がどこまで行けるか、本人にただ金があると云ふことが分つてるだけでは見當も付かなかつた。で、『その方は思ひ切つても少しもかまひませんが、あたしの方にも條件があります。』

『何です？』と笑ひながら、『何でも聽きますよ。』

『第一に、決して暴力に訴へないと云ふことです、ね。』

『そりやア、無論です。』

『それから、中野とはこれまで通りの交際をつづけますから。』

『それも承知です。』義雄はかの女が既に自分の來たことを中野に報告しに行つたことを聽かせられてゐた。

『たうとうあなたへまで近づいて來ました、ね――危險ですよ』と忠告したさうだが、『そんなことは、もう、あなたの干渉する權利内にあることではありません』と、かの女は答へたさうだ。『關根さんだツて、さう世間の人が惡く云ふやうな人物ではございませんわ』とも。

これによつて見ても、かの女は隨分未練もあらうが、意地もあつて面白さうな女であつた。

輕めしを馳走しに義雄はかの女をその近處にあつて自分もよく行つた西洋料理の龍土軒へつれて行つた。そして、碁を少し父からをそはつて知つてると云ふので、かの女に井目を置かせて二回試み、二回ともかの女の負けであつた。それから、また暫らく玉突をやつて見せた。

かの女の僅かな生活費の大半は突ツ張り中野から出てゐるのであつた。そして二三日前にも澁谷の奥あたりに家を一緒に見つけに行つてちよツと[illegible]かさうなのができ上りかけてゐたの

で、それに約束して置いたのださうだ。耕次は然しそんな面白くもないゆかりあるところへ這入りたくはなかつた。どこか全く方角の違ふところへ行きたかつた。

『兎に角、家を借りる準備に預けて置きますから』と云つて、渠はかの女に十五圓を手渡した。北海道にゐる時から書き始めて、歸京後急いで完成させた長篇の原稿料のうちからであつた。渠はこの原稿がきのふ賣れたことや久し振りで玉突をやつたことにやゝ元氣と都會的氣ぶんとを恢復した上にも、斯う容易に最近に會つた婦人と同棲することができるのを自分ながら勇ましく思つた。

歸宅してからも心が緊張してゐたので、直ぐペンを取つてかの女に手紙を書いた。『同棲のこと御承諾下すつてこれほど嬉しいことはありません。そのついでに第二の條件もお考へ直しの上承知して戴きたいのです。けれども、それがどうしてもできないとあらば、第一條件だけでも兩方を拒絶されるよりは結構なのでございます。僕は飽くまで一個の紳士としてあなたに向ひ、これから自分の新生活を築き上げます。人は僕のことを珍らしいほど傲慢な男だと云ひます。が、その實、ただ思つたことを無遠慮に云つてのけるだけのことでせう。その證據には、今回、歸京しても、さきに十年間つづけて奮闘した自分の文學的努力に對して、少しの未練がましい要求も持つてゐなかつたのです。全く初歩から、出直しをやらねばなるまいと思つて、これにも餘り望みなく歸つて來たのです。ところが、夫人と云ふものはありがたいもので、僕をもとの通りに認めて呉れました。これに元氣を得たと同時に、またあなたと云ふ新らしい獲物が加はりました。これから共同で新生活をやり始めませう。あなたもしッかりおやりなさい。僕は十分あなたの話相手になりませうから、あなたも亦僕の手頼りになつて下さい。』

翌朝、この手紙が屆いたあとへ渠はまた訪問して行つた。

『實は、きのふお預かりしたおかねを手紙に入れてお返し致さうかと思つてゐましたのですが、――』

『そんなことを今更ら』と、渠は何げなく笑つてしまつた。

『お手紙を拜見しまして、また思ひ直したところでした。』

『無論ですとも！』

暫らく雜談をしてから、家を搜しに一緒にそとへ出た。そして先づ飯田町なる紹介者の家へ行くつもりで、電車を九段したで下りる時、渠はかの女よりさきに飛び下りると、あやまつて自分の下駄の齒を折つてしまつた。すると、かの女はあとから下りて來て、

『見ッともないぢやアございませんか、どこか近處で買ひ換へなけりやア』と云つた。そして丁度角から二軒目にあつた下駄屋へ這入つてかの女のがま口から出して新らしいのを一足買つて呉れた。

『……』渠はかの女の年が年だけに、もう女房氣取りになつてるわいと思はれた。二十六と申し上げたのは思ひ違ひで、本年二十七歲、明ければ二十八になりますと云ひ直したッけ。一つでも若く云つて置きたかつたのだらうが、同棲するとならば、やがてどうせ分るものだからと思ひ返したのらしい。渠には、さきの色をんなが二十二歲であつたから、今度のもせめて譃にももッと若くあつて欲しかつたと云ふやうな慾心が、もうあたまの隅に出てゐた。

紹介者の家に行くと、房子さんの母親が、『それはいいことでありました、ね』と云つて喜んだ。『近藤さんもこれからはまじめになつて、關

根先生と御一緒にしッかりおやりなさいませ。中野さんなんか、あれは見かけによらない不まじめな人でしたから、ね。』

――……』澄子の顔にむッとした樣子が現はれたのを耕次も見た。

『不まじめと云ふのでもないでせうが』と、房子は取り亂しながら、『矢ッ張り、近藤さんが思つてるほど正直な人ではないのですよ。わたしはわたしの大切な友だちを棄なしにしたと云つて、泣いておこつてやりましたのですもの。』

――……澄子は矢ッ張りむッとして默つてゐた。あの事件に就ては自分の立ち場も理解のないものなんかに云ひたくないとかの女が云つたとかで、房子さんはかの女のところへ二度と忠告しに行かなく、またかの女も一方のところへ來なくなつたことは、誰も房子から聽いて承知してゐた。この行きがかりからであらう、――三人の間に男女貞操問題の議論が盛んに出て、關根さんのやうに妻があつても全く關係を絶して別に女を持つのならまだしもいいけれど、中野のやうに妻と住みながら他にも女に關係しようと云ふのは不都合であり、またその女の方もよくないと云ふ結論に房子さんが達した時、耕次もそれに賛成すると、澄子は興ざめた顏で、かた手をふところに入れたまま、『いやなら、よすがいい、さ』と云つた。そして御馳走になつてそこを出てからも、なほ不興な樣子をつづけた。

『あれは誰れに云つたのです』と、渠は不審だからかの女に尋ねて見た、『房子さんにですか、僕にですか？』

『もちろん、あなたにです！』

『ぢやア、あなたの思ひ違ひですよ』と、苦笑しながら、僅かに云ひぬけをした。『僕はあなたの特別な事情をまで含めて云つたのぢやアないのです。ただ一般論で云つたのですから。』けれども、渠はかの女に多少でんぼふ肌の口調や態度があつたことを見のがしはしなかつた。そしてこれが毒婦の本性を持つてゐて呉れれば一層に面白いがと思つた。どうせ自然に自分の女が出來るなら、いろんなのに接して見たかつた。

三

『兎に角、けふは、もう、家さがしはやめにしませうよ』と、かの女は云つた。寒いうへに、時間が後れてゐた。一緒に電車に乘つて、渠はかの女の家にまでついて行つたのである。

『ぢやア、大久保邊を探して、あす中には家をきめてしまひませう、ね。』渠は急いできめないと、かの女の心がまたどう變るか分らないので、夜に入つても、そのそばを離れたくなかつた。

『明日のことは明日にして、お酒でも飲みませうよ。』かの女の燗をしたのはをととひかの女の父と一緒に飲んだと云ふその殘りであつた。父は餘り飲めないが、もとから好きであつたのでその相手をさせられたのが地になつて、かの女は社會に出ても隨分多くの酒飲みにつき合つて來たと云ふ。をととひも、『酒あり、肴あり、お出で待つ』と云ふハガキを出したので、今でも小學教員の恩給を貰つてる父がやつて來たのだが、『まるで赤壁の賦を讀むやうであつたよ』と云つてたとか。そしてこの頃では、獨りで考へ込むうるささに、かの女はコップでひや酒をやつてると云ふことが自慢らしかつた。

『つまり、焼け酒でせう、ね』と、耕次は微笑して最初の猪口を受けた。自分が飲み手でないことは分つてるのだが、かの女の相手なら少しは自分もして見たかつた。

『あたしは原稿を書きます時でも、そばにコップを置いとかなけりやア書けない習慣ですの。』

送り迎へするのが却つてありがたくもなく馬鹿馬鹿しくなつて、逃げ出してしまつた。そして男が血で書いた手紙（これをもかの女は耕次に出して見せたことを以つて今一度歸つて來て呉れろと云つて來たが、相手にしなかつた。

かの女はまた或學生雜誌の編輯にたづさはり、その年若い會主兼社長の家に夜おそくまでゐることがあつた。そして歸りには新宿まで送つて貰つて、山の手線から電車を信濃町で下りると、そこにはまた中野が來て待つてゐるのであつた。が、或夜、餘りおそくなつたので、とまることにして、「いたづらさへしなければ」と斷つて社長と一つ室に眠つた。ところが、その翌朝、社長なる青年の夢中になつてゐる者が尋ねて來て、ひよんな疑をしたので、遠慮なくお這入んなさい、わたしは別に何でもないのですからと云つてやつたさうだ。

かの女はこちらが正直な態度になつてゐるのに懷いゐる爲めであらうが、そんなことをもすツかりしやべつてしまつた。一つには、また、そこにかの女が男子どもに對して意張つて來たと云ふ自慢若しくは興味があるらしかつた。最近にはまた若い會社員があつて、夜、英語を習ひに來てゐたが、毎度おかねか使ひ物かを持つて來るのがをかしいと思つてゐたら、三晩目にはいろいろ身の上ばなしを始めて、なかなか歸らうともしなかつた。で、とめてやつたら、遠慮がちにだが、だから煮え切れないで、結婚を申し込んだ。それを斷つたら、その明くる日からぱツたり來なくなつたさうだ。耕次も、だから、とまる氣で火鉢のそばを離れなかつた。すると、かの女は、

『まだお話がございますなら、横になつてから伺ひませう』となつた。そして無論別々になつてゐてだが、中野のことばかりは思ひ切れないと云つた風にその話をつづけた。云はば、のろけばなしだ。然し、こちらにはそれがかの女の男その物を擬しむよりも、かの女の戀その物を懷かしんでゐるやうに取れた。つまり、かの女の戀は既に實際の世界を離れて、全く空想界のあこがれに變じてゐるらしかつた。

『羅曼主義者よ』と、實は心のうちでかの女を卑しんで呼んだ。そしてその空虚な箇所を滿たしてやるのは自分だと、同時にまた自分の今の空虚にはかの女を入り込ませてやらうと考へた。

かの女はふと再び起き出でて原稿入りの小籠を枕もとに持つて來た。そしてもとのところに腹這ひになつて籠から出した一つの新聞切り拔きを讀み始めた。男の女に對する弱點をかの女が冷かした警句のやうなもので、――

『男をいつも引きつけて置くには、女はいつもただ微笑してをれば足る。然らば、その微笑の言葉に對して男は犬馬の勞もいとはざるべし』

とか、『女は少くとも一度は下らぬ男の口說きを受けるものなり』とか云ふ文句などが集まつてる。かの女はその一句を讀み終る毎に得意さうな顏をこちらに向けて、こちらが何と云ふかをうかがつた。

『面白い』とか、『眞理です、ね』とか、實は口のうへでは答へた。そしてかの女が起き上つた時にちよツと見せた腰の白かつたことを思ひながら、かの女の朗讀の口調がしツかりして、而も齒切れのいいのがここ地よかつた。尤も、かの女は歌の文句通り芝に生れて神田に育つたと云ふ。けれども、その先代は地方出であるに對して、こちらはまた生れたのはかみがたに於いてだが、最近の先祖數代の墓は深川に在り、父も祖父も八丁堀の生れで、自分の育つたのは芝でだと云ふことを負けずに告げて置いた。こんなことはこちらには實際どうでもよかつたのだが、かの女の氣取りの一つがそこにあつたので、こ

ちらも負けてはゐなかつた。
　暫らく二人とも無言であつた。
　渠には、自分が青くさい部屋で賤しい女のやつて來るのを待つてゐたこともある。そんな時の經驗から云へば、女がそばにゐさへすれば溜らぬ刺戟を受ける筈であらうが、――種類の違つた女にはまた種類の違つた感じを保つてゐるだけの餘裕があるのを、幸ひにも自分年來の教養のおかげだと思はれた。自分の神經がますます冴えて行つて眠られないのは、必らずしも一方の暗い刺戟ばかりではなかつた。また、かかる婦人の心のうちがいろ／＼に考へられて、小憎らしくもあり、また頼母しくもあつた爲めだ。こんな紹介があつたのなら、何も、降り積む根雪に追ひ迫られるまで北海道などにぐづ／＼してゐるには及ばなかつた。馬鹿な！ 自分は何であんなにあちらでまご付いてたのだらう？ 女郎に釣られたり、追ッかけて來たやまご付き女を病院に入れたりしてゐたのは、――その時にはいろ／＼の理由もあつたが、――皆、今となつては、自分の絶望から出た無方針の結果であつた。これからは一つまた新らしい氣ぶんを以つてこの婦人にも自分の努力を見せてやらうなどと思ひつづけると、自分は思はずしんみりした感激の涙をまでこぼしかけてゐるのをおぼえた。
　そしてこのまだ見せはしない涙を以つて自分の本心はかの女を迎へてやるのだと思ふと、これが自分その物の正直なところそッくりであるだけに、これを直ぐにもかの女の胸に傳へたかつた。自分は全人的に緊張してゐるやうな、そしてまたデカダン的にだらけ切つてゐるやうな氣持ちになつて、心ではそれとなく自分にもある寂しみを訴へつつ、右を向いて、かの女の厚化粧をした丸い横がほに自分の目をそそいだ。不眠性にかかつてると云ふかの女も、無論、まだ眠つてゐないやうすであつた。
　けれども、こちらはいつのまにか眠れた。翌朝、目をさますと、かの女は既に臺どころをしてゐた。渠は手を延ばして枕もとの時計を引き寄せて見ると、九時を過ぎてる。
『……』直ぐ起きようとしたが、
『もう少し寝ていらッしやいよ、今に起してあげますから』と、かの女がわだかまりのないやうな聲をかけた。そして來てゐる魚屋にさしみを二人前つくることを命じてゐた。
『……』渠はかの女が少しも人に憚つてゐないのに ちよッと驚きもしたし、また 安心もした。そして手を引ッ込めて、再び臺どころにあッたかみに親しんだが、その手がゆうべどう云ふ感じを自分に傳へたかと云ふことを考へて見ながら、私かに寢まき姿のかの女がしてゐることを枕のうへから見てゐた。
　その日、二人で晝下りに西大久保の方へ出かけたが、電車に乗つてる間にも、時々は自分のゆうべだらりと延ばした右の手にまだあッたかい夢を見てゐた。
　向うも不眠性の苦しまぎれにだらうが、
「お眠りになれなければ、手を貸しませうか」と云つた。こちらは寧ろ先づ恥かしみを感じた。自分の前にとまつた男もさうして默つて、自分迫り多少の滿足を得たのだらうと思へたからである。切迫してゐた自分の呼吸はその時却つて少し落ち付いた。そして、さうだ！ わけもなく無事にぐッすり眠りに落ちることができた。
　それから、西大久保へ渠等がわざ／＼目當てをつけたのには、渠の友人も三四名ゐるし、またかの女は去年まで學生雜誌の編輯に行つて、そのあたりの工合を知つてると云ふしするからであつた。その雜誌社は去年でつぶれたのだから、かの女もとまつたこともあると云ふその家が――恰好な家で――ひよッとすると明いてる

かも知れぬと云ふ望みであつたのだが、それは明いてゐなかつた。そしてその近處で、戸山の原に近いところで閑靜らしい、そして又ふたりの住むに丁度いいのを見付けた。玄關の間が三疊、客間が八疊、奥が六疊、茶の間が四疊半で、勝手の方には下便所もついてゐた。

『何よりもいいことには、門がまへで、玄關には式臺が附いてます、ね。』と、かの女は嬉しがつた。そして二ケ月分の敷金も渠がかの女に渡してあつた金で直ぐ間に合つた。

『よくそツくり持つてました、ね。』渠には、かの女の經歴をちよツと聽いたところでは人の物など何とも思はぬ婦人のやうでもあつた。

『まさか――あたしだツて――――』

『實は、つかはれても仕方がないと思つてましたが――』

『あたしだツて』と、またほがらかな聲で笑ひながら、『責任は重んじます、わ。』

『……』渠はそのことに於いて先づかの女を妻同樣に信じてもいいと思つた。

同じ大久保に住む木山と云ふ友人の家に立ち寄り、渠はあす移轉して來ることを報告し、またかの女をも自分のこれからの同棲者として紹介した。その歸りは夜になつたので、かの女を赤坂へ送つて行つて、暫らくまた話をした。

『記念ですから、庭の乙女つばきと鉢うゑのけやきとは持つて行きますよ。』二つとも多少物ごころが付いてからの春夫さんが時を異にして持つて來たものださうだ。

『あなたにはいろんな記念があるから。』斯うぞんざいな言葉が使へるだけ、渠は少しらくな氣ぶんになつてゐた。直接の返事として、『然しそれも結構です。』

・お互ひに友人のところで飲ませられた酒の醉ひがまだ殘つてゐた。

渠は家を探して歩いてる時、或雜誌の發行者に出逢つたのを幸ひ、原稿を約束してかね、借りた。その時向うがにやり〳〵と笑つてた樣子を思ひ出しながら、今夜も亦とまりたかつたのだが、もう、たツた一晩のことをあつかましいと思はれたくはなかつた。

四

九日は先づ澄子の方を引ッ越しさせる手筈にしてあつた。が、餘り早く行つて、男が臺どころの物までかたづける手傳ひをするのは、近處の人に見られても、餘り見ツともいい圖ではなからうと思つた。渠は朝から落ち付きを失つてる心を押さへながら、丁度正午を過ぎてから出かけた。

『大層御ゆツくりでした、ね』と、かの女は不平さうであつた。

『なに、さう早く來たツて仕かたがないと思ひましたから――』

『でも、まア、――もう、車さへ來ればいいんですの。』

『おやア、直ぐ呼んで來ます。』

渠はゆうべの歸りに賴んで置いた荷車屋へ行つて歸つて見ると、お向うとお隣りとの細君だと云ふのが揃つて來て、まとまつた荷物の間で茶と餅菓子との馳走になつてゐた。渠にはこの一方の細君だな、壁に耳をつけて澄子の話を聽き取つて、近處へ得意さうに觸れまはつたと云ふのは、と分つた。成るほど人の惡さうな顏つきをしてゐる。それに、今度の男はまたどんな人物だらうと見たがつて集まつて來たのでもあらうから、渠は恥かしいやうな氣もした。が、かの女はこちらを皆におほびらに紹介した。

『都合によると、――さうして結婚するかも知れませんの。』いろんなことを既に話してゐたらしい。こちらに向つて、『あなた、あのをとめ椿を賴みますよ。』

そのからだに附けたままだ。

『仕やうがないでせう。うッちやつて置いて行きませう』と、かの女は云つた。『どうせあなたにはお嫌ひのつれッ子ですから。』

『おやア、さうしませう。』渠は逃げた物のことよりも、寧ろかの女が獨り者にも拘らず割り合ひに世故にたけてゐて、近處や知り合ひの夫婦喧嘩を仲裁したり、人の細君の爲めに離婚請求の六ケしいかけ合ひを引き受けたりしたと云ふことを考へた。

渠等が轉居さきへ行つた時は、日が暮れかかつてゐたので、差配に立ち寄つて提燈と箒木とを借りた。そして電氣が今夜間に合はないとのことで、戸の突ッかひ棒を持つて來てその横へまた別に蠟燭の火を立てて、それと提燈とのあかりで晩めし代りに蕎麥を喰べた。

『いよ〳〵これからあなたのお三どんですか、ね？』

『なアに』と渠は簡單にうち消した、『條件さへ滿足になれば――』

『ですが、それはまだ分りません、わ、――あたしは男に對して少くとも二度の復讐心こそあれ、戀などは、もう、二度としたくないのですもの。』

『……』渠はかの女がいとこと中野とのことを云つたのだらうと思つて、『それは分つてますが、ね、やがて第二若しくは第三の戀を僕が産ませて見せますよ。』

『それまではきッと約束を守つて下さるでせう、ね？』この疑問にはまだかの女の顏に疑惑の色を見せた。

『無論です。僕がそんなことに敎養のない人間と見えますか？』

『だから』と、かの女は一段安心したやうに、『紳士として尊敬します、わ。』

『よろしい！　僕もあなたを一つの人格者として取り扱ひます。』渠はかの女の舊惡や古きずが如何にあつても、それは問はない決心であつた。自分も一新した生活を始める代りには、かの女にもさうさせたかつた。

荷車が着した時は七時を過ぎてゐた。うす暗いあかりを辿つて、荷を運び込んだ。玄關のから紙の奥なる六疊をかの女の部屋ときめて、渠は客間の八疊を占領することにした。兎に角、友人としてまだ同棲するだけのことだから、お互ひの寢どこは別室に取ると云ふのであつた。かの女の室へは玄關の間を通つて這入るほかには、茶の間からのひらきを明けるのだが、かの女はそのひらきに内がはからの假り錠をつけることにした。

氣候が氣候で、根を涸らせる恐れがあるので、をとめ椿をもついでに植ゑてしまふ爲め、渠はかの女に提燈を以つて場所を選定せしめた。そして門内と前栽とを仕切る建仁寺垣のうらがはにきまつた。今一つかへでの木を持つて來たのを玄關さきへ植ゑた。

その翌日は耕次自身の荷物が移轉するのであつた。こちらの懷中が乏しいのを察してゐる爲めか、かの女は、

『これでもお役に立つなら』と云つて、小形の銀時計をこちらに渡した。が、渠には持ち時計が北海道で無くなつたままになつてるので、一つは必要の爲め、かの女から預かつても質入れはしなかつた。そして自分にたッた一つ殘つて來た北海道製のせびろ服を曲げた。そして荷車と二臺の書籍と、夜着と、鐵の手あぶりと、碁盤とを持つて來た。その整理に日が暮れてしまつたが、二人で相談して、自分等の名をあつた板に二つ並べて書いた表札を門の向つて右手にうち付けた。

『……』渠はそれを人に自慢してもいい關係の表示として餘ほど得意に思つた。

『人が見たら、珍らしがりませうよ。』と、かの女も嬉しがつた。

落ち付いて、茶の間の火鉢に向ひ合つてから、渠は自分の舊作詩集を出して、そのうちから四五篇戀の歌を、

『實は、朗吟などしたことはないのですが』と前置きして、かの女に聽かせた。そして今かの女に對して有する同じ心持ちをそれとなく自分の調子にまで發表した。自分では詩や實生活に現はれた感傷心を卑しめながらも、少からずその感傷的になつてゐるのをおぼえた。

『あの猫はどうしてるでせう、ね？』かの女は然します〱沈んで行つた。

『猫ぢやアないでせう――』少し拍子ぬけがして、渠にはあはい嫉妬が燃えた。『中野のことだ。』

『そりやア』と、かの女はやや引き立つてこちらを微笑しながら見つめ、『あたしにやア戀がいのちですから。でも、中野との關係は、もう、過去のことですから御安心下さい。』

『そこがあなたのまだ羅曼主義者たるところですよ。』

『然し戀は靈で、靈は神聖です。』とまた云ひ出したので、渠も意地になつてかの女に反對して、神聖も不神聖もない、靈も肉もない、かかる區別はどッちへかた向いても部分的物質的な考へで、人間の眞相や本心はかかる物質的區別を撤去した合致のうへに在ることを說いた。

然しかの女には矢ッ張りそれが理解できなかつた。肉は物質で、靈はその反對だと云ふあり振れた先入見がある爲めだらうと思はれた。

五

かの女の父へハガキを出して置いたので、十一日の晝過ぎには早速やつて來た。それが納豆賣り、酒のかす賣りであることは耕次にも別に氣にならなかつた。且、娘のことは一切娘自身の自由にまかせてあると云ふのだから、今囘のことはただこれを報告しさへすればいいのであつた。

が、父がかつぎ荷を裏手の方へまはして、それを臺どころ口へ迎へに出た娘に向つて、

『けふは、もう、商賣はこれでやめだ。こッちの方は初めてだが、かすはよく賣れたよ』と語つてゐるのを聽くと、耕次は八疊の机がはりになつてる一閑張りに向ひながら、少からず一種の威壓をおぼえた。そして今までこちらで何げない話をしてゐた澄子が俄かにその態度を改めて、父と共にこちらがしよひ切れぬほどの要求を持ち出したりしてはと云ふ空想と恐怖とが浮んだ。

『……』が、改めて初對面の挨拶をした時には、また澄子の家を初めて訪づれた時のやうなうぶな赤面を感じながらも、大分に渠の心は落ち付いてゐた。座敷の鐵火鉢を三人で取り圍んだのだが、かの女もまじめになつて、渠に、

『事情はあなたからお話しして下すつた方がいいと思ひますから――』

『さうです、ね――わたくしから申し上げますが、つまり』と云つて、渠は自分のかたちを正した。

『先刻やつて來た萬朝報の記者にもよく話して置いたので、いづれ明日の新聞には出るでせうが』渠は簡單にだが明けッ放しに自分等の僅か四五日の間に同棲するに至つた事情や要件をかの女も一致できるやうに說明した。『ですから、僕はまだ戸籍上では別に妻を持てませんが、澄子さんさへ承知なら、いつからでも妻同樣の待遇をしたいのです。』

『尤もです。』父の六十を越えてもなほするどさうな目には、この時うるほひも出てゐるのが見えた。

『……』耕次は心で父の同情を感謝した。
「あたしは」と、かの女も耕次の言葉を引き取つて、『まだそこまでの決心には行つてゐないのですが、兎に角、さう云ふわけですからお父さんは御安心なすつて下さい。』
「もう、僕は――いつもお前の自由にまかせてゐるのだから。」
『さやア、もうお分りになつたとして』と云つて、耕次は話を父の商賣のことやら、父やかの女が教員をしてゐた時のことに移した。かの女らの赴任地であつたと云ふ方面に、これも矢張り教員で教員の妻になつた昔の友人がゐる筈なのを思ひ出して、その人名を擧げると、それはまた意外にもこの父が媒介の勞を取つた夫婦であつた。こちらは今一つ意外なことを知つてゐた。自分らの仲間の一人ふたりにいたづらなものがあつて、電車や道ばたで知りもしない女によく物を云ひかけた。そしてそのうちにはそれが爲めに友人になつたり、甚だしいのは、卽座に怪しい待ち合ひへしけ込んだりしたのがある。自分も一度それをやつて見ようとして、最初の試みに最後の失敗をした。もう、古いことだが、芝の品川電車通りで、けば／＼しい服裝で、ちよツと見つきの違つた若い女が通つてゐた。それに話しかけて、
「どうです、晝めしでも一緒にたべませんか』
と云つた。
『それどころですか、今から急いで帝國議會に行くんですよ。』女の昂奮してゐたのは、こちらに對する侮蔑の爲めよりも、議會と云ふ大きな場所でかの女の請願事件がその日の問題にのぼる故であつた。その女がいかなる奇緣か澄子だと云ふことは、をととひ、かの女が思ひ出ばなしにかの女から語り出したので分つた。そして今は渠から一つの笑ひばなしとして父に告げられた。
「だから、世間は廣いやうでも狹いものだ、ね。」父はこちらの私かに緊張してゐる心持ちに比べては一般平凡な意見しか持つてゐないやうだが、そのはなし振りにちよツと物の分つた老人にありがちな超脱味、世の中を茶化してゐる趣きがあるのは、昔の士族や老教員の物好きとして――娘には勿論、息子夫婦にも手賴らないで、――こんな商賣をしてゐるにふさはしく思はれた。
「……」父を失つてる耕次は澄子の爲めに第二の父を得たやうな懷かしみをおぼえた。
「碁盤があるやうだが、やつて見ようか、ね？」
『願ひませう。』
「關根さんも強いやうですよ」と云つて、澄子は盤の置いてある方に立つた。やさしく見せる爲めか、かの女は人並みより長く裾を引いてるので、兩手に持ち上げて盤を運んで來るその歩みの間にふとつてゐるさうなくるぶしのうへが見えた。
「……」渠は前にこれをかの女と一度戰つて見たが全く、同棲條件に對する程の手ごたへがなかつたことを思ひ浮べながら、父とは對で打つて、直ぐ負けてしまつた。それからまた何度努めても勝ち味が少く、たうとう二目の差があることになつてしまつた。そしてこの敵は老人だけに手が鈍いやうでも、なか／＼馬鹿にできぬ野心家であることが發見された。そして殘念さうに考へた上で、
『えい、やつちまへ』と劫を思ひ切るところなど、まだ／＼老いぼれてるとは思へなかつた。
今夜から茶の間と客間とに電燈がついたので、日が暮れても碁をつづけてゐるうちに、かの女の働きで酒が出た。さしみと、その他にちよツとした物とが出た。そして三人が一緒に耕次の机兼用の一閑張りを圍んだ。
澄子はこちらと二人の時には隨分あまえるや

うなおしやべりをするにも拘はらず、父のゐるところでは言葉ずくなであるのが寧ろ思つたよりもこちらには奥ゆかしく取れた。

『僕と淸子さんとはどッか似たところがあるやうです。だから、合はない點もまた明かであり過ぎるのだと思ひます。』

『これは、と、父は娘をさして、『二つの時に母親に死に別れてから、云つて見りやア、まア、男のあひだに育つたものだから、どうしても女としちやア荒ッぽ過ぎます。』

『そんなことも不服はございませんよ。』かの女は笑ひながら、中野に、かたなを抜いて出したのは、お向ふの野田の細君が見てゐて知つてゐますわ、あたしも死ぬ氣でしたのです。』

『それがよくない。』父はまじめ腐つてその手なる猪口を口の方へ持つて行つた。

『……』耕次も微笑してかの女と目を見合はしたが、そんなことまであつたものとしては必らずからだの關係にも達してゐたに相違ないと察せられた。

『それも、そのかたなは、もう、と、父はこちらに向つて、『こッちへ取り返しましたが、ね。』

『あれがありますと、』今度はかの女がその口へ猪口を運びながら、『こんな寂しい場所では泥棒の用心にもなつていいのですが――』

『その代り、僕がまた斬られちやア――』

『ほ、ほ、ほ！』かの女は半ば飲みさした酒をこぼしかけたが、こちらを氣をかねたやうに見ながら猪口を置き、縮のハンケチを出して口をふいた。

『……』耕次はかの女を取りつくろつてやるつもりであつた。矢張り笑ひながら、父に向つて、『今ぢやア、然し、いのち懸けなのは僕の方ですから――』

『まア、何でも人は無事圓滿にくらして行くに越したことはない。昔、神田の學校を持つてゐた頃は、僕もこれでも二三名の俠客を預つて引き受けて遣ひまくつたこともあるが――さうして、これがまた子供のくせに大膽で、それを隣りの部屋で寢ころんで見てゐたが――』

『……』耕次はそのことをも既にかの女から聽かせられてゐた。俠客の前には合ひ口があつたが、父がどうせ負けはしないとかの女は見てゐると、果して手に持つてたきせるをいきなりさか手に振り上げて、俠客の眉間に突きおろした。けれども、初めから向うの歯に弱みがあつたので、それッ切り一言も云つて來なかつたと云ふのだ。

『もう、年を取ると、』父の言葉はつづいた、『然し、何でも人は皆無事にあれかしと願ふやうになるものだ。』

『……』耕次はここに戀の必要がない人間と自分のやうにまだ〳〵それの必要ある人間とを比べて見た。そしてその間に大きな間隙があるのを、また自分と淸子との關係の如くにも考へられて、自分の心には人生の思はぬ悲哀に襲はれてゐた。そしてまたかの女に對する自分の進み方がちな心持ちは既に戀になつてゐることを自覺した。僅かの酒に醉はされ、誘ひそそられた自分はそれツとでも、『喝』とでも叫んで、この一切に拘ふ自分の心を皆の前に活現させて見たかつた。

が、父も年の加減か弱いのだと見え、大して飲まなかつた。そしてたうとう醉つてしまつた。

『僕ア方にかけちやアまだ〳〵誰れにも負けないつもりだが』と云つて、父はまだずッと立派に揃つてるうへ下の前歯をむき出して見せた。が、『鞭聲肅々』や『孤館の雨』などを得意さうに吟じたのは、奥歯の方からでも息が多少漏れてゐるやうなかすれ聲であつた。

『父から貰つたのですから』と云つて、かの女は酒のかすを入れた味噌しるを出して來た。

『寒い時ア、これに限るよ。』

『……』耕次もその汁のにほひにあッたかみをおぼえながら、皆と共に飯をたべた。

うら横手の貸し家はまだ人が這入つてゐず、前庭の向うには支那人らしいのがゐる。こちらの門まで這入つて來るまでに、支那人のと細い道を隔てて並んで家があるが、その間をまた曲つて支那人の臺どころ口を通りこちらの勝手へまはつて來るまたのほそ道は、もう、人の廣い大根ばたけの生け垣に添つてゐる。犬の遠吠えが寒さうに聽えるばかりで、戸が締まつてゐれば、あたりはしんかんとして、家の中にのみあッたかい味噌しるに得た勢ひが保たれてるばかりだ。

『……』耕次は父をどこへ寢かすのだらうと考へてゐた。すると、かの女は明いた物をすべてかた付けてから、父が座敷に坐りながらうとうとしてゐるのに聲をかけた。

『ちやア、お父さん!』

『おう』と、しよぼ〳〵する目を開けた。

『お休みなさいますか?』

『それぢやア、失敬させて貰ふか、ね?』

『……』かの女は客間へ父の床を取つた。そしてこちらに向つては斯う云つた。『あなたは六疊の方へいらッしやい。』

『……』渠は結構だとも、かまはないかとも云へなかつた。まだ關係のない時から父を變に思はせるにも及ぶまいと考へられたが――ここだけは矢ッ張りランプを用ゐる必要があつた室に於いて、

『あすの朝の新聞が見ものですよ』と、かの女は機嫌がよかつた。

『……』渠も醉つてるが、醉ひとは別な心の壓迫を感じながら、――顏だけを向き合はして、どちらからも微笑してゐると、かの女が先づ低い聲で話をし始めた。

『あなたがさッき憚りへ行つてらしつた時、父は中野のことを馬鹿なやつだ、なア、と申しました。』

『……』こちらには都合のいい言葉だと思つたが、さうは見せないで、『どうして?』

『分つてるぢやアございませんか、しッかり踏みこたへてゐさへすりやア、こッちは少しやア不利益な位置でも無事につづいたものを?』

『……』渠には然しそんな女と見えなくなつてた。『あなたが女房にしろと迫つたさうぢやアありませんか?』

『そりやア、何度も申しました、さ。でも向うがいつも強く出て呉れて、一度も逃げ腰になりさへしなかつたら、あたしだッても事を起しはしませんでした、わ。』

『あア、それでけふの話のかたなですか? 鎌倉の前ですか、あとですか?』

『前ですが、ね――あれがあれば鎌倉までも出かける必要はなかつたかも知れませんでせう。』

『さうとも限らない』と、渠はちよッと別な方へ目を轉じたが、またかの女に向き直つて、父の話を思ひ浮べながら、わざと無理に老人くさく理窟を捏ねた、『かたなと云ふ物は自分を殺すこともある代りに、また自分を自分で活かす爲めにもなります。』

『それこそどうして?』

『分つてるぢやアございませんか?』渠も亦かの女の言葉を繰り返したので、かの女は、

『ほ、ほ』と少し高い聲を出した。實はさう高くもなかつたのだが、それに、あたり近處へも聽えたやうに渠には思へてひやりとした。

あの檜町の家に於いてであつたさうだが、お向うの野田夫人を立ち合ひにして最後のかけ合ひをして見たところ、中野は澄子から云へば卑怯にも、

『まださう妻子を棄てるほど熱心になるまでの

關係はできてゐませんから』と答へた。

『……』耕次ははツきりさうとは思つてない
ので、そこでまた自分も現に望んでる通り結果
を避ける爲めの不自然な辛抱もあり得るので、
これとそれとを僞善的に區別してはならぬ。だ
から、かの女のこの語を聽いてわが身も中野か
らかかる區別的侮辱を受けたやうに感じて、か
の女の爲めに自分も[illegible]怒りに燃えた。同時に
また自分はそんな卑しい云ひぬけをする男では
ないぞと云ふ氣が出た。「何でまたそんな男に
未練があるのです？」

『でも、あたしは關係があるのも同樣ぢやアない
かと云つてやりましたの。』

『……』さうだ！ 尤もには相違ない代りに、
それで女がかたなに訴へかけたり、入水事件を
起したりしたのでは、どうしてもその女の處女
性を疑はなければならなくならう。これが最前
から最も自分の氣にかかつてゐたのだ。嫉妬か
ら出る少し皮肉な微笑になつて、「ぢやア、矢ツ
張り押し詰めた關係もあつたのです、ね？」

『……』かの女は答へなかつた。そしていや
な顏をして天井の方を向いた。

『それ位なら』と、僕は自分に顫へまでおぼえ
て口には云ひにくがりながら、かの女の横がほ
に向つて、「いツそのこと、――僕の――條件
も――聽いて下さい。』この頼みは既に時を得
てゐなかつた。

「あたしを信用おしなさい！ それが先決問題
です。』これが本心からか、それとも不本意なが
らの胡麻化しか、棄てツ鉢に兎に角、かの女はそ
の聲までぼけたんであつた。

「……」七日の夜に於ける如くまた手だけは
許して貰へるのかと喜んだのが無駄になつてし
まつた。ぐうぐうと安らかさうに大きないびき
聲が隣室から聽える。左には、また、かの女の
息ぐるしさうに出してる鼻いきだ。が、ゆうべ
は引ツ越しの當夜でありながら割り合ひによく
眠れたと云ふから、かの女は父の來たのを安心
して今夜は、まだ早いが、一層よく眠るだらう。
けれども僕自身は、女の意志を無理に曲げられ
てその女がさん〴〵な棄てツ鉢ものになつた例
を別にも澤山知つてるから、そんな者をしよふ
ことの利害上からだけでも飽くまで暴力は用
ゐないつもりである。

六

新聞記者が來たのは、こちらから通知した爲
めであつた。どうせあとからいい加減な想像を
書き立てられるほどなら、寧ろこちらから進ん
で實際をうち明けて置く方がましだと云つて、
耕次の友人にハガキを出した。それでその社の
社會部の一記者がやつて來たのだ。

澄子の考へでは、この發表によつて公けにか
の中野に對する意地惡い復讐の一端を示し始め
るつもりであつたかも知れぬ。いや、さう云ふ
口吻をかの女は記者やこちらに漏らしもした。
耕次に取つても、また、私かに友人にも一驚か
せてやらうと云ふ程のいたづら氣がなかつた
でもないが、それ程のことは正式の結婚を披露
する場合、花婿にでもありがちな意氣込みであ
つた。で、僕自身には、今度やり出す同棲生活
のよし惡しは人の僻見の仕かたによつて何とで
も云はせてかまはないのであつた。が、自分だ
ツても[illegible]妻に歸らない以上、また以後は世間
の所謂放蕩をぱツたりやめてしまふ以上、少
くとも一人のきまつた女の必要なことだけを誰
れにでも理解させて置きたかつた。

それが爲めに全く他人なる新聞記者に向つて
もかの女には勝手にかの女自身の云ひたいこと
を云はせ、その代り、僕も亦自分の俯仰天地に
恥ぢぬ自說と誠意とを述べたのである。けれど
も、その記事が十二日の朝に出たのを見ると、

先づ第一にその見出しを見てがツかりしないではゐられなかつた。

『變り物同士の同棲』はまだしもいいとして、『肉が勝つか靈が勝つか』と云ふ割り註が如何にも不まじめに響いた。本文を讀んで見ると、かの女が、

『私の愛は今でも中野に集注されてゐる、關根さんとはただ第一の條件通り同棲してゐるまでのことです。現在では露ほどの戀も愛もありません、云々』と云つてるに對して、自分はまた、『澄子はその後強情にも第二の條件を拒絕して今日に至つてゐる。だが、僕に成算あり、近き將來に於いて必らず僕の主義を遂行して見せる、云々』と云つてる。

これは兩方とも成るほど正直から云へばおぼえのないことはない。が、記者が兩方を獨斷的に區別して前者を靈とし、後者を肉とした爲めに、――たツた一言の書き添へに於いてだけれども、――ただそれが爲めにこちらの考へをそツくりぶち壞されてしまつた。

かの女に取つては、然し、寧ろその方が高尚らしく見えてよかつただらう。が、その反對に、こちらは下等なものに見えてゐるのだ。人生の哲理的眞相から云つても、はたまた人間生活の實際から見ても、そんな區別は僞りであり、空しく且おろかしくあることが自分には餘りによく分つてるのである。

『でも、大體は間違つてゐないぢやアありませんか？』さきに讀み終つたかの女はかた膝を立てて得意さうであつた。

『……』なんだ、目じりにきたない目くそをつけてゐながら！　渠は私かに先づ斯う憤慨した。かの女が新聞と云ふ聲を聽いてはね起きたので、こちらも直ぐ追ツかけて床を出た。二人ともまだ寢卷のままで朝の寒さにふるへながら茶の間に集まつてた。中野のことまで書いてあるだけに、ますます渠はかの女の喜んでるのが不愉快であつた。

『たツた一句、記者の獨斷がつけ加へられてる爲めに僕が臺なしになつてゐます！』

『どれ、お見せ。』父は、もう着物を着かへて、また一方の室からふすまを明けて出て來た。そのあひだに、こちらの二人も急いで衣物を着かへた。

茶の間にはその前から父が既に火鉢の火をおこしてあつた。そこへまた集まつた時、父はこれで以つて昔、神田の俠客を威服させたのか知らんと思はれるほど不恰好で、嚴乘なきせるを啣へながら、そらうそぶいて云つた。

『ふたりが勝手に勝手なことを云つてるのも淡白で正直でいいが――』それから娘の方に向つて、『お前が中野のことをまだ愛してるなんか云ふのは――心では知らず――おもて向きよくない、ね。あんなに猫のやうな、陰險で輕薄な男を。』

『……』耕次には、父がいいことを云つて呉れた。それに似たことを自分も云ひたかつたのである。男は矢ツ張り男の味かただと思へた。

『弱いだけですよ』と、然し、かの女は穏やかに反對した。『別に陰險ぢやアございません。』

『さうしたところでも、さ、ね。』それから、こちらに話題を轉じて、笑ひながら、『きのふから僕も氣が付いてたのだが――君は至極淡白で、男らしくツて面白いが、この新聞にもよく人のあらを書いてある通り、ちよツとうすぎたなく見える、ね。』

『……』澄子も無邪氣に笑ひを吹き出した。そして、こちらを微笑して見ながら、『直ぐお湯に行つて、おついでにちよツと顏を當つていらツしやいよ。』

『さうです、ね。』渠はわれ知らず頰のひげをか

た手でなでて見た。そして癪にさはる新聞を取つて、その記事に再び目をそそいで見ると、その前置きには大ッ嫌ひな左の如くある、――

「奥様の年は二十五六、むらさきだつすりの書生袴織りをぞろりと引ッ掛け、いやしげふきじひきしを出した厚化粧のおほハイカラなつに引きかへ、旦那と見えしはふけだらけのうすきたない男、木綿の絣羽織に山の出た小倉の袴、十日もかみ剃り[illegible]ひげづらをニッタリと空から消してゐるところ、その配合が極めて不調和だ……」

無論、記者の書き都合のいいやうに誇張してあつたが、綿服は渠自身の前身に於ける一つの事実だと云つてもよい[illegible]れて通して、歸つて二三日借用をつけたことである。北海道へ行つてから、[illegible]か、それではあんまり渠等までの肩身が狭いからと云ふので、絹物を揃へさせた。が、それは皆北海道で流れてしまつた。で、止むを得ず昔の名残りを用ゐてる。その上、帯の姫きは長い間の、襟からの裏り物で、常にどこ着てゐつたのが残つてたのだから、山の出たのは當り前であつた。

それはさうとして、父の注意も新聞記事に從つて、わざと冗談をまじへてのことであることは分つてたから、こちらはわれながらまづい氣がして苦笑を禁ずることができなかつた。

九時頃であつたが、かの女の出して呉れた手ぬぐひとしやぼんとを持つて、渠は先づかの女と共に近處の錢湯に行つた。そして獨りで歸つて來た時には、自分でもひげの剃れた顔が晴れて冬の空氣にすうッとして氣持ちがよかつた。

『……』自分でまた顔をなでて見ながら、また茶の間に立つてるまま、かの女と父とに向つて、『どうです、ね？』

『大變きれいになりました。』父の返事は豫期したよりもまじめ腐つてた。

『は、ほ、ほ、』と、調子は違つたが、[illegible]してゐる時の聲は相變らずほがらかであつた。

……

その日も、こちらの占領ときまつてる客間で碁をうち始めた。かの女は初めのほどは見てゐたけれども、やがて六疊の方に引ッ込んだ切り姿を見せなかつた。

こちらはかの女の爲めにかの女の父を歓待してゐるつもりだが、かの女は多分おのれだけが忘れられてると思ひ取つてじれてるらしかつた。どうせ初めから氣六ケしい女だと見てかかつてるのだから、時々かの女の部屋へこちらから出かけて行つて慰めの言葉を與へるだけの勞は惜しまなかつた。その度毎にかの女はにが笑ひを向けるが、見ると、机に向つてけふの新聞記事を讀み返してゐたり、中野への手紙を書いてゐたりした。そんなことにもかの女の寂しさが堪へ切れなくなつたかして、つひにかの女は默つてだが押し入れのふすまや臺どころの戸棚をがたッぴしさせたり、その急いで往き來の足の疊ざはりを荒くさせたりした。

『……』父がから紙のこちらでその音に氣付き出した時は、ただちよッと耳をかた向けて向うの方によこ目を使ふだけであつたが、あまり度々になつたので、『あんな女でもなかつたのだが』とつぶやいた。そして、そんなことの爲めにだらうが、碁盤の一方の隅に重大な失策ができたその防禦の一子を打つた。けれども、もう、父は手後れの爲めに全黒を投げにしてしまつた。

『ぢやア、けふはこれでよしませう。』[illegible]は父の顔をそぐのも氣の毒でならなかつたが、かの女に對しても氣がねがあつた。黒石を詰めながら、六疊の方に向いて、『さア、いらッしゃい。もう、やめます。』

『……』父もこちらのつもりは分つてたらしい。かの女のことを、『いい年をしてゐるのだが、まだ丸で赤ン坊のやうで――』
『……』かの女は茶の間とのあひだのふすまを明けてのッそり出て來たが、少し目を据ゑて、きまり惡さうであつた。こと更らに聲を和らげて、『もう、おやめですか？』かう云つたとたんに、かの女は疊の上に落ちてる毛か何かを發見して、腰をかがめて拾ひ上げ、緣がはへ棄てに行つた。
『みんなでまた話しませう。』
『もう』と、父は殊に頓狂に大きな聲で、『年を取ると、血の出るやうな決戰はできない、ね。高齢のうへのことだが、どうもおッかなびッくりが先きに立つて、ね。』
『でも』と、これはかの女に向つて、『お父アんは二目うへだけのことはありますよ、なかなか手ごはくッて。』
『全體の通算はどうですの？』
『僕の負け越しです。』
『そりやア、これでも少しやアこッちに强みはあるが――』
『古くからのことですから、ね。』かの女も心がうち解けて來たやうすだ、『あたしの五つか六つかの時からやつてるのですもの。』
『これはまた物おぼえがいい子で』と、父はかの女を――これも機嫌取りのやうに――讃めた。『十二の時じやア、もう、自分とおない年の男の子にまで大學や中庸を教へたものだ。英語もその後どうやらかうやら獨學で讀めるやうになつたらしいが――』
『……』耕次は、父から少しもかの女の兄のことを聽かないのは、五六年前から新宿の女郎を受け出してゐて、かの女とも仲が惡いさうだし、父自身も共に住むことを嫌つてるさうだし、する爲めだらうと思つた。
『あたしのして來た學問なんか何の役にも立ちませんわ、ね。』
『そんなこともない、さ。第一、お前だツて敎員もしたし、新聞記者もやつたし――』
『それが皆、あたしの失敗のもとになつたのですから。』
『……』耕次から見れば、それもかの女の實際上に一理があつた。
『字を知るは憂ひの初めと云ふこともあるが』と、父はさう云ふ方へ持つて行つて、『そんな厭世觀はこの老人にも禁物だよ。』
『自分の精神からさう厭世になるんなら、仕かたがないぢやアございませんか？』
『そりやア、ほんの、氣の持ちかた、さ。』
『……』耕次が傍聽してゐると、父がそんな呑氣なことを云つてるには、まだその娘のさうした心持ちがかの女の女性としての根本的失敗をその根本から後悔してゐるのであることに氣が付いてないらしかつた。こちらには、かの女の厭世的態度や羅曼的な得意がりはそれを身づからまぎらす爲め、もッとひどく云へば、人にも胡麻化す爲めであるに相違なかつた。けれども、父はそれに氣付いてゐないのか？ それとも、昔は矢ッ張り遊んだこともあり、また自家の女中を孕ませてその結果が、もう、品川あたりでそこの總領息子として十六七歲ばかりになつてると云ふほどの男だから、氣付いていながらも、再び娘に身投げなどしないやうに戒めるつもりで、わざと呑氣さうにそらとぼけてゐるのか？ 兎に角、またこんなことを云つた、
『僕なんざア、もう、至つて樂天家の方だから、自分で働ける限り自分で世を茶化して働くのだ。人間はどんなに死にたくないと云つたッて、獨り手に死ぬ時が來るものだ。』
『そりやア、さうですが、お父アん』と、耕次

はそこで口を出した、「僕らは働くにも二通りあると思つてるんです。さうして世の中を茶化してなら、働くと云つても、まだほんとの物でないと思ひますが――」

「若いものは皆さう行かなけりやアならんが、ね。然し、僕のやうに年を取つて來ると、盛んに働いて意張つてるものを見ても馬鹿々々しくなつて、たゞだ、べらぼうめと云つてやりたくなる。さうして、同じ價の物でも、意張つてるやつにやア意地にも高く賣つてやる代り、貧乏さうなものにやア成るべく負けてやるんだ。」

「それも面白いでせうが――」

「僕らの合宿所にやア、いろんなものがゐて、ね、僕のやうに恩給を貰つてる老書生があるかと思へば、親は立派な軍人だが、社會主義の爲めに納豆賣りになつてる人物もあつて、それにこなひだ探偵がついたから僕が仲に這入つてよく突きとめて見たんだが、ね、一向そんな惡い人物ぢやアないやうだツたよ。」

「さうですか、あなたも、ね、」耕次はかの女を返り見て、また鎌倉事件の新聞記事を思ひ出した、「あなたも社會主義者にされてゐました、ね？」

これも自分が念の爲めに聽いて置く必要があると思へたことの一つであつた。自分にはそんな主義は耕次馬のおもちやとしか見えなかつた。

「閑遊びですよ。たださう云ふ人の爲めに二三度議會の傍聽券を貰つてやつたばかりです。」かの女はまたむツつりしてゐたが、直ぐ笑ひに持つて行つて、「あたしやア戀でなければ復讐主義です、わ。」

「おそろしい人ですから、ね。」これは冗談にまぎらせて、自分の目をかの女から轉じて父の方に移した。そして父の顏に困つたものだと云つてるやうなやうすを見た。この親子の間にもまだ理解し合はぬところが殘つてて、そこをかの女が、それとなく云つてるのぢやアないかともこちらには考へられた。「然し復讐もいいです。」さうだ、中野には、復讐もいいが、その半ばは既にこの同棲によつて果されてゐるではないか？更らに思ひ切つて自分らが夫婦同樣になれば、こちらの熱心な望みが叶ふばかりでなく、かの女の執念深い敵意も十分滿足になるわけではないか？然しそこまでは父のゐる前でかの女に突ッ込めなかつた。日は暮れかかつてゐた。「二人でもツとよく親しめる爲めに、酒の方がいいと見て、「また一つ飲みませうか、ね？」

「別に何もありませんよ。」かの女がちよツとこちらへ目くばせしたのは、さうかねを使つてる餘裕がないとのことらしかつた。

「いや、もう」と、父は遠慮して、「飲むのはかまはないが、肴なんか無くツても――」

買つて來いと耕次は命じたのだが、かの女は寒いからと云つて行かなかつた。そして茶の間の火鉢のそばであり合はせの物にまた、朝と同樣、父の納豆を添へて出した。

七

十三日も晴れであつた。

ゆうべ、かの女はまたランプの光で新聞の記事を開いて見ながら、

「あたしだツて慾ばかりを要求してゐるんぢやアありません、わ。心が承知すりやア、あなたの肉にも一致して行きます」と云つた。

「……」二日間の交渉で多少はこちらの說が分つて來たのか？それとも、前々からその本心はさうであつたのか？いづれにしても、まだこちらに取つてかの女の考へは十分とは見えなかつた。云はば不著不熱の考へであつた。すべて人間の働きには――そして戀でもその働き

の一つだが――肉を受ける靈もなく、靈に與へる肉もない。その次は相互に並立する心と心、乃ち、肉であり、さう云ふ肉はまた眞に生きた靈であるから。これをかの女に對してゐんと向つてよりも寧ろ反對に、『然し、僕と云ふ物をあなたの肉としてはいいとツつかまへれば、その前に、もう、僕にあなたをすり拔けてゐませう。夫婦の眞相は男と女との一致と云ふよりも、男女相互の肉靈が無區別に燃燒合致するのだからね』と答へた。

渠はそんなことを思ひ出しながら、かの女と共に朝おそく起きると、井戸端の霜ばしらがなかなか解けさうもなく深かつた。それをざくざく踏み碎きながら、かの女の炊事の爲めにまた水を汲んでやつた。

第一便に――これがここへ郵便の屆く初めだが――かの女宛てのハガキが一つ舞ひ込んで來た。かの女はその自室に耕次を呼び込んでから、少し氣取つたやうすで云つた。

『これを御覽に入れます。』

『……』差出し人の名は匿名になつてるが、簡單な文句を讀んで見ると、

『意外の新聞記事を見て當方は驚き入り候。約束をお破りになるのは御勝手に候へども、まさか當方の姓名だけは先方へお告げになるまじと信じ候。以上』とある。嘘にするつもりであつたか、それとも脅かしか、それは實際にこちらに分らないが、かの自動車をも用意するからと申し込んだと云ふその本人らしい。そしてこの文句の云ひまはしが少からず恨みや嘲しめを帶びてゐるにも拘らず、大體の禮儀を守つてるところを見ると、かの女がさきに說明した通り、紳士であるらしい。若し果してそれならば、ゆうべ、中野のことを云はせながら、ふいとわざと反對の方へ押し詰めて、既にかの女をして――どうしても云はないと云つたのを、無理に――その住まひとその姓名とを白狀させてある。○○のお宮の森わきに住んでゐて、○○○○と云ふ人だ。その森わきの道をこちらもよく通つたことがあるので心に浮べて見ながら、

『あれでせう――？』渠の微笑した目にも矢ツ張り卑しめや妬みを帶びた。

『えゝ』と答へたかの女も亦無理に笑ひを見せてるだけのやうであつた。

『……』渠には、かの女が成るべく祕密を持たないやうにすると云ふかの女自身からの約束を――胸に斯く痛みを感じつつも――直ぐ實行して吳れたのはありがたかつた。それには自分も亦祕密をないやうにして報いなければならぬ。ましてやそんな金持ちとの約束――萬ざらうそでもなかつた――を棄てて、こんな貧乏人と同棲したのだ！　けれども、また、それをうらはらに考へて見ると、中野に對する復讐としては、ただ金を持つて意張るよりも、寧ろこちらと共に精神的な評判を取る方がいいのかも知れぬ。若しさうなら、こちらも亦ただの出しに使はれるに過ぎない。そして氣が向かなくなると、また、ふいと約束を破つて行くのだらう。こんな短いハガキの文句に、渠が妬みを產み出すのもその氣まぐれを思つてだ。

さきに房子さんが語つて吳れて置いたところによるも、かの女らが東洋學生會と云ふのに加入してゐたところから、或支那人に熱心に思はれたのをはね付けたにも拘らず、また同じ會員の一人であつた或朝鮮人と共に御嶽の山で一週間も暮した。澄子の自家辯護に從ふと、それは向うが友人の情としてかの女の失戀を慰めて吳れただけで、――眠る時には、疑はれない爲めわざ〳〵から紙を明けて、部屋を隣室の客と共通にして、かの女の寢どこをその中間に敷かせた。で、反對に、山みちを散步しながら口說

かれることがあまり烈しくなつたので、二十日の豫定をズッと早く切り上げて歸つたのだと云ふ。

けれども、また、かの女が二三の通信社、さまざまの雜誌にたづさはつた間に、或實業雜誌の社長なる洋行歸りを餘りにうるさい爲め椅子で毆り付けたのは、おほできだから自慢をしてもいいとしてからが、或通信社長に待ち合ひで云ひ寄られ、その斷りの返事をしに翌晩また同じ待ち合ひへ出かけて行つた。酒なら飮みたかつたのだとでも云ふならいざ知らず、成るべく愼み深くあるべき身としては他にどう云ふ意味をも成さないのである。或は、それも結果を殘さぬ用意があらばとでもかけ合つて見て聽かれなかつたのだらうか？

それに、また、かの女はおのれの思はれた若しくはおのれが思つた男の細君のところへ、――自狀してならまだしも殊勝らしいが、――そらとぼけて遊びに行つた。通信社長の場合にもそれださうだが、中野のにもさうだ。前者はやがて牢に這入つたので、そのあとで知らせたら、その細君はそんなことがあつたのですかと笑つただけださうだが、後者は今でも燒き餅を燒くと云ふ。が、男子たるこちらの今の心持ちにだつても遊びはない通り、燒くのが當り前ではないか？

かの女のかかる不謹愼、かかる圖々しさをすべて、渠は自分でその場の一瞬間にごちやごちやと思ひ浮べたのである。そしてかの女を愛してゐるだけに、そんなことが實際になかつたのを望んだ。けれども、あつた事實は、隱し立てや誤解のできる餘地のあるものとしたところが、事實としては動かせなかつた。そしてその動かせない事實のやうに、自分の立つてゐるからだがいつのまにか堅くなつてゐた。

「……」かの女も然しこちらに釣られて立つてゐた。

「むッ」と、渠は自分の口を結んだ。そして自分のその堅い心持ちが額にも出たのを誤魔化す爲めに、わざと首を後ろにそらせて、ハガキを持つてる方の手を不恰好に力を入れてかの女の方へさし延ばした。

「……」かの女も冗談にそらすやうな口びるの口を結んでとがらせた。そしてその和らかい羽織りの肩と手とを怒らせてハガキを受け取つてから、「ほ、ほ、ほ！」

「……」渠はかの女の頬と足とが可なり肥えて見える割り合ひにその肩などのあまり角張つてるのを初めて見て取つた。が、その聲にして若し全く僞りがないものになれば、かの女の前身などは――たとひ淫賣であつても、××であつても――問ふところではなかつた。立ちどころに自分の愛が動き涌いて來たので、「まア、いらッしやい」と云つた。そして自分がさきになつて、裏の向き家の庭に向つた窓に押しつけて据ゑてある机のそばに行き、そこに坐つてそのこちらがはの片隅に自分の左の肱を突いた。

「……」かの女もついて來て、机の眞正面に坐らうとしたが、こちらの避けためりんすの座蒲團を先づ半分押しつけて、投げ出したやうに慣れ慣れしく「お敷きなさいな」と云つた。そしてあとの半分の上に膝をおろして、左の肱を机にものせた。すると、こちらとの間に座蒲團のたるみが挾まつたが、渠が自分の揃へた膝をちよッと上げたので、その下にたるみは延びてしまつた。

「……」渠は燃えてるやうな胸の騷ぎを頬づゑにまぎらして、かの女の自分に向けてるその顏を見詰めながら、「これでこの方は僕にも安心ですが、まだ中野があります、ね。」

「……」ちよッとにッこりして、「あれはきッとやつて來ますよ――もう、あたしからは行か

ないと決心してをりますが――』

『それはどうも、あなたが會つてやるつもりがある以上は、止むを得ませんが――』渠はこのことにも父が何とか云つてるだらうと見て、『お父アんの意見はどうです？』

『父は、もう、あなたを信じてをりますから、中野のことはきッぱり思ひ切つて、ここに落ち付けと云つてます。』

『それ御覧なさい！』渠は笑つて右の手を擧げて輕くかの女の肩を叩いた。決してそんなことで樂觀したのぢやアないが、少しでもかの女の心にもッと接近する機會を得ようとしたのだ。

『でも、』と、かの女はほほゑみながら、『あたしのは未練ぢやアありません、復讐ですの。』

『なアに、復讐だッて、未練だッて、向うを眼中に置いてるのは同じですよ。』

『ぢやア、さうとして――お氣の毒ですが、ほ、ほ、あたしの目がなくなるまでは――』

『無論、一年でも二年でも待ちます！』これは渠がかの女の冗談的誇張に應じて同じくまた誇張した答へに過ぎなかつた。

この日は晩になつてから、かの引ッ越しの前日に澄子を紹介して置いた木山が――こちらに負けない氣でだらう――一人の美人を紹介しに來た。それから、また、つい近處の川上も來た。

その翌日、まだ父がとまつてるのを幸ひにして、耕次はかの女と共に朝めし後直ぐ、十一時半頃に家を出て、自家の後ろ手を一二町しかない戸山の原へ散歩に出た。風は寒く霜ばしらの深いまばら林の道で若い男女の一組に行き違ふと、かの女もこちらのからだの左手へ接近して來た。

『男は女の右手につくものです、わ』とは、かの女がさきに一緒に家を探しまはつた時に云つたことだ。

『……』今は、もう、全くおもて向きだけでは夫婦に見られるのをかの女も恥ぢてゐないやうだが、――いや、わざとにもさう見せようと云ふやうすもあるが、――あの時、渠はまだ自分の方が、九歳も年うへでありながら、寧ろ少し恥かしかつたので、それをまぎらせながら、『そりやアさうでせうよ、左にゐさへすりやア自轉車や自動車にもぶつかりッこがないでせうから』と高笑ひをしたッけ。

思はず早稻田へ出たついでに、共に眞宮と云ふ友人を老松町に音づれた。そこからまた氣が向いて、電車で房子さんを尋ねた。が、そこでまた前のと同じやうな婦人論、戀愛論で渠は自分の澄子と衝突した。

自分が考へて見るに、房子さんのところへ來る度ごとに斯う自分らに衝突があるのは、必ずしも自分らの間に不理解がある爲めばかりではなかつた。澄子は自身に弱點ができて以來、それを無理にでも否定して置かうとして堅くなり、その親子同士までこいぢになつてるこの獨身親子に對しても暗に楯を突いてるのであつた。

それに、また、かの女には面白くないだらうと見えることには、渠は房子さんとはずッと以前からの交際で、お互ひにいろんなことも知り合つてる。が、男と女とのことだから、さう痛切に競爭にもならねば、妬みにもならぬ。或時など、ふとした話から、房子さんはこちらに向つて、むろん冗談に、

『あなたはさう女を探しまはりながら、わたしを一度も口說いたことはないの、ね』と云つた。

『口說いたッて駄目だと分つてるから。』渠にはそれ位の理解はあつた。他の婦人で、房子の寫眞を見た者が、この器量ぢやア如何に闔根

さんでもおとなしくしてゐるのは當り前です、わ、ね、と冷かしたさうだ。渠は男女の接近をさう單純なものとは考へてゐないのであるが――。

こんなことをも澄子は既に聽かせられてるだけに、房子さんが渠の肩を持ち、渠がまた他方に贊成する――を――おのれがうとんじられてると思つて――面白くなかつたにも由るだらう。だから、渠はここを辭する時當分向ひは一緒に來ない方がいいと決心した。

『房子さんは理解も同情もないくせにつけ〱云ふから癪にさはる！』澄子はそとへ出てから獨り言のやうに云つた。

『おやア、僕はただその癪の犧牲になつたんですか？』

『あなたがツてあんなものに贊成する必要はないでせう。』

『……』――一緒にさうとも行かなかつたのだ。

ふたりが郊外の電車終點をおりた時は、もう、十時過ぎであつた。暗い方へ〱と從つて二人通りは少く、店燈も多くは戸が締まつてゐた。

『手をつなぎませうか。』突然かの女は云ふが早いかこちらの手を握つてゐた。

『……』――然し、歸京早々改心した人のお情を貰つたインバネスの羽根の下にかの女の血のあツたかみをおぼえながら、ぢツとあまく、胸のとどろきを辛抱した。そして自然に足の歩みを早めた。

『……』かの女にもそれツ切り言葉はなかつた。が、これまでにも隨分ずうずうしく見えてた女も、こちらの動悸か電氣かに感じてゐるかのやうに、その息を急がしさうについてる。そしてそれがかたはらの○○と書いてある門燈の光に白く見えて、直ぐ消えたり現はれたりしてゐる。

一方は芝草の土手に立派な門がまへ、他方はあらい生け垣なる、その間を少しのぼつて行く道であつた。

『……』渠はかの女とたツたふたりツ切りの世界であるやうに靜まつて來たので、矢張り默つてだが、手を取られてるままいきなりかの女の前へまはり、自分の右の手をかの女の肩にまはした。

『……』かの女も素直に進んで暫しこちらに接吻を受けてゐた。『もツと、ゆツくり歩きませうよ』と云つてから、また暫らく間を置いて、『あたし、實は、あなたを好きになつて來ましたの。』『感謝しますよ。』少し行つてから、また立ちどまつた。

『中野のことはただ過去の追懷に過ぎませんから、ね――あたしの一つの趣味として許して置いて下さい。』

『僕としちやア、然し、その趣味もなくなつて貰ひたいのです。』

『また、さう急いで』と、かの女はこちらを力強く引き戻した。再び手を取り合つてるのであつた。

『この奥に○根、近藤』とかかげてあるところを曲れば、四五間で自分らの住まひに達しられるところまで小一町ばかり、そしてなほ戸山の原までも直ツ直ぐにとほつてる狹い横町になつた時、生け垣のあひだから小徑の霜にしぼんだのと白い八ツ手の花が湯のゆき歸りによくのぞかれるあたりで、――川上氏の門燈よりも少し手まへだが、――もう一遍立ちどまつた。

そしてまた歩き出した時には、手が解けてかの女がさきに立つてゐた。

ところで、渠にかの女をその後ろから見て行くと、かの女は相變らず昔のをとこ書生の如く一方の肩を少し高くいからせてゐる。これは一度その前にも注意したことであるので、『それ』と云つて、突然、かの女の左の肩を輕

く叩いてやつた。すると、
『あ、さう、さう！』かの女は忘れてゐたと云つたふうで頓狂に笑ひながら、それを低めたが、今度はまた右の方が高くなつた。
『……』渠はいやな癖もあるものだと呆れた。向うがそれを獨りで氣にし出して、また直して見たりして行くのを、もう、こちらははふつて置いた。
女の獨り者がいろんな男に持てて來た思ひ上りの結果として、それも面白くない記念の一つかと思ふと、かの女がその度毎に與へたらしいのと同じ今の接吻には、それだけいろんな黴菌が傳はつてゐるかも知れなかつた。
で、渠は自分の袂からそッとハンケチを出して、そッと自分の口のあたりのべた〱したのを押しぬぐつた。

八

父は娘のところへ來ると、いつも娘の朝寢坊に釣られて自身も寢坊をすると云つてたが、十五日の朝、食事をすますと直ぐ、娘の小使ひとして三圓を置いて、歸つて行つた。その歸る時、臺どころから荷をかついで出るが早いか、うら庭で一つ、
『かすやア酒のかす』と呼んで見せた。
『面白い人』と、かの女はこちらに向つて獨り言を云つた。
『……』渠はひと風變つた細子の情を思ひやりながらも、然し笑つてはゐられなかつた。ゆうべは餘ほど碎けて、惡く取れれば馬鹿にして、かの女に當つて見たのである。けれども、矢ッ張り無駄であつた。
初めは、かの女がかけ蒲團の中で腹這ひになつて雜誌を見てゐるのを手で以つてからかつて見たりした。すると、かの女はおこりもしないで、こちらを見て、
『いたづらッ兒』とかの女のとがつたあごをしやくつた。その子供らしいところから、段々と說いて行つたのだけれども、つまり、徒勞であつた。
かの女は相變らず、それが中野のゐる爲めではない、また、耕次を嫌つてるのでもない、と云ふのである。
『あなたが僕を嫌はないなら、嫌はないやうにしようぢやアありませんか？　女が男を戀して行くと同樣に、男も女の全部を得てしまふまでは安心ができません。また苦しくッて、精神もからだも痩せて行くものですから。』實際に、渠は澄子を見てから自分のただでさへ痩せてる顏が一層痩せて來たやうな氣もしてゐるのだ。
『ですから、これからはおもて向きでは十分夫婦同樣に見えるやうに致しませうよ。あたしも今ぢやアあなたが無いと寂しい氣がしますから。』けれども、五年間も戀をしてその爲めにいのちまでも一旦は棄てたそのまとにさへ許さないで來た『處女性』を、今となつてさう容易に棄てたくはないと云ふのだ。
それは、然し、渠には半ば豫期してゐたことのやうでもあり、また半ばはうそのやうでもあつた。正直に云つて、かの女に果して純全たる處女を標榜するだけの資格が殘つてるだらうか？
かの朝鮮人のことは、豚に玉を與ふる類ひであつたとしてもいい。また、皆に或待ち合ひでわざと置き去りにされて、殘つた唯一人の男の爲めに午前の一時、二時まで引きとめられ、それでも逃げて歸つたのを、その男が翌日になつて既に成功した如く吹聽した。それをかの女が怒つて中野を立ち會ひ人にして、皆の前で取り消さしめたと云ふのも、それで少しもかまはない。が、——
『それぢやア、最初のいとこにはどうです』と、

渠は重苦しい挑戰的氣ぶんを以つて突ッ込んで見た。すると、かの女は、

『あれはまだ何にも分らない子供の時で、而もこツちが不承知の無理強ひでしたもの。』斯う答へて、平氣であつた。

『では、――ぢやア――』中野のことは渠には、もう、よく分つてるやうな、また分らないやうなので、聽きかけたのだが、聽き糺すにも及ばなかつた。

無理強ひの不承知を穢れてゐないと云ふ格で、不自然の用意をも『純潔』だと云つてるのなら、注意深い遊樂者のやつてることにも純潔で通せるのがあらう。こちらはそんな僞善的申しわけをしないでもかの女の舊惡は――きッとあるものとして――すべて許してやる氣でゐるのに、そこへ信じ込んで來ないのがもどかしかつた。

アメリカのそんな青年のうちには、おのれの愛する婚約者には結婚式をするまで決して身を許さないでゐながら、その間に他の男を――殊に日本人や支那人やアメリカ印度人を――近づける氣まぐれものがあると云ふ。却つて一たび、おのれの一生を共にする男にさう容易に許してしまへば、その男がいい氣にもなり、そしてまたおのれが速やかに卑しめられるからである。それに似た考へを澄子も持つてゐるのぢやアなからうかとも、渠には臆測できた。若しそれならお門が違ふ――『生意氣に、人を――馬鹿に！』

『……』かの女はこちらがそこまで考へてることなどを知らう筈がなかつた。父の歸つたあとでも、また相變らず前夜に見たたわいもない夢のことなどを語りながら、『あたしの親はあれだけよく分つてる人でせう。然し、あたしが若しほかのことに熱心になれば、親なんぞア――どうでも――』

『……』渠は、かの女のさう云ふ心持ちが果して生れ付きの眞實なら、むろん、これまでにもあの男、この男に浮かれるやうなことはなかつただらうとも考へられた。斯うしていろんなことに躊躇し、いろんなことに思ひ惑つた。

十五日のけふは少し氣を拔いて來るつもりで、友人訪問や仕事の要件に出かけることにきめた。そして明けッ放してある室を日當りのいい緣側に出て立つて、暫らく庭の南天やあすなろや持つて來た椿などに目をやつてゐた。すると、自分の向つてる眞向う、支那革命黨の家の窓から一人の支那人がちよッと顏を出して、こちらを見た。あれが宋教仁と云ふのか？　今一人の黄興は西郷隆盛のやうに肥えてるさうだ。そのどちらかのめかけになつてる日本人の女中のゐるのが澄子には自身のいやな對照になつて、一層かの女の思ひ切りを惡くした。

『あたしやアあんな女と違ひます』とも云つたことがある。おのれも御嶽の山で朝鮮人に或程度まで世話を受けたくせに――。

いろんな支那人も出入りする樣子だが、こちらで困るのは喰つた菓子の紙ぶくろを丸めて窓からこちらの庭にまで投げ棄てることであつた。疊の上に短い毛が一すぢでも落ちてるのまで氣にして拾ひ歩く潔癖な澄子は、きのふ、それに對する抗議を向うの女中まで共同の井戸端に於いて申し込んだ。が、また一つ白い紙の丸まつたのが庭の檜のしめつた根もとに落ちてゐる。また棄てたらしい。

『……』渠も癪にさはつたので、向うへも聽えるやうに、『また落ちてる――云つても分らない奴どもだなア！』一つには、然し、新聞の記事が吾等にも馬鹿にした興味を持たせたに違ひなかつた。『あなたは胸が明いて見ッともないから、これをおこしなさいよ』と、云つて、かの女は一つのピンを持つて出て來た。

『純金だから、惜しいんですが――』
『また何かの記念ぢやア――？』
『いやなら、およしなさい。』かの女は有無を云はせず、こちらの着物の襟を兩手で直して見れて、一寸二三分で曲つたさきに何かの小さな寶石が光つてるのをそこに留めた。
『いい、ね。』渠は今一度自分のあごを引いて、自分の目をピンの光へ向けた。結婚ゆびわの代用にも思はれるので嬉しくもないことはなかつた。
『またのぞいてる！』かの女はこれも聽えるやうに云つて、ちよツと横目をして向うを睨んだ。
『……』渠がまたその方に目をやつた時には、然し、もう見えなかつた。その自國の爲めに亡命して、その苦境を近ごろは懸け軸など賣つて切り拔けてると聽いては、あんまり馬鹿にもできなかつた。貧乏や亡命の所在なさにか、向うにも時々碁を打つ音がする。
『行つていらツしやい。』かの女のたツた半日をでも名殘り惜しさうにした顏と聲とを、それでも新らしい無事な家庭から出たそれだと空想しながら、渠は或雜誌社へ行つた。
すると、そこの友人が直ぐ澄子の話になつて、あれは君、中野の前にも男とくツ付いたことがあるぞといふことであつた。血で書いた手紙のぬしのことを傳へ聽いてたのだ。
『なアに、あれなら今の僕と同樣、ただ同棲してゐたばかりだ。からだの關係があつたのぢやアない。』
『若い女にそんなことができるだらうか？』
『現に、僕とまだ潔白ないきさつをやつてるぢやアないか？』
『そりやア、證據になるものか？ たとひ人のいい君とはさうやれても、それはもう女も老巧になつたあとのことで――中野の方の連中から聽くと、また、あれは不具者だらうツて云つてる。』
『……』耕次には寧ろこの最後のことが新らしく發見した事實ぢやアないかと思はれた。不具の爲めに女が男のやうになつて、平氣で男に接近して行つたりまた來たりする。そしてそれが女の氣ぶんに立ち返つた時は、俄かに一般の女よりも痛切にその缺點からの寂しみをおぼえて、男に熱心にもなり、いのちも棄てることがあらうが、それは女の心ばかりのことで男には關係がない。渠は、自分がかの女と關係を遂げて見るまでは、さら考へて却つてかの女を人にも辯護して置きたかつた。さうすれば何がなんでも、かの女の疑はれてる男は――中野でもその他でも――すべて潔白なあひだがらであつた。で、友人の非難をまじへた報告に對しても隨分らくな心持ちになつて、『それが本統かも知れない』と答へた。
　そしてその他のところでも冷かしやら忠告やらを受けた時、矢張りその心持ちでらくに受けてしまつた。が、渠はみち〳〵私かに考へて見ると、自分も人にかの女を不具者と云はせて置く方が便利でありまた高潔に見える如く、中野の方でもその爲めにさう皆に云はせて置いたのかも知れぬ。そして中野自身には十分祕密な樂しみがあつて――。
　矢ツ張り、どうもかの女の處女性が氣になつたので、房子さんのところへ立ち寄つて、あけすけに聽いて見た、
『どうでせう、あなたは中野と近藤とがすツかり關係してゐたやうに云はれましたが、近藤は今でもその身を純潔だと意張つてますよ？』
房子は答へた。『ぢやア、あなたはからだもすツかり許してあるのですかと尋ねて見た時、無論と返事しました、わ。』

「あなたにやア止むを得ないから白狀したんでせう、ね。」渠は鬼の首でも取つたやうに心がすツきりした。それが自分の愛してゐる女の前身を不純潔にきめてしまふ所以ではあつたけれども、その方がかの女に對して自分がもッと多くの征服力を持てるのであつた。

市中の空の一方につるぎの兩端をぴんと上に反らせて冷たさうに光つてる三日月のかたちに、渠の心もぴんと張つた。そして今夜こそかの女の傲慢を素ッぱだかにして、生れたまま又けがれたままでこちらに降服させてやらうと樂しんだ。が、これは取りも直さずかの女に對する自分の切實な愛であつた。

けれども、歸宅して見ると、迎へに出たかの女は先づこの報告をした。

『先刻、中野がまゐりました。』

「……」客間からさしてゐる電氣の光にかの女がにこ〳〵して見えたのも却つて面白くなかつた。この女も亦かのアメリカ女の如く、婚約實行までを、假りに他の男をおもちやにする挿嫉にもなれるだらうと云ふことが切にこちらのあたまに響いた。

「さうか」と、わざと輕く受けて、茶の間へ來た。これから再び中野に對するかの女のよりが戻らうと決して思つてゐないが、けふの房子さんの證言が氣にかかつた。

「……」かの女もこちらと向ひ合つて火鉢のそばに坐つたが、こちらの顏を見い〳〵また報告した、「一時間ばかりゐて歸りました。」

「……」

「よろしく〳〵と申しました。」

『さうか』と、また二度目には答へた。渠には、かの女がさう聞はず語りをするのは自分らの間の約束を守つてるのであるに違ひなかつたけれども、『それが却つてかの女の逆襲であるやうに取れた。

『……』かの女もそれッ切り默つて、少しいやな顏つきになつた。

「……暫らく〳〵してから、渠は食事を命じ、それの給仕をかの女にして貰ひながら、「どうでした?」

「どうッて」と、苦笑しながら、「餘ほど謹直に遠慮してゐました

「謹直はあれのお旗ぢやアないのですか?」渠には、實際、世間を憚ることに勝てぬやうな謹直は、そしてその謹直から愛する女を裏切るやうな男は、問題にならなかつた。

「あなたからおつしやれば、さうかも知れませんが――報告だけは致して置きます。」

『……』渠はこの方はすべきが當り前だと思ひながら、「いや、あなたから云つてもでせう――?」

また雨方からの沈默が少しあつた。

『……』かの女は火鉢にあたりながら下に向けてた目をちよッとじろりと上げて、『ぢやア、來させてはいけないとおッしやるのですか?』

『それは最初からの承知ですから、いけないとは決して云ひませんが、ね――』渠には今やそんなことを一小事件に過ぎないものにしてしまふほどのことがあつた。そして房子さんを裏切るのはよくないと思つたけれども、止むを得ないので聽いて來た言葉を持ち出した。「飯田町ではあなたが中野とはからだの關係もあると白狀したさうです。」

「そりやア、俗物には」と、眉をきりりッと上げて、「面倒なことを說明したッて分りませんから、ね。」

「……」渠はさうきッぱり云はれて見ると、それもさうだと云ふやうな方面へ自分の疑惑を轉じさせないでもなかつた。かの女にして若し世間の一部で評判されてるやうな不貞者であつたら、一層のことだし――また、然らざるも、現

に自分が一個の紳士としてかの女に暴力をさし控へてゐるのをも、ただ凡俗の考へしか有しないものらは、或は、あんな體裁のいいことを云つても、實は何とか馴れ合つてるのだらうと、見當違ひのうがちを云つてるかも知れなかつた。

九

一般婦人の感傷的な態度に小理窟を加へてだが、かの女は轉居早々から同棲日記を書いてゐた。そしてそれが――こちらの論文や創作をするに對して――かの女の何よりの仕事であるかのやうに見えた。

渠は試みにその十二月十五日のくだりを讀んで見ると、

『乃父歸る。無事。中野氏來る。君は留守なり。座に在るやや一時間にして恐縮頓首して去る』とあつた。

――……』渠はかの女が筆に多辯なのにも拘らず、その思想上に一番大切な男の來たのを書きしるした物としてはあんまりあッけない書きかただと思へた。いや、いろ〳〵書きたいことや書けることがあつたのだらうが、こちらに遠慮して詳しく云はないのだらう、と。渠には、かの女が一面には水くさく取れたが、また一面には、それでも、中野の『恐縮』してゐたのは恐らく事實であつた――中野の人物から云つても、またかの女がそれに對する一種の復讐的決心のあるところから想像しても。

さうだ、かの女には向うにうそにも見せつけてやれ、燒かせてやれ、羨まして向うを後悔に苦しめてやれと云ふやうなたくらみもあるに相違なかつた。

このたくらみのわなへ向うが這入つて來たのであるから、かの女の心は先づ待ち受けた最初の凱歌を奏した筈だ。が、それを例の感傷辯から羅曼的に多辯を弄してないのは確かにこちらへの遠慮であつたらう。渠の心が落ち付いた時に口で聽いて見ると、

『どうお暮しですか』と尋ねたに答へて、『至極平和ですよ』を以つてしたさうだ。そして日記の十六日にも、『無事、できるなら斯うした平和な生活にゐたいと思ふ』とある。また十七日には、『淡々として水の如し』ともなつてゐる。

『……』それを渠が、實際に解釋して見ると、水の如しとは決して淡々としてゐるのではなく、こちらが蟲を殺して隨分さりげなくしてゐる爲めである。從つて、その平和と云ふのもほんのおもて向きの、うはツつらの狀態に過ぎないのであつた。

かの女だツて多少はそれを知つてゐるだらうし、それに對するかの女自身の不滿の原因も分つてる筈だ。が、中野に對して無理にも無事滿足のやうすを示したのが嬉しくなつたからであらうか、

『あたしは當分あなたのおそばでこの日記を書くのを仕事に致しませう。このままで決してあたしは不滿足でもございませんから』とも云つた。

『さうですか――決して惡いことぢやアりませんから』と、渠は答へた。さうしてゐるあひだには、段々かの女の心がこちらへばかり向いて來るだらうと思はれた。

成るべくかの女をして過去を過去として葬らしめ、執着の種となつてるものは速やかにその根がなくなるやうに、渠はさきにかの女がこちらへ讀んで聽かせたところの追懷文――その中には中野のことを『半夜の友』と呼んである――を雜誌に公表するの發議を出した。かの女も異存はなく、喜んでそれをその雜誌の記者に渡した。まだ新年號に間に合ふと云はれたので。

十二月二十日には、眞宮が尋ねて來た。耕次は渠の關係してゐた新聞の文藝欄に長らくその時の問題を發表してゐたし、また渠と共に度々かきがら町の暗い怪しい小路へ行きもした。が、今では、もう、向うもこちらの事情を知つてそんなところへ誘はうともしなければ、こちらでも二度と再び行きたくなかつた。茶を汲みつつ碁を打つたり、雜談に耽つたりしてゐるうちに、澄子が錢湯からお化粧を新たにして歸つて來た。

『射るやうな目つきをして人をじろじろと見る』と云つて、かの女がさきに初對面のあとでいやがつたその人の來訪であるから、かの女はちよッと挨拶に出た切り、ふすま一つ向うの自室に引ッ込んでばかりゐた。

『まだか、』と、眞宮は向うの澄子にも聽える聲で云つた。

『まだ、』と、耕次は斯う事實を以つて答へるのが寧ろ苦痛であつた。

が、澄子はそれをふすま越しに耳に入れて面白かつたと見え、早速この問答をその通り日記へ書き入れてあつた。そして更らに左の如き文句だ、――

『われは今日では關根氏が世間の定評の如き、單なる放蕩者でないことを認めたり。赤坂の家に在りし時より今日まで十有餘日、私の處女性を犯さざるを見ても、此の定評の誤まれることを知る。』

……こちらは然しそんな呑氣なことに滿足してゐられなかつた。

二十二日は晴れたり曇つたりして、寒いばかりの日であつた。共に一歩も外出せず、夜になつて耕次はかの女の前で詩を歌つたり、うろおぼえの長唄や清元をやつたりしたが、その間にも流れ出ようとする暗涙をつとめて押し忍んでゐた。

ただ冷淡に考へて見れば、純潔か不純潔かも分らない高が一婦人のことではないか？　若し腕力を以つてすれば、そしてそれッ切り喧嘩してしまふつもりなら、實に、何でもないことだ。が、一新した生活をつづけようとしてゐるものには、そのあとの寂しさが火の消えたあとのやうになるだらうと思はれて、寧ろこのままでも今更ら喧嘩別れをしたくなかつた。

さうかと云つて、また、ただ獨り冷たい蒲團の上に目をさましてゐて、そとなる雀のちゆうちゆうと云つてる聲を聽くと、その僅かに小さい輕快な鳥に對しても面目がなかつた。大の男が朝早々からわざわざ陰鬱な不滿足を心にいだいて起き出でねばならぬとは！

兎に角、こちらの誠意誠心がまだかの女に十分に屆かぬのだと、殘念であつた。成るべく皮肉や嘲笑を出さないやうにして、かの女の心を荒立たしめなかつたので、かの女からの發議によつてその夜からかの女も耕次の勉強室に眠ることになつた。

『あたしの室は襖ひとへでそとになつてますから――』少し大きな聲を出してれば、直ち聽きされる恐れがあると云つた。そしてその翌日、耕次が東京へ出てゐる留守に、かの女は多くの手紙や書類を燒き棄てた。

『中野のものですか？』

『あれだけはどうしても燒けませんでしたの。』

『……』それもさうだらう。入水の節にもしッかりそれをかかへて死んでたので、助かつてからも、警察の人に、何か大切の書類でせうから、御身分に對して開きませんでしたと云つたほどの物だから。

『然し、行李の底深く納めましたから、再び取り出して見ることはございますまい。』

……こちらには、然し、仕かたない以上は、

どうせどちらでもよかつた。が、かの女がそんなことをするだけでも、少しはこちらの物に成りつつあると思はれた。
　二十五日に中野からハガキが来て、その一友人なる松山と共に明日やつて来ると云ふのであつた。二十六日は耕次も敵意と好奇心とをまじへて待つてゐると、おひる頃に二人同道でやつて来た。一方の男は極らいらくな代りにあたまは粗笨らしく、
「おい、姉御」と澄子のことを呼んで、前々から来ると必らず酒を要求し、とまつた時は朝になると、自分からさきに立つて家ぢうを箒木を以つて掃除してまはるほどちよくであつたと云ふ。それに、話して見ると、その男の一友人がまた耕次の友人であつたので、そんなことから話が進んで、割り合ひに圓滑な小酒宴がひらかれた。
　別な来客の為めに、耕次が暫らく別室にゐると、かの女は不断よりも堅苦しくなつた手つきや物ごしでこちらの世話もした。が、隣室のやうすに耳を傾けてると、男の方の聲はひそめられてるが、かの女のは却つて晴れやかな笑ひ聲にもなつてゐた。これは必らずしもこちらへの申しわけばかりでもなかつただらう。かの女は機嫌よく醉つて来ると、その聲がいつでも高く晴れやかになるのであつた。
　こちらが再び一方の男と盃を取りかはせることになると、澄子は獨りでその自室の方へ立つて行つた。そして窓を明けた音がすると、
『中野さん、ちよいといらしつて御覧なさい、月がいいから』と云つた。今夜は確か十四日の月で、天は晴れてるのであつた。
「……」中野もこちらへ氣がねしたやうにだが立つて行つた。
「……」耕次には、もう、それを悪い方へ怪しむなどの氣はなかつた。人のかけでまた手を握らせるやうなことはないと信じてゐた。が、澄子が一旦世を悲観してからの天然憧憬を以つてまた平凡な感傷だらうと思ふと、それを尤もらしく聴いてるらしい者の馬鹿けたつらが見たかつた。二人が歸つて行つてから、「僕は中野のやうな人物はきらひです」と、かの女に告げた。「正面から人の顔を見詰め得ないやうな男は邪心が多いものです。僕はあア云ふ男と交際したくない。」
「それは全くあなたの誤解でせうよ。」かの女は遠慮がちに渠のことを辯解した。『不断は如何に弱い人でもあんなではありません、わ。胸にこッちに對する嫉みと痛みとがあつて、冷にあし達に向つてることができなかつたのです。」
「ぢやア、どうしてそれが分りました？」耕次は、それでは中野がまた慾を出して来て、今よでの詫びやら後悔やらを述べて、かの女を再び取り返す氣であつた、な、と思はれた。そして多少氣がのぼせて、こちらがまた元の獨りになるかも知れぬ時の寂しさを想像した。
「松山が申しましたのですが、あたしと別れるやうになつたのはほんの氣が弱かつた為めで、素よりの本意ではなかつたさうです。」
「だから、今一度歸つて呉れろと云ふんですか？」
「向うでは、まア」と、かの女はこちらのぢッとさし向けた目をまたぢッと見つめながら、『さう云ふつもりでしたでせうが――』
「……」なほ進んで聴いて見ると、松山からは澄子に直接に今一度逆戻りすることを勧めたさうだが、中野はただかの女に、
「あなたは關根君と結婚なすつたのですか』とまでしか立ち入つて来なかつた。そしてそのあとはかの女を眞正面から見つめて、かの女のけしきにかの女の心を讀まうとしたさうだ。

「……」耕次はあんな氣の弱い者にも見つめられねばならぬ閲歴を有するところのかの女を、心ではさげすまざるを得なかつた。然し、かの女はその時中野に向つて、

「どうでもあなたの御想像にまかせます」と答へたさうだ。これはこちらに取つてもかの女のおほ出來で、ちよツと氣持ちがよかつた。

「……」然し渠は、かの女がまた直ぐ日記に向つたので、きツとまたこちらの神經にさはることを書くに相違ない、そしてけふのことには殊に不快を感ずるやうな感想が一層多いだらうと思つた。で、かの女をうツちやつて置いてさきへ床に這入り、習慣通り電氣を消した、そしてふすまを隔てて、「以後、もう、あなたの日記は讀まないことにしませう。」

「何もあなたに讀んで戴く爲めに書いてるのぢやアありませんから。」

『……』その癖、初めのうちはその古くさい文章を得意さうにこちらにも讀ませたのだが――。

獨りで天井に向つてそぞろに考へてると、何となく熱い涙がほと走るのであつた。この愛に於ける征服を自分は切實にまた眞實に考へてゐた。俺くまで亂暴はしたくない。かの女がその舊惡とその肉體とを心から投げ出して降服して來るのを――ガツと辛抱して――意地にも待つてゐるより仕方がない。が、小理窟の多いかの女には、それができるであらうか？ どうせそれができないほどなら、まだ純潔をかの女が標榜してゐるのを幸ひ、そして中野の方ではまだよりを戻さうとする下ごころがあるのを幸ひ、こちらがこちらの友人どもから不成功の爲めに逃げられたと云ふあざけりを受ける恐れなどはかまはないで、下手な妥協をするよりも、寧ろ今のうちに隨分面倒なかの女をそツくりのしを附けて返上してやる方がよかつた。

つまり、かう云ふ風に考へて、自分の誠實心が自分の胸をくら闇にはち切れさうにしてゐたところへ、かの女も日記を終へてやつて來た。が、こちらの樣子をこちらの迫つてる呼吸に氣付いたと見え、そのかた手で以つてかの女はこちらの枕もとを探つて見た。坊主枕のしめつて熱くなつてるのが分つたらしく、

「あたしはどうしたらいいでせう」と歎息した。

「……」向うの決心一つであるから、こちらは何も返事をしなかつた。

夜が明けて、二十七日の朝、渠が目をさますと、かの女は直ぐまた夢を語つた。

「ゆうべのはおそろしい惡夢でしたよ。黑い蛇があつて、あたしに向つて來ましたの。あたしは一生懸命に逃げまはりましたけれど、たうとう追ひつめられたのを、自分のうなされた聲で目がさめました。」

「……」渠は純粹の征服をそんな風に進めたくはなかつたが、切實な精神では然し、もう、そこまでも行つてるのだと思つた。「その蛇は、つまり、僕の執着心であつたのでせうよ。』

かの女をさきへ湯にやつてから、渠はゆうべの會見にまだ何か殘つてる祕密でもないか知らんと、かの女の机の引き出しから矢張り日記を出して見た。

「中野氏、松山氏と同道にて訪問せらる。君と初對面の日なり。胸のあらしは知られねども、兎に角、無事なり」と云ふ、氣取つたやうな文句に始まつてた。そしてそのあとは斯うだ、「中野氏とわが部屋の窓より十四日の月を望む。澄み渡る空、物凄きまで清し。嗚呼、この月、去年の今日はわれも人も世にも人にもらやまれし相思の人なりしを、浮世なれや、今年の今夜、利鎌とすめる月影を同じ窓に眺めながら、お互ひの胸は月とわれらとほどの距離あり。今やわ

れは彼れの愛人に非らず、彼れはわれの戀人に非らず。胸に悲哀を抱いて、つとめて笑みを含む。かの明星はわれよ、われに光明のあるあひだ、この戀のさかゆるあひだ、かの星も亦永劫の空に輝かんと誇りしが、明星はさんとして光をはなてどもわが胸は無限の闇に閉されて。』

「……」如何にも古くさい想でもあり、文章でもあるとは思へたが、ゆうべかの女に向つて、『けふの會見に、若し僕が既にあなたの全部を得てゐたら、中野に對しても勝利者として臨む强みがあつたでせうが、それがない爲めに、隨分侮辱されてるやうな氣がしました』と云つたことを、もう、撤回してもよかつた。

一〇

『あたしは戀と愛とは少し意味が違ふと云ふ説ですが、ね——』

「……」また何を呑氣に考へ出したのかと渠は思つた。が、何か返事をしてやらないとかの女がすねてしまふのだから、そしてそのすねかたと來たら、無邪氣な娘などのと違つて、なかなか執念深く、その幅ッたい顔が二度と再び見られないやうないやな物になるのだから、こちらも微笑と云ふよりも苦笑を見せて、ちやア、どう云ふのです？」

「簡單に云へば、戀とは詰り間接に思ひ忍ぶのでせう。だから、どうしても自分のそばから遠く離れてゐるものに向けることになります。』

『ふん——』渠はをかしくなつたのを無理にこらへてゐた。かの女がこちらをこの十數日間苦しめてゐたところの、中野に對して有する考へに段々と體裁のいい申しわけ付きの見切りをつけて來たのぢやアなからうかと思はれた。「ところで——？」

「ところで、愛はその反對で、と、かの女はこちらに微笑を向けながらも、なほこちらに負けて行くのぢやアないぞと云はぬばかりに眞面目腐つた目つきを見せて、間接でなく直接に、遠くなく近く、自分のそばに親しく心の相手を持つことです。』

『して見ると、中野に對するあなたは戀で、それとは衝突もしないであなたは僕にはまた僕に對して愛を持てると云ふ意味ですか？」

『若しその氣が出ました時にはです。」

「無論でせう——」渠はかの女の云ふところを、かの女がさう無理に羅曼的に持つて行つたよりも實際的に、理解することができないではなかつた。「それは然し珍らしいことでも何でもないのです。誰れでもその初戀が死に別れか生き別れか見棄てられかで破れた痛みをまだ持ちながら、再び別な男に心が向いた時の感じです、だから、あなたの所謂愛も第二の戀に過ぎず、あなたの所謂戀は最初若しくは一つ以前のそれでせうよ。」

『さうすりやア、矢ッ張り、靈も肉も一緒くたになつて』と、かの女はなほ未練らしかつた、「つまり、あなたの合致論になつてしまふぢやアございませんか？』

「無論、それでいいんです。』渠のこの答へには自分ながら隨分威壓の力を持つてゐるやうに思へた。「あなただツて、まさか、戀が靈で、愛が肉だと云ふやうな馬鹿なことを云つてるんぢやアないでせう——？」

「でも、どッちかと云へば、愛は合致的、實際的で、戀は靈的な傾きがございませう——？』

「さう云ふ靈的を僕らの新らしい哲學で矢ッ張り部分的、物質的だと云ひます。』ここまで來てまだ分らないぢやア、もう、議論で教へたッて駄目であつた。

渠には、然し、そんなことよりも別に一つまた氣になることを思ひ出してゐた。「初戀若しく

は一つ以前の戀とわざ／＼區別して云つたのもそれが爲めであつた。しば／＼夢を語る女は馬鹿だと云ふ譬があるが、澄子はそれをやつてるのである——無邪氣にだが、もういい加減な年になつてのかかる無邪氣はどこかにぬけてるところがあるとも見られ易い。つまり、そんなところからでもあらうか、かの女はよく易を見て貰ひに或易者を訪うてたさうだ。その有名な易者が例の新聞記事を見て、あの女なら度々男が變つた、そして變るたんびに今度のは長くつづくかどうかを見て貰ひに來たと、耕次の一友人へ直接にしやべつた。それをまた聽きに聽かせられた耕次自身は、その時、あまり念頭には置かなかつた。若しかの女に語つて見ると、一度は行つたが二度と行かなかつたと云ふから、向うが人違ひをしてゐるのかも知れないし、又、實際に度々行つたとしても、同じ男の違つた事件毎にそれがどうなるかを見て貰ふのを、男までが違ふのだと向うが思ひ取らないとも限らなかつた。その圖を誰れだツて、まさか、はツきり區別して行くものもなからうから。

けれども、自分でも昔、耶蘇教を信じてゐた時は、澄子とはまた反對に、戀は卑しいもので、愛は高尚だなどと考へさせられてゐた。その時のあはれ貧弱な知識程度と生活内容とを、今、かの女のうちにも想像して見ると、おのれの思ひに餘つて、據ん所なく、その足らぬ眞ごころを迷信やら神秘的方面やらに寄せて行くこともあつたかも知れない。その場合、たとひ何人目の男に關してであらうと、女が今度こそは長くつづくかどうかをうらなつて見ると云ふのは、寧ろ氣の毒にもあはれで、而も男から見れば、奧ゆかしいことではないか？

で、渠はその夜、かの女を珍らしくもさう云ふ女として心に描きながら、やツ張り、私かに暗涙を催してゐた。かの女が枕もとをさはつて見るのも前夜と同じであつた。そしてたうとうかの女の方からこちらには思はずも早く許しが來た。

その翌二十八日は、一旦門を開けてから、いつもより遲くまで朝寢をしてゐると、突然、その室へ這入つて來たものがある。さぶあツたかくうと／＼してゐた目を明けると、それは耕次の妻であつた。

「なんしに來た！」渠は斯う叫ぶが早いかはね起きた。

「いくら御免なさいと云つても」と、妻は痩せて尖つた目をきよろ／＼させながら室内に突ツ立つて、「御返事がないものですから。」

「あるまで待つてるがいい！」睨み付けながら、渠はかの女を玄關の室に締め出してしまつた。

「何物ですか、失敬な——」澄子も斯う向うへも聽えるやうに云つて、急いで衣物を着かへてた。

「……」どうせ妻がやつて來たのだとは分つてるだらうから、渠はわざと、「僕の一番きらひな婆々アさ。」

「婆々にやアきまつてまさア、ね」と、ふすま越しに怒つた聲で、「たがれん、苦勞をさせられて來ましたから、ね！」

「默れ！」あいつがこちらの北海道から歸つて歸つた夜に早速やつて來たのかと思ふと、それをきツぱりはね付けたのでさへ何だかごつ／＼した感じがあとに殘つたを思ひ出されて、今や新らしく得た感じの方をも半ば興ざめさせられるやうであつた。それでも、北海道までたうとうやつて來た女の東京に於ける隱れ場所へ、直ぐ込んで來た時とは違つて、今回は初めからよく明らかに分らせて置いただけに、その出かたが割り合ひに、穩やかだと思はれた。人の寢室へ無案内で這入つて來たのも、澄子が怒つてるらしいほどには無謀をしたのでなく、こちらが

聽えつけなかつたのが惡いのであつた。女ふたりで理解が仕合へるならしろと云ふつもりで、兎に角、うツちやつて置いて渠は先づ湯に行つた。錢湯にはこれも湯好きの川上が來てゐた。あとから、また木山も落ち合つた。こちらは最初の征服を仕就げたと云ふ、何だか樂しい誇りを私かに胸にいだいてゐたので、いつになくゆッたりとした氣持ちで皆と話をしながら、度々湯に這入つたり出たりした。そして考へた、若しけふの突然な闖入がきのふの朝あつたとしたら、或はゆふべの成功はできなかつたかも知れぬが、然し、もう大丈夫だと。そしてかの女に貰つたピンを襟に刺した時も、その感じが新らしかつた。

　そして歸つて見ると、もう女ふたりは火鉢のそばでうち解けて語り合つてゐた。澄子の感想文がのつてる新年號がそばに出てゐるのを見ると、自慢さうに見せたものらしい。

『……』妻は然し皮肉さうな目をこちらへ向けて、『大層いいかたを今度はおえらびになつたのです、ね。』

『ほ、ほ』と、澄子は笑つた。

『……』渠はわざとそれには返事をしなかつた。が、皆と一緒に食事をしながら、妻に向つて、『お前の飛び込んで來るのは、いつも、きまつて金の時だが——』

『そりやアきまり切つてまさア、ね。』

『……』渠はその語調からして圖々しいのがいやなのだ。それでも、まア、おだやかに、『今一度念を押して置くが、おれがお前にまかせたと云ふよりも、やつてあるその家をうまく經營して行きさへすれば、決してお前らは困るわけはないのだ。』

『わけはないと云つても』と、もう、こちらの云はうとすることに突ッかかるやうになつて、『困るから仕かたがないぢやアありませんか？』

『……』わざと暫らく間を置いてると、妻はこちらの返事を見越したやうに、

『子供までが困つてるのに、それを——』

『まア、待て』と、突然叱り付けてから、またおだやかに、『あの家にはおれの事業失敗の借金が附いてゐる。然し、あの先代から讓り受けた商賣を尋常にやつて行きさへすりやア、少しづつ借金を返しながら、らくに親子四名は喰つて行ける筈なんだ。』

『それが行かないんですよ。』

『いや、誰れに云はせても——たとへば、親類のものでも、他人でも——そんなことはないと云ふんだ。』

『そりやア、なにも知らないものは——』

『馬鹿！　貴さまの不精でだらしなさを自分で分らないんか？』斯う怒鳴つてから、また心を落ちつけるやうにして、『お前が甲斐性なしだから、あんな單純な商賣さへうまくやれない。どうせ男が何人ゐたツて役に立たない商賣だから、お前が承知して貰つた以上は獨りでもツとしツかりやるべきだ。』

『それにしたツて、この年末に迫つちやア——』

『だから、少しでもやれたらやるが、ね、こツちだツて澄子さんの衣物を質に入れたりまでしてやツと行つてる始末だ。金のことは例の通りここでもまかせッ切りだから、ふたアりで相談して見るがいい。けれども、澄子が思ひ違ひをしてまた氣を惡くしないやうに、が、できなけりやア仕かたがないんだぞ。』

　渠は妻子に對する金錢上の責任だけは家をやつてあるので十分に帳消しになつてるつもりであつた。だから、それ以上妻に話をしたくもなく、またその顏を見てゐたくもないので、早く歸れと云はないばかりにしてちよツと木山のところへ出かけてしまつた。

　それでも、しやべり出すと誰れに向つてもく

どくどしい妻のことであるからと思つて、三時間ばかり留守にしたあとで歸つて見ると、幸ひにもかの女はゐなかつた。

「仕かたがございませんから、三圓渡して置きました。」澄子はそれだけしか告げなかつた。

「……」こちらも妻のことに就いては餘り云ひたくも思ひ出したくもなかつた。

澄子が湯に行つたあとで、またその日記を引き出して見ると、もう、ゆうべのことやけふのことも書けてゐた。

「二十八日。古き戀はわれに寐ざめの涙となれり。われは君の僞りなき告白、抑へがたき男性の要求、熱烈なる君のセコンドラブに訴へられて、われは犧牲となりぬ。昨夜、われは精靈にそむき、わが特色を棄てて」とあるが、この特色などとは僞りでなければ、かの女の氣休めに拵へて置かねばならなかつた偶像の一つだらう。ゆうべの降服をかの女が中止しかけた時のわざとらしい處女氣取りがまた思ひ出された。が、なほ讀んで見ると、「君の熱情に焼かれたり。ただわれら寂しき人々が互ひに半生慰藉の友となるべく誓ひぬ。」それから、またこちらの妻が來ると云ふこともあつて、「この人も亦同情にあたひすべき人なり、然しながら、これ運命なり。」

「……」その最後の句には渠もちよッと考へさせられた。と云ふのは、女が他の女の亭主を、わざとではなく自然にだが、取るやうになつたその時に、その女がどう云ふ風に覺悟してゐられるかと云ふ問題の一實例を示したものだ。同情をするが、運命だと。そこに渠は澄子なる物の女らしい而も冷酷な本性を見當つたやうな氣がしたのである。かの女が頻りにそわ〱戀を標榜して、殊更らに人の熱意を求めるのは、自己の本性に於ける缺陷を無意識に補はうとしてゐるのであつて、だからかの女の現實を一足飛びに飛び越えて、空想などを高尚らしく見てゐるのだらうかとも思へた。

二十九日には、二人の名を並べた年始狀を郵便局へ持つて行つた。

あれでまた女人間や新聞社に新年早々また一問題起りませうよ。」かの女はこんなことを考へて嬉しがつた。

松山がまたやつて來て、渠の經營してゐる滿洲の新聞への寄稿を耕次に賴んだけれども、それはほんのおもて向きのことであつて、實は、私かに澄子の中野に對する返事をききに來たのだ。この日の記事には、

「空は曇つて、寒月見るべからず。されどわれは幸ひ多し、熱なき戀に獨り悶えし過去にくらぶれば、すべてを燒きつくさんとする君のパーニングラブはわれにより多くの幸ひありと信ずるが故に」とあつた。

三十日には、中野が房州からハガキをよこした。大原や勝浦方面へは澄子も渠に伴はれて行つたことがあると云ふから、その舊跡を思ひ忍びつつまはつてゐると云ふ思はしめ振りに、きのふの松山の來訪を思ひ合はせると、向うは餘ほど用意ある二度目の手を盡してゐるらしく見えた。が、もう、耕次には少しも恐ろしくも妬ましくもなかつた。

三十一日、おほつごもりの晩には、かの女は吉例として毎年市中を歩きまはつたと云ふから、渠もかの女の乞ひを容れて家をそとから締めて共に市中に出で、先づ淺草の活動寫眞を見たが、雨に降られて午前一時頃に歸宅した。

二

年が明けても昨夜からの雨は降り續き、風までが烈しくなつて板戸をかた〱と叩いてゐるので、起きる氣がしなかつた。まだ珍らしいだらけた氣持ちで、元日早々から寧ろ蒲團のあッたかみに親しんでる方がよかつた。年賀に出る

のも詰らないやうだし、その訪問客に來て貰ひたくなかつた。

「何よ云つたツて、兎に角、元日ですから、ね」と、それでもかの女が先づ九時頃に床を起き出でた。そして空の雲からは日光も照らすやうになつた。

最初の訪問客は眞向うの黄興氏であつたが、これは名刺を置いただけで行つてしまつた。次ぎは、すぢ向うに住んでる若い新聞記者で——お目にかかりがてら伺ひましたと云ふので、ちよツと上げて耕次は面會した。が、この人やそこへやつて來る連中のいたづらに相違なかつたことには、そこの家の前板壁に、かの萬朝の記事が出たその翌朝には、「この奥に關根近藤」の手引きをもじつて、

「この奥に關根、妾澄子同棲」と、白墨で大きな文字を落書きし、いろんな惡口をも記してあつた。澄子が最初に氣が付いて、怒りながら、

「どうしたらいいでせう」と云ふので、耕次もちよツと見て來てから、來てゐた父に賴んで、濡れ雜巾を以つて行つてぬぐひ消して貰つた。けれども、もう、そんなことは念頭から去つてゐたし、また今思ひ出しても根に持つ必要がなかつた。

それから、木山が不斷着のままでやつて來て、

「御年始ぢやアありませんよ」と云つた。その姿や物ごしのすツきりしたのを、澄子は初めから氣に入つてゐた。そしてその夫人も東京生れであると云ふのを、かの女は一人の味かたでも得たやうに自慢であつた。若しこちらがゐなかつたら、かの女は或はそこへものこのこ細君に會ひに行つて、おしまひにはまたその家庭に一波瀾を起したかも知れぬと、耕次には思はれるやうになつてゐた。

二日から四日にかけては、客が來たり、客に行つたりして賑やかであつたので、寂しがりの澄子をも喜ばしめたが、かの女の心は初めて會つた人に一々好き嫌ひの斷定を與へてゐるやうであつた。

四日のゆふかた、耕次がかの女をつれて訪問したのは、昔、渠が書生同樣に取りあつかはれてゐた人であるから、そしてさきの女をもつれて行つたことがあるから、十分氣を許して馳走になつた。そのあとで將棊をさしたのだが、王のあたまに步を指されてゐるのを知らないでうとうとといい氣持ちに醉つてゐた。

「どうしたのです、ね」と云はれて渠は目をさますと、澄子がをかしさうにこちらの顏をのぞいてゐた。

「ぢやア、失敬しよう。」醉ひざめの爲めに俄かに胸がむかむかして來たのでそとへ出た。そして淺嘉町の暗い道を步いて行く時、かの女はこちらの手をしツかり握つて、笑ひ聲で、

「あなたはほんとに可愛い人、ね。」

「……」渠は言葉なしにかの女を接吻した。が、この時にはその意味も感じも近い去年のとは違つてゐた。不自然がある爲めに本氣にならないのか、それともうはさ通り生理上の不具者か？　兎に角、かの女のからだと心とがいつまでも一致して來ないやうなのを渠は非常に面白くなかつた。

初めは自分で一氣にかの女の許しを求める爲めに進んで行つたものが、今や許されてるのは却つてこの數日間の自分にまた新らしいこの疑問を生じて、馬鹿々々しくもあり、また苦しくもあつた。

若しこれがうはべばかりの征服で、ほんとうはさうでないとしたら、金を出して賤しい女を買つてるのも同樣ではないか？　自分は眞實を以つて眞實を得たつもりであつたが、かの女から與へてるのはよしんばそれとしても一部分

の眞實であるらしい。矢ッ張り、中野から手紙の來るのが僕ほどの邪魔になると思はれるが、こちらにも無心を云ひに來たやうな妻があるので、この點は五分々々にされてしまふだけ不愉快でもあり、不滿足でもあつた。

で、用もないのに渠は木山のところを初めとして、その他へも獨りで出かけるやうになつた。錢湯で女人と落ち合ふのをいいしほにして、二時間餘りもそこで暮して來ることもあつた。すると、かの女も亦、早速その手に丸めた手ぬぐひとしやぼんとを持つて、式臺の上でこちらと行き違ひながら、

「あたしも行きたくッてお待ちしてましたのに、」と、不機嫌であつた。「あなたはあたしのからださへ自由にしてゐればいいのですか？」

『……』いや、その心をまでも十分に自由にしたいのだが、かの女の既成觀念に成る小理窟が邪魔になるのであつた。「僕には、あなたがすッかり中野との交通や交際を絶たなけりやア駄目だと思はれます。」

「ぢやア、あたしはあなたの條件を二つとも承諾してしまひましたのに、あなたはあたしの條件の一つを御承知なさらないのですか？」

『今となつちやア、おそらく、あなたがそれを撤回しなけりやア、僕の第二條件が合致的に承諾されたことにはなりますまい。」

「……」かの女が強情に出れば出るだけ、こちらも亦頑固になつた。そしてこんなことは晝間のことばかりではなかつた。共に眠つても互ひに物を云はないこともできた。

一月九日になつた時、かの女の赤坂に於けるおほ屋の主人が年賀がてらにやつて來て、猫を預かつてあるが、どうしたわけか、癇性が惡くなつて困つてゐるから、取りに來て吳れろと云つて歸つた。が、こちらではそれも面倒なので、矢ッ張りそのままにして置くことに一定した。耕次には猫なんぞのことどころではなかつた。

「僕はいッそのこと蛇になりたい、ね、」と、渠は云つた。かの女の一番きらひだと云ふ物になつて、どこへでもぬらりくらりと這ひまはつてやりたかつたからである。けれども、かの女は無邪氣であつた。そして斯う答へた、

「あたしがなるなら小犬です、ね。さうして方々の坊ちやんや孃ちやんのお相手をしたり、雪の中をころげ歩いたり――」

十日からみぞれが降つたりやんだりしてゐたのが、十一日の朝から雪になつて、正午ごろは本降りになり、午後三時には一寸ばかりの厚みを以つて見える限りを白くおほつてゐた。座敷の緣からは下に埋めて置く小鉢のけやきは、いつのまにか落葉して枯れ木のやうになつてゐたが、その枝にも雪が降り込んで積つてる。六坪ばかりの庭ではあるが、そこにある檜葉の四五本、椎の一本、かへで、乙椿、あすならう、南天などの枝にも、垣根以上に出たのは垣根以上に、地べたに近いのは地べたに近く、それぞれ綿帽子をかぶつてる。そこから右手の垣根を越えて見える廣い庭も、一面に眞ッ白であつた。

きのふは戸山の原へ行つてどこかの子供と一緒に、あのどッしりとした重苦しさうな圓ウ凧で、たこを擧げて來たと云つてたお向うの貴さんは、けふはうちに引ッ込んで碁を打つてるかして、ぱち〳〵云ふ音が聽える。大森の體育學校へかよつてるこの子の方がおやぢよりつよいので、おやぢが負けて躍起になるさうだと云ふのが人から聞いただけでも面白かつた。

こちらでも寂しさうに獨りでその室に引ッ込んでた澄子が、その窓を明けた音がするかと思ふと、直ぐこちらへ聲をかけた、

「まア、綺麗ですよ、あなた、來て御覽なさい、な。」

「……」渠はかの女と淺薄な感傷心を分ち

合ふことなどは好まなかつたけれども、呼ばれたので行つてやつた。そこから僅かな低い人家を押し分けて見える原のつづきも、眞ッ白であつた。が、たとひ世界中が雪で眞ッ白になつたとて、それが自分の得られぬ眞實には何のことでもなかつた。

『綺麗ぢやアありませんか』と、かの女もこちらをわざと見ないやうにして話しかけてた。

『……』雪がきれいなのをちよッと月がいいのに取り替へて見ろ。それはさきにかの女が中野をこの窓に呼んだ時の言葉ではないか？　きッと雪に對してもそんな思ひ出があるに相違なかつた。

矢ッ張り、不愉快なので、晩食をすまして、直ぐまた獨りで木山を尋ねようとすると、かの女は例の寂しかつた顏つきをして、自室へ引ッ込んで行つた。

『あなたはいつも口か手か動かしてゐる人です。人間の群れの中にゐて絶えず話をしてゐるか、さうでなければ仕事に熱中するか、この二つしかない人です。共に靜かに戀を樂しむやうな人ぢやアありません。』

『然し戀は決して閑散な人のすることにやアきまつてゐませんよ』と答へたことを、みち／＼思ひ浮べた。

かの女が然しこちらの爲めに直接に餘ほど心を勞してゐることは、その顏が痩せてその聲がいつもけんどんになつて來たのに見えてゐる。割り合ひに太つてゐらしいと見たかの女のふくらッ脛が案外痩せてて、而も俄か痩せであつたのでその皮膚が大きくたるんでるのは、中野の薄情の爲めであつたとして、こちらには責任を帶びない。が、かの女が近頃の顏の痩せにはこちらに直接の罪があると思へた。けれども、また、この罪はかの女の眞實をかの女がかの女の方で徹底させさへすれば補へるものと思へた。

そしてかの女の眞實の徹底とは、こちらには、かの女が中野のことを根本から忘れることであつたが、かの女と向うとがまだ下らぬ感傷を交換し合つてる限りは駄目であつた。

木山から耕次が夜おそく十一時頃に歸つて來ると、果して中野からのハガキがかの女に來てゐた。――そしてその二人が見た過去の感慨を漏らしてあるのだが、これにまた返事を出すのだらうと思ふと、そして向うのハガキ（これはきッとわざと向き出しにして置いて、こちらにも直ぐ見えるやうにだらう）に對してかの女はいつも封書をやると思へば、かさね／＼のその不見識が憎ましかつた。

癪にさはつて溜らないのだが、それとなく、わざと、來客がこの遲くまで待つてゐたのをあしらひながら、午前の一時まで碁を打つた。

『すみませんが、あたしはおさきへ失禮致します』と云つて自室へこちらの室から蒲團をも引ッ込んだかの女は、客が歸つたあとまでも寢つかなかつた。見ると、中野の手紙が机の上に乘つてゐた。

『……』渠はかの女に向つて、『これから以後は、もう、中野の書信は見せて貰はないでもいいです』と宣言した。そしてかの女の方からはどんなことを云つてやつてるのであるかは、こちらが想像してゐるだけで、初めから少しも見なかつた。

二

矛盾とはかかる心か、熱烈の
　戀を思はず、無情を慕ふ。

からうじて忘れはてむとする我れに
　思ひ出でよと雪ぞ降りける。

われはなほ寂しく暗し、石炭の
　ほのほの如き戀せらるれど。

思ひ出は忘れかくまれ、君なくば、
　この戀なくばわれは死ぬべし。
君いはず、われも語らず、ただ讀みて
　ただ書きてあり二とき餘り。

このやうな歌がかの女の十二日の記事中に盗み見られた。

十三日はまた耕次の妻がやつて來たが、「ある時にはやる」と云つて、それを突ツ返した。

實際に融通が利かなくなつて、二人は錢湯や電車賃にも乏しかつた。どうせ蒲團は一組ですんでるのだから、耕次の方のを――少しよくないので使つてゐないから――賣り拂つてしまはうかと云ふ話も、ちよツと相談だけはあつた。

十七日には、澄子がいよ〳〵辛抱できなくなつたと見え、雪ぬかるみを踏んでその父を淺草の福井町に訪うて、小遣ひ錢を貰つて來た。久し振りでかの女は獨りで外出をしたのであつたが、

『どうもあたしは親しいお友達のうちに寄留でもしてゐるやうな氣ばかりがして』と云つて、かの女の歸りがけの時の感想を相變らずこと更らに感傷してゐるやうに述べた、『自分の家に歸つて行くのだとは思はれませんでしたよ。』

「……」渠にはかの女が笑ひながらでもそんなことを云ふのが氣まづく取れた。そして、ついこんな皮肉に言せた、「そりやアさうでせう、貧乏してゐますから、ね。」

「……」かの女もただいやな顔をした。いかにかの女だツて貧乏にひるむやうなことのないのは渠にも分つてたが、お互ひに別々な意味で氣がいら立つてゐたのだ。そのゆふがた、相並んでお互ひに物を云はずに庭を見てゐると、そのかた隅の小さい椎の木のまだ雪を消え殘してゐる枝の上に、舊暦六日ばかりの月が淡くかかつてゐた。

十九日に、渠はまた留守であつたので、中野がまたやつて來たのを知らなかつた。かの女の日記には、――

　今あるも昔なりしもわれはまた
　　憎みはてかね悶え苦しむ。

「……」渠には、然し、それが全くかの女の眞實なのか、それとも半ばは例の羅曼的趣味からの拵へごとか、いづれとも分らなかつた。然しまた二十日のくだりを見ると、

「ああ、われあやまてり。戀を捨てしはわれに非らざるか？　捨てられしと信ぜし古き戀の却つてわれより去りたるに等しき事を見出せし今日、わが胸の苦痛！　恨みし人に誠ありて、われの輕卒なりしを悔ゆる今日しあるので見ると、向うから餘ほどおだやかに口説き返されたものらしい。一たび捨てた女を人が拾つたからツて、また取り返したくなる男の心持ちは、耕次もさきに經驗して知つてゐないではなかつた。が、それが自分の時には尤もな理由となつたけれども、人からの場合には妬ましく、憎らしく、失敬な侮辱を與へられてる氣がして溜らなかつた。そしてこちらも以前の女に云つたおぼえのあるやうなより戻しの言葉に多分かの女が釣られてゐるのを心外であつた。文句のつづき、「わが胸の懊惱、義理てふのがれ難き人情のとりことなりて、今更らに捨て去り難きわれの、昔の人、今の人いづれにもかた絲のより分けられぬ窮境を如何にすべき？　ああ、われ過てり、われ過てり！　死　死！　われに最善の道、ただ一つの死あるのみ。」

『……』えい、死ぬなら、いツそのこと死ね！と、渠もつい私かにその面白くない意味に怒つて釣り込まれてゐた。

けれども、――二十二日に渠がよそから歸つて來て、ふと直ぐに自分の一閑張りの前なる座蒲團に坐ると、誰れかゐたのか、そこに人のあツ

たかみを感じた。そして何よりもさきにくわッとして耳を臺どころの出ぐちの方へすました。不都合な男でも來てゐたのぢやアないか知らん、そして今こちらに見付からないやうに逃げたかとおもへたからである。

『何をお考へですの？』かの女もそばに來てゐて、こちらの素振りに感づいてゐた。

『……』渠は餘りにかの女を侮辱したやうなことになりかけたのを悔いた。そしてまだ多少は不審さうに、『誰れか坐つてましたか？』

『あたしが坐つてをりました。』

『……』それも亦意外であつたが、『僕はまた』と、久し振りの冗談にまぎらせて、『あなたのあだし男でも來てゐたのかと思ひました。』

『そんな女に見えますか、ねエ？』かの女もこだはりなく微笑した。『あなたのお留守をせめてはあなたのお机のそばにでもと思ひますから、あたしはいつもさうしてをります。』

『……』渠はそれを聽いて、以後用事の外は、あまり外出しまいと考へた。自分がゐないと、矢ツ張り、かの女は實際に寂しいのだらうから。

けれども、二十三日のゆふがたにはどうしても出なければならぬ用があつて、そこでキスキと日本酒とをちやんぽんに飲ませられて歸つて來た。まだ八時をちよツと過ぎてゐたたけだが、わる醉ひの苦しさに直ぐ床へ這入つた。そして前後も知らず眠つてしまつた。あとになつてこの日のかの女の日記を見ると、

『わたしは君の机に向つて靜かに坐つてると、戸山學校の消燈喇叭が寂しい冬の夜の靜寂を破つてきこえる。場所は違ふが、檜町の寓居で、五年間聞き慣れた聯隊のそれと同じ喇叭だと思ふと、一種懷かしい響きだ』とあつて、いつのまにか文章が口語體になつてるが――『君は昏醉してゐる。喇叭の音が消えるとまた元のしんとした夜にかへる。机の上のウオッチのセコンドが僅かにこの間の靜寂を破つてゐる。ああ、君は何と云ふ多感な人だらう？　戀も事業の一つだと云つて、戀の爲めには家をも社會をも無視して返り見ない程、強い熱烈な人で、自覺して耽溺し、又自ら社會公衆の前にそれを告白して恥を感じない程の人でありながら、愛人の前では若い青年よりはまだ感じ易い涙を持つてゐる。わたしは幾度か君のあつい涙をわたしの袖でふいてあげた。そしてその熱した額に手をあてて青春の血にもゆる君の顏を見た。外に向つて強いだけ、胸の中の寂しさと苦悶とに痛む君の寂しみを同情せずにはゐられない。わたしは自分ら二人こそ眞に寂しき人々だと思ふ。』

『……』そこまでになつてゐながら、然し、なんでまた全人的になつて呉れないのだと思はれた。そしてかの女の『寂しき人々』と云ふには、かのハウプトマンの脚本に捕はれた型になつてるのが想像された。

二十四日には、豫て賴んで置いた女中がやつて來た、これで澄子にこの一ケ月半ばかりもお三どんをやらせてあつた勞が省けるわけだ。かの女も亦それをありがたがつたが、二十五日に耕次の妻がまたやつて來たので、またかの女の落ち付きかけた心が亂れた。その日記はまた文語體に返つて、

『ああ、われは複雜なる戀の生活に堪へず。われはひたすらにもとの――寂しくとも、もとの獨身生活を思ふ。一身の不滿足、そはわれの覺悟するところ。ただ老いたる父の思ふところを如何？　心しらぬ社會の誤解をいかん』云々。

この夜、然し、二人は女中に留守を賴んで久し振りに淺草の公園へ遊びに行つたのである。

二十六日には雪が降つて、三寸も積んだ。二人は別々に自室にとぢ籠つて、興奮してゐる心

持ちを――互ひに誤解や憤激からの中止やうない筈のに――手紙を以つて取りかはした。そして夜中になつてから、かの女の發義で木山その他一名と四人して、そとを歩きまはつた。舊暦十五日の月が寒く澄んで眞ッ白な地上を照らしてゐた。

光つて而もさく／＼云ふ地上を踏んで、この一團は鬼王神社の横町をさきの通りへ出て、左へまがつて高千穗學校の前まで行き、また左へ二度まがつてもとの通りを歸り路になつた。その左側で、けやきや椎の木らしいものでちよッと樹立ちをかたち造つてるその高塀を漏れる月の光の中に、大きな古めかしいわら葺き家があつて、可なり廣い庭を隔てて、また低い離れ屋が見えた。その屋敷のかまへが耕次には何だか自分の記憶に殘つてるところらしく思はれた。

―若し果してそれなら、と前置きして、渠はそこを通り過ぎながら、二十何年か昔の友人に關することを語つた。友人はそこの植木屋に下宿して、早稻田の政治科へ通學してゐた。離れが建つた當座のことで、食事はその度毎におも屋からそこの娘が運んで來た。そのうちに友とその娘とは互ひに若い思ひの仲になつた。けれども、娘の父はそれを許さなかつた。友人が暑中休暇に歸省して、時を待ちかねてまた上京して見ると、かの女は既に人に嫁してうちにはゐなかつた。そして友人の机の引き出しには、女の止むを得ない事情、惜別状が這入つてて、花かんざしを一つ添へてあつた。

「さう云ふことはただほんのあまい軟情の話ではあるけれど、聽いてやッ張りあはれを催す、ね」と、木山は云つた。

「あたしもそんなお話を好きです、わ。」澄子は斯う木山に同感さうに告げた。

「……」耕次は、無論、それとなくかの女の心をやはらげるつもりで語つたのではあるが、あたしもと云はれては、如何に木山だッて、そのおのれのくらう人じみて氣取つて見せた意味を臺なしにされたに相違なかつた。

それから三四日の間は、たッた一度或大學へ臨時講演をしに行つた切り、耕次は引ッ籠つて創作に沒頭した。生活が迫つてゐて、さう／＼かの女の本意を云はせようとばかりもしてゐられなかつた。二三日前の手紙往復の結果でだらう、中野がまた三十日にかの女を訪ねて來たが、耕次は自分から渠等の話に立ちまじらなかつた。そしてかげにゐて、自分の心はくさ／＼した。が、それは不思議にもこの客の來た爲めではなかつた。渠には、かの女がいつもこちらに許してゐながら、いつもまたとぼけてゐるやうなのを漸く遺憾にばかり思はれたのだ。

客がかの女の室から歸ると、かの女はひらきを明けて茶の間へ來るけはひがしたので、渠もこちらのふすまを明けて行つて、いきなり、兩手をひろげて斷りながら、

「お淨なとりか――おいらなんぞは目が一つで、齒が二つで、舌が長くッて油をなめる！」

「……」呆れたやうにぼんやりとこちらの顏を見上げてゐるのは女中であつた。もう、ついてる電燈のもとで何か煮ものをしてゐる。が、冗談と分つたかして、やがて吹き出してをんな主人の方を見た。

「……」澄子はおだやかに微笑して手を鍋のよこにあぶりながら、「こなひだお話してあげたお化けのお眞似ですか？」

「……」渠はかの女から聽いた、おきよ踊りか……を踊り出す東京流のお化けばなしの文句を、かの女の名に變へて出鱈目にもぢつたのであつたが、自分がどこかの坊ちやんの如くかの女から輕く取り扱はれたのを恥ぢる自分からの不快な皮肉だと思つた。自分はかの中野のや

うな生まじめのうそ付きや未練ものではなかつたゞ直ぐ苦笑に變じて火鉢のそばへ腰をおろしたが、そこにもゐたたまらず、また自分がさきに立つて澄子をかの女の室へつれて行つた。そしてまたかと云はぬばかりの顏をしてゐるかの女に向つて、先づ、「僕はいくらあの人が來たッてあなたが再び誘惑されて行かうとは思ひませんそれは安心してゐますが、ね」と、鎌をかけた、それから、『然し、どうしてあなたの眞實の全部が僕に與へられないのです？』

「……」

「あなたは實際に不具なんですか？」

『さうかも存じません。』こちらをまじめに見つめて涙ぐみながら、『世間がさう云つてゐるさうですから。」

「若しさうなら』と、渠も全身がまじめになつて、『若しさうなら僕も決心して不具になる手術でも施しませう。どうせ部分的關係なんかなくッていいんですから！」

『許して下さい、ね、あたしにはこれがほんとうの性分なんですから！』かの女から聲まで顫はせながら進んでこちらの手を取つてゐた。

それから、お互ひに氣を取り直すつもりになつて、共に散歩に出かけた。そして下が大分に虧けて出た月の寒さうな姿にも二人のあッたかみをおぼえつつ、柏木まで行つて友人を訪ねた。大酒家の友人は澄子にも酒を飲ませようとしたけれども、かの女は豫て排次からとめられてゐる通りよそでは固く辭して一杯も飲まなかつた。庭にはその主人の趣味でいろんな草ばなの根や芽ばえが雪どけの中から月の光に見えてゐた。それをまたかの女に提燈をつけて貰つて近く見る爲めに庭へおりた。

「うちでもこの春は花を植ゑませうよ」と、かの女は歸り路で云つた。寒いので、二人はしッかり寄り添つて歩いてゐた。

「それもいいが――」渠には人間の眞實に添はないでは春も園藝趣味もなかつた。

二月一日からかの女は風を引いて發熱したので、渠はかの女のあたまを冷たい水で冷やしてやつたりした。二日に二六新聞の記者が來て、また二人の生活のことを聞いた時、かの女は、「あたし達の間ですか？　お互ひに一歩づつ讓り合つたのです」と答へた。

「……」けれども、こちらには、そんな解釋では征服したのでもなく、されたのでもない。そして熱ある眞實には、國家の生存と同樣に、必らずどちらかが征服し、他のどちらかが征服されねばならぬのであつた。そして征服被征服を戀愛以外のことでもあるかのやうにして讓歩や妥協にとどまる位なら、寧ろこの最初の狀態とは既に違つてる同棲をけふ限りに破壞すべきであつた。

二月三日には父が二度目で來たけれども、排次はその相手をする餘裕もなく、涙を呑みながら最近に思ひ付いた一つの脚本を書いてゐた。女がその男に棄てられたと思つて、その腹いせに直ぐ第二の男を持つた。ところが、さきの男はかの女を棄てたのではなく、周圍のものの讒言であつた。第二の男にはまた女がまだ純潔であると人に云はれたのを信じて受けたのだが、さきの男があるを知つたので直ぐ離れた。つまり、女は男を棄ててまた棄てられたのだ。第一の男は中野よりも罪や弱みがない。第二のを排次自身とすれば思ひ切りがよ過ぎる。そしてこれは佐用姫の傳說を改造して見たのだが、女を澄子に比べて見れば、初めはちと輕率であつたが、二度目に得た男がかの女を棄てて海に出たのを、飽くまで石にかじり付いても呼び慕ふ點は、多少は遊戯的氣ぶんに古い戀を持てあそんでるところの澄子よりも果斷で而も頼母しいのであつた。

澄子はその脚本の趣意を聽かせられて、こちらが直接にかの女に何を云つてるかが分らないほどの頑迷をんなではなかつた。かの女は自室に引ッ込んでまた考へ込んでしまつた。

一三

二月四日も渠は自分の座で朝から頻りに脚本を書いてゐると、郵便をはふり込んで行く聲がした。茶の間で父と話をしてゐる澄子がその自室の方からまはつて行つて受け取つた。

『どこからです。』と、渠はふすま越しに聽いて見た。

『あたしのところへ』と云ふ返事はまた嬉しさうであつた。

『……』また中野からに違ひないと思つたが、うッちやつて置いた。

かの女が父のそばへ立ち戻るけはひがいつまでもしないので、耕次は筆を置いて先づ茶の間へ行つて、暫らく自分の父の相手をした。それから何げなくかの女の室へ行つて見ると、かの女は机にもたれて泣いてゐた。

『どうしたのです?』渠はついそれに釣り込まれて、そのそばに坐つた。そしてそれとなく見ると、封筒の裏が出てゐて、そこには果して中野の姓名があつた。

『これを見て下さい』と答へて、かの女はそれの中味が矢張り机の上に乘つてるのをこちらへ近づけた。

『別に見たくはありませんが、何を云つて來たのです?』

『永別の手紙です。』

『……』ぢやア、たうとう向うから負けて來たのか? さうだ、――いや、――向うはかの女がどうしても動かないのを知つて、今一つ最後の手を思ひ付いたのであらう。もう、止むを得ないからこの後は一般的な交際をも絶たうとでも云ふ訣別の文にこと寄せて、つまり、今一度かの女を引いて見ようとしてゐるのだらう。かう考へると、こちらには、中野なる物が少しく手ごたへある人物になつたやうで、氣持ちよくもなると同時にいよ／＼氣の毒にもなつた。『けなげにもよく云つて呉れたとでも返事したらどうです?』つい、またこんな皮肉が出た。

『……』かの女には答へがなかつた。

『然し若し眞實の力が向うに強いと思ふなら、今から直ぐにでもお歸りなさい――厭な義理などをこッちへ立てる爲めにあなたがわざ／＼僞善の生活をつゞけるにも及ばないでせうから。』

『さうあたしをお突ッ放しになるなら、あたしも考へます。』

『それがいいでせう。』義憤のやうな感じに滿ちて渠はそこを立ち離れた。そして父と共に茶の間で碁を打ち始めた。そして、父をさへこちらへ取り込んで置けば、かの女が逃げようたッて逃がすものかと云ふ意氣込みで碁盤のおもてに向つてた。

すると、午後三時頃であつたが、かの女は獨りでどこかへ出て行くやうすであつた。そしてまだ玄關を出るか出ないうちに、父はこちらからかの女に聲をかけた。

『いいかい、まだよく風が直つてないのにそとへ出て?』

『……』耕次はかの女に返事がないのをちよッと不思議に思ひ、茶の間から立つて客間の障子を明けると、今、不斷着のままで門を出て行く後ろ姿があひの垣根の上から見えた。まさか、中野のうちへなど行くつもりぢやアあるまいと安心して座に戻つて來て、『實は、中野から絶交狀が來たのです。』

『馬鹿な』と、父も受けて、『丁度いいぢやアないか――あんな男を!』

『そりやアさうですが、澄さんにはさうも行か

ないんでせう。』

「僕の番だ、ね」と云つて、父はまた碁盤のおもてへ熱中して來た。

「あら手のやうに盛り返して來ました、ね」と云ひながらも、耕次はそれとなくまだ心配が殘つてて、かの女の早く歸るのをこころ待ちに待つてゐた。が、その勝負が付いても姿を見せなかつた。今の負けをまた取り返した時も、まだであつた。次ぎにまた負けてもだ。

『おそい、ね』と、父も少し心配をし始めたやうすだ。

『……』あんなざまで矢ツ張り中野のところへ行つてしまつたのか知らん？　若しさうなら、あア云ふ風に突ツ放した言葉を用ゐたのがこちらの悪いのだから、今更らのやうにそれが後悔された。そしてかの女が行つてしまつたものなら、ここに殘つてる老人も直ぐにこちらとのゆかりが絶えるので、これも亦向うへ行つてしまふに相違ない。そしてまたかの女の爲めに置いてやつた女中も必要がなくならう。斯うして耕次は自分が又たツた獨りぼツちになる時の狀態までが思ひ見られて、父に對しても世間に對しても、もう、自分の面目が全くつぶれたかのやうにこころ苦しかつた。女中が食事の支度をどうしようと聽いたのに對しても、自分の焼けやら憤りやらの爲め、わざとうツちやつて置かせるつもりで、それとなく、まア、待てと答へて、父に向つては、「もう歸るでせうから——」

二時間はかり勝負をしたところへ、かの女は歸つて來た。そして、

『今戸山の原へ行つてまゐりました』と、泣いてたらしい目を見せまいとしながら、父へとも付かず、こちらへとも付かず、何げないやうに苦笑しながら、『冬の日が火葬場の森に沈んでゆくところがようございました。』

『そりやアよかつただらう、ね。』父は娘の方を見向きもしないでだが答へた。『冬の入り相は一體に氣がしまつていいものだ。——さア、占めたぞ！』

『……』こちらは父の突然な叫びで氣が付くと、大きな石の唯一の聯絡點を中斷されてしまつてた。そしてこの投げでおしまひにした。

『けふは舊暦の年越しだから——一つ景氣よく』と、云つて、食事に晩酌の勢ひも添つた父は大きな聲で舊式な豆まきを始めた。『鬼はアそと、福はアうち！』その聲がさきに「鞭聲粛々」を吟じた時のやうにかすれたけれども、夜の空氣をまことに平和に破つて聽えた。が、それはただ父のやつてることに對して一時の敬意を表したあひだのことで——そのあとはまた家のうちにもそとにもうはツつらにだけの淋しさであつた。

病後の身をそとで冷えて來て焼け酒をあふつたせゐか、かの女は皆と一緒に茶の間にゐながらおこりに取りつかれたやうに振つてゐた。

『お先きへ休ませて貰ひます。』斯う云つてかの女はこちらの書齋兼用の客間へ立つて行つた。

『……』渠はその後ろ姿を目で見送つて、ざまを見ろと云つてやりたい氣も出ないではなかつた。が、この不快をうち消してしまふほど痛切な情愛がかの女に對して起つて來たので、自分もあとを追つて早寢に行つた。そして自分は一ことも口に發しなかつたけれども、かの女のふるへと忍び泣きとを自分にも感じつつ、同じやうな思ひをしてゐた。

まだ十時頃であつたが——締まつた門の戸を叩くものがある。そして木山の聲やその他のもの聲が聽えた。で、父が門を明けに出たあひだに、こちらの蒲團をすべて茶の間の方へ押し出して置いて、また衣物を手早く改めた。すると、這入つて來たのは木山、外二名と、木山夫人

とであつた。こちらもこれに元氣を得たので、老人なる父までも入りまじつて、雜談をしたり碁を打つたりして、午前の二時までに及んだ。

その翌朝は不斷よりもおそく起きて、二人一緒に湯に行つたが、耕次は湯屋でいつも衣物の襟にさして置くピンを失つた。かの女からゆびわがはりに貰つた純金のネクタイピンで、梅のすかしが這入つてたものだ。歸宅のうへ、殘念がつてかの女に告げると、かの女はちよッといやな顏をして、

「あたし、知りませんよ――また不吉なことができて！」

「どうも濟まないことをしたが――」渠は斯う多少とぼけて云ふほかには申しわけの仕やうがなかつた。そしてこれをまた一つの不吉と云ふなら、かの女の今一つのそれは何であらうと考へて見た。中野の絶縁狀若しくは絶交狀のほかにはないではないか？　そしてそれをも一つのつじうらと見てゐるやうでは、かの女がよく易者にかよつたと云ふ世間のうはさも萬ざらうそでないやうな氣がした。こちらには、かの女がよく夢を語つたりまたつじうらを見たりする女の一人になつてゐた。して見ると、かの女が戀に遊戯分子をまじへたり、羅曼的に走つたりするも止むを得まい。渠はなほかの女のかかる無意識の迷信を破らねばならぬのであつた。

ところが、同じ日に、三度目の日の不吉が來た。中野の絶縁狀にかの女は未練らしくも返事を出したと見え、それが封じのまま向うから返されて來た。

「失敬ぢやアございませんか、向うから永別の手紙が來たから、こッちからもおだやかに永別の言葉を送つたのですのに？」かの女は斯う云つて、耕次の見てゐる前で、添へ書きも何も這入つてないおもて封筒と共に、かの女の封じのままなる手紙を引き裂いた。

「……」渠はただ見てゐて、向うとかの女とどちらに對しても痛快であつた。

「あんな詰らない人ッたら、ない！　呆れてしまつた！　もう、誤解なり呪ふなり勝手にするがいい！」それから、こちらに向つて、「あたしはあなたのおツしやつた通り輕蔑されてしまひました。」

「いや、その方が向うも氣が利いてるんぢやアないのですか？」

「どうしてです？」かの女はこちらに對しても亦ちよッと不機嫌を見せたが、直ぐなほつた。と云ふのは、渠が斯う云つて驚かせたからである、――

「それで向うも」と、笑ひながら、「あなたに心を僕ばかりに向けろと忠告したやうなものですから。」

『……』かの女は然しちよッとにッこりするだけであつた。

「まア、湯にでも行つて一あびしていらッしやい」と云つて、かの女の留守にまたかの女の日記を盜み見ると、中野からの永別狀が來た二月四日のところに、

『熱い涙がとめどもなく出る』と書いて、左の文句が引用してあつた、――

「僕はあなたを今一度私の手に取りかへす時があると信じ候。澄さん、今一度かやら呼ばして下さい』とは、こちらに安ッぽい新派劇の泣き場を思はせたが、却つてそれでよく向うの下品なした心が讀めた。「若しあなたが圓かな月を眺める時は、同じ月をどこかの空で失戀の恨み――」馬鹿！　向うはおのれの意氣地なしから自分で失戀と云へば失戀をしたのぢやアないか？　お友だちを思ふ房子さんのくやし泣きに對して、その時どんなに冷淡な返事をしたかを正直に白狀して見ろ！　如何に房子やこちらをそのことでは信じない澄子だッても、一遍にそ

の白狀で愛想をつかしたに相違ないのだ。——『を抱いて見てゐる人があることを思ひ出して下さい。戀を失つた淋しい人にも——』ふん、何が淋しいのだ、飽くまで妻子と共に住みながら！『まだなすべき仕事があるでせう。僕はもう再びお目にかかりますまい。あなたの幸福を祈つてゐます。』

『……』こちらには、矢ツ張り、かの女をおびき出すあまい手としか讀めないのである。けれども、かの女はこれをそツくり正直に受け取つたものと見え、

『今これだけの熱があるなら、なぜあの時もう少し強くなれなかつたのです。周圍の爲めにでも、なぜすげなくわたしを突ツ放したのです。わたしはそれをあなたに聽きたい』と、口語的に書き足してある。

『……』こちらには、かの女の云ひぶんの方が、尤もに見える。そして多分この意味でかの女が最後の手紙をやつたものとすれば、相變らず向うに於いては手ごたへがなかつたのだから、七分まではいよ／＼の斷念と三分のそら頼みとを以つて、それを思ひ切りがいいかの如く突ツ返して來たものらしい。兎に角、もう、これでその方はすツかり安心になつた。

市内へ用事があつたので、午後三時頃から出て、十時過ぎに歸宅して見ると、澄子は客間の疊の上に横になつて、その上から蒲團を着てゐた。そして、

『お歸んなさいまし』と、近頃にない優しみを表して起き上らうとした。その顏がおそろしいほど眞ツ青であつた。

『どうしたんです？』また燒け酒でも飲んだのかと、こちらはその實かの女の馬鹿々々しさをむツとした。

『苦しいので、早くお歸りをお待ちしてゐました。』

『どうして苦しいんです？』立つたままかの女を睨み付けて、矢ツ張り、つよい語調であつた。

『……』父がそこへ茶の間とのふすまを明けて出て來た。『實は、今、木山さんがどこかの雜誌記者をつれて來て、これに隨分飲ませたのだから——』

『誰れです、その記者は？』

『秋田とか云つてたが——』これも立つてでだが、少しおど／＼してゐた。

『ぢやア、おほ酒飲みです！』これは些か誇張に過ぎたやうに思へたが、耕次は父とかの女とをおどし付けるには役に立つと見た。

『さうだらうよ、一升徳利を下げて來たくらゐだから。これがまたさう知つたらよせばいいのに、調子に乘つてばかりゐて——』

『お父アんが見てゐて、まだどうしてとめなかつたのです？』

『いや、とめても聽かないんだから——たうとう、みんなが歸つたあとで喰べた物を戻してしまつて。』

『馬鹿げ切つてる！』渠はかの女がまたぐツたり倒れたのを上から見おろしながら、涙となつて溢れ出ようとする忠告を自分の喉のところで暫らく差し抑へて、『あなたもまたなぜさう飲んだのです？』

『あなたがお留守でしたから』と、かの女は全く往生してゐるやうになつてた、『お代理をつとめなけりやアと思つたので——』

『馬鹿なことです。そんな代理なんか何もするにやア當りません！』友人どもから自分が侮辱されたも同樣だと思ふ憤りでだが、渠には、自分が斯うまで意張つて物が云へるのはかの女の中野との絶縁があづかつて力を添へて呉れてるのであつた。『早くお休みなさい、早く！　お竹もなんで床を敷かなかつたのだ？』

「さうだ、らくに休む方がいいよ。」父もそれから女中に向つて、「早く床を取つてやんな。」

澄子が床に這入ると、耕次はその枕もとに坐つて、先づ自分の手をかの女の仰向きのひたひへ當てて見た。まるで死人のやうにつべたかつた。

『……』渠はこちらがあべこべにぬくめてやらねばならぬ順番が來たと思ひながら、聲をずツとおだやかにして、「以後、あなたは酒をうちでもお愼しみなさいよ。」これは自分でさう飲まぬだけに十分うらはらなしに云へることであつた。

「許して下さい、ね」と、かの女もすツかり從順になつたやうすだ、「あたしが惡うござい、ましたから。」

一四

二月六日には、古谷露子と云ふ小說家志願の婦人が尋ねて來た。この婦人は耕次がこちらで弟子にしてゐるのでもないが、向うから弟子のつもりで前にはよくやつて來た。そしていろんな相談をも持ちかけられるところから隨分渠の心に親しく這入つてゐた。

丁度渠が北海道まで追ひかけて來た女を東京でめかけ同樣に世話することになるその以前のことであつたが、渠は露子をその借り二階の住まひに訪問した時、何かの話から持つて行つて、ざツくばらんに、

『どうです、僕の女房になる氣はありませんか』と云つた。

『……』かの女はこの時その背中で泣く兒をゆすりながら、疊の上に立つてゐた。凄いほど美人の資格ある顏をちよツと赤くして、それでもこちらを信じ切つてると云ふやうな落ち付きで微笑しながら、「奧さんがおありぢやアございませんか？」

「あれはどうせ別れるつもりだが――」その時にはまだ渠は容易に自分の妻と離婚ができるものと思ひ込んでゐた。離婚をいよ／＼持ち出して今に至るまで手こずつてる經驗がまだ附いてなかつたからである。が、斯う云つてかの女を見あけながら直ぐそのあとをつづけた、「然し、それには條件がある。」

「……」かの女も微笑をつづけてこちらの顏を素直に見つめながら、一二步あるいてゐたのを立ちどまつた。

「その赤ん坊をどこかへ呉れてしまふのです、ね。」

『……』かの女は自分を棄てた男にはもう思ひ殘りはないが、そのかたみだけは――と云つた風にして、「子どもがあツたツてかまはないぢやございませんの？」

「いやア、駄目、さ。」渠はそこまでの責任を持つ氣がなかつたので、その話はそれツ切りにして、相變らず無事につき合つてゐた。が、渠が妻のゐるところへ滅多に歸らぬやうになつてからは、かの女は來てもこちらが留守がちなので來なくなつてから、こちらが樺太へ渡つたりして、その間殆ど一ケ年半ばかりを置いて、久し振りの訪問であつた。

こちらがまた東京に歸つたのに張り合ひができて、かの女も創作を二篇ばかり書いたからと、菓子折など持つて來て、二時間ほど話していとまを告げた。が、その歸らうとする時に、かの女はつれてゐた子供――もう、ちよこ／＼步けた――の小便を緣がはのはなでさせた。これを見つけた澄子は、云ひやうもあらうに、つけつけと、

「そんなところでおしツこをさせちやア困りますよ」と云つた。

「僕の客になぜあんな失敬なことを云つたのです」と、渠はあとで澄子を責めた。父もこのとき

そばで聽いてゐた。「正直に云へば、曾ては一緒にならうかとまで思つた人ですが、子供を手離したくないと云つたので、その後も交際にしてゐますが、決して關係などあるんぢやアございません。それに、澄子さんは何だか燒き餅らしくつんけんと——第一、初めての客に對して見ツともないぢやアありませんか？ 僕はあなたのことゝ、今度はハッきりかの女に向つて、「お客が來た時にはそんなざまを見せたことがありますか？』

『ですから、あたしは最初おだやかに會つてやつたぢやアございませんか？ 然し、向うが荷くも一家の主婦たるものを馬鹿にしてかかつてました。』

『いや、そんなやうすはなかつたが——』小説の原稿などはそれを見て貰ふ者に手渡しするのが當り前だらうからと思つた。

「ありましたとも！ 第一、みやげを持つて來てゐながら、あたしが出てゐる時にあたしに渡さないであなたに出すとはどうしたことです？」

「成るほど、ね。」渠は女がいよ〳〵主婦氣取りをもむのかと感心した。が、なほ、歸つた方をもかばつてやるつもりで、『然し、向うはそんなことにやア無邪氣であつたのだらうよ。』そして心では、露子が或は澄子をどう見ていいのかに迷つたから、兎に角こちらにさへ渡せば間違ひツこはないと思つたのぢやアないかとも考へられた。

「なんにしろ、」と、父も最後に口を出して、「僕もあの時直ぐ思つた、ね——主人のところへ來た客が如何に女だからツて、主婦たる者があア叱り付けるのはよくなかつた。』

『何もあたしやア燒き餅なんかで——』

『さうでないにしても、さ。』

『……』耕次は、もう、その親子の話にまかせてしまつて、自分では露子さんがこれで二度と再び來ないだらうと考へてた。然し、もう、たとひ來ないでもよかつた。澄子の征服をして行けさへすりやア。

ところが、かの女はこれまでに於いて最も從順であつたゆうべでさへ、その心とからだとを合致しないで、別々であつた。そして渠がそれを追窮すると、かの女は、

「中野の爲めでなかつたのだけはお分りでせう」と云つた。

「ぢやア、何の爲めです？』

『多分、あなたにまだ奧さんがおありの爲めでせう。」

『……』そんな平凡なことを云ふ女であつたのかと、一きは興ざめてしまつたが、「僕は、然し、あなたが中野のことを思つてたやうに僕は僕の妻を思つてやアしません。』

「五十歩百歩でせう。」

「……」渠はそこで考へた。かの女はそんなことを云つた上にも、けふはまたこま〳〵しい主婦の權利じみた物などを求めて、こちらの左ほど重んじてもゐない家庭のことまで氣にして、つまり、いよ〳〵出でてます〳〵平凡なのである。渠はそれを卑しむより寧ろあはれましくなつたので、つとめて惜しんでた自分の涙と共に、夜になつてまた部分の全體化的燃燒とその眞實とを說いた。そしてそれが人間の生活としては偏肉や偏靈よりもずツと正しく、ずツと高尙で、而もずツと大切なことを說き明した。『よく考へて御覽なさい。不斷のことは緊張した一刹那の餘波に過ぎません。その大切な刹那に全人的合致ができないで、どうして不斷にばかりその合致の結果なる愛がありませう？ で、あなたが若しどうしてもこの愛を實現させることができないとおツしやるなら、僕はあなたを矢ツ張りらはさ通りの不能者と見て、僕も亦こんな

要求の生ずるその根元を切斷致しませう』

『……』かの女は顫へながら暫らく考へてゐた。そして涙ごゑになつて、『では、あなたもお死にならうとおッしやるのですか？』

『いや、お付き合ひに不具となつてあなたと生きたいのです！』

『感謝します。』かの女は暫らくまを置いてから、『然し、それだけ貴いあなたを不具者にしたくはありません。あたしはいつ死んでもかまひませんけれど――』

『僕の爲めに死ぬだけの氣があれば、その氣であなたの全部をお投げ出しなさい。』

『……』かの女はます／＼顫へてゐたが、溜らなくなつたと見え、起き出しながら、『あたしはあなたの御親切にはお報いすることができない身でせう。死ぬか、投け出すか、どッちとも父に正直に相談して處決致します。』

『……』渠はかの女が直ぐ六疊の方へ行くかと思つてひやりとしたが、かの女は緣がはへ出て便所に行つた。そしてまたこちらへ歸つて來てから、

『あたしにはまだ一つ云ひ後れた條件がございます。それを云はないのに免じて、どうか今少しおそばに置いて下さい、ね――父にまた心配をかけるに忍びませんから。』

『何です、それは』と聽いて見たが、かの女は云ひたくないとばかり答へたので、どこまでも何か一つ祕密を持つてゐたがる女だ、わいと思はれた。

一五

その翌日、父が歸つて行つてから、かの女が僞かに丸髷を結つて見たいから許して吳れろと頼むので、耕次は女中に命じて髮結ひを呼んで來させた。そして六疊の方が近ごろ珍らしくほがらかな聲を出してゐるのを、こちらの想の中絕した間を利用して二度も見に行つた。

髮結ひの年はまだ若いやうだが、その腕は十分にあるものと見えた。髮は立派にでき上つたのである。

『どうです、ね』と云つて、かの女がこちらの机のそばへ來て坐つて、結へた髮を見せた時には、人がらが殆ど全く改まつたかのやうに引き立つてゐた。そして右や左へ肩があがるやうな、もとの堅苦しいからだ付きのあとなどは少しも見られなかつた。

『なか／＼結構だよ。』斯う一つ嬉しがらせて、渠は何けなくかの女の髮を左右に見まはしながらも、私かに自分の顏が赤くなつたやうに思へた。さきに紹介者の房子さんが美人だと說明したのも、多分こんなところを見て知つてたからだらうが――それを今、自分は全く競爭者なしに引きつけてゐるのであつた。できることなら、一組、立派な裾模樣をでも拵へてやりたかつた。

ふと、かの女に自動車をも備へてやらうと云つたと云ふ男はどうしてゐるだらうと思ひ出された。

兎に角、けふの丸髷は、もう、かの女の所謂『狼よけ』ではなかつた。そしてかの女が中野に對して關係があるも同樣ぢやアありませんかと云ひ迫つたと云ふその關係は、今やこちらに於いてもッと實際化してゐるのであつた。

若しここにかたなが一振りあつて、それをこちらが拔いてかの女に迫ることができるなら、かの女が中野へ迫つた時のよりも一層深い理由を以つてだらう。が、かの女の所謂に を征服するにもこちらが全く强迫がましいことをしなかつたのであるから、かの女の分離した心を奪取するにも無論强迫はしたくないのであつた。

兎に角、かの女が眞劍な戀を初めて中野におぼえて、それを今ではこちらに移さうと努めて

ゐることだけは事實だと感じられるので、渠はその點ばかりにでも可愛さが餘つて溜らなくなつた。そして直ぐ引き寄せてかの女を接吻してやつた。

かの女の前身に對するいろ／＼な疑ひなどは、もう、渠に少しも問題ではなかつた。が、二月九日に、かの女が或人から聽き込んだと云ふところによると、渠にまた新らしい問題ができた。簡單に云ふと、渠にも友人なる島田と云ふ男のやつた仕事にかの女が雇はれてゐたが、あまり面白くないのでやめた。すると、同じやうに雇はれてた一名の男もまたやめて、かの女のところへ島田に對する不平をこぼしに行つた。それを島田は、この二名がくッ付き合つたが爲めに面目がなくなつて同時に辭職したのだと、今になつてまたこと新らしく吹聽してゐた。

「あれはあすこの下女から成り上つた細君が下らない卑劣な根性から割り出した想像ですが」と、かの女は憤慨してこちらに辯解した、「若しあの時あたし達が關係してゐたとしても、あたしはあんな夫婦に面目ながるやうな意氣地なしぢやアありません。」

「ぢやア、さう云つて念の爲め手紙でも出して置けばよからう。」

「いえ、あたしはぢかに行つてあいつの青瓢簞のやうな横ツつらを張り倒して來ます。」

「……」渠は、如何にも、向うの島田と云ふ男が女にかげでだけもそんな意氣込みを見せさせるに適するやうなひよ／＼した弱みのあることを思ひ浮べた。だから、それに對してかの女が若し言葉通りの亂暴をしても困ると思つた。

十日になつて、かの女が獨りで行くと頑張るのをなだめて、自分も一緒について行つた。

「細君をお呼びなさい」と、かの女は迫つたけれども、島田はわざと呼ばなかつた。そして渠自身で茶の世話などもした。それを一層不滿に思つてか、かの女は、「ろくに約束通りの月給も出さなかつた癖に、よくもそんな下らないことが云へたものです、ね？」

「あなただツて」と、島田は青くなつてからだを顫はせながら、「かさを借りて行つた切り、返さなかつたでせう？」

「あれは、もう、初めから破れてゐましたから、お返ししたツて使へる物ぢやアなかつたのです。」

「……」耕次はこれを聽いて、かの女も餘りに思ひ切つたことを云ふと思へた。その當座に既にさう云つてもいい物であつたのか、それとも今云はれて俄かに賣り言葉に買ひ言葉を出したのか、どちらともこちらには分らなかつた。

「然し」と、島田は口をむぐ／＼させながら、「直す道もあります。」

「ぢやア、あたしの方でも取るべき物を取らなかつたのはどうして呉れます？」

「まア、そんな過ぎ去つたことはお互ひに云はないことにしまして、さ」と、耕次は兩人の仲を取つた。そして兎に角誰れと誰れとに溶子のおこるやうなことをしやべつたのかと聽いて見ると、島田は三四人の名を擧げた。そして、

「それにもそんなうはさがあつたと云つただけで――」

「そのうはさのもとはあなたの細君ぢやアありませんか？」

「……」島田はかの女の追加に取り合はないで、「別にさう云ふ事實だと斷言したのぢやアありません。」

「兎も角も、ぢやア、その人々には君から今度お會ひの節に思ひ違ひのないやうに取り消して貰ふことにして」と耕次は渠に頼んで、かの女にも口をつぐませた。自分もかの女をやがては正式の妻に直すつもりでゐる以上、かの女に一つ

でも面白くないうはさの多いことは望んでゐなかつた。

自分がついて來たからこそ島田も、無事に濟ませることができたのだが、渠には恐らくさうとは思へまい。で、このことの爲めに、自分はどうせ淡い交際仲間の一人をまた失ふのだらうが、それは自分もかの女の愛に對して止むを得ないのであつた。

が、——斯うしてこちらは自分のただでさへ少い友人のうちから二人なり三人なりを失ふに從つて、自分の心はます／＼かの女にばかり熱中して行くのだ。それにも拘らず、かの女の方は最後に中野を失つても、直ぐまたその代りに何か別な詰らない物をその心に補つてゐるのである。一つには、又こちらどもの生活に冷かし半分の興味を持つて尋ねて來る客が少くなつたからでもあらう。それを趣味からであると思へばそれまでだが、こちらには何だかそれだけ水くさかつた。八日には花屋が白桃を持つて來たと云つて、その喜びかたが尋常ではなかつた。わざ／＼さうしてこちらの一直線な態度に反抗を見せてるのぢやアないかとも考へられた。

『如何に綺麗な花でも、人間眞實の生活に添つてゐなければ何でもない。』

『あなたは女學者に似合はず無趣味なんですよ。』

『そんな淺薄な趣味なんかで文學者は動いてるんぢやアない——一番重大なのは矢ッ張り人間その物の趣味です。』

『花を愛するのも人間の趣味でせう。』

『……』渠はかの女との間にいつも斯うして行き違ひがあつた。そしてそれを一々說き明すのも、もう、面倒であるほど毎日の仕事が急しかつた。そしてその間のかの女は、こちらから見ると、まことにゆるみたるんだものであつた。

かの女が白桃を愛するもいいが、かの女の白好きは既に姑息な因習になつてるのである。帝國議會の傍聽席に於ける「白襟、白うら、白そで口の美人」をいまだに夢見てゐるのに過ぎなかつた。そしてまたむく毛がこれも白いからであらう、かの女はどこかよそから近頃よくやつて來る小犬をいつも、

『ポチ、ポチ！　ポチや、ポチよ』と呼んでわが子のやうに可愛がつた。

『……』女房がその子に目もなく持つ愛情をも半ば燒き餅じみて見る男の經驗をして來たこちらには、そしてかの露子との交渉にも先づその子をよそへやれとまで云つたこちらには、澄子が犬や花を愛するに對しては一層抗議がましい言葉が出ないではゐなかつた。

十二日には、音樂と芝居とに關係ある友人が來て、澄子を女優にしたらどうだと勸めたのである。

『舞臺に出てさう引き立たない顏でもないから』と。『近代劇の女優なら、踊りの素養などはなくツたツてできるから。』

『それもいいね。本人がやらうと云へば、僕に不賛成はないが——』實際、若しどうせかの女が最後の不具者なら、今日以上に逼窮しても駄目なことであつた。寧ろ、その不具から來た、不滿や寂しさを花や小犬に費さしめるよりも、一つ花々しく舞臺にでも立たせる方がかの女の爲めにも一生の思ひ出にならうと思はれた。けれども、自分はこれまでに、もう、三名も女優の志願者には失敗してゐた。一には、藝者を受け出して裏切られたし、二には、有名な本願寺の役僧の落ちぶれた家族の娘をその約束で引き受けて、見習ひの最初から立派な衣物を要求された爲め駄目になつた。三には、餘りに不美人であつたが爲め、芝居の關係者がはから受け付けられなかつた。兎に角、かの女を友人もゐる前へ呼んで話して見ると、

『惡いことでもないと思ひますから、暫らく考へて見ます』と答へた。で、その翌日になつて、渠はあまり熱心でなしにだがまた尋ねて見た。

『きのふの話はどうです？』

『……』かの女もさう乘り氣になつてゐなかつた。『それよりも、あたし』と、ちよツと云ひにくさうに言葉を切つてから、『矢ツ張り、斯うしてあなたの熱い愛を受けてゐたいのです、わ――あなたさへこの狀態でお許しになつて下されば。』

『これ以上に』と、渠は重苦しい氣持ちで、『若しどうしてもあなたが進めないとすれば――』その夜は寒かつたけれども、月はまたよかつた。その輝くおもてに、ふと、渠は鏡を思ひ出したので、自分の机の前へ行つて懷中かがみに自分を寫して見ると、一時は多少恢復して來たと思へた顏が、また、自分ながら凄いほど痩せてゐた。

かの女の近況を心配してか、それともこちらにも親しみをおぼえてか、十六日に父がまたやつて來た。すると、生憎、その日になつて初めて、北海道からの途中で別れた女が――新聞でこちらの住所を知つたからであらうが――尋ねて來た。そしてさきに東京でこちらがかの女のよそ行き衣物を質に入れてあつたが、それを出す金二十圓を渡せとのかけ合ひであつた。

渠はこの女の最後に於ける不都合などを殊更らなじりたくもないので、云はれるままに金をやることにして、それができるまでの期日を入れた證文を書いて渡した。そしてこちら二人も同じく電車へ出るついでを、かの女と共に出た。そしてその途中で澄子がたばこを買ひにちよツと店屋へ寄つたあひだを、渠は久し振りに自分の心の緊張をゆるめて、笑ひながら低い聲でかの女にのしかかるやうに斯う云つた、

『さうこはい顏をして來ないでもいいぢやアないか？ 今度來る時はおとなしく、もツとおだやかにして來るがいい。さうすりやア、あれだツて萬ざら惡い氣の女ぢやアないから、お前も多少話相手にならうと云ふものだ。』

『……』かの女はこちらを矢ツ張り恨みがましく見詰めたが、その目つきには少し和らぎが見えた。

『……』さうだらう。たとひさうでも、今更らこちらはもと〳〵通りによりを戻さうと云ふやうな野心は微塵もないが、何といつても小一年が間は、隨分いろんな苦勞を共にしたのであつた。思へば、可哀さうなこともあつた。

一六

最初の女中はお嫁に行つたので、近處の桂庵から老婆が來てゐたが、それが十七日の夜に金を持つて買ひ物に行つた切り、たうとう歸つて來なかつた。すると、夜明けの五時半頃に臺どころの戶口を叩いた。どうしたのかと聽いて見ると、狐につままれて一晚中步いてゐたとの答へだ。馬鹿々々しい！ こちらの想像では、買ひ物の金で酒屋をちびり、ちびり飮み步き、いい心持ちに醉つてしまふと、裏手の明き家まで歸つて來て、そこの床の上でぐう〳〵眠つてゐたのだ。そして餘り寒くなつたので、斯う早くそこを出て來たのだらう。皆もこれには呆れてしまつた。二錢でも一錢でも持てばちよツと酒屋に行くと云ふ惡い癖の老婆で、これまでにも買つてある酒がいつのまにか思つたよりも減つてゐた。

『なんしろ着がへ一つない婆アやで』と、澄子は顏をしがめて父に語つた、『寢まきの上に裾のぼろを隱す前かけを一つして來たのですから。』

『……』さうかと云つて、それをこちらが追ひ出せば、早速澄子が困るのであつた。

ここ一週間或は十日ばかりを、渠は自分の仕

事にばかり熱心であつた。そして夜も午前二時より早く寢に就いたことがない。その間に雪が降つたり雨になつたり、また雪やみぞれがあつたりしたけれども、自分と澄子との間には殆ど葛藤がなかつた。蓋し自分かかの女をその根本に於いて追窮するひまさへもなかつたのである。

かの女は却つてそれを喜んでるやうに、ただこちらの餘りに仕事に精力を籠めてる爲めの健康をばかり心配した。が、それだけこちらはそこに一方の空虚を無理にこらへてゐたのである。それとも知らないで、老いてる父はこちらどものおもて向きだけの無事を喜んで、十九日に引ッ返して行つた。

その夜、二人がまだ床に這入らないうちに、互ひの暗闘がまたおもて向きにもぶつかつたのである。かの女は、

『あたしは刹那の滿足で明くる日は行路の人となつても構はぬやうな發作的の戀には不贊成です』と云ひ放つた。

『……』まだかの女の生意氣がぬけてないのかといきどほろしくなつたので、渠は、『何が發作的です』と少し聲を荒らげた。『僕は刹那の緊張に吸收されてない日常や永久なら、あつたとしても取るに足りないと云つてるんです！』

尖つた一點にはいのちが充實するが、延びた尺度は死んだ物に過ぎない。どちらの主張してゐる戀をたはむれであるかと云へば、寧ろかの女の尺度癖にあるではないか？ 戀の永久とはその尺度で、その內容は却つて刹那の充實緊張に在る。そしてそれを體現させようとするのは、決してたはむれでも下等でもない。熱烈の度から云つても、戀なり愛なりを一日でも二日でも押し延べようとしてその刹那をうとんじ忘れる方が不熱心に傾いてるのである。

これほど簡單明瞭なことを云はれて分らないかの女でもないが――と思ふと、矢ッ張り、こちらには、かの女がこちらを愛しながらもその自己の不能を飽くまでも云ひのがれようとする口實を拵へてるのではないかと云ふ風にばかり見えた。今夜はどうしてもそれを突きとめてやらうと考へながら、渠はかの女を無理にさそつて家を出た。その留守中に、だらしない酒飲み婆アやの爲めに、たとひ無けなしの家財道具をすッかり持ち運ばれてしまつたとしても、そんなことは少しも憂へるどころではなかつた。

舊暦十一日の月は、もう大分に中天を外れて冴えてゐたけれども、まだ滿ちるに至らないその光に却つて原ッぱへの雪のぬかるみ道を目の前にちら付かせた。そして夜ふけの寒い風がうす暗く二人の足もとに吹いてゐた。が、それを避けないで寧ろ氣持ちよく歡迎したほど、渠のあたまは熱してゐた。

家から左へ一直線の道をいよ〱人家のなくなつた原ッぱへ突き當ると、渠は大きく掘れた穴の左へ道を取つて、枯れ芝の上を五六歩さきへ出た。が、考へて見ると、その向うにはまばらなくぬぎ林しかなかつた。その間へ初めての雪を踏みにかの女と手を取り合つて來たことはあるが、その時を今から思へばただうはッつらの情愛を交換した言葉しかなかつた。今やそんなあまいことではうそにも滿足してゐられないのである。

ちよッと踏みとまつたが、それからあと戻りをした。そして工兵どもの練習のあとかたなる大きな長四角畑のやうな穴のふちをまはつて、山さきの角からその穴と陸軍射的場のまとなる山との間を二十間ばかり眞ッ直ぐに進んだ。そこでは射的場が二つに分れて、その兩方を二つの高い煉瓦塀で仕切つた狹いぬけ道が右の方へ長く向うまでとほつてゐる。渠はそれへかの女をつれ込まうかと考へた。そとからよくのぞいて

見ると、うへの方へ少し月の光が横照らしに照つてるけれども、壁のふもとは暗かつた。這入つてもいいが、ちよツとした聲でも籠つて遠く響くのを知つてるのでそれを恐れた。

また同じ方向を穴に添つて進み、たうとう、最大距離の射的場の内部に來てしまつた。つい、こなひだのこと、矢張り西大久保に住む或紳士が散歩がてら何も知らないでここへ這入つたところ、射的の眞ッ最中であることを横はばの眞ン中ごろへ來た時に初めて氣が付いた。ぷすぷすと云つて彈丸がいくつもあたまの近くを掠めた。進退に苦しんで地べたを這つて逃げてると、今度は狙ひ外れのが横ッ腹の前後にも落ちて來た。どうにも仕やうがないのでまた立ち上つて一目散にやッと驅け拔けたと云ふ。

さう云ふ苦しいあわてかたの場面をその起つた場に於いてぢッとまじめに想像して見ることができるに付けても、今や渠は自分の眞劍になつてることが確かめられた。若しかの女にしてなほ曖昧であつたり、なほ不正直であつたりしたら、今夜こそここで刃物があつたら光つたかも知れぬ。こちらのやうすでかの女もそれと察してゐるかして、餘ほど覺悟のやうに見えた。

こちらが然し言葉を發しなかつたので、かの女も亦ただ默つて附いて來たのだが、縱に長く渡つた廣ッぱの一方で、低いいばらや枯れ草の間に突ッ立つて、暫らくふたりは互ひに月の光をかすめて互ひの顏に互ひの心を讀み合つた。そして高みや地べたのところ〲に白いのがまだ消え殘つてるのが、却つて人の目をちら付かせた。

また山の後ろを一回、重い荷物列車の通過するのが聽えたあとは、全くしんとして、もちろん他に人けなどあらう筈はなかつた。

『いらッしやい!』渠は突然自分の足もとなる枯れ草の上に腰をおろした。そしてそばなるかの女を引き寄せて、横抱きに抱いた。

『……』かの女は素直に抱かれて、燃えてるやうな目つきでぢッとこちらの顏を見詰めたのが、光にかすれてちよツとよく見えた。が、恐怖の色もまたまじつて見えたので、こちらも餘ほどこはい目つきをしてゐるのだらうと身づから思へた。

『十二月の二十七日以來』と、成るべく優しくしようとした聲がそれが爲めにうつろに顫へて、『あなたはいつもからだと心とが分離してゐたんですか?』この問ひがおしまひになるに從つて、渠は憎しみと可愛さとが一緒に溢れて來て、かの女を半ば夢中でゆすぶつてゐた。

『……』こちらをなほも見つめてるかの女は、その首のがく〲するのがやむと、むせびをこらへてるやうな聲で答へた、『一番初めはさうでもございませんでした。』

『ぢやア、矢ッ張り、不能者ではないのです、ね!』渠は實際に一たび斷念したことがまた有望になつたのを喜んだ。

『でも』と、かの女もつづけてまじめに、『あたしが一生懸命になればなるほどまた中野とのことを繰り返すやうなものですから。』

『と云ふと――?』渠にはちよツとその意味が分らなかつた。

『……』まを置いて、かの女は、『それがあたしの云ひ後れた條件ですから。』

『……』何だらうと考へながら、渠はかの女の少し和らいで來た顏を見てゐた。

『あなたはそれをも白狀しろとおッしやるのでせうから、今、申し上げますが、あなたはまだ正式の奧さんがおありです。』

『ああ、分りました!』渠はそこにも既に意外でもなかつた意外のことを發見した。『あなたは、成るほど、それが爲めにこなひだも僕等が不自然なまじはりになつてるのを氣にしてゐた

んです、ね。』

さうだ、自分はもう占めたと云ふ一安心の爲めに、割り合ひに平凡な理性の勝つてるかの女の立ち場を全く踏み付けにして、かの女をばかり追窮してゐたのであつた。そしてかの女が最後に中野に要求して失敗したことをこちらにも云ひたいながら遠慮してゐるのであつたことが分らなかつた。然し今や、理性の平凡は女としてまぬがれないもので――かの女は矢ッ張り正式の妻になりたいのであつた。自分は今やそれに十分の同情を向けることができる。かの女が無〻氣に猫を記念にしたり、わざとらしくも主婦の權利を主張したり、ただ丸髷を結つて見たり、頻りに小犬を可愛がつたりするのは、結局、みな子を欲しがる年齢に達した證據ではないか？　かかる爛熟した女を手に入れながら、自分らは今日までそれに子を與へる道を取らなかつたのだ。中野にしても、自分にしても、『關係』したも同様でありながら、なほ且かの女に『處女性』主張の餘地を殘す所以は、乃ち、そこであつたらう。そこには正式の手つづきをすませてかの女を安心させる必要があつたのだ。若しかの女の肉靈區別觀で云ふと、かの女の最も否定する肉を實際にもッと多く要求してゐるのはこちらではなく、却つてかの女自身であつた。かの女にそれを直接に與へて子のできる道をひらかないでは、かの女をこちらの所謂合致の愛に救ひ上げることができないのであつた。澄子の如き女に對しては、如何に熱烈な合致觀も、正式な、それが爲めに平凡な家庭を持たせないでは實現できないことが分つた。かの女のいろんな小理窟や思はせ振りも決して空想や僞善ではなかつたのだ。

『よろしい！　僕は中野とは違ひます。成るべく早く、あなたの望み通り、あの死んだも同様の妻と離婚する方法を考へます。』

『あたしは然し』と、かの女は全く涙ごゑになつてその顔をこちらの胸に埋めて、『そんなことをなさらないでも、もう、あなたの物ですから！』

『いや、分りました。僕が惡かつたのです。幾たびもあなたばかりに許してを云はせましたが、最後に今僕から返します――どうか許して下さい。』斯う云つて、今一度かの女を抱き締めて接吻を與へた。そしてこの心持ちを自分らの家庭に實行してこそ、さきに房子さんらに誓つた澄子の救ひが初めて全くされるのであつた。そしてこの救ひがまた自分自身の救ひにもなるのであつた。『もう、すッかり分りました。さア、歸りませう。』

『……』かの女も一緒に立ちあがつて、下向きがちに歩き出した。

『……』渠は無言でだが、かの女を導きながら射的場のいばらや枯れ草の間を出る時、仰いで西の空を見ると、冷たさうなは虧けの月にも熱い感じが伴つてゐた。（大正七年十二月）

中禪寺にて

黑くよどめる水のおも、
油を延べし湖の如。

ひたり、ひたりと艪になづむ、
音さへおもきわがこころ。

遠く君より離れ來て、
暮れ行くけふの寂しさよ。

舟の行くへに引かれては、
わが身も消えて入るおもひ。

（『闇の盃盤』より）

年譜

明治六年　一月二十日、淡路國洲本に生れ、美衛と命名。父は直夫、美衛はその長男なり。

二十歳前後生國淡路を「阿波寺」ともぢり、その下に「鳴門左衛門」の名を附し、匿名にて脚本を發表せしが、その餘り長きため後、「阿波」を「泡」に「鳴門」を「鳴」につゞめ、爾來泡鳴と號す。

明治十二年　四月、洲本日新小學校に入學。

明治十七年　十月、同校卒業。十八年より二十年まで、郷里の塾に漢學と英語を學ぶ。

明治二十年　七月、大阪に出で泰西學館に入り、英語を以て普通學を修む。一度キリスト教信者となる。此年、一家を擧げて父母の生地東京に移り、明治學院に入る。（歴史小説）『サイラス王物語』を書く。矢野龍渓の『經國美譚』の向うを張り、大に賣つて洋行費を作る目的なりしも、出版を春陽堂に交渉して成らず、遂に火中す。當時耽讀せし馬琴の感化にて七五調に書きしもの。これ新體詩を作りし動機なり。

明治二十一年　九月より、二十四年七月まで、神田元專修學校に經濟學及び法律學を學ぶ。

明治二十四年　國木田獨歩、田村三治、加藤咄堂等と共に「文壇」を發刊す。

明治二十五年　二月、仙臺に赴き、東北學院に入る。押川方義の紹介にて教師となる筈のところ、西洋人の教師と衝突して一年生とされ、英語を以て高等普通學を修む。二十七年まで在學。此間希臘語梵語獨逸語、特に『萬葉集』『詩經』及びセキスピヤを研究せり。傍らエマソンと中江藤樹を耽讀。松島に於て頻りに獨禪す。キリスト教を脱したるもこの時にして、刹那哲學と新日本主義の起源を發したるも亦この時代なり。當時（劇）『魂迷月中刃』の作あり。

明治二十七年　實母さと死去。東京に歸る。十二月、『魂迷月中刃』（女學雜誌社）を出版。「歌舞伎新報」の編輯係となり、爾後二年間繼續す。

明治二十八年　竹腰幸と東京に於て結婚す。この年より三十年まで、米國宣教師を助けて讃美歌並びに宗教書の飜譯に從事す。これ他日の日本詩歌音律研究の端緒となれり。

明治二十九年　長女生れ、三十年死去。

明治三十一年　一英語學校を麻布に設立す。この奔走のために肺病に罹る。長篇の物語歌『嘉播の親』を作り、「學藝餘談」に連載す。

明治三十二年　病を養ひ琵琶湖畔に移る。三十五年まで滋賀縣の通譯及び第二中學の英語教師を勤む。長男生れ、八ケ月にて死亡。この間臨濟宗永源寺派管長久松師に參したるも、途中にて廢せり。又屢々比叡山に登り、天台を研究す。八月、『英和警察會話篇』を出版。

明治三十三年　次女富美子生る。

明治三十四年　七月、（詩集第一）『露じも』を自費出版す。

明治三十五年　九月、大倉商業學校の英語教師となる。與謝野鐵幹、平木白星、前田林外等と共に、第一回韻文朗讀會を神田青年會館に開き、「詩句格調管見」を演説す。

明治三十六年　一月、次男薫生る。前田林外、相馬御風等と東京純文社を起し、「白百合」を共同發刊、所謂ロマンチック運動を始む。

明治三十七年　十二月、（詩集第二）『夕潮』（日高有倫堂）を出版す。

明治三十八年　單にロマンチックなる思想と相容れざる爲め、東京純文社を脱す。六月、

詩集第三『悲戀悲歌』（有倫堂）、十月、詩劇『海堡技師』（尾文潮堂）を出版。某書店よりホメロスの『イリオス物語』を出版の約束にて、希臘原文より第六卷まで飜譯したるも、書店倒れたるため中止す。

明治三十九年　六月、論文『神秘的半獸主義』（左久良書房）を、十一月、夕潮『悲戀悲歌』の合本『泡鳴詩集』（梁江堂）を出版。

明治四十年　三月、三男眞男生る。『新體詩史』（「太陽」臨時號）を發表。十二月、『新體詩作法』を作る。（後これを訂正し、『日本音律の研究』と題して、博士論文として提出す。）

明治四十一年　四月、詩集第四『闇の盃盤』（有倫堂）を出版。五月父を喪ふ。十二月、四男死去。同月大倉商業學校教師を辭す。この前後より妻女幸とは殆んど別居同樣の狀態となれり。

明治四十二年　二月、最初の小說『耽溺』（「新小說」）を發表。四月、自ら資本家となりて、樺太に於て、蟹の罐詰製造業を始む。六月、樺太に赴く。この時既に罐詰事業殆んど失敗の狀態に在りき。樺太を露領まで巡歷し、歸途北海道の一部を踏破す。札幌に於て、『悲痛の哲理』大半を完成す。十一月下旬歸京。先妻と全く別居して、第二の妻清子と同棲す。

明治四十三年　一月、『悲痛の哲理』（「文章世界」）を發表。五月、『耽溺』（易風社）、七月、長篇四部小說の一なる『放浪』（東雲堂）を出版。

明治四十四年　一月より、『放浪』の續篇『斷橋』を『日々新聞』に連載。四月、『大阪新報』の記者となる。養蜂の研究を始む。四部小說の一なる『發展』を『大阪新報』に連載す。

大正元年　一月、『發展』（實業之世界社）を出版、發禁となる。十月、大阪新報記者を辭して歸京す。

大正二年　第一の妻と全く離婚し、六月、清子と結婚す。十月、シモンズの『表象派の文學運動』（新潮社）、十二月、論文集『近代思想と實生活』（東亞堂）、短篇集『炭屋の船』（岡村書店）を出版。

大正三年　二月、五男民雄、清子に生る。六月、次女富美子死亡。十月、短篇集『五人の女』（春陽堂）、短篇集『ぼんち』（植竹書院）、十二月、四部小說の一なる『毒藥を飲む女』（鈴木三重吉方より）を出版。

大正四年　一月、論文集『近代生活の解剖』（廣文堂）、『古神道大義』（敬文館）、二月、『惡魔主義の思想と文藝』（天弦堂）を出版。三月、詩集第五『戀のしやりかうべ』を金風社より印稅の約束にて出版せしも、無印の儘發賣せしを以つて、紙型を沒收す。五月、『日本音律の研究』を博士論文として文部省に提出す。同月、『耽溺』を縮刷し、『代表的名作選集』（新潮社）の一篇として出版。八月、清子と別居し、英枝と同棲す。この事、世間の問題となりしため、事情を辯明すると同時に、男女貞操問題に對する見識を發表する目的にて、十月、『男女と貞操問題』（新潮社）を出版。

大正五年　一月、『新日本主義』を發刊し、新日本主義運動に着手す。『プルターク英雄傳』の飜譯を始む。清子及び浮田博士に對する訴訟問題起る。二月、對浮田の控訴をなす。四月、『かの女の遺物』（「文章世界」）、五月、『藥人形』（「文章世界」）、六月、論文『タゴール氏に直言す』（「讀賣新聞」）を發表。對浮田博士の控訴破棄さる。詩集『闇の盃盤』の僞版出づ。七月、『その一日』（「中央公論」）を發表。この頃約三ヶ年がかりの『プルターク英雄傳』の飜譯完結す。八月、若宮氏等と西洋古典飜譯事業會組織の相談す。『二頭の馬』（「早稻田文學」）、九月、『國家主義並に個人主義の獨斷的區別の撤廢』（「日本評論」）發表。十月、『瓢簞みがき』「執筆」。十一月、『お園の家出』（「中央公論」）を發表。「日蓮上人御遺文」を研究的に讀み始む。十二月、耳を病む。『繼母と大村夫婦』（「新小說」）を發表。英枝、女兒を產む。清子の訴訟により、衣類四五點書物八百三十三冊を差押へらる。

大正六年　一月、『德富蘇峯論』（「新小說」）、二月、『訴訟より離婚まで』（「中央公論」）、三月、『寒月』（「文章世界」）、五月、『日本に於ける亞細亞主義の勃興』（「日本評論」）及び

(日本主義)を發表。金に困りてストーナ夫人の『自然の教育』を匿名にて譯出す。六月、『鼻』(新小說)、『霜子のかたみ』(黑潮)、七月、『指の傷』(青年文壇)、九月、『獨探嫌疑者と二人の女』(中央公論)、『大阪辯護論』(大阪每日新聞)を發表。この頃より、毎月一回「創作月評會」を開く、中澤靜雄、大月隆仗その他十數名集る。十月、『法學士の大藏』を脫稿。磯村氏によつて、「耽溺」の飜譯原稿成る。『華族の家僕』(大阪每日新聞)、十一月、『一日の勞働』(文章世界)を發表。押川氏の話で古神道に就いて飯野吉三郎と會見す。

大正七年 一月、『乃木大將の惑ひ』(新日本)、『非凡人のおもかげ』(中央公論)、三月、『強い相手』(早稻田文學)、『中產農民の漸滅と高等遊民の勞働』(日本主義)、四月、『憑き物』(新潮)、『空氣銃』(中外)發表。五月、英枝との結婚屆を出す。『渠の疑惑』(大觀)、『入れ墨師の子』(新小說 六月號 禁)、『青春の頃』(雄辯 六月號 禁)を發表。七月、長男を中心とする家庭上の問題生ず。『猫八』(大阪日日新聞)、八月、『淺間の靈』(中外)、九月、『惡太郎の夢』(中央公論)、『僕の描寫論』(新潮)、『午後二時半』(新小說)、『父の出奔後』(文章世界)發表。十月、日本主義協會會則を發表す。『描寫論補遺』(新潮)は所謂、『一元描寫論』として喧傳せられたるものなり。『公爵の氣まぐれ』(大觀)、十一月、『お安の亭主』(新小說)發表。十二月、短篇小說集『猫八』(玄文社)、『非凡人』(天佑社)を出版。男兒出產、諭鶴と命名。『家つき女房』(中央公論)發表。『征服被征服』を脫稿す。

大正八年 一月、また耳を病む。二月、『お竹婆さん』(大觀)、『一元描寫の實際證明』(新潮)を發表。『征服被征服』並に『空氣銃』『離婚まで』を春陽堂より單行。『部落の娘』(新小說)、三月、『蜜蜂の家』(雄辯)、『わが子のやうに』『二食主義者』(以上二篇、內外時論)を發表。四月、短篇集『青春の頃』(伊香保書院)を單行す。『お常』(中外)脫稿。『山の總兵衞』(文章世界)、『催眠術師』(中央公論)、六月、『母の立場』(改造)を發表。『勞働會議』(中央公論)、七月、『自由解放とデモクラシの批判』(新潮)、『お增の信心』(大阪朝日新聞)、八月、『燃える襦袢』(太陽)を發表。この頃、日光に遊び、『日光』『中禪寺湖』の詩、二篇を作る。『難船』(大觀)、『鐵公』(內外論叢)發表。著作家組合入會を拒絶す。九月、『狐の皮』(新時代)、十月、『犧牲』(新潮)、『渠の舊日記より』(新報知)、『實子の放逐』(中央公論)、十一月、『あぶら蟲』(雄辯)、『鹽原日記』(內外時報)、『おせい』(改造)、『或る高等學生の親』(中央公論)、十二月、『金貸しの子』(文章世界)、『眞理論者』(大觀)、論文『現代に對する日本主義的綜合觀』(文化批判 第三雜誌)を發表。更に『一元描寫論』の著述を目論む。

大正九年 一月、『許されたる自由』(大正日日)を發表。この頃『發展』を訂正す。二月、『おせいの失敗』(改造)、『山の奥』(中央公論)を發表。長篇小說並に一幕物四篇の『實子の放逐』上梓。(後『[illegible]か』と改題して日本評論社より出版)。三月、『美人』(雄辯)脫稿。この頃雜誌『日本主義』發展のために種々畫策す。四月、『おせいの巡禮』(太陽)發表。『公爵の氣まぐれ』(學藝書院)、『悲痛の哲理』(隆文館)を單行。四月十一日、月評會の觀櫻會に出席。この頃から風邪氣味。二十五日、研究座を見ての歸りに、市電爭議のため、日比谷交叉點にて雨に遇ひ、當時流行のスペイン風に冒され、就床。翌月六日夕刻下痢甚しく、急性腹膜炎の徴候あり。八日午後、大學病院に入院。九日、午前一時半、佐藤外科に於て腹部切開、手術は理想通りの結果を見たるも、心臟弱り、且つ一ケ年近くも氣附かざりし腎臟病もありて、九日午前三時四十分、知友に會釋しつゝ眠るが如く逝く。享年四十八歲、小石川雜司ケ谷墓地に葬る。

上司小劍集

藝術の墮落はだいぶ昔からのことだ
近代の文明は社會組織の足の裏で藝術を踏み
にじつた
文明は霜のやうに藝術の芽をいためた
藝術は文明から逃げた
生きた製作があらゆる藝術家の手から離れた
社會の改造を待つ
藝術の復興を望む

上司小剣

鱧の皮

一

郵便配達が巡査のやうな靴音をさして入つて來た。

「福島磯……といふ人が居ますか。」

彼れは焦々した調子でかう言つて、束になつた葉書や手紙の中から、赤い印紙を二枚貼つた封の厚いのを取り出した。

道頓堀の夜景は丁どこれから、といふ時刻で、筋向うの芝居は幕間になつたらしく、讃ヶ屋の店は一時に立て込んで、二階からの通し物や、芝居の本家や前茶屋からの出前で、銀場も板場もテンテコ舞をする程であつた。

「福島磯……此處だす、此處だす。」と、忙しいお文は、銀場から白い手を差し出した。男も女も、襷がけでクル／＼と郵便配達の周圍を廻つてゐるけれども、お客の方に夢中で、誰れ一人女主人の爲めに、郵便配達の手から厚い封書を取り次ぐものはなかつた。

「標札を出しとくか、何々方としといて貰はんと困るな。」

怖い顔をした郵便配達は、かう言つて、一間も此方から厚い封書を銀場へ投げ込むと、クルリと身體の向を變へて、靴音荒々しく、板場で□く鰻の匂を嗅ぎながら、暖簾を潜つて去つた。

四十人前といふ前茶屋の大口が燒き上つて、二階の客にも十二組までお愛想（勘定）を濟ましたので、お文は漸く喉の下から先刻の厚い封書を取り出して、先づ其の外形からつく／＼見た。手蹟には一目でそれと見覺えがあるが、出した人の名はなかつた。消印の「東京中央」といふ字が不明瞭ながらも、兎も角讀むことが出來た。

「何や、阿呆らしい。……」

小さく獨り言をいつて、お文は厚い封書を其のまゝ銀場の金庫の抽斗に入れたが、暫くしてまた取り出して見た。さうして封を披くのが怖ろしいやうにも思はれた。

「福島磯……私が名前を變へたのを、何うして知つてるのやろ、不思議やな。叔父さんが知らしたのかな。」

お文はかう思つて、またつく／＼と厚い封書の宛名の字を眺めてゐた。

河岸に沿うた裏家根に點けてある、「さぬきや」の文字の現れた廣告電燈の色の變る度に、お文の背中は、赤や、青や、紫や、硝子障子に映るさま／＼の光に彩られた。

一しきり立て込んだ客も、二階と階下とに一組づつゐるだけになつた。三本目の銚子を取り換へてから小一時間にもなる二階の二人連れは、勘定が危さうで、雇女は一人二人づつ、拔き足して階子段を上つて行つた。

二

新まいの雇女にお客と間違へられて、お文の叔父の源太郎が入つて來た。

「お出でやアす。」と、新まいの女の叫んだのには、一同が笑つた。中には腹を抱へて笑ひ崩れてゐるものもあつた。

「いゝをツさん、えゝとこへ來とくなはつた。今こんな手紙が來ましたのやがな。獨りで見るのも心持がわるいよつて、電話かけてをツさん呼ばうと思うてましたのや。」

お文は女どものゲラ／＼とまだ笑ひ止まぬの

を、見向きもしないで、銀場の前に立つた叔父の大きな身體を見上げるやうにして、かう言つた。

『手紙テ、何處からや。……福造のとこからやないか。』

源太郎は年の故で稍曲つた太い腰をヨタ〳〵させながら、銀場の横の狹い通り口へ一杯になつて、角帶の小さな結び目を見せつゝ、背後の三疊へ入つた。

其處には簞笥やら蠅入らずやら、さま〴〵の家具類が物置のやうに置いてあつて、人の坐るところは疊一枚ほどしかなかつた。其の狹い空地へ大きく胡坐をかいた源太郎は、五十を越してから始めた煙草を無器用に吸はうとして、腰に插した煙草入を拔き取つたが、火鉢も煙草盆も無いので、煙草を詰めた煙管を空しく弄りながら、對う河岸の美しい灯の影を眺めてゐた。對う河岸は宗右衛門町で、何をする家か、灯がゆら〳〵と動いて、それが、螢を踏み蹂躙つた時のやうに、キラ〳〵と河水に映つた。初秋の夜風は冷々として、河には漣が立つてゐた。

『能う當りましたな。……東京から來ましたのや。……これだす。』

勘定の危まれた二階の客の、銀貨銅貨取り混ぜた拂ひを檢めて、それから新らしい客の通した麥酒と鮒の鐵砲和とを受けてから、一寸の閑を見出したお文は、後を向いてから言つた。彼女の手には厚い封書があつた。

『さうか、矢ツ張り福造から來たんか、何言うて來たんや。……また金送れか。分つてるがな。』

源太郎は眼をクシャ〳〵さして、店から射す灯に透しつゝ、覗くやうに封書の表書を讀まうとしたが、暗くて判らなかつた。

『をツさんに先き讀んで貰ひまへうかな。……私まだ封開けまへんのや。』

かうは言つてゐるものの、封書は固くお文の手に握られて、源太郎に渡さうとする容子は見えなかつた。

『お前、先きい讀んだらえゝやないか。……お前とこへ來たんやもん。』

『私、何や知らん、怖いやうな氣がするよつて。』

『阿呆らしい、何言うてるのや。』

冷笑を鼻の尖頭に浮べて、源太郎は煙の出ぬ煙管を弄り廻してゐた。

『そんなら、私、そツちへいて讀みますわ。……をツさん一寸銀場を代つとくなはれ、あのまむしが五つ上ると金太に魚槽を見にやつとくなはれ。……金太えゝか。』

氣輕に尻を上げて、お文は叔父と板前の金太とに物を言ふと、厚い封書を握つたまゝ、薄暗い三疊へ入つた。

『よし來た、代らう。……どツこいしよ。』と、源太郎は太い腰を浮かして、煙管を右の手に、煙草入を左の手に摑んで、お文と入れ代りに銀場へ坐つた。

豆絞りの手拭で鉢卷をして、すら〳〵と械の廻るやうな手つきで鰻を裂いてゐた板前の金太は、チラリと横を向いて源太郎の顏を見ると、にツこり笑つた。

『此處へも電氣點けんと、どんならんなア。阿母アはんは儉約人やよつて、點けえでもえゝ、と言やはるけど、暗うて仕樣がおまへんなをツさん。……二十八も點けてる電氣やもん、五燭を一つぐらゐ殖やしたかて、何んでもあれへん、なアをツさん。』

がらくたの載つてゐる三疊の棚を、手探りでガタゴトさせながら、お文は聲高に獨り言のやうなことを言つてゐたが、やがてパッと燐寸を擦つて、手燭に灯を點けた。

河風にチラ〳〵する蠟燭の灯に透かして、一心に長い手紙を披げてゐる、お文の肉附のよい横顏の、白く光るのを、時々振り返つて見なが

ら、源太郎は、姪も最う三十六になつたのかなアと、染々さう思つた。

毛絲の辨當嚢を提げて、『福島さん學校へ』と友達に誘はれて小學校へ通つてゐた姪の後姿を毎朝見てゐたのは、ツイ此頃のことのやうに思はれるのに、と、源太郎はまださう思つて、聟養子を貰つた婚禮の折の外は、一度も外の髮に結つたことのない、お文の新蝶々を、俯いて家出した夫の手紙に讀み耽つてゐるお文の頭の上に見てゐた。其の新蝶々は、震へるやうに微かに動いてゐた。

『何んにも書いたらしまへんがな。……長いばツかりで。……病氣で困つてるよつて金送れと、それから子供は何うしてるちふことと、……今度といふ今度は懲り〳〵したよつて、いゝ、あやまるさかい元の鞘へ納まりたいや、……決つてるのや。』

口では何んでもないやうに言つてゐるお文の眼の、異樣に輝いて、手紙を見詰めてゐるのが、蠟燭の光の中に淡く見出された。

『まアをツさん、讀んで見なはれ。面白おまツせ。』

氣にも止めぬといふ風を見せようとして、態とらしい微笑を口元に浮べながら、殘り惜しさうに手紙を其處に置き棄てて、お文は立ち上ると、叔父の背後に寄つて、無言で銀場を代らうとした。

『どツこいしよ。』と、源太郎はまた重さうに腰を浮かして、手燭の點けツぱなしになつてゐる三疊へ、大きな身體を這ひ込むやうにして坐つた。煙管はまだ先刻から一服も吸はずに、右の手へ筆を持ち添へて握つてゐた。

『いゝをツさん、筆……筆。』と、お文は銀場の筆を叔父の手から取り戻して、懈怠さうに、叔父の肥つた膝の温味の殘つた座蒲團の上に坐ると、出ないのを無理に吐き出すやうな欠伸を一つした。

源太郎は、蠟燭の火で漸と一服煙草を吸ひ付けると、掃除のわるい煙管をズウ〳〵音させて、無恰好に煙を吐きつゝ、だらしなく擴げたまゝになつてゐる手紙の上に眼を落した。

『其の表書なア、福島磯といふのを知つてるのが不思議でなりまへんのや。』

手紙を三四行讀みかけた時、お文がこんなことを言つたので、源太郎は手紙の上に俯いたなりに、首を捻ぢ向けて、お文の方を見た。

『福造の居よる時から、さう言うてたがな、お文よりお磯の方がえゝちうて、福島と島やさかい、磯と文句が續いてえゝと、私が福造に言うてたがな。……それで書いて來よつたんや。われの名も福島福造……は福があり過ぎて惡いよつて、福島理記といふのが、劃の數が良いさかい、理記にせいと言うてやつたんやが、さう書いて來よれへんか。……私んとこへおこしよつたのには、ちやんと理記と書いて、宛名も福島照久樣としてよる……源太郎とはしよらへん。』

好きな姓名判斷の方へ、源太郎は話を總て持つて行かうとした。

『やゝこしおますな、皆んな名が二つづつあつて。……けど福造を理記にしたら、少しは增しな人間になりますか知らん。』

世間話をするやうな調子を裝うて、お文は家出してゐる夫の判斷を聞かうとした。

『名を變へても、おいゝはあかんな。』

そツ氣なく言つて、源太郎は身體を眞ツ直ぐに胡坐をかき直した。お文はあがつた蒲燒と玉子燒とを一寸檢めて、十六番の紙札につけると、雇女に二階へ持たしてやつた。

『この間も、選名術の先生に私のことを見て貰うた序に聞いてやつたら、福島福造といふ名と四十四といふ年を言うただけで、先生は直きに、「この人はあかんわい、放蕩者で、其の放蕩

は一生止まん。止む時は命數の終りや。性質が薄情殘酷で、これから一寸頭を持ち上げることはあつても、また失敗して、そんなことを繰り返してる中にだん〳〵惡い方へ塡つて行く」と言やはつたがな。ほんまに能う合うてるやないか。』

到頭詰まつて了つた煙管を下に置いて、源太郎は沈み切つた物の言ひやうをした。お文は聞えぬ振りをして、板場の方を向いたまゝ、厭な厭な顏をしてゐた。

三

源太郎がまた俯いて、讀みかけの長い手紙を讀まうとした時、下の河中から突然大きな聲が聞えた。

『おーい、……おーい……讃岐屋ア。……おーい、讃岐屋ア。』

重い身體を、どツこいしよと浮かして、源太郎が腰硝子の障子を開け、水の上へ架け出した二尺の濡れ縁へ危さうに片足を踏み出した時、河の中からはまた大きな聲が聞えた。

『おーい、讃岐屋ア。……鰻で飯を二人前呉れえ。』

『へえ、あの……』と、變な返事をして、源太郎は河の中を覗き込んだが、色變りの廣告電燈が眩しく映るだけで、黑く流れた水の上のことは能く分らなかつた。

『をツさん、をツさん。』と、お文の聲が背後から呼ぶので、銀場を振り返ると、お文は兩手を左の腰の邊に當てて、長いものを横たへた身振りをして見せた。

『あゝ、サーベルかいな。』

漸く合點の行つた源太郎は、小さい聲でかうお文に答へて、

『へえ、今直きに拵へて上げます。』と、黑い水の上に向つて叫んだ。

『さうか、早くして呉れ。』といふ聲の方を、瞳を定めてヂッと見下すと、眞下の石垣にぴッたりと糊付か何かのやうにくツ付いて、薄暗く油煙に汚れた赤い灯の點いてゐる小さな舟の中に、白い人影がむく〳〵と二つ動いてゐた。其の白い人影の一つが急に黑くなつたのは、外套を着たのらしかつた。

通し物の順番を追はずに、板前を急がせた水の上からの註文は直ぐ出來て、別に添へた一品の料理と香の物、茶瓶なぞとともに、こんな時の用意に備へてある長い綱の付いた平たい籠に入れて、源太郎の手で水の上へ手繰り下された。

『サンキュー。』と、妙な聲が水の上から聞えたので、源太郎は馬鹿々々しさうに微笑を漏らした。

雇女が一人三疊へ入つて來て、濡れ縁へ出て對岸の紅い灯を眺めながら、欄干を叩いて低く喇叭節を唄つてゐたが、藪から棒に、

『上町の旦那はん、……八千代はん、えらうおまんな。この夏全で休んではりましたんやな。……もう出てはりますさうやけど、お金もたんと出來ましたんやろかいな。』と、源太郎に向つて言つた。

隨一の名妓と唄はれてゐる、富田屋の八千代の住む加賀屋といふ河沿ひの家のあたりは、對岸でも灯の色が殊に鮮かで、調子の高い撥の音も其の邊から流れて來るやうに思はれた。空には星が一杯で、黑い河水に映る兩岸の灯と色を競ふやうであつた。

名妓の噂を始めた縮れ毛の、色の黑い、足の大きな雇女は、源太郎が何とも言はぬので、また欄干を叩いて喇叭節をやり出した。

手紙を前に披げて、ヂッと腕組をしてゐた源太郎は、稍暫くしてから、空になつた食器が籠に入つて雇女の手で河の中から迫り上つて來たのを見たので、突然銀場の方を向いて、

『これ、何んぼになるんやな。』と頓狂な聲を出した。

『よろしおますのやがな、お序の時にと、さう言はしとくなはれ。』

算盤を彈きながら、お文が向うむいたまゝで言つたのと、殆んど同時に、總てを心得てゐる雇女は、濡れ縁から下を覗き込んで、

『よろしおます、お序の時で。』と高く叫んだ。水の上からも何か言つてゐるやうであつたが、意味は分らなかつた。やがて、赤い灯の唯一つ薄暗く煤けて點いてゐる小舟は、音もなく黑い水の上を滑つて、映る兩岸の灯の影を亂しつつ、暗の中に漕ぎ去つた。

四

腕組をして考へてゐた源太郎は、また俯いて長い手紙に向つた。さうして今度は口の中で低く聲を立てて讀んでゐたが、讀み終るまでに、稍長いことかゝつた。

お文は銀場から、其の鋭い眼で入り代り立ち代る客を送り迎へして、男女二十八人の雇人を萬遍なく立ち働かせるやうに、心を一杯に張り切つてゐた。夜の更けようとするに連れて、客の足はだん／＼繁くなつた。暖簾を揭げた入口から、丁字形に階下の間と二階の階子段とへ通ふ三和土には、絕えず水が撒かれて、其の上に履物の音が引ッ切りなしに響いた。

これから芝居の閉場る前頃を頂上として、それまでの一戰と、お文は立つて帶を締め直したが、時々は背後を振り向いて、手紙を讀んでゐる叔父の氣色を窺はうとした。

「二十圓送れ……と書いてあるやないか。」と、源太郎は眼をクシャ／＼さしてお文の方を見た。

『さうだすな。』と、お文は輕く他人のことのやうに言つた。

『福造の借錢は、一體何んぼあるやらうな。』

疊みかけるやうにして、源太郎が言つたので、お文は忙しい中で胸算用をして、

『千圓はおますやらうな。』と、相變らず世間話のやうに答へた。

『この前に出よつた時は千二百圓ほど借錢をさらすし、其の前の時も彼れ是れ八百圓はあつたやないか。……今度の千圓を入れると、三千圓やないか。……高價い養子やなア。』

自然と皮肉な調子になつて來た源太郎の言葉を、お文は忙しさに紛らして、聞いてはゐぬ風をしながら、隅の方の暗いところでコソ／＼話をしてゐる男女二人の雇人を見付けて、

『留吉にお鶴は何してるんや。この忙しい最中に、……これだけの人數が喰べて行かれるのは、商賣のお蔭やないか。商賣を粗末にする者は、家に置いとけんさかいな、ちやッちやと出ていとくれ。』と、癇高い聲を立てた。男女二人の雇人は、雷に打たれたほどの驚きやうをして、パッと左右に飛んで立ち別れた。

『味醂屋へまた二十圓貸せちうて來たんやないか。……味醂屋にはこの春家出する時三十圓借りがあるんやで。能うそんな厚かま！いことが言はれたもんやな。』

何處までも追つかけるといつた風に、源太郎は、福造の棚卸をお文の背中から浴びせた。

『味醂屋どこやおまへん。去年家にゐて出前持をしてたあの久吉な、今島の內の丸利にゐますのや。あそこへいて、この春久吉に一圓借せと言ひましたさうだッせ。困つて來ると恥も外聞も分りまへんのやなア。』

また世間話をするやうな、何氣ない調子に戾つて、お文は背後を振り返り／＼、叔父の言葉に合槌を打つた。

『味醂屋や酒屋や松魚節屋の、取引先へ無心を言うて來よるのが、一番強腹やな。……何んぼ借して呉れんやうに言うといても、先方では若し

福造が戻つて來よるかと思うて、厭々ながら借すのやが、無理もないわい。若しも戻つて來よると、讃岐屋の旦那はんやもんな。其の時復讐をしられるのが辛いよつてな。取引先も考へて見ると氣の毒なもんや。』

染々と同情する言葉つきになつて、源太郎は太い溜息を吐いた。

『饂飩屋に丁稚をしてた時から、四十四にもなるまで、大阪に居ますのやもん、生れは大和でも、大阪者と同じことだすよつてな。私等の知らん知人もおますよつて、あゝやつて東京へほい、い、いつたらかしとくと、其處ら中へ無心狀を出して、借錢の上塗をするばかりだす。困つたもんやなア。』

漸く他人のことではないやうな物の言ひ振りになつて、お文は廣く白い額へ青筋をピク〳〵動かしてゐた。

『あゝ、「鱧の皮を御送り下されたく候」と書いてあるで。……何吐かしやがるのや。』と、源太郎は長い手紙の一番終りの小さな字を讀んで笑つた。

『鱧の皮の二杯酢が何より好物だすよつてな。……東京にあれおまへんてな。』

夫の好物を思ひ出して、お文の心はさま〴〵に亂れてゐるやうであつた。

『鱧の皮、細う切つて、二杯酢にして一晩ぐらゐ漬けとくと、溫飯に載せて一寸いけるさかいな。』と、源太郎は長い手紙を卷き納めながら、暢氣なことを言つた。

五

堺の大濱に隱居して、三人の孫を育ててゐるお梶が、三歳になる季の孫を負つて入つて來た。

『阿母アはん、好いとこへ來とくなはつた。をツさんも來てはりますのや。』と、お文は嬉しさうな顏をして母を迎へた。

『お家はん、お出でやす。』と、男女の雇人中の古參なものは口々に言つて、一時『氣を付けッ』といつたやうな姿勢をした。

「あばちやん、ばア。母アちやん、ばア。ぢいちやん、ばア。』と、お梶は歌のやうに節を付けて背中の孫に聞かせながら、ズウッと源太郎の胡坐をかいてゐる三疊へ入つて行つた。

背中から下された孫は、母の顏を見ても、大叔父の顏を見ても、直ぐベソをかいて、祖母の懷に嚙り付いた。

『あゝ辛度や。』と疲れた狀をして、薄くなつた髮を引ッ詰めに結つた、小さな新蝶々の崩れを兩手で直したお梶は、忙しさうに孫を抱き上げて、萎びた乳房を弄らしてゐた。

『其の子が一番福造に似てよるな。』と、源太郎は重苦しさうな物の言ひやうをして、つく〴〵と姉の膝の上の子供を見てゐた。

『性根まで似てよるとお仕舞ひや。』

笑ひながらお梶は、萎びた乳房を握つてゐる小さな手を竊と引き離して襟をかき合はした。

孫は漸く祖母の膝を離れて、氣になる風で大叔父の方を見ながら、細い眼尻の下つた平ッたい色白の顏を振り〳〵、ヨチ〳〵と濡れ緣の方に歩いた。

『男やと心配やが、女やよつて、まア安心だす。』

戰場のやうに店の忙しい中を、お文は銀場から背後を振り返つて、厭味らしく言つた。

それを耳にもかけぬ風で、お梶は弟の前の煙管を取り上げて、一服吸はうとしたが、煙管の詰まつてゐるのに顏を顰めて、

『をツさん、また詰まつてるな。素人の煙草呑みはこれやさかいな。』と、俯いて紙捻を拵へ、丁寧に煙管の掃除を始めた。

『福造から手紙が來たある。……一寸讀んで見なはれ。』と、源太郎は厚い封書を姉の前に押し

やつた。

『それ、福造の手紙かいな。……私はよッぽど今それで煙管掃除の紙捻を拵へようかと思うたんや。』

封書を一寸見やつただけで、お梶は顏を顰め顰め、毒々しい黑い脂を引き摺り出して煙管の掃除を續けた。

『まア一寸でよいさかい、其の手紙を讀んどくなはれ。それを讀まさんことにや話が出來まへん。』

『福造の手紙なら讀まんかて大概分つたるがな。……眼がわるいのに、こんな灯で字が讀めやへん。何んならをツさん、讀んで聞かしとくれ。』

煙管を下に置いて、巧みな手つきで短くなつた蠟燭のシンを切つてから、お梶はスパ〳〵と快く通るやうになつた煙管で、可味さうに煙草を吸つて、濃い煙を吐き出した。源太郎は自分よりも上手な煙草の吸ひやうを感心する風で、姉の顏を見つめてゐた。

孫はまた祖母の膝に戻つて、萎びた乳も弄らずに、罪のない顏をして、すや〳〵と眠つて了つた。

『福造の手紙を讀んで聞かすのも、何んやら工合がわるいが、……ほんなら中に書いてあることをざつと言うて見よう。』

源太郎はかう言つて、構へ込むやうな身體つきをしながら、

『まア何んや、例もの通りの無心があつてな。……今度は大負けに負けよつて、二十圓や。……それから、この店の名義を切り替へて福造の名にすること。時々浪花節や、活動寫眞や、仁和賀芝居の興行をしても、ゴテ〳〵言はんこと。これだけを承知して吳れるんなら、元の鞘へ納まつてもえゝ、自分の拵へた借錢は自分に片付けるよつて、心配せいでもよい。……長いことゴテ〳〵書いてあるが、煎じ詰めた正味はこれだけや。……あゝさう〳〵、それから鱧の皮を一圓がん送つて吳れえや。』と、手紙を披げ〳〵言つて、逆に卷いて行つたのを、ぽんと其處へ投げた。

怖い顏をして、ヂッと聽いてゐたお梶は、氣味のわるい苦笑を口元に湛へて、

『阿呆臭い、それやと全で此方からお賴み申して、戻つて貰ふやうなもんやないか。……えゝ加減にしときよるとえゝ。そんなことで此方が話に乘ると思うてよるのか知らん。』と言ひ〳〵、孫を側の座蒲團の上へ寢さし、戸棚から敷蒲團を一枚出して上にかけた。細い寢息が騷がしい店の物音にも消されずに、スウ〳〵と聞えた。

『奈良丸を千圓で三日買うて來て、千圓上つて、損得なしの元々やつたのが、福造の興行物の一番上出來やつたんやないか。……其の外の口は損ばつかり。あんなことに手を出したらどんならん。……一切合財興行物はせんこと。店の名義は戻つてから身持を見定め、自分の借錢のかたを付けてから、切り替へること。それから、何うあつても家出をせぬといふ一札を書くこと。……これだけを確かり約束せんと、今度といふ今度は家の敷居跨がせん。』

もう四五年で七十の觜を取らうとする年の割には、皺の尠い、キチンと調つた顏に力んだ筋を見せて、お梶は店の男女や客にまで聞える程の聲を出した。

銀場のお文は知らぬ顏をして帳面を繰つてゐた。

六

夜も十時を過ぎると、表の賑ひに變りはないが、店はズッと閑になつた。

『阿母アはん、今夜泊つて行きなはるとえゝな。……今から去なれへん。』

漸と自分の身體になつたと思はれるまでに、手の隙いて來たお文は、銀場を空にして母の側に立つた。

『去ねんこともないが、寢た兒を連れて電車に乘るのも敵はんよつて、久し振りや、そんなら泊つて行かう。……をツさんは、もう去ぬか。』

其の日の新聞を披げた上に坐睡をしてゐた源太郎は、驚いた風でキョロ〳〵して、

『あゝ、去にます。』と、手を伸ばして姉の前の煙草入を納ひかけたが、煙管は先刻から煙草ばかり吸ひ續けてゐる姉が持つたまゝでゐた。

『狹いよつてなア此處は、……此處へ寢ると、昔淀川の三十石に乘つたことを思ひ出すなア。……食んか舟でも來さうや。』と、お梶は煙管を弟に返し、孫の寢姿に添うて横になつた。

『をツさん、善哉でも喰べに行きまへうかいな。……久し振りや、阿母アはんに一寸銀場見て貰うて。……なア阿母アはん、よろしおまッしやろ。』

何もかも忘れて了つたやうに、氣輕な物の言ひやうをして、お文は早や身支度をし始めた。

『いといで。眼がわるなつたけど、こないだまでしてた仕事やもん、閑な時の銀場ぐらゐ、これでも勤まるがな。』と、身を起して、お梶はさツさと銀場へ坐つた。

『またもや御意の變らぬ中にや、……をツさん、さア行きまへう。』

元氣のよいお文を先きに立てて、源太郎は太い腰を曲げながら、ヨタ〳〵と店の暖簾を潛つて、賑やかな道頓堀の通りへ出た。

『牛に牽かれて善光寺參り、ちふけど、馬に牽かれて牛が出て行くやうやな。』と、お梶は眼をクシャ〳〵さして、銀場の明るい電燈の下に微笑みつゝ、二人の出て行くのを見送つた。

七

筋向うの芝居の前には、赤い幟が出て、それに大入の人數が記されてあつた。其處らには人々が眞ツ黒に集まつて、花電燈の光を浴びつつ、繪看板なぞを見てゐた。序幕から大切までを一つ一つ、俗惡な、浮世繪とも何とも付かぬものにかき現した繪看板は、芝居小屋の表つき一杯に揭げられて、竹に雀か何かの模樣を置いた、縮緬地の幅の廣い緣を取つてあるのも毒々しかつた。

お文と源太郎とは、人込みの中を拔けて、棲を取つて行く紅白粉の濃い女や、萌黄の風呂敷に箱らしい四角なものを包んだのを提げた女やに摩れ違ひながら、千日前の方へ曲つた。

『千日前ちふとこは、洋服着た人の滅多に居んとこやてな。さう聞いてみると成るほどさうや。』と、源太郎は動もすると突き當らうとする群集に、一人でも多く眼を注ぎつゝ言つた。

『兵隊は別だすかいな。皆洋服着てますがな。』

例もの輕い調子で言つて、お文はにこ〳〵と法善寺裏の細い路次へ曲つた。其處も此處も食物を並べた店の多い中を通つて、この路次へ入ると、奥の方からまた食物の匂が湧き出して來るやうであつた。

路次の中には寄席もあつた。道が漸く人一人行き違へるだけの狹さなので、寄席の木戸番の高く客を呼ぶ聲は、通行人の鼓膜を突き破りさうであつた。藝人の名を書いた庵看板の並んでゐるのをチラと見て、お文は其の奥の善哉屋の横に、祀つたやうにして看板に置いてある、大きなおかめ人形の前に立つた。

『このお多福古いもんだすな。何年經つても同し顏してよる……大かたをツさんの子供の時からおますのやろ。』

妙に感心した風の顏をして、お文はおかめ人形の前を動かなかつた。笑み滴れさうな白い顏、下げ髮にした黒い頭、青や赤の着物の色ど

り、前こゞみになつて、客を迎へてゐる姿か、お文の初めこの人形を見た幾十年の昔と少しも變つてゐないと思はれた。

子供の折、初めてこのお多福人形を見てから、今日までに、隨分さま〴〵のことがあつた。とお文はまたそんなことを考へて、これから後、この人形は何時までかうやつて笑ひ顔を續けてゐるであらうかとも思つてみた。

『死んだおばんが、子供の時からあつたと言うてたさかい、餘ッぽど古いもんやらうな。』

かう言つて源太郎も、七十一で一昨年亡つた祖母が、子供の時にこのおかめ人形を見た頃の有樣を、いろ〳〵想像して見たくなつた。其の時分、千日前は墓場であつたさうなが、この邊はもうかうした賑やかさで、多くの人たちが、店に並んだ食物の匂を嗅ぎながら歩き廻つてゐたのであらうか。其の食物は皆人の腹に入つて、其の人たちも追々に死んで行つた。さうして後から後からと新らしい人が出て來て、食物を拵へたり、並べたり、歩き廻つたりしては、また追々に死んで行く。それをこのおかめ人形は、かうやつて何時まで眺めてゐるのであらう。

こんなことを考へながら、ぼんやり立つてゐる中に、源太郎はフラ〳〵とした氣持になつて、

『今夜火事がいて、燒けて碎けて了ふやら知れん。』と、自分の耳にもハッキリ聞えるほどの獨り言をいつて、自分ながらハッと氣がついて、首を縮めながら四邊を見廻した。

『何言うてなはるのや。……火事がいく、何處が燒けますのや。……しようもない、確かりしなはらんかいな。』

お文はにこ〳〵笑つて、叔父の袂を引ッ張りつゝ言つた。

『さア早う入つて、善哉喰べようやないか。何ぐづ〳〵してるんや。』と、急に焦々した風をして、源太郎は善哉屋の暖簾を潛らうとした。

『をツさん、をツさん……そんなとこおきまへう、此方へおいなはれ。』と、お文はさッさと歩き出して、善哉屋の筋向うにある小粹な小料理屋の狹苦しい入口から、足の濡れるほど水を撒いた三和土の上に立つた。小ぢんまりした沓脱石も、一面に水に濡れて、切籠形の燈籠の淡い光がそれに映つてゐた。

『あゝ、御寮人さん、お出でやす。まアお久しおますこと、えらいお見限りだしたな。さアお上りやす。』

赤前垂の肥つた女は、食物を載せた盆を持つて、狹い廊下を通りすがりに、沓脱石の前に立つてゐるお文の姿を見出して、ペラ〳〵と言つた。

『上らうと思うて來たんやもん、上らずに去ぬ氣遣ひおまへん。』

かう言つて駒下駄を沓脱石の上に脱ぎ棄てたお文の背中を、ポンと叩いて、赤前垂の女は、

『まア御寮人さん。……』と、仰山らしく呆れた表情をしたが、後から隨いて入つて來た源太郎の大きな姿を見ると、

『お連れはんだッか。……何うぞお上り。さア此方へお出でやへえな。』と、優しく言つて、窮屈な階子段を二階へ案内した。

茶室好みと言つたやうな、細そりした華奢な普請の、階子段から廊下に、大きな身體を一杯にして、ミシ〳〵音をさせながら、頭の支へさうな低い天井を氣にして、源太郎は二階の奧の方の鍵の手に曲つたところへ、女中とお文との後から入つて行つた。

『善哉なんぞ厭だすがな。こんなとこへ來るといふと、阿母アはんが怒りはるよつて、あゝ言ひましたんや。』

向うの廣間に置いた幾つもの衝立の蔭に飲食してゐる、幾組もの客を見渡しつゝ、お文はさも快ささうに、のんびりとして言つた。

『御寮人さん、お出でやす。』
『御寮人はん、お久しおますな。』
なぞと、痩せたのや肥えたのや、四五人の赤前垂の女中が代る／＼出て來た。其の度にお文が白いのを鼻紙に包んで與るのを、源太郎は下手な煙草の吸ひやうをしながら、眼を光らして見てゐた。
　肥つた女中は、チリン／＼と小さく鈴の鳴るやうな音をさして、一つ／＼捻つた器具の載つてゐる杯盤を運んで來た。
『まア一つおあがりやへえな。』と、女中は盃洗の底に沈んでゐた杯を取り上げ、水を切つて、先づ源太郎に獻した。源太郎は酌された酒の黄色いのを、しツぽく臺の上に一寸見たなりで、無器用な煙草を止めずにゐた。
『こんな下等なことやよつて、重亭や入船のやうに行きまへんが、お口に合ひまへんやろけど、まアあがつとくなはれ。‥‥なア姐はん。』
　自分に獻された初めの一杯を、ぐツと飲み乾したお文は、かう言つてから、二度目の酌を女中にさせながら、
『姐はん、このお方はな、こんなぼくねん人みたいな風してはりますけど、重亭でも入船でも、それから富田屋でも皆知つてやはりますんやで。なか／＼隅へ置けまへんで。』と、早や醉ひの廻つたやうな聲を出した。
『ほんまに隅へ置けまへんな。粹なお方や、あんたはん一つおあがりなはツとくれやす。』と、女中は備前焼の銚子を持つて、源太郎の方へ膝推し進めた。
『奈良丸はんと一所に行かはりましたのやもん。箕子はんでも、八千代はんや、吉勇はんを、皆知つてやはりまツせ。』
かう言つてお文は、夫の福造が千團治で三日の間、奈良丸を買つて、大人を取つた時、讃岐屋の旦那々々と立てられて、茶屋酒を飲み歩いた折のことを思ひ出してゐた。さうして叔父の源太郎が監督者とも付かず、取卷とも付かずに、福造の後に隨いて茶屋遊びの味を生れて初めて知つたことの可笑しさが、今更に込みあげて來た。
『阿呆らしいこと言はずに置いとくれ。』と、源太郎も笑ひを含んで漸く杯を取り上げ、冷めた酒を半分ほど飲んだ。
　雲丹だの海鼠腸だの、お文の好きなものを少しづつ手鹽皿に取り分けたのや、其の他いろいろの氣取つた鉢肴を運んで置いて、女中は暫く座を外した。お文は手酌で三四杯續けて飲んで、源太郎の杯にも、お代りの熱い銚子から波々と注いだ。
『お前の酒飲むことは、姉貴も薄々知つてるが、店も忙しいし、福造のこともあつて、むしやくしやするやらうと思うて、默つてるんやらうが、あんまり大酒飲まん方がえゝで。』
肴ばかりむしや／＼喰べて、源太郎は物柔かに言つた。
『置いとくなはれ、をツさん。意見は飲まん時にしとくなはれな。飲んでる時に意見をしられると、お酒が味ない。‥‥をツさんかて、まツさら散財知らん人やおまへんやないか。今度堀江へ附き合ひなはれ。此處らでは顏がさしますよつてな、堀江で綺麗なんを呼びまへう。』
かう言つて、お文は少しも肴に手を付けずに、また四五杯飲んだが、果てはコップを取り寄せて、それに注がせて呷つた。
もう何も言はずに、源太郎はお文の取り寄せて呉れた生魚の鮓を喰べてゐた。

八

お文と源太郎とが、其の小料理屋を出た時は、夜半を餘程過ぎてゐた。寄席は疾くに閉場て、狹い路次も晝間からの疲勞を息めてゐるやうに、ひつそりしてゐた。

――私が、六歳ぐらゐの時やつたなア、死んだおばいんの先きに立つて、あのお多福人形の前まで走つて來ると、堅いものにガチンとどたま（頭の）打付けて、痛いの痛うなかつたのて。……武士の刀の柄の先きへどたま打付けたんやもん。武士が怒りよれへんかと思うて、痛いより怖かつたのなんのて。……其の武士が笑うてよつた顏が今でも眼に見えるやうや。……丁ど刀の柄の先きへ頭が行くんやもん、それからも一遍打付けたことがあつた。』

思ひ出した昔懷かしい話に、醉つたお文を笑はして、源太郎は人通りの疎らになつた千日前を道頓堀へ、先きに立つて步いた。

『をツさんも古いもんやな。芝居の舞臺で見るのと違うて、二本差したほんまの武士を見てやはるんやもんなア。』と、お文は笑ひ〳〵言つて、格別醉つた風もなく、叔父の後からくツ付いて步いた。

『これから家へ行くと、お酒の臭氣がして阿母アはんに知れますよつて、私もうちいゝと步いて行きますわ。をツさん別れまへう。』

かう言つて辻を西へ曲つて行くお文を、源太郎は追ツかけるやうにして、一所に戎橋からクルリと宗右衛門町へ廻つた。

富田屋にも、伊丹幸にも、大和屋にも、眠つたやうな灯が點いて、陽氣な町も濕つてゐた。たまに出逢ふのは、送られて行く化粧の女で、それも狐か何かの如くに思はれた。

『私、一寸東京へいてこうかと思ひますねや。……今夜やおまへんで。……夜行でいて、また翌る日の夜行で戻つたら、阿母アはんに內證にしとかれますやろ。……さうやつて何とか話付けて來たいと思ひますのや。……あの人をあれなりにしといても、仕樣がおまへんよつてな。私も身體が續きまへんわ、一人で大勢使うてあの商賣をして行くのは。……中一日だすよつて、其の間をツさんが銀場をしとくなはれな。』

醉はもう全く醒めた風で、お文は染々とこんなことを言ひ出した。

『今、お前が福造に會ふのは考へもんやないかなア。』と、源太郎も思案に餘つた。

九

日本橋の詰で、叔父を終夜運轉の電車に乘せて、子供の多い上町の家へ歸してから、お文は道頓堀でまだ起きてゐた蒲鉾屋に寄つて、鱧の皮を一圓買ひ、眠さうにしてゐる丁稚に小包郵便の荷作をさして、それを提げると、急ぎ足に家へ歸つた。

三疊では母のお梶がまだ寢付かずにゐるらしいので、鱧の皮の小包を窃と銀場の下へ押し込んで、下の便所へ行つて、電燈の栓を捻ると、パツとした光の下に、男女二人の雇人の立つてゐる影を見出した。

また留吉にお鶴やないか。……今から出ていとくれ。この月の給金を上げるよつて。……お前らのやうなもんがゐると、家中の示しが付かん。』

寢てゐる雇人等が皆眼を覺ますほどの聲を立てて、お文は癇癪の筋をピク〳〵と額に動かした。

『何んやいな、今時分に大けな聲して。……兎も角明日のことにしたらえゝ。』と、お梶が寢衣姿で寒さうに出て來たのを機會に、二人の雇人は、別れ〳〵に各の寢床へ逃げ込んで行つた。

まだブツ〳〵言ひながら、表の戸締をして、鍵を例ものやうに懷中深く捻ぢ込んだお文は、今しがた銀場の下へ入れた鱧の皮の小包を一寸撫でて見て、それから自分も寢支度にかゝつた。

妾垣

——『鱧の皮』後編——

一

名所舊蹟を見て廻ることの好きであつた母親に、だん／＼自分も育て來るのか、此頃は町を歩きさがして、昔の思出に耽ることが多くなつたと、光淳は染々考へる日があつた。

亡き母親の名所舊蹟癖は、それに何か古い時代の公卿か武將か勇士か、さもなければ、名高かつた遊女か俳諧師かの故事が附いてゐなければならぬのを條件としてゐた。變な棄て石にも、菅家の腰掛け岩なんぞといふ札が立つて、注連繩でも張り廻してあれば、母親は何かなしに氣に入つて、其の前に立ちつくした。老いてはゐるが、まだ漸く二三百年ほどにしかならぬと思はるゝ松の樹にも、八幡太郎義家鎧懸けの松とでもいふ名がついてゐると、其の葉を毟つて來て、紙に包んだのを大事に手文庫へ納つてゐた。地獄太夫が生れたのはこの邊だといふ、場末の汚い町にある氣味のわるい床屋へ、わざわざ襟元を剃つて貰ひに行つたり、芭蕉が赤痢に罹つて死んだ花屋裏といふのは、此處の路次だといふ佛師の店頭に立つて、番頭に怪まれたりしたのも、今は亡き母の逸話として殘つてゐる。

光淳は、そんな、古い人間に絡み合つた名所舊蹟には信用を置いてゐないし、興味も有つてゐないのであるが、子供の折からの自分に、少しでも係り合ひや緣故のある土地や家屋には、他人の話しても眞事としないほどの強い憧憬を抱いてゐる。

世間では誰れも知らぬ自分一人の名所舊蹟が、自分には一番懷しい。これは屹と母親の遺傳に違ひない。

朝起きて手水を使つた時、母親は手拭で顏を拭いて、額から顋までツルリと撫でた後で、一寸口を歪めるのが癖であつた。それを自分が此頃よく行るやうになつた。考へてみると、其の時の口の歪めかたが、如何にも母親そつくりなので、手拭を持つたまゝ一種の恐怖に打たれることさへある。

こんなことを考へながら、光淳は、用事もないのに家を出た。身體の持つて行き場に困つて、兵營の長い煉瓦塀に添うた寂しい通りを、だら／＼と谷町の方へ下りた。

この道をこれでもう何遍通るやらう、と光淳は不圖考へた。空が曇つてゐて、夏の太陽もさう劇しくは照り付けないけれど、若い時から帽子を被ることが嫌ひなので、夏の外出には必ず蝙蝠傘を翳さなければならなかつた。黑い毛繻子の蝙蝠傘も、これで四度目の夏に逢ふのである。

夏になると、毎も昔の祭禮の賑かさを思ひ出す。花車を曳いてこの敷石の坂を上つたこともある。吳絽に金紗で鯉の繪を繡りした襦袢なぞを、得意になつて着込んで、花車の綱を持つてゐたのは、もう幾十年の昔であらう。吳絽と言へば、今は風呂屋へ持つて行く垢摺りにしか、其の殘骸を見ることはないが、其の頃は縮緬なんぞよりズッと／＼珍重されたもので、吳絽の帶を締めてゐると言へば、今時白金の鎖を絡ましてゐるよりも、見せびらかしの利いたものである。それを襦袢に仕立てて、おまけに金紗で

縫りをしたのであるから、誰れが見ても仰天したに違ひない。

亡き父は、若い時江戸へ奉公に出てゐたので、江戸の夏祭の華美な風を見て來て、それをよく自慢げに話した。……江戸では嬶や女房を賣つてまで、祭禮の支度の立派さを競ふのだから面白い。祭禮の終つた後へ賣家を探しに行けば、必ず安い家作が見附かるから、家の買ひたい人は、祭禮の濟むのを待ちかねてゐる。これに比べると、大阪の祭禮はしみつたれぢや、花車を曳くにも木綿ものか何かで、犢鼻褌だつて、紅木綿か黄木綿ぐらゐを締めてゐる。江戸の若い衆見い、緋鹿の子縮緬の犢鼻褌を長くたつぷりと締め、餘つたのを腹へぐる〳〵卷いて、花車を曳いたり、御輿を擔いだり、暑さに苦しむと、其の見事な犢鼻褌のまゝで、橋の上から川の中へ飛び込んだものである。

―大阪の若い衆はあかんわい。』と、父は長々しく江戸の祭禮の話をした末に言つて、今度の夏祭には、呉絽の襦袢を光淳に拵へてやると力んだ。

丁度、光淳が十七になつた夏であつた。豐玉稻荷の砂持ちで、近所の娘たちが、派手な單衣の片肌を脫いで、緋縮緬の襦袢の燃え立つやうな袖を露はし、右の手に持つた團扇で左の掌を叩きつゝ、

「えらいやつちや、えらいやつちや。……」と、蕾のやうな唇に、紅の色のちよんぼりと靑く光るのを、金絲雀の嘴の如くに開けて、口々に呼ばはつて行く長い列の、幾組も續くのを見る時、源太郎は其の呉絽の襦袢に金絲で龍を繡りしたのを着て、緋鹿の子縮緬の犢鼻褌を眞白な脛の膝の上まで卷き附け、父の考へ通りの身形をして、跣足の眞ん中を荒繩で一つ結び、花車を曳きに町へと躍り出した。

父が團扇を使ひ〳〵、門口まで送つて出た其の折のホグ〳〵した顏は、三十五六年も後の今まで、まだあり〳〵と眼の底に殘つてゐる。

―江戸では身體に文身がしてないと、幅が利かんのや。」と言つて、父が光淳の搗き立ての餅のやうな、柔かい滑々した肌に刺靑をしようとしたことがあつた。

『祭禮になると、江戸では十歲から十二三ぐらゐの子供でも入れ墨するよつてなア。……痛いちうて厭がるのを、親が捉へて、梯子へ俯つ伏さに括り付け、刺靑師を呼んで來て、餘り手間のかゝらん入れ墨をしたもんや。』と、父は異郷の懷しげな色を、大きな鼻のまはりに浮べて、自慢さうに言つた。

けれども、光淳は漸くこの刺靑だけは免れて、この年になつても、灸點一つない美しい肌の誇りを持つてゐる。近頃は皮がだいぶ弛んで來たけれど、白蠟のやうだと言はうか、象牙の如しと譬へようか、白い色艶は風呂屋へ行つても、自分ながら目に立つほどである。

呉絽の襦袢は、後になつて垢摺りにばかり使はれるほどだから、しやご〳〵して、着心地の悪いこと、こんなものを長く着てゐると、皮膚が擦り剝けやしないかと思はれた。

それでも、オランダ人に騙されて、呉絽をば蜀紅の錦よりも貴いと思つてゐた其の頃だから、光淳の襦袢に、祭禮に醉ひ、砂持ちに狂つてゐる人々に、驚異の眼を瞠らせた。側へ寄つて來て、金絲の縫りを撫でたり、硬張つた袖口を引つ張つたりするものもあつた。其の中には[illegible]の形を稍崩して、抜けるやうに白い、肌理の細かな顏へ、後れ毛を振りかゝらした隣家のお孃さんの、眞赤な襦袢を半分見せた片肌脫ぎの砂持ち姿もあた。

呉絽の襦袢と、緋鹿の子の犢鼻褌とに、若々しい肉は、これまでにまだ一度も知らなかつた刺戟を受けたものか、光淳はこの時から、身體の

何處かに變な感じを覺えるやうになつた。さうして砂持ちに行く娘たちを見る眼にも、異樣の光を包むことになつた。隣家のお靜さんには、殊に妙な目附が向けられた。——

昔の夢を辿り〳〵、光淳の肥えた大きな足は、谷町を北へ〳〵と行つた。電車に轟と響を立てて、幾臺か駛せ過ぎたが、乘らうとする氣は起らなかつた。

何時の間にか辻を西へ曲つて、眞つ直ぐに御堂筋へまで出て了ひ、それをまた南へ〳〵と步いてゐた。何の橋を渡つて、東橫堀を越えたかも知らなかつた。

芭蕉終焉の舊蹟はこのあたりであらう。母のよく言つた花屋裏といふのは、何處かいな。と、光淳は思つた。

二

光淳の足は、何時しか南の御堂の石段を上つて、唐門から廣場へ入ると、茶所の前には五六羽の鳩が丸い顏をして餌を拾つてゐた。お茶所の汚い疊には、三人ばかりの老人が腰をかけて、呑氣さうに、眞鍮の煙管で煙草を吸つてゐた。

曾て、光淳が天主敎へ入つて、ドミニコといふ魂名を命けて貰ひ、コンタスや十字架を貰つた時、此處のこの堂に、御堂といふ尊稱を附けて御堂と呼ぶのが忌々しかつたけれど、それはもう土地の名になりおほせてゐて、警察向きの看板にも、御堂筋巡査派出所なぞとしてあるのを、自分だけが、單に『堂』と呼んでみても通用しないので、其の忌々しさを神父に話すと、普通の時は一分間でも强い煙草とマドロスパイプとを離さないで、國府や水戶の名葉に柔かい煙の味を嗜んでゐるものが一口吸つてもグラグラと眼の廻りさうなのをハク〳〵やつて、紫の毒々しさうな煙を、愛嬌鬚が渦を卷いてゐる口元に棚引かしつゝ、老神父は、

『そんなこと構ひません、尊稱が其のまゝ地名になつて、尊稱の意味を失つてること、故國の方にもよくあります。氣にかけるに及びません。』と笑つた。

それでも光淳は、『一寸御堂筋までいて來ます。』なぞといふのが、何んとなく强腹で、出來るだけは御堂といふ地名を使はないやうにと心してゐたのを思ひ出した。

今はもう、そんなことは何うでもよいので、巧みに自家の尊稱を地名にまで使ふやうに持ちかけた、佛敎の傳道方法の狡猾なのに感心してゐるだけである。それに比べると、耶蘇敎には、日本人でありながら、態々西洋人の不得手な日本語を眞似て、言ひにくさうに物を言つたりする牧師も珍らしくなかつた。今はもうそんな剽輕者がないにしても、厭に熱心ぶるだけで、毫も方便の缺けてゐる彼等に、碌なことの出來るわけがない。しかし、自分が何うしても佛門に入り得ないのは、其の方便が厭なからである。印度の山の中から出て來た敎へは、いろ〳〵の小細工を加へても、煎じ詰めると、山の中の物である。大乘も小乘も落ち着く先きは、無の外道である。山を下りて、こんな町の中へ寺を建ててみても、一向念佛の響の末には、幽遠と玄妙との音波が揺がつてゐる。天台、眞言、矢ッ張り其處へ流れ込んで、山の奥に隱遁する。自分はそれが嫌ひだ。愚禿の愚は方便の愚だ。自分はそれも嫌ひだ。

說敎が終つたと見えて、老いたものの多い人の群れは、天台に象つたといふ大きな大師堂の、切り貼りの多い障子の奥から、流れて出て來た。あの立派な建物の障子に、あの切り貼りは何うしたことかと、自分はよく氣になるのだ。西本願寺が王者に取り入つてか、阿諛してか、本堂の家根を紫宸殿に象ると、東本願寺では口惜

しいけれども、眞似は出來ないので、家根を天台に象つたとか。其の國に入れば直ぐに其の權力階級に取り入るのが、彼等の奧の手だ。腐敗は其處に始まつて、墮落は彼等の本領であらねばならぬ。革新し、向上すれば、一向念佛を止めて、故鄕の山に還らなければならないであらう。

光淳は、取り止めもない知識から、取り止めもない思索を割り出して、大きな身體の太い腰を茶所の床几に下ろしつゝ、大きな顏の太い眉毛をビリ〳〵動かしてゐた。

大きな堂から出て來た、說敎の聽衆は案外に少なかつた。鳩と子供との遊び場になつてゐる砂地の柔かい廣場を、ぞろ〳〵と、杖なんぞ突いて步いてゐる人の數は三十を多く超えなかつた。

この茶所には、何うしたものか蠅が多い。番人の老婆は、棕櫚の葉を細かく編んで、枝を其のまゝ柄にしたやつで、頻りに蠅を叩き殺してゐる。

「今年は蠅が多て、仕樣がおまへん。……あんたはん、御免やすや。」と、光淳の側まで、堅い土間に利休の齒を、頭の中へ痺れ込ませるやうな音さして近寄りつゝ、光淳の丸い背中の、まだ紺の香の高い袱白にとまつた蠅までを、ピシャリとやつ付けた。

「何んでこんなとこに、こない蠅がゐますのんやなア。」と、光淳も持つてゐた扇子で、膝の上の蠅を叩かうとして仕損じ、蠅が巧みに翼を翻へしつゝ逃げ去るのを見てゐた。

「詣らはる人が持つて來やはりまんね。……難波や長町の汚いとこからも來やけりますよつてなア、何んぼ殺したかて、先繰り〳〵肩や背中へ蠅を附けて來やはりまんのや。……附けて來やはつても、去ぬ時また持つていて吳れはるとよろしおますけど、さうはいきまへんよつて、此處がいゝツち迷惑だす、北の蠅も南の蠅も、附いて來た人にはぐれたのが、皆んな此處へ寄つて來ますんやもん。コレラの流行る時なぞ、そら厭だッせ。」と、老婆はだん〳〵馴々しく、言葉も粗末にして來た。

「河鹿飼うてる家やと、蠅が一匹來ても喜んで、大騷動して捕りやはるがなア。」と、光淳は老婆の手から棕櫚の枝を借りて、二三匹叩き殺した。

「そんな家にはまた、蠅が居まへんのやなア、ようしたもんや。」と老婆はさも感心した風で言つた。

其の棕櫚の枝は、もう餘程古びて、麻絲で編んだ葉がほぐれかゝつてゐた。赭ちやけた葉裏には、それに打たれて生命を落した蠅の肝膽が塗れ込んで、この小ひさな蟲の恨みが、幾百千匹の分も染み附いてゐるやうな氣がした。佛の前、法の庭で死んだら、蠅蟲もまた佛果を得るなぞと、僧等が說くであらうと思ふと、光淳は可笑しくてたまらなかつた。

雌雄と見ゆる二匹の蠅が、相繫がつて古疊の上で、ぶん〳〵やつてゐるのを見た老婆は、難かしい顏をして、

『おのれまア。』と叫ぶとともに、「一寸お貸しやす。」と、光淳の手から棕櫚の枝を引ツたくり、力を込めてピシャンと打つと、哀れや一匹の蠅は無殘にも身體を潰され、他の一匹は翼を曲げて、重傷に苦しみつゝ、打ち潰されて死んだ蠅に繫がつたなりで、ビク〳〵と足を動かしてゐた。

「あんじやう殺しよかんと、蘇生りよるよつてなア。」と、老婆はまたもや棕櫚の枝を振り上げて、一擊を下さうとするのを、光淳は押し止める手振りをして、

「まア待ちなはれ。」と言ひ〳〵、ビク〳〵動く重傷の蠅の姿に見入つた。

『あんた、えらい思ひやりがよろしおまんな。』と、老婆はニヤリ厭な笑ひかたをした。

『可哀さうやおまへんか。』と、光淳は更らに、潰れた死骸になつた蠅と、其の刹那の動物的情人とも覺ゆる半死の蠅とに見入つて、四十を過ぎるまでは嚴に童貞を守つてゐた自身の上を顧みた。さうして、五十近くで妻を拵へると、芋の子のやうにごろ〳〵と小ひさいものの生れたのを思ひ、坐に、『何んぢや阿呆らしい。』といふ氣持ちになつた。

『もうよろしおまッしやろ。』と、老婆は棕櫚の枝を取り直し、傷ついた蠅がだん〳〵元氣を取り戻して、細い腸のやうなものを引き摺りつつ、潰されて死んだ友の身體から離れ、今にも飛び立ちさうにして歩き出したのに、ピシャンとまた一撃を吳れると、狙ひが外れて、手首の蠅から五分ほど距つたところを、強かに打つた。すると、たゞさへ弱つてゐた蠅は、この霹靂のやうな、すさまじい物音に失神して、仰向けにひツくり返つたまゝ、少しも動かなくなつた。

光淳は、生物の命といふことに就いて考へ始めた。

人間に靈魂があるならば、蠅にだつてそれがなければならぬ。この通り叩き潰された蠅の靈魂は行方は何處に何うなるのであらうか。……蠅の夫婦がこの通り、一方は死んで一方は氣絶してゐる。どッちが男で、どッちが女か見分けは付かぬが、何んだか氣絶してゐる方が小春で、叩き潰された方が治兵衞のやうに思はれる。治兵衞はもうあの世へ行つて、小春の來るのを待つてるかも知れぬ。

あゝ、小春がまたピク〳〵動き出した。小春の魂は先刻から何處に何うしてゐたのであらう。……と、光淳は痛ましさうな顏になつた。

『おのれ、まだ死にくさらんか。』と、老婆は憎々しげに言つて、棕櫚の枝を取り直すと、今度は十分に狙ひを定めて、ピシャンとやつたので、哀れや小春の身體は、頭も胴も分らぬやうに、ひしやげて、多くの同類の血や肉がコビリ附いてゐる棕櫚の葉裏へ、新らしい血と肉と翼とをクッ附けた。

さても急がしい小春の靈魂の往來であつたが、かうなつてはもう永久に靈は肉に離れたと思つて、光淳は老婆の手にある棕櫚の葉を見てゐた。老婆はまたピシャッ〳〵と續けて二三匹の蠅を叩き潰し、うツとりした眼で、阿彌陀堂の家根にとまつてゐる白鳩を睨め込んだ。

光淳は何んだか、この老婆が安達ヶ原の鬼婆みたいに思はれて來たので、つと立つて、物も言はずに茶所を出た。

さうして唐門を出る頃には、もう蠅のことを忘れて、源太郎といふ自分の古い名をば、光淳と哲名術の先生に變へて貰つたことに就いて考へ始めた。

三

老い朽ちて、もうこの世に望みのない自分ながら、後の幸福を希ふ心はある。

『源太郎といふ名は薄命な名ぢや。盥に乘つて大海に浮び出たといふ形になつてゐよるわい。苗字次第で、こいつが逆に行きよるんぢやが、福島といふ、あんたの苗字に、源太郎は、だいたいごく惡い名ぢや。』と、赭ら顏の先生の言つたことは、其の前に白い腮鬚の長い淘宮術の先生から聽いた自分の運勢にもよく合つてゐるし、今はもう宗教なんぞよりも、こんな淘宮術や哲名術に信ずる價値の多いことを考へてゐる自分は、直ぐ先生に賴むと、先生は、『照久』と改名しなはれと言つたが、一ケ月ほどしてから、更に『光淳』といふ名を命けて吳れたのである。

「もう十五年早いとなア、光淳といふ名で、あんたの運勢を天へ昇らしたんやが、年齢がいてからの改名は、利きがわるいわい。」と、赧ら額の先生はまた言つた。

それでも自分は嬉しかつた。第一光淳といふ名が、下へ法主とでもいふ字を附けて呼ぶにふさはしいのも氣に入つた。自分の家は代々門徒宗で、「門徒物知らず」と、たゞ念佛ばかりに打ち込んでゐるやうに教へられたのであるが、自分はそれが嫌ひで、父母の亡つた後は、寺なぞ構ひ付けないけれど、法主といふ貴族に對しては、尊敬の變形ともいふべき羨望を有つてゐる。さうして光淳といふ代々の法主の名にありさうな名を、偶然に哲名術の先生から選ばれた時は、嬉しくて仕樣がなかつた。自分が長いこと童貞でゐたのに、愚禿親鸞はじめ、僧形で妻帯する。それが羨ましいやうな、氣に喰はんやうな憤慨を起させる。光淳といふ名は、何んとなしに、さういふことに對しても、蟲が治まつた。

天主教の神父に會つた時は、生涯獨身で、女を知らずに死ぬ人といふことが、何よりも清らかで、尊く思はれた。牛の腦の羹なんぞを喰べて、舌鼓りしながら、女を近付けるといふことなしに、烈しい酒や強い煙草に、五體の刺戟を紛らしてゐる其の人が、何故か尊く見えて仕樣がなかつた。それは確かに枯木のやうに老い果てて、性慾はなくなり、食慾も乏しくなつた佛教の僧等の、自然の成行から來る清らかな身體よりも、ずつと〳〵尊いと思つたことがあつた。童貞さんのいたいけな尼姿を見たこともあつたが、それは餘りに可哀さうであつた。

考へるに事を缺いて、光淳は不圖、神父や童貞さんと、先刻南の御堂の茶所で老婆に打ち殺された雌雄の蠅のこととを比べて考へてゐた。一生人間の性交を知らずに長く活きてゐるものと、あゝいふ時、棕櫚の葉裏で叩き殺されて、自然に心中をした蠅どもと、どツちが幸福であらうか。……あの蠅は、今度こそ人間に生れて、小春と治兵衛とのやうなことをするかも知れぬ。

考へ〳〵て、光淳はまた芭蕉終焉の花屋裏はこの邊かと思はるゝところを眞ツ直ぐに、堺筋まで出て、其處の辻を南へ〳〵と、電車に追ひ越されながら、老いても達者な足を運んだ。

鐵道馬車といふものの時代を過ぐることなしに、電車の時代に入つた。この一足飛びの粗末な進歩といふものが、日本の到る處に見られる。

と老神父は、この間も言つたが、……と、光淳はそれを考へ出したりした。

四

この年齢になつても、ぶら〳〵と外を歩くことより外に餘り樂しみのない光淳は、正午を過ぎても空腹を感ずることはなく、灰色の雲が自然の日除けになつて、蝙蝠傘は杖にのみ用ゐらるゝ仕合はせを喜びつゝ、時々バラ〳〵と小ひさな如露から撒かるゝほどの驟雨を、ほてつた額に受ける冷やかさ、涼しさに心持ちをよくしながら、島の内を過ぎて、日本橋の北詰に差しかゝつた。

「あゝ此處やなア。」と、其の時直ぐさう思つた。太い電信柱が一本、ぬうツと邪魔ツ氣に立つてゐるところから、足數にして間口五六歩、奥行二十歩ぐらゐの地面が、光淳の産湯を浸み込ました土でもあれば、つい二三年前まで住み續けて來た舊蹟でもある。

夥しい牛の糞のしてあるあたりから、北へかけて一間のところに、幾十年のあひだ拭き込まれて、ピカ〳〵光つてゐた杉の細丸太の姿垣があつた。それへ向うむきに凭れかゝつて、狹い漆喰場に唾液を吐いたり、内の千本格子を透

かして、母親の合はせ鏡をしてゐるのと顏見合はせて笑つたりしたのは、もう何年の昔になるであらうか。其の時分の鏡は、今のやうな硝子でなく、青銅製の圓形に、裏へは銀で火の玉なぞを浮かし、『天下一藤原忠廣』なぞといふ銘があつた。さうして其の中蓋には桐の板へ金粉を散らして、牡丹の花の鮮かに眼の覺めるやうな押繪がしてあつた。

一人前の大人は身體を斜めにしなければならぬほどに狹い格子戸が、細長く其の袤垣の脇に附いてゐた。それを入ると、丁度あの新らしく水道の消火栓の出來たあたりから東へかけて、一間の長竈が續いて、大小いろ〳〵の鍋釜のかゝるやうにした五つの黒い穴があつた。狹い格子戸を入ると、直ぐ上り口の沓脱石が横向きにあつて、其の先きに、冬は黒木綿の、夏は黄びらの、のれんが懸り、それから其の長竈と、次ぎの間の上りかまちとの間の細長い土間(一口に庭と言つた)を、走り元から、裏口へ出るやうになつてゐた。

竈は土間へ立ちながら焚くので、母は黒の引ツ張りを着て、髮の結ひ立てを、髷の脂で襟の汚れぬやうに、白い布片をば脊筋の上にだらりと下げつゝ、祭禮の御馳走なんぞを拵へて吳れた。

吳絽の襦袢を着て、緋鹿の子縮緬の犢鼻褌を締めて出たのも此處の家からであつた。二三年前、電車の通ふやうになる爲めの市區改正で、家を毀されるまでは、この牛の糞のところあたりにあつた六疊の座敷へ、此方を頭にかう寢たのである。

お靜さんの家は、直き隣家で、矢ツ張り狹い格子戸と、拭き込んだ杉の細丸太の袤垣とが、同じやうにあつた。丁度今あの白雲頭の丁稚が「西洋洗濯」と書いた箱車を曳いて行きよる、あの邊がお靜さんの家の座敷で、彼處の床の間へ、三月の節句にはお雛さんや市まを飾つて、其の前で、自分とお靜さんとが、夫婦ごとをしながら、廣島海苔の酢もじや、分葱の酢和や、慈姑の煮締やを喰べたこともある。「これ支那人の頭みたいや。」と、お靜さんは、せッせと料理を調へてゐる母の側から、生の慈姑を一つ摘んで來て、袤垣の前で自分に言つたことがある。

十五の夏、お靜さんが、何か一用で自分の家へ來た時、丁度祭禮の濟んだ後で、母はあの吳絽の襦袢を取り出して見てゐたが、腋のところに少し綻びがあつたので、それをお靜さんの前へ突き出して、

『お靜さん、此處一寸縫うといてやつとう、かい、わたへ眼がわるいよつて、若役におたの申します。……綻び縫ふのが縁結び、ちふ唄の文句がおますやないか。』と、戯れながら頼むと、お靜さんは忽ち一面に紅を刷いた如く、肌理の細かい色白の顏から小ひさな耳朶までを眞ツ赤に染めて、それでも、嬉しさうに、洗された襦袢と針とを持つて、透き通るほど白くて、少し青味がかつたやうに見える細長い指の先きで、可愛らしく針と絲とを運んだ。

小學校を卒業してから、裁縫と生花との稽古に通つてゐたお靜さんの後姿に、中學校の歸りの光淳はよく追ひ附くことがあつたけれど、其のまゝ追ひ拔いて、一寸振り返ると、お靜さんはニッと笑つて、直ぐ俯向いて了ふのが常であつた。

河内の大百姓の娘と、島の内の大問屋の息子との縁談が調うて、三十荷の簞笥長持が擔で、相生橋の北詰へ着いた時、近所の人は皆下駄を鳴らして見に走つたが、丁度秋の夕間暮で、羽織袴嚴しい宰領の人の手には、四つ目の紋の附いた馬乘提灯が、ゆら〳〵と光つてゐた。

『もッと早う出て來やはると好かつたのにな

ア、日が暮れてから荷が着くなんて、あんまりぞッとせんわい。』なぞと、河岸に人垣を作つた中から私語かれた。其の背後の方に立つて伸べ首をしながら、光淳はお靜さんと並びつゝ、紺の法被にだんだら襷を締めて薄い笠を被つてゐる人足の往來するのや、油單のかゝつた簞笥長持の擔がれて行くのやを見てゐたが、三十荷は角の宿屋へ運び込まれて、人足は皆草鞋を脱いで息んだ。人込みに混れて、光淳とお靜さんとは、何時か手を握り合つてゐたが、誰れかが横の方から變な恥かしいことを叫んだので、ハッとして繫いでゐた手を互ひに振り離した。この時のお靜さんの手の柔かい溫か味は、何うあつても忘れることが出來ぬ。

　十五のお靜さんと、十七の自分と、この時先刻の蠅のやうに、叩き殺されてゐたら、今頃はあの世で二人が蓮の臺に半分づつ坐つて、樂しくしてゐたかも知れぬと、光淳は後になつて、不圖考へることもある。

　其の夜から、お靜さんの姿は見えなくなつた。繫いでゐた手を振り離した途端に、二人は人込みの中にはぐれて了つたのである。嫁入りの三十荷が行列立てて、宿屋から繰り出して行つたのを見てから、光淳に道頓堀を一廻りして、小濱治兵衞の芝居の看板を大西まで見に行き、戎橋から宗右衞門町の家の路次口へ戾つて、打ち水をした漆喰の上を、片側の羽目板の高塀に添うて、右側に二軒よりない路次の家の手前の方が自分の家で、丁度表口の前まで來て、奧の井戶で足を洗はうかと考へてゐるところへ、お靜さんに能う肖たお靜さんの母親が出て來て、

『お靜はまだ戾つて來えしませんかな、あんたと一所に居たんやおまへんか。』と、何やら落ち着かぬ風で訊いた。

『いゝえ。』とだけ手短に答へて、光淳は心持ち顏を赧くしながら、井戶端へ行つたが、家へ歸つて顏色を窺つてゐると、お靜さんの母親は、幾度も〳〵路次を出たり入つたりしてゐるらしく、可なり夜が更けてゐるのに、まだお靜さんの歸つて來た樣子はなかつた。

　十二時を過ぎると、騷ぎはお靜さんの母親一人の上に止まらなかつた。二軒の家の兩親が四人になつて周章て出し、手分けして界隈をズッと探し廻つたけれど、お靜さんのスラリとした色白の、年よりはませた姿を、何處にも見出すことは出來なかつた。

『十五だすけど、他人さんが御覽じたら、十七ぐらゐにお見やすやら知れまへん。……』なぞと母親は南警察署へ保護願に出て、涙聲でおろおろしながら、當直の巡査に訴へた。

『頭髮は新蝶々に結うてました。今朝わたへが結うてやりましたのだす。……着物は荒い縞の雙子織で、帶は緋縮緬と黑繻子の晝夜だす。……嫁入りの荷い見るいうて、常の着物の上へ帶だけ結び更へて行きましたんや。……』と、母親の涙聲は、眠むさうな顏をしてゐる黑服の巡査の前に、何時までも續いた。

『はアん。』と、巡査は欠伸混りに返辭して、無茶苦茶みたいな字で、手帖の上へ鉛筆を走らしてゐたが、

『人相は、……』と、五分刈りの頭を上げて訊いた。

『面長の方で、色が白うて鼻も高うおます。眼がハッチリしてまして、……親に似たのだすか、痩せ形で、身長はわたへよりちいと高うおます。』

『ふうん、なか〳〵別嬪ぢやな。……何か目印しになるやうな特徵はなかつたかな。』

『口元に黑子が一つござりました。藥液で拔く、拔くいうて、まだ拔きまへんのでした。』

『何か其の、……情夫でもあつたといふ形跡はなかつたですか。』と、巡査は稍氣乘りのして來

たらしい口振りで、眠いことも忘れたやうであつた。

『いゝえ、滅相な、……そんなことはござりまへん、なアあんた。』と、母親は力の籠つた聲で言つて附添うて行つた光淳の顏を顧みた。

『其處に居るのは當人の兄さんかな。』と、巡査は手帖を閉ぢて、また欠伸を一つしてから、此方を向いて言つた。

『いゝえ、隣家の坊ンちでござります。』と、母親はまた光淳の顏を見い〳〵言つた。

『はアん、……』と、巡査は胡散臭さうな眼を振り向けたが、嗄れたやうな咳を一つすると、

『何分まだ昨夕の今ぢやから、何んとも手がかりが付かん。……或は友達の家で遊んで泊つたかも知れんし、事に依つたら、今頃はもう自宅へ歸つてるかも知れん。當署でも出來るだけの手は盡すから、……』と唄でもうたふやうに言つた巡査の聲を、賴もしく聽いて、母親と光淳とが警察の門を出る時、巡査の頭の眞上の古びた八角時計が四時を打つた。

夜が明けはなれても、お靜さんの姿を路次内に見ることは出來なかつた。若しやと思ふ空賴みは皆外れて、三人ほど車屋から賴んで、心當りへ尋ねにやつた車夫等は、皆氣の毒さうな顏をして、手ぶらで戻つて來た。この上はもう探しやうもなくて、一日二日と經つて行つたが、新聞の變死人の記事は眼を皿のやうにして讀んだ。第一の賴みの警察へは日參したが、行く度に相手の巡査が代つてゐて、同じことを初めから繰り返し〳〵した。あの夜當直してゐた巡査に四日目で巡り合うた時、母親は懷しさうに物を言ひかけたが、巡査の方ではもう母親の顏を忘れてゐた。

千日前の八卦見には直ぐ翌る日見て貰つたが、西の方で無事に生きてるとだけで、賴りない次第であつた。天滿の方で、玄關へ定紋附きの幕を張つてゐる評判の八卦見にかゝると、其の先生も矢張り、西の方の遠いところへ行く途中で、今は船に乘つて泣いてゐる、何んぼ血眼になつて探してもあかん、時節を待てばまた會へる、と嚙んで含めるやうに言ひ聽かして吳れた。流石に高い見料を取る先生だけあつて、何うやら當になりさうぢやが、時節を待てとあるからには、いづれ永いことであらう。娘姿のお靜にはもう何しても會へないのか、生憎とこの二三年寫眞もうつさせて置かなかつたと、母親は家の敷居を跨ぐなり、上り口へ泣き崩れた。

『何んの、當るも八卦、當らぬも八卦や、さういうてる中にヒョッコリ戻つて來よるやら知れへん。……泣くことがあるもんか。』と、岩乘な身體つきをした父親も、口でばかり強いことを言つて、眼には涙をいつぱい溜めてゐた。兵隊に行つてゐた兄さんも、其の爲めに休暇を貰つて歸つたりして、隣家はざわ〳〵と混雜が三四日續いた。光淳の家でも母親が始終貰ひ泣きをして、つい先頃お靜さんが綻びを縫つてくれた吳絽の襦袢を取り出し、腋のところの縫口を檢めては、あの細い綺麗な指で此處んとこへ針を通してゐたのに、と母親は涙に咽せ返つた。

要垣の脇を、風呂敷包抱へて裁縫屋へ通ふ赤い姿の見えぬのが、光淳には何よりも寂しくて、朝の中學校行きにも張り合ひがなかつた。學校の歸りに、能う似た赤い帶の後姿を見付けて、追ひ附からうとしながら、ハッと氣がついて、ホロリとなることも度々であつた。

路次の中に同じ要垣を並べた、二軒の寂しい家では、秋から冬へかけて、濕やかな日ばかりが續いた。どつちからか母親が、日に三四度づつも尋ね合つて、其の噂ばかりした。

『神戸には惡い人買ひがゐますさうで、そいつの手に攫はれたら百年目やちふことだす。……

船へ乘せて了うたが最後の助、警察でも手が附けられんのやて。……惡い奴だすなア。』
『けど、お靜さんは賢いもん、やみ／＼そんな惡い奴の手にかゝつてやおまへんやろ。』
『賢う見えても、年がいきまへんよつてなア。……今頃は其の船に乘せられて、ひどい目に遭うてますのやろ。二軒とも同し八卦が出たんで、わたへもう諦めました。……』
『そんなこと、分れしまへんがな。』
『いゝえ、分つてます。……いづれ娼妓か淫賣に賣られるんだへうが、初めて取らされた客で、お家の坊ンぼんのことを思ひ出しますやろかいな。……』と、言ひ出して、隣家の母親は、もうたまらず、わツとばかりに泣き伏した。
『わたへもなア、この間から家の子を見るたんびに、お靜さんのことが……』と言ひかけて、家の母親も涙の雨に舌が廻らなくなつた。
『これが病氣か怪我で死にでもしたんなら、壽命やおもて、諦めよいのだすがなア。』
『死ぬより辛いちふことは、この世にないとおもてましたがなア。』
『こんな目に遭ふより、自分に死んだ方が、何んぼよいや知れまへん。……あゝ死にたい。』
『けど、考へてみると、生命さへあつたら、また會へることもおますがな。……八卦にも生命はあると出てるやおまへんか。』
『嫁入りの荷い見るいうて、坊ンちと一緒に出ていた時の姿のまゝで會へるのならよろしいけど、獸みたいな異人に身體を手遊品にしられて、惡い病を傳染され、見る影もないやうになつた時會ふのなら、もうこんなり會はん方が何んぼよいや知れまへんがな。……今頃は何處に何うしてゐるやら。……』と、隣家の母親はまた涙に咽せて、續けさまに噦をした。
親たちの繰り言がつゞいてゐる中に、秋が去り冬が來て、やがては春のおとづるゝ正月になつても、お靜さんの消息は、かいくれ知れなかつた。
『お靜も十六になつたのやなア。……隣家の坊ンちは十八か。……』と、元日の蔭膳には雜煮を附けて、母親はまた新らしい涙を、春着の袖で拭いた。
　ありし昔の家の跡は、夥しく小砂利を喰ひ込んだ堅い道路になつてゐるところへ、何時までもイんで、往來の人々の怪しみの眼さへ向けられながら、光淳はなほも立ち去りかねてゐたが、若い日の思ひ出は、それからそれと、土の下より湧き出るかと思はれて、心の痺れをさへ覺えて來た。

五

　荷車を避けて横へ外れた自轉車に、危く突き當らうとしたのを機會に、光淳は漸う懷しい家の跡を立ち去つたが、心の裡で、
『名所舊蹟も、草の繁つた荒地になつてゐたり、麥畑の間に標が立つてゐたりするのと違うて、あの通り繁華な街の道筋になつてゐるのは、却つて寂しいものぢや。』と思ひ／＼、生きてゐるか、死んで了うたか、生きてゐれば今年は五十一の老婆で、先刻御堂の茶所にゐた蠅殺しの婆と同じほどの年恰好になつてゐようといふお靜をば、矢張り十五の小娘姿に愛らしく頭の中に描いて、日本橋を渡ると、あれから西へ道堀を、京與の角から曲つて、小間物屋の前で、昔お靜さんが插したやうな房の附いた花簪の、時節が廻つてまた流行つて來たらしいのを、老の眼で物凄く、それでも心では優しく睨んで、其の横を法善寺の細道へと入つた。
　流石にお腹が空いたらしいので、行き付けの『一寸一ぱい』屋へ入つて、例もの通り、サイダーと二三種の肴と飯とを言ひつけてから、透かし

の入つた木の衝立を脇に、助老を組んで、夜にならなければ客のない家の、廣々とした書座敷を見やりつゝ、四十過まで童貞を續け通した五十幾つになるまだみづ／＼と肥えた身體を、投げ出すやうにしてゐた。

今の今でも、お靜さんさへ、自分の側へ來れば、心にもない今の妻を棄てるのであるが、それでなければ……。

實のところ、自分は、こんなにまでして、お靜さんに節操を立て通すといふ氣はなかつた。たゞ雙方の母親が、今にもあの娘が戻つて來ればといふ空頼みを力にして、一年三年と自分の婚期を延ばしたので、自分も何んだか意地づくになつて、生來か母に素直であつた自分の心は、十二分に母の氣持ちを汲み取り、あたりまへならば、逆つて他に女狂ひでもするところを、お靜さんより外の女には眼も呉れまいと堅く決心すると、天主教に凝るやうにもなり、生涯獨身の老神父に可愛がられたりしたが、さうなると、もう敵に降參する屈辱を、女の前に覺えるやうになつて、女には物も言ふまいと考へたこともあつた。

二十歳代はまだよかつたが、辛いのは三十から四十へかけてであつた。道を歩いてゐて人いきれに行き逢ふと、身體中が硬張つて動けなくなるかと思はれた。

夏の夜、橋の上なんぞで、頭髮の臭い、下等な女に出くはしても、今のやうに其の臭さを感ぜずに、うツとりとたゞ振り返るのが常であつた。

神父のして來たやうに、酒と煙草とで、肉體の刺戟を忘れようともしたけれど、自分の口は、何うしてもそんなものを受け入れるに嵌らないやうで、酒も煙草も、胸苦しく、吐き氣を催す種になるだけであつた。

あゝ童貞の怖ろしさ。――老いてから却つて童貞を破つた怖ろしさ。――今それを考へると、身慄ひすることが何んぼあるやら知れない……。

陶然と夢でも見るやうに、何もかも忘れて、心持ちよくなるのは、十五のお靜さんと、十七の自分とが、背後向きに並んで凭れかゝりながら、罪のない話に興じ合つた妾垣に今も昔の心で凭れかゝることである。

日本橋の北詰の家は、市區改正で取拂ひになつたが、懷しいお靜さんの細い身體を支へた妾垣だけは、お靜さんの家のであつた分をも合はせて、上町の方へ持つて行つた。

其の青い妾垣に凭れて、身體をば懷しの綫の細丸太に擦り附けることがなかつたら、自分はもう四十代でこの世を去つてゐたかも知れない。

もう此頃ではさして氣にも止まらぬ、女といふものが、光淳の前へ食物と飲物とを、細長い脇取りに載せて運んで來た。

第二の樂みのブラ／＼歩きに疲れた光淳は、早く飲食をして、妻とも思はぬ妻や、さして可愛くもない子の居る、上町の家へ歸らうと思つた。其處には生活の料になる家作が五六軒あつて、懷しの妾垣が待つてゐる。

コスモス

コスモスが建仁寺垣に添うて垣の高さに達するまでは、ズン／＼伸びて行くが、垣を凌いで其の上まで伸びると、曲つたり折れたりしないまでも、伸びる勢はズッと衰へる。血も肉もない枯竹の行列も、コスモスに取つては必死の競爭相手だつた。（『金魚のうろこ』より）

天滿宮

一

府立病院の二等室は、其の頃疊が敷いてあつた。竹丸の母は其の二等室に入つてから、もう四ケ月の餘にもなる。一度竹丸をよこして呉れと、度々父への便りに言つて來たけれど、父は取り合ひもしなかつた。

千代松といふ子供のやうな名を有つて居る人があつた。四十二の厄年が七年前に濟んだ未の八白で、「あんたのお父つあんと同い年や。」と言つてゐるが、父に聞くと、「いや、乃公は亥の四綠で、千代さんより四つ下や。」と首を振つてゐた。けれども竹丸の眼には却つて父の方が老人に見えた。竹丸は今年十二で、三十歳ぐらゐの人はもう年寄のやうに思つてゐた。

千代松といふ人は頭髮を丁髷に結つてゐた。幾ら其の頃でも、村中で丁髷はたゞこの千代松の頭の上に見らるゝだけであつた。年に比べて髷が大きいといふことで、人々はよく千代松の髷のことを『××の金槌』と呼んでゐた。

其の千代松のところへ病院の母から、是非竹丸を連れて來て呉れといふ手紙があつたさうで、千代松は其の手紙を懷中にして竹丸の家へ來た。

竹丸の家は、天滿宮の別當筋で、別當は僧體であつたから、血脈は續いてゐないが、第四十五世別當尊[illegible]の代になつて、國の政治に改革が起り、封建が廢れたので、別當の名で支配してゐた天滿宮の領地二ケ村半、五百石を上地し、別當は還俗して神主になり、名も前田道臣と改め、髮の伸びるまでを附髷にして、細身の大小を差し、頻りに女を買つて歩きなぞした。それが竹丸の父である。

「いゝ、あんたの阿母の來やはつた時は、えらいこツちやツた。七荷の荷でなア。……今でも納戶におまツしやろ、あの簞笥や長持は皆阿母が持つて來やはつたんや。あの長押に掛けたある薙刀も。……嫁入りの荷の來る時、玄關で薙刀を受け取るのが難かしいいうて、わたへや忠兵衞はんが竹竿で稽古したもんや。」

丁ど道臣が朝の日供に拜殿へ出てゐたので、千代松は竹丸を相手にして、社務所を兼ねた家の勝手口でこんなことを喋舌つてゐた。

「あんた、まア一つおあがりやす。直ツきに戻つて來やはりますさかい。」

女中のお駒が、かう言つて番茶を汲んで出した。煙草を吸はぬ千代松は、手持無沙汰で丁髷の髮を撫でたり、出もせぬ咳をしたりしてゐたが、

「相變らず別嬪やなア、お前幾つや。」と、竹丸を棄てゝお駒の方へ向き直つた。お駒はたゞ笑つてゐたけれど、

「ほんまに幾つや。」と、千代松が重ねて問ふので、

「六でおます。」と羞かしさうに、袖で口を掩うた。

『三十六？』

笑ひながら千代松の嘲ふのを、お駒は眞面目に受けて首を振つてゐた。

『けんど十六とは見えんなア、十八九、二十歳に見る人もあるやろ、大柄やさかい。』と、千代松はまじ〳〵と、お駒の眞ん圓い、色の白い顏の、眼のパッチリとした、睫毛の長いのに見入つてゐた。

もうそろ〳〵春先きで、逸早く這ひ出した蟻が、黒光りになつた臺所の大黒柱の根方の穴へ歸つて行くのを見て、

『あゝ蟻さんのお歸り〳〵。』なぞと、お駒は他愛もないことを言つた。

『お前も家の旦那と定はんと兩方では、骨が折れるなア。』と、千代松は丁髷頭を搖り〳〵、にや〳〵して言つた。

『知らん、嫌ひ。』と、お駒は長い袂を振つて立ち上つた。

『けんど用心せんといかんで、旦那は好きやさかいなア。お前も奥さんみたいな病氣になるで。……』

『へえ――。』と、お駒は中腰になつてゐた。

『眞言律で、魚は喰へず、牝猫も飼へなんだのが、還俗したんやもん。張りきつた馬の手綱を切つたやうなもんや。……平野屋のお源を手初めに、方々撫で斬りや。』

『家には昔馬がゐたんだすてなア。』と、お駒は珍らしさうにして訊いた。

『さうや、あの納屋の横に馬小屋があつて、旦那が馬に乘つて平野屋へ散財に行かはつたんや。お源に惚れはつてな。……もう十七八年も昔のこツちや。』

かう言つて千代松は、ヂッと考へ込む風をした。

『いゝわたへのまだ生れん前のことだすな。……妙なもんや。』と、お駒も何か考へ出したやうで、また其處の板の間に坐つた。

『何が妙や。……お前がまだ生れん先きから女子狂ひしてた人と、何んするのが妙やちふんかいな。』と、千代松は元の笑顔になつた。

『またあんなこと言やはる。嫌ひ。』

お駒はさッと紅を刷いたやうな顔色になつて、俯いてゐた。

『まツさら嫌ひでもあるまい。頭が禿げてても、旦那は親切やろ。』

『うだ〳〵いうとくなはんな。いゝ、あんたとこのお時はんに恨まれまんがな。』

お時といふ名を聞くと、千代松は忽ち急所でも突かれたやうに默つて了つた。

『あんた、ちよツとも白髪がおまへんな。毛も多いし、入れ毛してなはるんか、眞ン中は禿げてまツしやろ。』

やゝ暫くしてから、お駒は罪もない物の言ひ樣をして、千代松の丁髷を見詰めた。

『何んの禿げたるもんか、入れ毛なんぞしてえへん。』と、千代松は頭の祕密を押し隱すやうに、右の手で月代の邊を押へた。

『譃や、禿げたるさかい、そんなわげ(髷の事)に結うてはるのや。』

『禿げたるも絲瓜もあるもんか。』と、千代松は周章てたやうにして言つた。

『それ、言やはつた。』と、お駒は崩れんばかりに笑つた。千代松も氣が付いて共に笑つた。

言葉の間に「絲瓜」といふことを挾むのが千代松の癖で、村の人々は「絲瓜の千代さん」といふ綽名を命けてゐるのである。

二人で笑つてゐる最中に、道臣が拜殿から歸つて來た。風折烏帽子に淨衣、利休を穿いて、右の手に笏を持つてゐる。出入の度に門の敷居を跨ぐ時、『えへん、えへん』と空咳をするのが、この人の癖であつた。

二

勝手口から上りながら、道臣は臺所の千代松をチラと見て、輕く會釋をすると、次の室に入つて、柱の折れ釘に烏帽子を掛け、淨衣は衝立の前に脱ぎ棄てた。表に陵王の舞樂を極彩色にかき、裏に墨繪の野馬が三頭遊んでゐる衝立の上には、お駒のヨソイキの夜帯が、眞ッ赤なハギを見せてかゝつてゐた。

白衣に淺黄の袴の平服になつて、居室の爐の前に坐つた道臣は、ポン〳〵と快い音のする手を二つ鳴らしてお駒を呼んだ。

『お駒どんお召しだすで。』と千代松は莞爾した。

『千代さんを此方へ呼んどいで。』と、道臣は、四疊半の居室の入口に手を支へてゐるお駒に言つた。

茶室がかつた四疊半に爐を隔てて對坐してゐる主客の姿が、勝手の方から見えてゐた。薄い毛を總髪のやうに撫であげた道臣の頭と、千代松の丁髷とが、かたみに少しづつ搖いで、ねちねちとした話聲が、途切れ〳〵に聞えた。

この家は昔の六坊の一つであつた梅の坊といふのの建物である。東の坊に中の坊に梅の坊に西の坊に北の坊に知足坊の六坊の中で、西、北、知足の三坊は疾くに廢絶して、其の跡は竹藪になつてゐるが、東、中、梅の三坊だけが上地の時まで殘つて、村の人々は東さん、中さん、西さんと呼んでゐた。西さんといふのは梅の坊のことで、ズッと昔の西の坊のあつた時は、梅さんと呼ばれてゐたさうである。

別當の館は、この六坊をば、たとへば堵列した兵士のやうに見て、それに號令してゐる指揮官といつたやうな前面の地位にあつて、天滿宮の本殿、拜殿と並んでゐた。其の館のことを昔は役所と言ひ、別當の旨を受けて狹いながらも獨立した領地の裁判をする代官が詰めてゐた。其の北には祭事を扱ふ御供所があり、其の東には形ばかりの空濠に臨んで、小ひさい牢屋があつた。

接近した他領の民が、或る惡事をして捕へられさうになると、よく天滿宮の領地へ逃げて來て、別當に縋つてこの牢屋に入れて貰つたといふやうな昔話も殘つてゐる。高が五百石でも、何分幕府の直轄であるから、かうなると他領の役人は手が出せない。人を助けるのが出家の役とでもいふのであらう、別當はこの牢屋に入つたものに自由を與へて、三度の食事は、總門前の水茶屋を兼ねた小料理屋から取り寄せることを許し、夜は外出をさせなぞした。

罪人に嵌める手錠は、自分に抜き差しの出來る緩いもので、牢屋の入口には締りをしてないから、土地の者でこの牢屋へ入れられた男なぞは、晝間でもブラ〳〵家へ歸つて、月代をしたり、酒を飮んだりした。月代のしたてに代官から呼び出しがあると、流石に青々と剃り立ての頭では白洲へ出られない。そこで月代をした上へ引火奴を黒々と糊で貼り付けて出ると、一通りの調べが濟んでから、代官が繼ぎ裃の衣紋を正して、

『こりや源六……面を上げい。』と叫ぶので、恐る〳〵顏を上げると、代官はにこりともしないで、

『頭の火の用心をせい。』と言つたといふやうな昔話もある。

其の牢屋の跡には雜草が生ひ茂つて、春は村の子供等が土筆を摘んでゐる。役所と御供所との建物は一時小學校になつて、渡邊といふ漢學の老先生が來てゐたが、學校は別に新らしく建てられ、老先生はます〳〵老いて、往く處を知らずになつた。罪人の寢た牢屋の跡にも別當の住んだ館の跡にも、代官の坐つた白洲の跡にも、同じ雜草が生えてゐた。昔わざ〳〵都の橐駝師を連れて來て造らせたといふ遠州流の前栽も殘らず草に埋れて、大きな石の頭だけがニョキッと見えてゐた。土地の橐駝師が昔の名匠の苦心を雜草の中に學ばうとして、新らしい草鞋を朝露にじと〳〵させながら、埋れた泉石を探り歩いてゐることもあつた。

東の坊も中の坊も皆、知足坊、北の坊、西の坊の後を追うて竹藪になつた。還俗して神主に

なつた別當は、たゞ一つ取り殘された梅の坊に移り住んで、「西さん」と呼ばれてゐた。

「西さんそこへと飛んで來て、何をするかと見てあれば、高天原に神ずまり、鼻の腹に子がやどる。……」なぞと、村の子守等は大きな聲で唄つた。

梅の坊は六坊の中で一番小ひさかつたけれど、天滿宮の廣い境内の南の端の崖の上にあつて、岩を嚙む水の美しい山川が其の下を流れ、川邊には梅の花、秋の紅葉と、とり〴〵に良い樹が生えてゐた。庭には表裏とも梅の木が多くて、生活の叫びを立てるチョン〳〵のさゝ啼きが、竹藪を出て、ホーホケキョと戀愛の歌をうたふ頃になると、あの黄色い小鳥は、二羽も三羽もこの閑寂な梅林へ來て遊んだ。「梅に鶯」と繪にある通りのものを、竹丸はよく雪隱の窓から見た。

川を距てて、廣い靑々とした昔の領地を望みながら、道臣は千代松と稍暫く語つてゐた。茶室がかつた居室の庭先きには、八つ手なぞを植ゑ込んで眺めを妨げてあるけれど、大きな葉の間から麥畑や草の家がチラ〳〵と見えた。鍬を擔いで野路を行く人は誰れであるかと、千代松は若い時から自慢の眼の、強い視力のまだ衰へぬのを試すやうにしてゐた。野路の彼方には、低い小松山が枕屛風のやうに昔の領地を取り卷いてゐて、其の上の方には、秋の頃を思はせるやうな白雲が、ふはりと浮んでゐた。

『お駒もよいゲンサイやけんど、奥さんは品がおますさかいな。……長いこと煩うて、あないになりやはつたけど、品はなア、身に備はつてゐますわい。』

煙草を吞まぬので兩手を持ちあつかつて、兩の肩を横に搖り動かしながら、千代松はこんなことを言つた。

「ふゝん」と道臣は吸ひ飽きた煙管を弄びつつ、たゞ笑つてゐた。

「此方へ來やはつてから、何んぼにもならん中や、そいでも三四年してからやつたかなア、孃やんが生れて直き死にやはつて、奥さんが墓參りに行きやはると、何んでも寒い時で、雪が散ら散ら降つて來ましてなア、お供のお鶴どんが家へ傘を借りに來ましたんで、家内が嫁入りの時に持つて來た柄の長い蛇の目を袋から出してお貸し申すと、お鶴どんが其の傘を後から翳しかけて去なはつたのを、わたへは山から戻りに見ましたけど、それや上品で、思はず頭が下がりました。」

ねち〳〵として、千代松はかういふ話をした。お駒と暫く遊んでゐた竹丸は何時の間にか父の背後の方へ來て、千代松の言ふことを芝居の話のやうに思つて小耳に挾んでゐた。

『何んしよまア、たッた一人の坊んちやもん、奥さんも久し振りに會ひたいのは、無理ごわへん。わたへが連れて行きますさかい、一寸だけでも會はしたげなはれ。』と、千代松は先刻から幾度も說いたらしいことを根氣よく言つた。

『會はしても仕樣がないやないか。』

舌の爛れるまで吸うた煙管にまた煙草を詰めながら、道臣は冷かに言つた。

『そら仕樣がないと言や仕樣がないが、さう言うたもんやおまへん。なア坊んち、……お母さんに會ひとおまッしやろ。』と、千代松は微笑みながら竹丸の顏を見詰めた。竹丸は父の氣を氣ねて首を振つてゐた。

『そんなら、あんたに任しますよつて、一寸連れていてやつとくなはれ。連れて行く〳〵と乾と一晩だけ竹を病院へ泊らして呉れ」と京子が言ひますやろが、それは金輪際いきまへんよつて、泣いても何うしても構はずに、引き離して他へ泊つとくなはれ。』と、道臣は到頭千代松の根氣に負けた。

「何もおまへんけど、時分どきだすよつて千代さん。」と、お駒が低い足附きの膳を持つて來て千代松の前に据ゑた。

『もう正午だすかいな。』と、千代松は自分の尻と長話とに驚いたやうな顏をした。

三

其の晩、道臣は千代松の宅へ行つた。酒がなくては食事の出來ぬ道臣は、朝飯にも晝飯にも一本づつお駒に燗をつけさせるのであるが、夕飯には二本飮んで少し醉つたやうな風で、羽織も着ずに出て行つた。宅の門を出て、隨神門と總門との間の石の鳥居の前を通つて、廣い境内を東門から出ると、左へ曲つてだら／＼坂を、天滿宮の堀溝に沿うて登つた右側に千代松の家はあつた。

近頃建てた武家造りの門は、往來から少し引つ込んだところに、木の香がまだ新らしかつた。二つの扉は固く閉つて、少し手前には砂利が盛り上げてあつた。横手の潛り戸を押すと、鎖の付いた重い分銅が、ガラ／＼と音を立てて、戸は一文字に開いた。門の内は稻を扱いだり、籾を乾したりするのに使はれる庭で、隅の方に柿の木が一二本立つてゐる外には、納家と土藏と塀と門と、それから藁葺きの屋根が小山のやうに高い母家とに取り圍まれたこの眞四角な廣場が、百姓の閑な此頃はガランとしてゐた。盆になるとこの廣場でよく踊りがある。天滿宮の境内で催される定例の盆踊は、場所がだだッ廣くて、若い衆と娘たちとが押し合ふのに工合がわるいさうで、何時も餘りはずまずに流れて了ふが、其の流れの一部がこの廣場を借りて淨瑠璃音頭で、「お染は覺悟の以前の剃刀、おゝゝなどと始めると、踊りかゝつた近まはりの村々の男女までが引き返して來て、東の白くなる夜明け頃まで踊りつゞける。秋はまた村第一の山持ちと呼ばれるこの家の松茸が、其處の土間に堆く積まれて、廣場にも新らしい山の薫りが漂ふ。

「お家はん、西さんの旦那がお越しだすで。」と、晩くなつてから廣場を掃いてゐた下男の治郎作が言つた。

千代松夫婦は、臺所の廣敷の長火鉢に對ひ合つてゐたが、妻のお安は治郎作の聲を聞くと、立つて自分の坐つてゐた場所を道臣の席にするやう座蒲團を敷いたりした。

法事か何かで特別に招いた人の外は、どんな客とでも長火鉢の前で應接するのが、この邊の農家の習慣であつた。客座敷などは疊がへをした上へ莚を敷いて、其の上へまた澁紙を敷いて、乾餅が干し並べてあつたりした。

道臣は暗い土間を通つて、中戸を越えて、中の口から長火鉢の前へ上り込んだ。娘のお時は、座敷の書院から石油ボヤのかゝつた丸ジンの臺ラムプを持つて來て、黒塗の燭架のまゝ長火鉢の側に置いた。燐寸を擦つてパッと灯を點けると、お時の白い手が先づ眩しいほどに光つて見えた。青い色の紙の裾を掩ふほどに房々と編まれた毛絲のラムプ敷の赤いのが、ケバ／＼しかつた。

其處に先刻から點いてゐた五分ジンの煤けた吊りラムプを持つて、お時は何も言はずに勝手へ引き下つた。母のお安はガチャ／＼と音を立てて、勝手で酒の支度を始めてゐた。

「明日何時頃に行きなはる。お駒に肴を盛らしておこしますわい。」

「八時頃から行きまへうかい。わたへが行きにお宅へ寄つて、竹さんを連れて行きますさかい、竹さんに支度さして待つてて貰とくなはれ。」

こんなことを話し合つてゐる中に、千代松は莖ばかりの[illegible]が香といふ煎茶を丁寧に入れて、酒の出るまでと道臣に進めた。

『いゝえ、あんたとこみたいな薄茶はごわへんので。』と千代松は、稍亂れかけた丁髷を氣にするやうに撫でながら言つた。

チリン〳〵と盃の搖れる音がして、茄玉子と香の物とでお時が酒を運んで來た。此家へ來れば酒を飲むものと極めてゐるらしい道臣は、直ぐ盃を取り上げたが、燗が微溫さうなので、長火鉢の鐵瓶の中へ自分に德利を漬けた。

『わたへが無調法だすよつて、お合ひはでけまへんが、御酒は樽で取つておますよつて、何んぼでもあがつとくなはれ。……お安お前一つお合ひをしたらどうや。』

二十一になるお時を頭に、まだ乳房を探りたがる義之助まで、男女七人の子を生んだお安は、取つて三十七で、道臣の妻と同い年であるが、ズッと老けて見える。一日を子供の世話と雇人等の指揮とに疲れ切つて、夕暮のゴタ〳〵した勝手元で、大きな戸棚の中へ首を突ッ込んで、『白鹿』と銘のある大樽の呑口から茶漬茶碗に一杯注いだ冷酒をグッと呷ることもある。それを千代松が薄々知つてゐるのである。

『へゝゝえ。』と、お安はたゞ笑つてゐるより外はなかつた。

十五の年に赤い振袖でこの家へ片付いて來たといふことは、村の一つ話になつてゐる。其の時はもうお時が腹の中に居たのだとは、お時自身にもよく人に話してゐる。隣り村の豪農で、天滿宮の御家人といふものになつてゐる家に生れたのを、同じ村の若い衆さへまだ餘り眼を注けぬ蕾の中に、千代松が頰冠り姿で、高塀を乘り越え、廣い庭先きから忍び込んで、其の蕾を捥り取つたので、村の若い衆は他所の者に第一指を染められては顏が立たぬと騷ぎ出し、暗に紛れて千代松を袋叩きにしようとしたこともあつたのを、お安の父が事面倒と見て、可愛い一人娘を棄てるやうにして千代松に呉れたのである。

天滿宮には別當、六坊、社家の外に、八十人の御家人と、六十人の長谷川組といふものとが、近郷近在に散らばつてゐた。御家人といふのは天滿宮の祭神の家來筋といふことで、昔から苗字帶刀を許されて、鄕士のやうな格になつてゐた。長谷川組といふのは別當の家來で、儀式の時だけは帶刀を許される武士格ではあるが、御家人に比べると一段劣るのである。千代松の家は長谷川組で、お安の實家は御家人の筆頭であつたから、この緣は不釣合と、人々に評判されてゐた。けれども千代松のねち〳〵した根氣は、お安といふ戀女房を得てから、一生懸命に稼ぎ溜めて、山や田地を殖やしたので、今では村一二の物持ちになつて、家柄なぞといふものの光のだん〳〵薄くなるとともに、鷹揚な好人物の主人を有つたお安の實家が、村に唯一つの瓦葺きの大きな家と、立派な長屋門とを殘して、財產は何時の間にかタバコの煙のやうにして了つたのに比べると、今では提燈と釣鐘の地位が反對になつたやうにも思はれて來た。

『一つ何うや。』と、道臣はお安に盃を獻したけれど、お安は相變らず笑つて受けなかつた。

盃洗の水に三つ浮んで來た盃は、一つだけが絕えず道臣の手から口へ運ばれてゐて、他の二つは寂しさうに取り殘されてゐた。

『時やん、此處へ來て金毘羅參りの話でもしいんかいな。』

家から下地のあるところへ、また二本ほど飲んだので、道臣はだいぶ醉つて、舌が少し縺れかゝつた。

『へえ。』とお時は素直に答へて、道臣の側に坐つた。

一昨年頃は、お時が毎日風呂敷包を抱へて、道臣の家へ京子に裁縫を習ひに來てゐた。京子が墓參りに出た後に、道臣がお時の側へ寄り

過ぎてゐたとかいふことで、一寸した騒ぎが起りかけたけれど、昔の領主といふ地位がこの片田舍では今もなほ後光が射して、旆黨の旗頭と呼ばれてゐる道臣には、こんなことがよくあるので、京子も諦めて了つた。老いて醜男の道臣も、この村では第一の色師のやうに見られてゐた。

其の一昨年の春のことである。道臣は突然お時を連れて金毘羅參りに行くと言ひ出した。昔の主人筋の言ふことであるから、千代松夫婦は寧ろ喜んで承知した。もとより義理一遍ではあらうが、道臣は京子をも連れて行かうと言つた。京子は一寸考へて、それでは一所に行かうと言つて、一行は其の頃十歳の竹丸をも加へて四人になつた。

道臣等の親子三人が支度を調へ、留守を昔の社家の長老に賴んで東の門まで出かけた時、お時の裾端折つて緋縮緬の湯もじを精一杯見せた旅姿は、左の方のだら〳〵坂の半腹に見えた。丁ど舊暦の三月の半ばであつた。

四人は先づ大阪へ出て、船の出る川口に近い博多山といふ家で、道臣の好物の鰻で飯を喰べた。道臣は嬉しさうにして何時までもチビリチビリ飲んでゐた。これから船に乘るのだといふことを聞いて竹丸は、丁ど博多山の奧座敷の前を通る荷舟を指さしつつ、『あれより大きい舟』なぞと訊いた。

川口から龜鶴丸といふ芽出たい名の汽船に乘つたのは、其の日の夕景であつた。ボウーと厭な響の笛が鳴つて、家も岸も橋も皆後へ走つて行くやうに竹丸には思はれた。お時さへ一寸さう思つた。船は間もなく廣い海の中へ出てゐた。

多度津へ着いて、金毘羅へ參つて、其處で二晚泊つて、鞘橋の上で魚の廉いのに驚いたりして、善通寺から丸龜へ出て、其處から便所のない和船に乘つて、通じを催したのを堪へ〳〵て備中へ渡つた。

『あの時ばツかりは、男に生れて來ると好かつたと思ひました。』と、今でもお時は言つてゐる。

備中から備前、それから播州巡りをして、石の寶殿や高砂の松を見て歩く中に、道臣はお時と、京子は竹丸と、別々の旅人のやうになつて歩いたこともあつた。兵庫へ着いて福原の清盛の墓の前で、四人はまた落ち合つた。

大阪へ戻つて、二三日道頓堀の宿屋に泊つてゐる中に、芝居見物をしたが、狂言は不破伴左衞門、名古屋山三の鞘當であつた。花盛りの太い櫻の幹を山三が刀で切り開くと、女の生首が現はれた。其の芝居を見て戻つた晚に、京子は宿屋で逆上して卒倒した。顏へ水を吹きかけたり、氣附藥を口に含ましたりして、やつと回復はしたが、それからは餘り物も言はぬやうになつて、皆なが出かけて行く時にも、獨りで宿屋に閉ぢ籠つてゐた。竹丸も母と一所に殘つてゐることがあつた。大阪には伯父もあり叔母もあるのに、何故こんな家に泊るのかと竹丸は思つてゐた。

一月半ほどを旅に暮らして、道臣の一行は財布を空にして村に歸つて來ると、天滿宮の木立は見違へるほど繁つてゐた。出立の時には蕾の脹みかけてゐた櫻が、すツかり若葉になつて、花吹雪の名殘りが少し見られるばかりであつた。　鳥居の前の老木の櫻に今年はまた枯枝が多くなつたのを見た時、京子もお時も、名古屋山三の引き出した女の生首のことを思ひ出した。道臣は出立の時にしたやうに、拜殿の方に向つて祈念を凝らしてゐた。

其の後道臣とお時とは、寄ると障ると金毘羅參りの話ばかりしてゐた。千代松夫婦は二人の話を傍で聽いてゐるだけで、自分たちも金毘羅

參りをしたのかと思ふほどに、讃岐から播州へかけての名所を知つた。

『いゝあんたみたいに、神さんの守りをしてる人は、他のお宮へ參つても、まツさら他人のやうな氣がしましよまい。』と、酒も煙草も呑まぬ千代松は、三度目の急須の茶を入れかへながら言つた。

『さいやなア。……』と道臣もこの答へには窮してゐた。

『金毘羅はんでも、吉備津ッあんでも、參る〳〵いうてやはつて、ちよつとも拜みやはれへんのや。可笑しい人。』

お時は滿るやうな色氣を眼元に含ませて、こんなことを言つた。お時の妹のお今といふ十一になるのが、背張りをして起きてゐるだけで、他の子供等は皆寝て了つた。子供の巣のやうなこの家も稍靜かになつた。

四

其の頃まだこの村へは汽車が通じてゐなかつた。電車なぞは何處にもなかつた。竹丸は千代松に連れられて村から一里あまり距つた小ひさな町まで、水の美しい山川に添ひつゝ歩いて、其處から人力車で五里の道を大阪へ行つた。

『北野まで何んぼで行く。』と、千代松は小ひさな町の坂の下のところで路傍に客待ちしてゐた車夫の誰に聲をかけた。合乘り一臺の賃錢が折り合はずに、千代松は坂の半腹までさツさと歩いたが、竹丸の歩き澁るのに足元を見込んだ車夫は、冷笑ひつゝ二人の後姿を見送つてゐた。此處を外れるともう車がないので、千代松は殘念さうにしながら振り返つて車夫を手招きした。

一人乘りでも結構やと千代松の言つただけに、合乘りではゆツくりし過ぎるほどであつた。一面に麥畑の眞青な中を白くうねうねとして行く平な國道を、目額に頬髯を剃つた顔の青々とした車夫は、風を切つて駈け出した。尊鉢といつて釋迦の鐵鉢とかを藏してゐる白壁の寺のある村を過ぐる頃には、もう先きへ行く人力車を二臺も追ひ拔いた。こツてりと油を付けて結ひ上げた千代松の丁髷に、車夫の蹴立てる白い砂埃りが煙りのやうに掩ひかゝつた。

もつと背後へ凭れかゝつて呉れとか、足を踏ん張つて呉れとか言つて、五月蠅い車夫であつたが、中肉中脊の屈強な足つきは、北野へ着くまでに、十臺からの車を拔いて、正午少し前に千代松と竹丸とは鶴の茶屋の前へ下り立つた。

『よツぽど早うおましたで、ちいと增してやつとくなはれ。』と、碌に汗もかゝねば疲れた風もなくて、車夫は股引の塵埃を拂ひ〳〵言つたが、

『一時間や二時間早う着いても仕樣がない。先きい行く車追ひ拔いたかて、乘つてる客の手柄にならん。』と、千代松は冷かに言つて、定めただけの賃錢をやると、竹丸を連れてずん〳〵歩き出した。

『あれがお母樣さんの入つてはる病院や。』と大川の長い橋の上から指さしておいて、千代松はもう歩くのが厭さうな竹丸を笑顔で引き摺るやうにして、だいぶ長いこと歩かした。また橋を二つも渡つて、川沿ひの赤い軒燈の出た宿屋に入つた時、稍草臥れてゐた竹丸の機嫌も直つた。其の宿屋は竹丸が父母やお時と一所に金毘羅參りの時に泊つた宿屋らしくて、母が卒倒した時の怖ろしさを竹丸は思ひ出してゐた。二階座敷の欄干に凭れて、川の中を往來する小舟を見たり、小旗の立つた蒸汽船に出入りする人を數へたりして、竹丸は物珍らしい半日を送つた。對う岸の家で欄干に赤い裏の蒲團を干してゐる女は、白い顔に笑ひを浮べて、竹丸に小手招きなぞした。背後の賑やかな通りでは、人音がざわ

ざわ聞えて、太鼓の響や喇叭の聲が絶えずしてゐた。

『さアこれから阿母さんとこへ行くんや、嬉しおますやろ。』と夕飯を喰べてから、千代松は竹丸を連れ出した。また歩かせられることかと、竹丸は稍拗ねかけて見たが、千代松は直ぐ其處の橋の詰から、今度は値切りもせずに合乘りの人力車を呼んだ。車の上から飽かぬ街景色を見て行く中に、長い橋を渡つて、車は病院の鐵門の前に着いた。

病院の玄關には薄暗い灯が點いてゐた。胡麻鹽の腮鬚の長い受付の老爺の顔を、半圓形の硝子窓の中に、覗きカラクリのやうに見て、右へ曲つて行くと、白い壁の長い廊下が續いて、其の片側には、下駄箱を横にしたやうに、一つ〳〵扉の附いた入口が幾つも並んでゐた。其の扉の一つの横の方に、黒い板へ白く「前田京子」と門の標札のやうに書いてあるのを、薄暗い中に目早く見付けた竹丸が、

『此處や、此處や。』と叫ぶと、千代松は吃驚した顔をして、竹丸と同じやうに其の白い字の標札を仰いだ。

『さアお入りなはれ。』と千代松は標札の文字を確めてから言つたが、竹丸は俄に尻込みして、扉の白い把手を握ることが出來なかつた。

『早う入りなはれな。』と、千代松はニヤ〳〵して言つた。さうして自分で把手に手をかけてギュッと押すと、扉が一尺ほど開いた。

『誰れや。』と中から久し振りで聞く母の聲がしたので、竹丸はいよ〳〵尻込みして、廊下を一間ほども隣りの扉の前あたりまで逃げて行つた。千代松は笑ひながらそれを追うて、引つ捕へると、容赦なく母の病室の中へ押し込み、自分も引き添うて入つた。

寢臺から下りて、疊の上に座蒲團もなく坐つてゐた京子は、薄暗いラムプの下で短刀を拔いて見てゐた。痩せこけた顔へ櫛卷きにした髮の後れ毛が振りかゝつて、大きな圓い眼は血走つてゐるやうに思はれた。

『怖い。』と竹丸は覺えず叫んで、また逃げ出さうとするのを、千代松は抑へて放さなかつた。

『あゝ竹ちやんか、千代さんに連れて來て貰うたのやなア。』

短刀を持つたまゝではあるが、京子の物の言ひ振りは、物靜かに優しかつた。さうして短刀の刃先を檢めては、少しばかり錆の出かゝつたのを文錢でゴシ〳〵擦ることを止めなかつた。

今までニヤ〳〵してゐた千代松も、少し眉を顰めて、京子の容子を見詰めつゝ、竹丸を庇ふやうにして、短刀の切先を避ける風にしながら、黄色くなつた疊の上に坐つた。

俄に氣がついたといふ狀で、京子は短刀を鞘に納めた。其の短刀は鎧通しといふ短いもので、彼女の父がこればかりは一生肌身を離すなと言つて、道臣に嫁する日に彼女の手匣の中に入れてやつたもので、無銘ではあるが相州ものの古いところらしく、作りは父の好みで、彼女の爲めに酉の歳に因んで金無垢の鷄の高彫りを目貫に浮き出させ、鞘は梨子地で、黒に金絲を混ぜた鐶付きの下げ緒が長く垂れ、赤地金襴の袋に入つてゐる。金で大きく蓋の上に定紋の折鶴を現はした手匣とともに、今は亡き父の記念品となつて、病院の枕元に置かれてある。

竹丸はよくお駒から怪猫の話を聽かされてゐたので、自分の母は疾くに何處かの古猫に喰ひ殺されて、猫が母の姿になつてゐるのではあるまいかと思つてゐた。この廊下に母の白骨がごろ〳〵してゐるのではあるまいかと思ふと、身體中がぞく〳〵して來て、ザラ〳〵した坊主疊に氷のやうな冷めたさを感じて來た。

『書置の事』とでもしてある封狀が、其處らにありさうな光景だと千代松は考へて、京子と一通りの挨拶を交した後は、打ち解けた話もしにくいので、ツイ默つてゐた。京子も默つてゐた。

金毘羅參りから歸つた年の夏、修驗者のやうな姿をした眼のよく光る男――其の男の眼を見てゐると自然に氣が遠くなる――が自分の家へ尋ねて來たことを竹丸は思ひ出した。其の時丁ど父はお宮の用事で四五日泊りがけに他へ行つてゐたが、母は忽ち其の見も知りもしなかつた修驗者と懇ろになつて、金毘羅このかた起りかけてゐた今の痳氣を癒して貰ふ御祈禱だと言つては、まだ暑いのに室を閉め切つて、修驗者と二人で二時間も三時間も出て來なかつたことがあつた。夜になると修驗者は竹丸に向つていろいろ面白い話をしたが、竹丸は何んだか其の男が氣味わるくて、其の異樣に輝く眼の光に打たれると、氣が遠くなつて、死ぬとはこんなになるのではあるまいかと思はれてならなかつた。修驗者は日本國中を大抵巡つたさうで、いろいろの面白い事や怖い話を知つてゐた。

もう明日あたりは父が歸るであらうといふ日、母はまた修驗者と二人で納戸へ入つたまゝ戸を閉め切つて、夕方になつても出て來なかつた。其の頃居たお鶴といふ下女は、何も知らぬ顏をして、せッせと臺所を働いてゐた。餘り氣にかゝるので、竹丸は納戸の前まで忍び足で行つて、幾度か躊躇ひつゝ、青地に金粉で龍の丸をおいた襖を細目に開けて内を覗いた。

昔内佛の安置してあつたこの室は、この家へ女氣が入るやうになつてから、納戸に用ゐられて、紅白粉の匂ひで一杯になつてゐるが、竹丸の怖々覗いた時、修驗者の姿は見えないで、母がたゞ一人衣裳簞笥の前に坐つてゐた。竹丸の覗いたのを直ぐそれと氣付いた母は、意外にも莞爾々々として手招きしたので、二三日母に疎くされてゐた竹丸は、喜んで襖を開け、駈け込むやうにして母に近づいた。母は直ぐと立つて、襖の開かぬやうに竹丸の手の屆かぬところへしんばり棒をしてから、靜かに竹丸の側へ寄ると、他所の家へでも行つた風にちよこなんとしてゐた竹丸に向つて、『見に來ては可かんというたるのに、何んで見に來た。』と急に怖い顏をして叱つてから、あの金の鷄の目貫の光る短刀を引き寄せながら、『お父つあんが戻つてから、あの小父さんの來たことをいふと、斬つて了ふよつて、よう覺えてゐや。』と短刀を半分ほど拔きかけた。其の形相の物凄さに、竹丸は懷へ上つて泣き出した。

それから竹丸は其の修驗者の姿を一度も見なかつたが、近頃お駒に教はつた怪猫の話から、若しやあの修驗者が古猫で、母を喰ひ殺して母の姿になつてゐるのではあるまいかと、時折り考へることもあつた。

そんなことを思ひ出しながら、今かうやつて病院で母の姿を見てゐると、病み窶れた顏から眼付きが、何時かの修驗者に似て來たやうに考へられ、ぼんやりと射すラムプの光に、耳の尖つた口の裂けた髭の長い大猫の影法師が映るやうな氣がして、竹丸は眞ともに母の方を見ることが出來なくなつた。

『もう去なう。』と、竹丸は小ひさな聲で言つて、千代松の背後へ隱れるやうに膝行り寄つた。例もの低い聲でねちねちと話し始めてゐた千代松は、

『癒る癒らんも、絲瓜もおまへん。癒つて見せうちふ氣一つだす。病は。……』なぞと元氣よく言つて病人を勵ましつゝ、竹丸には頓着しなかつた。

『ずッと前に診てもろた醫者が、リョーマチやいうて、其の藥ばかり呉れてたんが惡おました

んや。子宮だしたんやもんなア、此處の院長さんが診やはつて、餘ッほどわるなつたるいうて、喫驚してゐやはつた。』

『前に診てもろた醫者て、片岡だッしやろ。片岡なら確かだす。日本人の身體には矢ッ張り漢法醫がよいので、西洋醫者はあきまへんわい。』

　西洋醫者を信じてゐる京子と、漢法醫者を尊んでゐる千代松とは、互ひに堅く執つて動かぬといふ風を見せたが、

『わたし御免蒙つて。』と、京子の方が先きに閉口して、大儀さうに寢臺の上へ這ひ上つた。

『ぼち〳〵行きまへうかな。』と、千代松は初めて竹丸の居るのに氣がついたやうな風をして、背後を顧みた。

『竹は今夜泊つて行くなア。』と京子は寢臺の上から言つて、自分の身體を少し片わきに寄せつゝ、白い蒲團の上に自分と並んで竹丸の寢る場所を拵へた。

『泊つて行きなはるか。……久し振りや、阿母さんの乳汁可味しおますで。』と千代松は微笑みつゝ言つて、背後に竦んでゐる竹丸を母の前へ引き出さうとした。

『厭や。』と首を振つて、竹丸はシク〳〵泣き出してゐた。

『前には阿母さんと一所に寢たいちうて泣いたもんやが、今は阿母さんがそないに厭になつたんか。そんなら早う去に。……もう來いでもええ。』

　不機嫌な顏をして京子は寢臺から下りた。千代松の横手から頭を出してゐた竹丸は、また後ずさりして其の背後に隱れ、千代松の一帳羅の紋付羽織の脊筋を見てゐた。

『あんたが、そんな高いとこで寢なはるさかい、竹さんは怖いんだすやろ、なア竹さん。』と、千代松は氣の毒さうにした。

『高いとこで寢るのが厭なら、あの蒲團を下へ敷いて貰たげるよつて、今夜は阿母さんと一所に寢よう、なア竹。』

　また優しい顏になつて、京子は竹丸を引き留めようとした。

『さう〳〵忘れてた、竹さん今夜善哉喰べに行くんだしたな。そんならぼち〳〵行きまへう。』と、千代松は村でも夜に入る見込みの外出には必ず懷中に入れて行く小ひさな小田原提灯を取り出して、用意のマッチをパッと擦つた。竹丸は早や立ち上つて出口の扉に手をかけた。

『そんならもう去んでだすか。』

　何もかも諦めたといつた風で、京子は苦しさうな笑顏をしたが、

『蠟燭がそれでは短いやろ、竹ちやんこれ持つといで。』と、床頭臺の抽斗から十本ばかりの蠟燭を取り出し、白紙に包んで、竹丸の方へ手を差し伸した。竹丸は千代松の顏を見い〳〵母の側へ寄つて、其の蠟燭を受け取つた。

『それだけ蠟燭があると、江戸までも行かれる。』と、千代松は笑つた。

五

　千代松と竹丸とは、其の翌くる日の朝早く宿を立つて、北野からまた合乘りの人力車に乘つて歸つたが、丁ど半分道ほど來た時、向うから若い男と女とを乘せた車夫が「賣るか」と聲をかけて、車夫同士で客の取り替へッこの相談を始めた。梶棒と梶棒とを摩れ〳〵にして、何か知ら符牒で暫く話し合つてゐる中に、忽ち纏りが付いて、千代松と竹丸とは向うから來た車に乘せられ、若い男と女とは此方の車に乘つて、車夫は互ひに別れの懸け聲をして、各々の來た道を引き返した。

　來る時に千代松が車賃を値切つた小ひさな町の坂の下で、二人は車から下りて、其處から村まで山川に添うて歩いた。竹丸は千代松に尻

を端折つて貰つて、元氣よく先きに立つて歩いた。山川の美しい流れは、底の小石までを透き通して見せてゐた。西の方の小山の裾に、お寺の大きな屋根を眞ん中にして、富んでゐるらしい瓦葺きの家や藁葺きの家や白壁の光る土藏なぞが、ごちや〳〵と一塊りになつてゐるのは、××の部落で、其處の男女が三人五人、剝いだ獸皮の眞白に見えるのを、この川原に持ち出して、淸らかな水に晒してゐた。雪のやうな肌をした女が、新らしい手拭を被り眞赤な襷をかけて、白い足を膝のあたりまで水の中に浸しつつ、皮を引つ張つてゐるのも見えてゐた。春らしい風がそよ〳〵と吹いて、午後の太陽はどんよりと、大きな暈をかぶつてゐた。

山川の曲つて流れてゐるところまで來ると、其處からが天滿宮の昔の領地で、「殺生禁斷」と深く刻つた大きな石標が川端に苔むして、倒れさうになつたまゝ立つてゐる。竹丸は後をも見ずに駈け出して、二三町續いた松原を一散に、風の如く天滿宮の境内に歸つて行つた。

家では父がまた千代松の家へ行つたさうで、お駒は昨夜泊つたまゝ歸らぬといふ從兄の定吉と話してゐた。

『坊んち、戻りなはつたか。』と、定吉はお駒の背中にかけてゐた手を離して、竹丸を迎へた。

「今夜も泊つといで、休みやさかい、えゝやらう。家の胥張さんが五月蠅いよつて。」

お駒は、ほんのり紅をさしたやうな圓い顏に笑みを浮べて、後の半分は聞えぬほどの小ひさい聲で、定吉を流眄に見ながら言つてから、竹丸に、

「さあ、着りもん着更へて。……」と早口をして、白メリンスの兵兒帶に手をかけると、追ひ剝ぎのやうに竹丸のヨソイキの着物を脫がしかけた。

「鹿島一日、下はん半日。休み嫌ひの仙藏はん、なほも嫌ひの絲瓜はん。」と定吉は、村の草刈童のよく唄ふ歌を高い聲で唄つた。今日は久し振りに降つた雨を喜ぶ「あまよろこび」の休みが一日、村の若い衆や草刈童や雇人たちに與へられて、農作物のよく實るのを祝つてゐるが、近頃は頓とこの種の休みが尠くなつて、昔鹿島大盡が庄屋であつたり、下はんと呼ばるゝ好人物の旦那が村の支配者であつたりした時、一日或は半日の休みが始終貰へた時代を謳歌する聲が、今の若者たちの間にまで響いてゐる。

「この人は何を持つてゐやはるんやなア、いゝほところ(中懐)膨らかして。」と、お駒は竹丸の附け紐を解きながら言つて、懷中を押さへてゐる兩手を引き退けると、嵩張つた紙包がバタリと疊の上に落ちた。

「定はん貰ひや、大阪の土産やで。可味しいもんやろ。…飴…蛸の糞(菓子)…羊羹…。」

半分は定吉に、半分は竹丸に言つて、お駒は樂しさうに紙包を開けて見た。

「何んや阿呆らしい、蠟燭や。」とお駒は吐き出すやうに言つて、紙のまゝ其處に放り出した。

「蠟燭の形に拵へたかい、かしん(菓子)や知れんで。」と定吉は、自分の前にころ〳〵轉けて來た一本の蠟燭を取り上げて、頻りに匂ひを嗅いでみたりした。

「いゝ、きりもん着んとお父つあんに叱られる。ほんほんになるのはまだ早い。おゝ寒い寒い。」と、お駒は竹丸が裸體のまゝ板の間を駈け廻るのを追ひ廻して、ふだん着を着せた。さうして、

「今日でもう五日も學校を休んで、……落第しますで。」と、母のやうな顏をして竹丸を睨んで、直ぐに噴き出して笑つた。竹丸も共に笑つた。

「お駒ちやん、矢ツ張り蠟燭やなア。」と定吉は、匂ひを嗅いだだけでは諦められぬらしく、マッチを擦つて火を點けてみて、板の間へ一たらし

滴した熱い蠟で其の蠟燭の尻を据ゑて、ジイジイと燃えるのを見ながら言つた。

「わかつてるやないか。一寸見ただけで。」と、お駒は笑つて、定吉の顔を見詰めた。

『さうかいなア。』と、定吉はまだ白晝にとぼつてゐる蠟燭の赤い火から眼を離さずに、腰から新らしい革の煙草入を抜き取つて、ツイ昨日から始めた煙草を其の蠟燭の火で吸ひ付けた。

「あゝ可笑し、定はん煙草呑むん。何時から。」と、お駒は大變なことゝ見付けたやうに、頓狂な聲で言つた。

「きんの(昨日)から。」と定吉はキマリのわるさうな顔をして、白い煙をプーッとお駒の顔に吹きかけた。

「あゝ臭い。」と、お駒は長い袂で其の煙を拂ひながら、定吉の新らしい煙草入を引き寄せて、緒締めの赤い玉なぞを捻くつてゐた。

『お父つあんが十七から煙草呑んだちふさかい、俺も十七で呑むんや。』

から言つて、定吉は二服目の火をつけた。

『二十歳から呑んだらえゝ、十七ではまだ早い。』と、お駒は圓い眼に媚を湛へて嘲弄ふやうに言つた。

『煙草呑むんと、五斗俵持つんと、……ほえから、……色事するんと、この三つは一所に始まるもんやげな。』

にや〳〵と笑ひ〳〵、言ひにくさうにして定吉は言つた。

『定はんが、……嫌ひ。……』と、お駒は一寸横を向いて見せた。

「何が嫌ひや、誰れでもさういふやないか。」と、定吉はお駒の側へ摺り寄つて背中を撫でるやうにした。

『定はんはもう五斗俵が持てるのん。』

『いやや、まだ持てん。膝まで來るが腰が切れん。あかん。』

『それみい、煙草と……それから……其の……何……はしても、五斗俵が持ていでは一人前やないやないか。』と、お駒はツンとして言つた。

「お駒ちやん、怒つたんかい。怒らんかてえゝやないか。」と、定吉も稍改まつた調子で言つた。

「怒れへん、ちよつとも怒つてやへん。」と、お駒はまた滴るやうな笑顔になつた。

「坊んち、こんな蠟燭どうしなはつたんや。」と定吉は、裏の梅林の方へ遊びに出て直ぐ戻つて來た竹丸を見つゝ言つた。まだ核子の固まらぬ梅の實を取つて來て、掌に載せた鹽を附け附け、コリ〳〵噛り始めてゐた竹丸は、

「病院で阿母さんに貰たんや、十二本貰たんを絲瓜はんと半ぼん分けにしたん。」と、竹丸は板の間に腰をかけて、短い着物からニュッと出た二本の足を搔つてゐた。

「蠟燭の土産て、妙やなア。香奠の返禮みたいやないか。」

變な顔をしてお駒は言つたが、何と思つたか、定吉の煙草入と煙管とを引き寄せ、一服詰めてまだ燃えてゐる蠟燭の火につけ、苦さうに顔を顰めて煙を吐くと、コン〳〵と咳をして、板の間に顔を摺り付けつゝ咽せ入つた。

「お駒ちやん、もうこの頃は白い丈長懸けんのかい。」と、定吉は、俯向いて咽せてゐるお駒の島田髷の搖いでゐるのを見ながら言つた。

「旦さんが、そんなものを懸けるな言やはるよつて。……」

漸く咳を止めて、眞ツ赤な顔に苦し涙さへ浮べたお駒は、から答へて笑つた。

「さうかい。」と定吉がなほもお駒の頭に見入つてゐる時、竹丸はまた何か思ひ付いた風で、鐵砲丸のやうに裏口から駈けて出た。

程暫くしてから、竹丸の聲で何か知ら「わアいわアい」と囃し立てるのが聞えたので、若い二人

は其の囃し聲に引かれて、裏口へ出て見ると、竹丸の姿は見えないで、突き當りの藪に近い土藏の白壁へ、大きく消炭で、無恰好な相合傘と、其の下へ、握り飯に箸を突き差したやうな人の形とを書いて、上の方には、「大仲よし、定吉・お駒」と下手な字が行を並べて出來てゐた。若い二人は其の新らしい樂書の傍に寄り、ニヤ〳〵笑つて見てゐたが、軈て定吉は下に落ちてゐた消炭を拾ふと、相合傘の側の『定吉』といふ字を消して、其の跡へ『道臣』と小ひさく書き、ベロリと舌を出して首を縮めた。するとお駒はまた自分の名を消して、定吉の棄てた消炭を拾ふと、『お時』の二字を大きく書いた。

『叱られるで。』と言ひながら、定吉は軈て其の樂書を悉皆消して了つた。

六

この村へは一年に一度か二度ほどしか來ることのない、變な帽子を被つた電報配達人が、松原の入口を小走りに入つて來たので、村の人達は皆目を欹てた。

『何家やろ。』

『誰れが死んだんやろ。』

人の死んだことを知らせることより外には、電報といふものの使ひ道のあることを知らぬ村人たちは、配達人の提げた赤い印の付いた小鞄を恐怖の征矢として、其の飛んで行く先きを見極めようとした。家の奥の方にゐた人は戸口まで出て見てゐた。自分の家の前をば無事に通り過ぎた赤い小鞄を見送つては、ほツとして、死神の來訪を免れた喜びを顏一面に浮べた。

『俺んとこは今親類に病人もなかつたんぢや。心配することはない。』

『けんど、急病頓ころちふこともあるさかいなア。いゝ、きんのまでピチ〳〵してて、ケンビキが肩滅して死ぬ人もあるやないか。』

配達人の行き過ぎてから、こんなことを語り合ふ人々もあつた。

電報配達人は、兩側に並んだ五六軒の家の何處へも入らずに走つて、天滿宮の東門前の水茶屋の前に立ち止まつた。

『梅鉢屋さんや、梅鉢屋さんや。』と人々は騷ぎ出した。武士が帶刀のまゝ天滿宮の境内に入ることの出來なかつた時代には、梅鉢屋の女將が赤毛氈を敷いた店頭に立つて、『御門内はお腰の物が許りまへん。……息んでおいでやす。……お腰の物を預けておいでやす。』と叫んで、店を繁昌さしてゐた。殊に先々代の女將は聲が美しく、天滿村のきりぎりすと呼ばれて、村の老人の中には今でも其の美しい聲色をつかふものがある。

店頭に立ち止まつた配達人の姿を見ると、きりぎりすの孫に當る蚕のやうに痩せた今の若い女將が飛んで出て、配達人に何か言つてゐた。配達人は何事をか教はつた樣子で、きりぎりすの代に建てた水茶屋の大きな土藏に添うて眞ツ直ぐに、天滿宮の東門の石段を登つて行つた。

『西さんや、西さんや。』

『西さんの奧さんが死なはつたんや。』と、人々はまた騷ぎ出した。

道臣は其の時丁どお時とお駒とを相手にして、居室で酒を飲んでゐた。この二ケ月ばかり、月日は目にも止まらぬほど早く經つて、麥の穗は黄色く、四邊は若葉の匂ひに埋れた。もう少しすると鮎が捕れる山川は、此頃引き續いて雨が多いので、水が濁つて瀨も隱れた。眺望が佳いからと言つてこの梅の坊を擇んで住居にした道臣も、此頃では、景色なぞはどうでも可い、といつた風で、毎日お駒やお時を相手にして酒ばかり飲んでゐた。

『かんのし(神主)て、えゝ商賣やなア。』と、毎晩のやうに來る定吉は羨ましさうにして言つた。

お駒が酒のお酌か何かに道臣の居室へ入つて、長いこと密々話なぞしてゐる時、定吉は別に何事をも感ぜぬらしく、竹丸を嘲弄つたりして面白さうにしながら、何時までも根氣よくお駒の出て來るのを待つてゐた。夜晩くなつてもまだお駒と道臣とが居室から出ないと、竹丸はよく定吉の膝に凭れて眠つた。お駒は定吉の來て待つてゐるのを知つてゐながら、別に氣の毒がるといふことはなく、憚るといふ風も見せずに、四時間も經つてから、のツそりとして出て來ると、定吉と顏を見合つて互ひにニヤリと笑つた。其の後から道臣が大手を振り〳〵、煙草盆を片手にノツシ〳〵と疊を踏んで出て來て、定吉とお駒とが睦まじさうに膝突き合はしながら話してゐる仲間へ入つて、三人で嬉しさうに笑ひ興じた。

お時が絶えず出入りするやうになつてからも、男と女、女と女との間に、かういふことで互ひに遠慮し合ふといふやうな樣子は見えなかつた。これがこの村の一般の氣風であつた。武家に育つて、こんな氣風に慣れぬことから起つた京子の惱みが、其の不治の病に罹る因であるといふ噂もあつた。

『お時さんは飲けるんやよつて。』と、お駒は道臣が自分に獻した盃をお時の前へ置いて、波々と注いだ。

『あゝお駒ちやん、あんたの貰たお盃やないか。一人で飲めんのなら、定はん呼んで來て助けてお貰ひやす。』とお時は笑つて、注がれた盃をお駒の前へ戻さうとすると、お駒がまた笑ひながら押し戻したので、酒はだら〳〵と疊の上に溢れた。

『勿體ない〳〵。』と、道臣も痘痕のある赭顏を酒にほてらしつゝ、兩手に櫻と桃とを翳した喜びの色を漲らした。

『電報ツ。』といふ叫びは、この時玄關に響いた。

お駒が顏の色を變へて、立つて行かうとすると、お時も續いて立つた。

『わたへが行きます。』

『いゝえ、わたへが。』

二人の女の先きを爭つてゐるのを、道臣は細いドリ目を溶けさうにして見やりつゝ、電報といふ恐ろしいものの來たことを氣にもかけぬ狀であつた。其處へ、何處かで遊んでゐた竹丸が、素早く電報を受け取つて持つて來た。先きを爭つてゐた二人の女は笑ひながら坐つて、電報の封を切る道臣の手を見つめた。顏に比べて手の綺麗な道臣は、右の紅さし指に嵌めた細い金の指輪を光らしつゝ、馬鹿丁寧に電報を披いて讀むと、一寸考へる風をして、また元の通り電報を丁寧に疊んで、側の小机の上に置いた。

『何んの電信だす。……病院から。……』と、お時は膝推し進めて問うたが、道臣は默つて盃を差し出した。

德利はまたお駒の手で熱いのに取り代へられたが、酒はもうはずまなかつた。

『一寸大阪へいて來んならん。』かう言つて道臣は、盃を足附きの高膳の上に伏せた。

『お父つあんに知らして來まへうか。』とお時は心配さうな顏をして、小机の上の電報送達紙から眼を離さなかつた。

『さいやなア。これ持つて去んで見せとくれ。』と、道臣は赤い封紙の正しく切られた電報をお時の白い手に握らせた。

七

千代松は大阪行の支度をして、あたふたと出て來た。竹丸が電報を受け取つた時のまゝ珍らしく大玄關が開け放しになつてゐるので、砂利を敷いた其處の敷臺の前から、

『えらいことになりましたなア。これから行きまへう。』と、千代松は滅多には出さぬ高聲をして言つた。
『あんたもいて呉れはるか。』と、道臣は繕つた顏に笑を浮べて答へた。
『ハッキョウちふんやさかい、どツち道輕いこツちやおますまいと思ひまして、金もちいと用意して來ました。』と、千代松はまだ少し早いが輕いからよいので着て來た紺飛白の單衣の裾を捲つて、式臺に腰を下ろした。
『えへん、えへん、えへん。』と續けさまに咳をした道臣は、千代松が喋舌る電報の中味を、竹丸やお駒に聞かせぬやうにしようとした。お駒は聞く耳を立てつゝ、道臣の外出の着物を簞笥から出した。
ちやんと紋服に袴を着けて玄關に現はれた道臣の姿は、流石に昔が偲ばれた。其處へ定吉が來て『留守を賴む。』なぞと道臣に言はれてゐた。
『火の用心に氣を付けて。……』と、道臣は繰り返し繰り返しお駒に言つて、千代松を後に門を出た。
『猿にも衣裳や。』
お駒は定吉と二人で玄關横の連子窓から、伸び上つて道臣の後姿を見送りながら、こんなことを言つて笑つた。
『千代さんは仲間みたいやなア。村一番の良い衆(の家持ち)とは見えん。』と、定吉は、油のコテ〳〵した千代松の丁髷が、午後の日影に光るのを見てゐた。
『竹にも見せて。』と背後へ竹丸が來て、定吉の帶に取り付いたので、定吉は重さうに竹丸を抱き上げてやつた。道臣と千代松とは鳥居の前で丁寧に天滿宮を拜禮して、東の門の方へ、葉の繁つた櫻の老木の蔭に姿を消した。
『奧さん死なはつたのん。』
『まだ生きてやはるんやらう。……狂氣になはつたんらしい。』
『狂氣。……』と、定吉は眼を圓くした。
『奧さんも氣の小ひさい人や。……胸の狹い人や。』と、お駒は平氣な顏をしてゐた。
『お駒ちやん、奧さんに喰ひ殺されるで。』と定吉は恐ろし氣な身振りをして見せた。
『わたへよりお時さんが危い。』と、お駒は矢張り平氣で笑顏を續けた。
『けんどお前は常時此處に居るんやし、お時さんは自分の家に居るんやさかい、どうしてもお前の方が憎まれる。……寢てるとこ咽喉笛に喰ひ付かれたら南まん陀佛や。』と定吉は氣味わるさうに言つた。
『負けるもんか、長いこと病み呆けた人に。……出て來たらギュウと押へ付けてあげる。健康な時でもわたへの方が强い。』
『どうや知らん。』
定吉は不安さうに言つて、腰の煙草入を弄つてゐたが、
『其の時は俺が毎晩泊つたろ。』ときも名案を思ひ付いたやうに言つた。
『さうしとくれ、そんなら安心や。』とお駒は臺所の方へ行つた。
『坊んち、阿母さんが死んだら踊りまへうか。』と、定吉は手に唾を付けて、竹丸に角力を挑む狀をしながら言つた。
『ふん踊らう。』と竹丸は妙な手付きと足踏みとで座敷中を踊り廻つた。定吉もそれに連れて、盆踊りの形をして靜かに踊つた。
『何んや定はん、置いとくれんか。子供みたいに、阿呆らしい。』
臺所から箒を持つて來て、掃除を始めようとしたお駒は、かう言つて、箒で一つ定吉の臀をどやし付けた。定吉は竹丸と一所に道臣の居室に逃げ込んだ。後を追つて來たお駒は、其處に

飲み荒らし喰ひ荒らしたまゝ殘つてゐた杯盤を見ると、箒を棄てて、

『あゝ定はん、一杯飲みんか。わたへが酌するよつて。』と、取り上げた德利の尻を撫でてみて、夏になつても爐塞ぎをせぬ煮立つた釜の湯に漬けて燗をしなほした。

それからお駒は、定吉を道臣の座蒲團の上へ坐らして、

『さア旦さん、一つお喫りやしとくれやす。』と恭しく盃を進めた。

『うん、駒、燗はよいか。……えへん。』と定吉は道臣の眞似をしたが、どうも耐へ切れぬといふ風で、其の眞面目腐つた顏を崩して、大きな聲で笑つて了つた。お駒も共に笑ひ轉げた。竹丸も變な顏をしながら笑つた。

八

其の翌日の午後、京子は駕籠に乘つて大阪の病院から歸つて來た。

お駒と定吉とは、正午少し前頃まで寝てゐて、門も雨戸も閉め切りになつてゐた。節穴や隙間から日の光が白く射し込んで、サーチライトのやうにお駒と定吉との枕元を照らした。前の晩獨り寂しく眠つた竹丸は、朝早く飯も喰べずに裏口から出て、遊び廻つてゐた。だいぶ熟しかけた梅の實を取つては、鹽を付けてポリ〳〵喰べた。

巡禮や參詣人が二三人も來て、神名帳や神符を頂きに社務所へ來たけれど、門が閉まつてゐるので、暫く扉を叩いてはブツ〳〵言ひながら立ち去つた。

漸く眼を覺まして、餘りに日の高いのに驚きつゝ、定吉は起き上つて雨戸を繰り開けた。それに續いて、お駒も眼を擦り〳〵起きて、よたよたしながら便所へ行つた。二人は緣側で眩しさうな眼をして、顏を見合つたまゝ默つて突つ立つてゐた。白日は容赦なく二人のしどけない姿を照らし付けた。

雨戸を開け、門を開け、掃除を濟まして、やつと人心地が付いた時、川向うの潮音寺の鐘が、ゴーンと耳を刺すやうに響いた。

『やアい、正午ぢやぞ。』と叫ぶ農夫の濁聲が何處からか聞える。眠さうな牛の鳴き聲もしてゐた。

急いで炊き付けた釜の中の米が、漸く飯にならうとする時、『えへん、えへん』と道臣の咳が先づ聞えて、京子の乘つた駕籠が嫁入りの時のやうに、玄關へ乘り付けたのである。

股立を取つた道臣の袴にも、尻端折つた千代松の股引にも、砂埃りが付いてゐた。駕籠舁夫が二人、車夫が二人、ドヤ〳〵として井戸端で水を飲んだりするので、周圍が俄に混雜をして、お駒はたゞ茫然としてゐた。

客座敷と道臣の居室との間の六疊に、千代松の手で蒲團を敷いて、病人を寝さした。ツイ二三ケ月前までは、痩せて行くばかりであつた京子の身體に、甚だしい水腫が來て、角力取りのやうになつてゐた。眼が細く顏が大きくなつて、昔の面影は何處にもなかつた。

それを襖の隙間から覗いた竹丸は、慄然として、お駒から聴いた化猫の話が、いよ〳〵確められたやうな氣がした。道臣は袴も脱がずに竊と竹丸を小手招きして、便所の横の戸棚の前へ連れて行き、

『阿母さんは無茶いふよつて、あんまり側へ寄らんやうにしいや。竹、竹いうて呼んでも、聞えん風してるのやで。』と小ひさい聲で言つた。

『疲勞れたと見えて、スヤ〳〵寝てはります。あの分ならまアちよいと安心だすなア。』と、何時の間にか千代松が足音も立てずに背後へ來てゐた。

「さらだすか、わたへ等もしつかり疲勞れまし

たなア。まア緩然一服しまへう。』と、道臣は稍どぎまぎしながら言つて、先きに立つて居室へ入つた。

『三月に病院へいた時、蠟燭を十二本も呉れはつたので、可笑しいとおもてましたんやが、あの時から少し變つてましたのやなア。』と、千代松は例も自分の坐るところへ例ものやうな形に、阪こで捺した如くキチンと坐つて、肩を搖り搖り低い聲で言つた。

『刃物弄りさへせんと、まだ置いといてもよいのやが、と院長がいうてました。初め剃刀を弄つてゐたのを看護婦が騙して取り上げたんやが、其の次ぎにまた匕首を弄つてたのを見付けたんで、取り上げて了ふと、それから暴れ出したんだすな。……院長もさうは言ひよらんけど、さうらしいと思はれますなア。』と、道臣は京子の短刀を懐中から出して机の上に置いた。

『其の匕首はあの人の寶物や。肌身離さず持つてゐやはつたんやさかい、それを取り上げると氣も狂ひまへう。……拔けんやうにして持たしとかはつたら、よろしいやろ。』

『拔けんやうにちうても、狂人力で拔くかも知れんなア。』道臣は首を傾けた。

『あんたも疲勞れなはつたやろ、六里の道歩きなはつたのは近年ないこつちや。わたへもだいぶ疲勞れましたわい。……駕籠屋と車屋去なして來て、ちいと息まして貰ひまへう。あんたも息みなはれ、定はんが居るらしいよつて、あの子に病人を番してゝ貰たらえゝ。』

かう言つて千代松は靜かに立ち上つたが、

『乘らん車屋に、空車曳かして連れて來たんやもん、阿呆らしい話や、錢只取られて。……けんどいゝ、わたへは一里も乘つたかいなア、あんたは全で乘りなはれへなんだなア。』と、物惜しさうな顔をして道臣の額を見た。

『わしも一町や二町、あれで乘りましたやろ。駕籠の側離れると病人が喚き出して轉け出さうとするもんやよつて、到頭駕籠脇の武士みたいなことを初めて勤めて了うた。』と、續けさまに煙草ばかり吸つてゐた道臣は、プッと細長く煙を吐き出してから言つた。

『天下茶屋の芝居の元右衞門みたいに、駕籠から太い腿を出して、バタ／＼暴れられた時は、往來のもんが立ち止まつて見るし、わたへも氣が氣やおまへなんだ。』と、千代松は言つて、臺所の方へ出て行つた。

道臣はポン／＼と手を鳴らしてお駒を呼ばうとすると、次の室で病人が健康であつた時のやうに、『ハイー』といふ返辭をしたので、氣味わるがつて首を縮めつゝ、病室を覗いたが、京子はまた眼を閉ぢてスヤ／＼眠つてゐた。其處へお駒が來たので、

『酒を持つて來て呉れ、酒を。』と言ひ付けて、漸く氣が付いたやうに袴、羽織を脱ぎ棄て、襟垢の付いた平常の白衣を引ッ掛け、白い帶をグルグル卷きにして、コロリと横になると、手枕をして、

『チャンヤリホイロ……』なぞと、輕く疊を叩きつゝ、手拍子を取つて、篳篥の樂譜をやり出した。

其處へ千代松がまた猫のやうに、足音もなく入つて來て、小ひさな帳面に細かく書き付けたのを見てゐたが、軈て懐中から玉の大きい老眼鏡を取り出し、道臣の枕元に坐つて、委しく昨日からの入費を説明した。道臣はそれを碌に聞かないで、たゞ『ふん、ふん』と點頭いてゐた。

五百石を上地した公債證書を千代松が預つて、道臣の家の不時の物入りを辨ずることになつてゐるので、綿密で周到な千代松は、一厘一毛までも誤りのないやうにしようとするのである。果ては懐中から小ひさな算盤を取り出し、節くれ立つた指で、やりにくさうに彈き出した。

お駒が酒を持つて來たので、道臣は起き直つて膳の上でチビリ〳〵始めた。千代松はそれに構はないで、算盤と帳面とを睨んでばかりゐた。道臣も千代松には頓着なく、忽ち一本を傾け盡した。

『お父さん、お父さん。』と、次の室で病人が途方もない大きな聲を出したので、道臣と千代松とは驚いて顏を見合はした。お駒は顏の色を蒼くした。

『お父さん、早うおいなはれ。……あゝ天神樣も御一所に。……齋世親王樣もお姫樣も。……』

一向に分らぬことを、病人はいよ〳〵高聲で叫び出した。

道臣は盃を下に置き、千代松は眼鏡も帳面も算盤も一所に懷中へ捻ぢ込んで、京子の枕元へと急いだ。お駒は立つたり坐つたり、たゞ周章てゝゐた。

『京子、氣を確かに持ちんか。……お前のお父つあんは、もう故人になられたやないか。』と道臣は、動もすれば歩き出しさうな京子を押へながら言つた。

『あれあこへお父さんが來る。』と、京子は半ば起き返つて、障子のガラス越しに川向うを指さした。其のガラス障子は、何事にも珍らし物喰ひの道臣が、まだガラス障子といふものの出來たてに大阪へ註文して、この室の四枚だけを昔から嵌まつてゐた黑塗り腰高のと取り替へたのである。其の頃は京子の實家も全盛で、河から河へ廣い地面を貫いた網島の邸に贅澤をしてゐた。たま〳〵道臣が其の邸へ行つても、出入りの骨董屋以上の待遇は受けられなかつた。『昔は五百石の御朱印で』なぞと言つても、『乃公の家の糊米だ』と京子の父は高を括つて道臣を見下げた。腹が妾だといふので、長女には生れてゐても、京子は弟や妹ほど父に重んぜられなかつた。廣い家には道臣も昔から慣れてゐたけれど、網島の邸の內部の數寄を凝らしたのと、美しい小間使たちの多いのとには、キョロキョロして京子に窘められることも多かつた。其處の三階の小座敷で、鼎形の瓶かけに銀瓶の湯のたぎる音を聽きつゝ、前面の淀川からお城の角櫓の白壁までを見渡したガラス障子越しの眺めに感心して、道臣は直ぐ自分の家にもガラス障子を嵌めたのである。馬も網島の義父の眞似をして飼つてみたけれど、庭の泉水に羽を切つて放してあつた丹頂の鶴は、羨ましがるだけで、眞似がしきれなかつた。

『あゝ孫一が來る。』と病人はまたガラス障子越しに指さしたので、道臣も千代松も前と同じやうにツイ其の方角を振り返つたが、川向うの縣道には人ッ子一人通らないで、里道との辻に立つた自然石の常夜燈が、寂しく夕陽を浴びてゐた。

『孫一、大けなつたなア。』と、病人はまた叫んだ。孫一といふのは、竹丸の兄で、生れて一ケ月經たぬ中に亡つた稚子である。其の次ぎに産れた竹丸の姉は、一年ほど生きてゐたが、この二人の子は村の北山の別當代々の大きな五輪の並んだ後に、二つの小ひさな石碑となつてゐる。孫一の生れた時は、京子の父が初めての孫だと言つて、自分に孫一といふ名を選び、舊藩主から拜領の、轡の紋を散らした黃金作りの大小を幼い孫へ贈り物にして喜んだ。

『あゝ西鄕樣が。……西鄕隆盛が。……』と、病人は今までよりもまた大きな聲で、殆んど怒鳴るやうに叫んだ。

『これ〳〵、氣を確かに持ちんか。』と道臣は、當惑の色を浮べて言つたが、ズッと前に網島の邸へ西鄕隆盛といふ大入道が、粗末な飛白の着物に白い兵兒帶をだらしなく結んで、『居るか』と太い聲をして來たことのあるのを思ひ出してゐた。鳥羽繪の西鄕隆盛といつたやうな人相をし

てゐるので、多分さうした綽名のある何處かの奇人でもあらうと思つてゐると、それが眞個の陸軍大將西郷隆盛であつたのに驚いたことは、今でも半月に一度ぐらゐ思ひ出してゐる。京子の兄の一郎といふのは西郷戰爭の時賊軍に味方して「勝てば官軍……」と歌つたが、其の後アメリカに逃げたとか聞いてゐる。この亂暴者が嘗て父の愛馬を厩から盜み出し、網島から一鞭あてて、六里の道を天滿宮まで乘り切り、汗塗れになつた馬を繫ぎもせずに、道臣を相手に大杯を傾けたことなぞが、次々に思ひ出された。病人がこの次ぎには必ず『一郎さん』と叫ぶであらうと、道臣は考へたが、今度は、

『竹ちやん、竹ちやん。』と優しく竹丸の名を呼んだ。

「竹さん、竹さん。」と、千代松は聽き取れぬほどの低い聲で、次の室の方に向つて呼んだ。今まで何故竹丸の名を呼ばぬのかと、不思議に思つてゐたのであらう。この場合病人の心を和げて、幾分でも落ち付かせるのは、竹丸を呼んで來るに限ると、千代松は遂に立ち上つて、竹丸を探さうとした。

母の側へ行くのに怖氣をふるつてゐた竹丸は、お駒に引ツ張られ、定吉に押されて、病室の入口の襖の蔭まで來てゐたので、それを見た千代松は否應なしに連れ込んで、京子の枕元に坐らした。

『竹ちやん、遠いとこをよう來たな。いゝ、しんどかつたやろ。』と、京子はちやんと起き上つて、舐め付かんばかりの嬉しさを湛へた。竹丸は木像のやうに四角張つて、眞正面を向いたまゝ、瞬きもすることが出來ぬらしかつた。

『竹ちやん、お前も十二やよつてな、櫻井の驛子別れの時の正行と同い年や。阿母さんのいふことを、よう覺えときや。……この匕首はなあ、阿母さんのお父さん……竹ちやんの祖父さんの記念や、これをお前にあげるよつてなア、……阿母さんが死んだら、これを阿母さんやと思うて、大事にするんやで。……阿母さんの顏が見たうなつたら、これを拔いて見るのや、さうするとこの白刃の中に阿母さんの顏が映つてる。……若し阿母さんの惡口をいふ奴があつたら、こいで斬るんや。』

眼も何も腫れふさがりさうな顏に、涙の露をたらして、京子はチッと竹丸の顏に眼を注ぎながら、右の空手で大事な物を握つてゐるやうにして、恭しく前に差し出した。

『竹さん、阿母さんが、刀をあげると言やはるんだす。お辭儀して頂きなはれ。』と千代松は竹丸に言つて、眼配せをしたけれど、竹丸は何が何やら分らぬので、腕まで腫れて來た母の拳を見詰めてゐた。

『そんなら、わたへが取り次いであげまへう。』と言つて千代松は、兩手で京子から物を受ける眞似をして、一寸押し戴くと、更にそれを竹丸の懷中へ入れてやる眞似をした。竹丸は擽つたさうな顏をして、母の身體から眼を離さなかつた。

『竹ちやんも大けなると、腎張になるんやろ。……親に背ん子は鬼子や。』と言ふかと思ふと、大きな聲でゲラ〳〵と笑ひ續けた。

『其處に居るんは誰れや。』

急に笑ひを止めて、京子は次の室の敷居際に坐つてゐたお駒に眼を付けると、から言つて屹と睨めた。お駒は顏を赧らめて尻込みするのを、千代松が取り成す風にして、

『駒だす。あんたのお留守に一人で竹さんのお世話をしてゐました。』と言つた。

『駒……駒……駒鳥……將棋の駒……此處へお出で。』

また笑顏になつた京子は、ます〳〵尻込みしようとするお駒を、腫れた二重瞼で麾いた。

道臣とそれから次の室の襖に半分顏を現はした定吉とは、冷水でも浴せられたやうな狀をした。

「お駒ちゃん、お召しや。」と、千代松は目顏で知らして、病人に逆ふなと注意したので、お駒は澁々病床近く膝行り寄つて、お辭儀をした。

『お駒ちゃん。……ハヽヽヽ。可愛らしい名やなア。』と、京子は眞向から大きな聲を浴せて、綺麗に結つたお駒の頭髮と愛くるしい顏筋のあたりとを見た。

『お駒ちゃん、お前は何や。……此處の家で何んしてるんや。……お前に竹ちゃんは與らん。欲しいやろ竹ちゃんが。……何んぼ欲しがつても與らん、與らん、與れへん。』と京子は鋭く首を振つた。

『駒は内方の召使やおまへんか。女樂だすで、女中さんだッせ。』と、千代松は低い聲をして嚙んで含めるやうに言つた。

『女中。……家の女中は代々「鶴」だす。駒といふ女中はおまへん。……駒はてかけ(妾の)はんだすやろ。……女中なら白丈長を掛けますが、てかけはんだすよつて、赤い鹿の子掛けてます。』と、京子は憎々し氣にお駒の頭髮を見入つた。

『てかけでも足かけでもおまへん。わたへが請け合ひますさかい、安心しなはれ。』と千代松は微笑んだ。

居たたまらぬ風で、冷汗を流しつゝ居室へ入つた道臣は、燗冷ましの酒を手酌でグイ〳〵飲んだ。

九

子宮病から嚴しいヒステリーになつて、それから心臟をわるくしたといふ病院の見立てであつたから、かゝり付けの醫者もそれによつて投藥したけれど、京子の病氣は日増しに惡くなるばかりであつた。何をするか少しも油斷がならぬので、道臣と千代松と定吉とが代り合つて、日夜病床に附き切つてゐた。

「大事の〳〵匕首がない。番頭さんが盜んだんやろ、お父さんに申譯おまへん。」と、京子は突然泣き聲を出して、敷蒲團の下なぞを探つた。

『いゝ、あんたあの匕首は、いゝ、となひだ竹さんにあげはつたやないか。』

「いゝえ、竹には與れしまへん。竹が持てよるんなら、盜みよつたのか。……竹……竹……竹。」と、京子は大きな聲で呼んだ。其の聲を聞くと、竹丸は驚いて表門の外へ逃げ出して了つた。

お時が厚化粧を凝らして病氣見舞に來た。

「あんたは何處のお方や。えらう綺麗にしてはるなア。」と、先刻から蒲團の上に起き返つて坐つてゐた京子は、ケロリとした顏をした。

『まア奧さんとしたことが。』と、お時は情なさうな顏に涙を浮べて俯向いた。

『まア奧さんとしたことが。……』と、京子は嘲笑ひながら、お時の聲色を使つた。

「奧さん、ほんまに、わたへがお分りになりまへんか。」と、お時はハンケチで涙を拭き〳〵、顏を上げて言つた。

「奧さん、ほんまに、……わたへがお分りになりまへんか。」と、京子はまた口眞似をして、有り合はした手拭で涙を拭く形までして見せた。

「奧さん、氣を確かに持つて、ようわたへを思ひ出しとくれやす。」

お時は絞り出すやうな聲で、から言つて、また溢れ落つる涙を拭いた。

「奧さん、氣を確かに持つて、……」と、今度は京子があかんべえをした。

何とも物の言ひやうがないので、お時はたゞ呆れた顏をしてゐると、京子の方から意地わるさうな聲を出して、

「奧さん。……」とやり始めた。お時は堪らない

ほど悲しい顏をして、わッと泣き伏した。
『何んぼ何んでも、お時さんを忘れるちふことがあるか。……千代さんとこのお時さんやないか、お前がお針を教へたし、金毘羅さんへも一所に參つたやないか。』と、道臣はお時の方を見い見い、氣の毒さうな顏をして言つた。
『またあんなこというて騙すのや。……千代さんとこのお時さんは、天神さんのお姫さんになつて、齋世親王と牛車の中でな、……ほゝゝゝほ。』と、京子は若い娘のするやうに、科を作つて、寢衣の袖で羞かしさうに、腫れた顏を掩うた。
『何いうてるんや。……京子、お前氣を確かに持つて、ゆつくり考へてみいや。お前は夢でも見てるんやらう。』
道臣は物靜かに、よく分らせようとして言つたけれど、京子は劇しく首を振つて、
『阿呆らしい、そんな勿體ないこと考へてるよつて、天滿宮さんの罰が當るんや。道眞公の臣やいうて、道臣ちふ名つけたかてあかんなア。』と道臣を尻目にかけて言つた。
道臣は差し俯向きつゝ、頻りに考へてゐた。
お時は顏を上げて、泣き腫らした眼をしばたゝきながら、ニヤリと笑つて道臣の方を見た。
『空涙溢したかてあかん。』といふかと思ふと、京子はすッくと立ち上つて、次の室から臺所の方へ歩き出したので、道臣もお時も周章てた風で其の後に隨いた。
臺所の板の間に居たお駒は、京子の姿を見ると逸早く裏口へ逃げ出した。竹丸も續いて逃げたが、定吉だけは、今まで自分に並んで腰をかけてゐたお駒の尻の跡の暖かくなつてゐるところを撫でつゝ、獨りだけ逃げずにゐた。
『あゝ櫻丸がゐた。……お前の嫁はんはお八重ちふんやろ。……何處へ逃げた。』と、京子は定吉の前に立つて言つたが、何か急に思ひ出した風で、土間からお駒の古い利休を穿いて、キューキューと厭な響をさせながら、裏の井戸端へ行つて、深い井戸の中を覗き込んだ。

十

其の夜千代松が來て、例もの通り足音も立てずに、猫の如く臺所から上つたが、誰れも居ないので、其處の圓形の大火鉢の前に坐つて、何うかすると薄ら寒い初夏の夜を、眞黑に煤けた藥罐の上に兩手を翳しつゝ、半時ばかり默つて過した。大きな古家の内は、死に絕えたやうに靜かで、奧の方にも咳拂ひ一つ聞えなかつた。
横の方の柱には、珍らし物喰ひの道臣が、網島の邸の廊下にあつたのを見て、直ぐ同じ物を買ひ調へた反射器附きの掛けランプが、此頃はもう燻つたまゝぼんやり光つて、だだッ廣い臺所の隅々までを塵一本も殘さずに照らした昔の面影は見えなかつた。千代松は火鉢に翳してゐた兩手を懷に收めて、首を傾けつゝ、傍の俎板の上に澤庵漬けの黃色い大根が半分だけ切り殘されて、庖丁とともに置きッ放しにしてあるのを見詰めてゐた。
奧の方に足音がして、大黑柱の横に寂しく姿を現はしたのは定吉であつた。
『あゝ千代さんが來てなはつたんだすか。』と、定吉は稍安心した容子であつた。見れば顏の色は蒼くなつてゐる。
『狂人さんは何うしてはる。』と千代松は何氣なく問うた。
『寢てやはる。……それよりわたへ今しよんべんに上の雪隱へ行くと、戶の中で拍手が三つ鳴つた。あれは一體何んやらう。』と、定吉の顏色はまだ元の通りにならない。
『レコが入つてたんやろ。……あの人も雪隱で拍手を叩くなんて、少し傳染つて來たかなア、おきちが。』と千代松は微笑んだ。

『旦那は納家でお駒ちゃんと飲んでやはる。』と定吉は首を振つて、千代松の側へ摺り寄つた。
『納家で酒飲んではる。……』と、千代松は變な顏をして裏口の方を見た。
『上の雪隱には怪しいものが居るに違ひない。俺アしよんべんしたいんだが、怖うてもう中の雪隱へも下の雪隱へも行かれん。』と、定吉は千代松にくつ付くやうにして、兩手を火鉢に翳した。
『わしが代りにいてこうか。』と、千代松は冷かしたが、心の中では初代の梅の坊が女犯の罪を自ら責めて、別當への申譯に、あの上の雪隱で舌を嚙み切つて死んだといふ話に就いて考へてゐた。
梅の坊の幽靈なら拍手は打つまい。鉦を叩くか珠數を揉むかするであらう。狸が腹鼓を打つたのが、拍手のやうに聞えたのではあるまいかとも思つた。
いつの頃であつたか、ズッと前の或る晩に、お時がこの家へ手傳ひに來た時、上の雪隱はお客用としてこの家の人が少しも入らないのを知らずに、あの暗い廊下を行くと、便所の中にあかあかと燈火が點いてゐるので、此方から聲をかけたが、答へはなくて、燈火がふつと消えて了つたといふことをも思ひ出した。梅の坊へ入る人が代々色好みなのも、初代の祟りであらうといふ村人の噂も考へられた。
『上の雪隱と言ひ、風呂場の踏石と言ひ、この家には祟り氣のあるもんが多い。』
千代松も覺えず心細さうな獨り言をした。
定吉は氣味わるさうに千代松の顏を見て、
『風呂場の踏石て何んだす。あの四角い大けな踏石が祟るんだすか。』と慄へ聲をして言つた。
『祟るも絲瓜もあるもんか。』と、千代松は俄に態とらしく笑つた。
『先刻お時さんが來やはつたけど、奧さんは分りまへんのや。あんた何處の人やちうて問やはりました。それから妙なことばかり言やはりますのや。……お時さん泣いてはつた。』と、定吉は少しく落付いた狀をして言つた。
『さうやつたてな。けんどそれやわしに言はすと譃や。何んぼ氣がちごたかて、わしを知つて、お時を知らんちふことがあるもんか。其處んとこは作り狂氣や。……何んぼ何んでも、菅原の芝居やおまへんで、櫻丸や菅秀才が出て來て耐るもんか。……わたへは憎まれ役やさかい、差し當り時平公か松王ちふとこや。』と、千代松は何處までも粘り强さうな顏に、太い皺の波を打たせた。
『わたへらのまだ生れん前に、村で狂言(素人芝居の事)があつた時、あんたは近江源氏の花賣佐々木を演なはつたさうだすな。……今ならわたへが盛綱を演て、あんたに時政を演て貰ひますなア。』
『そんな臆病な盛綱では、和田兵衛の鐵砲の音で眼を廻すやろ。』
二人は相顧みて笑つた。其の時外の濡れ緣の横にある物置の邊で、ガチヤンといふ大きな音がしたので、定吉は忽ち顏の色を變へた。
『猫やろ。……シイッ〳〵。』と言つた。
『猫にしては、ちいと音が大け過ぎるなア。』と言ひ〳〵、千代松は立ち上つて靜かに障子を開けると、外は星月夜で、濡れ緣の前の御所柿の黑い幹は人の姿のやうであつた。眼を据ゑてヂッと横の方を見ると、何やら動いてゐるものがある。
千代松は後を振り返つて、一寸定吉の頸筋を見てから、外へ出て、音のせぬやうに障子を閉めると、拔き足で濡れ緣から物置の前へ行つて、逃げようとする影のやうなものを中の便所に追ひ詰めた。逃げ場所がなくなつて後を向きつゝ、
『今晩は。……』と言つたのは京子であつた。

寢衣も何もはだけ放題にはだけて、太腿までもあらはに、口の邊には、鐵漿のやうなものがベタベタ附いてゐる。千代松は先づ無言のまゝ京子を伴うて、中の便所へ通ふ開き戶から、黛玉和歌集が披かれたまゝ卓机の上に載つてゐる道臣の居間を經て、行燈の薄暗い病室に送り込み、轉がすやうにして蒲團の上へ横にした。

裏口の戶を閉め切つて、納家の蓆の上で、京子に知れぬやうに、お駒の酌で酒を飮んでゐた道臣は、腰の邊に藁屑の附いたまゝ、微醉で病室に入つて來て、何も知らずに、

『京子、加減はどうやなア。』と言つた。

漸く放たれたお駒は、臺所で千代松の坐つてゐた跡へ、定吉に寄り添うて坐りながら、二三杯無理に飮まされた酒臭い息を吐いた。

『風呂場の踏石なア、あれが祟つてるんやさうな。……千代さんがさういうてた。』と、定吉はお駒の顏を覗きながら言つた。

『さうや、あの踏石は、旦さんが裏の藪にあつたんを運ばして据ゑたんやが、何んでも昔のえらい大將の石塔の臺やといふ話や。それが祟つて奥さんが病氣にならはつたんやろ。』と、お駒は事もなげに言つて退けた。

『千代さんがそんなこと知つてるんなら、なんで旦那に、あの臺石を元の藪に戻しなはれて言はんのやろ。……お駒ちやんも、なんで默つてるんやなア。』と、定吉は不思議さうな容子をした。

『千代さんが、そんなこと旦那にいふもんか。……千代さんは奥さんの死なはるんを待つてるんやないか。お時さんを二度目の奥さんにしようとおもて。……それからお時さんの妹がゐるやろ、あの子は十一かなア、あれを坊んちの嫁はんにしようとおもてるんや。よう分つたる。……今に天滿宮さんを皆な千代さんが取つて了ふんやろ。』

聲は低いけれど、お駒は言葉に力を入れて、定吉に敎へ込むやうにした。

『そんならお前も奥さんが死なはるやうに、風呂の踏石のことを旦那に言はんのやなア、あゝさうか。』と、定吉は厭味らしく言つて横を向いた。

病室では千代松が道臣に默つて、京子の口の邊に附いてゐる汚れを拭き取つて見ると、何か知ら青い色をしてゐるので、立つて元の物置を調べて見た。

物置の中には、いろ／＼の物がゴチャ／＼してゐて、綠礬の入れてあつた大きな茶碗へ新らしく水を盛つたのが、マッチの灯であり／＼と見られた。京子は綠礬を呑めば死ねると思つたのらしかつた。

十一

其の翌日の夕方、道臣が風呂へ入つて、お駒に背中を流さしてゐるところへ、定吉が來て、

『お加減はどうだす。ぬるけれや焚きまへうか。』と言つた。

『焚いて好けれや、わたへが焚くし、定はん、放つといて。……それよりお前は奥さんとこへ附いてんと、またよんべみたいなことがあるよつて。』

お駒は道臣の背中へ小桶で湯をかけながら、素氣なく言つた。

『お駒ちやんに言うてるんやない、旦那に言うてるんや。直きに口出すんやなア、お前は。』と定吉はプリ／＼した。

『もうえゝ、結構、それでえゝ。』

上機嫌の道臣はかう言つて、湯桶に浸りながら、

「風呂場で夫婦喧嘩すると、乃公が困るやないか。……駒、お前一寸京子の番してて與れ。定はん、そんなら一つ焚いてんか。賴む。」と、

仲裁顔をした。

『よろしおます。』と、定吉は勝利を誇り顔に、出て行くお駒の帯のハギの赤いのを見送つてから、風呂柴を折りくべて、ドン／＼と釜の下を焚いた。

『ぬるい中に入つて、後からだん／＼熱うして貰ふのが一番やなア。大名風呂ちふのはこれや。』と、道臣はざぶ／＼やつて、いよ／＼上機嫌であつた。

『旦那、この踏石をどけて了うて、他のもんに代へたらどうだす。』と、定吉は火氣と煙とに、額から汗をたらしながら言つた。

『お前もこの石が祟つてるちふんか。そんな阿呆らしいことがあるもんか。……よしんば祟つてたかて、えゝやないか。あんな病人早う片付いた方が好いもんなア。……それでもまだ祟りさうやつたら、其の時元の藪へ戻しとこ。……それでよいやないか。』と、道臣は小ひさい聲で、奥座敷へ氣を兼ねるらしい狀をしつゝ、洒々として言つた。

それから道臣は、風呂の流し場で、お駒の鏡臺を据ゑて、髯の多い顔を綺麗に剃り、まだ時候には早い浴衣を輕さうに引つかけて、京子の病室に入つて行つた。

『えらうやつしてなはるな。えゝ男にならはつた。……若いのんが出けると、自分も若うなるもんやなア。』と、京子は嫉んだ正氣の人のやうな物の言ひ様をして、道臣を冷かした。

其處へお駒が出て來て、何やら角張つたものが新らしい風呂敷に包まれたのを差し出し、

『これを大工さんとこから旦那に上げて呉れちうて、三ちやんが持つて來ました。』と道臣に渡さうとした。道臣は不思議さうな顔をして、それを受け取りかけたが、ハッと氣が付いた狀で、手を引つ込め、

『何んやこんなもん、こんなとこへ持つて來るんやない。彼方へ置いといで、阿呆んだら。』と稀らしくお駒を叱つて、眼に角立てた。

『さいだすか、そんなこと知りまへんもんやよつて。』と、お駒がふッと膨れて、風呂敷包を片手に立ち去らうとするのを、

『それ何や、いゝ、わしに見せとくれ。』と京子は手を差し延べて、お駒から風呂敷包を取らうとした。

『早う持つて行きんか。何グヅ／＼してるんや。』と、道臣は周章てふためいて、お駒の手から風呂敷包を引ッたくると、急いで玄關の方へ立つた。風呂敷の結び目が解けて、衝立の陵王の舞樂の繪の前にころりと落ちたのは、刻み立ての白木の位牌であつた。お駒は凄い眼付でそれを見てゐた。

神道葬祭記といふ本を取り寄せて、この間中から道臣は頻りに研究してゐたが、位牌だけは直ぐ間に合はぬので、出入りの大工を呼び寄せ、本に書いてある雛形を見せて造らしたのである。今風呂敷から拔け落ちた位牌を拾つて納戸へ入ると、内から締りをして、本の繪と引き合はせた上、位牌をば片隅の人の氣付かぬところへ押し隱した。

『あれ何んやろ、ごツつおう(御馳走)か。』と、病室では京子がお駒に言つてゐた。

十二

其の夜丑三つの頃に、道臣は京子の枕元で看病をしながら、ツイうと／＼と居眠りをしてゐたが、蚊帳越しに風と吹き込む夜露を含んだ冷たい風に顔を撫でられ、驚いて眼を覺ますと、京子の寢床は空になつて、緣側の雨戸は人の出入りの出來るほどだけ繰り開かれ、山川の瀬の音が滔々と聞えて、行燈の灯は今にも消えさうにチラ／＼搖いでゐた。

道臣は青い蚊帳を撥ねて立ち上ると、帯締め

直して、上の便所と中の便所とを見て廻つたが、京子の姿は何處にも見えぬので、臺所の次ぎの六疊に寢てゐるお駒と定吉とを蚊帳の外から起さうとした。 二人とも看病疲れでグツスリ寢込んで、定吉の足は二本ともニューと長く蚊帳の外に出てゐた。

道臣は二人を起さなければならぬ急場の用をも忘れて、窓から射し込む星明りをたよりに、額を蚊帳に押し付けて覗き込んだ。

『うん。』と叫んで、定吉が寢返りを打つたので、それに誘はれたやうに道臣は、

『定はアん。』と大きな聲を出すと、定吉は漸く眼を覺まして、むく／＼と起き上つた。お駒も殆んど同時に蒲團の上へ置き直つて、眼を擦り擦り、キョロ／＼してゐた。

『二人ながら一寸起きてんか。』

から言ひ棄てゝ、道臣は病室に引き返した。

定吉とお駒とは、手や顏を掻き／＼後から病室へ入つて見て、病床の空なのに、初めてハッキリと眼の覺めた容子になつた。

道臣と定吉とは手分けして、京子の行方を探しに出ることにした。定吉は道臣が、

『そんなもの持つて行かいでもよいやないか。』

といふのを無理に賴んで、脇差しを一本腰にぶち込み、喜び勇んで、搦手の大將といつたやうな顏をしながら、西の門の方へ出て行つた。道臣はマッチを一つ袂に入れて、東の門の方へ行つた。

お駒は唯一人、怖々で病室に坐つてゐたが、兎ても堪らぬといふ顏をして、玄關に廣い蚊帳を吊つて寢てゐる竹丸の蒲團に這ひ込んだ。

道臣は先づ東の門前の水茶屋の軒下に立つて、何方へ行つたものかと考へた。水茶屋の戸は堅く締つて、雨風に晒された黑い板のところどころに新らしく繕はれた痕が、白く浮き上つて見えてゐた。夜の匂ひは薄暗に漂うて、戸の隙間から若い女將の細い寢息が聞かれるかと思はれた。松原の方へ長く續いた里道の砂塵は、しッとりと露に濡れて、其間は氣の付かぬ凸凹したところが、一目にずうッと見られた。

水茶屋の横を川端へ下りて、猫柳の繁つた岸の上から、水の中を覗くと、星影が魚の目のやうに映つて、清らかな水垢の香が、今年も鮎の豐漁を思はせた。杭に繫いで錠をおろした水茶屋の魚槽には、鯉の跳ねる音がした。

川沿ひに猫柳を分けて、南隣りの村へ渡る長い丸木橋の袂まで來ると、其處は淵になつてゐて、黑ずんだ水の底には、鐘が沈んでゐると傳へられてゐる。牛の寢たやうな岩の上に立つて、夜目の屆く限り見渡したけれど、兩岸には人らしいものの影もない。小石を一つ拾つて投げ込むと、水音とともに緩く波紋を起して、黑い淵は微笑してゐる巨人の脣のやうに見えた。

この底に京子は早や冷たくなつて吸ひ込まれてゐるのではあるまいかとも思つて、道臣は岩の周圍を探し廻つたが、冷かな岩は何事をも語らない。

引き返して、水茶屋の前に、また女將の寢息が漏れるかと立ち止り、それから東の門を入つて行くと、隨神門の内にマッチでも擂つたらしい光がチラと見えた。道臣は神殿の[illegible]の擬寶珠でも盜みに來たものがあるのではなからうかと思ひつゝ、隨神門の扉を押し開いて、兩側に並んだ石燈籠の蓋や、中をくり拔けば大きな水風呂の幾つも出來さうな、太い幹の松杉の根方などに眼を配りつゝ、拜殿へ昇つて行つた。

結界を越えて廣い板の間を歩くと、參詣人の投げた文久錢が足の裏に冷りとした。常に下ろしてある簾をかゝげて、東の局に入つたが、古臭い空氣が鼻を衝いて、自分の姿さへ見られぬ暗黑である。袂からマッチを出して擂ると、今の先きまで人が居たやうで、神殿の遷座式の

時に使ふ手燭の雪洞には、蠟燭が半分ほど燃えさして、吹き消した後の暖みがありさうに見えた。道臣は二度目に擦つたマッチの火を、其の雪洞の蠟燭に移して、よく四邊を見ると、食物を包んで來たらしい竹の皮なぞもあつて、疊に薄く積つた塵埃の上の足跡や膝の跡から見て、三四人の者が車座で賭博でもしてゐたらしかつた。白に黑の紋を置いた緣の上には、煙草の吸ひ殼の生々しい燒け焦げも見えた。

京子が此處へ來たので、賭博を打つてゐた者共が驚いて逃げたのではあるまいか。――と道臣は考へて、雪洞に暗を照らしつゝ、西の局から神饌所なぞを見て廻つた。西の局には、この天滿宮の神體になつてゐる菅公自作の木像を絹地に模寫したといふ、極彩色の衣冠束帶の軸物が掛かつてゐる。道臣は雪洞を傍に置いて、其の軸物の前に拜伏し、稍暫く祈念を凝らした。神饌所では俯伏せにした黑塗りの高坏に雪洞の光と自分の顏とが映つたが、道臣は恐ろしいやうに思つて、映つた自分の顏を正視することが出來なかつた。

雪洞を吹き消して拜殿を下りると、夜はもう曉に近くて、星の影も薄くなつた。拜殿の横から、ぐるりと神殿の後に廻ると、こんもりとした神域の木立は、紫の雲が垂れ下がつたやうで、梟が一聲けたゝましく啼いた。

横の方の玉垣の側で、何やら白いものがチラと動いたやうなので、道臣は足音を偸んで近づいて行くと、其處の大きな杉の幹へ、蟬のやうにピタリとくッ付いてゐるのは、寢衣姿の京子であつたから、道臣は慄然として棒のやうに突つ立つた。

よく見ると、何時の間に持ち出したのか、だらりと垂れた手には金槌を持つてゐる。勇氣を出した道臣が息を吹きかけても分るほどの近さに進んでゐるのに、京子は少しも氣付かぬ風で、身動きをしなかつた。

よく見ると、杉の幹には丁ど京子の頭の屆く高さに、二つの小ひさな市松人形が、釘で打ち付けてあつた。京子が婚禮の時桐の箱に入れて持つて來た上製の京人形で、二つとも女であるが、一つには緋縮緬の着物を着せ、一つには紫縮緬の着物を着せ、腰に下げた將棊の駒の形の迷子札には、麗はしい墨色で名前まで書いてあるのだ。

この二つの人形は、京子が手匣に入れて病院まで持つて行つてゐたのであるが、今夜金槌とともに持ち出したのであらう。暗黑に慣れた道臣の眼には、杉の大木へ釘付けにされた二つの人形の、白い顏から眼鼻立ちまでが、鮮かに見えた。

『京子、何してるのや。……丑の時參りか。』と、力を込めた聲で言ふとともに、道臣は躍りかゝつて、金槌を持つた京子の腕を引つ攫んだ。

十三

この事があつてから、道臣の家は千代松の工風で、雨戸も門も總て內から嚴重に締りの出來るやうにした。井戸には蓋をして、夜は錠を下ろした。刃物といふ刃物は、小ひさな錐まで皆片付けた。

けれども、半月ほどする間に、京子の容態は、もう起き上ることも出來ぬほど惡くなつた。

『起してえ。』

『寢さしてえ。』

半時おきほどづつに、かう極つたやうに言つて、看病人に扶けられつゝ、半身を起き上らして貰つたり、寢さして貰つたりした。今はもうお時に對しても、お駒に對しても、たゞ自分の全半身を寄せかけ、靠れかゝつて、少しでも苦痛を忘れさして貰ふといふことより外には、何事も考へてゐない容子であつた。

た。
　竹丸なぞは、もう見るのが五月蠅さうであつた。
　次の居間で、道臣がお時やお駒を相手にして、面白さうに酒を飲んでゐても、氣持ちを悪くするといふ風はなくなつた。
『其處開けて見せてえ――。』と、子供のやうに語尾を長く引いて言つた。
　隔ての襖を開けて貰つて、道臣の酒を飲んでゐるのを、高枕の上から絲のやうに細く腫れ塞がつた眼で、樂しさうに見てゐた。
　道臣等は初めそれを氣味わるがつたけれど、馴れて來ると、お時やお駒が此方から聲をかけて、
『奥さん、御酒が始りますよつて、御覽なはれ。』と、襖を引き開けながら言ふやうになつた。すると京子は、うつら／＼眠りかけてゐる時でも、分らんことを引つ切りなしに言つて、看病人を困り拔かしてゐる時でも、默つて一心に、道臣の盃の上げ下ろしに、自分の眼の球をも上げ下ろしして見てゐた。
　昔、自分が酌をして、この四疊半で樂しい晩餐を取つたことが、幻のやうに京子の頭に浮かんでゐるらしかつた。其の頃は京子も若かつた。十二違ひで少し年を取り過ぎてゐるが、道臣もまだ男盛りであつた。京子が二十一で、道臣が三十三の新婚の當夜も思ひ出されてゐるらしかつた。銀の燭臺に百匁蠟燭が白晝のやうで、この新室も、其の夜は光り輝いてゐた。この村始まつて以來、まだ見たことのない、上品な、氣高い、芝居に見る奥方のやうな花嫁の姿、それは今でも村人の語り草になつてゐる。
　明日をも知れぬ、今のやうな淺ましい身體になつて、自分の決つた世界といふもののない、紊れ縺れた心緒にでも、昔の折の鮮かな花嫁姿の誇りは、ハッキリと刻み込まれてゐるであらうか。
　床の枕から道臣の晩酌を見てゐる京子の顏には、絶えず微笑があつた。
『皆んな其處で御酒喰べてえ――。』と、京子に自分の枕から見えるところに、一同の膳を持ち出さして、可味さうに喰べるのを喜ばし氣に見てゐた。半月前の狂暴を思ふと、同じ水腫れのやうな身體から、どうしてこんな人を泣かせる優し味が出るのであらうかと、流石に道臣は鼻を詰まらして、折角の酔を内攻させることもあつた。
『竹ッ、退けッ。』と、京子が突然大きな聲を出すので、一同は驚いて箸を止めたが、それは竹丸が一番先きに食事を濟まして、母の世界から逃れ去らうとする時、自分の身體で母の眼と一同の食膳との間を遮つたのであつた。
　母に叱られた竹丸は、風呂場へ行つて丁ど沸きかけた風呂へ入り、手拭で泡沫玉を拵へて遊んでゐると、お時が顏色を變へて走つて來た。
『竹さん、一寸早うおいなはれ。裸體のなりでよいさかい。早う／＼。』
　口早やにかういふと、お時は直ぐ引き返して行つた。けれど竹丸は矢つ張り風呂の中で、ジャブ／＼やつてゐた。
『竹さん、ほんまに早うおいなはらんか。……阿母さんが今落ち入らはりますんやがな。』と、お時はまた呼びに來たが、今度は其の圓い眼が涙に濡れてゐた。
『女といふものは何時でも直き泣けるもんやなア。』と竹丸は思ひながら、濡れた身體を碌に拭かずに着物を引ッかけて、病室へ來て見ると、一同が枕元を取り卷いて、事あり氣に坐つてゐた。
『何んぢや、立つたなりで。』と、父は背後を顧みて、竹丸を叱つた。手にはおろし立ての筆を持つて、茶碗の水を含ませ／＼、幾度も京子の脣に塗つた。
『さア次は坊んだす。たんと塗つてあげなは

れ。」と、お駒も眼の縁が赤く泣き腫らして、背後を向いた。

『末期の水だす。……なんでもつと早うおいなはれへんのや。』と、お時は道臣の持つてゐる筆を取つて、竹丸に渡した。

京子はもう石像のやうになつて、眼を瞑つてゐた。竹丸はおづ〳〵しながら進み寄つて、教へられるまゝに、慄ふ手で、紫色の硬さうな脣へ水を塗つた。今にもわッと口を開いて筆を持つた手に喰ひ付かれはせぬかと竹丸は思つた。

一同が順々に京子の脣へ水を濡つてから、顏へ白い片布を掛け、白い屏風を立て廻らして、枕元の小机には、水と鹽と洗米とを盛つた土器を置き、細い燈明の火がチラ〳〵してゐた。

『午後三時三十分だしたなア。』と、道臣は大きな銀側時計を弄りつゝ言つたが、軈て居室へ退いてまた酒を始めた。京子の枕元には、お時が一人團扇を持つて附いてゐた。

千代松が周章てた狀もなくやつて來て、お時の渡す水筆で末期の水を塗つてから、道臣の居室へ入つて、

『遲かれ早かれ、からならはるには極つてるんやさかい、どうやつてもいかんのなら、早い方がなア。』と、例もの通り兩方の肩を搖り〳〵言つた。

『さいや。……早い方がなア、本人にも、いゝはたのもんにも。……』と、道臣は溢れるほどに注いだ盃をグッと呑み乾したが、

『あゝさうや。』と俄に氣が付いた容子で、盃を置いて立ち上り、押入の小簞笥から京子の大事にしてゐた短刀を取り出して、死骸の側へ置きに行つた。

『定はん、約束や。さア踊らう。』と、竹丸は臺所の板の間に駈けて行つて、其處に不安さうな顏を二つ並べてゐたお駒と定吉との前で、盆踊りの眞似をした。二人は顏を見合はせて苦笑してゐた。

『さアお駒ちやん、お時さんを奥さんて言はんならん日が來たで。』

定吉はかう言つて、太い息を吐いたが、

『天滿宮さんも、いよ〳〵千代さんが占めるんかなア……』と、言ひ足した。

梅の花

隱遁的で、社交上の勢力に乏しい梅の花が、追々に「花」の仲間から疎外されて行くのも、時代の一風潮であらう。東京の近郊で言つてみても、梅の名所なぞは殆ど廢滅してしまつた。けれども、花の氣品から言つても、その淸香から言つても、櫻なぞは到底梅に及ばない。俗衆を相手に、酒の興を佐けて、塵埃まみれになる幇間的手腕のないのが、梅の缺點といへば缺點、長所と言へば長所である。

櫻と梅と

世俗の花の中では櫻が一番好きであつた。少し散り初めた頃の櫻花が好きであつた。ところが此頃はどういふものか、梅の花が好きになつた。寒いのを辛抱して梅見に行つて見る氣にはなるが、塵埃を浴びて觀櫻に出かけるよりも、二階の書齋で安樂椅子に寢そべつて、氣に入つた本でも弄つてゐる方が遙によいと思ふ。食物をはじめ、生活上の好惡の變遷を色々と考へるのが面白い。

（金魚のうろこより）

父の婚禮

一

父の婚禮といふものを見たのは、決して自分ばかりではない。それは繼母といふものを有つた人々の、よく知つてゐることである。

曾て、クロポトキンの自傳を讀んだ時、まだ二十とはページを切らぬところに、父の婚禮を見ることが書いてあつたことを覺えてゐる。

……母が死んでから、父はもうそろ〱其の眼を世間の若い美しい娘たちの上に投げた。――といふやうなことが、あの黄色い假表紙の本の初めの方にあつたと思ふ。父の第二の婚禮の折の、子としての寂しさ、悲しさも書いてあつたであらう。いや確かに書いてあつた。

自分はそれを讀んだ時、礑と自分の身の上に突き當つたやうな氣がして、暫く其のページを見詰めてゐた。さうしてゐると、あの一面に刷つた小ひさな文字が、數知れぬ粟のやうな腫物に見えて來て、全身がむづ痒くなつた。それ以來自分はあの書物のあの邊を披いたことがない。

自分の母の亡つたのは、六月の七日で、村の若い衆たちが、娘のある家をつぎ〱へ、張店を素見すやうにして歩き廻るには、おひ〱と好い時候であつた。

昔は其の土地の支配者であつたといふ身分の程も考へねば、もう五十に間もないらしい年と、二十歳臺からからであつたと自身には言つてゐる其のツル〱とした禿頭とに、恥づる風もなく、父は毎晩若い衆たちに混つて、娘のある家へ夜遊びに出掛けた。

「父母の齢をば知らざる可からず。」

かういふ言葉が、自分の其の頃無理に習つた難かしい本の中にあつたので、自分は時々父に向つて、

『お父つあん幾つ。――』と問ふことがあつた。

其の度に父は態とらしい大聲を出して笑ひながら、

「お父つあん、十八。」と答へるのが常であつた。

父は何故あのやうに年齢をいふことを厭がるのであらうか、と其の頃自分は不思議でならなかつた。

父の一人兒であつた自分は、其の頃巾着のやうに、行くところへは必ず附いて行くといふ風であつた。九歳頃から十二三まで、殊に母の亡つた十二の年なぞは、夜も父と同じ蒲團に寢た。たゞ父は夜になつて外へ出る時だけ、決して自分を連れて行かうとはしなかつた。自分も夜は外へ出るものでないと思つてゐた。

客があると、自分は何時でも、父の側に坐つて、會話を聽いてゐた。話の模樣によつては、自分も時折口を出したりした。厭な子供だと嘸客がさう思つたであらう。今考へると汗冷が出る。食事時になつて、客に酒を出したり、飯を進めたりしても、自分は父と客との傍を動かなかつた。父は客に出した肴を自分にも手鹽皿へ取り分けて吳れて、むしや〱と喰べることを許した。鍋物なぞが出ると、自分は遠慮なく鍋の中へ箸を入れた。

「大變に頂戴しました。……結構ですな、御子息は、お幾つだすか。」

「十二になります、柄ばつかりで薩張りあきまへん。……死んだ母親は醫者にしたがつてましたが、本人は軍人になるいうてますよつて、軍

人にしようおもてます。……親の跡を襲いでこんなとこで神主してても仕様におまへん。

客と父とがこんなことを言ひ合つて、幼い自分を肴にまた酒をはずませることがあつた。自分は下女のお駒に箸と茶碗と飯櫃とを持つて來させて、酒臭い座敷で手盛の飯を喰べた。

『時にあんた幾つにならはるな。何時もお達者で結構や。……ほんまに幾つだすかなア。』

こんなことを客が言ひ出すと、父は俄に酒に噎せた風をして、こん／＼と咳なぞをしてから、

『こないだ、豊彦の雪中山水を手に入れましたが、一つ見とくなはれ。』なぞと、立ち上つて、年齢のことを誤魔化して了ふのが常であつた。客が三四人もあつて、一座の雲行が年齢の話にならうとするのを、際どいところで見究めて、それとなく座を外すことが、父は甚だ上手であつた。こんな時、客は屹と父の敷いてゐた座蒲團の模樣を見詰めつゝ、

『此家の旦那一體幾つやろな。頭は昔からあんな工合に茶瓶さんやがな。』

『道臣さんかいな、あの人の年こそ分らんな。……戸籍にや何んぼとか、だいぶ若いやうになつたるさうなが、ほんまのとこは分らへん。……いゝ、ぼんち、お父つあん幾つだんのや。』と、果は自分に訊くこともあつた。父はもう襖の外まで戻つてゐながら、室の中へはよう入らずに、耳を澄まして突ッ立つてゐるのが、自分にはよく分つてゐた。

『竹丸さん幾つやなア。』と人から訊かれると、『十二』と直ぐ答へる自分と違つて、父は何うしてあんなに年齢をいふのが嫌ひなのであらうかと、自分は其の頃よく考へることがあつた。

父は大きな廣い家の内の、四疊半一室を居室に定めて、其處で食事をすれば睡眠もするし、客も引くといふ風であつた。其の四疊半は茶室仕立に出來てゐて、眞ん中に爐が切つてあつた。爐には八角の摘み手の附いた助炭がかゝつてゐて、釜の湯は何時も熱く、よしや湯の冷めてゐる時があらうとも、釜の下を探れば必ず火があつた。事によると、螢ほどの火種しかないこともあつたけれど、父が一度それへ堅い池田炭を手際よくつぐと、忽ち炭から蒼い炎がぽッぽと燃えて、威勢よく火が起つた。

『お前らは炭を逆まにつぐよつて、火がおこらへん。』と、父はよく言つて笑ひ／＼した。けれども自分には何うしても切炭の本末が分らなかつた。二尺五寸ばかりの長さにして、炭には切目ないほどの立派な箱に入れたのが屆くと、父は嬉しさうな顏をしながら、弦の附いた鋸で尺を當てつゝ、其の炭を同じ長さに切つて、大抱の横腹を刳り拔いた炭取に入れた。一箱の炭は二十本ほどで、同じ太さに揃つてゐたが、父はそれを切り上げるのに半日を費した。少しでも皮の剝げかゝつたのが出來ると、臺所へ下げて雜用に使はした。

爐の灰が殖えると、町の灰屋が來て、一升一圓に買つて行つたことを覺えてゐる。子供心の自分には、一圓が途方もない大金であつたので、今から考へると、パンテオンに改葬したエミイル・ゾラの灰ほどの尊さが、其の頃其の爐の灰にあるものと思つてゐたのであらう。

『契待戀』といふ題で、『うたがはぬ心ながらに小夜ふけて待つとは人に契らざりしを』といふお家流の手蹟を短册に殘した高祖父の代から、この爐の火は傳はつてゐるのだと、父はよく言つてゐた。其の大事な火、高價な灰の入つてゐる爐へ、目見えに來たばかりの下女お駒が、竈の下の焚き落しを十能に山盛に入れた時の騷ぎは、今でも鮮かに自分の眼に殘つてゐる。父は火のやうに怒つて、紺繻、にかけた程に柔らかな良い灰の上層から、ザラ／＼した燒土の嫌

き灰を取り棄てるのに、朝飯が晝飯になるのを忘れてゐた。一日見て色が違ふので、選り分けるのは何んでもなささうに思はれたけれど、悪い灰へ良い灰を少しでもクッ付けて棄てまいとするところに、多くの苦心があつたのであらう。

　お駒は爐の側に兩手を突いて、頸筋まで眞ッ赤にしながら差し俯伏いてゐた。幾らませてゐても、まだ十五の頭に、白丈長をかけた島田は重さうであつた。怒つてゐた父の顔色はだん〳〵和らいで來て、灰を見る眼よりも、お駒の頸筋を覗く眼の方が忙しくなつた。この時から早やお駒どんは下女ではなくて、お女中樣々になつたのであると、村の人たちは噂し合つた。

『茶道の心掛のないものは仕樣がない。』と、父は口癖のやうに言つて、幼い自分や若いお駒が、短い裾や長い袂を火鉢に差した火箸に引つかけて灰を飛ばしたり、炭取に蹴躓いて、黑い粉を疊の上に散らしたりするのに、眉を顰めてゐたが、さりとて別に幼いものや若いものを提へて、茶の湯を敎へようとはしなかつた。また出入りする村人が無作法だと言つて、客火鉢に附いた眞鍮の火箸の頭を錐のやうに尖らして、火箸を灰に突ッ立てた上へ掌を載せて火にあたることが出來ぬやうになぞした。村人がうつかり氣がつかずに、頭の尖つた火箸に掌を痛くするやうなことがあると、父は手を打つて喜んだ。

　そんなでゐて、村人を相手に他愛もないことを話すのが好きであつた。なまじひ茶や花や行儀作法の心がけのある都の客なぞは、窮屈だと言つて嫌ひであつた。四疊半の居室へ、茶碗の持ち樣一つ知らぬ百姓共を集めて、大服に立てた薄茶を飮まし、苦い顔をしながら、周章てて菓子を摘むのを見るのが好きであつた。抹茶は先へ菓子を喰べるもの、といふくらゐのことすら敎へないで、父はたゞ笑つてゐた。茶の後で酒が出て、主人も客も大口叩いて打ち興じた。昔の無禮講といふものはこんなであつたらうかと思はれた。語るところは、幼い自分の耳にさへ、卑しく猥らに響くことばかりであつた。

二

　よく來る村人の中に、平七といふ男があつた。若い時にはだいぶ茶屋酒を腸に染み込ませたとかで、京の祇園町や大阪の新町の話を面白さうにした。わけても京の島原の話が得意で、太夫が立派な硯箱と金紙の短冊とを出して、何んぞ書けといふので、大變に弱つたが、仕方なしに、『秋の田のかりほの庵のとまをあらみわが衣手は露に濡れつゝ』と金釘流で書いたが、それは春の眞盛りで、御室の櫻が吹き揃つた頃のことであつた、なぞと言つた。

　其の折の太夫の返歌は、『見しや夢逢ひしやうつゝ面影の……』といふので、下の句は忘れたけれど、『忍ぶ心のしのばれぬかな』といふのではなかつたかと思ふ、或は違ふかも知れぬ、とも言つて、平七は前齒の二本拔けた口から微笑を漏らしてゐた。

『坊んちの水揚は、いゝ、わたへが手引してあげまへうな。……姫買ひなら、誰が何んちうても島原に限りまつせ。座敷から、燭臺一つまで違ふし、お後架へいても、あそこのは品がおますわい。』

と、昔の夢に憧憬れるやうな顔をして、こればかりが昔の記念だといつてゐる金の吸口の煙管でタバコを喫んだ。

『坊んち幾つだすのやなあ、一體。』と、平七は父と二人で燗德利を三本空にしてから訊いた。

『十二。』と自分が、眩しさうに眼をクシャ〳〵さして答へると、平七は口を『へ』の字なりに堅く結んで、暫くヂッと考へてから、

『來年からやなア。……十三ぱつちり、十四はいい、ちよこ〳〵、十五の春から、ていふことがおますやないか。……坊んち確乎しなはれ、お父つあんに負けなはるな。……お父つあんが嫁はん貰やはるんなら、わしにも貰うとくれてなア。』と、稍纏れかゝつた舌で、父の厭な顔をするのも構はずに、滿更戲談ばかりでもなささうな調子で言つた。

『一つ珍物を喰はさうかなあ。』と、父は毎も年齡を訊かれた時にするやうな手段で、話を他へ持つて行かうとした。

『なア坊んち、さうだつせ。……お父つあんの嫁はんもえゝが、わたへは坊んちみたいな人に、若い綺麗な嫁はん宛行うて、雛はんが飯事するやうなんを見るのが好きや。なア坊んち。……』と、平七は飽くまでも、自分の引き出した話の緒を捉まへて放さなかつた。

「何うやなア、これ。」と、父は茶簞笥の奧から祕藏の一物でも出すやうにして、小さな壺を持ち出した。

「何んだすのやそら、骨壺みたいだすなア。」と、平七は赤味の勝つた醉眼を瞠りつゝ、チッと其の壺に見入つた。

「これ知らんかなア、お前の飲酒家もまだ素人や。」と、父は丹念に壺の目貼を取つて、灰吹を掃除した時に出るやうな、ぬら〳〵した、汚らしいものを箸に挾み出して、可味さうに舌打した。

「分つた、海鼠腸。……五島だつしやろ。……それ知らいで、飲酒家と可味いもん喰ひの看板掛けとかれまッかいな。」

ぼんと膝を叩いてから、平七はから言つて、村方の人さんと憚りながら一所にして貰ひますまいと、言ひたげな顏をした。

「えらい、それではこれを下物に熱いとこをまア一本。」と、父は鼓のやうに能く鳴る手を二つ拍つた。

お駒の持つて來た燗德利を父が受取らうとすると、平七は急しい手付で、膝の前の杯の中に波々と冷め切つてゐたのを取り上げ、グッと一口に飲み乾して、

「ドッコい旦那、あんたよりお駒ちやんに一つ注いで貰ひまへう。」と、首を左右に振りながら、お駒の鼻ッ先へ杯を突き出した。

「おい、お駒ちやん、旦那にえゝがな。……そらお前、旦那は燒いて喰はうと炊いて喫はうと、お前の隨手やがな。坊んちに手を付けると、俺ア承知せんで。坊んちの水揚は誰が何んちうても俺がさすんや、……俺がえゝのを世話して後見になるんや。なア坊んち、をツさんが今に世話しまッせ、待つてなはれ。」

海鼠腸を下物にお駒の酌で、熱いのを立て續けに三四杯呷りつゝ、平七はまたこんなことを言ひ出した。其の時自分は父の顏を見い〳〵、壺を引き寄せて、少しばかり手鹽に取り分けたのを喰べてゐたが、父は厭な〳〵顏をして、お駒に彼方へ行けと眼配せをした。

「なア坊んち、坊んちの嫁はんは、十一二ぐらゐのとこかなア。それとも十四ぐらゐかなア。……お駒ちやんみたいに、十六にもたつたもんは、姉さんみたいでいきまへんなア。」

平七は幼い自分の方を、赤い眼をして見詰めながら、から言つて、

「わーしとおまへは、おないどしめうと、ひとつちがへば、なほよいがア。」と、聲張り上げて唱つた。

「平七つあん、まだ珍物があるがなア。」と、父は、平七が動もすると幼い自分の顏を見詰めて、「なア坊んち、坊んちの嫁はん」をやり出しさうにするので、またこんなことを言ひ出して、平七の心を向け變へようとした。

「旦那、……珍物結構。……頂戴。……頂戴。」

と、平七は卷舌で言つて、上半身をグラ／＼させながら、兩手を重ねて差し出した。父はツイと立ち上つて、奥から、小さな桐の箱に萌黄の打紐のかゝつたのを恭しく持つて來た。あゝあれかと、自分は直ぐさう思つたが、父は默つて、そろ／＼と打紐を解きかけた。平七は井戸の底でも覗く風にして、醉つた眼を据ゑつゝ、父の手元を見入つてゐた。箱の中に何があるかを知り拔いてゐる自分も、父の手つきが大業なので、一寸胸を躍らせて蓋の撤らるゝのを待つといふやうな心地になつた。

『いよう、首實驗。……』と、平七は變な聲をして、身振をしつゝ言つた。

小さな桐の箱の蓋は撤られた。中から現はれたのは、見窄らしい一つの曲物であつた。『何んぢやい、埒もない。』と言ひたげな顏が平七の上に讀まれた。

父は一層勿體振つた手附をして、曲物の蓋を開け、黑い佃煮のやうなものを、蜆貝に一杯ほど手鹽皿に盛つて、平七の前に押し進めつゝ、

『△△の宮さんからの拜領や。……この夏奈良へいた時、御殿へ出てお手づから頂戴したんや。……まア一つお前も頂いてみい。何んや分つたらえらいさかい。』と誇り顏に言つた。

『謂れを聞くと、助老(胡坐の事)組んでもゐられまへんなア。』と、平七は坐り直して、手鹽皿にちよいいゝ入れてある黑いものを一箸挾んでは首を傾け、一口嘗めては首を傾けした。

『分るかなア。』と、父は子供をあやすやうに言つて、冷かに笑つた。

『待てよ。』と、平七は思案投首の體で、二箸三箸、また黑いものを挾んで、精限り根限りの味覺を舌の尖端に集めようとする狀で、ぴた／＼と音させて、深く考へ込んでゐたけれど、到頭分らなかつた。

『分らんか、無理はない。』と、父は輕視の役人のやうな顏をして、平七の口元に見入つた。

『殘念ながら分りまへん。兜脫ぎます。……何んだすのや、こら一體、敎へとくなはれ。』と、平七は平身低頭といつた風に、頭を下げ兩手を支へて、滑稽な身振をして見せた。

『杉菜の佃煮や。』と、父は事もなげに言ひ放つた。

『杉菜ツて何んだすのや。けツたいな。……そいつまたわたへ知りまへんがな。』

平七は怪訝な顏をしながら、膝の下に隱れてゐる金の吸口の煙管を探す風で、座蒲團の右左を手探りに探りつゝ、父の顏を眞正面に見てゐた。

『杉菜ちふのは、土筆の姉さんや。』と、父の物の言ひやうは、一層事もなげであつた。

『あゝあの畦に生えてるやつ。……いゝしやうもない。』と、手鹽皿の中の小さな黑い塊を見下しつゝ、平七は苦笑した。

『いゝしやうもないことがあるもんか。』

父は稍威猛高になるといつた樣子を見せて、

『あの杉菜も矢ツ張り土筆と同じやうに、袴穿いてよるやろ。しかも土筆と違うて、細い枝に一分おきか半分おきに袴や。あれを一つ／＼手で袴脫がして、細う刻んで、佃煮にする手間ちうたら、大抵やあれへん。……このわげもん(曲物の事)に一杯の佃煮を拵へるのに、宮さんと尼さんが三人して、一月の餘かゝらはつたげな。』と、あとは優しく說き聽かせるやうに言つた。

『はえーん。……ふーうん。……』と、平七はただ感嘆の聲を漏らした。

『このわげもん一つ頂くんは、金百圓頂戴するより有難いんやや。』と、父はまく／＼し立てる風に言つたが、平七はニヤ／＼笑ひつゝ、『そら譃や』と言ひたげな顏をして、

『今日はわたへ一人で御ッつおうの獨り占めや。……宮さんお手製の土 筆の姉さんの佃煮

まで頂いて、もう明日死なうと本望だすわい。』

と、厭に滅入つた聲をした。

『まア、そんなこと言はいで、もう一杯飲んどくれ。……時に頼んだことはえゝやろな。』と、父の語氣は急に改まつたやうであつた。

『お時さんの一件だすか。……何んぼ醉うても、それ忘れてなりますかいな。……萬事は胸に、……』と、平七は頻りに胸を叩いて見せた。

幼い自分は、お時さんといふ名にハッとして、覺えず父の顏を見た。父も自分の顏を見たので、父と子との視線は眞ん中で突き當つたが、父の方から先に眼を外らした。

『しんによた、よたア、……』

平七は低い聲で唱ひ出したが、やつと膝の下の煙管を見付け出して一服吸ふと、

『旦那、例の件は早速話付けて來まッさかい、わたへんとこへも、まア一遍來とくなはれ。……土筆の姉さんの佃煮はおまへんけど、酒は樽に一杯おます。……坊んち、坊んちもお父つあんと一所においなはれ。』と言ひ〳〵、そろ〳〵去にさうにした。

三

其の後平七は二三度來たが、毎も四疊半の居室で父と密々話をしては歸つて行つた。幼い自分が別に大人の話を聽かうとするのではなく、例もの通り父の根付けの積りで、居間へ入つて行くと、父は珍らしく怖い顏と高い聲とで、

『彼方へ行き。……』と睨んだ。自分の嬉しい味方で、父とはまた別な懐かしい味を有つてゐる平七も、何うしたものか、難かしい顏をして、話を途切れさせつゝ横を向いて、タバコの煙を吐いた。

自分は臺所へ來て、黑光りのする分の厚い板の間で、下女のお駒を相手に遊んでゐた。

『お時さんが坊んちのお母アはんにならはるんや。若いお母アはん、坊んちと九つより違えへん。』と言つて、お駒は厭な笑ひやうをした。

『お駒がわたいのお母アさんになつて呉れるとえゝな。……平七つあんとこの小母はんがいうてたやないか、お駒は坊んちのお母アはんも同じことやて。……』

何心なく自分がかう言ひ放つと、お駒の圓い顏は、手水鉢へ赤インキを滴したやうに、ぼうとなつて、

『坊んち嫌ひ。……お時さんは一昨年からもうお母アさんやおまへんか。お父つあんと金比羅まゐりしやはつた時から。……』と、兩の眼を[illegible]見みたいにして、自分を見詰めた。

『そやかて、一昨年はまだわたいのほんまのお母アさんが生きてたやないか。』

腑に落ちぬといつた顏をして、自分もお駒の顏に見入つた。

『ほゝゝゝ。坊んちのお母ん何人あるやら知れえへん。』と、お駒は下女だてらに、長い袖を振り〳〵、袂の先を口に當てゝ嘲笑んだ。

『いやア、今日はお預けしといて、又出たい席で底抜けに頂戴しますわい。』といふ平七の高聲が、父の居室に聞えて、密々話は酒にもならずに崩れた。

平七が歸つてから、父は大きな抽斗附の煙草盆を提げて、ヨタ〳〵と臺所へ來て、丸爐形の大きな置火鉢の横に坐つた。其の火鉢では始終柴を折りくべて燃やすので、火鉢も其の周圍も黑燻りにくすぶつてゐた。地の底から掘り出したもののやうに時代のついた藥罐には、飴色に濃く煮出された番茶が半分ほど入つてゐた。

『竹ちやん。』

七つ八つの頃によく自分の名を呼んだ時の呼び方をして、父は優しく自分の方に向き直りつつ、

『明日、平七んとこへ連れていてやろ、平七が

御ツつおうするいふよつて。』と言つて、自慢の東京土産の村田の眞鍮煙管を吸口深く銜へ込んで、精一杯煙を頬張つた。

『お父つあん、それ面皰。……』と、自分は父の脹れた口元にポツリと白く膿を持つた、小ひさな腫物を指さしつゝ言つた。

『うーん。』と父は、丁度年齢を訊かれた時と同じ顔をして、

『番茶の焙じたのん、まだあつたかなア。』と、藪から棒にお駒の方を見て言つた。

『昨日、旦さんがドッサリ焙じとくなはつたばツかりやおまへんか。』と、お駒は不審氣な顔をした。

『いゝゝ、こないに、お駒の面皰指で絞つてやつたら、白いシンがぷつツと出たで。……面皰絞るん面白い。』

まだ面皰のことを言つて、自分は父の口元を見詰めつゝ、如何にも大きく見事な父の面皰を絞りたさうにした。父は顔を北へ向けて、『えへん、えへん。』と無理に空咳をした。

『坊んち、何んで面皰出けまへんのやろなア。』と、お駒までが面皰のことを話しかけて、其の白く眞ん圓い顔を撫で廻しつゝ、パッチリと鈴を張つたやうな眼を光らして、幼い自分の搗き立ての餅のやうな肉理の細い顔を覗き込んだ。

『いゝ、わたへ、まだ一遍も面皰出けえへん、何んでやろ。』と、自分も顔を撫で廻して、ごは〳〵と凸凹の多い、硬さうな父の顔を覗き込んだ。

『竹ちやん。……もう十一時やろ、今日はお前が明神さんへ、日供上げて來とくれ。』

さも大事のことを忘れてゐたといふ風をして、父がかう言つたので、自分は直ぐに立ち上つたものの、母が亡つてからこのかた、日供は愚か、朔日十五日の神饌さへ忘れ勝で、村人が蔭でよく、『無性神主、腎張神主、歌手何んとやら』と言つてるほどなのに、今日に限つて何故また頓狂に日供なぞと言ひ出したのであらうかと、幼心に訝りながら、お駒が糊を入れてゐた神饌桶を掃除して、洗米を拵へ、鼠糞の溜つてゐた土器と三寶とを取り出し、總菜の餘りの枯魚一枚、それから父の飲み餘しの酒を瓶子に移し、紺飛白の綿入のまゝ、五郎丸の袴を着けて、雀の巣の多い明神さんの拜殿へ持つて行つた。

四

其の翌る日は、小春日和の暖かい天氣であつた。父は午後の二時頃から自分を連れて平七の家へ行つた。村の南の外れの明神の森から、北の端の平七の家へ行くには、村の眞ん中を突き切らねばならなかつた。

桔槹から水を吸んで、眞ツ蒼に苔の蒸した石疊の井戸端で、米を洗つてゐた赤い襷の乙女は、自分たち父子の姿を見ると、周章てて籾を乾した蓆に蹴躓づきつゝ、白壁の土藏と鎧板の納屋との間に逃げ込んで行つた。父は乙女の赤い帶の見えなくなつた跡を、立ち止つてまで倦かず眺め入つてゐた。

ごろ〳〵した荒い砂利を敷いた新道を拔けると、自分の二番目の姉になりさうなお時の家の横へ出た。古びた大きな藁葺の家の棟には、烏が何處からか物を銜へて來て、頻りに啄んでゐた。此處でも籾を乾してある牛部屋の前の廣場には、人影が見えないで、耳の垂れた洋犬が此方を向いて大きな欠伸をした。

平七の家へ近づいた時、お時の家の下男が向うから空の肥桶を擔いで來て、輕く會釋して行き過ぎた。其處の垣根には、ひよろ高い山椒の木が一本混つてゐたので、父は手を伸ばして、其の老い硬ばつた一葉を摘み取りつゝ、少しづつ口へ入れて前齒で嚙みながら歩いた。

『いよう、旦那、なんでもつと早う來んのかい。』

自分が先きに立つて、父が後から、平七の家のかどへ入つて行くと、物の言ひ樣のぞんざいなので、村中に名を取つてゐる家内が、かう言つて聲をかけた。

『さア旦那、待ちかねてましたで。』と、平七も莞爾々々して、玄關代りの緣側へ現はれた。

『坊んち來たな。……さア小母はんが裸體にして檢査してやろ。』と、家內は幼い自分に躍りかかつて來た。冷え性ださうで、腰へ綿の入つた奴袴のやうなものを當てて、肥つた身體をえごちやらと自分を追ひ廻した。自分は父の身體を楯にして、其の周圍を逃げ歩いたが、父は直ぐ座敷へ上つて了つたので、自分は更にかいどの大きな柿の木の周圍をクル／＼と廻つて逃げた。爛れたやうに熟し切つた柿の實が、ぼたりと音して自分の肩口に落ちると、惡性の腫物の潰れたやうに、血膿のやうな汁が、襟から頸筋へ撥ねかゝつた。自分はハツとして泣き顏をしながら足を止めたが、其の隙に家內は、ツト進み寄つて、自分を引ツ捕へ、大變な力で自分を横抱きに抱き上げた。

「それ見い、逃げるさかいこんな目に遭ふのやがな。」

かう言つて家內は、自分の內懷へ手を入れて擽りながら、自分が足をピン／＼さして、泣き聲を立てるのも構はず、緣側まで抱へて來て、擽つてゐた手で雜巾を取つて、熟柿に汚れた肩のところを拭いて與れた。

「この熟柿、可味いやろ。鶉の喉か餘しや。……中風の藥になる。」と言つて、家內は自分の首筋に附いた柿の汁を、ペロ／＼と舌を出して舐めた。

「こそばアい。」と、自分は高く叫んで身を藻掻いたが、家內の手から離れることは出來なかつた。亡つた母の肌の匂ひとはまた別な、三十五六の大年增の烈しい香が、強い酒のやうに自分の鼻を衝いて、白く圓く肥えた大きな顏、剃つた後の青々した眉、吊り上つた眼、隆い鼻、廣い口、毒々しい赤い脣と舌、それらのものが丁度遠いところから眺めてゐた山の巖や松やを、登つて近く見たやうに、直ぐ自分の前に押ツかぶさつた。

家內は、幼い自分をギューッと引き締めて、首筋から喉のあたりまで弄り廻した上、更に頰までをペロ／＼とやつた。舌が柔らかく、生温かいのが氣味わるくて、自分は、

「汚アい。」と、絞り出すやうな聲で叫んだ。

『これ、えゝ加減にしときんか。……酒の燗をしとくれ。』と、平七が緣側へ現はれたので、家內は一寸手を緩めた。自分は、其の隙に太く脂切つた手を振り離して、座敷に駈け込んだ。其處には父が厚い座蒲團の上へ坐つて、金米糖で玉露を飮んでゐた。

「あんたは、雨風やなア、兩方もいけるんやさかいえらい。……わたへは其の甘いもんは、見ただけで胸がむかつきますわい。」と言ひ／＼、平七はチリン／＼と盃洗の中に鳴る盃の音とともに、大きな膳取盆を抱へ込む風にして、ヨチヨチと運んで來た。

かんてきは、ぼッぼとおこる炎とともに座敷の眞ん中に据ゑられ、それを取り卷いて、大きな皿に美しく鷄肉の並べられたのや、海苔卷き鮓を金字塔の形に盛り上げた鉢や、青い葱や、白い豆腐や、さま／＼のものが置かれて、たゞ喰ふ爲めの素朴な食味の匂ひといつたやうなものが、廣い京間の八疊に充ち流れた。かんてきにかけた鋤燒鍋へ、平七が巧みな手つきで黃色い脂肉を入れて、溶けたところへ、砂糖を加へ、紫を注すと、ジュウッといふ音とともに、湯氣がむらむらと舞ひ昇り、黑ずんだ天井の眞ん中に貼つてある大神宮の劍先神符が、白雲に蔽はれた山寺の塔のやうに、暫く見えなくなつた。

『さア旦那、何うぞ入つとくなはれ。』と、平七は父に箸を進め、自身に一杯毒味して、其の杯を献した。幼い自分も平七から箸を貰つて、直ぐ鍋に入つた。

『ぼんち、あかんな。……わたへに負けるんやもん。……あれではまだ嫁はん貰へんわい。』

ぴん／＼と頭へ響く高聲で、かう言ひつゝ家内は、吸物を持つて來て、ベタリと自分の横へ寄り添ふ風にして坐つた。最前と同じ執濃い大年増の匂ひが、鼻をもぎ取るほどに、ぷんとした。この家内はよく間男といふ惡い事をするといふことが、幼い自分の耳にも入つてゐた。それで矢ツ張り先刻自分にしたやうなことをして、其の惡い事をするのであらうか、なぞと自分は考へながら、少しづつ膝を父の方へ摺り寄せて、家内の肥つた身體から離れようとした。

『旦那、お芽出たうおます。……芽出たい言うても、手付けは三年も昔に納つたるんやもん。……お時さんのお父つあんも、毒性な人や、手付けだけ取つといて、尻食ひ觀音はなア。……そいでもまア話が附いて好かつた。』と、家内は稍眞面目くさつた物の言ひやうをした。

『何んや、もうそないなこと言はいでもえゝがな。話はちやアんと分つたる。……お時さんのお父つあんもな、餘り……旦那の前で言ひ憎いが、……其の何んや、年齡が違ふもんやよつて、土壇場になつて考へはつたんやけんどなア、吐いた唾液呑み込めんちふことがある。約束は約束やし、それに……其の……お手付けか三年前に濟んでゐるんやもん。』と、平七は家内を窘めておいて、ニヤリと笑ひつゝ父の顏を見た。

『ほんまや、お時さんかて、もう箱入りで通用しやへん。』と、家内も笑つた。鋤燒のものは、グツ／＼煮立つて、杯は幾度か父と平七との間を往來した。

『旦那も、薄茶や、濃茶や、生花やいうて、上品がつてはるが、行き詰りは矢ツ張りレコやなア。』

いつもながらに醉ひに廻りの早い平七は、もう少し卷舌になつて、かう言ひながら、右の手に波々と注がれた杯を持ち、左の拳を妙な形に拵へて、父の眼の前に突き出した。

『阿呆かい、此奴は。……そんなこと言はんかて分つてるがな。どんなえらい人かて、學者かて、落つれば同じ谷川の水や。……なア坊んち、坊んちかて、嫁はん欲しいやろな。』と、家内はまた自分の方へ摺り寄つた。

『坊んよ、坊んよと、何時まで坊んよ。坊んの、……や。坊んちにやわたへが今に三國一の花嫁さんを貰うたげるんや。ちやアんと約束したアる。』と、平七は今にも溢れさうな右の手の杯の酒を、グツと一息に飲み乾した。

『わいやまた、坊んちに嫁はん世話するより、自分に坊んちみたいな稚い子の嫁はんになつてみたいな、一日でよいさかい。……』と、家内は白い顏をほんのりとさして、水の溜つたやうに濡ひの多い眼で、幼い自分の一擧一動を見守つた。

『何んぢやい、貴さんみたいな婆ア、糞婆ア、腎張婆ア、坊んちが相手にしやはるかい。』と、平七は憎々し氣に家内の方を見て言つた。

『さうでもないなア、坊んち。……お半長右衞門を裏表にすれや、わしと坊んちや。』と、家内はニタ／＼と平氣であつた。

『お時さんのお父つあん遲いなア。……あれほどいうといたんやさかい、來やはるにや違ひあろまいが、もう一遍使やつてみたらどうやろ。』

肝心のことを忘れてゐたといつた顏をして、平七は改まつた調子で言つた。

『噂をすれば影、だツせ。』と、重々しい口振で

言つて、鳥羽繪に描いた徳川家康のやうな下膨れの圓顏に、辛抱強さを見せた千代はんへお時さんのお父つあんは、縁側からぬうツと入つて來た。今では村中で唯一人の丁髷が、結立てで餘計大きく見え、髯を剃つた痕が青々としてゐた。

「遲かりし由良之助。……」

微醉の父は、から叫んで、持ち合はした杯を獻した。

五

婚禮は舊暦十月の亥の子の日であつた。庭の柚子が眞ツ黄色に熟して、明神の境内には、銀杏の落葉が堆かつた。村の家々ではお萩餅を拵へ、子供たちは亥の子藁といつて、細い棒をシンに藁を束ねて繩でキリ／＼と堅く卷いたもので、ポン／＼と音させつゝ地べたを打つて、

「亥の子の餅や、祝ひまへうかい。」と叫んでゐた。明神にはお百燈が點くので、叢の中からざわ／＼してゐた。

媒妁人に料理番を兼ねた平七は、朝の中から家内と一所にやつて來て、亥の子なぞには頓着なしに、盃事や御馳走の用意に忙しがつてゐた。亡き母の葬式の時きり上藏から出たことの無かつた輪島の本膳が二十人前、箱のまゝ擔ぎ出されて、お駒や近所から手傳ひに來た嬶衆の手によつて空拭きをかけられた。

「お駒ちやん、おいとしぼや。……」なぞと、お駒を憐れむものもあつたが、お駒は洒々として、襷がけで働いてゐた。手に大勢あつても、勝手が分らぬので、皆んなは矢張り若いお駒に手を頼らなければならなかつた。「臺所奉行」なぞと、お駒を呼ぶものがあつて、遂には彼所からも此所からも、「おい臺所奉行」と叫ぶ聲が聞えた。

「此家の旦しう、殘つやゐな、若いのやら年寄りやら分れへん」と、膾の大根を刻みながらいふものがあれば、

「若い管やかて十五日づゝ、何遍生き延びてはるか分れへん。……お駒ちやん、お時さん……やない今度の奧さん、こいたけでもう百五十日や。お駒ちやんは、明けて五年、三月の、まだ當の十五や、もんなア、二人で三百日ぐらゐの値打がある。そやないかお駒ちやん。」と、里芋の頭をこそげながら、唄の節を混ぜて戯れるものもあつた。

自分の家はお萩餅どころでなかつた。それでも平七が忙しい中で、亥の子藁を拵へて呉れたので、自分はそれを持つて門の外へ出た。

「坊んち、あかん、そんなもん持つて遊ぶんでは、嫁はん貰へへん。」と、平七の家内は襷がけで、櫺子窓から見ながら言つた。

同じやうに亥の子藁を持つてゐる友達の群に入つて行つても、皆んなは自分を仲間外れにして、遊んで呉れなかつた。「お時さんの子や」とか、あんな若いお母んあれへん」とか言つて、自分をせびらかした。其の中にはお時さんの弟も混つてゐた。

また家へ歸つて行くと、丁ど魚屋が來て、鯛や海老や蒲鉾の入つた蒸籠を、大人の身長の高さほど積み上げたところであつた。ドッサリのお魚やと思つて、自分が呆れた顏をして見てゐると、何時の間にか嬉しさうな顏をした父が側へ來て、

「死んだお母さんの來た時は、魚がこの三倍あつたんやで。」と、小さな聲をして言つた。

夜が近づくと、亥の子藁を打つ音が、方々でだん／＼盛んになつた。自分の家は平生一度も雨戸を繰つたことのない室へまで、あか／＼と燈火が點いた。

「ぼんち、ちやッちやと、着物着更へや。」と、いやに自分を幼兒扱かひにした、平七の家内の聲

が聞えたので、自分は皆んなの集まつてゐる納戸へ入つて行つた。其處は亡つた母の室で、亡き人の手垢を留めた大きな鏡臺や簞笥が、根を下ろしたやうに疊へ喰ひ入つて煤ぶられてゐた。

父は何時の間にか髯を剃つて、黄色い着物に青い袴を穿いてゐた。平七も家内も別の人のやうになつて、大きな紋所をハッキリと明るいランプに映し出してゐた。

やがて花嫁の一群は、迎へに行つた平七夫婦に導かれて、門の外に近づいて來た。亥の子藁を持つた子供の一隊は、花嫁らを取り圍んで、亥の子ろ餅や、祝ひまへう。」と、口々に叫びつゝ、花嫁の白足袋を擲り付けるほどにして、ぼん／＼とやつた。

「あゝ祝うて呉れ／＼。」と言ひ／＼、先きに立つた平七は、圓に柏の紋の附いた箱提灯を振り照らして、道を開いた。黒い着物にクッキリと白い襟を見せて、前踞みに歩いて來た花嫁、それが自分の新らしい母であるとは、何うしても思はれなかつた。亡つた母の居た時分、裁縫を習ひに來ては、自分に無理を言はれ、虐められて、泣いて歸つたお時さんとは、なほさら思はれなかつた。

一行がもう玄關へ差しかゝつた時、自分が、ぱッぱと瞬きをしてゐる燭臺を持つて出ようとすると、父は、

「お前がそんなとこへ出るんやない。」と、例になく邪險に叱つたので、自分は周章てゝ次ぎの六疊へすッ込んだ。其處にお駒が上氣した顏をして立つてゐて、自分と顏を見合はせると、ペロッと赤い舌を出した。

『儀式の席に座蒲團は要らん。』

平七が座敷へ座蒲團を出さうとしたので、父がかう言つて叱るやうに止めると、平七は紋付きの袖をあげて、頭を搔き／＼、また元のところへ更紗の座蒲團を十枚抱へて行つた。

自分はたゞ一人納戸へ入つて、亡つた母の手摺れのした道具の前に、ぼんやりとしてゐた。其處には何うしたことか、ふッくりと柔らかな新らしい蒲團が長く敷いてあつたので、自分は袴を穿いたまゝ、其の上へ寢轉んだ。上を見ると、亡つた母の半身の寫眞か、額になつて長押から見下してゐる。黒い[illegible]に青貝を鏤めた飾棚もかゝつてゐる。自分は生れてこのかた覺えたことのない、寂しさと悲しさとに、蒲團へ頬摺りして、涙を擦り付けてゐた。

其處へお駒が呼びに來たので、自分は涙を見られないやうにして、座敷へ出て行つた。床の前に父とお時さんとが並んで坐つてゐて、其の次ぎの空いたところへ、平七は自分を坐らした。自分の次ぎには、徳川家康のやうな顏をした千代はんが坐つてゐて、微笑みながら時々自分の方を見た。

平七の家内が三寶に土器を載せたのを持つて、錫の銚子を手にしたお駒がそれに引き添うて進んだ。

「右のお足からそろり、……」なぞと戯談を言つて、先刻平七の家内がお駒を嘲弄つてゐたのを思ひ出して、自分は今泣いた顏に笑みを浮べた。

三寶と土器とが花嫁の前へ行つた時、互ひにお辭儀し合つたお時さんとお駒との、ビラ／＼の附いた同じやうな簪が、縺れ合つて兩方とも抜け落ちたのには、一座が皆眼を注いだ。お駒は靜かに簪を拾つて、一つを恭しくお時さんに渡し、一つを自らの頭に插した。

其の夜、自分は誰れと寢るのかと思つて考へてゐた。

『竹と寢ると、温うて炬燵は要らん。』と、始終父はさう言つてゐたけれど、もう昨夜かぎり、父と同じ蒲團に寢ることは出來ぬと、幼い自分も

今朝から覺悟はしてゐた。

四疊半の居室へ、長持から客蒲團を出して、暖かさうな、廣い寢床を取つた側へ、今夜は殊に見窄らしく見える自分の煎餅蒲團が敷いてあつたので、自分はまだ座敷の方のお開きにならぬ中に、其處へ潛り込んで寢て了つた。

フト眼を覺ますと、薄暗い短檠の下に、綺羅な友禪の長襦袢一つになつたお時さんの姿が、覗きからくりの繪のやうに、夢ともなく幻ともなく動いてゐるらしかつた。

品性庵人格居士

品川で山手線の列車から降りて、本線の上りを待ち合はしてゐる時に、中肉中脊の五十ぐらゐの紳士が、新聞を見ながらプラットフォームを歩いてゐるのを見ることが屢々ある。

新聞を押し擴げて高く捧げつゝ讀んでゐるところは、辨慶の勸進帳を讀む形のやうであるが、足を一つ運ぶにも、手を一つ動かすにも、苟くもせざる用意の見えてゐるのには、私のだらしの無い動作に引き比べて、いたく感心するとともに、あんなに四角張つてゐては嘸窮屈であらうと思ふこともある。

成功——品性——人格——これ數年前からの流行言葉で、今尚これを賣り物にしてゐる雜誌もあるが、私に取つてはこの三つの言葉のいづれにも緣が遠い。成功なぞといふ驕慢な言葉は暫く別として、品性とか人格とかいふやうな言葉の奧には、必らず不自然な虛僞な響きのあるのを覺える。人間の價は裸體百貫——イヤ十三四貫から十六七貫、二十貫ぐらゐにある。裸體の上にいろ〳〵のものを纏ひ、本性の上にいろ〳〵の鍍金をして、何の品性ぞ、何の人格ぞ。

この間大阪から奈良、京都の方へ旅をした時、奈良の停車場で、品川で見る四角張つた品性庵人格居士と同じ型の人を見た。年は少し若いが、歩きぶりから物の言ひ方まで能く似てゐたので、品性——人格なぞといふことが、こんな田舍まで流行つて來てゐるなと思つて、感心してゐる中に、汽車が着いたので、ツイこの小品性庵を見失つた。

汽車が奈良を去つて、木津を過ぎ、宇治川を渡り、茶畠の間を通つて、伏見に近づいた頃、私は何氣なく立ち上つて、一等室に通ずる扉を開けて見ると、前の小品性庵は其處に只一人乘つてゐて、フロックコートも白襯衣も脫ぎ棄て、仰向けに轉がつて、奈良の名物大福餅を頰つてゐた。

さうして彼れは私の姿を見ると、狼狽した體で起き上つて、素肌の上へフロックコートを引つかけ、大福餅の折を窓の外へ棄てて、奈良の停車場で見た時の姿其のまゝに、昂然として濟してゐた。

京都で下車すると、ツイ一間ばかり先きを、この小品性庵が歩いて行く。其の恰好がいよいよ品川の大品性庵に似てゐるので、私は東京が懷しくなつて、早く歸りたいと思つた。

（一九一四年）

（『小ひさき窓より』より）

東光院

一

東光院の堂塔は、汽動車の窓から、山の半腹に見えてゐた。青い木立の中に黒く光る甍と、白く輝く壁とが、西日を受けて、今にも燃え出すかと思はれるほど、鮮かな色をしてゐた。長い〳〵石段が、堂の眞下へ瀑布を懸けたやうに白く、こんもりとした繁みの間から透いて見えた。

『東光院で、あれだすやろな。』

お光は、初めて乗つた汽動車といふものの惡い臭ひに顔を顰めて、縞絹のハンケチで鼻を掩うてゐたが、この時漸く斯う言つて、其の小ぢんまりとした、ツンと高い鼻を見せた。

小池は窓の外ばかり眺めて、インヂンから飛び散る石油の油煙にも氣づかぬらしく、唯々乗り合ひの人々に顔を見られまいとしてゐた。

『こないに汚れまんがな。』

口元の稍大きい黒子をピク〳〵動かして、お光はハンケチで小池の夏インバネスの袖を拂つてやつた。

『耐らないな、歸りには汽車にしようね。二時間や三時間待つたつて、こんな變なものに乗るよりやいゝや。』

小池は初めて氣がついたらしく、肩から膝の邊へかけて、黒い塵埃の附いてゐるのを、眞白なハンケチでバタ〳〵やつて、それから對ひ合つてゐるお光の手提袋の上までを拂つた。

『そやよつて、もつと待ちまへうと言ひましたのやがな。あんたが餘り急きなはるよつて、罰が當りましたのや。』

底を籠にして、上の方は鹽瀬の鼠地に白く蔦模様の刺繍をした手提げの千代田袋を取り上げて、お光は見るともなく見入りながら、潤ひを含んだ眼をして、獨り言のやうに言つた。

『知つてる人に見られると厭だからね、この方角へさへ逃げて來れば、大抵大丈夫だからね。……逃げるは早いが勝だ。乗り物の贅澤なんぞ言つてゐられなかつたんだよ。』

斯う言つて小池は、力一杯に窓の硝子戸を押し上げた。

汽動車は氣味のわるい響きを立てつゝ、早稻はもう黄ばんでゐる田圃の中を、十町程と思はるゝ彼方に長く横はつた優し氣な山の姿に並行して走つてゐた。

『これから先きへ汽動車はまゐりません。先きへお出での方はこの次ぎへ來る汽車にお乗り下さい。』と、車掌が節を附けて唄ふやうに言つたので、小池もお光も同時にハッと頭を上げて車室を見渡すと、自分たち二人の外には、大きな風呂敷包みを背負つた老婆が、腰を曲げてまごまごしてゐるだけで、多くの人々は早や改札口をぞろ〳〵と出て行くのが見えてゐた。

『何處へ行きますのや。……一體。……』と、お光はあたふたと車室を出る小池の後から、小走りに續きながら聲をかけた。

『僕は東京の人だもの、こんな遠方の片田舍の道は知らないからね。……君が案内をするんだよ。』

屋臺店を稍大きくした程の停車場を通り拔けると、小池は始めて落ちついた心持ちになつたらしく、燐寸を擦つてゆッたりと紙卷煙草を吹かした。青い煙がゆら〳〵として、澄み切つた初秋の空氣の中に消えた。

『私かて、知りまへんがな、……こんなとこ。……』
琥珀に斑紋をした白い蝙蝠傘を、パッと蓮の花を開くやうに翳して、動もすれば後れようとする足をお光はせか／＼と内輪に引き摺つて行つた。
駄菓子を並べた茶店風の家や、荒物屋に少しばかりの呉服物を附け加へた家の並んでゐる片側町を通つて、漸と車の通ふほどの野道の、十字形になつたところへ來ると、二人は足を止めて、何う行かうかと顔を見合はした。小學校歸りの兒童が五人八人ぐらゐづつ一塊になつて來て、二人の姿をジロ／＼見やつては、不思議さうな顔をして驅け去つた。
眞ツ直ぐに行かうとしても、一筋道が長々と北へ續いてゐるだけで、當てもなく歩くといふ氣にはなれなかつた。右の方を見ると、山の上に何かありさうだけれど、たゞ歩いてゐても汗を催しさうな日に、坂道を登るのはと、お光が先づ首を振りさうであつた。
『彼處へ行つて見よう。』と、小池は大仰に決斷した風に言つて、左の方へさツさと歩き出した。
行手には、こんもりとした森が見えて、銀杏らしい大樹が一際傑れて高かつた。赤く塗つた鳥居も見えてゐた。二人はそれを目當てに歩いた。お光は十間餘りも後れて、沈み勝にしてゐた。
田圃の中の稲の穂の柔かに實つたのを一莖拔き取つて、まだ青い籾を噛むと、白い汁が甘く舌の尖端に附いた。小池はさうやつて、三つ四つ五つの籾を噛み潰してから、稲の穂をくるくると振り廻しつゝ、路傍に佇んで、後れたお光の近づくのを待つた。
『あゝ、しんど。……此頃はちよツとも歩きまへんよつて、ちいと歩くと、直きに疲勞れますのや。』
蝙蝠傘を擔ぐやうにして、お光は肩で息をしてゐた。薄鼠の絽縮緬の羽織は、脱いで手に持つてゐた。
『御大家のお孃樣……だか、奥樣だか、……阿母さん……だか知らないが、お駕籠にでも召さないとお疲れになるんだね。』と、小池は冷かに笑つた。
『矢つ張り稲の穂を噛むのが癖だすな。……東京に居やはると、稲もおますまいがなア。……春は麥の穂を拔いて、秋は稲の穂や。決つてる。』
冷かな小池の言葉には答へないで、お光は沈んだ調子ながらに、昔の思ひ出を懐かしみつゝ語つた。

二

別れた時は、お光が十三の春で、小池は二十二であつた。
今年三十三の小池が、指を屈めて數へてみると、お光は二十四になつてゐる。
麥畑の徑を小池が散歩してゐると、お光が後から隨いて來て、小池が麥の穂を拔いて拵へた笛を強請り取り、小ひさな口に含んで吹いてみても、小池が鳴らすやうには鳴らぬので、後から後からと、小池の拵へる麥笛を奪ひ取つたことや、秋の頃二人で田圃道を歩いて、小池が稲の穂の重さうに垂れて實つたのを拔き取り、籾を噛んでは白い汁を吐き出すのを眞似して、お光も稲の穂を拔き、百姓に見付けられて怒鳴られたことや、いろ／＼と昔の記憶を小池も思ひ出して來た。
そんなことは、お光が十歳で小池が十九の時から、お光が十三で小池が二十二になつた時まで、三年の間續いてゐた。
或る田舍町で藥種屋をしてゐる家の小娘と、其の町へ來て新たに開業した醫者の息子とは、

家が隣りであつたので、直ぐ親しくなつた。小學校の讀本の下讀みを小娘に醫者の息子に教はりに來た。

「あの小池ちふお醫者はんの息子が、都家のお光ちやんを可愛がるのは、他に目的があるんやろな。あんな尿臭い小めろ可愛がつてもあけへんがな。」

町のおカミさんたちは、二人の聞いてゐるところで、こんなことを言ひ〱した。

お光と小池との最初の縁は、斯ういふことから繋がれた。――

縁と言へば、それが縁であらうと、小池には頻りに十五年も前のことが考へられた。

小學校の兒童が五人、八人づつ一塊になつて歸つて來る。其の塊の中から可愛らしいお光を見出して家へ呼び込む。それが小池の毎日の仕事のやうになつてゐた。

先刻汽動車を下りてから間もなく、野道の十字點で見た小學兒童の群は何處へ行つたかと、小池は坐に背後を振り返らずにゐられなかつた。

あの兒童の群の中には、昔のお光に似たほどのものが一人も居なかつた。

斯う思つて小池は、ハッと夢から醒めたやうに、自分に引き添つて低首れつゝ弱い足を運んでゐるお光の姿を見た。

髪油の匂ひ、香水の匂ひ、強い酒のやうな年增の匂ひが、耐らなく鼻を衝いた。

其處に十五年の年月があつた。――

三

「まだなか〱暑いなア。氷が欲しくなつた。」

丹塗りの鳥居を潜つて、大銀杏の下に立つた時、小池は斯う言つて、お光の襟足を覗き込むやうにした。

「暑おまへうかいな、まだ舊の八月だすもん。……八月のいらむしと言ひますのやさかいな。」

太い〱銀杏の幹に凭れかゝつて、ホッと息を吐きつゝお光は言つた。さうして、

「愛宕さんにも大けな銀杏がおましたな、覺えてなはる。……蜂の巣を焼いてえらい騒動になりましたな。」と、また懐かし氣な眼をして、小池の顔に見入つた。

「覺えてるとも、怖かつたね、あの時は。……何うなるかと思つた。」

白粉に汚れた赤い襟の平常着の縮緬のやうな姿をしたお光を連れて、愛宕神社へ行つた時、内部の空洞になつてゐる大銀杏に蜂が巣を作つてゐるのを見付けて、二人相談の上、藁に火を點けて蜂の巣を焼かうとすると、火は忽ち空洞の枯れ果てた部分に移つて、ゴウ〱と盛んに燃え出し、村人が大勢で、火消し道具を持つたり、鐘を振り立てたりして駈け付けた時の恐怖しさが、ツイ近頃のことのやうに、小池の胸に湧いて來た。

「黒い煙の中を蜂が子を銜へて逃げて行つたね。」と、小池はこの名も知れぬ神の宮の大銀杏を、愛宕さんの大銀杏ででもあるやうに、見上げつゝ言つた。

「愛宕さんの銀杏、これより大けおますな。……あないに焼かれても枯れまへなんだな。……今年も仰山實がなりました。……けどもな、あの穴へ手を入れると、あの時に焼けたのが消し炭になつてゐて、黒う手に附きまッせ。……あゝこの銀杏は雌やこと、實がなつてへん。」

お光も小池と同じやうに、名も知れぬ神の宮の大銀杏を見上げて言つた。鵯が二羽、銀杏の梢から杉の木に飛び移つて、汽笛のやうな啼き聲を立てた。

誰れから先きに動いたともなく、二人は銀杏の傍を離れて、盛り上げるやうに白砂を敷いた

道を本殿の方に歩いた。

短い太鼓型の石橋を渡ると、水屋があつて、新らしい手拭に「奉納」の二字を黒々と泳ませて書いたのが、微風に揺いてゐた。

ところ〴〵に幟や提燈を立てたらしい穴が、生々しく殘つてゐて、縄の切れ端のやうなものも、ちよい〳〵散らばつてゐるのは、祭があつてから間のないことを思はせた。

村の男や女が着飾つて、ぞろ〳〵この宮の境内に集まつて、佐倉宗五郎の覗きカラクリの前に立つたり、頭は犬で身體は蛇の觀せ物小屋に入らうか入るまいかと相談したり、食物や手遊品の店を見て廻つたりした光景を、小池は頭の中で繪のやうに展げながら、空想は何時しか十五年前の現實に飛んで、愛宕さんの祭のことを追懷してゐた。

愛宕さんの祭には花踊があつた。ある年の祭に町の若い衆だけでは踊り子が足りなくて、他所者の小池までが徴發されて、薙刀振りの役を宛てられたことがあつた。

白衣に袴の股立を取つて、五色の襷を掛け、白鉢巻に身を固めて、薙刀を打ち振りつゝ、踊の露拂ひを勤めるのは、小池に取つて耻かしい業でもなく、二三日の稽古で十分であつた。

都育ちの小池の姿が、四人一組の薙刀振りの中で、際立つて光つてゐた。手振り身振りの鮮かさと、眼鼻立ちのキリヽとして調つたのとは、町中の人々を感心さして、一種の嫉みと惡しみとを起すものをすら生じた。

町の藝妓や娘たちからは、旅役者の市川鯉三郎が曾て受けたほどの人氣が小池の一身に集まつた。

其の祭の日に、稚兒になつて出た町の小娘たちの中で、髪の結ひ振り、顔の作りから、着物の柄、身の廻りの拵へまで、總てが都風で、支度に大金をかけた町長の娘にも光を失はしたお光の噂は、覗きカラクリよりも、轆轤首の觀せ物よりも、高く町中に廣まつた。

薙刀を抱へた白衣姿の小池と、母親が丹精を凝した化粧の中に涼しい眼鼻を浮べて、紅い脣を窄めたお光とが、連れ立つて歸つて行くのを、町の人は取り卷くやうにして眼を注いだ。

「東男に京女やなア。」なぞといふ囁きが、人々の口から漏れた。

まだ穢れを知らぬ清淨な少女を選り出して、稚兒に立てねばならなかつた。それをお光は十二やそこらで、早や月々の不淨を見るさうなと言ひ出したものがあつて、さう言へばさうらしいなア、なぞと合槌を打つものも現はれ、穢れた娘を神前に出した祟りは恐ろしい、若しや神樣の怒りに觸れるやうなことがあつたら、都家とは町内の交際を絶つ、といふことにまでなつたけれど、幸ひに秋から冬にかけて惡い病も流行らず、近在が皆豐作で町も潤うたから、神樣の方はそれなりに濟んで、たゞお光の早熟といふことを町の人々は噂し合つた。

こんなことのあつた昔を思ひ出してから、小池は、自分に離れて獨り水屋で手を洗つてゐるお光に聲をかけて、

『愛宕さんの祭は何日だつたかね。』と問うてみた。

「來月の六日だすがな。」と、お光も先刻から昔の祭の日の記憶を辿つて、さま〴〵の追懷に耽つてゐたらしく思はれた。

「今年は花踊をするとか、せえへんとか言うて、町内が揉めてゐますのや。……」

先刻から脱いでゐた絽縮緬の羽織をまた着て、紺地に黄色の大名縞の、お召の單衣と、白の勝つた博多の丸帯と、友染の絽縮緬の長襦袢とに、配合の好い色彩を見せつゝ、其のスラリとした撫肩の姿を、田子の浦へ羽衣を着て舞

ひ下りた天人が四邊を明るくした如く、この名も知れぬ淋しい神の森を輝かすやうに、孔雀の如き歩みを小池に近く運びながら、お光はまた斯う言つた。

『君はもうお稚兒に出られないだらうな。』と、小池は笑つた。

『十三の年から、もう一遍も出えしまへんがな。…あんたに別れてから一遍も出えしまへんのや。…十二の時、あんたと一所に祭に出ましたな、あれが出納めだしたんや。』

あの頃が懷かしくて堪らぬと言つた風に、お光は肌理の細い額に筋肉を躍らせつゝ、小池に寄り添うた。

『穢れてる〳〵、ツてあの時皆んながさう言つたのは、矢ツ張り眞個だつたのかい。』

小池が突然棄鉢のやうな調子で斯う言ふと、お光は紅を刷いた如く、さつと顏を紅くした。

四

やがて二人は、並んで拜殿の前まで行つて、狐格子の間から内部を覗いた。

海老錠のおりた本殿の扉が向うの方に見えて、薄暗い中から八寸ぐらゐの鏡が外面の光線を反射してゐた。扉の金具も黄色く光つて、其の前の八足には瓶子が二つ靜かに載つてゐた。

拜殿の欄間には、土佐風に畫いた三十六歌仙が行儀よく懸け聯ねられ、板敷の眞中には圓座が一つ、古びたまゝに損じては居なかつた。深閑として、生物といへば蟻一疋見出せないやうなところにも、何處となく祭の名殘を留めて、人の香が漂うてゐるやうであつた。

『愛宕さんの方がよろしいな。第一大けおますわ。』と、お光は横の方に簾のかゝつた局とでも呼びさうなところを見詰めてゐた。

『こんなもの、見てゐても仕樣がない。』と、小池は砂だらけの階段を下りて、廂の下に掲げてある繪馬の類を一つ〳〵見ながら、後の方へ廻らうとした。

『不信心な人。…此處まで來て拜みやはりやへんね。』

潤ひのある眼で小池の後姿を見詰めつゝ、お光は斯う言つて、帶の間から赤い裏のチラチラと陽炎のやうに見える小ひさな紙入を取り出し、白く光るのを一つ紙に包んで、賽錢箱に投げ込み、石入の指輪の輝く華奢な兩手を合はして暫く祈念した。

『何う言つて拜んだの、…神樣に何を賴んだんだい。…何か難かしいことを持ち込んだのかい。…何う言つて拜んだのか、モ一度大きな聲でやつて御覽。…』

微笑みつゝ小池は、側に寄つて來たお光に、遠くから見ればキッスでもしてゐるかと思はれるほど、顏を突き附けて言つた。

『さア、何う言うて拜みましたやろ、當てて見なはれ。』

心持ち顏を紅くして、お光はニタ〳〵笑ひながら、小池のしたやうにして、繪馬の類を見て廻つた。

諏訪法性の兜を被つた、信玄の猩々の如き頭へ斬り付けようとしてゐる謙信の眼は、皿のやうに眞ん圓く、振り上げた刀は馬よりも長くて、信玄の持つてゐる軍配は細く弱さうで、天下泰平と書いてある――のが、一番大きな繪馬で、其の他には、櫻の咲いた下で短册に字を書かうとしてゐる鎧武者の繪や、素裸の人間が井戸の水を浴びてゐる上へ、金の幣が雲に乘つて下りて來る繪や、また今樣の無恰好な軍帽を被つた兵隊が、軍旗を立てて煙の中を運び出してゐる繪や、本式に白馬を一頭だけ畫いたのや、さまざまの繪馬の古いの新らしいのが、塵埃に汚れたり、雀の糞をかけられたりして並んでゐた。

それらの繪馬に混つて、女の長い黒髪の根元から切つたらしいのが、まだ油の艶も拔けずに、恭しく白紙に卷かれて折敷に載せられ、折敷の裏に『大願成就寅の歳の女』と書いて、其と折敷とが離れぬやうに赤い絲で確と結び付けてブラ下げてあるのを、お光は一心に見入つてゐた。

『寅の歳の女、……お前も寅の歳だつたぢやないか。』

小池も不圖其の女の黒髪を見付けて、こんなことを言つてみた。

『知りまへんがな。……そんなこと。』

怒つたやうに言つて、お光は厭な／＼顔をした。

『こんなことをして、これ何效になるんだらう。』

と、小池は細卷きの袋入りの蝙蝠傘の尖端で、其の女の黒髪を突ツついた。

『そんなこと、しなはんな。相變らずヤンチャはんやなア。……さア行きまへう。』

最後の一瞥を女の黒髪に注いでお光は、さツさと社殿の後の方へ行つた。

もう二月もすれば紅く染まりさうな楓の樹や、春になれば見事な花を持ちさうな躑躅の木や、そんなものが、野原のやうに小石を敷いた神苑ともいふべき場所に、行儀よく植ゑてあつた。

『前は鳥居や門や扉で、幾重にもなつてますのに、後は板一枚だすな。……私、何處の宮はんへ參つても、さう思ひまんな。』

本殿の眞後へ廻つた時、斜めに破風の方を仰ぎながら、お光はこんなことを言つた。

『さうだ、神樣に頼みたいことがあつたら、前から拜むより、後からさう言つた方がよく聞えるぜ、お賽錢も此處からの方が利くよ。』

腰板のところ／＼にある樂書を讀んでゐた小池は、斯う言つて笑つた。

太い杉の樹を伐り仆して、美しく皮を剝いたのがあつたので、二人は其の上に並んで腰をかけた。

五

『一生の中に、こんなところへ來ることがあるとは思はなかつたね。』

『私かて、さうやわ。……こんなとこ、用も何もあれへんよつて。……』

もと來た野道を停車場の方へ歩きながら、小池とお光とはこんなことを言ひ合つてゐた。

『何處へ行きよ、すかや。こんなとこばつかり歩いてたて、仕樣があれへん。』

『君の行くとこへ、何處へでも隨いて行かアね。……何處へでも連れてつてお呉れ。』

『あんたの行きなはるところへなら、何處でも隨いて行きまんがな、私かて、……』

果てしもないことを、互ひに言ひ續けつゝ、二人の足は自然と停車場の方へ向つた。停車場では先刻のが引き返して來たのか、汽車にはまた毒々しく黒い煙を揚げて、今にも動き出しさうであつた。

手織縞の單衣に繻珍の帶を締めて、其處に根の低い丸髷に赤い手絡をかけた人が、友禪モスリンの蹴出しの間から、太く黒い足を見せつゝ、後から二人を追ひ拔いて、停車場に驅け込んだ。

『私等もまたあれに乘りますのかいな。』

停車場に驅け込んだ人の後姿を笑ひながら見やつて、お光は斯う言つた。

『いや、あれは厭だ。日が暮れるまで待つても汽車に乘らう。』と、小池は横の方の茶店へ入つて行つた。

店の間一杯に縫ひかけの瓦斯蒲團を擴げて、一心に針を入れてゐた茶店の若い女房は、二人の入つて來たのを見ると、[illegible]のやうに膝の邊へ

附いた綿屑を拂ひ棄てながら、愛想の好い顏をして出迎へた。

「何うぞ此方へ、お上りやはつとくれやす。」と、土間の床几に腰をかけてゐる二人を强ひて、奧まつた一室に案内した。

「汽車にお乘りやすのやごわへんか。……この次ぎはキッチリ四時に出ますよつて、まだ一時間ござります。……こんな見るもんもない在所へお越しやしとくれやして、……ほんまに仕樣のないとこで、……」

囀るやうに言つて女房は、茶や菓子を運んで來た。狸が腹鼓を打つてゐる其の腹のところに灰を入れた煙草盆代りの火鉢は、前から其處にあつた。

「火がござりましたか知らん。」と、女房は一寸狸の腹を撫でゝ言つた。

「君も家に居るとあんなことをしてるんだらう。」

帶の狹い女房の後姿を見送つて、小池はニヤニヤ笑ひつゝ言つた。

「もう店はしてえしまへんがな。妓どもしいも二人居るだけで、阿母アはんと四人だす。……お茶屋はんから口がかゝると妓どもを送るだけで、家へはお客を上げえしまへん。」

お光も笑つて、氣味の惡いほど、まじまじと小池の顏に見入つてゐた。

「暑いなア。」と小池はインバネスを脫いだ序に、堅絽濃鼠の薄羽織をも脫ぎ棄てると、お光は立つてインバネスを柱の折釘にかけ、羽織は袖疊みにして床の間に載せた。

「女ばかり四人ぢやア物騷だね。……君のお鄰さんは何うしたんだね。……」

『そんなもん、あれしまへん。……』

「初めッから。……」

顏を眞赤にしてお光は、態とらしく俯伏いてゐたが、其處へ女房が梨を五つばかり盆に載せ、ナイフを添へて持つて來たので、顏を上げてそれを受け取ると、器用な手付きで梨の皮を剝いて、露の滴りさうな眞白の實を花の形に切り、ナイフの尖端に刺して小池の前に差し出した。

「君の方ぢや、梨をさういふ風にして客に出すことが流行るのかね。」と、小池は其の梨の一片を摘んで言つた。

「別に流行つてもゐえしまへんけど、藝妓はんがこんなことをして出しやはると、お客さんが口で受けたりしてはりまんがな。」

一番小ひさな一片を自分の口へ入れ、ハンケチで手を拭きつゝ、お光は言つた。

「ほんとに、君はまだお鄰さんを貰はなかつたのかい。……一人娘だから、何うせ貰はなけりやならないだらう。」

小池は斯う言つて、娘と呼ぶには不似合なお光の風情を見てゐた。

「そんなこと、何でもよろしおますがな。……それより、あんたはん奧さんおまッしやろ、お子さんも。……」

俄に屹とした調子になつたお光の聲は、今まで違つた人の口から出たもののやうであつた。

「そんなものありやしない。僕の家は男ばかり四人暮しだ。」

「嘘ばッかり、……知つてまッせ。」

小池もお光も、互ひに眞顏になつて、口先きだけで笑ひ合つてゐた。

「何うして君に、今日僕を見付けたんだね。……よく分つたもんだ。」

昨日の朝東京を立つて、晩に京都へ着き、祇園の宿に一泊して、今日の正午過ぎには、大阪の停車場の薄暗い待合室で、手荷物を一時預けにしようとしてゐるところを、突然背後から、束髮の結ひ振りなり、着物の着こなしなり、一寸

見ると東京の人かと思はれるほどの、スラリとした女に、上方言葉で聲をかけられたことが、もう遠い昔のことでもあるやうに、小池には思ひ浮べられた。

『そら分りまんがな、直きに。……カザがしますよつて、住えカザや。……何んぼ隠れなはつても、あきまへんで。』

斯う言ひながら、また梨を剝き始めたお光の右の中指の先きが、白紙で結はへてあるのを、小池は初めて氣がついた風で見てゐた。

『あの時は、ほんとに吃驚したよ。東京の何家かの女將にしては野暮臭くもあるし、第一言葉が違ふし、それにフイと下駄を見ると、ヒドい奴を穿いてるんだもの。東京の人はあんな下駄は穿かないね。』

『惡口屋はんやこと、相變らず。……そらあきまへんとも、私なぞ。東京のお方はんは皆別嬪で、贅澤だすよつてな。』

『お前の家は昔から阿母さんが東京好きで、長火鉢まで東京風の緣の狹い奴を態々取り寄せて、褞袍か何か着込んで其の前へ新橋邊の女將さんみたいにして坐つてゐたが、娘も矢張り東京風に作るんだね……近くに大阪があるのに、それを飛び越して、遠い東京の眞似をするのは隨分骨が折れるだらう。』

つくづくと小池は、田舍の小ひさな町に住みながら東京風の生活に憧れて、無駄な物入りに苦しんでゐるらしい母子の樣子を考へた。東京の人と言へば、直ぐ偉いものに見える田舍町の人の眼をも想うた。

『だからね、あの下駄を改良して、其の頭髮を少し直せば、一寸誤魔化せるよ。……君は。……見る人が見れば直ぐ分るだらうが、僕なんぞにはね。』

『人のことを、そないに見るのは厭。』と、お光は自身の身形を身廻してゐる小池の視線を厭しさうにして、身體を竦めた。

『あんたやちふことが、何で分つたと思てなはる。先刻大阪で。……あの荷物の名札を見ましたんやがな。……入つて來なはつた時から、さうやないかと思ひましたんやけど、大分變りなはつたよつてな。……若しやと思て、名札を見ましたつや。……名札が裏返つてたのを、側へ寄つて知らん間にひつくり返してやつた。……』

皮を剝かれた梨は、前のやうに花の形に切られたまゝ置かれてあつた。お光の眼には懷かしさうな潤ひがまただんだん加はつて來た。

『油斷のならん女だね。……ほんとに君はまだお金さんを貰はないのかね。』

『またや。』と、お光は笑ひ出した。

『切符を買うて參じまへうか。』

茶店の女房は、にこにことして出て來た。

六

『こんなとこへ、もう一生來ることあれへん。折角來たんやよつて、まア東光院へでも寄つて行きまへう。』と、お光は、銀貨を取り出して、東光院へ行く停車場までの切符を女房に買はせた。稍暫らくしてから、

『まアそないに仰しやらんと、こんなとこへでも、これを御緣にまたお越しなはつとくれやす。』と、女房は口元に笑を拵へて、青い切符と釣錢の銅貨とを持つて來た。

『四時だツたね、汽車は。』と、小池の懷中時計を見い見い歩く後から、お光が小股走りに停車場の方へ蹤いて行くのを、女房は西日を受けつゝ店頭に立つて、睦しさうにぼんやりと見送つてゐた。

汽車の内は唯二人だけであつた。萌黄のやうな色合に唐草模樣を織り出したシートの狀が、東京で乘る汽車のと同じであつたのは、小池に東京の家を思はせる種になつた。

若い妻や、幼い子供を連れて、箱根や日光へ行つた時の光景が描き出された。土産を樂みにしながら留守をしてゐるもののことが、頻りに考へられた。二年も居る下女の顏までが眼の前に浮び出た。

今日行きますと、京都から葉書を出して置いた大阪の叔母のことも思はずにはゐられなかつた。煙草の好きな叔母が煙管を離さずに、雇人を指揮して忙しい店を切盛してゐる状も見えるやうで、其の忙しい中で、甥の好きな蒲鉾なぞを取り寄せてゐることも想像されないではなかつた。

斯う考へてゐると、横に寄り添つて腰をかけてゐるお光の身體が、蛇のやうにも思はれて來た。蛇の温か味が、お光の右の膝から自分の左の膝へ傳はつて來るといふ氣がした。

執念深く附き纏はる蛇から脱れて、大阪に待つてゐる叔母の前に坐りたいと思はれて來た。早く東京の家へ遁れ込んで、蛇から受けた毒氣を洗ひ落したいとまで思はれて來た。

『あゝ、此處が東光院へ行く道やないのかなア。』

窓の外を振り向いて、お光は獨り言を言つた。驛名を書いた立札の雨風に晒されて黑く汚れたのが、雜草の生えた野天のプラットフォームに立つてゐる眞似事のやうな停車場を、汽車は一聲の汽笛とともに過ぎ去つた。來る時に見た東光院の甍や白壁は、山の半腹に微笑むが如く、汽車の動くとともに動いてゐるやうであつた。

『さうだ。此處で下りるんだよ。……けども來る時に此處で停つたかね。』と、小池は考へ込む風をした。

次ぎの停車場までは稍遠かつた。其處に着くのを待ちかねて、小池はお光とともに、小砂利を敷き詰めた長いプラットフォームへ下りると、ざく〳〵と小砂利を踏みつゝ車掌に近附いて、

『切符を賣つといて停車しないのは不都合ぢやないか。通過驛なら通過驛だと乘る時にさう言つて呉れないぢや困る。』と、二枚の切符を車掌の鼻先きへ突き出した。車掌はチラと切符の表を見ただけで小腰を屈めつゝ、

『通過驛といふこともございませんが、あそこは停留場でございまして、知らせがないと停りませんので、……』と、氣の毒さうに言つた。

『さうならさうと、乘る時に言つて呉れゝばいいぢやないか。』と小池も言葉を柔かにした。

『誠に濟まんことを致しました。何んなら次ぎの下りでお引ッ返し下さりましたら。』と、車掌は無恰好に揉み手をした。

下りを待つとなると、また一時間もかゝつた上に、それが汽動車でもあつたら厭なことだと、小池は切符を車掌に渡し、プラットフォームから、線路を越えて、直ぐ其處に見える街道の方へ歩いた。

『何處へ行きますのやなア。』と、お光は黑い油の染み込んだ枕木の上を氣味わるさうに踏みつつ、後から聲をかけた。

『さア何處へ行くんだらうな。』と、小池はもう砂埃の立つ街道へ出てゐた。

二人は暫らく無言のまゝ、當てもない街道を歩いた。

其處は一寸した町になつてゐて、荒物屋や呉服屋のやうなものも見えた。一膳飯屋と下駄屋とが並んでゐて、其の前には空の荷車や汚い人力車が曳き棄ててあつた。赤い色で障子に大きく蠟燭の形を畫いた家が、其の先きの方にあつた。

行き違ふのは多く車であつた。首に珠數を懸けた百姓らしい中年の男女が、合乘車の上に窮屈しつゝ、砂石の車夫に、重さうにして曳か

れて來るのにも逢つた。夥しい庭石や石燈籠の類を積んだ大きな荷車を、逞しい牡牛に曳かして來るのにも逢つた。牛の口からは、だらだらと涎が流れてゐた。

三町ほど行くと、町は盡きた。水の汚い小川に架つた土橋の上に立つて、小池が來た方を振り返ると、お光の姿が見えなくなつてゐたので、後戻りして探さうとすると、お光は町はづれの小間物屋に荒物屋を兼ねたやうな店から、何か買物をした風であたふたと出て來て、潤ひのある眼の縁に皺を寄せつゝ、ニッと笑つた。

『何を買つて來たの。』と、小池はお光の手に氣をつけて、何を持つて來たかを見ようとした。

『何買うたかて、よろしいがな。』

お光の手には蝙蝠傘と手提げの千代田袋とがあるばかりで、買つたものは千代田袋の中にでも入つてゐるらしかつた。

『何んだらう、……何を買つて來たんだらう。隱すから餘計見たいやうな氣がするな。……ほんとに何を買つて來たの。』

千代田袋の中を透視でもしようとする風にして、小池は言つた。

『別に隱してやしまへんけど、男が、そんなこと訊くもんやおまへん。』

たゞ笑つてゐるだけで、お光は千代田袋を輕く振つてゐた。

『さア行かう。』と、小池はお光の買つた物を知らうとするのを諦めて、さつさと歩き出した。灰のやうな土埃が煙の如く足元から立つた。

『行かうて、何處へ行きますのや。』

今にも跛足を曳きさうな足取りをしながら、お光は言つた。

『何處へ行つていゝか、僕にだつて分りやしないぢやないか。』と言ひ棄てて、小池は小川に沿うた道をズン／＼歩いた。

『一寸待つとくなはれな。……斯うしますよつて。』

哀れ氣な聲を出して、動もすれば後れて了ひさうなお光は、高く着物を端折り、紹縮緬の長襦袢の派手な友染模樣を鮮かに現はして、小池に負けぬやうに、土埃を蹴立てつゝ歩き出した。

沈み勝の、物悲しさうな、人懷かしさうな、痛々し氣な状をして、男のすること、言ふことには、何一つ背くまいとするらしいのが、小池にはいぢらしく、いとしく見えて來て、汽車の内で考へたやうな蛇に纏はられてゐるといふ氣は消え失せ、金絲雀でも掌の上に載せて來たといふ心になつた。

それで足の速度を緩めて、お光の歩き易いやうにしてやりながら、手でも引いてやりたいといふ氣がして來た。

おかる勘平の道行といつたやうな、芝居の所作事と、それに伴ふ輕く細く美しい音樂とが、頻りに思ひ出されて來た。

能く實つた四邊一面の稻田が菜の花の畑であつたならば、さうして、この路傍の柳に混つて櫻の花が眞盛りであつたならばと、小池は芝居の書き割りの鮮かな景色を考へ出してゐた。

鷺坂伴内のやうな追手が、だん／＼近づいて來はせぬかといふことなぞも思はれて來た。

七

『おい人車に乘れば好かつたね。』と小池は、路傍の柔かい草の上を低い駒下駄に踏んで歩きつつ土埃の立つことを防いでゐるお光の背後から聲をかけた。

『一車、あれしまへなんだがな。たツた一つおましたけど、あんなん汚うて乘れやへん。』

擔ぐやうにした蝙蝠傘に西日が當つて、お光の顏は赤く火照つて見えた。

『停車場には屹と人車があつたんだよ。表口

から出なかつたもんだから、分らなかつたけどね。』

『人車があつても、乘つて行くとこが分れへんのに、仕樣がおまへんがな。』

『車夫に訊けば何處か行くとこがあつたらう。』

こんなことを言ひ〳〵、二人は東の方へ山の裾に向つて歩いた。野道に入つてからは、車に行き逢ふことはなくて、村役場の吏員らしい男や、貧乏德利を提げて酒を買ひに行くらしい女や、草刈童や、そんなものに時々逢つた。逢ふほどの男女は、皆胡散臭い眼をして二人を見た。

東の山續きの左の方の、山懷のやうになつたところに、先刻汽車から見えてゐた東光院らしいものが現はれて來た。

『あれが東光院だらう。折角行からと思つたんだから、彼處へ行つて見よう。』

前途の希望に光が見えたといふ風で、小池は力附いて言つた。

『から廻つて行きますのやろ、……餘ッぽど遠さうだすな。』と、お光はぐんにやりした。

自然にまた小池の足が速くなつて、お光は半町ほども後れた。小池は嫁菜の花が雜草の中に咲いてゐる路傍に立つて、素直に弱い足を運んで來るお光の追ひ付くのを待つてゐた。細卷きの蝙蝠傘の尖端で、白く孱弱い嫁菜の花をちよいちよい〳〵突ついてゐた。

お光はと振り返ると、横の徑から鍬を擔いで來た百姓に小腰を屈めつゝ、物を訊いてゐたが、やがて嬉しさうな顏をして小走りに小池に追ひ付き、

『十八町だすて、東光院まで。……この道を眞ツ直ぐに行きますと、駐在所があつて、其處から北へ曲るんやさうだす。』と元氣よく言つた。

小川に沿うた眞ツ直ぐな道は、なか〳〵長かつた。川はだん〳〵狹く汚くなつて、藻も生えぬ泥溝のやうになつた頃、生活の裕かならしい農村の入口に差しかゝつて、其の突き當りに駐在所もありさうであつた。

何か知ら惡事でも働いてゐるやうな氣がして、小池は赤い軒燈の硝子の西日に眩しく輝いてゐる巡査駐在所の前を通るのに氣が咎めた。

黑い苔の生えた石地藏に並んで、『左とうくわうゐん』と刻つてある字の纔に讀まるゝ立石の前を、北へ曲つて行くと、二戸前三戸前の白い土藏や太い材木を使つた納屋を有つた豪農らしい構への家が二三軒もあつた。道に沿うて高い石垣を築き、其の上へ城のやうに白壁の塀を廻らした家もあつた。耶風の忍返しが棘々と長屋門の横に突き出てゐた。

『この村は金持の村だね。』

斯う言つて小池は、自分の住む東京の郊外の村の、瘦せて荒れて艷氣のないのとは違つて、この村のいゝいゝふッくりと暖かさうで、野にも家にも活々とした光の充ちてゐるのを思つた。さうして自分の家のことが、また少しづつ考へ出されて來た。

『良いやうでも百姓はあきまへん。家でも田地を少し有つてますが、稅が高うて引合はんよつて、賣つて了はうか言うてますのやがな。』と、お光の物の言ひ振りが今までとは變つて、如何にも世帶染みた、商賣の懸合でもするやうな風であつたので、小池はこの時初めて女將としてのお光を見たと思つた。

この村を通り過ぎると、次の村まではまた暫らくの間人家が無かつた。次の村の入口には、壞れた硝子戸を白紙で繕つた床屋があつた。其の村は前の村よりも貧しさうであつた。

東光院の長い石段の登り口は、其の村の中程にあつた。日は漸く西の山に沈んで、雲が眞赤

に染まつてゐた。

『あゝア、漸う來ましたな。……まア綺麗やこと。』と、お光は石段を背にして立ちつくしつゝ、西の空を眺めた。

八

音に聞いてゐた東光院の境内は、遠路を歩いて疲れた上に、また長い石段を登つてまで見に行くほどの場所でもなかつた。本堂の外に三つばかり小ひさな堂やお宮のやうなものがあるのを、二人は大儀さうにしながら一々見て廻つた。お光は本堂で一寸頭を下げて拜んだだけで、他の堂は小池のするやうにして素通りした。

庫裡の方では、何か事があるらしく、納所坊主や寺男なぞが忙しさうにして働いてゐるのを、横目に見つゝ、二人は石段の下り口に立つた。

眞赤であつた西の空は、だん／＼と桃色に薄れて、それがまた鴇色に變つて行くまで、二人は眺め入つてゐた。遙か向うに薄墨色をしてゐる山の端から、夕靄が立ち初めて、近くの森や野までが、追々薄絹に包まれて行くやうになつた。轟と響く遠音とともに、汽車が北から南へ走るのが、薄絹を透いて手遊品の如く見えた。其の煙突からは煙とともに赤く火を噴き出した。暗は早やじり／＼と石段を登つて來さうであつた。

『家では何處へいたのや知らんと思てよるやろ。』

二人並んで石段を半分ほど下りかけた時、お光は心細氣な顏をして斯う言つた。

『家が戀しくなつたんだな。……これから直ぐ歸れば、夜半までには着くよ。……阿母さんの顏も見られるし。お稚さんの顏もね。……』と、小池はまた立ち止つて、海のやうに擴がつた夕暗の中をぼんやり見詰めた。

『またあんなこと言やはる。……お稚さんなんぞ、あれしまへんちうてるのに。……あんたこそ、奥さんが戀しおますのやろ。先刻にから里心ばツかり起して、考へてやはるのやもんな。……』

斯う言ひ／＼、お光は獨りで石段を下りて行つた。

『ほんとにお稚さんはないの。……ほんとのことを言つて御覽。』と、小池も後から随いて石段を下りた。

『まだあんなこと言うてはる。……ほんまにあれしまへんがな。』と、お光は聲に力を籠めて言つたが、

『そら、あつたこともあるか知りまへんが、今はあれしまへん。嘘と思ふんなら、家へ來て見なはれな、阿母はんと、彼ども二人と雇人家内だすがな。』と、これだけに囁くやうに低く言つた。

『丸で女護の島だね。僕も是非一度行きたいな。』と、小池はもうお光の言葉を疑ふことは出來なかつた。

『一遍來とくれやす。屹度だツせ。……明日……明後日……そら阿母はんが喜びはりまツせ。時時なア、あんたの噂をして、何うしてはるやろな、お父つアんのお葬もあるのやよつて、一遍來たはるとえゝないうて、失禮やがわしは自分の子のやうに思はれるいうてはりますのや。』

少しばかり家のことを思ひ出しかけてゐたお光は、もう何もかも忘れた風で、ひたと小池に寄り添ひつゝ石段を下りた。

九

石段を下り切つた直ぐ前に、眞ツ黒な古ぼけた家が、暗の中から影の如く見えてゐた。内部のラムプの光で黄色く浮き出した腰高の障子には、『御支度所大黒屋』といふ文字が茫として讀まれた。

小池が其の障子を開けて入ると、お光も默つて後から入つた。割合ひに廣い土間には、駒下駄が二三足揃へてあつて、煮物の臭ひがプンと鼻を衝いた。奧の方からは三味線の音が響いて來た。

『えらう遲い御參詣だすな。さアお上りやす。』と、隅の方の暗いところから、五十恰好の肥つた女將らしい女が、ヨチ〳〵しながら出て來て、嗄れた聲で言つた。

『お出でやす。えらい遲うおますなア。』と、奧からも女が出て來て、二人を導いた。思ひの外に懷の深い家で、長い廊下を過ぎて通されたのは、三味線の音のする直ぐ隣りの八疊であつた。

『いかいはに致しまへうか。……御酒は。』と、煙草盆を運んで來た女が問うたので、鷄肉とサイダーとを命じて、小池は疲れ切つた風でインバネスのまゝゴロリと横になつた。お光は立つて、小池の背後から皺くちやになつたインバネスを脫がし、自分の單へ羽織と一所に黑塗りの衣桁へ掛けた。

隣り座敷では三味線の音がいよ〳〵劇しくなつて、濁聲で唄ふ男の聲も聞えた。唄ひ終ると、男も女も哄と一時に笑ひ囃すのが、何かの崩れ落ちるやうな勢ひであつた。

『こんなとこで散財してはる。』とお光は低く笑つた。

間もなく普通の話聲になつたと思ふと、三味線の音も止んで、隣り座敷の客はドヤ〳〵と座を立つたらしかつた。廊下を歩く足音がバタバタと聞え、やがて、杯盤を取り片付け、箒で掃いてゐる氣色がした。

『此方へお出でなはツとくれやす。』と女は、難かしい字の書いてある唐紙を開けて、二人を次ぎの十疊へ誘うた。この家の一番奧の上等座敷らしく、眞中に紫檀の食卓を据ゑ、其の上へ茶道具と菓子とを載せてある物靜かさは、今まで村の若い衆が底拔け騷ぎをしてゐた室とも思はれなかつた。

座敷の三方は硝子障子で、廊下がグルリと廻り縁のやうになつてゐた。障子の外へ出て見ると、中二階風に高く作られて、直ぐ下が稻田であると分つた。星明りにも見晴らしの佳いことが知られた。これで川があつたらばと小池は思つた。

三味線を彈いてゐた女であらう、二十歲ぐらゐの首筋に白粉の殘つたのが、皿に入れた鷄肉や葱や鋤燒鍋なぞを、長方形の脇取盆に載せて持つて來た。薄赤い肉を美しく並べた皿の眞中には、まだ殼の出來ぬ眞ん圓く赤い卵が寶玉のやうに光つてゐた。

『えらい遲い御參詣だしたな。』と、女は鍋を焜爐にかけて、手際よく煮始めた。

『姐さん此家は景色が佳いね。』と、小池はお光の注いだサイダーを冷たさうにして飮んだ。

『へえ、お蔭さんで、月見の晩やなぞは、大阪から態々來て呉れはるお客さんもござります。』

女はサイダーの瓶を取り上げて、『御免やす。』と、お光に注いだが、鍋のグツ〳〵と煮上つたのを見ると、

『奧さん、何うぞお願ひ致します。』と、後をお光に任して座敷を退り出た。

『奧さんや言やはる。』

お光は女の足音の廊下に遠くなつた頃、低い聲で斯う言つて、首を縮めた。

足音がまた廊下に響いて、女が飯櫃を持つて來た頃は、小池もお光も、貪り喰つた肉と野菜とに空腹を滿して、ぐい〳〵やりとしてゐた。

一〇

『もう歩くのは厭だね。……此家で泊つて行かうか。』

小池は欠伸交りに早口で言つて、お光の顏を見た。

『これから大阪までいても、何處ぞへ泊らんなりまへんよつてな。……大阪から家へは寂しいよつて、私もうよう去にまへんがな。』

お光も態とらしい欠伸をして、同じやうに早口で言つた。

能く鳴らぬ手を小池が五つばかり續けて、ペチヤペチヤとやると、遠くで返辭が聞えて、白粉の殘つた女が出て來た。

『この家に泊れるかね。……疲れちまつて、暗いところを歩くのも厭だから、今夜泊つて、明日の一番で歸らうと思ふんだが、何うだらうね。』と、小池は言ひにくさうにして言つた。

『さうだツか、お泊りやすか。……其の方が緩くりしてよろしおますな。……なア奥さん。』

女はお光を見て、微笑を漏らしつゝ、立つて行つたが、やがて荒い格子縞の浴衣を二組持つて來て、

『裾湯になつてますが、お泊りやすのなら、お風呂お召しやへえな。』と囁いた。

赤い裏の紙入を取り出して、お光は、女と家とへそれ〴〵心付けをやりなぞした。

二人とも浴衣に着更へ、前後して煙臭い風呂へ入つた。小池は浴衣の上から帶の代りに、お光の伊達卷きをグル〳〵卷いてゐた。

『明日、君の家へ行かうか。』

手枕をして橫に足を伸ばしつゝ、紙卷煙草を吹かしてゐた小池は、自分の頭の直ぐ前で、お光が臺ランプの光に懷中鏡を透かして、湯あがりの薄化粧を始めたのを見やりながら言つた。

『何んぼ何んでも、不意に二人でいんだら、家で喫驚しますがな。』と、お光は自家へ小池を伴つて歸るのを澁る樣子であつた。

『今晩、東光院さんで淨瑠璃がござりまんがな、何んなら聽きにお出でやしたら。……其の間にお床延べときます。……素人はんだすけど、上手やちふ評判だツせ。……先刻に此室でお酒あがつてはつたお方も皆行かはりましたんだす。』

また女が出て來て、斯う言つて勸めたけれど、二人とも此の室を動きたくはなかつた。女が去つてから、小池は莞爾々々として、

『十五年も前の古い馴染だから、ツイ引ツ張られて、君と一所にこんなとこへ來たんだね。……初めて會つたんだと、僕は君なんぞ見向きもしないんだけど。』と、不躾に言ひ放つた。

『私かてさうや。……幼馴染やなかつたら、いゝあんたみたいな男、初めて見たて、眼に止まれへん。』

可愛らしく薄化粧を終つたお光は、ツンとして、斯う言つた。

東光院で撞いたのであらう、初夜の鐘の音が、ゴーンと響いて來た。

土龍の穴

私の家の庭の土の下には、いゝ、いゝ、むぐらもちが棲んでゐて、時々土を持ち上げる。それを見ると、今丁ど瘙痒症に惱んでゐる私は、忽ち全身の痒さが增して來る。雨が降つて溜り水がいゝ土龍の穴へ、吸ひ込まるゝやうに流れ込んだ時、私は皮膚科の學士に血管注射をして貰つた折の清々しさよりも、更に清々しい思ひがした。

（「金魚のうろこ」より）

生存を拒絶する人

一

私(女)は私生兒である。――

私生兒とは何んのことであるか、そんなことを、まるで知らなかつた九歳の春、學校からの歸りに、麥畑の間の細路で、あとから竹片を振り廻しながら走つて來た四年生の男の兒が、

『ヤアい、皆んな聞け、こいつ私生兒やぞい。……』と叫んで、竹片で一つ、私の赤い帶のあたりをどやし付けて、向うの空に雲雀のチイツクチイツクと囀つてゐるのを仰ぎつゝ馳け去つたのが、私の『私生兒』といふ言葉を耳にした最初であつた。

し、せい、じ。……私には、それが何んのことだか、少しも解らなかつた。大層綺麗な、春の野にいろ〳〵の花の咲き揃つてゐるところへ、遠い山の上から鐘が鳴り渡るやうな、氣持ちの好い、響きの滑らかな言葉である。發音である。……と、さう思つて、私は其の『し、せい、じ』と、いふ聲を聞いたのである。

『家は潮音寺といふんやもん……いい、しせいじやないわ。……餘所のお寺と取り違へてるんや。』と私は獨言をして、學校道具の入つた風呂敷包を抱へつゝ、草履を引き摺つて歩いてゐると、また一人後から風のやうに馳けて來た男の兒が、同じやうに、

『こいつ、私生兒ぢやぞい。……』と叫んで、私の肩口を、袋入りの算盤で突いて行き過ぎた。それは村役場の書記をしてゐる宇之といふ人の兒であつたが、この兒のお父つあんを何故宇之といふのか、私はそれを長い間知らなかつた。宇之助といふのを略して宇之といふのだといふことを知つたのは、餘程後のことである。私は其の時、其の袋入りの算盤で突かれた機みに、よろ〳〵と溝の中へ落ちようとして、纔に踏み止まりながら、男の兒のするかういふ惡作には慣れ切つてゐるので、馳けて行く宇之の兒の後姿を見送つてゐたが、たゞ其の『しせいじ』と、いふ言葉が、少し氣になりかけた。

坂路を登つて、溜池の端を通つて、もう殘らず花の散つて了つた梅の木の下から、だら〳〵坂を下りて、いつもの通り裏口から歸つて見ると、薄墨色の着物を着た和尚さんは、白金巾を摺鉢の中へ入れて、眞ッ黑に摺つた墨汁で、捏ねるやうにして染め上げてゐた。脇には、古くからこの寺に傳はつてゐる五寸ばかりの唐墨と、大きな圓形の唐硯とが置いてあつて、和尚さんは其の硯で其の墨を摺つては、摺鉢の中へ流し込んで、丹念に白金巾を染めてゐるのである。

『これが、ほんまの墨染の衣や。』

和尚さんはいつもかう言つて、其の墨汁で染めた着物を着るのを喜んでゐた。

かうやつて、墨汁で眞ッ黑に染めた白金巾を、裏の溜池へ持つて行つて、丹念に洗ひ洒すと、黑い墨汁は、煙のやうにむら〳〵と水の底へ沈み込んで、何か可味しい餌でも來たのかと、丁斑魚や鮒の子の群が集まるが、和尚さんの白い手に殘つた白金巾は、まことに趣のある薄墨色に染め上つて、ところ〳〵にむらがあつたり、木目のやうなものが出來たりするのを、和尚さんはこの上もなく喜ぶのである。

『品は金巾でも、この唐墨はもう日本に二本とないもんや。……これを摺つて染めるなんて、三井でも大丸でも出けんこツちや。……』と、和

尙さんはよくこの墨染の着物を自慢してゐる。

さうして、それをば妙海さんにも着せてゐるのである。

妙海さんの一張羅は、白縮緬をかうして染めたやつである。

『和尙さん、いんま戻りに學校の男の兒が、わいへのことを、しせいじやいうて、肩をどやしましたが、和尙さん、しせいじて、何處のことだすのん。……』

私はふと思ひ出して、學校道具の風呂敷包を臺所の廣い板の間に放り出すなり、白い透き通るやうな手を眞ツ黑にして、ギユウ〳〵やつてゐる和尙さんの背中から問うた。すると、和尙さんの細い背中は、ぶる〳〵ツと震へたやうであつたが、相變らず擂鉢の中の金巾をギユウギユウと押し揉んでゐた。

妙海さんは、土間の大竈の下の灰の中へ布巾に包んだ豆腐を埋めて、締め豆腐を造つてゐたが、私の小ひさい口から出た『しせいじ』といふ聲を聞くと、俄に俯向いて悄氣てゐる樣子であつた。

『和尙さん、しせいじて、何處のお寺だすのん。……潮音寺のことを、しせいじとも言ひますのん。』と、私がまた不思議さうな顏をして尋ねると、和尙さんは向うをむいたまゝ、矢ツ張り擂鉢の中の金巾をギユウ〳〵やつてゐるだけであつたが、妙海さんは、ニヤリと變な笑ひかたをした。

私は其の頃、餘所の子等が皆家に居る大きい人のことを、『お父つあん』と言ひ、また『お母ん』或は『お母さん』と言つてゐるのに、私だけが、『和尙さん』と呼び、また『妙海さん』と呼んでゐるのを、自分ながら何故だらうと、つくづく考へることがあつた。

『おゝゝゝゝう……』ときり、知らぬものには聞えない聲で、妙海さんはお經を讀みつゝ、人の門に立つて托鉢をする。黑い法衣を着て、白足袋に赤い鼻緒の草鞋を穿き、深い網代笠を被つて、鐵鉢を持ち、頭陀袋を頸から懸けて托鉢に出る時、丁度私が學校へ行くのと一所になる。私はそれが厭なので、よく駈け拔けて先きへ行かうとすると、

『これ待ちや。……』と、妙海さんは芝居の役者のやうな聲で言つて、私を呼び止め、坂路を下り切つて了ふところまで、私と並んで歩くのを、この上もない樂みにするやうに見えた。

『あれ、あんたのお母んやしな。……尼はんの子、おほゝゝゝ。』と、友達が橫合から現はれて、容赦もなく笑ふのに、私は顏を眞ツ赤にして俯向いて了ひ、態と妙海さんの赤い鼻緒の草鞋の足から後れようとすることが度々あつた。

そんな時、竊ツと偸むやうに背後を振り返つた妙海さんの二つの眼に、涙の露が光つてゐたのを見たのも、一度や二度ではない。

『おゝゝゝゝゝう……』と、お經を唸りつゝ妙海さんが、人の家の軒に立つと、其處の家の女房や娘が出て來て、一握の米か麥か、またはお錢かを、妙海さんの白い手にある鐵鉢に入れて呉れる。妙海さんはさうして順々に家々村々を廻り、鐵鉢がいつぱいになると頭陀袋に入れ、頭陀袋がいつぱいになると、寺へ戻つて來る。けれども、そんな米やお錢を屹と鐵鉢の中へ入れて呉れる家ばかりではないので、頭陀袋がいつぱいになるのは、日の短い時なら、もう夕方である。

夜になると、妙海さんは黑い腰法衣さへ取つて了つて、和尙さんの染めた薄墨色の着物一つになり、靑い丸ぐけの帶を細腰に卷き付け、頭陀袋の中のものを、四角い莚の上へぶツちやけて、米は米、麥は麥、お錢はお錢と選り分ける。

私は大抵それを手傳ふのが役で、褒美に五厘ぐらゐ貰ふのであるが、寺にはお米も偶に入つた

のがドッサリあるし、和尚さんの財布にはお錢もぢやら〳〵鳴つてゐるのに、妙海さんは何故こんなにして、人の家へ貰ひに出るのかと、私は妙に考へてゐた。

『沙門ちふのは、乞食ちふこッちや。……俗人の活命は不淨ぢやが、沙門は托鉢して、清淨に活命するんや。……托鉢が修行ぢや。……』

和尚さんは廣い緣の付いた大きな長火鉢を前にして、クリ〳〵とした小ひさな圓顏の口を尖らしつゝ、莞爾々々して、こんなことを言つたが、そんなことはもとより、幼い其の頃の私に解りやうもなかつた。

托鉢した米錢は、清淨なのか知らぬけれど、米や麥は、五羽ほど飼つてゐた白い矮雞の餌になり、お錢は穴のあいたのばかりで、多く豆腐屋に拂はれた。

妙海さんの托鉢に出る日はきまつてゐて、毎日ではなかつた。和尚さんは朝のお勤行だけが用で、日毎夜毎ぶら〳〵して、食べて寢るより外はなかつた。いや〳〵、お勤行よりもまだ肝心な用があつた。それは庭の掃除である。

潮音寺の前栽、と言へば、この村で綺麗なものの比喩に用ゐらるゝ一つの標準になつてゐた。

『あのげんさい別嬪やなア、潮音寺の前栽みたいや。』

『西の村の花車見たか。……今度村山實つて拵へたんやが、綺麗なもんやで、そら、まるで潮音寺の前栽みたいや。』

若い衆たちは、碌に潮音寺の庭へ入つたこともないのに、こんなことを言ひ〳〵して、潮音寺の前栽を綺麗なものの形容に使ひつゝ、其の形容の當る當らぬなぞに頓着はなかつた。

『禪家の修行は、掃除と托鉢や。……』と、和尚さんはよく言つて、雨さへ降らなければ前栽へ出て、掃除をしてゐた。好きな薄墨色の着物を着て、竹箒を持つて立つてゐる寒山拾得のやうな姿は、和尚さんに一番似つかはしいものであつた。

『……釋迦に遭へば釋迦を殺し、彌勒に遭へば彌勒を殺し、……』と、和尚さんは其の『殺し』といふ言葉に力を入れて、草を拔いてゐた。表門から玄關まで、ずうッと礫が三尺幅ほどに敷いてあるが、其の礫は一つ〳〵丁寧に磨き上げたやうに光つてゐて、滅多に人の來ないこの寺へ、たまに來た客は、この礫の上をば土足で踏むのを勿體ながつて、横の方の、篩にかけたやうな白い砂地の上を拔き足して歩いた。

そんな風で、雜草なぞ欲しくても見當らないほど綺麗であるのだが、それでも人間の保護を受けずに蔓る力を自得してゐる名もない草は、いつの間にか、礫の下なぞに芽をふかして、青い頭を擡げることがある。もう掃除といふことが、心の內面まで染み込んで、それが一つの精神上の行とまで深入りしてゐる和尚さんに取つては、さういふ青草を發見するのが、胸の裡の時ならぬ耀きであつた。

『釋迦に遭へば釋迦を殺し、彌勒に遭へば彌勒を殺し、……』と、其の『殺し』といふ音に殊更力を入れて、和尚さんは、忽ち其の草を引き拔かうとするが、偖てヂッと見てゐると、其の澄み切つた青い芽をば、玉のやうに美しい礫の下から少しばかり現はしてゐる姿が、清くもあり愛らしくもあつた。そこで和尚さんは、白い手を礫の上に翳して、若い草を庇ふやうにしてゐたが、

『これが、一念三千なんかと言うて、妙といふ字に假着してよる天台坊主なら、このまんま放つときよるやろ。……それから、一念不定とぬかして、幽遠振つとる眞言坊主なら、上から礫をかぶせて隱しときよるやろ。……えゝ何んぢやい、ぼッちりさうは、だいりさう(沒理想は

大理想ぢや、釋迦に遭へば釋迦を殺し、……』と『殺し』といふ音に態々力を入れて、其の青草を白く細い指で引き拔いた。頭だけ青い草は、礫の下に長く根を卸してゐて、それが白く長かつた。和尚さんは、痛ましさうな、また氣樂さうな、眼の色の使ひ分けをして、其の愛らしい草を摘んだまゝ、暫らく見入つてゐた。

こんな風にして、掃除の届いてゐる寺の庭は、常住美しく、小山の上の砂地であるから、土も其の細い一粒づつにゆきがかゝつてゐるやうであつた。長いこと雨風に晒されて、木目の露に高く浮き立つた表門の扉は、年中堅く閉ざされたなりで、貫木は鉄に錆び付いたまゝになつてゐるが、横の潛り戸だけは、早朝から夕刻まで締りを外してある。それでも人は大抵裏口から出入りしたが、それも私が學校の往復に通るだけで、わざ／＼寺へ來るものと言つては、三日に一人、十日に二人くらゐのものであつた。

表門から玄關までの砂地には、芭蕉が二株植つてゐて、夏分は大きな青い葉を、小山の下から吹き上げる涼風に、ゆら／＼と搖かしてゐるが、冬になると、其の立派な、威勢のよい、清らかな砂地の大守も、葉が破れて、枯れて、丸太棒のやうな幹には、厚く藁が巻き附けられて、霜や雪を避けてゐる。其の厚い藁衾の立姿もまた、この前庭に趣を添へるやうに、和尚さんの白い手は恰好よく拵へるのである。

三尺幅に礫を長く玄關まで敷いた兩側には、夏分になると、帶のやうにずうつと石竹を植ゑて、それに赤い花の咲くのが、私の眼には何よりも綺麗に見えた。

『庭の石竹、根が引き拔きにくい。庭の石竹、根が引き拔きにくい。庭の石竹、根が引き拔きにくい。』

から三度續けて早口に言つたら、褒美を與ると、鼎形の瓶かけに白檀を焚いて、其の細い煙を嗅ぎながら、和尚さんはよく私に言つて笑つた。

門と玄關との左手に、長く建仁寺垣が結つてあつて、其の眞ん中に衞門がある。衞門の内は可なりに廣い庭で、其處には樹木も多いが、別に石燈籠や泉水や築山があるのではなく、小山の一部を塀の中へ取り込んだまゝで、樹木は多く赤松である。赤松の幹の裾を拂ふやうな形になつて、丸い葉の雜木に赤い實の生るのなぞも少しは見られるが、天然の山林の趣を損せずに、たゞそれへ磨きをかけたやうなのが、この寺の庭の價値なのである。まことにこの庭の雜木を見ても、其の青い葉には、一枚々々絹布巾をかけたとも見える光がある。赭土の固まつたやうな岩もあるが、それには白い苔が蒸して、深山に入つたといふ感じを與へる。

沓脱石も自然の巖石を用ゐて、縁側の前一坪ばかりに平べッたく横はつてゐるが、縁側から、黒塗腰高の障子を開けると、十疊の座敷で、それが佛間になつてゐる。寺と言つても、本堂や山門があるのではなく、藁葺きの稍大きな庵室なのである。

佛間の正面の須彌壇には、黒光りのする釋迦如來の木像を安置し、其の前には、何處の寺にもあるやうな、ごた／＼したものが置いてある。さうして此處は庭の割合に綺麗ではなく、掃除は妙海さん一人の受持ちであつた。

二

私は幼い時、家の天井といふものは、鼠の棲む爲めに設けてあるものだとばかり思つてゐたことがある。

潮音寺には鼠が多かつた。天井の上をば、がた／＼がた／＼と音さして、朝から鼠の走つてゐるのを聞いた。天井に音さへすれば、直ぐ鼠だといふことを悟つたのは、幾歳の頃からと

も覺えてはゐないが、何んでも初めて學校へ行くことになつた年のズッと前のやうな氣がしてゐる。東西の方角さへ知らぬ幼いものにも、天井の音と言へば、直ぐ鼠と合點させるほどに、この寺の鼠は多くて騷がしかつたのである。

私の四歲ぐらゐの折のことである。山寺の春は寒くて、裏の溜池の畔に桃の花が咲き揃ひ、もう舊暦の上巳の節句も濟んだのに、私のお寺ではまだ炬燵を入れてゐた。

佛間の横手の小座敷の狹い床の間には、立て雛さんの畫をかいた美しい軸を掛け、其の前に臥床を敷いて、眞ん中に炬燵を盛り上げ、私と妙海さんとが一所に寢て、それと後さしに和尚さんが寢た。和尚さんは、立て雛さんの畫の上に麗しい手蹟で書いてある『桃の花もゝ世の春のたまくらをひゝな遊びにならしそむらむ』といふ賛を、幾度も〳〵、心の底の底から感じたやうに朗吟して、其のまゝ炬燵の溫りで、うつらうつらと夢に入るのであつた。私も何時しか幼い舌で、『もゝのはなもゝよの……』と、其の歌を半分ほど覺えて、和尚さんの朗吟するあとから口眞似をするやうになつた。さうして、私もまたうつら〳〵と半ば夢に入りかけてゐると、妙海さんの滑々した白い顏が、私の顏の上に覆ッ被さるやうに思はれて、眠りかけた眼を細く開けて見ると、有明行燈の光に、何時もは小ぢんまりとした妙海さんの顏が、この時ばかりは、大變に平ッたく大きなものに見えた。それから妙海さんの赤い舌が、火でも燃えたやうに、私の鼻の眞上あたりにペラ〳〵と動いたと思ふと、私の頰へ溫かい濕りが、ぬらりと來た。

『お母さん。……』と、妙海さんのことを呼んで叱られたのは、幾度のことか知れぬが、この時また私は妙海さんの胸に顏を押し付けて、低いながらも絞り出すやうな聲で、『お母さん』と、呼んでみたくてたまらなくなつた。

私はそれでも、妙海さんのお乳汁を吞んでゐたのを薄らと覺えてゐる。いや〳〵覺えてゐるといふよりは、たゞ何んとなくそんな氣がするのである。私はお乳汁の味を少しも知らない。けれども私だッて、お乳汁を吞んで育つたには違ひない。吞んだとすれば、それは妙海さんのお乳汁より外にはない。

けれどもまた、私は妙海さんに乳房のあることを、長いこと知らなかつたのである。六歲の時であつたか、裏の濡れ緣で、妙海さんと二人並んで、四本の足をブラ〳〵やりながら、矮雞の小米を啄んでゐるのを見てゐた折、あの薄墨色の着物の襟元がはだけて、世間の母親のと少しも變らぬ妙海さんの白い乳房が、私の眼に着いた。私はたゞ茫ッとして、懷かしさのあまり、總て夢中で其の乳房に縋り付くと、妙海さんは驚いて、

『お高、こそばい。……』と、私を押し退けようとしたが、直ぐまた氣を變へた風で、ぎゆうと私を抱き締めて吳れた。この時ばかり私は、心のゆくだけ母(妙海さん)の乳房に取り付いたが、何時の間に來たか、和尚さんが背後にすッくと突ッ立つて、

『何をしてるか、こらッ、……』とばかり、孫の手といふ背中を搔く道具で、ぴしりと私の頭を打つた。其の孫の手は竹細工で、都の名ある彫刻師が刻んだといふもの、頭に骸骨が小ひさく附いてゐて、其の反齒の尖つたところで、ごしごしと痒いのを搔くやうになつてゐた。

吃驚して、妙海さんの乳房から離れた私は、もぢもぢしながら、和尚さんの手にある孫の手の骸骨の細く纎い彫刻を見詰めてゐたが、和尚さんはたゞにや〳〵して、庭先きの矮雞の雄が、片翼を擴げて雌に迫るさまに見入つてゐた。

『三千の諸佛出身のところ、三界の衆生此の門に集まる。……』

やがて、和尚さんは、吐き出すやうにこんなことを言つて、ふいつと影の如くに立ち去つた。この時私は乳房を離した手で、其のまゝ妙海さんの胸に拘き付き、小ひさいながらも力強い聲で、

『お母さん。…』と、覺えず叫んだのであるが、妙海さんは、さつと顏の色を變へて、邪險に私の小ひさな身體を突き退け、

『わたへに、お母さんと言はれる子がおまッか。…滅相な。…俗緣の子は妙海の子やおまへん。…』と、怖い顏をして睨み付けた。其の時私はたゞ俯向いて、しく／＼泣くより外はなかつた。

和尚さんのことは、『和尚さん』と呼んでそれで濟んでゐた。別に改まつて、『お父つあん』と呼んでみたいとはさう思はなかつたけれど、妙海さんのことは、一日でもよい、天下晴れて『お母さん』と呼んでみたかつた。――

其の四歳ぐらゐの折、炬燵に温まりながら、半ば夢に入つて、妙海さんの赤い舌を快く頰に受けてゐた時、私は寢言のやうに口の裡で、『お母さん』と言つて、また酷く叱られることかと、ハッと胸に小ひさな動悸を打たしたが、妙海さんはちッとも叱らずに、頭も眉も剃り立ての青々したのが、私の顏の上に何時までも覆ッ被さつて、赤い舌は私の頰から額の方へと移つて行くのが、夢心地に分つてゐた。

『お母さん、…お母さん、…お母さん、…お母さん、…』

この時ばかり私は、私の呼びたいことをお腹いつぱい呼んだやうな氣がした。さうして、もう大丈夫といふ心の安らかさを得て、すや／＼と深い眠りに落ちた。

がたごとと、急に物騒がしい音がするので、私はふッと眠を覺ました。其の時直ぐ咽喉元から込み上げるやうにして出て來たのは、あの懷かしい『お母さん』といふ言葉であつた。けれどもお母さん――妙海さん――は、もう私に其の肌の溫みを與へてゐないで、寢てゐた跡が洞穴のやうに、萌黄の蒲團を浮き上らせ、私の育つて行く身體の溫みも、炬燵の暖かさも、皆其の洞穴から拔け出して、私は薄寒を覺えた。

はッきりと眼を覺まして、私は小ひさな頭を擡げると、和尚さんは長い銅の卦算を持ち、妙海さんは毛の無くなつた拂子の柄を手にして、薄暗い有明行燈の光の中に漂ふやうに、立ち分れて突ッ立つてゐた。今から考へてみると、それは芝居の暗闘のやうな景色であつたらうと思はれるが、其の時の私には、もとよりそんな聯想の浮びやうもなくて、私はこの眞夜中に、また和尚さんが妙海さんと喧嘩を始めたのだとばかり思つて、蒲團の中へ首を縮めつゝ、息を殺してゐた。

和尚さんと妙海さんとは、時々喧嘩することがあつた。和尚さんは、妙海さんを情が强いと言ひ、妙海さんは、和尚さんをばこせ／＼と女みたいなと言つてゐたが、簞笥から法衣や着物を出す時、抽斗を開けて上の方にあるのが入用な時はよいが、下の／＼抽斗の底にあるのを取り出すとなると、妙海さんは面倒くさがつて、上のものは其のまゝに、下の入用なのだけを引き摺り出すので、そんなことをすると、ほかの着物が皺くちやになると言つて、和尚さんはよく怒つた。さうして骸骨の彫物の附いたあの孫の手で、妙海さんの頭を擲り付けると、妙海さんは眼を吊り上げて、和尚さんに獅嚙み付く。どたんばたんといふ騷ぎになり、妙海さんの長い袂が火箸に引ッかゝつて、火鉢の灰がパッと撥ね飛び、私は幼い頭を灰だらけにされて、おろ／＼と涙ぐみつゝ、どうなることかと胸を痛めたこともある。

この眞夜中に、卦算と拂子の柄とで對ひ合つ

てゐる和尚さんと妙海さんとの、しどけない立姿を、ぼんやりと夢の國の墨繪のやうに見出した時、私はさア大變なことだと思つて、今にも和尚さんか妙海さんかの、どッちかが殺されはしないかと考へた。

　しかし、それは總て私の思ひちがひであつた。何やらかう小ひさな、丸い、柔かさうなものが、私の蒲團の洞穴へ、矢のやうな速さで飛び込んで來たと思ふと、和尚さんと妙海さんとは、

『そらお炬燵の中へ入つた。』と、一所に叫びを揚げて、前と後とから、二枚の掛け蒲團を容赦もなく捲り取つた。逃げ場を失つた小ひさな鼠は、炬燵の櫓の脇から、私の腿のところを掠めて、狼狽へながら隅の柱の方へ走つて行つた。それを追つかけて和尚さんの打ち付けた卦算は、空しく敷居の溝に疵を附けただけで、鼠はもう稻妻のやうに鴨居の上を傳つてゐた。

『あゝ此處へ來よつた。』と、妙海さんが拂子の柄で、『壽如山』といふ書の古びた額の後を探ると、鼠は額縁からぼたんと飛び下り、蒲團を捲られてきよとんとしてゐた私の腿の間へ這ひ込まうとしたので、私は『わアッ』と泣き聲を立てて、横さまに轉んだ。和尚さんは、

『あはゝゝゝ。……』と、お腹の底から響き出すやうな、夜寒の笑ひ聲をして、突ッ立つたまゝ見てゐたが、妙海さんは、

『お前、此處へ載ッといで、溫うてよいし、此處ならチウ〳〵チウ助も上りよれへん。』と、いつもの閑雅な手つきで私を抱き上げ、そうッと炬燵の櫓の上へ置いた。私は格子に組んだ櫓の上にちよこなんと坐つて、それから續いた鼠狩の模樣を見てゐたが、程のよい溫りは膝の下から湧き出すやうで、少し足は痛いけれど、棧敷にでもあがつて見物してゐる風であつた。

　何時も鼠の出入りする右手の壁の隅の穴は、妙海さんの白い湯もじで、手早く塞がれて了つたので、鼠はもう幾ら上手に逃げても、この小ひさな室の外へは出ることがならぬのである。それで死物狂ひになつた鼠は、其の小ひさな身體を紙の赭ちやけた障子へ打ち付けて、紙が破れたら其處から逃げようと考へたらしいが、其の輕い身體には薄い紙一重さへ打ち破る力がなくて、ぽん〳〵と撥ね返つた。

　もう眼が見えぬまでに、怖れて焦れて疲れた鼠は、どう勘違ひをしたのか、和尚さんと妙海さんとの並んで立つてゐる方へ、驀地に走り込んで來た。すると、今までは鼠を追ッかけてばかりゐた二人の大きな人が、逆まに鼠に追はれたやうな形になつて、さッと道を開いて鼠を通した。

　追ひ詰め追ひ廻した擧句に、和尚さんの打ち付けた卦算が、鼠の頭に當つて、鼠は白い齒を剝き出し、足をブル〳〵慄はしながら横に倒れた。長い尾が蛇の子のやうにビク〳〵と動いてゐるのを、私は炬燵の櫓の上から氣味わるく見てゐた。

『まゐりよつたかなア。……』と、妙海さんは白い首を伸ばして、拂子の柄を斜に構へたまゝ、鼠の斷末魔に見入つた。

『方便やら知れん。……まだ油斷はならん。』と、和尚さんは更に、一つ二つと卦算の打擊を加へたが、別に僞つて死態を見せたのではなく、鼠は腦骨の痛手に、和尚さんの引導を受けるまでもなく、自分に死出の旅に上つたのであつた。

『あの鼠にも親はあるのやらう。……』と、私は幼い心でこんなことを考へつゝ、痛ましい鼠の死骸を見てゐた。全くのこと、四歳ぐらゐの折の記憶で、今まであり〳〵と殘つてゐるのは、この鼠狩の一條だけである。其の前のことも、其の後のことも、總て白紙で、何の痕も印しもないが、この鼠狩だけは、昨日のことのやうに、二十四にもなつた今日の日まで、鮮かに

殘つてゐる。さうして其の『鼠にも親はあるのやらう。…』といふ痛ましさが、私の心に深く深く食ひ入つて、焼かなければ癒らない疵になつてゐる。

三

十二の時まで、私は『しせいじ』といふことの意味を知らずに居た。學校で鬼ごとをして、私に鬼になると、皆んなが口々に『しせいじ』と呼んで逃げる。私はそれをたゞお寺の子といふ意味に取つて追つかけてゐた。それから友達と喧嘩でもすると、必ず『しせいじめが』と、口でいーをしながら、友達はいふので、私はお寺の子といふことがそんなに惡いことか、それにしても、他にもう一人、門徒寺の子が一つ上の組に居るのに、あの子は何故『しせいじ』とは呼ばれぬのであらうか、と私は心の中で不思議に思つてゐた。それからまた、上の組の子が卒業間近になると、言ひ合はしたやうに、どんなことがあつても私のことを、もう『しせいじ』とは呼ばぬのも、變に思はれてならなかつた。

十二になつても、『しせいじ』といふ言葉の意味が明らかに解つたのではない。たゞお母さんの私の生みかたが人並みでなく、私が今に妙海さんのことをお母さんとは呼ぶことが出來ず、和尚さんのことをお父つあんと言ふことも出來ぬ理由を、一口に煎じ詰めたのが、其の『しせいじ』といふ言葉であると、誰れに教はるでもなく知つただけで、成るほど『しせいじ』といふ言葉は人を辱しめるのに恰好の言葉だと思つて、獨りで顔を赧らめずには居られなかつた。其の頃の私は、もとより人間といふものがどうして生れて來るのか、ちツとも知らなかつたし、『しせいじ』と呼ばなければならぬ私と、そんなことを言はれなくて濟む皆さんとに、生れかたの相違でもあるのかと怪しんでゐた。しかし、見たところどうも、皆さんと私とがさう異つてゐるやうなところもなし、皆さんにあるものは、眼でも鼻でも口でも、私にだツてみなあるし、足が二本で手が二本、これがどうして『しせいじ』なのかと、疑ひはなか〱解けさうもなかつた。――もと〱其の『しせいじ』といふ言葉が、掟といふ尊像の腹から生れた、活きた人間の生死に係り合ひのない空なものである。――なぞといふことの解らう筈もない。――

多くの學校友達の中で、私の一番仲の好かつたのは、君江さんといふ同い年の子で、この子にはお父さんがなかつた。お母さんが村方の使ひ歩きなぞをして、貧しく暮らしてゐるのにも似ず、そんなに汚い着物は着てゐなかつた。色の白い痩せ形の、絶えず何やら考へてゐるやうな、笑ひかたまでの淋しい子であつたが、この子ばかりはどんな時にも一度だツて私のことを『しせいじ』なんて言つたことはなかつた。

この君江さんは四歳の時、お母んが耳糞を取つてやると言つて、小ひさな耳の穴へ、青い玻璃の簪を耳搔きの代りに突ッ込んで、君江さんの首を振り〱厭がつて泣くのも構はず、意地と物好きとから、石のやうに凝り固まつた耳の垢を穿り出してゐると、玻璃の簪の先きが折れて、それが君江さんの耳の穴の中に殘つた。

『あゝツ仕舞うた。さアえらいこツちや。』と、お母んは周章て出したが、君江さんは、玻璃の折れる音が、耳の穴の中だけによく聞えたと見え、『ポチン』と小ひさい聲で言つて、ケロリと笑ひ顔をしてゐたさうな。お母んは其の玻璃の青い折れ端を、太い母指と食指との先きで摘まみ出さうとして、却つて奥の方へ押し込んで了つたが、これではならぬと、何故お母んはそんなに周章てるのかと言ひたげな顔をしてゐる君江さんを、横さまに引ッ抱へ、二三町の道を村總代さんの家へ駈け付け、其處で毛拔を借り

て、君江さんの耳の穴から青い玻璃を挾み出さうとしたけれど、初めなら兎に角、太い指で摘まみ出さうとして却つて押し込んだ後では、毛拔の先きが滑つて巧く玻璃へかゝらず、周章てて震ふお母んの手は、更に深く玻璃を穴の奥へ押し込み、さうなると、痛さと氣持ちのわるさとに、君江さんも長く笑ひ顏はして居ず、ヒイヒイと悲しさうに泣き出した。

初めの中は、『いゝえ、わたへがします』と言つて、如何なこと、他人に子の耳の穴を任せなかつたお母んも、到頭強情負けをして、總代さんとこの誰れ彼れに毛拔を渡したが、誰れがやつてみても、青い玻璃を少しづつ穴の奥へ押し込みこそすれ、前の方へは引き出せなかつた。

丁度畑から肥料田子の空を擔いで戻つて來た下男の智慧で、燐寸の軸へ糊を附けて、耳の穴の異物を引き出さうとしたが、それも穴の入口を汚しただけで、何んにもならなかつた。この上は醫者の手に賴るより外はないとなつたが、一里半も行かなければ醫者の看板を懸けた家はなく、高いお金を取られさうな氣がして、お母んの足は醫者の居る方角へ進まなかつた。

君江さんの耳の穴は、それなりになつて了つて、村の人たちはもとより、お母んさへ、あゝさう〳〵、と時々思ひ出すほどになつた。それでもお母んは折々先きの折れた青い玻璃の細い棒を火鉢の抽斗から出して、怨めし氣に眺め入つてゐることもあつたさうな。

それが爲めに、君江さんの右の耳は少し遠いやうであつたが、自身にはそんなことをまるで知らぬ風で、耳といふものは誰れでもこんなものと思つてゐるらしく見えた。時々お母んが其の先きの折れた青い玻璃の細い棒を持ち出して、『お前が四歳の時なア…』とやり出すと、君江さんは痛まし氣な顏をして聽きながら、思ひ出したやうに右の耳を押へるけれど、矢ッ張り半分は他人事の如く聞き流して了つた。

『君江が嫁入りする時までにや、ドッサリ錢溜めて、醫者どんに耳の穴の詰まつたのを癒してもろたる。』と、親一人子一人の動物性の愛情を燃え立たせつゝ、お母んは獨言のやうに言ふこともあつたが、

『耳や詰まつたて構やへん、耳の穴ア嫁入に用はないわい。…』と、村の若い衆は調弄つてゐた。

子供ながらも氣が合つてゐたといふのであらう、私は學校でこの君江さんとばかり遊んでゐた。同じ組であつたから、二人同じ机に並ぶやうになると嬉しいなア、と言ひ合つてゐたが、なか〳〵さうはならなかつた。お辨當に麥の飯を入れて來ると言はれて、君江さんが皆んなに卑しめられ、罵られ、嗤はれてゐる時、私は丁度私が「しせいじ」と呼ばれる時と同じくらゐの辛さと口惜しさとを感じて、二人は眼と眼とを見合はせつゝ涙ぐんだ。

學校の門を出ると、西と東とに別れて歸らなければならぬのを、態々裏の用水堀に沿うて、どつちかが毎日一町ほど送り合ひをした。それから漸うの思ひで、十二の年の學年の初めに、私は初めて君江さんと同じ机に並ぶことになつたので、二人の喜びは何にたとへんやうもなかつたが、ある日の放課時間に、二人は便所に通ふ廊下の板の間で、向ひ合つてお手玉を取つてゐた。すると通り合はした男の子が、

「しせいじッ…」と罵りさま、足でお手玉を蹴散らかして行つたが、其の中の赤いお手玉は袋が破れて中の赤豆が零れ、三四尺も脇へ飛んだ。それで私は廊下を離れて、其の破れたお手玉を拾ひに行つたが、其の途端廊下の屋根はメリメリと劇しい音がして、瓦の重みで籠を伏せたやうに眞ん中からばつたりと落ち、細い柱は斜めに倒れてポッキと折れた。此處は餘り皆ん

なの來ないところなので、私たち二人の遊び場に選ばれ、大勢から撥ね退け者にされた同志で、淋しく睦まじくしてゐたのであつたが、思ひもかけぬ椿事で、私は驚きの餘り、ぼんやりとして、むら〳〵と舞ひ騰る煙のやうな塵埃を浴びつゝ立つてゐた。さうして一切夢中で、

「君江さアん、……君江さアん、……」と、呼んでゐる中、丁度柱の折れた横のところに、見覺えの紺付の白足袋に草履を穿いた君江さんの足が二本、ニユウッと出て、身體は屋根の下敷きになつてゐるのを見た。

「先生ッ、……」と、私が悲鳴を揚げた時には、もう先刻の物音を聞き付けて、先生や小使さんの駈け付ける後から、學校中の子等が眞ッ黑になつて押し寄せて來た。

『えらいこッちや、こらどんならんがな。』と、早口に言ひ〳〵、小使さんは瓦を捲り垂木を押し上げて、君江さんを救ひ出さうとしたが、君江さんは太い横木の接ぎ目に頭を壓し付けられて、「お母ん」とも得言はずに、息が絶えてゐた。

「こらもうあかんわい。……一體何處の子や。何んでまたこんな鈍なとこに居たんやなア。」と、一人の先生は死んだ者を叱るやうに言つて、小使さんに力を借しつゝ、君江さんの身體を引ッ張つた他の先生たちもポカンとしてゐた氣の拔けたやうな態度から醒めて、其々に働き出した。

地獄落しにかゝつた鼠でも引き出すやうにして、平駄張つた廊下の屋根の下から、漸く君江さんの身體を拔き取つた先生たちと小使さんとは、小ひさな身體へ大きな人の手を幾つもかけて、小使室へと運んで行つた。其の後からわいわいと多くの子等が随いて行かうとして叱られた中に、私も混つてゐたが、手織木綿に茜色の縞のある見慣れた君江さんの着物の裾が、ちいとばかり見えただけで、あとは何も分らなかつた。

『血い出えへんねやな、ちよッとも。……』

「危い思うてたんや俺ア。……片手で搖つてもゆら〳〵してたんやもんなア。」

上の方の組の男の子等は、大人のやうな口振りでこんなことを言ひ〳〵、壞れた廊下の散々になつた光景を眺めてゐた。私はたゞぼんやりと、其の隅の方の邪魔にならぬやうなところに立つてゐたが、考へてみると、あの時誰れや知らん男の子がお手玉を蹴散らかして行かなかつたら、……蹴散らかして行つてもお手玉の一つがあんなに遠くへ飛ばなかつたら、……飛んでもそれを私が拾ひに行かなかつたら、私も君江さんと同じやうに、死骸になつて、今頃は小使室の古疊の上に寢かされてゐたことであらう。さうして若しやあの時あの蹴飛ばされたお手玉を私が拾ひに行かないで、君江さんが拾ひに行つてゐたら、君江さんが死なないで、私が死んだであらう。……なぞと考へながら、それでも私はまだ何んだか、君江さんとはもう一所に遊べないといふやうな氣はしなかつた。この次ぎに二人でお手玉を取つてゐて若しあんなことがあつたら、君江さんにお手玉を拾はして、私が廊下の屋根の下敷になつてあげよう。……とまるで出來ないことを、何時でも出來ることのやうに考へたりした。

其のうちに、額をテカ〳〵光らして、薄い髪を綺麗に分けたまだ若い村長さんを初め、役場の手合ひが皆やつて來た。この連中が一所にぞろぞろ歩くのは、町の呑み屋へ飲みに行く時の外は見られないのであるが、今日はそれが狹い小使室へ鈴生りになつて首を突ッ込んだ。

「兎に角、他の兒童を皆去なして了ひまへう。早や疾うにさうすれや好かつた。」と、播州訛りの校長先生は言つて、受持々々の先生からそれ

を傳へたので、學校の内がドン／＼バタ／＼と何時もよりは一層調子づいた皆んなの足音に騷がしく、一度にわアッと門の前を西東に散らばつて行つたが、中にはまた物好きさうな眼を光らして、遠くから小使室の方を窺ひつゝ、うろうろしてゐる上の組の子等もあつた。

　歸つて行つた學校の子等によつて、君江さんの死んだことが、一時に村内へ廣まつた。肝心の一人の親でありながら、一人娘の死の通知を忘れられてゐたお母んは、尻切れ草履を引き摺つて、狂人のやうな風で駈け付けて來た。

『娘の死骸に取り縋り……』と、淨瑠璃の文句にでもあるやうな愁嘆場を豫想して、お母んの入つて來るのを迎へた役場の手合ひや、學校の先生たちは、

『お前んところへ一番に知らさんならんのに、忘れてたんや。』と言つて、左右へ立ち分れつゝ、お母んを死骸に寄り添はさうとしたが、お母んはたゞ喫驚ばかりしてゐる風で、圓くパチ／＼さしてゐる眼からは、頓に涙も零れさうになかつた。

『うちの君江が死んだ。……そんなことおますかいな。』と言つた切りで、古疊の上に横たはつてゐる娘の死骸に見入つてゐたお母んは、暫らくしてから、

『矢ッ張り死んだのかいな。』と、震へる聲で言つて、三四尺も離れて見てゐるだけであつた。

　同じ組の女の子だけは、もう暫らく殘つてゐるやうにと、受持の先生が言つたとかで、十四五人のお垂髪が、小使室の入口のところに顏を見合はして立つてゐたが、『それもう歸つてよろしい。』と言はれたので、皆んなは放免されたやうな心で、バラ／＼と歸つて行つた。それを窓から眺めてゐた村長さんは、ニヤ／＼と厭な笑ひかたをして、眼前の哀しい場面を忘れた風で、

『あいつらも今にまた、芋の子みたいに、ごろごろ生みよるやらう。』と、獨言のやうに言つてゐた。

　皆んなが去んで了つても、私だけはもう一度君江さんと物が言つてみたいやうな氣がして、急には立ち去りかねてゐた。お母んは漸く人々が待ち構へてゐたやうに、はら／＼と涙を零して、死骸の側へ寄り添ひ、男みたいに荒くれた手で、君江さんの頭を撫で廻した。太い横木に頭を挾まれたのださうだけれど、遠くから見たところでは、別に頭が潰れても居ず、昨日私の上げた古いリボンが少し歪んで結ばれてあつた。

　村中に唯一臺ある役場の自轉車に乘つて、給仕が町へ醫者を呼びに行くと、町の醫者は袴を穿いて馬に乘つて來た。『馬が來た。』と男の子等は珍らしがつて、また學校の門前へ集まつてゐたが、若い醫者はひらりと下りると、白い泡を吹いてゐる馬をば、いつぱい蕾をもつてゐる太い櫻の幹に繋いで、脇目も觸らず小使室に入り、預けてあつたものでも受け取る風にして、君江さんの側へ寄り、一寸頭のところを見ただけ、平氣な顏をして、村長さんと何やら話を始めた。

　村の駐在巡査が來ると、醫者は小使に君江さんの帶を解かせ、まだ薄寒いのに丸裸體にして、毛を拔いた鷄の目方でも量るやうに、足を持つてクルリと仰向けに引ツくり返し、また俯向けにしたりして、身體中を見てゐた。妙な笑ひ顏をしてゐる大人と大人との間から、其の有様を覗いてゐた私は、裸體にされた君江さんが、もう今までの君江さんではないやうな氣がして、急に親しみも痛ましさも拔けて了つた。

　しかし、また元の通り着物を着せられた君江さんを見ると、前の懷かしさに返つて、もう一度一所にお手玉を取つてみたいと思つた。

　可愛い娘が裸體にされても、鷄が料理される

時のやうな扱ひを受けても、繪にかいた人の如く身動きもしないで、眼ばかりパチクリさしてゐたお母んは、突然醫者の側へ進み寄つて、

「あのう、先生はん聽いとくなはれ。……この子はなア、四歳の時玻璃の簪を耳掻きにして耳糞を取つたりますとなア、其の玻璃が耳の穴へ折れこみましてなア、お醫者はんに取つて貰うたろ、取つて貰うたろ思ひながら、錢がおまへんので、今まで取つてやれまへなんだんだす。……そいでなア先生はん、これがこの世の名殘だすよつて、せめてなア、長いこと取つたろ取つたろ思うてた耳の穴の玻璃を、先生はん今ここで取つてやつたツとくなはれ。……お願ひだす。拜みまツさかい、この通りだす。」と、お母んは兩手を合はして醫者を拜んだ。

『まアよく氣を落ち付けてなア。……』と、醫者はお母んの賴みを眞面目には取り合はなかつた。

『何言うてるねやお前、かうやつて、もう佛になつてしもてるのに、耳の穴掃除したて仕樣がないやないか。』と、村長さんはせゝら笑ひつゝ言つた。

「そやかて、あんた、時節が來たら取つたろ取つたる思うてた玻璃だすもん。もうかうなつてしもたら、これから先き取つたろ思うても、千兩の金積んだかて、取つたること出けしまへんがな。……それ思ふと、今生の思ひ出にはならいでも、かうやつて形のある間に、親の失策を癒してやりたいのだす。……先生はん拜みまツさかい。……』と、お母んはまた涙をほろ／＼と零しながら、兩手を合はした。

「お前も阿呆なこと言ふなア。死んだ子の耳の穴に何が入つてたて構やへんやないか。……燒いて灰にしたら、玻璃は獨りで取れるし、またこんなり土の中へ埋けたら、身體が腐つても其の玻璃の折れだけは、ちやんと取れて殘るがな。」と、村長さんは稍聲を高くして、叱り付けるやうに言つた。

「そんなら、宜しおます。……もう賴みしまへん。わたへが後で耳の穴切り開いても取つたります。……わたへのこの心は、あんたみたいな薄情な人に解れしまへん。……取つたりたい取つたりたい思うてたもんを、一生の思ひ納めに取つたるものが阿呆なら、葬禮したり、引導渡したり、死んだものに食物供へたりするんも皆阿呆なこツちや。……其の日ぐらしの貧乏人で、子供を學校へ出すどこやない言うて斷つてるのに、義務やとか何やとか言うて、無理に引ツ張り出しといて、こんなむごたらしい殺しやうをしやがつて、……この人殺し。……」と、お母んは到頭聲を揚げて、わアッと泣き出した。

巡査と醫者とは逃げるやうに、すうッと小使室を出て了つたが、村長さんは眞ッ赤な顏をして、

『何んぼ無教育な賤民でも、あんまりや。……人殺しとは何んぢや、誰れがこの子を殺した。獨りで死んだんやないか。』と、膝を進めて詰め寄つた。

「……獨りで死んだ。……』と、お母んは涙の乾かぬ顏に、凄い冷笑を浮べて、村長さんの顏を睨み詰めたが、舌が硬張つたやうで、其のあとは何も言ふことが出來なかつた。

學校の門の前を、輕い中風になつた前の村長が、太い杖を突きつゝ、赭ら顏をテカ／＼と此方へ向けて、小使室の方を見い／＼、よた／＼して行くのが窓から見えた。この肥えた禿頭の老爺が、この學校の普請の時、うんと儲けて、學校をばこんなやにこいものに建てて了つたので、壁が剝げたり、天井が墜ちたり、果ては廊下崩れて、人まで殺したのだなア、と校長先生初め皆さう思つて、村長さんとお母んとの睨み合つてゐるのを見てゐた。

四

それでも、君江さんの亡骸は、村の人費で始末されることになつた。三十何年前、村に大火事があつて、今も十二月十一日のお日待ちに其の日を記念してゐるが、火事の慘狀を委しく見た人は追々に減つて行つて、たゞ鯖の鮨と酒とを目的に、お日待ちへ集まるものが多くなつた。

其處に唯一つ三十餘年の慘狀を思ひ出させるものは、今君江さんのお母んの住んでゐる家であつた。お母んの家も其の火事に燒けて、全燒二十三戸といふ片田舍には珍らしい大火事の卷き添へになつたのであるが、お母んはもとより其の時まだ生れてゐなかつた。お母んのお母んが、さして有福でもない家に賃仕事なぞをして獨りで暮らしてゐたのを、それだけは自分のものであつた家を燒かれて、雨露を防ぐことさへ出來なくなつたので、其の頃はまだ親切であつた村の人々が見かねて、源兵衛爺さんとこの土藏が燒け落ちて厚い壁だけが赭くなつて殘つてゐたのへ、屋根を拵へ床を取り付けて、入つて寢られるだけのものにして與れた。源兵衛爺さんは、其の燒け殘りの土藏の厚い壁を只で與れた代りに、お母んのお母んを孕まして、お母んを生ました。三十年から經つてもまだ大火事の名殘の赭い色の拔けないお母んの家は、小ひさな窓が二つきりなくて、家と言へば家、穴と言へば穴ともいふべきものであつたが、お母んは其處で育つて、お母んのお母んを見送り、父無しの君江さんを生んだ。

『ほんまの家といふものへ、三日でもよいさかい、住んでみたいなア。……』

お母んは君江さんによくこんなことを言つて、『お前が大けなつたら、よい聟さんを拵へて、ほんまの家へ住んどくれ。それを樂みに、お母んはお前を守り奉公にも出さずに、學校へやつてるんやで、……仇おろそかに思うとくれなや。』と、泣き聲を出したりしてゐた。

『お前んとこは、これでも煉瓦造りやで。』と、村長さんは戯れを言ひ〳〵、君江さんの葬禮の日、りうとした羽織袴の姿で、お母んの家のぐるりを廻つて、赭く燒け固まつた厚い壁土が、三十餘年の風雨に晒されても、崩れず潰れずにある丈夫さを見てゐた。

『かうなると、えらいもんや。學校もこれぐらゐ丈夫やつたら、君江さんも死なへんのになア。』と、嘆息するやうに言ふものもあつた。

土藏の時は二階があつたのを、突き拔いたまゝにしてあるので、恐ろしく天井の高いお母んの家では、向うの壁際へ、頭北西面にして君江さんの亡骸を置いてあつた。學校の小使室から抱きかゝへて戻つて來ると、直ぐ箸の尖端で、君江さんの右の耳の穴を穿つてみたのであるが、コツ〳〵と玻璃らしい手答へはするけれど佛が痛がりさうに思はれて、お母んの手が痺れた。お母んはもう玻璃のことを諦めて了つたのである。

村持ちの葬禮やよつて、お膳も出まい。あんな狹い家、並んで坐るところもあれへん。といふことで、村からの會葬者は尠かつた。お布施も尠いやらう、と思つたのかどうか、檀那寺の淨土坊主は、病氣を言ひ立てて出て來なかつた。そこで宗旨違ひの家の和尚さんが出ることになつた。

『昔なら、えらいこツちや。人別を變へるんやもんなア。』と、村の老人は痛まし氣な顏をして言つた。

『村方の賄や言うたら、他村なら進んで皆んな出て來よるとこやのに、この村は別やなア……村の仕事ちふと信用がないんや。』と、村政の極度の腐敗を嘆くやうに言つてゐる生意氣盛りの若者もあつた。

「カン〳〵〳〵……」と、村のあるきが打ち鳴らす出棺の鉦の音とともに、小ひさな柩は、腰の方に蔦の搦んだ四角な家から擔ぎ出された。敎師も兒童も學校のものが皆従つたので、わい〳〵と賑かな葬式ではあつた。私たち同じ組の十二人の女の兒は、校長先生の指揮で、小ひさな柩の兩側に附き添つて歩いて行つたが、兎もすればおくれて、小走りに袂を握つて追ひ付いた。

田地を有つてゐて、檀家は一軒も無しに立つて行かれる家のお寺では、和尚さんがこの日初めて葬式といふものに出たのである。私がまだ一度も見たことのない立派な法衣を着て、下にも何時もの薄墨色ではなく、純白の着物を着込み、袈裟も綺麗なのを懸けて、白い毛の拂子を振り〳〵、

『今日は芝居をするんや。……給金の安い役者や。……』と、寺を出がけに妙海さんを顧みて笑つてゐた。

「昔の坊主はずるい奴ぢや、人が死んで愁嘆にくれてるところへ乘り込んで行つて、傳道をやりよつたのやが、それから見ると、お布施稼ぎ専門の今の坊主の方がまだ罪がないわい……全體葬式にばツかり坊主を立ち會はせるのも可笑しいやないか、葬式に立ち會ふんなら、婚禮にも立ち會はんならん筈や。」と、和尚さんは上り口で履物を穿きながら、人の胸に突き當るやうな例の大きな聲で言つた。

『印度の通俗百科全書でも讀んで來たろかなア。』と、和尚さんはまた言つて、氣輕にスタ〳〵と出て行つた。お母んの家では、和尚さんの來るを待ち構へて、直ぐに行列は動き出した。

花を催す暖かい午後の春日和に、淋しく小ひさな柩は、前後を細長く會葬者に護られて、蒲公英の芽の萌えかけた野路を、小山の上の墓場へと登つて行つた。人々は皆横顔をあか〳〵と春の西日に照らされて、笑つてゐるやうに見えた。

火屋も龕前堂もないこの村の墓場は、小山を登り切つた十坪ほどの平地の眞ん中に柩を据ゑて、和尚さんが引導を渡すことになつてゐた。其の横の方に一坪足らずの四角い圍爐裡のやうな穴があつて、それが死骸を燒く場所であつた。この平地と四角い穴とを取り巻いて、一筋の路を殘した外は、山の中腹が皆昔からの村人の骨を埋めるところになつてゐる。石塔といふものは別にそれ〳〵の寺の奥庭へ先祖代々のを建てて、死人があると申譯ばかりに、一摘みの髮の毛ぐらゐを、其の墓石の横手へ淺く納めるだけで、亡骸や白骨を埋めるこの墓場へは、土饅頭の上へ竹を組んだ簗のやうなものを建てて、當座の目標にしてあるだけで、二年三年の後には、簗が朽ち、柩が腐り、土饅頭はごつそりと落ち込んで、それに雨水が溜つてゐる。かくして、十年十五年と經つ中には、また其の古穴を掘り返して、新しい亡骸や白骨を埋める。古い骨は其處らあたりへ放り出されて、下から土筆が芽を出してゐるが、それも何時か無くなつて、この村の墓場は、幾十百年經つても、狭さを告げるといふことはない。

富める者は燒くし、貧しい者は生で埋めるといふ習慣になつてゐるので、君江さんの亡骸は山の裾の方へ、新しく黒い土を掘り返した淺い穴に埋めることになつた。誰の脛か、細長い骨の白いところへ黒い斑の入つたのを、自然薯のやうに掘り出した跡が、君江さんの永久の眠りの床になつたのである。君江さんの骨も、また何時かはかうして掘り棄てられるのであらうと思ふと、私は人間と鼠や魚とに、どれだけ尊さの違ひがあるのか、と疑はれてならなかつた。

家の和尚さんは、ゆつたりと、曲彔に凭りかゝつて、拂子を振りながら、小ひさな柩を睨

み詰めつゝ、

『明月直入清風徐來。……咄ツ。……』なぞとやつてゐた。私はあんな難かしいことを言つても、君江さんには迚ても解るまいと思ひながら、小ひさな白い棺の中に入つてゐる君江さんの顏をもう一遍見たいなアと、たゞそればかりを考へてゐた。

拂子のことを和尚さんはよく、『これは印度あたりの暑い國で、蚊や蠅を追ふ爲めの道具ぢや。……馬の尾の毛で腹や胸にたかる蠅と蚋を追うてるやろ、あれから思ひ付きよつたもんやなア。』と、言つて、この有難さうなものを棕櫚の葉の蠅叩き同様に言つてゐたけれど、今日は蚊も蠅もゐないのに、勿體振つて拂子を振つてゐる和尚さんの狀が可笑しかつた。さうして、和尚さんが出がけに、『今日は芝居をするんや、……』と、言つたのを思ひ出して、和尚さんの演てゐる芝居と、君江さんの死とは、何んの係り合ひもない事だと考へられてならなかつた。

一町半先きの大きな寺から雇つて來た黑坊主が、和尚さんの叱り付けるやうな臺詞の終るのを待つて、早口でお經を讀み始めると、和尚さんは拂子を兩腕に支へて、仔細らしく合掌しつゝ眼を閉ぢてゐた。

『寛永通寶、……表に寛永通寶の文字を現はし、裏に四海の波を描き、五十枚を以て一圓に通用す。……咄ツ。』

後の方で年老いたあるきが、和尚さんの引導の臺詞を上手に眞似て、あたりの人々を笑はしてゐたが、其のあとから學校の小使さんが、

『和尚が一圓なら、俺等は二十錢、……』と、黑坊主の早口のお經を、そつくり其のまゝと思はれる調子で唸つたので、難かしい顏をして笑ひを忍んでゐた人たちも、一時に噴き出して了つた。

總代さんの家で借り着をして來たお母んだけは、涙の露を春の夕陽に映して項低れてゐたが、お經が濟むと、坂の下り口に立つて、皆んなに淋しさうなお辭儀をしてゐた。學校の子等は上が狹いので坂の下に居たが、私等の組十二人の女の子だけは、十三人が一人減つた其の一人を、墓穴の中に埋めるところまで、お母んと一所に隨いて行つた。

ずうツと前、和尚さんの打ち付けた卦算に殺された鼠と、今度學校の廊下に壓し殺された君江さんとが、私の小ひさな胸の裡にいつぱいになつて、私も死んで行きたいやうな氣がしてならなかつた。

これは餘程後になつて考へたことだが、君江さんも私生兒であり、其のお母んもまた私生兒であつたのに、私だけが何故『しせいじ』と呼ばれて、小ひさな友達から侮られたのであらう。さうして、私と君江さんと仲の好かつたのも、私生兒同志の寂しい心と心とが、ピッタリと合つてゐたのであらうと。……

五

小學校を卒業して了つた十六の夏の頃、私は漸く、私生兒といふ言葉の意味がハッキリと解つたやうな氣がした。さうして、何んだか自分の身體が日蔭者の肩身狹く思はれて、外へ出るのが恥かしくもあつた。それはたゞお政府の帳面にさう書いてあるだけのことで、生れて活きて行くのに何んの變りもないことと知りながら、矢張りこの人間よりは後で出て來た紙の上の錠前に、心の扉を閉ざされずには居られなかつた。

其のうちにも、私は曾て和尚さんの卦算に打ち殺された鼠のことと、學校の廊下の下敷になつて死んだ君江さんのこととは、片時も忘れることがないほどであつた。私の魂はどうし

ても、この鼠と君江さんとの亡魂に結び付いてゐるとさへ思はれた。

さうしてゐる中にも、私は戀を知るやうになつてゐたのである。どうせ日蔭の身の、人並に花の咲く春の來るのを思はなかつたけれど、村の若い衆が、

「十三パッチリ、十四はチョコ〱、十五の春から。……」なんぞと濁聲を揚げて唄ふのを聞いては、坐ろ心の搖り動かされることもあつた。一體に早熟な、南を受けたこの暖かい村の男女は、男が十五、女が十三で、嬰兒生んだといふやうな話もあつた。

都の俳諧師の孤兒で、この地に遠縁の親類を頼つて來て、少しばかりの田地を求め、さゝやかな家を建てて、親類の老婆と二人で住んでゐた貞之助といふ子があつた。

『正風宗師芭蕉翁直指相傳一字血脈

△△脈△△』

と刻つた大きな石印を手遊品にして縁側で遊んでゐたのは、つい先頃のことのやうであつたが、もう口のまはりに薄い髭の見える若者になつて、年は私に二つ上の十八であつた。去年から學校の方へ、代用教員に出るやうになつて、私も卒業する少し前、受持ちの先生の休みの時、高等科を教へる資格のないのを無理に一二度教はつたことがあつたが、家のお寺の裏の坂を下りると、直ぐ横の畑の奥に其の貞之助はんの家があつたので、私は學校へ行く時、よく畑の曲り角で、辨當を提げた貞之助はんに出くはし、私が辨當を持つて上げて、後から隨いて學校まで一所に歩いたことも度々であつた。後から隨いて行くのが、狹い路を並んで歩くことになり、時たま出くはした折だけにさうしたのが、時刻を計つて畑の角で待ち合はせるやうにもなつた。私が先きへ、春菜の蒔いてある綺麗な畝を見詰めながら、貞之助はんの出て來るのを待つてゐなければ、貞之助はんが丸ッこいぼんぼんちの葱の花を籐のステッキの先きで弄り〱、私の坂路を下りるのを待つてゐて呉れた。

友達が後指をさして何か蔭口を言つて呉れるのが、私には嬉しく、貞之助はんも嬉しさうであつた。第一、私が貞之助はんを皆んなのやうに「先生」と呼ばずに、「貞之助はん」といふことが、何んとなしに心の浮き上るやうな悦ばしさであつた。貞之助はんもさうに違ひないと思はれた。

「今夜もなア、……」と、二人は莞爾と笑ひ合つて、約束をするやうになつた。お寺から三四町ほどある山川の岸の廣い砂地に、村一番の富者と呼ばれてゐる材木屋の濱納屋があつた。其の物蔭へ私が夜學の歸りに佇んでゐると、貞之助はんが口笛を吹き〱、さく〱と砂地の上を歩み寄つて來た。春はまだ淺くて、梅の蕾さへ固かつたけれど、子供あがりの二人の胸には、燃えるやうな熱い血汐が通ひ合つてゐた。

人の居ない濱納屋の、轉がしてある材木を踏み越え、藤蔓で編みかけてある筏を渡つて、川に沿うた藪蔭の細路を、せゝらぎの音に祕め言の續きを消されながら、二人は白い手を引き合つて歩いた。

「お高ちやんは女學校へ入るのん。」

「いゝえ。」

「そいでも、夜學へ通うてるやないか。」

「勉強しといて損になれへんよつて行けと、和尚さんが言やはるのん。」

「女學校なら三年へ入れるんやな。」

「いゝえ、かつ〱二年へ入れるくらゐやて、高橋先生が言うてはるわ。」

「お高ちやんが卒業してしもたら、かうやつて毎晩逢へんな。」

「……。」

「あゝあの星さんが、もう一間ほどになつた。」

早う去なんと叱られるで。……』

こんなことを言ひ〳〵、二人が濕とりとした夜氣に包まれつゝ、人目を忍んで步く路は、材木屋の濱納屋の際から、筏士の通ふだけの川端を、猫柳に顏を撫でられながら行くのである。鐘ケ淵の岩角に立つて、此處だけは碧く澱んだ水が、上の瀨から落ちて來る泡を浮べて、靜かに魔神の住み家のやうな面を見せてゐるのに見入りつゝ、

『この淵へ二人で飛び込んで死んだら、屹と心中やいふやろな。』と、私は貞之助はんの腰のあたりへ捉まるやうにしながら言つた。

『死んだて仕樣がないやないか。……お高ちやん死にたいのかい。』と、貞之助はんは、何んとなしに賴りなささうな笑ひを、暗の中に浮べつつ、夜は、黑く堅さうで、すら〳〵と踏んで步かれるやうに思はるゝ淵の水を見てゐた。この何んとなしに賴りなささうに見える笑ひ顏を見る度に、私は貞之助はんが嫌ひになりかけるのであつた。

鐘ケ淵の岩角から上へ出て、土の白く見える縣道を横切る時には、二人が別々に離れて、通る人に怪まれない用心をしながら、横山の細路へ入つて、櫟林の脇で、また一所になるやうにしてゐた。

『もう星さんが四尺ほどになつた。……』と、貞之助はんが、大きな聲で言ふのに、私はギクリとして、西の山の上に煌々と大きな瞬きをしてゐる明星を眺めたが、この星さんが西の山の端からまだ三尺ぐらゐ上にあると思はるゝ頃お寺へ歸つてさへ行けば、和尚さんにも妙海さんにも叱られずに濟んだ。

毎夜定まつた細路を、それだけずうツと步いて、別れる時には、固く手を握り合ひながら、

『また明日の晩なア。……』と約束して、横山の古御坊の小松の生えた赤土の上を、東と西とに離れつゝ、別々の道を歸つて行つたが、別れて了ふと、私が二度三度振り返るのに、貞之助はんは一度だつて後を向かずに、さッさと木立の中に姿を消したのが、私にはまた賴りなく心細くて、淋しさに心が痺れるやうであつた。

二月ほどもこんなことを續けてゐる中、月夜に二度遭つた。雨も三四度は降つたが、雨の夜には宵の明星が見えぬので、時刻が分らないでゆツくりすることが出來なかつた。さうして月夜には人の目が怖くて、早くあのお月さんが細く缺けて暗になつて呉れるとよいなアと、果ては月が憎らしくなつて、小石でも拾つて投げ付けてやりたいと思つた。

『お高ちやんはよいなア、家へ去んだら、可愛がつて呉れる人が二人も居るんやもん。……僕は詰まらん、去んでもお婆んが行燈の影で怖い顏してるだけや。』

こんなことを言ふ折だけ、貞之助はんの顏は淋しさうであつた。青い額へ長く伸ばした髮が、馬の頭のやうに垂れ下つて、ちま〳〵と片付いた顏の、可愛らしい口元を引き締めつゝ、前齒で下唇の裏を噛みながら、いツぱいに月の光を浴びて、貞之助はんが物を言ふ時、私は其の寂し味に打たれて、慄然とすることもあつた。白い碧を溶かして流したやうな山川の瀨に、月が碎けて流れる美しい夜でも、二人の眼には何んともなくて、私はたゞ、白晝のやうな明るさが怖ろしくてならなかつた。

『誰やわ、……家で一番可愛がつて貰うてるのは誰や。……』と、私は笹の葉の影に身を忍ばせて、白い月の光を避けつゝ、聞えるか聞えぬかの聲で言つたが、其の時直ぐあの和尚さんの卦算に打ち殺された鼠の、幼い記憶が浮んで來た。さうして、それに伴うて胸の裡に湧き出すものは、學校の廊下の下敷になつて死んだ君江さんの最期である。

『猫がそないに可愛がつて貰うてるのん。』と、貞之助はんは圓い眼をパチリとさして言つた。

『家にはなア、猫が居なんだんだすけど、あんまり鼠が出るんで、去年妙海さんが貰うて來やはつたの。……小ひさいうちは可愛らしかつたけど、もう大けなつて憎てらしいわ。和尚さんは、爪で障子を掻いたり泥足で上つて來たりするいうて、嫌ひやはつたが、妙海さんが可愛がりやはるので、和尚さんもこの頃はおなじやうに可愛がつてはるわ。……夜になると二人で抱いて寝さしてはるのん。』と、私は何んとなしに、其の白い猫のことが急に妬ましくなつて來た。

『潮音寺の猫、から〳〵(漬物の事)食ふいふが、ほんまか。』と、貞之助はんは、不圖思ひ出した風で問うた。

『漬物は何んでも喰べよるわ。そいから泥足で上るいうて、和尚さんが怒らはるんで、妙海さんが雑巾を出しといたはると、それで足拭いて上るやうになりよつたわ。……和尚さんも妙海さんも、わたへより猫の方が餘ッぽど可愛いんやろ、猫が何したて一寸も叱らはらへんわ。』と、私は思ひ切り強く、愛に飢ゑた表情をしようとした。

『和尚さんはお高ちやんのお父つあんやろ、妙海さんはお母さんやろ。……兩親揃うてゐて、不足言ふことあれへん。』と、貞之助はんは、大人びた物の言ひやうをして、月明りにヂッと私の顔を見詰めた。

『そら小ひさい時は可愛がつて呉れたけど、今はもうちよつとも可愛がつて呉れへん。……わたへが死んだら、和尚さんも妙海さんも屹と喜ばはるやろ。』

『そんな阿呆なことがあるもんか。』と、貞之助はんは、何氣なしの顔をしようとしたのであらうけれど、月の光は鮮かに、其の痛ましさうな筋肉の動きを映して見せた。

『兩親が揃うてたかて、わたへは餘所の子みたいに、お父つあん、お母さんて呼ぶことが出けんのやもん、親がないのもおなじことやわ。……小ひさい時から、お父つあん、お母さん言うてると、其のお父つあん、お母さんといふ言葉の中から、可愛さが滲み出して來るんやら知れへんわ。……和尚さん、妙海さんと常に言うてると、ほんまの子でも他人みたいに思はれて來るのやろ。……』と、私は十六の小娘には考へ過ぎるほどに老成たことを言つたが、

『さうやろかなア。』と、貞之助はんは溜息を吐いてゐた。

『わたへなア、……和尚さんにも妙海さんにも可愛がつて貰はんかて、だんない。……貞之助はんにさへ可愛がつて貰うたら、……。』と、私は自分ながら顔へ紅を刷いたやうになるのを覺えつつ、まんまるい月に背を向けて立つてゐた。

『わいしみいな、お父つあんもお母さんも死んでしもてるがな。其のこと思へや、お高ちやんは結構や。……お父つあんと呼べいでも、お母さんと呼べいでも、お父つあんはお父つあんや、お母さんはお母さんや。……』と、貞之助はんは眼をしよぼ〳〵さした。

『そやけどわたへなア、大きな聲で、お父つあんお母さんと呼んで見たうてどんならんわ。』

『お高ちやんは、ほんまに僕のことが好き、……』と、貞之助はんは、急に私の前へ寄り添うて來た。

『和尚さんや妙海さんより、あんたの方が餘ッぽど好きやわ。……』

毎夜の忍び逢ひに、二人の語り合ふことは、大凡こんな風であつた。

六

月明りに星の光は弱かつたけれど、宵の明

星の形だけは、西の山の端にきら〳〵してゐた。それが山から三尺ほどに見える低さになつたのに驚きつゝ、私は名殘惜しく貞之助はんに別れて、がさ〳〵と乾いた赭土を踏みつゝ、裏口から家のお寺へ歸つて行つた。黒光りのする上り框に圓くなつてゐた白猫は、私の姿を見ると、直ぐに奥へ逃げ込んで行つた。燈心を一本にした行燈の薄暗い明りに、白紙が散つて行くやうに見えた其の後影が、私には憎らしくてならなかつた。

何んにもしてゐないのに、私は其の白猫さへ見れば火箸でコツンと頭を打つた。猫の頭が石のやうに堅いのも、私は其の時から知つたのである。

雄猫で、白雄といふ名が命いてゐたけれど、私は白雄なんて人間じみた名を呼ぶのが嫌ひで、たゞ猫々と言つてゐた。私が火箸で猫の頭を打つのを見付けられると、戯れではあらうけれど、和尚さんはよく私を猫の前へ引き摺つて行つて、三遍お辭儀をさして猫に詫まらした。或る時なんぞは、『三遍廻つてお辭儀しい。』と言はれて、クル〳〵〳〵と三遍、身體を舞はされてから、頭を摺り付けてお辭儀させられたが、鏡のやうに拭き込んだ板の間で額を打つて、私はしく〳〵と泣き出したこともあつた。招き猫みたいにチヨコナンと坐つて、和尚さんの白い腕に引き廻されてゐる私をば、えらさうに見下ろしてゐる猫に、私の憎しみはだん〳〵加はつて行つた。

妙海さんが、留めて呉れでもすることか、嬉しさうに笑ひながら見てゐるのも口惜しく、何んといふむごたらしい兩親であらうかと、私は零れかけた涙が自然に引ツ込んで了つて、前齒を固く食ひしばつてゐた。

私が學校でお淸書の甲上を取つて來たつて、それは和尚さんも妙海さんも喜ぶには喜んだけれど、猫が鼠を捕つた時の喜びやうとは、比べものにならなかつた。自分たち大人二人が夜半に大騷ぎをして、卦算や拂子の柄を持ち出し、蒲團まで捲り上げて、辛く一頭の子鼠を殺したのとは違つて、猫はほんの一寸の間に、大きな鼠を捕つて銜へて來るのだから、えらいやうなものの、

『捕つたか、捕つたか。えらいやツちや、白雄白雄。』と、聲まで變へて喜ぶには當るまいと、私は殘念でたまらなかつた。

こんな風で、猫は和尚さんや妙海さんの居ないところで私に出くはすと、直ぐ逃げて行くが、和尚さんか妙海さんの側だと、三角な耳を立てて、私の方ばかり見てゐた。

今、私が夜學の戻りに、宵の明星で時刻を計りつゝ、貞之助はんと忍び逢つて、何んだか斯う堅い心になつて裏口から入り、奥へ逃げ込んだ猫の後に續いて、和尚さんの居間へ行くと、大きな長火鉢を眞ん中にして、和尚さんは妙海さんと差し向ひに坐つてゐた。猫は妙海さんの肥えて盛り上つた膝へ鼻面を押し付けつゝ、ゴロゴロと咽喉を鳴らしてゐたが、やがて妙海さんは猫を抱き上げ、

『白雄さん、ぽツぽへ入れたろなア』と、もう三十を五つ六つも過ぎたにしては、むツちりと娘のやうな肌を押し分け、猫を乳房と乳房との間へ入れて、薄墨色の襟を掻き合はすと、猫は欄間の彫刻でも見るやうに、首だけを出して、またゴロ〳〵と、咽喉を鳴らした。

『只今ツ。……』と、妙海さんは、氣の故か、猫の顏を見る時とはまるで逆まな怖い顏をして、ぼんやり突ツ立つてゐた私を促しつゝ窘めた。

『只今ア。』

私はハツと氣が付いて、べたり敷居際へ坐ると、兩手を突いて我れながら頓狂な聲でさう言つたが、猫の首が此方を向いて笑つてゐるや

うなのが、憎らしく口惜しくてたまらなかつた。

すると妙海さんはまた、崩れるやうな笑顔を猫の顔に向けて、自分の高い鼻の先きを猫の平べツたい鼻先きに押し付けたり、それから自分の赤い舌を出して、猫の口をべろ〳〵舐めたりした。

『あゝ汚い。』と、私は口の中で言つたが、ニヤニヤ笑ひながらこの狀を見てゐた和尚さんは、

『どれ〳〵、一寸わしにおかし。』と、妙海さんの胸から、猫の首を摑んで抽き出し、妙海さんのしてゐたやうに、痩せた懷中へ猫を押し込み、薄墨色の襟の間から首だけを出さして置かうとしたが、猫は居工合がわるいのか、妙海さんの懷中でのやうに溫和しくはしてゐなかつた。それでも、和尚さんは無理にも妙海さんのしたやうに、自分の尖つた鼻先きを猫の圓い鼻に摺り付けてゐたが、舌を出して猫の口を舐めることだけはしなかつた。其の中に猫はそうツと和尚さんの懷中から這ひ出し、其の細い膝の上へ丸くなつて寢てゐた。

『お高、お前は矢ツ張り尼になるか。……なるんなら早う得度したらよい。高等を卒業したらもうえゝやろ。女學校へ入つてもよいが、俗くばかり長けて可かんわ。』と、和尚さんは猫の背中を撫で〳〵、ゆツくりと言つた。

『もう懲り〳〵や、……尼はんにするんは置いとくなはれ。』と、妙海さんは針差しを持ち出し、此頃貰つた新らしいラムプの光で、眩しさうにしながら、みゝどへ絲を通して、白足袋の破れを繕り始めた。

『一人出家を遂げて、九族天に生ず。』と、和尚さんは、謠曲のやうに節を付けて、一層ゆツくりと言つたが、何を思ひ出したか、たまらないやうにカラ〳〵と高笑ひをした。

『わたへはなア、矢ツ張りお高を女學校へ入れて、當り前に片付けたいと思うてますわ。』と、妙海さんは何時にない優しい顏をして、私の方を見たので、私は急にラムプの眩しさを覺えつつ、橫向きになつて了つた。

『貰ひ人があれば片付けてもよいが、俗人の嚊になるより、尼になつた方がえゝで。わしはもう妙高といふ名まで考へたるんや、お高の高といふ字を取つてなア。妙海の弟子で妙高、……えゝやろな。』と、和尚さんは何時ものニコ〳〵笑ひをして、舌の先きで下唇を舐めてゐた。

『妙高より妙舜の方がえゝやないか。舜田の舜を取つてなア、……そやけどなア、わたへは、お高をあの貞之助はんに貰うてもろたら、どや知らん思うてる。』と、妙海さんは輕く欠伸をした。私は不意に胸を突かれたやうな氣がして、俯向いて了つたが、和尚さんも妙海さんも、何んの氣も付かずに、たゞの世間話といふほどの意味よりは深くこの話に突き入らなかつた。

『さア、困つたことが出けたわい。……』と、和尚さんが大仰に言つたので、妙海さんも私も首を擡げて眼を瞠つた。

『弱つたなア、こいつは、……』

和尚さんは、さも〳〵當惑したやうな顏をして、膝をもぢ〳〵動かしたが、それで眠りを覺まされた猫は、ぬツくと起き上つて、和尚さんの細い膝の上で、大きな背伸びを一つすると、赤い舌を出して、口いツぱいの欠伸をしてから、のそりのそりと和尚さんの膝を下り、妙海さんの暖かさうな圓く肥えた膝へと移つて行つた。

『まア好かつた。……實は小便が支へてたんやが、白雉さんを起すのが氣の毒や思うて、チツと辛抱してゐた其のつらさ。……やれ〳〵助かつたわい。』と、和尚さんは眞面目くさつた顏で言つて、猫から傳染されたらしい欠伸を一つすると、急いで便所へ立つて行つた。

私はたゞ、妙海さんの膝の上へまた丸く寢て了つた猫を見詰めてゐるだけであつた。

七

學校を卒業して了ふと、夜學にも行かれぬやうになつたので、私は貞之助はんと忍び逢ふ隙も夜の機會を奪はれて了つた。其のうちに貞之助はんのとこへ、里の中百姓からお嫁さんが來るといふ噂が立つたので、私はたゞ胸が張り裂けるやうな氣がして、和尚さんや妙海さんに顏をそむけてゐた。實に今から考へると、齒痒いやうな戀であつた。まだ裾の方に花瓣の名殘を留めてゐる青い果物にでも譬へようか。割つて見ても核子がぐぢや／＼と白く柔かな、其の頃の幼い私の戀は、男に手を引かれて寂しい夜路を歩くだけに滿足してゐたものであつた。されば其の戀が破れかけても、ぢき／＼男に會つて怨みを言ふといふやうな心には決してなれなかつた。獨り隅の方を向いて、貞之助はんのことを考へながら、しく／＼泣いてゐた。

けれども、私の心が冷たく凝固まりかけたのは、其の時からであつた。私が果敢ない戀の破れに泣いてゐるのを少しも知らぬ和尚さんと妙海さんとは、始終私の身體をどうしようかといふことで、密々話をしてゐた。私がいツぱい涙の溜つた眼を和尚さんと妙海さんとにはそむけて、猫を眞正面に見てゐると、猫の顏が、涙に染んで二つに見えた。嫌ひで嫌ひでならぬ猫も、この折ばかりは、妙に懐かしいものになつて、人間よりも猫の方がよいわ、とさへ思ひかけた。

『矢ツ張り尼にするんがえゝやろ。……子供のうちなら兎も角、だん／＼大けなるもんを、俗體で寺へも置いとけんやないか。……檀家がないよつて構はんやうなもんの、本山へ聞えると煩はしい。』と、和尚さんが何時になく染々した物の言ひやうをした後から、妙海さんがそれを貶し付けるやうに、

『そやかて、身體が滿足に出けてるもんを、尼はんにするのは可哀さうやないか。……わたへかて、身體さへ當り前やつたら、尼はんなぞになりますもんか。……不吉やいうて、嫁入りしても戻されたよつて、泣きの涙で尼はんになつたもんの、其の時からもう死んだもんと思うてまんね。……お高はわたへみたいな、言はゞ不具者やおまへんで。……』と、常の聲で疊を叩かんばかりにして言つた。

不吉とか、不具者とか、今からなら大凡想像も附いてゐるが、其の頃の私には何んのことだか解らなかつた。さうして掃除ばかり綺麗に屆いてゐても、山の上の貧乏寺で、屋根替へも十分に行かなかつたのを、近在の物持ちの總領娘に生れた妙海さんが、田地を手土産にこの寺へ尼に弟子入りしてから、寺は俄に豐かになつたのであるといふことも、私は完全な大人に成るまで知らなかつたのである。私が生れるまでは、妙海さんの俗縁の父母、私には俗縁の祖父祖母が、好い土産を持つて寺へ來たといふことであるが、『比丘尼の腹ぼて』と、まだうら若い妙海さんが、托鉢に出て里の子に後指さゝれるやうになつてから、俗縁の實家とは義絶になつて、私は祖父母の顏を知らないのである。

これも後から聞いたことであるが、和尚さんと妙海さんとは、私へ内々で、私と貞之助はんとの縁談を纏めようと、隨分骨を折つたのださうである。けれども、お政府の帳面にあるだけの私の『私生兒』といふ空しい肩書が邪魔をして、貞之助はんの唯一人の叔父の故障に、さゝ蟹の糸のやうな細い縁は切れたのであるげな。思へば私の心は、どうしても冷やかに凝固まらなければならぬ運命の鑄型の中に置かれたのであつた。

『本山、本山て言ひなはるけど、本山はわたへがこの子生んだことさへ默つてるやないか。……

納め物さへちやん／＼してたら、本山は盲になつて了ひます。…よしんば、この子に養子貰うたかてだんない。』と、妙海さんは氣色ばんで言つた。

『お政府かて食妻帶を許してるのに、本山が許さんちふのも工合なもんやなア。…』と、和尚さんは話を勝の方へ持つて行つた。許すとか、許さぬとか、さういふことの愚かしさを、和尚さんは全く知つてゐたのではないけれど、强制と迷信との私生兒として生れて來た紙の上の約束の無理といふことには、幾分か氣が付いてゐたものらしい。

妙海さんが、一生懸命になつて、私を人並に男へ添はさうとしてゐる中に、私の年はだんだん長けて行つた。――

『それ見い、どうしても尼はんが性に合うたる。…蛙の子は蛙、尼の子は尼かなア。』と、和尚さんが氣樂さうに言ふのを、妙海さんは躍氣となつて睨み詰めつゝ、血眼で私の嫁入りの口を探し廻つた。姿は世棄人でも、心は矢張り世間並の母親の有つべきものを皆有つてゐたのである。

『お妙、…』と、其の頃和尚さんはよく小ひさい聲で、妙海さんのことを呼ぶことがあつた。

妙海さんは顏を赧くして返辭もしなかつたが、『お妙、…』と、其の俗名を呼ばれる時の心地は、兎ても端のものに想像の付かぬものがあつたらしい。私の生れる頃は、夜になりさへすると、妙海さんは必ず『お妙』と呼ばれてゐたのだといふことを、何かの折に聞いたやうでもある。

妙海さんは、私に『お母さん』と呼ばれてみたいと思ふのとはまた別の心で、和尚さんに『お妙』と呼ばれてみたかつたのであらう。

私の緣談は、妙海さんの骨折りで、纏まりかけるが、直ぐに解れ、纏まりかけてはまた解れした。今度こそは大丈夫と思つてゐると、媒人が苦蟲嚙み潰したやうにして、裏口から入つて來た。緣談の解れは必ず『私生兒』といふ、私に對する紙の上の迷信から來てゐる。

私はかうして、だん／＼冷やかに凝固まりつゝ、尼にもならずに二十歲を越して了つた。

八

それでも私は、時々嫁入りといふことを考へて見ないではなかつた。嫁入りのことを考へると、身體中がぞく／＼して、凍て付いた膚にも春風が暖かく通つて來るやうな氣がした。

振り返つて見ると、たまらないほど阿呆らしい、幼稚た戀の對手の貞之助はんは、其の後學校の代用敎員を罷めて、村役場の筆生になつたが、宗匠の坊んちには、俳道なぞいふことの氣は全く拔けてゐて、幼い折から癖の、前齒で下唇の裏を嚙みつゝ、郡內の役場員の速算の競爭に二等賞を取つたのを、村中へ自慢に觸れ歩いてゐた。

時たまこの貞之助はんに途中で出くはすことがあると、如何にも最う二人の子の父らしく、年齡よりはズツと老けた小ひさな、三角の尖つた方を下にしたやうな、ちま／＼と片付いた顏の、鼻の下に髭なんぞ立てて、昔のことはまるで忘れたやうに、納まり返つて、『今日は、…』なぞと、出來合ひの言葉をかけて行くのが、私には寧ろ不思議であつた。さうして私は、世の戀さめと言つたやうな意味ではなくて、何んぼ嫁入りがしたくても、あんな男の妻に貰はれるよりは、まだ尼になつた方がましであらうと、染々さう思つたりした。

澄まし込んでゐる譯でもなく、空惚けてゐるつでもなく、當り前にあんな顏をして、袖と袖とを摺り合はさなければならぬ細路で私に行き違つて行くことの出來る貞之助はんの心を、私は馬鹿々々しく思つた。

私は貞之助はんのことを、唯馬鹿々々しい、阿呆臭いとばかり思ふやうになつたが、四歳の頃和尚さんの卦算に打ち殺された鼠と、十二の時學校の廊下に壓し殺された君江さんとのことは、何時まで經つても、同じ痛ましさで、私の心に深い創のやうに殘つた。

　君江さんの殺された學校は、其の後大暴風雨で殘らず倒壞したが、夜分であつたから、死人も怪我人もなく、宿直してゐる筈の教員も小使も、酒を飲みに行つてゐたから、何が幸ひになるか分らぬと、低い聲で語り合つて無事を喜んだ。さうして學校は新しく別のところへ、耕地を潰して平家に建てられた。

　大きな松の幹の、子供の身長の屆くあたり一面に、小刀でいろ〳〵の疵の付けられた痕が、樹脂を卷いて殘つてゐるのが、前に學校のあつた跡の目標である。

　其の松の根は浮き上つて、傍には石垣が崩れたまゝになつてゐる。草が一面に生ひ茂つて、平地と言へばほんの少しよりないが、あれでよくあんなに廣い校舍が建つてゐたものと、私は坐ろに不思議の感じを起すのが常であつた。便所は裏手の方にあつたが、今はもう何處と言つて、確かに其の跡を突き止めることも出來ねば、其處へ通つた廊下は此處ぞと、土を踏みしめて見ることもならぬやうになつたけれど、君江さんの痛ましい最期だけは、まざ〳〵と眼に映つて來る。

　何をしてゐるのかと、通る人たちが怪しみの眼の光を向けるので、私は何時までも踏んでゐたい土を離れて、松の根ッこのところ〳〵に躍り出した並木道を、西の方へと進んで、西の村に赭茶けた燒け殘りの土藏を家にしてゐる人を尋ねることが多かつた。君江さんのお母んは、君江さんが亡つてから、眼を病んで使ひ歩きも不自由になつたので、其の日の食物にも困ることが多く、私が時折惠んでやる十錢二十錢を、何時のほどにか待ちかねるやうになつてゐた。

　女の四十と言へば、大層なお婆さんと思はれるけれど、お母んは苦勞したり貧乏したりしてゐるのに似ず、三十代の若々しさがあつて、眼元口元の君江さんに生寫しなのも、私には懷かしかつた。

　けれども、私に取つて物足らなくて仕樣のなかつたのは、お母んがもう君江さんのことなんぞ殆んど忘れたやうで、一頃は大事に大事にして、肌身離さぬほどであつたあの青い玻璃の簪の先きの折れたのを無くなして了つて平氣でゐる、其の心であつた。

　「ほんまになア、家の君江も生きてゐたら、あんたみたいに大けなつてますねやなア。」と、たまには言ふこともあるけれど、それは如何にも白々しくて、染々と人に迫る哀調に缺けてゐた。

　「けれどもなア、こないに貧乏で、食ふや食はずに居るくらゐなら、君江もあの時死んだのが仕合はせやつたや知れまへん。」と、いふお母んの言葉には、却つて眞劍に物を考へてゐる心の閃きが見えた。

　『そんなことがあるもんだッか。君江さんが居てだしたら、わたへはほんまの姉妹みたいにして、毎日一所に居るやろ思うてます。』と、私が言つても、お母んはせゝら笑ひつゝ、

　『腹いつぱい物が食へんやうなら、生きてても仕樣がおまへん。』と、愛想もこそもない風で言つた。

　『そいでもあんたは、、、君江さんの死んでやつた當座、泣いてばつかり居なはつたやないか。』と、私は少し忌々しくなつて來たので、稍言葉を嶮しくして言つた。

　『そらあんたなア、あの時あんまり泣いたんで、こないに眼が惡うなりましたんやがな。・・・死

んだと聞いた時は、あんまり喫驚して涙も出えへなんだけど、葬れんが濟んだ日ぐらゐから、出る、出る、何んぼでも涙が出ましたで。……到頭泣き潰したかと思ふやうに眼が痛うなつて、兩方へ星が二つ出けました。……それからなア、眼の惡いのを放ッたらかしといて、毎日墓參りもしてやりましたし、家の位牌の前へは、生きてる時好きやつたもんを買うて供へたりますし、お手玉を取るのが好きで、それ、あのな、死ぬ時まであんたとお手玉を取つてたさうだすさかい、唐縮緬の布片でお手玉まで拵へて供へたりましたで。……』と、お母んはそこまで言つて、流石に眼をくしや／＼さした。

『それに此頃はもう君江さんの位牌も墓も忘れてしまひなはつたのん。』と、私は少し言ひ過ぎたと思ふことを、覺えず言つて了つた。

『考へてみるとなア、位牌いぢりや墓參りも、腹が減らいでゐる人のてんご（道樂の事）だんな。……泣くんかてわたへは、錢や米のある人の慰みや思うたことがおますで。……役場の宇之はんの嫁はんみたいに、宇之はんが死なはつてから、彼れ是れ十年にもなるのに、まだ宇之はんのことばッかり言うて、寫眞に煎餅供へたり、墓へ線香立てにいたりしてはる。……それも盆か彼岸にすることなら分つてるが、あの人のは毎日や。何んぼ惚れてた男かて、今日さんに困つては、あんなことも出けまへんで、……あれもあの人の一つの慰みや。……それも若けれやまだしもやが、宇之はんが死んだ時五十やつたさかい、あの嫁はんも最う五十やろ。あんな大けな息子はんがあるし、長いこと役場に居て、溜めてはッたよつて、わたへみたいに、今日さんに不自由するやうなことがない。……結構なもんや。』と、お母んは妙に調子附いて喋舌り出した。秋も闌で、天滿宮の大銀杏が眞ッ黄色になりかけた此頃、この薄暗い燒け殘りの土藏の家には、昔ながらの、緣と横側とに著しく焦げた痕の見える箱火鉢に、火があるかないか、かゝつてゐる古土瓶の缺けた蓋には、無味さうなものの煮え溢れた痕が、蛞蝓の這つたやうにこびり付いてゐた。五六年前までは、『紅蕾童女位』と家の和尚さんの手蹟で書いた位牌の載つてゐた寺子屋机の、無暗に釘の打つてあるのへは、茶碗と椀と箸が一本とだけ置かれて、位牌は何處にも見えなかつた。

『食べることの苦勞なぞは、何んでもおまへん。人間の辛い苦みはもッと外におまッしやろ。……』と、私は、寂しく果敢ない自分の身を顧みて言つた。

『そら食ふことに困らん人の言ふこッちや。お腹が減らん人は皆んな贅澤言やはります。……わたへみたいに、この年まで菊の花一本植ゑて樂んだことのないもんは、お腹がいッぱいになつた上の苦勞は、皆好きこのんでの贅澤苦勞や思うてます。……こなひだもあの門徒寺の報恩講で、握飯與るさかい說教聽きに來い言やはつたよつて、握飯が欲しさに行きましたが、何處のお寺から來やはッたのか、好え男の若い坊んさんが、人間はおいしいものを喰べ過ぎて病氣になつて死ぬのはドッサリあるけど、どんな貧乏人でも空腹いので死ぬちふことはない。贅澤さへせなんだら、人間の食ひ扶持は自然に授かッたる、や言やはつたけど、おいしいものを喰べ過ぎての病氣なら、罹つて死にたい思ひますわ。……自然に授かつたるもんなら、こないに辛い思ひをして、米買はんかて、もッと樂な法があるやろ思ひます。』

　君江さんのことを話したのでは、もう涙を零すことを忘れて了つたお母んも、今日さんの食物の話には、涙ぐんでこんなことを言ひ／＼した。

『蟹は甲に似せて穴を掘る、……言ひますよつ

てなア、人間は皆自分のことばツかり考へて、それから割り出した勝手なことを言やはりますのや。』と、私は家の和尚さんのよく言ふことを眞似して、ヂッとお母んの顏を見てゐた。喰べるものにさへ事を缺く暮らしをしてゐながら、そんなに窶れたところも見えず、顏の色なんぞの若々しいのが、不思議なくらゐであつた。

『こないに苦勞して、食ふもんにばツかり心配してるより、寧そ一思ひに死んだろか思うたこともおましたが、なか〳〵死ぬ氣にはなれんもんだすな。……いよ〳〵となると、生命は惜しおますわい。』と、お母んは何氣なく言つたのであるが、其の身體のあたりには、妙に凄味が漂ふやうに思はれた。

『死んだて、仕樣がないわ。……』

『生きてたかて、仕樣がおまへんがな。』

『そんな阿呆らしいこと考へるより、何處ぞへ奉公でもしたらどうだす。獨身でこんな家へ入つてるより、喰べることに心配せいでもよいよつて、さうしたらどうだす。』と、私は不圖思ひ付いたことを言つてみた。

『椀給でもよいよつて、置いて呉れはるとこがあつたら、今からでも行きますが、こないに眼が惡いので、誰れも置いて呉れはれやしまへんがな。夜になると一寸も見えまへんよつてなア。』と、お母んの聲には急に悲しさの調子が加はつて來た。

『眼醫者にかゝつて、癒して貰うたらえゝがな。』

『あの時分、君江の耳を醫者どんに診て貰うて玻璃の破片取つて貰ふことが出けなんだんだすもん、今のわたへが眼醫者どこだすかいな。……それにこの眼はあきまへん、わたへも諦めてます、これはなア、……』と、お母んは急に聲を密めて、

『瘡毒だすよつて、醫者どんの手にも了へまひよまい。……君江のお父つあんのあの薄情男のが傳染つたんだす。……君江も今まで生きてたら、わたへとおんなしに眼が潰れたやら知れまへん。それを考へると、あの娘はあの時死んだのが仕合はせだす。……あの薄情男は骨搦みになりましたさうだすもんなア。……』きれぎれにから言ふと、さも恐ろしいといふ顏付きをした。私も何んだか怖くなつて來て、

『まア、……』と、言つたきり、言葉も出なかつた。

『あんたもなア、これから男持ちなはるんなら、氣い付けなはれ、薄情男のや、人でなしに引ツかゝると、一生取り返しが付きまへんで。』と、お母んは難かしい顏へ急に、ニヤ〳〵と笑ひを浮べた。

『わたへは一生獨身でゐまんがな。』と、私はこんな話にも別段顏を赧くすることはなくなつてゐた。

『さう出けるんなら、それが宜しいなア。……わたへが若い時あの薄情男と一所になつたのも、色の戀のといふんやなかつたんだすが、世間ではわたへを不身持ちの看板みたいに言やはりました。今でもわたへがこないに乞食みたいな暮してるのを、不身持ちの罰や言うてる人がおます。……色の戀の不身持ちのといふことは、矢ツ張り、今日さんの食物に事を缺かん人のすることや思うてますが、そやないのか知らん。……わたへはなア、あの薄情男をあんな薄情と知らずに、一所になつたら一生樂に養うて呉れるやろ思うて、言ふことを聽いてやつたんだすがなア。……』と、お母んの話は果てしもなかつた。

九

冬になつて、私のお寺の裏の崖へ、多くの劍を植ゑたやうに霜柱が立つと、村一番の物持ち

の材木屋大淸では、山の裾の田圃の中へ、キビツといふものを拵へて、田畑を荒らす猪を捕らうとした。

其のキビツといふのは、二間半幅に二間半ほどの太短い筏のやうに材木を編んで、それを人間が立つて入れるくらゐの高さに片一方だけを擡げ、上の方に仕掛けを加へて、其のまゝでは落ちないやうにしたのへ、石だの土俵だの、二百貫からの重りを載せ、稻の穗の、米にしたら一升もあらうと思ふほど房々と穰つた束を下の方へ垂れて吊り下げ、それを括つた繩の端をば仕掛けの橫木に結び付け、夜分に猪が來て、其の稻の穗を銜へて引ツ張らうものなら、上の仕掛けが外れて、猪は二百貫からの重みのある筏の下に壓し殺されることになるのである。

キビツの出來た場所は、私のお寺から直き近かつたので、丁度出來上つた日の夕方、私は和尙さんと、がさ／＼枯葉の落ちたのを踏んで、山の裾の間道から見に行つた。まだ株伐りをしない田の面には、稻を刈つた痕が點を打つたやうになつて、其の一隅にキビツが、話に聞くギロチンとはこんなものかと思はるゝやうに嚴めしい恰好をして、睨むが如く頭を擡げてゐた。其の材木の一番太い二本の切り口が、二つの眼玉のやうに見えて、氣味惡く思はれた。

『和尙さんはまだお若うおまんな。水々してなはるで、……さうやつて孃やんと歩いてはると、まるで夫婦や。』と、材木屋の若い者は、キビツの上に載つて、仕掛けの撥ね木を括り止めながら、大きな聲で言つた。

『阿呆言ふない。孃やんが坊守さんに見えてたまるかい。』と、今一人の若い者は、朋輩が撥ね木を括り止めたのを見濟まし、黃色い一束の稻の穗を持つて、怖さうにしながら、キビツの下へ入らうとした。

『賴むで、今此處で其の撥ね木一つ外されたら、なんまんだぶつや。……えゝか大丈夫か。……』

『こいつが金持ちやつたら、今此處で百兩の證文書かしたりまんがなア、和尙さん。書かなこの撥ね木外すいうて、……』

『證文書くひまに飛んで逃げるわい。……おいうだ／＼いふのん止めて、撥ね木を確り括つといとくれ、生命がけの仕事やで、……手が慄ふがな。』と、下の若い者は、手早く房々した稻の穗を下の橫木に結び付けると、橫飛びに筏の下を逃げ出した。

『臆病な奴ちや、そいでも犢鼻褌かいてるんかいな。』と言ひ／＼、上の若い者は撥ね木の止めを解いた。

『ほんならお前入つて見い、毒性氣味の惡いもんやで。』と、下の若い者は腰を探つて、煙草入を抽き取つた。

『生死岸頭に大自在を得たり。……』と、和尙さんは、重苦しい語調で、歌ふやうに言ひながら、のツそりとキビツの入口まで進んだ。

『和尙さん危いツ、撥ね木の止めを解きましたで。……』と、上の若い者は周章てたさまで早口に言つた。

『生死一如、……善惡無差別、……』

和尙さんは同じ語調で靜かに唸つて、若い者の言ふことなんぞ耳にもかけぬ風であつた。私は見てゐて、たゞはら／＼してゐた。

『和尙さん、じやうだん置きなはれ、ほんまに危うおまツせ。……君子は危きに近寄らず、ちふことがおまツせ。』と、下の若い者が背後から言つたので、和尙さんは呆れたやうな顏をして、ポカンと口を開きつゝ、キビツから離れた。

私はこのキビツといふ恐ろしいものから、ズツと前君江さんの壓し殺された學校の廊下のことを思ひ出し、黃色に房々と穰つた一束の稻の穗に釣り込まれて、生命を失ひに來る哀れな

猪が、今頃は何處の山で寢てゐるであらうか、なぞと考へてゐた。

『和尚さん、猪の肉喰べなはるか。』と、上の若い者は笑ひ〳〵問うた。

『あゝ食ふとも、呉れれや何んでも食ふ。そうべつ四本足は可味いもんぢや。炬燵の櫓でも食はせア食ふ。』と、和尚さんは眞顏をして答へた。

『俺ア、ズッと前やつたが、和尚さんが鷄を殺しはつたのん見たで、……い、い、しよこくの黑いやつを總代さんとこの裏の藪の端で締めて、毛を拔きかけはツたら、半ぼんほど毛を引いたとこで、鷄が生き返りよつて、其の時は和尚さんも周章てはツたなア。…周章てて、俎板や擂り鉢と一所に料理しようと思うて置いたツた出刃庖丁を、鷄の背中へ打ち込んだもんや。…さうすると、半ぼん裸體になつた鷄が出刃庖丁を背中に負うてヨタ〳〵逃げよるのを、和尚さんが追ひかけて行きやはる風は、そら面白かつたで。……』と、下の若い者は面白可笑しく、こんなことを言つた。

家では豆腐に納豆ぐらゐをお菜にばかりしてゐる和尚さんが、外では四つ足でも鷄でも何んでも喰べる上に、むごたらしい殺生さへするのかと、私は幼い時和尚さんが卦算で鼠を殺したことをまた思ひ出し、坐ろに和尚さんが怖くなつて來た。

十

雪のやうに霜の深かつた其の翌くる朝、起きることの早いうちのお寺で和尚さんのお勤めの最中、キビツが落ちてる、といふらしい聲が、山の裾の方から響いて來た。

お勤めを中途に止めた和尚さんの後から、私も坂を下りて、また間道の落葉を踏んで行くと、成るほどキビツは鐵鉢を伏せたやうになつて、其の側には、村木屋の若い者と十人ばかりの村人とが、白い息を吹き〳〵、わい〳〵と話してゐた。

キビツの上に載せてある重い石や土豚の、眞白に霜の置いてゐるのを、若い者等が痛さうな手付きをして、取り退ける間に、朝日は淸らかに東の雜木山の上から照らして、厚い霜がじりじり解けかけた。

横の方で誰れかが焚火を始めたので、其の煙が白く、ふは〳〵と、雲のない空へ雲を造るやうに舞ひ騰つた。若い者等は皆キビツから離れて焚火に暖まらうとした。

『やい、早うせんかい。どえらい猪がかゝつてるぞ。』と、白い厚司を着て、腰に眞鍮の矢立を差した村木屋の若主人が、元氣の好い聲を出して急ぎ足に來た。

『嬶貰うたんで調子に乘つてる。』と、焚火の焰に鼻の先きを赤くした若い者は、小聲に蔭口を言ひながら、焚火に背を向けてキビツの方へ行つた。若主人は私に輕く目禮すると、足袋跣足の凜々しい足ごしらへで、焚火なぞには眼も呉れず、跳ねるやうにして、キビツの落ちた上へあがつたりした。

白壁の土藏が三棟も並んで、貧しく瘦せ衰へたこの村のかゝりに、唯一つの景氣を添へてゐる村木屋では、この若主人に近頃花嫁が來てから、一段の美しい趣を添へた。花嫁さんは、町の呉服屋の二番娘で、羽二重のやうに肌理の細い、色白の圓顏で、深い靨が愛くるしさを見せてゐると、村の女房たちの煩いほど噂するのが、耳に滲み付いてゐるけれど、私はまだ見たことがない。いや見たくないと思つてゐる。

『村木屋は金持ちで、田地もドッサリあるから、家を建てるのと食ふものとはお手のものぢや。そいつが呉服屋と縁組みすれや、衣食住の組合が出ける。』と、和尚さんは戲れてゐたが、與

入れの翌くる日、花嫁さんの衣裳開きといふのへ、妙海さんも托鉢の序に寄つて見て、材木屋の母家の八疊の三間を打ち通して、燃え立つやうな赤い總の垂れ下つた黒塗りの衣桁を幾つも幾つも並べたのへ懸け渡して、村中の女房たちを呼んで見せた七荷の簞笥、長持の内容の綺羅びやかさ、素張らしさは、村が開けてからこのかたのことと言ひ囃された。何んしろ裲襠が三組もあるといふやうな衣裳開きは、村ばかりか近在を探しても、何處の衣裳開きにだつてないことで、村の女房たちが、それから二三日茫ッとしてゐたといふも、大仰な話で、

『裾模様の紋付きばツかり五つからあつた。丸帶は何本あつたや知れん。嫁入りの披露の折、嫁さんは衣裳を着更へに五遍も納戸へ入らはつたげな。……町から隨いて來た介添のお婆さんに手を引かれて出たり入つたりするのが、芝居みたいやつたてなア。』と、妙海さんは長く息を吐いて言ひ〳〵した。

私は其の時、其の綺羅びやかに、さま〴〵の花の一時に咲き揃つたやうな材木屋の座敷に、妙海さんの世を棄てた托鉢姿の混つてゐた光景を想像して、可笑しくもあり、痛ましくもあつた。

『ほんまになア、……』と、妙海さんはまた溜息をした。一通りの嫁入衣裳ぐらゐには決して他家に引けを取らぬ親を持ちながら、身體に揃はぬところのある悲しさから、咲きかけた花を凋まして、衣裳開きも昔の夢となつた妙海さんの心を推し量ると、私もまたヂッとしては居られないやうな氣になつた。

『お高にも早う衣裳開きをさしてやりたいなア。……』

冷やかに凝固まつた心で、もう疾くから生涯獨身ときめてゐる私の志は、妙海さんも略知つてゐながら、まだこんな親心の未練を言ふのである。妙海さんはもう自身の舊い夢に醒め果てて、また私の身の上に、新しく哀しい夢を結ばうとしてゐるのか。

『わたへは嫁入しえしまへんがな。……そやけど、何時までもこんな姿で、お寺には居られまへんよつて、今に此處出ますわ。』と、私は自分の耳にも哀れな響きが、鼓膜を打つやうな聲で言つた。

『ほんまになア。……私生兒やいふと、何んで當り前の家で貰はんのやろ。……』

妙海さんが、まともに打ち付けて、私に關はつた心の蟠まりを明らさまに言つたのは、景にも晴にも、この時が始めで、また終りであつた。

『どうでもだんない。……』と、私は心の中でかう思つて、つと座を立つたが、竊と背後を振り返ると、妙海さんは、其の薄墨色の布子の袖で眼を拭いてゐた。次の間では和尚さんが、

『青山青白雲白、……』なぞと、いつもの唸るやうな聲でやつてゐた。

それから間もないことである。何かで外へ出た道の序に、圖らずも材木屋の本宅の前を通ると、木犀の匂ひの豊かな生垣續きの奥深い離座敷の、艶々した縁側に、暖かく日があたつて、一枚だけ開け放たれた貼りかへたばかりの眞白な障子の中には、赤の勝つた友禪の座蒲團が敷かれて、其の前には針箱や、尺や、縫ひかけたものの置いてあるのが、私の眼に映つた。私は一種の慕はしさが、胸の奥から涌き起るとともに、言ひ知れぬ妬ましさをも覺えて、心が搖々するやうであつた。さうして其の友禪の座蒲團の主の現はるゝのを恐れる風で、長くは立ち止まつてゐることが出來なかつた。——

私は今こゝに、猪のキビツの側で、材木屋の若主人を見るなり、この友禪の座蒲團の、床しくもまた小憎らしい光景を思ひ浮べて、固い心

がいよ〳〵固くなつた。この近在では、娘が皆十五六から嫁入を始めて、十七八を頂上に、十九となれば、もう少し賣れ口が遠くなるのだもの。

若い者等は、キビツの上の殘しや土豚を順々に取り除いてから、四五人が力を合はして、編んだ材木の、ねと〳〵した黒い土の中へ減り込んでゐるのを引き起した。人々は皆如何なる獲物が其の下から現はるゝかと、一心になつて見詰めてゐた。

編んだ材木を横へ寄せると、柔かい泥土は寒天の細工物のやうに、筏の形をば編んである藤蔓の結び目まで其のまゝ、繪の如くに型を付けて、眞ん中に敷皮でも敷いた恰好で、大きな猪が土と水平に、横倒しの身體を嵌め込まれたやうになつてゐるのが見えた。

『大けなやつちや、ぼろいぞ〳〵。』と、見てゐる人々は、口々に皆自分の獲物のやうに喜んだ。

『かうなると、釘拔きほどの力があつたかてあかんわい、力を出せや出すほど、土がやらこいさかい、身體が減り込むわなア。』と、首を傾けて頻りに感心してゐるものもあつた。

若い者が二人で、根のあるものを拔き上げるやうに、泥だらけの猪の身體を引き起したが、私はそれを見ながら、あんなことをして若しや猪がまだ生きてゐたらどうするのかと危みつつ、後の方へ寄つたが、猪は生きてゐるどころか、固くしやちこばつて、其の大きな鼻には夥しく泥を吸ひ込み、口には確りと、生命を釣り替へに引き寄せられた稻の穗を銜へてゐた。それでも若い者が戯れに『わアツ』と、言つて猪が生き返つた状に、重いのを躍らして見せると、見てゐた中の子供等は、顔色を變へて逃げかけた。

この時、私の思ひ出してゐたのは、また、四歳の頃和尚さんの卦算に打ち殺された鼠のことと、十二の時死に別れた君江さんのこととであつたが、私の哀しい記憶は、いづれも、重いものに壓し殺されたのであるのも、不思議と言へば不思議でならぬと、寂しく考へたりしてゐた。二度あることは三度あるといふから、これで丁度三遍こんな哀れな生物の最期を見たのだから、もうこれでよいのだらうと思つてみたり、君江さんをば、鼠や猪の畜生と一所にして考へたのを濟まないと思つたりしながら、何故だか、この大きな猪の最期が、あの小ひさな鼠の最期ほどに、私の哀れな心を引き立たさなかつた。

猪は恰好よく四本の足を藤蔓で括られ、それに細い松丸太を通して、若い者が差し擔ひで川へ漬けに行つたが、重石を附けて午後まで岸近くに沈めて置いた上、廣い川原に引き上げて、近くの××村から來た伊三といふ皮剝ぎが、嬉しさうにして料理にかゝつた。

それを黒く取り巻いて見物してゐる村の人々は、休みでもないのに仕事を半日潰された、なぞとぼやきながら、大きな猪が赤い切肉になつて、俎板の上で一斤二斤と竹の皮包みにされる時まで、立ち去りもせずに見てゐた。

都からえらい兵隊さんの大將が、兵隊さんをドッサリ連れて、この奧山へ猪狩りに來た時、當り前に勢子で追ひ立てずに、喇叭を吹き立てて無茶苦茶に騷ぎ廻つたので折角出た猪も、決まつた路へ乘つて來なんだから、此處からなら打てると、火繩銃を控へて要所々々を固めてゐた奧山の獵師は、引き金を引く機會がなくて、兵隊さんが無暗に撃ち立てる火繩無しの便利な鐵砲の音に、猪はいよ〳〵狼狽へ、更に山深く逃げ込んで了つたから、えらい大將は一頭の獲物もないのに業を煮やし、『屹と獲れます。』と約束した村長と獵師の頭とを呼び付け、昔の殿樣のやうに、手打ちにすると言はんばかりに

叱つたので、獵師の頭は、これも芝居に出る獵師か殿樣の前でするやうに、六十近くにもなつて矢張り赤いシャッポ被つてゐやはるえらい大將の前に、平突く這つて詫まつた末、今度は邪魔になるらちや〳〵した兵隊さんをば殘らず山から下げて貰ひ、五六人の獵師だけで、勢子を入れて狩り立ててみたが、喇叭の響と上等の鐵砲の音とに喫驚した獸どもは、皆何處へか逃げ込んで、兎一疋見ることが出來なかつた。そこで獵師等は、またあの赤いシャッポの大將に怒られるのが怖さに、村長さんともいろ〳〵相談した擧句、丁度隣り村でキビツにかゝつた二歳の猪があつたのを幸ひ、それを讓り受けて、冷たい死骸へ、態々二發まで鐵砲を撃ち込み、泥土を洗ひ落すやら、藁灰で温めるやらして、今獲れたもののやうに、えらい大將のギョロ〳〵した眼を晦ましたが、大將の機嫌は忽ち直つて、褒美の金を呉れた上、鼻の穴へ藁灰の入つてゐる猪をば、大將自身に撃ち取つたやうにして、都へ持つて歸つた。…といふやうな猪に關はつた話が、幾つか高聲で見物人の間に語り交された。

私はまたつく〴〵と、村木屋であんなキビツなぞを拵へなかつたら、あの猪は今頃山の奧深くで、樂々と眠つてゐたであらうに、なぞと考へて、一束の稻の穗の喰べたかつたばかりに生命を失うた大きな生物に、今更哀れを催しつつ、そこ〳〵に血塗れの川原を立ち去らうとすると、向ふから君江さんのお母んが、この寒空に、單衣を二枚重ねたばかりの薄汚い姿で、大きな缺皿を手に、探るやうな歩きかたをして、猪の屑肉を貰ひにやつて來た。眼が一層わるくなつたやうで、人の顏も定かには分らぬらしかつた。

其の夜は、村中の家々で、猪鍋の小酒宴が始まつてゐた。家の和尚さんも藥食ひぢやと言つて、貝燒きにじわ〳〵と、村木屋から分けて貰つた猪の肉を樂んで、いたら貝に焦げ付いたのを、猫にも喰べさしたりした。

私には、たゞ寂しく、物哀しい一夜であつた。

十一

美しい花嫁さんに調子付いてゐた村木屋の若主人は、キビツの最初の獲物にいよ〳〵調子付いて、刈る時から其の用意にと扱かずにあつた稻の穗をまた殖やして、キビツを掛け直したが、今度はさう易々と猪もかゝらなかつた。キビツの周圍の柔かい土に、四五歳とも思はるゝ猪の新らしい足痕が、幾つも〳〵亂れて印いてゐるのを見付けた朝なんぞ、若主人は殘念でたまらぬといふ顏をして、

『畜生ッ、此處まで來て、入りくさらん。…何んて阿呆なやつちやろ。』と、舌打ちした。

『若旦那、猪の方から言や、入らんやつは阿呆やおまへんで。…前ど入つて落ちたやつこそ、阿呆だんがな。…あの猪にはおほかた背中に戒名でも書いたつたか知れまへんで。…戒名背負うた猪も尠いもんと見える。』と、隨いて行つた若い者は笑ひ〳〵言つた。

『貴さん、猪の味方するんか、そんならもう今度は獲れても食はさんし、酒も飲まさんぞ。』と、若主人は戲れに若い者の背中を撫つて、『貴さんの此處にも、戒名が書いたれへんか。』と笑つた。

あんまり猪がかゝらないし、もう足痕さへ印くことがなくなつたので、若主人を始め皆キビツのことを忘れてゐる頃になつて、三日に一度ほどより巡廻して來ない警察から村木屋へ沙汰があつて、主人に出頭せよといふ權柄づくの紙片れが來たので、若主人が往復六里の惡い路を、一日潰して本署まで行つて見ると、二時間も冷たい腰掛けの上に、火のない鐵火鉢の赤

錆びたのと睨みッこをさした末、受付にゐた早口の巡査から、『あのキビッちふもんは危險ぢやから、夜だけかけることにして、晝間は決して落ちんやうに、仕掛けを止めて置け。』と言ひ渡された。

『何んや阿呆臭い、あれだけのことなら、差し紙持つて來る手間で、口で言うていたら分るやないか。…呼びに來て、呼び出されていて、戻つて來て、言うた通りにするまでに三日かゝるがな。…あゝせんと、貰うてゐる月給に値打ちが付かんのかなア。』と、若主人は家へ歸つてから、皆んなと一所に大笑ひをした。

私は暇があると、坂路を下りて、まだ落葉のがさ付く山の裾を廻り、此處だけは株伐りもしなければ、勿論麥も蒔いてない材木屋の田へ下り立つて、キビッの周圍をぶら／＼歩きながら、さま／＼のことを考へてゐた。

娘とも妻とも付かぬ俗體の姿で、『不許葷酒入山門』とした苔の深い石の立つた寺を度々出入りするのに氣が咎めるので、一日に一度ときめて、キビッの邊まで運動に行くことにしたのである。

つく／＼と見てゐると、キビッには、落ちたら人の生命でも取るといふ力があるので、それだけの威力が具はつてゐるやうに思はれてならなかつた。其の時私はまだ、晝間だけ落ちないやうに止めて置け、といふ警察の沙汰のあつたことを知らなかつたので、何處となく嚴肅な姿をして、内部に死の魔力を蓄へてゐるキビッには人を惹き付ける働きがあつて、いつまでもヂッと見詰めてゐると、ふら／＼と其の下に入つて、黄金色の稻の穗を引ッ張つてみたい氣になるやうに思はれた。

そんな時、私はハッとして、キビッの魔力を避けるやうに、二三間も飛び離れたが、またそろ／＼と近寄つて行つて、このキビッの下で男と情死したらどうであらうか、なぞと、あらぬことを想像してもみた。

心中しようにも、私には相手がない。さう思ふと、私は譯もなく哀しかつた。今はもう妻子もある貞之助はんでも構はない、一所に死んで吳れるなら、昔の幼稚な戀心に還つて、あのキビッの下で、二人が手に／＼、あの稻の穗を摑んで死ぬがなア、と思つたり、さうかと思ふとまた、まだ若い身空で、爺染みて燻つてゐる貞之助はんなんか厭だ／＼、あの元氣いッぱいで、撥ち切れさうな、――人間が面白くてたまらぬ――と言つた風の材木屋の若主人が、私と一所に死んで吳れたら、…と、途方もないことまで考へ出した。

材木屋へは、其の後また警察から呼び出しの巡査が來たので、若い者を代理に出すと、今度は署長の口から、『危險に付き近寄るべからず』と書いた札をあのキビッの前へ立てて置けと命ぜられた。

開帳札のやうな形に、大工を呼んで拵へさした木札へ、其の通りに墨黑々と書いて、キビッの正面へ立派に押し立てたのを見ながら、若主人は笑つて、

『猪に字が讀めたら、もうかゝれへんなア。…』

と、さも感心してゐる風に言つた。

キビッが、晝間は落ちないやうに止めてあるといふことが知れ渡つてから、餌にかけてある稻の穗は、ちよい／＼無くなるやうになつた。眞逆猪がそれと知つて、晝間に稻の穗を食ひに來よるんぢやあるまい。なぞと戯れてゐるものもあつたが、扱いで米にすれば一升の餘もあらうといふ大束の稻の穗だから、乞食が盜むのであらうといふ想像に一致して、よく氣を付けてゐたけれど、稻の穗はそれからも盜まれたが、盜人の影を一度も見ることは出來なかつた。

『可笑しいなア。…』

『不思議やなア。……』

『そやけど、何んぼ落ちんやうに止めてあるいうたかて、あの下へ入つて、稲の穂を引ッ張るのは氣味がようないやろ。……俺ア食はんとゐたかて、そんな恐ろしいこと出けんがな。』なぞと、材木屋の人たちは言ひ合つてゐた。

もう貯への稲の穂はこれで仕舞ひや、といふのをかけた翌くる日の朝、久し振りにキビツが落ちてゐたので、それを見た若主人は小踊りして駈け付け、殆んど若い者の手を假らずに、石や土豚の、もう中ぶるにこびり付いてゐるのを退け、雨水の滲み込んだ重い筏を引き起して見ると、下に無慘な潰れ死をしてゐたのは、單衣を二枚重ねて、皺だらけの手足をしてゐる四十女であつた。それが、あの君江さんのお母んであるとは直ぐに、判らなかつた。

十二

私はもう、其の後のことを長々と書く氣にはなれない。……思ひたくも考へたくもないのが、二十四にもなつた今の私の心である。

君江さんのお母んの死に就いては、其の時村中の人々が、格別驚いた顔もせずに、いろ〳〵と噂をした。

『これまで稲の穂を盗んでたのはあいつやで、食ふもんがないとこへ、キビツが落ちんやうに止めてあるのを知りよつて、盗みに來よつたんや。……』

『そやけど、あのわるい眼をしよつて、知れんやうによう盗みに來たもんやなア。……』

『そら隨分暗うなつてから、落ちるやうにかけたこともあるさかいなア。……』

『俺ア、そやないと思ふなア。どうにも食へんし、眼はわるいし、自暴くそになつて、首吊りする代りに、キビツで死によつたんやあろまいか。……稲を盗んだやつは別や知れんで。……』

私は、この終りの説に從ひたいと思つてゐるのである。

寺を出た私は、都へ流れて來て、女書生の仲間に入つたが、二年ばかりの勉強で、少し英語が讀めるやうになつたから、それを元手に、これから何かしたいと思つてゐる。しかし、考へると、痛ましく、悲しい、ことばかりが胸いつぱいで、何一つ仕出かしさうには思はれない。

私の心はどうしても、冷かに凝固まつて了つて、假しやどんな春風が吹き流れようとも、それが溶ける時節は來ないであらう。

さりとて、寺へ去んで、尼になる氣にもなれないのである。

英語のパンフレットで讀んだ、Law And Authority といふ本に、私は今一番惹き付けられてゐる。もう私生兒なぞといふ紙の上だけの言葉は、眞個に何んとも思つてゐやしない。

別のパンフレットの中にあつた、確か同じ著者の、『生存の拒絶』といふ言葉も、私は好きでたまらないのである。

母子が十年おきに、同じやうな死にかたをした、君江さんとお母んとのことを考へると、私はあのお母んが、不完全なる共同生活に對して、宣戰する代りに、さッぱりと、生存を拒絶したものと思ひ込んでゐる。

けれども、私には、生存を拒絶する勇氣が出ない。——

石川五右衛門の生立

一

文吾（五右衛門の幼名）は、唯一人畦の小徑を急いでゐた。山國の秋の風は、冬のやうに冷たくて、崖の下の水車に通ふ筧には、槍の身のやうな氷柱が出來さうであつた。布子一枚で其の冷たい風に慄へもしない文吾は、實つた稻がお辭儀してゐる田圃の間を、白い煙の立ち騰る隣り村へと行くのである。

隣り村には、光明寺といふのがあつて、其處の老僧が近村の子供たちに手習ひをさして實語教なんぞを讀むことを教へてゐる。文吾も今年の春から其の寺へ通ひ始めたのであるが、朝寢坊の癖があるので、いつも遲れ勝ちで、朋輩が雙紙を半分も習ひ終つた頃、文吾の小まちやくれ姿が庫裡の入口に現はれるときまつてしまつた。

「文吾はん、早う起きいしいや。」と、母は朝の支度が出來た時、文吾の枕邊に立つて、優しく呼び起すのであるが、文吾は微かに眼を見開いて、母の世帶疲れのした顏を見守つたばかり、また眼を閉ぢて、スヤ〳〵と眠つてしまふ。こんなに眠がるものをと、母は足音を忍ばせつゝ、勝手の方へ立つて、井戸端に絞り上げてある洗濯物を竿に懸けてから、御飯は文吾が起きてからと、お膳を片寄せて置いて、板の間につくねてある賃仕事の縫ひ物にかゝらうとしたが、幾ら何んでも、あんまり遲い。もうお寺通ひの子は殘らず行つてしまつて、表には子守唄が、のんびりと聞えてゐる。文吾は狸寢入りをしながら、母のすることを一つ〳〵手に取るやうに、座敷の寢床の中で知つてゐるのである。

ねんねこ、さんねこ、
酒屋の子。
樽にもたれて、
寢た心。
こい〳〵。

子守唄は文吾の耳へもハッキリと聞えて來る。こんな、眠りを誘ふやうな唄をうたはれても、文吾は更に眠くないのである。もう起きてやらうかと、小さな身體をもぐ〳〵さしてゐる枕頭へ、母の足音が、遠くから響くやうであつた。また起しに來たのだなアと思ふと、文吾は起きるのが厭になつた。さうして、ヂッと眼を瞑つて熟睡を裝うてゐた。

ねんねこ、さんねこ、
酒屋の子。
樽にもたれて、
寢た心。
こい〳〵。

さらに近く子守唄が、窓の外で聞えた。母の足音は、文吾の枕邊まで來て、はたと止まつたが、今度は「文吾はん、起きいしいや。」といふ聲も聞えないで、たゞ側に近く人が立つてゐるといふ氣色を、文吾の狸寢入りの魂に感じさせるだけであつた。

ぼつり。……

雨の日に、この荒れた家の天井から落ちるやうな雫が、文吾の頰に垂れかゝつて、冷りとした心持ちは、文吾の全身をビク〳〵と慄へさせた。文吾はまた細く眼を見開かうかと思つたが、ヂッとこらへて、頰にかゝつた雫の、全身に滲み渡るのを感じつゝ、何か劇しい藥でも付けられて、肉を爛らし、骨を燒く苦みが、今にも

やつて來るやうに思はれてならなかつた。頬にかゝつた雫が、母の涙であることを、文吾は直ぐ悟つたのであるが、母の涙には、恐ろしい毒でも混つてゐるやうに思はるゝことがあつた。愛兒の枕頭に立つて、其の寝顏に見入つてゐる母の爲めに、文吾はいつまでも狸寝入りをしてゐなければならないやうな氣がした。

文吾が寺へ手習ひに行くのは、毎朝こんな風で遅れるのであつた。お師匠さんも、もう小言を言はなくなつた。朋輩もあまり待たされるので、誘ひに來なくなつた。文吾の机は、みんなが雙紙を半分から習つてしまふまで、毎朝必ず空であつた。文吾が來るまでに、欠伸の一つや二つは、お師匠さんの齒のない口から漏れた。

二

寺へ手習ひに行く道で、文吾は大きな柿の木に、京紅で染めたやうな、眞ッ赤の御所柿が、枝もたわゝに熟してゐるのを見た。

『可味さうだなア。』と、文吾は思つて、唾液を呑み込み呑み込みした。「喰べたいなア。」と思つて立ち止まつた。それが爲めに、寺へ行くのが遅れた上をなほ遅れた。

『一つ取つてやらうか。』と思つて、身の輕い文吾は、其の柿の木に登りかけた。人が見てゐやしないかと思つて、一番下の枝に足をかけながら、方々を眺め廻したが誰れも見てゐるものはなささうであつた。文吾の小ひさい身體は、夥しく實つた御所柿の中へ潜り込むやうにして入つて行つた。一匹の蟻をば砂糖壺の中へ投げ込んだやうに、文吾は可味さうな柿の實に包まれてしまつて、まご〳〵した。どれから捥り取らうか、と手のやり場に困つた。

さうして、一番小ひささうなのを一つ取つて袂へ入れた。この時どうして、一番小ひささうなのへ手が行つたのか、文吾は後で考へてみて、どうも解らなかつた。一生解らなかつた。五右衛門になつてからも、この折の心持ちを考へてみて、幾度首を傾けたか知れなかつた。

忙しい手付きで、小ひさな柿を一つ取つて、袂へ入れると、次ぎにはまたどれを取らうかと、手がまごつき始めた。左の手にシッカリと枝を握つて、右の手では、近まはりの柿の實を撫で廻した。何んだか捥り取るのが可哀さうにも思はれて來たのである。

『どいつちや。…柿盗人、奴盗人。』

大きな聲を、眞下から鐵砲丸か花火のやうに打上げられた文吾は、足を踏み外さんばかりに驚いたが、兩手でしッかり枝に捉まりながら、柿の實の間から下を覗くと、弓矢を持つた獵師が、眞ッ赤な口を開いて立つてゐた。あの大きな口の中へ、柿の實を一つ投げ込んでやりたいと思ひながら、文吾は默つてゐた。

『どいつちや。人んとこの柿を盗みさらして。…さア下へ降りて、取つた柿を出せ。降りやがらな、打つぞッ。』と怒鳴つて、獵師は弓に矢を番へつゝ、キリ〳〵と引き絞つた。それでも文吾は動かなかつた。打つなら打つてみいと思つて、動かなかつた。すると、獵師の引き絞つた滿月のやうな弓は、八日頃の月くらゐに縮つて、弱々しいひよろ〳〵矢が、びゆうとも音せずに飛んで來ると、文吾の眼の前の、この木では一番大きいと思はれる實に、ぐさとばかり突き刺さつた。味なことをする獵師だと感心して、文吾は木から降りてやる氣になつた。

初めは喫驚しても、文吾の小ひさな度胸は、もうスッカリ据わつてしまつた。矢でも鐵砲でも持つて來いといふ氣になつた。一番下の枝まで傳うて來て、其處から草原へ飛び降りると、獵師は持つてゐた弓矢を投げ棄て、手甲のかゝつた大きな手で、ぐいッと文吾を引き据ゑた。

『こら、やい。この柿、何家の柿やと思うてけ

つかる。』
獵師の罵る聲は、雲に響くばかりに高かつた。
文吾はいよ／＼度胸を据ゑてしまつて、もう少しの恐怖もなかつた。
『さア取つた柿を返せ。返したらお上へ突き出すことだけは宥してやる。』と、獵師は稍靜かに、恩に着せるやうに言つた。
『返さん。…俺の取つた柿は俺のもんや。…お前の腰に提げてる鳩がお前のもんなら、俺の袂に入つてる御所柿は俺のもんや。』
文吾が落ち着き拂つて言ふ言葉と、小まちやくれた態度とは、實に／＼踏み潰してやりたいほど憎らしかつた。
『何んぢや、この鳩が俺のもんなら、この柿は貴さまのもんぢや？　阿呆吐かせ。』と、獵師は呆れ返つた顔をした。さうして餘りな圖々しさを憎むのあまり、文吾の襟元を攫んで突き轉ばした。其の途端に袂の柿がころ／＼と草原に轉がり出た。選りに選つて見窄らしい小ひさな柿なのを、獵師も意外に思ふ風で見てゐたが、更に文吾を捻ぢ伏せて、兩の袂から、懐中までを檢めた。
『何んぢや、たつた一つか。』と、獵師の言つた言葉は、文吾の耳へ嘲笑はれたやうに響いた。

もつと大きなやつを、ドッサリ取つてやれば好かつたと、文吾は殘念でたまらなかつた。さうして、彼れは怨めしさうに、大きな御所柿の木を見上げた。

三

それから文吾は、夜になるのを待つて、其の御所柿を取りに行くことにきめた。しツとりと夜露に濡れた柿の實の風味は、また格別であつた。
『これ貰うて來たんや。』と言つて、大きなのを二つばかり、母に持つて歸つてやると、柿の好きな母は、何も知らずに、ほく／＼喜んで、研ぎ減らした小刀で、薄く細く長く皮を剝いた。都は三條の大橋の欄干に凭れて、白い玉を溶かしたやうに美しい水の上まで、剝いた柿の皮を屆かしたといふのが、母の自慢話の一つであつた。若い頃都で御殿奉公をしてゐた母の言葉には、京訛りが殘つてゐた。
『關白さんの上る柿や。』
さう言つて、母はもく／＼と淡紅色の御所柿の一片を前齒で嚙んでゐた。奥齒の一つもない母は、馬のやうに前齒でばかり喰べるので、嚙んだものが膝の上へぽろ／＼とこぼれ落ちた。

あんまり毎晩、見事な御所柿を持つて來るので、母はそろ／＼怪み始めた。文吾はそれを知らないのではなかつた。母の心を疑はせるといふことが、文吾には何んとなく面白いのであつた。
『文吾はん、あんたこの柿を何處のお方に貰うといなはるね。こないによう毎晩呉れはりまんな。』
母は少しむづかしい話になると、いつもかうやつて、目上に物を言ふやうにして、文吾に對するのであつた。そら來たな、……と、文吾は思つた。
『人に貰へやしまへん。天から授かりまんね。』
文吾はかう言つて、ニヤリと笑つた。それがどうして、七歳や八歳の幼いものの口から出る言葉かと、母は呆れてしまつて、文吾の幼顔に浮ぶ不敵の面魂を見詰めてゐた。さうして、急に差し俯向くと、文吾の小ひさい膝の前にひれ伏して、めそ／＼と泣き出した。母の方が幼い者のやうになつてしまつた。
けれども、母は滅多に外出をしないで、家で賃仕事をしてゐるから、隣り村の大きな御所柿の木のことは知らなかつた。木に生つたのを盗んで來るのか、何處かの家に藏つてあるのを

撰つて來るのか、ハッキリとは分らないが、どうしても正しい品ではないと思ふと、母は今まで喰べた美味い御所柿を、殘らず吐き出したいと思つたのであらう、いきなり首を擡げると、前にあつた二つの大きな御所柿を取つて、表の方へ投げ付けた。さうして、

「文吾はん、何んであんたは、そんなさもしい心になつて呉れたんや。」と言ひ〳〵、小ひさい膝を、皺だらけの手で搖り動かした。

「阿母さん、柿はあゝやつて、自然に生つてるんやおまへんか。人間に喰べさせようと思うて生つてるんやおますまい。あの井戸の水が人間に飲まれようと思うて湧くのやないのと同しこッちやらう。柿を取つて喰べるのが盗人なら、井戸の水を汲んだり川の水を掬うたりして飲むのも盗人や。」と、文吾の幼い智慧は、えらいことを考へ出して來た。

「無茶言ひなはるな。……川の水と柿とが一緒になりますかいな。」と、母は百結衣の袖でそつと涙を拭いた。

「取つて喰べるのが惡いのんなら、人の見る前で生らん方がえゝ。生るよつて喰べるのは、當り前やないか。これは俺の柿や言うて、自分一人のもんと勝手にきめたかて、柿の方では、そんなこと知りよれへん。持つてる人が木へ登つて捥らな、ほかのもんでは堅うて取れんし、また木へも登れん、よしんば登つて柿を取つて來ても、持つてる人やなけれや、皮も剝けんし、齒も立たんといふのんなら、ほんまに其の人の持ち物ときめることが出けるけど、誰れでも登らうと思うたら、其の木へ登れるし、持つてる人の手でなうても、捥ると取れるし、取つて來たらかうやつて、誰れにでも喰べられるんやもん、これは俺の柿やときめるのは譃や。誰れの柿でもない、柿は柿の柿や。そやなかつたら、皆んなの人の仲間持ちや。」と、文吾は母の前に片眦怒らして、小憎らしいことを言つた。

「無茶ばつかり言つて、そんなら文吾はん、あんたはこれから、人のもんも自分のもんもない、欲しなつたら、何んでも取りなはるんか。」と、母は涙の眼を輝かして、文吾の小ひさな膝に詰め寄つたが、また忽ち崩れるやうにひれ伏して、わつと泣き出した。

四

「文吾はん、あんたはお父つあんの顏を知らんのやなア。……」

夜も更けて、母子枕を並べて寢てゐる時、母はこんなことを言つた。文吾がよく眠つてゐると思つて、獨言のやうに言つたのを、折節眼を覺ましてゐた文吾は、「うッすら覺えてる。顏の平たい、大けな人やつた。」と、寢惚け聲でかう言つて、何か喰べてでもゐるやうに、口をむにや〳〵さした。

「あゝ、あんた起きてなはつたのか。」と、母はいゝきまりわるさうにして、向うへ寢返りをした。其の途端、蒲團が狹いので、足がドタリと疊の上へ滑り落ちた。この村で疊の敷いてあるのは、この石川の家のほかには、庄屋ぐらゐのものであつた。家は荒れ果てても、破れ疊に昔榮えた名家の跡を見せてゐた。疊の敷いてある家と言へば、それがどんなに破れてゐても、人は其の家を敬ふことを忘れなかつた。古疊の上へ足を滑らせると、冷りとした氣持ちが、得も言はれぬ感じを母の胸に與へて、痩せても枯れても、石川の家には、まだ疊が敷いてあるといふ誇りが、全身に漲るのであらう、母は古疊の上へ足をバタ〳〵させてゐた。

「文吾はん、あんたの四歳の時に死んだお父つあんはなア、あれは……」と、母は向うをむいたまゝ言ひかけて、もう泣き聲になつた。文吾は母がまた何を言ふことかと、頓着もしないで、も

ら御所柿にも飽きたから、明日は一つ、手習ひに行つた時、お師匠さんの菓子箪笥にある饅頭を喰べてやらうと思つて、頻りに其の方法を考へてゐた。喰べたくなるのは自然だ、欲しいものを取つて喰べるのは當り前だ、といふ考へは、文吾の魂魄に深く〲植ゑ付けられて、なか〲拔き去ることの出來ぬものになつてゐる。

『文吾はん……』と、母はまたくるりと此方へ寢返りをして、疊の上へ滑り落した足をバタ〲やつてゐる。

『阿母さん……』と、文吾も夢のやうな聲で呼んだ。

『文吾はん、あんたのお父つあんはなア。……』と言ふなり、母はむツくと起き直つて、床を這ひ出し、文吾の側へ寄つて來て、ひしとばかりに其の寢姿に取り付いた。

『文吾はん、あんた、死んだお父つあんの代りになつて、わたしの言ふこと聽いとくれ。』と、母の聲は、涙とともに、塞いであつたものを取り除いたやうに溢れ出た。――

文吾の父は、由緒ある武士石川左衞門の後裔で、先祖代々伊賀の郷士であつたが、だん〲に家が衰へて、多くあつた山林田畑も賣り拂ひ、其の日の米や鹽にも困るやうになつた。しかし、酒だけはどうしても缺かすことが出來ないといふので、母が瓶子を抱いて、遠い山路を濁酒など求めに歩いたものであつた。何處の酒屋でも、石川と言へば相手にしなくなつてゐるのを、無理やりに瓶子を突き付けて、推し込んで行かねばならぬ母は、どんなに辛いことであつたらう。

『酒がないのは、生命がないのも同じことぢや。』と父は毎朝必ずさう言つて、母に酒の才覺を促したさうである。

酒のほかにもう一つ、父の求むる心の甚だ強いものがあつた。それは子だ。『男の子が一人欲しい。仕方がなけれや女でもよい。』と、父は熱心に考へてゐた。酒と子供……それが父の求むる二つの大事なものであつた。しかし、酒は母の苦心によつて、毎晩のこなからは缺かさないが、子供だけは、母一人の力でどうにもならなかつた。

『石川の血統が絕える。……』と、父は毎日溜息ばかり吐いてゐた。

ところが、或る日、どうしてもこなからの濁酒の手に入らぬことがあつた。母は八つ時の頃から、草履の尻を摺り切らして、山一つ越えた向うの里まで行つたが、酒を借して呉れる家がなかつた。家へ歸ると膳の上に瓶子のないのを憤つた父は、『もう生きてゐられん。酒がなけれや死んでしまふ。』と、狂氣のやうに駄々を捏ねる。

もう當てはないけれど、父の憤りをヂッと見てゐることは出來ないので、母はまた瓶子を持つて外へ出た。五月の空はどんより曇つて、村の家々は、燃ゆるやうな青葉の匂ひに包まれてゐた。破れ草履を脫ぎ棄てたので、足の裏が冷たく、濕ひをもつた土に吸ひ付くやうであつた。

酒のありさうな家へは、皆行つてしまつたので、この上は神の力に縋るよりほかはないと思つて、母は毎朝跣足まゐりをしてゐる隣り村の平井明神の森へと志した。神の青葉は人の青葉よりも更に美しかつた。それが夜だから、こんもりと雲か山かのやうに見えてゐる中へ、鳥居の下を通つて進んで行くと、燈明もない拜殿の中は、洞穴のやうに思はれた。

近付くほど餘計に願ひ事が叶ふかと考へられるので、階段を足で探つて、砂だらけの板の間へ上つて行くと、暗に馴れた眼は、眞正面に据ゑてある八足臺の上に注がれて、木の間を漏る星明りに映し出された錫の神酒瓶子が一對、母

を引き寄せるやうにして立つてゐた。母は覺えず手を伸ばしかけたが、神さまのものを勿體ないと思つて、慄ふ手を引ッ込めても、其の手はまたいつの間にか伸びて、錫の瓶子にかゝつてゐた。殆んど無意識に、其の瓶子を振つてみると、酒か水か、トブン〳〵と音がした。夫の喜ぶ顏を想ふ嬉しさに、勿體なさも忘れて、瓶子の口に鼻をあててみると、芳醇な匂ひが、ぷうんと來た。

『平井大明神……との賜物を頂いて、夫を喜ばせます。それからどうか子供を一人お授け下さりませ。』と、母は覺えず大きな聲で禱つた。

其の時、何處から現はれたか、白衣を着けた大きな男の姿が、母の眼の前にあつた。母は『きやツ』と叫んで、氣絕せんばかりに驚いたが、其のかよわい手を摑んで、ぐいッと引き寄せた白衣の男は、母の耳に口を寄せて言つた。

『わしはお前に、美い酒を授けてやつた。これからえらい子供を授けてやる。……』

それは、ほんたうに神の聲のやうであつた。——

此處まで語つて、母はあとを言ふことが出來ないで、泣き喚りになつた。

『文吾はん、わたしはなア、お父つあんを喜ばさうと思うた餘り、お酒と子供が欲しさに、言はうやうのない大きな罪を犯したんや。神さんのお宮を穢したんや。お父つあんが生きてゐるうちに、何遍白狀しようと覺悟したか知れんが、言ひそゝくれて、臨終の床にも間に合はんことになつた。お父つあんの代りに、文吾はん、あんたに白狀したのやよつて、どうでもしてわたしを責めとくれ。』と、母の言葉は、矢張り涙とともに溢れ出た。

けれども、それから母がまた涙とともに言ふところに據ると、文吾はどうも、自分のほんたうの父は、其の暗黑の中から出た怪しい白衣の男だと思はれた。『あんたの四歲の時に死んだお父つあんはなア、……』と、母が泣き顏をして言ひかけては、後を止めてしまつた言葉の破片が殘りなく拾はれたやうな氣がした。

都にまで響いた大盜賊の何某が、六十六部に姿を扮して、長いこと平井明神の拜殿に隱れてゐたといふこと。……

父は文吾を、平井明神の申し子だと信じ切つて、有り難がつてゐた。自分の面ざしに少しも似てゐなければ、性質のまるで反對な文吾をば、却つて餘計に可愛がつた。……

文吾は、母の口からこんな風の痛ましいことばかり、いろ〳〵と聽かされて、深く自ら心に決するところがあつた。

五

寺へ手習ひに行く時、文吾は街道の煮賣屋の前を通るのが厭であつた。畦を渡り、小徑を拔けて、少しでも近い方を行くのであるが、其の煮賣屋の前だけは、どうしても通らなければならなかつた。一束の杉の葉を吊した軒下に、「名物にしん蕎麥」といふ字が、障子へ大きく書いてあつて、其の奧に主婦の蒼白い顏が、ふは〳〵と水にでも浮いてゐるやうに見えてゐた。薄暗いところで、黑い着物を着てゐるので、顏だけがくツきり現はれて、身體は煮物の臭ひの漂ふ中に暈されてしまつた。

冬の寒い盛りにも、煮賣屋の表は障子が一枚だけ開いて、街道を人が通る度に、蒼白い主婦の顏は、きツと此方を見た。足音がしないでも、人さへ通ると、主婦はそれを其の低く平べツたい鼻で嗅ぎ取るかのやうに、直ぐ感知して、此方を向いた。文吾が藁草履に砂埃りを立てて通つても、深沓の破れたのに泥を踏んで行つても、煮賣屋の主婦の窪んだ濁つた眼は、決してそれを見遁さなかつた。

文吾はもとよりこの主婦が、文吾の通る時だけにさうするのだとは思つてゐなかつた。自分ばかりが主婦に注目されてゐるのではないことをよく知つてゐた。日がな一日、其の煮賣屋の店の奥に坐り込んで、鰊蕎麥や焼豆腐の煮物の臭ひを嗅ぎながら、まるで關所の役人か何かのやうに、一々街道を往來する人に目を着ける。それはもう主婦の心では、見たいといふことを離れて、人さへ通れば、たゞ何かなしに表を見るのだ。人の足音さへ耳に入ると、眼はもう往來を向いてゐる。それがだん／＼練れて來ると、もう足音なんぞは聞えなくとも、人さへ通れば、眼の球の方が先きにそれを知つて、背後向きに坐つてゐても、くるりと首を捩つて、往來を見るやうになつた。それで、今日はこの往來を幾人ぐらゐ人が通つたかといふことを、主婦はちやんと知つてゐて、客が來ると、通つた人の數や種類を大聲に話してゐた。文吾も時々それを小耳に挾んで、大和へ減え、伊勢に通ふこの街道筋が、日によつて通る人の數に、大層な違ひのあるのを知つてゐた。

文吾は煮賣屋の主婦が、自分の通る時ばかり氣を配つて此方を見るのではないことを知つてゐながら、主婦にジロリと自分の姿を見られるのが、厭で厭でたまらなかつた。どんなに足音を忍ばせて歩いても、杉の葉の吊してある其の軒下に文吾の影がさすと、主婦の蒼白い顔は、きッと此方を見た。曇つた時や、雨の降る日でも、主婦は決して文吾の通るのを見逃さないから、それが文吾は憎らしくてたまらなかつた。酒を賣るしるしに軒へ杉の葉を吊しておいても、備へた樽はよく空になつてゐた。杉の葉も黄色く枯れかゝつて、焚き付けになりさうであつた。其の杉の葉を指さして、空樽に失望した酒好きの旅人が、主婦を談じつけてゐる頃に、文吾は今日こそ主婦に姿を見られまいぞと思つて、小走りに駈け抜けようとしても、主婦は一心に何やら喋舌りながら、客と睨み合つてゐた眼をば、稲妻のやうに文吾の方へ向けることを忘れなかつた。『さアしまつた。』と文吾は思つた。

どうかして、主婦に見られないやうに、あの杉の葉を吊した店の前を通り過ぎることは出來ないものかと、八歳の文吾が小ひさい魂魄は、いろ／＼に苦勞を始めた。或る時は、餘りに憎らしくなつて、自分を見るあの主婦の眼を、突き刺してやらうかと思つて、文吾は母の使ひ古した錘を一本持ち出したことさへある。毎日絲を紡いでゐる母は、絲紡ぎ車から外した錘の古いのを、危いからと言つて、高い棚の上へ載せてゐた。踏臺を用ゐても、文吾はまだ其の棚へ手が届かなかつた。ところが棚の領主のやうにして、塵埃を蹴立てつゝ暴れてゐる鼠が、錘を一本轉がし落したのが、ぐさとばかり古疊の上へ突つ立つた。文吾は急いで駈け寄つて、其の錘を取り上げたが、錆びてはあつても、尖つてゐて、錐より鋭かつた。其處へ母が來かゝつたので、文吾は手に持つた錘を隱す暇もなく、『鼠ッ、鼠ッ』と棚を指さして叫ぶと、母は慌てた様子で、上を仰ぎ見たから、其の間に文吾は錘を懷中へ忍ばせて了つた。

『文吾はん、鼠が何んにも落せしまへなんだが。……』と言ひ／＼、母はあたりを見廻したが、古疊の上には、蟲齒が痛むとよく紙に包んで痛い齒に嚙ませられる鼠矢が五粒ほど、黒くバラバラとこぼれてゐるだけであつた。

『いゝえ、何も落せしません。……其の齒痛の禁厭だけだんがな。』と言つて、文吾は錘を隱した懷中を押へつゝ、つぽんと立つてゐた。母は文吾の言葉を疑ふ様子もなく、昔榮えた家の面影を殘してゐる廣い裏庭の、崩れかけた土塀の側へ行つて、丹念にしいし張りをつゞけた。張つて糊を引いてゐるのは、文吾の單衣にな

る繼ぎ接ぎだらけの大和木綿であつた。初夏の空は淺緑に晴れて、山も里もキラ〳〵と輝き渡つてゐた。

六

山城へ行き、近江へ拔ける旅人は、文吾の育つた村の街道を歩かない。大和から伊勢へ、伊勢から大和へ、伊賀路の物靜かな麥秋の頃を、六十六部が多く通つた。

『あゝア、また六部の鉦が鳴るわいな。……』と、母は瘦せた胸を、洗ひ晒した澁染めの單衣の上から押へながら、今にも秋ならぬ時雨の來さうな顏をして、六部の鉦の遠ざかり行くのに耳を澄ましてゐた。一人の六部が行つてしまうて、また一人の六部の鉦が、杉の葉を吊した煮賣屋の方から流れて來た。

『あッ、……』と叫んだ母は、兩手で耳朶に蓋をした。六十六部の多く通る麥秋の頃には、文吾の家の表戶が閉め切つてあつて、六部に留守だと思はせるやうにしてあつた。報謝を受けようとする鉦の音が、いつまでも家の前に鳴つてゐるのを避ける用意だと、文吾は去年あたりから氣付いてゐた。

六十六部の鉦が、夕暮までも鳴つてゐると、母は頭痛を起して、奧の納戶へ倒れ込んでしまつた。其處の長押には、槍と薙刀とをかけた跡があつて、得物は疾くに失はれてゐた。

槍があつたら、其の槍で、あの煮賣屋の婆の眼を突いてやるのにと思つて、文吾は桐を隱した懷中を押へつゝ、表の往來へ駈け出して行つた。煮賣屋の前を歩いて、婆がいつもの通り此方を見よつたら、いきなり飛び込んで行つて、其の目尻の下つた兩眼を突き刺してやらうと、文吾は其の時、ほんたうにさう考へたのであつた。

文吾の眼からは婆でも、煮賣屋の主婦は、まだ三十七八の殘りの色香を、櫻の若葉に留めてゐるほどの女であつた。年中血の道で、蒼白くふさいでゐても、琵琶をとつては、平家の一曲に村人の淚を唆ることもあつた。この日は茜染の單衣若々しく、背中を往來に見せて坐つてゐたが、人が表を通る毎に、細い首を捩ぢ向けて、眼の光りを投げかけることは、一人々々に怠らなかつた。文吾がこの煮賣店に近づいた時は、何處で棄てられたか、見馴れぬ子狗が一頭、鼻を土に摺り付けて、物の臭ひを嗅ぎ廻つてゐた。懷中から桐を取り出して、路傍の缺け瓦に尖端の銹を磨りおとした文吾は、白く光る針のやうな銳さに見入りながら、これで煮賣屋の婆の眼をば、飛び込んでたゞ一突きと、氣が狂ふたやうに、草履の足音もバタ〳〵と、急ぎ足に通りかゝる途端、あの子狗がくん〳〵鼻を鳴らして、煮賣屋の土間へ入つて行つた。さうして、其處にあつたお客からの預り物の袋の端を銜へて引つ張つたので、主婦は其の方へ氣を取られて、この時ばかりは、店の前を態と荒々しく通る文吾の方に眼が屆かなかつた。

きつと此方を見るであらう、見たらこの桐であの厭な眼を一突きと、後の難儀も思へないで、飛んだことを考へてゐた文吾は、ほツと息を吐きつゝ、首尾よく煮賣屋の主婦の眼から遁れて、あの店の前を通ることが出來たのを喜んだ。

それから每日々々、文吾は何か知ら居合はせた子狗なり、雞なり、雀なり、或る時は空の鴉なりを種につかつて、其の方へ煮賣屋の主婦の注意を惹き付けておいて、自分だけは其の關所役人のやうな目尻の下つた眼から見遁されることを工夫し始めた。うまく行く時もあるし、しくじることも多かつたし、寺で敎はる手習ひよりも、文吾には煮賣屋の前で身を忍ぶ工夫を練るのが面白くなつて、うまく行つた日は終日氣持ちがよく、しくじつた時は、腹が立つて仕樣がなかつた。しかし、もうあの銳く尖つた桐

で煮賣屋の主婦の眼を突き刺さうなぞといふことは考へなかつた。

朝遲いにきまつてゐた文吾が、此頃は早く來るやうになつたので、お寺の和尚さんも、寺子朋輩も、『これやえらいこツちや』と思つた。早く來ると言つても、矢ツ張り文吾が一番遲かつた。しかし、今までは、みんなが雙紙を一面習ひ終つた頃に、さして急ぎ足でもなく入つて來た文吾が、まだ墨を磨つてゐるうちに來ることもあるやうになつた。一同が机の前に頭を揃へて和尚さんにお辭儀してゐる時に文吾の姿が見えるのは、餘ッぽど早いのであるが、遲くとも雙紙を二三枚習はぬうちに、文吾の机にも硯や筆や墨が取り出されてあるやうになつた。

或る時はまた文吾が、何時の間に來たのか、隣りの机の子さへ知らぬことがあつた。文吾はまだ來んなアと、和尚さんも朋輩も皆さう思つてゐるうちに、文吾がにこ〳〵して、もう雙紙を一二枚習ひかけてゐるのを見て、あツと驚かされることもあつた。

文吾はそれが得意であつた。煮賣屋の主婦の眼を晦ますことを覺えてから、それをいろ〳〵の人に試みたが、うまく行くことの多いのに、嬉しくてたまらなかつた。『これはうまいなア。』と、文吾は獨りで叫んだ。

七

たゞ足音を忍んで、人の眼を晦ますだけでは詰まらないといふことを、文吾の小ひさな胸は考へ始めた。

初夏から眞夏になる頃には、文吾の忍び足も、おひ〳〵に習練の效を積んで來た。それでも時々、煮賣屋の主婦の目尻の下つた眼には見現はされることがあつて『あの糞婆め。』と齒嚙みをしたが、家の母や寺の和尚さんの眼を晦ますことは、もう何んでもなくなつた。

人の眼を晦ますことが何んでもなくなるに連れて、それをたゞぼんやりとやつてゐることが、文吾には詰まらなくなつたのである。去年の秋の末に顎の外れるほど大きな口を開いて、夜露に霑うたうまいやつをドッサリ喰べたあの御所柿も、今年は不作と見えて、花が尠かつた。其の御所柿の樹から、『人のものは我が物、我が物は人のもの。』といふやうなことを敎へられた文吾は、今度偶然に覺えかけたこの忍び足の法で、人のものを我が物にしてやるのも面白いことであらうと考へた。さうして、それを先づ家の母に試みてやらうと思つて、寺の午休みに、竊と自分の家へ忍び込んで見た。

棚の上を走る鼠の足音の方に、母の心を引き付けておいて、首尾よく一本の梱を懷中に隱し了せたのと、店の土間へ這ひ込んだ子狗に、煮賣屋の主婦の眼を晦ましたのとが、文吾の忍び足の法を會得しかける最初であつたが、近頃ではもう、鼠や子狗がうまく出て來なくとも、小ひさな石ころを一つ、あらぬ方角へ投げ付けた物音の中に、身を隱すことも出來るやうになつた。

裏の崩れた土塀の上を、毛の汚れた野良猫がノソリ〳〵と渡つて行く。折柄絲を紡いでゐた母の眼は、其の猫の方へ惹け付けられてゐて、文吾が直ぐ背後に立つてゐるのを知らなかつた。

ビイビイビイビイビイ。

チョン。

ビイビイビイビイビイ。

チョン。

絲車は靜かに廻つて、じんき（白い綿を胡瓜の小ひさなのぐらゐにしたもの）は長く母の左手で絲になつて伸びると、右の手で廻してゐた車が、チョンと把手を鳴らす音とともに、梱に卷き着く絲の玉は、だん〳〵太くなつて行く。

ビイビイビイビイビイビイ。

チョン。

異國の歌でも聴くやうな絲車の音は、うッとりとして、人の眠りを誘ふやうであつた。靜かな伊賀の山里の、村人は皆午睡の夢を貪つてゐるのに、文吾の母だけは、夜業をしても足らぬ賃仕事の絲紡ぎにかゝつてゐるのであつた。寺の午休みに駈け戻つて來た文吾は、母の手元にあるじんきの束を取つて、窃と物蔭へ身を忍ばせつゝ、樣子を窺つてゐると、自分の廻す絲車の音に自分の眠りを誘はれながら、ぼんやりと向うの土塀の上の野良猫に見入つてゐた母は、左の手に乏しくなつたじんきを繼ぎ足さうとして、手さぐりでじんきの束を求めたが、指先きに當るのは、古疊の藺のほつればかりなので、ヤッと眼が覺めた風で四邊を見廻したが、じんきはそこいらに一本もなかつた。いぶかしさうに小首を傾けた母は、立つて行つて戸棚から一束のじんきを持ち出し、またビイビイビイと紡ぎ始めた。

文吾は再び拔き足して、母の傍に忍び寄ると、其の新らしいじんきの束を攫つて、更に物蔭へ隱れた。今持つて來たばかりのじんきの束が、また見えなくなつたのに呆れた母は、暫らく考へてゐる風であつたが、やがて絲車を片付け、膝の上の綿埃りを拂つてから、臺所へ行つて火打箱を取り出し、燧石をカチ〳〵やつて、神棚に燈明を上げた。さうして、其の前に長いこと瞑目祈念してゐた。

文吾は攫つた二束のじんきをば、母の直ぐ側へ投げて、忍び足に寺へ立ち戻つたが、七つ過ぎに家へ歸つて、今度は大びらに入ると、母はまだ神棚の前に坐つてゐた。

『文吾はん、氣い付けなはれや。今日は魔物が家の中へ入り込んでるよつて、……』と、聲を震はして言つた。文吾は獨りクス〳〵笑つてゐた。

八

光明寺の和尚さんは、伏見から取り寄せた駿河屋の羊羹で、宇治の玉露を淹れて飮むのを樂んでゐた。紅を刷いたやうな四角い長いものを、和尚さんが大事さうに庖丁で切つて、齒のない口でもぐ〳〵やつてゐる度に、手習ひ子等は何を喰べてゐるのかと思つて、遠くから不思議さうに眺めてゐた。羊羹といふ名なんかは、もとより知らうやうもなかつた。文吾は、初めにそれを見た時、家へ歸つて、母に和尚さんの不思議の食物のことを話すと、若い頃都の水を飮んだ母は薄笑ひをして『それは伏見の駿河屋の晒し羊羹といふもんや。』と敎へてくれたので、羊羹といふもののことをよく知つてゐたし、此頃宇治で出來た玉露といふお茶のことをも、母に聞いてゐた。さうして其の羊羹といふものを、一片喰べてみたくてたまらなかつた。

夏だから襖も障子も開け放してあるので、手習ひをしてゐる本堂の片隅から、庫裡の奧まで、一目に見通すことは出來るが、手習ひ子は庫裡へ片足でも踏み込むことを禁ぜられてゐるから、羊羹の納つてある茶簞笥へ近づくことは、文吾の忍び足にもなか〳〵むづかしかつた。殊に本堂と庫裡との繼ぎ合はせのところには、賢さうな小僧が一人机を控へて、別にお經をさらつてゐるし、まだ若い寺男の眼も、臺所や庭前から光つてゐる。其の中を潛り拔けて、和尚さんの居間に忍び寄ることは、文吾が一生の大事のやうに思はれた。

其の頃は他の國々に、まだよく戰があつて、馬の蹄や、雜兵の草鞋に田畑を踏み荒らされたり、家を燒かれたり、女を攫はれたりする噂が、よく耳へ入つたけれど、この伊賀の國だけは、さういふ難儀から暫らく免れてゐた。ところが、此頃毎夜丑三つの刻限に、東の山の上へ怪しい星が現はれて、其の星の下に弘法大師のお姿があり〳〵拜まれるといふことを言ひ觸ら

すものがあつた。誰れが言ひ出したのか分らないけれど、光明寺の和尚さんも、スッカリそれを信じて、『これはきつと近いうちに、この伊賀にも戰があるに違ひない。それをお大師さんが教へて下さるのぢや。』と、手習ひ子たちにも言ひ聞かせてゐた。

『和尚さん、戰があると、わたへ等はどないになりますのや。』と、一番年上の手習ひ子は和尚さんに問うた。

『戰があつたら、もうお前ぐらゐの年のものは、軍役というて、兵粮運びなんぞに使はれるし、家にあるお米や麥は皆取り上げられ、家の納屋も燒かれる。』と、和尚さんは教へた。

『兵粮運びしたら、駄賃呉れはりまッか。』と、其の手習ひ子は、嬉しさうな顏をした。

『駄賃は呉れんな、駄賃の代りに、流れ矢を貰うて死ぬぐらゐのものや。』と、和尚さんは冷かに笑つた。

『人の家のお米や麥をたゞ取つて、駄賃も呉れいで兵粮運びさしまんのか。そいで家を燒く。まるで無茶やでな。……和尚さんそんな無茶しても、だいじおまへんのか。』と、横合ひから、眉を顰めつゝ問うた手習ひ子があつた。

『どうもしやうがないなア。軍人は强いよつて。……』と、和尚さんは微笑んでゐた。

『强いもんなら、惡いことをしてもだいじおまへんのやなア。』と、其の子は腑に落ちぬといふ顏をした。

『現世ではしやうがないなア。……强いといふことは、尊いといふこと、正しいといふことより、一枚上手ぢや。』と、和尚さんは、矢ッ張り笑ひ續けた。

『强うならな、あかんわい。』と、誰れやらが大きな聲で、頓狂に言つたので、みんなは一時にどッと笑つた。しかし文吾だけは笑はなかつた。

文吾は笑ふよりも考へたかつた。「强いといふことは、善いといふこと、正しいといふことより一枚上手ぢや。」と言つた和尚さんの言葉を、しみじみと嚙みしめて味ひたかつた。さうして、『强うなれ、强うなれ。』と、口の裡で叫んだ。

けれども、よく考へてみると、一人だけでは幾分强くなつたとて、大勢でかゝつて來られては、兎ても敵はない、これは何んでも手下をドッサリ拵へなければならない、其の手下の出來るまでは、近頃覺えた忍び足の法でやつてやらう、他人に出來ないことを自分がするといふのも、矢張り一つの强さだ、强いといふことが、善いといふこと、正しいといふことより一枚上手なら、もう大威張りぢや、自分はこの忍び足といふ强さで、煮賣屋の婆に勝つた、家の阿母さんにも勝つた、これから一つこの和尚さんに勝つて、どうしてもあのおいしさうな駿河屋の羊羹を喰べねばならぬと、文吾は小ひさな胸に、自ら問ひ、自ら答へて、深く決心した。

其の夜の丑三つに、大膽な文吾は、東の山へ現はるゝといふ大きな星と弘法大師のお姿とを拜むのぢやと、母に告げて、壞れかけてガタ〱してゐる雨戸の外へ出たが、其のまゝ跣足に夜露を踏んで、飛ぶが如く光明寺へ驅け付けると、うま〱和尚さんの居間に忍び入つた。

九

『誰れぢや。……奈良枝か。』

暗黒の室の欄間のあたりから、手習ひの折の小言で、耳の底深く滲み込んでゐる和尚さんの聲が、いやにそは〱した調子で聞えた。

これや、しまうたわい、と思つて、文吾は暗黑の室内を、瞳が二つあると言はれる眼で透かして見た。自分が今五寸ばかり雨戸を開けて、小ひさい身體を斜めに忍び込んだところから射す星明りに、茶簞笥や火桶や、罐子が、晝間の通り正しく位置してゐるのを知つただけで、人間

の姿は何處にも見えなかつた。

文吾は不思議でならなかつた。和尚さんの今の聲は、一體何處から響いたのであらうか。さう思つて、つい鼻の先きにある羊羹に手をかけることも出來ないで、隅の方に小ひさく、蜘蛛のやうになつて、壁へ身體を摺り寄せつゝ、ヂッと樣子を窺つた。

晝間は遠くから眺めてゐるばかりで、足の親指の先きだけでも敷居の内へ入れることを許されない和尚さんの居間の疊を踏んだのは、たいしたことをしたものだといふ誇りが、文吾の胸に湧いて來た。怖ろしいことをしたとか、年に似合はぬ惡いことを企てたとかいふことは、少しも考へなかつた。見付けられたらまゝよ、和尚さんの鶴のやうな首へ食ひ付いてやれといふ大膽さが、腹いッぱいに蔓つた。

本堂の片隅から遠く眺めただけでも、文吾の隼のやうな眼は、この室の模樣を手に取る如く突きとめてゐた。しかし今からやつて、深夜に此處へ忍び込んでゐると、茶簞笥や火桶や鑵子に、一つ〱皆息が通つて生きてゐるのではないかと思はれた。殊に鑵子なんぞは、今にも足が生え、尻尾が出來て、むく〱と歩き出しさうな風に見えた。

生きてゐるのは人間ばかりぢやないのか。――そんなことを文吾は考へた。鑵子に足が出來て、羊羹に羽根が生えて、歩いたり飛んだりしたらどうであらう。……深夜といふ怪しい魔の力は、幾ら利巧でも、矢張り幼い文吾に、こんな事が今にも眼の前に起るやうに思はせた。さうして文吾はまた母が伴て平井明神の拜殿で、白衣の怪しい男に手をとられたのも、かういふ夜であつたかなぞといふことを思ひ浮べた。

『奈良枝、……奈良枝。』

和尚さんの聲は、また同じ高いところから聞えた。文吾は頭を擡げて、欄間を見上げたが、暗くて何も分らなかつた。

『誰れぢや……奈良枝か。』

今度は和尚さんの聲が低いところで聞えたと思ふと、文吾の寄り添うてゐた壁が、大地震でもあるやうに、ぐら〱と動いた。文吾は吃驚してしまつて、これは大變なことになつた、自分より和尚さんの方が矢ッ張えらいなアと感心した。しかし、このまゝむざ〱取り押へられるのも業腹だから、忍び足の法で、隠れられるだけは隠れてこまさうと、不思議に動く壁を離れて、目指す羊羹の入つた茶簞笥の傍に潛んだ。暗いから隠れるのには都合のいゝやうなものの、晝間だけの修行では、夜の仕事にさつぱり役立たぬのを、文吾は泣きたいほど殘念だと思つた。第一和尚さんの眼を晦ます種を、何も見付けることが出來ない。鼠なり猫なり、居合はせた何ものかを種に使つて、相手の氣を其の方へ奪はせ、眼をもそれへ向けさせるといふ工夫が、かう暗くてはどうにもならぬ。これは駄目だ、夜の修行をしなければならぬと、文吾は一つの大きな決心をした。

『奈良枝、……なにしてる。』

和尚さんの聲は、また高いところで聞えた。

文吾はいよ〱、不思議でたまらなかつた。聲ばかり聞かされて、姿の見えぬ時、鳥のやうな和尚さんは、何處に居るのか、さう思つて、キヨロキヨロと、暗い中を見廻したが、茶簞笥、火桶、鑵子、それ等のものよりほかに何もなかつた。

其の時、自分の入つて來た雨戸が五寸ばかり開いたまゝになつてゐるのを、一尺ほどに開け擴げたものがある。文吾はぎよつとして、そつちを見た。鑵子に足が生えて動き出すより前に、雨戸が獨りで敷居の溝を滑つたのかと、驚きの眼を瞠つてゐると、流れ星の光りが深い軒を掠めて飛んだのとともに、白い布を頭から被つて、其の端を口に銜へた一つの人影が、すう

つと緣側へ上つて來た。

『奈良枝、…奈良枝。』と、また先刻からの版木で捺したやうな聲が聞えるとともに、正面の壁が三尺四方ばかり、眞四角にパタリと開いて、大きな怪物の口かなんぞのやうに、其處だけが殊に黑く見えた。

『奈良枝、…てんごしいなや。』といふ和尙さんの聲が、其の黑い穴の中に聞えたと思ふと、カチカチと燧石の音が聞えて、先刻の流れ星のやうな薄い光りが、ぴか〳〵したが、やがて手燭の火とともに、和尙さんのつる〳〵した頭は吐き出されるが如く其の四角い穴から現はれた。

『なんにもしえしまへんがな。今來たばかりだす。』と言つたのは、たしかに女で、それがあの路傍の煮賣屋の肥えた娘であることも、文吾の暗を探る眼にはよく分つた。

『譃言ひなや、いゝかいこと待たしといて、それからあんなてんごしても、吃驚しえへんで。…』と、和尙さんの身體は、其のつる〳〵した頭から、ぽつ〳〵溶けかゝりさうであつた。

『まア、何んでもえゝわ。こつちへおいで、…』と、和尙さんの枯木のやうな手は、煮賣屋の娘の脂ぎつた太い手をとつて、怪物の四角な口の中へ、食はれて行くやうにして、入つてしまつた。

和尙さんの手にある手燭の光りは、白い單衣に鼠色の丸ぐけを締めた鶴の如き姿をくつきりと映し出したとともに、丸く肥えて足の短い鶩のやうな娘の容を描き出した。

二人の影が四角い穴の中に消えた時、其處にもちやんと疊を敷いた室のあることを、文吾の眼はチラと見た。其の途端、四角い穴は元の壁なりに塞がつて、接ぎ目も分らぬ暗黑になつてしまつた。

文吾は何んだか夢のやうな氣がした。あの娘の名はたしか磯菜で、奈良枝ではなかつたがなア、とも思つた。して自分もうつら〳〵と眠くなつたが、ぐらつと頭を茶簞笥の角に打ち付けて、ハッと眼が覺めるとともに、眞夜中…男…女…といふ疑ひの雲が、其の頭の中に徂徠した。けれど、幾ら智慧が走つてゐても、まだ幼い文吾には、それがとつくりと解るまでには至らなかつた。けれども變な氣持ちは、彼れの頭を押し付けるやうで、肝心の羊羹を盜むことを忘れたまゝ、ぼんやりと家へ歸つて來た。

東の空には白い星が大きく輝いて、村の噂の弘法大師の姿は見えなかつた。文吾はぞつと身慄ひをして、母の寢息の籠つた紙帳の中へ潛り込んだ。寺で蚊に食はれた痕が、急に痒くなつて來た。

十

翌る日、寺へ行つて和尙さんの顏を見るのが樂みであつた。其の途中で籠に入れた茄子を抱へた煮賣屋の娘に行き逢つた。『お早う。』と頷いて行く彼女の頰は、はち切れさうに膨れて、針のさきで輕く突いても、紅い血がパッと迸りさうであつた。この勢ひのよい女と、あの枯木のやうな和尙さんと、それが眞夜中に何の用があつたのかと、文吾はつく〴〵考へた。

寺では珍らしく文吾が眞ッ先きに來たので、腰衣で本堂を掃除してゐた小僧が、先づ驚きの眼を瞠つた。和尙さんは庫裡から本堂への通り路に、美しく敷き詰めた礫の兩側へ、緣をとるやうにして植ゑてある石竹の花の麗はしく咲いたのを見やりつゝ、石像の如くに蹲つてゐたが、『善海子ッ。』と、いつもとは違ふ淸らかな聲で小僧を呼びかけて、『今日は雨が降るぞ。』と、朝晴れの蒼空を見上げた。ほんたうに雨が降るのかと思つて、ほんの一瞬間だが、蒼空を仰いだのは、利巧な文吾にも似合はぬおぞましさであつた。文吾はてれかくしに、つと和尙さんの側へ寄つて、

『和尚さん、綺麗だんな。』と言つて、和尚さんの視線を辿りつゝ、同じ石竹の花を見ようとした。

『庭の石竹根が引き抜きにくい。庭の石竹根が引き抜きにくい。庭の石竹根が引き抜きにくい。……さア、文吾、かうやつて三遍續けて言うてみい。』と、和尚さんは澄まし切つて、村の聖顔をしたが、どうしたことか、今朝の和尚さんは、いつもよりズッと聲も様子も若々しかつた。

『なんぞ褒美おくなはるか。』と、文吾は石竹の莖を持つて、一本引き拔かうとしたが、なかなか堅くて、成るほど引き拔きにくかつた。

『慾の深いやツちやなア、こいつ。褒美は望み次第ぢや。』と、和尚さんは齒の尠い口を尖らした。

『そんなら、あの羊羹一きれおくなはれ。そいたらうまいこと言ひまツせ。』

『よし、やらう。言うてみい。』

『庭の石竹根が引き拔きにくい。庭の石竹根が引き拔きにくい。庭の石竹根が引き拔きにくい。庭の石竹……』

『もうよい。……えらいやツちや。』と、和尚さんの褒め言葉の終らぬうちに、文吾の小ひさい掌は、お重ねをして、和尚さんの鼻ツ先きに出てゐた。和尚さんは、『あはゝゝ。』と大きく笑つて、居間の方へ行つたが、稍手間取れると思ふ頃、白紙に包んだ二きればかりの羊羹を、大事さうに持つて來て、

『さア、歸つてから喰べるんぢやぞ。此處で喰べると、ほかの寺子にわるいによつて。』と、嚴かに言つた。

『京の三十三間堂の佛の數は三萬三千三百三十三體あるといなさうかいなほんかいな。……さア文吾、これを七遍息をせずに續けて言うてみい。そしたらあるだけの羊羹をみんなやる。』と、和尚さんはまたこんなことを言ひ出した。

文吾は口の裡で、『京の三十三間……』のと繰り返して言つてみたが、四五度まではどうやら言へるけれど、あとの二度がどうしても續かなかつた。一生懸命にやればやるほど息が切れて來た。其のうちに、手に持つてゐた筈の羊羹の紙包みがなくなつてしまつた。

『和尚さん、返しとくなはれ。』

『何を。』

『羊羹を。』

『お前の袂に入つたる。』と、にこりともしないで和尚さんの言つた途端、文吾の右の袂が急に重くなつて、文吾は外から羊羹の紙包みの四角なのを、柔かく探ることが出來た。

まだ〳〵和尚さんには兎ても敵はぬ、この和尚さんに敎はるのは、手習ひよりもほかにあると文吾は考へた。

其の夕方、家へ歸つて、黑々と墨の附いた手で先づ袂の四角い紙包みを取り出し、いそ〳〵として披いて見ると、現はれたのは、紅を刷いたやうな駿河屋の羊羹ではなくて、羊羹を切つた形に捏ね上げた寺の栗飯であつた。文吾はあツと呆れた。

十一

こんなことがあつてから、文吾は寺の和尚さんが大好きになつた。今までは好きでも嫌ひでもなかつたのが、好きでたまらなくなつた。手習ひは相變らず厭だし、『山高きが故に貴からず、木あるをもつて貴しとなす。……』と義理一遍に讀むのも、面白いことではないが、文吾は成るたけ早く寺へ行つて、少しでも多く和尚さんの側に居たかつた。

どうしても、和尚さんの居間の茶箪笥にある羊羹が喰べられない。それを喰べ得られるまでに、修行をしなければならぬと、文吾は考へた。

まさか廿三つの深夜に、大膽な文吾が寺へ忍び込んだとは、流石の和尚さんも思つてゐないやうである。文吾の方からは、もとより何も言ひ出さなかつた。煮賣屋の娘が夜中に寺へ忍び込んだことと、和尚さんの居間の壁には仕掛けがあつて、其處から內證の一室へ行かれることとは、たゞ面白い話として人に言ひたいのは山々だが、それを言ふと、自分が深夜に和尚さんの居間へ忍び込んだことが知れる。一體煮賣屋の娘は、何んの用があつて、夜中にわざ〳〵寺へ來たのであらうか。それをハッキリとは知らない文吾であるけれど、またまるツきり解らないのでもない。男……女……夜といふことが、文吾の幼い頭にも少しづつ判じがつきかゝつて來た。和尚さんは老人でも、男である。煮賣屋の娘は若い娘である。若い娘でも、文吾の眼には一人前の大人である。母と同じやうな大人だと思つてゐる。母が亡父の寢酒を求め歩いた果てに、平井明神の神酒を盜まうとした時、神の名を騙つて、母の手を捉へた白衣の男と母との關係は、丁度寺の和尚さんと煮賣屋の娘のそれと、同じことではあるまいか。平井明神は宵の口、光明寺は夜中、たゞそれだけの違ひである——と此處まで考へて來た時、文吾の心は怪しく震へた。さうして自分も、もう一人前の大人になりかけたといふ氣がした。男と女……人間といふものが、どうしてこの二つに別けられてあるのか、自分は今まで少しもそれに就いて考へなかつた。これからはもう、羊羹どころぢやないぞと思つた。

家へ歸つてから、それとなく光明寺の怪しい室のことや、煮賣屋の娘が和尚さんに手を引かれて其の室へ入つたことを、晝間の話になほして、母に告げると、母は紡いでゐた絲車の手を止めて、

『滅相な、文吾はん。……あんたまア何んでそんなことを言ひなはる。譃は盜人の始めといふが、……』と言ひさして、さめ〴〵と泣き出した。何んでまたこんなことで母が泣くのか、とそれが文吾には解らなかつた。

『譃やない、わいが見たんやもん。』と、文吾は力を籠めて言つた。母を面白がらせようと思つたことが、母を泣かしてしまつたので、文吾は躍起とならずにはゐられなかつた。

『あの活佛の光明寺さんに、そんなことがあつたら、天地がひつくりかへつてしまひますぞよ。』と、母は短い兩袖で涙を拭きながら言つた。

『それやけど、わい見たんやもん。』と、文吾は自分よりも寺の和尚さんの方が、母に信用されてゐるのが殘念でたまらなかつた。

『それはあの娘が何んぞ用でもあつて、お寺へ行かつたんやろ。それから其の壁のひツくりかへるところは梵妻部屋というてな、何處のお寺にもあるんやが、光明寺さんは其の部屋を使ふやうなお方やない。晝間やもんなア、あんたがそれを見たのは。……そんなことはない、あつてたまるもんか。』と、母も少し氣にかゝり出したやうであつたが、强ひて櫛巻きの首を振つてゐた。文吾は夜の話を晝になほしたばかりに、自分の言ふことが弱くなつたのを、またしみじみと殘念に思つた。さうして、其の『夜』といふものに就いて、いろ〳〵と考へた末、自分もこれからは、其の『夜』といふものを、自由に使はなければならぬと考へた。

十二

夏から秋になるのは早かつた。寺へ通ふ路の傍に大きな御所柿が、今年は不作だといふことで、ちらほらと枝の間に紅い實が見えるくらゐであつたが、其の代りに去年よりも一昨年よりも、ズッと大きく見事なものであつた。しか

し文吾はもうそんなものにはあまり心を惹かれなかつた。もう少しよいものをと、文吾の鋭い重瞳の眼は、他の方を睨んでゐた。

秋と冬との間に、青地の村では、若い衆たちの伊勢參りの道中がある。それは五年目々々々に行はれる村の行事で、伊賀から伊勢へ、さう遠くもないところを、ぐるツと廻り道して往復七日がかりで、木遣り音頭を謠ひながら、白裝束に脚絆、甲掛け、菅笠に金剛杖といふ山登りの姿をして、ゆる／＼と出かけるのである。鹿島立ちから參宮までは、戲談一つ言はずに、精進潔齋して行くが、下向の第一夜を古市の姫買ひに明かすのが、參宮よりもズッと大事な彼等の唯一の希望で、それからは次々の宿場に、飯盛りと戲れぬ夜とてもない。往きはよい／＼復りはこはい疾を獲て、鼻のない顏を生涯、村に曝しつゝ、有り難い記念を留むるものもあるけれど、そんなことは頓着なしに、若い衆たちは指折り數へて、五年目の「さアとこせ、よういやな」を待つのである。

文吾も、夏から其の伊勢參りの同行に加はりたくてならなかつた。それを母に言つても『あれは子供の行くとこやない。』と、頭から顧みられないし、若い衆の頭に賴んでも、『ふゝゝ。』と鼻の先きで笑はれてしまつた。

『行きたいなア、行きたいたア。』と、秋になつてから、文吾はそればかり考へて、もう御所柿でも、羊羹でもなかつた。

いよ／＼鹿島立ちも十日の後に迫つた或る夕、文吾は昨夜見た伊勢參りの夢を想ひ出して、獨りぶら／＼と杉の葉を吊した煮賣屋の前を歩いてゐると、向うの方の路傍に立ち話してゐた五六人の若い衆が、手に／＼文吾を招いた。伊勢參りの話ではないかと思つて、文吾は胸を躍らせながら、若い衆の群に近寄ると、其のうちの頭だつた一人が、一層近く文吾の顏を、胸にまで引き付けて、

『文吾はん、杉の屋の風呂の栓抜いて來て呉れんかい。俺等が行くと目立つさかい、お前なら丁度よい、早う／＼。』と促し立てるやうに言つた。杉の屋とはあの煮賣屋のことで、今日は杉の枯葉が、青々として新らしいのに取りかへられてあつた。この家の風呂場は裏の方にあつて、栓が長く背戸の小溝の上に出てゐるのも、文吾はよく知つてゐた。

『厭ぢやい、そんなわるいこと。』と、文吾は大きな聲で言つて、首を振つた。

『シッ、シッ。……』と、手を振りつゝ若い衆は文吾の高聲を制して、『やい、や、わるいこツちやない、ちいとわけがあつて、あそこの風呂の栓拔いたらんならん、今、娘が入つてよるさかい、早ういて拔いて呉れ。賴む／＼。』と、若い衆は神佛を拜むやうに、文吾の前に手を合はした。

『伊勢參りに連れていて呉れるんなら、あの栓拔いて來る。』と、文吾は若い衆の足元を見て言つた。若い衆は顏を見合はせて困つた樣子をしたが、『よし／＼、連れていたるさかい、早う拔いて來い。』と言ふと、皆々それに同じて、『早う、早う。』と急き立てた。

『騙すんなら厭ぢや。』と、文吾はまだ動かなかつた。

『騙しやせん。……早うして呉れ。お娘があがると何んにもならん。』と、若い衆は焦慮つた。

文吾は漸く駈け出して行つたが、覺え込んだ忍び足の法で、煮賣屋の人々の眼を晦ましつつ、背戸へ廻つて、繁つた蓼のそろ／＼枯れかけてゐる上へぬッと出てゐる竹の筒の栓を拔くと、後の世には自分が大人になつてからの名で呼ばるゝ五右衞門風呂の湯が、ぢやアと噴き出した。

『あゝッ。……』と叫んで、娘が風呂から飛び出したところへ、若い衆の一人は急用でもある風

をして、表から飛び込んで來た。あわてふためいて、何をする間もない娘のまる裸體が、稻妻のやうな若い衆の眼光に映つた。

『これぢや、これぢや、疑ひなしぢや。』と、煮賣屋から出て來た若い衆は、右の手で腹の膨れた形をして見せながら言つた。

『さア、これから相手の詮議ぢや。』と、年嵩の若い衆は言つた。

『伊勢參りに連れていて呉れるなア。』と、文吾も其處へ顏を出した。

十三

　青地の村から出た伊勢參りの同勢八人のうちに、子供が一人居るといふことは、道中筋で人々の眼を集めた。

『あれや何んぢやい。あんなもん連れて行ッとる。』

『あんな小ッぺいにお女郎買ひが出けるやろか。』

　憚り氣もなくこんなこと言ふのが、ちよいちよいと文吾の小ひさい耳へ入るが、文吾はただニヤ〳〵と笑つてゐた。伊勢參りの願望の屆いたのが嬉しくて〳〵、人が何んと言はうとそんなことは構はないのである。

　木遣り音頭の聲賑かに、殆んど村中の人殘らずに送られつゝ、先づ隣り村の平井明神に參詣して、だん〳〵伊勢路へ向ふのであるが、其の時から文吾の小ひさい身體は笑はれ通しであつた。先達の源右衞門さへ、時々後を振り向いては笑つてゐた。

　何故そんなに可笑しいのか。それはこの頃この國のお伊勢參りが、古市の姬買ひを目的として、神信心は附けたりであつたから、子供の參宮をば、八十の老婆の嫁入りよりもまだ不思議なこと、可笑しいこととしたのである。先達を除いては、皆血氣の若者ばかり、六人のうちで四五人までは、この度の旅によつて、其の處女性を破らうとしてゐる。それまでは愼んでゐて、これからそろ〳〵といふのを、一生の誇りとしてゐる。後の世に行はれる神前結婚式……先づさうした嚴肅な意味に、お伊勢參りをば、性的の行動と觀るのであつた。元服の烏帽子親を選ぶやうな心を、お伊勢參りの人がもつてゐた。

『あの人もえゝけど、まだお伊勢參りが濟まんよつてな。』と、村の娘たちは、伊勢參りに行かない若者を、幾分嘲笑の眼をもつて見た。處女の重んぜらるゝのは、いつの世でも同じことであるが、男の方でお伊勢參りの濟まぬものは駄目であつた。

　出立の前夜、文吾の母は、いろ〳〵に心配して、先達源右衞門の家へ尋ねて行つた。嬉しさに包まれて、旅の支度をしてゐた文吾は、背戶を出て行く母の姿を見て、直ぐ源右衞門の家へ行くのぢやなアと覺つた。人の姿を見て其の行方を知るといふことは、文吾が忍び足の法とともに、此頃自得した一つの神經作用であつたが、大抵は誤らなかつた。あの人は何處へ行くといふことを知るのは、さうむづかしいことではないやうに思はれた。殊に母の場合には、それが手に取る如く分つた。

　旅の支度に忙しいなかで、母の出て行く後姿を見送つた文吾は、にこり笑ふと、直ぐ表から飛び出して、畦道傳ひに源右衞門の家へ先き廻りをした。

　源右衞門の家は、中くらゐの百姓であるが、家柄は文吾の家の次ぎに位してゐた。文吾の家は後家と子供とだけだから、村の寄り合ひの正座も奪はれてしまつたのであるが、源右衞門も家柄だけでは正座へなほることが出來ないで、成り上りが幅を利かしてゐる不平を、酒に紛らしつゝ憤つてゐる。今年五十一になるまで、

になるまで、四度お伊勢參りの先達を勤め、大和の行者參りには八度も先達になつたのを誇りとしてゐる。

今度も、先達に講元を兼ねてゐるので、大きな藁家の傍に一坪ばかりの土地を淨めて、神籬を立て、八足の机を置き新菰を敷いて、大神宮樣が祀つてある。文吾はこの神籬の中へ入つて、母の來るのを待つてゐると、察しに違はず聞き覺えの尻切れ草履の足音がした。さうして入口の敷居を跨ぐ影が薄く陽炎のやうに見えた。

文吾も直ぐ後から眞ツ暗な土間へ入つた。白い砂が疊のやうに美しく均してある神籬の中へ、『若し土足を踏み込めば、直ぐ腰が立たなくなる』と、村人は皆恐れてゐて、靈代を安置する平井明神の神主のほかは、誰も入るものがない。それを文吾は子供らしくもない好奇心から、神の罰で腰が拔けたら、明朝の出立も嬉喜びになるのを忘れて、ついフラ／＼と、神籬の中へ忍び込んだのである。しかし榊の枝がさら／＼と袖に觸れて鳴つただけ、腰も拔けなければ、跛足になることもなかつた、文吾はニヤ／＼と笑つて、暗い土間に倒れてゐる鍬の柄に躓きもせずに、すうッと風のやうな足どりで、圍爐裡の切つてある板の間の前まで行つて蹲つた。

源右衞門は鹿島立ちの酒に醉ひ仆れて、榾の火にあか／＼と顏を照らされながら眠つてゐた。文吾の母は、源右衞門の内儀と一言二言話してゐたが、うんと寢返りをした源右衞門を、内儀は『もし、もし』と呼び起して、『左衞門旦那のが、わせらッた。』と告げた。

『これは、これは。』と源右衞門は眼を擦りつゝ起き直つた。亡き大左衞門と、先祖との光りが見る影もない後家の上にまで輝いて、蔭では何んと言はうと、面と向つて文吾の母を侮るものはまだなかつた。

『御用なら、お人を下されば上りましたのに。』と源右衞門は居住ひをたゞし、襤褸の襟を引ツ張りながら言つた。お人を下さるにも何んにも、母子二人切りの家では、どちらか一人が使に出るよりほかはなかつた。家柄よりも物持ちを貴ぶ風は、山城大和から此頃この伊賀の國へも吹き込んで、田地持ち山持ちが上座になほるのを憤つてゐる源右衞門には、態とらしく丁寧に文吾母子を扱ふ傾きがあつた。それは文吾母子を敬ふのは石川の家柄を敬ふので、石川の家柄を敬ふのは、詰まり家柄を重く見ることを村人に知らせようとするに當る。石川に次いでの家柄をもつた源右衞門が石川を貴ぶのは、また自分の家を村人から貴ばせようとすることになるのであつて、源右衞門の心には、こんな簡單なことに對して、甚だ複雜に働いてゐた。

『あのわるさがお伊勢參りするんや言うてきゝまへんので、若い衆も連れて下さりますさうで、いづれまア、あんたはんの御厄介や思うて、お賴みに參じました。あんな小ッこいもんが色事も存じまへんでへうし、皆さんの足手纏ひになるやらうと思ひますと、お氣の毒さんで……』と、母は早口に言つて、萎びた手を圍爐裡の火に翳してゐた。

色事の二字に、文吾はハッとして首を傾けた。光明寺の夜の不思議と、路傍の煮賣屋の風呂の枠と、この二つの新らしい事件は、文吾の幼い頭を掻き亂して、何やら其處に物があるやうな氣がしてゐた。お伊勢參りがしてみたいといふ心も、これが爲めに一層強くなつたのだといふことは、自分にもよく分つてゐる。

『お伊勢參りに子供を連れに行くのも、樂しみなもんぢやらうと思ひましてなあ。……』と言つてニヤ／＼笑つてゐるだけで、源右衞門は別に何も言はなかつた。母はもつと言ひたいことや賴みたいことがあつたらしかつたけれど、親の口からは出しにくい言葉だと見えて、もぢ／＼

して言ひそゝくれたまゝ歸つて了つた。
『可哀さうに心配してらるなア』と、源右衛門は內儀を顧みて、矢張りニヤ／＼しながら言つた。文吾は呆氣ないやうな氣もしたが、色事の二字を、仔細に胸の裡で考へつゝ、また風のやうに源右衛門の家を飛び出すと、先き廻りして母よりもズッと早く自分の家へ戻り着くなり、元の樣子で旅支度のものを弄つてゐた。

さうして、翌日の出立に、源右衛門の家の勢揃ひへ眞ッ先きに行つたのは文吾で、白衣に脚絆甲掛けの姿が可愛らしかつた。

『妙ぢや、妙ぢや。妙ちきりんぢや。あれ見い、子供の伊勢參り。……』と、道中の何處でも囃し立てるやうに呼ばれた。全く其の頃の土地では、お蔭參りの時のほか、子供の伊勢參宮が、それほど珍らしかつたのである。伊勢參りといふことが、妙な意味に取られる伊賀あたりの風儀であつた。

十四

伊勢參りから歸つた文吾は、小ひさい身體が急にめき／＼と、筍のやうに伸びるやうな氣がした。

『俺はもう子供でないぞ。』と、人に向つて威張りたくなつた。

『あの坊んち、どないしまんね。殺生なことしやはつて。……』と、古市の油屋で、先達の源右衛門が赤い前垂の女に叱られるやうな物の言ひやうをされてゐるのを、文吾は恐ろしいやうな、可笑しいやうな氣持ちで聞いたのであつた。

『何んでもえゝ、店の法通りにして呉れ。』と、旅慣れた源右衛門も、少し困つた風で、役人の前へでも出たといふ形をして言つた。六人の同行は、そら來たとばかり、待つてゐたらしい顏をして、面白さうに眺めてゐた。

やがて文吾唯一人のところへ、衣摺れの音とともに現はれたのは、母を少し若くしたほどの女であつた。

『坊んち、泣かんやうに、よう遊びなはれや。』

其の女は、前で結んだ美しい帶を、白い手で撫でながら、かう言つて、莞爾と笑つた。其の顏には小皺が多くて、ツンと高い鼻の側面に一かたまりの菊石が、つくねたやうになつてゐた。其の菊石の上の白粉は殊に濃くて、美しい帶を撫でてゐる手の甲にも白粉の痕が見られた。

白粉の化け物！　さう思つて文吾は、睨むやうに其の女を見詰めた。さうして、一つ驚かしてやらうかと考へてみたりした。

『坊んち、何んにも怖いことあれへん。わたしがよう遊ばしたげるがな。……何んぞ手遊品持つて來たらよかつたなア。』と言つて、女が四邊を見廻してゐるうちに、文吾は例の忍び足の法で、突然女の前から姿を隱した。

『あゝ、坊んち、何處へ行かはつた。』と、女は白粉の顏をあげて、きよろ／＼した。文吾が隅の屛風のところから、ぺちや／＼と手を叩くと、女もぽん／＼手を拍つた。文吾の手はよく鳴らないが、女の手は表へ聞えるほど朗かに響いた。

『そんな手の鳴らしやうではあかん。』と言ひさま、女は文吾に飛びかゝつて、其の手を自分の手に持ち添へつゝ鳴らさうとしたが、四つの手が一つになると、兎てもうまくは行かなかつた。

『この子、妙なことをする子やなア、氣味がわるい。』と言つて、女の手は固く文吾の手を握つた。それを振り離して、火桶の緣を一つトンと叩くと、文吾の姿は、また女の眼から消えてしまつた。

『ポン、ポン、ポン。……』

今度は女の方から、迷子でも探すやうにして、一層朗かに手を拍つた。

『ペチャ、ペチャ、ペチャ。……』

文吾の小ひさな手は、女の直ぐ前に、小兎が餅でも搗くやうな音を立てたと思ふと、其の呑まれたやうに大きな丹前を着た姿が、元の通り火桶を前にして坐つてゐた。

『この子はまア、可愛らしいと思うてたら、怖らしいわえ。……』と、女はさも〳〵感心したやうに言つた。

其の頃ポルトガル國から初めて渡つて來たタバコといふものの煙を、大きな灰皿の附いた管で、スパ〳〵吸ふことを、この古市あたりの女は少しづつやつてゐた。伊賀の奥から出て來た文吾は、それが珍らしくて、女に教はり〳〵、火を點けて貰つたのを、一口吸ひ込んだが、喉にいがらつぽくて、眼を白黒にして咽せ返つた。

女はよく鳴る手を拍つて笑ひこけた。

『さいぜんの敵打ちや、あんたは伊賀の山椒賣りの子や思うて、侮つてたら、えらいことしなはつたなア、そやけど、タバコには降參だすやろ、兜脱ぎなはれ。』と言ひ〳〵、女は文吾に摺り寄つて來た。

『わつはゝゝ。……』

次ぎの間に大きな笑ひ聲が聞えたのは、源右衛門を始め、同行の若い衆たちで、先刻から様子如何にと、次ぎの間へ來て窺つてゐたのであるが、襖の隙から覗いたものが、こらへかねて大きな聲で笑ひ出したのに和して、五六人がどつと一時に笑つた。

羞かしいといふことを、文吾は其の時初めて知つた。今までの恥かしいといふ心持ちとはまるで異つた羞かしさ！　そんなものがこの世にあることを少しも知らなかつたのだから、全く文吾には或る世界の夜が明けたやうなものであつた。

浮世の夜はだん〳〵更けて行くのに、文吾の夜は明けかゝつた。まだ固い寒梅の蕾が一夜の南風に綻び初めるやうなものであつた。

『おうい、邪魔すなやい。後家さんに頼まれて來たことがあるんぢや。』

酔ひしれた源右衛門の千鳥足が、廣い廊下に響いて、文吾の小ひさな座敷を覗く同行たちを叱り飛ばす聲が聞えた。

ほんたうに浮世の夜が明けるのは、秋のこととて、長いことであつた。それを長いとも短いとも、文吾は一切夢であつた。浮世の夜が明けて、文吾の夜も全く明けた。文吾はたゞぼんやりしてゐた。其の小ひさい背中をば、女が輕く叩いた。

『何考へてなはる、坊んち。』と、言つた聲は、文吾の耳に滲みた。

『山吹さん。……』と、文吾は大人のする大きな枕に押し付けてゐた耳へ、よく覺え込んでゐた女の名を改めて呼んでみたが、何も言ふことはなかつた。

『はい。……』

『……』

『何んです。……何んとか言うとくなはれ。』

今日はもう山吹に別れなければならないのかと、文吾の悲んでゐるところへ、源右衛門は頓に若返つた五十面を、朝酒にほんのりさせて、入つて來た。

『石川の坊んち、今日も流連や、幸ひ雨になりさうで、結構なこつちや。』と、丹前姿で突つ立つたまゝ言つた。

『おゝ、嬉しい。……』と、山吹が魁けて欣んだ。流連の意味が文吾にはよく解らなかつたけれど、雨が結構ぢやと言つた源右衛門の言葉と、女の嬉しさうな顔とから推し測つて、文吾もぞくぞくと嬉しかつた。

十五

古市二日といふ村の伊勢參りの掟を破つて、三日も流連したので、日取りの狂ひは後の道中

で取り返すから、下向の迎ひを平井明神の境内に待ち惚けさせる心配はないが、苦勞なのは、めい／＼の懷中であつた。源右衛門は講の積み金を持つて出たのだけれど、それは今までの旅籠賃と、御師への禮物と、大神樂の奉納とに、あらかた使ひはたして、幾らも殘つてはゐない。

　どうしてもこれは、村から呼び金をするよりほかはないが、其の使には誰が立つ。同行八人が一室に集り、女を退けての評定が、三日目の辰の刻に始つた。伊勢から伊賀へほんの隣り國ではあるけれど、古市は東南へ寄つてゐるので、達者な足で、久居から林へ拔けて、上野へ出ても、一日では兎ても行かれない。二十里あまりの道程を、往復七日がかりの參宮は、氣樂過ぎる道中だが、今日往つて明日金を持つて復るといふのは、少しむづかし過ぎるので、誰れも彼れも、この使は尻込みするのが當然であつた。

　さういふ時には、きつと籤にしようといふことになるのを、この時は小ひさい文吾が言ひ出すまで、皆忘れてゐた。

『負うた子に教へられて淺瀨を渡る。』なぞと呟きながら、源右衛門だけを拔きにして、源右衛門が籤を拵へた。一番長いのを抽いたものが、金の使に立つといふ定めになつた。

『何んぼ先達でも、源右衛門さんが拔けるのは、ちつとすこいなあ、源右衛門さんを入れて、文吾はんを拔いたらえゝ。』と、言ひ出したものがあつた。

『成るほどさうぢや。こんなもん籤に當つたかて、使に行かれへん。よしんば行けても、金の工面が出けえへん。』と、合槌を打つものがあつた時、文吾はカッと怒つた。

『こんなもん‥‥とは、何んぢやい。使に行かれんか、金が出けんか、やらしてみてから言へ、くそ垂れめが。』と叫んだ文吾の小ひさい口からは、火を吐きさうで、脣は眞ッ赤に燃えたやうであつた。

『俺はもう大人ぢやぞ。』

　更にかう文吾が叫んだ時、一同は噴き出した。文吾にくそ垂れめがと罵られたものも、共に笑つてゐた。

『籤なんぞ引かんかて、俺が其の使したる。』と、文吾はいよ／＼成丈高になつた。

『まア／＼。』と、源右衛門は、さながら若い主人を宥める家老のやうにして、文吾のいきり立つのを押へながら、最初の定めの通り籤親の自分だけが拔けて、一同に紙捻の籤を抽かした。

『どうれ、俺が一番長いのを引いて、使にいたろ。金もドッサリ持つて來たるぞ。』と、文吾は一晩のうちに聲變りがしたのか、大人のやうな調子で言つて、眞ッ先きに源右衛門の節くれ立つた手にある白く細い籤を摘まんだ。

　文吾には、どの紙捻が一番長くて、どれが短いといふことがよく分つてゐた。どういふもので分るのか、それは文吾も知らないが、兎に角、源右衛門の汚い握り拳を透いて、中の紙捻がギヤマンの鉢に浮く慈姑の根のやうに見えてゐた。

　七人の親指と食指とが、皆源右衛門の拳の上に集つたところで、源右衛門は『よしか。』と一聲、パッと指を開くと、七つの手に一本づつ紙捻がブラ下つた。比べて見ると、成るほど文吾のが一番長かつた。

『さあ、俺が使に行く。金もドッサリ持つて來てやるぞ。』と言ふなり、文吾は山吹の部屋へと長い廊下を躍る風にして行つた。後に七人は、金魚が水を吐くやうに、ぽかんとして、顏を見合はせてゐた。

　暫らくしてから、源右衛門が、氣がかりでたまらないといふ顏をして、山吹の部屋へ來た時、源右衛門の眼には、女が唯一人立て膝をして、長い煙管の瀨戸物の吸口から、頻りに煙を吸つて

ゐるのだけしか見えなかつた。

『坊んちはもうお立ちだしたで。何んやら急な用やいうて。』と、白粉の斑になつた口元に微笑を寄せつゝ、女は言つた。其の背後の屛風の蔭に文吾の立つてゐるのを知らずに、源右衛門はいよ〳〵心配さうな顏をして、腕組みをしながら、山吹の部屋を出て行つた。朝酒もスッカリ醒めたらしく、舌を吐いて文吾の覗く丹前の後姿を、松風が冷たく撫でてゐた。

『バア。』

廣い廊下を己れの部屋へ入つた源右衛門の後姿を見屆けてから、文吾は山吹にかう言つた。

『可愛うて、仕樣のない子やなア。』と、山吹は溜息とともに、撫で肩を窄めつゝ言つて、莞爾と笑つた。

十六

日が暮れかゝる頃、文吾は、源右衛門を始め、同行のものにはもとより、廣く〳〵多い油屋中の男女にも餘り知られないやうに、忍び足の法で往來へ出ると、直ぐ他の遊女屋へ入つて行つた。廊下や部屋の樣子は、油屋で呑み込めてゐたから、ズン〳〵入つたり廻つたりして、鏡臺や手匣の類を搜き探した。忍び足の法が、こんなにまで人に氣付かれないで、役に立つものかといふことは、文吾自身にさへ驚かるゝほどであつた。人が來れば、壁……襖……屛風……何んでも、有り合はしたものに寄り添うてさへゐれば、それで先方は氣付かずに行く。壁に近付けば壁と同じやうになるし、襖にぴつたり身體を押し付けてゐれば襖の繪にでも見えるのか。曲折のある屛風は身を忍ぶに最も屈強のものであつた。

しかし、幾ら部屋々々を探して歩いても、お金を貰ふことが出來なかつた。仕方がないから、珊瑚玗、瑪瑙、水晶なんぞ、玉ばかりを多く貰つて、お金はほんの少しばかり。これでは足りないであらうと思ひながら、油屋へ戻つて來た。部屋へ入つて見ると、山吹は居なかつたから、貰つて來たものを殘らず出して、疊の上へ並べて見た。

文吾の心には、貰ふといふことと、盜むといふこととの間に、隔ての障子が立てられてゐなかつた。村で御所柿を貰うた時からさう思つてゐる。人間が尠うて品物は多い。人間が殖えて行くよりも品物の殖える方が早い。欲しいといふものが皆貰へたら、誰れも欲しがるものはない。さうしないで、こんなところに珊瑚や瑪瑙を、五つも六つも隱して置くから、持つてゐないものが欲しがるのだ。まアこれを皆貰うて行けと、懷中へ押し込んだ時、肌がひやりとした。

待てよ、こんな玉は貰うても喰へない。肌に着けたとて、何んの藥にもなるものではない。それをどうして人が欲しがるのか。文吾の智慧はなか〳〵急に其の譯を考へ付くことが出來なかつた。

あゝ分つた。こんな美しい玉は、柿や栗や米や麥や粟のやうに、さうドッサリあるものではない。世界中にあるのを、海の底に生えてゐるのまで、皆持つて來たら、總ての人に一つ宛こんな珊瑚の玉一つぐらゐ行き渡らんこともあるまいが、誰れも皆持つてゐては値打ちがない。同じやうに裸體で生れて來た人間に、外から値打ちを附けようと思うて、こんな玉を拵へよつた。さうして態と其の數を尠うして、誰れでも手に入れることが出來ないやうにして置く。狡猾い奴ぢや。こんなものは、貰うてやるに限る。

紺屋の職人がどうにでもして勝手に染められる色にさへ値打ちを附けて、光明寺の和尚さんはまだ赤い法衣が着られないと言つてゐた。阿呆め、物の色はお天道さまの光で、いろ〳〵

に見えるのだ、人間の眼の加減で、赤いとか青いとか紫だとかになるまでぢや。それにこれは俺の色だ。ほかのものは赤い法衣を着ることならんといふのぢやもの。人の物とか我れの物とかいふのは、一番分らん話ぢや。赤い色は許さぬぞよと威張つてみても、御所柿の實が自然に赤く染まるのを、將軍樣だつてどうすることも出來ぬぢやないか。烏瓜の實は大僧正の緋ごろもよりも赤いぢやないか。阿呆め。駒鳥の胸は、御領主樣の緋縅の鎧よりも綺麗ぢやぞ。

　御領主の富田樣から、お布令が出た。あのお布令といふものが、自體氣に喰はぬ。村總體を一つの同じお布令で縛らうとしても、太いものがあつたり、細いものがあつたりして、工合よう行くものか。人間一人にお布令一つ宛別々でなけれや、ほんとには行かん。ほんとと言つても御領主樣の役人が考へてゐるほんとは、ほんとのほんとぢやない。俺を叱るお布令と源右衞門さんを叱るお布令と同じことでは、キッシリ行くものか。源右衞門さんにはお内儀があつて、子を産んだからお芽出たうと人が祝ふけれど、光明寺の和尚さんが、女子を引つ張り込むのは極内ぢや。香賣屋の肥えた娘のことは、俺のほかにまだ誰も村で知るものがないけれど、あれが和尚さんの子を生んで、若しそれが知れたら、えらい目に遭ふのは和尚さんであらう。同じことをしても、源右衞門さんなら芽出たうて、和尚さんなら惡い、といふ理窟が立つなら、御領主のお布令は、村方の人間一人々々別々に、一つ宛拵へて貰はねばならぬといふ理窟も立つ。

　人間が誰れでも蹈んで歩けて、蚯蚓やけらが自由に棲んでゐる土地へ、勝手に繩張りをして、これは俺のものぢや、と言つてゐるのも可笑しいが、海の底から拔いて來たものを、こんな玉にして、これは俺のぢや、俺よりほかにこんな見事なのは滅多に持つてゐるものがないぞ、とひけらかしてゐるのも阿呆ぢや。

　こんなことを、文吾は獨りで考へながら、大きな赤い玉を一つ取つて、疊の上へころ〳〵と轉がしてみた。

　其の時廊下に、山吹らしい足音が、バタ〳〵と響いたので、文吾は周章てて、數々の珠玉を押し隱しながら、

『俺は矢ッ張り、惡いことをしたのかなア。……』

と思つて、胸を抱いた。

　廊下の足音は山吹でなくて、源右衞門さんであつた。あんまり心配して、歩きつきがひよろひよろと女のやうになつてゐた。

『もういておいなはつたのか。』と、源右衞門さんは驚きの眼を瞠つた。

『もう、いて來ました。……お金はこれだけ、これは家の阿母さんに貰うて來ました。賣つてお金にして、餘つたのを持つて戻れというてでした。』と、文吾は平氣な顏をしてお金と玉とを出した。

　源右衞門を始め、同行は皆どうも怪しいと思つたけれど、倅文吾がどうして金と玉とを手に入れたか、見當の附けやうもなかつた。さうして、背に腹はかへられぬので、數々の珠玉を源右衞門が松坂の町へ持つて行つて、お金に換へて來た。其のお金は油屋の支拂ひをして、まだドッサリ餘つた。それが皆文吾の懷中に入つた。

　翌朝の出立に、文吾は突然、『あッ痛ッたゝたゝッ。』と腹を押へて、山吹の膝に倒れかゝつてしまつた。

　八人の同勢が七人になつて、村へ下向の途に就いた。

死刑

一

今日も千日前へ首が七つかゝつたさうな。……

昨日は十かゝつた。……

明日は幾つかゝるやろ。……

こんな噂が、市中いツぱいに擴がつて、町々は火の消えたやうに靜かだ。

西町奉行荒尾但馬守は、高い土塀に圍まれた奉行役宅の一室で、腕組みをしながら、にツと笑つた。

『乃公の腕を見い。』

彼れの腕は細かつたが、この中には南蠻鐵の筋金が入つてゐると思ふほどの自信がある。其の細い手の先きに附いてゐる掌が、ぽん〳〵と鳴つた。

『お召しでございますか。』

矢がすりの袷に、赤の帶の竪矢の字を背中に負うた侍女が、次の間に手を支へて、キッパリと耳に快い江戸言葉で言つた。

『玄竹はまだ來ないか。』

但馬守もキッパリと爽かな調子で問うた。

『まだお見えになりません。』

侍女は手を支へたまゝ、色の淺黑い瓜實顏を擡げて答へた。頰にも襟にも白粉氣はなかつた。

『おそいなう。玄竹が見えたら、直ぐこれへ連れてまゐれ。』

滅多に笑つたこともない但馬守、今日は殊に機嫌のわるい主人が、にツこりと顏を崩したのを、侍女紀は不思議さうに見上げて、『畏まりました。』と、うや〳〵しく一禮して立ち去らうとした。其の竪矢の字の赤い色が、廣い疊廊下から、黑棧腰高の障子の蔭に消えようとした時、『あゝ、これ、待て、待て。』と、但馬守は聲をかけた。

『御用でございますか。』と、紀は振り向いて跪いた。但馬守はヂッと紀の顏を見詰めてゐたが、

『其方は江戸に歸りたいか。』

優しい言葉が、やがて一尺もあらうかと思はるゝほどに長く大きな髱を載せた頭のてツぺんから出た。

『はい。』

紀の返辭はきはめて簡單であつた。

『歸りたいか。』

『はい。』

『歸りたいだらう。生ぬるい、青んぶくれのやうな人間どもが、年中指先でも、眼の中でも算盤を彈いて、下卑たことばかり考へてゐるこの土地に、まことの人間らしい人間はとても居られないね。狡猾で恥知らずで、齒切れがわるくて何一つ取り柄のない人間ばかりの住んで居る土地だ。取り柄と言へば、頭から青痰を吐きかけられても、金さへ握らせたら、ほく〳〵喜んでるといふ其の徹底した守錢奴ぶりだ。此方から算盤を彈いて、この土地の人間の根性を數へてやると泥棒に乞食を加へて、それを二つに割つたやうなものだなう。』

但馬守は、例の額の筋をピク〳〵と動かしつつ言つた。紀はなんとも答へなかつたが、厭で厭でたまらないこの土地の生ぬるい、齒切れのわるい人間をこツぴどくやつ付けてくれた殿樣の小氣味のよい言葉が、氣持ちよく耳の穴へ流れ込んで、すうツと胸の透くのを覺えた。

『あゝもういゝ、行け〱。……江戸はもう山王祭だなら、また賑かなことだらう。』

但馬守は懐かしさうに言つて、築山の彼方に、少しばかり現はれてゐる東の空を眺めた。紀も身體がぞく〱するほど東の空を慕はしく思つた。

二

暫らくして、紀が再び廣縁に現はれた時は、竪矢の字の背後に、醫師の中田玄竹を伴うてゐた。

『玄竹、見えたか。』

さも〱待ちかねたといふ風にして、但馬守は座蒲團の上から膝を乘り出した。

『見えたから、此處に居りまする。』

玄竹は莞爾ともしないで言つた。

『また始めたな、玄竹。其の洒落は古いぞ。』と、但馬守は微笑んだ。

『古いも新らしいも、愚老は洒落なんぞを申すことは嫌ひでございます。江戸つ子のよくやります、洒落とかいふ言葉の戯れ遊びは、厭でございます。總じて江戸は人間の調子が輕うて、言葉も下卑にござります。下品な言葉の上へ、無暗に「お」の字を附けまして、上品に見せようと企んで居ります。味噌汁のことをおみおつけ、風呂のことをおぶう、香のもののことをおしんこ。……』

『もういゝ、玄竹。其方の江戸攻撃は聞き飽きた。なら紀。』と、但馬守は玄竹のぶツきら棒に言ひたいことを言ふのが、好きでたまらないのであつた。江戸から新らしく此の町奉行として來任してから丁度五ケ月、見るもの、聞くもの、癪に障ることだらけの中に、町醫中田玄竹は水道の水で産湯を使はない人間として、珍らしい上出來だと思つて感心してゐる。

『玄竹さまは、わたくしがお火のことをおしと言つて、ひをしと訛るのをお笑ひになりますが、御自分は、しをひと間ちがへて、失禮をひつれい、質屋をひち屋と仰しやいます。ほゝゝゝ。』と、紀は殿様の前をも忘れて、心地よげに笑つた。

『紀どのは、質屋のことを御存じかな。』と、玄竹の機智は、敵の武器で敵を刺すやうに、紀の言葉を捉へて、紀の顏の色を赧くさせた。

『料理番に申しつけて、玄竹に馳走をして取らせい。余もともに一獻酌まう。』と、但馬守は、紀を立ち去らせた。

『殿様、度々のお人でございまして、恐れ入りました。三日の間、城内へ詰め切りでございまして、漸う歸宅いたしますと町方の病家から、見舞の催促が矢を射るやうで、其處をどうにか切り抜けてまゐりました。』

『それは大儀だツた。どうだな能登守殿の御病氣は。』と、但馬守は容を正して問うた。

『御城代様の御容態は、先づお見込がないといふところでございませうな。癆症といふものは癒りにくいもので。』と、玄竹は眉を顰めた。

『前御城代山城守殿以來、大鹽の祟りで、當城には碌なことがないな。』

『猫間川の岸に柳櫻を植ゑたくらゐでは、大鹽の亡魂は浮ばれますまい。しかし殿様が御勤務役になりましてから、市中の風儀は、見ちがへるほど改まりました。玄竹、辯ちやらが大嫌ひでございますで、正直なところ、殿様ほどのお奉行様は昔からございません。』と言つて、玄竹は剃り立ての頭を一つ、つるりと撫でた。

『譽められても嬉しくはないぞ。玄竹、それより何か面白い話でもせんか。』と、但馬守の顏には、どうも冴え切らぬ色があつた。

『殿様のお氣に召すやうな話の種は尠うございましてな。また一つ多田院參詣の話でもいたしませうか。』

『うん、あの話か。あれは幾度聽いても面白いな。』と、言ひかけた但馬守は、不圖玄竹の剃り立の頭に、剃刀創が二ヶ所ばかりあるのを發見して、『玄竹、だいぶ頭をやられたな。どうした。』と、首を伸ばして、覗くやうにした。

『いやア。』と、玄竹、頭を押へて、『御城内で、御近習に切られました。御城内へ詰め切りますと、これが一つの災難で……。』と、醫者仲間では嚴格と偏屈とで聞えた玄竹も、矢張り醫者全體の空氣に浸つて、少しは輕佻な色が附いてゐた。

『能登守殿の近習が、其方の頭を切るか。』と、但馬守は不審さうにして問うた。

『左様でござります。愚老の頭を草紙にして、御城代様のお月代をする稽古をなさいますので、成るたけ頭を動かしてくれといふことでござりまして。どうも危いので、思ふやうに動かせませなんだが、それでもだいぶ創が附きましたやうで、鏡は見ませんが、血が浸染んで居りますか。』と、玄竹は無遠慮に、圓い頭を但馬守の前に突き出して見せた。疊二枚ほど距つてはゐるが、但馬守の鋭い眼は、玄竹の頭の剃刀創をすつかり數へて、

『創は大小三ヶ所だ。……大名といふものは、子供のやうなものだなう。月代を剃らせるのに頭を動かして仕樣がないとは聞いてゐたが、醫者の坊主の頭を草紙にして、近習が剃刀の稽古をするとは面白い。大名の頭に創を附けては、生命がないかも知れないからな。』と言ひながら、但馬守は『生命がない』の一語を口にするとともに、少し顏の色を變へた。

三

玄竹は病家廻りの忙しい時間を割いて、日の暮れるまで、但馬守の相手をしてゐた。酒肴が出て、酒の不調法な玄竹も、無理から相手をさせられた盃の二つばかりに、ほんのりと顏を染めてゐた。一合ほどを量とした但馬守は、珍らしく二三度も銚子を代へたが、一向に醉ふといふことを知らなかつた。飲めば飲むほど顏色の蒼ざめて行くのが、燭臺の火のさら〳〵する中に、凄いやうな感じを玄竹に與へた。

玄竹は今日の奉行役宅が、いつもよりは更に靜かで、寂しいのに氣が付いた。夜に入るとともに、靜寂の度が加はつて川中の古寺の書院にでも居るやうな心持ちになつた。いつも氣に入りの玄竹が來ると、但馬守は大抵差し向ひで話をして障子には、大きな『××の金槌』と下世話に惡評される武士髷と、固い頭とが映るだけで、給仕はお氣に入りの紀が一人で引受けて辨ずるのであるが、それにしても、今宵は何んだか寂し過ぎて、百物語の夜といふやうな氣がしてならなかつた。

『玄竹、其方に逢つたのは、いつが初對面だツたかなう。』と、但馬守は空の盃を玄竹の前に突き出して、銚子の口を受けながら言つた。お氣に入りの紀さへ席を遠ざけられて、何かしら込み入つた話のありさうなのを、玄竹は氣がかりに思ひつゝ、落ち着かぬ腰を無理から落ち着けて、天王寺屋、米屋、千種屋と出入りの大町人に揃ひも揃つて出來た病人のことを、さまざまに考へてゐた。

『御勤役間もない頃のことでござりました。岡部様の一件から、いゝ、しようもないことが、殿様のお氣に召しまして。……』と、玄竹は圓い頭を振り〳〵言つた。さうして物覺えのよい但馬守がまだ半年にもならぬことを、むざ〳〵忘れてしまはうとは思はれないので、何か理由があつてこんなことを問ふのであらうと、玄竹は心で頷いた。

『あゝア、さうだつたなア。美濃守殿のことから、其方の潔白を聞いて、ひどく感心したのだ

つたな。全く其方は此の卑劣な、強慾な、恥知らずの人間ばかり多い土地で、珍らしい潔白な高尚な人間だ。余は面前で其の人間を譽めるのを好まんが、今夜は許してくれ。』と、但馬守はまた盃を上げた。

『黒い物ばかりの中では、鼠色も白く見えますもので。……』と、玄竹は得意氣に言つた。

『しかし、美濃守殿も、不慮のことでなう。江戸表參覲の出がけに、乘り物の中で頓死するといふのは椿事中の椿事だ。』と、但馬守の言葉は、死といふことになると、語氣が強く且つ沈痛の響きを帶びた。

『あの時は愚老も不審に思ひました。岸和田藩のお武士が夜分内々で見えまして、主人美濃守急病で惱んでゐるによつて診てくれとのお話。これから直ぐお見舞申さうと申しますと、いや明日でよい、當方から迎へをよこすと、辻褄の合はぬことを言うて、さッさと歸つて行かれるのでござります。翌る日も漸う巳の下刻になつて、ちやんと共揃ひをした武士が改めて愚老を迎へに見えましたが、美濃守樣はもう前の日の八つ頃に御臨終でござりまして。……』と、玄竹は天下の一大事を語るやうに、聲を密めて言つた。

『この土地で病み患ひをしたのは、其方の見立て書きがないと、江戸表へ通らないことは、かねがね聞いてゐた。其の特權を利用して、其の方は不當の袖の下を取るのだらうと、實は當地へ勤役の初めに睨んでおいた。ところが美濃守殿の一件で、言はゞ五萬三千石の家が立つか潰れるかを、其方の掌に握つたも同樣、どんな言ひがかりでも付けられるところだと、内々で注意してゐると、潔白の其方は、ほんの僅かな謝禮を受けて、見立て書きを認めたと聞き、實に感心したのだ。』と、但馬守は今もなほ感心をつゞけてゐるといふ風であつた。

『醫道の表から申しますれば、死んだものを生きてゐるとして、白々しい見立て書きで、上を僞るのは、重い罪に當りませうが、これもまア、五萬三千石の一家中を助けると思うていたしました。』と、玄竹はまた得意氣な顏をした。

『天下の役人が、皆其方のやうに潔白だと、何も言ふことがないのだが。……』と、但馬守は、感慨に堪へぬといふ樣子をした。

『い、い、しようもないことが、お氣に召したとは存じて居りましたが、しかし殿樣にあの時のことをすッかり愚老の口から申し上げますのは、今日が初めでござります。』

『余も其方の面前で、この事を譽めるのは、今夜が初めだ。其方とは何かにつけて、氣が合ふなう。』

『愚老も殿樣が守口で、與力衆の膽玉をお取り拉ぎになつたことを、今もつて小氣味よく存じて居ります。』

話がよく合ふので二人は夜の更けるのを忘れて語りつゞけた。

四

西町奉行荒尾但馬守が、江戸表から着任するといふので、三十騎の與力は、非番の同心を連れて、先例の通り守口まで出迎へた。師走の中頃で、淀川堤には冬枯れの草が羊の毛のやうでところ〲に圓く燒いた痕が黒く見えてゐた。

戯れに枯草へ火を移した子供等は、遥かに見える大勢の武士の姿に恐れて、周章てながら火を消さうと、青松葉の枝で叩くやら、燃えてゐる草の上へ轉がるやらして、頻りに騒いでゐた。青い水の上には、三十石船がゆつたりと浮んで、晴れた冬空の弱い日光を、舳から艫へいッぱいに受けてゐた。

伏見から京街道を駕籠で下つて來た但馬守

が、守口で駕籠をとゞめ、靜かに出迎への與力等の前に現はれたのを見ると眞岡木綿の紋付きに小倉の袴を穿いてゐた。何處の田舍武士かと言つたやうな、其の粗末な姿を見て、羽二重づくめの與力どもは、あつと驚いた。

與力の中でも、盜賊方と地方とは、實入りが多いといふことを、公然の祕密にしてゐるだけあつて、其の裝ひでもまた一際目立つて美々しかつた。羽二重の小袖羽織に茶宇の袴、それはまだ驚くに足りないとして、細身の大小は、拵へだけに四百兩からもかけたのを帶してゐた。鐺に嵌めた分の厚い黃金が燦然として、冬の日に輝いた。それを但馬守に見られるのが心苦しさに地方の與力何某は、猫に紙袋を被せた如く後退りして、脇差しの目貫の上り龍下り龍の野金は、扇子を翳して掩ひ隱した。

『遠方までわざ〳〵出迎へを受けて、大儀であつた。何分新役のことだから、萬事宜しく賴む。しかしかうして、奉行となつて見れば、各々與力同心は、余の子のやうに思ふ。子だから可愛いが、いけないことがあると叱りもすれば勘當もする。事によつたら殺すかも知れない。各々も知つてゐるだらう、御城與力や同心は、御城代へ勤役中預けおく、といふ上意だが、町奉行へは與力同心を勤役中下されおくといふ上意になつて居る。御城與力は、御城代の預り物だが町奉行は與力同心を貰つたのだ。詰まり各々は今日から、この但馬の貰ひ物だ。貰ひ物だから、活かさうと殺さうと但馬の勝手だ。其處をよく辨へて、正しく働いて貰ひたい。爪の垢ほどでも、不正があつたら、この但馬は決して默つてゐない。』

堤の枯草の上に立つて、但馬守は大きな聲で新任の挨拶に兼ねて一場の訓示演説をした。其の演説に少しも耳を痛めないで聽くことの出來た者は、多くの與力同心中で殆んど一人もなかつた。

『此地の與力は皆な贅澤だと、かね〴〵聞いてゐたが、しかしこれほどだとは思はなかつた。お蔭で但馬、歌舞伎役者の座頭にでもなつたやうな氣がする。』と、ひどい厭味を言つた時は、與力どもが皆な冷汗に仕立ておろしの襦袢の胴を濡らした。

かうして、但馬守は敵地にでも乘り込むやうにして、奉行役宅へ入つたのであつた。

天滿與力はそれから急に木綿ものの衣類を仕立てさせるやら、大小の拵へを變へるやら、ごたごたと大騷ぎをしたが、但馬守の眼は、キラキラと常に彼等の上に光つて、彼等は眩しさに尻込みばかりしてゐた。

但馬守は先づ與力どもを威かし付けて置いて、それから町家の上に眼を配つた。すると其處には、あらゆる腐敗が、鼻持ちもならぬまでにどろ〳〵と、膿汁のやうな臭氣を八方に流してゐた。其の中で、内安堂寺町に住む町醫の中田玄竹だけが、ひどく、氣に入つて、但馬守の心は玄竹の圓い頭を見なければ、決して動くことがなくなつた。

但馬守が玄竹を愛したのは、玄竹が岡部美濃守の頓死を披露するに最も必要な診斷書を、何の求むるところもなく、淡白に書き與へたといふ心の潔白を知つたのが第一の原因である。それから、但馬守が着任して間もなく、或るところで變死人があつた時、其の土地の關係で、但馬守の配下の與力と、近衞關白家の役人ともう一ケ所何處かの代官の何かの組下と、から三人揃はなければ、檢死は行はれない事情があつて、死體は菰包みのまゝ十日近くも轉がしてあつた。それで其の一町四方は晝間も戸を締めたといふほど、ひどい臭氣が、其の頃の腐つた人間の心のやうに、風に吹かれて飛び散つた。

漸く三組の役人、顏が揃うて、いざ檢死とい

ふ時、醫師として中田玄竹が出張することになつた。流石に職掌柄とて玄竹は少しも死體の臭氣を感じない風で、菰の下の腐肉を細かに檢案した。

『もういゝ加減でよいではないか。』

近衞家の京武士は、綺麗な扇で、のツぺりした顏を掩ひつゝ、片手で鼻を摘まんで、三間も離れたところから、鼻聲を出した。

『もうよい分つた。』と、但馬守配下の與力も言つた。

『ひどい蛆だなア。』と、一番近く寄つた某家の武士の側からでも、死體まではまだ一間半ばかりの距離があつた。

『もつと近うお寄りなさい。それで檢死の役目は濟みますか。』と言ひ〳〵、玄竹は腐つた死體を右に左に、幾度もひつくりかへした。皮が破れ、肉が爛れて、膿汁のやうなものが、どろ〳〵してゐた。内臓はまるで松魚の酒盜の如く、掻き廻されて、ぽかんと開いた脇腹の創口から流れ出してゐた。死體が玄竹の手で動かさるゝ度に、臭氣は一層強く、人々の鼻を襲うた。

『やアたまらん。』と、京武士は更に一二間も後退りした。

『もツと側へ寄つて、ほんたうに檢死をなさらんと、玄竹檢案書を認めませんぞ。』と、玄竹は大きな聲を出した。其の聲は遠くから、鼻を摘まみつゝ檢死の模樣を見たがつてゐる群衆の耳まで響くほど高かつた。

三人の武士は仕かたなしに、左右を顧みつゝ、少しづつ死體の側に近寄つて來た。玄竹は町醫であるけれども、夙に京都の方へ手を廻して、嵯峨御所御抱への資格を取り、醫道修業の爲めに其の地に遣はすといふ書付に、御所の印の据わつたのを持つてゐるから、平生は一本きり帶してゐないけれども、二本帶して歩く資格を有つてゐて、與力や、京武士の後へ廻らなくてもいいだけの地位になつた。

「まるで、今の世の中を見るやうに上も下も、すつかり腐つて居りますぞ。臭いもの身知らずとやら、この死骸よりは今の世の中全體の方が臭氣はひどい。この死骸の腐り加減ぐらゐは今の世の中の腐りかたに比べると何んでもござらん。」

玄竹は當てこすりのやうなことを言つて、更らに劇しく死體を動かした。三人の武士は、「ひやア。」と叫んで、また逃げ出した。――

この話を但馬守が、與力から聞いて、一層玄竹が好きになつたのであつた。それからもう一つ、玄竹が但馬守を喜ばせた逸話がある。

五

其の春、攝州多田院に開帳があつて、玄竹は病家の隙を見た上、一日其の參詣に行きたいと思つてゐた。ところが丁度玄竹に取つて幸ひなことには、多田院別當英堂和尚が、病氣になつて、開帳中のことだから、早く本復させないと困るといふので、玄竹のところへ見舞を求むる別人が來た。其の前年の八月、英堂和尚が南都西大寺から多田院への歸りがけに、疝氣に惱んで、玄竹の診察を受けたことがあるので、一度きりではあるが、玄竹は英堂和尚と相識の仲であつた。それで直ぐ準備をして、下男に藥箱を擔がせ、多田院からの迎への者を先きに立てて、玄竹はぶら〳〵と北野から能勢街道を池田の方へ歩いた。

駕籠に乘つて行かうかと思つたけれど、それも大層だし、長閑な春日和を、麥畑の上に舞ふ雲雀の唄を聽きつゝ、久し振りで旅人らしい脚絆の足を運ぶのも面白からう、何んの六里ぐらゐの田舍路を、長袖の足にも肉刺の出來ることはあるまいと思つて、玄竹は殆んど二十年振りで草鞋を穿いたのであつた。

北野を出はづれると、麥畑の青い中に、菜の花の黄色いのと、蓮華草の花の紅いのとが、野面を三色の染め分けにして其の美しさは得も言はれなかつた。始終人間の作つた都會の中ばかりを駕籠で往來してゐた玄竹が、神の作つた田舍の氣を心ゆくまで吸つた時は、ほんたうの人間といふものがこれであるかと考へた。駕籠なんぞに窮屈な思ひをして乘つてゐるよりは、輕い塵埃の立つ野路をば、薄靄に霞んだ五月山の麓を目當てに歩いてゐた方が、どんなに樂しみか知れなかつた。

左の方には、六甲の連山が、春の光りに輝いて、ところ〳〵赤く禿げた姿は、そんなに霞んでもゐなかつた。十三、三國と川を二つ越して、服部の天神に參詣し、鳥居前の茶店に息んだ上、またぼつ〳〵と出かけた。

玄竹の藥箱は可なり重いものであつた。これは玉造の稻荷の祭禮に神輿擔いだ町の若い衆がひどい怪我をした時玄竹が療治をしてやつたお禮に貰つたものであつた。療治の報酬に藥箱の進物といふのは、少し變だが、本道のほかに外療も巧者の玄竹は、若い者の怪我を十針ほども縫つて、絲に絡んだ血腥いものを、自分の口で嘗め取るといふやうな苦勞までして、漸く癒してやつた其の禮が、たつた五兩であつたのには、一寸一兩の規定にして、餘りに輕少だと、流石淡白な玄竹も少し怒つて、其の五兩を突き返した。すると、先方では大に恐縮して、いろ〳〵相談の末、或る名高い鍼醫が亡つて、其の藥箱の不用になつてゐたのを買ひ取り、それを療法の禮として贈つて來たのが、この藥箱で、見事な彫刻がしてあつて、銀金具の厚いのが打つてあつた。

五月山の木が一本々々數へられるやうになると、池田の町は直ぐ長い坂の下に見おろされた。此處からはもう多田院へ一里、開帳の賑ひは、この小都會をもざわつかしてゐた。朝六つ半に立つてから、老人の足だから、池田へ着いた時は、もう八つであつた。おくれた中食をして、またぼつ〳〵と、馬も通ひにくい路を、川に添うて山奧へと進んで行つた。今まで前面に見てゐた五月山の裏を、これからは後方に振りかへるやうになつた。美しい瀨を立てて、玉のやうな礫をおもしに、獸の皮の白く晒されたのが浸してある山川に沿うて行くと、山の奧にまた山があつた。權山といふ峠は、低いながらも、老人にはだいぶ喘いで越さねばならなかつた。峠の頂上からは、多田院の開帳の太鼓の音が聞えて、大幟が松並木の奧に、白く上の方だけ見せてゐた。峠を下ると、多田御社道の石標が麥畑の畔に立つて、其處を曲れば、路はまた山川の美しい水に石崖の裾を洗はれてゐた。川に附いて路はまた曲つた。小さな土橋が一つ、小川が山川へ注ぐところに架つてゐた。山川には橋がなくて、香魚の棲みさうな水が、京の鴨川のやうに、あれと同じくらゐの幅で、淺くちよろちよろと流れてゐた。正面にはもう多田院の馬場先きの松並木が枝を重ねて、ずうつと奧へ深くつゞいてゐるのが見えた。松並木の入口のところに、川を背にして、殺生禁斷の碑が立つてゐた。松並木の路は流石に廣くつて、松も可なりに太く老いてゐた。

參詣の老若男女は、ぞろ〳〵と、織るやうに松並木の路を往來して、袋に入つた飴や、紙で拵へた旗のやうなものが、子供の手にも大人の手にもあつた。太鼓の音に混つて、ひゆう〳〵と笛の音らしいものも、だん〳〵間近に聞えて來た。

松並木が盡きると、石だたみのだら〳〵坂があつて、其の邊から兩側に茶店が並んでゐた。「君勇」とか「秀香」とか、都の歌妓の名を染めた茶色の短い暖簾が、軒に懸け渡されて、緋毛氈

の床几を背後に、赤前垂の女が、甲高い聲を絞つてゐた。

『お掛けやす、お入りやす、息んでおいでやす。』

『御門内はお腰の物が許りません。お腰の物をお預りいたします。』

おちよぼ口にお鐵漿の黒い女は、玄竹の脇差しを見て、から言ひながら、赤い襷がけのまゝで、白い手を出した。『えらい權式ぢやなア。』と思ひながら、玄竹は脇差しを預けようとすると、多田院から來た迎への男が手を振つて、『よろしいよろしい。』と言つた。

『あゝ、御寺内のお客さんだつかいな。孫右衞門さん、御苦勞はん。』と、茶店の女は愛嬌を振り撒いた。

東の門から入つて、露店と參詣人との雜沓する中を、葵の紋の幕に威勢を見せた八足門の前まで行くと、向うから群衆を押し分けて、脊の高い武士がやつて來た。物を言つたことはないが、顏だけは覺えてゐる天滿與力の何某であることを玄竹は知つてゐた。この天滿與力は町人から袖の下を取るのに妙を得てゐる形だけの偉丈夫であつた。新任の奉行の眼が光るので、膝元では綿服しか着られない不平を紛らしに、こんなところへ、黒羽二重に茶宇の袴といふりゆうとした姿で在所のものを威かしに來たのだと思はれたが、多田院は日光に次ぐ徳川家の靈廟で、源氏の祖先が祀つてあるから、僅か五百石の御朱印地でも、大名に勝る威勢があるから天滿與力も幅が利かなかつた。

黄金作りの大小を門前の茶店で取り上げられて、丸腰になつたのを不平に思ふ風で、人を突き退けながらやつて來た其の天滿與力は、玄竹が脇差しを帶してゐるのを見て、怪しからんといふ風で、一層ひどく人を突き退けながら南の門の方へ出て行つた。

『馬鹿ツ。』と、玄竹は與力の後姿を振りかへつて獨言をした。

鷲尾山法華三昧寺多田院と言つても、本殿と拜殿とは神社風で、兩部になつてゐた。玄竹は本殿に昇つて、開帳中の滿仲公の馬上姿の武裝した木像を拜し、これから別當所へ行つて、英堂和尙の老體を診察した。病氣は矢張り疝癪の重つたのであつた。早速藥を調合し、土地の醫者に方劑を授けたが、其の夜玄竹は、塔頭の梅の坊といふのへ案内されて、精進料理の饗應を受け、下男とともに一泊して、翌朝歸ることになつた。五百石でも別當はこの土地の領主で、御前と呼ばれてゐた。其の下に代官があつて、領所三ヶ村の政治を執つてゐた。

其の夜、天滿與力の何某が、門前の旅籠屋に泊り、大醉して亂暴し、拔刀で戸障子を切り破つたが、多田院の寺武士は劍術を知らないので、取り押へに行くことも出來なかつたといふ話を、玄竹は翌朝聞いて齒痒く思つた。

翌日は別當の好意で、玄竹は藥箱を葵の紋の附いた雨掛けに納め、『多田院御用』の札を、雨掛けの前の方の蓋に立てゝ貰つた。さうして下男には、菱形の四角へ『多』の字の合印しの附いた法被を着せてくれた。雨掛けの一方には藥箱を納め、他の一方には土産物が入つてゐた。少し重いけれど、かうして歩けば途中が威張れて安全だといふので、下男は勇み立つて歩き出した。成るほど葵の紋と『多田院御用』の木札は、行き逢ふ人々に皆々路を讓らせた。大名の行列が來ても、五分々々に通れるといふほど權威のあるものに、玄竹の藥箱は出世した。

岡町で中食をして、三國から十三の渡しに差しかゝつた時は、もう七つ頃であつた。渡船が込み合つてゐるので、玄竹は路の片脇へ寄つて、待つてゐた。この次ぎには舟が空くだらう、どうせ日いつぱいには歸れまいから、ゆつくりして行かうと、下男にさう言つて、煙草をくゆら

してゐると、いつぱい人を乘せて、もう岸から二間ほども出かゝつた渡船をば、『こら待て、待て。』と、呼び留めながら、駈けて來たのは、昨日多田院で見た天滿與力の、形だけは偉丈夫然とした何某であつた。

武士に呼び留められたので、船頭は不承々々に舟を漕ぎ戻した。こぼれるほどに乘つた客は行商の町人、野ら歸りの百姓、乳吞兒を抱へた町家の女房、幼い弟の手を引いた町娘なぞで、一度出かゝつた舟が、大きな武士の爲めに後戻りさせられたのを、不平に思ふ顏色は、舟いつぱいに溢れてゐた。

天滿與力は、渡船を呼び戻してみたけれど、殆んど片足を踏み込む餘地もないので、腹立たし氣に舌打ちして、汀に突つ立つてゐたが、やがて高く、虎が吼えるやうに聲を張り上げると、『上れ、上れ。百姓、町人、同船ならん。』と、居丈高になつた。

さう言はれると、弱い者どもは強い者の命に服從するよりほかはなかつた。腹立たし氣な顏をしたものや、ベソを搔いたものや、怖さうにおど／＼したものなぞが、前後してぞろ／＼と舟から陸へ上つた。母に抱かれた嬰兒の泣く聲は、殊に哀れな響を川風に傳へた。

空になつた渡船へ、天滿與力は肩をいからして乘つた。六甲山に沈まうとする西日が、きらきらと彼れの兩刀の目貫を光らしてゐた。

船頭は惜々しさうに、武士の後姿を見詰めながら、舟を漕ぎ出した。

舟がまた一間半ばかり岸を離れた時、玄竹は下男を促して兩掛けを擔がせ、大急ぎで岸へ駈け付けて、

『待て、待て。其の舟待て。』と、高く叫んだ。

墨黑々と書かれた『多田院御用』の木札を立てて來られると、船頭はまた舟を返さないわけに行かなかつた。天滿與力は面を膨らしつゝ、矢張り『多田院御用』の五文字に膨れた面を射られて、うんともすつとも言はずに、雪駄穿きの足を舟から岸へ跨がないではゐられなかつた。……さうして炎の紋の附いた兩掛けに目禮して、片脇へ寄つてゐなければならなかつた。

玄竹は意氣揚々と、舟の眞ん中へ『多田院御用』の兩掛けを据ゑて、下男と二人それを守護する位置に跪いた。船頭が棹を取りなほして舟を出さうとするのを、玄竹は、『あゝ、こら、待て／＼。』と止めて、

『同船許す、みんな乘れ。』と、天滿與力に舟から引きおろされた百姓町人の群に向つて聲をかけた。いづれも嬉しさうにして、舟へ近付いて來るのを、突き退けるやうにして、天滿與力は眞つ先きに舟へ、雪駄の足を踏ぎ込んだ。其の途端、玄竹はいつにない雷のやうな高聲で、叱咤した。

『武士、同船ならん。』

天滿與力は、太い棒か何かで胸でも突かれたやうに、よろ／＼としながら、無念氣に玄竹の坊主頭を睨み付けたが、『多田院御用』の五文字は、惡魔除けの御符の如く、彼れを壓し付けて動かさなかつた。玄竹の高い聲に驚いて、百姓町人の群れまでが、後退りするのを、玄竹は優しく見やつて、

『百姓乘れ、町人乘れ、同船許す。』と、手招きした。天滿與力がすご／＼と船から出るのに、ざまア見ろと言はぬばかりの樣子で摺れちがつて、百姓町人はどや／＼と舟に乘つて來た。

鈴生りに人を乘せた舟が、對岸に着くまで、口惜しさうにして突つ立つた天滿與力の、大きな赤い顏が、西日に映つて一層赤く彼方の岸に見えてゐた。——

この與力は間もなく、但馬守から閉門を命ぜられた擧句に、切腹してしまつた。其の咎の箇條の中には、多田院御用の立札に無禮があつた

といふ件もあつた。

六

但馬守は新任の初めから、この腐つた大きな都會に大清潔法を執行するつもりでゐた。彼れはかねぐ書物を讀んで、磔刑、獄門、打首、それらの死刑が決して、刑罰でないといふことを考へてゐた。彼れは刑罰といふものが本人の悔悟を基礎としなければならぬと考へる方の一人であつた。殺されてしまへば、悔いることも改めることも出來ない。從つて、死刑は刑でないといふ風に考へた。

ところが彼れは、町奉行といふ重い役目を承つて、多くの人々の生殺與奪の權を、其の細い手の掌に握るやうになると忽ち一轉して、彼れの思想は、死刑をば十分に利用しなければならぬといふ議論を組み立てさせ、着々それを實行しようとした。

死刑は理想として廢すべきものだけれど、それが保存されてある以上、成るたけ多く利用しなければならぬ。曲つた社會の正當防衛、腐つた世の中の大清潔法、それらを完全に近く執行するには、死刑を多く利用するよりほかにないと考へた。往來で煙草を吸つたもの、込み合ふ中で人を押し退けて進まうとしたもの、そんなのまでを直ぐ引つ捕へて、打首にするならば、火事は半分に減ずるし、世の中の風儀は忽ち改まるであらうと思つた。

しかし、但馬守も流石に、そんな些事に對して、一々死刑を用ゐることは出來なかつたが、掏摸なぞは從來三犯以上でなければ死刑にしなかつたのを、彼れは二犯或は事によると初犯から斬り棄てて、其の首を梟木にかけた。十兩以上の盜賊でなくても、首は繋がらなかつた。死刑は連日行はれた。彼れが月番の時は、江戸なら淺右衞門ともいふべき首斬り役の刃に、血を塗らぬ日とてはなかつた。

「今日は千日前に首が七つかゝつた。」

「昨日は十かゝつた。」

「明日は幾つかゝるやろ。……」

こんな言葉が、相逢ふ人々の挨拶のやうに、また天氣を占ふやうに、子供の口にまで上るとともに、市中は忽ち靜まりかへつて、ひつそりとなつた。

但馬守は莞爾と笑つて、百の宗教、千の道德も、一つの死刑といふものには敵はない、これほど效果の多いものは他に求むることが出來ないと思つた。

配下の與力同心は慄へあがるし、人民は皆な往來を歩くにも小ひさくなつて、足音さへ立てぬやうにした。

芝居の土間で煙草を吸つて、他人の袂を焦がしたものも、打首になるといふ噂が傳つた時は、皆々蒼くなつた。それはもとより噂だけにとゞまつたが、それ以來、當分は芝居で觀ながら煙草を吸ふものが殆んどなくなつた。

噂だけでも、死刑といふものには、覿面の效力があると思つて、但馬守は微笑した。

七

氣に入りの玄竹を相手に、夜の更けるのを忘れてゐた但馬守は、幾ら飮んでも醉はぬ酒に、便所へばかり立つてゐたが、座敷へ戻る度に、其の顏の色の蒼みが增してくるのを、玄竹は氣がかりな風で見てゐた。夜はもう亥の下刻であつた。

「玄竹、多田院參詣の話は面白いなう。もう一度やつて聽かさんか。」と、但馬守は盃をあげた。

「何遍いたしましても、同じことでござります。」と、玄竹はこの潔癖な殿樣の相手をしてゐ

るのが、少し迷惑になつて來た。しかし、今からもう病家廻りでもあるまいし、自宅へ方々から、火のつくやうに迎への使の來たことを想像して、腰をもぢ／＼さしてゐた。

『玄竹。今夜は折り入つて其方に相談したいことがある。怜悧な其方の智慧を借りたいのぢや。…まあ一盞傾けよ。盃取らせよう。』と言つて、但馬守は持つてゐた盃を突き出した。

『有り難うはござりますが、不調法でござりますし、それに空腹を催しましたで。…』と、玄竹はペコ／＼になつた腹を十德の上から押へた。

『はゝゝゝ。腹が空いたか。すつかり忘れてゐた。今に飯を取らせるが、まあそれまでに、この盃だけ一つ受けてくれ。』と、但馬守は强ひて玄竹に盃を與へた。

『愚老にお話とは、どういふ儀でござりますか。』と、玄竹は盃を傍に置いて、但馬守の氣色を窺つた。

『玄竹、返盃せい。』と、但馬守は細い手を差し伸べた。

『恐れ入ります。』と、玄竹は盃を盃洗の水で洗ひ、懷紙を出して、丁寧に拭いた上、但馬守に捧げた。それを受けて、波々と注がせたのを、ぐつと飲み乾した但馬守は、

『玄竹。酒を辛いと感ずるやうになつては、人間も駄目だなう。幾ら飲んでも可味くはないぞ。』

『御酒は辛いものでござります。辛いものを辛いと思し召しますのは、結構で、…失禮ながらもう御納盃になりましては。…』

『其方と盃を取り交したから、もう止めてもいゝ。』

但馬守は悵然として天井を仰いだ。

『愚老へお話とは。』と、玄竹はまた催促するやうに言つた。

『ほかでもない、其方の智慧を借りたいのぢや。…』

『おろかものの愚老、碌な智慧も持ち合はせませんが、どういふ儀でござりませうか。』と、玄竹はまた但馬守の氣色を窺つた。

『玄竹、…三日の道中で江戸へ歸る工夫はないか。』

但馬守は、決心したといふ風で、キツパリと言つた。

『はア。』と、玄竹は溜息を吐いた。

『工夫はないか。』と、但馬守は無理から笑ひを含みながら言つた。

『韋駄天の力でも借りませいでは。…どんなお早駕籠でも四日はかゝりませうで。…』と、玄竹はもう面をあげることが出來なかつた。但馬守は屹と容を正して、

『今日、江戸表御老中から、御奉書が到着いたした。一日の支度、三日の道中で、出府いたせとの御沙汰ぢや。』と、嚴かに言つた。

『恐れ入りましてござります。』と、玄竹は疊に平伏した。老眼からは、ハラ／＼と淚がこぼれた。

『玄竹、今のは別盃ぢやぞ、但馬の生命も今夜限りぢや。死後の手當ては其方に賴む。』

『畏まりましてござりまする。』

玄竹は淚に濡れた顏をあげて、但馬守を見た。奉行と醫者とは、暫らく眼と眼とを見合はせてゐた。

『玄竹。…だいぶ殺したからなう。…』

但馬守の沈み切つた顏には、凄い微笑があつた。

昔、大阪の町奉行に荒尾但馬守といふ人があつたさうです。それとほゞ時代を同じうして、安田玄筑といふ醫者もあつたさうです。しかし、本篇の奉行荒尾但馬守と、醫師中田玄竹とは、それらの人々と全く無關係であります。

女帝の悩み

一

女帝はいま、病に悩んで、混亂した頭を、宮居の廂の方に向けつゝ、いろ〳〵のことを考へてゐる。――

自分がいま死んだら、世の中はどうなるであらうか。それを考へることによつて、女帝の頭はまづ混亂しはじめる。あゝア死にたくない。生きてゐたい。二百歳ぐらゐまでは生きられないものか。自分はもう、孫の珂瑠の王を立てて皇太子とし、皇太子を天皇の位に卽けて、いまでは太上天皇ぢや。しかし世の中の政治はまだ〳〵この掌に握つて離さない。病んでも離さない。死んでも離したくない。あゝア、それで死にたくないのぢや。

もうそれ、大赦も行うた。百人の僧に度牒を與へて、畿内の國々の寺々で、金光明最勝王經を講じさせたけれど、なんのしるしもない。自分の生命は今年いつぱいもつか、もつまいか。

自分の生命は惜しくない……とも無理から言へば言はれぬこともなからう。死にたくはないが、生命は惜しくない、と變なことも言つてみたい。しかし自分の生命の惜しいといふことよりも、自分が亡き後の天下の不安と恐怖とが、第一に氣がかりで、死んでも死にきれない。自分が眼を瞑るとともに、世の中が眞ツ暗になる。さういふ氣がするではないか。あゝア死にたくない。

當今を枕頭に呼び寄せ、太政大臣も側近く召して、もう遺詔といふものを下した。それで最後の覺悟はきめたつもりである。自分は女だ、女だから日輪だ。……とさういふ氣がしてゐる。

世の中に女ほどえらいものがあらうか。女は子を生む、男は子が生めないぢやないか。子を生むものがなければ、世の中にはいつか滅亡が來るにきまつてゐる。それだから女はえらいのぢや。自分は女の中の女ぢや。昔の大比留女牟知に並ぶべき女ぢや。あゝア自分が死ねば、自分の掌から、自分の握つた天下は離れる。さうして麻絲の亂れたやうに亂れるであらう。不安ぢや、恐怖ぢや、自分の冷たい骸も、其の不安と恐怖とに慄へるであらう。氷のやうな肉が慄へる。血汐の固く強飯のやうな塊りになつたのがびく〳〵と戰く。あゝア恐ろしや、恐ろしや。

死んでも死ぬまい、……と思ふ自分ではあるが、この病の床から、自分の最後の政治を布令して出しておきたい。それはこれまで、帝崩御の後には、必らず行うた群臣の素服して哀號することを止めるのぢや。白い裝束に悲しみを湛へて、正笏しつゝ哀號するもののなかに、欠伸をば笏の蔭に嚙み殺してゐるもののあるのを自分は見た。御父の帝天命開別の大喪の折にも、倭は背の君大海人の崩御の時にも。……

自分はこの虚禮を止めてやらう。さうして、日輪がいかなる日にも東から昇つて西へ沈むやうに、晝が來て夜が來るやうに、文武百官の務めは、大喪の日にも、常の如く怠らぬやう。自分の骸は、何んの儀式もなく、飛鳥の丘の煙と化するやう。……おうさうぢや。

二

萬事を簡素に、自然に、……との遺詔を、太政

大臣に下した女帝は、大きな枕に載せた白髪の頭が、いくらか輕くなつたやうにおぼえた。自分の白髪が、病んでも亂れぬ如く、自分がたとひ、あすの日、冷たい骸にならうと、自分の遺詔が、群臣萬民を感泣させて、世の中が案外おだやかかも知れぬ。日輪が西のかた生駒の山に沈む時、大空が淺緑に晴れわたつて、風もない靜けさを見せるやうに。

幾分の安心が、女帝の白髪頭をおちつかせて、うつら／＼と平和な眠りに落ちかゝつた。浮んで來るものには、何等の新しい考へがなくて、昔の夢ばかり繰りかへされた。

自分は旅が好きであつた。遠くへ御幸するのを、何よりの樂みとした。年々の花の頃には、思ひ出の多い吉野へ行かぬといふことがなかつた。吉野の山には花が咲く。自分の心にも花が咲いた。日嗣の位を辭して法體となり、帝から袈裟を賜つた大海人とともに、從者あまた具して、志賀の都から菟道まで、公卿たちに送られつゝ、世を遁れたのは吉野の山であつた。『虎に翼を附けて放つやうなものぢや。』と、公卿の誰れ彼れは囁いたとやら。自分には其の時の旅が一生で一番思ひ出深いものとなつた。

朱鳥四年の正月に、自分がたうとう位に卽いて、其の三月には早や旅好きの心おさへられず、伊勢に御幸しようとした。ところが高市麿といふ男、長々しい表を捧げて、三月の御幸は百姓の迷惑で、農事の妨げになるから、見合はせたがよからうと言つてよこした。誰れもほかにそんなことを言ふものはないのに、はてさて物好きの漢よと、自分はをかしくなつた。そこで其の事々しく長つたらしい表を、高市麿めに突きかへして、伊勢への旅を見合はせることはならぬと言ひわたした。さうなると、兩方が意地づくで、自分にはわるいと思つてゐても、押し切らねば、氣が濟まなかつた。しかし三月はまだ農業のさう忙しい時でないのを自分はよく知つてゐる。

　春すぎて夏來るらし白妙の
　　ころもほしたり天の香久やま

と詠んだ五月の頃にもなれば、水田に青い苗が、さながら湧き出すやうに萌えいでて、畦を傳ふ早乙女の姿にも、農事の忙しさは知らるゝ。しかし、三月はそれほどにもない。百姓の迷惑を厭うてゐては、自分なんぞ、とても外へ出ることはかなはぬ。いつも／＼宮居の奥深く垂れこめてゐねばならぬ。おほよそ自分たちの外出にあゝも仰々しい行列をつくつて、民草の上を踏みにじつて行くやうなことをしはじめたのはいつの世の頃からであらうか。古の帝は御笠深々と召させられ、從者とても一人か二人、百姓の耕すさまを御覽じながら、歩ませられたものぢやさうな。本街道が廻りになるなら、徑を傳ひ畦を渡つて近みちをあそばす。百姓は耕したまゝで、チラと見たばかり。『あゝあそこを帝の渡らせらるゝよ。よき稻作つて御感に入らう。』と考へるくらゐのもの。もし其の折に、鍬で顎をさゝへつゝ、田畑の中に立つて息んでゐるものがあつたら、輕く目禮ぐらゐはしたさうな。かうやつて、帝の御幸は露ほども民草の重荷にはならなかつた。かくてこそ、君臣水魚の交りではないか。自分もさうしよう。侍女一人召し連れて、伊勢まで行かう、とさう言つた時、さすがの高市麿も腋に汗して聞きよつた。けれども、萬乘の尊をもつて、左樣な輕擧はなりませぬとまじめくさつて言ふものがあつたので、自分の旅はやはり仰々しい御幸の式によらなければならぬやうになつた。

『どうあつても、自分は伊勢の旅を思ひとゞまらぬ。』さう言ふと、高市麿は重ねて自分の前へ出て來た。『百姓が迷惑いたしますれば。……』あの男の言ふことは、このほかになかつた。あ

の男はやがて冠を脱ぎ棄て、頭で床を叩いて、「このたびの御幸は思ひとゞまらせたまへ。」と強情を張つた。あの男が強情なら、自分も輪をかけて強情であつた。

『どうしても行く、伊勢へ行く。』と、自分は押して言ひ切つた。高市麿は、男泣きに泣いて退出した。其の時のをかしさ。冠を脱いで、床に頭を叩きつけつゝ、何やらぶつ／＼言つた樣子もをかしかつたが、落膽してすご／＼出て行く後姿に、一層の面白さがあつた。かういふ面白い餘興を見ることは、君主といふ窮屈な仕事に當らなければ、とても出來ぬ一つの得ぢや。

其の折の伊勢への旅は面白かつた。近江で湖水を眺め、大和で山ばかり見てゐた眼に、果てしもない大海原を見るのが先づ心地よかつた。其の大海原がどこまでも靜かに、鏡の面のやうにつゞいて、向うから來る小舟の姿が、さながら天降るが如く思はれたのもよかつたし、風が吹き荒んで、山のやうな荒浪の打ち上げるさまも、平生おとなしい男の氣が狂うたやうで、興のあることであつた。

伊賀から伊勢へ、過ぐる道々の國人へは、みな其の年の貢をゆるしたので、青人草は御幸を迷惑に思ふどころか、鼓腹して歡び迎へた。「これはどうぢや、よう見ておけ。……」と、眼に物を言はせて、供奉の列にあつた高市麿をふりかへつた時の、……あら心地よさ。

志摩の國では、百姓の男女とも八十歲以上には、稻を五十束づつ分ち與へたので、いづれもの喜びやう。君の御德は大海の如し、と跪いて嬉し泣きに泣くものを見た。其の時自分は大海の岸に立つて、天涯萬里の青海原を眺めた。自分の祖先はあの青海原から降臨ましましたのか。青海原も天の原もつまりは同じことであらうと考へた。天と海とはつゞいてゐる。繫がつてゐる。旅の好きな自分の、御幸の轍のあとは土の上に限られてゐる。いつかは一度、海を渡つて天に昇りたいといふ氣がしてゐる。自分の祖先が降臨まします前の住居の高天原に遊んでみたい。安の河原に撫子花が咲いてゐるのであらうか。――

あゝア、自分はもう死ぬのか。死ねば天に昇ると聞く。あの二見ケ浦から船出して、高天原に昇りたい。志賀の都で、父君とともに朝な夕な眺めくらした琵琶の湖は小さい。志摩や伊勢の海のやうに天へつゞいてはゐない。あゝア、苦しい。苦しく惱ましいうちにも、今一度海が見たい。ひろ／＼とした伊勢の海が見たい。音に聞く日向の海、それは天への一番近道だといふ日向の海が見たい。旅の好きな自分にも、日向の國は遠すぎて、轍のあとが及ばなかつた。あゝア苦しい、惱しい。自分の都を遷したこの藤原の宮では海が見えない。大和の國には海がない。攝津の國に都を遷せばよかつたのに、今となつては仕樣がない。自分が死んで、世の中に恐ろしいことがやつて來た時、都が海の畔にあつたなら、自分の孫たちはなんぼうか幸ひであらう。

三

女帝は、日に夜にうつら／＼してゐた。長い夢がいつまでもつゞいて、多事だつた其の生活を、そこへまた繰りひろげて、白髮頭の中に再現するのであつた。

天命開別の帝の皇女として生れた自分は、鸕野讚良と名づけられた。蘇我倉山田石川の麿の女の腹に宿つたのであつた。父君の御弟で、自分には叔父にあたる東宮大海人の皇子と婚を結んでから、間もなく、安らかでない日がつゞいた。父君の御代の八年に内大臣藤原鎌足が薨じて、國の柱石がなくなつたと皆々が憂

へた。自分も小ひさい胸を痛めたものゝ一人であつた。其の時あの伊賀の采女の腹から生れた大友が太政大臣となつた。父君の一粒種で、眼の中に入つても痛いとはしたまはぬやうなあの大友を、自分は甥でありながら、どうも嫌ひぢやつた。それは伊賀の采女宅子といふものを自分は好かなんだので、其の腹に宿つた大友も好きになれなんだのぢや。しかし、父君の御寵愛は伊賀の皇子大友の一身にあつまつて、娘たる自分、姉たる自分なんぞは、そこに居るかとも言はれなかつた。面白くない色合ひが、志賀の都の内外に漂うて、近いうちに何か恐ろしいことの起りさうな様子はあり〳〵と見えてゐた。其の不安と恐怖との中へ、かてて加へて、父の帝の御惱ぢや。御いたつきが輕くないばかりか、だん〳〵に重らせたまふ。

帝の宮居から、急の御使が我が夫大海人の宮へ見えた。大海人が急いで敕使に對面せんとする直衣の袖を控へて、自分は、大海人に囁いた。

『きつと、天位を讓らうといふ父の帝の敕命にちがひありませぬ。もう東宮の位に備つておいであそばす御身ながら、父の帝は御弟の御身よりは大友の皇子がいとしうて、位を大友に讓りたい御心はやま〳〵ながら、御身へ義理を立てての敕使故、必らずともに敕命を御辭退あそばせや。』とさう囁いた。妻でさうして姪にあたる自分をば、大海人はまたなきものとして何事も聽き從つてゐたので、この囁きも、すぐに耳の奥深くへ受け入れた。一人の甥ながらも、大海人は自分と同じに大友が嫌ひであつた。年なほ若くして、太政大臣顏をしてゐるのが氣に食はぬと言うてゐた。

ところで、大海人が敕使に對面してみると、帝が大海人を大殿に召さるゝといふことだけで、御位の話は何もなかつた。敕使の退出後、大海人が装束を改めて參内しようとしてゐるところへ、仲のよい蘇我の安麿が、馬を飛ばして駈け付けて來た。大殿の内の模樣は手に取るが如く分つた。父の帝は大友に御讓位の前提として、大海人を召さるゝといふことが、明らかになつた。もし、大海人が即座に天位をお受けするやうなことがあつたら、退出がけの殿中にいかなる企みがあらうも知れぬ。おそらくは、生きて再びこの宮居へは立ち歸れまいと、安麿が手眞似までして物語つた。自分はゾッと身ぶるひをした。大海人も慄へ戰いたが、しかし何をとばかり勇氣を振ひおこして、安麿を隨へつゝ、參内の車に乘うた。

大殿では果して、父の帝が御いたつきの枕近く大海人を召されて、天位を授けたまはるよし仰せられた。其の時の大海人の答へは、自分が教へたとほり其のまゝであつた。『臣生來多病にござりますれば、九五の御位に備はるとも、其の重器を保たんこと、覺束なう存じまする。願はくは、賢明で御すこやかな大友の皇子を立てて東宮となしたまひ、すぐにも御位を讓らせたまはんことを、心の奥底から念じあげまする。それは即ち陛下の御喜びで、また臣が幸にござりまする。臣は世の中に望みが何もござりませぬ。……しかし、たゞ一つの望み、それを陛下がおかなへ下さらば、それより上の幸はござりませぬ。』と、大海人はしみ〴〵と靜かに、肺肝を披いて見せるやうに、さう言つたのであつた。天智とまで言はれたあの賢い、眼から鼻へ智慧が突き抜けて、大千世界を包まうとするやうな父の帝も、御いたつきと、子ゆゑの闇とに御心の鏡が曇らせられてか、大海人の心の底の底までも見透す御眼の力はなくて、窶れさせたまへる御顏に、嬉し氣な笑を浮べられ、痩せ細つた手に、大海人の肉つきのよい手をとつて、『其のたゞ一つの望

みといふのは何か。』と御下問になつた。

『僧となつて、吉野の山に分け入るのが、たゞ一つの望みにはべれば……。』と、大海人は其の時啜り泣きをしながら答へた。この白々しい言ひ分、野心に充ち滿ちた精悍な面魂をして、多病といふのに、其の手の顫えふとつて、艶々しいこと、多血の脈が鋭くしかも靜かに力強く打つてゐる。それを病の御手に握り締めながら、父の帝は何一つ見ぬく眼力がなかつたのである。ほつと安心をして、大海人の退出を枕の上から見送つた父の帝の御顏に嬉し涙の露が、二たしづく、三雫。

すぐにまた勅使が、大海人の宮に立つて、大海人の東宮辭退と出家とを許され、見事な金襴の袈裟を賜はつた。眩しさうに其の袈裟を睨んで、其の時ニヤリと笑つた大海人の顏の色の物凄さ。自分もまたニヤリ笑つたが、やはり凄い色をしてゐたであらう。

其の日にすぐ剃髮して、大海人は吉野へと向つた。自分は一日おくれて其の後を慕うた。

四

大海人に吉野入りをさせるのは、虎に翼を附けて放つたやうなものぢや。……といふ評判はこの時から、宮廷の内外に起つて、不安に充ち滿ちた幾日かが送られたのであつた。父の帝の御惱は、日に〳〵重らせたまふばかりで、藥師の働も一向に、しるしが見えなんだ。大友の皇子は內裏の西殿におはして、織物の曼陀羅の前に端坐しつゝ、何事をか祈念してゐた。御側には左大臣蘇我赤兄、右大臣中臣金連、蘇我果安、巨勢人臣なんぞ控へてゐた。大友の言はるるやう、『天位は既に我れと定つた。群臣のうちに歸服せぬものがあつてはならぬ。』と、そこで手づから佛前の香爐をとつて、起ち上ると、『我れ今こゝに汝たち五人のものどもとともに、父の帝の大詔を拜して、儲の君となつた。この後もしこの大詔にそむくものがあつたら、天罰立ちどころに、其のものの身體を八つ裂きにするであらう。』と、おごそかに言ひわたした。すると、蘇我赤兄が起つて、『臣等五人のもの、君に從ひ奉りて、永久に忠節をつくすべく、御父の帝の大詔をいかでかそむき奉りませうや。もし違ふものがございましたら、直ちに天神地祇の誅罰をうけて、子孫は斷絕し、家門は滅亡するでござらう。』と申しあげて、卽座に大友へ一味の盟ひを立てた。それと殆んど時を同うして、父天命開別の帝は崩御になつた。——

この仔細を、吉野に居る自分と大海人とに告げ知らしたものは、朴井連雄君であつた。彼れは吉野の奧深く入つて來て、『臣近頃私の用事がござりまして、美濃の國までまゐりましたところ、大友皇子からの御沙汰ぢやと申して、人夫ども大勢が都へと馳せ上る樣子でござりました。御用の次第は、先帝の山陵を造らせたまふ次第と承りおよびましたが、それにしては不思議とも不思議、人夫め等は皆兵器を携へ居りまする。全く山陵造營とは僞り、それに事寄せて、今にも大友皇子の大軍がこの吉野の山に押しかゝり、君の御座所を取り卷くでござりませう。』と、息せき切つて言つた。其の時自分も大海人も、これはいよ〳〵思ふ壺に嵌つてまゐつたと喜んだが、それを色にも見せず、『何とて左樣のことあるべきぞ、大友は自分の弟、自分の夫には甥にあたつてゐる。其の大友に自分たちを害しようとする心のないのはよく分つてゐる。大友とて、まさかに一旦世を遁れた自分の夫に反叛の心があらうとは疑はぬであらう。山陵造營の人夫が兵器を携へたといふのも、夜道に狼を恐れたので、兵器と言つても、短い劍か、よもや長卷や弓矢は手にせぬのであ

らう。疑心暗鬼とやら、疑うてはならぬ、つゆ疑うてはならぬ。」と、自分は心の底をこんな言葉で押し包んで、わざと赤心を人のお腹に押しこむやうな風を見せたのであつた。朴井連雄君は、不服な顔をしながらも、親類同志の間柄のことを、他人が水でもさすやうに取られるのがいやであつたか、其のまゝ佛頂面をして、黙り込んだ。萬事はもうすつかり壺に嵌つてゐるのぢやといふ悦びを深く隠して、自分と、背の君とは、倚も困つたものぢやといふ顔をして見せた。

其の後へ、また一人の者が、吉野の山の奥へ法進に馳せ參じた。『このごろ近江の都では、大和の京へ通ずる道々に、候をおかれ、また莵道の橋守りに仰せて、大海人皇子の御用米を押さへさせられました。』

それを聞いた大海人は、すツくと立つて、法服をかなぐりすて、『もうこれまでぢや、位を退き、世を遁れ、病を養うて、身を全うせんものとの心づくしも泡になつた。禍の迫つてくるのを避けもせで、徒らに滅ぶるも口惜しゝ。いでこの吉野から奥州にでも落ちて行かう。』と、悲鳴をあげるが如く、痛まし氣に叫んだ。其の言葉の終るを待たで、自分はかねて用意の烏帽子に直衣を捧げて、背の君の法體をば拭ひ去るが如く俗體にかへた。

『いざ御車を。』と呼んで見ても、急場に用意も調はぬ。直ちに御馬に召されて、吉野を立たれた。從ふものは妃たる自分と御子の草壁、忍坂に、舍人、女孺たち十餘人、いづれも徒であつた。朴井連雄君もこれに加はつた。先づ村國の男依等を先き走りさせて、急に美濃の國に赴かせ、國司どもに觸れ知られて、後の恩賞を餌に、諸軍を發して、不破の關の要害を塞がせたのは、自分で言ふのも恥かしいが、自分の手柄であつた。これがなければ、あの勝利は思ひも寄らぬ。自分たちの一行が廿羅の村を過ぐる頃、藤蔓の弓に太い征矢を持つた獵師が二十餘人ほど出て來て、御供の人數に加はつた。莵田の郡まで行くと、伊勢の貢米を積んだ駄馬五十頭がちやがちやと音のわるい鈴を鳴らして向うからやつて來た。

五

『やよ、土民たち、其の馬入用ぢや。そこへおいて行け。』

先きに立つた舍人の一個は、大聲でから叫んだ。

『何んぢや、馬をおいて行け、ぢや。この馬はなア、大事の〳〵貢米を載せてゐるのぢや。馬をおいて行けや、米をおいて行かんならんわい。人間の肩では運び切れんこの米を、馬なしに運ぶ智慧があつたら、智慧と引きかへに馬は貸してやる。』と、口達者な農民の一人は、から言ひながらも、相手の武装した姿に、おそれ戰いて、尻込みした。しかし馬は平氣で、道草を食つて、馬子の尻込みに附き合はなかつた。

『馬なしに米を運ぶ智慧を貸してやる。それは運ばぬといふことぢや。米をこゝへおいて、土に上納するのぢや。こゝも王土の端くれぢや。』と、さう言ひながら、鎧武者の一人は持つてゐた鉾をとりなほすと、舍人は長い劍を拔いた。

『ひやア、盗人。米盗人。』と呼びながら、農民どもは手綱持つた手を離し、馬と別れて、馬を棄てゝおき、生命から〴〵といふ風で逃げ出したが、躓いて轉ぶもあり、突きあたつてよろけるもあり、威しに振り上げられた劍の光、突き付けられた鉾の輝きは、ぴか〳〵といつまでも藁をつかねた笠の上にあるやうに、農民はドン〳〵と追はれもせぬ野路をば、後をも見ずに逃げ去つた。其のをかしな有樣を見ながら、自分は大海

人と顔見合せてニッコリ笑つたが、百姓をいつくしむと、かねがね言つてゐながら、かういふこともしなければならぬ、今の身の上が、哀しくもまた寂しかつた。

駄馬の載せた米をおろして、其の米を棄てるのが惜しさうに、つくづく眺め込んでゐる舍人の横顔から、日が暮れかゝつた。急がねばならぬと、スッカリ裸體にした駄馬のうちの一番見まさりのするのを、自分の乘り料にと、舍人の手で自分の傍へ牽かれた。今までは大海人一人であつた馬上の人が自分と二人になつて、鐙を並べた。米を棄てた馬の數と徒立ちの人の數とが丁度合つて、人々は皆つゞいて馬に跨つた。米の代りに人を乘せた馬の行列が長くつゞき、徒立ちの人は一つもなくなつた。これで一行の勇氣は百倍した。大野といふところまで馬を打たせると、もう四邊は眞つ暗になつた。民家の垣をとはして松明をつくるのも舍人の役であつた。盗んだ馬の上に盗んだ松明が、あかあかと振り照らされ、やがてはこの馬上に、天下をも盗まうといふのである。

隱の郡まで駄馬の足を進めた時は、もうかれこれ夜半であつた。路傍に藁を堆く積みあげてあるのへ、舍人が松明の火をうつすと、天を焦さんばかりの勢ひで燃え上つた。邑のものはだいぶ驚いて戸をあけたが、怪しい鎧武者や、公卿の落人や女孺の如きものら一行が、駄馬に乘つて、さもさも疲れた風をしてゐる、百鬼夜行の生きた圖を見て、かゝり合ひになるなよ、とでも囁き合ふ樣子で、皆々戸を閉しつゝ、寢てしまつた風を装うた。

朴井連雄君は、高聲を自慢の咽喉を絞つて、『先帝の皇子、東國に入らせたまふなり、人夫どもの御用がある。早やまゐれ。……』と、繰りかへし繰りかへし、三度呼んだけれど、一人も召しに應ずるもののないのは、悲慘といふよりも滑稽で、滑稽といふよりは痛快でもあつた。世の中のことは、貢米を積んだ馬を牽いて行く土民を威かして駄馬を奪ふほどに、たやすくは行かぬものと、つくづく考へた自分と大海人との姿は、哀れであつた。しかし、このみじめさは、それから二里ばかり、道を急いで伊賀の郡まで行つたところで、十分に慰められた。そこには當國の郡司ども數百の人夫を引き連れてまゐり合はし、また高市の皇子もそこに馳せ加はられた。いよいよ進んで伊勢の鈴鹿に着くと、當國の國司三宅の岩床が五百の軍卒を率ゐて味方に加はり、大津皇子のあとから、惠尺たちも馳せ付けて來た。お供の人數がだんだん加はつて、喜悦の色は、大海人の顔にも雜兵ばらの額にもあつた。ふところ鏡に映して見ると、自分の頰にもありありそれが見えた。もう夜が明けたのに、人々は松明を棄てるのを忘るゝまでに喜んでゐた。昨夜のみじめな自分たちと、今朝の冴え冴えした自分たちとは、まるでちがつた人々のやうであつた。一晩眠らなかつたことなんぞは、皆々忘れてしまつて、なほも勢ひよく馬を進めた。

折も折とて、自分の計略の圖にあたつたことがわかつて、女軍師の鼻は高かつた。吉野から先發させた村國男依が、早くも美濃の國の軍兵三千人を發して、自分の言ひ付けにたがはず不破の道を塞いでゐた。そこで自分は男依に褒美の言葉を與へて、後日の恩賞を約し、其の大軍に迎へられて、不破の道を桑名へと進んだ。『もう大丈夫ぢや。大儀々々。』と、大海人の口から、滿足に感謝をかねた言葉が、馬上より馬上へと來た。伊勢は道が廣いので、二人は轡を並べて馬をうたせてゐたのである。自分の馬ももうあの貢米を載せた農民の駄馬ではなくて、男依の手から牽かせて來た鹿毛の逸物であつた。大海人にもやはり男依の手で連錢葦毛の

駿足が乘りかへに奉られた。心利いた男依はいかにもして、大海人と自分とに車をと思つて、いろ〳〵才覺したのであつたが、天ざかる鄙に恰好な車はなかつた。大海人は心の弛みと、徹夜の旅の疲れとで、馬上ながらに、うつらうつらと居眠りたまふ。自分は過ちのあるのをおそれて、馬を近く乘り寄せつゝ危かつたら、抱きとめて、落馬させぬやうにと心がけてゐた。實にも骨の折れた旅で、吉野から伊勢まで、なかなかに早く來たのを、自ら不思議に感ずるほどであつた。

　桑名の郡家に至つて、皆々馬から下りた。ここを當分の本營にするつもりなのぢや。大海人もハッキリと眼をさましてすぐに軍議を開いた。自分の獻策が多く用ゐられて、數日の滯留の間に、山背部の小田と、安斗の阿加布とに東海道を扼へさせ、稚櫻の五百瀬と土師の馬手とに東山道をきり從へさせた。東海東山並び進んで、味方の軍勢はいよ〳〵盛んに、近江の朝廷の運命は自分の掌に握つたのも同樣となつた。大友の死活はたゞ自分の思ひのまゝぢや。かへりみてこの時くらゐ、自分の胸の清々しく開いたことは、一生のうちに二度となかつたのである。

　近江の朝廷では、大海人が吉野を出て東國に入つたといふことを聞いた時、群臣皆色を失つたさうぢや。或は東國に赴いて降參しようとするのがあるし、また山澤に潛み隱れて、時節を待つか、其のまゝ土民の仲間に身を落さうかと思案するものもあつたげな。そんな風に、人の心がまち〳〵で、都は地震のやうに動搖したといふ話。

　しかし、近江の朝廷にも、父の帝このかたの勇士が少しはあつた。さう〳〵腰ぬけどもばかりではなかつた。勇士の一人は大友に勸めて、大海人が不破の關へかゝらぬ前に、僅かな騎馬の兵を催し、神速に追ひ討ちをかけたら、多くとも千騎はありとおぼえぬ大海人の同勢を殲滅することが出來よう、早く〳〵、と、焦つたけれども、大友は肯き入れずに、おそく謀つて、事をおくらしてしまうた。この時若し大友がこれに從つて、精鋭な騎馬武者を繰り出し、伊賀の郡あたりに砂塵を捲いて追ひ寄せて來たら、自分も大海人も、馬足にかけられて、生命はなかつたであらう。敵ながらも自分には弟、大海人には甥だけあつて、大友は二人の生命の恩人ぢや、と自分は一生この折の危さを考へるたびに苦笑ひをした。物事はすべて決斷が專一ぢやと、自分は其の時から、今の日まで思ひつづけてゐる。

六

　近江の朝廷の軍議は、さま〴〵で、なか〳〵きまらなかつた。其のうちにこつちの腰がいよいよ据つた。草も木も、大海人の旗いろものに動く勢ひとなつた。この勢ひを見て、眞ッ先きに桑名の軍門に降つたものは、大友方の大將大伴馬來田に其の弟吹負等であつた。そこへ尾張の國から國司小子部鉏鉤が二萬騎を率ゐて加はつたので、雪達磨の大きくなるが如く、味方の軍はます〳〵大軍となつた。大友方の意氣阻喪が思ひやられた。其の時遙か先手にあつた高市の皇子から桑名郡家の本營へ使が來た。大海人皇子の本營が遠くて、軍令を出すにも政治を行ふにも不便至極でござる。急いで近くに御座を進められい。それが使者の口上であつた。それで自分が桑名の郡家に留まつて後押さへになることとし大海人は其の日のうちに野上まで進發し、高市皇子に迎へられて、本營をそこにおいた。さうして、紀阿閇麿、置始連等を大將として、三萬騎で伊勢の大山越えに、大和へ向はせ、村國男依を大將として四萬騎で不破か

ら直ちに近江の都へ攻め入らせようとした。それもこれも皆桑名の郡家から授けた自分の軍法であつた。ところが吹負の軍勢が進み過ぎて、大友方の勇將大野果安に打ち破られて退いたので、自分は吹負を桑名の郡家まで召し寄せて、大に叱り付けたが、降參したばかりで、今までの味方を敵として戰つた苦しさが吹負の面にいツぱい現はれてゐたのが、哀れであつた。「なぜいつまでも大友のために働いてはやらなかつたか。勢のよい方に從ふのは卑しいであらう。」と、自分が言ふと、吹負が女のやうに顏を赧らめたのもいよ〳〵哀れであつた。吹負は其の時自分が大友の姉であることに漸く氣づいたといふ風に、どぎまぎしてゐた。「そなたのやうな勇士を敵に奪はれたことは、弟の不運であつたなア。」と、自分がしめやかな調子で言ふと、吹負はいよ〳〵慴ぢ入つて、顏はます〳〵赧くなつた。この時ぐらゐ自分は男といふものを調弄してやつたことが、一生のうちにもうなかつた。

吹負は負けたけれど、男依は大友方の軍を息長横川に破つて、敵の兜首あまた打ち取り、勝に乘じて、勢田まで進んだ。これも自分の意匠で、味方の軍兵には皆赤符を附けさせたから、敵を追うて進む勝色が、殊に麗はしくて花々しかつたと、注進のものが、殊にそこへ力を入れて告げ知らせた。「赤勝て、赤勝て。」と、戰見物の土民が皆さう言つたさうな。

其の時、大友はけなげにも、親ら三軍に將として打つて出で、勢田の橋の西詰に陣を布いた。さすがに天子の親征とて、其の陣が五里にもわたり、旌旗空を覆ひ、煙塵雲につながつた。さうして勢田の長橋の橋板を三丈ばかりの間剝ぎとつて、其の代りに、廣い一枚板のやうに別の板を接ぎ合はせたのを敷き、大海人の兵がそこを踏んだら、接ぎ合はした板がごツそり、三丈ばかりの間、川へ落ちる仕掛けをした上、强弓の勇士を選り出して、長く太い矢を雨の如く射かけさしたから、味方の軍勢もたやすく橋を渡りかねて、敵の矢に射すくめられた形となつた。

男依の部將に大分稚臣といふものがある。平生から武勇自慢で、天下廣しと雖も、鉾をとり弓箭をとつて、やつがれの右に出づるものありともおぼえぬ、と廣言を吐いてゐたので、たじろぐ味方の眼は言ひ合はしたやうに稚臣の上へ注がれた。一きは大きな赤符を鎧の上にひら〳〵さして、得意氣に馬上で乘りまはしてゐた稚臣も、先刻からの敵の弓勢に首をすくめて馬から下り、隅の方の木蔭に小ひさくなつてゐるやうに見られた。其の小ひさくなつてゐるものを、大きく見ようとして、いづれもの眼は、稚臣を木蔭から引き摺り出した。手で引き出したのではなくて、多くの眼の力が、この自稱勇士をばぢツとしてゐられないやうにしたのぢや。今はこれまでと、稚臣も潔く覺悟をしたか、日頃の廣言を、天に響く敵の矢聲に打ち消されもしないで、徒立ちに鉾を橫たへて、たゞ一人進み出た。「出た、出た。稚臣が出た。」の聲は、味方の陣中の口から耳へ、耳から口へと傳はつて、後陣のものは見えぬながらに、伸べ首をして、其の兜へ流矢を受けたりした。

稚臣はと見れば、あの鮮かな赤符を鎧の袖にひら〳〵させながら、鉾でもつて敵の矢を拂ひつゝ進んだ。何だか腰のところの恰好がわるい。どうも今に倒れさうな腰つきぢや。ふらふらしてゐる。しかし倒れはしないで、橋にかゝつた。橋にかゝつたと思ふと、コロリ倒れて、赤符が鎧の上を血のやうに流れてゐた。「稚臣が討たれた。」といふ聲が、また味方の軍卒の口から耳へ、耳から口へと傳はつた。敵の矢はいよ〳〵劇しく、ほんたうに雨のやうに飛

んで來る。稚臣が倒れたので、矢は皆橋の上を高く素通りして、味方の陣中に落ちるのぢや。味方にも強弓のものがないではないが、どうも足並みの亂れかゝつたためか、弓勢が弱くて、辛うじて川を越えるくらゐの、ひよろ〳〵矢が多い。大勇稚臣が討たれたと聞いては、ひよろひよろ矢がいよ〳〵ひよろ〳〵して、味方の足までが皆ひよろ〳〵になる。折角こゝまでやつて、敗軍かと、大海人の溜息を吐く背後へ、妃の自分が男の裝ひして、近侍の若い武士の如く立つてゐるのに氣づくものはなかつた。實のところ、この天下分け目の戰ひが氣になつて仕樣がないので、前の日ひそかに桑名の郡家から陣中へ乘り付けたのぢや。桑名にはちやんと、侍女の中で自分によう似たものを自分に仕立てて、後押さへの力を弛めぬやうにしてある。

稚臣は死んだのでない、討たれたのぢやない。自分の智慧が稚臣の上に働いてゐるのぢや。勇氣を持つて敵に打つかる人間一人の力は知れたものぢや。いかに力が強いとて、千貫目のものは持てぬ。其の半分も四半分もむづかしい。けれども子供だとて千人集れば千貫目のものは樂に動かす。力は多くを集めて、智慧は一人が働かせる。こんな平凡なことでも、十分に心得てゐる人は尠い。動もすると勇士によつて戰をしようとする。勇士なんか飾り物ぢや。實地に使つて役に立たぬ。どんな勇士でも矢が一つ頭へ刺さつたらまゐつてしまふ。其の勇士といふ看板を、騙して得用に使ふ、それが自分の智慧ぢや。およそいかなる勇士の勇氣も、女が子を産む時の勇氣にくらべては、物の數に入らぬ。子を産むのは國を産むのぢや。自分はさう信じてゐる、女の勇氣と女の智慧、其の前に廻つては、男の勇氣や男の智慧は何んでもない。見よ大勇士として名うての稚臣も、女の勇氣に操られて進んでゐるではないか。賢明な皇子として聞えた大海人も女の智慧の傀儡ぢや。あら心地のよいこと。

敵も味方も、倒れた稚臣の死骸と見ゆるものが、一寸二寸づつ、勢多の長橋の上を蚯蚓の這ふやうにして前進してゐるのを少しも知らずに、矢聲をあげ、鬨の聲を響かして、川をまん中に睨み合つてばかりゐた。一刻二刻とたつうちに、稚臣の死骸と見ゆるものが、一丈も二丈も先きへ行つてゐるのにさへ氣がつかぬほど、いづれも上氣してゐた。本陣の物見から、稚臣の死骸とおぼしい黑いものが、ほとんど眼には映らぬほど小ひさく、動くとは見えないで、いつの間にかだいぶ先きの方へ行つてゐるのを、會心の笑とともに眺めてゐるのは、自分の眼ばかりであつた。總帥の大海人さへそれを知らずに、あたら味方の勇士を名も知れぬ敵の矢にかけたと言つてガツかりしてゐる。

稚臣の身體がやがて、あの三丈ばかりの橋板の新らしく陷穽になつてゐるところまで近づいたと思ふと、死骸と思はれたものが、むツくり起き上つて、飛ぶが如く、新らしい橋板の仕掛けの上を駈け進み、敵も味方も、あはやと言つてゐる暇のないほど速かに、鋒取りなほして、陷穽の仕掛けの綱を切つてしまつた。この時おそくかの時はやく、自分は大海人を促して、總進軍の號令をかけさせた。まことに潮のやうに、味方の大軍は、もう危險の仕掛けのなくなつた勢多の長橋をば、順序よく混亂せずに、先きを爭ふこともなく、さうして迅速に渡つて行つた。其の先頭に立つものは、一旦死んだと見せかけた大分稚臣である。大友の同勢は、驀地に中軍を衝かれて本陣から潰亂し始めた。敵の先鋒智尊といふもの、獨り踏みとゞまつて力戰したが、大海人の近臣で自分の好きな稚臣が橋の西詰の崖下に隱れてゐて、不意に鉾を突き出したので、さすがの智尊もそれに脇腹をやられて討死し

た。そんな工合にして大友方の勇士は犬養連、谷鹽手なんぞ、皆味方の騙し打ちにかゝつて斃された。こんな次第で、この戰ひは、この爭ひは、大海人の吉野入りから隱山の大友の最期まで、スッカリ、智慧と勇氣との戰ひであつた。詭と眞との爭ひであつた。智慧は勇氣に勝つもの、眞は詭に負くるものとの信念は、自分の一生を通じて變らぬ。學問と言ひ武術と言ひ、皆詭で眞を破る方法を敎ふるものぢやと、自分は信じてゐる。詭といふものを一ばんよく活用するもの、それは女ぢや。女あつての男ぢや、男女あつての世間ぢや、女がもとぢや。

七

大友の最期は、姉の身として、自分の口から言ふに忍びぬ。隱山に逃げ込んで、みづから縊れたとなつてゐる。さういふ記錄を作つたのも自分の業ぢや。勢田の敗軍の後に、いたはしや、大友方では左右の大臣をはじめ、群臣が皆蜘蛛の子を散らすが如く逃げ失せて、御側には物部連麿と舍人一個ばかりが從うてゐた。この皇子は幼少の頃から賢くて、眼の光さへ、常人とは變つてゐた。學問を好み、武道を嗜んだけれど、行ふところが、眞一文字に過ぎて、詭の效用を知らなんだ。それが終りをよくせぬもととなつて、僅か二十五で滅びたのであらう。思へばいとしいものであつた。

自分は大友の最期に、せめてもの花を添へてやりたい心で、彼れのために辭世の一首をものしようとした。しかし彼れは和歌よりも漢詩に秀でて、日本の詩賦の元祖と言はるゝまでに、二十歳やそこいらで、才學ともに進んでゐた。それほどの秀才をむざ／＼殺す惜しさを償ふために、立派な辭世をば我が弟の作として後の世に遺したいと思うたが、彼れに代つて、彼れの詩を僞作するものは先づない。そこで自分は大友ほどの詩人の再び我が國に現はるゝまではと思うて、十幾年根氣よく待ちつゞけた。さうして漸く、大津の皇子を得た。この皇子は、大海人の第三の御子であるけれど、正妃たる自分の出ではなくて、自分の姉大田の皇女の御腹から生れられた。自分はこの皇子が大友にもまして、賢明に、學問武術に秀でたのを心にくく思つて、あまり親しくはしてゐなんだけれど、大友の辭世を僞作するとなると、どうしてもこの皇子に相談するよりほかはなかつた。皇子は自分の相談を受けて、當時の戰の記錄を題に、すら／＼と、卽座に一首を賦した。それも心にくいほどの手際であつた。大友滅びて十幾年、彼れの辭世は初めて世に出たのである。

金烏臨西舍、鼓聲催短命。
泉路無賓主、此夕誰家向。

これを大友の辭世とするに十分であつた。こんな立派な辭世まで遺したのだもの、權勢の爭ひの敗者として、我が弟は、いゝ最期を遂げたものとなつた。それがせめては姉たる自分の慰めでもあつた。

大津の朝廷を滅ぼして、其の左右大臣をはじめ、大友に與した百官有司を刑に處した翌年、大海人は位に卽いた。自分は直ちに皇后であつた。治世十五年は泰平の天下であつたが、淨御原の宮に黑雲がかゝつて、帝の崩御が萬民に知れ渡つた時、不安恐怖の時代はまたもや押し寄せて來た。

大田の皇女を母とした大津皇子と自分の腹に生れた草壁皇子との對立が、亂階となるのぢや。しかし、自分の眼の黑い間は決して、大津を昔の大海人にしてしまつて、草壁に大友の足痕を踏ませるやうなことをするものか。自分にはもうちやんと考へが定まつてゐた。新羅から來た僧の行心といふもの、大津皇子を相して、叛逆の心があると言つた。臣下の列にあらば、

御身完からず、と忠告した。其の一言を理由として、大津皇子は終に死罪となつた。群臣のうちには、生命まで召さずとも、出家を遂げさせて、山に入らしめたまへ、と諫むるものもあつたが、出家と山入とは、大海人の昔の例が、當てにならぬ證據として、今も活々してゐる。あんなことになつてたまるものかと、自分は嘲笑つた。

ところが、其の草壁の皇子が、間もなく病のために世を去られたのには、自分も何んだか報いの恐ろしさを感じかけたが、「女だぞ、自分は女だぞ、日輪だぞ。世の中にえらいものは女で、女の中の女は自分だぞ。」といふ自信が、自分の勇氣を百倍させて、自ら天位に昇つたのぢや。――

過去を追懐すれば、人生は幻の如きものぢや。しかし、自分は世の中のたゞ一人ぢや。日輪と同じものぢや。篤い病に犯されて、今は玉の緒のたのみも細うはなつたけれど、自分は死んだとて死ぬものか。三たびこの世で自分の前に來るべき不安恐怖の時代を、どういふ風にして動かぬやうに繫ぎとめようか。自分は死んでも死なぬ。

大友が滅びて十餘年の後に、大友の辭世を代作した大津は、己れの死に臨んで一首の歌も詩も遺す暇がなかつた。そんな暇を、自分は彼れに與へないまでに彼れを恐れたのぢや。――あア苦しい惱ましい。自分は今、大津皇子の辭世を代作をしてやりたいやうな氣がしてゐる。

(二四、五、一五)

鐵の門

目黒の原の枯草の上に寢轉んで、秩父の山に沈む夕日に照らされながら、澁谷發電所の煙突から出る毒々しい煤煙の行方を眺めるのが、私の毎日の樂みであつた。

去年の冬の初めに、この目黒の原の一番高い、眺望の佳いところを三千坪ほど仕切つて、竹の垣を廻らした人があつた。私の寢轉ぶ枯草は、其竹垣の中になつて、もう寢轉びに行くことが出來なくなつた。

それからこの竹垣の中へ、毎日幾臺もの荷馬車が曳き入れられて、煉瓦が運ばれる、木材が運ばれる。四邊の麥畑は、荷車の轍と馬の蹄とに、轢かれ、踏まれ、枯尾花は土方の鍬に掘り棄てられた。

一年經つた今年の冬の初め、久しぶりで目黒の原へ行つて見ると、曾て私の寢轉んだあたりには、大きな西洋造りの家が建つて、去年の竹垣は石の塀に變り、荷車を曳き入れた木戶は、鐵の門になつてゐた。さうして前の方の麥畑は小ひさな玉川砂利を布いた廣い道になつて、枯尾花の叢り生えてゐたところには、技巧を凝らした小松が並べて植ゑてある。

鐵の門の横の方は一面は、土地を掘り下げて、其處に石垣を築き、流石に濠は無いが、石垣の上には忍び返しとかいふ先の尖つた木が、一面に立て並べてあつて、其の下には長い釘のやうな金屬が下を向いて、曲者來らば突き刺さんと構へてゐる。敵は何處にあるのか知らんが、物々しい構へとはこのことであらう。

鐵の門、石の塀、尖つた木と釘との逆も木。私はこの中に住む人を大江山の酒顚童子のやうな人ではあるまいかと思つた。

年の暮には、この鐵の門の左右に、ドギ／＼と先を尖らした太い竹が三本づつ、見事に立ててあつた。

(「小ひさき窓より」より)

空想の花

一

不圖眼の覺めた和三郎は、あたりをキョロキョロ見廻した。何んだか餘りに明るいので、腦の中にまで太陽の光りが滲み込むやうな氣がした。

『一體何時だらう。』と、和三郎は先づ考へた。さうして、いつもならば、かういふ折に屹度出る欠伸が、一向出ないのに氣が付いた。無理に欠伸といふものをしようとして、いツぱいに口を開いてみたが、どうしても欠伸は出ない。一體欠伸といふものは、無理な働きに疲れた腦へ溜る一種の毒瓦斯で、それが口や鼻の奥から漏れて來る爲め、若しくは自然に漏らさうとする爲めに起る生理上の動作だといふことを聞いてゐたが、して見ると、今からやつて口を開いても、欠伸が催して來ないのは、自分の頭に疲れと、それに伴ふ毒瓦斯との殘つてゐない爲めであらうか、と和三郎は考へた。

何んにしても、近頃にない清々した快い氣持ちである。

『お作、……お作。……』と、和三郎は少し間をおきつゝ、妻を呼んでみた。けれども返辭がない。

『忠一、……忠一。……』と、息子の名を呼んでみた。矢張り返辭がない。

『みんな聾になつたのか。』と、和三郎は持ち前の皮肉な考へかたをして、今度は無意識にまた一つ欠伸をしようとして口を開きかけたが、矢張り毒瓦斯は出て來ない。

この間に一つ鐵砲の掃除をしておかうと思つて、いつもの床の間の隅を探りに行つたが、どうしたことか鐵砲が見當らない。

昨夜晩く歸つて來て、あの獵銃をば確かに此處へ置いた筈である。それが見えなくなつたのは、どうしたものであらう。彼れは今までだと、かういふ場合に、直ぐむら／＼と癇癪を起して、家内中の人間の名を呼びつゝ、怒鳴り立てるのであるが、今日はどうしたことか、其の癇癪が起らない。丁度欠伸が出なくなつたと同じやうに、癇癪も起らないのである。額に青筋の浮ぶこともない。

和三郎は昨日の獵に一日を費してもまだ足りなくて、仲間の獵夫五六人とともに、向う山を狩り暮したことを覺えてゐる。手を負はした牝鹿の池を渡つて逃げたのを追ひ廻し、暗くなつてから撃つた鐵砲の筒先きに、シュツ／＼と光花が走るのを見て、甚だ壯觀だと思つた。さうして日沒までといふ規則に反いて、こんなことをしてゐるのを、若し巡査に見咎められたら、大變なことになるであらうと考へて、少し怖くなつて來たのをも覺えてゐる。

到頭其の牝鹿を撃ちとめて、先づはこの日の稼ぎも出來たと喜びながら、牝鹿の四足を藤蔓で結はへ、松の生木の枝を拂つたので差し擔ひにして、寺家まで戻り、獲物を川へ浸して、石をおもしに流れ去らないやうにと、自分が殊に氣を付け、仲間に別れて川端を立ち去つてから、また後戻りして、藤蔓の端を杭に結び付けたことをも覺えてゐる。それから歸つて、臺所の圍爐裡の側で飲んだ三合のおしきせが、どんなに可味かつたであらう。

『待てよ。……』と獨言して、和三郎は漸く床の間の甚だ綺麗になつてゐるのに氣が付いた。

惠比須さまが鯛を釣つてゐる繪を描いた紙の掛けぢが、先代このかた煤ばんで掛かつてゐたのに、それが何處へか取り外されて、其の代りには、いつかお寺で見た極樂天堂の畫を、もつともつと美しく立派にしたやうなのが掛かつてゐる。前の三社よりはずツと大幅で、一目見ただけでも、身も心も春めいて、浮き立つやうな氣がする。

こんな見事な掛けぢは、兎ても俺の家なんぞにはなかつた代物である。俺の家ばかりではない、世の中にこんな、たまらないやうな美しさをもつた畫があらうとは思はなかつた。

さう思つて、和三郎は、稍暫らく何事をも忘れて、ぢいツと其の畫に見惚れてゐた。描いてある人物の一人々々に皆魂が籠つてゐるやうで、コツちで笑へば畫の方でも笑ひ、コツちで喜べば畫の方でも喜ぶといふ風に見える。さうしてこの畫の世界には、樂しみといふことより外に何もない、哀しみといふことと怒りといふこととは、疾くに忘れてしまつたといふ風な顏をしながら、働いてゐるのか、遊んでゐるのか、さツぱり見別けの付かぬ樣子をしてゐる。

たゞもう、恍惚として灘の上酒に醉うたやうな氣持ちで、和三郎は稍長いこと其の畫を見詰めてゐた。

つひぞ掛けぢとか畫とかいふものに頓着したことのない和三郎であるが、この畫ばかりには、妙に引き付けられて、床の間の前を立ち去ることが出來なかつた。それで、たゞもう、うーんと唸つてゐた。

二

何んといふ名の畫家が、こんな見事な畫を描いたものであらう、とさう思つて、和三郎は見るともなしに落款を見ると、これはまたどうしたことか、『忠一畫』としてある。忠一とは俺の息子だ。あいつが眞逆こんな畫を描く筈もない。裏の土塀へ消炭でかいた『へのへのもへ』の描きと、この畫の見事さとは、もとより比べものにも何んにもならぬ。

しかし、よく見ると、この『忠一畫』としてある、三字には、何處かに見覺えがある。いや見覺えどころではない、これは正しく忠一の手蹟だ。和三郎はかう思ふと不思議さに混つて、嬉しさが込み上げて來た。

あんまり畫にばかり心を奪はれてゐたので、今まで氣が付かなかつたが、床の間の掛けぢのみではなく、家の内全體が見違へるほど綺麗になつてゐる。自分が今此處で眼を覺ましたのだから自分の家だと思つてゐるものの、これが外から入つて來たのだつたら、屹度他人の家へ間違へて入つたのだと思ふであらう。間取りや何かが元のまゝであるから、今でもかうやつて安心して居られるものの、しかしどうかすると、眠つてゐた間にこんな家へ運び込まれたのではないかと思はれてならぬ。第一妻や子の名を呼んでも返辭のないのが不思議だ。

「お作、……お作。……」と、和三郎はまた少し聲を高くして呼んでみた。

『はい、只今。……』と、いふ聲が納戸の方でした。『はい、只今。……』何んだ人を馬鹿にしてゐる。そんな返辭は町の旦那衆の奥さんと呼ばれてゐる女どもの口から出る返辭だ。この片田舍の獵夫の嬶が、『はい、只今。……』もないものだと、和三郎は思つたが、いつもならそんな場合に、屹度癪に障つてならないのが、今日の特別な晴々した心は、どうしても癪なぞといふものを起させない。

けれども、其の『はい、只今。……』がどうしても氣にかゝる。俺の嬶は、そんな芝居染みたことをする女でないのだが、今日は俺が特別に晴々と心持ちが好いやうに、嬶も少し浮かれ

氣味になつてゐるのであらうか。そんなことをしてゐて、晩に買ふお米とおしきせの二合とに差し支へはないのであらうか。昨日の獲物のあの牝鹿が、今日賣れたら、割前が來るであらうが、さうでないと少し困る。矢つ張り、お作に遣り繰りをさせなければならない。

こんなことを考へてゐる和三郎の耳へ、ふいと心持ちの好い音が入つて來た。言ひ知れぬ快い響である。琴でもなければ、三味線でもない。勿論あの祝日に學校で醜い女教師が彈くオルガンなんぞではない。一體何んであらう。

和三郎は踊り出したいやうな氣になつて、つい、ふら／＼と其の妙なる音樂に操られつゝ、納戸の方へ入つて行つた。音樂は納戸のあたりから聞えるのである。

見ると驚いた。納戸の中で、ゆツたりと椅子に腰をおろして、得體の知れぬ樂器を弄んでゐるのは、現在我が妻のお作であつた。昨日まで、不如意な家政の切り廻しと、女には過ぎた力仕事とに窶れ疲れて、健康に生れ付いた其の身體も方々に弛みが出來たらしく、幾ら姥櫻でも、三十六にしては少し老け過ぎてゐると思つてゐたのに、それが急に若やいで、二十四五とも見えるほどになつてゐる。

何んだか知らぬが、龍宮の乙姫さまのやうな扮裝をして、手に持つてゐるのは、琵琶でもなく、琴、三味線でもなく、變な形をした樂器である。

これがほんたうに、家のお作なのであらうか。お作の成れの果――ではない、生れ更はり――なのであらうか、と首を傾げながら、和三郎は恐る／＼と言つたやうな氣味を少し混ぜて、試みに、

『お作。……』と、呼んでみた。

『はい。』

樂器を弄ぶのを止めて、から答へた聲は、樂器の音にも勝るかと思はるゝやうな美しい聲で、調子は矢張り元のお作に違ひないが、昨日までの濁聲とは、玉と瓦とほどの相違がある。

俺の鐵砲が見えなくなつて、こんな琵琶みたいなものが出て來た、といふやうなことを考へつゝ、和三郎は、お作が傍へ置いた樂器を見詰めてゐたが、何んだか怖いやうな氣がして、手に取つて見ることは出來なかつた。

『お作。……』と、和三郎はまた妻の名を呼んでみた。

『はい。』といふ金鈴のやうな聲は、昨日まで紫色をしてゐた彼女の脣の、今日は眞紅に燃ゆるやうな色になつたのを漏れて出た。

『ねえ、あなた。……』

和三郎はそれを聞くとまた喫驚した。さうしていよ／＼これは芝居だわいと思つた。昨日までは、『何んだい、お前さん。』と、噛み付きでもしさうにしながら言つた其の同じ口から、幾ら脣の色が紅くなつたとは言へ、「ねえ、あなた。』はふざけ過ぎてゐると思はずにゐられなかつた。

『ねえ、あなた。……わたしをお呼びになるのに、お作……と呼び棄てはいけませんよ。わたしは構ひませんけれど、村の人が皆笑ひますよ。さんを附けてね、お作さん……とから呼んで下さいましな、どうぞ。』

樂器なぞを弄ばずとも、話聲が其のまゝ音樂のやうで、言葉が直ぐ詩であるとさへ思はれた。

三

『お作、お作……さん。……俺の鐵砲はどうした。昨夜確かに床の間へ立てかけて置いたんだが。……』と、和三郎は少しきまりわるい思ひを

じながら、妻に訊いてみた。

『あなた、どうかもう少し、お言葉を綺麗にして下さいましな。……第一俺といふやうなことは、もう誰れも言ふものがありません。わたしですから、俺といふ言葉の意味も解るのでございますが、ほかの人には解りません。どうぞね、わたしと仰しやつて下さいまし。……俺なんぞと申す言葉は、百五十年も前にあつたさうで、昔の小說にはよく出てまゐりますわね。』

つんと澄ましてゐるのでもなくて、お作の樣子は何んとなくキリッとして、氣品が高い。これが昔の鄕士の末の零落した貧乏獵師の娘と思はれようか。よしんば祖父時代の鄕士に逆戻りしたとて、これだけの品のある妻は得られまい。――和三郎はたゞ譯もなくそんなことを考へた。しかし、俺は現に昨夜山狩りから戻つて、二合のおしきせを飲んで寢る時まで、俺といふ言葉を使つてゐたのだ。それが今朝になつて、俄に通用しない。そんな馬鹿々々しいことがあるものかと思ひつゝ、

『百五十年も前の言葉だ。……じやうだん言つちやいけない。俺は昨夜まで自分のことを俺と言つてたんだ。獵から歸つて、牝鹿を一頭擊ちとめたことをお前にも話して、喜ばしたぢやないか。』と、言つてみた。幾ら言葉を銳くして、突ッかゝるやうに言はうとしても、どういふものか、そんなけんどんな言葉は出ないで、優しみのある、情の籠つた言葉になつてしまふ。成るほどこれでは、俺といふ言葉が似合はしからぬ。

『ほゝゝゝ。あんなことを。……あなたは夢を見ていらッしやる。ほゝゝゝ。』と、お作は笑つて取り合はない。

『さうだ、俺は……いやわたしは夢を見てゐるのかも知れない。何んだか先刻からちッとも樣子が分らない。……』

『わたしも、あなたの仰しやることが、少しも分りませんわ。鐵砲……だなんて、そんなものは、今の世に何處へ行つたツてありやしませんわ。つい先頃まで、博物館に一挺ありましたけど、先祖の作つた罪惡を思ひ出していけないといふことで、燒き棄ててしまひましたわ。……さうさう、百科全書の中の畫にありますね、あれで見るだけですよ。あれと、昔東洋の或る國で使つた煙管とをよく間違へますよ。』

『博物館だとか、百科全書だとか、獵師の女房がえらいことを言ふやうになつたもんだね。お前はまだ博物館なんて、見たことがなかつたぢやないか。第一遠い町へ行かなけれや、そんなものはありやしない。』と、和三郎はけゞんな顏をした。

『……町。……ほゝゝゝ。』と、お作はまた笑つて、『成るほど、百五十年も前には、そんなものがあつたさうでございますね。人間が、うぢやうぢやと一つところへ集つて、軒と軒をくッ付けて家を建てたのですね。それが町でございませう。……それも圖書館にある百科全書で見ましたわ。何んでも其の時分の人間は、人間の生きてゐるのに必要なものを拵へるのに骨折らないで、賣つて儲かるものを一生懸命になつて作つたのださうでございますね。當てもないのに、これを拵へたら屹度賣れるだらう、儲かるだらうぐらゐに思つて、其の頃にはあつた職工といふ特別の階級の人間を大勢働かして、わるい空氣の中でせッせとやらしたものださうでございますね。そんな無理なことから、自然に町といふやうなものが出來て、波のやうな屋根瓦の下に、人間がうぢや〳〵と蠢いてゐたのでございませう。……今の世の中には、もうそんなものはございませんよ。食べるものや着るものを作ることを打ちやらかしといて、玩弄品や人形の着物や、人殺しの道具を拵へるのに夢

中になるなんて、氣狂ひじみたことはありませんもの。ほゝゝゝ。』

『お前の言ふことは、何んだか、さツぱり解らない。……第一俺は、……いやわたしは、鐵砲がなくちや、今日から働くことが出來ない。……じやうだんを言はないで、早く鐵砲を出して與れ。』

『ほゝゝゝ。まだあんなことを、ほゝゝほ。』と、お作はどうしても取り合はない。

『困るなア。……働かないぢや食へないぢやないか。』

『働く。……あなたはよく字書を探さなければや解らないやうなことを仰しやる。働くことと、遊ぶことが別になつてゐたのは、矢張り百五十年も前のことでございますよ。……今ぢやね、一年三百六十五日のうちで、毎日一人が五時間づつ、僅か十七日だけ働けば、――昔風に言つて――御覽なさい、あの綺麗な田や畑から食べるものが餘るほど取れるんですよ。……ついあなたの眞似をして働くなんていふ昔の言葉を使つてしまひましたけど。ほんの運動がてら、氣に向いた時に一寸田や畑へ出さへすれや、もうそれで食物は十分に取れるんですもの。……ですから大抵の人は、一日五時間十七日ぐらゐぢや働き足りないと言つて、其の倍の三十四五日も一年に田畑へ出る割合ひにやりますから、何處の家でも皆、食物が餘り返つてるぢやありませんか……百五十年も前には、百姓といふ特別の人間が毎日暗いうちから、星の光る夕暮まで働いても――これこそほんたうに昔流の働くといふ言葉ですわ――まだ食物が足りないで大騷動が起つたことがございますのね。それを考へると、まるで夢のやうでございますわ。』と、お作は靜かに靜かに言つた。

『うーん。……』と、和三郎はたゞ唸つてゐるだけである。

四

『お前が先刻鳴らしてゐた、其の變な形のものは、それや何んだらう。』と、和三郎はお作の傍に立てかけてあるあの樂器を指さしつゝ問うた。

『これでございますか。』と、お作はそれを取り上げて、『これは矢つ張り琴でございますよ。』と、言ひながら、靜かに歌うて、徐ろに彈いた。

東の空のほの〴〵と
汝が世は白みそめにけり。
この曉のさまを見て、
運命をいかにうらなはん。
ことにさやけき紅の
光をはなつ明星や、
やがて處女となるまでの
汝がおいさきのしるべせよ。
朝風舞をまふごとく
遙かに雲の袖を吹き、
雞は寢覺におどろきて、
まづしのゝめを呼びにけり。

聲の美しいこと、琴の音の妙なること。和三郎はそゞろに感心して、また恍惚となつてしまうた。

『いつの間に、お前はそんなにいゝ聲になつたのだ。……其の歌をうたふことや、琴を彈くことを誰れに敎はつたんだい。』と、和三郎は不思議でたまらないといふ顏をして、妻の側へ摺り寄りつゝ問うた。昨日までは變に日なたくさく、泥くさかつた彼女が、今日は實に百花の精を集めて搾つたといふやうな匂ひがする。

歌といへば、地主に雇はれて稻を扱きながら、頭から塵埃を被りつゝ、『一つ小山の竹松さん、なう竹松さん。……』なぞと濁聲でやつてゐたのが、あんな上品な歌をうたふやうになつた。何

んにしてもこれはどうかしてゐると、和三郎は腕を組みつゝ頻りに考へた。

『わたしは、これで、歌も琴も皆下手な方ですよ。皆さんはもつと〳〵お上手で、聲もいゝんですよ。それや聽いて御覽なさい。』と、お作は樂器をまた元のところに立てかけてから言つた。

『皆さんて、この邊の百姓の女房や娘が、皆歌をうたつたり、琴を彈いたりするのかい。……へーん。』と、和三郎は馬鹿々々しさうな顏をした。

『百姓？ほゝゝ。……百五十年も前には、そんな特別の仕事をする人があつたんでございますツてね。……德川家康とかいふ大將が言つたさうぢやございませんか、百姓は死なぬほどにして置け、ツて。……田畑を作つて年貢を納める爲めに生れて來たやうな、其の時分の百姓といふものは、農は國の本だとか、國の寶だとか言はれながら、粗末なものを食べ、汚いものを着て、いつも鋤や鍬を握つて、腰を屈めてゐるものときまつてゐたのでございますね。身體を眞ツ直ぐにして立つことと、暇のあることとは、百姓といふ者に取つて分不相應のことだツたのでございませう。成るほど、死なぬほどにして置けと大將に言はれた通り、やつと生きてゐるといふだけだツたのでございませう。……けれども今日では、もうそんな百姓といふやうな特別な人間はございませんの。百姓と言へば、世界中の人が皆んな百姓なのでございませう。何しろ先程申しました通り、一人がほんの少しばかり其の爲めに身體を動かしさへすれば、食物は餘りかへるのでございますもの。…昔の人は何故あんなに馬鹿であつたかと、それを考へると可笑しくなりますよ。働くなんて、御大層なことを言つて、……』

お作の話は、其の音樂にも劣らぬまでに美しく聞えるが、どうも和三郎の腑に落ちないことが多かつた。

『どうも、俺……いやわたしはよく分らない。しかしそれはまア追々分るだらうから、後廻しにしておいて、お前は一體其の歌や琴を誰れに習つたのだ。……それからいろ〳〵と物識りになつてるが、一體いつの間にそんなことを覺えたのか。學校へでも入つたやうだね。』と、和三郎はいぶかしく思ひながらも、それを顏色には現はすことが出來ないで、矢張り晴々した調子で問うてみるより外はなかつた。

『學校？……』と、お作は却つて不思議さうに首を傾けた。さうして漸く思ひ付いたといふ風で、『さう〳〵、學校といふものがあつたのですね。兵營とか學校とか監獄とか、あなたのお馴染な、いろ〳〵のものの中で、それでも學校だけは、ついまだ五十年餘り前まで、形だけでも殘つてましたが、今では到頭それも無くなつたのでございますよ。』と、さも〳〵面白さうに言つた。何が面白いのか、和三郎には分らなかつた。

『學校が無くちやア、仕樣があるまいね。』と、和三郎は自分が眠つてゐる間に、自分の家の内がスッカリ變つて、建て直したやうに綺麗になつたのを怪むとともに、世の中がまた家の内と同じやうに變つてゐるのを想像して、驚くべきことが夥多いであらうと思つた。

『學校でなければ、人を教へることが出來ないと思つてゐた開けない時にでも、少しづつ學校の無用を唱へた人があつたさうでございますね。詰まらないお荷物だとか、馬鹿々々しい鑄型だとか言つて、學校を貶した人も少しはあつたさうでございますが、初めは唯變人の言ひ草だと思はれてゐたことが、いよ〳〵ほんたうになつて來たんでございますよ。學校なんて、窮屈な鑄型に嵌め込まれないで、人間はもつと

樂々にしてゐながら、自由に物を覺えるやうになつたのでございますよ。……何しろ、一年三百六十五日の中で、食物を取る爲めに入用なのはたツた二十日ばかりですもの。昔のやうに活きてゐる爲めに心配したり、食ふのに苦勞したりすることは、決してないのでございますから、其の餘の三百四十日ばかりから眠る間を差し引いた殘りといふものは、善い智慧を磨き、分別を養ひ、藝事を覺え、快樂を味ふのに使はれるのでございます。わたしだつて、誰れにも習はずに、これだけのことを覺えましたし、歌も琴も自然に會得するんでございますよ。忠一はまた畫が好きで、あの床の間に掛けてありますあの軸物ね、あれはクラブの寫生でございますが、あれくらゐのものは直ぐ描くやうになりましてございますよ。活きて行くといふことに少しも困難がないから、持つて生れた才分は、誰れでも自由に表はすことが出來るんでございますもの。』

『うーん。……』と、和三郎はたゞ唸つてゐるばかりであつた。

其處へ、輕い靴の音が聞えて、お伽話の王子みたいな、天鵞絨の服を着た忠一が、踊るやうな足つきで歸つて來た。

五

あのまア、始終ぬツたんぼうの忠一が、まるで貴公子のやうになつたのに、和三郎は暫し呆れてゐた。しかし襤褸と手鍋とを提げるのに餘念もなかつたお作が、『お作』と、呼ぶには勿體ないまでに、奧方然として來たのに比べると、忠一の姿は丁度釣り合ひが取れてゐた。

こんなに立派になつて、何故下女も下男も置かないのかといふことを、和三郎は不圖考へて、妻に問はうかと、よツぽど思つたけれど、滅多なことを言つて、また笑はれるのも厭だと考へたので、默つて忠一の姿ばかりを見詰めてゐた。

十七にもなつて、行儀も何も知らず、よく惡い事ばかりする小僧だと思つてゐた忠一が、自分とお作とに向つて、ちやんと挨拶したのも、意外と言へば意外だが、其の裝ひと姿とに對しては、相當のことで、別に不思議ではなかつた。これならあの見事な畫も描ける筈だと、和三郎はスッカリ感心してしまつた。さうして、なほも忠一の樣子ばかりを見詰めてゐた。

『忠一さん、あなたはね、お父さんの御案内をして、少し外を歩いておいでなさい。今まで何處においでたんですか。』と、お作の忠一に物を言ふさまが、極めて物靜かで、優しく、慈愛が籠つてゐるのに、和三郎はまた感心させられてしまつた。さうして昨日まで、『おい忠公。』と、お作が呼ぶと、『なんでえ、おツかア。』と、忠一の答へてゐたのを思ひ出して、何が何やら、夢に夢見るとはこんなことかと、總てが分らなくなつてしまつた。

『僕ですか。圖書館に居りました。百五十年ほど前の文教記錄といふものを讀んでゐますと、其の時分には教育會議とかいふものがあつて、少しばかりの人が集つて、人を敎へることの筋道を相談したんですつて、あんまり可笑しいから、皆んなで笑つたんですよ。』と、忠一は無邪氣な樣子で母に言つて、

『さアお父さん、まゐりませう。』と、和三郎を促した。

『あゝあなた、お寢衣のまゝぢやいけませんわ。』と、お作は忠一の後から外へ出ようとする和三郎に追ひ縋つて、其の着衣を改めさした。

今まで氣が付かなかつたのを不思議に思つて、和三郎は其の純白な、柔かな寢衣を見入つた。さうして、それを脱ぐのが惜しまれてならなかつた。毛織でもなささうだし、絹物では

なし、得體の分らぬふつくりしたものに、身體を包まれてゐたのが、どうして今まで分らなかつたかと思つてゐるうちに、いつか其の寝衣は、する〳〵と身體から滑り落ちて、其の代りには、如何にも外を歩くのに都合の好ささうな、身輕で溫かなものを纏はされた。

『さア、行つていらツしやいまし。』と、お作は裏口まで送つて出た。出入をするのに裏口の方が便利なのは、元のまゝ變りがなかつた。

背戶に小溝があつて、淸らかな水のちよろちよろと流れてゐるのも、また元のまゝであつたが、其處に蹲つたやうになつてゐた崩れかけた土塀は、拭ひ去つた如く形を留めないで、其の跡らしく思はるゝあたりには、石榴が美しく實を結んでゐる。

小溝を跨ぐと、向うに土手があつて、其の上で、子供等がよく紙鳶を揚げたのであるが、土手の芝草は綺麗に磨きをかけた如く光つて、野菊でもあらうか、小ひさな花が、笑つてゐるやうに咲き揃つてゐる。

土手の前から小溝への間へかけては、帶のやうに細長い田であつたが、今は畑に變つて、果樹らしいものが、ずらつと植ゑられてある。しかし今は花も實も着けてゐない。

『此處は仕樣のない瘦土で、何を植ゑてもうまく行かないから、こんなことにしてあるんで、氣候も此處は天然のまゝに打ちやらかしてあるんです。……それでも、かうやつて梨の樹を植ゑたら、一年に一度は實が生りますよ。』と、先きに立つた忠一が、昨日に變る血色のよい手を振り〳〵指さし示した。

『こんなとこへ梨を植ゑて、實が生つたら、盜まれるだらうな。垣根でもして、入口の戶に錠をおろしとかなけれやいけない。……一體何處の家で持つてるんだ。』と、和三郎は細長い梨畑を見渡しながら言つた。忠一はくす〳〵笑ひ出して、

『ほんたうにお父さんは、阿母さんの言つた通り、字書でも引かなけれや解らないやうなことを、よく仰しやいますね。』と、まるで取り合はなかつた。

『だつて、さうぢやないか。垣根がなけれや、人が入つて盜むだらう。垣根があつたツて盜むだらうが、それでも垣根さへあれや幾らか安心といふものだ。』と、和三郎は却つて、忠一が矢張りとぼけたことを言ふと思つてゐた。

『垣根？……垣根？』と、忠一は稍暫らく考へてゐたが、どうしても思ひ出せない樣子で、かくしから赤い表紙の小ひさな字書を取り出して引き始めた。さうして莞爾と笑ひながら、『人の通行を妨ぐる設備、……と書いてありますね。塀とも柵とも言つたんでせう。そんなものは、今の世にありませんよ。欲しいものは、何んでも勝手に取つて、食べもすれば用ゐもする。それを拒むものはありません。昔は垣根なんぞ拵へて、或る一人の人がいやに慾張つたから、自然にまたそれを欲しがるものが出て來たのでせう。欲しがるのは自然で、垣根を拵へるのは無理なのでせう。……お父さん御覽なさい、何處の家だつて、垣根なんていふものはありませんよ。』

忠一が指さした方を見ると、成るほどそんなものは一つもなくて、家だけが美しく畫のやうに、ぽつり〳〵と建つてゐた。『さうかなア、欲しいものが皆自由に得られるから、盜むといふことはなくなる。盜むことがなくなれば、垣根もいらないのか。』と、和三郎は首を傾げつゝ獨言をしたが、どうもよくは呑み込めなかつた。

『そんなことを言ふけど忠一、ドッサリあるものはいゝが、數の尠いものは矢ッ張り大勢の人へ行き渡らないから、持つてゐる人と持つてゐない人とが出來て、欲しがつたり、盜んだりす

ることがありやしないか。……黄金とか寶石とかいふものは。……』

『あゝ、あの昔の野蠻人の玩弄品ですか。野蠻人はあんなキラ〳〵光るものを身體に着けて喜んでゐたんださうですが、今は博物館の棚の上で、塵埃まみれになつてますよ。誰れがあんなもの欲しがるもんですか。……昔は數の尠いものが貴重品だつたんですね、隨分變な話だ。今は數の多いものが貴重品で、つまり必要だから多く出來るといふ自然の掟に合つてるんですよ。昔の野蠻人は、隨分自然の掟に外れたことをして、生きてゐたものと見えますね。……人間同志が傷つけ合つたり、殺し合つたりしたのも、それが爲めでせう。……』と、忠一は少しも生意氣な風がなくて、しツとりと重味のある口調で言つた。

『さうかね。俺には何んだか、解つたやうな解からないやうな氣がしてるが、しかしあの梨畑は誰れが持つてるんだね。』と、和三郎はもう行き過ぎてしまつた細長い梨畑の方を振りかへりつつ言つた。

『誰れが持つてる？……』と、忠一はけゞんな顔をした。

『誰れの所有地なんだ。』と、和三郎は重ねて訊いた。

『所有地？……何んのことですか。……』と、忠一はまた急いで字書を引き始めた。

六

いつの間にか和三郎は、いろ〳〵の野菜や穀物類の、こぶ〳〵と勢ひよく伸びたり、繁つたり、實つたりしてゐる肥沃な田園の中に連れられて來てゐた。

引き込まれた水は、清らかに流れ、野菜類は春のものも秋のものも皆一所になつて、見ただけでもおいしさうに肥え育つてゐた。苺が紅く滴りさうになつてゐるかと思へば、トマトがそれと色を競ふやうにして、枝もたわゝに實つてゐた。こつちに筍が黄色い芽を出してゐるかと思へば、あつちには蕈が巧みに栽培されてゐた。

『筍や松茸まで、畑に作るやうになつたのか。』と、和三郎は寧ろ嘆息するやうにして言つた。

『お父さん、雨が降つて來たやうですね。あんなにいゝお天氣でしたが、矢つ張り秋は空模様が變り易いんですね。』と、忠一は空を仰ぎながら言つた。

『さうか、それは困つたなア。傘を持つて來れや好かつた。』と言ひ〳〵、和三郎も空を仰いだが、成るほど一面に曇つてゐて、太陽の形は見えないやうだが、雨の滴の落ちて來る樣子は更らになかつた。

『お父さん、大丈夫ですよ。此處に居れや濡れやしません。』と、忠一は微笑んでゐる。

『雨が降つても、濡れない。……そんなことがあるのか。』

『えゝ、この上が皆ガラス張りになつてゐますから。……』

『なに、ガラス張りだ。……そんなことが、……』と、和三郎は意外に思つて、また空を仰いだが、成るほどさう思つて見ると、上の方に靄のかゝつてゐるやうなのが、ガラスなのであらう。それにしても、接ぎ目一つ見えなければ、桟や骨の現はれてゐない、技術の巧みさには、まだ自分が欺かれてゐるのではないかと思はれた。

『お父さん、昔の野蠻時代にも、これの極く小ひさなのがあつたんでせう。ほら、何とか言つたんですね。』と、言ひ〳〵忠一はまたかくしから字書を取り出した。

『お父さんにお話するには、一々古語の字引がいるんですから、面倒くさいや。』

こんなことを言つて、忠一は字書を繰り披いてゐたが、やがて、大變な發見でもしたやうに、

『さうだ〳〵。溫室！ 溫室！』と、叫んだ。さうして、『ねえお父さん、溫室と言つたんでせう。……此處は詰まり其の溫室の大きなのですよ。この田も畑も皆大きな溫室の內にあるんです。』と廣い田園を見渡しながら言つた。

『うーん。……』と、和三郎はたゞ呆れてゐるばかりであつた。

『お父さん、こんなにまでするには、隨分長いことかゝつて、大勢の人たちが骨を折つたんですよ。』と、忠一は莊重な口調になつた。さうして、『でもね、大昔からあつた戰爭といふ厭なことが、國際の上にも、種族の間にも、また階級とか言つた昔の習慣の點にも、皆無くなつたものですから、それに費してゐた無駄な人間の力を、かういふ方へ持つて來ることが出來たので、こんな大きな溫室が、世界中方々に造られるやうになつたんです。』

『うーん。……』

『お父さん、百五十年も前に、或る一部の進んだ人によつて唱へられてゐました集約農法といふのが、立派に出來上つて、追々とそれが改良されたんですよ。……農作の上に天候を心配するといふやうなことは、隨分長くやつてゐた人間の惱みだつたんですが、かうなつて見ると、全く昔のことは馬鹿々々しいもんですね。』

『うーん。……』

『御覽なさい、向うの方でやつてるでせう、若い男や女が、……あゝやつてあの丸いものを一つ動かしてさへゐれば、田畑が耕されもするし、種を蒔くことも出來るし、草を取ることも出來るんです。これはもう百五十年も前に、フランスあたりでやつてゐたのを少し改良したばかりなんですが、蒸汽の力で鋤や種蒔機械を動かしてゐたのが、電氣の力に變つただけで、一層簡便になつたのです。……詰まり大昔の粗放耕作が集約農法に變つたので、同じ廣さの地面から十倍以上、事によると百倍ぐらゐの作物を收穫することが出來て、人は皆欲しいだけの食物を勝手に取つた後は、牛や羊や豚や雞の餌にしますし、あゝやつて、誰れにでも食後の運動がてら、耕作が出來るんですもの、勞働とか分配の苦情とかいふ、古語辭典を引かなければ解らないやうなことは、全く大昔の夢になつたんです。』と、忠一の話し振りは、だん〳〵重々しく、お辭儀をして聽かなければならないもののやうになつた。

七

和三郎は忠一に連れられて、山川の岸へ出た。此處はよく獵に出た時獲物を漬けたところだ。けれども今は、そんな穢らはしい獸の死骸なぞはなくて、澄み切つた水が岸の小笹を洗うて流れてゐる。

『少し寒くなつた。』と、和三郎は心もち身を震はしながら言つた。

『さうでせう、此處はもう、天然のまゝの氣候ですから。……溫室の內ぢやありません。……雨がやみました。』と、忠一は空を仰ぎつゝ言つた。

對岸から、若い女が大勢、いろ〳〵の食物や食器らしいものを持つて、橋を渡つて來るのが見える。

『あれは何んだね、お寺で何んとか講でも勤まるのか。』と、和三郎は其の女の群れを見詰めつゝ言つた。

『いゝえ、晝飯の支度をするんでせう。あゝやつて每日氣の向いた人だけが食事の用意をするんです。昔のやうに、仕事と遊びとの區別がありませんから、何んでも氣の向いた人間だけが

好きなことをしてゐれや、それでいゝんです。』と、忠一も其の女の群れを眺めてゐた。
『あんなに大勢で晝飯の支度をするところを見ると、村の人が一つ處に集つて、食事をするんだと見えるね。』
『さうです。あの大きな溫室の內に花園がありますから、大抵其處へ食卓を並べて、皆んな一所にやります。……しかし氣の向かないものは、自分の家で自分に拵へて食べたつて無論構はないんです。總てが自由ですから、料理を拵へる方も自由なら、食べる方も自由なんです。……しかし、仕事と遊びとの區別がまるでないんですから、誰れかしら拵へるものがあつて、誰れかしらまた食べに來るものがあるんです。さうして拵へる分量と食べる分量とが、大抵しつくり合ふのも、妙ぢやありませんか。』
『うーん。……』と、和三郎はまた唸り出した。
『何んだか若い女ばかりだね。俺の知つてるのも居るのだらうが、まるで活々と樣子が變つてるから、さつぱり分らない。』と、和三郎は橋を渡つて來る女の人を、一人々々檢める風にして言つた。
『いゝえ、この中には隨分年を取つた人も居るんですよ。あの玉菜の入つた籠を提げてる人は、あれでもう五十ですが、二十歲ぐらゐの人とさう變りません。』
『あの人が五十？……』と、和三郎は今までのうちで一番驚いたやうな顏をした。
『生きて行くことに就いて、苦勞といふものをしないんですもの、顏に皺がよることなんぞありやしません。……心を痛めるともいふんでせう、苦勞といふ言葉は。……』と、忠一はまた字書を出しかけた。
　其處へ、矢張り野菜の入つた籠を提げた、十四五と見ゆる少女が橋を渡つて來て、いきなり忠一に縋り付き、堅い〳〵握手をして、にツこり笑ふと、バタ〳〵と無邪氣に駈け去つた。
『あれは何んだ。……』と、和三郎は少し眼を光らした。
『あれですか。あれは僕の戀人で、許嫁です。僕が二十五になつて、あの人が二十四になつたら、結婚するんです。』と、忠一は憚り氣もなく言つた。
『うーん。……』と、和三郎はまた唸つた。さうして言ひたいことがドッサリ胸に湧いて來たけれど、うつかり物を言ふと、また恥を搔くと思つて、たゞ唸つてばかりゐた。
　それからまた二人は、淸らかな川端道を、ぶらぶらやつて來ると、和三郎の眼には、今までまだ一度も見たことのない大きな樹木が、蒼い淵の上へ、一面に枝を張つてゐて、麗はしい花が、いツぱいに咲いてゐた。
『これは何んといふ花だね。眼の覺めるほど綺麗ぢやないか。』と、和三郎は顧みて忠一に問うた。
『これは、空想の花といふんです。……この花から、現實といふ實が結びます。』
　忠一の答へは、ハッキリと、確かであつた。——

一錢

一錢といふ貨幣は、それ自身獨立して、殆んど力のないものであるが、電車値上げといふ問題が起ると、頓に威力のあるものになるのが不思議だ。

（『金魚のうろこ』より）

新らしき世界へ

一

いつとも知れぬ時代のことである。——

妹尾兼時は、ブラリと岩橋村の奥へ、旅行とも附かず、散歩とも附かぬ姿でやつて來た。

輕便鐵道が、こんなところにまで近く延びて來て、一里あまり手前の君津町に停車場が出來た。其處から腰の痛くなる人力車で、岩角が金米糖のやうに尖り出た細い道を、行き逢ふ人に避け場所の足溜りを探させつゝ、ガタリゴトリと登つたのである。

妹尾は大島飛白の綿入一枚に、黑繻子の袷羽織といふ時代おくれの扮裝で、頭には鳥打帽を被つてゐた。ぐる〳〵と卷いた白縮緬の兵兒帶も、この山奥ではまだ立派な旦那のものとして通用しさうであつた。

岩橋村の奥を湯の山と言つた。昔から鑛泉が湧き出でて、或る時代には溫泉宿が二三軒も並んでゐたことがあるさうな。鹽川といふ小さい流れが山奧から來て、この湯の山では、橋が無ければ渡れぬだけの幅になつてゐた。『平野屋』とか『河内屋』とかした樂書が、剝げちよろけの壁に殘つてゐる大きな家は、其のまゝ百姓家になつて、疊を引き上げ、床板を外した座敷が、煤ばんだ天井板を見せて、納屋の代りに使はれ、一面に去年の麥を乾してあるのも痛ましい氣がする。

たゞ一軒殘つてゐる角屋といふのへ、鳥打帽の紳士は入つて行つた。表に据ゑた大きな用水桶の底が拔けて、內部に溜つた落葉の食み出したのが見えてゐても、軒に懸けた短い暖簾に、まだどうにか商賣を續けてゐることを知らしてゐる。『千代香』『春榮』『染龍』などといふ字が、暖簾に大きく現はれてゐるのも面白い。

『お出でやす。』とも言ふことを知らぬ小娘が、後れ毛の多い不恰好な桃割れを頭に載せて、ぼんやり突つ立つてゐた。土間は隨分廣くて、向うの方に、敷石のびしよ〳〵に濡れた板場がある。竹格子の間から煮物の湯氣が漏れて、腥い臭ひの流れて來るのは、流石に商賣柄だと思はれた。

『お客さんだッせ。』

大事さうに膝掛けを抱へて隨いて來た車夫は、吃驚するやうな大きい聲をした。

『お出でやアす。』と、言つて板場から出て來たのは、五十ぐらゐの女であつた。薄汚れた綿入に新らしい前垂をして、利休の齒をギク〳〵鳴らしつゝ、妹尾の側に近寄つて、何御用と言つたやうな顏で、ケロリとしてゐた。客商賣が客を忘れて、暖簾だけの飜つてゐるのも哀れであつた。

『この旦那、中食しやはりまんね。』と、車夫がまた背後から氣付け藥のやうな聲をしたので、女は漸く解つたらしく、『さアお上り。』と、拍子の拔けた樣子であつた。

薄埃りの上に、足痕の殘りさうな階子段をば、白足袋に踏み締めて昇ると、二階座敷は割合ひに整つてゐた。疊は古いが、障子は白く、穴もなくて、黑塗りの棧が剝げないで光つてゐた。

妹尾が何よりも先きに庭の方を向いた障子を開いて、山の裾から續いてゐる庭を眺めてゐると、形だけ殘つた蓮池の畔へ、先刻の女の子が來て、篠竹の先きへ白い絲を附けたので蛙を釣り始めた。絲には鉤がないらしく、黑い餌が結び

付けてあつた。蛙が白い腹を見せて、絲に釣り上げられては、ぽちやんと音して、黒く濁つた水に落ちた。

『何んとかちやん、これ附けてみい。』と、姿に似合はぬ優し氣な聲をして、山男のやうに脊の高いのが、此方の軒下から現はれた。樵夫の姿をして、手には鍬を下げてゐた。

『さア、これや。』と、彼の男は腰に下げた淀屋橋の根付けを外して、藁で括つた叺をブラ／＼させながら、雁首のひしやげた煙管を拔き取り、格別汚さうにもせず、黑い脂を吹き出して、餌に塗り附けてやつた。

今度飛び付いた蛙は、白い腹を見せるまでもなく、苦い煙草の脂に驚いたらしく、直ぐに餌を吐き出して、ぴよこ／＼と逃げて行つた。

『それ、腸洗ひよるで。』と、男は言つて呑氣らしく鍬を擔いだまゝ、蛙のすることを見てゐた。妹尾のところからは遠くてよく見えなかつたけれど、蛙が口から腸を吐き出しつゝ、よく水で洗つて、元の通りにお腹へ納める有様が、面白さうにそれを眺めてゐる二人の樣子で想像された。

『えらいことをしよるもんやなア。人間もかういふことが出けると、お醫者はん上つたりや。』

と、男は言ひ／＼、無事に腸を洗ひ了へた蛙が水の中へ沈んで行くとともに、自分も何處へか立ち去つた。

『お出でやす。』と、また同じことを言つて、先刻の女がこの時漸く仙德の火鉢に、松炭の火を入れて持つて來た。

二

鷄を追ひまはしてゐるらしい氣色がして、クワツクワ、クワツクワと異常な啼き聲が聞えたと思ふと、註文の晝食には、堅い鷄肉の煮たのが夥しく附けられた。妹尾は自分が來たばかりに、忽ち生命を亡うた動物のことなんぞを考へて、妙に咽喉の詰まるやうな氣がした。

食後、この家の主婦と思はるゝ先刻の五十女を呼んで、此處の鑛泉のことをよく訊いてみた。

昔は隨分繁昌したものださうで、この國の名所圖會にも委しく出てゐるさうな。主婦は口でさう言つただけでは安心がなり難いといふ顏付きで、階下へ行つて稍長いこと手間取つてから、表紙が汚れ綴絲の切れた一册の和本を持つて來た。それは名所圖會の第四卷で、終りの方に、この湯の山鑛泉のことが見えてゐた。

雪旦あたりの筆になつたと覺しい風俗畫に見えたのは、まさしくこの角屋の景で、表の用水桶も同じ形をして、底が拔けずに、上へ積み重ねた小桶に二重山がたの印がある。庭に蓮池があつて、其の橫に蹴鞠の遊び場が竹の垣に圍まれてゐるのも奥床しい。二階にも階下にも、丁髷のある湯治客がドッサリゐて、枕引きをしたり、將棊を差したりしてゐる。

主婦は誇り顏に、本を披いた妹尾の手元を覗き込んで、『どんなもんや。』と、言つたやうな風をした。

それから妹尾は、先刻の脊の高い男の案内で、湯元の方を見に行つた。どうかすると水が鹹くなるといふ鹽川に沿うて二三町、崖の細道を行くと、岩に包まれた四角い穴があつて、周圍が黃色く染まつてゐた。これが湯元なのである。

妹尾は仔細に調べて、この冷泉を原料に炭酸水の瓶詰めを造つたら、屹度良い品になつて、賣行きが多からうと考へた。實はそれを目的にこの山奥まで、わざ／＼やつて來たのだといふことを忘れてはならぬと思つた。

岩から岩へ渡した狹い板の上を、薩摩下駄に危く踏んで、溪水の向ふ側へも行つて見た。靑い小松山の裾が、なだらかな傾斜になつて、家を

建てるのに都合が好ささうであつた。湯元の傍に岩を斫り開いたらしい十坪ばかりの平地があるのを見て置いたから、其處に製造所を建て、住居を此方に設けて、釣橋か何かで溪水の上を往來することにすれば面白からうと、妹尾は獨りで頷いた。

湯元の四角い穴は國有で、傍の平地は其の昔この土地の繁昌した折に、角屋が離座敷のやうなものを建てようとして、地形をしたまゝなのであるといふことを、案内の男から聞いて、妹尾は先づ可しと微笑んだ。この小松山も半腹までは角屋の所有であるといふことは、更に妹尾の幸先きを祝はせずには置かなかつた。

妹尾は其の晩、角屋に泊つた。旅籠屋業の鑑札は其のまゝ受けてゐながらも、二階へ客を寢かすことは、彼れ是れ十年振りだと、主婦は其の晩、古風な行燈に火を點けて持ち出しながら、つく／＼考へて、嬉しいやうな、悲しいやうな氣持ちになつた。

『旦那はん、ラムプがおまへんので、暗うおますけど、御辛抱なはつとくれやす。』と、もう一廉心安くなつたつもりになつて、妹尾の側へ出た。

燈火の暗いのも、蒲團の堅いのも、偖は晝つぶした鷄の肉が夕食の膳にまた上つたのにも、妹尾は別に不足を言ひたくなかつた。彼れにはたゞ、この土地に對する自分の希望が輝いてゐた。

さして多くもない資本ではあるが、それを一番意味深く使つてみたいといふのが、新たに亡父の遺産を受け繼いだ彼れの志であつた。平凡な商業なぞはやりたくない。投機業も亡父が幾度かの浮沈を見せ付けられて、三十幾つまでの男盛りを、空しく部屋住みで暮らして來た身には、考へるだに身慄ひがする。大勢の人たちを相手に、何か意味のある新らしい仕事に活きて行きたいのである。さう考へて、先づ目を着けたのは、人づてに聞き及んだこの山奧の鑛泉である。此處に製造所を設けて、思ふ存分にやつてみたい。

山男のやうな姿をした樵夫は、角屋の主人であつた。五十女の主婦と夫婦であるといふのも、この夜の話でよく分つた。男の方がどうしても若く見えるけれど、實は四十八の同い年で、十八の時聟養子に來て、お雛樣のやうな夫婦ぢやと近所で言はれたなどと、色氣の拔けた主婦は臆面もなく物語つて、

『何を言ふぞい、おいとくれんか。』と、亭主に窘められた。

『お前とわたしは同い年夫婦、一つ違へば、なほよかろ。』

こんな唄がこの村に流行つたことがあるのも、二人が夫婦になつた當座のことであるといふ話を、主婦はまた亭主に横目で睨まれながらした。

二人の間には、先刻の女の子が一人あるだけで、心細く暮らしてゐるのであるさうな。旅籠屋の方は、たゞ昔の看板を殘してゐるばかりで、旅商人がたまに泊つて行くぐらゐのもの、それとて階下座敷で澤山であるから、久し振りに二階へ上るお客を迎へたのを喜んで、夫婦は一心に妹尾を接待した。

さういふ風であるから、地所買受けの相談も樂に捗んだ。旅籠屋は繁昌せずとも、先祖傳來の田畑山林で、親子三人の生活にさしたる不自由はないけれど、纏つた金といふものに手を觸れる機會がないので、大きな屋臺骨の傾きかけて來たのを繕ふこともならなかつたが、畑にすることも出來ない岩角を斫り拓いた場所が賣れて金になるのは、煎豆に花が咲くやうなものであると、夫婦は湯元に沿うた十坪ほどの空地の賣り渡しを二つ返事で承知した。

其の向う側の小松山の裾は、少し賣り惜しむ樣子にも見えたけれど、この邊の賣買の相場にはない値段を聞かされると、これももッと廣く買つて貰ひたいといふやうな顏をして來た。

三

總てがスラ〳〵と運んで、湯元の國有地借用願も、やがて政府から許可になつた。

あんなところを買つたり借りたりして、何處の阿呆が何をしくさるのかと、土地の者は噂し合つてゐた。先祖から傳はつた田畑を耕し、山の木を伐り、秋には蕈を賣つて、寢たり起きたり、正月と盆と祭禮とを無上の樂みに、夢の如く生きてゐる村人たちは、昔繁昌した湯の山が、また新らしく蘇生つて來ようなぞとは思はなかつた。そんなことに頓着するだけの心の働きもなかつた。

ところが、町の方から材木を積んだ車が頻りに引き込まれるので、『これは妙ぢや。』と、首を傾けたり、眼を瞠つたりするものが殖えて來た。材木といふものは、筏になつて川へ流されるか、車に積まれて南へ運ばるゝか、兎にも角にも、村から外へ出るものとのみ思つてゐたのに、それが南の方から北へ、村の內へ入つて來るのを見ては、寺から里へと、物が逆になつたやうな氣がしてならないのである。

其のうちにも、町の大工が、小粋な容子の捻ぢ鉢卷で、五六人も入り込んで來た。大工以外の職人も矢張りそれくらゐは來て、皆角屋に泊り込んで、それ〴〵の仕事にかゝつた。

妹尾は背廣の洋服で、洋杖を振り〳〵、指揮に出てゐた。色の白い細面の其の妻も、時折は町の家から、犬とともに角屋の二階に泊つた。夫婦して村を散歩すると、子供たちが大勢ぞろぞろと後から隨いて來るのが五月蠅くてならなかつた。

妹尾にはまだ子がないので、二頭の犬が家族の一部として、寂しさを慰めてゐた。町の家では犬が座敷へ上り込んで、夫婦の間に坐りつゝ、同じ食物に贅澤をしてゐた。この四脚の家族は、初め町の家に殘して置いたけれど、夫婦とも留守になると、家中にでも居るやうに、首を捩れて、哀しさうにクン〳〵と鼻を鳴らしてゐると、留守番の書生や女中が言ふので、六里の道を汽車や人力車に乘せて湯の山まで連れて來た。

人力車から下りた二頭の犬が、いきなりパッと角屋の座敷へ躍り上つた時は、主婦も主人も娘も、一樣に『あッ』と驚きの叫びを揚げた。犬は地べたに居るときまつたものに生れてからこのかた思ひつゞけてゐた人々だもの、平氣で座敷へ上つたのに呆れたのは尤もの次第である。さうして其の犬が妹尾から『あんよ、あんよ』と言はれると、直ぐ板の間の方へ引き返して、有り合はした濡れ雜巾に足の裏を擦り付けて泥を拭いたのには、三人とも口あんぐりと、何も言ふことが出來なかつた。

犬は二頭とも牡で、小ひさくて白い方をルミと言ひ、大きくて黑いのをジャックと呼んだ。兩方とも毛が房々と長く、耳が顎の邊まで垂れてゐた。妹尾が二階へ上ると、犬もともに上つて、狛犬のやうにちやんと左右へ跪きつゝ、これで安心だといふ顏をしてゐた。

夜になると、ルミが奧さんの床へ、ジャックが旦那の床へ、巧みに潛り込んで寢るのには、角屋のものがまた驚いた。もうこの上の驚きやうはないと思つてゐると、朝になつて、犬がちやんと餉臺の前へ坐つて、主人夫婦と食事を共にするのを見て、主婦も主人もぽかんとして了つた。娘は裁縫の稽古に出かけたさうで、それを見なかつた。

『坊や、坊や。』と、奧さんが犬を呼ぶと、犬は自分のことと心得て、ノッ〳〵と奧さんのしな

やかな膝に前脚をかけるのも、角屋のものには憎らしいほどに思はれた。

『えらいこつちや……。』と、主人はぼつ／＼それを村の誰れ彼れに吹聴して廻つた。

『あんまり、畜生を可愛がり過ぎるもんに、後生のよいのはないぞい。』と、眉を顰める村人もあつた。

　それでなくても、妹尾のことは、もう村いつぱいの噂になつてゐた。初めは何んの氣にも留めなかつたのが、湯元の側へ妙な恰好の家が棟を上げるとともに、噂もだん／＼高くなつて、中には、『角屋はんもえゝ加減にしといたらえゝ。あんなもん引ッ張り込んで來て。……』なぞと、角屋を罵るものも現はれた。

　村人の口の端なんぞには頓着なしに、製造所の工事は大に捗取り、次いでかゝつた小松山の裾の地均しも、小氣味よく進んで、住宅の設計圖を持つた妹尾の前後を、二頭の犬が黒い土に足痕を印して目まぐるしく駈け廻つてゐた。

　製造所の方は青いペンキ塗りで、いろ／＼の機械が牛車で運ばれて來るのを、其の入口の硝子戸の中へ皆呑み込んで了つた。手遊品のやうな小さく可愛らしい蒸汽釜が着いた時は、山の上の禪宗寺の坊さんまでが下りて來て、道端に立ちつくしつゝ見物した。其の蒸汽釜が、製造所の屋根の煙突から白い煙を吐いて、正午にはピイーと笛を吹いた時には、村の人が皆『おやおや』と思つた。

四

　動力の試運轉も、製造機の試驗も滯りなく濟んで、いよ／＼仕事を始めるばかりとなつた。先代このかた執事のやうなことをしてゐる四十男を事務長にして、妹尾は自ら製造を監督することにした。技手を一人、町から呼んで來た外には、男女十人あまりの職工を皆村から採用した。

　妹尾はこゝで考へた。自分は別にこの事業で大きな利益を得て富豪にならうとするのでない。勿論損失をしてはならぬが、自分だけ獨り儲けて、職工を瘦せさせるやうなことはしたくない。

　そこで、製造所長たる自分も、瓶洗ひの小娘も、平等の報酬でやつて行きたいと思つた。しかし、この計畫は、機械が運轉を始めた第一日、炭酸水の瓶詰めに、皮切りの赤い商標が貼られた時、早くも壞されて了つた。この製造所で、一番大切な役目を承はるものは、町から來た技手で、蒸汽機關もこの人が組み立てて動くやうにし、瓶詰めの機械もこの人がギュ／＼カタンカタンと音をさして、二つの鉛管から動力の運轉によつて注がれて來る瓦斯と鑛泉水とを適宜に調合するのである。この人がなければ、この製造所の仕事は暗黑である。

　この人はまだ若い、二十歳と三十歳との間くらゐである。さつぱりとした洋服を着て、活潑に歩いてゐる。仕事にかゝる時は、洋服の上から白い仕事着を羽織つて、徐ろに臺の上に立つのであるが、色の白い圓顏に、この白い仕事着がよく映つて、瓶洗ひの女工等や、商標貼りの少女たちに、橫目を使はれてゐる。『内田さん』と言へば、もう仕事にかゝつた第一日から、製造所一番の人氣者になつてゐるのである。

　この人氣者の内田技手と、瓶洗ひの少女とを平等に見て、同額の給金で働かせることは、流石の妹尾にも出來ないことであつた。彼れはハタと困つて、いろ／＼に考へた。こんな筈ではなかつたのにと頻りに首を傾け始めた。

　この製造所では、朝の八時から夕の五時まで仕事をすることにしてゐる。其の間晝食の時三十分と、別に十分間づつ三度と、都合一時間の休息を取ることになるから、正味働くのは

八時間である。この八時間に對して、妹尾は誰れにも總て同額の給金を拂ふことを考へてゐたのである。注ぎ込んだ資本といふものを姑らく別として、自分も職工と同じ給金で滿足しようとしたのである。

それを聞いたものは、如何に無智な村人でも、皆飛んでもないことぢやと思つた。そんな無茶があるものかと言つた。

製造所の根源力ともいふべき機械の運轉を一手に操つてゐる技手の八時間と、小ひさな圓い紙と細長い紙とに糊を付けて、それをば炭酸水の詰め込まれた瓶の横腹へ貼り込んで行く少女の八時間とが、同じ値打ちであつてはたまらないといふことに、自分も氣が付かなかつたのではない。しかしそれをば無理にも同樣と見て、働く結果よりも働く時間を尊重しようとした自分は過つてゐたのであらうか。

技手の身體には、これまでに仕事を覺え込むのに對して、可なりの資本がかゝつてゐる。けれども商標貼りの少女の技には、鐚一文の資本も要らぬ。手さへ滿足に動けば誰れにでも出來る仕事である。さう考へて來れば、この話は別段考へるだけの値打ちもない分り切つたことのやうであるが、自分はさう思ひたくない。資本から取る利息として、人間の働きを見たくないのである。

けれどもまた働く時間だけで、價値を定めることの出來ないのも言ふには及ばぬことである。米を一圓がとこ賣つて貰れといふ代りに、米を五時間分賣つて貰ひたいとか、醬油一升幾らといふ代りに一時間分の醬油何合として、總てが働いた時間と入用な品物との交換されるやうになることは、さして可笑しいとも思はないけれど、それが果して公平であらうか。

妹尾はいろ／＼と考へあぐんで、現在の自分の仕事の將來を持てあますやうな氣にもなつて來た。

彼れは、さま／＼と考へた末に、人間の働きといふものは、到底金錢に換へて勘定することの出來るものでないといふことを知つた。込み入つた機械を扱ふ技手の八時間は、瓶に商標を貼り付ける少女の八時間よりも貴重ではあらうけれど、それを八つに割つた技手の一時間は、矢張り少女の一時間よりも優つてゐるであらうか。更にそれを六つに割つた技手の十分間と、少女の十分間との優劣はどうであらうか。其の十分間をまた十に割つた一分間に、技手が横を向いて欠伸をしてゐたとせよ、さうして少女の方は其の一分間に、大切な商標を丁寧に且つ迅速に瓶へ貼り付けたとすれば、八時間に於ては技手が優つてゐても、一分間にあつては少女が優つてゐる。

こんなことを、小うるさくも算用したからとて、人々の仕事の値打ちといふものは、兎ても公平に測り得べきものでない。そんな桝も尺も、この世にはない。

さすれば何うしたらよいのであらうか。

五

兎も角もして、この炭酸水製造の事業は、秋頃までにだん／＼と進んで來た。需用の多い夏の盛りには、二里餘りを距つた停車場まで、川に沿うた道を下つて行く荷車といふ荷車は、皆炭酸水の瓶を箱詰めにしたものを載せてゐた。上つて來る荷車にはまた空瓶が山の如く積まれて、雙方の車が行きちがふのに、道が狹いから、なかなか難儀であつた。

小松山の裾に建てた妹尾の住居も、木の香新らしく出來上つた。門から格子戸から、二階の欄干まで、すつかり都振りに粹な好みを見せて、西洋風の露臺が高く附いてゐるのも、家と言へば光線の不十分な、薄暗くじめ／＼したも

のとのみ思つてゐる村人には珍らしかつた。露臺に籐椅子を置いて、それに凭りかゝつた妻美根子が、犬を抱いてゐる姿を遠くから眺めた村人どもは、『龍宮の乙姫さんのやうぢや。』と、言つてゐた。

『乙姫さんが山へ來て、魚の代りに犬を連れてる。』なぞとも言つた。

　この新らしい住居で、柔かい夜の物の上に起臥して、妹尾は鹽川の向うの製造所へ毎日々々通つてゐた。さうして新らしい疑ひが始終彼れの胸に往來してやまなかつた。

　妹尾は先づ、十人餘りの職工の中にも、よく働くものと、少しは怠るもののあるのとを見逃さなかつた。どうかすると閑を偸んで、蒸汽機關の笛の口に煙管の雁首をあてがひつゝ、脂の掃除をしては、それを面白がつてゐる職工のあるのを見た。汽鑵室の壁は、煙草の脂に黑く汚れて、厭な臭ひがした。

　或る職工はまた、其の本務が瓶洗ひであるのに、洗ふ瓶がなくなつても、手を空うしてはゐないで、商標貼りの方へ來て女工の手傳ひをした。

『おいさはんが居るんで、お前は此處へばつかり、よう出て來るな。』と、角屋の亭主は言つて、にやりと笑つた。もう百姓も樵夫もやめて、この製造所へ働きに來てゐるのである。『お蔭さんでだいぶ工合がようなつた。』と言つてゐる通り、角屋の店は餘程綺麗になつて、用水桶の底も、新らしく入れかへられた。おいさといふ女工は默つて忙しさうに商標を取り揃へてゐた。一同が笑つたのに、この少女だけは莞爾ともしなかつた。色が白く目鼻立ちが調つて、頭髮の赭いといふ外に缺點がなかつた。女工中で一番の美人だと、來るほどの人が皆さう思つた。

　妹尾の妻美根子も、このおいさに女工をさして置くのは勿體ないと思つて、幸ひ小間使が一人欲しいからと、其の旨をおいさに傳へた。二つ返事で承知することと思ひの外、家に不具の兄と病身の母とを抱へてゐる彼女は、小間使なんぞと悠長なことはしてゐられないのであつた。まだ漸う十六の發育し切らぬ身體で、村の使ひ歩きなぞをして、賃錢を稼いでゐたのであるが、この製造所が出來たので、眞ツ先きに女工を志願したのであつた。

　おいさには、美しい着物も、白粉も、戀もなかつた。そんなものは、食べるのに事を缺かぬ人の餘計な遊びだと思つてゐるらしかつた。仲間のものが、浮付いた話に笑ひ興ずることがあつても、彼女だけは、ケロリとして、働きつゞけてゐた。

　家に不具者や病人があつては、幾ら働いても追ツ付くまいと、妹尾は考へた。この少女の働く力は不具者と病人とに打ち消されて了つて、この製造所だけでは役に立つてゐても、世の中全體から見ると、怠けてゐる者も同様の結果になる。これで見ても、一人の働く分量から、其の値打ちを測ることは、いよ／＼難かしい。働くといふことを、賃錢といふ形に替へるのは、どうしても無意味であると思はずにゐられなかつた。

六

　妹尾は亡父の存命中から、遊獵を好んだので、よくない殺生だと思ひつゝも、やめることは出來なかつた。殊にこの山奥に仕事を始めて、町から移り住むと、念頭には常に獵のことが往來してゐた。

　其の秋を待ちかねて、晴れた日の朝早く、角屋の主人を案内に、ジャックとルミとを連れて、裏山の奥深く分け登つた。丁度其處に雜木林があつて、低く垂れた枝に、小ひさな赤い實が鈴なりに生つてゐた。角屋の主人はそれを採つて、口

を眞ッ赤にしながら食べた。ジャックが、叢の中に驅け入ると、一羽の山鳥がバタ〳〵と音をさせて低く飛んだ、手にしてゐた銃を獵服の腰で構へたまゝ、狙ひを付ける間もなく忙しく撃ち出した散彈は、パッと擴がつて、忽ち其の山鳥を射落した。ジャックの口へ銜へられて來た第一の獲物の見事さに、角屋の主人はほくほく喜びつゝ、妹尾の手練とジャックの働きとを譽め立てた。今度は俺の番だと言ひたげな顏をして、小さなルミが林の奥深く白い姿を隱した。

雜木林を拔けて、なほも上へ登ると、また小松が生えてゐた、赤土が老人の禿頭のやうにテカ〳〵してゐた。それが絶頂なのである。大きな岩に這ひ上り、銃をば白い苔の上に横たへて、燐寸の火で煙草を吸つた。好い見晴らしで、村々が盆景のやうに見える。足元には鹽川が細く帶のやうに流れて、松の梢に圓く窓のやうな恰好になつた枝の隙間から、手遊品の如きペンキ塗りの家を見出すことが出來た。それが妹尾の炭酸水製造所なのであつた。

妹尾はそこでまた考へた。あの工場をば、そんなに大きなものにはしたくない。たゞ大學の實驗室のやうな、綺麗に、快く、行き屆いたものにしたい。さうして、世の中の多くの工場を皆それに倣はしたい。

世の中の工場主のやり方は、皆間違つてゐる。さうして自分の現在のやり方も矢張り間違つてゐるのであらう。

第一にこれは、どうしても給金といふものを廢さなければなるまい。其處へまだ自分は十分に氣が附いてゐなかつた。人間の勞力を金錢に換へることの不合理は知つてゐても、給金といふものを廢して、人々に其の必要なもの、求むるところのものを與ふるといふことにならなければ噓だ、とまではまだ進んでゐなかつたらしい。働くといふことを基本にしないで、必要なもの及び欲しいものを求むる心を重んずる。人それ〴〵の必要と欲求とに應じて生産を分配する。――それが眞個ではないか。

學者や技師の力は、土方や女工の力よりも、それを準備するのに費用がかゝつてゐるから、其の働きに對する給金にも等差がなければならぬといふが如きは、まことに分らない話である。學者や技師の力が如何に傑れてゐたとても、それは彼等一人の私すべきものでない。彼等に彼等の力を私さして、多くの給金を要求することを許すならば、他のいろ〳〵の人間の私した總ての不當な力をまたこれを許さなければならぬ。さすれば世は全く逆戻りではないか。新らしき世界の門を閉ぢて、舊い世界への橋を繕ふものである。

自分の製造場では、どうしても給金といふものを廢さなければならぬ。たとへばこの山鳥といふ一羽の獲物だ。これが料理されて晩餐の膳に上る時、それを食ふものに與ふる美味の快感と、身體を肥やす滋養分とをば、ちやんと秤にかけて、誰れがどれだけの快感と滋養分とを供給するに力があつたかといふことを公平に算出し、それによつて報酬を定めることが出來ようか。

最初に山鳥を發見して、追ひ出したのは犬であるから、犬の手柄が最も多いであらうか。しかし犬よりも先きに山の勝手を知つてゐて、此處へ案内したのは角屋の主人であるから、この人の手柄が第一番であらうか。けれどもたゞ發見して追ひ出しただけでは、山鳥が手に入らない。それを鐵砲で撃ち留めたのは自分であるから、自分の手柄が第一であらうか。しかし鐵砲や火藥を造つたものは自分でないから、自分一人の手柄にはならぬ。鐵砲や火藥の製造者もまた、それを發明し、改良した代々の苦心家と手

柄を分つべきもので、一人や二人に私の出來るものでない。

更にまた山鳥其のまゝでは、美味を感ずることも、滋養分を取ることも出來ないから、これを料理し、調味した人の手柄をも數へ擧げねばならぬ。調理に就いては前代から多くの人の研究を經て來てゐる。如何に巧みな庖丁も、これを其のコック一人の手柄に歸することは出來まい。

高が一皿の山鳥の料理でも、詰まりは萬人の協力によつてなつたもので、一人や二人の力に歸することも、手柄にすることもならぬのだもの、更らに多く世に必要なものの製造や産出をば、或る限つた人間の力に歸して、其の手柄の分量を割り出すことが出來ようか。傑れた技師と、若い女工とを比べただけで、目前の手柄を算出し、それによつて給金を定めるのは、容易なことであるが、まことに愚かな話である。

妹尾は日あたりのよい山懷で、大きな岩に凭れつゝ、獨りで考へてゐたが、偖、『己れ自身はどうか。自分の有つてゐるといふものは何物か。』といふことに氣が付いた時、愕然として、大きな棒に突き當つたやうな感じを起さずにはゐられなかつた。

白い蚊帳

初夏の夕、新調した白い大きな蚊帳を座敷いつぱいに吊つた。近所の小川の畔で捕へた螢を若葉の盛り上つた庭先きに放ち、手製の氷菓を舐めながら、蚊帳の中で腹這ひになつて、二燭光の手ラムプの光で新しい本を披いてゐる處へ、女達が來た。女達は早速蚊帳の裾を褰ねて、中へ入つたが、蚊帳へ配合するには、どうも男の頭では面白くない。古い浮世繪によくあるやうに、蚊帳へ入りかかつてゐたり、蚊帳を出かゝつてゐたりするのは、女の湯上り姿がよいと思ひながら、私は友達の五分刈頭を見てゐた。

×

日本人はどうも物を改めることを知らぬ、蚊帳と言へば必ず萌黄に紅の縁を附けると決めてゐて、こんな白い蚊帳に淺黄の縁を附けたのなぞを一般に用ゐはじめたのは、ツイ近年のことであるといふやうなギゴチない理窟を、友達はすぐ言ひ始めた。私は蚊帳が好きである。蚊帳を吊らぬうちは完全に『好きな夏が來た』とは思はぬ。今の住居なぞ、蚊も殊に尠いのであるが、私はもう蚊帳を吊つてその中で寢轉ぶのを樂みにしてゐる。

×

子供の折、初夏の頃、郷里で或る立派な尼寺へ父に連れられて行つた時、其の尼寺の女主人が、折柄の病中を晝間も十疊の座敷へいつぱいに蚊帳を吊らせて、麻の蒲團の上に寢てゐたのを覺えてゐる。その蚊帳は白絽で、墨繪の竹が涼しさうにかいてあつた。縁は眼の覺めるやうな緋縮緬で、『蚊帳の内と外では話も出けんよつて』と言ひ〳〵、女主人が侍女に蚊帳を取り外させた時、侍女の白い手へ、其のゴリ〳〵した緋縮緬が絡り付いてゐた。柱の根に仕掛けがあつて、二人の侍女は恭しく跪きつゝ、眞紅の絹紐を手繰つて、蚊帳を取り外した。日本でも上流には昔から物の改良も進歩も遺憾なく行はれてゐたのである。白い蚊帳の、裾をぼかしたのなぞも、ずツと前からあつたのだ。たゞそれが民衆的に一般の用品となるべく、安價なものを濫造しなかつたまでである。……私もツイ友達に釣り込まれて、ギゴチないことを考へかけてゐた。廉價な、安ツぽい白蚊帳をながめながら。

（『魚のうろこ』より）

分業の村

一

　この村には、昔五兵衞といふ智慧者があつて、いろ〳〵のことを村人に教へた。其の五兵衞は、今や五兵衞稲荷と神に祀られて、毎年二月の初午には、赤や黄や白や、さま〴〵の幟が其の祠の畔に立つ。

　祠は小ひさいが、赤く塗つた鳥居の數は、殆んど數へ切れないほど、重なり合つて、長さが一町にも及んでゐる。一番初めの親鳥居ともいふべきものは、傑れて大きく、二間以上の高さで、それから小ひさい鳥居が、ずうッと行儀よく、殺人國の兵隊さんの行列のやうに續いてゐる。

　こんもりとした杉の森が、五兵衞稲荷のあるところで、死んでからまだそんなに、何百年とは經たぬだけに、杉の木にもさう高く天を衝くやうなのはない。

　何んでも、自分の力に及ばぬことがあれば、五兵衞稲荷に願を掛けよと村人は、互ひに教へ合つてゐる。

　其の五兵衞は、どういふことを村人に教へたか。先づ第一は草鞋を造ることである。

　勿論、この村の人とて、五兵衞に教はるまで草鞋の造りやうを知らなかつたのではない。ただ五兵衞は、一人の手が、藁を化して一足の立派な草鞋にさせるまで、かゝり切りになつてゐることを愚かだと教へたのである。

　この何んでもないことに、感心するものや、感心するまでに納得の出來ないものや、村人の智慧はさま〴〵であつたが、其の智慧の誰れ一人、五兵衞に及ぶものがないだけは確かであつた。

『さア、貴さんは、藁を揃へるんぢや。』と、五兵衞は一人の男に言つた。言はれた男は默つて藁を揃へた。この男の運命は、一生藁を揃へてゐることにあつた。

『さア、貴さんは、藁を打つんぢや。』と、五兵衞はまた他の一人の男に言つた。其の男は頷いて、前の男の揃へた藁を受け取ると、すべ〳〵した臺石の上へ載せて、樫の横槌で、トン〳〵と藁を打つた。この男は、一生藁を打つて暮らす爲めに生れて來たやうなものであつた。

『さア、貴さんは、繩を綯ふのぢや。』

『貴さんは草鞋の耳を拵へるんぢや。』

　それ〴〵に言ひ付けられた男どもは、手に手に草鞋の一部分だけを拵へて、それが濟むとめい〳〵手をあけて、あッけらかんとしてゐた。總ての材料が揃ふと、後は五兵衞が發明の機械で、草鞋がひとりでに編み上つた。馬鹿馬鹿しいやうでもあれば、樂でよいやうでもあつた。

　かうして草鞋を造つてみると、前には一人の手で、藁を揃へ、それを打ち柔げ、繩を綯ひ、耳を添へ、紐を附けて、一足の草鞋といふ形のあるものを見ることが出來るまでには、先づ半日足らずかゝつたのが、五人で手分けしてやつて、後は機械に任せたのでは、半日に十五足の草鞋を容易に造ることが出來た。今までは、どんなに上手な草鞋つくりでも、半日に二足を造るのはむづかしいとしてゐたのに比べると、全く大層もないことぢや、えらいといふことになつた。

　しかし、五人の手を十人に増して、五兵衞の

智慧でやつてみると、一日に六十足の草鞋は何んでもなく造れた。

から草鞋ばかりドッサリ出來ても困ると、五兵衞の次ぎぐらゐの智慧者は思つたが、五兵衞は平氣で、大胡坐をかいて酒を飮んでゐた。五兵衞はもうこの自分の智慧といふもので、多くの村人と機械とを働かせるやうになつてからは、自分に手を下して藁一すべ摘まないでもよいことになつてゐた。

『あの人は智慧で働くから、手足を動かすには及ばん。』と言つて、村人は皆感心してゐた。

五兵衞の食膳には、そろ／＼と他の村人の口には入らぬ美味が上るやうになつた。五兵衞の身に纏ふものは、他の村人の肌を包むものと違ふのが、遠くから見ても一日に分るほど光つて來た。

五兵衞が外へ出ると、村人は皆お辭儀をした。五兵衞はもう自分の足で歩くといふことがなくなつて、村人は大抵五兵衞の姿を美しい車の上に仰いだ。

しかし、それはズツと後のことである。

二

草鞋から草履と、この村では先づ日常足に履くものから、こんな風に手分けして、大勢の手と機械とで拵へ上げることをば、五兵衞の智慧で工夫したので、村中の家々には、土間にも納屋にも、草鞋や草履がいツぱいになつた。これでは村中の人々が、兎ても五年や十年で履き切れない。其のうちには、下積みの品物が腐つて役に立たなくなるであらうと危まれた。

『さア、貴さん、藁を揃へるんぢや。』

『貴さんは藁を打つのぢや。』

かういふ聲が聞えても、村人は、『また草鞋か、……草履か。』と、いふ顏をするやうになつた。

第一、其の原料の藁が乏しくなつて來た。肥料溜めの屋根を葺いた藁まで、新らしいのは皆持つて來て、草鞋や草履にして了つた。

『五兵衞さん、こない草鞋や草履ばツかり、どえらいこと拵へて、どないするんぢやい。』と、たまりかねて、問ひに來るものもあつた。其の頃の五兵衞はまだ川添ひの藁屋で、唯一人ごろ寢をしてゐる身分であつた。親兄弟もなく、妻も子もない四十男は、朝起きて自分に飯を炊かなければならなかつた。

村人に雨戸を叩かれて、五兵衞は不承々々に起きて來た。さうして雨戸を開くと、物も言はないで、先づ用便をした。彼れの家の軒先きには、無造作な小便壺の設けがあつて、村人や往來のものまでがよく用を足した。

『五兵衞さん、あの草鞋や草履をどないする。……』と、皆まで言はせずに、五兵衞は大きな欠伸を一つすると、

『喧しう言ふない、俺が呑み込んでる。……』と、力を籠めて言つた。其の言葉に餘り力があり過ぎたので、村人は半ば安心もし、また半ば恐怖をも感じた。

ところが、それから半歳とは經たぬうちに、近郷近在から、この村へ草鞋や草履を買ひに來るものが、ぞろ／＼と續くやうであつた。それからそれへと聞き傳へて、隨分遠方の町からも買ひに來た。

家々の土間や納屋に積み上げてあつた草鞋や草履は、面白いほど減つて行つた。それが皆金に代へられて五兵衞の手にあつた。かういふことになるのも、皆五兵衞の智慧の賜物だと言つて、村人は草鞋や草履の賣り上げ金を一人で自由にする五兵衞に不平を唱へなかつた。五兵衞は十分に自分の智慧に對して酬いらるゝだけのものを自分に取つて、其の餘りを僅かばかりづつ、村人に分ち與へた。それを相當として、村

人は皆滿足してゐた。

五兵衞は他の村々から、ドシ〳〵原料の藁を買ひ入れて、村人に草鞋や草履を造らした。一日に百足の草鞋と百足の草履とが造り上げられても、まだ間に合はぬほどよく賣れた。女も子供も總がかりで草鞋や草履を造る手傳ひをした。手傳ひと言つても、この仕事は總ての人が皆機械の手傳ひといふ位地にあつた。誰れ一人纏めて仕事をしてゐるものはなかつた。藁を揃へることの上手なもの、藁を打ち柔げることに絶妙の腕をもつもの、繩を綯ふのに巧みなもの、草鞋の耳を附けるのに得意なもの、草履の鼻緒に卷く紙を並べることの素早いものと、それぞれに進歩發達はして來たけれど、一人の手で、初めから終りまで、一足の草鞋や草履を造り上げることの出來るものは、だん〳〵に亡びて了つた。そんなことは忘れて了つてもよいことになつた。コツ〳〵と一つの物に取り付いて、長いことかゝつて、完全な形を一人の手に造り上げるよりは、其の一部分づつを手早く拵へる方が、どんなに利益か知れない。さうさへすれば、人の力が三倍にも五倍にも、時としては十倍にもなつて働くといふことを、この村の人は皆信じ切つて、さうしたことを案出した五兵衞の智慧をえらいと思つた。

さうやつて、いつの間にか五兵衞は、村人の總てを顎で指揮するやうになつてゐた。五兵衞の顎が、人並み傑れて長いのを小癪にさへて、楯突いてみるものはあつても、其の時はもう、草鞋に耳を附けることしか知らないもの、草履の鼻緒に卷く紙を並べる能しかないものが、幾ら騷いだッて、五兵衞を離れて、單獨にどうするといふことは出來なかつた。泣きごとを言ひながらも、矢張り五兵衞に使はれてゐるより外はなかつた。

この村の人々は、全體皆一足の草鞋、一足の草履を、一人で完全に造り上げる力を持つてゐたのだ。それが五兵衞といふ智慧者の智慧に醉はされて、この村にはさう餘分に用もない草鞋や草履を、一人が一部分づつ受け持つて、大勢の力と機械とでドッサリ拵へたが爲めに、全體の力は恐ろしく進んだが、一人の力は皆物の一部分を拵へることしか出來ない畸形のものになつて了つた。人間は一人前でも、仕事には不具となつた。大勢集つて、初めて力があるので、一人では何も出來ない。

前には五兵衞の智慧を使つた多くの村人が、後には五兵衞の智慧に使はれるやうになつた。智に使はれるばかりでなくて、五兵衞といふ人間に使はれるやうになつた。さうしてまた機械といふ妙なものにも使はれるやうになつた。兎にも角にも五兵衞の世の中だといふことになつた。

三

さうなると、もう五兵衞は川沿ひの藁屋に起臥してはゐなかつた。同じ川沿ひながら、もッと上流の景色の勝れた高臺に、立派な家が建てられた。村人の多くは、自分たちの手先きで、最も素早く、且つ最も器用に造り上げた草鞋や草履が、うまくひッくりかへつて、かういふ立派な家になつたのぢやとは、滅多に氣付かないで、矢張り五兵衞の傑れた智慧がかうさせたのぢやと思つてゐた。

幾年かの後に、この村は全く他の仕事をしないで、草鞋と草履とばかりを造つてゐる村になつた。幾千の草鞋や草履が、この村から運び出された。一の瀬の草鞋村と言へば、可なり遠いところの人が皆知つてゐた。

五兵衞は下流の川沿ひの元の藁屋を開け放して、村人たちが自由に遊べる場所にした。この家にもいつの間にか疊が敷いてあつて、村人は

其の上に坐るのを快しとした。それを樂みに夕景頃からこの家へぞろ／＼と集つた。實際この村で疊の敷いてある家は、此處と五兵衞の本宅ぐらゐのものであつた。

遠い町の方から、五兵衞は假面芝居といふものを呼んで來て、この下流の川沿ひの家で村人たちに觀せた。一人の男が交々假面だけを取りかへて芝居をするのであるが、横に赤い幕を引いて、其の上へ假面を着けた顏だけが出てゐる。白髮頭の老婆が出たり、花簪の娘が出たり、毛蟲眉の武士が出たりして、舞臺に見立てた赤い幕の上にあるのは、いつも一個の首だけであるが、其の動きかたによつて、嬉笑怒罵がそれぞれに分る。分らないでも、初めてそれを見た村人は、たゞ何かなしに面白がつてゐた。さうして、かういふものを呼んで來て觀せて呉れる五兵衞を徳とするとともに、ます／＼五兵衞をえらいと思つた。

假面芝居の役者は二人きりで、それが交代に舞臺へ出てゐた。夏のことで、犢鼻褌一つに假面だけを着けて、舞臺の方へ這ひ出して行く恰好を、五兵衞は樂屋から見て笑つてゐた。樂屋には女太夫が五人ばかり居て、それが順々に横の方の花毛氈を敷いた高座へ出て、淨瑠璃を語つた。淨瑠璃に從つて、舞臺の假面は動くのである。

小光といふ座頭から小花といふ口語りまで、女太夫は皆若かつた。小光が二十歳ぐらゐ、それから順々に、地位とともに年も下つて、小花は十四五であつた。五兵衞はこの小花ばかりを側に引き付けて、假面芝居なんぞ碌に見てゐなかつた。早くまだ燈火の點かぬうちに語つて了ふ小花が、紅い裏の肩衣の色の褪めかゝつたのをヒラ／＼させて下りて來ると、五兵衞は抱き取らんばかりにして、それを待ち受けた。

年齡も地位も一番下な小花が、傑れて大柄なのは可笑しいほどであつた。色が淺黑く、骨太で、眉毛は薄く、口は大きく、僅かに鼻の高いので、見てゐられるばかりの顏であつた。

肥えてはゐても、何處かに萎びたところの見える座頭を初め、いづれも誰れかに血を吸ひ取られたやうな女太夫の中で、小花だけは發育盛りの薫りが高くて、まだ吸ひ取られない血の色が、皮膚から溢れさうであつた。兩肌を脫いで淺黑い顏に安白粉を塗つてゐる時や、手早く肩衣をはねて、次ぎの出番の口上を言つてから、薄い眉毛を氣にして、頻りに小指の先きで撫でてゐる折に、五兵衞は眼を細くして、小花の影ばかり趁つてゐた。

假面芝居は、話の種と小花とを殘して、次ぎの興行地へ去つた。小花が其のまゝ五兵衞の持ち物になつたのは、申すまでもない。多くある假面の中から、五兵衞は一つの美しい假面を見立てて、一座の束ねをしてゐる小光の養父にそれを讓つて呉れと言つたが、其の男は首を左右に振つて應じなかつた。其の假面は八重垣姫にもなれば、初菊にもなり、お舟にもなれば、小浪にもなるといふ、一座の光であつた。

小花を手離すことを二言と言はずに承諾した男も、假面を讓ることには、どうしても應じなかつた。身の代金を小花の倍まではずんで來たけれど、矢張りいけなかつた。五兵衞の智慧にも及ばぬところがあると、側で聞いてゐた村人は思つた。

「仕樣がない、もう一遍其の假面を借して呉れ。」と言つて、五兵衞は若く美しい顏を自分の四十面に被せて、子供のやうに喜んでゐた。さうして、それをまた小花の淺黑い顏にも被せて、別れを惜ませた。小花は、幾度か大功記の十段目を語つた時に、この假面を活躍させたことを思ひ出してゐた。

「初菊もろとも走り出で、……」と、優しく哀

しく、柔かく、細く、絲のやうに語り出る聲の下から、この假面は其の美しい目鼻を大年増の假面の後に引き添うて舞臺に現はれた。何處までも一人しかゐない假面つかひの男は、母の操の假面を脱ぐと、直ぐこの初菊を被つて、母子が二人で走り出でた光景を描くのに、多くの苦心を費した。旅興行の貧しい葛籠の中にも、假面だけは天晴れの名作として、寶物のやうに扱はれてゐた。それを五兵衞の望みによつて讓り渡すことが、兎ても駄目であつたのは尤もの次第である。

小花は一座に別れるのを哀しいとも思つてゐないやうに、また五兵衞と一所に暮らすのを嬉しいとも思つてゐないのが當然であつた。側にゐない時は、五兵衞といふ人がどんな顏の人だか、つい忘れて了つてゐることすらあつた。

村人は忙しく草鞋や草履を造つて、五兵衞といふブラ〳〵遊びの人間を贅澤に養つてゐる上に、また小花といふ厄介者をも養つて行かねばならないことになつた。しかしそんな底の方までを透かして見ることの出來る人間はゐなくて、四十と十五と、甚だしく年齡の不釣合ひな男女を、お雛樣のやうな夫婦だなぞと、心から譽めてゐるものが多かつた。

四

しかし、村人の中にもまた、分らぬながらに考へる人間がないのではなかつた。

『自分たちは、何んで、かうやつて生きてゐるか。』

かういふ胸の質問に對して、同じ胸は早速答へた。

『欲しいものを手に入れたいから、生きてゐる。』

『欲しいものが手に入るか。』

『なか〳〵手に入らんわい。……毎日々々欲しうもない草鞋ばツかり造つてゐる。何んぼドツサリ草鞋があつても、一時に二足は穿けんよつてなア。……それに俺等は毎日々々草鞋の一部分は造つてゐるが、出來上つた草鞋といふものの全體の形を滅多に見たことがない。……あゝアもう〳〵、俺等は草鞋の耳ばかり拵へるのに飽き果てた。何んぞ外のことをしたいもんぢやが……』

胸と胸とは、こんな問答に日を暮らしてゐた。

『欲しいと思ふものが、數知れぬほどあるのに、それを拵へないで、草鞋や草履ばかり造つてゐるのか。これはまた何んのことぢやい。』

村人の胸の裡には、おひ〳〵にかういふ考へが蟠まつて來た。欲しいと思ふから拵へる。それが順序でないか。といふことに氣付いた時、毎日々々草鞋の耳ばかり拵へてゐるのや、明けてから暮れるまで、暑い時も寒い折も、トントンと藁を打ち柔げてゐるのが、どんなに馬鹿らしくなつて來たであらうか。

何んでも人間は欲しいものを、易々と手に入れなければならぬ。出來るだけ少しく働いて、取れるだけ多くを得なければならぬ。ちよツぴり働いて、どツさり取ること、それより外に道はない。總ての學問や智慧や發明も、皆それが目的ではないか。少しく働くといふことと、怠けることとは違ふ。少しの時間を最も德用に働いて、欲しいものを澤山取ることは、怠けものの看板でなくて、經濟學の心棒でなければならぬ。それをば村に飼ひ殺しになつてゐる――といふよりは、五兵衞さんに養はれてゐる――學者先生が、講釋をば横道の方へ持つて廻つて、五兵衞さんに都合のよいことばかり言ふ。

俺等は、年がら年中、面白うもない草鞋造りや草履編みの手傳ひばかりさせられてゐて、草鞋や草履の山を築き上げながら、自分には時々跣足で歩かなければならんことのあるのは、ど

ういふものか。學者先生がえらさうな顏をして講釋して聽かせる價値とか交換とかいふ難かしい御規則も、根から間違うてゐて、村の今日の有樣をば、都合よく譃ツぱちに說き示したもの。たとへば磁石盤の傍に鐵氣を置いて、違つた方角を俺等に見せてゐるやうなものである。俺等は其の磁石盤の爲めに、間違うた道を步いて、働く目的を見失うた。——

かういふことを、少しづつ朧氣ながらにも考へてゐる村人はあつたが、しかしそれによつて、五兵衞の智慧をどうするといふことも出來なかつた。

五兵衞は、假面芝居を呼んで來て村の人々に觀せたことが、深く村人を喜ばせた上、自分には小花といふ快樂の種を得たので、俺のすることは、何んでもこの通りぢやと威張つてゐた。さうして、それからは手品使ひを呼んで來る、浮かれ節を招いて來る、落語家、講釋師を呼んで來る。一年に四五度ぐらゐはさういふものを、自分の川沿ひの舊宅でやらして、村人に娛樂を與へた。

かうなつて來ると、誰れも彼れもまた五兵衞を譽めない譯には行かなかつた。さうして五兵衞は其の果てに、遠い國から學者先生を呼んで來て、自分のしたことのえらさを先生に講釋さして、村人たちに聽かせたのである。一々御尤ものことぢやと村人の多くは思つた。

移るが瀨の淸流を前に控へた高臺に、五兵衞の新宅は、いつまでも木の香が新らしかつた。村人の住居は皆非人の蒲鉾小屋を少し立派にしたくらゐのものであつたが、五兵衞の新宅は、幾年經つても新宅と呼ぶに差支へのないまでに新らしくて、新宅はいつしか新御殿とも呼ばれてゐた。

夏になると、この新御殿の軒先きに靑い簾が懸け渡された。村人の中にはこの簾といふものをこれまでまだ見たことのないものが多かつた。簾が風に搖いで、其の影に、白く涼しさうなものを纏うた五兵衞や小花の姿のチラ〳〵するのを、對岸の熱い砂塵に足を埋めて步きつつ、村人は皆美しいと見てゐた。美しいと見るだけで、羨ましいと思ふものはないやうであつた。羨ましいと思ひかけても、それは飛んでもないことぢやと、胸が胸を打ち消して了つた。及びも付かぬことを考へるのは愚かなことぢやと、自分が自分の心を叱つた。それをば正しいことといふ手製の板へ釘付けにするやうにして、お抱への學者先生は『身のほどを知れ』と說いて廻つた。

靑簾の側に美しい絹張りの繪提灯が吊されて、夕景には火が入る。其の下に大きな食膳を持ち出して、五兵衞は小花と差し向ひに、數々の肴を並べつゝ、保命酒でも酌んでゐる。それを橫目に、或は眞向きに眺めながら、村の人々は、朝からかゝつてせッせと造り上げた澤山の草鞋や草履を擔いで、對岸の細道を通つた。熱く日に燒けた砂塵に埋まつてゐる其の足には、破れた草鞋や、破れかけた草履をば、言ひ合はしたやうに汚く履いてゐた。中には跣足で、自分の力相應の草鞋の荷を擔いで行く子供も見えた。

履くものを肩に載せて、足には何も履いてゐない。

そんな可笑しなことに頓着なしに、例の學者先生は、分業の御利益や、剩餘價値のお話を頻りと說き立ててゐた。

五

村を貫いて流るゝ淸瀨川の水だけは、いつまで經つても失はれぬ天の惠みとして、村人たちの前にあつた。

少しも面白くない草鞋造りの仕事に、ぐッた

り疲れて、この清い流れの前に立つと、毎日毎日草鞋と草履とに惱まされてゐる頭の痛みや、腕の痺れが、自然に癒るやうであつた。この川の水で口を漱ぎ足を洗つて、ぼんやりと水の流れに見入つてゐる村人も多かつた。

『この水を逆に川上へ流すことは、いかな五兵衞さんでも出來まい。』と、村人の中には獨言をするものもあつた。

「水の流れと人の行末」といふやうなことを、考へてもみたりした。

五兵衞は小花とともに、高臺の新御殿から、この川の水をたゞ景色として眺めてゐるだけで、水で口を漱いだり、水に足を浸したりすることをしなかつた。其の點だけでは不幸の人のやうにも村人の眼には見えた。

下流の川沿ひの藁家に、唯一人で起臥してゐた頃の五兵衞なら、川の水は眞下にあつて、毎朝岸の洗ひ場で、直に手水を使つてゐた。醉ひ醒めの水は、岸に兩手を支へて、川から口へ、クウクウと吸ひ上げて飮んだ。昔まだ人間が兩手の使ひやうを十分に會得しなかつた頃は、掌で水を掬んで飮むことにも考へ付かずにゐたさうで、それを敎へたものは、大の智慧者として奉られたものださうな。しかし、水は掌で掬つて、指の間から溢れ落ちない間にと、慌てて飮むよりも、直に口を浸して、川を吸ひ干す勢ひで飮む方がうまい。……と、五兵衞はそんなことを考へたこともあつた。昔はそれほど五兵衞もこの川に親しんでゐたのである。

口の力で、クウ〱とポンプのやうに水を吸ひ上げるのは、人間でなければ出來ないことぢや、靈魂があつて、天國や地獄極樂をもつてゐる人間でなければ出來ない藝當ぢやと、考へ付いた五兵衞は、犬や猫が舌の先きでベロ〱とまだるツこく水を飮んでゐるのや、鷄が嘴の先きに水をちよッぴり含ましては仰向いて、咽喉から腹へ流し込んでゐるのを、馬鹿な奴ぢやと思つて見てゐた。人間は口先きで水を吸ひ込む力がある上に、兩手で水を掬ぶことも出來る。この上考へたら、もツと外のえらいことが出來さうなものぢやと、頻りに腕組みをしてゐたのが、五兵衞の智慧の働き初めであつた。さうして間もなく五兵衞は、村の人々がめいめいに手分けして、草鞋の一部分づつを拵へ、後は機械の力で大體を編み上げることを發明したのである。五兵衞とて、初めは何も、村人の總てをば、草鞋や草履の一部分しか拵へることの出來ない不具にする積りでもなかつたのである。村人をば自分と機械との下に壓し附けて、身動きもならぬやうにした上、自分だけが有り餘る食物や快樂を一手に占めて、なほ其の餘りの力を金庫の堅い扉の中に納め込んで置かうなぞといふ、惡氣もなかつたのである。

清い川水は、五兵衞の眼の前を、昔の通りに美しく流れてゐた。岩が多く、瀨もあつて、また淵をもなしてゐたこの川には、夏になると村の子供たちが殆んど總て水浴をした。正午頃から八つ時を過ぎても、子供はまだ瀨に浸り、淵に泳ぎ、熱く日に燒けた岩の上へ腹這ひとなつて、水に奪はれた體溫を回復しては、また水に躍り込んだ。

『五兵衞の馬鹿ア。……』

かう言つて、川の礫をば、高臺にある五兵衞の御殿に投げ付けようとした子供もあつたが、礫はもとより新御殿の軒下にまでも屆かなかつた。ズッと下の石垣と石垣との間に咲いた紅白の芙蓉の中へ落ちて、黃色い蝶の夢を驚かすぐらゐのものであつた。

それでも、えらい智慧者の五兵衞に向つて、正面から馬鹿と呼び得るものは、子供だけであつた。

『子供……正直。……』

『正直……乞食。……』いろ〳〵のことを言ふ村人もないではなかつた。

六

五兵衞が死んで、小花との間に生れた息子が、二代目を襲いだ。それが六兵衞であつた。六兵衞から七兵衞、七兵衞から八兵衞、八兵衞から九兵衞となつて行くのである。

其の草鞋の製造高はだん〳〵と殖えて、村人の働く時間はずん〳〵長くなつた。何んの爲めにかうドッサリ草鞋を造るのかと疑ふものも殖えて來たには違ひないが、中にはまた一生草鞋の耳を拵へることにばかりかゝつて、俺はかういふやうに生れ付いたんだと、覺悟をきめてゐるものもあつた。草鞋の耳で心が痺れたのぢやなぞとは、滅多に考へなかつた。

五兵衞は五兵衞稻荷と祀られて、杉の森の奧に、赤い鳥居を聯ねて、今戸燒きの狐が、在りし世の小花のやうにして、侍つてゐる。

初午の太鼓がドン〳〵と、まだ霜の解けやらぬ頃から鳴り響くと、村方の世話人は五兵衞稻荷の前へ集つて、赤や黄や白の幟を樹てにかかつた。『五兵衞稻荷大明神』と、書いた赤い長提灯が二つ、祠の前に吊り下げられて、それがまだ淺い春風に搖々と動いてゐた。

午後からは、村人が皆家を空にして、稻荷の森へ集つた。草鞋や草履を造る機械も、今日は動かないで、村人はお揃ひに胝の出來た指先きを摺り合はせて、五兵衞稻荷を拜んだ。

『今日は嬉しい。朝からまる一日遊べると思ふと、昨夜から寢られなんだ、身體がぞく〳〵して。』と、村人の或るものは言つた。

『それも、五兵衞稻荷さんのお蔭ぢや。』と、他のものは言つた。

『さうぢや〳〵。』と、多くの村人は合槌を打つた。

『ほんまにさうか知らん。』と、首を傾けるものは極めて尠かつた。

『皆さん、五兵衞稻荷大明神のあらたかな功德を疑うてはなりませんぞ。』と、叱るやうに言つて出て來たのは、お抱への學者先生で、稻荷の神主を兼ねた髯の長いお爺さんであつた。かういふ人は、五兵衞の盛りの時分から、代々村に居る。

『へえゝゝ。……』と、言つて村人は皆稻荷の前にお辭儀するやうにして、髯さんにお辭儀をした。

髯さんは、五兵衞稻荷の神前に、酒や米や餠や魚や野菜や昆布や水鳥や卷絹や、種々のものを供へて、恭しく祝詞を上げてゐた。紅白の小餠を大きな三寶に堆く盛つて、八足の一番前の方に置いてゐるのを、子供達は皆指を銜へて見てゐた。

『親の代からしてるんやよつて、厭ぢやとは言へんが、手に胝を拵へて、毎日々々草鞋にかゝつてるのも、つく〴〵厭になつたなア。……』

杉の森の枯草が、自然に柔かい敷物になつてゐる上に寢轉びながら、溜息とともに言ふものがあつた。

『勿體ないことを言ふな。罰が當るぞい。』と、其の隣りに寢轉んでゐた男は、欠伸とともに言つた。

『もうちいと、ほんのもう一息、仕事を面白うすることを考へても、罰はあたるまいがな。』と、前の男はさも〳〵遠慮するやうに聲を密めつゝ言つた。

『さうぢやなア、草鞋なら草鞋でもえゝ。どうで、俺等は一生草鞋を造つてるやうに、先祖から生み付けられて來たんぢや。それならそれでもえゝ。けどもせめて、一足の草鞋を初めから終ひまで、一人で造つてみたいなア。……さうす

るとまた仕事に面白味も附いて來るんぢや。』
横合ひから突然、ひそ〳〵話の中へ割り込んで來たものがある。
『それがいかんのぢや。それでは草鞋がちよぼツとほか出けん。そいで、昔五兵衞さんが、俺等の先祖に手分けして草鞋の耳や紐ばツかり拵へるやうに敎へてくだはつたんぢや。藁を揃へるもんは、一生藁ばツかり揃へ、藁を打つもんは、一生藁ばツかり打つてるやうになア。』
かう言つてまた横合ひから出て來た男の口先きには、だいぶ冷かな笑ひがあつた。
『シツ、シツ。……』と、誰れかが猫を叱るやうな聲をしたのは、今神主が歸りがけに其處を通るぞと、知らしたのであつた。
神主は氣取つた歩きかたをして、高臺の新御殿に入つて行つた。幾ら古くなつても、村人からは矢張り新御殿と呼ばれてゐる其の立派な家には、當主の八兵衞さんが、美しい妻とともに居て、五兵衞の殘した智慧を絞つて、村人を上手に働かせることばかり考へてゐた。
稻荷さんの前では、子供たちがわい〳〵と聲を揚げて騷ぐ。神前に供へてある紅白の餅を前の廣場へ撒いて、一同に拾はせる時刻に近づいたのである。
太鼓はまたドン〳〵と響いた。其の音が、『働け〳〵』と鳴つてゐるやうに、村人どもの耳へは聞えた。
『働け、働け。』と、一同が口々に叫んだ。
胝の出來た手を合はして、また思ひ出したやうに、稻荷さんを拜むものもあつた。
分業の村は、いつまでも榮えて行く。

雲の色

昔徳川氏の旗本の勇士たちは、夏の暑いさかりに會合を催し、冬の着物を着て、食物も熱いものばかりを選び、座敷を閉め切つて、外は雪でも降つてゐるやうに、厚い座蒲團を敷込み、大火鉢には炭火を山のやうにカツカとおこし、各一つ宛の焜爐と鍋とを控へて鷄の肉を煮ながら喰べた。さうして冬の最中にはまたこれと反對の會を開いた。と講談本か何かで見たことがある。
虛言か眞個かは知らず。眞個だとしても、餘程誇張のあることと思ふが、兎に角これぐらゐのことならば、强ひて行れば行り得ることで、さまでに人間離れがしてゐない。
こゝに於て、日本には思ひ切つた誇張がないといふやうなことを考へる。最も誇張の多い講談なぞでも、遠慮をしい〳〵勇士の働きを誇張してゐる觀があつて、一人の勇士が百千といふ人數を相手に鬪ふといふが如きは餘り多くない。さうして直ぐ『多勢に無勢』といふ常識的な言葉を持出して勇士の最期に餞をする。
誇張に就いて遠慮のない支那人は、張飛が百萬の大軍を睨み退けたといふやうなことを言ふ。何うせ人間離れのした偶像を造つて其の前に拜跪するならば、遠慮は要らぬ譯であるのに、日本人の誇張は鵯越を輾げ下つた辨慶の頭が岩角に當つてパチ〳〵火が出たといふくらゐが精一杯で、誇張の中にも詩趣がある。
私たちが何か書く時、それを其のまゝ描すと誇張に見え、誇張すると却つて自然に見えることもある。
雲の色、海の景色、山の姿。それを其のまゝ畫にすれば、必ず畫そら事として見られるやうなのを見る事も往々ある。自然にも誇張のあるものである。

（一九一四年）

（『小ひさき窓より』より）

高さを競ふ（喜劇）

第一幕

東京の郊外。文化村と名づくる西洋風模倣の住宅地の一番奥。高臺がゆるく傾斜をつくつて、漸く平地につゞかうとするあたり、金氣のある赤い水が、ギラ／＼と流れもせずに、泥鰌一尾さへ棲まぬらしい小溝一つを隔てて、十幾年前からある貧民長屋と境を接してゐる。

千九百二十三四年頃の初夏。晴れた日の朝の心。

舞臺は、其の文化住宅の一軒の、二階ヴェランダ。五坪ばかりの庭の彼方に、低い垣根を隔てて、貧民長屋の北の端の方を見おろす。籐の小卓子に、籐の肱かけ椅子二つ。小卓子の上には、銀の蔓のついた硬質陶器の花模様ある灰皿を置く。ヴェランダから觀客の方に向つて、舞臺の前面は、主人の書斎になつてゐて、書斎に相應する卓子、書棚などを置き、額、花瓶其の他、中流知識階級の趣味を表現すべき適宜の装飾をする。書斎とヴェランダとの間は、日本風の障子で仕切る。但し其の障子は開いてある。ヴェランダには硝子戸をたてる。

主人尾上雄藏（三十八歳。著作家）登場。越後紬の袷にヨネリウの羽織。羽織の紐を結ばず。書斎を素通りして、ヴェランダに出る。

主人。（ドッカと、籐椅子に腰をおろし、持つてゐた雑誌を忙しさうに繰り披きながら）あゝ、いゝ天氣だ。久し振りにいゝ天氣になつた。（さう言つただけで、空も庭も見るのではない。庭には若葉青葉が、青年のやうに活々とした太陽の光を浴びて、麗はしく光つてゐる）

妻芳枝（二十九歳）登場。娘時代に拵へたと思はるゝ派手な銘仙の、羽織と着物との對を着てゐる。頭は普通の束髪だが、白粉を濃くつけて、年よりもずつと若く、どうかすると、たゞの女でなささうに見える。家に居る時も、懐中鏡を帯の間に挾んで、時々顔を見ては、粉白粉でなほしてゐる。

妻。（流眄に夫を見て）あなた、矢ツ張り自分の家といふものは、いゝものね。お掃除一つするにしても、自分のものだと張り合ひがあつて、力の入れかたが違ふわ。……あゝ嬉しい、やツとこれで、自分の家に住むことが出來た。（主人の向う側の籐椅子に腰をおろし、なほもぢつと顔を見詰める）

主人。（冷かに微笑して）掃除するにしても張り合ひがあつて、……お前自分に掃除したことがあるかね。顔の掃除はよくするが。

妻。（大仰に、これは意外だといふ顔をして）あらツ、あなたひどいわ。顔の掃除はよくするつて、それやお化粧もするにはしますが、お室の掃除だつて、あなたのこの書斎なんか、一度も龜や（女中）にさしたことなんかありやしないわ。

主人。まアいゝさ。……けどもお前、この家が、

（ヴェランダから、書齋の方にかけて、頻りに壁や天井を見廻しつゝ）自分のものだといふことが、そんなに嬉しいのか。（苦々しいといふ顏をする）

妻。それや嬉しいわ。生れてから初めて、自分の家に住んだんですもの。

　借家で生れて、
　借家で育つ。
　お前の身體も、
　出來合ひか。……
　ほゝゝゝゝ。

主人。（呆れた顏をして）なんだい、それや。…そんなに嬉しいのか。（淋しく暗い顏をする）

妻。だツて。……（若い娘のやうに甘つたれる風をする）

主人。他人の地面の上へ建てた、家だけが、自分のものだと言つて、全地球を所有したやうに喜ぶやつがあるか。税はいる。保險料は拂ふ。修繕費はかゝる。町の寄附金は家持ちだと言つて多く取られる。祭りの提灯だつて、借家なら一つでよかつたのを、二つ出すんだらう。……莫大な金を費して、多くの人を殺して、戰爭に勝つて、一等國になつたと有頂天になる馬鹿者の氣持ちが、お前の氣持ちだ。馬鹿々々しい。（だん／＼大きな聲になる）

妻。また始まつた。始まり、始まり。（相變らず、浮かれてゐる）

主人。（ます／＼、淋しく暗い顏をして）僕なんかも、これで、借家で生れて、借家で育つたんだ。しかし他人の所有地の上では生れなかつたね。

妻。（不思議さうな顏をして）へえん。家が借りもので、地所が自分のものだつたの？ 變だわね。

主人。僕は神社の境内の社務所で生れたんだ。家は氏子からの借りものだが、産湯を流した床の下の地面は官有地だ。官有地なんて言ふと癪にさはるが、……殊に官といふ字が、胸くそのわるい字だが、……官有地を國有地と言ひかへて、それからまた國有地を共有地と言ひかへたら、僕は理想どほりの土地の上に生れたんだ。僕はこの地面といふものが、他人の所有であることを惡むと同時に、また自分の所有であることをも嫌ふんだ。（だんだん早口になる）

妻。（詰まらなさうな顏をして）そんなこと、幾度聞いたか知れやしないわ。

主人。この話は初めてだよ。

妻。其の形式で聞いたのは初めてですが、内容はいつも同じことだわ。同じ内容をいろ／＼と形だけ變へて言ふんですもの。あなたの思想も進歩しないのね。あれから、……（細く白い指をかゞめて、年を數へる。其の一本の指に、この夫婦の生活には少し不相應なダイヤモンドの大きなのを嵌めた指輪がキラキラと眩しく光る）わたし二十二の年だつたから、もう八年、同じ思想をいろ／＼と形だけ變へて發表してるんですもの。それで讀者があるんだから、世間は廣いものね。ほゝゝゝほゝ。

主人。馬鹿にするな、僕の思想は米の飯だ。いつも同じだといふところに價値がある。鮓にしたり、ライスカレーにしたり、粥にしたり、おじやにしたり、いろ／＼にして、人を養ふのだ。（冗談でもなささうに、眞顏で言ふ）

妻。いゝこぢね。昔からずゐぶん。

主人。僕は子供の時、小學校の教科書で、「我國、我國」といふことを、うるさく教はつたが、其の「我國」といふものは、一體何處にあるの

かと思つたよ。

妻。へえゝん。

主人。歸つて親爺に訊くと、この邊の地面は皆我國だといふから、僕は子供心に俺の家は大地主だなア、それにしちや、どうしてかう、貧乏なんだらうと思つたのさ。ところが親爺め、我國だと言つておきながら、其の我國の一尺四方の土も、自分のものでないのだから驚いた。

妻。(冷かに笑つて) それ落語?

主人。いや實際の話だよ。

妻。すると、あなたは、子供の時ずゐぶん低能だつたのね。よくそれまでになれてね。

主人。神童だつたのさ。神童だつたから、そんな、プルウドンの「財產とは何んぞや」にでもありさうなことを言ひ得たんだらう。しかし安心したまへ、今はもうそんな危險千萬なことを言つて、十手捕繩の御用にならうとは思つてゐない。僕はもう此頃、決して奪ふことを考へないで、讓ることを考へようと思つてるんだ。何んとか爭議といふものは、要するに奪ひ合ひだ。「我が爭ふものは、人必らず爭ふ。極力之れを爭ふと雖も、未だ必らずしも得ず。我が讓るものは、人必らず讓る、極力之れを讓ると雖も、未だ必らずしも失はず」といふことがある。僕たちはもう奪ひ合ふ爭ひに飽きた。これから一つ讓り合ふ爭ひを始めたいね。……アルサス、ロウレエンの讓り合ひで、フランスとドイツとが、戰爭をおつ始めるやうなことがあつたら、戰爭ぎらひの僕も、從軍記者ぐらゐのことならやつてみたいと思つてるよ。

妻。へえゝん。

主人。資本家は賃錢を增して勞働時間を短くしようとする。勞働者は賃錢を減じて勞働時間を增さうとする。それでストライキが起る。……さういふ世の中になつたら、同じストライキでも、もつと面白いだらう。資本家は資本の私有を廢しようと主張する、勞働者や無產階級は、それに反對して、激烈な運動を起す。地主は田畑を小作人に分配しようとする。小作人は小作料を增していつまでも……

妻。(白い手を振つて) もう澤山!

主人。(同じやうに手を振つて、妻の手を握るのを制しつゝ) 僕は兎に角、この利益中心の世の中を呪ひたくなつたのだ。善惡と言へば、甚だ立派に聞えるが、實は利害……損益なんだからね。いやになつちまふ。

妻。(少し眞顏になつて) だつて、昔からずゐぶん、自分に損をして、他人の利益を圖つた人があるぢやありませんか。今だつてさういふ人もあるでせう。お父さんのお好きな、志士仁人といふのが。……

主人。(微笑して) お父さんのお好きな……はよかつたね。其の志士仁人といふ奴の腹の裡は果してどうか、そこまでは分らないが、彼等が表面に現はしてゐるところを、其のまゝ馬鹿正直に受け入れたとしても、彼等の目ざすところは、矢張り社會の平和とか、民衆の幸福とかいふことで、詰まり利益なんだね。多くの人々の利益を圖つて、自分の名譽心を滿足させようといふんだから、矢張り醜劣さ。僕は全然利益といふ町人根性を離れた社會を見たいね。利益を善とし、損失を惡とする世の中は厭だ。……善惡なぞといふ氣取つた言葉を全廢して、總てを利害で行くのならまた面白いが、何々宗教だとか、何々主義だとか言つても、煎じ詰めると、皆利益の一點に歸着するんだから、厭になつちまふ。其の利益に深いのと淺いのと、念の入つたのと、念の入らないのとはあるが、大聖人の說

いたところも、詰まり利益が目的で、小賣商人と相場師とのやうに、利益に大小があるだけだ。

妻。(また少し眞顔になつて)藝術家の申します、美と醜とも、矢張り煎じ詰めたら、利害といふことになるんでございませうか。(殊更丁寧に言ふ)

主人。いやあれは少し違ふ。あれは利害と言ふよりも、好惡と言つた方がいゝ。兎に角利害といふものを超越してゐるのは藝術だけだと思ふが、僕には藝術といふことがよく分らない。……一部の人間から藝術が餘計なもののやうに言はれるのは、利害を超越してゐて、利益の目的物にならないからだらう。超越してゐると言へば、立派に聞えるが、まア仲間外れにされてゐるんだね。

妻。(妙に眉を顰めて)あなた、今日は頭がわるいぢやないの。何んだか矛盾したことばかり言つてるわ。變にこぐらかつて、解りやしない。(急にぞんざいな調子になる)

主人。(顏をばどこか痛いところでもあるやうに顰めて)頭は始終わるいんだ。僕ばかりぢやない、皆矛盾したことばかり言ふよ。矛盾しないことを言つてちや、大家になれないんだ。(苦笑する)

妻。(不圖庭の方を見下ろして、とんきやうな聲で)あらッ、大變だ。あんなものが。(指輪のダイヤモンドの輝く手で指さす)

　垣根の外には、いつの間にか、物干竿をかける杉丸太が、蹄鐵の古いのを三段に打ち付けて、竿を受けることにし、同じ太さのを二本、にゆうと蝸牛の角の如く、こちらの植ゑ込みを突き拔くやうにして、高く立ててあつた。

妻。(先刻とは違ひ、しんけんに眉を顰めて)あんなものを、あすこへ立てられちや、ほんとに困りますね、折角の文化住宅も臺なしですよ。このヴェランダだつて、すつかり打ち毀しだわ。(垣の外の貧民長屋へ聞えよがしに言ふ)

主人。(つく〴〵と、二本の杉丸太の突ッ立つてゐるのを見て)あれもいゝぢやないか。一つの景色だよ。

妻。だッてあなた、文化住宅に。

主人。文化といふことは、物干を立てないといふことかな。

妻。また皮肉が始まつたわね。(言ひ〴〵庭の方を見下ろして)おやッ。(また一大事が起つたやうに叫ぶ)

　物干の杉丸太には、蹄鐵の古いのを打ち附けて設けた二つ目の段へ、女物の赤い襦袢と、赤い腰卷とをば、いづれも洗濯したばかりで、ぽた〴〵と水のたれさうなのをかけた竹竿が、横に渡される。細い木の股に竹を長くつぎ足したさん股といふものが、ちよい〴〵動いて、干したもののの形をなほしてゐるのが見える。

妻。仕樣がないわね。あんなものをあすこへ干しちや。(またひどく眉を顰める)

主人。干す爲めに拵へたんだから、干すのが當然だらう。干さなけやどうかしてる。

妻。だつてあなた、あんなお腰なんか、こつちの書齋の眞正面へ向けて干すのは、失敬ぢやないの。

主人。こつちから見れや、書齋とヴェランダの正面だが、向うから言へや、裏口で、便所の前ぢやないか。……それに赤い色と言ふものはいゝもんだよ。赤化がいゝ、なんて、うッかり言はうものなら、叱られるどころか、殺されるかも知れないが、スッカリ赤い色のなくなつた世界を想像してみたまへ。第一太陽がなくなるぢやないか。星がなくなるぢやた

いか。月もあれやどツちかと言へや、赤い色の部に入るから、共になくなるんだね。太陽がなくなつちや、もうお仕舞ひだから、天體の赤化だけは、いかな警視總監も大目に見るとしてだね、地上だけから赤いものをスッカリ除くとしても、先づ花といふものの大部分がなくなると覺悟しなくちやならない。それから人間をすぱッと斬つても、赤い血が出ないとなつたら、景氣がわるいね。……

妻。(冷笑して)また始まつたのよ。お止しなさい。わたしはあなたがさうした馬鹿々々しいことを、得意氣に仰しやる時、あなたの價値が半減乃至三分の二減するのを感じますよ。

(ツンとする)

主人。(笑ひを忍んで)半減しても三分の二減しても、兎に角赤い色といふものはいゝものだ。……赤い湯卷に迷はぬものは、……(節をつけて)

妻。おやツ。(更らに甚だしく驚いた風で、きツと庭を見下ろす)

物干の杉丸太の一番上の段へ、汚いお襁褓を一面に暖簾の如く並べたのが、さん股で懸けわたされる。

主人。(も遂に眉を顰めて)これやいかんね。僕は明日から、旅行だ―

第二幕

第一幕と同じ場所。だいぶ曇つて、今にも、雨にならうとする日の午後。主人は新築の文化住宅が氣にかゝつて、旅行もつゞかず、二三日で歸つて來たところ。洋服。

主人。(ヴェランダの籐椅子にドッカと腰をおろして)あゝア、くたびれた。

主人の後から直ぐ上つて來た妻。第一幕と同じ頭髮、同じほどに濃い白粉。着物は稍古びた大名じまの縞大島。

妻。(第一幕の如く、主人と對ひ合つて、籐椅子に腰をおろし)あなたちよいと見てごらんなさい。

主人。(態ととぼけた風に)何處を?

妻。(得意氣に)お庭の方をちよいと御覽なさいよ!

主人。(顏をそむけて、庭の方を見ないやうにしながら)お襁褓の行列が厭だから、僕は、これから一切庭の方を見ないことに決心して、歸つて來たのだ。(ますく庭の方を見ないやうに顏をそむける)

妻。(笑つて)決心して來たの? お庭の方を見ないやうに。……ずゐぶん大仰ね。(また笑つて)だけど、ちよいと見て御覽なさい、一度でいゝから。……よう、ちよいと、たッた一度だけ。……ちよいと見て御覽なさい。

しつこく、うるさく勸めても、主人が、強情に、庭の方を見ようとしないので、果ては妻が、手を伸ばして、主人の耳朶を引ッ張つたり、兩手で主人の顎から頰を掬ひあげるやうに持つて、庭の方へ顏を捻ぢ向けようとする。

主人。うるさいなア。(頭を振つて妻の手を引ツぱづした機みに、顏が横を向いて、庭の方を見る)

庭には、垣根に添うて高く、貧民窟の物干を遮るやうに、杉の四分板の目かくしが、新らしく出來てゐる。

主人。おや。……えらいものが出來たね。これやまるで、洲の股城の一夜普請だね。よくこんなものが早く出來たね。……これやいゝ、これやいゝ。(首を傾けて感心する)

妻。ずゐぶんあなた、あれには苦心したのよ。

(得意氣な顏を、庭の方へ向ける)

主人。わかつてる。お前は賢夫人だ。よく注意して、牛を賣りそこねないやうにね。

妻。何んですツて？（主人の言葉の意味を解しかねる）牛をどうするの。牛の畫？

主人。まアいゝさ。（微笑する）

妻。初めね、龜やをやつて、あの物干を、どこかほかへ移してもらへないでせうかと、長屋の一番端の家へさう言はしたんですよ。ところが要領を得ないの。それから澤木さん（書生）に行つてもらツたんでせう。……澤木さんもさういふことには氣が利かないのね。矢ツ張り要領を得ないんですよ。たゞね、あの物干が、長屋の一番端のだと聞いてゐたのが、少し違つてゐて、五軒長屋の共有だから、いづれ相談の上御返事するといふことだけ聞いて來たの。

主人。それで要領を得てるぢやないか。

妻。まアお聞きなさいよ。……あなたは澤木さんが贔屓ね。……それでわたしが出かけて行つたの、厭だツたけど。

主人。（大仰に驚いた風をして）それや大奮發だ。

妻。すると、矢ツ張り譃なの。あの物干は、一番こツちの端の家ので、亭主は留守でしたが、おかみさんが大變な劍幕であの物干の爲めにお宅の方へ日あたりがわるくなるとか何んとかいふことなら、わたしの方もまた考へますが、たゞ見たとこ體裁がわるいとか、なんとか、そんな贅澤なことの爲めに、わたしの方の實用のものをどうすることも出來ません。あなたの方は言はゞ遊びごとだし、わたしの方はしんけんだと、かう言ふの。憎らしいぢやありませんか。（心外なといふ顔をする）

主人。尤もだ。（感心する）

妻。ね、尤もでせう。（甘える）

主人。いや先方の言ふことが尤もだよ。

妻。あら。あなたは先方の味方なの？

主人。味方はしないが、言ふことは先方が正しいね。此方の遊戯的眺望を妨げるからと言つて、先方のしんけんの生活を脅かすことは出來ない。

妻。さう。（不平な顔をして）それぢや、わたし、もうあの日かくしとツちまふわ。明日でもまた大工を呼んで。（悄然となる）

主人。（あわてて）いや、いや、誤解しちやいけない。今言つたのは、公平な批評家としての言葉だ。この家の主人としては、飽くまで、お前の態度を是認する。資本家國へ行けば、資本家の爲めに祈り、勞農國へ入れば、勞働者の爲めに祈るキリストの弟子のやうなものだ、僕は。

妻。（心の釋けた風で、にツこりして）それで直ぐ、この家を建てた大工のところへ、龜やをやつて、大急ぎで日かくしを拵へてくれと言はせると、親方は忙しいから、弟子をやると言つて、一人よこしてくれたので、何んでもいゝから早いがいゝと言つて、あれを拵へさしたの。

主人。それやよかつた。大手柄だ。あれで、お襁褓の行列も見えなくなつた。いゝあんばいだ。……しかし、今日は天氣がわるいんで、干してないやうだね。（庭の方を見つめる）

妻。今日も、干してあつたの、先刻まで。……それにおかみさんが、あすこへ來て、惡口が大變よ。……こんな日かくしなんか拵へられちや、また、干し物が乾かない。全體こんなところへ家を建てるから、長屋中の日あたりがわるくなつて、冬が思ひやられる。火をつけて燒いツちまへ、毛唐人の物置みたいな家……ですツて。……

主人。毛唐人の物置は、よかつたね。（ヴェラン

ずから書齋から、頻りに家の內を見廻す）

妻。直ぐ感心するのね。長屋のおかみさんの言ふことに。……學者のくせに。

主人。まアいゝや。（頭を掻く）

妻。それからね。（少し言ひにくさうにして）こんなことも言ふのよ。……米は高いけど、白粉は安い。……ですツて。……垣根の隙間から、わたしの顏を覗いたのよ。

主人。（うツかり感心しようとして、急に止め、口をもぐ／＼させる）

妻。ほんとに憎らしいのよ。（殘念さうにする）

先刻から、垣根の外に人の動く氣色がしてゐたが、この時、ぬらッと高く、物干の杉丸太に繼ぎ足しをして、目かくしの上へ、四尺ばかりも高く出る。

妻。あらッ。（目早く見とめて驚く）

主人。面白いな、これや競爭だ。此方でも目かくしを高くしてやれ。……おい、澤木、澤木。

（階下に向つて、書生を呼ぶ）

書生澤木登場。飛白の着物、小倉の袴。庭の方を見て、物干の高くなつてゐるのに驚く。この時物干には、汚いお襁褓の並んだ竿が懸け渡される。

わあア……と、多くの人の高く叫ぶ聲が、凱歌の如く垣根の外に聞える。

主人。（怒つた聲で）君、早く大工の家へ行つて、また一つ目かくしの繼ぎ足しをしてくれと言つて、賴んでくれたまへ。早くだよ。急ぐでは駄目だから、君が行つてくれたまへ。（急ぎ立てる）

澤木。あゝ さう ですか。行つてまゐります。

（退場）

主人。（むつかしい顏をして）長屋中が聯合してかゝつてると見えるね。面白いぞ、これから、物干と垣根との高さの競爭だ。

妻。決して負けやしないわ。

主人。これは別の話だがね。僕は旅行中に一つ論文の腹案を作つて來た。それは近頃頻りに家族主義の復興といふことを保守黨の連中が言ひ出して、子は親を訴ふべからずとか、祖先の墓を大事にしろとか言ふから、其の序でに、刑法の犯罪も一家族の連帶責任にして、一人が罪になれば家族が皆同罪といふことにするんだ。其のひどいのは罪三族に及ぶんだね。これほど徹底した家族主義はないし、こゝまで行かなければ、ほんとの家族主義とは言へない。親爺が牢へ入つても、息子は平氣で、役人を勤めてるといふのぢや、家族主義でないね。……かういふことを書くつもりなんだ。

妻。さうすると、あなたが若し牢へ入つたら、わたしも入るの？……いやなこツた。……でも同じ牢ならいゝかも知れないわね。ほゝゝほゝ。

書生澤木再び登場。

澤木。先生、駄目です。

主人。駄目とは？

澤木。其處で、あの目かくしを拵へた大工に逢つたんです。それで直ぐあの目かくしをもう四尺ほど高くしてくれ、と言ひますと、變にニヤ／＼笑つて、それや手間賃になるから、幾らでも高くするにはするが、この競爭はお前の方が負けだらうぜ、と言ふんです。……先生、奧さん、驚きましたね、先方ぢや長屋中聯合して、もう五月幟の棒の古いのまで持つて來て、立てる用意をしてますよ。此方が目かくしを繼ぎ足したら、先方は直ぐ物干を伸ばすつもりなんです。先生、奧さん、幾ら何んでも、五月幟の棒には敵ひませんね。十五間ぐらゐあるんですもの。あれを其處へ立てて、一面に汚いお襁褓を干されちや、たまりませんね。

妻。まあア。……（呆れる）

主人。其の大工はまた、どうしてさう委しいことを知つてるんだね。君はどうして、其の五月幟の棹まで用意してあるのを見て來たんだね。（不審さうにする）

澤木。（少し興奮した樣子で）先生、奥さん、この目かくしを拵へた大工が、あの物干の持ち主なんです。長屋の端の家に、大工はおかみさんと二人で住んでるんです。生れたばかりの子供が一人、それがあのお襁褓の使用者です。……大工は目かくしを拵へといて、直ぐ物干の杉丸太を伸ばす仕事にかゝつたんださうです。寸法がよく分つてていゝ、と言つてました。

妻。まあア。

主人。さうか。

二人とも呆れるうちに、

《幕》

遊び

ジョン・バーンスであつたか、ケヤ・ハアデーであつたか、英國勞働黨の一議員が初めて議院に送られた時、勞働服其のまゝで入つて行つたので、守衛が『何をしに行く。』と咎めると、「働きに行く。」と答へた。守衛が重ねて、「屋根の繕ひか。」と聞くと、「イヤ床の上だ。」と言つて、サッサと議場に向つて足を運んだ……

代議士が議場に出るのを純粹の勞働と見たのは面白いが、英國の議院政治が甚だしく國民の生活といふことに觸れて來たのは、こんなことがあつて以後のことのやうに思ふ。

日本の議院が國民の生活といふことに對して、何れくらゐに接觸してゐるか、或は幾許の距離にあるか、といふやうなことは、こんなところで測量すべき限りではないが、政治よりも一足先きに進まなければならぬ文學に於て、日本のはこれ迄まだ國民の生活と痛切に接觸したものが餘りなかつたやうに思ふ。ノンキに遊んでゐたものが多かつたやうに思ふ。眞に働くといふ意氣込で議院に送られた英國の政治家のやうに、全く『遊び』を離れて書かれた文學が尠なかつたやうに思ふ。

ゾラは古い。といふことに衆口は一致しても、日本の文學者で今までに、エミール・ゾラだけの仕事をマジメにしたものがあつたであらうか。古くてもよい、私はモッと生活に――生活問題――に接觸した文學が欲しい。

私は「働きに行く……床の上だ」と叫んで議院の門を潜るやうな人の日本に現はれることを望むものでないが、シンケンに生活問題に觸れたものを書く文學者が、勞働服を着た仲間から出るやうなことがあらば、兎角『遊び』の多い日本の文學にも、冴え切つた光りを見ることが出來るであらうと思ふ。

荷車が坂に行き惱んでゐるのを見て、馬車から飛び下り、大禮服の姿を其のまゝに、うんうん後押しをしてやつたのは、フランスのサン。シモンであつたか。これも詰まりは『遊び』に遊ひないが、同じ若旦那のすることでも、これだけ力の入つてゐる『遊び』ならば、また面白い。藝妓と一所に自動車を乗り廻すやうな若旦那文學からは、何の力をも見出すことが出來ぬ。文學は總てのものの魁であらねばならぬ。――文壇が今までのやうな風では、政治界に二十年前の古い〳〵旗を押し立つるものがあつても、笑ふ事は出來まい。（一九一五）

（『小ひさき窓より』より）

年譜

明治七年（一八七四年）
十二月十五日、奈良に生る。父の家は、世々手向山八幡宮の神主たり。從三位紀延興の孫。延興、國學に深く、才藻に富み、和歌をよくす。上司の丘に居るをもつて、上司を氏とす。本姓は紀。
父延美（通稱仲臣）、次男の故をもつて、出で攝津多田神社に社司たり。延貴（小劍）またこの寒村に生立つ。

明治十八年
母幸生死す。鹿兒島藩士安田鐵藏の長女なり。

明治二十年
小學校を卒へて、大阪に出づ。

明治二十二年
四月より大阪豫備學校に學ぶ。

明治二十六年
九月、父死す。祖父正四位延寅既に歿し、伯父延紘によつて生活を扶けられたるも、遂に學業を廢して、小學校の代用教員となる。月給三圓、間もなく六圓となる。

明治三十年
一月、堺利彦に勸められて東京に上る。
三月、讀賣新聞社會部長堀紫山の紹介をもつて讀賣新聞に入る。二十四歲。
明治四十年まで、社會部の編輯主任となり、兼ねて論説記者たり。

明治四十三年
讀賣新聞文藝部長兼社會部長となる。この間數年、フランス語をトーマス・アレキサンドルに學ぶ。
同年初めて小說を書き、雜誌「新小說」に發表す。處女作「神主」。

明治四十四年
長篇「灰燼」（春陽堂）、長篇「木像」（今古堂）を發表す。

大正三年
一月、雜誌「ホトトギス」に「鱧の皮」を發表す。
四月、「中央公論」に「天滿宮」を發表す。

大正四年
四月、讀賣新聞編輯局長となり、文藝部長、婦人部長を兼ぬ。
同月、隨筆小品集「小ひさき窓より」（大同館）を出版。
五月、短篇集「父の婚禮」（新潮社）を出版。
六月、長篇「お光壯吉」（植竹書院）を出版。
八月、小說「美女の死骸」（鈴木三重吉刊行東京堂發賣）を出版。

大正五年
一月、讀賣新聞編輯局長及び婦人部長を辭め、文藝部長の名目だけを存し、重に自宅に在つて創作に從事す。
九月、小說「巫女殺し」（[illegible]社）を出版。

大正六年
七月、長篇「處女から母に」（[illegible]）を出版。
九月、小說「鱧の皮」（新潮社）を出版。

大正九年
四月、短篇集「生存を拒絕する人」（[illegible]）を出版。
九月、讀賣新聞社を退く。
同年、長篇四部作「東京」の腹案を立つ。

大正十年
二月、長篇「東京」第一部「愛慾篇」を「東京朝日新聞」に掲載し始む。

同月、長篇『花道』(叢文閣)を出版。
十二月、長篇『東京』第一部『愛慾篇』(大鐙閣)を出版す。重版二萬餘部。
同年より翌年に渉りて、長篇『東京』第二部「勞働篇」を「中央公論」に連載す。

大正十一年

三月、長篇『花瓶』(聚英閣)を出版。
八月、長篇小說『東京』第二部『勞働篇』(大鐙閣)を出版す。重版約一萬部。

大正十二年

七月、長篇『早婚者の手記』前篇(金子書店)を出版。
八月、暑を日光中禪寺湖畔の米屋に避けて長篇『東京』第三部『爭鬪篇』の執筆中、同九月の震災に遭ひ、出版元大鐙閣燒亡し、校正中の原稿を燒く。

大正十三年

六月、長篇小說『女護の島』(文社)を出版。
八月、短篇集『ユウモレスク』(中央堂)を出版。

大正十四年

一月、短篇集『西行法師』(而立社)を出版。

昭和三年

十一月、長篇小說『東京』第一部『愛慾篇』第二部『勞働篇』、第三部『爭鬪篇』を合冊し、『長篇小說全集』第十六篇として(新潮社)出版。

昭和四年

三月より長篇『歌の翼』前篇を「東京日日新聞」「大阪毎日新聞」に發表。

昭和五年

二月、長篇小說『東京』第四部「建設篇」起稿。

小ひさな藝術家

夏の盛りに、秋の色が炎のやうな大氣の中に浮んでゐるやうに、寂しい寒さの中にも暖かい春のおとづれが聞えます。

鶯の多い私の家の庭には、朝からチョンチョンと筰啼きの聲がします。もう起きようかと、夜具にくるまつたまゝ半身を起すと、障子のガラスから、庭の楓の木にとまつてゐる上品な黄色い鳥が見えます。

其處へ四五羽の雀が來て、この黄色い公達を苛めにかゝる。私の家の周圍には雀も多いのです。

鶯は雀に追はれて、彼方へ逃げ此方へ渡りして、庭の木々を移り廻つてゐましたが、たうとう建仁寺垣を越えて、何處へか逃げて了つた。小ひさい貴族は、多くの平民の攻撃に堪へなかつたのです。

理智的に規則立つた社會組織と、經濟制度とを有してゐるらしい、さうして人、否鳥並外れて雄辯な雀に、遊治郎の音樂家たる鶯は、何處から行つたつて敵ひますまい。

さうして彼れの上品な姿と氣高い藝術とは、俗惡な百まで忘れぬ踊の一手より外に知らぬ、趣味の低下した雀どもに理解されよう譯はありません。

私の家の庭には、生惜梅の木が一本もありません。私は何處かで細いのでも一つ求めて來て、植ゑようかと思ひますけれど、其處に黄色の小ひさい藝術家がとまつてゐるところへ、勞働者が馬鹿野郎呼はりをしつゝ、尻ヒン捲つて坐り込みに行くのを見るのが厭さに、まだそれを果しません。

小ひさな藝術家よ。御身は速かに死にたまへ、亡びたまへ。さうして強く且つ進んだ勞働者の群に伍する憐れさと、彼等樂隊に迫害さるゝみじめさとを見せてくれるな。

(『小ひさき窓より』より)

小川未明集

童話の社會を現出せんとするところに藝術の使命がある

未明

烏金

叔父は旅へ出てゐる。留守居を私と叔母がしてゐた。或る日叔父の許から爲替金がついた――叔父は行商人である――其の明る日のことであつた。

早くから起きて、私は外へ遊びに出ようと思つて、心が落付いてゐなかつたが、叔母が遊びに出れといはなければ出られないのだ。私は、二三度勝手許へ行つたり來たりしてゐた。相變らず勝手の板の間には味噌を入れてある大きな瓶がある。毎日見てゐるので珍しくもないのだが、ついそれに日が止ると茶色の瓶に浴びせかけた黑い模樣などが目に入つて、其の瓶全體の趣きが、直ぐ私に死んだ母を聯想させた――私の家にもよく是に似通つた瓶があつた。而して黑い模樣もちやうど斯樣なやうであつたと思ふ――私は、用のないのに勝手へ來たり、また居間へ入つたりしながら、早く叔母の許しを得たいものだと、考へるうちにも外で鳴つてゐる凧の音などに氣が取られてゐた。

叔母は、彼方、此方と取り片付けてゐる。私にはもう何もする用がないにと思はれるのに、また叔母は戸棚を開けて皿を出したり、入れたりしてゐた。而して傍にゐる私には少しも注意も向けてゐない。叔母は、其頃リウマチで足が惡かつた。やつと、叔母の仕事が濟むと、叔母は私の顏を見た。もう遊びに出てよいといふだらうと心が勇み立つた。

『今日は大事な用事があるんだよ。』と叔母は私に向つていつた。

其れを聞いた時、私はがつかりした。やはり遊びに出られないのかと思つて落膽した。叔母は私を伴れて奥の間へ入つた。而して小簞笥の前に坐つた。まだ叔母は襷を外さずにゐた。勝手をする時の前垂をかけてゐた。すべて働く時のまゝである。頭髮の薄い、顏に小皺の寄つた、極めて氣の小さな人であつた。

私は叱られるのではないと、早速其の樣子で知つたが、大事の用とは何事かと思つて其の前に正しく坐つて兩手を膝の上に乘せてゐた。

「お前に分るだらうか。」と叔母は獨り言のやうにためらつた樣子であつたが、

「お前よくお聞きよ。」といつて、未だ叔母のいふことが私には分らないのに、叔母はヒステリー風にちよつと私を叱つて見た。而して、ぐるりと後方を向いて、簞笥の抽斗から、鍵を出して一番上の抽斗の錠を外した。抽斗を開けて其中から、一つの紙包を取り出すとまた舊のやうに抽斗を閉して、錠を下してしまつた。

「烏金を返しに行くのだよ。」と叔母の氣はやはり、自分の手にしてゐる紙包の方に取られて、微かな聲でいふと紙包を開けて中を檢べて見てゐる。

おまじなひや、お寺詣りや、總ゆる世の中の不思議なことを信じてゐる叔母は、時々私には分らない、たゞ妙だと思はれるやうなことをいふ。

この場合にも、私には『烏金』といふ意味が分らなかつたものだから、

『叔母さん、烏金つて何？』といふと、

「え。」とやはり、紙包を氣にして下を向いてゐながら、此方に氣のない返事をする。

『烏金つてや……』と三度私がいひかけると、

「いゝよ、そんなこと知らんでも……』とやはり、下を向いて紙包を氣にしてゐる。

私は心の中で「烏金」が分らなくて心配でならなかつた。きつと消炭のやうに黒い色をした金であると思つた。

何か知らず消炭が想ひ出された。而して一種厭な黒い色をしてゐる金であるやうに思つた。滅多に表向には通用が出來ず、隱れて使ふ金のやうにも考へられた。

『あの女もなか／＼現金だからね・・・』と叔母は、自分獨りに分つて、私には分らないことをいつてゐる。

『叔母さん何處まで、お使に行くんですか。』と聞いた時、初めて、叔母は顏を上げて私の顏を見たのである。けれど直には決しかねて、私をやつていゝものかとためらつてゐる風が見えた。私には、叔母がリウマチであるため遠方へは行かれないのだから、今度の使もきつと遠方であるなと思はれた。

『此間行つた尼さんのところへ使に行かれるかい。』ときつぱりといつて、叔母が私に聞いた。

『此間行つた・・・』と私は考へた。

叔母は不安さうに眼を光らして、熱心に私の顏を見詰めながらいつた。

『職人町の・・・』と、町の名まで教へた。私には分つた。半道ばかり遠い處に、獨りで住んでゐる、もとは尼であつたとかいふ四十許りの女の處へである。

『ハイ。』と私は、厭々ながら返事をした。

『金を持つて行くのだよ。』と叔母は調子をかへて言つた。

『ハイ。』と何んでも私は叔母の言ひ付けに從はなければならぬのだ。

叔母は、簞笥の抽斗から風呂敷を出して、手に持つてゐた紙包を包んだ。而して私に向つていふに、決して途中で友達に遇つても金を持つて使に行くなどと言つてはいけない、また友達と一しよに遊んでゐてはいけない、たゞ眞直に行つて眞直に急いで歸つて來い。しかしあんまり急いで落すやうなことがあつてはいけないからといつて、風呂敷包を手に通して落さないやうに持つて行けと言つた。叔母は其れから、まだいろ／＼注意を與へた。私に先方へ行つてからの言ふことまで、一々語つて聞かせた。最後に、

『お前に行つて來られるかい。』とまた頭から押へ付けるやうにいつた。

私は、それ程の大事な金が入つてゐるのかと思つた。――烏金――消炭色の黒い金――表向きに使ふ金でなくて、隱されて使ふ金といふ空想を再び畫いた。

私は、其時大丈夫行つて來ると叔母に誓つた。叔母はやつと安堵したけれどまだなか／＼不安な樣子であつたが、ふしようぶしよう私を門口まで送り出した。私はさつさと外へ出てしまつた。後方で尙ほも叔母の注意してゐる聲が聞えた。

外へ出たけれど少しも嬉しくなかつた。私は、大切な用事を引き受けて來た身の上であるといふことを考へると外に遊んでゐる子供の群にも注意せずに、一心になつて道を歩いた。けれど時々凧の音などが耳に入つた。此時、空を仰ぐと高らかに青々と晴れ渡つた美しい麗かな天氣である。しかも雪は凍つてゐて、子供等は田の上となく畑の上となく凍つた雪の上を驅け廻つて凧を上げて遊んでゐる。

けれど私には、少しも此の好い天氣が氣持よく感ぜられなかつた。朝起きた時まで此の天氣は氣持よかつたが、叔母の言ひ付けを聞いてから急に私の心は鬱いで頭は重くなつて、此の大事な用事を仕遂げて歸らないまでは自分の身體のやうにも思はれなかつたのである。

頃はちやうど二月の末である。北國の低い

村の家並が彼處にも此處にも陰氣に見られた。四邊の木立まで重苦しく陰氣に見られた。日當りのよい家根の片面だけ雪が融けて、黑い色の石がぽつら／＼と出てゐるのやら、黑ずんだ杉の生垣などが前を立て塞めてゐる家などがあつて、何となく、空は青く冴えても、何處にか暗い、冴えぬ景色を見ると、私はまた――烏金――消炭色――隱れて通用する――といふやうな聯想が胸に縺れ合つて――母が死んでから、此方――時々何といふ譯なしに思ひ込むと心の中が暗くなる一種の悲哀を覺えた。

彼方にも此方にも、黑い家根石の出た長屋が見えた。黑い石を見詰めると深い穴が眼の前に幾つも明いてゐるやうな氣がする。また彼方の黑い杉の森を見ると母の葬式の日の有樣などが目に浮んだ。はや、私は寂しい田舍道を出て町へ入つてゐた。

――別段に知つてゐるやうな友達にも遇はなかつた。私は叔母の言つたことを思ひ出して却つて遇はない方がいゝと思つた。けれど少しも淋しいとは思はなかつた。却つて人が私に注意しないのは、私の金を持つてゐるといふことに氣が付かんからだと安心した。町の片側と片側とが挾んだ道の眞中には雙方の家根や又は通り道からはき寄せた雪が積つて、それが日の當る上の方から融けかけて、しかも塵埃で、白いのが汚れて、穢くなつて、ちやうどゴツ／＼として牛の脊骨のやうに尖つて横はつてゐた。

此前叔母と此町を通つた時に、赤と白の椿の造花を人足が持つて、それと同時に白木の柩を擔ぎ出さうとしてゐた佛具師の前に來た。此日は、店の内は靜かで、一人の小僧が働いてゐた。やはり店には、金紙や、銀紙や、造りかけた梅の花や、柩の家根になる板やらが取り散らされてゐた――私は斯樣な家の前を通るのが苦痛だ――何となく緣起が惡い。紋屋――紺屋――表具屋――指物屋などの澤山並んでゐる――いつしか職人町へ來たのである。

私の行く、尼さんの家は、もう大分近くなつた。

此時私は、日頃叔母が話をしてゐる尼さんの身上を想像した。またなぜ叔母は斯樣な烏金などを尼さんから借りたのだらう？

昨日、叔父の許から催督が來た……何か、叔父、叔母、尼さんの間に一種の關係があるらしく考へられた。私は、叔母と尼さんとの關係などをいろ／＼考へて見たが遂に分らない。たゞ、叔父も、叔母も、今迄には幾たびも尼さんの所へ行つたやうだ。先日叔母は尼さんの許から歸ると、足が痛いといつてゐた。此頃の叔母の足は大分惡い。私が、叔母と共に尼さんの處へ來たのは二度ばかりであつたが、いつも尼さんは愛想よく迎へてくれた――私は尼さんの顏が目から取れないでゐる。尼さんは私が行けばきつと可愛がつてくれるが、私は何んだか氣味が惡い感じがする――今は尼さんではないといふことだ。

尼さんの家は、職人町の西側で、小さな暗い二階屋である。尼さんは一人で其家に住んでゐる。表は細い縱格子になつてゐて、小さいくゞり戸を開けて入るのだ。内は薄暗くて、陰氣でいつも曇つた日でもあるやうな感じがする。

尼さんは、年頃四十ばかりの色の白い、眉毛の薄い上に、齒を黑く染めてゐて頭にはいつも黑い頭巾を被つてゐた――私は、尼さんの笑ふのが、何處か氣味が惡く、厭に思はれた。其樣なことを考へながら、いつしか尼さんの家の前に來た。

直ぐ家の前には小さな杉の林があつて、田舍町は斯樣な工合に處々とぎれてゐた。杉林の中には醫者の家がある。白壁がちら／＼と間か

ら見える。麗しかつた空はいつか曇つて、少し風さへ加はつて來た。晝過にはまた雪が降るかも分らない。北國の天氣で一日麗かな冬の日といふものは稀である。
實に不安な空合だ。
杉の木の頭は、揃へた樣に並んで、先が尖つて空に聳えてゐた。軟かな、羊の毛の樣な白雲が、幾重にも重つて、日の光りを含んで、底光を放つてゐたが、杉の頂は折々吹いて來る北風に動いてゐた。町の西の方にも、東の方にも凧の鳴り音が聞えた。私は、呢と佇んで、杉の樹の上を見、また雲を見ると、早く家へ歸らうといふ氣が起つたので、元氣を付けて尼さんの家の例の低い小さなくゞり戸を、がたぴしやつて開けて入つた。裡は、やはり陰氣に濕りかへつてゐた。
『ご免下さい。』と、私は訪れた。
けれど何の返事もない。私は、更に大きな聲で、
『ご免下さい。』といつた。
けれどやはり返事がない。私は、留守かと思つて、暫く耳を澄してゐると、晝間でさへ、天井裏に鼠が騷ぐ音が聞えて――私は悲しくなつた。
『ご免下さい。』と更に三度、四度と大きな聲で叫んだ。
若し留守だつたら何うしよう、此處から、自分の家までは隨分遠い。その間をまた今來た時のやうに一生懸命に歸つて、而して叔母に此の事をいつたら、定めし私は役に立たぬといつて叱られるだらう。此の金は大事な金だと聞いてゐる。若し尼さんが留守だつたら何うしようと急に胸が詰つて泣き出したくなつた。
私は、表へ出た。而して尼さんが使に行つた先から歸つて來はしないかと暫く尼さんの家の前で待つて、町の南と北とを眺めてゐた……けれど尼さんの姿は見えなかつた。直ぐ南隣りは易者である。前に爺さんが八卦を置いてゐる看板がかゝつてゐた。
また北隣りは、陶器つぎやである。店の前には、大きな罅の入つた鉢や、丼や、瓶などが幾つも並べてあつた。青い色の鉢には罅が十文字に入つてゐる。それは白い粉か何かでついだと見えてちやうど傷口のかせた時のやうに薄黑く痕がはつきりと見えた。丼もやはり青い色である。瓶の色は薄黑い。私は一々店に並べてあつた是等の傷の入つた陶器を一々心に止めて見てゐると、中には艶々と光つた火鉢の上に、表の杉林の動くのが映つてゐるのもある。私はまた振向いて杉林を見た。其の林の頭の上に宿つてゐた白雲を見た。愈々天氣が變りさうになつて來た。私は、早く尼さんが歸つて來てくれないかと思つてまた長くつゞいてゐる町の南と北とを眺めた。稀々の人が往來してゐる。
けれど尼さんの姿はやはり見えなかつた――
私は、再び店の陶器に目を止めると初めて此等の燒つぎの傷の入つた青色の鉢や、丼や猪口の上には塵埃が澤山に白く溜つてゐるのに氣がついた。また先刻まで目に止らなかつた神棚に上げる小さなかはらけなどが目に入ると、其れから其れへといろ〳〵な聯想が起つて、私には更に一段の悲しみをまさせたのである。私は、もはや堪へられなくなつた。
『いつ尼さんは歸るのだらう……此のお金を渡さんで歸るとまた叔母さんに叱られるのだ。』
と思ふと、死んだ母さんが戀しくなつた。若しも母さんが生きてゐたなら私はどんなに嬉しいだらう……と、目は自から、陶器店のかはらけの上に落ちて、熱い涙が湧き出るので、
『小母さん』と、大きな泣聲で叫んだ。
すると、此の聲を聞きつけて、隣りの燒つぎやの女房が乳飲兒を抱いて家の内から出て來た。

三十前後で髪は亂れて、汚らしい風をしてゐた。而して泣いてゐる私を見ると、

『先刻から呼んでゐなさいますがお留守ですか。』と尋ねた。

私は、默つて泣きながらうなづいた。

『何か御用があるなら、私が聞いて置いて上げますよ。』と女房は優しくいつてくれた。

私は女房に柔しくいつてもらつたのが嬉しかつた。誰でも柔しくいつてくれる人は、皆な私の母親のやうな氣持がして、どうか此の優しくいつてくれる女房が私の母親であつてくれゝばいゝにと思つた。初めのうちは、例の烏金のことを言ひ出しかねてゐたが、いつしか心のうちが和いで女房が懐しくなると共に、尼さんの所へ使に來た用事を語つてしまつた。

『おゝ、お金を持つてお出でなすつたのですか。』と女房は少し考へながらいつたが、

『もし、私でいゝのなら預つて置いてお歸りになつたら渡して上げますよ。』といつて、また、

『それは大丈夫渡して上げますよ。』と念を押して柔しくいつてくれた。

私は、もうすつかり此の女房が懐しくなつてしまつた。而して心から女房を親切な人であると思つた。何んで夢にも此の親切な女房を疑ふことが出來るものか、私は、もはや此の儘、女房の子供となつてしまひたいやうな氣持がしたので、たゞ默つて風呂敷包を其の女房に手渡した。而して女房を仰ぐと、何と思つたか女房も眼に涙を湛へて柔しく笑つてくれた。私は、餘りの嬉しさと恥しさに、顔が赤くなつて、居堪らなくなつて、

『ぢや、小母さん渡して下さい。』といふと、其儘其處を駈け出してしまつた。やゝて、一二町來てから振向いて、女房を見返ると、もう人が往來するのに妨げられて、それらしい立姿も見られなかつた。

私は、家へ歸るまで幾たびか女房の姿を想ひ浮めて、戀しく懐しく、胸の血潮が亂れるのを禁じ得なかつた。私は、ちやうど春の天氣に浮かれてゐるやうな感じがした。いつしか家の前に來て立つた時に、叔母は、何といふかと思ふと遽かに今迄の嬉しさが醒めてしまつた。而してどんなに叱られるだらうと……流石に家へ入りかねた。

私は二三度家の前を往來して、まごついてゐた。家のうちでは叔母が炬燵に當つてゐて、咳をする聲が聞えた。

果して空模様が變つてしまつた。もはや、大空にはいゝ風が出て來て、何處を見ても凧の音が聞えない。

私が家の前をまご／＼してゐるのを目敏くも叔母が見付けた。

『倖二でないか？』と名を呼ばれたのが、百雷の落ちたよりも激しく耳に轟いた。

『ハイ。』と私は答へて、どう叔母が言ふだらうと心配して戸の口を入つた。

私の顔を見ると直に叔母は、

『尼さんに屆けて來たかい。』といつた。

私が口籠るのを見ると、はやヒステリーの叔母の顔色が變つた。もう叔母はすつかり私の心のうちを見拔いてゐるやうだ。私は、有の儘を語つて、

『女房が……』といひ出しにかゝると、

『何？　女房に渡したえ？』と叔母は驚いて、後方に倒れかゝつた。もう私が何といつても其後のことは叔母の耳には入らなかつた。叔母は聲を上げて前垂を顔に當てて、其處で泣き出した。

『あゝ、お前を使にやらなければよかつた。』

私は餘りのことに驚き、初めて大變な事をしたと心付いた。而して初めて彼の女房を怨めしく思つた。……

暫く其處に叔母は泣いてゐたが、懐しく其座を立上つた。私は子供心ながらに若しや……何うなるのかと思つて續いて後を追つた。叔母は其儘身形も構はずに勝手の隅に倚せかけてあつた杖を取ると家を出て行つた。私は泣きながら「叔母さん何處へ行くの？」

と呼びかけると、一寸叔母は立止つて振返つたが何も言はずに其儘行つて了つた。私は此時許りは餘りの叔母の權幕に怖れて追驅けて行つて取り縋ることが出來なかつた。

叔母は、痛む脚を引摺りながら、合羽も被ず、竹の杖を突いて腰を曲げて白髪交りの頭を風に吹かせながら、白の破れた足袋をはいて、汚れた前垂をかけたまゝ、町の方を指して急いで行つた……急いでゐるやうであつたけれど、歩みははかどらなかつた……私は、見えなくなるまで、叔母の後姿を見送つてゐたが、職人町まで叔母が行かないうちに日が暮れてしまふだらうと思ふと、氣の毒だ、惡いことをしたといふ感が胸に迫つて、小さな胸は張り裂けるばかりであつた。

午後から北西の風が募つて、ちら〳〵と雪が降つて來た。

空は一面に經かたびらをかけたやうに灰色になつてしまつた。私は獨り表に立つて、彼方の町に出る道の方を見ると、遠くには寺の栗林が寒空に枝を擴げてゐて其の下にある幾つかの灰色の墓の頭が見える。人通りは稀にぽつらぽつらとあつた――黑い合羽を着て、村から町の方へ出て行く人影がある。其れを見送つてゐるといつしか寺の横手を曲つて見えなくなる。また暫くたつと町の方から、赤い毛布を被つて、ちやうど達磨のやうな姿をした人影が、てく〳〵と歩いて村の方へ入つて來る。私は、黑い合羽を着た人……赤い毛布を頭から被つた人を見ると……是等の人達が、やはり烏金を持つてゐるやうな氣持がした。殊に、今彼方から來かゝつた赤毛布の男は、祕密に使ふ烏金のやりとりの使でもしてゐるものの樣に思はれて、怖しいやうな、氣味の惡い感がしたので、其の男がだん〳〵此方に近づいた時、私は戸口に逃込んだ。

あゝ、叔母さんは今頃どうなつたらう……寺の栗林が朦んで見えなくなるまでに雪が降つて來た。

平野に題す（一）

「すべての人は、死すべきものなり。」と、いふことを眞に痛切に感ずるのは、大空に浮動する白雲を心なく眺めた時であります。

明るい夏の自然には、悲しみが潜んでゐますやがて來る秋の姿は、早くも澄み渡つた青白い、更け行くとも見えない、淡い夜の空に遠く幽に輝く星の光りに、音も立てずに南から北に消えて行く銀河にも感ぜられるのであります。

人間は常に現在を考へるばかりでなく、何かにつけて未來を考へ過去を考へるものです。人生歴史あつてから幾百千年を算へますけれど、思つて見れば、其れは眞に慌しい束の間の事實に過ぎなかつたのです。尙ほ處々に古墳が殘つて居り、其の民族の使つた土器が落ちてゐるのを發見した時などは、眞に斯の如き感を深くするのであります。

陰晴定まりなき、日本アルプスの峻嶺を遙か西の國境に眺めながら、ある夏の日のこと、私は、平野の間を歩き廻つて、石器や土器の蒐集につとめたことがあります。

（『未明感想小品集』より）

雪來る前

豐吉と長二の二人は、今も笛を吹いたり泣いたりして見せてゐるやうだ。

北國の濕り勝ちな秋、雲は薄墨を流したやうに空を染めて、村は日々に黄色く色づいた。夏の初め私の隣りに町から越して來た一家がある。兄は二十三、弟は十七、弟は暫く東京に奉公してゐたが、肺を患つて歸つて來た。

冷たい風が來て、背戸の柿の葉をさわ〳〵と鳴らした。天地は一時靜まりかへつた。此時、彼方の墓場で、人の叫く聲が聞えた。此方で見ると、栗林の下に黑くなつて人が集つてゐる樣子――白い提燈が見えた。

「あゝ、死んだ人を埋めてゐるのだな。」さう思へば、先刻寺の鐘が鳴つた。本願寺といふ寺だ。古い寺で、もはや周圍の白壁が處々落ちて赤地が出てゐる。

また、鐘が鳴り始めた。人の聲が聞える。前の柿の葉がさら〳〵鳴つて、冷たい風が吹く。兄の豐吉は家の入口で、鉈や、鋏や、糊や、小刀を出して、破れた胡弓の修繕をしてゐた。

私は、家の裡を覗いた。暗い日であつた。障子は煤けて、破れてゐる。他に誰もゐない。隅の方で弟の長二はしく〳〵泣いてゐた。私は、暫く默つて見てゐると、長二が泣き腫した赤い瞼を此方に向けて、につこりと笑つた。が、しくしくと泣きつゞけた。彼は十二歳の時から、東京の絲屋に行つてゐたので、病氣は、主人の女房のが染つたとかいふ。顏は青く、體が瘦せ衰へてゐた。國に歸つて來たが、家が貧しいので醫者にも見てもらはない。自然の成行に委して置いた。時に蝮や青蛇の膽が藥になるといふので、豐吉は青竹を持つて、河邊や、桑畑の中を歩いてゐることがある。これは父親が命じたのである。兄弟が喧嘩をすると兄は弟を、「死に損ひめ」といふ。弟は、さういはれると直ぐ泣くのであつた。もう直に自分は死ぬのだと考へると悲しくなる。今日も、また喧嘩をして泣いてゐるのだ。兄は無口に似ず笛を吹くのが上手であつた。またよく胡弓も彈けば歌もうたつた。

空には雲がはびこつた。ランプを點けたい位に薄暗くなつた。豐吉は熱心に胡弓を直してゐる。前には青竹の割れたのがあつた。前の戸口にある櫻の木が、さら〳〵と鳴つて枯れた葉が落ちる。灰色の空に、頭を揃へてゐる遠くの杉林が見えた。墓場では、まだ人が何やらやつてゐた。

「どう、これで直つたか。」と豐吉はいつて、輕く弓で、絃に觸れて見た。

きい〳〵と悲しげにすゝり泣くやうな音が出た。暫く豐吉は耳を傾げてゐたが、力を入れて強くひくと其音は傷つた胸に痛く響くやうだ。彼方の隅で泣いてゐた長二も此時耳を傾げてゐたらしい。豐吉は一層力を入れて彈くと、高くなつて、其刹那にぷつりと絲が切れた。

「畜生め。」といつて豐吉は、其處へ胡弓を投り出して、溜息を吐いた。

私と長二とは胡弓の絲を買ひに町へ行つた。二人は墓場の側の空濠の淵を通つた時に、「また誰か死にましたね。」と、長二は立止つた。

其處からは、木の間から寺の壞れた壁が見える。もはや蜂の棲んでゐない、古い巢があつた。子供等に石を投げ付けられて半分壞れたのが懸

つてゐた。紅い漆の葉がひら〱する。空濠の淵には樒などが繁つてゐた。竹藪もあつた。倒れた石塔や、半分濠にのめり込んだ石塔や、割れた墓石などがあつた。また頭を累々と擡げてゐる墓石もあつた。無緣のもの、有緣のもの、村の貧者の墓も、町の富貴の者の墓もある。竹林を倒して、其處に新しい白張提燈が三つばかり立つて、眞新しい卒塔婆の姿が見えた。其れに目をとめて長二はいつたのだ。

『あゝ、先刻土を掘つてゐた。』と私は簡單に答へた。

はや長二は涙ぐんだ。いつしか自分が年若くして、土の底に行かねばならぬと考へたからであらう。私は、子供心ながらに長二に同情した。で、かういつた。

『早く行つて、早く歸らう。降つて來るよ。』……

空を仰げば暗かつた。

長二は何となく氣が進まぬらしい。私の後について歩いた。

『敏さんの家のお墓は何處?』と長二が私に聞いた。

『禪念寺だ。』と答へた。

長らく、都にゐた彼は、禪念寺が何處だか忘れてしまつた。私も、二三年前の盆に父と行つた以來行かなかつた。何んでも町の端であるやうに思つた。而して寺の境内が淋しかつたやうに思つた。寺だけは本願寺よりは小さかつたが綺麗であつたやうに思つた。

長二は、長い睫を潤ませた。

『今度病氣が快つて東京へ歸つたら、敏さんに綺麗な羽織の紐を送りますよ。』といつた。

此時私は十五で、長二よりは二つ年下であつた。

『お前が紐を製るのかい。』

『機械で織るのもあるが、私が手で製つて上げますよ。』

『東京は賑かだらうね。』

『えゝ、賑かですよ。』と何となく氣のない返事をする。

『いつ東京へ歸るの?』と私は聞いた。

『秋、病氣がなほると歸りますの。』

『だつて、もう秋ぢやないか?』

『まだ雪が降らないから、雪が降る前に歸りますよ。』

『もう、難波山へ雪が來たよ。』

『さうですか。』

『まだお前は雪を見ないの? 僕は昨日の朝見た。』

『今、見えませうか。』といつて長二は西の山を眺めた。たゞ一面に灰色の空は、總てを隱してゐる。冷たい毒を含んだやうな風が森も、林も、村も、鋭く刺すやうに吹いてゐる。

『雪が降らないうちに歸りたい。』と長二はいつた。

私は、今年の暮には、もはや長二はゐたいと思つた。彼は賑かな東京でお正月を送るのだ。よく少年雜誌の口繪にあるやうに東京のお正月は賑かだらうと思つた。私は、何となくこの優しい長二に別れるのが名殘惜しい氣持がした。

町へ出ると金看板のかゝつた藥屋があつた。其前を二人が通つた時に、沈香の匂ひが鼻に染みた。大きな藥屋であつた。私は肺病の妙藥があるだらうと思つた。また絲屋の前を通つた。店の硝子箱に紅、青、紫の絹絲や、光る針を黄色な油紙に幾十本となく差したのが入つてゐた。私は、心のうちで長二の行つてゐる絲屋は斯樣な絲屋でなく、もつと大きな小僧の澤山ゐる家だらうと思つた。

二人は、九尺間口の小さな三味線屋に入つて胡弓の絲を二筋買つた。此の三味線屋は町の左側にあつた。滅多に此家に限つて人の入つ

てゐたのを見なかつた。店にはずらりと三味線が三本も四本も並べて懸つてゐる。胴の赤いのや、黒いのや、また丈の長いのや、短いのが懸つてゐる。私は、子供の時分から三味線の形が厭であつた。何んだか陰氣な、此の形を見てゐると病氣にでもなつて、頭痛を催しさうになる。二人は黄色な細い絲を買ふと、急いで家に戻つた。

家に入る頃、ぽつら〳〵と雨が降つて來た。間もなく日が暮れた。

長二の兩親は夜遲くならなければ、出稼ぎから歸らない。やがて、小さな窓から燈火が射して、豐吉と長二が二人で留守をしてゐた。

是迄、豐吉は幾度となく役所や、會社の小使に雇はれて行つたが、怠者で直に職を止してしまつた。彼の兩親は豐吉のなすまゝに委して置いた。いつまでもかうやつて、自分でも遊んでゐられまい。――年寄つた兩親が斯様にして働いてゐるのを見て――其れに此頃、長二が病氣で歸つてゐる。幸ひ、病人を一人殘して働きに出られないからと思つてゐた。

時雨はじめ〳〵と降つてゐた。何處からも燈火が洩れなかつた。獨り、此の寂れた家の小窓からは、燈火が洩れて、前の暗い泥道の上を薄く照してゐる。内では親しげに二人の話する聲が聞えた。また胡弓の音と、哀れな歌の聲とが混つて聞える。

もう二里隔つた、直江津海岸に打ち寄せる波の遠音が、夜毎々々に枕に響くのである。はらはらと、柿の木の落ち殘つた葉が、風の吹くたびに闇の中で鳴る。

「今夜雪が來るかな。大變冷える。」と豐吉は胡弓を鳴らしながらいつた。

火鉢に手を翳してゐた長二は、

「早く東京へ歸りたいもんだ。」といつた。

「其の體で何うして歸れる。雪が降つても越後は温かだ。」と豐吉はいふ。

「いやだ、雪の降る前に歸りたい。」

と長二はいつて、子供の時分、毎日々々雪ばかり降つて、一日青空を見ない北國の冬を考へ出して早く都に歸りたいと思つた。稀に天氣になつて日が當つても、雪は地上に六尺も積つて、旅人は家根よりも高い雪の上を歩いて行く。別に出て見る所もなければ友達もなく、一日茫然と日を暮してしまふ。偶々聞くものは鳶の啼聲か、烏の啼聲位のものであることを考へ出すと、早く雪の來ない前に都に歸りたかつた。

「東京は是からお天氣がつゞくのだ。」といつて、長二は押出窓の障子にザッと當る雨の音に耳を傾けた。ランプさへ曇つて薄暗い。

「其體で、今歸れるか考へて見ろよ。」と豐吉は、やはり胡弓を鳴らしてゐる。最初胡弓の方に熱心であつたが、終には弟の話に半分氣を取られてゐた。

「雪の來ない前に歸りたい。」といつて長二は涙ぐんだ。

「分らない奴だ。」と怒鳴つて、豐吉は、俯目になつて、また細い聲で歌ひ始めた。

『外が暗いのに、隣りでお經。
木魚叩いて、霙降る。』

歌ふ聲は哀れだ。ランプは暗い。たゞ雨の音がすゝり泣くやうに降つてゐる。時々、障子の破れ目が風に鳴つた。

麓の村にも雪が降つた。難波山には雪が三度ばかり來た。儀明川の流れが紫水晶を碎いたやうに碧である。橋の上には霜が雪のやうに結んで、欄の鐵は手を切るやうに冷たかつた。

或朝、私は橋の上で長二に出遇つた。長二は是から町の醫者に診察してもらひに行くのだといつた。彼は、都へ歸ることを急いだ。私は午

後から遊びに行くことを約して別れた。彼は、かひ／＼しく絹の袷に、紺の前垂を掛けて、頸には綿を卷いてゐた。私は、暫く其の後姿を見送つた。

午後の日が生温かである。圃の黑い土の上に小蜘蛛が這つてゐた。雪が來る前の乾きが來て、往來の土は白くわれた處がある。穩かな風のない日であつた。死に瀕した赤蜻蛉が弱つて、日向の竹垣の面にしがみついてゐた。また窓先に吊した唐辛の上にも止つてゐた。私は、隣りに行つたが家の内は火が消えたやうに靜かであつた。

長二の父親は默つて六疊に坐つてゐた。母親も長二も默つて坐つてゐた。

私は、默つて長二の傍に坐つた。

『お醫者は何といつたえ。』と聞いた。

父親も、母親も默つて蠟人形のやうに俯向いてゐる。色の赤い唐辛に短い秋の夕日が射して、もう秋が去るのだ。長二はしく／＼と泣き出した。此時、一日見た父親の顏色は蠟よりも尙ほ青白かつたのであつた。

＊　＊　＊　＊　＊

雪が一度村に來ると、急に長二の病氣が革

まつて、年の暮れないうちに此世を去つたのである。兄の豐吉は、今では信州の牟婁あたりに鐵道の工夫をしてゐるといふことだ。

平野に題す（二）

『北に山を負ひ、其の地勢は南に向つてなだらかに延びて、林があり、また丘があり、而して、近傍に川が流れてゐるやうな處は、大抵穴居民族の住んでゐた處である。石器や、土器の破片を蒐集するには、殊に雨上りの日がいゝやうである。』

から豫て聞いて知つてゐる知識を唯一の賴りとして、私は、あてもなく野中の路を右を眺め、左を眺めて歩いたのです。平野の至る處に鬱然として樹木の繁つた大部落があります。また、其處を離れると、何もない平野となつてゐる。彼方に、また鬱然として別の部落を見出し得るのです。思ふに、昔も、また斯の如くに、其等の民族は自分等の住む地勢を選んだにちがひないと思はれる。恐らく、幾百年の後、一たび新たなる研究家が、今日斯うしてゐる部落の既に廢滅に歸してしまつた跡を探ねて感慨に耽ることがあるだらうと思はれたのです。

偶然、野原の中に丘のやうなものがあつて、其の上には木が繁つてゐました。私は、古墳の姿に憧れてゐたので、譯もなく、其の日光に閃く葉影や、枯れかゝつた片枝などをまさしく古墳と思ひ込まずにはゐられなかつた。けれど其の丘を打壞して見るに於て、私には、何の證據があらう。幾たびも躊躇しながら、其の傍を通り過ぎるやうなこともありました。私は、心で、このあたりに、きつと昔は部落があつたであらうと考へることから、圃の中や田の畦などを熱心に探し廻つたことがあつた。而して、石塊など積み重ねられた處などを掘返して見たことがあつた。からして、其の當時、手に入れた石斧や、矢根石やまた繩紋土器の破片や、埴輪の破などは少くなかつたのです。

（『未明感想小品集』より）

越後の冬

小舍は山の上にあつた。幾年か雨風に打たれたので、壁板には穴が明き、窓は壞れて、赤い壁の地膚が露はれて、家根は灰色に板が朽ちて處々に筵を掩せて、其の上に石が載せられてあつた。此の山の上は風が強い。雪解の頃になれば南の風が當るし、冬は沖から吹く風が時々小舍を持つて行くやうに搖るのであつた。だから家の周圍には四方から杉や、松や、榛の材で支へをして置く。其の木すらもはや大分根元が腐つて、少しの風でぐらつくのだ。

田や圃の收穫は濟んだ、太吉の父親は病身の妻と其の子を殘して、上州へ出稼に出たのである。來年、此の北國の山や野が若々しい綠で被はれて、早咲の山櫻の花が散つて、遠野に白い煙が棚曳いて、桃の花が咲く時分にならなければ歸つて來ない。

太吉は爐邊に坐つて、青竹を切つて笛を造りながら、杉の葉や枯れた小枝を手折つては之に火を焚付けて、湯を沸して町から母の歸るのを待つてゐた。長い月日の間、火を焚く煙で黑く煤けた天井の梁からは、煤が下つてゐる。其處から吊された一筋の鐵棒には大きな黑い鐵瓶が懸つてゐた。ぱつと移りの易い杉葉に火が付いて、紅い炎は梁の煤にまで屆かうとして、同時に太吉の顏を赤く色彩つた。太吉は髮の縮れた、眼の大きな兒であつた。燃え上つた火に薪を入れて、火の之に燃え付くのを見守つてゐる。紅い炎の舌は、此の黑い鐵瓶を嘗めるやうに周圍にちら〳〵と纏はつて、つる〳〵と細い鐵棒を辿つて天井の梁にまで走らうとしたけれど、忽ち思ひ止つたやうに穩かに燃え收つた。

太吉は全く火の燃え付いたのを見て、又傍の竹を取り上げて小刀で孔を明け始めた。白い細かな粉がばら〳〵と破れた膝の上に落ちる。暫く太吉は熱心に氣を笛の方に取られてゐたが、ふと手をやめて窓から外の空合を眺めた。たゞ白く雲自身が凍つてゐるやうに、凝として空は鈍く、物憂く、日の光りすらなかつた。彼方の方は一面に暗くなつて見える。暗くなつてゐる空に浮き出てゐるやうに溪を隔てた松林の山は黑く見えて、僅かに見覺えがあるため其れが近くの山であるといふことが分るが、若し、全く見覺えがなかつたなら、あの山は十里も彼方にあると言はれたとて、其れを信ぜずにはゐられないやうな、遠い氣持がする。太吉の眺めてゐた眼は自ら寒がつた。言ひ知れぬ悲しさが胸に湧いたからである。

『もうお母は歸らしやる時分だ。どの邊へ來さつしやつたらう。』

と、獨りで言ひながら考へて頭を傾げてゐたが、また何と思ひ返したか、笛を取上げた。笛を見ると、彼はまた樂しみの心を禁ぜずにはゐられない。此の笛を吹くのだ。麓の村へ持つて行つて此の笛を吹くのだ。雪が降つて外へ遊びに出られなくても、此の笛があれば、吹いて樂しく家で遊んでゐられる。來年の春になつて、小鳥が來る時分までも此の笛を大事にして取つて置く。

『何時頃お父さあは歸つて來さしやるだらう。其の時分までも此の笛を大事にして取つて置いて歸らしたら見せるのだ。』

から考へると、無限に此の笛が懷しい、戀しい、何うしたらいゝだらうかと笛を取上げて彼は雀躍をした。而して割らないやうにと念に

念を入れて、只一つまだ明けない孔をほり始めた。

「この孔が明いた時分にお母は歸つて來やしやるだらう。」

といつて、口を歪めて、眼を圓く、飛び出して、小刀に力を入れた。

雪の多い上越後の片田舍では、冬になれば外の樂しみは全く絶えてしまふ。獵に出かけるものは之を商賣にする獵師か、若しくは金持の道樂息子の他にない。一般の百姓は若い者も、年老つたものも、總て終日圍爐裏に火を焚いて取卷き騷ぎ、聲の好いものは聲自慢に松前や、または鄕土固有の甚句や、磯節など歌つて、其處に來合せたものに聞かせる、皆なはへいくれんとして之を聞いてゐる。家の外には雪がちらちらと降つて、前の小川の水は獨り寂寞を破つて囁いて流れてゐる他、村の端に廻つてゐる水車の音が靜かな林や、田の中を通つて其處まで聞えて來る、けれど家の中にゐるものの耳には、此の小川の囁きも水車の音も聞えない。たゞ、歌ひ手の歌の聲に聞き惚れてゐるばかりだ。或者は懷手の儘聞いてゐる、或者は頰被りをした儘聞いてゐる。或者は火に手を翳したまゝ、燻る煙に眼を瞬いてゐる。さもなくば酒を温めながら之に合槌を打つて陽氣にするばかりだ。實に北國の冬は、笛を吹くか、歌を歌ふか、酒を飲んで女に惡戯ふか、而して其等の遊び方が原始的で、其處に言ひ知れぬ哀れがある。是等の笛の音も、歌の聲も、寒い、澄み渡つた空氣に透通つて、一層木精に冴える思ひがした。

ヒューと梢に當る風の音がして、ガタガタと窓から吹き込んで障子に當つた。遽に天氣が狂つたのである。太吉は外を眺めて崖端に立つてゐる一本の榛の木の頂に目を止めてゐた。

秋の頃、黄色い粉を吐いた花の乾固つた死骸や、小さく黒く見える實や、其れも僅かに彼方の枝に二つ、此方に一つある位で他に一片の葉の影も止めてゐなかつた。哀れな裸姿になつて木は悄然と立つてゐる。枝は四方に咲いてゐて、此の細い枝にも、冷かな、切るやうな、風が當るかと思ふと痛々しい。其の細い梢の頂を見つめてゐると、急に太吉は母が戀しくなつた。

鐵瓶の湯は煮え沸つて、火は何時しか消えてしまつた。太吉は笛と小刀とを下に置いて家の外に出て見た。

一度降つた雪は、まだ處々消えずに山や、田や、畑に殘つてゐた。麓の村も見えた。村の端にある水車場の家根も見えた。其の水車場の傍を通る往還も見えた。けれど人一人の影すら見えなかつた。隣村で此頃新築した小學校が白く林の間から見える。町へ行く時通る長い野中の松並木が微かになつて見える。

北の海の方を見ると、たゞ白く波頭が躍つてゐた。空は暗く、惡魔が住むやうに思はれた。林の頂に遮られ、山の鼻に隱れて其の暗い空も、鉛色をした海も一部しか見えない。前には脈々たる頸城の山嶺が迫つて、其の高い山を越えれば他國である。何の山にも雪が來て頭が眞白になつてゐた。雲が降りて山々の腰から上に墨を塗つたやうだ。

太吉はまた暗い沖の方を見た。

お母は何うさつしやつたらう。……いんまに降つて來るに……。

太吉の母は病身であつた。いつも青い顏をして咳ばかりしてゐた。けれど太吉を可愛がつた。父親が旅稼に出てから、一入太吉も母を慕つた。母は二三日前まで床に臥いてゐたが、此の日は朝のうちは天氣がよかつたので、買物をするため、豆を少し許り負つて町へ行つた。町へ行く時、

「太吉や、氣分もいゝし、お天氣も好ささうだ

から町へ行つて來るぞ。歸途には直に歸つてくるから待つてゐねよ。』

と言ひ遺して、平常商賣に出る時の風で、草鞋を穿いて出て行つた。此の村から、高田へは三里、直江津へは二里ある。母は常に高田へも行き、直江津へも行つた。太吉は、母に向つて何方の町へ行くのかと聞かうかと思つたが、母が直に歸つて來るといつたので、別に聞かなくともいゝと思ひ返した。而してたゞ、

『そんだら、早く行つて來やしやれ。雪が降つて來ると不可ないすかい、早く行つて來やしやれ。』

といつたばかりで、出て行く母を淋しさうに見送つてゐた。太吉は今年十四であつた。山にはたゞ此の家一軒あるばかりだ。麓の村に下りる迄は二三町程あつた。太吉は日に幾回となく、此の赤地の山道を下りて遊びにも行き、家の用事をも達しに行つた。其の道は無論細い坂になつてゐて、杉の林を一つ通らなければならなかつた。天氣の好い時は何でもないが、風が吹いて、雨が降る時は此の林の下を通ると雫が滴れる、杉の枝がざわ／＼と動いて、襟元の寒いのを感じた。又雪が降ると杉の枝が撓んで、頭にかゝるのが厭な感じであつた。

家の前に立つてゐて、水車場の傍の往還に人の通りがあるかと眺め――若しや自分の母が、今にもあの道の上に出て來はせぬかと見てゐたが、何時迄待つてゐても其れらしい姿が見えなかつた。

『お母、早く歸つて來てくれやしやればいゝに……。』

と太吉は獨り呟いた、而して眼前に悲しい影がかゝつたやうに、自づと氣持が滅入るのを感じた。尚も太吉は立つて水車場の方を見てゐると、裏の山から飛んで來た鳶が頭の上を過ぎたが、輕く、忙しげに翼を刻んで、低く、溪に舞ひ下つて水車場近くの枯木に止つた。止つたかと思ふと、又忙しげに翼を刻んで、再び高く舞ひ上つて、向うの松林のある山を越えて遠く、海の方へと飛んで行つた。太吉は其の鳶の行方を見守つてゐた。

此の時寒い風が吹いて來た。

振り向いて、裏の山を見ると、山は夕暮の空に接吻してゐた。山と空の境界に松だか、杉だか、聳えてゐた――二本――三本ばかり――其の樹の頂が、此の寒い風に動いてゐた。

『あゝ、もう晩方になつた　まだお母は歸つて來やしやらん……。』

太吉は坂を下つて、杉林の處まで來た。けれども母の姿は、まだ見えなかつた。暮れるに早い山の林――其の下蔭が暗くなつた。山雀やら、四十雀やら、其他の小鳥が、チュン／＼ツーツーと林の暗い、繁みで小啼をしてゐた。

『お母！』

と呼んで見た。けれど、其の聲は空しく木精に響いたばかりだ。魂消たものかバタ／＼と、鳥の羽叩きしたのが聞えた。

耳を澄すと、水車の音が此處まで聞えて來る。たゞ悲しいと思つて其の音に耳澄してゐると、

『お母――達者で――死にさうになつて――道で臥れてゐやしや――る。』

と歌つてゐるやうな。其の歌つてゐるのが、誰かが歌つてゐるやうな。其の誰かが自分であつて、自分の心が歌つてゐるやうな。さうかと思ふとやはり水車が歌つてゐるやうな。――太吉は、母が病氣で道で臥れてゐるのではないかと思つた。

さう思ふと胸の裡が騒ぎ出した。もう一刻もかうやつてゐられなくなつた。彼は支度をしようと走つて家へ歸つた。家へ入ると急に中が眞暗になつたやうで、窓から明りが差し込んでゐるばかり。其れも悲しい晩方の空の色に、何と

なく一家の不幸を語つてゐるやうだ。圍爐裡の火は全く消えて、鐵瓶の湯も水に返つたらしい。僅かに差し込む窓の明りが、其處に投げ出されてゐた笛と小刀とを照らして、小刀の刃が白く光つて見えた。

　太吉は笛を見ると、急に昔前、まだあの笛の孔を明けぬ前は母がゐたのだと思つた。母が今歸つてくれゝば、此の笛は昔の孔の明かぬ前になつたからとて惜しくない。斯樣な笛はいらぬから、どうか母が歸つてくれゝばいゝにと地蹈鞴踏んだ。

　太吉は小さな草鞋を穿いた。菅笠を取つて戸を閉めると一目散に驅け出した。

『町へお母を迎ひに行つて來る――。』

　から獨り言をいふと、急に胸が塞つて、熱い涙がはら〳〵と湧いた。太吉は心のうちでから叫んだ。

『お母に遇つたら、ウンと恨んでやらう！　お母に遇つたらウンと泣いて小言をいつてやらう！』

　夢中になつて一目散に畦を走つて、村に下りると、急に他の人の顏が目に付いた。

　けれど胸が張り切つて、知つた人に遇つても物を言ふのが厭であつた。成たけ人の顏を見ないやうに走つて、いつしか水車場の脇も通り越した時分、高田へ行かしたか？　直江津へ行かしたか？　と惑つた。

　太吉の歩みは遲くなつた。

『直江津へ行かしたんだらう？　どれ、聞いて見よう……。』

　村端に一軒の桶屋があつた。よく母が町への出入りに此の家へ立寄るのである。いつしか其の桶屋の前へ來た。五つ許りの頭に腫物の出來た子が立つてゐた。家の前に一本の柳の木があつて、子供の汚物を洗つたのが、其の柳の木から板壁に繫がれた繩に掛けてあつた。家は藁屋で、店には割りかけた赤味の板が散らばつてゐた。けれど別に人の來てゐる樣子はなかつた。

　太吉は外で、から聲をかけた。

『今日は！』

『おーい。太吉かー。』

『お母今日寄らしたかい。』

『いんや、寄らしやらんぞ。町へ行かしたけい。』

『まだ歸らしやらんから迎ひに行くだ。』

『まだ歸らしやらんちゆだか。』

『何方へ行かしただらうなう。』

『己あ知らんが直江津だんべえなう。』

と桶屋の女房が家の内で答へた。

　太吉は直江津へ向つた。

　厚く重り合つた雲の斷目から、飴色の弱い日が洩れた。畦の並木の片側が薄く照り映えた。田の中には氷が張つて、處々に雪が消えずに殘つてゐる。街道を行くと、旅人の影がちら〳〵見られた。電信柱は遠くまでつゞいた。折々冬木立に風が當つて、枝が鳴るかと思ふと頭の上の電線が呻つた。彼方に沙山が見える。急いで來ると、やがて沙山へ着いた。沙山を越えると町だ。

　町へ入つたのは日暮方であつた。入日が海邊の町に當つてゐた。空つ風が強くて、黃色な砂塵が揚つてゐた。雪が來る前には乾くものだ。小道は乾き切つて割れてゐる處さへあつた。小高い丘の船問屋の高い竿の尖に赤い旗が飜々と閃いてゐる。また町の三階造の宿屋の窓硝子がぎら〳〵と黃金色に輝いてゐた。太吉は町の中を彷徨いてゐた。馬が荷車を引いて通つた。人力が驅けて行つた。何れも日暮方であるのと、夜になると風が寒いのに怖れて、行先を急いでゐる。其の他、忙しさうに道を歩いてゐる男や女の姿を見た。けれど自分の母の姿は見えな

かつた。
太吉は、心當りの家を尋ね廻つたが、何等の手掛りを得なかつた。彼は疲れた足を引摺つて町を出ると、濱邊の廣々とした處に來た。此の邊は一面に無縁の難船者の墓がある所であつた。何處の者とも分らない航海者や、船乘人が、暴風で船を壞されて、海の藻屑となつて、此の濱邊に打ち上げられたものを、此の海岸の漁獵人が此處に葬つたのである。昔からの風が此處にあるのだ。いづれも三尺に滿たぬ木標が建てられてゐた。古いのは腐つてしまひ、二三年前のものは、墨痕が雨風に消えて、根元が腐りかけて傾がつてゐる。まだ新しいものは字も鮮かに讀まれて、『遭難者の墓』と、別に名の分らう筈がなければ、たゞから書いてあつた。他に、卒塔婆や青笹などが處々に建てられてゐて、其の赤く枯れた笹に當時結び付けられた白紙や、赤い紙などが淋しげに風に動いてゐた。太吉は其の墓場で休んだ。
白い德利の缺けや、石地藏の頭なども落ちてゐる。暫く、石の上に腰を下してゐた。此處からよく海が見える。海は眞黑だ。空は暗い。空の暗いのよりも海の色が黒い。彼は偶然此の黑い海の中に怖ろしい鰐や、獰鮫が棲んでゐるのだと思つた。
「お母！――どうさしたらう。」
から力なく言つて、太吉はまた當もなくとぼとぼと歩き出した。
直江津と高田との間は二里餘りある。直江津は北に、高田は南になつてゐる。
日が全く暮れてしまつた。太吉は疲れた足を引摺りながら、とぼ〱と昔の今町街道（直江津から高田へ行く道）を歩いて來た。北風が強いので、雲が拂ひ去られて星が出た。空は海のやうに青かつた。星の光りは凍るやうに冴えた。宛然金銀、水晶、瑪瑙を碎いたやうであつた。
太吉は踏切番の小舍の前まで來ると、此の汽車道に添つて行けば早く高田へ着くと考へた。小舍は野中にあつた。四邊の林や、森は靜かに眠つてゐた。小舍の障子には明るく火影が照つて、中で二三人酒を飲んで笑つてゐる樣子であつた。太吉は番人の見てゐないのを幸ひに拔足して線路内に立入ると一生懸命に線路に付いて驅け出した。一陣夜嵐が空を渡つた。星は身慄ひした。
轟々と闇の裡に鳴つて溪河が流れてゐる。其處には、黑い鐵橋が架つてゐる。太吉は氷のやうに冷たい鐵橋に縋りながら細い板の上を怖る怖る渡つた。下は暗く、深く〱、岩に碎けて水が叫んでゐた。霜は一面に白く、粉の如く板の上に結んでゐた。星明りに白くなつて光つた。やつと其の難關を通り拔けた。遠くの方で犬の遠吠するのが聞える。
また一陣夜嵐が空を渡つた。
太吉は覺えず身慄ひすると、北の方から黑雲が自分の後を追つて來た。瞬く間に拭つたやうに星晴のしてゐた空は曇つて、星の光りが遠く遠く幽んだ。
また一陣夜嵐が空を渡つた。さら〱と額に當つたものがある。撫でて見ると雪であつた。あ、雪が降つて來た！ といつて太吉は途を急いだ。此の邊には人家がなかつた。全くの廣い野原の中で、目を遮る大きな林もなかつた。雪は次第に降つて來た。
今迄頼りに歩いて來た二條の線路は見えなくなつた。枕木も隱れてしまつた。太吉の笠や着物は重くなるまで雪が積つた。益々夜嵐は吹き募つて、雪は目となく、耳となく、襟元となく入り込んだ。指頭も、足尖も、感じがなくなつた。何處も一樣に眞白になつて、もう一歩も踏み出すことが出來ぬまでに四邊が分らなくなつた。
「お母！」と太吉は泣聲を上げた。

其の聲は餘りに小さかつた、弱かつた。彼方の畦に悄然と立つてる並木にすら、聞えなかつたであらう。漸々黑雲は頭の上を通り越した。薄明るかつた南の方の空が、暗くなつた。黑雲が空を掩ひ盡したのである。たゞ闇の裡に風が暴れた。雪がさら〳〵と鳴つた。耳に鳴る雪は刻々に地に積る氣はひがした。

呪と立つてゐると手足がしびれて來てだんだん氣が遠くなつた。遂に何處に何してゐるのやら分らなくなつた。――種々なものが見えた。種々な音が聞え始めた。昔前に造つた笛が、あの儘轉つてゐる、水車が歌をうたつてゐる――其の歌は水車でなくて、自分が歌つてゐるやうにも思はれる。桶屋の前に子供が遊んでゐた。あの黑い海に鰐が住んでゐる。白い德利の缺けが落ちてゐる。笹に白い紙、赤い紙がひら〳〵と動いてゐる――。

ビューウ、ビューウ……風の音！　つゞいて凄じい車の轟きがした！

ほの〴〵と夜が明け離れてから四時間ばかり經つた。烏は畦の並木に止つて悲しさうな聲で鳴いてゐる。ちやうど雪の晴間であつた。四邊はどんよりと曇つて、今にでもまた降つて來さうな空模樣である。

線路の上に五六人、集つて何やら見てゐた。見てゐるのではない取片附けてゐた。雪が血に染つて子供の死體は滅茶苦茶であつた。集つてゐるうちに一人、頭から黑い布を被つて、顏色が蠟のやうに青白い、窶れた女がある。眼は泣き腫らして、唇の皮が厚く乾からびて、堅く死骸に抱き付いたまゝ身動きすらしなかつた。

其れは太吉の母であつた。

平野に題す（三）

何といふメランコリーなことであらう。昔のまゝに地勢は今も變つてゐない。美しい清流が圃の近傍に丘をめぐり、森をめぐつてゐる。其の歳月の間に、平氏あり、源氏あり、戰國時代があつて德川氏から、今日に至つて幾多史上の變遷あるに係らず、其の民族の使用した土器の破片は尙ほ全く地底に、葬られずに、畑や田の畦に落ちてゐる。私は一種の不思議を感ぜずにはゐられなかつた。

我等が遠く考へる昔も、つい昨日のことに過ぎないといふ氣持が抱かれたのである。短い間に世の中も、また人間の思想も、非常に進歩し、また變化したもののやうに考へるけれど、其れは畢竟さう吾等が思つただけであつて、何も變つてゐないのだといふ一種虛無的な思想に、轉た其處に佇立して私は憂愁に捕へられずにはゐられなかつたのです。

晴れた日には火打山が見えました。故鄕で俗にかう呼んでゐる山は、恐らく燒ケ岳のことでありませう。三角形の野獸の牙のやうな鋭い山は、夏も雪を頂いて光つてゐます。日本アルプスの何の山々にも、雪の影が見えなくなつた時でも、獨りこの山は雪を頂いて妙高山と蓮華山の間から、僅に其の尖峰が望まれたのであります。其山を眺め乍ら、私は思ひをまた遠くに馳せて疲れを休めました。

（『未明感想小品集』より）

薔薇と巫女

一

家の前に柿の木があつて、光澤のない白い花が吹いた。裏に一本の柘榴の木があつて、不安な紅い花を點した。其頃から母が病氣であつた。

村には熱病で頭髮の脫けた女の人が歩いてゐる。僧侶の黑い衣を被つたやうな沈鬱な木立がある。墓石を造つてゐる石屋があれば、今年八十歲の高齡だからといふので、他に賴まれて盲目縞の財布を朝から晩まで縫つてゐる頭巾を被つた老婆が住んでゐる。

彼は、多少學問をしたので迷信などに取り付かれなかつた。腐れた古沼には頭も尾もない黑い蟲が化殖るやうに迷信の苔が此村の木々に蒸しても、年の若い彼は頓着しなかつた。

然るに或夜、夢を見て今迄になかつた重い暗愁を感じて不快な氣持から眼醒めた。

曾て來たことのない沙地の原へ出た。朧ろに月は空に霞んでうね／＼とした丘が幾つも幾つもある。

全く道に迷うたのである。月の光りに地平線を望むと、行手に雲が滯つてゐて動かなかつた。何ほも歩いて行つた。月の光りは一樣に灰色な沙原の上を照らしてゐて、凹凸さへ分らない。幾たびか踏み損ねて窪地に轉げた。けれど勇氣を出して起きては歩いて行つた。たゞ行手には、同じいやうな形の圓い沙の丘が連つてゐた。足許を見ると其處、此處に一かたまりづつ夢のやうに色の褪めた花が咲いてゐる。白でもない。青でもない。薄黃色な倦み疲れた感を催させるやうな花であつた。其の黃色な花の咲いてゐる草の葉は沙地に裏を着けてゐた。葉の色さへ鮮かでない。

單に葉は漠然として薄墨色に見えた。其の花は、何の花であるか名を知らないが、海の邊に咲いてゐる花の種類であると思つた。

此の沙原の先は海ではあるまいか。暫く、道の上に立つて、遠くに響く波音を聞き取らうとした……何の音も聞えて來ない。人も來なければ、犬の啼聲もしないのである。けれど彼は、足に委せて行ける處まで行かうと思つた。いつしか細い道は、何處にか消えて自分は道のない沙原を歩いてゐる。

二

ふと、彼は、此時清水の湧き出る音を聞き付けた。此の沙原に清水のあることが解つた。水の音は何方からともなく聞えて來る。耳を左に傾ければ左の方に當つて聞えた。其の方へと歩んで見ると、水の音は、どうやら右の方に當つて聞える。地底から湧き出て、沙を吹き上げる泡立つ音は、さながら手に取るやうに聞えて來る。其時右の方に歩みを變へた。すると水の音は、後方になつて、次第に遠ざかるやうにも思はれた。

彼はたゞ此の泉を見出しさへすれば、また自分の行くべき道が其處から見出されると考へたのである。必ず此の泉の邊に來た人は自分が初めてな譯ではない。既に幾人も此の泉を汲んだであらう。其等の人々の踏んで來、踏んで去つた足跡は、自然、微かな道となつて、此の仄白い月の下に認めることが出來るだら

う。

此時、月は雲に掩はれた。一面に沙原は薄暗くなつた。而して月を隱した雲の色は、黑と黃色に色彩られて、黑い鳥の翼の下に月が隱れたやうに見えた。

身に惡寒みを感ずるやうな寒氣が沙原に降る。怖れと愕きに何れの方角を選ぶといふ餘裕がなかつた。彼は闇の中に幾たびか躓いた。そのたびに柔かな沙地に跪いた。最後に、急な崖から轉倒した。刹那に冷汗が背に流れた。自分では深い、深い谷に落ち行くやうな氣がしたが、不思議に怪我もせずに沙の中に倒れた。

彼は、倒れたまゝ空を仰ぐと、月は、黑雲を出て以前と同じやうに沙原を照らしてゐる。其處も同じく沙地であつたが、丘が見えない。平な沙地が、地平線の遠くにまで接してゐる。南の方と思はれた。雲の裾が明るく斷れて、上は濃い墨を流したやうに厚みのある黑い線を引いてゐる。

さながら、其の地平線に咲き出た花のやうに、一輪の花が眼の前に頭を擡げてゐる。

彼は、十步餘りで、其の花に近づくことが出來た。其れは病めるやうな此の朧ろ月の下に咲いた黃色な薔薇の花であつた。

此時、水を探ねたやうに香を嗅がうと焦つた。而して花に鼻を觸れて見たけれど、花には何の香といふものもない。

誰か造り花を此の沙原に來て插したのではあるまいか。

急に、南の風が吹いて來た。明るく一直線に雲斷れのした空は物凄かつた。南の風は、人間若しくは、是に類した死ぬべき運命を持つた生物の、吐く息のやうに生溫かであつた。急に頭が重くなつて眼が暈るやうに感じた時、眼前に咲いた黃色な薔薇の花は、齒の拔けるやうに音なく花瓣が朽ちて落ちた。

三

この夢の與へた印象を忘れることが出來ない。

何となれば、母は間もなく死んだ。

彼は、此時から、前兆といふことを考へた。今迄迷信と思つて居た世の中の不思議な話が事實あり得べきことのやうにも思はれる。而して終には靈魂の不滅といふやうなことも信ぜぬ譯には行かなくなつた。彼は寺の傍を通る時は、きつと何か考へて步いた。夜、獨り戶外に出る時は、きつと或る一種の不安に心が曇るのを覺えた。而して眠る時も、枕を東にするか西にするかと惑ふやうになつた。

而して、人に遇ふたびに不思議な怖ろしい話を知らないかと聞いて迫つた。人が其樣な怪談をする時には、きつと彼の顏は靑ざめて、窓の外に誰か自分を待つてゐるやうに體をもぢもぢさせながら怪しく眼が輝くのが常であつた。

彼の友達は、彼を神經病だと言ひ始めた。

或年の夏もやがて過ぎんとする時、此の靑葉に繁つた村へ一人の若い巫女が入つて來た。自らは其の女を見なかつたが人々の噂によれば、眼が黑く大きくて、頭髮が鳶色に縮れてゐて頰が紅かつたといふ。けれど此村の人で其の巫女を見た者は眞に僅かばかりに過ぎなかつた。

子供等が桑圃の中で、入日を見ながら遊んでゐると黑い人影が、眞紅に色づいた彼方の細道を步いて來た。其れが其の巫女であつた。巫女は子供等に向つて隣村へ出る道を聞いたさうだ。

ちやうど此時、村の或る一軒の家で、娘が大病に罹つてゐた。命がとても助からないと知つて親類の人々が此家に集つてゐた。一室の裡は簷に垂れかゝつた青葉の蔭で薄暗かつた。何となくしんめりとして水を打つたやうであつた。病める娘は、痩せ衰へて、床の中から顔を出してゐた。もはや、眼を見開いて、人々の顔を探ねる程の氣力もなかつた。既に意識は遠くなつて、靈魂は此の現實の世界から、彼の夢の世界へ歩いてゐた。

人々は、心配さうた顔付をして互に默つて獨り此世を離れて行く、娘の臨終の有樣を見守るばかりであつた。

巫女は、背に小さな筐を負つて村を通つた。娘の叔母がこれを見付けて家に連れて來た。其時は、もはや娘は眼を閉ぢて最後の脈が打ち收めた時であつた。一室の裡には、母親が泣き、妹が泣き、親類の人々も泣いて、娘の枕許には香が焚かれて、香が冷かな夕暮方の空氣に染み渡つて、青い蠟燭の焔が風もないのに搖れるやうに思はれた。

窓からは、木々の青々とした梢を透して夕焼の色が橙色に褪めかゝつてゐる。

巫女は、死んだ娘を呼び戻すと言つた。而して枕許に坐つて呪文を唱へた。人の魂までも引付けるやうな巫女の顔は、物凄くなつて、見てゐる人々は顔を反けたといふ。刹那、地震が地球を襲つて家を搖つた。人々は驚きの瞳を見張ると死んだ娘は、深い溜息を吐き返した。而して閉ぢた眼を大きく見開いて、床の上に起き直つて呢と母親の顔を見て物を言はうとした。母親は、喜んで娘に抱き付いた。而して、

『オヽ、息を返してくれたか。助かつたか。』といつて、餘りの嬉しさに娘の顔を見てしみ〴〵と泣いた。

涙は、娘の痩せた頰の上に落ちた。眼を見開いて、母親の顔をさも懷しげに眺めてゐた娘は、再び靜かに眼を閉ぢてしまつた。もはや、口を耳許に當てて娘の名を呼んだけれど何の應へもなかつた。

四

人々は、巫女の魔術に驚かされた。中には娘の死んでからの行先を聞いたものがある。巫女は死んでからは、何の人も平等に同じい幸福を受けるものだ、而して其の幸福の國は、何の人も經驗するのであるから知らうと思ふ必要がないといふことを告げたのである。

この娘の母は、奇蹟を行ふ巫女は此の世界に稀に現はれて來る魔神の使であるといつた。而して、人間の身の上に關することで此の女に聞いて分らないものはない、若し疑ふ人があるなら是から五十里許りある南方のXの町へ行つて巫女に遇つて聞いて見れ、巫女は過去、未來、現在のことを言ひ當てると言つた。巫女は其のXの町に住んでゐる……

彼は、やはり娘の母親に遇つて此の話を聞かされた。其ればかりでないXの町へ行つて見れと勸められたのであつた。

彼はXの町へ旅立しようか、何うしようと惑つてゐた。人間が死んでしまつてから、果して國といふやうな名のつくものがあるだらうか、靈魂はどういふやうに生活するものだらうか、死んだ母と、見た凶夢とに關係があつただらうか……などといろ〳〵目に見えない心の疑問があつた。

彼は、遂にXの町へ旅立することに決心した。燕が南の國に歸りかけた頃、彼も亦南の方を指して旅をつゞけてゐた。

餘程旅した後であつた。道を行く人にXの町を聞いた。或者は、まだ遠いと言つた。或者は曾て聞いたことのない町だといつた。彼は、或る町で老婆にXの町を聞いた。其の老婆は彼を家に泊めてくれた。其夜、老婆はXの町について教へてくれた。

此處からまだ三十里南にある町だ。而して若い巫女のことも話したのである。其の町に昔からの豪家があつた。其の家に一人の娘がある。生れた時から蛇や、鳥の啼聲を聞き分け、よく人の生死を判じたのである。家の周圍は繁つた深林であつて、青い鳥や、赤い鳥が常に枝から枝へと飛び渡つてゐた。娘は、また生れつき蛙を食べたり、蛇を食ふことが好きであつた。家の人は、此の娘が普通の人間でないのを怖れて、世間にこのことを祕さうとした。而して外に出して、勝手に生きた蛇や、蛙を食ふのを止めようと思つた。けれど娘は人の目を盜んで外の林や森の中に入つて、鳥に物を言つたり、蛇を見て笑つたり、蛙を掌の上に載せて面白がつたり、さながら狂人のやうな眞似をしたのである。

其の家では、世間の人が娘の噂を立てるのを怖れた。また此の家には餘程いろ〱の祕密が隱されてゐるものと見えて、他人の家に入ることを怖れた。

其れで一人の老翁を日夜、家の門に立たせて護らせてゐる。此の老翁は利口な老人であつた。知識にかけては此の町の人の誰れよりも優つて、困難な問ひを考へ、また複雜な謎を解した。老人は長い月日の間にいろ〱の經驗をしたのである。だから忍耐強くて、物の悟りが速かつた。

老翁は、一日呢として門を護つてゐたのである。しかし體の衰へは爭はれなかつた。門に立つてゐて折々居眠りをすることもあつた。けれど決して鼠一疋といへども其處を通つたものは覺らずにはゐない。其程、彼の靈魂は聰くあつた。老人自身でもよくいふのに、肉體が衰へれば精神はそれだけ敏くなるものだと。……而して老人は常に手に太い棒を持つてゐた。けれど其れは何の役にも立つものでない。何となれば若かつた昔は強力で容易に其の棒を振り廻すことが出來たけれど、今は、其れを振り廻すだけの力がないのである。たゞ、其の棒を持つて立つてゐるのが老人にとつて漸くの力といつてもよかつたのである。

彼は、老婆から此の話を聞いてゐるうちに、幼い時分に聞いた昔の物語りを思ひ出した。其の不思議な寓意の物語りの筋が、ちやうどこのやうなものであつた。勿論筋の大體は違つてゐるやうだけれど、やはり斯樣な老人が出て來るやうに覺えてゐる。かう思つて、彼は、老婆を眺めた。燈火の光りが當つて老婆の白い頭髮は銀のやうに輝いてゐる。老婆は、下を向いて眼を細く閉つて、尚ほも語りつゞけてゐる。

然るに或日のこと、この豪家の娘は門を逃げ出した。其の夜は非常な嵐が吹いて、雨が降りしきつた。家の周圍に繁つてゐる林の木は悉く呻いた。雨は草木の葉を洗つて、風は小枝を揉んで荒々しく搖つた。暗い夜の天地は、さながら雨と風と草木との戰場のやうに思はれた。

森の梢に巢を造つてゐる小鳥は、夢を驚かされて、雌鳥は雛鳥を慰つて巢の上にしがみ付いた。雄鳥は、慌しく巢の周圍を飛び廻つて叫び立てた。是等幾百の小鳥は、森と林の中に飛び廻り、雨と嵐を突き破つて行方もなく驅け騷いでゐる。此時、娘は雨戶を繰つて身を縮めて庭の闇の中に飛び下りた。

「鳥よ、もつと喧しく啼き立てておくれ。妾の足音の聞えぬやうに。鳥よ、鳥よ、けれどあん

まり啼き立てて家の人の眼を醒してくれては厭だよ。』

と言つた。而して其の姿は、何處にか消え失せてしまつた。

其夜に限つて此の利口な老人は、決して油斷したのでない。また安心して居眠りしたのでもない。彼は常の如く落付いて門を見張つてゐた。しかしなぜ娘の足音を聞き付けなかつたらうか。必ず聞き付けたに相違ない。けれど此の足音を犬の足音と聞き違へたのかも知れなかつた。また立騒ぐ小鳥の翼の音と聞き違へたのかも知れなかつた。氣まぐれに森を離れて飛び來つた小鳥が門の前を過ぎたのかとも思つたのであらう・・・

其の娘は、なんでも諸國を巫女になつて歩いてゐるといひ、また、家に連れ歸されて座敷牢の中に入れられてあるともいふ。何れにせよXの町の此の豪家には、必ず老人の番人がゐるに相違ない。而して誰が訪ねて行くとも決して其の大きな青い門から中へ入れない。いかなる強情な人でも、此の老人の知識あることに怖れて、其の命令に背いて入るものがないといふことだ・・・。

と、或る老婆は語つて聞かせたのであつた。

五

彼は、秋の末に南方のXの町に着いたのである。

白壁造の家は夢のやうに流れの淵に並んでゐた。水は崖の下に咽んでゐた。水色の夜の空は、白い建物の間から露れ出て、星は穿たれた河原の小石のやうに散つてゐる。瓦や亞鉛の家根の上を月の光りが白く照らした。

彼は、此の白い靜かな町の中をあてなく歩く小犬のやうに、白く乾いた往來の上に、みすぼらしい影を落してさ迷つた。而して怖ろしい巫女の家を見舞はうと思つた。

或日、遂に其の舊家を見出すことが出來た。町から程隔つた小高な處にある。彼は、月の冴えた晩に其の門に辿り着いた。

もはや、話に聞いた彼の利口な老人は死んでしまつたといふ。幾年前に死んでしまつたのか分らない。何んでも或日、老人は門の扉に倚りかゝつて、横木に手をかけた儘、堅く死固つてゐたといふことだ。今は、誰も門を護る人がないと見える。半ば朽ちた大きな灰色の門は左右に明け放された儘、淋しく青い月の光りを通してゐた。奥深く繁つた木立は、今や葉が落ち盡くしてゐる。黑く惡魔のやうに立つてゐるのは常磐木の森であつた。

最初Xの町の人に聞くと、『幽靈家敷』を問ふのだと言つた。其時、彼は心のうちで年若い巫女のことをいふのであらうと思つた。何となれば巫女は、奇蹟を行つて人を驚かしたからだ。彼は其樣な女を見たいと思つた。而して其樣な女に愛されたいと思つた。此の好奇心は、彼を臆せずに祕密の門の中に導いた。たゞ巫女の黑い大きな瞳で昵と見詰められたい、魔女の手に抱かれて、其の鳶色の縮れた長い頭髮の下に顏を埋めたい、而して紅い頰と熱い脣に觸れて見たいと胸の血潮が躍つた。

彼は、百人の普通の人に愛せられなくても、異常な力を持つた惡魔に可愛がられたならば、もはや、自身は此世に於いて孤獨な人でない。

微かな細い道は、奥の方へ縷々としてつゞいてゐる。いつ此の道を人が歩いたか、餘程久しい前から、足跡が絶えたと見える。草が生えて、全く道を消さうとしてゐた。

獨りとぼ〳〵と月の光りを頼りに覺束なげな道を辿つた。天地は寂然として、草木も息を潛

めてゐる。たゞ青い輝く月光が雨のやうに降つて來るのを眺めた。月光はすべての森や林を神祕の色に染めてゐる。彼は遂に道の消えた處まで步いて來た。其處には大きな礎石があつた。古い大きな建物のあつた跡であつた。常磐木の森の暗い影に隱れて古い沼がある。半分姿を現はした沼の面が、月光に照らされて鏡のやうに怪しく底光りを放つてゐた。

小鳥も啼かなければ、風の吹く音もしなかつた。全く其の建物は跡形もなく亡びてゐる。舊家の人々は何處にゐるか？ 座敷牢に入れて人目に觸れさせるのを恥ぢたといふ、凄い美しい不思議な娘は、姿を何處に隱してゐるか。聲を上げて呼んでも木精より、何の答へもなかつた。

小鳥の巢の下に立つて物を言つたり、蛙を掌に載せて笑つたりした娘の姿は、此の寂然とした廣い屋敷の中には見えなかつたのである。

彼は、礎石の上に腰をかけてコホロギの啼聲を聞いてゐた。而して荒れ果てた昔の祕密の園を眺めた。

冬が近づいたと見えて月の光りが白くなつた。

六

彼は再び故鄕へ歸つて來た。黑い陰氣な森は處々に立つてゐる。彼は默つて家の中に坐つてゐた。偶々、墓石の右手に見える道の上で、病氣で死んだ娘の母親に出遇つた時、巫女を見て來たかと問はれた。けれど彼は、巫女が死んでしまつたとは答へられなかつた。相手の母親は、

『いえ、また夏になつたら、此村へ入つて來るやうな氣がする……。』

と、いつて左右に分れた。

友は、默つてゐる彼を訪れていろ／＼と話しかけた。

『まだ、いつか見た夢を思つてゐるかえ。』

其の友の筋肉の弛んだやうに開いた口の穴が、刹那に彼に謎のやうに考へられた。彼の頭はぐら／＼として理窟ではない、たゞ夢知らせといふやうなものを信じない譯にもゆかない氣がした。

同時に、人々の、形のない美しい話も、故意にうそをいつてゐるとは思はれなかつた。

其れから彼は、黑い木立や、墓石や、石屋や、婆さんの家の周圍を考へながらぶら／＼と步いて每日、默つて日を暮した。

其内に、白い雪が降つて來た。

平野に題す（四）

『あの丘には、何かありさうだ。』と、いふやうな氣がして、私は、一つの小高い萱の繁つてゐる丘を鍬で掘り返したことがあります。

折しも日は曇つて、空の色は一面によどんで、冷たい風に戰ぐ萱の葉先が暗くなつた。鍬を持つ手を休めて、頭を擡げて見ると、難波連山の背後から、雨雲が湧き上つて、山を呑み麓の村々を呑み盡して、次第に限りない平野を掩ひ被さうとしてゐるのでした。

私は、ヂイ・エフ・ワッツの畫集にあつた雨雲の畫を思ひ出します。而して、其れは、たゞ獨り夏に於て、田舍の平野に限つて見える、自然美の一つであると信ずるものです。

――一九二〇・七――

（「未明感想小品集」より）

物言はぬ顔

一

母が達者でゐる時分には、まだ私を可愛がつてくれた人はあつたやうに思ふ。今、思ひ出して、これこそ眞に可愛がつてくれたのだといふやうな記憶は、一つもないが、一軒隔てた家にゐた二十七八の、青い眼鏡をかけた女の人などは、よく教會へ行く時に私を連れて行つてくれた。

私が日曜日になつて、其の家を訪ねずに、何か家にゐて小鳥の餌をやつたり、他のことをしてぐづぐつしてゐるときつと、先方から、私を迎ひに來てくれた。其の女の人の樣子まで、目に殘つてゐる。白い足袋を穿いて、青色の眼鏡をかけて、丈の低い、色の白い肥つた女であつた。其の人の眼は、細くて、絲のやうに思はれたこと、また餘程な近眼であつて、眼鏡をかけなくては近くのものもよくは見えなかつたが、度を上すのを恐れるといつて、成たけ字を讀まない時や、物を見る必要のない時は、きつと青い色の眼鏡をかけてゐたのである。頭髮も、其頃の流行のエス卷とかいふのを結つてゐたやうだ。

『正ちやん、今日はお行きなさらんの?』と、責めるやうな、問ひたゞすやうな口調で家の戸口に立つて私を見詰めながらいつた。

私は、餘り教會堂に行きたくないから、どうしようかと心のうちで決しかねてゐたが、また、もう一枚札が貯ることを考へ出して、其の女の人に連れられて行つた。

教會堂は、古い、灰色の町の中にあつて、此の建物ばかりは、西洋風で、頭が尖つて空に突き立つてゐた。中には、幾つかの長方形の色硝子の窓が附いてゐる。例のやうに讃美歌が終り說教が終ると幾人も此の女の人のやうな形姿をした、同じ年頃の他の女が手に紙の札を持つて、此の教會堂に集つてゐる幾多の子供等に配つて廻つた。

私の貰つたのは、やはり紙の緣を赤く染めたカルタ形の小札で、其れには、『イエス吾等を愛す、聖書に示す。』と書いてあつて、漢字には、平假名がふられてある。此のやうな紙、普通の札を行く度にもらつて、四枚になると、更に一枚の美しい西洋の景色や、子供や、犬の畫いてある色摺の繪と取り換へてもらふのである。私達は、此の繪のことを油繪といつてゐた。

其の女の人は、私に、日曜每に必ず行つて四度行けば、此の美しい油繪が貰はれるのだといつて、頻りに私に教會堂へ行くのをすゝめて、いつかは、信者にする考へがあつたものと見える。

此の女の人は決して、私に向つて意地の惡いことを言つたことがない。私の言ふことは、なんでも眞面目になつて聞いてくれた。而して、私を他の人のやうに口頭ばかりでだましたり、うそを言つたりしてだましたことがない。また次の日曜日になると、きつと其の女の人は私を誘ひに來てくれたものだ。

私の家と、其の女の人の家とは、實に一軒隔つたばかりであつたが、あんまり其の家とは行き來をしなかつた。何んでも、濱の生れで、一人の年老つた母親と妹と三人で住んでゐた。其れで其の女の人は、別に之といふ仕事をしなかつたけれど、此の村に來てからも、樂に日を送つてゐたらしい。それで、村の人は、『きつと耶蘇教信者だから外國から金を貰つてゐるの

だらう。」と暗に嘲るやうな調子で語り合つてゐた。
　其の女の人は、其の他の日には、私の家へは來なかつた。日曜日になつて、朝の八時頃になると、きつと教會堂へ行く時に迎ひに來た。
　私は、其の女の人に連れられて、二度其の教會堂へ行つた。而して、二度目の時には、見知らない他の女の人に、其の女の人から紹介された。『この兒は、私の家の近所の兒ですよ。』といつて引合はされた時に、見知らぬ他の女の人は、何れも笑顔を以て、私の顔を眺めた。私は心のうちでもはや、自分が信者にでもなつたと思うて、……また信者にすると思うて、斯様に柔しく迎へてくれるのでないかと多少厭な感じも覺えたのである。
　私は、其れぎり其の教會堂には行かなかつた。二度目の時にも何か、字の書いた紙札を貰つたが、其の札にはどういふ文字が書いてあつたか覺えて居らぬ。其後は、日曜日になると家に隠れてゐて、女の人が來ても返事をしなかつたり、また頭が痛いといつて母から無理に斷つてもらつたり、また或時は、其の女の人の來る時刻になると外へ遊びに出てゐなかつたので、どんな風に其の女の人が私の家に來て門口に立つて呼びかけたかは知らないが、やはり最初來た時のやうに白足袋を穿いて、青い眼鏡をかけて、聖書を風呂敷に包んだのを持つて、今日は、お行きにならんの？』と言つたであらうと思はれる。
　私は、何ういふものか其の當座、其様に可愛がつてくれた女の人が厭でならなかつた。其れで逃げたり、隠れたりして、成たけ其の女の人を見ないやうにと力めたものだ。今になつて、考へると何んだか其の女の人が懐かしい。
　村に移つて來てから、三月ばかりして、其の女の人は母と妹とを遺して東京に出た。私は、其の當座のことは知らなかつた。其の女の人の母親は村の人に遇うて話をする時は、『ちよつと温泉に行つてゐます。』とか、『お友達の處へ行つてゐます。』とか、言つてゐたさうであるが、後には東京へ出てゐるといつたので、私は、何時其の女の人が歸つて來るだらうかと心待ちにせぬでもなかつたが遂に其の女の人は歸らずに、母と妹とは、再び此の村を引拂つて、濱の方へ行つてしまつた。後に、濱から來た人に私の母が聞くと、母親は死んで、妹は、やはり東京へとか出たといふので、其の姉妹二人のことを知つてゐるものがなかつたのである。
　私の母は病身であつたけれど、昔から貯めて來た金を大分持つてゐた。祖父の時代からの金もある。また私の生れぬ先きに死んでしまつた父親の遺して行つた金もある。其の金のためで、母も大分餘計の苦勞をしたやうに思つた。母の顔は、ちやうど、青い葉のやうに色が悪かつた。眼は打ち窪んでゐて、頭髪は薄くて、いつも默つて鬱ぎ込んでゐる。ちやうど其の時分のことで、村に大きな家、屋敷が賣物になつたのを買はうか、どうしようかと思案に暮れてゐた時である。
　いつも日暮方になると、縁側に出て、其處に蹲踞つて、彼方の雲切のした杉の林の方を見ながら、何か考へに沈んでゐる。日は、杉林の彼方に沈んで、夕闇は、する／＼と這ふやうに裏庭にある、樫の木の繁みに潜み、柿の木の下に漠然とした灰色の翼を擴げて呢と動かなくなる。其様な時分には、一層母の横顔が青くなつて見える。
　また、箪笥の前にきちんと坐つて、抽出しの中から幾枚かの證書類を取り出して、呢と赤い印の捺つた證書に見入つてゐる時がある。其れが苦勞のために、いつも外にも出んで、人とも話も疎々交さずに家にばかりゐて考へ暮

らすのである。

二

『其樣に金を持つてゐても死ぬ時には、どうして行くか。』と、叔父が來て、よく私の母に言つたと母は、繰り返し〳〵自分に獨り言ふとなく、傍に坐つてゐる私に向つて言ふとなく、言つたものだ。而して終ひには、其の青い顏に、寂しい、微かな笑ひをたゝへて、『誰にやつて行くものか、皆んなお前にやつて行くのだけれど、どうしてお前に、遺して行くかと、其ればかり思つてゐます。』と言つたことがある。

其の實、母の持つてゐる金といふのは、よくも知らなかつたけれど其樣な大した澤山な金でもなかつたらしい。けれど淋しい寡婦の一生にとつては、實に此の小さな人のよかつた母の心をして苦勞せしめるに足る程の金であつたと思はれる。いつも來ては母に對つて、其樣に金を持つてゐても死ぬ時には、どうして行くか。」と餘り母が苦にしてゐるのを傍から、慰めるやうに語つたといふ叔父は、却つて私の母より早く此世を去つて行つたので、秋も末になつて木の葉が黃色がかる頃になると、母は思ひ出したやうになつて、叔父のことを口にし出して、佛壇に叔父の寫眞を祭つて、何か叔父の好きであつたものを町から買つて來て供へたのである。夕暮方の空氣は、しんとして黑ずんで、何處となく濕り返つてゐるのに、酸いやうな木犀の花の香りが流れて來て、まだ燈火も點けずに母と自分と對ひ合つて坐つてゐる座敷の中に流れて來る。

母は、また、何時の間にか其處を立つて、いつも坐る箪笥の前に行つて考へ込んでゐる。其の、箪笥の三番目の抽出しの中には、叔父の遺物として、水色の帷子が一枚入つてゐる筈である。其の帷子に、風を透して納つたのも、まだ幾日とならないのに、早くも月日は流れて、はや秋も暮れんとしてゐる。

母が、いよ〳〵古い大きな家、屋敷を買はうと決心した時の顏附や手附が思ひ出される。「正や、私は買ふことにきめた。」いつも青い顏の母が、其時ばかりは、頰が赤くなつて、いつに見られない顏の熱つて、汗ばんでゐるのである。而して、箪笥の抽出しから證書を出して、貯金帳を出して金高を數へた時には手先が戰へて、今迄にない、活氣を帶んだ母の樣子が哀れにも、悲しく、また嬉しくも見られた。斯樣に一時顏が赤くなつて、はしやぎ立つた母は、其の日の夕暮方には、また更に沈んで、何やら思ひ込んでゐた。それよりかいつもの青い顏となつて時々は深い溜息を洩らしてゐた。

其夜嵐が吹いた。明る日の朝起きて見ると、庭といはず、畑といはず、人々の往來する道の上にも、また生の枝木が折れて、散らばつて無殘な有樣に見られた。ちやうど、年が若いのに肺病で無理に有る命を捥ぎ取られた人のやうに、また無理に手足を折られて痛みのために泣き悲しむ人のやうに、空を見ると、雲が、騷がしさうに驅けて、木の葉は、不安にはた〳〵と鳴り搖れてゐた。

母は頭痛がするといつて、鉢卷をしてゐたが、午後になると嵐は衰へたので、約定をきめて來るといつて、母は出掛けて行つた。

大きな古い家と屋敷を訪ねて、此の嵐の跡を見た母は何と感じたか分らなかつた。日暮方、愁へ顏をして歸つて來た。

ランプの光りは、常になく青く見えた。嵐が止んだので、空氣が澄み渡つてゐたせゐであらう。……母もがつかりとして、靜かな家の外の話聲に耳を澄してゐた。其夜は、二人ともすや

すやと眠つた。

三

私等は、暗い御堂の片隅に積み重ねられてある葬式の時に使ふベンチを取り下して、之れを御堂の眞中に持運んで、其れを二列に整しく並べた。夕闇は外に迫つて、杉の木立の繁り合つてゐる間は、黒くなつてゐる。彼方の墓場に立つてゐる胡桃の木の葉も、朧げになつて、白い夏の夜が圃も、林も、墓も、抱く兒を寐かす乳母のやうに柔かに包まんとした。

『君は、提燈に燈火をつけたまへ。』と私は、傍に立つてゐる小木に向つて言つた。

他のいふことは、大抵もがつたことのない小木は、やはり、御堂の佛像の裏手、ベンチの上に置かれてあつた大きな提燈を持つて來て、これに蠟燭を點けようとして、『これんばかりの蠟燭で足りるかい。』と私の方を見て聞いた。私は、傍に寄つて、小木の肩に手をかけて、提燈の中を覗き込んだ。ちら〳〵と短い、太い蠟燭の消し殘りに再び赤い烏帽子を被つたやうに黑い燈心に火が移つた。風があるかないのに、ちらちらと臆病げに搖れてゐる。其の光りに鐵釘の立つてゐる底の方が僅かに見られた。蠟が流れ落ちて、黑い埃が積つてゐて、他に極めて短い、蠟燭の消し殘りが一つ入つてゐるばかりである。小木は、其の消し殘りを取り上げて、今點つてゐる蠟燭に足さうと試みたけれど、容易に此の別々の二つのものが一つに成りさうでなかつた。

『君、僕がこれを吊してあげるから、君は、奥へ行つて坊さんに一本もらつて來給へ。』といつて、私は、ベンチを足臺にして、これを寺の御堂の正面に吊した。暗い、大きな赤い提燈が吊されたのである。小木は、やがて暗い、奥の方の廊下に足音を立てて歸つて來て、其處のベンチの上に細い、白い蠟燭を乘せて、二人は、やつと幹事の役目が終つたので、其處の疊の上に坐つた。彼方の隅の方で蚊の細い啼聲が聞えて來る。なんでも廣い御堂の中はしんとして冷たかつた。闇の裡から、香の殘り香が、鼻に浸みて、心の目に、葬式のあつた時、其處に白い布のかゝつた柩が置かれて、此のあたりで坊さんが引導を渡すのであらうと思はれた。

其の中に一人集り、二人集つて來て、討論研究會の人々は、來るだけの人は集つたのである。小木はランプを點けて、ベンチの上に置いた。白い着物の上に黑い衣と袈裟をかけて、此の寺の住職がいつも列するやうに此の會に列したのである。

私の小さな村で、此の討論研究會は、毎土曜日の夜、此の寺に開かれることを知らぬ人がないやうになつた。それで、寺の前の道を通る人々は、きつと足をとゞめて寺の中を覗き込んでゐた。各自が議論に熱中してゐると、遠くから話聲が聞えて、下駄の足音がして、來かゝる人があると思ふと、きつと其の話聲や、足音は寺の前に來ると止つて、長い大門から、遠く此方の方を覗いてゐる樣子であつた。

年取つた住職は、常に最後の審判官である。落着きのあつた人で、穩かに自分の考へを述べたものだ。此の會の議長若しくは、審判官として、却つて此の住職のことが此の村の中で有名になつた位であつたから、住職は、きつと會のあるたび毎に、さながら、自分の重大の仕事のやうに心得て誰に見られても恥しくないやうに、ちやんと白い着物の上に黑い衣をかけて、正しく坐つて審判をしたのである。

此の會も長くはつゞかなかつた。一夏で止んでしまつた。

ミイミイツクの聲が、寺の墓場の胡桃の木に悲しげに啼いて、青い空からは、涼しい氣が送

られて、何時となく此の天地の上に一種腸に滲みるやうな悲しみが満ち渡つた時、寺の空漠たる庭に咲いた木犀の蔭に來て、從順しかつた小木の面影を思ひ出して涙に暮れなければならなかつた。

ふとしたかりそめの病から、この生れつき弱かつた少年は此世を去つたのである。私には、會のたびによく小木とは共に幹事になつたので、柔かな、茶色を帯んだ、人懐かしげな瞳の色や、割合に大きかつた頭が思ひ出される。また、日の烈しく照り附ける日に二人は、相向つて往來に立つて遊び疲れて呪としてゐた時、彼の黒い艶かな、細い頭髪に、日の光りが照り附けて滑らかにさながら水に濡れたやうであつた記憶までが思ひ出される。而して、私が桑圃の方に歩いて行けば、黙つて後から從いて來た。森の方へ行けば、厭だと言はずにやはり黙つて從いて來た。決して、自分から、私を捨てて家に歸つたことがなかつたのである。

私は、誰もゐない寺の御堂の處に立つた時に、階段の上には、乾いた土が白くなつてゐた。また、長い大門から、此方につゞいてゐる敷石の上も白くなつてゐた。何處の木立にも、林にも、今を最後と啼きしきつてゐる油蟬の啼聲を聞くばかりである。呪と其の啼聲に耳を澄してゐると氣が遠くなつて、薄赤く色づいた漆の木の葉が、はら／＼といふたびに青い空の地肌が透き間から見えるのなどが譯もなく悲しかつた。

頭が大きかつた小木は、學校では、よく「頭でつか」といはれて、からかはれたものだ。

此の地の上が、赤く焼けて、砂の上にも、石の上にも、底光りの放つた日に、長い一筋の疲れたやうな道を歩いて學校から歸つて來る時には、大きな頭を、さも重さうに左右に搖つて、輕く立ち上る黄色な砂埃は、むつと鼻に蒸苦しい臭をもたらした。頭が大きいので、帽子を被るのが苦しいと見えて、片手にそれを持つて、烈しい日を正面に頭に受けながら、よぼよぼと酒に酔つた小さな人のやうに、町の通りを歩いて來る。左の肩には黒い布で製へた辨當の袋をかけて、右の肩には黄色がかつた鞄をかけてゐる。歩むたびに頭がゆら／＼と搖れて、圓い辨當の入つた袋がごろりとなる。平常は柔しげな眼の中が血を搔き込んだやうに眞赤になつた。だから頭は、大きな重い、黒い鍋を被つたやうに重苦しかつた。ぐら／＼とちやうど御輿にかゝつた圓い姿見の鏡が、搖れに搖れて、ぎら／＼と閃く時のやうに、天地が、ぐら／＼と搖れて、體が幾たびか大地の上に倒れようとした。

耳がガン／＼鳴り響いて、時計屋の店の硝子が電光のやうにぎらりと輝くと見ると、彼方の白壁が斜に倒れて來て、足許に音なく崩れるかと思つた。斯樣な苦しみのうちにも、彼は黙つて我慢して歩いてゐた。

「頭でつか、や――い。」と通り縋りに小木を罵つて過ぎる生徒があつた。其等の生徒は、早く歩いて、何れも、彼を追ひ越してしまつた。而して、樂しさうにはしやいで足早に歩いて、いつしか遠く姿が見えなくなつてしまつた。

私の母の買つた古い大きな家と屋敷といふのは、此の憐れな死んだ友、小木の住んでゐた屋敷であつた。

四

小木の一家は、彼が死後二年目に此の家と屋敷とを賣り拂つて、何處にか行つてしまつた。

私は、小木の達者の時分に、遊びに行つたことがあるが、私の家のものとなつてから後は、度々

此の古い大きな屋敷を見にやらせられた。

青い顏して、打ち沈んで箪笥の前に坐つてゐた母は、獨り言のやうに、「私はこれで弱いけれど、なか／＼死にはしない。」といつて、私を、力附けるやうに言ふかと思ふと、『甲見の家は、代々早死だから……おせいも早く死んだし、おひさも四十代で死んだから……』といつて、獨り涙ぐむこともあつた。甲見とは、母の實家である。其の實家は、今では全く絶えてしまつた。

家、屋敷を買つた後も、母の苦勞は絶えたかつた。私の一家には、灰色の日がつゞいた。つくねんと片手を頰に當て、ぐんなりと前に首垂れて、伏目になつて、青い横顏を此方に見せて、獨りで思ひわづらつてゐる其の窶れた樣子が目につく。或時は、さも後悔したらしく、「あゝ、あの小木の屋敷を買ふのでなかつた。やはり、正に遺して行くには金の方がよかつたかも知れん。しかし、金だと直に他人の手に渡れば失くなつてしまふし……、あゝ……」といつた。

或時は、全く無心で傍にゐる私の方を見て、いつにない大きな聲で、「お前も、もう十三になるよ。他人の世話にならんでも、獨りでやつて行けるだらう……」と叱るやうに言つた。私は、急に明日からでも母がゐなくなるやうな氣がして涙ぐまれて默つてゐると、母は、急に柔しい聲になつて、「さういふけど、まだ十三だもの……獨りでどうして、此先き、行けるものか……」と、さも自分が言つたことが惡かつたやうに、打消して、自分の身を大事にして、此の兒を育てなければならぬといふ風が見られた。

すや／＼と眠るやうに母は死んでしまつた。

其の夜は、いたつて靜かな晩であつた。前日の夕燒は紅く林を染めた。緣側に出て母はいつものやうに蹲踞つて、何事をか深く考へてゐる樣子であつた。柿の木の葉は青くだらりと、さながら湯に浸されたやうに力がなかつたけれど、折々、吹いて來る涼しい風に、梛の木の、頂の、葉がひら／＼と躍つた。落日は彼方の森を染めて、桑畑の中に沈んでしまつた。

眞夜中頃、自分は、いつになく寢苦しいので、ふと眼を見開くと蚊帳の吊手が一方だけはづれてゐる。何の深い考へもなしに、蚊帳をくゞつて外に出て、窓を見ると、赤い月が照らしてゐる。あまり暑いから眠られないのだと思つて、窓を開けて、月を室の中に入れた。青い、水のやうな月光が颯と室の中に流れ込んだ。其の月は、蚊帳に當つて、中に眠つてゐる母の顏を青く染めてゐる。私は、傍にあつた針箱の上に乘つて、蚊帳を吊した。而して暫く窓際に立つて外の景色を見てゐるといふに言はれぬ不安が胸に湧き返るやうでどき／＼と心臟がするのを覺えた。夜は、靜かであつた。尼さんの立つてゐるやうな杉の木や、頭から黑い布を被つて爺さんの坐つてゐるやうな藪が、眼の前に何の聲も立てずに置物のやうに呪として動かなかつた。而して、最も厭な、薄青い、死んだ繪具を溶して、白紙に塗り附けた畫のやうな、夜の色合であつた。

窓際に立つてゐると、蚊が飛んで來て、頰のあたりに止つた。而して、考へてゐる間に細い嘴で直に血を吸ひにかゝつた。けれど私には、これを追ふだけの心に餘裕がなかつたやうに、其の刹那、胸のあたりに落着かなかつた心は、何物かの不安と悲しみに占領せられてゐた。私は、遂に痒いやうな痛みを感じた。この時、蚊を殺さうといふより他には何も考へてゐなかつた。而して、出來るだけ蚊の油斷を見澄して、平掌で頰を打つて蚊を叩き潰した。一種腥いやうなぬめりけのある血が手にこぼり附いたの

ことを、私は、鼻に近寄せて其の臭ひを嗅いで、この生温い晩にふさはしいものだと思つた。

私は、窓の障子を再び閉める前に、月の光りで母の寢顏を覗いて見た。青い、既に幾十年か經つた死んだ昔の人を見るやうな感じがした。靜かに、何の苦もなく眠つてゐる。私は、疲れた母がよく眠つてゐるのを見てさながら自分の體が休まるやうに安心して窓を閉めて、再び床の中にもぐり込んだ。

夜明方に、私の心は、上に重い屋根石を載せられたやうな、麻痺して働きが止つたやうな、黒い疫病の熱の起る前の凶兆のやうな、苦しい恐怖から閃いて眼を醒ました。

『お母さんを見れ』と耳の邊で、形のないものがいつたので、私は、母の床を覗いた。而して、つまらぬ怖れであつたといふことが直に分るといふことを、この刹那、心の何處かに期待して、

『お母さん……』と、靜かに耳許に口を寄せて囁いて搖り起した。私の母は、いつも今頃になればきつと眼を醒して默つて何か考へてゐるべき筈であつた。

『お母さん！』と、私は二度搖り起しにかゝつた。私の心は眞暗になつた。神經質の母は、一度呼べば起きなかつたことはないのだ。

『お母さん！』と三度私は母を搖り起した。けれどやはり返事がなかつた。

私は、抵抗することの出來ないものから、後方から急に怖ろしい底の知れない穴の中に突き落された感じがした。また、心の何處かには、豫て斯樣なことがあらうと思つてゐたが、遂に其のやうになつたといふ感じもした。

『お母さん！』と四度、私は叫んだ時に大聲で泣き出した。涙の溜つた眼に窓の障子のほんのりと明るくなつてゐる、鈍い光線が映つた。母の顏は、ぼんやりとしてよく明かに見ることが出來なかつたけれど、雨戸や障子を繰つて外の光線を中に入れる丈の氣力はなかつたのである。

外は靜かである。いつまでも此の薄闇がつづいてゐるのだらうとしか思はれなかつた。これより次第に明るく夜がなるとは思はれなかつた。

紫色の罎！　と思ふと直に母の小夜着の袖の下に隱れてゐた小さな罎を思ひ出さずにはゐられない。よく日來の樣に、このやうなのがあるが、この中には怖ろしい劇藥が入つてゐると後から聞いた時には、全身がぞうとして惡寒を催した。其時、紫色の硝子を透して中に入つてゐる、まだ幾分か殘つてゐた水藥をすかして見るとすべて紫色になつて見えて、怖ろしい毒藥もやはり紫色をしてゐる水のやうに見えたのである。また私は母の手に觸れて見て、頰に脣を寄せて見て、初めて、死んでしまつた人は、水のやうに冷かになつてゐるものだといふことを知つた時に、母は、もはや生きてゐないのだと……更に新しい悲しみがせきあげて來た。而して、何時頃自分の母が死んだのか其れすら分らなかつた。

靜かに母は死んだのである。燈火の消えるやうに死んだ。青い水の流れたやうに死んだ。永劫に、終始ない時の、目に見えない、音も、臭ひもない、このある儘の中に消えたのである。箪笥の前に坐つて考へてゐた母の顏は青かつた。死んだ時、床の上に仰向になつて臥てゐた顏は更に青かつた。無口で、靜かで、心配して、苦勞した母は、死んでしまつても、やはり無口で、靜かで、呼んでも、泣いても凝として眼を閉つたまゝであつたけれど、もはや、心配と、苦勞とは、哀れな母の體から取り去られた。而して、死んでしまつては、此世に幾日もゐられない。

總べて、人間がさうであれば、母もまた、靜かに、默つて、安心して、全く夜も晝もない、いつまでも暗い墓の下に行つて眠ることとなつた。後になつてから、あんなに眠るやうな靜かな死を見たことがない、劇藥を飲んで死んだ人は苦しむと聞いてゐるのに母には、其れがなかつた、體が疲れて、弱りきつてゐたので、藥がみる間にきゝめがあつて、死んだのだ……靜かな母を、不仕合せな母を、不憫に思つて、靜かに灰色の形を見せない死は抱いて去つたに相違ないとも思つたことがあつた。

其の黄色味を帶んで、黒い木立の頂を染めた、頭痛のした曉から、たゞ一人、此のすべてのものに關係を持たない世界に殘された私は、母の死骸を其儘にして、振り返つて、もう一度蚊帳の外から青い顏を覗いて、框を下りると雨戸を開け、外に出てぴしりと閉めて、暫く途方に暮れたが、最も母が嫌ひであつた叔父、叔母の二人の住んでゐる家に告げに行くより、親戚が他になかつた。

其の、叔父、叔母の住んでゐる家の家根が彼方に見えた時に私は、覺えず道の上に立止つた。まだ往來を歩いてゐる人の姿が見えなかつた。前方に、松の木のある土手の上には、白い露がかゝつてゐる。私は、是れから冷やかな鐵の、牢屋の重い門を開けなければならぬ身の上であることをはかなく考へられた。其の家に近づいた時に、何を見ても私には異樣な感じが與へられた。細目な格子戸も、燒杉板塀も、皆親しみづらいやうな、無心で手を觸れられないやうな感じがしたのである。母は此の家が大嫌ひであつたと思ふと、この細目の格子戸も、燒杉の板塀もやはり嫌ひであつたやうに思はれたからだ。さう思ふと、私の賴りない悲しい心に一種の憤りも混つたけれど、どうすることも出來なくて、怖る〳〵戸を開けて入つた。

ちやうど起きたばかりで、叔母と向ひ合つて煙草を喫つてゐた叔父は何んで來たかといはぬばかりの顏附で、私を頭から睨んだ。母が、人の惡い女だと言つてゐた叔母は、何か、これには仔細があることだと顏に見せて、白齒を剝き出して、無理に笑つた。

『何んで來た？』と叔父は、太い銀の煙管で煙草盆を叩きながら言つた。

私は、いはうと思つて來たすべてのことを忘れて、心の底から悲しみが込み上げて、何も言ふことが出來なかつた。

『お前の母親は、分らん女だ。歸つたらさういへ。』といつて叔父は煙草を吹してゐた。

叔母は傍から、『あなた見たいなことをいふものがありますか……此の兒に言つたつて仕方がないぢやありませんか……』といつて、此方を向いて、

『正ちやん、どうして來たのだね……』と強ひて柔しく言つた。

私は、泣く〳〵、母の死んだことを告げると、また悲しくなつて來て、大きな聲をあげて其處で泣きくづれた。私は自分の泣いてゐた間がなんでも五分ばかりのものであると後から考へられた。其間、流石に叔父も叔母も何の言葉も出さなかつた。私は、獨り泣きつゞけた。しばらくして、

『死んぢや、お前の母親が……』と叔父がいつて、口許で笑ひながら、煙管をカンと吐月峯に叩いて、何の意味とも分らない、一種のさげすむやうな笑ひ聲を立てた。

『どうして……病氣ででもあつたんですか。……』

と、叔母は流石に女だけに驚いていつたが、

其の驚きのうちには、死んだ母の怨みがかゝらないかといふ怖れがまじつてゐたと思ふ。けれど、どういふものか其の言つた言葉が冷やかに聞えた上に黒い大きな眼であるが、なんの懷かし

みも潤ひも輝きもない眼を見張つた。

『それは、正ちやん、全くほんたうかね……』

といつて、疑ふやうに叔母は、頤の慄へるのを堪へようと力めながら、出來なかつたのである。

此の時は、私の心には、すべて此の世界に住む人の中で、眞に惡い人といふやうなものはない、みんな、同じい感情を持つてゐる人間である、眞に、此方で悲しく感じたことを語れば、彼方でも斯樣に悲しく感じてゐるのに、何故、私の母は此の叔父、叔母を冷酷な、强慾の人だといつて仲をよくしてゐなかつたのだらうと、却つて母が褊狹であつたやうに思はれもした。

『叔母さん、早く來て下さい。』

と、私は、泣きすがるやうにしていつた。叔父は、叔母に對つて、『早く、行つて見れ。』と命ずるやうにいつて、自分は、何か考へながら其座を立つて奧の間へ入つたが、頭を襖から此方に出して、『己れも、直に行くからな。』と叔母に向つて言つた。私は、說明の出來ない不安に驅られながら、慌てて家を出た叔母の後からついて再び來る時に通つて來た道の上に出た。もはや、人の往來する姿が幾つも見られて、太陽け、黄色く頭の上を照らしてゐた。

五

しんとした麓の古い沼にじゆんさいの花の咲く頃であつた。また城の濠にはかきつばたの葉に日の光りがぎら〳〵と照り返してゐる頃であつた。家の外には、若い夏の日光が、音なくしきりに降り注いでゐる。

叔父は、私に、母の死骸が橫はつてゐる六疊の間に入ることを禁じた。私の母の死骸は、いつも母がちよこなんとして首垂れて坐つてゐた簞笥の置かれてある室に死んだ時から其儘になつて橫はつてゐた。其の室は、母にとつても、私にとつても最も親はしい、懷かしいさま〴〵の思ひ出のある室である。幾間もない、狹い家の中でも、自分の滅多に行かない室もあつた。また、イツも行つてゐる室もあつた。

叔父、叔母、其他に、私のまだ知らぬ人までが家に集つた。而して平常は其樣な人と顏を合はしたこともない遠緣の人にまで、また、私の家には關係なくて單に叔父の家に出入するといふ者にまで、叔父が人を出したので、集つて來て隣の八疊の座敷に叔父と話をしてゐる。其等の人は、叔父に向つて母のくやみを言つて、女は勝手に出て飯の支度などして働いてゐた。この勝手も、潔癖な私の母は、決して他の人にいぢらせなかつたので、棚の上のものや、ふくろ戸の中に入れてある皿や茶碗の置方まで母がキチンとして自分の思ふやうにして置いたのだ。

私の母のゐる時分に來た、町の車屋は、母の死を聞いて、驚いて顏を出したけれど、叔父や叔母を初め、來てゐる人々がお前は誰だ、なんで來たかといはぬばかりに取扱つたものだから、附葉がなくて直に歸つてしまつた。歸る時に、私は、ふと門口へ出て車屋と顏を合した。車屋は、母が叔父、叔母を嫌つてゐたのを知つてゐるから、顏に氣の毒な、同情してゐますといふ誠心を見せて挨拶したが、何んだか四邊の樣子が急に變つてしまつたので、私とも碌々話もせずに歸つてしまつた。其の男は元來、氣の小さな、正直な男であつた。其れは母がよくいつてゐたことで、『あの車屋は、人がいゝかはりに餘り氣が小さくて何かの時の役には立たぬ……』といつたことがあつた。

私は、叔父が、あまり死んだ人の傍には、行つてゐるものでないといつたにかゝはらず、母の枕許に坐つてゐた。ぢつと窓の外を見ると、庭の繁つた木立の綠が溶けるやうな、風のない蒸し暑い日であつた。坐つてゐても何となく、

心が落着かないのでまた立つて外に出ると、日がぐわつと照らして、前の圃には大きな葉の晝顔の蔓に白い花が茫然と浮いてゐるやうに開いてゐる。ひよろ〳〵と高い、唐黍の股に實はだらりと赤い毛を垂れて、別に地面を這つて黄色な南瓜の花が咲いてゐた。私は、眩つぽい目に眼を細くして、上を仰いで、唐黍の實の赤い毛を見ると、微かに覺えてゐる母がまだ若くて、自分が七つばかりの子供の時分の姿などが浮んで來た。それは、まぼろしのやうに消えてしまつた。白い雲は、斷れて、青い空を、何處へとなく流れて行つた。私は、やはりあの雲のやうに、極樂のある、母の靈魂の去つた、はてしない海の方へと消えて行つてしまひたかつた。雲を見て、しばらく悲しい思ひに耽つてゐたが、ふと皿の壞れた音が耳に入つた。

見もしない、知りもしない女や、男が來て、今迄母と私より、誰もみだりに入らなかつた我が家の勝手を掻き廻してゐるのが殘念のやうな、馬鹿にせられてゐるのを知りつゝ默つてゐるやうな氣がした。

『おれは、そんなに弱くないぞ！』と口のうちで叫んだ。すると顔が熱つて、胸がどき〳〵鳴つた。

私は、この家は己の家だ、と彼等に向つて言ふかはりに、形に現はさうとした。さう思つたから、勝手に入つて故意と手桶の水を汲まうとして其處にひつくり返した。『まあ――』と仰山な聲をあげて、立働いてゐた女共は、慌て水を避けようとした。――中には、眇目に險を立てて、初めて私の顔を見たやうに注意したものもゐた。

此の物音に、來合せてゐた馬のやうな長い顔の男が、『どうしたんでい。』と、暗に私を叱るやうに奥から出て來ていつた。叔父の家に出入する男だと思つた。私の想像は、電光のやうに、この男の顔は、或日、學校へ行つた時分、町端の鍛冶屋の前に繋がれてゐた、赤毛の馬の顔に似てゐると思つたから、

『馬だ！ 馬だ！』と怒鳴つて其處から上に驅けあがると、また母の横はつてゐる室に入つた。後で、勝手許にゐた皆んなが私を氣狂ひだと思つたに相違ないと考へた。

其の枕許にある簞笥の中には、母の大事にしてゐた印形がある。黒い色をしてゐた。また貯金帳がある。こゝに其れが入つてゐるといふことは私より他に知つてゐるものがない。私は、先刻家に歸ると袋に入れて母が人の氣のつかぬやうに押入の中に下げて置いた此の簞笥の鍵を叔父、叔母の知らぬ間に懐に隱してしまつた。其時から、どんなことがあつても飽迄身から放さないと決心した。

『なぜお母さんは、私ばかり置いて死なれました。』と怨んで見た。いつの間にか線香は、燃え盡してしまつたけれど、別に、誰も來て立てもしなかつたので、私は、死んだ母が氣の毒になつて、眼に涙が湧き出た。

『お母さん、誰もあげなくていゝ、私があげます。』と、線香を立てて、手を合して拜んだ。白い二筋の煙は、搖ぎのない空氣の中に立ち上つて、いつしか一筋となつて、する〳〵となほも上つて、消えてしまふ。其の煙は、私の方へとなびくこともあれば、死んだ母の、白い紙のかゝつた顔の方へとなびくこともある。私は、この一片の白い煙にも心といふものが宿つてゐるであらうかと思つて見詰めてゐた。

『晝飯ですよ。』

と、叔母が愛想氣なくいつて、室に入つて來た。飯の間、わたしがお母さんの枕許に坐つてゐますから、お前さんは食べておいでなさいといつた。私は、食べたくありませんといふと、

皆んなが食べずにゐるから、おや行つて坐つてゐればいゝんですといつた。襖を隔てた八畳の間には叔父と、遠縁のものと、其他見知らぬ人々が、私の行くのを待たず飯を食べてゐる。あの顔の長い男や、眇目の女もゐると思ふと、先刻のあつたいろんなことが頭に浮んで、其の室に行くのが厭で、音のしないやうに下駄を穿いて、裏庭の椰の木の蔭に來て隠れてゐた。

日暮前に、棺屋が來て母の死骸が棺に納められた。いよ〳〵釘が打ち附けられる時、私は、もう一度母の顔を見せてもらひたいと泣いて地だんだ踏んだけれど叔父は、耳にも入れず、叔母に對つて「彼方へ此兒を連れて行け！」といつて無理に私を其の座から遠ざけてしまつた。後から、人のゐない時を見はからつて來て見た時には、もはや白い布がかけられてあつた。

六

翌日、葬式は濟された。赤い袈裟をかけた僧侶は磬を叩いて、これから母の歩いて行く、長い途の、山を登り、谷を越えるにも平穏なれかしと祈つた。而して、死骸は先祖代々からの墓所に埋められた。寺から、其の墓地までは七町餘りあつた。其間を棺が運ばれた。新しい土が盛られて、白い卒塔婆が立てられた時には、日は正午を少し過ぎてゐたが、暑さは、少しも衰へなかつた。葬式に從いた者も、棺を擔いで來た人足も共に無言で汗が額に流れてゐた。

遂に母と私は、此の世界から、彼の世界から、共に別れてしまはなければならなかつた。今日から、此の淋しい、晝も、人がゐず、夜になれば星が照らし、嵐が吹く墓地に、たゞ獨り母は淋しからうと思つた時、聲を上げて泣きたかつた。一番後から、私は、墓地を出た。油を煮るやうに蟬の聲が、むつとした空氣の中に震へて、空は黄色くて、頭を上げると氣が遠くなるやうだ。

町の方が光つて見えた。白く乾いた道が二筋に分れる處で叔父は振向いて立止つた。

叔父は、其日から、私に、今迄の家に歸るのを許さなかつた。私に、物をいふ時、眼の中は赤かつた。顔の筋肉は震へて、憚るやうな聲で、「いくら、面白い間柄でなくても、やはり骨肉だ。これからお前は、私の家に來てゐなければならないのだ。歸つたら、話して聞かすこともあるから、先へ、家へ行つてゐろ。」と、叔母を呼んで、私に付けて、叔父は獨り、私の家へ行つて後始末をして來るからといつて別れた。

前になつて歩いた叔母の影は、道の上に動いた。時々、途中から私の逃げて歸るのを怖れるやうな樣子で、變な顔附をして私の顔を見ることもあつた。――いろ〳〵な氣持を現はしてゐる此の顔附を變なといふより言葉がない。――而して何かに氣兼をして、私を、自分の家まで護つて來た。何處の家根も光つて、何處の森も霞んで見えた。叔母の翳してゐる、絹地の洋傘の尖に附いた金屬が、星のやうに光つてゐる。長い、人通りも絶えた道の上を二人は、別に何も話ることがなしに、うなだれて來たのである。而して、私は叔父の家の敷居を跨いだ刹那から、やつと叔母は安心したといふ風が見られた。同時に、さげすむやうな、たかぶる風が見られた。物言ふ言葉つきまで、急に變つた。叔母は上ると直に汗に濕れた衣物を着換へたけれど、私には、顔を洗つて來いとも言はなかつた。私は茶の間の六畳に、袴を穿いた其儘で坐つて、日の暮れるまで身動きすらしなかつた。かうやつてゐる間にも私は、獨り殘して行つた母がうらめしかつた。

紅く窓にさした西日が蔭つた時分、たゞ私に

だけ用意せられた、小さな膳が出された。けれど、私は氣分が惡いからといつて食べなかつた。

やがて、日が暮れてランプの點く時分になると直に叔母は、疲れてもゐるし、それに氣分も惡いなら、先に眠た方がいゝといつて、四疊半に案内した。

叔母は、いそがしさうに出て行つてしまつた。

私は其處へ坐つた。風通しの惡い室である。たゞ北に一つ四角な窓が附いてゐて、其處から、痩せた楓の木が家と垣根の狹い間から伸上つて、室の中を覗き込むやうにしてゐる。私は、この楓の木にまで憐れまれる身の上であるかと思つた。また地上には、晝間の蒸れが全く消えないので、室の中には・生温い空氣が滯つてゐて、い、もうとして息を止めるやうに感じた。而して、この蒸れのために、生殖の發作的の狂はしのために、輪を畫いて廻つてゐる蠅が、巨大な物質が立入つて來たので、或は、一種の好奇心と、或は、憤りのために三四疋、私の頭に止つたり、肩の上に止つたりした。稀れに、ぶうん――と長い單調なうなりを發して二三遍、この蒸れた室の空氣を泳いで刎ね纏るが、またぶつりと其の音の斷れた時は、うるさくも黑點の如く、頭の上の天井板に止つて、時間が經つたら、もう一度此の室の中を飛び廻るといふ用意を示してゐる。

斯樣に蒸暑い、息苦しいことも、考へ惱んでぼんやりとしてゐる私の頭には極度の苦痛ともならなかつた。更に、叔母が來て、自分は、日の前に火を焚き付けられた、黑い、四角に出來てゐる鐵室の中に入れといはれても、これを拒む氣力がなかつた。心は、汗と埃に穢れてゐる不快な肉體に反抗して、羞恥力は、疲れて、不安に目醒めない程に鈍つて、いふがまゝに火室の扉を開けて頭をかゞめて入つて、窒息するまで忍耐して狂的に赤い火を見詰めて坐つてゐたらうと思ふ。

けれど是等の苦しみすら、また憤りすら、心臟を刺すやうな、氷のやうな、母を失つた悲哀には打克たれなかつた。

私は、頭を疊に載せて聲を忍んで泣き倒れた。日が暮れてしまつてから叔父が歸つて來た聲が聞えた。蚊は耳許で鳴つて頰を刺した。傍にはいつの間にか、叔母が置いて行つた蒲團があつたけれど蚊帳はなかつた。私は、蒲團を敷かずに、其儘、俯向になつてゐたが、ふと、眼を上げた時は、ひよろ〳〵とした痩せた楓の木は黑くなつて、僅かばかり見える青い夜の空に突立つて、梢の間から星の光りが輝いて洩れて來る。其の星の光りを見ると、悲しいうちに一種の慰めがあつた。

明日からは毎晩星を見て、死んだ母の面影をしのばうと思つた。

不意に私は、搖り起された。

『お前は、箪笥の鍵を隱してゐるだらう。』

と、叔父は、何時の間にか室に忍び込んでゐた。私は、うつかり、うと〳〵と眠つたのである。小さなランプが、臺の上に點されてゐるのを見て、いつ點されたのであるか知らなかつた。何となく、宵から今迄の間に、獨り自分の目に見えなかつた長い月日が繰り返され、經つてしまつたやうな氣がする。さういふうちにも、頭の痛むのを感じた。また、つかれに疲れた體はふらふらして坐つてゐることが出來なかつた。生なか、少し眠つたのが、酒の醉がまはつたやうに氣力が衰へたのである。もはや、痩せた楓の木もない。星の光りもない。たゞこの儘眠たかつた。

『オイ、お前は箪笥の鍵を隱してゐるだらう。』

と、二度叔父が言つた言葉で、私の心は、再び苦しい現實の煩悶に返つた。フト、叔父が

眼の前に差し出した片手には、ぴかり光つたものがあつた。ピストル！と心が叫んだ刹那、心臓はどき／＼として、耳は早鐘を叩くやうに鳴つて、體が、わく／＼と震へ始めた。私は、叔父の顔を見上げて、人間であるとは思はれなかつた。而して、何處かで、叔父は人を殺して、強盗をして來たことがある。其れが世間に知られずにゐるのだといふ直覺が閃いた。叔父の眼は鷲のやうに鋭く光つて片腕の袖を捲り上げて、手に小形のピストルを握つてゐる。ピストルのニッケルの筒尖は、二分心のランプの光りを反射してゐる。何の知覺もない金屬の輝きは、ただ無心に光つてゐるばかり。

私は、體の震へるのを無理に耐へて默つてゐた。叔父は、ピストルをもつと近く私の胸に突き付けた。私の眼は、ちら／＼して、紅い火が、今にも出て、胸を貫く彈丸が、耳の鼓膜を破る轟きと同時に飛び出るのだと思つた。

家は、病的とも思はれる程靜かである。誰か、不意に入り込んで來て助けてくれるものがないかと希つた。尚ほ、長い絲のやうな連續である、自分の命といふものが、これで斷れてしまふとは思はれない、けれど窓際にひよろ／＼と立つてゐる痩せた楓の木は、どうすることもなし得なかつた。心のうちで、彼の空に輝く星に、神の力が宿つてゐたならばと思つたけれど星はたゞ、無限に遠く、この慘劇を見てゐるばかりで音もたてなかつた。

叔父は、太い、しかし、灰色の壁に當つても、通らない低い聲で、

『鍵を、隱してゐるだらう。』

と言つた。

夜は靜かである。死と眠りの似てゐるのを、其の色に、其の沈默に語つてゐる。廣い世界の人々は眠りに就いた。たゞ、この一室で、かゝる殘忍な行爲が演ぜられてゐる。けれど、これがために、靜かな夜の、すべてのものの沈默が呼び醒されるやうなことがなかつた。私は、祕密に行はれてゐる罪惡を知らずにゐる社會を呪つた。罪惡を見逃してゐるものにも罪があることを思つた。風の音一つ聞えない靜かな夜である。天地は、すべて魔藥を飲ませられて死んだもののやうになつて眠つてゐる。私は、母の姿を目に畫いて、口のうちで救ひを求めた。靜かな夜には地震があるといつた死んだ母の言葉にも、何の眞理がなかつたやうだ。また、神のあることが信じられない。自然の夜は、すべて惡魔にとつて、眠つてゐる人の眼醒めないやうな、靜かな、好い機會を與へてゐる。

或る瞬間に、私は、叔父が引金をひいたのかと思つた。手に力が入つて、心持、ピストルの銃尖が、動いた時、前後のことを忘れて私は、驚いて、躍り起つた。而して、出來るだけ大きな聲を出して、「人殺し！」と、叫んだ。叫ぶと同時に眼が昏んで、四邊が眞暗で、何も見えなかつた。それでも心は爭つた。もう一度、町まで聞えるやうに叫ばうとした時、大きな厚味のある掌は、私の口を塞いだまゝ、體は其處へねぢ伏せられた。叔父は、押へ附けながら、靜かに耳許でかういつた。

「馬鹿野郎！　まだ喚くなら、殺してしまふぞ。」……

私は、息苦しい裡にも、思想は閃いた。此の叔父の半生涯が目に浮んで來た。初めは、土方であつた。次に、土方の親方になつて、其れが、今では金を貯めてゐる……人を殺しかねない、殘酷な性質を持つてゐると思つた時、私は、急に怖氣附いた。出來るだけの力を籠めて引くと、叔父の手が僅かにゆるんだので、

『鍵を持つてゐます。簞笥の鍵を持つてゐます。』と泣きながら訴へた。たゞ命が助かつたなら、きつと此の復讎はして返すと思つた。け

れど叔父は、押へ附けてゐて、容易に手を放さなかつた。

「野郎、よくも叫きやがつたな。」

と、いつて、ピストルを鼻尖に突き附けた。

私は、死に物狂ひになつて、身を悶えた。やつと、思ひで、懐裡にあつた鍵を握つて、其處に投げ出すと、叔父の手は意外にも弛んだ。私は、起きたけれど、手足は痺れて、頬はづき／＼痛んだ。叔父は、急いで鍵を拾つて、握つてしまふと、默つてランプを消した。やがて足音を忍んで室を出たらしい。

私は、もしや叔父が闇の中から、狙撃しはしまいかと思つたから、思ふと直にこつそりと這つて、叔父の見當が附かないやうに小さくなつて室の片隅に身を竦めた。私の、頭髪は神經が通つて、蛇のやうに戰いてゐる。

七

黒い夜の幕が撤しられると、物憂さうな灰色の光線が窓から、音なく入り込んだ。其後、二三日は叔父の姿は見られなかつた。

秋風が吹き初めた頃、私は、叔父から月に僅かばかりの學資を受ける約束で、町へ下宿することになつた。宿は、叔父が出て取り決めて來た。叔父は、私を家から出さうと思つたのだ。

宿は、裏町の、屋根の低い、暗い素人の家である。家根の上には、石が置かれて、ぺん／＼草が頂きに生えてゐる。兩隣の家の家根は、高くて、此の家が家と家の間に陷込んでゐるやうに思はれた。間口は二間で、戸や障子が傾つてゐる。家の中は、暗くて、窓が、天井の煙出に一つ附いてゐるのと二階の表に面した方が、格子になつてゐて、其處から、鈍い光線が射して來るばかり。間數は下に三つ、二階に二つあつたけれど室と室の隔ての襖は破れて、隙間から隣の間の、破れた壁に貼られた、赤くなつた新聞紙や、汚れた着物の下つてゐるのが見られた。下には、一つ爐があつて、上からは、黒い煤が棟木となく、壁となく、戸棚の上からとなく垂れ下つてゐて、爐に吊された鐵瓶のかけ金も黒くなつてゐる。僅かに光りを放つてゐる金も、弱い力で、老婆の磨くのだから、どんよりと白く光つてゐるといふより、鈍く灰色に曇つてゐるといつた方が適當である。疊の目には、埃が埋つてゐて、奥の一間には、蒲團や、衣物や、不用の道具が重ねられて、さながら物置のやうになつてゐる。其の隣の間の三疊には、箱が一つ眞中に置かれて、白の紙片が、僅かばかり板の上に載せられてゐる。飴色に、煤けた障子に、裏手の光線がほんのりと赤く染めてゐる。此の暗い、貧しげな家は、七十になる白髮の腰の曲つた眼の見えない老婆と、四十許りになる片足のない女とが二人暮しで、二階の裏手の三疊には、丈の低い、陰氣な顔附をして、齒の缺けた年のとつた巡査が間を借りてゐて、朝になると出て、夜になると歸つて來て寢る。

片足のない、色の青い病人らしい女は、いつも頭髪を粗末に束ねて、壁の片側に背を寄せ附けて箱に向ひ、其の箱に載せた板の上で、燈心を卷いてゐる。この不具者の女は、かうやつて手内職をして、生活を營んでゐる。箱の中には、燈心が入れてあつた。女は、いつでも少しばかりづつ板を上げて箱の中から燈心を摘み出して、板の上に載せる。而して、紙片を竹の棒にくる／＼と卷いて、更に、青白い螺細工のやうな指頭は、燈心の端をつまんで、きり／＼と竹の棒に卷く。こと／＼と板が鳴つて、象牙細工のやうな卵色の棒が出來る。卷かれた燈心を竹の棒から拔いて、紙の箱の中に並べる。其れが、ちやうど小學校の門前にある雜貨店に賣つてゐる、箱の中に並んだ薄黄色な石筆が思

ひ出された。女は其れを丁寧に、傍にある紙製の煙草箱の中に並べてからも、眺めて、其れの幾本となく澤山に積み重ねられるのが、さも、其の日の此の上もない樂しみのやうに、傍からは思はれた。

老婆は此の女の母親である。一日、圍爐裏の傍に坐つて、居眠りしてゐる。風が音を立てて、外を吹いてゐようが、日が雲に掩はれて、四邊に暗い影が落ちて來ようが、また日は、東から出て、長い旅を急いで、短い秋の日が暮れて、物悲しい夕暮方に近づかうが、老婆は、何の考へもなく、かうして居眠りをつゞけてゐた。

人間は、死ぬべきものだ。年を老つたものはやがて死ぬ時期の近づいたものだといふ苦痛をも、別に感じてもゐなかつたやうだ。自然に肉體の機關を濕してゐる油が盡きて、血管の裡に燃えてゐる生命の燈火は、だん／＼細く、弱く、光りが薄くなつて、いつしか全く冷かに、暗く消えてしまふ。かゝる現象は想像し得ることのやうに、人間の命は卽ち、其の永遠に流れてゐる時の、中に燃える限りのある現象であると思つた時に、此の老婆の、氣力なく居眠りしてゐる姿は、實に不安心な狀態にあるのだ。しかるに、老婆自らには、其れの意識すらなかつた。

『お母さん、もう、直に日が暮れますよ。』

と女は、燈心を卷きながら、此方を向いて小さな聲でいつた。けれど、この聲は、ガランとした火の氣の消えたやうな室の何處かに吸ひ取られて、老婆の耳には聞えなかつた。女には、屡々、平靜の氣持を破る、特種の暗い影が差した、其れは母親の氣力が、失せたのが、殊に目立つて、死ぬのが近くなつたのでないかと思つたことだ。暫らく、胸が塞つて手を止めて、母の最後の日が來た場合を目に畫いて、茫然としてゐたが、心を取り直して、天井の煙出窓を見るとだん／＼日が暮れて行く氣はひがした。

『おつかさん、もう日が暮れますよ。』

と、今度はやゝ大きな聲でいつた。けれど、十分優しみを含めていつたつもりであつた。老婆は、不意に呼び起されたので、びつくりした樣子で眼醒めた。

『おや、さうかえ。』といつて、直に、曲つた腰を無理に伸して、手を疊に突いて起き上つた。彈力を失つた枯木を、手強く取扱ふやうに見てゐるのが女に辛かつた。而して、老婆の返事のうちには、決して今の境遇に對して不平を抱いてゐないばかりでなく、却つて、自分のすべき義務を盡すことを忘れてゐたのを注意せられた時のやうに、早速勝手許に行つて仕事に取りかかつた。女は、老母の後姿を見守つた。而して運命を恨むよりも、自分の責任の如く感ぜられて自分を責めた。母に對して濟まぬと思ふと眼に熱い涙が滴つた。

私の下宿を探しに出た叔母は、町から歸つて來ると、ほんのりと紅くなつた顏をして、

『あゝ、いゝ素人下宿屋があつた。あの家なら、申分はない。年寄と、娘と二人ぎりで、二階には學生さんが一人下宿してゐるばかりだ。家の者も同じくしてゐてくれるなら、置いてもいゝと先方でも言ふし、彼の家なら金もかゝらないから早速きめて來た。』

と、いつた。

弱つて行く日の光りは赤銅色をして、地面は白く乾いてゐた。叔母は、衣物を着換へてから、家の外に出て水を撒いた。また、秋になつたといへど、晝過ぎ時分の熱さは夏に似てゐた。溝の邊には、咲き後れた淡紅い金盞花が、田舍少女のやうに、淋しさうな顏附をして咲いてゐた。私は、其花に眼を落して、考へながら、半分窓から頭を出してゐると、

「お前さんは、直に移るかい。」と叔母は、此方をきつと睨んで、「直に」と力を入れて言つたが、手に重味を感じたと見えて、金盥の残りの水をざぶりと溝邊に撒き捨てた。水に濡れて、ゆらゆらと赤い絲花の頭が搖れて、葉には小さな露の滴りが日に輝いて光つた。

私には、叔母が、もうお前を見たくないといふ心持が分つてゐた。また私も、早く此の家から脱れて、二人の顔を見たくないと思つたから、「ハイ、行きます。」と答へたが、かうやつて厄介拔ひにされてゐる自分の身を考へると、涙が湧き出て、はつきり物が言へなかつた程咽喉が塞つた。

私が、家を出る時、叔父はゐなかつたが、叔母は、叔父が歸つたら、よく、金のことも間違ひのないやうに話して置くといつた。行李と蒲團が車に積まれた。車屋が、其れを搬んで、私が後からついて行く時、彼方では、蜩の啼く聲がして、神社の森を見ると、杉の木立を幾分か衰へた秋の日は、赤く照らしてゐた。尖つた杉の頂の、青空には、早くも身に沁み渡るやうた悲しい氣が流れてゐた。

私は、大抵一日中巡査の姿を見なかつた。巡査は、朝早く出て、夜遅く歸つて來たからだ。尤も、朝のうちは、濁つたせきする聲が聞えたり、居間の中を歩く足音が、よぼ／＼になつた疊に、どしん／＼として響いたが、互に襖を開けて、顔を合す機會がなかつた。八時、少し前になると、階子段を下りて出て行く樣子であつた。階子段は、私の室と巡査の室との間にあつたから、巡査が下へ段を降りる時でも、一枚の破れた古ぼけた襖が閉つてゐるので、たとひ其の襖と傾つた柱との間が一寸位は明いてゐても、晝間でも階子段の上は暗いから、近寄つて、其の間に顔を附けて見るのでなければ、巡査の顔が分らなかつた。

此の家の二階に來てから三日目である。朝、下に降りようとして、巡査の居間の襖が明いてゐたので、横になつてゐた巡査を見た。卽時に、私には休日であらうと思はれた。室の中には、小さな机が置いてあつて、其の上に赤い表紙の本が一冊と黑い色の手帳とが置かれてあつた。壁には毎日着て出る洋服と、佩劍とがかゝつてゐた。巡査は、白い兵兒帶を締めて和服を着てゐたが、顔には髯が澤山延びてゐて、白眼の澤山な、色の黑い、丈の低い姿が、さも退屈してゐるといふ風に眼に映つた。巡査も、好奇心で、呢と自分の顔を見守つた。

二人が顔を見合はしたのは單にそれだけであつた。其の日の午後である。いつになく此の無口の巡査は、ぶつ／＼と室の中で獨り言をいつてゐるのが聞えた。私には、何が原因で怒つてゐるのか判斷がつかなかつたが、其の内に足音を暴く立てて二階の階子段を驅け下りた。覺えず耳を澄してゐると、彼は下の室に行つて、大きな聲で頻りと物を言つてゐた。其の聲が少し、杜絶えると次に、片足の女と老婆とが、二言三言い譯をいつてゐたやうであつたが、出來事の意味は分らなかつた。間もなく巡査は、再び、何やら口のうちで小言をいひながら階子段を驅け上つて來て自分の室に入ると、ぴしりと手暴く襖を閉めたが、殆んど同時に、上から重い物を引摺り落したやうなどしんといつた響きが聞えた。

其の日の午後、巡査は、荷物を取り纏めてゐる樣子であつたが、暮方になつてから、幾度となく、階子段を往來して、下に荷物を搬んだ。其れが止んで、靜かになつた時分、直ぐ下の外で、車が動き出す音がした。

巡査が轉宿した明る日から、不具者の女は、青い顔に造り笑ひをして私を見るやうになつた。

私には、其の笑ひが色の褪めた花瓣のやうに氣味惡く思はれて、成たけ見たくなかつた。

八

秋風が町の家根を吹いて、空には、終日濁つた雲が亂れてゐた。灰色の町の中は、平日ですら暗いのに、家々では戸を締めきつてゐた。人々は寒い、身を刺すやうな、殘忍な冬の迫つて來るのを怖れてゐる。ひら／＼と、小鳥の飛ぶやうに、高い木立の葉は、風にもぎ取られて、空に舞ひ上げられる、而して風が、溜息をつくやうに一度吹いて、次の襲來を待つ間に家根や、窓際に落ちて來る。中には、穴の明いた、破れた葉もあれば、また、全く青い色のもあつた。其等が、火の子のやうに風に舞ひ上げられて、空を翔る時には、痩せた電信線は、微かにうなりをあげてゐる。四角な、家根の上に突起した煙出窓は、口を開いて、此の灰色の空から、灰色の空へと吹き渡つてゐる北風を吸ふやうに思はれた。

雨に打たれ、風に叩かれても、容易に破れないやうにと、色の黑い生紙に、油を塗つた煙出窓の障子も、其れでも、屢々の雨風に當つて、處々破れてゐる。バラ／＼と、何の木の葉とも知らない、薄紅い葉や、眞黄色な葉が、風に吹き込まれて窓から降つて來る。稀れには、青い葉も混つて落ちるが、若し無理に風に捥ぎ取られずに梢に附いてゐたら、まだ此の青葉は幾日か生きながらへて、此の明るい世界の光線を浴び、日光に輝いて面白い餘命が送られたかも知れぬ。

窓から、婆さんの坐つてゐる圍爐裏の中に葉が落ちて來た。また婆さんの白髮の上に、また土間の上に、疊の上にも葉が落ちて來たのである。

婆さんは、日に幾たびとなく、起つて奥から箒を持つて來て、疊の上や、板の間の上に散つた葉を掃き落して、土間に下りて澤山の葉を一所に集めて、これを塵取に拾つて、裏の圃へと捨てに出た。

私は、二階の煤けた障子を開けて、格子窓の中から外を見てゐた。私には、この默つてゐる自然にも神經があつて鬱いだ顏をしてゐるとしか思はれなかつた。而して、此の町に住むすべての人々は、何の希望もなしに、日の暮れて行くのをどうすることも出來ずに、あてなく待つてゐるとしか思はれなかつた。此の自然の上にも、此の人々の上にも、暗い夜が來かゝつてゐる。寒い冬が來かゝつてゐる。

誰れも、この自然力に反抗しようとするものがなかつた。淋しい眠つたやうな町を歩いて、無理にこの眠りを醒まさうと力めるものもない。鬱ぎ込んでゐる人の心は滅入つて、鳴物にも手を觸れずにゐた。たゞ火鉢にしがみついて、臆病な樣子をして、耳を澄しながら、音の滅びた古びた灰色の町の中を鞭を振つて走る、風の通るたびに、小さな頼りなげな響きを立ててかゝつてゐる看板が風に煽られて鳴るのを聞いてゐる。

風の裡に日が暮れてしまつた。

私は、机の上を照らしたランプの赤い火影を見詰めて、色々なことを考へてゐた。四邊を壓してゐる闇の裡に、冷たく凍えてゐる火のやうに思はれた。風はひゆう／＼と叫びを立てて、空を横切つて、町の家根を走つてゐる音がした。其のどよめきは大濤が、狂つてゐるやうだ。其の中に、壞れもせずに漂つてゐる船を頼りとして坐つてゐる時の心地がした。闇の裡を果てなく飛んでゐる木の葉は、ばら／＼と鳴つて窓に當つた。

一時、風が吹き募つた時、痩せた錆びれた釘にかけられてゐた看板は遂に地上に落ちた音が

カランといつて、風の後の、瞬間の天地の寂寞を破つて聞えた。

此時、階子段を上つて來る足音がした。靜かに破れた襖が開いた。男が顏を出した。暗いランプの火影がよく照らさなかつたが、直に、車屋の要助であることが分つた。私が、まだ、口に言葉を出さうとしてゐるうちに、彼は、はや、私の机の傍に來て坐つた。

『お淋しいだらうと思つて泊りに來やした。』

かういつて、要助は腰から煙草入を拔いて、煙草をスパ／＼と吸つた。彼は、車を引いて通つて來た濱の景色を語つた。海は荒れて眞暗である、濱邊に吹き荒む風は寒かつた、茫漠とした沙原には、人の影を見なかつたといつた。而して、彼は斯樣な日には私が、淋しがつてゐるだらうと思つて、歸ると直に來たといつた。

要助は、火鉢の中の火を掻いて、兩手を暖めながら、世間話をした。近所の機屋の婆さんが、九十で漸く此頃死んだことなど語つた。彼は、夜のまだ全く明け切らないうちに歸つた。外は、風が止んで靜かであつたが、寒さが一層強く身に感ぜられた。下では、誰も起きなかつた。要助は自分で戸の錠を外して出て行つた。其れから四五日經つて、或晩、大分遲くなつてから要助は、泊りに來てくれた。其の僅かしか日の經たぬ間に寒さは遽に募つた。やはり彼は、働きに出るので、暗いうちに歸つて行つた。朝、早く起きて外に出て見ると霜が一面に降りてゐる。屋根の上が眞白であつた。裏の圃には、柿の木の散り殘つた葉が、赤く朝日に輝いてゐた。見渡すと、遠い山々には、既に雪が降つたと見えて、鋸の齒のやうな頭が白くなつてゐる。

其後である。要助が訪ねて來た時には、叔父が、私の實家を賣つたといふことを話した。而して、私の母が買つた、彼の古い大きな屋敷も、今は、皆んな叔父が勝手にしてゐることを、さも悔しさうに物語つた。彼の古い、大きな屋敷には、私の母が、成たけ好い人をと探ねて貸したのであるが、叔父は、今迄の借りてゐた人を追ひ出して、自分が知つてゐる人を入れたこと、今度の借家人は、どうせ叔父の知つてゐる者である限りは、山師でなからうかなどといふことを語つた。

而して最後に、要助は、

『まあ、坊ちやんは、大きくなるまで馬鹿になつてゐないと、叔父さんが學資を出してくれませんから……』

と、いつて何時になく、涙聲になつた。

私は、もう十五になつてゐるものを、彼が、坊ちやんといつたのがをかしかつたが、母のゐる時分から、町の知つた人々は私を坊ちやんと呼んでゐた。

其時、私は、家にあつた——よく母が其の前に坐つてゐた——簞笥は、どうなつたらう……と要助に聞いて見たが、

『さあ、どうなりましたか……』と、いつて當なく考へ込んだので、要助にも、家の道具の行方などは分らなかつたものと見える。

また、彼の古い大きな屋敷にも、忘れ難い思ひ出があつた。

九

私は、頭の大きな、小木に連れられて、よく其の屋敷に遊びに行つたことがある。家の横手に七八本ある栗の木の葉が、忙しげに銀のスプーンを閃かすやうに風に戰いでゐる。しつとりと草の葉の伸びたのが、日光を浴びて油を流した如く蒸れてゐる。赤い、ダーリヤの花が垣根の傍に咲いて、重さうな瓣を支へた莖は垂れてゐる。丈の高い、南洋の島を思はせるやうなも

ろこし畑を分けて行くと、足許にある紫蘇の葉の紫色が目を刺戟して、高い匂ひが、鼻に浸みた。小木は、自分の前になつて歩いて行く。

其れは小さな、瀟洒した室である。栗の木の蔭になつてゐる、實際に二人は腰をかけた。床の間には、青い石の中にはまつた時計がキチキチ鳴つてゐた。風が栗の木を渡るたびに、家根の上に繁つた木の梢が開いて日光がさら／＼と、青苔の生えてゐる地面の上を這つた。小木は黙つてゐる。私は、また床の間の違ひ棚の上に置かれた青い石にはまつた時計を見ると、時計の金線がどんよりと光つて、室の内は水の中のやうに沈靜である。小木は、此時奥の間から、昔の錦絵を持つて來た。二人は、頭を並べて綴られたのを初めから順序に見て行つた。中には、額に赤い筋の入つた役者の似顔や、華やかな長い着物をだらしなく被てゐる花魁や、其他に長い鼈甲の櫛を差してゐる女、また大きな口を結んで、白眼を出して睨んでゐる男の顔がいくらもあつた。

私は、日が暮れる時分に、小木の家から歸つた。其の當座は、あの青い時計や、紅いダーリヤの花が目に殘つてゐた。其れに、も一つ、不思議に記憶に殘つてゐるのは、黄色な草花に止つてゐた黒の翼に朱の斑點の附いてゐた大きな蝶であつた。

私は、小木が、何時も大きな頭を日に照らして、片手に白い日避の布の被つた帽子を持つてぶらり／＼と道の上を左右に體が搖れるやうに歩いて、學校から歸つて來る姿を見ると、私は、あの、紅い爛れたやうなダーリヤの花が咲いて、黄色な花に黒い蝶の止つてゐた畑の奥にある、あの青い石にはひつた時計の置いてある室で、彼は、毎日、友達もないから、獨りで、默つて、昔の錦絵を見てゐるのだらうと思つた。

栗の木の蔭の、ほんのり暗い、靜かな、青い時計の置いてある室の中で、眞夏の晝間のうす緑色の光線の中で、昔の錦絵を見たのが、私には、時々思ひ出されて、厭な夢に魘されるやうな心地になつた。

雪が三尺も降り積つてゐた。一月も末のことである。

私は、家の戸口に立つて、外を見てゐた。晝過ぎまで降つてゐた雪は、暫らく止んで、人が黒い合羽を頭から被つて、彼方の寺の横手から歩いて來た。其の姿がだん／＼近づいて來るかと思ふと、不意に此方からも一人現はれた。やはり、黒い合羽を頭から被つてゐる。互に下を向いて、二つの黒い影は同じい一筋の雪道を知らずに來かゝつてゐる。初めは、眞白な雪の空間が遠ざかつてゐたけれど次第に近づいた。是等の二人は、いつまでも下を向いて自分の足許ばかり見詰めてゐる。さくり、さくり、と下駄の歯が雪を噛んで、また其れを下に殘して行くやうに、ゆるやかな歩調で、互に前から人の來るのも知らずにゐる風に見られた。

私は、眼を其方から離さずに見てゐると、だんだん近づいた二つの黒い影は、遂に白い雪の上の一點で出會つた。暫らく、此の二つの影は、ちやうど合して更に大きな黒點となつたやうに、白い雪の上で一塊となつた。其の間に、烏が寺の林で死んだやうな天地の寂寞を破つて、たゞ一聲啼いた。漸く、また其の大きな黒い一塊は、分れて小さな二つとなつた。――其れは、二人で一歩づつ相讓つて片足を雪の中に入れて、避け合つて通らなければならぬので手間取れたのである。――二つに分れた黒い影は、だん／＼白い雪の上に直線を延長して、距離が遠ざかつた。再び今迄と同じいやうに、反對の方向に、ゆるやかな歩調で、相變らず下駄の歯が

雪を踏んで、さくり、さくり、と互に默つて下を向いて、一つは彼方に、一つは此方に、其の間の距離が遠く、遠ざかつてしまつた。

此の二つの黒い姿は、全く何處にか消え失せて、見渡す限り鈍色に雪の平野に暮れかゝつてゐた。

黒く、悲しんで、おし默つた森は、しんとした日暮方の空氣の中に凝と空模樣を見詰めてゐる。獄吏に押へ附けられた罪人のやうに、頭を伸ばすことを氣兼してゐるやうだ。

烏が、不安に、曇つた空を低く、啼いて過ぎた。

母は、早く戸を閉めた。コト、コトと雨戸が鳴る。風が出たらしい。ランプを點けて、母と二人で、火鉢に向つて凝として、外の風の音を聞いてゐる。今度は、ガタンと激しく戸が鳴つて、ゴーッと大きな吹雪が掠めて去つた。

『今夜は、およしさんは來なさるまい。』……と青い顏の母が、うなだれて言つた。

寂寞とした夜を、おびやかすやうに、絶えず小さな吹雪の音が聞えた。うなだれてゐた母は、

『あの叔父さんも好い人だが、およしさんも好い人だ。』……と、思ひ出したやうに獨り言を言つた。母は、よく此の叔父、叔母の噂をしたものだ。不幸にして、此の叔父、叔母は早く死んでしまつた。この叔父は私の母に對つて、『そんなに金を持つてゐても、死んで行く時にはどうするか……』と、來るたびに母があまり、金のことばかり心配してゐるので、年老つた白髮頭の叔父は、よくかういつて笑つては氣の小さな、私の母をからかふやうに言つたものだ。其の叔父が死ぬと、其の明る年、此の叔母さんも死んでしまつた。別に兒もなかつたので、其の家は永遠に絶えてしまつた。

吹雪は募つた。

外の闇の裡を驅けてゐる吹雪は、三たびゴーーーッと戸を掠めて當つた。此時、コト、コト　コトと戸口の柱で、下駄に喰附いた雪を拂ふ音がした。間もなく、戸を開けて、

『今晩は……』といつて、眞白になつた身を竦めて入れた。

『まあ、およしさん……』といつて、母は慌てて起ち上つた時に、寒い風が吹き込んで、ランプの火が、も少しで消えかゝつた。叔母は、急いで戸を閉めた。

『およしさん、よくこんな暴れに出て來なすつたね……』と、母は重ねて言つた。

叔母は、雪で白くなつた合羽を脱ぎ、頭巾をはづして、足についた雪を拂つて上つた。

母は、火鉢の火を掻き起して、私と、三人は、火鉢を圍んだ。叔母は、

『外はなか／＼寒かつた。』

といつた時、母は、後方を振向いて、

『およしさん、炬燵が暖かになつてゐますが……』といつて、起ちかけたけれど、叔母は、火鉢に手を翳しながら、

『今日は、日が好いといふから……』といつて、其處を立たなかつた。

母も、また座に落着いて、

『ぢや、行つて見ませうか……』といつた。其れから二人は、暫らくしみ／＼と語り合つた。

叔母は、自分の知り合ひから嫁の世話を頼まれてゐた。私の母が小木の屋敷を買つてから、其の古い大きな屋敷を貸した家には、二人の娘があつた。初めは、母が見立てたので、遂に其の姉の一人を嫁に欲しいといふことになつて、今夜、叔母と母とが、先方へ貰ひの相談に行くことになつてゐた。

私は、其の夜のことを記憶してゐる。

母と叔母と二人は、提燈に火を點して、合羽

を着て、頭巾を被つた。また、歸りには雪に積るといふので雪沓を穿いて家を出た。母は、私に向つて、直に歸つて來るからといつた。

私は、一人で、家に留守をして居たのである。二人は、雪の上をぼんやりと照らす提燈の火影をたよりにとぼ〳〵と歩いて、吹き溜つた雪の丘を上つて、吹雪の中に道を辿つた。折々、野を掠めて吹雪の襲ふたびに、二人は、提燈の火を捕られまいと、體で提燈を護つて、合羽の下に入れて、隱さうとした。

いつか二人の歩いて行く、提燈の火影が、彼方の平地に霞んだ時分に、私は、急に心細くなつて泣き出したくなつた。

風が吹き込んで、ランプを消さうとするので、戸を閉めて家に入つたけれど、矢張り、凝として母の歸るのを待つてゐるのが手間取れた。私は、たえず一、二、三、四、と口のうちで數字を讀んで、百になつた時、指を一つ曲げて、更にまた一から始めて、百になつた時、指を一つ曲げて、而して其れが十に達して、兩手の指を殘らず曲げる時分には母が歸つて來るだらうと心待ちに待つて數へてゐたが、終ひには數へくたびれて欠伸が出た。いつしか眠氣が差して、火鉢の前につつぶしたまゝうと〳〵となつた。

ふと、ザー――と鳴つた吹雪の音に眼が醒めると、ランプは暗く、獨りに輝いてゐて、まだ母が歸つて來なかつた。其の夜、遲くなつてから母は歸つて來た。其の時は母は一人であつた。私が、何うしたと叔母のことを聞くと、途で別れて、叔母は町へ出て、歸つたといつた。

後になつて、此の縁談は、都合があつて遂に纏らなかつた。

壽助から、母の生きてゐるうちは、往來しなかつた嫌ひな叔父夫婦が、此の二人の娘がある家の人々を、追ひ出して、彼の古い大きな屋敷を他のものに貸したといふことを聞いた時に、私は、今、其の娘等は、何處に行つて暮らしてゐるだらうかと思つた。而して當座は娘のことばかりが頭に考へられた。是等の二人の娘は、私と親しく遊んだ。母のゐた時分は、よく此の娘の家に行つて、學校の眞似事をした。姉娘が先生となつて、私と妹の方とが生徒になつて算術を教はつたり、習字を教はつたりした。姉は、妹が算術が出來ないといふて、小言をいふことがある。妹は姉に小言をいはれると、時には口應へをしたので終ひには姉が怒つて妹を撲いた。すると妹は、大きな潤ひのある黑眼に、一ぱい涙をためて袂で顏を掩うたことがあつた。

けれど姉は、私に對しては、他の子供と思つて遠慮をしてゐたらしく、滅多に算術が出來ないからといつて、叱つたことがなかつた。

ある時、姉は、二人にお伽話をして聞かせたことがある。

――或る町に貧しい子供があつた、籠の中に林檎を入れて賣りに出たけれど少しも賣れなかつた。歸れば繼母に叱られるだらうと思つて、心配してゐるうちにいつしか夜となつた。すると、月が森の頂きに上つて、水の流れに映つた。子供は世をはかなく思つて、死なう……と、橋の上に佇んで、ふと怨めしさうに籠の中の林檎を覗くと、不思議なことには、其れが悉く黄金の林檎に化つてゐた。ハッと驚いて眼を拭ふと、其れは、涙に月が輝いた光りであつて、籠の中の林檎は、やはり普通の林檎であつた。今度は、いよ〳〵河の中に飛び込みにかゝると、不思議なことには其處に懷かしい死んだ母の姿が現はれた。子供は、餘りのことに胸の裡が騷いで眼を拭ふと、やはり自分の涙の中に浮んだ幻に過ぎなかつた。

子供は遂に意を決して、河の中に飛び込んで

死んだ。――
　この話は、私には、餘りに此の子供が不憫に思はれた。たゞ、何となく、此の話が、此の子供を別に可哀さうとも思はずに平氣に、當然の事實のやうに、作られてゐたからだ。……而して、やはり、其れが忘れられない話となつて、記憶に殘つてゐた。

十

　音なく日が出て、音なく日が沈んだ。幾たびも幾たびも同じいことが自然の裡に繰り返された。或は、風の吹いた曇つた日もあつた。或は、紅く、朝日が森に輝いて、小鳥が樂しさうに囀つた日もあつた。……しかし、冬になると、必ず掟を忘れずに雪が降つて、地上に三尺も四尺も積つた。其の頃になると、どんよりと空は曇つて、一日、日の光りが射さずに、自然はおし默つて眠つた。而して、折々、溜息するやうに、北海の濤の響きが遠くから轉がつて來るやうに、呪として爐の前に坐つてゐる者の耳に聞えた。
　人は死に、物は亡び、村は移り變つた。
　私が、二十六歳の時である。私は、旅で機關車係をしてゐたが、或日、仕事の時、片手を機械に挾まれて痛めた。別に頼る處もない身であるから、一度、故郷に歸つて、母の遺産の幾分なりと、强慾の叔父に請求して見ようと思つた。其の金で、病氣が全快したら、更に再び自分の生活の道を拓かうと決心した。
　月日は流れた。誰人の目にも姿を見せずに去つてしまつた。私は、突然に昔、住み慣れた故郷の道の上に現はれた。すべての物が、目に新しい興味を惹き起した。村は、狹苦しいまでに草木が繁つて、寂然としてゐる。
　寺へ行くと、子供の時分に攀上つたことのある、土手の百日紅の木は枯れて、なかつた。大門には、ペンキ塗の青い夜燈が建てられてゐたが、其れは、近頃の新しいものである。横手に繁つてゐた杉の木は、大半伐り拂はれて、午後の日は斜めに射して、寺の家根が日に照り付けられて白く光つて見えた。
　紅い夕燒のする夕方、他の子供等と共に墓場に行つて、胡桃の木の下で、隱れ鬼をして遊んだ。暗碧の大空に星の閃く時分になるまでも笑つたり、叫んだりして遊んでゐた。なつかしい、昔の記憶が、あり／＼と畫のやうに目の前に、色彩られて展げられた。今は、其の墓場の胡桃の樹も切り拂はれてしまつて、何物もなかつた。たゞ、黑く繁つた笹藪の蔭から、倒れた石塔の頭が出て、日が照り付けてゐる。此頃では、子供も、此の墓場に入らないと見えて、繁つた草を踏み付けた細い道すらついてゐない。人に聞いて見れば、寺の住職も代つたといふことだ。
　叔父は、請負に失敗して自分の住んでゐた屋敷を賣拂つた。私は、村に歸つて初めて其の事を知つた。而して、叔父が暫らく土木から手を引いてゐることも分つた。また、叔父は私の留守の間に私の實家も賣拂つて、其の金も費つてしまつた。而して、私の母が思案した末に買ひ取つた彼の古い大きな屋敷は荒れて、家は、修繕を加へるだけの金がない處から、やはり賣拂つてしまつた。昔から町で古家の賣買を業とする山浦といふ男がある。此の家も此の男の手に渡つたさうで、歸つて見た時には、何時か取り拂はれて、家の跡形もなかつた。たゞ大きな栗の木は昔の儘であつて、眞夏の日光に葉風がぎら／＼と銀の如くに光つてゐた。私を知つてゐた村の人に聞くと、家は、其の時、八十圓とかで賣買せられたさうだ。屋敷も、家の跡も、今ではすべて畑となつて、其處には茄子、南瓜、豆などが植ゑられてある。而して、この

屋敷も多分叔父の借金の抵當に入つてゐると
いふことも聞いたのである。
　叔父は、村の片端の小さな家を借りて住んでゐた。私は、旅から、歸つて來て幾年目で、叔父、叔母を見た。而して、日頃目に遠いてゐた昔の面影と甚だ變つてゐたのに驚いた。急に叔父は老い込んで、頭が白くなつた。性質の勝氣な、骨の肉附のしつかりしてゐた叔母は、見違へる程痩せてしまつた。而して、私に對つて、もう一度好い機會を捕へて、土木で金儲けをせなければならぬと、さもいま／＼しさうに運命を呪うて言つた。
　叔父も、叔母も、以前のやうに私につらく當りはしなかつた。それは、私が、既に二十六にもなつてゐて、腕力のある青年であるのと、是迄も私を苦しめた罪惡に對して、常に目に見えぬ暗い蔭を心の上に感じてゐた。其の蔭は、自然私の顏を見て、自らの頭を低く抑へ付けられるやうに感じた。其ればかりでなく、一たび、運命の波に弄ばれて、暗い人生のどん底を覗いた心持は、どうしても大きな顏をして威張る氣にはなれなかつたのである。
　而して、今、其の上私が負傷して哀れな姿で歸つて來たのを見ては、樂に學校へ入つて、學問をなし遂げ得られる境遇でありながら、學問もさせずに、是迄、私を、かうして逆境に落し入れて苦しましめたのも、やはり自分等が、知つて爲たことであると覺つた時には、多少良心に恥ぢて、惡い顏を以て迎へることが出來なかつた。
　其れで、私が、村に歸つて來てから、幾日となく此の家に泊つてぶら／＼してゐても、面當がましいことも言けずに默つてゐるのである。
　或日、叔母は、ランプの下で、私に、しみじみと語つた。叔父も、この頃は、急に年を老つて全く意氣地がなくなつてしまつた。もう一度盛り返してくれなければならぬのだが、今の元氣では、其れが出來さうにも思はれない。此間も、一つ請負の口があつたのだけれど、保證金にも差支へて駄目であつた。今迄、世話してやつた者も、かうなると、誰も、昔のことを思つてゐるものがない。世の中といふものは、いつどうなるか分らないものだ。といふ意味のことを、さもしみ／＼と同情してくれる者にでも向つて語るやうに打解けて話した。
　私には、叔母が、昔の仕打を忘れて、よくも斯樣なことを私にいはれたものだと疑はれた。で、叔母の顏をしみ／＼と眺めた。しかし、此の女は、私の胸のうちを察するだけの、鋭敏な神經を持たなかつたやうに思はれた。黄色なランプの光りを受けた、窶れた顏の片頰は、私の冷かな目を止めてゐるうちに、回想の緒口を惹き出した。昔、派手な衣服を着て、眞夏の日に、母の葬式から歸る時、私の前に立つて洋傘を翳して歩いた姿が浮んだ。當時の髪の色は黑くて、濕つぽくて、艶々しかつた。今、此の叔母が、其の女とは思はれない。此の弱々しい姿は、何處か死んだ私の母に似て來たやうだ。
　やがて、此の叔母も、世の中を怨み人を疑ひ、終日くよ／＼と鬱いで、ぼんやりと日の暮れるのを待つやうになるのかと思ふと、昔の仕打を思ひ出して、其れを惡んで、今から面と向つて、情なく罵る氣にもなれなかつた。まして、此の女と言葉を合して、何事をも語る氣にはなれず、たゞ默つてゐた。
　其後、叔母は此の年になつて、懷胎してゐることに氣付いた時、一種の淺ましい感じがしたのである。
　叔父は朝早く出て、夜遲くならなければ家に歸らなかつた。毎日、三里も隔つた村の役場に通つて書記をつとめてゐた。夜になると數が出

るので、火鉢の中で青い杉の葉を燻して蚊を室から追ひ出してから、私は、北向きの四疊半に入つて、本箱の中から、外史や、唐詩選などを取り出して、讀んでゐた。昔讀んだ時分の感想が、今一度微かに浮んで、其の時分のことが思ひ出された。文章の面白味と、過去の回想とが、殆んど私をして、夢見る氣持にして、尙ほ、讀み耽つてゐると、家の裏手で釣瓶の軋る音がした。其方に耳を傾けてゐると、ザーと盥に水を明ける音がした。やがて、勝手許に來て、チャブ、チャブ、チャブ、チャブと、足を洗つてゐる音がした。暫らくたつと、膳を出して、茶碗と皿の觸れ合ふ音がした。其間、默つて飯が濟んでしまふと、極めて低い小さな聲で叔父と叔母との話が、杜絕れ、杜絕れに聞える。

私は、人の衰微といふものは、かう淋しく世を憚るやうになるものかといふことに考へ及んで、窓の外から寒ぐやうに差し出てゐる、黑ずんだ萩の葉を見てゐた。夜の色は、靜かに四邊を色どつて、默つてゐる。心は、文章や、回想から遠ざかつて、却つて、不可知の未來を探らうとしてゐる。私は、此の闇の中にほんのりと白く浮き出た、い、い、ききやうの花を見詰めて、何んとなく此の暗默の裡に、吾等を支配してゐる運命といふものが怖ろしくなつた！

朝になると、叔父は、私のまだ起きぬうちに、草鞋を穿いて出かけてしまふ。或日叔父は常のやうに夜遲く歸つて來た。私と叔母と、話してゐる二人の前に、袂から、紙袋に入つたお菓子を取り出して、手を伸して投るやうに置いた。叔母は、勝手許に立つてゐる叔父の顏を見上げて、

『どうしたんですか？』と、直樣疊の上の菓子袋を取り上げて、中を開けながら言つた。

『買つて來たのだ。』と、叔父は自分で、常の如く水を盥に汲んで來て足を洗つて上つた。

夕飯の後に三人は、其の金米糖を茶受にして、茶を飲んだ。叔父は、金米糖を一つ口に入れて、一つ指頭に摘んで弄ぶやうにして見てゐたが、

『この、金米糖には角がない。彼處の菓子屋から、もう買ふまい。』

と、感じたやうに言つた。

私には、いかにも此の叔父の言葉が老い込んだ、向上心も反抗心も失せた人の言葉のやうに感ぜられた。斯樣な考へに耽つて、しみ〴〵と叔父の横顏を見ると、髭が伸びて、毎日、三里の道を往來するので、顏の色が日に焼けて黑くなつてゐる。而して、今では、自分にピストルを差向けて强迫したといふことなど、全然忘れてゐるらしい。鈍つてしまつた頭腦は、過去も未來も感じなくなつた。而して現在の刺戟すら、雲の上の出來事位にしか感じなくなつた。

昔は、車に乘つて、往來した道を、今では、毎晩、其の道の片ほとり、町にさしかゝる前半里の處に、森があつて、祠がある、其の祠に裸蠟燭が點つて、ちら〳〵と森の奧に閃き、村の子供等が鳥居の附近で遊んでゐる時分、其の祠の前をテク〳〵歩いて來て、手を合せて通つた。最初は、疲れた足を引摺つて、途を歩きながら零落を感じて、路傍の祠の神に未來の祝福を祈る氣になつたのであつたが、今では、其れが習慣となつて、手を合せなければ濟まぬやうになつてしまつた。

歸つてからも、叔父は、自分で井戸から水を汲んで、足を洗つて上るのを、さまで不平にも感ぜずにあきらめてゐる。叔母は、叔父の歸つたのも知らずに假寢してゐる時があつた。

叔母は、日の照り付ける眞晝頃、い、い、すもゝの實を捥ぐといつて、瘦せた顏で、大きな腹をして、片手に長い竹竿を引摺りながら、草履で埃をあ

げて、古い大きな屋敷跡の方へと行つた。其の醜い樣子は、恥も、外聞も、構はぬ女のやうに思はれたのである。

いつしか舊暦の盂蘭盆が廻つて來た。夜など、家の外へ出て空を仰ぐと、白い天の川が夢のやうに北流の方へと流れてゐる。何處となく、既に秋らしくなつた。

晝頃は、ひつそりとして畑に繁つたもろこしの葉や、青い豆の葉を見てゐると幼兒の時分のことが思ひ出された。昔も、今も故郷の夏に變りがなかつた。たゞ、あの時分達者であつた母は死んで、もう十年餘りの月日が經つた。斯樣な空想に耽つてゐると、木に止つて啼いてゐる蟬の聲が聞えて、青葉の蔭で、風の吹いて搖れるたびにジ――イ、ジ――イと啼いてゐる蟲の聲がした。此の時、家の前を、さもだるさうに歩いて、町の十か十一の子供が、

『燈籠や――とうろ……

かけとうろや――燈籠……と

と叫きながら、踵の切れた草履を引摺つて、葉の附いた青竹の尖に幾つも紙を淡く、ほんのりと色彩つた盆燈籠を吊して、額際に汗を光らしながら、日中を頭に何にも被らずに眠むさうな聲で家の前を通つて西方に行つた。その聲は、だん／＼裏の長屋の方へと遠ざかつた。私は、その聲のうちに、再び昔の盂蘭盆の日の光景を目に描いた。

夜になると盆踊の太鼓の音が、遠くで、靜かに更けて行く星晴れのした空に響いた。

私は、十三日の夕方、要助と二人で、母の墓に詣で花と水と線香を手向けた。線香の煙は、搖ぎない空氣の中に力なく立上つた。……その煙の中に、首垂れて、青い顏の、打沈んだ母の姿がありありと浮んだ。……要助は手を合せて、幾たびも／＼母の墓を拜んで、死んだ私の母を好い人であつたといつて惜んだ。其時、彼は、また私に向つて、

「お前さんにピストルを向けた叔父さんだ……腹の黒い惡黨です。此村で誰も、よく言ふものがありません。此頃は、うまく正直者をして、化けてゐますが……油斷なされてはいけません……

と、口を極めて叔父夫婦を惡く言つた。而して叔母の何の兒も、誰の兒であるか知れたものでない、去年の冬頃、あの家で賭博の宿をして、町から、いろんな男が出入したことがあるなどと語つた。私には、要助の言葉を悉く信ずる氣にもなれなかつた。

一時、土石を燒き盡した烈しい日の餘炎も、次第に衰へるばかりで、既に天地には、目に見えぬ秋の悲しみが潛んでゐた。私は、倒れた墓石に腰をかけて、空想に耽つてゐると、いつしか西の松林を紅く染めて、夕日が沈んだ。形あるものは音なく亡び、記憶に殘つてゐるものは、うすれ行く畫のやうに、いつか消えてしまふのだ……。

あゝ、紅い故郷の夕燒も、私には、これが見收めであるやうな感じがした。

一月八日

昨夜、哲夫の歸つて來た夢を見た。死の瞬間の苦痛などを考へて、彼を憐ましく思つた。追惜も、悔恨も、悲哀も、苦痛も畢竟自我的のものである。死者には何の與ふるところもないものだと思つた。死は肉體の破滅であるけれども、生命の終極であるか分らない。

（『未明感想小品集』の「最近の日記」より）

紫のダリヤ

一

熟んだ太陽は、巴旦杏のやうな色をしてゐた。其の黄色い夢のやうな光りが、兩側の町家の上に這ひ纏はつてゐる。蒸し暑い、物の腐れるやうな日の風の死んだ午後である。

正助は埃を吸ひながら、其の町を歩いて來た。咽喉は干からびて、眼窩が落ち窪んで、襟許から油のやうな汗の滲み出る、言ふべからざる不快な心持と自らの零落を憫れむ哀愁の情とが縺れ合つて、聲を立てて、此儘地にしがみ附いて泣きたくなつた。

彼は病院を出てから、道を何う歩いて來たか思ひ出せなかつた。たえず頭の中には形の定らない妄想や、不安の濁つた霧が渦を卷いてゐる、しかも眼に見る物の姿までが、其の暗い色で塗り隠されてしまつたからである。けれど、もう彼の歸る家は此町からは遠くなかつた。

ちやうど、この町の縁日と見えて、其の時分から小間物店や、金魚を賣る露店などが路の傍に出てゐた。植木屋は何處からかいろ／＼の草花や、灌木を車に積んで來て、横路に引き入れて置いた。白い花、赤い花、黄色の花が細かい葉や、絲のやうな小枝の繁つた間に咲き亂れて、車の上に在るときながら自然の野趣其儘であるやうな氣持がした。

其等の中から、脊の高い鉢植のダリヤが抜き上つてゐた。大輪の紫色の花は夏の夕日に照らされて、重々しく首垂れて、靜かに呼吸をしてゐる如くに思はれた。

正助は其處を通る時に、これを見て歩いて來たが、一目見た紫色のダリヤの花が、いつまでも眼に映つてゐて取れなかつた。彼はあまり其の花の色が好きと思はないのである。何方かといへば紫が強すぎて、寧ろしつこくて毒々しかつた。けれど、何となく六月の淡々しい白いやはらかな息の立ち籠めたやうな中に秘密があり、風の吹くにつけて、折々草木が靡されるやうに身に觸れ、脈打つてゐる不安が感ぜられるかと思へば、其れで活々としてゐて、刻々に萬物の生長する力が目に見えるやうな、しかも一種病的な暗い氣持のする、この季節の自然から眞に生れたやうな花である。

さう思ふせゐか、この花が忘れられなかつた。思ふ存分に水分を澤山含んでゐるやうな太い莖と、黒ずんでゐる大きい厚味のある葉を持つた、濃紫のダリヤに六月の魂が宿つて吐息してゐるやうに思はれた。而して、ある妖艶な婦人が黒い衣裳をして立つてゐる姿のやうに、すらりとして美しかつた。

其日は庭の喬木の葉にも、草の上にも輝かしい餘彩を投げた、夏の夕暮方をしみ／＼と思はせる澄み切つた、紅い西の空の景は、たま／＼屋根を越えて見えた。而して、彼方の森では蜩が鳴いてゐる。正助は家に歸ると着物を着換へてから縁端に坐つて、つくねんとして暗く考へ込んでゐた。日數を經るにつれて、だん／＼體が衰へて惡い方になつて行く妻のことや、先刻見舞に行つて見て來た病院のことや、それから自分自身のことなどを思つてゐたのであつた。何もかも其等のものは灰色の霧の裡に埋もれてゐる。其れをいつまでも忍耐強く見詰めてゐるといふ樣子であつた。――この時、紅い空

も牛乳ばかりでは飲み難いのですもの、済みませんけれど。』と妻が青腫れのした顔を向けて言つたのであつた。
「あゝ持つて來てやる。それに水飴も……』と彼が答へた。
『水飴は隠して持つて來て下さいよ。茶と角砂糖の他は差入れることが出來ない規則なんですから。けれどあまり體が衰へるやうですから』と妻が歸りかけた正助に言つたのであつた。
彼は其時のことを思ひ出した。而して高くなつた懐の上を手で叩いて見た。肌に附けて水飴の罐が隠されてゐる。着物の前の寛いだ間から其れが見えないやうに、きちんと襟を合せて正助は[illegible]上つた。
其の控室を出て受附所に來て、妻にまで届ける角砂糖の袋を渡してから、自分は札を受け取つて草履を穿きかへ、上被を着るために白い上被の下つてゐる室に來た。傳染病患者に面會するには、これを着てから行かなければならぬ規定である。上被は傳染病の種類によつて別けてあつた。チフテリー、窒扶斯、猩紅熱、虎列剌、といふやうに病名を書いた木札が壁にかゝつてゐた。後から從いて來た看護婦が、「何病患者のお方に面會ですか。」と聞いた。そこに居る看護婦は行く度每に變つてゐるので、いつも初めてのやうに問はれたのである。
『窒扶斯です。』と正助は簡單に答へた。
看護婦は直に窒扶斯の札のかゝつてゐる下の上被を取つて被せてくれた。けれど中には脊の馬鹿に低い女があつて、容易に釘からはづし得ないやうなのがある。其時は、正助は自分で取つて被たこともあつた。頭髪の縮れた、赤ら顔の女は正助が上被の紐釦をかけてゐる間に敏捷に手頸の紐を結んでくれた。
彼は穿き難い草履を爪先にかけて、長い廊下を歩いて行つた。上被を着たために急に體から汗の浸み出るのを覺えた。何の病室も開け放たれてゐた。寝臺の上に横はつて、殆んど枕を並べて、一室每に幾人となく患者が青い顔をして呻いてゐた。何れも幾日かの苦しい疲勞のために肉が落ちて、頬骨が際立つて突立つて見えた。眼は暗く骨の中に落込んで、額の半分は蔭つてゐた。病室の大さは其れ〲に異つてゐた。從つて室によつて收容せられてゐる人數に多いと少いとがある。廊下には各室每に便器が置いてあつた。たえず消毒するらしく板の上が濡れてゐて、石炭酸の臭ひが鼻を突いて來た。彼は其の濡れた上を踏まなければならなかつた。白い衣物を着た怠屈さうな病人の氣味惡い眼附は其處を通る外來の人間を物珍らしさうに眺めた。これ一つだけでも厭惡な感じがせられるのに、汚物罐が置いてあつたり、錆の出た便器の色や、窓際に置いてある赤い昇汞水の入つた器などが病的に神經を焦立たせずに置かなかつた。庭の方を見ると、其處に人間と無關心に立つてゐる木立の葉には、日の光りが流れて、緑色にてら〱と光つてゐた。
正助は廊下を歩いてゐるうちに、ふと重く壓されてゐるやうな厭な感じがした。其れはまたあのうす氣味の惡い室の前を通らなければならぬかと思つたからである。
其の室といふのは、何か特別の患者を容れるためにあるもののやうに、極めて陰氣に見える狹い室であつた。而して、其の室の内の光線は死んでゐるやうに三方は灰色の壁が重苦しく前へと壓し合つてゐるやうに見えた。其處にはただ一人の老人が、大きな寝臺の上に仰向けに臥てゐて、頭を廊下の方に向けてゐた。正助は初めて、妻を見舞ひに來た時から此の室の前を通りかゝつて、この老人を見たのである。其れはあまりに其の室が陰氣である上に、また患者が目に見えて窶れてゐたからであつたか、此の

印象は惡夢のやうに、家へ歸つた後でも眼から取れなかつた。而して、病院へ來るたびに其の室の前を通る時には何うしても忘れることの出來ない、この氣味の惡い室を振り向かなければならぬやうになつた。何うかして、其の室を見ずに行き過ぎてしまはうと思つても、急に其方を向く樣に惹き附ける怖ろしい力が何處かにあつた。

やがて其の室の前にやつて來た。まだ其の室を見ぬ先きから正助の胸はわく／＼とするので自然と怖氣が附いて足が進まぬやうな氣がした。彼は前方を見詰めて、脇見をせずに急いで其の室の前を通り越さうとした。けれどもやはり駄目であつた。

あの老人は何うしたらう。と自分の心の中で問うた者があるやうに、つい室の中を見たのであつた。

其處には冷たい死の影が宿つてゐる如く、寂然として陰氣であつた。而して灰色の壁が空間を塞ぐために、前へと壓し附けてゐるやうだ。

老人は日にまし窶れて來た。益々病氣が重るばかりであるらしく全く髑髏のやうに顏は尖つて、二つの眼が大きな孔となつて落ち込んで、顎は憔けて、頰骨が土手のやうに突立つてゐた。

老人は一昨日見た時から未だに身動きもしなかつたやうに、やはり頭を廊下の方に向けて、痩せた手を胸の上に組んで、仰向けになつて其儘の樣子で臥てゐた。しかし今日は餘程、苦しみが增して來たと見えて呻き聲が聞える。正助は其の呻き聲を聞くと體に刺されるやうな寒氣を催した。其れは、もう直に此の老人は死ぬのだといふ考へが頭に浮んだからであつた。

何か不思議な合圖のやうに、正助が其の室の前を通る時に老人は胸に組んでゐた痩せた片手を力なげに上に擧げた。其れがちやうど白い骨が空間で踊るやうに見えた。正助は自分の神經にこの氣味の惡い何等かの合圖が通ずるやうな氣持がして、急いで走るやうに通り越したのであつた。

三

廊下を中途から左に曲つて、少し行つて突き當りの室が、正助の妻のゐる室であつた。其の室は大きかつた。其處には七八人の患者が收容せられてゐた。彼が其の方に進んで來た時に同じ室にゐる七ツ八ツの女の兒で、屢々行く處から彼の顏を覺えてゐるので、正助の妻を見ると廊下に出て遊んでゐたのが彼、妻に其れと知らせた樣子らしく走つて室の中に驅け込んだ。其の兒は殆んど癒りかけてゐて近日退院するといふのであつた。其のことは、この前何か話のついでに妻から聞いて知つてゐる。

彼は騷々とした、比較的風通しのいゝ室の前に立つた。室の中に臥てゐる人々は、皆な此方に視線を送つた。彼は直に室の片隅の寢臺に橫はつて、やはり此方を見てゐる妻を見附けた。一種のうれしさと悲しさとが胸に混み上げて來た。彼は妻の寢臺の方に歩いて行つた。彼の來たのを見ると臥てゐた妻は少しばかり身を起して迎へるやうな樣子をした。

『何うだ。』と正助は彼女の寢臺に近づいた時言つた。

彼方の窓際の處で、先刻見た女の兒は立つてやはり此方を見守つてゐた。其れにこの室にゐる人々の眼や、耳は、すべて此方を注意してゐると思ふと、自ら打解けて話することも出來なかつた。衝立てを閉けて置かなければ彼等が直に嘲るであらうといふやうな懸念が、正助の心にも、妻の心にもあつた。二人は表面だけでも冷淡に見せなければならなかつた。其れでなくてさへ、この前正助が來た時に、妻から、

『あなたの旦那様はよく見舞ひにいらつしやいますね。』と同じ室にゐる、あの女の人が言つたといふことを聞いたのであつた。そんなことが互ひの心にあるので、一層表面だけでも冷淡に見せるやうな考へになつた。

『やはり同じことです。心臓が悪くなるとかう腫れるもんださうですね。先生はたゞ呢として少しでも動いてはならんとおつしやいますので、今日から小便までかうしてゐてするのです。』と彼女が言つた。青白く蠟のやうに血色のよくない顔が見えた。しかも水氣を含んで堅くなつて表皮が水銀色に光つてゐた。

『起きなくていゝ。それなら體を動かしてはいけない。さあ靜かに臥てゐるがいゝ。』と言つて正助は彼女を普通の様子にさしてやつた。

『牛乳が飲めるか、角砂糖を持つて來たよ。』と彼は言つて、妻の顔を覗き込むやうにした。

ちやうど其の時、看護婦は正助の差し入れた角砂糖の袋を持つて入つて來て、彼女の枕許に置いて行つた。

『どうも有難う御座います。』と彼女は小さな聲で言つた。

看護婦が彼方に行つた時分に、彼は懐から水筒の罎を取り出した。其れは新聞紙で包んであつた。

『あゝそれに水筒を持つて來たから。』と言つて、彼は、其れを彼女の枕許に置かうとした。すると、

『有難う御座います。もう何も食べたくありませんから、折角ですけれど持つて歸つて、あなたがお食り下さい。』と彼女は細い聲で言つた。而して何と心で思つたか急に眼いつぱいに涙ぐんだ。

『だつて、何も食べんでは體が弱るぢやないか。折角持つて來たんだから、此處へ置いて行くから、少しでも食べたがいゝんだよ。』と、正助はたとひ言つても無效のことと知りながら、それでも諭すやうに言つたのである。

『はい。』と彼女は言つたばかりであつた。

かうして暫時二人の話は杜絶れた。正助は二たび妻が舊の如き健康の體となつて家に歸るといふことは、夢想することすら不可能のやうに絶望を感ずると共に心が暗くなつた。而して胸が苦しく塞がつて來た。どうかして氣をまぎらさうと思つて、初めて室の内を見廻した。

何處かに務めてゐる會社員だとかいふ四十前後の男は、此前に來た時には、いろ〳〵傍の人々と話をしてゐて、なか〳〵元氣さうに見えたが、今日は餘程様子が變つたと見えて、頭の上に氷嚢を當て、默り込んで枕に附いてゐた。其れと四五日前に入院した雜貨商の年若い女房は初めて見た時には、これが眞に病人であるかと疑はれた程、血色もよく顔附きも何處となく活々としてゐて、大きくぱつちりと見開いた、黒味勝の眼は魅するやうに強い印象をこの灰色の室の裡に與へてゐた。而して白い上掛の上に露はに出した二本の太い腕は、張り切つてゐるやうに好い色氣に肥えて脂切つてゐた。正助は其の眼の印象や、腕のくつきりと浮ぶ幻を心の鏡に映しながら、其の女の臥てゐる寢臺の方を振向いた。僅か二日ばかりの間に、昔の姿がなくなつた。其れを見ると、今更ながら病魔の力を怖ろしく思はずにはゐられなかつた。女の腕は痩せて、顔の色が蒼白めて來て、天井を無心に見詰めてゐる眼には力がなく、落窪んでゐた。女は何か獨言をしてゐるやうに、口を微かに動かしてゐた。彼は何を言つてゐるのだらうかと思つて、しばらく其の女の方を見守つてゐたのである。すると女は、

『あゝつまらない。』と人に聞えるほどの大きな聲で言つて、此方に寢返りを打つたので、彼は急に眼を閉じてしまつた。

二たび其の眼は窓の方に向いたのである。女の兒は、もはや其處には立つてゐなかつた。この開け放たれた硝子戸のはまつてゐる窓から、病院の庭先が見えた。日の當つてゐる木立の葉が輝いてゐる。而して外側の往來と境をした高い板塀が見えた。窓の敷居の上には誰が持つて來たものか小さな草花を植ゑた鉢が載つてゐた。けれど水をやる者もなかつたと見えて、既に葉が凋れてゐた。

此時、妻が物を言つたので、正助は急に其の方を見て、驚いたやうにすべての空想から心を引戻した。

『來ました女中といふのは、どんな女で御座います。』と彼女が問うたのである。

『どんな女つて、此間こゝへ寄來したぢやないか。お前は見たんだらう。』

『白粉を塗つて、白足袋なんか穿いて來たんぢやありませんか。』と妻が言つた。

『働くことは働く女だよ。』と正助は言つた。白粉を塗つたり、白足袋を穿いて來たことがさう妻の怪しむやうに、惡いこととは思はれなかつた。

『あの人は何ですかつて、此の室の人が後でお聞きになつたから、今度留守に來ました女中ですと言つたら、大へんめかした女中さんだと其の人は言はれました。』と言つて、彼女は强ひて淋しさうな笑を造つた。

『もうあの年にもなるのだから、少しはめかすだらう。』と彼は苦々しく思ひながら言つたのである。

其れきり妻は其の女のことについて默つてしまつた。正助も別に、其他のことについても語ることがなかつたので、默つて其處に立つてゐた。

やがて廊下を軋る小さな車の音が聞えた。其の方を見ると小さな車の附いた臺を押しながら二三人の看護婦が患者に藥罎を配つてゐた。十七八の色の白い看護婦が正助の妻の處にもやつて來て、藥罎を置いて、其れから檢溫器を腋の下に挾まして行つた。

彼はこの美しい、まだ若い看護婦を見ると命がけの危險な職に對して、このやうに忠實に働いてゐることを心の中で感激せずにはゐられなかつた。此時、彼方から別に二三人の看護婦を從へて、三十七八になる金縁の眼鏡をかけた醫者がやはり白い服を着て、手に聽診器を持ちながら患者を一人每に診察して來るのであつた。

これを見ると正助は、醫者が妻を見終るまで待つてゐて、其の樣子を聞いてから歸らうかと思つたが、此の病院の門の閉るのが四時であつて、もはや何となく外の木の葉にうす赤く、弱り行く日の光りが、其の刻限に近づいたのを感ずると、またこの次に醫者に遇つて聞かうと思ひ、彼女の方に向つて、また二三日中に訪ねて來るからと衰弱して瞼を閉ぢてゐる妻の耳許に額を近付けて、優しく言ふと後をも見ずに廊下を歩いて來た。

四

赤銅色に空を焦がした、午後の光りの中を黃色な埃の立つ路を歩いて來た。

彼は道を歩きながら、妻の言つたことなどを思ひ出した。而して、妻が留守になつてから來た、今の下女のことを念頭に置いて、この女に關したいろ〳〵のことを考へ出して、はじめてどんな女であらうかと吟味する心が起つた。

この下女の名は初と言つた。二十三四で、茶釜に眼鼻を附けたやうな大きな顏をして、横に肥え太つてゐる處から、ちやうど家鴨の歩く時の容子にそつくりであつた。

彼はいろ〳〵に考へてから、結局あゝいふ

醜い姿をした女の方が、却つて美しい女よりは心の良い者が多いものであると思つた。
『成程、先日下女を病院へやつた時にはめかして出て行つた。けれど性質の悪い女ではないらしい。』と正助は道を歩きながら、漫然とこんなことを思つて、獨り言をしたのである。
　其の日下女は朝出たのが、正午少し過ぎになつてから歸つて來た。暑い日であつた。彼女が歸つて來た時には、顏の白粉は汗で大半は洗はれてゐた。間の迫つた二つの眼は血走つて鮫の眼の中のやうに赤かつた。女は外の暑い中を急いで來たらしかつた。
『おそくなりました。』と下女は言つて、衣物を被換へて、脱いだ他行きの衣物を窓にかけてから直に晝飯の支度に取りかゝつた。
『病院にどれ程居たね。』と正助は聞いた。
『三十分ばかりゐました。』と下女は答へた。
　それにしては、からも時間を取るものかと思つたが、
『なか〜遠いからな、殊に女の足ではそれ位かゝるだらう。』と彼は氣を換へて快活な調子で言つた。
『お晝が遲くなると濟みませんと思ひまして、これでも急いで來たんですが、まことに申譯御座いません。』と言ひつゝ、彼女は起つたり、坐つたりして、其處にあつた焜爐に炭を入れて火を起しかけた。いよ〜飯を食つたのは一時を過ぎてゐた。
　其夜、彼は机に向つて、ペンを持つて考へ込んでゐた。いろ〜の俗事に苦しめられて、早く書き上げなければならぬものでありながら、日が多くかゝつた。其れに雜念から脱れて、書かうとする詩境に心を潛めるには一行綴るにも相當の沈默と苦心とを缺くことが出來なかつた。しかも其の創作的の氣分は少しの音にも、外界の刺戟にも、時としては無慘に打ち破られるものであつた。此の時、彼は自身の子供の頃のことを材料として、ある不幸な下宿屋の跛の女主人のことを――子供の眼を通して見た――書かうと思つてゐた。
　彼は今北國の鉛色の空の曇つた、寒い冬の日の午後の光景を空想の眼に描いた。而して古い淋しい町にある、其の暗い高窓の附いてゐる下宿屋を思ひ出した。烈しい外の吹雪は反古紙が貼られた窓に力强く吹き當てた。處々破れてゐる間からは、微かに、其の風に煽られて狂ひつゝ舞つてゐる雪の姿が見えた。そして悲しい、罅の入つた草笛を子供が吹き鳴らしてゐるやうな音が其の窓の破れた處で起つた。三十を少し越した位の色の青い女がうす暗い居間で針仕事をしてゐた。彼女は起たうとしても跛であつた。其時、體を半分起して疊の上を泳ぐやうに、何か探すために邊を掻き廻つた。……彼は其の時の光景を遠い記憶を辿つて、あり〜と再現しようとしてゐた。
　しかるに、この瞑想は直に次の間から聞えて來た異樣な呻り聲で破られてしまつた。
『オイ初、お前か其處で呻つてゐるのは。』と彼は振返つて、下女を呼んだのであつた。
　其の呻り聲の聞えたのは玄關の三疊の間である。夜になると下女は其の室で蚊帳を吊つて寢ることになつてゐた。其の間には三尺の押入があつて、彼女の着類を入れた行李や、夜具などが收められてあつた。南の方に低い窓が附いてゐる。晝も夜も其の窓から涼しい風が吹き込んだ。窓の外には隣家と地境をして枳殼の垣根が青々として茂つてゐた。
　下女は其れには答へなかつた。やはり低い聲で呻りつゞけてゐた。正助は机の前から立ち上つて、其の室に行つて見た。女は疊の上に打伏すやうに體を曲げて、兩手で頰を押へてゐた。

何うしたんだ。』と彼は其の傍に立ちながら女を見下した。

『私歯が痛み出しましたので。』と、やはり其の儘の様子をしてゐて答へた。

『前にも、こんなことがあつたのか。』と、何となく説明し難い不快を感じたので、正助は冷淡に言つた。この時、彼は心の中で、これからもたびたびこんなことがあるだらう、其のたびに自分までが煩はされるだらうと思つたことと、何か他の目的があるために、女が虚を言つてゐるのでないかといふやうな氣がしたのは事實である。

『前にも、よくかういふことがありました。』と女は答へた。

『其の時は何うしたんだ。』と彼は問うた。

『醫者へ行つて、藥を差してもらひますと直に痛みが取れました。』

『この近所に齒醫者があるか知らん。』

『あの、下の街の方へ少し行くとありました。いつか其處で藥を差してもらひました。』と女はやはり片手で頬を押へながら、片手で醫者のある方角を指すやうな手附きをした。

『そんなら、あまり遲くならないうちに、醫者へ行つて來るがいゝ。』と正助は命ずるやうに言ひ殘して自分の室に入つて、二たび机の前に來て坐つた。

けれど一たび傷付けられた感興はもとのやうな姿で蘇生つて來なかつた。しばらく落着くことの出來ない心を抱いて、眼を暗い庭の方に向けてゐた。

『行つてまゐります。』と下女は次の間で言つて、やがて家を出て行く氣はひがした。其の後は急に家の中が寂然としてしまつた。

正助は何の氣なしに、縁側の處まで出て、外を眺めた。刻々に更けて行く紺碧の空には、地球の上に棲息する生物から全く忘れられてゐるやうに、弱々しく星が光つてゐた。何となく自分の體の如く、其等の星にも疲勞が絡んでゐる如く思はれた。

其夜、下女は遲くなつてから歸つて來た。正助は彼女の歸つたのを知らなかつた。戸を閉めて、外から入れるやうに戸口の鍵をかけずに彼女の歸らぬ前に寢たのである。枕に頭を付けると魔睡藥にかけられたやうに直に前後不覺な深い眠りに陷つた。其れはこの頃の氣候のせゐもあつた。眠ると惡酒を飲んだ時のやうに四肢が痺れた。而して不快な夢をしつきりなしに見つゞけた。彼は自ら精神が疲勞してゐることを感じたのである。

五

彼は病院を出てから、妻のことを思ひ、また四日ばかり前に下女を病院へやつた、其の日の出來事を思ひ出して、家に歸つて來たのであつた。

もはや黒ずんだ木の間から僅かに消え殘つてゐる、入日の赤い餘炎の見えたのも無くなつてしまつて、昨日と同じやうに空の色が紺碧に變つて星の光りが見えて來た。

婢は醜い顏に濃く白粉を塗つてゐた。彼は其れを見ると不快に思つたので、何とか言ひ聞かさなければならぬやうな氣がしたけれども口に出せなかつた。而して、たゞ凝と彼女の横顏を見て、しばらく此方の室に突立つてゐた。下女は電燈の點いた居間で、もう少し前に來た其の日の夕刊を下をこゞんで見てゐたのである。

正助は先日から苦心して書いてゐた原稿を漸く昨日金に換へることが出來て、拂ひを濟ました殘りを本箱の誰れにも氣付かないやうな舊物の間に入れて隱して置いた。

『あのダリヤでも買つて來よう。』と彼は獨り言をして、急に本箱の方に歩き寄つた。

彼は本箱の下の抽斗の中から、赤い紙の付いてゐるニッケルの鍵を取り出した。而して殆んど無意識であつたが、細心の注意は下女の方に瞳を向けた。けれど彼女は此方のすることに氣付かない樣子であつた。彼は早速本箱の戸棚の錠を落した。而して戸を開けて中から重さうな原書を四五冊取り出した。すると其の跡が切り拔かれたやうに四角の穴が明いた。彼は其の穴の中に手を差し入れて奥の下の方を探ると小さな箱を取り出した。其れは名刺の入つてゐた紙箱であつた。彼は其の箱を開けた。中には銀貨と紙幣が混ぜられて入つてゐた。其れを帶の上に打ち撒けて、音を立てないやうにしながら計算したのである。すべてで金額は十圓に少し缺けてゐた。彼は八圓五十錢を其の箱の中に殘して、三四枚の銀貨と量ばつた銅錢だけを袂から出した皺だらけの紙に包んで、其れをまた袂に入れたが銅錢の重みでだらりと垂れるので、取り出して懐に入れて見たが、拔けて下に落ちるやうな氣がしたので、帶の間に布の端に卷くやうにして挾んだ。而して、箱を舊の場處に隱して、足許にあつた取り出した書物を穴を塞ぐやうに差し入れたのであつた。これなら誰にも分る氣遣ひがないと心のうちで思つて、戸棚の錠をかけて、鍵を抽斗の中に收つた。瞬時其の前を立ち去りかねた、彼の常に惱みある顔が、夕暮方の灰色の光線を反射してゐる硝子の上に映つた。

「一散歩して來るから。」と言ひ遣して、彼は書齋を出た。此時新聞紙をがさつかせてゐた下女は、重さうな體を起しかけたのを横眼で見た。而して急いで下駄を穿いて、彼女が掛ける聲を聞くことを煩はしく思つて、杖を握ると後戸を荒く閉めて外に出てしまつた。

街の通りへ出ると、何處から人がこんなに集つて來るものかと疑はれる程に賑かであつた。無目的に無意味に、彼等は互ひに押し合ひながら同じ方向に歩いて行く者と、同じ方向に歩いて來る者とで機を織るやうに體を摺れ合ひあつてゐた。正助も後方から押されながら、この黒い人の流れの中に身を埋めて泳いでゐた。

兩側には、露店の上に明るく灯が照らしてゐた。あくどく赤い玩具があつた。其の獨樂の色は血のやうに眼にいつまでも殘つた。ふと青白い瓦斯の洩れる活動寫眞館の前に來ると其の夢のやうな光りを浴びて、入口には水色の衣物を被た女が立つてゐた。而して、中では頻りにフィルムが變つてゐることを思はせるやうに寂然としてゐて、たゞ機械の動く音だけが洩れて、小さな硝子窓に紫色の光りが映つてゐた。其の光りを見ると其處に音のする機械が据ゑ付けてあることが分つた。

もう彼是れ九時を過ぎてゐた。此の時分になつてから、活動寫眞を見に入る者もなく、札賣る女も、案内する女も、下足番も、客引く男等も暇であつた。彼等は漸く身に疲勞を感じて、茫然としてやがて終りに近づいたのをそれとなく心に思つて、待つてゐる樣子であつた。

この邊から、植木屋が並んでゐた。カンテラの火は、植木の葉を異樣に彩つてゐた。根こぎになつて、力の弱つた草の葉はだらりと垂れて、其の葉の色が飴色がかつてゐた。しかも水の雫が、木々の葉から、草々の葉から滴つて暗い地面に落ちてゐる。彼は火に點つたやうな、眞紅の瞳に染み入るやうな柘榴の花を見た。また銀のラッパを空に向けてゐるやうな百合の花を見た。

正助は、先刻見た紫のダリヤを探して歩いた。而して遂に其れを見付け出した。其時は夜のことで、晝間見た時には、濃紫に見えたものが、全く黒色に見えたのである。

彼は其れを買つて家に歸るまでには途中幾た

だと知れず、地の上に鉢植のダリヤを下して休んだ。紺碧に更けて行つた空に、天主教の會堂が嚴かに、默つて聳えてゐた。其の前を通る時にも休んだことを覺えてゐる。

微風が忍足をして、沈默の夜の領域を行くたびに、木の葉が闇の裡で動く音はかすかした。物悲しげな蟲の聲が近くに聞えた。其れを聞くと正助はどういふものか直樹が死んだ、夏の晩のことを思ひ出すのであつた。其の蟲の聲は、また病院にゐる衰へた妻の顏を思ひ出す程に哀れを感じさせた。彼は庭に出て、買つて來たダリヤの鉢を地上に置いて、暫く其處に立つて何思ふともなく、耳を遠くに澄した。けれど町のどよめきの響きも此處までは聞えて來なかつた。

彼は縁側に腰を下して、闇に咲く黒い花影を見詰めてゐた。この時、また下女の泣聲を聞いたのであつた。

彼女は例の三疊の南についてゐる窓際に腰をかけて、兩手で、いつものやうに頰を押へてゐた。其の室には電燈が引いてなかつた。座敷に點いてゐる燈火の餘りが此の室まで届いて、うす暗の裡にすべての光景が墨繪のやうに浮き出て見えた。

『また、齒が痛むのか。』と、正助は言つた。

『甚く痛めて來ました。今日は正午時分から痛みはじめましたので、晩の御飯はやつと一ぜんしか頂けませんで……』と下女は答へた。けれど何處となしに、けろりとした物の言ひ振りは正助に同情を少しも惹かなかつた。却つて、彼は冷淡に、

『藥屋へ行つて、何か買つて來て付けて見たらどうだ。』と言つた。而して、容易に醫者へ行けとは言はなかつた。

『無理なら持つてゐます。けれど、付けても效果がありません。』と言つて、帶の間から、小さな罎を取り出した。强さうな藥品の匂ひが、暗い空氣を傳つて來て、正助の鼻に染みた。けれど其れは新しく今買つた品ではなかつた。

女の背後には黒ずんでゐる垣根の葉が、影を星の光りの下に浮き出してゐた。何處ともなく、新樹の香氣は、靑ざめて行く空に淡く湧き返つてゐた。すべて是等の外氣は夏の闌けて行くといふ感じを切ならしめた。

一夜出るといふことは、あまりよくない。痛むなら仕方がないけれど、遲くならないうちに歸らなければいけない。しかし、よくこんなに遲くなつてから行つて、醫者が見てくれるもんだね。』と正助は闇の裡に呪としてゐる女の樣子を見詰めた。

『此家へ來ます前に町の菓子屋に奉公してゐました。其の菓子屋の者は皆な蟲齒なものですから、よく其の醫者にかゝり付けてゐます。其れでどんなに夜遲く行つても戸を叩いて起しさへすれば、藥を差してくださいます。』と言つた。

『おや、醫者へ行つて來るがいゝ。けれど此の前のやうに、あんなに遲くならないやうにして歸つて來なければならん。己は直に休むから、戸締りをよくしてくれい。』と正助は言つた。

やがて女は悄然とした樣子で出て行つた。彼は居間に蚊帳を吊つてから、窓や、縁側の戸を閉めて床に入つた。枕に頭を付けてからいろいろのことを思つたりした。――病院にゐる妻はもう休んだらうか？　苦痛がうすらいで、この蒸し暑い晩に少しは眠ることが出來たであらうか？　其れとも床の上で呻いて苦しんでゐるであらうか？　雜貨商の女房は何うであらう？――隣室に書齋にしてゐる六疊の座敷には、ちやうど机の上に吊された十燭が白熱に光り閃いてゐた。青い蚊帳を透して、机の上に載せたまゝまだ書きかけもせずに置いてある原稿紙の白く光りを反射してゐるのを見た。其の中

に神力が自然と疲れて來て眠りに陷入つてしまつた。途中でふと眼を醒した時には、家の裡が寂然としてゐて、たゞ茶簞笥の上にあつた時計の音が際立つて耳許に響いて來た。十二時を過ぎてゐたらしかつた。彼は時計を見ようともせずに、蚊帳の中で體を起して、玄關の三疊の方を透して見た。けれど下女はまだ歸つて來なかつた。頭の中で誰かされたことに對する憤りの感じがむら〳〵と起つたけれど、頭を枕に付けると其儘、深い眠りの朦朧な谷に惹き入れられてしまつた。

きれ〳〵に、いろ〳〵な夢を見てゐた最中であつた。不意に、彼は女の呼び聲で起された。

「旦那樣、泥棒が入つたんぢやありませんか。」

女は、また同じいことを言つた。

彼は急に床から起き出たもので頭がぐらぐらとした、而して眼はまだ眠氣のために痛かつた。下女は書齋の緣側に立つて、開いてゐた障子に片手をかけて室の中を覗いてゐる。彼女は浴衣の寢衣に赤い細紐を締めてゐた。正助は何となく迂散に思つて、女の顏を見た。お絹に眼鼻を明けたやうな、大きな顏に一つの小粒た眼が引詰つて、鼻柱を挾んだのが、此方を見てゐるのであつた。

『何、泥棒が入つた。』正助は大きな聲で言つた。

彼は書齋に來て見ると本箱の戸棚が開いてゐた。而して原書が下に取り出されて、其の傍に名刺箱の蓋が開けられたまゝ空になつて、疊の上に置いてあつた。其れは自分でなければ、誰もこんなに直には出來ぬやうに、明かに金の隱してある場處を知つてゐる者のした仕事であつた。其れでなければから偶然に、其の金の置いてある場處を探り當てるといふことがないやうに思はれた。彼は忌々しさうにして名刺を取り上げた。

「何か他にも盜んで行かなかつたか知らん。」と言つて、早速居間に來て、蚊帳の上になつてゐる電燈を點した。壁際に置かれてあつた、妻の簞笥は抽斗にも異狀がなくて無難であるらしかつた。

「何うして、お前には泥棒の入つたことが分つたんだ。」と正助は聲を鋭くして、下女の顏を睨んで言つた。

「便所へ參らうとしますと玄關の戸が外してありますから、をかしいと思つて此處まで來ますと本箱の戸が明いて、本が出てゐましたから泥棒が入つたのだと思ひました。」と落着いて下女が答へた。

『何時歸つて來たのだ。』

『十二時、少し過ぎで御座います。』

『そんなに遲くなるまで醫者の處に居たのか。』と正助は彼女の顏から眼を放さなかつた。

『家を出て行きます時に十一時になりかけてゐました。』と下女が言つた。彼女の鯰のやうな眼が益々厭味らしく見えた。

「譃を言へ、なんでそんなになつてゐたものか？」と正助は打ち消しにかゝつた。

『私は出て行く時、時計を見て參りました。』と下女は言つた。正助は實際彼女が出て行つた時に時計を見たのではなかつたから、彼女の言ふことを否定したものゝ、或はさうであつたかも知れぬと信ずる心も起つた。

『今、何時だらう。』と言つて正助は時計の置いてある處へ行つた。丁度二時にならうとしてゐた。

「お前は一時近くに寢て、何うして今頃眼が醒めたのだ。其れでなくとも此頃は眠いのにをかしいぢやないか。」と彼は下女を顧みて詰つた。

彼は心で全く此の女を疑つてゐたから、こんな言葉を意識しながら使ふことに躊躇しなかつた。

『毎晩、今頃起きる癖が付いてゐます。』と下女が辯解した。

『お前は昨夜も起きたか？』

『ハイ起きました。』

『一昨夜も起きたか？』

『一昨夜は、忘れましたが、起きなかつたやうで御座いました。』

正助はたゞこんなことを無意味に聞いたに過ぎなかつた。彼女が譃を言つてゐるか、事實を言つてゐるか、其れを糺すつもりで、さも自分が昨夜も、一昨夜のこともすべて記憶してゐる風に見せかけて、問うたに過ぎなかつた。其の實彼は夜になると死んだもののやうに眠入つてしまつて、たゞ不快な夢を見つゞけてゐるばかりで、其の他のことは何も知らなかつたのであつた。

正助は机の上の灰皿の中に載つてゐたマッチを摺りながら、下女の寢てゐた三疊を抜けて玄關に出た。吊手のたるんだ、色の褪せた蚊帳は痩せ馬の汚れた腹掛けを見るやうであつた。何となく四邊が蒸されるやうに生溫かな晩であつた。玄關にまで來ると、手のマッチは燃え盡してしまつた。表戶を見ると一枚外れてゐた。闇の底から、一皮剝げて仄暗い世界が窺はれるやうな氣がした。眼を凝らして其の方を透して見ると青黑い空の端が出てゐた。其の下に隣りの家根が黑く見えた。尙ほ瞳を凝らしてゐると微かに星の光りが見えた。枳殼の延びた新芽が、其の青黑い空に伸び上つてゐるのが分つた。しかも外にも內にも少しの風がなかつた。この天地が魔睡にかゝつて、生溫い虛空の間に死んだもののやうに轉がつてゐる如く思はれた。

正助はまたマッチを摺つた。火は狹い上り口の灰色の壁の面にたどり附いた。其處には古くなつた二枚の張板が重ねて立てかけてあつた。彼は周圍を見廻した。格子戶は閉つてゐた。

『オイ、この格子戶は閉つてゐたのか、其れともお前が閉めたのか。』と背後について來て立つてゐる下女に聞いた。

『知りません、さうなつてゐたんです。』と彼女は言つた。

正助は板の間の上を見た。けれど土が附いてゐなかつた。彼はまた別にマッチを摺つて額を板の上に近附けて仔細に見た。

『土が附いてゐないな。』と女に問ふやうに言つた。

『さうで御座いますね。附いてゐませんやうですね。』と彼女は眼を下に向けながら言つた。

彼は下駄を穿いて、格子戶を開けて外まで出て見た。夜は更けてゐた。自然は悉く眠つてゐた。黃色い木立の姿が見えた。彼は足許を見廻してゐた。往來に向いて閉つてゐる筈の共同門が何うなつてゐるだらうかと思つた。彼は其の門の處まで行つて見て來ようかと思つたが、ふと胸に浮んだことがあつて其れを試して見ようと刹那に氣を變へた。

―何にこの犯人は直ぐ分る。きつと素人に相違ない。平常こんな事件を數限りなく取扱つてゐる刑事が來たなら、直に捕へてしまふだらう。

オイお初！あの門の處まで行つて見て來い。何か其の邊に落して行かなかつたか？見て來い。と彼は家に入ると、下女を門の處まで見にやつた。こんなことを言つたからとて、たとひ彼女が盜んだにしろ、遽かに恐怖を感じて其の金を持つて來るものでないと思つた。

彼はしばらく、うす暗い玄關に立つて、何うしたらいゝかと思ひ惑つた。出て行つた女の下駄の音が彼方に遠ざかつて行つた。これに耳を澄してゐるばかりで頓に好い考へも浮んで來なかつた。何とか言つて、鋭く女の肺腑を貫く

やうな言葉がないものか、其れとも思ひ切つて女を強迫して自白させるやうなことは出來ないものかと思つた。しかし女が果して盜んだとも斷言し難かつた。もし男でもあつて外から來て女と二人してこの犯罪を遂げて、男が金を持つて行つてしまつたものならば何の役にも立たない。女が果して其れまで自白するか否かは疑問であつた。

　やがて二たび女の歸つて來た足音が近づいた。女は正助の顏を見ると、

『門は閉つてゐます。何も落ちてゐません。』と言つた。

　彼はもはやこの事件に關しては、自分の力では駄目であることを知つた。しかし兎も角も門の處まで行つて見ようと思つた。彼の家は門から最も隔つてゐて奧にあつたので、寢靜まつた他の家の前を通つて行かなければならなかつた。兩側に枳殼の簇つた垣根があつた。彼は空怖ろしい感じがした。賊が此の木蔭に潛んで樣子を見てゐやしないかと思つたからだ。また他の家の前にあつた溝板を踏むと夜中に時ならぬ音を立てたので、もしや人々が眼を醒して自分を却つて賊と思ひはしなからうかなどといふ餘計の心配のために一層神經が焦々させられた。

　門の處まで來ると門が閉つてゐた。しかも鍵までかゝつてゐた。彼はこれを見て賊は塀を乘り越して入つて、乘り越して出て行つたものか、さなくば女が男を出してから、鍵をもとのやうにかけたかの二つであると思つた。彼は家へ入ると直に下女に訊ねた。

『お前は門の鍵に手を觸れなかつたか？』と言つた。

『いゝえ、少しも觸りません。』と彼女は言つた。けれど其れは僞りであつた。先刻、女を門の處まで見にやつた時に、正助は耳を凝らしてゐた。而して、彼女が鍵に觸れたらしい微かな鳴音を聞き取つたのであつた。彼は決してこれを空想に聞いたのだとは思はなかつた。

『譃を言へ、先刻お前は鍵に觸つたぢやないか？　己がたしかに聞いたのだぞ。譃を言ふと承知しないぞ。』と正助は大きな聲で怒鳴つて嚇し附けた。女は急に下を向いた。

『なんで譃などを言ふのだ。お前の身に暗い處がなければ譃を言ふ必要がなからう。』と正助は言つたものの、これだけで女を疑ふといふことが出來ないやうな氣持がした。

『御門の鍵を掛けるのを忘れたやうな氣もいたしましたので、叱られると思つて掛けてまゐりました。』と彼女は小さな聲で言つた。彼はこれを善意にも、また惡意にも解することが出來なかつた。人間の心は複雜であつて、傍から見ると矛盾してゐるやうなことでも、其れが其の人に取つては僞りない眞實を語つてゐるやうな場合も少くなかつたからだ。

六

　正助は衣物を着換へて、直に警察署まで屆けに行かうとした。交番へ行くよりは、本署の方が近く、道順がよかつたからだ。けれど一人でこの眞夜中出て行くのがうす氣味惡かつた。まだ盜賊がこの邊にうろついてゐるやうな氣がしたので、

『オイ、お前もいつしよに己と警察署にまで從いて來い。』と彼女に向つて言つた。彼はかう言つて女の顏色が變るかと注意した。けれど下女は平氣であつた。

『此儘の樣子でよろしう御座いませうか。』と其處に突立つてゐながら、彼女が聞いたのである。

『どうせ警察へ行けば、お前はしらべられるのだぞ。』と正助は帽子を被りながら言つた。杖を握つて暗い外へ出ると、彼は日和下駄を穿き

にかゝつた。

　正助は先になつて歩いた。門を開けて往來に出ると路傍の木は黒くなつて、頭の上から掩ひ被さるやうであつた。風すらなくて、生温い物音一つしない晩であつた。彼は心のうちで後から來る女を憎んだ。何となくこの犯罪は、彼女のしたこととしか思はれなかつた。――どんなことを女は心に思つてゐるだらう。己のすることを愚かしく思つてゐやすまいかなどと考へた。二人は一語も交さずに歩いて來た。途中まで來ると、正助は不意に立止つた。

『オイ、お前は家へ歸つて居れ。また留守に泥棒が入つて物を持つて行くかも知れない。よく留守をして居れ。』と言つて、惡々しく女の姿を見詰めた。けれど其の聲は形の分らない不安を感ずるために戰いてゐた。實際彼の眼にはまだ何者か隱れて内部の樣子を覗つてゐるやうな氣持がして、庭頭の黒ずんだ木立の繁みが浮んだのであつた。

　此時、彼は偶然にも直ぐ近く、路傍にあつた黒いポストに眼が止つた。その刹那、これが人間のやうに見えて胸が騷いだのである。後から自身であまり意氣地がないと思つた。

　女はかう正助に言はれると、來た道を戻つて行つた。其の歩み附きから見ても、この暗い處を怖ろしいとも思つてゐないことが、振返つた正助には感ぜられたのであつた。

　彼は圖太い女だと思ひながら反對に町の方へと急いだ。左手には廣場の中に大きな工場があつた。眞夜中のことで寢靜り返つてゐる。内部に點いてゐる幾つかの電燈が硝子窓を透して、外部に横はつた無限の闇の裡に光りを射してゐた。而して、沼を覗くやうに深みのある夜の空が、此の長方形の建物を見下してゐた。

　彼はこの建物の前を走つて過ぎた。坂の上に來た。其處を驅け下りれば、警察署の前に出るので、眼の下に町の燈火が集つて見えた。其の中に赤いのが混つてゐた。彼は其の火を見當に、其の坂を走つて下りた。

　警察署の門口を入らうとすると、出て來た白い服の巡査に摺れ違つた。巡査はちよつと正助に眼を注いで行き過ぎてしまつた。

　彼は是迄度々此處の前を通つたけれど、かうして其の内に入るのが初めてであつた。冷たい扉の金屬製の把手に手をかけて引くと扉は重々しく音を立てて開いた。彼は身を内側に入れると、机を並べて、事務を執つてゐた二人の警官は鋭い眼附きで彼の樣子を睨んでゐた。彼は其の前に來て一應今夜の事件の顛末を語つた。

　其の話の中途であつた。一人の警官は、『其の賊を捕へたのですか。』と口を入れた。

『賊は分りません。』と正助は直に其の問ひに答へたが、彼等は自分の言つてゐることをよく聞いてゐなかつたことが分つた。其れで、自分はこんなに張り詰めた氣持でゐても、彼等は熱心になつてこれを聞いてくれぬことが分つた。

　こんな事件は其筋の人々にとつては極めて平凡で、また有ふれた事件に相違なかつた。而して犯罪に對して、既に一種の興味の眼をもつて見てゐる者には、單調な平凡な事件よりは異常な、複雜した事件の方が面白かつたに相違なかつた。彼はもし、自分が此處に來て、かうして彼等の前で、

『人殺しがありました。』と叫んだら、彼等は、きつと驚愕に眼を見張つて、

『え、何ッ。』と言つて、直樣起ち上るに異ひない。而して、自分の一言に刺戟されて、全く眠氣を醒すであらうと思つた。

　しばらくしてから、警官の一人が、正助を見て、

『いつたい、盗まれた金は幾何ですか。』と言つた。

『八圓五十錢です。箱の中に入れて置いた全部を持つて行きました。』と彼は答へた。而して明かにさうとは言はなかつたけれど、其れが自分の現在の所有してゐた金の全部であるために困却するといふ意味が、この答への中に含まれてゐた。

　彼等の一人は、其れを手帳に書き留めた。

『直ぐ御一緒に行つて見ませう。』と一人の警官が椅子から起ち上つた。其の警官の顔には睡眠不足のために疲勞した色が見えた。

『まことにすみません。』と彼は挨拶をした。

　警官が先に、正助が後から、二人は共に警察署の扉を開けて外に出た。刹那であつたが、軒燈の火が、警官の白服を赤く染めた。二人は間もなく闇に身を包まれて、默り勝ちに坂を上つた。正助はかうして警官と共に歩くといふことが心を脅へられるやうな苦しさを感じた。

　二人は門を開けて入つた。其の時、警官は振向いて門を見た。而して默つて、先になつて歩いて行つた。二人は家に來た。正助は先になつて玄關から上ると、

『さあどうぞお上り下さい。』と言つた。

　警官は上り框に腰を下して、兩手で片方宛の靴を脫いだ。而して三疊を拔けて書齋に入つて來た。正助は座蒲團を出して、自分は机の前に坐つた。下女は居間の片隅に坐つてゐた。其處には正助の臥てゐた床が敷いてあつて、蚊帳が吊つてあつた。上に點いてゐる電燈の光りで蚊帳の内が透して見ることが出來た。枕の布や、敷布の色が眞白であつた。彼は直に本箱の前へ行つて、警官に向つて、

『金を此處に入れて置きました。』と言つて、先刻、警察署で言つたやうなことを繰り返して、昨夜から今朝にかけて、僅か二三時間の間に起つた出來事を說明した。警官は其の傍に來て、仔細に本箱や、疊の上に取り出してあつた書物と名刺箱の上に眼を晒してゐた。而して首を傾げてゐた。

『全く外から來たものでせうか。』と正助は思つたことを其儘口に出して、疑はしげに聞いたのである。

『よく檢べて見ませう。今の處外から來たものか、或はさうでないか、夜が明けてからもう一度來て、門の處や、戶口を檢分してでなければ何ともいへません。』と言つて、二たび舊の座に歸つて、隱しから手帳と鉛筆とを取り出したのである。

　正助は其の間もたえず下女の樣子を探ることに注意を怠らなかつた。彼女は鉛のやうな眼附きをして平氣で此方の二人の樣子を見守つてゐた。彼は何となく女の小面が憎々しかつた。

『オイ、瓦斯で湯を沸して、お茶を入れて持つて來い。』と正助は女の方を向いて、其處を追ひ立てるやうに言ひ附けた。

『いやおかまひなく。』と警官が言つた。

『此家にゐる人は、誰と誰ですか。』と直に警官は語を次いで短い鉛筆を舌で舐つて、小さな黑い表紙の手帳を片手に取り上げて言つた。

『今、二人限りです。妻が病氣で入院してゐますので、下女と二人限りなんです。』と正助は嚴肅に彼が誤解をしないやうに言つた。

『下女といふのは、あれですか。』と警官は言つて、じろりと白眼で居間の方に視線を送つて、何やら手帳に書き留めた。

『さうです。』と正助は穩かに答へて、自分も徐ろに顏を向けて、彼女の樣子を見ようとした。彼女は宛も此方の話に無關心であるもののやうに、平氣で茶を入れてゐた。二人は彼女の後姿を見たのであつた。

　しばらくすると二人の坐つてゐる處へ、下女が茶を入れて持つて來た。警官は彼女が盆を下

に置いて立去る時に其の樣子を見たのである。

正助はかうしてゐる間にもこの事件を離れて、他のことを考へた。たとへば夜もかうして勤務しなければならぬ是等の警官等はどんな生活をしてゐるだらう。果して、この辛い任務と勞力に酬ゆるに足る程の月給を取つてゐようか、彼等が眠らずに警護する人々の中には不義の快樂に耽つて、この夜を送つてゐる者もある。眞正な勞力を要せずして、不正な手段と欺瞞によつて富を造り安らかに眠つてゐるものもある。其等の矛盾した、且つ不公平な此の社會に於ける惡むべき事實を考へて、この四六時中の勤務に疲れた警官の樣子を見守つた時にいろいろの疑問と生存に關する不安とが心の中に起らざるを得なかつた。警官の日に燒けた頰には幾日も剃刀を入れないと見えて小髭が延びてゐた。眼の白味には黄色な雲がかゝつてゐて、眼球は心持ち骨の中に落ち込んでゐた。而して、燈火に顏を向けるたびに視神經は衰弱して、眩しい刺戟に堪へ得ざる如く懶げに瞬きをつゞけた。正助は最後に警官の胡坐を組んだ足の靴下に眼を止めたが、其の汚れて眞の地肌の何色であるか分らないやうな靴下は兩方とも二三ケ處に穴が明いてゐた。これを見て、彼は略ぼ其の人の生活を察することが出來るやうな感じがした。而して、其の靴下に眼を止めてゐたが、あまり見るのは惡いといふやうな氣が差すと正助は横を向いてしまつた。

此時警官は手帳を隱しの中に收めて座を起ち上つた。

「これから下女を連れて行きますから……」と正助を見下して言つた。

正助は胸が穩かでなかつた。彼は下女がどんな態度をするだらうと其の際まで見屆けようと注意を凝らしてゐた。

『お前は、ちよつと來い。』と警官は座敷に立ちながら居間にゐる下女に向つて、顎で招く樣子をした。

「私ですか。」と女は鉛のやうな眼附きを凝らして此方を見詰めた。而して、肩にかけてゐた襷を脫して其れを疊の上に置くと立つて此方の室に入つて來た。警官は默つて玄關に出て框に腰を下して靴を穿いた。女も其處にあつた日和下駄をはいて後から從いて出ようとした。正助は其處に立つて、二人を見送つた。

「ちよつと行つて參ります。」と言つて、女は正助を振返つて頭を下げた。靴の音と、日和下駄の音とが次第に遠ざかつて行つた。彼は茫然としてゐた。女の態度について、自分の經驗だけでは何とも批判することが出來なかつた。たゞどんな心持で彼女は自分に向つて、あゝ落着いた態度で言つたらうと思つた。

家の中にたゞ一人となつてから彼は急に淋しく感じた。二度と眠ることが出來なかつた。夏の夜は明け易かつた。程なくすると、ほの〴〵と戶の隙間が白んで來た。彼は緣側に出て雨戶を繰つた。まだ近所は靜かであつた。庭の木立には白い靄がかゝつてゐた。遠くで鷄の啼く聲などが聞えた。彼は獨り座敷の眞中に坐つて、まだうす暗い外の庭頭を見ながら、日の上るのを待つてゐた。次第に靄は樹を離れて動き始めた。其の內に近所でも雨戶を繰り始める音が聞えた。彼は三疊に來て下女の蒲團と蚊帳とを隅の處に固めて、其の室の窓を開けた。東の空が色づいて、快活な紅の中に金色の光りが洩れてゐた。彼はまさに堂々として上らうとする日の光りを見るに堪へなかつた。其れ程、眼が疲れて、頭の中がぼんやりとしてゐた。日頃の精神の過勞してゐる上に夜、滿足に眠らなかつたといふことが直ちに、殊に此頃の體には影響したのであつた。

正助は近所の小さな菓子屋からパンを買つ

て來て、瓦斯の火で湯を沸かして、其れで朝飯を濟ませようとしてゐた。彼は青い火の燃えて居るのを見ながら、食卓の上に頬杖をついてパンを嚙つてゐた。今日も昨日にまして暑くなりさうな日であつた。何となく四邊の日の光りが赤味を帶んでゐた。

其時玄關に訪れた人の聲が聞えた。正助は直にパンを下に置いて出て見たのである。其れは四十餘りになつた、警察署の三字が襟に縫つてある紺色の上衣を着て、同じやうな色の股引をはいた、警察署の小使であつた。正助を見ると頭を下げて、丁寧な物の言ひ方で、警察から承つて來たのだと前置きをして、

『先刻の女の人は、都合によつて長く留めて置くかも知れないから、其れで押入の中に洗濯をした單衣と腰卷が入つてゐるから、其れだけ渡してくれるやうにといひ附けられて來ました。』

と言つた。

彼はしばらくの間ためらつた。けれどさう言ひ附かつて來たものを出して渡してやらぬ譯にも行かぬと思つた。其處で彼は押入を開けた。行李の上に、いろ〳〵の物が入つてゐるらしい風呂敷包みが乘つてゐた。この包みに目を止めて、

『この風呂敷包みの中か知らん。』と大きな聲で誰れに向つて聞くとも附かず、また獨り言するとも附かずに言つた。

『なんでも風呂敷包みの中に入つてゐるとかいひました。』と小使は玄關に立つてゐて言つた。

これに力を得て、正助は其の包みを取り出して、疊の上に下して、結びを解いて擴げて見たのである。洗濯した白つぽい單衣があつた。またいろ〳〵細かな物が重ねてある下に赤い色の腰卷が見えた。其れを引き出す時に、彼は女から侮辱せられたやうな氣持がして、忌々しかつた。手荒く其れを引き出すと、白紙に包んだものが一緖に出て來た。正助はもしや盜んだ金でも隱して置いたのでないかと、其の紙を開いて見ると黑硝子のはまつた、鍍金緣の眼鏡が出て來た。正助はこれを見ると、てつきり男の持つてゐた物だと思つた。彼女が情夫からもらつた品で、記念品として持つてゐるものだと思ふと、不思議に胸が躍つたのであつた。彼は二品だけを小使に渡した。小使は歸つて行つた。其の後で、其處に出てゐる物を二たび風呂敷に包んで、舊の處に入れたのである。

此時勝手元で湯の煮え沸つて、瓦斯の火に吹きかゝる音が聞えた。彼は其の方に走つて行つた。其れから三十分ばかり經つと、夜、自分と共に警察署から來て、下女を連れて行つた警官がやつて來た。正助は其夜來てくれたことに對して禮を言つた。

『何、あなたが騷いだ時分には、まだ賊は家のぐるりにゐたかも知れない。』と警官は言つた。靴の踵に佩劍の尖が觸れるたびに鳴つた。

『さうですか知らん。』と正助は答へた。

『家の中を探して見ましたか。』と警官が聞いた。

『いゝえまだ探して見ません。』と正助は言つた。警官は玄關の雨戸に觸れて見た。まだ昨夜からの儘になつて、一方の戸は外されて柱に立てかけてあつた。警官は其れを取つて、自分で敷居にはめて見た。極めて容易に其の戸は立て外しが出來るのであつた。

『直ぐ外れるのですな。』と言つて、警官はついでに戸をば袋戸の内に繰り込んでくれた。それから格子を開けて、上り框に來て板の上に足跡が附いてゐるかどうかと見詰めた。けれど土一つ附いてゐなかつた。警官は靴を脫いで家に上つた。正助は明るい光線の中で、二たび此人の顏と靴下とを見ることが出來た。けれど其の日に燒けた黑い顏は、積日の疲勞のために

衰へてゐる色が見えるとはいへ、まだ現實に打當つて直にひるむらしい處がなかつた。今にでも賊が躍りかゝつて來たなら、これと組打する勇氣が潛んでゐた。これに較べると、自分は昨夜はこの人を憐んだものにも似ず、今朝は全く氣力の萎れてしまつたことを怪しまずにはゐられなかつた。

警官は勝手元に來て緣板をめくつて見た。また、柱にかゝつてゐる屑籠を下して、其の中に手を差し入れて中を探つて見た。

『紙幣ばかりでしたか。』と警官は言つて、固められた紙などを解してゐた。

『いゝえ五十錢銀貨が三枚ありました。』と正助は答へて、彼もまた膳棚の隅などを覗いて見た。

『よくかういふ處に盜んでから隱して置くものです。本人についても檢べますが、あなたも家の周圍などを探して御覽なさい。』と言つて、警官は此處を切り上げて、出て行かうとした。正助は其れを呼び止めるやうに聲をかけた。

『先刻、單衣と腰卷を小使をお寄來しになつたので持たしてやりました、其の時分、中から男の眼鏡が出ましたが、何んだかをかしいと思ひました。』と彼は言つた。

『その包みを見ませう。』と警官は言つた。

彼は三疊の室に警官を連れて來て、押入の中から例の風呂敷包みを出した。警官は身を屈めて其の包みを開けると、中の物を搔き廻して見てゐた。その傍にゐた正助は、一つの紙包みを指さして、

『これですが。』と言つた。

警官は紙を開いて、眼鏡を撮み出した。而して其れを眺めてゐた。正助の眼には、緣日あたりの露店に出てゐる、安つぽい品のやうに思はれた。

『男の持つてゐたもんではありませんでせうか。』と彼は言つた。

『彼奴こんなものを持つてゐるんですな、しかしこれは男の持つてゐたものではありますまい。』と警官は尙ほ其れを見ながら言つた。

『しかし、黑い眼鏡など……』と正助は其の言葉が信じられなかつた。

『何に、近頃の女は生意氣ですからな、眼鏡位かけませうよ。』と言つて、警官は其れをもとの通りに紙に包んだ。

『別に、怪しむべきものもありませんな。』と言つて、風呂敷を結んだ。正助には、この警官の言葉は多少意外な氣がしたが、自ら專門家の見る所は異つてゐると思つた。からして警官は歸つて行つた。

正助は庭頭に出て、昨夜買つて來た、紫のダリヤを見た。いろ〳〵のことがこのあくどい色をした花に對して考へられた。この花を欲しいと思つたばかりに本箱の中から金を出して持つて出た。それでなければ彼女に金の隱してある場處が分らう筈がなかつたのだと思つた。

一日見た時には、いかにもこの紫の花が魅するやうに美しかつた。けれど買つて來てからして見るとあくどい色で、だん〳〵厭になつて來た。彼はすべての女といふものがやはりさうであると、つく〴〵此頃は思つてゐる。哀れな女であるが、自分は妻のために苦勞をしてゐる。下女ですら、傍にゐると女の醜さといふものが見えて、しみ〴〵と心憎く思はれるのであつた。けれど、やはり女の手を借りなくては、何にかにつけて困ることが多かつた。

正午少し前であつた。和服を着た肥つた刑事が、爼のやうな大きな下駄をはいて扇子を使ひながら入つて來た。

刑事は本箱の前に來て、正助の說明を聞きながら、其處に立つて左右を見てゐたが、

『外から入つたのでせう。』と言つて、やはり扇

子を忙しげに動かしてゐた。
　正助はどういふものか女が盜んだとしか他に考へられなかつたので、其の言葉が不滿でならなかつた。單に不滿に思はれたばかりでなく、其れでは自分の疑ひが解けなかつた。さう思ふと自然と彼の言葉使ひまでが急しくなつた。
『どうして、直に金のある處が分つたものでせう？』と問ひ詰めるやうな言ひ振りで聞いた。
『書物を盜むつもりであつたのが、意外に金があつたので其れを持つて行つたのでせう。大抵八圓足らずもあれば其れだけで行くものです。』と言つて、刑事は彼の言ふことを取り上げなかつた。
　正助は心のうちでいろ／＼の疑ひが起つた。たとへば、刑事が書物を盜むために外から入つたといふけれど、書物のやうな量になるもので、其の割合に金にならぬものを果して賊が目を附けるであらうか。また、もし賊が品物に目を附けて入つたとしたならば、机の上に萬年筆が載つてゐた。其の萬年筆は自分の生活には不釣合な程贅澤な品で金の飾りが附いてゐる。しかも電燈の點いてゐる下に置いてあつて燦爛として光つてゐた。賊はなぜこの輕い貴重品に眼を附けなかつたらう。其樣な疑問がむら／＼と胸の裡にこみ上げて來たが、畢竟このことを言つて見たところが、刑事があゝいふ上は役に立たないと思ひ返して默つてしまつた。
　其れから刑事は家の周圍を歩き廻つた。庭頭に來た時、新らしい足跡を見出して、
『この足跡は？』と正助を振向いた。けれど、其れは昨夜、自分がダリヤの重い鉢を下に置く時に足に力を入れて、地面を踏み躙つたものであると知れた。
　庭の木戸口から出て、二人は三疊の窓の下に來た時に、刑事は急に歩みを止めて、幾つとなく破れた障子の穴に眼を注いだのである。大きな眼球は、異樣に光つて鋭く見えた。
『この穴は何時明けました。』と刑事は疊んだ扇子で、其の中から指頭で明けたらしい一つの穴を指さして言つた。けれど、正助には覺えがなかつた。彼も其の穴に眼を注いで、
『下女が明けましたか知りませんが、私には覺えがありません。』と答へた。
『いや、これは外から明けた穴です。昨日か一昨日のもので、極く新らしいものです。』と言つて、刑事はまた扇子を擴げて、大きな懷に風を入れてゐた。
　見終つてから刑事は歸つてしまつた。烈しい暑さであつた。午後の一時頃には、庭頭の地面は白く乾いて、黑い鉢に植つたダリヤの花も、葉も、水氣が涸れてだらりと頭を下げてゐたのである。
　彼はこの炎天の中を歩いて、妻の晴着を抱へて、豫て顏を知り合つた、町のある質屋まで行かなければならなかつた。其れは妻の見舞ひに病院へ行くにも、また其の日の自分の生活にも、直ぐに金が無くて困つたからである。彼はこの暑さのために、また精神の疲れてゐるために、急に筆を取つて、何も書くことが出來なかつた。
　風もない、いきれる暑い日であつたけれど、其れでも質屋の紺の暖簾をくゞつて中に入ると身がひやりとした。無意識に羞恥心が萌したのと、日當りから、急に庇深く入つたせゐもあつた。
　正助の眼は速かに帳場に控へてゐた冷淡な青白い顏をした男に止つた。其處には質の流れが積んであつた。細引きが幾筋となく天井から下つてゐた。男は正助の樣子を一眼で讀んだやうな素振りをした。而して溫か味も、濕ひ氣もない世辭を言つて、後は口許で私かにせゝら

笑ひをした。彼はこの男を見て癪でならなかつた。けれど、物靜かに、持つて來た品物を手渡した。

其の品は一度此店に來たことのある品であつた。彼女には、數もない上に且つ愛着してゐる品であつたために、二三月前のこと金の入つた時分に受戻したものであつた。今度も妻に斷りもなくこの品を持つて來たのは、他に目ぼしい物もないのと、一つは金額の分つてゐる爲めであつた。

男は、風呂敷から、着物を出して、一應其れを眺めてゐたが、

『十一圓でおよろしければ。』と言つた。

『だつて此の前には十三圓貸したぢやないか。』と正助はあまり足許を見た言ひ方なのに激昂して言つた。

『それよりは何うも出せません。其れでおよろしければ。』と言つて、男は例のせゝら笑ひをした。

『あれから一度も着た譯ではなし、どうしてさう前と値段が異ふのだ。』と正助は息卷いて言つた。急に熱くなつて、額際から汗の滴るのを覺えた。

『其れでおよろしければ。』と言つて、男は他のことは言はずに口許でやはりせゝら笑つてゐた。足許を見て言ふことだとは知れるのだが、仕方なく正助は其れで承知をしなければならなかつた。

彼は金を掴んで外に出ると一層胸の中で憤りが募つた。おゝ雇主と雇はれ人との關係でなくてさへ是れである。眞に憎むべき者、呪ふべきものは金を持つてゐる奴等だ。質屋などは考へて見れば高利貸以上の非道を敢てするものだ。彼等は物品の保證を――しかも踏み倒されるだけ踏み倒した價で見積つて――取つて置いて、其の上利子を貪る輩である。正助は道を歩きながら、つく〴〵と高利貸の老婆を殺したラスコリニコフの心持に同感したのである。『世の中にこれあるがために人々が苦しむのだ。』といつた人殺しをした時の言ひ分を至極道理であると考へた。

彼は奇怪な幻想に囚へられて、知らず識らずに道を歩いて、いつしか出る坂の中途まで上つて來ると偶然口入宿の主人に出遇つた。其の男の樣子を見ると、彼等の苦しさうな生活が察せられた。年は五十を越えてゐるらしく、額際には皺が寄つて、汚れた頭髮にも、顎から口許にかけて生えた短い髭にも白い毛が澤山に混つてゐた。日に焼けた胸からは汗が光りつゝ流れてゐて、痩せてゐるので肋骨が數へられるやうに皮の下に浮き出てゐた。

正助は男を呼び止めると、昨夜の出來事などを話してから、

『まだ誰が盗んだか分らないことだ。けれど夜出ると遅くまで歸らないのは事實だ。兎に角、あの女を出すから、他の女を世話してもらひたい。』と言つた。

男は片手で扇子を翳して、頭上から射しつける日の光りを遮つて、しよぼ〳〵した眼を眩しさうに細めながら話を聞いてゐた。正助が言ひ終ると、

『それはお氣の毒なことで御座います。よくさういふのがありますので、私共でも顔だけ見たのでは、正直さうな女だと思つたのを上げるより仕方がありませんので。承知いたしました。かはりを探して見ませう。』と言つた。男の着てゐる木綿縞の單衣は水で濡れたやうに汗が黑く染み出てゐる。正助は男の痛々しさうに浮き出た肋骨や、水落の處で忙しさうに鼓動をつゞけてゐる、其れに目を止めてゐた。而して、いつかは此の男のこの鼓動も止る日があるのだといふやうなことを空想してゐた。

彼はこの男の身にも同情せざるを得なかつた。

『この暑さでは、あなた方の商賣も骨折りですね。』と言つて、正助は强ひて笑顔をして見せた。

『かなひませんですよ。からして歩きましても、無駄骨になることが多いのですから…』と男は答へた。其れは雇主と雇はれ人の間で妥協が直ぐには成立たぬことを言つたらしい。而して折角口のかゝつた其の女も二度目には同じ宿に來ずに他へ行くものが多いといふことも正助は聞いて知つてゐた。

『さうでせうね。』と彼は心から、此の男の言ふことに同情した。

『至急探しますから。』と言つて、男は挨拶をして行き過ぎにかゝつた。正助は懷を探つたが、急いで男に追ひ附いて、五十錢の銀貨を男の手に握らした。男は其れを返さうとするのを無理に取らして置いて、

『何分にも賴みます。』と言ひ殘して、彼は二たび急ぎ足に坂を上つた。彼は歩きながら、其の男の答へを思ひ浮べた。少しばかりの心附けのために、男が正直な下女を探して連れて來るなどとは考へてなかつた。彼は瘦せた男の肋骨の浮き出てゐるあたりを見て、急にたゞ何となしに憐憫の情が起つて、彼に金をやる氣になつたのであつた。

彼は家に歸ると汗と埃に汚れた衣物を洗濯したものに着換へた。其れから庭に出て、暑さのためか凋れたダリヤの根に水をかけてやつた。漸く地上に木の影が出來て、日が傾いたのである。この時分になつて、其の日の明方に警官に連れられて行つた下女の初がぶらりとして歸つて來た。

『只今、歸りました。』と彼女は正助の居る處に來て頭を下げた。彼はじろりと女の樣子を見たぎりで何も言はなかつた。夕飯を食べる時分に、彼女に向つて晝飯は何うしたかと聞いた。彼女は警察署でくれたのを食べたと平氣で答へた。彼は其の日の中に此の女に暇をやつてしまはうかと思つたけれど、もはや日の暮れ方にもなつてゐたので、明日の朝にしようと考へ直した。

其の一夜、彼女と同じい家に寢なければならぬといふことが、何となく氣がかりでならなかつた。更に彼女が警察署から免されて歸つて來たといふことが、畢竟此の社會生活に於いて何者も賴むに足らぬといふやうな氣がして、不快でならなかつた。明る朝、飯を食べてしまつてから、正助は都合があつて、暇をやるからと下女に言ひ渡した。彼女はこのことを豫期してゐたもののやうに見受けられた。

彼は其の月の給金を紙に載せて下女の前に出した。すると彼女は其れを押し戾すやうにして、

『金を盜まれなさつて御不自由のところ、これは要りません。』と言つた。正助には、女の言ふことが何となく不自然に聞えたけれど、やはり眞に同情して言つたものだか、他人の心理といふものが探り難かつた。

『金を盜まれたことと、これとは別なものだ。やるべきものをやるのだから。』と正助は言つた。

『ぢや頂いて行きます。』と言つて、女は金を頂いて懷の中に收めた。そして永遠に此の家から、何處へとなく去つてしまつた。斯くして其の女は去つてしまつたけれど、其の後でも彼はあの鯰のやうな眼附きを思ひ出すと、言ふべからざる嫌惡の感じに心を魘された。

七

明る日のやはり正午過ぎに、彼は殆んどこの

一月ばかりの間といふものは、隔日のやうに往來した、病院へ行く道の上を歩いてゐた。この道は町の端となつてゐるので、其の兩側には汚らしい古道具屋が二三軒もあり、また青物屋や、漬物屋なども處々に狹い小さな長屋の建ち並んだ中に混つてゐた。彼は下を向いて、たえず何等か頭の中で考へながら其の路の上を汗と埃に塗れて歩いた。しかし彼は何時からともなく、其の古道具屋の店にはどんな物が置いてあるかといふことも、また青物屋の店にはどんな物が並べられてあるかといふことも覺えて知つてゐた。たとへば一軒の古道具屋の店の臺の上には一枚の黄色味を帶んだ金屬製の四角な皿があつた。其れには繪具で彩つて、支那の女の繪が描かれてゐた。女は髮を揚巻に結つて赤い帶をだらりと前で垂れて、黑い小さな靴を穿いて、椅子に腰をかけてゐる。けれど大分其の繪具が剝げて、下から光つた金の地肌が出てゐた。ちやうど釘尖か何かで引掻いたやうに小さな傷が無數についてゐるやうであつた。彼はいつからとなく、其の店の前を通る時はきつと眼を其の皿の置いてある處に止めて過ぎた。而して、まだ一度も其の皿を手に持つて見たことがなかつたけれど、輕いといふことも略ぼ分つてゐた。彼は其の皿を欲しいと思つたことがない。けれど其の皿を見ずに其の店の前を通ると、一日病院へ行つて來た氣持がしなかつたのである。

今日も彼は其の皿を見て店の前を過ぎた。其の置場にも、皿の位置にも變りがなかつた。彼は青物店の前を通る時に、其處の品物に目を附けた。其れは一度林檎を其の店で買つたことがある。けれど其の林檎は水氣に乏しく、萎びてゐて、日數の經つたものであつた。其上に他で買ふよりも價が高かつた。彼は其時心で不快に思ひながら、店に並べてある他の品物を見るとやはり一樣に水氣の切れた、萎びたものばかりであつたので、この店は賣れないので、自然こんな風なのであらうと思つたことがあつたが、此日も見ると、まだ其の時分の賣れ殘りの林檎が既に黑く變色したのが五ツ六ツ笊の中に入つてゐた。

彼は其れもやはり病院にゐる妻の許に持つて行くために、パイン・アップルの罐詰を買つた比較的綺麗な漬物屋の前を通つて、少し行くと、擔架に乘せられて行く病人の一群に追ひ附いた。彼は常にいろ／＼の傳染病患者のゐる病院に行きながら、尙ほ途中でこんな病人に遇ふと氣味が惡かつた。彼は成たけ其の傍を通る時には呼吸をしないやうにして、小走りに通り過ぎてしまつた。而して、遂に我慢がし切れなくなつて、ホッと深い溜息を吐いた。

其の日も病院の窓下を通る時に、例の陰氣な室の前を過ぎた。見ると此の前まで其處に呻いてゐた髑髏のやうな老人の姿が見えなくて、灰色の室は空になつてゐた。妻に遇つてから、いろ／＼の話をした時に、昨日、病院で三人の死亡者があつたといふことも聞いた。窓の處に置いてあつた、赤く枯れた鉢植の草花は取り退けられたと見えて無かつた。また青腫れのした妻の樣子にも變りがなかつたやうだ。彼は病室を出てから、受附の處まで戻つて來て彼女の受持ちの醫師に面會を求めたのである。

看護婦が來て、正助を應接室に導いた。其の室は光線が不十分で少しうす暗かつたが可なり廣い室であつた。大きなテーブルの周圍に幾つかの椅子が置いてあつて、頭の上の三方の壁には、何かの寫眞が額にして懸けてあつた。待つてゐると間もなく、一方の扉を押して入つて來たのは、先日彼が病室で患者を診察してゐる姿を見た、其のまだ年若い金緣の眼鏡をかけてゐる醫者であつた。彼は丁寧に醫師に對して、彼女の世話になる禮などを言つてから、話

を進めて、終に妻の生死に關しての醫師の意見を求めたのであつた。
醫者は彼女の病氣の經過を委しく語つた。また今後の懸念すべき併發しかゝつてゐる餘病について、專門的の術語を混へて說明してから、彼女の身心の疲勞してゐることを話した。而して、かう最後に言つた。
『何分にも、今申すやうに體が衰弱してゐますから、これで餘病が出ますと、今のところ保證は出來ませんのです。』と醫者は事實を言ふと共に幾分なりとも相手の心にも同情することにつとめて言葉を低く、靜かに語つた。
『其の餘病といふのは何でせうか。實際起りかかつてゐるのでせうか。』と言つて、正助は凝と醫者の脣を見詰めた。學校敎師の前に立つて、自分といふものが極めて賴りないものであると感じて、今、其の人の口から及落の決定が言ひ渡されるのを待つてゐた、子供の時分の心持を思ひ出した。今は、其れよりは一層苦しい、絕望的の氣分の漲つた心の狀態であると自覺すると、頻りに心臟が高く打ち始めた。
『いろ〳〵ありますが、心臟痲痺なども其の一つです。どうも豫防はしてゐますが、何か餘病が出ないかと思つてゐます。』と醫者は答へた。
而して此時の醫者の顏色には、これ以上のことを語るのは苦しくもあり、また眞に分るものでもなく、これ位にして置いてもらひたいといふ心持が現はれた。正助はこれを見ると、其の上聞く氣にもなれなくなつて、たゞ何となく自分までが死の宣告を受けたやうに、たじ〳〵として病院から出たのであつた。
明るい、眩しい筈の路の上も、彼には全く暗かつた。彼は何處を步いてゐるかすらよく分らなく、また何も眼で見る氣がなかつた。たゞ妻のことを考へつゞけて來た。三四年前の秋の日であつた。最も自分等が貧しい經驗をした日の當時であつた。雨の降る日に、彼女は井戶端へ水を汲みに出て、水の滿々と入つた重い手桶を下げて來かゝると、石に躓いて前のめりに轉んだ。やつと起きた時は膝頭を石で擢り剝いて赤黑い血が染んでゐた。其樣ないぢらしい彼女の有樣も心の眼に浮んで來た。彼は自分ながら過去の自分を考へると彼女に對して、慘ましいまでに tyrant であつたことを想はずにはゐられなかつた。
しかも其の egoistic であつた自分が、今こんなにたじ〳〵として步いてゐるかと思ふと、其の姿を第三者となつて冷笑つてゐる氣持とならずにはゐられなかつた。
眼の前に彼方から來た黃色な電車が止つた。彼は危げな足附きで其の車に乘つた。中には人がいつぱいで、彼も吊皮に摑まつて立つてゐなければならなかつた。不意にぎくりと體が動いて、電車が出た。彼はこの機勢で二たびたじたじとなつて、傍にかけてゐた人の上に倒れかゝらうとした。彼はやつと堪へて、唾を飮んで乾枯びた咽喉を濕した。間もなく次の停留場に來て電車が止つた。また不意に動き出した。同じくこの反動で、彼の體はたじ〳〵となつてまた前と同じいやうに人の膝の上に片手を突いて危く倒れかけた。今度は其の人が默つてゐなかつたので、彼は其の人の顏を見た。腰をかけてゐた人は老人であつて、其の傍にかけてゐる二三の人までが不審さうにして正助の顏の上に眼を集めてゐた。彼は何とか言つて、其の老人に詫びなければならぬと思つたが、咽喉が先刻から塞がつてゐるやうな氣がして、聲を出せなかつた。たゞ神經質じみた眼で其の人の顏をまじまじと見詰めてゐるだけであつた。彼は自分の眼が深く底の方に落込んで、瞳の自由すら效かなくなつてゐる有樣を見るやうな氣持がした。もう此の上には倒れてはならぬと思つて、

彼は兩手でをかしな體附きをして吊皮にしつかりとしがみ附いた。

正助は此日から、どんな女が來ても、つまり自分に較べれば知識に於いて、力に於いても弱いのだから憐んでやらなければならぬと思つた。また暇をやつた、金を盗んだらしい女も畢竟好い衣物を買ひたいために、また好い櫛を買ひたいためにしたことだとも考へれば、何處か其の弱い、いぢらしい心根に對して憎むよりか、憫んでやらなければならぬといふ氣持になつた。

彼はちやうど知つた醫者から、看護婦にならうといふので、田舍から出て來た女があるが、とても看護婦にはなれさうでもない、どうせ飯も滿足に炊けなさうに思ふけれど、それでも一時の間に合はせに使つて見る氣なら連れさしてやるが何うかといふやうな手紙をもらつた。正助はどんな女でも我慢をして使ひ、また其の女のためには世話もしてやらうと考へた。

其の女はまだ十七にしかならなかつた。色の白いむつちりと小肥りのした女學生上りの女であつた。庇髪の下に其の腫れぼつたい、細い眼が隠れてゐるやうに頭髪が澤山であつた。田舍にゐては飯も炊き附けなかつたといふことで、女が來た明る朝飯を炊かして見ると、まだ煮え切らないうちに火を落してお鉢の中に移してしまつた。其處へ出て來て、これを見た正助は、

『まだ炊けてゐないでないか。』と言つた。すると女は顔を紅くして、袂で半分其の顔を隠してしまつた。

『これは煮て食べるより仕方がない。』と言つて、正助は二たび書齋に入つた。

彼はしばらくすると勝手許で米の焦げ附く臭ひがしたので氣になつて行つて見ると、女は顔から汗を流して釜を下してゐる處であつた。其れを女が下してから蓋を開けると米は黒く焦げて、中から臭ひのする煙が上つた。彼はこれを見ても女を叱らなかつた。たゞ今後のことを注意してから、自分でこの食べられなくなつた釜の中の米を埋めるために、庭へ抱へて來た。庭には一面に日の光りが當つてゐた。彼は其れを日蔭になつてゐる青桐の根許に持つて來て、土を掘り始めた。見ると紫のダリヤの新らしい枝に蕾が吹きかけてゐた。

女はこの頃の暑さにも衣物の襟をきちりと合はして、其れを光つた金屬の襟止でとめてゐた。常に白粉を額に塗つてゐる上に、たえず香水などをハンケチに濕らして置いた。

彼は近所の人々が、この女を自分の親類の者か、さもなくば妹であると噂してゐると聞いた時に、何も知らずに病院にゐる妻に對して、何となく憚るやうな心になつた。

日に慣れるに從つて女は大膽に家の裡を歩いた。彼の眼は自然とこの女のむつちりとした圓味のある肉の上に止らずにはゐなかつた。暑い日などには、女が自分の近くに坐ると肌着を汚した汗の臭ひと、安香油の臭ひとが體溫のために蒸されて來て、若い女といふものを實感的に感じさせた。彼の眼に、女は體が熱さうに、また物憂く、けだるさうに見えた。彼はふと女の寢たり、また常に坐つてゐる三疊の間の疊の上に赤黒いものの附いてゐるのを見つけた。顔を其の染みに出來るだけ近づけて凝視すると生々しい血の滴れて乾いた痕であつた。其れを見た刹那、不思議な狂暴の快感が全身に痺れ渡るのを覺えた。しばらく眠つてゐた盲目の本能が眼を醒まして起き上つた。

彼は其の日、庭に出てダリヤの花を見た時に其の當時艶かに咲き誇つた花が黒く朽ちてしまひ、もう見る影もないのに引き換へて、新らしく咲きかけた蕾には、自分獨りを褒めてくれいと

いはぬばかりの額附きと、日に輝いてゐる笑ひがあるのを見た。其時、彼はたとひいかに憐れに思つても病んだ者、死んで行く者には、この變化多き世界に住つてゐて、共に享樂し、また幸福を受ける權利がないことを思つた。から思ひながら、また彼は心のうちで妻に對して濟まないことだと思つた。けれど次第に悔恨の情がうすらいで行つた。彼の瞳は燃えるやうに、女を見送る時、既に發達した腰附きや、露はにまくし上げた、むつちりとした白い兩腕に喰ひ入つた。彼は是迄、自分を支配して來た信仰が壞れかゝるのを感じた。而して、新らしい經驗のために、冒險を敢てする日のことなどを空想に描いた。

ある曇つた、蒸れた日の午後である。女は病院まで使ひに出て行つた。正助は女の歸るのが待たれた。日が暮れても女は歸らなかつた。其の中に雨が降り出して來た。彼は女の居間に入つて、彼女の荷物や夜具などが置いてある押入の戸を開けて、其の中を見詰めたりした。雨は夜の更けると共に益々甚く降り出した。筧から落ちる水の音は、さながら小さな瀧のやうであつた。耳を澄すと溝を走る濁流の音は、遠く闇の裡に響いてゐた。彼は雨戸を細目に開けて墨のやうに暗い外を眺めた。僅かに軒燈の光りの落ちてゐる處だけは水が光つて、其處に飛び込む白い銀のやうな雨脚が分つた。

雨は夜半前に止んだけれど、女は歸つて來なかつた。

明る日は、また朝から日の光りが強く射した。雲もない大空に赤く燒け爛れた銅盤のやうに太陽が燃えてゐる。彼は昨夜女は知人の家に泊つたので、今朝は早く歸つて來るだらうと思つた。しかるに其の日の午前は經つたけれど、遂に女は歸つて來なかつた。彼には漸くいろ〳〵の疑惑が湧きかけて來た。

彼はしばらくの間、心が落着かなかつた。日の照る庭に出て其處を二足、三足歩いたりするかと思へば室に入つて机の前に身を投げるやうに坐つたりした。けれど徒らに頭の中が亂れて來るばかりで、何一つ考へのまとまる處がなかつた。

『なぜ己はこんなに苦しんでゐるのだ。』と口に出して、自分の心に問ふやうに言つた。

彼は暫く頭を垂れて、默然として考へ込んだ。而して、また次に口に出して、

『自分をこんなに苦しめて來たもの、自由を束縛して來たもの、また現に墮落させようとしてゐるもののすべては女でないか。なぜ自分はさうと知りつゝ女から解脱することが出來ないのであらう。』と自分に向つて詰る如く言つた。

彼の病的な、衰弱し切つた體に石炭を燃やすやうに活氣を與へ、刺戟して來たものが性慾の力であつた。今、其の性慾を斷ち、この底力のある盲目の本能の太い繩を滿身の力で斷ち切らうとするのである。容易にこれが出來る筈のものでない。彼は其處に身を悶えて、この理想と本能の苦しき悶え戰ひのために轉々として、聲を上げて泣きたくなつた。

其の日の午後二時頃である。ちやうど女が此家を出てから一日目になる同じ頃の時刻であつた。女が悄然として門口に姿を現はした。正助は急いで室から出て見た。

一日、彼は女の姿を見ると其の樣子が尋常ならぬのを見た。病人のやうに其の顏色は青く、髪は崩れて眼の中には惱ましい悲痛の閃きがあつた。彼女は正助の顏を見ると、直に首垂れてしまつて、顏の色を紅くした。

『オイ、何處で泊つて來た。』と彼は鋭く言つて、女の姿を忌々しさうにして睨んだ。女は忽ち體をぶる〳〵と震はせた。肩先の搖れるのが瞭然と正助の眼に映じた。

「オイ、何處で泊つて來た。」と彼は一層大きな聲で言つた。

「門が閉つてゐましたので、其處の車屋で泊りました。」と言つて、彼女は泣いた。青白い頬を傳つて涙が落ちた。

これを聞くと彼の體には、二たび狂暴な情慾の血潮が驅けめぐつた。眼は悔恨と嫉妬と殘忍な野性のために燃えて、堅く握り締めた拳が振へた。同時に強健な、無智な、若者等が毛脛を露出して臥轉んでゐる狹い車屋の光景が眼前に浮んだ。

彼の咽喉は乾き附いて、言葉が出なかつた。彼はづかづかと女の傍まで寄つて、柔かな肩頭の肉を掴んで、力まかせに其處に突き倒した。

田舍の秋、高山の秋（一）

都會を去つて、一歩、一歩、深く田舍にはひれば、もうそこは、いかに自然が人生を支配してゐるかを身にしみて感ずることができるのであります。

街の中にあつて、きらめく燈火をながめながら漫歩する時には、いかにも人間は、自然を征服してゐるのであります。しかし、人々は、かの渦卷きかへる雜沓を見ても、また驅走する馬車をながめても、また喧騷たる人間の醜や、悲喜さまざまな生活の有樣を見ても、それによつて人生を考へるにはちがひないが、都會を去つて、自然の胸に深く入ることによつて、さらに切實に人生を考へるものであるといふことを悟ります。

街の中にあつては、四時の變遷はきはめて緩慢であり、いつの間にか夏となり、いつの間にか秋となつたといふ風に、秋もすでに深くなつてから、人々は、はじめて秋のすでに行き渡つてゐるのを知つて驚くのでありますが、高原に、もしくは林の中に、または山中に住む者にとつては、四時の移り變りは實に鮮かに感ぜられるばかりでなく、またそれによつて感慨を深くするを常とするものです。

私達は、あの畑の中に紅く色づいた唐辛の實をどんなに美しく見たでせう。もうあの唐辛が紅くなれば、雁が歸つて來ます。夜もだんだん涼しく、寒くなつて、戸の隙間から洩れる月の光りが、さながら水の大地に浸したやうにしんとしてゐる。蟲の音が、たえだえにやがて來る秋の末をかこつやうに鳴いてゐる聲も幽かなのに、一聲高く、凜として空に冴えて、月を過ぎて行く雁の聲をきく時は、どんな思ひに耽るでありませう。日本海の波の音が、これから夜々、耳につくのでした。そして、ちやうど雁と入れ交つたやうに、昨日まで、夕暮の空高く舞つて囀つてゐた燕の姿が、見えなくなるのは、まことに寂しいものでした。

「また、來年の夏まで」といふ感じには、少年時代の自分の心をどんなに感動したでありませう。

圃に、美しく色づいた唐辛には、やがて拔かれて、實だけを束として、外の日當りのいゝ窓際に吊されるのでした。今から、思ひ出すと、そこに田園の情趣はかぎりなく漂つてゐました。そして、赤蜻蛉が、それに來て、ちやうど圃にあつた日、それに止まつたやうに止まるのでした。

ある夜、西の風は、胡弓の音の如く、窓の破れを鳴らしました。翌朝、起きて見ると、柿の木の下に、それは、繪具よりも鮮かな葉が散つてゐました。

（『未明感想小品集』より）

少年の死

昔は、城下で榮えた日もあるといふけれど、今は、衰微してゐる淋しい町の片ほとりに小學校がある。この町は灰色に朽ちた家ばかり並んでゐて活氣といふものが見られなかつた。小學校には、町からと其の附近の村から來る生徒が總數で二百人ばかりあつた。學校の小使室と共に南向きになつてゐる玄關の傍には大きな柳の木があつて、秋の末時分になると黃色くなつて、蟲の食つた葉が雨の降るたびに、また靜かな日に少しの風の吹くたびにはら〳〵と落ちて、黑くなつた家根の上に散りかゝつた。

　この學校の黑くなつた家根には、處々に新しい白い色の板が混つてゐるのが目立つた。それはかうして雨の漏るのを防いでゐるのである。この玄關からは、教員が出入りするのであつた。生徒等は、柳の木の下を通つて東向きになつてゐる口から昇降したのである。

　二年生西組の級中に、色の青い痩せた、丈の高い、臆病な眼付をした少年があつた。子供の風が他の者と異つてゐた。大きな、足に合はない、だぶ〳〵とした足袋を穿いて來た。紐を長くして、大きく無器用に縫はれた辨當袋を右の肩にかけ、厚い白木綿で製つた鞄を左の肩にかけて、其の步き付といつたら、學校の門を出るとぶら〳〵として町の中を彼方の店の前に立つたり、此方の店の前に立つたりして、茫然と硝子箱の中に入つてゐるニッケル製のインキ壺や、よく光つてゐるナイフや、青味を帶びてぎらぎらとしてゐる小形の鏡などを覗いて、硝子箱の上にも、また靜かな水の面のやうな鏡の上にも自分の顏の映るのを見た。

　學課の成績はあまりよくなかつた。算術がいつも落第點であつた。また教師のいふことを聞かないところから、あまり生徒間にも意地惡いことをしたこともなく、却つてすべてすることが臆病な位であつたのに、いつも品行點は丙であつた。彼、自身では心の中で先生に憎まれてゐると思つてゐた。

　彼の級を受持つてゐた教師といふのは、鬚の延びた、額にうすあばたのある、洋服を着てゐた、脣の厚い四十二三になる男であつた。よく此の少年を學校が退けてからも後に殘して叱つた。或時は教員室に連れられて來た。其處には、ちやうど頭の上の柱には角な時計がかゝつてゐて、壁には色つきの幅の廣い日本地圖がかかつてゐる。其の下で、教師は椅子にかけて自分の机に向ひ、少年は此の傍に立たされた。

「さう出來ないのは、つまり勉強をせんからのことだ……お前のお父さんは、家で何を職業としてゐる……」

　から教師は少年に向つて聞いたことがある。

　少年は、自分の父が桶屋をしてゐるといふことを口に出すのを恥かしく思つた。彼の眼には、自分の家に並べられてゐる赤味の勝つた杉板が浮んだ。いくつも轉つてゐる底のない桶の胴などが浮んだ。彼は、また空想力の強い子供であつた。其樣に叱られてゐる間にも、いつしか家に歸つてから、外に遊びに出ることなどを考へてゐた。學校の門を出ると、もう彼を苦しめる何物もない自由の天地に放たれたやうな心地がせられる。で、夕方の黃色な爛れたやうな日光に色づいた桑畑の光景は、しきりに心を誘つて、彼はつひに歸りたくて堪らなく足踏をして泣き出した。

『泣く位なら少しは分つたらう。かう算術が出來なくては、また落第だ。』といつて敎師は紫色の風呂敷包を解いて中から、點數帳を出して開いて見た。

或時は、獨り敎室に殘されて、火の氣のない處で、寒い風が破れた障子に當つてひら〳〵と鳴るのを見ながら、一時間餘りもベンチにかけて寂しい思ひでに胸が塞つて呢としてゐると、やつと敎師が入つて來て、この少年の傍に立つた。

『なぜ、小使室の硝子を壞したり、柳の木の枝を折つたりするのだ。そして敎師の言ふことは少しも聞かない……』

といつて叱つた。少年は叱られながら、敎師の胸に下つた時計の銀の鏈を見てゐた。夕暮方の北向きの窓から入り込む鉛色の光線は、此の金屬ににじんで悲しげな灰色の光りを放つてゐる。……どんな氣持でこの金屬はゐるだらうか……などと思はれた。

外に出ると、遠く北の空を眺めた。淋しい、寒い、海の方の空が青く、雲切れがしてゐる。何となく、この少年には、この青い空は、すべて頼りなく思はれる。此の世界に、最も自分に懷しいもののやうに感ぜられて見てゐるうちに涙ぐまれた。而して、暫らく人通りの稀れな道の上に佇んで、きつと眼を遠くの空に馳せて、あまりの冷かな悲しみに、わな〳〵と手足を戰かした。

少年は、學校の往來に、必ず町の中程の一軒の藥屋の前に立つた。其の藥屋は、昔から此町での藥屋である。小僧が二人店に坐つてゐる時もあれば、また、誰も其の薄暗い店頭に坐つてゐるもののない時がある。眞鍮の火鉢が置いてあつて、ちやうど小僧が外の方を向いて坐つてゐる後方に當つて、其處には、赤黑く塗つた藥棚があつて、棚には幾つかの小さな抽斗がついてゐる。抽斗には、長方形に切つた紙札が一つ一つ貼られてゐる、それに墨で中に入つてゐる、の名が書いてある。この棚の上には、別に曇硝子のはまつた戸棚が乘つてゐる。其の傍には青い罎や、紫色の罎が幾つも並べられてあつた。其の四角な曇硝子戸のはまつた小形の戸棚は暗い感じを與へた。何となれば其の硝子の色に濃い灰色に、うす黑く曇つてゐた。其の中には、何が入つてゐるか分らないが「劇」といふ字が一字やゝ大きな四角な紙札に書いて硝子にべたりと貼つてあつた。其の「劇」といふ字の上に、人間の頭蓋骨の畫を切り拔いたのが貼つてあつた。少年は、藥屋の前に來ると、子供心ながらに此の「劇」といふ字の書いてある藥戸棚が忘れられないでいつもそのうす暗く曇つた硝子戸の色を見つめて立止つた。

ちやうど、其の藥戸棚にはまつた曇硝子の色は、夕暮方の雪の降つて來る前の西の方の空の色に似てゐる。彼は、鉛色の各〻の光線が、音もなく此の古い藥舖の軒端からくゞり込んで來て、家の中の其の硝子戸に當つてゐるのを見て、自分の心も曇硝子のどんよりとしてゐるやうに鬱いだ氣持になつた。少年は此の、笑ひ聲一つ、話聲一つ聞えないしんとした藥屋の奥の方を見つめて前に立止つてゐた。

少年は、冬の早く暮れかゝり易い日に、學校で晩留にせられて、やうやく自分の家に歸つて來る時分には、いつも藥屋の店にかゝつてゐる時計の圓盤をめぐつた金緣のわくに、冬の鉛色の光線がにじんで、白い面に黑い針が四時半を指す時分であつた。いつか、彼は小さな心のうちに、「劇」といふ字は劇藥の入つてゐることを意味してゐるのであらうと考へた。

或日のこと、何かの課業時間のとき、學校の

教師から、毒藥のもつと強いのが劇藥であるといふことを聞かされた。

少年は、はじめて――毒藥――劇藥――といふ、同じやうで其れにも區別があることを知つた。教師の話によると、中には、ほんの耳掻きぐらゐの分量で、これを飲むと三分間と經たぬうちに死ぬやうな怖ろしい劇藥がある――どんな色をしてゐるかと問ふと、やはり、セメンみたいな白い色をしてゐる粉であるといつた。劇藥より、毒藥の方が、もつと強い力を持つてゐると思つたのが、さうでなくて、劇藥の方が、毒藥よりも強い力を持つてゐる、毒藥のことをいふのだと聞いた時に、いつも其の前を通る、藥屋の曇硝子になつてゐる戸棚に貼られた『劇』の字が目に浮んだ。滅多に見られもしない、買ふことも出來ない、怖ろしい劇藥の入つてゐる硝子戸棚を毎日見て通られるといふことが、限りない幸福のやうにも思はれた。

『劇藥』といふ言葉は、少年には、此の雲切れのした青い空を見るよりも身に悲壯に感ぜられた。彼は友達から避けて、學校の控場の片隅に獨りベンチに腰をかけて暗い窓の障子を見つめながら、

『劇藥!』と口のうちで叫んで見た。無限の勇ましいやうな、また悲しいやうな感じが切々として身に迫つて來るのであつた。

劇藥といふものが、其れ程、強い力を持つてゐるといふことが、小さな胸に深く刻み付けられた。それからといふもの彼は、藥屋の前を通る時はいつも立止つて、其の灰色のうす暗い四角な硝子戸棚に『劇』の字と頭蓋骨の畫の貼つてあるのに一層深い怖ろしいやうな興味をもつて呪と見詰めるやうになつた。――其の頭蓋骨は、眼の處が黒く窪んで、齒をむき出してゐる白い色の畫であつた――其の下に白い四角な紙札に『劇』といふ字の書いたのが貼つてあるので、これを見るたびに、あの硝子戸棚の中には、白い粉の……或はどんな色の劇藥の入つてゐる罎があるのであらうと思つた。何となく少年の心には其の中に入つてゐる『劇藥』が氣にかゝるやうな氣持がせられた。

誰が、いかなる用事があつて、この劇藥を買ひに來るであらうかと考へられた。また、劇藥は誰にでも賣られるやうな品でないと聞いたことのあつたのを思ひ出された時に、其樣な怖ろしい劇藥を自分の家の片隅に平生別に何とも思はんで備へ付けて置く此の藥屋の主人はどんな考へで――よく不安心とも思はずに――ゐるだらうかと思はれた。

其後も、少年は學校で怠けたり、また算術が出來なかつたりして、屢々教師から叱られた。また算術の出來なかつたため、或時は教場で生徒の面前に一時間も立たされたことがある。其上にも、教師は少年をすべて授業が終つてから後、一時間も殘して、もはや誰も、歸るものがない時分になつてから、歸されたこともある。彼は、獨り、暗い、鬱いだ顏付をして學校の門を出てぶらり〳〵と例の如く、大きな足袋を穿いて、辨當の紐を長くしたのをぶら下げて歸つて來る時には、此の少年の顏の色は、一層青く、眼は落窪んで何となく鬱いだ顏付をしてゐた。而して、灰色に朽ちた長い町にさしかゝると、此の藥屋の前に立つて、いつものやうに、うす暗い藥屋の奥の方を覗き込んだ。いつものやうに、鈍色の日暮方の光線が、四角な灰色の硝子戸棚に當つてゐる。而して、いつも見るやうな頭蓋骨のついた下に『劇』の字が書いて貼つてあるのを見ると、急に頭がすが〳〵しくなつて、嬉しいやうな、眼の醒めたやうな感じになつた。ほんの耳掻きに一ぱい飲むと三分間とたゝぬうちに死んでしまふ。毒藥よりも、もつと強い、最も怖ろしい力を持つてゐる劇藥の入つてゐる罎かしま

つてあるのかと思ふと、うす墨色に曇つてゐる硝子にも懐しいやうな、讃美せられるやうな微かな光りがあるのを覺えた。

「劇藥！……、あゝ劇藥！……」

……から口のうちで叫ぶと、少年は、急に遠い、高い青い空が思想の眼に映ずるのを覺えた。淋しくなつて、夕暮方の鈍色の光線が柱時計の圓盤に金色の框をとつてゐる金屬に觸れる其の光りにも、言ひ現はしがたい尊いやうな、眞理を思はせるやうな、インスピレーションとも名づくるやうなものが、小さな胸の中にたゞ美しい霧のやうに湧き上つた。

しかし自分の家が見える處に來ると、また彼の顏色は鬱いだ、沈んだ青い色になつた。少年は、家に歸ると、口やかましい母親から、また晩留になつたのか……」と叱られて、頭を火箸で撲られた。而して、寒い晩方に獨り戸の外に閉め出されて立たされてゐた。彼の母親は、此の少年の身形などについては考へなかつた。其れ程無頓着の女であつた。彼が、生徒間の笑ひ者となつて、大きな足袋を穿いて來たとか、お前の足袋はお父さんのおさがりだらうとか、お前の辨當袋の布は、お母さんの前垂の古い布だらうとかいはれるのが常であつた。……或時は、あまりかういふやうに冷笑されるので、少年は、獨り默つて、鬱いで、小使室の窓の下に來てうす寒い風に吹かれながら、仲間の者から避けてゐることもあつた。

町では、此の藥屋は、金を溜めてゐるといはれてゐた。けれど何となく火の消えたやうな淋しい家で、いつ其の店の前を通つて見ても笑ひ聲一つしなかつた。店の小僧も二三人はゐるが、いづれも青い、瘦せた活氣のない子供であつた。其の藥屋の主人といふのも、やはり瘦せ形の男で、其の嫁らしい女の人も、やはり青い顏をして、此の夫婦のもの二人は、稀にしか姿を店先には見せなかつた。誰いふとなく、此の藥屋にはらうがいの血統だといつた。

少年は、つひに學校を退かされてしまつた。或日教師は、少年の父親を呼んで、この兒には、學問をさせても將來見込みがないから、其れより今のうちから、家に置いて親の手助けをさして家業を習はせた方がよからう。……といつた。父親は、默つて頭を下げて自分の子供をつれて學校の門を出た。少年は、また默つて悄然として、父親の後からついて歩いた。學校の門を出て、少しばかり來ると父親は後からついて來る我が兒を振返つてかういつた。

「かうなれや仕方がない。どうせお前も他の子供さん方のやうに、利口に生れて來なかつたのだからよく親のいふことを聞いて、俺の後をつげよ……」

と、眼をうるませて、涙聲で言つた。

其れから二三日後のことであつた。

冬の日は、一日どんよりと鉛色をしてゐた。また、雪の降つて來さうな晩方、町では藥屋にたゞごとならぬ事件が起つた。何者か不意に、店に人のゐない隙に忍び込んで、彼の「劇藥」の字の書いてある劇藥の入つてゐる硝子戸を破壞して、中からアヒサン罎を取り出してこれを持ち去つてしまつた。

藥屋では、其時皆んな奥にゐて、硝子の破れた音に氣が付かなかつた。暫らくしてから、小僧が店に出て見ると、其處の疊の上に、破れた硝子の缺片が散らばつてゐるのを見て驚いて、早速この事を奥に入つて主人に知らせた。瘦せ

た、丈の高い、青い顏色をしてゐる主人は店に出て來て見ると、初めて大騷ぎになつた。

　このことを早速警察に訴へ出ようと、主人は帽子を被り、二重廻しを着ると灰色をした空の下に出た。既に、吹雪となつて、顏を反けて來かゝると四五間先の雪の上に血を吐いて少年が倒れてゐた。傍には、紫色の罎があつた。罎には雪が降りかゝつてゐた。少年は多量に飲んだ劇藥のために、一面に眞紅の血を雪の上へ吐いた。血は、眼からも、口からも、鼻からも吹き出して、少年は、雪を掴んだまゝ其處に悶え死んで、體は冷たくなつてゐた。

　此處に驅け付けて、この死骸を見た藥屋の小僧は、此の少年の顏をどうやら見覺えがあるやうだと言つた。寒い北風が、雪片を吹き捲つて飛ぶ中に町の人々が黑くなつて、死骸の周圍に集つたが、日が全く暮れる時分には、人影が次第に減つて、雪は一寸先も見分けがつかないまでに降つて來た。

（明治四十四年十月）

田舍の秋、高山の秋 （二）

渡鳥が、頭の上を鳴きながら過ぎて行きます。風のあしたの氣分は、格別にすが〳〵しかつたのです。村の端れの方まで走つて行きました。そして、水量のました、河の橋の上に立つて、疎らになつた、あちらの木立の間から西の山を見た時に、一層、心の爽立つやうな思ひがしました。

　鋸山や、蓮華山の頂きに、雪が來たからです。鋸山は、その名のやうに、尖つた山が連なり、蓮華山は、憂鬱に、かき曇つた空の下に、物凄く沈默してゐたからです。

往年、私は、この日本アルプスの中の温泉に、夏から、秋にかけての景色を稱したことがありました。まことに、その夏から、秋へかけての變化は、一夜が爭はれたからです。

硫黃の香は、溪川から立ち上つて、暁方になると白い靄があたりを包んでゐました。どの宿も、二階の障子は開かれて、浴客は、欄干に凭れて、山の頂きの、風にそよぐ木々の姿をながめたり、湯の町に點つた火の下を往來する人々を見下したりしてゐました。

どこからか、流れて來た、旅藝人が、三味線を彈き、唄をうたつたりして、この町の中を行きました。こゝにも夏は、まだ行くべくも見えなかつたのが、僅かに、二三日後にはもう、人の數が半ば減つて、夜になると、どの二階の障子も閉つてゐました。

「かう急に、涼しくなるものですかな。さすがに、深い山の中です。ごらんなさい。東京へ歸れば、まだみんな浴衣で、相變らず、夜は、散歩をしてゐるのを見られますから。」

私は、人々が、かう言つて話合つてゐるのを聞きました。

歸りを急いで、浴客が、ぞろ〳〵と宿を立つ朝、私は、獨りこゝから、一里も奧へ山の中をはひつて行きました。そこには湖水があり、風景が極めて好かつたからです。

紫色に咲いてゐるりんだうの花は鮮かな色をしてゐるのに、葉は、うすい霜がかゝつたか枯れてゐました。なゝかまどの葉が、冷たい火のやうに、淸らかな、すき徹る日光の中、青い、青い、空の下に、絢爛な花よりも美しかつたのです。

私は、この時の自然美に對する印象を、永久に忘れることができません。（一五、八）

（『未明感想小品集』より）

魯鈍な猫

一

氷を嚙んで來たやうな、北風が、白く鈍色に光つたレールの上を吹いた。汽車に乘つて既に幾十分か幾時間か前に此の驛を出發して、何處にか行つてしまつた人々の捨てた紙切れが、當もなく地面に轉がつてレールの上を越して行つた。

並んでゐる倉庫の三角形の家根と家根の間から、遠い北の國境の山々が見えた。まだ其等の山には雪があつて花崗石に刻んだやうに頂きが鋭く光つてゐた。青い雲切れのした空が慰めるやうに、山々を見下してゐた。

私は、停車場の外側の、風に吹き晒されてゐる柵に身を凭せて、北國から來る汽車を待ちつつあつた。其の汽車にはまだ互に顏も知らない十二になる女の兒が乘つてゐる筈であつた。其の兒は孤兒である。故鄕にゐる叔母が、子供の守に世話してくれたのであつて、私が旅費を送つて呼び寄せたのであつた。

まだ、汽車がこの停車場の構内に入つて來るには三十分ばかり間があつた。其處に私の傍に、二三人の者が立つてゐたけれど、何の關係もない、初めて顏を見た、而してまた直に其の顏を忘れてしまふやうな人々であつた。其等の人々も、やはり、誰か汽車に乘つて來るのを迎ひに出て待ちつゝある樣子であつた。

其の中の一人は、手荷物取扱室の入口の上に懸つてゐた、大きな時計を見上げて、何やら口の中で呟いてゐた。時計の白い大きな圓い顏には、二本の黑い針が時間の推移を差し示して、永遠に人間の情愛から離れて、冷かに淋しく流轉の眞理を語つてゐた。

褐色の襟卷をした、痩形の女の人は、默つて、プラットフォームの低い柵に片手をかけて、頸を伸して、汽車の來る方を眺めてゐた。けれど、まだ、汽笛の音は聞えなかつた。

私は、是等の人々と過去に於て、現在に於て、恐らくまた、未來に於ても何等の關係がない。たとひ是等の人々が悲しいことがあつて泣く時でも自分は、其れを知らう筈もなければ、共に泣く理由もない。同じく、自分が生活のために苦しみ、若しくは病んで死ぬとも、是等の人々は、其れを知らう筈もなく、同情せぬとて憾む理由もないのである。

其時、私は、二たび、幾百里隔てた遠い北國から汽車に搖られて來つゝある孤兒の少女のあることを思つた。曾て、この孤兒とは互に顏を見たこともないのに、偶然に顏を知り、偶然に物を言ふやうになつた。人生を繫ぎ合ふ目に見えない約束といふものが不思議でならなかつた。

私は、獨り柱に凭れて呆としてゐる所在なさに、敷石の上を下駄でコツ〳〵と鳴らしてゐた。而して、今頃は、汽車が何處の邊を黑い煙を上げて走つてゐるかと思つた。

ふと、倉庫の家根のあたりを見ると、黑い鳥が一羽、五ツある倉庫の右から三つ目の家根に止つてゐた。鳥にしては、少し體が小さいやうに思はれたが、やはり烏であらう。彼方に幾つも立つてゐる煙突から黑い煙を吐いて、空の色は濁つてゐる。私には、何故此の鳥は、都會などに住んでゐずに、廣々とした田舍へ飛んで行かないのだらうかと怪しまれた。

二

雲の切れ目から、黄色く落ちる夕暮方の日は、飴色に電車の硝子窓を染めてゐる。私は、神經衰弱にかゝつてゐると見えて、車臺が左右に搖れるたびに、頭痛は激しくなつた。而して、胸がむか〳〵して吐瀉を催して來る厭な氣分を堪へてゐた。

電車は、街の中を走つてゐる。夕日は、町の建物をも色彩つてゐた。さながら地球の上に、黄色な悩ましい輕い熱病が見舞つて、いづれのものもこの熱にかゝつてゐるやうであつた。私は、この夕暮の光線の中に浮き出てゐる赤い色の看板や、黑い煙の立つてゐる煙突などを見まいものと思つた。何となれば、こんなものを一々見てゐると眼が暈つて來て、益々吐氣が催して來たからであつた。靜かに瞼を閉ぢると、電氣をかけたやうに痙攣を感じて瞼の上が痛んだ。

何時の間にか、眼を開けて、他のことを考へ出した。僅か十二歳にしかならない北國から出て來た少女が、汽車から下りて、右も左も知らずただ一人、停車場の構内から、この賑かな通りに押し出されたら、どんなに驚くだらう。此の次に着く汽車は今日の夜中であつた。私は、もう、一度迎ひに出て見ようか、其れとも構はずに置いて見ようか。冷かに運命のまゝに突き放して置いて見たいやうな心持にもなつたので、何方にしたらいゝか決心が出來なかつた。

『今日は立たなかつたのでなからうか。』

こんな餘計な事件が、樂しみの少い、淋しい自分の生活を擾き亂すのを腹立しく考へた。早速電報を打つて聞き合はして見ようかと思つた。しかし、このこともまた決しかねて、遂に家に歸つたのである。

戸口に來ると、家の内は依然としてひつそりとしてゐる。私の心は、また、急に暗くなつた。

『來はしなかつた。』

と、言つて手荒く襖を開けて入つた。

其處には、南向きの障子の方を枕にして、病み窶れた妻が、二つになる幼兒を抱いて眠つてゐるのであつた　妻は、靜かに細く瞼を見開いた其の眼の中は、弱々しく、力なくうるんでゐた。亂れた頭髪は、枕の上に垂れかゝつた。

私の顏を見ると、妻は、微かに笑つた。青い笑ひである。私は憫み、且つ優しくしてやらなければならぬと思ひながら、もう幾日もかうして臥てゐる女を見るのが不快でならなかつた。

『何うして、來なかつたのでせう。』

と、咽喉にひついたやうな乾いた聲で妻に言つた。

私は、陰氣な霧の裡に居るやうに、心が重く苦しくていら〳〵とした。而して、慳貪な聲で、

『叔母から來た、手紙は何處にあるか。』

と、妻の枕許に突立つて言つた。

妻は、靜かに體を動かしながら、

『彼處です。』

と、言つた。

私は、妻の床から半分身を起して指さした方に行つた。もう、病氣になつてから、幾日も使つたことのない針箱の抽斗を開いた。而して、其の中から妻の叔母から寄來した手紙を摑み出した。

三

手紙の中には、

『何分にもみなし子のこととて、ひがみ心もあることゆゑ、わるいことした時には、叱りなされ、小さな時より、不仕合せな子供なれば、不憫をかけてやり下されたく……』と、書いてある。文字の上に私は、眼を速かに走らせて、

三月五日の當地一番にてと書いてある處に來て瞳を止めて日附を確めた。而して、から書いてある上は、もう、一度迎ひに出て見なければ氣が濟まないと思つた。

此時、暮方の日がほんのりと、妻の枕許の障子の一部分に當つてゐた。

『もう、お前も起きたら何うだ。少し位苦しくても我慢してやるのだ。』

と、私は、自分の感情を其の儘、妻に向つて言つた。妻が病氣にかゝつてから此の附近の口入宿を幾軒となく歩き廻つて下女を探ねたけれど、病人があつて、幼兒のある家と聞いて來るものがなかつた。近所の人が親切心で世話してくれた車屋の老婆は、まだ、六十になつたかならない位の年頃であつた。毎日、朝と暮方に來て飯の支度をして歸つて行くのであつた。けれど、此の老婆のすることは、不潔で、親切心がなくて却つて不快に感ぜられた。昨日は朝來るのが十一時頃になつて漸く來たので、私が、これから、もう少し早く來てくれいと言つた。其れが老婆の癪に障つたと見えて今日から來なくなつた。

私は、こんな日に出遇ふ毎に、空虚な博愛主義を說くものの無意味にして愚なることを感ずるのである。自分等が憐む下層社會の者等や、多くの勞働者は、自分等が考へるやうに自覺してゐるものでない。たとひ、五十年の生活を青空の下で共にして此の地上に住んでゐる人間といひながら、他の苦しみを見て、自分の苦しみの萬分の一にも思つてゐるものがない。幾百萬の人間の中には、稀れに眞に他を愛し、他のために犠牲とならうとするものはあるかも知れぬけれど、殆んど、悉くは利己的で、無同情にして、冷酷である。然るにこの人生に縋つて、博愛を說くのは、自ら弱いがために說くのではなからうか。極端に言へば、社會に道德の存在したのは、自らの生を不安に感ずるためにこの正義といふものを楯にした、人間共通の弱點でなかつたらうか。たゞ、獨り野獣の如く腕力さへ強かつたなら、この自然力に對抗して戰つて行くことが出來ると思つた。

私は、獨り、うす暗く、灰色からだん／＼と黑色に變つて行く障子戸を見詰めて、空想に耽りながら坐つてゐると、遠く、生活といふ盲目の本性のために爭ひ戰つてゐる人間と、石炭の熱度で運轉する物質文明とが、さながら肉の響と鐵の響きとが相纏れあつて、地獄を呪ふ獸の如くに空に向つて訴へてゐる。

『また、日が暮れるのだ。』

と、私は、常の如く變化なき夕暮を見て言つた。自分の死ぬまでに、こんな夕暮をこれから幾たび見るであらう。

此時、勝手許で音が聞えた。其處に働いてゐる妻は、今日で三日間、飯を食べなかつた。あゝして、病んで苦しい中を起きて働かなければならぬのも、やはり生活をなしつゝあるからの責任の如く感ぜられた。私は、尚ほ、長い未來に戰鬪と苦痛とを經なければならぬといふことを考へるのが苦しかつた。さながら暗澹として夜の垂れかゝつた沙漠の中に一人居殘されて坐つてゐるやうな心細さと寂寥とを感じた。

四

母に抱かれて眠つてゐた幼兒は、母が、床を拔け出た後にもやはり何も知らずに眠つてゐた。此時、私は裏の庭に出て、猫は、何處にゐるだらうかと探したのであつた。

夕暮方の空には、灰色の雲が亂れてゐた。やがて襲はんとしてゐた夜は、其の雲の斷れ間から下界を覗いてゐる。風に、悲しげに吹いた。庭に出て見ると羅漢松の葉が黑い骨子を被つたやうに鬱然として、音もなく木の蔭には闇が漂

を造つてゐた。
ふと、青桐の木が、太い枝をくつきりとうす明るい空に浮き出してゐるのを見て、私の心は、何物にか驚かされた。よく考へて見ると、其れは、何時であつたか、『前世界』といふ書物を見た時にあつた、巨大な動物の遺骨の圖に何處か似てゐたからであつた。
長い冬の間、太陽の光りは、此の庭の上に射さなかつた。秋の頃、繁つてゐた薄や菊などが赤く枯れてゐた。春が來て、時節はめぐつても、冬の遺して行つた傷痕は取り去ることが出來なかつた。而して、赤い花咲く草花の根は腐れたと見えて、哀れな花壇には、綠色の芽も見られなかつた。
たゞ、土の色は黑くなつて、凍傷を起した生物の膚を見るやうに、醜くなつてゐた。私は、眉を顰めて地の面を見詰めたけれど、虛心の土は何の苦痛も語らなかつた。而して、默り返つてゐる地面は、獨り殘忍の冬が荒して行つたまゝにしてあつた。私は、この寒い、暗い、陰氣な庭を見舞つて、小さな猫の名を呼んだのである。
低い、呻くやうな啼聲が、羅漢松の木蔭から聞えた。私は、うす闇を透しながら、忍び足に、其の啼聲のする方へと近寄つた。此時、地平線から全く、太陽の光りが沈んでしまつたと共に、冷えきつた空氣は何處からともなく地球の上に襲つて來た。此の一本の木にも、また、寒い風は吹いたのである。其の木の下に、白と黑の斑毛の小さな猫は、凝として竦んでゐた。私は、この小猫が、茫然として、夜になりつゝあるのも知らずに、かうして此處に凝として居る心を悟りかねたのである。
『なんで、こんなに寒くなつたのに、此處にかうしてゐるのだ。』
と、言つて、私は、慄へてゐる獸物を抱き上げた。猫の體は、凍えたやうに冷たくなつてゐるのを感じたと同時に、私の心には憐憫の情が浮んで來て、涙が眼に湧いたのであつた。自分の力で、何うにでもなるやうな弱いものは、憫んでやらなければならぬと思つたからである。而して、自分も、猫も、いつか死んでしまはなければならぬ同じい運命を持つて此の世に生れて來たものであると思つたからである。而して、人間は心の苦しさ、悲しさを言葉に出して訴へることが、出來るけれど、この哀れな動物には、物言ふことが出來ぬと思つたからである。私は、自分が此の世に於て孤獨であるよりも、一層此の小猫が此の世に於て孤獨であるやうに感じたのであつた。
私は、慄へてゐる小猫を懷の中に押し入れて、自分の體の溫味で暖めてやらうと思つた。

五

この猫は、私が、街から拾つて來たのであつた。木枯に夕陽の色は傷んで、うす黃色に西の空を染めた二月の夕暮方であつた。彼方から、劍を佩げた兵隊の一列が、乾いた途の上に白い煙のやうな塵埃を上げて靴音を立てて來た。彼等は、西から來て街を東の方へ行かうとした。
其處、此處に子供等の遊んでゐる叫び聲が聞えた。赤い、星のやうな軒燈は木枯に磨ぎ澄されて、菓子屋には、青い瓦斯の光りが硝子戶を射し透して往來の上を照らしてゐた。此時、隣の足袋屋では、店頭の戶を閉してしまつた。
この足袋屋の前の途の上に、白い小さな猫が凝としてゐて動かなかつた。兵隊の一列は、間近に足音を立てて來かゝつたけれど、猫は驚いて逃げようともしなかつた。
私は、この有樣を見て其の猫を追はうとした。すると小猫は、嘗て私を見知つてゐた人のやう

に、さも懷かしげに額を見上げて啼いた。私は、其の小猫を摑き上げて、衝突しかゝつた兵隊の列から慌てゝ避けた。而して、この誰でも通つて差支へない往來の上を獨り、威張つて通る兵隊を面憎く思つた。

若し、私が、救つてやらなかつたら、この小猫は、一直線にしか進むことの出來ない自動機械のやうな兵隊の靴の踵の下に踏み潰されて、今頃は、血を吐いて路の上に斃れてゐるであらう。而して誰も、この哀れな動物の死について、餘り多く悲しみもしないだらうと考へた。

私は、其時、暫らく小猫を抱いたまゝ兵隊を見送つて、道の上に佇んでゐた。街を行く人々に、いかなる思ひを抱かせたか知らないけれど、人々は私の顏を見守つて過ぎた。私は、猫を救つたのに何の不思議もない、何故珍らしくて、自分の顏を見守つて過ぎるのか不快に感ぜられた。而して、私は、其等の人々を無神經な、無同情な、冷かな人間の如く見做して、憎惡の眸を以て見返してやつた。恐らく、私の見返すのが、睨んだやうに見えたであらう。何となれば、中には、急に下を向いて氣まり惡さうにして、行つてしまふ者もあつたからだ。

西の地平線に沈んだ黃色な入日の名殘りは次第にうすれかゝつた。寂しい、灰色の冬の日は暮れて、家々では戶を閉して長い、寒い沈默の夜の來ることを思はせた。けれど誰も哀れな小猫のために戶の外に出て來て呼ぶものをも見なければ、探して步くものをも見なかつた。

私は、小猫を抱いて四五軒此方に來かゝると、明るい光りを路上に投げてゐる家があつた。其家は酒屋で、店頭の戶を開いて、小僧や若者等が立働いてゐるのを見た。

「この小猫は、どこのか知りませんか。」

と、私は、酒屋の前に立つて明るい方に顏を向けて聞いた。

小僧や、若者等は、何れもちよつと暗い、外の方を見たが直ぐ、燈火の下で、背を圓くして下に屈んで早く片附けてしまはうと働き始めた。たゞ十五六の小僧が、國のことでも考へ出してゐたのであらうか、ぼんやりと立ちながら此方を見て白い息で、指頭を溫めてゐたが、

「知りませんね。」

と、眠さうな聲で、答へた。

六

私は、街から、この小猫を拾つて來た日のことを思ひ出しながら、家の內に、小猫を連れて入つた。雲の亂れた空の下を寒い風が走つた。私は、緣側に上ると直に雨戶を閉めてしまつた。

每夜の義務に疲れたやうに、うす赤味を帶んだランプの光りが、一室に置かれてある物の上を悲しく彩つてゐた。ランプの下に坐つてゐる青い妻の顏の上にも妻に抱かれた瘦せてゐる幼兒の上にも、又、私の腕から離されて室の片隅に小さくなつて竦んでゐる哀れな猫の上にも、一樣にうす赤い不安な光りは漂つてゐる。此時、急に、私には、妻と子供と、この小猫の行末がどうなることだらうかと淋しく感ぜられた。何となれば、自分が是等の自分よりは弱い者の生活を保護して行かなければならないからである。私は、自分の境遇と、社會に對する反抗力と戰鬪力ともいふべきものを考へたのである。而して、其處には、其の人の努力で動かすことの出來ない逆境と名づけられた一種の暗い運命の存在することに思ひ至つた。

この暗い、冷かな翼に掩はれて、終生明るい日の光りを見ずに死んだ人々が幾何あるか知れない。主義を持つてゐるために、また、自分でどうすることも出來ない不調和の性格を持つてゐるために、よぎなくせられた者を見もし、ま

た知りもしてゐるのであつた。さう考へる自分もまた其の一人であるまいか。

私は、さながら、自分の未來が、漠然として限りない曠野に、灰色の霧が一寸先も見えないまでにかゝつてゐる、其の中を歩いて行くやうに、明日の太陽を痛ましい憂愁なしに、のんびりとした氣持で迎へることが出來なかつた。獨り自分ばかりでない、自分と共に生活する一家の者が、黙つて、いづれも自分を頼りとして、この一夜を送らうとしてゐるのを見て怖ろしくなつた。

私は、氣持が焦々した。死刑の行はれる前夜、それを豫知して、獄屋の中で悶掻く罪人のやうに、室の中を歩き廻つた。呪として坐つて考へてゐるよりは、急激に體を動かして思想に靜かなる時間と自由を與へない方が、全然、思想を持たない野獸の如く、たゞ、盲目的に檻の中を往來してゐるばかりで、苦痛を感ずることがなかつたからだ。しかし、忽ち空想は、空虚な頭に潜り込んだ。私は、いつしか今夜、十時に、もう一度停車場まで迎ひに行かなければならぬだらうかと考へた。而して、瓦斯と電氣の明るい街頭の光景を目に描いてゐた。

私は、常に鋭い實感の苦痛よりも、奇怪な色、彩を織る空想の重い魘されの方を幾分か快く感じた。

其時、郵便が來た。自ら受取つて見ると田舎の叔母が出した手紙である。まだ封を切らないうちに、孤兒のことについてであると直覺せられた。私の驚き易い胸は、こんな時にも躍るのを禁じられなかつた。果して、手紙には、獨りで立たせるといつた少女は、幸ひ、當地から東京へ行く人があるから、二三日後れるけれど、其の人に頼んで、共に旅立たせるといふ意味のことが書いてあつた。

七

今夜、停車場まで迎ひに出なくてもいゝといふことが、私には、頭の上に宿つてゐた憂はしげな黒雲が去つた後のやうな、輕い嬉しさが感ぜられた。しかし、其の嬉しさも、もう一度反省して味つて見た時には、全くはかない夢に過ぎなかつた。此の世に於て、何等か夢でない幸福を掴んで見たい、空想でない、愉快な事實に出遇つて見たい、長い間、寂然とした、日蔭の如き生活を送つてゐる一家に、大自然の循環の掟として、もはや、明るい日の光りは射して來てもよい時分だと考へもしたのであつた。から思つた刹那、樂しい形の分らない顏が漠然として灰色の未來に笑つてゐるやうな心持がした。私は、尚ほ一層明かに其の顏を見詰めようとした。而して、明日、誰かと利害關係のある事件について、約束したことがなかつたかと考へた。また、自分の懷しいと思ふやうな人が遠くから訪ねて來る筈にでもなつてゐるのでなかつたかと考へた。しかし、すべて是等のはかないやるせないやうな空想は、直ちに、身に迫りつゝある實感によつて破壞せられた。自分は、闇の中に突き出された。其處には、寒い、不公平の世界が眼前に横はつてゐた。

而して、また今夜も、幼兒が夜泣きをするだらうと思つた時、心が暗くなつて、此の世界に苦しまんがため生れて來た如く考へられた。而して、毎夜の睡眠不足から、——夜遲くまで勞働に從事してゐる職工等の欲望と同じいやうに——何處かへ逃げて行つてせめて飽々するまで安眠に耽りたいと思つた。

毎日の如く、太陽の光りが沈みかゝると共に、暫らく忘れられてゐた空怖ろしい沈默と、赤味を帶んだランプの光りが壁や、襖を彩る長い夜の來たのを思はせたのである。

幼兒は、不幸な兩親を選んで産れて來た。盲

日の社會に對する幾多の犧牲者の呪ひ叫びは、永遠に人生の暗い底に流れなければならない。兩親の呪ひ、怖れ、爭ふ心は、直ちに幼兒の精神となつた。兩親の、疲勞、苦痛、屈辱は、直ちに幼兒の不健全な肉體と化した。しかし、自然は、尙ほ、この哀れな幼兒の生命を斷たずに、社會といふ形も、意志も分らない、怪物と最後の血を流すまでの戰鬪に徵集しようとしてゐる。

妻が姙娠した當時は、私等は生活難のために、針のやうに鋭く神經は過敏になつて精神の休まる日がなかつた。而して幼兒の産れたのは去年の夏である。ちやうど日にまし黃金色に葡萄の實が色づいて、枝に止つたまゝ濃い綠色の甘い液に醱酵せられるかと思ふやうに、美しく夕日に樣子が透されて見える、もうやがて夏も行かんとしてゐる頃であつた。庭先には、靑々と木立の葉が繁つてゐるのに、妻が衰弱してゐて乳が不足であつたために、産れた子供は濕氣のない地面に生えた草のやうに、肥立ちがよくなかつた。而して、常に、何物かの暗い影に襲はれて見えた。

此頃は、殆んど毎夜のやうに、夜泣きをするのであつた。こんな、何も知らぬ幼兒の頭の中に、いかなる怖ろしい幻影が映ずるのであらうか？

八

母親から傳はつた、生に對する恐怖心が、惡魔の姿となつて、まだ何を見ても意識がない幼兒の眼に映じて、心を脅かすのでなければ、私の不健全な思想がこの幼兒の頭に殘されて、衝動的に眼を醒してからして毎夜、魂消たやうに泣くのでなからうか。親が、社會の迫害に對して抱いた思想、親が日常祕密に犯して來た罪惡が、其れと無關係に新しい時代を步む幼兒の身心に傳はるといふことは、私ばかりでない、人類の意志でなかつた。この承認し難い自然力に對して、單に不可思議の眼を見張つて、戰慄すべき以外に、人間は採るべき手段はなからうか。

私は考へた。私の産んだ子供は、大きくなつた曉には、私と同じいやうに暗い人生觀に捉へられて苦しみ悶えるだらう。而して、肉體が其の苦しみに堪へられる程健全でなかつたなら、病的な思想は、終に腦髓を破壞してしまふに相違ない。此處に於て、道德家が言ふ如く、親と子が關係は動物的、盲目的、本能的の結果でなくして、ヒューマニズムの上に立脚するものであるとしたなら、初めから子供を産むのを避けなければならなかつた。科學の力によつて避姙を自由になし得る時代にあつては、避け得るといふことを知らないのでない。而して、原始的時代のやうに、子を産むといふことは無意識であると言はれなくなつた。

例を他に假りて言へば、初めから、遂げられない戀であると知つてゐたなら、心で戀してゐても、口に言はなかつた方が却つて、其の人を愛してゐた所以であつたらう……眞に愛してゐたなら、初めから分つてゐた苦痛をさせるに忍びない譯であつた。善惡をたゞさずに、常に有は、無に歸るといふ眞理は、未だ何處にも見出されないのである。

苦しき世界に、生れ出た兒は、自己の運命を呪ふよりも、産んだ其の親を呪ふべきであるまいか？

私は眼付の何處となく臆病げな幼兒を見詰めて、こんな子供を自分が自然に對して何の約束もなしに産んだのを悔いた。子供が親に對して言ふべき怨みはあつても、親が子供に對して怨むべき道理はないと思つた。

母の腕に抱かれてゐた幼兒はいつしか眠りから醒めて、疲れた赤いランプの火影を見詰めて

ゐた。ランプの火影は、無心の幼兒の靑い瞳に、小さな赤い星のやうに、可憐に光りを映じて、慰める如く思はれた。

幼兒は毎日の如く晝過ぎから晩方にかけて僅かばかりの間眠つた。何故、此の時間に限つて眠るかといふことは分らなかつた。若し、私等二人の力で、この幼兒の眠る時間を夜に、換へることが出來たなら是程の幸福はないと思つた。

或日妻は幼兒の眠りかゝつたのを無理に眠させまいとした。きつと夜になつたら晝間の疲れで眠るに相違ない、而して、是から、夜眠る癖を付けなければならぬと言つた。『子供の時分には、癖はどうにでも附くものです。夜、眠ないのは、きつと晝間眠るからなんですから、晝間眠らせない方がいゝと思ひます。』

と、妻は私に向つて言つた。

九

私には幼兒が晝過ぎになるとすや〳〵眠るのには、何等か空氣とか光線のデリケートな官能と關係があるのでないかと考へられたけれど、たゞ默つて妻のするのを見てゐた。妻は、幼兒が眠りかゝると、手を叩いたり、笛を吹いたりして眠るのを妨げた。幼兒は眠る代りに泣きつゞけた。やがて夜が來た。私等は、眠りを催したけれども幼兒は、倘ほ泣き止まなかつた。

『晝間も眠らなかつたのだよ。』

と、私は、此の弱々しい幼兒の肉體の衰弱を氣遣つて言つた。

『坊や、毒だからねんねしておくれ。』

と、妻は、怨めしさうに、幼兒の顏を眺めて、起つて室の中を子守唄をうたつて歩き始めた。

『晝間眠てゐる時に眠させて置けばいゝのだ。癖をつけるといつてお前が眠させなかつたのだ。人間の考へ通りに何事も出來るものだと思つてゐるのが滑稽ぢやないか。』

と、此時私は、妻ばかりでない、世間の自然力を認めずに、たゞ、矯正とか習慣とかいふ教育家が憎くなつた。

長い間、心臟病に罹つてゐる妻は、生活の絶えざる苦痛と、この幼兒の夜泣きのために、靜かに體を休める暇がなかつた。而して妻が一日の中で、僅かにうと〳〵と眠るのも、やはり晝過ぎから晩方にかけての時間に過ぎなかつた。

常の如く、午後の空には、白雲が浮遊して、どんよりと日の光りがうるんだ。さながら、この地球の上に柔かな灰色の絹を被せたやうに、遠く、近く、四邊の物音も靜まつて、家の內が寂然としてしまつた。此時、私は、隣の室で、机に向つて、いろ〳〵な追懷や、空想に耽りながらペンを紙の上に走らした。而して、暫らくこの苦しい生活の意識を離れて、眞に優しみのある自然に同感して、藝術的の享樂に心醉するのも此時であつた。

私は極めて人氣のなかつた畫家である。其の自分の繪畫について辯護するために、新聞雜誌に斷片的の評論を書いたのでない。私は、寧ろ繪具を使はずに、新綠のやうに柔かな綠色の夢のやうな追懷的氣分を文字に描いて、ラインの面白味をリズムに出したいためであつた。而して、私の書いた散文詩が、本職の繪畫よりも、自分の生活を援けたのであつた。

太陽は音もなく西に廻つた。もう、日影が庭の垣根に遮られる頃になると、妻は、先づ怖ろしい思想に眠りを搖られて、隣の室で眼を醒すのであつた。私もまた此の世界の苦しい現實の巷に呼び返されて、子供の時分に遊んだ故鄕の景色や、幼な友達の短い美しき髮を吹いた風に輝きは忽然として眼前から消え失せてしまつた。

赤いランプの光りが、室の中の埃りのかゝつた器具の上を彩つてゐた。濃い漆のやうに黒い夜が、家の周圍を取り卷いてゐる。幼兒は苦しさうに軀を搖つて、さも飢じいのを訴へるやうに、苦しい聲を上げて泣き立てた。惡魔の溜息を吐くやうに、鞭を振りあげて此の世の罪人を擲つ音のやうに、風は杜絶れつ吹いた。

十

私は、頭が其の泣聲の爲めに搔き亂された。而して隣の室に驅け込んで來て怒鳴つた。

『やかましい。何にも考へたり、書けないぢやないか。この兒の泣聲は特別だ。身を切るやうに神經に戰ひ付いて、心が暗くなつてしまふ。』

而して、どうかして泣かさない方法がないかと言つて、妻の默つてゐる青白い横顏を睨み付けた。妻の眼には涙が光つた。私は其の光りが遠い處に輝いてゐるやうに思つた。而して、妻が、どんなことを考へてゐるか知りたかつた。

『貴樣には藝術家に對する同情といふものが少しもない。』

と、言つた。

『だつて、泣くのですもの、私にだつてどうしていゝか分りません。』

と、妻は、怨めしさうに言つた。

『外へ連れて出れ。』

と、私は嚇となつた。而して手荒く襖を閉めて、自分の室に戻つたが机の前には坐らずに、茫然と佇んでゐた。耳を暗い外の風の音に傾けて考へれば、急に氣が靜つて、哀れを催した。生れながら、別々に、孤獨の靈魂が闇の中に、嵐に吹き晒されてゐるのだ。誰の罪でもない、この灰色の世界に生れて、本能を附與せられた生物の苦しき叫びであつた。

私は、此時、戸を開けて、暗い戸外に泣き叫ぶ子供を負つて出かける妻を呼び止めた。而して、茶簞笥の中から、ビスケットの鑵を取り出した。蓋を開けて、ビスケットを摘み出して、幼兒の指に握らせたけれど、其れを食べなかつた。而してやはり泣きつゞけた。私は、哺乳器にミルクを溶かして、ゴムの赤い色の乳首を、幼兒の口に無理に押し込んだけれど、直ちに吐き出した。私は、此の刹那、幼兒自身の氣持になつて見た。自分の欲するものを與へられざるもどかしさと、腹立しさとに、同感することが出來た。母親の乳の不足を感ずる子供よりも、與へることの出來ない母の悲しみを察することが出來なかつた。

『どうして、此の兒は牛乳を飲みませんでせう。』

と、青い顏をした妻はランプの下に坐つて言つた。私は馬鹿ッ！ と怒鳴つて、無同情に見えた其の横顏を擲りたかつた。しかし私はこの衰へた妻に十分の滋養分も與へることが出來ない。かう思ふと、私は、急に悄れてしまつた。

『母親の乳が飲みたいのだらう。』

と、言つた、私の聲は感情のために戰いた。眞面目に努力して働いてゐる自分に對して、冷然として默過する社會がある、人生がある。すべての人間には、其の與へられたる生涯を平和に送るべき筈であつた。人間の壽命は、徒らに自然が與へたものでない。其の壽命を、本能を遂げるため、思索するため、享樂するために送らしめんが爲めであつた。

然るに、吾等は、自然の理法に反した生活を營みつゝあるのだ。しかも私の苦しんでゐる生活を見て、當然の如く冷笑し惡罵する知人や、敵意ある批評家に對して、必ず何時か復讐を企てゝやると思つた。如何なる目的も、事業も、

また破壞も、たゞ自らの生命に執着してゐることを知らなければならなかつた。先づ人間は憧れる、要求する、訴へる。而して得られなければ、自ら打ち碎いて要求する生命を斷つに如かなかつた。

十一

私は、さま／＼なことを考へながら、妻の傍に立つてゐる。常よりも淋しい晩であつた。闇の裡に溜息するやうな風の音は杜絕えつ吹いた。私の心は、風の遠く、木立を搖つてさらに遠方に走つて消える行方に取られてゐたが、眼は下に落ちて、ランプの光りがうす赤く彩つた妻と幼兒を見詰めてゐた。而して妻が青筋の見える凋びた乳房を幼兒の口に當てて、痛々しさうに顏を顰めるのを見ながら、血を吸つても、生きんとする動物の本能が怖ろしくなつた。

此の幼兒の泣く態は醜く、また哀れであつた。青い瘦せた脾腹に波を立てて、腹の中から絞り出すやうに泣くのであつた。ちやうど蠟色のゴム人形の腹を強く壓し附けると、人形は鋭い泣聲を立てるやうに、泣き疲れて、次第に其の聲は細くなり行くのであつた。

此の泣聲は、風の淋しく吹く夜、何處からともなく闇の中から聞えて來る聲でなくて、何處へともなく、血を絞るやうな悲しい泣聲は、此の室の中から、闇の中に消えて行くのであつた。

寒い、黑い木立が呻いて、雲間から、凄い星の光りが洩れる夜中に、この悲しげな、力ない、細い泣聲は、闇の中を何處へともなく辿つて、墓場の方へと消えて行つた。私の家の近くに寺があつた。寺の墓場には、木立が蔽うてゐた。多くの墓は、頭を並べて、晝でもうす暗い日蔭にあつた。其處には、青く苔の生えた墓もあれば、まだ、屍が埋められてから幾日にもならない新しい墓もあつた。靈魂といふものが不滅であつたならば、兒を遺し、親を遺し、思ひを此の世に遺して死んで行つた人々の靈魂が、夜中に、この墓場を步き廻つてゐるであらう。

空の星は不可思議を語り、霜は常磐木の黑ずんだ葉を白く染めてゐる。而して、四邊は、寂然として人の氣はひもしない。此時、偶々、遠くから、闇を辿つて來る幼兒の泣聲を聞き付けて、亡靈は、人間の住家が戀しくなつた。彼等はこの泣聲の聞えて來る方へと、闇の中を迷つて來た。而して、直ぐ私の家の裏庭に入つて來た。雨戸の隙間から、僅かばかりランプの火影が、暗い空漠の世界の中に光りを細長く突込んでゐる。彼等は足音も立てずにこの光りを賴りに進んで、戶の傍に立寄つて隙間から家の內の樣子を覗つた。

ランプの光りを受けて、うす赤味を帶んだ破れた障子や、襖や、穴の明いた壁が人間とは無關係で無心であつた。力の衰へた幼兒が泣きつゞけてゐる。青い顏の母親は、床の上に坐つて思案にくれてゐた。

戶の外に立聞をしてゐる無緣の亡靈は聲を立てなかつた。たゞ、雨氣を含んだ風が戶を鳴らした。淋しい、悲しい、心細い氣分が冷かな空氣と共に一家の內を占領してゐる。私は、いろ／＼の空想に耽つてゐた。其の中にもいつしか、自分が美しい、はかない、夢を追ひながら、知らぬ間に子供の父となつてしまつたといふことが、もはや取り返しのつかぬことのやうに最も悲しかつた。過去を懷へば、すべて夢のやうであるが侚ほ華かで麗しい。現在から未來を思へば、冬のやうに寒く、暗く、墓場が望まれるばかりであつた。

十二

曾て、父や母に我儘をし盡して、晝間の遊び疲れに、何の苦しみもなく、何の考へもなく、

死んだもののやうになつて、日が暮れると、明る日の朝まで眠つた時分のことが考へ出されて、其の時分の幼兒の自分が羨ましくなつた。しかし、其の時分にも、父や、母は、やはり生活の苦闘をつゞけてゐたのであつた。而して、夜は、兩親の惡夢のために襲はれる怖ろしい時であつたに相違ない。

私は、この泣き疲れて、なほも泣き叫ぶ幼兒を抱いて、眞夜中に室の中を子守唄をうたつて、眠かし付けようと歩き廻つた。私は幼兒が乳が不足のために眠れないことを知つてゐた。しかし、其れを忘れて泣かずに眠てくれといふ懇望と憐憫を歌の節に託して訴へた。人間の力でどうすることも出來ない自然力に對して反抗するよりは、寧ろ訴へ、懐しんで、涙ぐんで憐れみを請ふより仕方がなかつた。けれど、私の腕に抱かれてゐる幼兒は、時々、思ひ出したやうに泣き叫んだ。父親の手に抱かれてゐても、忍び寄つて來る惡魔の手に奪ひ去られるのを怖れるやうに、目に見えない何物かの影におびやかされて眼を開いて、火の付くやうに泣き叫んだ。而して、この切なる要求が、親にすら分らないのかといふやうに、悲しく痛ましく響いた。

かうして、毎夜のやうに、私と妻の二人は、この一人の幼兒のために、苦しみから免れることが出來なかつた。

『これでも日數が經てば、どうにかなるだらう……』といふやうな、望みにつながれて、幸福といふものを漠然とした未來に求めた。

灰色の日がつゞいた。惡寒い風が吹いた。私は何時か或る醫者がいつたやうに皮膚が弱かつたので、また風邪に罹つて惡熱に冒されて床についた。而して、三日間といふもの頭痛に苦しめられた。或日、私は、アンチピリンを多量に飲んで、外界が黄色く見えた。而して、眼底に痛みを覺えて物を凝視することに得堪へられなかつた。

既に幾日か病める妻は衰弱してゐて、尚ほ苦しいにもかゝはらず起きて働かなければならなかつた。或朝、私は、重苦しい疲れた眠りから醒めた。隣の室で、妻と曾て聞き慣れない人聲がした。直に、田舎から孤兒を伴れて來た人が訪ねたのだと分つた。

朝日が庭の羅漢松にうす紅の光りを投げた。其の光りには愉快な分子が拔き取られたやうに光澤がなかつた。しかし、此の世界が、日に何となく春めいて來たのである。何處か、遠くの方で鶯の啼聲が聞えた。私の、床を離れた時には、もう、隣の室に來てゐた人の話聲は止んでゐた。其の人は歸つたのであつた。

孤兒だけが私の家に遺されたのである。妻は、孤兒を伴れて來た男は、此方に用向きがあつて出て來た田舎の町の小間物商であると言つた。また、金の指輪をはめて、丈の低い男だといふことも語つた。

私は、心の中でつい一枚の襖を隔てた隣の室まで來た其の男を見なかつたのが名殘惜しいやうな氣持もした。何となれば、もう永遠に其の男を見ないだらう。而して、どうしても其の男の顏には、うすいあばたがあるやうに思はれた。私は、獨り、空想の目に其の男の姿を描いて見た。たとひ眞實の顏はどうであつてもいい、私は、空想の眼に浮んだ顏を其の男の顏と思つて懐しく思つた。而して何となく悲しかつた。

十三

其の日から少女は幼兒を負つて小守唄をうたつた。其の孤兒の眼は硝子のやうに光つて、小鷲の眼のやうに鋭かつた。顏は日に燒けて黑く痩せてゐた。足の爪も、手の爪も延びて、其の中

に泥が溜つてゐた。昨日まで、野山を驅け廻つてゐたことが知れた。何の節とも名のつかぬ憂鬱な子守唄を朝から晩まで口吟んでゐた。

私が、初めて顏を見た時、少女は、氣まり惡いといふ風もせずに、默つて私の顏を見上げたまゝ前に突立つてゐた。妻が、『お辭儀をしなさいよ。』と穩かに言つた時、彼女は、初めてお辭儀といふ、曾て、他人のするのを見たことのあつたものを思ひ出して、妙な手付で、其處に坐つて頭を下げると、再び、其處に突立つて私の顏を見上げたが、色光澤の惡い頰に、うす紅い色を帶んでゐたのが可憐らしかつた。

あゝ、かうして、だん／＼他人になれ、いつしか都會の空氣にしみて、俗化されてしまふのだと考へると、私は、急に少女の今迄遊んでゐた森の多い、風の野に叫ぶ荒涼たる自然を眼に描いて、其處に二たび此の少女を歸してやりたいやうな氣にもなつた。

其の日の午後であつた。

『田舍が戀しくないか？』

と、私は言つて孤兒を眺めた。少女は垢れた頭髮をぎり／＼と引き結んだ頭を下げた。傍に仕事をしてゐた妻が、『この兒をあづかつてゐた家は、遠い親類とかいふんださうですが、この兒を甚くいぢめたさうです。時々、食物を食べさせないこともあつたと、女房といふのが癇癪持で直に火箸で擲つたり、冬の晩に戸の外に出したなり、明る日の朝までかまはなかつたことがあるといひます。ほんたうに、この兒から其の話を聞いて、親のない兒は不憫なものだと思ひました。考へて見れば、いくら甚く、いぢめられて苦しいことがあつても行く家はなし、訴へて見る者もないのですから……今度、旅へ出すにも、これが世話のし納めでありながら、平常着のまゝこんな風をさして寄來す位ですから大抵樣子が分りますが……』と、言つた。

人間の住む所は何處に行つても、こんなやうな悲劇は行はれてゐる。たゞ漫然として、田舍は質朴で、人情に溫厚であると言ふことは出來ない。たゞ、自然は常に最も僞りのない友達である。

幼な馴染の親しい自然を見捨てて、知らぬ他國の空で、同じい冷淡な社會にもまれて、泣くことがあつても、もはや、其の淚を覗いてなぐさめてくれる森の上に出た月影もなければ、家を逃げ出して來ても、其の身を護つてくれる、こんもりとした親しい行きなれた杉の木の森もないであらう……或時は、母となり、或時は、姉となつて淋しい孤兒の身の上を慰めて共に遊んでくれた自然から、遠く離れて來た少女の身の上を悲しく考へた。而して、私は、都會に來るよりも田舍にゐた方が、いくら苦くても幸福であるやうに考へた。

「田舍が戀しくないか。」と、私は、同じいことを聞いた。少女は、やはり、默つて下を向いてしまつた。

「そんな、怖ろしい家などにゐるよりか、いくら東京がいゝか知れないわねえ。」と妻が言つた。

『さうでないさ、やはり、子供の時分から遊びなれた故鄉がいゝにきまつてゐる。』と私は、感慨を催して言つた。

十四

此の孤兒が來てから三日目であつた。前隣の女房が、私の家に怒鳴り込んで來た。あなたの家へ田舍から來た子守が、自分の子供を擲つたばかりでなく、惡口を言つて泣かして歸したといふのであつた。

此時、私は、日當りのいゝ緣側で、小猫を撫でながら、眩しい光りを身に浴びてゐた。遙か南の太平洋を渡つて太陽が近づきつゝあるのを

思ひ、耳許を過ぐるうす寒い、北の青い海の方から吹いて來る風の次第に和ぐのを感じた。而して、遠い處を思はせるやうな、冬が去つて、春の來ない間の心地よい、物々しい空虛のやうに、音もなく、自然は無心でゐるのを見た。私は、空想して、憧れた。しかし、其れは氣にとめて考へて見た時には、全く形のないもので、失望と現實に對する憎みを感ずるに過ぎなかつた。幼少の時分に、よく夢想したやうな、遠い、美しい見られない世界を戀ふる心があつた。幼兒の時分には、いろんなことを空想しながらも、いつか大きくなつたら、其の美しい世界を見ることが出來て、其の幸福が得られるやうに、さながら好い香氣のする酒のやうな、不可思議な氣分に醉はされることが出來た。しかし、今では、空想の破れた後には白い牙を見せて嘲笑ふ醜い悔恨があるばかりだ。

私は、首垂れて、眼を哀れな動物の上に落した。この小猫は生れながら耳が遠く、眼がよく見えなかつた。この小猫の眼には、他の猫に見られないやうな、薄膜がまだ切れずに瞼を半分閉してゐた。

この白い膜が、たえず私の神經を惱まして、一日とて氣にかゝらない日はなかつた。それは自然にかういふ別の膜が、この小猫に限つて生れながら張つてゐるのであらうか、それとも、生れると同時に切れるべき筈のものが未に切れずにゐるのであらうか、分らなかつた。而して、仕事に倦むと猫を抱いて來て、指で瞼を開けて覗きながら、今後、この膜は自然に切れるものであらうか、それとも、私が小刀で切つてやつた方がいゝものであらうかと思つた。私はたびたび小刀で膜を切つたら、其の下から、黑い、圓い、澄みきつた瞳が出て、小猫の目がよく見えるやうになつて、喜んで飛び廻る光景を空想に描いたのであつた。――日の光りは弱々しい瞳の中に映じてゐる。而して、發育の惡い體を掩うてゐる堅い毛は薄く貧しかつた。

妻は、しきりに孤兒のことで、隣の女房に詫びを言つてゐた。私は聞くともなく、隣の女房の話を聞いてゐたが、ふと、自分の子供の時分のことが考へ出されて、よくちよつとしたことで泣いて告げ口をしに歸る子供のあつたことを思ひ出した。而して直ちに、自分の子供の言つたことを信じて、眞赤な顏をして眼に角を立てて怒つて來る母親のあつたことを思ひ浮べて、急に、血が頭の方に走つて、何となく腹立しくなつた。私は出て行つて、隣の女房を怒鳴り歸してやらうと思つたが、無理に堪へてゐた。隣の女房の聲は、だん／＼低くなつた。而して造つて押し付けたやうな笑聲が聞えた。もう、四十に近い、身形を構はない女の姿が目に浮んだ。其の顏には、小皺が寄つて、齒が黃色かつた。『畜婆め！』と私は言つたが、案外に其の聲の大きかつたのに自ら驚かされた。たしかに先方に聞えたと思つた時、二たび心が騷いだ。

孤兒はまだ歸つて來なかつた。僅かばかり、不安な沈默がつゞいた。

『歸つたら、よく言ひ聞かせます。』と、妻が、其場を繕ふやうに、女房に言つたけれども女房は、返事をしなかつた。私は、馬鹿め！と心に叫んだ。而して妻をつく／＼弱い女だと思つた。

十五

それからまた四五日は經つた。妻は、私の仕事に倦んで、緣側に出て、小猫を弄んでゐる處に來て、叔母さんは、とんだ子供を寄來したものだ、あの兒は、性質が荒くて、とても私等の言ふことを聞くやうな子供でないと言つた。

孤兒は、正午前、幼兒を負つて、遊びに出たぎ

り、午後になつて、乳を與へなければならない時刻が來ても歸つて來ないのであつた。妻は、度々、戸口に出て、白く土色の乾いた往來を見遣つた。遠くの木立が鬱悶しく默つて日に光つてゐた。空漠な、悲しい感じは心を襲つた。けれど子供の影も形も見えなかつた。妻は口のうちで、『あんなに言つて聞かせて置くのに。』といつて、眼の前に映つた少女の横顔を睨んだ。刹那また、やるせない悲しみが胸をそゝつた。而して、少女の背で泣き叫ぶ幼を眼に描いた。

『もう、とつくに正午になつたのが分らないのだらうか……』といつて、無智の田舍少女を憐れむやうな氣にもなつた。同時に、ヒステリーの發作の閃きが眼の上に青筋を立て、小皺を寄せた。而して、油のにじんだ、毛の拔けて薄くなつた頭髮の地肌を日に晒しながら、青い顏をして家の内に入つて來ると、私のゐる處に來たのであつた。

『まだ、いくら性質がよくないといつて十二でないか。これから直せばよくならんとも限らない。』

と、私は、たゞから言つたばかりだ。荒々しく、何處か淋しい、北海の自然が産んだ寵兒であつたやうに思はれた。其の寵兒を奪つて都會に放つたやうな氣持もした。私は、妻の言ふことに取り合はなかつた。其れよりも、小猫の眼に半分程かゝつてゐる白い薄膜が氣にかゝつてならなかつた。生れた時に破れるべき筈であつたものが、かうしてかゝつてゐるやうな氣がした。私は、自分の力で、其の薄膜を切つてやつたら、どういふものであらうかと考へた。

空は日の光りにうるんで見えた。やがて春になつて、花が、あの枯れたやうな木立にも咲くだらうと思つた。もう四月には、幾日もないのに、なぜ、いつまで風が、かう寒いだらうか、四月になつたら慌てゝこの寒い風は北に、逃げて行くのだらう……妻は話の附葉がないので默つて去つた。

神經の過敏な、氣の弱い妻には、其後前隣の女房の聲を聞くたびに、一種の不快と理由ない恐怖とに心が襲はれたのであつた。羅漢松の木が黒く繁つて、其の背後に押し付けられたやうな竹の垣根があつた。其の日蔭のうす暗い處で、隣の女房が小さな兒を叱つてゐる聲がした。毎日のやうに、此の女房の子供を叱る、嚙み付くやうな、聲を聞かない日がなかつた。私は彼女が子供に對して、愛といふやうな分子を其の聲の裡から感ずることが出來なかつた。たゞ、同類の憎しみである、殘忍の閃きである、自分の子供といふことを忘れた眞に敵視した叫びである。この聲を聞いた時に、先づ妻は口のうちで、『よく、子供を叱る人だ。』と、傍にゐた私には聞えないやうな聲で垣根の方に瞳を向けて言つた。しかし、私には、其の瞳のうちに、一種の怖れと、反抗と、憎みのあつたのを認めた。やはり、妻は、隣の肥つた聲の太い女房を怖れてゐるのだと思つた。

『あの兒を田舍へ歸しませう。私にはどうしても面倒を見て行くことが出來ません。』

と、妻は話を孤兒の身の上に轉じて私に向つて言つた。

私は直ちに妻の複雜な、矛盾した、而して、物におびやかされてゐるやうな心理狀態を察知することが出來た。

『お前が、呼び寄せたのだよ。』

『いゝえ、あなたが……』

『まあいゝさ。明日にでも歸してしまはう。さう言つて叔母に手紙を出すから。』

と、私はもうすべて過ぎ去つた問題の如く執着しなかつた。妻は、考へ込んだ。

『でもねえ、折角來たのだから……歸れば、またいぢめられるのですから。』

と、言つて、心にもないことを言つたのを、獨り悔いる樣子が見えた。

十六

『飯さへ澤山食べれば、意地が汚くならない。』

と、いふ低い話聲が聞えた。天井張は頭の上を押へ付けて、ランプの光りは、黄色く濁つてゐる。私はこんな話を聞くと、自分の現在ゐる苦しい貧しい、牢獄の生活を意識して、いらいらと其處に突立つた。其時、私は、ペンを下に置いて、自分の書きつゝあつた作品の價値について考へてゐた。自然力に對して其の力を爭ふ藝術的の價値である。自分は、この宇宙に存在する最も微かな、弱いものに對しても、自分の生命を捧げて歌ふべき力の潛んでゐることを知つた。たとへば、草の葉を赤く染めて、地平線に沈む夕日に對して、うすく曇つた日に、木の葉の暮方の風に搖れてゐる景色に對して、後方を向いて默つてすゝり泣く女の姿に對して、また、故郷の生れた家の裏長屋の絲車を廻してゐた、見覺えの微かにある老婆の幻に對して、其處に、此の天地の不可思議な、悲哀の力の潛んでゐるのを思うて、それを描き歌ふために自分の短い生命と生活と幸福を犧牲にしていゝと思つた。而して、かういふ氣持と、眞率の態度で書いた、自分の未成品の價値を考へたのである。然るに、當時の或る批評家は、私の小品を空想の産物として、人生に寄與のないものだと斷言したものもあつた。さうであつたなら、私は何のために生きてゐるのだらうと惑つたこともあつた。また、眞に悲しくなつて、泣いたこともあつた。而して、中には、私の生活を幾分なりと知つてゐた批評家は、なぜ君は、あんな灰色の雲とか、遠い遠い空とかいふやうな夢のやうなことを書かずに、此頃の、書物を賣食ひしてゐる、日々の苦しい生活を生々しく有の儘に書かないのか、なぜ、君は、此の人生と關係のない空想の天地に遊んでゐるのか？と詰つたものもあつた。

決して遊んでゐるのでない！　私は、柔しい、悲しい、また物哀れな感情の響きを此の實生活と關係のない、セルフイシュな樂しみのための藝術とは思はなかつた。暗い、陰氣な工場で重い槌を揮つて、鐵を叩いてゐる男は、常に火と、鐵と、煉瓦の壁とを考へてゐるものでない。たまたま、空想は、遙かの空を翔けめぐる。而して、彼等の冷かな堅くなつた胸にも、しめつぽい故郷の野原を吹く風は吹く。雲や、小鳥の歌は、さまざまな思ひを呼び返して、新しい子供の時分のやうな血潮を波立てる。其時の涙は眞實の涙である。思ひは、すなほな、眞面目な思ひである。其處に、人生の眞相がある！　力のある藝術は、深い溜息と、深い哀愁とを、底知れぬ谷間から、立ち上る霧のやうに、いつとなしに身をつゝむものでなければならない。

私は藝術といふものを美しいもの、優しいもの、而して力のあるものと思つてゐる。私は此の地球の上に錯雜して紛起する、多くの事件に對して、寧ろ、其の事件を彩る人間の目に見えない感情とか、若しくは、自然力の祕密な關係とかを感ずるものである。而して、レールの上に流れた、血潮を見て必ずしも驚かない、鈍色に光るレールを見詰めて佇んでゐた人の神經の働きを想像して怖ろしく思ふ。こゝに恐怖を描く藝術家があるとする。必ずしも其の人は超自然の妖怪を書かない。殺人、強盗、自殺を書かない。一室の中に瓶に插された黄色な花の凋れて色褪めて行くのにも、自然力の怖ろしさと、戰慄を感ずることが出來るのであつた。同じく生活の慵ましさから産れる、さまざまの憧憬的の色彩ある作品は、人間の生命を求める時、眼から迸る情火の閃きである。眞率を缺き、

何等時代に反抗的精神のない、節操のない批評家の知る處でなかつた。

十七

ある誤解せる自然主義者は、人生の事實を爭鬪としか見得なかつたのであつた。而して、同情の缺乏に泣き、戀愛のために悶える幾何の人生のあることを知らなかつた。即ち爭鬪は、同情と同感の缺乏から起る、人間の不自然な、悲劇であるといふことを知らせなかつた。自然に歸れ！ 原始時代の感情を持てよといふ藝術上の主張は、唯物主義に反抗したロマンチシストの叫びであつて、何の時代にもこの叫びには變りがなかつた。何となれば幸福を不公平に配ち與へる社會制度の下に生存して、我等は、常に物質の缺乏に苦しみ、爲めに過度の肉體の疲勞を感じて、尚ほ、理想あるがために精神の苦痛に泣かなければならなかつた。而して、これを改めるためには、藝術的理想主義より、人間自然の感情に歸る運動を起すにあつた。原始時代の、子供らしい僞りない感情を慕ひ、喜ぶの情に堪へなかつたからである。

私は、机に向つて書きかけてゐた、小品を讀み返して、果してこれが、自分の主張を示した、人生の悲哀に觸れた作品であらうかと考へた。而して、空漠とした、はかない悲しみのために心が暗くなつた私は、ちやうど自分が勞作に疲れて、考へに倦んだ者の筋肉がたるんで、しかも心のうちでは泣いて、神經は益々過敏になりながら、肉體の之に伴はない場合がある、其時の姿がありありと浮んだ。

たるんだ筋！ ちやうど其のやうに、この作品には、生氣と鋭い力といふものが缺けてゐるやうだ。あまり、自分は、生活のために臆病になつてしまつたのだ。知らず、知らずのうちに、俗世間の批評に動かされて、氣がいぢけてしまつたのだ。藝術家の精神は、常に自由で、廣く、大きくなければならない。いかに、鋭い自意識を必要としても、尚ほ一面に、奔放な雲を呼び、風に乘じて、星影を掠めて飛ぶ感情の活躍がなければならない。生氣と精彩と、驚くべき魅する力といふものは、天才的の感興に待たなければならない。解剖と寫實に終る藝術は、さながら、人にたとへたなら、俯向き、眼を地上に注いで、とぼとぼと背を圓くして歩いてゐる、灰色の影に似てゐる。もう、年老つて、躍つたり、跳ねたりすることの出來ぬ人のやうだ。

私は、さう思つて書きかけてゐた自分の原稿を引き破つてしまつた。而して、注意が散つて隣の室に氣をとめるともなく妻の孤兒に言つてゐる話聲を聞いたのであつた。

『飯さへ澤山食べれば、意地が汚くならない。』

妻が孤兒に向つて言つてゐるのだ。私は、あの氣が弱い、女の口から、いつこんなことを言ふやうになつたかと疑つた。この現實的な、どん底の經驗をして來た人の言葉のやうな、曾て、青空を見て、遠い、空想に耽つたことのないやうな人間の思想を表白した言葉を聞くのを悲しんだ。而して、いつしか自分等の貧しい生活は、私等の若々しい空想の世界を全く闇に破壞してしまつたのだと呪つた。

私は、この廣い社會には、この風の吹く夜を、こんな暗い考へに耽らずに、また、こんな貧しい生活を知らずに、樂しく、賑かに、贅澤に笑つて送る人もあると思つた。而して、其等の人々は、同じく自分等の住む地球の上には、幾多の偶然にして、且つ盲目の運命に弄ばれて或者は幸福に送り、或者は逆境にゐるといふことを果して考へてゐるであらうか？

十八

風の吹く、頼りない晩であつた。外は、暗くて

星の光りもなかつた。もう、直に春が來るのだらう……此頃は、毎夜のやうに風が吹いて、風は、北へと逃げて行くやうだ。妻は、聲を殺して、低い憚るやうな調子で、孤兒に對して決して他人の持つてゐる物を欲しがつてはならないと言つてゐた。勿論、私が此方の室で、耳を澄してこんな話を聞いてゐるとは、妻は思はなかつた。やはり、私は、熱心に机に向つて、ペンを動かして、創作に耽つてゐると思つた。また、私が、原稿を引き裂いて茫然として、深い、絶望に陷つてゐることを知らなかつた。私は耳を澄して話を聞いてゐたばかりでなく、妻の心理狀態をも觀察してゐたのである。

私は考へさされた。この地球の上に存在するすべての物は、其の初めは、誰の所有にも屬さなかつた。また、深く考へれば、如何なるものでも、全く自分の獨占にするといふことは意味のないことである。幼年時代乃至少年時代の思想は、最も自然に近いものである。彼等は、如何なる貴重な品物に對しても、特別に、俗人の言ふやうな、金錢上の意味の價値を認めない。欲しい時に其れを手に持つて弄ぶ。飽きれば其れを地上に投げ捨て、他人の拾つて行くのを何んとも思つてゐない。大人のやうに、飽迄、其の物の金錢上の價値を考へて自分の所有にしようとは思はない。若し、社會の人々が、悉く、この幼年乃至少年時代の考へでゐたなら、この社會には特別の貴重のものといふものはない筈である。すべての物の價値は平等とならる筈であるまいか。

社會の人々が、自らを護らなければならなくなつたのは、此の人生の墮落でなければならぬ。然るに多くの人は自分の經驗について、知識について、思想について其れを正しいものとして疑はない。罪惡に汚れた思想を子供の頭に吹き込んで教育と呼んでゐるのである。而して、他人のものを欲しがつてはならない、他人のものを盜んではならない、と教へられたために、却つて子供等は、何も知らなかつた頭に罪惡といふやうな黑い影を刻み込まれるのである。人間は自然に生活して行くために、必要の知識だけは持つて産れて來た。人間が不自然な境遇によつて學び得た知識は、これと同じいやうな境遇にゐる人にとつて必要となるとも、自然の生活にとつては不必要な不快なものでなければならぬ。正直に言葉を信ずる人にとつては、他人の顏色を窺ふ機敏と警戒は要なきものであつた。此の自然界には初めから善なる事實もなければ、惡なる事實もない。たゞ人間が、社會生活を標準として、自由の解釋に基づいて善とも見、惡とも見るに至つたのである。原始時代にあつては人間は、自己の境遇に從つて、本能を遂げるだけの知識しか必要を感じなかつた。現代にあつては、不自然な苦しい生活をせなければならぬために、神經が過敏に働いて、遂に病的となり、惡夢に魘されて、この虛心の自然界をさまぐに見、苦しみ、惱み、憎んで日を送つてゐるのである。私はこのうす暗い、黄昏のやうな過渡期の社會に産れて、しかも默々として死んで行くものの運命を考へた。妻の如きも、卽ち其の淋しい影の一つであつた。而して、比較的餘裕のある、未開の田舍に生れた無智の少女が、この都會に出て來たのを惡いことのやうに考へた。

十九

家の外には春が來た。けれど春は家の戶口から内には入らなかつた。窓を開けて見ると、何の木も赤く色づいて、新しい生命が宿つたやうに思はれた。垣根の隅に枯れかゝつてゐた桃の木にも花が咲いてゐた。

私は、急に、全く、別の世界に來たやうな氣持

がした。而して此の世界が、自分の侮辱せられ、苦悶して來た、辛い、また罪惡に汚れた灰色の、同じい世界であるとは思はれなかつた。今迄、あまり人通りのなかつた往來の上を、華かな笑ひ聲を立てて、若い女が行つた。また、他にもいろんな人が話しながら、花見物に行くのであつた。しかし、家の内は、寂然として、冬の日が障子に差した時と變りがなかつた。妻も、私も、子供も、まだ冬からの衣物を着てゐた。

庭には地面の上にいつしか家根を外れて、暖かな日の光りが落ちたけれど、すべての草花の根は長い冬の間に凍えて腐れてしまつたと見えて、去年植ゑたチュリップは芽も出なければ、他に花も咲かなかつた。私は、やはり暗い思想に襲はれて、常に氣が滅入つてゐた。

障子の硝子板を透して、庭の羅漢松の黑ずんだ、埃のかゝつたやうに日の光りを受けた葉の色を瞳に映しながら、極端に病的な人生を色濃く描くために、ペンを執つて机に向つてゐると、私には、春が來たといふことが、私の存在とは何の關係もないやうに思はれた。獨り、私ばかりでない、妻にとつても、また小猫にとつても、少くともこの一家の者とは何の關係ないやうに思はれた。

春は地上の草木に新しい生命を惠まんがために來た。而して、冷酷な冬のために傷ついた草木は、すべてこの暖かな日の光りに蘇生つた。しかし、人生の春は、永遠に來ない。私等のやうな、生活の爲に傷ついたものは、遂に人生の春を見ずして死んでしまふのだらうと思つた。

なぜ、私は、春の來るのをあんなに待つてゐたであらう。さながら、春になつたら、苦しい身に纏つた繩が切り放されて、眞の自由は得られて、樂しいことがあるやうに思つてゐた。而して、毎日、青く、狂人の瞳のやうに、淒く冴えた二月の空を見て、早く、肌に染む、寒い北風の逃げて行くのを思つたのであつた。また、太平洋の波の上を照らして、黃色く燃える太陽の近づきつゝあることを思ひ、而して綠葉の頃になつたら頸のまはりの赤い燕が飛んで來て、いろんな小さな、赤い、白い花が咲いて、此の地球の上を麗しく彩るだらうと思つた。而して、其れが自分のために自然がしてくれるやうに考へて、樂しく、心に待ち憧れてゐたのであつた。

遂に、春が來た。けれど、其れは、哀れな、空想兒を樂しませんがためではなかつた。やはり、夕日は、灰色の壁を、昨日の如く染めて、濕りかへつた空氣の裡に依然として生活の努力は營まれた。やはり、私の心は樂しむことが出來なかつた。却つて、春は、私の一家を除いて、他の人々に愉快な樂しい遊び場を造つてくれたやうな氣持がした。毎日のやうに、私の家の横手を、さまぐ\の女や、男が賑かに、さも心から苦痛といふものを忘れて樂しさうに話して、群をなして花見に行くのが通つた。私には、此時、『どうして、あれ等の人々は、あゝしてのんきに日が送れるのであらう。』と考へられた。而して、私は、淡く哀愁の霧がかゝつた、空虛な室の裡を見廻した。其處には、隣の室で顏色の靑い、窶れた妻が襤褸を綴つて幼兒の春衣を作つてゐるのであつた。緣側には、眼のよく見えない、耳の遠い、鼻も惡い、魯鈍な猫が竦んで人間の心も疑はずに心地よく眠つてゐるのであつた。

二十

花の散つた頃だ。ある日、正午時分、孤兒は、背に負さつてゐる幼兒に乳を飲ますために外から歸つて來た。而して、妻は何やら少女に向つて小言をいつてゐた。『お前は、何と言つて叱ら

れても笑つてばかりゐる。少しは、身に染みて直すやうにしなければならぬ。』と、言つてゐる聲が聞えたのであつた。

私は、此時、茫然として庭の木立を見詰めてゐた。青桐の若葉が、日の光りに輝いて、靜かな、晩春の愁しみが空氣の裡に流れてゐた。しばらくすると、妻の話聲は止んで、家の外で少女の子守唄の聲がした。其の聲は、私に、故郷の丘や、麥圃や、青い海を思はせた。

私の眼にさま／＼の幻想が浮んだ。北の方から、哀愁を含んだ潮風が、少女の頭髮を吹いて、魚と磯草の香の漂つてゐる小さな港町を、少女が素跣で歩いてゐたことがあつた。少女は、問屋の、前に立つてゐる高い竿の頂きに、赤い旗が、青い、無限の空の下に飜つてゐたのを見たこともあつた。

また、村端れに立つてゐて、彌彥詣りに行く人々が、山路を歩いて、風に日が輝く杉の木の下を通つて、麓の青田で啼く蛙の聲に、恍惚と聞きとれて、汗ばんだ額を拭き、立止つて遲咲のうす赤いうつぎの花を見たり、遙か隔つた處で晩春を惜しむ鶯の鳴聲を聞いてゐるのを見た。しかし其等の人々は、からして旅してゐる間にも、心は我が村に歸つていろ／＼と家のことを考へたり、金圓の出納を計算したりして思ひを煩はすのであつた。

この孤兒は、濱に、山に子守にやられたと言つた。けれども二月とはゐなかつた。まだ物心のつかぬ幼兒の時分から他人の手に育てられて、いろ／＼の悲しい目、つらい目に遇つて來た孤兒は、早くから何處へ行つても、生きて行けるといふ思想を持つた。自然は、不幸な孤兒に家を定めずして青空を家として生活する漂浪の味を敎へたのである。けれど此の少女の歌つてゐる子守唄には、一種の哀しい響きがあつた。

秋の寒い晩に月が雜木林から光りを投げて、旣に、霜が眞白に圃の上に降りて、月の光りを受けて、青白く輝いてゐる時分になつても、まだ、戶の外に立つて、子守唄をうたひながら背中の幼兒を眠付かせなければならなかつたであらう。私は、子供の時分によく、隣のお作が、やはりこんなやうな哀れつぽい子守唄をうたつて、晩方遲くまで家の外に立つて背中の幼兒を眠かし付けてゐたのを覺えてゐる。お作の母親はよくお作を叱つたものだ。私の家と、お作の家との境には大きな柿の木があつて、しめつぽい曇つた空を渡る風に葉がひら／＼と鳴つた。壞れかゝつた家の前の土塀には、石の間から蟋蟀が啼いてゐた。お作は、どうしたであらう……眼の涼しい、色の黑い顏であつた。私が、十三の頃、學校へ通つてゐる時分に、上州へ行つたきり再び私の村には歸つて來なかつた。

晩方、孤兒が歸つて來た時に、私はランプの下で少女をしみ／＼と見た。小險しい眼は、遠い處のものが何んでも見えるやうに冴えてゐた。而して、田舍から着て來た衣物に處々土がついてゐるのを見て、私は、針仕事をしてゐる妻を見返つて、『この兒にも新しい着物を被せてやらなければならない。』と言つた。妻は顏を上げて、

『この着物が縫ひ上つてしまつたら、次に此の兒のを縫つてやるつもりでゐます。』と答へた。

二十一

孤兒は父の顏を知らなかつた。母は五歲の時に死んだ。彼女は、母の死んだ日のことを朧げながらに覺えてゐる。恐らく、これが最も幼年時代の記憶であるやうに思はれた。人間は僅かに記憶によつて、過去を感ずるものだ。しかも記憶の絲はだん／＼遠ざかるに從つて、ぼんやりとした灰色の世界の裡に消えてしまふ。誰れしも、よく、幼兒の時分にあつたことを思ひ

出し得るものがない。たま〳〵、其のぼんやりとした灰色の世界から、顏を出してゐる記憶があつても、其の顏の輪郭ははつきりとしてゐなかつた。

哀れな少女は、誰もゐない時に、ぼんやりとして日に映る母の顏を、もつとはつきりと見たいと願つた。すると、不思議にまだ五つ時分の小さな自分の姿が目に浮んで來る。ちやうど、もう一つ自分といふものが浮き出たやうに思はれた。而して、まだ何も知らぬ自分が、何かして遊んでゐると、其處へ母が入つて來た。何となく、自分を抱いてくれたり、自分といつしよに寢てくれる時の樣子とは異つてゐた。『いゝ子だからおとなしくしてゐるのだよ。母ちやんは、ちよつと他へ行つて來るから、もう直に彼方の叔母さんが來て下さるから……』と、母は言つて姿は見えなくなつた。少女は、日が暮れる時分になつても母が歸つて來ないので、大きな聲で泣き叫んだことを覺えてゐる。また、其時見なれない女の人が、もう、母ちやんは歸つて來ないのだよと言つた。尚ほ悲しくなつて、家の外に出て、彼方の森の方を見て母の歸つて來るのを待ち憧れて泣き叫んだ。すると其の女の人は、『この兒は聞き分のない兒だよ。』と言つたので、其の女の人を怖い人だと思つた。――少女の記憶はこれだけである。

母は遂に歸らなかつた。其れから、孤兒はこの女の人に育てられた。少女は、後になつて、母は、其の日、他へ出て行くと自分を僞つて、二階に上つて自ら縊死したのを知つた。親類の女の人は、屢々、其の日のことを物語つて聞かせた。『其の日は曇つた日で、裏の麥圃で村の人が、此方の家で人が自殺したのも知らずに、歌をうたつて肥を撒いてゐた。』と言つた。また女の人は、何か氣に障つたことがあると、孤兒を口穢く叱つて、其の言葉の終りには、『お前の母親も、不品行をしたものさ。それで、あんな死態を晒したのだ。お前も、後にはどんなものになるか、怖ろしいもんだ。』と毒々しく言つたことがあつた。

私の家に、此の孤兒が來てから、いつしか三十日は經つてしまつた。其間、私は、叱らなければならない時でも、眼前に其の孤兒の姿を見ると急に憐れを催した。親がない兒だ。誰か、親身になつて此の兒を護つてくれるものがあるか。此の兒は、此の世界に、全く孤獨な兒である。かう思ふと、其れぎり默つてしまつた。而して、私も、妻も、『自分は、孤兒だ。』といふ反省をするやうな話題は、少女の前では避けてゐた。

或時、私は、感激して、『お前は孤兒だ。お母さんのことを思ふことがあらう。』と言つた。すると少女は、顏の色も變へずに、にや〳〵笑つてゐた。『何といつて叱つても、身に染みて直すといふことはせずに笑つてゐる。』と、曾て妻の言つた言葉を思ひ出した私は、腹立しくなつた。

『お前は、眞に自分の身を哀れに感じないか。』と、いつた。けれど、少女は、にや〳〵下を向いて笑つてゐた。私は、考へざるを得なかつた。

この孤兒は、これ迄、幾たび泣いたか知れなからう、而して、擲られた時に聲を上げて苦痛を訴へたか知れなからう。けれど、社會は、他の兒の涙といふものを餘りに安く見て過した。遂に、この孤兒は泣かなくなつた。心で苦しみを感じ、悲しいと思つても、眼に涙も湧かなければ、聲にも出さなくなつた。自然は、この孤兒に涙の不必要を知らせたばかりでない、此の少女の眼から涙を奪つて、涙の不必要な冷酷な境遇に適合するやうに體を作り代へてしまつた。而して、社會から迫害せられた場合に泣

かずして笑ふといふ、一種の皮肉な、敵に對する反抗を教へたのであつた。少女の頰や、背中には、擲たれた紫色にあざとなつた血の泌んだ痕があつた。

二十二

此頃になつて、幼兒は夜もすや〳〵と眠るやうになつた。人間の筋肉に疲れを感じさせるやうな甘い愁しみと、やるせない思ひをさせる暮春の時節となつた。日にまし、青桐の葉は大きくなつた。荒れて色彩に貧しかつた庭にも、すべての木が生々として若葉を出して賑かになつた。而して狹苦しいまでに地面の空間を塞いだ。窮りない大空から射し込む光線は、若葉の間を洩れて、うす青い色に、木々の放つ香氣を含んで室の裡に溢れた。其處に、幼兒は臥かされて、おとなしく牛乳罎についてゐる赤い色の乳頭を弄んで、何やら譯の分らぬことを言つて、弱々しい柔かな瞳を、青桐の方に向けてゐた。動物の春情發動時期と見えて、牝を戀ふ牡猫の鳴聲が、暗い木蔭に聞えた。私は、退屈まぎれに、どんな毛色の猫であらうか見届けようと思つて緣側に出て、庭に下りて下駄を穿きかけた時分には、其の切なさうな苦しいうちにも甘えるやうな啼聲は、何處か遠くに行つて、聞えて來たのである。多くの他の猫は、かうして、如何ともし難い性慾のせめに狂ひ騷いでゐるのであつて、獨り、私の、小さな猫は、日にまし痩せて元氣がなく、緣側に出て眠つてゐるのであつた。

私は、暫らく、緣側に腰をかけて、この肥立の惡い、自分の幼兒と小猫とを眺めてゐた。而して、何となく心に期するところがあつた。――かうして、日が經てば、いつか此の兒は強くなるだらう――と思つたからだ。しかしそれは單に幼兒の身の上にとつてであつた。眼を小猫の方に移して見入つた時に、痩せた脾腹のあたりに、呼吸すると骨が露はれた。また、鼻の惡いせゐか、其の呼吸はいかにも苦しさうであつた。私は、指頭で小猫の瞼を靜かに開いて覗き込んだ。其の眼には、半分白い色の不要と思はれるやうな薄い膜が懸つて、視力を遮つてゐる。次に、私は、鼻の穴を覗いて見た。けれど、其の息苦しい原因を見出すことが出來なかつた。最後に私は、猫の耳の穴を吹いて見た。魯鈍な猫は驚いて走つた。私は、小刀で眼を半分閉いだ白い膜を切つたらどんなものだらう……といふ空想に耽つた。

畢竟此の猫は初めから不具に生れて來た。而して、其の五感の發達を缺いてゐるために魯鈍であつた。從つて、他の壯健な猫のやうに、駈け騷ぐことも出來なければ、また、性慾を感ずることも少かつた。斯のやうに、生れながら不具に、癡鈍に生れて來た動物は、いくら養生して體が強くなつたとて、到底普通の猫のやうになれないと考へた。――さうすると自分はこの猫の死ぬまで哀れな態を見てゐなければならなかつた。私は、何となく、暗い、氣持に襲はれた。說明の出來ない不快を感じた。

日に三度、小猫に與へる飯は、妻のすることに定めて置いた。此日、私は、自分で久しぶりに猫に飯をやらうと思つて勝手に來て鰹節を削つた。すると、耳の遠い魯鈍な猫は、この鉋の音だけは耳に敏く聞えて走つて來た。而して私の坐つてゐる身の周圍に摺り付いて人懷しげに泣いた。

二十三

私は、鰹節を削り終つて、輕く小猫の頭を叩きながら、「待つてゐれよ。」と言つて、小猫の飯皿の乘つてゐる盆のある處に來て見た。すると、もう何日前に入れたか知れない飯が、乾いて

堅くなつてゐた。私は、これを見ると急に傍に來て泣いてゐた小猫が、さも自分に訴へてゐるやうに思へて哀れになつた。私は、直ちに妻の針仕事をしてゐる室に來て、『なんで、親切に猫に飯をやらんのだ。』と、投げ付けるやうに怒鳴つた。すると妻は、もう、何日も前から、猫の飯は、少女に委してゐると言つた。私は少女を探した。けれど家にはゐなかつた。私は手に持つてゐる盆を外の日が當つてゐる地の上に投げ付けた。而して、勝手に來て水を汲んで清潔に猫の飯皿を洗つて、尙ほ付いてゐる黴菌を殺すために盆と共に日光に晒して置いた。

其後、私は、幾たびとなく少女に向つて、殆んど毎朝のやうに、自分等が飯を食べてしまふと、同じことを繰り返して言つた。

『親切に、猫に飯をやるんだよ。』

と。すると少女は、『ハイ。』と返事をした。けれど、偶然、私が、勝手に出て見ると、猫の飯皿には、何もなかつたり、また幾日も皿を洗つてやらぬので、古い飯が乾き付いて、其れに蠅が止つてゐたりするのを見た。私は思つた。自分が不幸の兒だからとて、其者は必ずしも、更に不幸の者に對して憐みを抱くものでない。此の世界は、やはり、弱い者が虐待されて行くのだ。

最近、私を慰めてくれた唯一の友であり、室の色彩であつたものは、ムーテルの近世繪畫史であつた。此の書を買ふために、當時の餘裕のない生活では、どれだけの苦心であつたか知れない。けれど其の苦心は、希望のある、樂しい苦心であつたと言ひ得る。私は、たび／＼、多くの書物を賣り拂つたけれど此の書物だけは、其の他の二三册の愛讀書と共に最後まで賣らなかつた。私は、いつまでもどんなことがあつても賣らないと思つた。――しかし、後に至つて、ある困難のために、遂に此の書も手放してしまつたが――私は中でも、第三卷を最も愛した。其の一册には私の大好きなベックリンや、ギュスターヴ・モローのことが書いてあつた。私は、常に、此の第三卷目を讀み耽つた。或時は机の上に置いて、或時は疊の上に開いて、自分も臥轉んでゐて樂しみに見てゐたので、此の一册だけが殊に手垢がついて際立つて汚れてゐた。

此日の午後、私は、モローの處を讀みながら、冷たい紅い色、冷たい青い色を使つて描かれたクラシカルの匂ひのゆかしいザロメの傑作を想像してゐるうちに、いつしか私は高い超現實界に聳えてゐる山の巓に立つてゐるやうな好い氣持になつてゐたかと思ふと、いつしか知らずうと／＼と眠つてしまつた。

私は來客によつて眼を醒されたのである。此頃、來始めた例の批評家であつた。病後の彼は頭髮が薄くなつて、顏の色が惡かつた。私は、どういふものか、此の男に遇ふと平靜な感情の調和が破られた。而して、最も、現實に對する惡感を此の男を見た時より鋭く意識せられたことがなかつた。批評家は故意に逆境の私を嘲るといふやうな態度を示してゐた。彼の目付は何物かに饑ゑてゐるやうな、疑ひ深いやうな、女のやうな感情を囁いてゐた。私はこの眼を見た時、この眼を向けられた時、藝術家といふもののすべての誇りも、男性的自尊心も、イリュージョンも打ち壞された。而して、今迄、忘れてゐた、煩はしい感情をそゝられて胸がわくわくなつた。彼は此の不思議な點に於てたしかにラザロである！

二十四

懷しく思ふ藝術家は眞率で、無邪氣で、而して主義の人であつた。しかし、いづれの時代でも、藝術の評價がたとひ一時的であつても、群集によつて定められたることを知つた時に、また、無主義の批評家によつて定められること

を知つた時に、私は、徒らに反抗的氣分と不安とに心が襲はれた。而して人生のために闘つた幾多の眞面目な藝術家の生活に死活の途を拓いた所謂人氣とか、輿論とかいふものの多くは、根本のいはれなくして結果の怖るべきであつたことを感じた。此時瘦せた馬面の批評家の、物欲しさうな、嫉妬深いやうな、物質と精神の儀を語るやうな、臆病げな、不安げな瞳が意味ありげに私の顏の上に向けられた。彼は、常に、私に對して虛心で藝術を語ることが出來なかつた。彼はたえず自分を語らなければ、內面的に寂寥を感ずる人であつた。而して、現時の藝術家の世間的の地位を自分等の筆の力で授けたり、奪つたりすることが出來ると思つてゐた。而して、この淺果な、憐れむべき自尊心は、せめても、殆んど空虛に等しい生活的意識をまぎらせてゐる唯一の霞のやうな影であつた。彼が、此の內面的生活を反省した時に起る淋しさ、藝術的努力の對象を確かに握り得ざる怨みは、歪て、讒誣の鉾となつて、默々として主義のために途を歩いてゐる作家を罵倒し、中傷するに向けられたのである。かゝる批評家は、極端に厚顏であつた。羞恥を知り、言責を貴んずることが男性の權威であると感じなかつた。たゞ、機敏に時流の趣く所に從つた。而して、離合常なく、賣女のやうに巧言の阿諛と、圓滑なる讒誣とを手に入れて世を渡つて行つた。眞の藝術家らしい不遇の藝術家が自殺する時にあつて、是等の不貞の黨は決して餓死はしなかつた。社會は案外に盲目である、無智である。而して群集は、藝術家の終生闘はなければならぬ性質を帶びてゐた。ラザロのやうな批評家は言つた。

「何といつても、君は、あの頃の人々の中では、趣味の人だよ。」

「Mや、Kが、今のやうなあれだけの地位になつたんだつて、僕が、S紙上に書いたのなどが影響してゐるのは分つてゐるさ。何時か君のことも書いて上げよう……」と、嘲るやうな、いやらしい目附で私の顏を見て特有の音のない笑ひを見せた。

其時私は何となく不安を感じた。其れは、誰しも全然人氣以外に立ち得るものでないと思つたからだ。さう考へると、自分の長い努力も、目的も、容易に他人の意志によつて或程度までは妨害せられるやうな氣がした。私はたゞ默つてゐた。落付きのない彼は、立ち上つて私の書物棚の前に來て、忙しさうに其の中を探り始めた。彼の、青白い髭の疎な顏が、幽靈の樣に硝子戸の上に映つてゐた。「君は何かシモンズのものを持つてゐないかね。」と言つた。私は、其處にあるだけだと言つた。彼は、忙しさうに其れを抜いて中を擴げてみたが、「君はマーテルリンクなんか讀まずにモーパッサンを讀みたまへ。」といつた。私は默つてゐた。彼は、トルストイを褒めた。而して、私の書く小品や、隨筆はあまり空想的であるといつて冷笑して歸つた。

二十五

彼の批評家の言ふやうに、私は今後努力せなければならなかつた。ちやうど其時、私の机の傍には『アーサーシモンズの態度』といふ評論の載つてゐる近著のアウトルックがあつた。私に、雜誌を取り上げて、其の論旨を思ひ返した。或る批評家がシモンズの精神的努力に說き及ぼして、シモンズは遂に苦悶の人たるを免れない、自由の人たらんとして、放縱な生活をした、けれど、其處にも靈魂の休息を見出さなかつた、彼は、神祕主義者の同時に信仰であつた象徴的藝術から鍵を探つて、現實苦逃避の途を僅かに此の幽遠の境地に見出さうとした、けれど、カソリシズムの氷のやうに冷かな窮屈

の衣は、燃える焔の肉體を押し付けてゐる、シモンズは終生矛盾と闘ひ靈肉の苦悶に狂ひ叫ぶ人であつたといふやうな意味のことであつた。私の好きな批評家は、かういふ眞率な誠實な批評家である。私は秋の展覽會に出す繪畫に取りかゝらなければならなかつた。

私の頭の中で描かうと思つてゐる繪畫は、『勞働者の妻』といふ畫題であつた。勿論、材を現實に取つて、主觀で色彩するつもりである。貧しげな家屋の内の光景を壁の色や、壞れた土器に示して、ランプを點ずる前約半時間の淡く煙つた淋しい夕暮方、子供と相抱き合つて茫然としてゐる三十前後の女の姿を描かうと思つた。私は、所謂暗い調子で畫を描きたいと思つた。而して、重苦しい氣分を現はしたかつた。黑と赤との勝つた中に、ほんのりと氣持の好い黄色な明る味を浮き出して、黄昏の光線の微動してゐるのを落すのだ。ちやうど深山の血の流れた怪しげな黑い岩間から、硫黄がとろ〳〵と燃え上つてゐるやうに、魅力のある色を出すのだ。これは、もう、ずつと以前から描いて見たいと思つてゐたので、未に手を附けない、頭の中で出來上つてゐる空想畫であつた。私は、どういふものか、この頭の中に存在してゐる自分の藝術を、或時は、出來るものならいつまでも祕して置いて、人に示したくないと思つた。而して獨りで靜かに美しい空想の世界に遊んでゐて樂しみたいと思つた。或時は、これを板や、布の上に畫き出さうと思つて手に刷毛を取り上げると、もう、藝術を樂しむ氣分よりも製作の苦しみが先に立つて、張り詰めてゐた感興が急にゆるんで、それがために動物的の筋肉が倦怠を生ずるのが常であつた。

其れで私は、頭の中の自分の空想畫を、板や布の上に拙く描くのを好まなかつた。描けば、きつと悔恨を感じ、失望を感じた。而して成べく自分の天職は畫家であることを自覺して、自分の眞に喜ぶやうな空想畫は、すべて板や布の上に描かずにイリユージヨンの世界にゐて製作すべきものであることを知つた。而して私は、常に自分の歩いて行く何處にもゐて、この時間と空間を超越した不思議な藝術品を眺めることが出來た。私は獨り道を歩いてゐる時にも、佇んで淋しくこれを遠い處に眺めることが出來た。而して、うす青い世界に存在する――頭の中に存在する――神聖な氣分の藝術は、決して澄み渡つた明るい現實の世界に赤裸に晒された時、其の不思議な魅力の衣を破らずにゐるものでないと感じてゐた。それで、私は、第二義の手段を散文詩の製作に試みた。而して、朧ろげに頭の中に存在する空想畫の郭を描き出して、これで生活の道を開いて行かうと努力したのであつた。

しかし、遂に、私は、大膽に自分の頭の中にある繪畫を發表したい氣がしたのである。而して、秋までに、これを描き上げたいと想ふと、急に、この藝術的意識と感興を、何物かの刺激によつて高潮に達せられなければならなかつた。

二十六

『長い間、他人は、自分の本領を知つてくれなかつた。馬鹿にしてゐる。嘲弄してゐる。復讐せなければならぬ。レムブラントは自分の理想とする畫家でないか？』とから私は自ら勵まして叫んだ。

私の心は、描かなければならぬと思つた瞬間から、不思議に慌しくなつて、神經が過敏になつた。

其の日の夕暮方私はランプも點けずに室の裡に坐つてゐて、獨り、描くべき畫の構想に耽つてゐた。私の頭は冴えて、耳が鳴り音を高めて來た。而して、頻りと、何等か自然界に隱れた強い

力に打ち當つて見たい氣がした。私は室の中をぐる〳〵と夢中になつて廻り始めた。

　而して、此の怖るべき作業的氣分が、十分に強度に達してゐると知つた時に、恐らく、もう四五日の後にこの繪畫が出來上るやうな氣がした。多くの藝術家は、みんな斯のやうに憧れるものを直ちに眼前に見詰めて進んだ。而して、皆んな深い、暗い、崖に迫つて倒れた！見返れば累々たる、ロマンチストの死骸よ！

　都會が黄昏の黄色な光りを浴びてゐる。而して、輕い熱に冒されたやうにうめいてゐた。私は暮方家を出た。而して、外濠線に乘つて、下町の方へ出かけた。電信柱と、家々の家根の間をうす紅く染めて夕日が沈んだ。濠の對岸には、燈火の影が閃いて、黒ずんだ水に青い瓦斯の光りが映つてゐる。其の長い火影を搔き亂して音なく船が行つた。電車の窓からは、さまざまの人々が活動してゐる都會の夜の景色が見られた。

　彼方に大きな長い、黒い建物があつた。夜の、青白い空は、其の建物の上を掩うてゐる。而して、其の長い建物に幾十となく並んだ窓は、青く燃えてゐた。其の建物の中には、幾多の勞働者が働いてゐることを思はせた。疲れた顏、青白い腕を思つた時に私の身は鞭打たれたやうに引き締つた。而して、神經は、今迄氣付かなかつた、夢として否定し難い、冷かに眼前に横はつてゐた現實の一角に觸れてゐた。而して、空しく、夜の空に、反響してゐる鐵槌の音を一つ一つ苦しい實感を起さずに聞くことが出來なかつた。私は、熱心に窓を見詰めた。血は眼に向つて走つた。

　空想が破れると、さながら自分は星影凄き、曠野に立つてゐるやうな感がした。自分は孤獨を歌ふ丈の詩人であつて、未だ現實を描くだけの經驗に觸れてゐない。自分には『勞働者の妻』を畫くだけの力がなかつた。さうだ、自分は、單に、どうしてもこの生きた人間を畫かなければならぬと思つた。而して、自分に光線の研究と色彩の調子を出すことに苦心した。けれど、若し、假りに畫題となつた勞働者に自分の畫を示して、「何のために畫かれたか？」といふ根本の思想をうなづかせるまでには、自分の人生觀または哲學が深刻でなかつたのを語つたのである。――電車は過ぎてしまつた。

　私は行き慣れた狹い町に行つた。其の町にゐる女と、しめつぽい柔かな誰でも來る人を迎へるやうな艶かしい空氣に觸れた。私は、酒を飲んでも、女と話しても、やはり何處か淋しかつた。殊に初めて遇つた女の顏を見ると人生の味氣なさが感ぜられた。私は藝術的氣分が全く別になつて、酒に醉ふと、狂うた獸物のやうに物言ひが荒くなつた。而して、夜遲く、再び電車に搖られて歸つた。其の時分には、何處の停留場からも餘り人が乘らなかつた。赤い球燈は、力なげに晝間の雜沓した光景を、遠い昔の記憶のやうに思ひ出させた。電車は闇の中を突いて走つた。車内には燈火の光りが冴え返つてゐた。しかし、疲れた頭に、視力の衰へた眼には、此の光りも霞んで見えた。夜、遲く務めから歸るらしい痩せた三十五六の男と、家も定まらずに、何處へか乘つて行くやうな老婆とが間を隔てて前側に腰をかけて居眠りをしてゐた。

　窓から覗いて見ると、夜のほんのりと明る味を帶びた空には雲が亂れてゐた。其の下に横はつてゐた、黒い、長い建物の窓には、いつしか燈火が消えて、暗く死んだもののやうになつて默つてゐた。私は冷え切つた鐵の上に手を載せた時のやうに感じた。

　私は、再び頭の中の空想畫を、板や布の上に

描からとは思はなかつた、また、展覽會に出品して審査を受けて見たいなどとは思はなかつた。

二十七

木々の下は日が落ちると夜のやうに暗くなつた。近所の子供等は、其處に集つて眼を光らして怖ろしかつたこと、面白かつたことを語り合つた。子供等は、みんな私の家に田舍から來た孤兒のことをひそ〳〵言つてゐた。意地の惡い兒だとか、いぢめられたとか、いつも話し合つてゐた。

朝の色はうす青かつた。障子の骨には、昨夜血を吸つた蚊が、腹を酸漿のやうに赤く脹らして止つてゐた。それを、蠟燭に火を點けて燒くやうな時節が來た。青梅の實が地上に音を立てて落ちた。いろ〳〵の青く繁つた木々の林の上を流れて行く白雲にも、落付きがなくて、何となく梅雨の近くなつた氣はひがした。濕つぽい葉風が晝過から、毎日のやうに庭の青桐の葉をばた〳〵と鳴らした。私は、毎日、物思ひに沈んでゐた。而して、机に向つて原稿を書いてゐた。私の單調な生活と、自然の慌しい變化とは、其の間に關係がなかつた。外界にはいつしか冬が過ぎ春が來て、春が過ぎて夏が來たけれど私の生活には何の變りもなかつた。

さま〴〵の形して、自分の靜かな生活に顏を出した單調を破つた現實界の事件に出遇つたけれど、やがて、其の事件もすんでしまふと、再び、水の合したやうに、私を、靜かな夢のやうな氣分が心地よく包んでしまつた。かくて自分は空想の世界に生きてゐる人であることを知つた。

孤兒は、毎朝、幼兒を負つて、外に遊びに出て、正午頃になると歸つて來た。而して、また飯を食べて乳を飮ますと外に遊びに出て夕暮方に歸つて來た。夜は遲くならぬうちに歸つて來るやうにと妻から言ひ聞かせてあつた。しかるに、或日のこと、少女は、正午になつても歸つて來なかつた。

『何處へ行つたらう……』と妻は、たび〳〵外に出て見た。

いつしか正午過ぎになつたけれど、まだ歸つて來なかつた。何處を見ても、木の葉が繁つてゐて、しんみりとしてゐた。空氣は、青い油を流したやうに重かつた。午後二時頃家の横手を金魚賣が通つた。其の呼び聲は、何となく一層、まだ歸らない幼兒の身の上を思はせて、やるせない悲しみが心をそゝつた。其の他に道を通る人の話聲も聞えなかつた。遂に、日が暮れかゝつたけれど少女は歸つて來なかつた。

私はぢつとして机に向つてゐることが出來なくなつた。妻はもう歸つて來ないもののやうに悲しみに沈んで、外から默つて入つて來た。私の心には、重い不安が落ちかゝつた。誰か少女と幼兒を伴れて行つてしまつたやうな氣がした。私は兎も角も町の方へ行つて探して見て來ると言つて、家を出た。

歩きながら、私は、警察署に行つて屆ける時分の光景を想像した。また、これぎり少女も幼兒も歸つて來なかつたらどうするだらう……而して、此の世界の何處かに、生きてゐるものとしたら……私は、いつしか、あてなき旅の日を考へてゐた。而して私は、遂に、暗愁のために眼が暗くなつて、倒れかゝつた。しかし、また、今夜の中に歸つて來るだらうといふやうな覺束ない希望もあつた。また、『行方の知れなくなつた少女と幼兒』といふやうな畫題で、この悲しいやるせない氣持を描いて見るやうな日が來ることを想像した。西の地平線は紅くなつて、夕日は沈んだ。私は、人家の稀な、郊外に來て立つてゐた。木立も、草の葉も、永遠に二たび

見ない、今日の落日の名殘に傷んで、うす紅く悲しげに彩られてゐた。

二十八

青桐の頂きの、夜の空を見れば、星の光りが雲間を洩れて、微かに光つてゐた。私が、机の前に坐つて、警察署に屆け出ようと妻と相談をしてゐた時、前隣の女房が來て、其の話を聞いて印形を忘れて行つてはいけないと注意してくれた。私は、羽織を着かへてゐた。其處へ、少女は、悄然として外から歸つて來た。此時、私も、妻も、隣の女房も皆んな、默つて少女の姿を見詰めた。異常な感覺よりも、先づ暗い想像が心を暗くした。私は、今迄何處に行つてゐたかとたづねる前に、背中の幼兒は、どうしたらうと覗き込んだ。うす暗いランプの火影は、よく幼兒の顏まで屆かなかつた。此時、妻は、物も言はずに背中の幼兒を抱き下した。而して眼に涙を浮べて、幼兒をランプの下に伴れて來た。すると、長い間泣き疲れたと見えて、すや〳〵と眠入つてゐた。而して顏の色が青かつた。少女の肩から投げ出された片手を見ると、何の草か名も知らない一本の莖を握つてゐた。脣のまはりには草の汁がついて黄色くなつてゐるので、其れを食べてゐたことが分つた。私も、妻も、鋭い眼を孤兒の顏に向けた。其の眼には、何の權利があつて、この兒の生命を自由にしようとするのか？ 誰の許しで、こんな草を勝手に食はせたかと詰る光りが閃いた。

『こんなものを、お前は食はしたのか。』と言つて私は、早く其の返答を聞きたかつた。初めに、弱い者を擲るのも罪惡でない場合があると感じた。私の傍には、隣の肥つた女房も來て、眼の色を變へて立つてゐた。妻はランプの下に幼兒を抱いて孤兒の後方に立つてゐた。飽迄、孤兒は默つてゐた。しかし、何となく平常にない、悄れた姿に見えた。私は胸が迫つて來た。而して言葉が思ふやうに速かに思想を傳へることが出來なかつた。『なんで、……こんな時分になるまで何處に行つて遊んでゐたのだ。而して、こんな草をこの兒に食べさせたのだ。今夜にでも、この兒が死んだならどうするつもりだ……』と私は、怖ろしい未來が迫つてゐるのを感じて、言葉が戰へた。

孤兒の顏は、次第に血の氣が滅じて白くなつた。而して、冷かな色が浮んだ。私は、其の無自覺な冷かな色を見ると同時に、力に委せて少女の横顏を擲つた。此時、妻は、幼兒の耳許で大聲に、『坊や！ 坊や！』と叫んでゐた。けれど幼兒は呼ぶたびにぼんやりと眼を開いた、けれどまたすや〳〵と直に眠入つてしまつた。

孤兒は、此方の騷ぎに關係せずに全く、獨り別の世界にゐるやうに思はれた。而してたゞ下を向いて默つて立つてゐた。妻は、幼兒の外に、誰も其處にゐないものの如く、頻りに幼兒を呼んでゐた。けれど幼兒はだん〳〵力が衰へて、顏の色が青くなつた。

『早くお醫者に連れて行つた方がよくありませんか。』と隣の女房は、低い、暗い聲で言つた。

「なんだか樣子が變ですね。私は、こんなことがあらうと思つてゐました。』と妻が、怨めしさうに言つた。

『いや、今度ばかりは、此の兒を歸してしまふ。』と私は言つた。此時ばかりは、孤兒の姿を見て哀れと思はなかつた。

二十九

妻は慌しげに醫者の家へ幼兒を抱いて驅けて行つた。隣の女房も、今日ばかりは利害といふ考へなしに親切に物を言つて歸つて行つた。

妻は醫者の處から歸つて來ると、私が樣子を聞いても答へずに、靜かに幼兒を床の上に眠かし付けて、自分は、心配さうな顏付をして其の傍に坐つてゐた。醫者のくれた藥は、小さな罎の中に入つてゐた。暫らくすると、妻は、其の藥を茶碗に移して、幼兒に飮ました。ランプの光りは、罎の上に力なく反射してゐた。私も其の傍に來て坐つた。

『なんと、醫者はいつたか。』と二たび、私は、口を開いて聞いた。不安な沈默が、二人の間を隔ててゐた。

『熱がある樣子です。草を食べたので、腸を少し傷めたといつてゐました。幸、毒草ではなかつたが、なんでこんなものを食べさせたんでせうね。』と、妻は、またしみ〴〵と幼兒の眠つてゐる、青白い横顏を見入つてゐた。而して、何か言ひかけて不意に默つて、いつまでも靜かにかうして心配さうな顏付をしてゐた。

『死ぬやうなことはないと言つたか？』と、私は、先刻、妻が醫者へ行く時に持つて行つた、青い草の莖を思ひ出して言つた。

『夜中にでも、若し腹が痛み出して泣くやうなことがあつたら、直に呼びに來いと言ひました。而して、この藥を飮むと腹にあるものを出すから……と言ひました。』と妻は語つた。

私は、今夜は、二人が眠らずに起きてゐなければならぬと思つた。而して、此の兒が夜泣きをして、毎夜のやうに熟睡が出來なかつた、寒い、苦しかつた冬の夜のことを思ひ出した。而して、空想は遂に今日の幼兒の身の上に及んだ。

『よく、あんな草を食べさしたものだ。』と、私は、怖ろしい毒草の草に混つて生えてゐることを思つて、少女の幼兒を負つて歩いて來た道の景色を考へたのであつた。

『あの草は、すいことかいふのです。よく、田舍の子供は食べるんです。』と、妻は言つた。

『そんなら、お前は、あの草の名を知つてゐたか？』と、私は、妻の生れた村の景色と子供の時分の姿を想像して見ながら、聞いたのであつた。妻は昔の記憶を呼び返すやうに鈍い眸をして考へ込んだ。私は、急に孤兒に對する憎しみが薄らいだのであつた。

私は彼方の隅に默つて坐つてゐる孤兒の傍に來た。而して、しみ〴〵と姿を眺めた。まだ餘り長くもない頭髮は汚れて、ぎり〴〵と卷いたきりであつた。私は未に飾り氣のない少女に對して哀れを催した。而して、少女の顏の色は青醒めて、伏眼になつてゐる姿は、何處か自分等と親しみの少い、未開の自然に接したやうな感じを抱かせるのであつた。

『今夜、お前を此の家に置かないといつて、今から追ひ出してしまつたら、お前は何處へ行くつもりだ。』と言つて、私は、孤兒の淋しい胸の裡に、故意に暗い影を投げて見たくなつた。而して、此の上どんな顏付をして悲しむか見たくなつた。孤兒はやはり下を向いて默つてゐた。

三十

私は少女に何とか返事をしろと迫つた。孤兒は青白い顏を上げて私の顏を見た。ランプの光りを正面に受けて、脣の色が眞紅に見えた。而して、自分のしたことを惡いと思つてゐないやうに私の顏を見上げて笑つた。私は意外に感じた。何となれば、全く、此の夜、家を追ひ出すといつたら、泣いて、悲しむだらうと思つたからだ。而して、今更自分の强く言つたことが何の效果もなかつたのが馬鹿にせられたやうな氣がして、少女を惡く思つた。

『オイ、家から追ひ出したら、どうするつもりだ。』と、私は、聲を大きくして少女の笑ひを打ち消した。

「誰も泊めてくれなければ、川へ入つて死んでしまふ。」と、少女は言つた。

少女の言つたことは、虚僞とは思はれなかつた。青白い顏にも少女の決心は見えてゐた。私は何んだか怖ろしくなつた。此の少女の死は、卽ち、自分に對する反抗であると思つたからだ。而して、すべての反抗の中で自殺程、精神的に無形の壓迫を感じさせるものはないと考へた。何となれば、死は、其の人にとつて悲哀の極點であつた。自分のために生活を捨てた人があるといふ記憶は、終生、自己の生活を享樂する場合には氷のやうな冷かな影となつて心を掩ひ、何時の間にか其の快樂を打ち消してしまふからであつた。私は、急に、少女に對して、柔しく物を言はうといふ考へになつた。而して、少女でありながら、涙も出さずに死を考へるに至つた彼女の過去に於て他人に苛められて來た境遇に對して、一種の凄愴な同感を禁ずることが出來なかつた。「何處へ行つて來たのだ。」と私は、少女に聞いたのであつた。

其の瞬間から、私は、もう少女を叱らないと思つた。少女は、かう優しく聞かれると眼に涙を浮べた。而して次のやうなことを語つた。

少女は、毎日のやうに行つた社の森に來た。幾つも石段を上つて高い處に立つた。白く乾いた石段の上を風が吹いて、沙塵が渦を巻いてゐる。町には日が當つてゐた。其處からは町を見下すことが出來た。人々が町の中の白い道の上を歩いてゐる。家根瓦にも、初夏の光線は眩いやうに輝いて、空は明るかつた。而して、町を越して見える、森の若葉が、銀色に光つて、電信柱の高く、低く、連つてゐる上の空には、白い雲が、浮動してゐた。少女は見慣れた社の鳥居の下に立つてゐた。頭の上の杉の木にも、幾分か風があつて、梢が動いてゐる。此時、少女は、しみじみと誰れも友達がなくて寂しいと感じた。何の氣なしに、神社の裏手に歩いて行つた。すると初めて見る細い道が、杉の木の林の中につゞいてゐた。少女は其の道について、杉の林に入つた。急に暗くなつたが、直に道は坂になつてゐたので其處を下りると、全く、來たことのなかつた、栗の木や、樫の木の兩側に繁つた土手の間に下りた。道は稍々廣くなつた。しかし日蔭のために地の色は、黑くて濕つぽかつた。而して此の林の間の、落込んだ低い道の上には荷車の轍の跡が付いてゐた。少女は、この道を歩いて行つたら、やはり高い煙突から、煙の空に立ち上つてゐる町の方へ歸られるやうに考へた。

三十一

少女の故鄕には、かういふやうに暗く繁つた林は幾つもあつた。まだこれよりも、こんもりとした森の中を通つた道もあつた。彼女はいろいろの記憶を呼び返しながら、子守唄をうたつて歩いて行つた。けれどこの林は故鄕の林のやうに深くなかつた。空が、行手に露はれて垂れ下つてゐる。木々の葉風が、何か懷しいやうな聲で囁いてゐる。少女は立上つて考へたけれど、この世界には自分を愛してくれるやうな人はない筈であつた。それでも、長い間自分の育てられた山中の叔母の家を戀しく思つた。而して、自分を擲つたり叱つたりした叔母の姿が慕はしく思はれた。いつしか、林は、切れて、少女は、明るい空の下に立つてゐた。見廻したけれど、町は見えなかつた。其のかはりに、廣い野原がつゞいてゐた。青々とした圃がつゞいてゐた。遙かに地平線は霞んでゐる。其處には白い雲が顏を出してゐた。もう、いつの間にか麥は黄色くなつてしまつた。少女は國を出る時、まだ、野には處々雪があつた。汽車の窓から覗いて見た時は、名も知らぬ他國であつて、三寸ばかり延びた青い麥の葉に寒い風が吹いてゐた。こ

んな記憶が、目に浮んで、冬も春も、さつさと獨り自分を置きざりにして何處へか行つてしまふやうな氣がして悲しくなつた。少女は、淋しさを禁ずることが出來なかつた。

少女は、鐵道線路が、一二町先の處を通つてゐると知つた時に、其處まで歩いて來た。畑には、芋の葉が、うす紫色に緊つて、蔓を延してゐた。鐵道線路の傍に立つて、前を見ると、彼方にこんもりとした雜木林があつた。しかし、もう此先き線路を横ぎつて行きたくなかつた。たゞ、この線路は、自分の來た時に汽車に乘つて通つた鐵道線路であつた。少女は、此の線路について行けば、故郷に歸れると思つた。線路の行方を見渡すと、左手は、間もなく、林のある丘の方に彎曲に折れてゐたので、眼を遮られてしまつた。右手の方には、遠く眼を遮るものがなかつた。少女は、其の方を見て茫然と立つてゐた。

『あの、黒くなつてゐる森は、よく私の村の森に似てゐる。』と言つた。暫らく考へてゐたが、少女は線路について行つた。

正午頃になつた時、少女は背中の幼兒に乳を飲ます時分であると思つた。たび〳〵汽笛の音がして、轟々と地鳴をうつて汽車が過ぎた。少女は、路の端に避けて、汽車の過ぎるのを待つてゐた。而して、見守ると、黄色な窓がぼんやりと一直線になつて見えた。人の顔などはよく分らなかつた。背中の幼兒が泣き出した時に、少女は、子守唄をうたつて眠かし付けようとしたけれど、幼兒は泣き止まなかつた。少女は出來るものなら、背中の幼兒を、路傍に捨てて、自分だけ驅けて行つてしまひたかつた。遠くに見えた森は、近づくにつれて、幾たびか其の姿を變じた。少女の胸は其のたびに躍つた。遂に森に近づいた時、其處には、白いシグナルが見えて、全く、見知らぬ停車場があつた。而して、自分を慰めてくれる者も居ない、知らぬ人の住んでゐる村があつた。少女は失望と疲勞に泣きたくなつて線路の傍に立つてゐると、これを見た驛夫は大きな聲で叱り付けた。

家に歸れば、叱られると思つたので、少女は、野の上に佇んで空しく日の暮れるのを待つてゐた。紅く地平線を染めて日が沈んだ。其の落日を悲しく思つて眺めた。日が暮れると空には、濁つた雲が湧いて來た。少女は道を間違はずに町へ入つて來たのであつた。

『己はやはり野原の方まで探しに行つたんだ。』と、私は孤兒に言つた。孤兒は下を向いて默つてゐた。ランプの光りは、孤獨の人々を淋しく、賴りなげに照らしてゐた。

三十二

明る日醫者が來た。幼兒の身には格別の變化が來なかつた。しかし此日から再び少女に負させて外には出さなかつた。二人は遂に孤兒を歸すことに相談した。私は妻の意に從つて、叔母に宛てて、孤兒にとつて不利益にならぬやうな口實を造つて認めた。其内に孤兒を歸すといふことを言ひ送つた。而して誰か此方から北國に行く知つた人はないかと、好い便りのあるのを心待ちに探してゐたのであつた。

四五日の後に北國へ歸る人があるといふ好いたよりを見付け出した。而して遂に其の日孤兒を其の人に賴んで歸すことにしたのであつた。孤兒が來てから、まだ四月にしかならなかつた。けれど、もう長い間一つに住んでゐた樣にも思はれた。

私は、少女が國に歸つたら、また淋しい、而して、一日餘り多くの人を見ない麓の家に住んで、毎日、意地の惡い女房に叱られるのであらうと思つた。私はさま〴〵の空想を描いて孤兒を眺めた。

「もう、お前も此の家にゐるのは今日と明日限りだ。」と言つた。それでも、孤兒は何となく國に歸るのを樂しむやうな樣子が見えた。而して少女には、何となく今迄になかつた、落ちついた優しな風が見えた。私は、心のうちで、平常少女が斯樣であつたなら、いつまでも此の家に置いたものをと思つた。

「お前は、國に歸るのが嬉しいか。」と私は聞いたのであつた。彼女は癖であるが、微笑んで下を向いて默つてゐた。妻は、少女が國に歸つたら、また何處か、他の家へ子守にやられるのだらうと言つた。而して、いよ〳〵明日の夜行の十時の汽車で立つと決つた時に、妻は、前夜遲くまで、孤兒の着て歸る新しい衣物を縫つてゐた。其の衣物は明る日の晝前に縫ひ上げられた。晝過ぎから妻は自分の叔母の處に持つて行つてもらふ土産物を買ひに出かけた。此時、私は、妻を呼び止めて、少女の心を樂しましてやりたかつた。私は人生といふものを考へて、机に向つてゐて筆を取る氣になれなかつた。同じい人間として何の權利もないのに、私は、この少女を叱つたことがあつた。その事は、猥りに弱い者を苛めたやうな氣がして、頻りに痛ましい哀愁を感じた。また、空漠とした前途の生活をつゞけなければならぬこの不幸な少女の歩んで行く道を考へた時、其の道は、極めて不安な同情せなければならぬものであつた。

やがて、梅雨の時節が過ぎて、此の地球の上に烈しい日の光りが當つて、明るい夏が來た時に、少女は、何處にゐて子守唄をうたつてゐるだらう？……

……午後から、風が吹いて、雲が切れて、青い空が出た。妻は風呂敷包を下げて歸つた。而して、叔母には果物を土産にしたいと言つた。風呂敷包を開けた時に、バナヽの入つた籠と鈴の入つてゐる塗つた、赤い鼻緒のついてゐる下駄と、花簪の入つてゐる箱が出て來た。下駄と花簪とは、孤兒が、今日、故郷へ飾つて歸るために買つて來たのであつた。

「見れ、まあ綺麗な下駄だらう！」と、私は、笑ひながら少女の顏を見た。

三十三

竹籠の中に入つてゐるバナヽの香ひは、私の心をして、遙か南の國を思はせた。而して北海の青い色の身に浸みて淋しい如く、南の島の椰子樹の上に音なく出る赤い月影を淋しい悲しいものと思つた。此の南の産物が今夜遠い北に持つて行かれるのであつた。妻は日が暮れると、幼兒を床の上に眠かし付けた。而して、私に向つて、

「この頃は、この兒は、三四時間は眼を醒まさずに眠てゐますから、私の歸つて來るまではかうしてゐますでせう。」と言つた。私は、今夜の創作を止して、幼兒の傍に來て雜誌を讀んでゐた。靜かな晩であつた。忍び足に過ぎる夜嵐がしめつぽい庭の木の葉を拂つて行つた。少女はランプの光りのうす暗い室の隅の方で新しい着物を被た。妻が手傳つてやつた。而して田舍から來る時にして來た赤い色の帶をしめた。帶をしめてから足袋を被いて、自分の品物を風呂敷に包んで支度をした。妻も着物を被換へて、停車場まで見送つて行く支度をした。今夜、北國に歸る人で、少女を賴んだ其の人は同じ時刻に停車場で落ち遇ふことになつてゐた。簞笥の上に置いてある時計が、もう十分で九時になつた時、いよ〳〵妻と少女は家を出かけることになつた。少女は、疊の上に兩手を突いて、私に暇乞を告げたのである。私はもうこれが暫くの見收めであると思つて眺めた。しかし、長い月日が經てば、全く、互ひに顏を忘れてしまふのだ。哀れとか、悲しいとか思ふのも一時の本

能に過ぎなかつた。二人は出かけた。私は幼兒と共に家に殘つてゐた。

悲しいとか、哀れとかいふことは、一時の本能に過ぎないと思つても、やはり、今、私の眼には熱い涙が湧いた。胸には悲しみが亂れた。――人間は、偶然に知り、かうして別れ、而して忘れ、遂に互ひの生死すらも知らずに終るのだ。――而して、今、別れた少女が歩いて行く夜の賑かな都會の景色を思ひ、明るい停車場を思ひ、間もなく、汽車に乘つて、この明るい、賑かな都會に別れて、是から指して行く、淋しい、暗い、靜かな田舍の天地を思つた。

私は長い間獨り感慨に耽つてゐた。妻が、十一時過ぎに歸つて來た時に、私は、うと〳〵となつて、手枕をして眠つてゐた。

「まだ、起きませんでしたか。」と妻は言つた。

彼女は、今頃、幼兒が泣いてゐないかと思つて心配して來たのが、靜かに眠つてゐたのを見て、喜ばしさうな顏付であつた。私は、この聲で半睡から呼び醒されて、何となく不快で、頭が重苦しかつた。此時、私は、少女はどうしたかと口に出して聞くのも物憂かつた。しかし、私の聞かないうちに、妻が、『宜しく言つてくれいと言ひました。而して、汽車が動いた時に、泣いて行きました。』と停車場で別れた時の光景を浮べて、ランプの下で眼を拭いて語つた。

此の話を聞いて、私の眼は二たび冴えた。而して、いつしか頭からは不快な感じは消え去つた。初めて、家の内を見廻して、既に孤が家族の中から缺けたと知つた時に、身の四邊には新しい哀愁が生ずるのを感じた。夜は更けて、庭前の木々の葉を吹く風の音が、青い雲切れのした空に應へる如く冴えて來た。

三十四

明る日から私は少女がゐなくなつたので、小猫に三度の飯を與へた。勝手許の黴臭いやうな、濕氣ばんだ臭ひが板の間に坐つて鰹節を削つてゐると、何處からともなく鼻に浸みて來た。日の光りは西向きの勝手には射さなかつた。僅かばかり戸の開いた間から、風が吹き込んで、掛竿にかゝつてゐる布巾をひら〳〵と搖つてゐた。これを見るのも、私には何となくわびしい感じがせられた。鰹節の削り粉を小皿に盛つた飯の上にかけて、箸で其れを掻き混ぜてゐると、小猫は絶えず私の身の周圍を巡つて、喜ぶやうに、訴へるやうに泣いてゐた。毎日のやうに飯をくれた、少女がゐなくなつて、今日から、自分が飯を與へるのを、不思議とも小猫は思つてゐないだらうかと、獸物の心が怪しまれた。

また私は、昨夜、十時の汽車で立つた少女は、もう何處の邊に行つたであらうと考へながら、猫に飯を與へると、私は直ちに自分の机の前に坐つた。而して、昨日と變りのない重い心持でペンを執つて、やはり視線を庭の羅漢松の黑ずんだ葉の上に落して、書くべき思想を凝らすのであつた。私の疲れた頭では、さながら、役に立たなくなつた古綿を幾度も打ち直して、新しい光りのあるものに造りかへるやうな苦しさと經驗の貧しさとが感ぜられた。しかし、たとひ細くとも出來るだけ至純のものを書きたいといふ氣持だけは失せなかつた。青桐の頂きの空は青く澄み渡つてゐた。日光がすべての物の上に明るく染んで、すべての物は輝いて見えた。此時、妻は、長い雨の間に濕れ盡して紙のだらけたやうな傘だの、泥に塗れた下駄を洗つたのだのを庭に持ち運んで來て、日陽に乾かした。而して、自分が机に向つて考へてゐるのを知つて、視線を遮るのを避けるやうにして、默つたまゝまた玄關の方に戻つて行つた。見てゐると、傘の上からも下駄の上からも、地面からも白い淡い水蒸氣が立ち上つた。私はしばらく茫然としてそ

れを見つめてゐると、
『まあ、優曇華の花が咲いた。』と玄關先で妻か言つた。其の驚いたやうな聲が異樣に私の耳に響いた。
『來てご覽なさい。こんなに優曇華の花が咲きました。』と、妻が、重ねて大きな聲で言つたのであつた。
私は暗い心持で玄關に出て見た。すると片側の灰色の壁の上に、黴が附いたやうに、一面に白い細い花が咲いてゐた。これは、何んでもないだらう。』と、私は、空想も、事實と共に打ち消してしまひたかつた。
『いゝえ、黴ではありません。多分優曇華の花といふのでせう。』
と、妻は奇異な物を見るやうに眼を近づけた。
私もこの花が咲いた時は、何等か凶いことのある兆であると聞いてゐたので、不安に胸を亂しながら、これを見上げてゐるうちに、自分等はまだこれよりも苦しい境遇を經なければならぬやうになるのか知らんと思つた。而して、自分には、これ以上の屈辱と奮鬪と生活の苦しみに堪へ得られるかが想像出來なかつた。それよりもこんな場合を強ひて考へたくはなかつた。次に、幼兒がふとして死ぬのでないかと思つた。次に、妻が病氣をするのではないかと思つた。けれど、そんなやうなことがある譯がないと、自ら打消して、長い間の雨のためで壁が濕けたのだらう。』といつて自分の室に戻つた。私の心は臆病になつた。而して明るい方を追はれて、暗い方にばかり逃げ路を探し歩いてゐた。

三十五

私は初めて氣にとめて自分の室の裡を見廻した。私の室は破れて處々貼紙をした色の褪めた襖で茶の間と仕切られてゐた。南側の庭に面してゐた、其處には障子がはまつてゐた。私の机は其の障子の際に押し付けられてあつた。床の間の正面の壁は、大分傷んでゐると見えて、黄色の壁紙が貼られてゐたが、紙も大分古くなつたので其の色が白ちやけてゐた。而して下の方は破れてゐて、何時となしに砂が落ちて來て、板の上に溜つてゐた。
私は今迄机の前に坐つて、ペンを持つて考へながら、床の間にかけた、友のBが描いた海の油繪に眼を注いだことはあつても、——而して金色の額縁に埃がかゝつて、色が曇つたのと、緑の勝つた海の色とが穩かに調和してゐると思ひながら、別に氣にとめて見もせずに、たゞ、心でさう思ひながら見てゐたことはあつても——未だこんなに眼を壁に近づけて、隅々まで壁の地を見たやうなことはなかつた。兩横の狹い處だけは、壁の上に黄色な紙が貼られてゐなかつた。而して、其のうす赤い、ちやうど紙の色と似てゐるやうな壁の上には、人の氣の付かない、細かな疵が、無數についてゐた。私は眼が其の壁の上を歩くやうに、力を入れて視線を上の方に引き摺つて行つた。すると遂に、豫期したものに出遇つた、刹那に胸の躍るのを覺えた。而して、瞳は蜘蛛の巣のかゝつた天井張の一尺許り下から、一面に優曇華の花が白く咲いてゐたのを見詰めて動かなかつた。此時冷かな異樣な感じが體を襲つた。私は凶い兆がこのやうに、知らぬ間に身の四邊に現はれてゐるのを氣味惡く感じた。たとひ手で優曇華の花を拭き消すことは出來るとしても、この目に見えない運命の一旦示された象徵を人間の力で何うすることも出來ないと思つた。私の神經はいら／＼して、直ちに、死といふことが考へられた。自分の故郷か、それともこの家に何か不幸のことが起るのでないかと、空虛な暗い世界に靈魂が觸れたのである。私は妻の仕事をしてゐる傍に行つた。而して、背を襖に凭せて、默つて針

を運ぶ指頭を眺めてゐた。この間にも心は暗い空虚の谷底に落ちて行くのを感じた。

『何か凶いことがあるのか知らん。』と私は溜息を洩らして言つた。妻は私のやうに優曇華の咲いたことを格別氣にも止めてゐなかつた。而して、もう忘れてゐたやうな風が見えた。

『何しろ、古い家ですから、而して梅雨ですから咲いたんですよ。』と、妻は暗い室の裡を見廻した。妻はかういつたけれど、私は意外の場合を豫想した。而して、妻の心に迫るやうな、鋭い調子で言つた。其の言葉は無理に妻に押し付けるやうに聞えた。

『もし、今、國許で誰か死んだら、どうするつもりだ。』と、妻の平氣であるのを暗に詰るつりであつた。妻は、默つて下を向いて針仕事をしてゐた。

『お前の着物はみんな質に入つてゐるのだらう……』と、私は自分等の苦しい境遇をもつと切實に自覺せねばならぬと思つた。故に、妻の神經を躍すやうに刺激のある言葉で言つた。妻は默つてゐたが、いつしか眼に涙ぐんでゐた。

『今、誰が死んだつて、行く金がないよ。萬一のことがあつたらどうしたらいゝだらう。』と、私は目の前に怖ろしい不意の事件を想像した。

『これから、苦しくても少しは、貯金しなければなりませんね。』と、妻がしみ〴〵とした聲で言つた。

『そんな、そんな餘裕があるか？』と私は、この言葉が何となく、此上にも自分に勞作を強ふるやうに聞えたので腹立しかつた。二人は暗黒の思想の裡に沈み返つてしまつた。茫然として顔を背けると、庭の青葉が障子の開いてゐる間から涼しげに洩れて見られた。

三十六

私は、屢々、小猫の烈しい泣聲に驚かされて、家の外に飛び出て見たことがあつた。其れは、此の近傍を常にうろついてゐる家なしの眞黒の大きな猫が、私の家の弱い猫を苛めるのを知つてゐたからであつた。この眼に白い薄膜が半分かゝつてゐる、鼻の惡い、耳の惡い、其の上に性質の魯鈍な猫は、それでも日を經つにつれて家にばかりゐて、縁側に眠つてゐずに、此頃では外へ出遊ぶやうになつた。しかし、もう猫の交尾する時節も過ぎてしまつた頃になつて、時ならぬこの慌しい、苦しさうな泣聲は、私の神經に震ひ付くやうに痛ましく感じられた。私は其の泣聲の聞えて來る方を探ねて、家の横手に出て、寺の墓場を見ると、此時其方から、毛の白い小猫が一生懸命に此方に駈けて來た。其の後を追つて黒い金色の眼をした大きな猫が、恰も一掴みにする權幕で危く迫つて來た。私は何を投げ付けてやらうかと、立ちながら心は焦立つたけれど、足許には何もなかつたので、自分の穿いてゐた下駄を脱いで、其の黒猫を目懸けて投げ付けた。けれど、いろんな木立に妨げられて、青い葉を二片、三片落した位で黒猫には當らなかつた。私は、たゞ地に落ちた鈍い下駄の手應へを聞いたばかりだ。

私は、ふとしたこの黒猫の姿を目に思ひ浮べると、夜もいつまでも眠られずに、床の中で何うして苦しめてやらうかと考へさせられたのである。食物を置いて誘ひ出して、自分は物蔭に隱れてゐて一撃に殺してやらうか。それとも毒薬を手に入れて、これを食物に混ぜて置かうかとも考へた。しかし、是等のことをするには、ある忍耐と、ある時間を要さなければならなかつた。そんなことは、私の、この單純な、一時的の憎惡には、却つて相反するやうな忌むべきものであつた。私はいつしか其れも忘れて、眠りに落ちてしまつた。明る日になると、また机に向つてペンを執つて、いつものやうに、自

分の藝術上の主張とする『すべての物の價値は平等なり』といふやうな思想から、冥想に耽るのであつた。

或日、小猫の鋭い泣聲が聞えたかと思ふと、驅けて來る足音がして、緣側から猫が躍り込んで、私の机の傍に逃げて來た。而して惡い鼻を鳴らしながら、息苦しげに痩せた脾腹のあたりに波を打たせて、庭の方を振り向いて止つた。私は猫の背を撫でて見ると、毛が濡れてゐた。異樣に感じて、手を見ると生々しい血が付いてゐた。私は刹那に黒猫を突き刺すといふより他のことを考へることが出來なかつた。抽斗からナイフを取り出して、それを片手に握つて、緣側に出ると、果して、羅漢松の下に大きな黒猫が金色の眼を光らして、此方を睨んでゐた。私は不意にナイフを黒猫目がけて投げ付けた。黒猫は逃げてしまつた。私は下駄を穿いて庭に出て見ると、ナイフが隣の境の垣根の處に深く地面を抉つて突立つてゐた。其れを拾つて、指頭で泥を拭き落した。そして、何の氣なしに庭の面を見ると、其處此處に小猫の白い拔毛が固まつて落ちてゐた。私は一つ一つ拾つて、掌に載せて見詰めながら、胸はどき／＼して、どうしても、黒猫をこの儘にして置くことが出來ぬやうな氣がした。しかし、どうしたら懲らすことが出來ようかと頭を惱ました。

三十七

暦の面では梅雨が上つたけれど、まだ未練らしく後を曳いてゐるやうに濕つぽい蒸し暑いやうな日がつゞいた。地面からは物の腐れるやうな臭ひが立ち上つた。私は青竹の尖に彼のナイフを細い緒繩で括り付けて、ちやうど五尺ばかりの槍を造つた。二日ばかりといふものは、日が暮れると其の槍を持つて、羅漢松の蔭に身を潛めて、黒猫の來るのを待つてゐた。雲の厚く重つて蔓延つた、暗い夜が次第に垂れて來て地上を掩うてしまつた。たま／＼寺の墓場の方から青い火を曳いて、螢が人魂のやうに飛んで來て家根の上を越えて行つた。蚊は思ひがけない動物の木蔭に蹲踞つてゐるので、其の動物が死んだもののやうに動かなかつたので、盲目的に、私の手や足に來て生血を吸はうとした。虚心で蚊の鳴聲を聞くと、彼方の隅で鳴いてゐるものには、何となく厭世的な響きがあつた。しかし、夜の色と黒猫の色と分らなくなつた時に、私は槍を下に落して立上つた。四邊は靜かであつた。青桐の葉風が寂寥の空氣を破つて鳴つた。

私は急に心の空虚と不安に堪へられなくなつた。自己の藝術に對しても、もつと、もつと深く考へなければならぬもののやうに感じた。私は暫らく星の光りも見えない暗い空を仰いでゐた。

『旅をして來よう。』……私は急に旅を思ひ立つた。すると此の瞬間から、寂寥は潮のやうに私の心を襲つて、直にも、座を追ひ立てて旅に上らさうとしたのだ。

其れから二三日といふものは、碌々、妻と顏を合せても物を言はなかつた。食事の時膳に向つても、私は、漠然とした悲哀や、瞑想に囚へられて、たゞ默つて、味も辨へずに慌しく食事を濟して、机の前に來て坐つた。僅か一坪にも足りない机の前は私の故郷である。私は机の前に來て坐ると、常に心の落付くのを覺えた。私は本箱の中から總ての書物を取り出した。而して、賣るべく自分で價踏みをし始めた。いつしか遂に頭が疲れて書物を疊の上に投げ出したまゝ、書物の間に體を横へたのであつた。是等の愛讀書も、日ならず自分の手を離れるのかと思つて眺めてゐると、既に、自分のものでないやうな感じがした。此時、私の顏の前に幾人となく見覺えのある古本屋が現はれた。

其等の顏は、いづれも、あまり好い感じを私に與へなかつた。或者は、書物について無智であつた。或者は强慾であり過ぎた。私は其の中で人の好ささうな一人を選んだ。
　午後から私は其の古本屋へ出かけて行つた。半年ばかり其の男に遇はなかつた間に、彼は顏貌まで違つてしまつた。彼の女房から受けたと思はれた、惡性の腫物は、熟した巴旦杏のやうに彼の顏を崩してしまつた。店頭には表紙のとれた書物や、古い雜誌の上に埃が溜つてゐた。私は無理に笑顏を造つて、店頭に腰を下した。しかも最近に淫蕩の妻は逃げた。而して、日にまし此の店が衰微して、新しく近所に出來た古本屋に壓倒せられて行くのであつた。不意にこんな意識が此の男を見てゐるうちに心を亂した時に、私は、曾て、心に經驗しなかつた異樣な寂寥を感じた。
『原書を買ふかね。』と、私は話の後で言つた。
『頂きます。』と、彼は力强く言つて、やはり、自分の零落を見せまいとする樣子が見えた。而して、近所に出來た彼の競爭者に對する反抗の語氣もほの見えてゐた。
　日が暮れかゝる少し前に此の男は來た。しかし、殆んど想像の出來ない程安く價を附けた。私は腹立しく思つたけれど、默つてゐた。而して、書物は一册も賣らずに古雜誌を與へて歸した。私は、同感より、寧ろ憎惡の眼で、彼を見送つた。

三十八

　冬から春に、春から夏にかけて、常に暗い室にゐて沈みかへつてゐた私の心に、時ならぬ動搖が來た。今一度、若やかな氣持に返りたいといふ心の運動であつた。自分の藝術に力を與へるやうな新しい生活に觸れたかつた。若やかな氣持――新しい生活――依然として其の形は自分に見えなかつたけれど、さながら外界に照り付けてゐる日光のやうに、銀の如く鋭い光澤を帶びた神經の緊張でなければならなかつた。
　二三日の間に、書物は賣り盡されて、幾何かの金に換へられてしまつた。私は空となつた本箱を古道具屋を呼んで來て賣り拂つた。幾何にもならなかつた。たゞ、ムーテルの近世繪畫史だけは殘して置いた。私は此際思想上に何等かの確信を得ることが出來さへすれば、書物も、着物も、すべての物も犧牲にしたとて惜しくないと考へた。さうすれば自分は强くなるのだ、たゞ人間として强くなるといふことが私の理想であつた。
　私は急に書物も本箱も失くなつて、淋しくなつた室の中で、やはり机に向つてペンを採つてゐた。既に、約束のしてある原稿を書くためであつた。しかし心は落付かなかつた。私の眼の前には、淋しい路を旅してゐる自分の姿が浮んだ。霧のかゝつた山が見えた。谷底に白く流れてゐる靜かな溪川が見えた。其の傍に妻が來て、
『何日にお立ちなさいます。』と、言つた。
『さうさ、まだ分らない。』
と、私は答へた。既に、私の心は遠い他國の山野を歩いてゐた。故に頭が空虛のやうな氣がして、容易に筆が捗らなかつた。私は書きつつある原稿を引き破つて、斷つてしまひたかつた。而して直に旅立ちをしようとも思つた。しかし、徒らに感情は熱しても、考へれば何處にも自分の言責を破るだけ、自分の心の驕る筈が見出されなかつた。私はいかなる場合に於ても、少し眞面目に考へれば、擲たれてゐる自分を見出すことが出來た。飽迄眞面目であれ！人氣に立つ藝術ではない。眞に、常に淋しい心持でゐる。たゞ一人道を行く眞の藝術家として恥ぢるなかれ！　と私の耳に何處からとも

なく叫んだ聲があつた！

たとひ心は慌しく騒いでも、一日は、靜かに音なく暮れた。夏の深くなるにつれて、次第に夕燒の色が鮮かになつた。しめつぽい重い空氣が紫色を帶んだ晩方になると、蝙蝠が飛んで、蜻蛉が飛んで、蟬の鳴聲が繁くなつた。而して、外に遊んでゐる子供等の叫び聲が聞えた。私は子供の時分のことを思ひ出した。村端れの橋の色が黑く、其の彼方の圃に沈む夕日は紅かつた。私が此の景色を獨り立つて眺めてゐる姿が浮んだ。全く暗くなつた。夜は遲くまで障子を開けて置いた。妻は隣の室に蚊帳を吊つて、幼兒を日が暮れると早くから眠かし付けた。其の靑い、海色の蚊帳には孕む風もなかつた。緣側に置いた蚊遣線香の煙が、ゆら〳〵と白い絲のやうになびいて、庭の木下闇の方に流れて行くかと思ふと、する〳〵と机の上に這ひ上つて來た。私はいつしか作をしてゐた頭が疲れて、ペンを下に置いて其の日の仕事を終ひにしたのであつた。

三十九

私は仕事が濟むと、每晚、故鄕に其の日の新聞を送るのであつた。ペンで表書をする時に、明後日の朝、故鄕の山家にゐて母はこの私の書いた文字を見るのだと思つた。私は新聞を包んで、切手を貼らうとして抽斗を開けると、中に入れてあつた書物と本箱を賣り拂つて得た金が相觸れ合つた音が聞えた。覗くと、ランプの光りが鈍色の銀貨の上に落ちた。私は銀貨と紙幣の取り混ぜてあつたのを、悉く机の上に掴み出して、靜かに價額を數へ始めた、指頭を離れて音を立てぬやうに注意して。机の上に置かれた銀貨には、多くの人々の手に渡つて來た、全く溫味のない冷かな光りがあつた。而して色の汚れた紙幣には、汗と脂と淚の染みが附いてゐた。

『二十五圓五十錢……これで二十圓……』

と口のうちで小聲に言つて、紙幣の上に銀貨を載せながら、心は一種の哀愁に襲はれてゐた。而して何となくまた慌しさを感じて、この計算を誰か傍にゐて急き立ててゐるものがあるやうに思はれた。

私は、此時、人が垣根に寄つて、闇から此方の樣子を見て笑つてゐるやうに氣が差した。急に、計算を止めて、障子を閉めようかとも思つたが、また、全く氣のせゐであるとも考へ直した。何となれば、既に隣の女房も寢てしまつたと見えて四邊が靜かであつたからだ。靑桐の木は黑く默つて、靑い硝子色の空の下に突立つてゐた。私はやつと安心しながら、其の儘障子を開け放つて置いた。私は、自分の心が極めて消極的の氣分に包まれてあるのを知つた。私は、かういふやうな時には、すべての執着から離れて、全く、陰氣な弱い人であつた。すべての金額は二十七圓に、三十錢が不足してゐた。私は、金を計算し終ると一種の賴りなさを感じた。書物を賣つて得たといふことが意識せられたからだ。私は自分の境遇を考へて、而して、自分といふものが明かに分れば分つた程、友人からは離れて、益々孤獨となつて、社會から遠ざかつて、貧窮した生活を送つて行くやうな感じもした。私は空しく、机の上に金を置いて、呪と其の金を見詰めて考へ込んでゐた。其處へ幼兒を眠かし付けて妻が來た。

『まあ、澤山のお金ですね。』と笑つて言つた。

『あゝ、みんな本を賣つてしまつた金だ。』

と私は力なく答へた。而して、此の金はどんなことがあつても家庭の爲めには使はないと決心した。此時、私は、妻の手が此の金に觸れるのを氣遣つたばかりでなかつた、自分の手が觸れてさへ血の出るやうな痛ましさを覺えて戰へるのであつた。ランプの光りは銀貨の上に紗

を被せたやうにどんよりと照らしてゐた。何となく、其の金を見詰めて、私は縁の薄い金の如く思つた。ちやうど、自分の金でありながら、長く、自分の手に握つて置かないといふ契約が何處かにしてある金の如く。私は、一日も、早く旅行に出かけなければ、自分の意志に對して僞りを言つたものの如く考へられた。

『これだけの餘裕があつたら……』と妻が言つた。

私は長い間この古い暗い家に樂しみもなく生活してゐる妻のことを考へないではなかつた。而して常に經濟のために憂へてゐるのを知らなかつたのでなかつた。けれど、自分等はお互ひに敵に對して強くなければならぬと思つた。

『お前も知つてゐるやうに、此頃では友達すらあまり來なくなつたでないか。好い作を遂に書かなければ己は、死んでしまつた方がいゝのだ。……やはり、ベックリンが逆境時代には、途で友達に遇つても、物を言ふ者がなかつたさうだ。……』私は、神經が興奮し始めた。机の上の金を見るのさへ不快を禁じ得なかつた。

四十

哀れな夢遊病者のやうに、私は此の二三日は隱されてゐるやうな氣持で送つた。稀には規則正しく、猫に飯を與へないこともあつた。机の前に坐つて何を考へるとなく、たゞ、頻りに心が急き立てられて、既に時間が迫りながら、宿題が解けぬやうな惱ましさを感じた。而して、地圖を擴げて、山國の中の印の付いてゐる溫泉場を探ねたり、また、黑い脈管のやうに圖面に引かれてゐた鐵道線路の哩數や、初めて知つた驛の名などに心をとめて見た。しかし、同時に私の頭には、この古い暗い家から、何處か明るい場處に移りたい氣持があつた。もう、幾年も此の家に住んでゐた。其間に妻は病氣にかゝつた、この瘦せた幼兒が產れた。私はまた庭の一本の大きな青桐の木を見上げた。而して、たとひこの家に別れても、この木に別れるのが悲しかつた。私は、いつしか心を落付けて地圖を見てゐることも出來なくなつて、室の中を步き廻つてゐたが、帽子を被つて杖を取ると、ふら〳〵と家を出て當もなく家を探しに步いた。木立の葉に、また街の家根の瓦にうす赤味を帶んだ午前の日光が落ちてゐた。何となく、此の穩かな、雲もないどんよりとした空の景色は、午後には暑さが强烈となる前兆の如く思はれた。

重なり合つてゐる街の瓦家根が光つてゐた。

其の下の乾いた道の上を朝の涼しいうちに用事を濟ます考へで、急しさうに往來する人々の影があつた。また、店頭で立働いてゐる人々の姿を見た。其時、私には幾年の昔から繋がつて來た人生の生活といふやうなものが考へられた。自分は、何故に、この人々等の虛心でなしつゝある仕事を、疑はずに、仲間となつてすることが出來ないのであらうか。何故に私は、獨り、考へ、疑ひ、而して、この習慣に叛くやうな心を持たなければならぬのであらう。此の世の中の多くの人々の家庭に比して、自我の強い、また醒め易い私を中心としてゐる家庭は不幸なものだと思つた。

私は家を探して步いて、全く自分と關係のない、顏も知らなかつた家を訪ねて、家賃を聞いた時に、神經は病的に銳くなつて、先方の疑ひ深い底意味の籠つた眼の光りを身に受けることを怖れた。知らぬ人にも家を貸すといふこと、知らぬ人からも家を借り得るといふこと、たゞ、其れはすべて金の關係に過ぎなかつた。必ずしもヒユマニズムのためではない。單に物質の關係に過ぎなかつた。この意識は極端に私の心を臆病ならしめた。而して、新な土地、

新な家に移るのを不安に思はしめた。私は刹那に住み慣れた暗い、古い家が懷しくなつた。隣の女房も、彼の家主も、彼の米屋も、全く、知らぬ人々よりは幾分か自分等に懷しみのある人の如く感ぜられた。私は家を探ねるのを思ひ止つて家に歸つた。

私は、疲れた足を、机の前に投げ出して、熟々と、暗い、古い家の内を見廻した。再び不快な陰氣な重い空氣は自分の體を包んだ。長い間其の裡に呼吸した空氣であつた。其の日、晝飯の時に、私は妻に向つて言つた。

『とても家庭があつては駄目だ。思ひ切つたことが出來ないから。』――是迄にも、かういつたことは度々あつた。其のたびに互ひに面白くない感情を抱いて、其れがために一日物を言はなかつたことも經驗したのであつた。私は默つてゐる妻に向つて言つた。

『お前も、どうだ。子供をつれて田舍に歸つたら……』と。而して、冷かに其の青白い横顔を眺めた。

『私等が歸るのが、あなたの爲めになりますなら歸ります。』と、妻は、幼兒に乳房を含ませながら泣いて言つた。私は、翻然として、弱い者に向つて、こんなことを言ふのでなかつた、強い、自分等を苦しめる社會に對して反抗して、倒れて後已むばかりだと心で叫んだ。

四十一

翌朝、私は、旅に立つといふ前の日であつた。約束してあつた、仕事を濟してしまふと、急に、張り詰めてゐた筋肉に弛みを感じて、もう一枚の原稿も書き得ないまでに疲れてしまつた。私は、眼を閉ると、汽車に搖られて、田舍の青い世界に、新鮮な空氣を呼吸してゐるやうな感じがした。而して、是迄も單調につゞいて來た如く、この一日が、早く無事に暮れゝばいいと思つた。而して、自分の旅立つ前に何等の妨げの來らないことを希つた。私は初めて追ひ立てられるやうな氣持から脱れて、寢轉んで、庭の景色を眺めてゐた。一日は、私の眼の前に是迄氣の附かなかつた複雜な光線の變化を示してゐる。

『また、あのお祭の時分になりましたね。』と、私がうつとりとした氣持でゐると隣の室で妻が言つた。

此時、彼方の町を行き盡した處で、叩いてゐる鉦の音が、靜かな空氣に響を傳へて來た。カン、カン、カンカラカン……カンと誰の手で叩かれてゐるか知らないけれど、一種の調子をとつて響いて來た。

『あのお富士樣のお祭が濟むと直に夏が行つてしまふやうな氣がいたします。』と妻が言つた。

私は默つて其の鉦の音を聞いてゐた。去年の今頃は、妻が大きな腹をして息苦しさうに働いてゐたのであつた。頰骨の尖つた色艷の惡い淺間しい姿が目に浮んだ。私は、心の眼を閉ぢて、強ひて、其等の幻想を打ち消した。

『をばさん。』と、戸口に來て子供の聲がした。私は、何事かと思つて耳を欹てた。

『をばさん、猫が死にかゝつてますよ。』と、近所の子供等が告げに來た。妻は、直樣立ち上つた。

『猫が？　何處にゐますか？』と言つて急いで外に出た。私は、意外な事件に出遇つたと思ふと心が暗くなつた。

『こんなことがあると思つてゐた。』と獨りごとを言つて、つゞいて外に出て見た。眩しい日光が地上に漲つてゐた。どんなことがあつても、旅行に出かけるぞと目に見えない力に對して反抗の言葉を放つた私は、子供等と妻の行つた後について往來に出ると、五六間隔てた溝の際に白毛の多い猫が倒れて苦しんでゐた。私の家の

猫であつた。忽ち心は、言ひ知れぬ愁しみに滿された。而して、近づいて見ると、口から泡を吹いて、痩せた體全體に動悸を波の如く打つてゐた。而して、白い薄膜の半分かゝつた茶色の眼で、痛々しく染み入る日光を睨んでゐた。私は、刹那に、誰か此の猫に毒を飲ましたと思つた。同時に、この社會が悉くこの弱い動物のために敵であるやうに感ぜられた。私は、幾たびとなく隣の家から追はれて逃げて來た、この猫の姿を思ひ浮べた。其の上、常に近所の家では彼の兇猛な黒猫のしたことまで、此の魯鈍な猫のしたことと思つてゐた。敏捷な黒猫は人に多く姿を見せなかつたけれど、この魯かな猫は、逐はれても容易に逃げなかつたからだ。

『誰か、毒を飲ましたんだ！』と私は、大きな聲で叫んだ。而して、家に猫を抱いて來た。隣の家根を見ると、惡魔のやうな氣がした。

『毒を飲ました奴は、己には分つてゐる！』と、私は、其處に聞えるやうな大きな聲で二たび叫んだ。私は、寶丹を水に溶いて飲ました。何うしても、猫は、歩くことが出來なかつた。此時、妻は、

『これは、きつと誰かに甚く擲られたんですよ。』と言つた。而して、私は、疑ひの眼を見張つて、猫の背中を撫でると猫は痛みに堪へかねて鋭い泣聲を立てた。

私は、もう、こんなになつた猫をどうすることも出來なかつた。

四十二

妻は町に行つた。薬屋から『またゝび』を買つて來た。私は其の黄色な粉を新聞紙の上に載せて、猫の鼻尖に付けたけれど、たゞ懷しげに鈍い鼻を鳴らして頭を摺り付けたばかりで、嘗めようともしなかつた。而して、其の一日は暮れかゝつた。勝手許の隅に臥かして置いた猫の周圍をば、いつしか柔かな鼠色の空氣が取り巻いた。蚊は隠れ場處から出て、夜の來たのを喜ぶやうに歌をうたつて、動物の血を吸ふために群つてゐた。

『かうして、歩けなくなつて、何日も生きてゐられたら困りますね。』と妻が、猫の方を見ながら言つた。私は、この言葉を聞いて、若し、是れが人間の場合であつたらどんなものだらうと考へさせられた。

『可哀さうですけれど、何處かへ、捨てて來る譯に行きませんか？』と妻が、冷かに自分等の爲めに考へて言つた。

私は、この哀れな短い間に、波瀾の多かつた動物の一生について考へさされた。而して、遂にこの慘ましい末路を見て、他の家の猫の如く眼を閉ぢてゐる譯には行かなかつた。今は、苦しみの裡に生をつゞけるよりは、苦痛のない死の方が、この哀れな猫にとつて幸福であると考へた。而して、もはや再び、此の地上を自由に驅け廻ることも出來なくなつた動物を、いつまでもかうして見てゐることに忍びなかつた。私は、一思ひに此の猫の呼吸を止めてしまふことを考へた。妻は、殺すなどといふ殘忍なことが出來るものでないと言つた。しかし、廣い人家の稀な野原に伴れて行つて、此の猫を捨てて來たなら、終夜、苦痛と物淋しさのために叫ぶ猫の泣聲は、野を吹く夜中の嵐に冴えるに相違ない。たとひ遠く隔てゝゐて、其の泣聲は自分等の耳に聞えなくとも、私等の頭から、此の天地の何處かにこの苦しい泣聲の起つてゐるといふ思想を取り去ることが出來なかつた。夜の十時頃、私は、傷いた猫を抱いたまゝ戸外に出た。空を仰ぐと、星晴れがしてゐた。街の中は、此の時分まで祭のために人の往來が絶えなかつた。遠くでは、鉦の音が聞えてゐた。私は、鉦の音の聞える方と反對の方向に歩いて行つた。

つひに町を端れて、淋しい郊外に出た。猫は幾たびか悶掻いて泣いた。其のたびに、私は、頭を撫でて猫を慰つた。青黒い夜の空に、鬱然とした木立が、音もなく立つてゐた。夜は、都會に原始時代の幻を投げて見せた。私は、明日の夜は、高い山の麓で、眞に荒涼とした自然に接することが出來ると考へた。私は、途を急いだ。而して、曾て、幾たびも散歩に來たことのあつた河淵に出た。水聲が闇の底にあつた。私は、もう一度、苦しい生よりは、苦痛のない死の方が此の哀れな猫にとつて幸福であると考へた。

『好い處に、生れ變つて來いよ。』と私は言つた。私の眼には、熱い涙が湧いた。私は、顔を猫の毛の中に埋めて、同じく、此の世に生を享けてゐるといふやうな懐しさを感じた。此時、一層自分の手で頸を締めて息を止めようかと試みた。けれど、手に力が籠らなかつた。猫は、悲しさうな聲で泣いた。私の胸は塞つた。頭の中では生命を殺すことの怖ろしい罪惡であることを意識しながら、盲目の感情が、「より幸福に」と囁いて背後から迫つたので、私は、猫を眼の下の瀧壺に投げ込んだ。暫らく立つてゐたが水聲より何の音も聞えなかつた。私は、茨を分けて土手を滑り下りると、淋しい野中の道を驅け出した。急に、私は、途の上に立止つた。今、自分のしたことについて、靜かに考へて見ようといふ氣にはなれなかつた。死！　戰ひに疲れきつた生物の上に垂れた休息の幃である。生ある者のすべてが苦痛、爭闘の最後に、泣いて歸つて來た時に、我が子を抱く母のやうに、柔かに靜かに抱いてくれる沈默の母である。現在、此の地球の上に、動いてゐる人間は、幾十年を待たずして悉く死ぬ時があるのだ。而して、等しく公平な、光りの　して來ない暗い世界に永遠に消えて行くのだ。眼を上げて、彼方の都會の空を見渡すと、薔薇色に明るかつた。私は、胸に新しい希望を感じた。さまゞゝの音色が、面白さうに歌つてゐるやうに、地平線から起つて來た。

少年の見る人生如何（一）

私はラフカディオ・ハーン氏の書いたものが好きで、其れをよく愛讀した頃があつた。其して、今でも倚ほ記憶してゐる一節に、次のやうな氏の感想があつた。

「子供の時分、基督教の宣教師が theism の講義をして pantheism の攻撃をしたが、其の結果、自分は却つて後者を信ずるに至つた。」と、いふやうな意味であつた。

私は、其れを實に意味深いことだと考へる。この世の中のことで、これに類するやうな事實が決して少くないであらう。

少年の神經は鋭敏で、しかも觀察力や、直覺力に富んでゐることは、子供を持つた親たらずとも常に子供を手懐けてゐる教師等の知るところである。たとへば、口先でどんなにやさしく言つても、腹でさうで無い時は、やはり其れを知つてゐる。また假りに父母が何か意見が衝突をして言ひ爭つた場合にも、どちらが正しい、どちらが無理かといふことは、第三者の立場にゐる子供のよく直覺するところである。チッケンスのダビッド・カッパフィールドを讀んだ人は、いかに子供の觀察力の鋭敏で、心の純粹であるかを感ずるであらう。

（『未明感想小品集』より）

河の上の太陽

外で遊んでゐた。日の光りが漲つてゐる中で、友達と笑つたり、驅けたりしてゐた。いま誰かに追ひかけられて、相手の白い指が肩先に附かうとしたので、慌てて其れから脱れようとして身を悶えた刹那に夢が醒めた。『夢であつたか？』と良治は心に思つた。

ほんの少しばかりの間であつたけれど、好い氣持で眠つてゐた。夢が醒めても、あんな氣持でいつまでもゐられたら、どんなに仕合せであらうと、彼は小さな胸の中で思つた。其れ程、右の繃帶された眼に氣が附くと、どき〳〵痛んでゐた。

皆なと面白く遊んだのが夢であつたことがかへすがへすも殘念であつた。長い間床に就いてゐる。廣場や、森の中を忘れてしまつた程外に出て見ない。臥てゐて戸口の方を見ると輝かしい銀のやうな強い光りが虚空に閃いたり縺れたりして、木々の葉影が其の中で笑つてゐるのが見える。其れによつて、外の景色を思ひ出すばかりであつた。ちやうど水の中に沈んでゐる魚が、うす青い水の中から、明るい外の自然を眺めるやうに、眼を患つてゐる良治は、もう長い間うす暗いしんとした家の中に横はつてゐた。

彼の遊び友達は、良治が病氣で臥てゐることをいつとなしに聞いて知つてゐた。けれども、もう長いことたから癒つた時分ではないかと思つて、稀には戸口に立つて、

『良ちやん遊ばない。』と、言ふ聲がした。良治は其れを床に就いて聞いてゐた。しかし默つてゐた。すると母親が、『良治はまだ惡いから遊ばれない。まだなか〳〵よくならないから呼びに來ないで下さい。』と言つてゐた。母の聲もまた良治の耳に入つた。良治はこれを聞くと急に悲しくなつた。

『あまり一方だけ見てゐると飽きるだらうから、今度は彼方を向きなさい。』と、母親は床を其儘、静かに引摺つて良治の向きを換へてやつた。南の戸口の方を見てゐた良治は、北の障子の方を見たのであつた。しかし其處には何の眼を樂しませるやうな珍らしいものがなかつた。

『お母さん、明るい方を見てゐたい。』と、子供は母親に言つた。

『あまり明るい方を見てゐると左の眼によくない。少し眼を閉つて休ませた方がいゝ。』と、母親は答へた。

其れぎり二人は默つてゐた。良治は母親が氣附かぬ間に彼方へ行つてしまつたのではないかと考へてゐた。彼は、何となく獨りかうしてゐる自分といふものが頼りなく考へられて悲しかつた。其時であつた。

『良治、何處か痛くないか？』と、母は小さな沈んだ聲で聞いた。彼は、はじめて何ほ母が其處を去らずに自分についてゐたのを知つたのである。而して限りなく嬉しかつた。

『腰が痛い。』と、彼は訴へるやうに言つた。

『さうとも〳〵、片方だけで、幾日も臥てゐるのだもの、痛いのが當然だ。しかしお前は感心だ。よく其の我慢をしてくれた。他の者に其の眞似が出來るものか。癒つたら、お前の欲しいものは何でも買つてやる。どうかもう少し我慢をしてくれよ。今、好い方の眼を下にして、惡い方の眼を上にして臥るものなら、すぐに膿が

左の眼に入つて、好い方の眼が盲れてしまふ。もう少しの間だから辛抱しなければならんと、くれぐ\もお醫者様がおつしやられた……』と、母の聲は曇つた。

默つて、靜かに臥ながらこれを聞いてゐた良治は熱い涙が眼の底から湧き出るのを覺えた。しかし、枕に就けてゐる下の右の眼は頻りに腫れぼつたく、痛みに惡痒みを增して來て、感情の興奮につれてだん\/堪へられなかつた。

彼は、また母に其の苦痛を訴へた。

『膿が溜つたのだ。今洗つて、藥をたでてやらう。お前がよく眠入つてゐたものだから、眼を醒さないやうに少し其儘にして置いたけれど、晩でも氷嚢は當てて置かなければならん。どれ少し體を起しなさい。繃帶も淸潔なのに取換へてやるから』……と母親は言つて、彼の枕許に近寄つた。良治は其時、母親の姿を見ることが出來た。

良治は頭を母親の胸のあたりに輕く附けて、母のするまゝに委した。頭の上から幾重にも卷いて眼にかゝつた繃帶は一重、一重に剝がれて行つた。彼の左の眼には、其間母親の瘦せた、日夜幾度となく石鹼や、石炭酸で消毒をするために荒れ切つた掌の皮膚の上に止つてゐた。

其のうちに最後の繃帶の一卷きが取り剝されると、消毒綿の面にまで染み拔けた膿が、更に白い繃帶を黄色く汚してゐた。これを見ると、子供よりも母親の顏に驚きと不安の色とが著しく動いたのであつた。

『こんなに汚れてゐる……』から、話しかけるやうに子供に向つて言つた時には、旣に母親の聲は常と變りがなかつた。而して、綿を離しにかゝつた。すると、いつとなく乾いた膿のある一部分は固く眼の周圍に貼り附いてゐて、容易に其處から綿が取れなかつた。母は其れを水で濕して軟かになるのを待つてから剝ぎにかゝつた。やがて其れは離れたけれど、膿のために眼は全く塞がつてゐて開かなかつた。僅かばかりうす明るくなつたやうだけれど、瞼を透して見える光りは、鷄卵を透して見る位の赤さに過ぎなかつた。良治はこゞんで小さな土鍋に生溫く暖められた水藥をガーゼの片に浸して膿で塞がつた眼を輕く洗ひ始めた。晩春の穩かな午後には音もなかつた。彼はたゞ患つてゐる眼が燃えてゐるやうな熱さと底の方に深く根を張つてゐるやうな疼痛を感じた。さながら頭の心から、この痛みが下つて來て眼に應へるやうに感じたので、何處から來る痛みだらうかと疑つたのであつた。

『お母さん、この痛みは頭から來るのですか。』と、彼は母親に問うた。

『こゞむと眼の痛みが頭に應へるのだよ。』と、母は反對の說明を與へた。良治は何うしてもさう考へられなかつた。下をこゞむと一本の筋のやうな痛みの棒が眼から頭につゞいてゐる。頭を切り開いて取り出して見たいやうな氣がした。

『好い方の眼をしつかり閉いでゐるのだよ。其の水のとばしりが入ると眼が直に惡くなるから。』と母は注意をした。この時、やつと惡い方の眼が開いたのであつた。しかし、一時に細い針を無數に吹き込まれるやうに光線の刺戟に痛んで、眩しくて、どうしても開けたまゝで物を見ることが出來なかつた。

『お母さん眼が開いた。』と、良治は告げた。

『どれ、見せてくれ。』と、母親は良治の顏に片手を當てて、頰を押へるやうにして片手の指を恐る\/惡い方の眼の瞼に觸れて、靜かに其の眼を開いて其の中を覗くと、

『よくないなら、どうかして癒らないか知らん。お前のお父さんに見せてやれ……』と、母は言つた。而して、洗つた繃帶を取りに立つて行つた。

どういふものか、母が父を何かに附けてよく言はないのであつた。けれど、良治はこの眼が父のために惡くなつたといふ理由も、また何んで父が惡いのかといふ理由も解することが出來なかつた。母が父を惡く言ふのを——自分が病氣であるために——却つて父を氣の毒に思つたのであつた。

良治は、あまり父がこの室に來る姿を見ないことを考へた。また、たま〳〵、やつて來ても心が落着かないやうな樣子をして、何か一言か、二言聲をかけると直に彼方へ行つてしまふので、其のたびに心のうちで物足らなく感ずることを思ひ出した。母の言葉と考へ合せて、これには何か仔細があることだらうと思はれた。

母は眞白な繃帶と消毒綿とを持つて來た。而して、まだ何か忘れたものがあるやうに、二たび立ちかけようとした時、良治は、

『お父さんは？』と、母に聞いたのである。

『いまゐないやうだ。あんな者は何うでもい。』と、母は怒つたやうな顔附をして答へた。

良治は母の言葉と顔色とによつて、彼女が父に對してある憎しみを抱いてゐるのを知つた。

『なんで、お父さんをそんなに惡く言ふの。』と、彼は聲を震はして問うた。

『だつて、お前の大事な眼を盲してしまつたのでないか。』と、母は一層大きな聲で言つた。

良治は默つてしまつた。何うして眞の父によつて、自分の慕つてゐる、愛してゐる、また自分をも深く愛してゐると信ずる父によつて、いかなる理由で眼を盲されたかといふことを考へる前に、彼は、ほんたうに自分の眼は盲れてしまふのかといふ驚きと、怖れに心が捕へられてしまつたのであつた。

母親の姿が其處に見えなくなると、彼は慌てて床の中から飛び起きた。どんなになつてゐるか、常に醫者と母との他に見ない、而して、其れを見るたびに顔色を變へて母が驚く、自分の惡い方の眼の中は、いつたいどんなになつてゐるのか、良治は其れを見たいと思つたのだ。母が傍にゐたら、決して其れを許さないだらう。から考へたので、彼はこの間にと思つて、鏡臺の置いてある次の室にと驅け込んだ。而して、淡白い曇りの處々にかゝつてゐる鏡の前に立つて自分の顔を映すと、右の方の眼が赤く腫れ上つて、毬を附けたやうだ。其の赤みは眉毛のあたりまで一帶擴がつてゐて、疎らになつた眉毛の下肌が光つてゐる。そればかりでなく眼を中心に周圍は一面張り切つてゐて、怪しく光りを放つ薄皮を切つたなら、其の中から燃えるやうな毒血が迸るやうな氣持がした。而して、痛みは立つてゐると踵の先にまで響くのであつた。良治は、いつしか睫毛が一本殘らず拔けてしまつたのに氣附いた。自分ながら、怖ろしいやうな、心細いやうな、この先どうなるか知れんといふやうな不安に襲はれたのである。彼は小さな指頭で全く塞がつたビイドロのやうな瞼を僅かばかり開けて、好い方の眼で、鏡に顔を近寄せて右の眼の内を覗いた。

この時少年ながら、比較的物事についてまだ怖れを知らない少年ながら、何となく魂が戰きはじめた。眼の中は、何處からこんな氣味の惡い赤い肉が盛り上つて來たものか、いつぱいに塞いでゐた。而して白眼は見えなかつた。彼は白眼と黑眼とを探さうとした。而して盛り上つた肉の奧底を覗かうとした。すると、雞の肝臟のやうに眞紅な色をした處が、全く白眼の部分であつた。鋭いメスで白眼の上皮を剝いたやうに覺えた。而して、彼は、其の眞中の底の方に小さな瞳が埋れてゐるのを見た。平常見た、ちやうどこの好い方の眼に於けるやうな、あの大きな黑眼は何うしたのか？ 小さく痩せて、今はやつとあるか、無きかに見える程になつて、

しかも大變に遠く奥底に埋れてゐた。其れは、入日があのもく／＼した黄金色の雲の中に包まれてゐる時のやうにも似てゐたのである。彼はこの眞赤な色と、何處からともなく瞼の上下、左右から盛り上つて來る爛れたやうな肉とを見れば、見る程怖ろしくなつた。而して、今しがたよく薬で洗つた瞼にはいつしか眞黄色な膿が絲のやうに絡んでゐるのを見た。

『眼が盲れてしまふのか知らん。』と、不意に良治は叫んだ。この形の見えない、何かに襲はれて、其の刹那に思はず放つたやうな聲は自身の耳にも異様に聞かれた。彼は、其處から逃げるやうに鏡臺の前を離れて、また自分の床の中にもぐり込んだ。いつまでも鏡に映つた奇怪な眼が幻に浮ぶ。而して、其れが永久に消えずに鏡の面に喰附いてゐる。彼は現在其處に横はる自身の肉體の一部で其れがあると考へられなかつた。彼は怖ろしくて、二たび鏡の前へ行く氣にはなれなかつた。

『黒味勝の好い眼だ。』と、たび／＼いろ／＼な人に言はれたことを良治は思ひ出した。其の人は自分の傍に立つて呪と眼の中を覗き込んだものだ。もし眼が盲れたら、もはやさういふやうに言つて自分の眼を褒めてくれる人がないだらう、と考へると悲しくなつた。

醫者は脊の低い痩せた人であつた。いつも黒いやうな洋服を被て來た。至つて無口の人であつた。どういふものか、醫者が來て歸つた後は、しばらく家の裡が陰氣であつた。

醫者は規律正しく、毎日、來る時刻になると、時を違へずにやつて來た。氣候がだん／＼暑さに向つた。夕方になると蚊が一つ、二つ出るやうになつた。石竹の赤い花が咲く頃であつた、午前のうちから日の光りは強く、若葉の上に照つて銀の如く輝いた。

醫者は子供の枕許に來て、キチンと坐つてゐた。やがて、其の色の淺黒い顔は、子供の母親の方に向いたのである。

『一方の眼には變りがありませんか。』と、落付いた調子で聞いた。

『ハイ、別に變りがないやうで御座います。』と母親は答へて、更に語をついで、

『片方の眼は治りますまいか。』と、今度は醫者に向つて問うたのである。

『とても、いけますまいな。』と、醫者は首を傾げた。此時母親は、俯向いて、默つて涙ぐんでゐた。醫者は直ちに子供に近く摺り寄つた。而して、先づ好い方の眼を靜かに開けて見て、其次に頸を伸して中を覗いた。

『アツ、此方に移つた。』と、醫者は驚いたやうに、突然聲を立てた。

この聲を聞くと、同時に沈んで坐つてゐた母の體は刎ね返つたやうに飛び上つた。彼女は子供の枕許に驅けて來た。

『うつりましたですか？』と、咽喉にひついたやうな聲を出した。

『うつらないことがありますものか。これを御覽なさい。』と、言つて醫者は子供の好かつた方の眼を開けて見せた。

其の眼の中は果して、西瓜を切つたやうに眞紅になつてゐた。いつかうなつたのか全く彼女には氣が附かなかつた。『これは大變だ。』と心の中で思つた。

『あれ程、御注意申したのに、なぜ氣を附けて下さらんのです。』と醫者の眼は冷かに光つた。而して、子供の母親の顔を睨んだ。

晝夜、看病に面窶れのして、頭髪も幾日か梳らない母親は、哀れにもどぎまぎした。

『この子も、よく聞き分けて、決して惡い方の眼を上にして眠たことがありませんのです：：ど、どうしてうつりましたでせう？』と、泣き出さんばかりな顔附をして答へた。

・ある瞬間に於て室の裡の寂然とした沈默は破れて、空氣は動搖した。けれど、醫者の歸ると共にやがてまたもとの靜けさに復つた。軒端に塒を造るらしい雀の庭頭の木立に止つて鳴いてゐる聲が聞えて來た。

良治は兩方とも眼をば醫者によつて繃帶されたのであつた。白い布で鉢卷をされた頭を枕に載せて呢として床の中に横はつてゐた。

『お母さん、今度は仰向になつてもいゝ。』と、良治は臥てゐて母親に問うた。

『仰向になつてもいゝが、成たけ惡い方の眼を上にしないがいゝよ。』と、母は答へた。

仰向になつてもいゝと母は許したけれど、良治は仰向にすらもならなかつた。やはり惡い方の眼を下にして、何迄も醫者の言つたことを守つてゐた。この苦痛を忍ぶ子供の樣子を見るにつけ、而して、其れ程にするにもかゝはらず、右の眼は全く駄目になつたばかりか、左の眼すら惡くなつたのを見ると、母親はいぢらしくて堪らなかつた。出來るものなら、自身の眼を一つ潰しても、我が兒の眼を救ひたかつた。どんなことをしても自分の一心で、これから後は夜、晝、眠らずに看護をして、せめて一つの眼だけは助けずには置かぬと母親は思つたのであつた。

良治は眠てゐるとも思はれなかつたが、兩方の眼を繃帶されて身動きもせずに靜かに横はつてゐるので眼を開けてゐるのが分らなかつた。母親は彼の枕許に坐つて、昨日に變つた子供の樣子を見守つてゐた。そのうちに彼女の眼から淚が溢れ落ちた。

『堪忍してくれ、みんな親が惡いのだ。お前は大きくなつたら、どんなに私共を恨むだらう。私はどんなことをしてもお前の一つの眼だけは助ける、堪忍してくれ。』と、泣きながら母は子供に向つて言つた。

良治は母親の姿を眼に見ることは出來なかつたけれど、言葉によつて悲しんでゐる母親の胸の中を察することが出來た。而して、すべての原因がたゞ自分一人の上に係つてゐることを考へると、——自分の小さな心が、其れを許すと否とにあるのだと考へると——彼は、哀れな母を氣の毒に思つた。限りなく愛してゐる母を何うして許さずにゐられよう。母と共になら、死んでも悲しくないと感ずるものをなんで眼が一つ潰れたからとて、其れを恨み、憤りなどしよう。母が子供の誠の籠つた心の中を理解しないことを却つて彼は不思議に感じた位であつた。良治は獨り廣い野原の中に立つてゐるやうに賴りなく自分といふものを感じた。彼は身の置き處がなかつたやうに手足を動かしながら、

『お母さん、片方の眼が盲れても、片方が見えれば澤山ですよ。』と、言つた。其の聲はせき來る悲しみのために震へてゐた。

『なんでいゝことがあるものか。黑味勝の大きな綺麗な眼だと誰でも言はぬものがなかつたのに、少しの不注意から取り返しのつかぬことをしてしまつた。みんな親の罪だ。いま、お前はそんなことを言ふけれど、大きくなつたらどんなに私共を恨むことか知れない‥‥お前のお父さんは、ほんたうに惡い人だ。』と、母親は淚を呑んで言つた。

良治は、どうしても親を恨む氣にはなれなかつた。而して、母親が自分に對して詫びるのが益々分らなかつた。母親が、かうして詫びる程、彼は親から遠く引き離されて、何處か遠くに獨り淋しさ迷はなければならぬやうな氣持がして悲しかつた。どんなに不具者になつても家内の者が、自分を除け者にせず、互にいつまでも結び合つて離れることがなかつたら、なんで悲しい道理があらうと思つた。たとひ、世間の者が

自分を片眼のない不具者と言つて嘲笑しても、自分は決して其れを心にかけまいと良治は思つた。

母親が、彼の枕許を去ると、彼は一人になつた。考ふるともなく、これまで路の上で見たさま〴〵な盲人等の姿が浮んだのであつた。其時、彼を初め、彼と共に其處に遊んでゐる多くの彼の友達等が、其の盲人を見て笑つたり、また眼の見えないのを侮つて、其の人の後に忍び寄つて、杖をついて歩く眞似をしたり、いろいろなをかしな樣子附をして互に顏を見合つて笑つたりした。中には、其れと知りつゝ默つて通り過ぎて行く盲人もあつたが、稀れには、子供等に侮蔑されたのを甚く怒つて、口汚く叫んだり、杖を振り廻したりしたものもあつた。子供等は、其時、聲を上げて遠くに驅けた。而して、其の盲人に石を投げたり、罵つたりした。良治は、これまで不具者を見ると、何となく異つた人間のやうに思つた。醜い汚らしい人間のやうに思つた。いま其れが誤つてゐたことを悟つた。なんで、あの哀れな盲目の人々に對して、石を投げたり、侮つたりしたらうと後悔された。いつか自分は、其等の哀れな人々の仲間に入るのかと思ふと、而して、今迄仲好く遊んだ友達から、「盲目」と言つて嘲られるのかと思ふと、其の日の來るのが怖ろしかつた。たゞそのことを考へると恐ろしかつた。盲目になつてからの不自由も、何もかも、我慢をするけれど、また親のしたすべての過失を許すけれど、たゞ、皆なから侮られることを思ふばかりに盲目となることが厭であつた。盲目にならなければならぬと考へることが怖ろしかつた。

突然、良治の室から叫聲と共に泣聲が起つたので、母親はびつくりした。彼女は疲れてうとうとと茶の間で居眠りをしてゐたのであつたが、慌てて子供の臥てゐる室に驅け附けると、子供は叫んでゐた。

「盲目になるのは厭だ……盲目になるのは厭だ……」と、泣き叫んでゐた。これを聞くと、彼女はぎよつとして、思はず其處に立ち竦んでしまつた。子供は頻りに床の中で暴れてゐた。彼女は眼が眩んだやうに手が附けることが出來なかつた。

子供の頭髮は、母親の涙で濕れた。母親は何か小さな聲で詫びるやうに頻りに物語つて、子供の背中を撫でてやつた。すると、いつとはなしに暴れ狂つてゐた子供はおとなしくなつた。而して、つひに眠つてしまつたらしい。

投げ附けた茶碗が何處かに當つて碎けた音で、良治はふと眼を醒した。勝手許で、母と父が爭つてゐる樣子であつた。母が頻りに父に向つて何か甲高な聲で言ひつゞけてゐた。其のうちに父が大きな聲を出して何か怒鳴つた。同時にまた何か投げ附けたらしく、物の破れる音がした。つゞけさまにもう一つ投げたらしかつた。其れきり母の罵る聲も、父の怒鳴る聲も聞えなかつた。良治は日頃のことを思ひ出した。父は母と爭つた場合に言葉に窮するとか、若くは自分の方が道理に反いて言ひ敗けるとかした時は、きまつて傍にあるものを手當り次第に投げ附けるのであつた。ある時は壁に向つて投げた。ある時は其れを母に向つて投げた。ある時は外の地面に向つて投げたのであつた。父が物を破壞する時は、母は口を噤んだ。たとひいかに其の事件について言ふべきことがあつても默るのが常であつた。良治はなんで、今日、父と母とが爭つたかを考へた。而して其れが何となく自分の病氣に係るやうな氣がした。母が父に向つて、「良治の眼を潰したのは、あなただ。なんと言つて良治にあやまるか。申譯する言葉がないだらう。」と言つたにちがひない。最初、父は默つてゐた。母は父に對して飽迄も其

のことを言ひつゞけた。而して最後にこんな事件が起つたのだらうと考へた。

事件のあつた後、しばらく家の裡は寂然として音がなかつた。其れは昵として樣子を探らうとしてゐる良治にとつて、氣味惡く感じられた。先刻まで鳴きつゞけてゐた雀の啼聲が止んでゐた。しかし遠くの方で、子供等が遊んで、驅けながら呼びかはしてゐる聲が聞えて來た。あたりの氣はひは、何となく、日暮方のやうに思はれた。彼は、嘗て自分も皆なと共に、其の群の中に入つて、往來を走つたり、森の中に隱れたりしたことのあつた記憶を呼び起して、うす暗い葉蔭の繁つた、脂の香の漂ふ藪の中の見覺えのある光景を眼に描いた。彼はうつとりとした。而して小さな體を竦めて、息を凝して其處に潛んでゐるやうな氣持がした。彼方に聞える呼聲にぢつと耳を澄して、近づき來る鬼の足音を聞き逃すまいとした。

良治は二度眠入つたことが自身にも分らなかつた。眼が醒めた時は、四邊は死んだやうに靜まつてゐた。耳を澄しても、何一つ音の聞えるものがなかつた。而して繃帶で全く塞がれた眼であるけれど、其の明るみのあるとなしとの差別によつて夜といふことが察せられたのである。もう何時頃だらうか？　彼は小さな胸に迫つて來る寂寥に堪へられなかつた。彼は暮方父と母とが爭つてゐたのを知つてゐた。而して、其の時に母の聲を聞いたきり、母のこゝに來た氣はひを知らなかつた。母はどうしたらう？　而して、父は何うしたらう？　かう思ふと、胸がどき／＼として來て靜まらなかつた。何となしに不安の念は彼の魂を搖つたのである。彼は全く堪へられなかつた。

『お母さん……』と、大きな聲を出して呼んだ。

彼は、自分獨りが、この室の中に置き忘れられてゐるやうに思つた。

『どうした？　眼が醒めたか。氷はもう少し前に取り換へた。どこか痛むか？　お母さんは、今彼方で休んでゐる。どうかしたか？』と、思ひがけなく、枕許に坐つてゐる父が言つた。たしかに其れは父の聲であつた。良治は自身の耳を疑つたのであつた。誰も其處にはゐないと思つたのに、人が其處に昵として彼を見守つてゐたのであると知ると、彼は意外に思つた。

しかし、其の人が他のものでない、彼の父であるのを不思議に感じた。これまで、あまり父は室にすら入つて來なかつたのに？　また嘗て、こんなにやさしい言葉をかけたことがなかつたのに？　どうしたのだらうと良治は訝かしく思つた。

次に、彼の頭に浮んだのは、何時頃だらうかといふことであつた。夜にちがひないが、而して、夜も大分更けたやうな氣がするが、どうしてこの時刻になるまで父が獨り起きてゐて、自分の枕許に坐つてゐるのだらう？　彼は、耳を遠くに澄した。寂然として音がなかつた。

『お父さん、何時頃ですか。』と、良治は悲しくなつて聞いたのである。

『十二時過だ。お父さんが附いてゐるから、氣を靜めて眠たがいゝ、少しでも眼を休めた方がいゝのだから。』と、父は言つた。

この言葉は、良治に新たなる疑ひを抱かせた。まだ自分の眼が助かるだらうか？　全く盲れてしまふものなら、休める必要がないのにと思つたのであつた。

『お父さん、僕は盲目にならずに濟む？』と、良治は父の坐つてゐる方に顏だけを向けて言つた。

『一つだけは大丈夫癒して見せると、今日醫者が言つた。良治！　どうか堪忍してくれ。皆な俺のせゐだ。俺は今お前にあやまる。許してくれ。どうか許してくれ。』と、父が言つた。其

の聲は低く、微かに震へてゐた。良治には青ざめた、眼の深く落込んだ、この時の父の姿がありありと心に映つたのである。あの頑固な曾てやさしい言葉をかけたことのない父にも、こんな悲しい、哀れなことがあるかと考へられた。このことは少くも過去に於ける父の印象を破壊した。而して、これは産れてから未だに覺えのなかつた淋しい、頼りない驚きであつた。

良治には、父の言葉に答へる言葉が出なかつた。彼は默つてゐた。しかし心は掻き挘られるやうに苦しかつた。たゞ涙が衝き出ようとしたのを彼は無理に押へてゐた。何といふことなしに、この場合父に自分の涙を見せたくなかつたのだ。何ものかたえず、自分にも分らないけれど父に對して反抗するものがあつた。もしこれが母の場合であつたら、彼は聲を上げて泣いたかも知れない、感情のまゝに母に取縋つて泣いたかも知れない。否、必ず泣いたにちがひなかつた。けれど彼は、どういふものか父に對しては、この感情を强ひて隱さうとした。しかし思へば、思ふ程、悲しかつた。自分といふものが不幸に思はれて、悲しかつたばかりでなく、かういふ父がまた限りなく哀れに思はれて悲しかつたのであつた。遂に彼は感情に打勝てなかつた。俯いて泣き、父に涙を見せまいとして、彼は此方に向き直つて、額を蒲團の中に隱すと泣いたのである。

良治の左の眼は意外に早く癒つた。「明日からは繃帶を取つてもいゝ。」と、醫者が父母に向つて言つてゐるのが、良治の耳にも入つた。彼の右の眼の痛みは、今はあるかなきかにまでうすらいでゐた。けれど、醫者は其の方のことについては語らなかつた。

明る日、彼は左の眼が、全く癒つたことを知る時が來た。而して、黑い洋服を着た痩せた醫者の姿と、この室に同じく坐つてゐる母の姿と、而して、周圍にあつたすべての物とを全く新しい氣持で眺めたのである。北向きの障子は開け放たれた。庭には驚くばかり繁つた木々の葉が淡い初夏の日光の中に躍つてゐた。陰になつた處は神秘的にひつそりとしてゐた。彼は、早く下駄を穿いて、其の異つたやうなうす暗い世界に入つて行きたかつた。遲咲の皐月の紅い花が庭の隅の石の陰に咲いてゐる。今、其の上に日が燃え附いたやうに、鮮かに照らしてゐた。

「右の方の繃帶は、いつ頃取れませうか。」と、母親は醫者に聞いた。醫者は手を洗つて、器械や、小さな罎を箱に收めてゐるところであつた。

「もう少しです。まだ全く腫れが引きませんから。」と、答へた。

「一方が助かつてよう御座いました。世間には兩方駄目にするのが澤山ありますから。」と、醫者は其の後で言つた。

母親は醫者がさう言つた意味――より多くをこの場合に望むのは間違ひである。もしこの一つの眼も助からなかつたやうな不幸な場合を考へるがいゝ、一つ癒つた故をもつて、一つ失つたことを悔いるのは幸といふことを知らぬものだといふ意味を――彼女に悟つたのであつた。

「なんで、この上の仕合せを願ひませう。先生のお蔭樣で一つの眼が助かりました。この兒も全く盲目にせずにすみました……」と、母親は醫者に謝するやうに言つた。無口な醫者はこれには別に答へなかつた。彼は、やがて歸つて行つた。しばらくの間は家の裡に、醫者の黑い影が殘つてゐて、何となく陰氣な人だと、其の人のことを思はせた。けれど、曾て、誰もそのことを口に出して言つたものがない。

醫者が來ないやうになつてから、其後しばらく、良治は母につれられて、この醫者の許に通つた。其處に行けば他にも眼を患つてゐる人々

が澤山あるのを見た。遂に、右の眼の繃帶を取り去られる日が來たのであつた。しかし、子供の變つた姿を見た時に、母は他人の集まつてゐる前をもかまはずに、涙を流して物を言ふ聲も震へてゐた。良治は母の袂を惹いて、早く醫者の玄關から、外に出ようとした。而して、二人は明るい日光の中を、乾いた路を歩いて街に差しかゝつた。

知らぬ人々が、皆な自分の顔を眤と見て行くやうに良治は感じた。母は、たえず口の中で誰にも分らないやうな小聲で、何か言ひながら歩いた。この路は良治が學校へ行く時に毎日通つた處であつた。而して、兩側の店は彼の見飽きる程、見慣れたものであつた。また其等の店頭に坐る番頭や、家の人々は、物こそ言つたことがないが顔を見知つた親しいものであつた。良治は母と共に歩いた。すると門前に坐つてゐる人々が、不思議さうな眼附をして此方を見てゐた。少くも彼にはさう思はれた。彼は、其等の人達がどんな考へで自分を見るだらうか。『あの兒はいつ片眼が盲れた？』と、思つて驚いたのであらうか。『可哀さうに。』と、心に思つてくれるのであらうか。其れとも、『みつともない顔になつた。』と呆れてゐるのであらうか。良治は、何となく彼等がすべて可哀さうにと思つて、自分を見送つてゐるやうに感じたので、覺えず熱い涙が彼の眼の中に溢れて來た。而して、恥しくなつて、成るたけ母の袂に隱れるやうにして歩いて來た。

燕が低く、往來の上をつやゝかな翼を閃かして飛んでゐた。八百屋の店には、色の美しい巴旦杏や、林檎や、苺などが並べてあつた。旅から來た西瓜や、胡瓜なども物珍らしく眼に映つた。母親は、良治のために好きなネープルと他に林檎などを買つたのである。其の間、良治は往來の上に立つて其の方を見てゐたが、つい隣に理髮店があつたので、何の氣なしに、其の前に行つた。店には客が一人あつて、主人は鋏をチョキ〳〵鳴らしながら刈つてゐた。良治は、澄み渡つた清らかな大きな鏡に、自分の姿が描かれたやうに映つたのを見た。而して、ぢつと顔に注意すると、彼はびつくりしてしまつた。これが果して自分の顔か？と疑つた程、びつくりしてしまつた。其れは二目と見ることの出來ない醜い顔になつてゐた。同時に彼の心の眼には、二つの黒味勝の大きな眼を持つてゐた昔の自分の顔が見られた。而して、この異つた二つの顔を較べることの怖ろしさに、彼は其の鏡の前から飛び退いた。

明日からは、一人で——母は、學校について來ないから——學校へ行く時に、みんなが何と惡口を言ふだらう？『やーい、眇目め。』と言ふにきまつてゐると思ふと、彼は堪らなく、苦しく、悲しく、怖ろしくなつた。彼は不意に往來の上で泣き出した。

其の聲を聞き附けて、驚いて母は、果物の入つた大風呂敷をさげて彼の傍に驅けて來た。

『良治何うかしたのかい？』と母は、泣く子供の顏を覗き込んだ。

『なんで、急に泣き出したのだ。』と、言つて、其れを聞かうとした。而して、彼女は漸く思ひ當ることがあつたと見えて、急に其の聲を和げて、

『お前の好きなものを買つて來てやつた。さあ、早く家へ歸つておあがり…』と、言ひながら、子供の鼻先に風呂敷包みを差し上げた。其の中からは好い、懷しい香氣が漂つて來た。良治は其の香を嗅いで氣が遠くなるのを感じたけれど、やはり頭を振つて泣き止まなかつた。

『もう、學校へ行くのは厭だ。學校へ行くのは厭だ！』と、彼は泣きながら言ひつゞけた。眞晝頃の町の中は靜かで、往來には人通りが少かつ

た。獨り、太陽は悠々として、大空に高く輝いてゐた。

『學校へなんか、まだ當分行かなくてもいゝから、……お前の臥てゐる間に英さんが、幾度も呼びにいらしたから、早く家へ歸つて、英さんが學校から歸つていらしたら、私が迎ひに行つて連れてくるよ。さうしたら二人で仲よくお遊び……』と、母親は、子供を慰めてゐた。

良治は、既に今迄のことは、すつかり忘れてしまつたやうに希望に憧れて、元氣よく先になつて歩き出した。後から、物思ひ顔に沈んで、歩みを運ぶ母親の眼は濡れてゐた。

日は經つたけれど、良治の兩親は我が子を學校へやるのに苦しんだ。良治はどうしても學校へは行きたくないと言つて、毎朝泣いて止まなかつた。これに對して、母親はどうすることも出來なかつた。ある日のこと家に出入りする老婆のお近が、良治に向つて、

『なあに、恥かしいことがありますもんですか、病氣にかゝつて眼が盲れましたのに、何恥かしいことがあるもんですか。笑つたり、惡口を言つたりするもんだつて、いつ病氣に罹らないと限りませんもの。そんなことを言ふ奴があつたら、學校へ行つて、お父さんに言つて頂きますから、何も知らぬ顔をして、今迄のやうに氣を大きく持つて學校に行きなさいまし。こちらから、何にもしないのに、いぢめたり、惡口を言つたりするものがあつたら、其時は先生にお母さんか、お父さんに行つてもらつて、言つてもらひなさいまし。』と、人の好い、腰の少し曲つたお近は、良治の家の戸口に立つて、涙ぐんでゐた良治に向つて言つた。

彼は、老婆の言ふやうに、さう誰でも道理が分つてゐるものでないと思つた。もしさうであつたなら、仲間同志で意地惡をしたり、喧嘩をしたりすることがないと思つた。

『そんなことを言つたつて、皆なは惡口を言ふぢやないか。』と、良治は老婆を睨んで言つたが、『病氣だから仕方がない。』と言つた、老婆の言葉には、何となく眞理があるやうな氣もした。

彼は、眼を擧げて、學校が其の下にある方の空を見遣つた。今頃は何の授業の時間だらうと考へた。彼の友達の顔が浮んだ。また、彼等は今、最初の一時間が終る鐘が鳴つて、あの廣い運動場を目がけて、先を爭つて驅けてゐる光景が見えた。或者は笑つてゐる。或者は叫んでゐる。或者は器械體操の鐵棒に搖下つてゐる。

『さうだ。病氣で眼が潰れたのだから仕方がない。』

今度、誰か自分に向つて惡口を言つた時には、自分はさう彼等に言つてやらう。これはほんたうのことだ。どんな人間の力でも、どうすることも出來ないことだ。其れでも、もし彼等が其の上に何か言つたなら、

『君だつて、病氣に罹らないとは言へないだらう。病氣にかゝつて、こんなになつたんだから仕方がないぢやないか。君だつて、いつ病氣にかゝらないとは限らないぢやないか。』と、かう自分は、彼等に言つてやらう。良治は、こゝに初めて、あきらめと、悟りと、而して勇氣とを見出したのであつた。彼は、自ら孤獨の感に打たれながら、涙ぐんだ眼で雲切れのしたうす青い空の色に見とれてゐた。

明る日の朝になると、日頃から仲の好い英吉が學校へ行くために、良治を誘ひに來た。この兒は良治より一つ年上であつたけれど、ずつと體は大きかつた。脊はあまり高くはなかつたが、手や、足が肥つてゐて、何となく強さうな兒であつた。しかし、どちらかといへば、やはり内氣な、だんまりの性質であつた。二人は連立つて、戸口を出かゝつた時に、良治の母親は、

英吉に向つて、
『英ちやん、もし皆なが家の良治に、眇目だなどと言つて、いぢめたら、英ちやんは強いのだから、そんなことを言ふもんぢやないと先方の子供に言つて下さいね。どうか二人は仲よくして行つて、歸つて下さい。歸つたら、二人の好きなお菓子を澤山とつて置きますからね。』と、母親は言つて頼んだ。此時、英吉は默つて足許を見詰めて立つてゐた。其のよく肥つてゐる顏は赤い林檎のやうな色をして、厚ぼつたい瞼は、眼を包んで、細い絲のやうに見せてゐた。最後に、英吉は、
『ハイ。』と、たゞ一言いつて、頭を下げると、二人は既に路の上を隈なく照らした日の光りを浴びながら、彼方に遠ざかつて行つた。良治の母親は、門口の處で、二人の子供の影が路を曲つて見えなくなるまで、立盡して見送つてゐた。
學校では、皆なが毬投げをしたり、鬼事をやつたりした。良治も、また其の中に加はつてゐたが、誰言ふとなく、良治が毬を投げる眼附がをかしい、見當ちがひの處に投げるなどと言つて笑つた。
『オイ、君は何處を見て、毬を投げるんだい。』と、一人の學友が良治に聲をかけた。
『僕？ 君の處に投げてゐるんぢやないか。』と、良治は顏を赤くして笑つた。
『あゝ、そんならいゝけど。』と、相手の學友は答へた。けれど、良治の投げた毬は方向を違へて、彼方の草の中に轉がつた。すると、傍に立つてこれを見てゐた生徒等は手を叩いて笑つた。良治の顏は益々赤くなつた。
其のうちに授業の始まる鐘が鳴つた。皆なは散らばつて敎室の中に入つて行つた。次の遊び時間には、皆なは鬼事をした。其の時も誰言ふとなく、良治が鬼になつて追ひかける時の眼附がをかしいと言つて、互に肩を押して笑ひ合つた。
『オイ、君は誰を摑まへようとするのだい。』…などと、友達は良治に追はれながら、惡口を言つて彼にからかつた。すると良治は益々顏を赤くして、好い方の眼で、相手を睨むために思ひきり顏を曲げて、口附を妙に歪めたので、いよいよ顏附がをかしくなつた。生徒等は手を叩いて、彼を笑つた。
次の遊ぶ時には、彼は皆なから離れて杉の木の下に悄然として立つてゐた。二三本の杉の木は、そんなに太くなかつた。いつ誰が其の皮を剝いたともなく、幹の皮は剝がれて下の生木が露はれてゐた。其れにすら爪の痕が附いてゐたが、尙ほ何處からか生氣が通ふと見えて、上の枝葉は青かつた。しかし、何となく哀れな樣子であつた。
『人もいぢめられた人間程強いが、木もやはりさうだ。』と、いつか敎師が其の木の下にゐた時、この杉の木の幹を撫でながら、獨言のやうに傍にゐた生徒等に向つて言つたことがあつた。良治は、其の言葉を思ひ出して、切實に心に感じたのであつた。
其處へ、友達等は、『鬼事をしようよ。』と、言つて彼を誘ひに來た。彼は直ちに彼等の嘲笑を含んだ顏附で、鬼事が目的でなく、自分をからかひ、自分の顏を見て面白がるために、鬼事に誘ひに來たのだと知つたから、彼は頭を振つたのであつた。
『君、鬼事をしようよ。』と、彼等はしつこく言つた。
『厭だ。』と、良治は答へた。
『どうして？』と、彼等のある者は、狡さうな笑ひを押し隱して言つた。
『どうしても。』と、良治は飽迄も頭を振つて應じなかつた。
多數の彼等は、たゞ一人の意志によつて、彼等

が期待してゐた樂しみを無駄にはしなかつた。一人を暴力に訴へて犧牲にしても、其の目的を達しようとして、多數の彼等の中で、一番亂暴の者が二三人前に進み出た。其の中の一人が良治の着物を摑んだ。

『さあ、彼方へ行つて鬼事をしよう。』と、言つた。

『厭だ。』と、良治は答へた。しかし强く引かれるのを手を擧げて抵抗するだけの力がなかつたので、彼はしつかりと杉の木の幹にしがみ附いた。

其時、監督の教師が運動場を靜かに歩いて、眼鏡を日光にきら〳〵させながら此方に來かゝつたので、皆なは亂暴をやめて、彼方に散つてしまつた。

學校の門から出ると、皆なは群がつて町の方へ歸つて來た。夏の日は白く路の上を晒して、建物の家根は光つてゐた。何處の露路から出て來たのか、一疋の赤毛の犬が皆なの先になつて歩いてゐた。風の吹くたびに柳の枝が搖れて葉が日の光りに銀のやうに閃いてゐた。而して、路傍の土手の上には、頭垂れて胡蝶花が咲いてゐた。良治は、よく見ると、先になつて歩いて行く犬が後の一つの足を何處で傷けたか跛を引いてゐるのに氣附いた。犬は後方から子供等が笑つたり、話したりしてやつて來るので、多少の不安を感じてゐるものゝ如く身を竦めて姿を隱すやうに急いでゐた。

不意に一人が、こゞんで下に落ちてゐる小石を拾つたと感ずる間に、彼方に投げ附けた。其の石は犬の身邊の土の上に落ちて、白い埃を上げた。犬は驚いて、慌てたけれど、さう早くは歩けなかつた。

『やーい、あの犬は跛を引いてゐらあ。』と、二三人が聲を合せて叫んだ。

『みんなで石を投げてやらうぢやないか。』と、一人が言つて、路に落ちてゐる石を拾つて投げると、つゞいて皆なが犬を目がけて石を投げ附けた。石は犬に當らなかつたが、幾つも其のまはりに落ちて地面を打つて砂を飛ばしたので、犬は怖氣附いて悲鳴を上げながら、一生懸命に逃げて行つた。

この思ひがけない事件のために、彼等は興奮した。而して急にはしやぎ出して、互に惡口を言ひ合つたり、押し合つたり、突き合つたりして戲れながら歩いて行つた。良治は何となく、いつか彼等の殘忍な心持が彼の身の上に移つて來るやうな氣がして、彼は其れを怖れてゐた。而して、成るたけ彼等の注意を惹かないやうにと思つて、後れ勝に下を向いて歩いて來た。

『跛目。』と、誰か急に叫んだ。するとつゞいて二三人が聲を合せて笑つた。良治は不意に頭から冷水をかけられたやうに慄然とした。果して、不安に思つたことが、今、事實になつて現はれたからだ。彼は其の方を見まいとした。すると、また誰か他のものが同じ言葉の惡口を言つた。彼の顏は赤くなつた。胸の中はどき〳〵とした。眼にはいつぱい涙が湧いた。けれど、彼は其れを飮み込んで、誰にも心の中を氣取られまいとつとめた。

今度は、强く或者に押されて一人が、良治に來て突き當つた。良治は、初めてきつとなつて顏を上げて其の者を見詰めると、彼に當つた者は、良治の顏を見ながら、何となく疚しげに、

『僕ぢやないぜ、誰か僕を押したんだぜ。』と、言つた。彼等は互にかうして其の罪を自身に被まいとした。而して、心の中では結び合ひつゝ一人を苦しめようとしたのだ。良治にはよく其のことが分つてゐた。しかし、何と言つても役に立たないと思つた。

路が二筋に分れてゐて、其の何方を行つても歸れる場所に來た時に、良治は一言も彼等に告

げずに自分は彼等の行かない路を取つた。
「やーい、眇目一人だけが、あちらの路を行くやい。」と、言つた者があつた。これに氣附いた皆なは聲を合せて同じことを言つて囃し立てた。
此時、良治は心の中で、自分にいかなる罪があつて、かうして彼等からいぢめられ、辱かしめられるのだらうかとしみ〴〵と思つたのであつた。「良ちやん、待つてて。」と、言ふ聲が後方でした。良治は涙の溜つた眼で振向いて見ると、英吉であつた。彼等の中に混つて、一人自分に今迄侮辱を加へずに脇を歩いてゐた英吉であつた。彼の姿を見ると、良治は溜つてゐた熱い涙が一時に頬の上を濺つて落ちた。
「英公、貴樣は眇目に加勢をするのかい。やーい、英公の鈍馬め。」と、彼等は口々にこんなことを言つて、此方を見て遠くから罵倒をしてゐた。
其れでも、無口の英吉は默つてゐた。而して二人は此方に來かゝつた。其の時、石が飛んで來て、英吉の鞄に當つた。牛のやうに呢と默つて路の上を見つめながら歩いてゐた英吉は、急に顏の色が變つた。而して、後方を見返つた彼は眼を据ゑて、多勢の者の顏を睨んだのであつた。
「なんで石を投げるんだ。」と、英吉はやゝしばらくしてから大きな聲で言つた。彼等は最初英吉の劍幕に怖れてこれに答へずにたゞ冷笑してゐるばかりであつた。
「英公の鈍馬。」と、やがて其の中の一人が言つた。皆ながつゞいていろ〳〵の惡口を彼に浴びせかけた。
『こゝへやつて來い。』と、英吉は更に怒鳴つた。而して、彼は兩方の拳を固く握つて彼方を向いて路の上に立つてゐた。
彼等はやつて來なかつた。やつて來るかはりに、二人を目がけて石を無數に投げ附けた。石は二人の前と後に音を立てて落ち、響きを立てて掠めた。英吉は良治を顧みて、
『良ちやん、危いから、彼方へ入つて隱れておいで、僕は石を投げ返してやるから。』と、言つた。
横手には寺があつた。寺の破れた垣根の上には掩ひ被さる程に銀杏の樹の若々しい青葉が垂れ下つてゐた。其處には、この靜かな寺の境内に入ることの出來る、小さな口が附いてゐた。
「僕もやるよ。」と、良治は言つた。彼の手足は熱して來た。血は頭に向つて逆上つてゐた。
「君の好い目に當ると大變だから、早くお隱れよ。」と、英吉は怒るやうに良治に言つた。而して、彼は荷物を肩から轉して、下の地面に置いて、其處にあつた石を拾ふと、先方に狙ひをつけて、火の出るやうな石を投げた。石は地面に當つて、土の上を摺つて彼等のゐる處まで轉げて行つた。英吉はまた石を拾つた。見ると、彼の大きな耳朶は眞赤に熱してゐた。良治も同じく石を拾つて投げた。けれど、其の石は大抵思はぬ方向に外れてしまつた。彼等からは嘲笑が其のたびに起つた。而して雨の降る如く石が二人の周圍に落ちて來た。英吉は何と思つたものか、幾つも石を拾つて懷中に入れた。其の上兩手にも石を握つて前へ突進して行つた。一時、彼を目がけて石を浴びせかけたが、英吉が彼等の間近に至ると、彼等は遂に聲を上げて逃げ出した。英吉は尙も彼等を追つて持つてゐるだけの石を投げ附けて歸つて來た。
ある日のことであつた。良治と英吉の二人は河のほとりにやつて來た。釣をしに來たのである。此處は二人がたび〳〵共に來たところであつた。彼等の村からさう遠くは隔てては居らなかつた。背を伸して見れば、村の森影が霞んで、其の頂きが光つて、眩しい空に接吻しつゝ眠つ

てゐるやうな光景が見られるのであつたが、今は桑の圃が青々と高く盛り上つたやうに茂つて、二人の體を全く埋めてしまつてゐるので、脊を伸しても其れを見ることが出來ない。たゞ、折々夢のやうに、この草木もうたゝ寢をしてゐるやうな水銀色の眞晝の空氣を傳つて、遙かに鷄の啼聲が聞えて來ることがあつた。其の聲は自分等の村からするのであらうと少年等は思つたのだ。

幾町となくつゞいた廣い桑圃は、河の流れてゐる浦に迫つて、僅かに一筋の細い道を殘して盡きてゐた。其の道とて稀にしか人が通らなかつた。道は足跡を全く滅して一面に掩はるゝ柔かな青草で隱されてゐたばかりでなく、桑の黑く重みのありさうな葉が其の上を絶えず覗いてゐた。其處は傾斜勝になつてゐた。而して、道は直ちに河の縁となつてゐて、水際には、やや春の高い雜木が處々に鬱然として毬形の如く藪を造つて更に水の上にのめつてゐた。どんよりと青磁色に澄んだ水は溢れるばかりに淵を浸してゐるばかりでなく、また藪の下枝を浸して、急がずに流れてゐた。

眞夏の日光は、すべて其等のものの上を照らしてゐた。桑圃の上には、若葉が一面にてらてらとして、白光りのする油を浴びせかけられたやうに見えた。草の葉に燃え移る日光は茫然として、眼を霞ませる[illegible]の上に金色に照らされて、葦の赤い野薔薇の若芽がさながら美しい細い蛇の小枝に絡んでゐるやうに鮮かであつた。二人は桑圃の間から拔け出て來て、この小道を急いだ。而して、少しばかり行くと空高く枝を擴げた太い栗の木の下に奔つてやつて來た。其の木の下は暗い影をば、この隈なく明るい天地の中に造つてゐた。而して、ゆるやかに流れてゐる可なり幅の廣い水の上には、其れがために美妙な鼠色の綾が畫かれてゐた。

二人は、栗の木の下の影の處に蹲踞つた。其處はちやうど釣をするのに好い場處であつた。良治は曾て大きな魚を釣落したことがあつてから、絲を此處に來て垂れるたびに、もう一度其の魚が絲に懸ることを願つたけれど、其れ以來あのやうな大きな魚を釣つたことがなかつた。英吉は、はや竿に卷いた絲を解いて、いつしか餌を鉤につけて水に落してゐた。赤い色の浮標が青みがかつた水の中に半分ばかり沒しながらゆるく渦を卷きつゝ流れる水に穩かに弄ばれて、たえず其の處を變へてゐた。白い浮標の半分は、上から洩れる日光に當つてゐた。其時、良治は蜘蛛の巢が、三本の結んであつた竿の先に附いてゐるのを眺めてゐた。而して、手間取つてゐた。彼はこの前、この竿を携へて、釣に來た日のことを考へた。其れは、まだ眼が何ともなかつた時であつた。眼を患つて、たうとう片方の眼が盲れてしまつたのは、其の後であつた。さう思ふにつけて、良治は、この前釣に來た日のことが懷しまれた。

あの時は、自分の二つの眼は、浮き上つた水晶のやうにぱつちりと開いてゐて、燦々として水の上に火花を散らすやうに輝いてゐる日の光りを見た。何となく、空も、水も、もつと明るかつたやうだ。かう思つて彼は、竿を手に持つたまゝ仰いで、大空に照り輝いてゐる太陽を凝視した。依然として、太陽は昔の如く、熾んに燃え渡つてゐた。何の變りがなかつた。彼の片方の眼は、しばらく其の光りの源に憧れて止まなかつたが、早くも眼は昏みかゝつた。しかも尚ほ彼は胸の裡の喜びを押へることが出來なかつた。而してよく、この一つの眼が見えなくならずに濟んだものだと小さな子供心ながら神に對して感謝の念が起つたのであつた。

『君は、何をしてゐるんだい。絲が縺れたのなら、僕が解いてあげようか。』と、英吉は良治を

見て言つた。
『今、下すところだ。』と、良治は答へた。彼はやつと絲を竿から解いて、鉤を検べて見ると、一本の鉤は既に折れてゐて役に立たなかつた。彼は其の竿を背後の草の中に投げた。他の二本に附いてゐる鉤は形だけは完全してゐるけれど、いづれも赤い錆が出てゐた。良治は小さな木箱の中から蚯蚓を摘み出すと、掌の上に乘せて叩いてから、二つにまだ生きてゐるのを切つて、其の一つづつを鉤に刺した。而して、水面を見下して浮標下の深さを心持で測つてから、絲を水の中に投げ込んだ。二つづつ四つの浮標先が、河の面を時々渡る風に吹かれて覺束なげになびいた。而して、默つて其れを見てゐるうちに、良治の頭の中には其の日學校であつたことや、自分を侮辱した彼等の顔附や、樂しかつたことや、眼が盲れてから、近所の人々の自分に對する態度の變つたことなどが善いにつけ惡いにつけ思ひに浮んで來たのであつた。彼は、まだ眼が何ともない時分に、皆なとこの河に來て遊んだ、去年の夏のある日のことを思つた。其の日はやはり今日の如く暑く、而して眩しかつた。皆なが、怖ろしがつて、誰も、二本の丸木橋の上をよく驅けるものがなかつたのに、自分は大膽に巧みに兩方の手で體の調子を取りながら幾度も其の上を走つて見せた。

良治は、さう思つて、河の上手を望むと、二三十間程隔つた彼方に、其の丸木橋がかゝつてゐた。而して日の光りの中に白つぽく晒されてゐた。雪が降つて雪が消えて、あの時から大分月日が經つた今日となつても、古びた橋の妙に變つたところがなかつた。

英吉は、先刻から二三度、竿を上げたり下したりした。下す時は細い竿先の風を切る音と共に絲の水面を打つ微かな音が聞かれた。

英吉は水の上を見て默つてゐたが、やがて口を切つた。

『良ちやん、今日はちつとも浮標を引かない。釣れさうもないから止めて、其れよりか草の上に臥轉んで「少年雜誌」でも見よう。考へ物が出てゐるよ。考へようぢやないか。』と、彼は良治に向つて言つた。

良治はこの時空想に耽つてゐた。あまり釣にも興味が乘つてゐなかつたから、早速、彼の言葉に同意した。すると英吉は直に竿を上げて水の滴る絲を巻き始めた。良治は何となく竿に少しの執着もなかつたので、どうせ歸る時まで其儘、其處に捨てて置かう、而して歸る時に絲を上げたら、其の間に、いつか釣り落したやうな大きな魚がかゝつてゐまいものでもないと空想したのであつた。（其の實、彼は大抵魚は餌を銜へた刹那に竿を上げるのでなければ、鉤に懸るものでないといふことを辨へてゐないのではなかつたが、こんな好都合な空想にも耽つたのである。）而して、二人は草の上に這ひ上つた。栗の木の影は其のあたりまで一面に廣く、暗い、涼しい綱の目を張つてゐた。良治は何より木の描く神秘的な影を好んだのであつた。

二人が臥轉んでゐた背後の桑畑には、枝先の葉隱れにまだ熟し切らない赤い實や、既に熟し切つた紫色の實が鈴なりになつてゐた。而して、其れが多くの人々には知れずにゐた。黃金色の日が差し覗いて其の實に映ることもあつた。白銀で造られたやうな若葉の上へ眼を光らした蜻蛉が止つて、體を休めてゐることもあつた。けれどこのことは其の蜻蛉より他に知る者がなかつた。英吉は懐裡からまだ新しい雜誌を出して、其れを二人の間に置いて繙いた。もう夏の休みには間近かつた。雜誌の口繪には山や海の風景が多かつた。少年と少女と連立つて歩いてゐる繪が色摺になつて入つてゐた。葉蔭を洩れる光線が風のまに〳〵水珠を散らした

やうに紙の上を走ることもあつた。

良治は、青い海岸の砂路を少年と連立つて風に長い袂を吹かれながら歩いてゐる少女の姿を見た時、其の眼の大きいところ、口附の締つたところ、頭髪の額にかゝつたところなどが、しげ子に似てゐると思つた。而して、其の少年は誰だらう。

彼は、もつと子供の時分に、しげ子の家へ遊びに行つて、二人で幼年畫報を見てゐたことがあつた。而して、ほゞこれと似たやうな顔附をした、もつと年のいかない男の子と、女の子との顔が並んで表紙に畫かれてゐることを記憶してゐる。其時、傍からしげ子の母親が顔を差出して、

「まあ、よく二人に似てゐること、これは良ちやん、こちらはしげちやん。」と、言つて繪を指して笑つた。二人も眼を輝かして、何ほよく畫に見入つて、ほんたうに二人を描いたのか知らん、どうしてこの繪師は、二人を何處で見て描いたらうといふやうな疑ひすら抱かれたことがあつた。座敷には長押に槍や薙刀が懸つて、茶の間には古風の時計が柱にかゝつてゐる、彼女の家の內の有樣が良治の心の眼に浮んだ。しかし二人は、互にやゝ年をとつてから、氣まりが惡いやうな氣がして、今迄のやうに親しくして遊ばなくもなれば、其の家へも訪ねて行かなくなつた。けれど、胸の中では却つて其の人を深く思ふやうになつた。――この口繪の少年、少女は、あの時の畫に似てゐる。やはり同じ少年少女を描いたのであるかも知れない。けれどこの一人は、たとひしげ子であつても、この一人は自分でない。どうして自分と言ふことが出來よう。かう思つて良治は繪に寫されてゐる少年の顔を見守つた。二つの涼しげな活々とした黑味勝の眼がぱつちりと開いてゐる。彼は其れを思ふと、強く突き除けられたやうな恥かしさを覺えた。

良治の顔は覺えず赤くなつた。而して眼を雜誌の上から外して、茫然として顔を上げて考へ込んだ。するといつとはなしに路の上で、たまたま遇つても顔をば長い袂で隱して過ぎることもあれば、學校から歸つて來てから、書物を習ひに行く先生の宅で遇つても、顔を紅く染めるしげ子の姿が、空間にあり〳〵と浮ぶのであつた。而して、初めて此時、栗の木で頻りに鳴いてゐる蟬の聲が風に亂れてゐるのに氣附いた。

良治は、この頃學校から歸つて來ても、其の西野先生の家へ書物を習ひに行かないことを考へた。而して、其れ以來しげ子とも顔を合はさないことを淋しく思つた。けれど、其の家に於て、今迄經驗しなかつた心の淋しさを味つてから、彼は二たび其の家へ行く氣にはなれなかつた。彼は、其のことを思ひ出すと怨めしさに心が曇るのである。其處には彼と同じ年頃の少年が幾人も集つた。而して、先生の細君は、皆なを可愛がつた。細君はまだそんなに年をとつてはゐなかつた。青い顔をして眼鏡をかけて、頭髪を延した先生よりは、ずつと年が若かつた。而して、先生と異つて愛嬌があつて、顔の血色も美しかつた。

ある日のこと、皆なは先生を待つてゐた。先生は外から、まだ歸つて來なかつた。家の門口の處には柿の木があつた。柿の青い實が、時々地面に落ちる音がして、其のたびにびつくりすることもあつた。

ちやうど其時、其處へ先生の細君が奥から出て來て皆なを見て笑つた。良治と他に三人の少年が正しく、玄關の次の間に坐つてゐた。皆なは丁寧に頭を下げたのである。細君はいろいろの話をしたが、少年等は默つてゐた。其のうちに、細君は他の三人の眼や、口附や鼻形などについて褒めて、

「ほんたうに皆さんは、器量好しだこと。」と、言つて、眞にかはる〴〵見惚れるやうな樣子をしたけれど、たゞ一人、良治については何も言はなかつたのであつた。

　彼はこの時、涙が滲んだ。而して、なんで自分だけは眼が盲れたかと父母を（病氣のせゐで仕方がないと知りつゝ）怨んだ。また、自分一人が除け者にされたことに對して、其の辱かしめを受けたことに對して悲しみもし、また限りもなく憤りもした。而して、其の日は全く書物が頭の中に入らなかつた。彼は家に歸ると、張り詰めてゐた胸の悲しみが一時に決して、泣き、而して、母親に向つて怒りながら訴へたのであつた。

『もう、本を習ひに行くのは厭だ。』と、良治は母に向つて言つた。

『あゝ、そんな家へは本を習ひに行かなくていい。』と、母も泣いて、さも無念さうに言つたのである。其れ以來良治は、西野先生の處へは行かなかつた。しげ子は今も倚ほ毎日行くのであらう？　而して、英吉も、やはり行くのであらう？　英吉も、行つてゐたから、

『英ちゃんは、毎日西野先生の處へ行つてゐて？』と、言つて、良治は英吉に問うた。

　英吉は下を向いて、眼を雜誌の面に落してゐた。良治にから問はれたので、ちよつと額を上げて、

『行つてゐるよ。』と、答へて、直にまた雜誌の方に心を取られながら、

「君、これは何か？」と、良治に言葉をかけて、指頭で活字の上を押へてゐた。すると良治は初めて眼醒めたやうに自分も頭を下げて共に其の上を覗き込んだ。

　其れは「考へ物」の欄であつた。新題が五つばかり出てゐる。其の中の一つを英吉は指してゐた。

「魚にして魚に非ざるものは何か。――君はどう思ふか」と言つて、英吉は良治を見た。

　良治は頭を傾けて考へてゐた。

「龜か知らん？　鰻か知らん？　あゝ、蟹か知らん？」と、いろ〳〵に思つて言つたのであつた。

「僕には、これが分るんだよ。」と、英吉は眼を輝かして笑つて言つた。

「分らないから、敎へておくれ。」と、良治は英吉に言つた。而して、ほんたうにこの世界の中に、魚であつてしかも魚でないものがあるか知らん？　あれば其れは何であらう。彼は自分等の知識の範圍に於て、斯の如きものを、果して知つてゐるだらうか。而して、それに氣附かずにゐたであらうかと怪しんだ。

　英吉は得意さうに笑つてゐた。

「君、果してそんなやうなものがあるのかい。」と、良治は彼に向つて念を押した。

『考へ物なんだから、成程と思へばいゝのだよ。』と、英吉は答へた。

「何だらう？」

「鯡のことさ。」と、英吉は言つた。

　二人は、手を叩いて笑つた。「さうだらう。」と英吉が言つた。「成程。」と良治が叫んだ。

「君これが、全く分らないんだよ。」と、英吉は次の題を指した。良治は興味を呼び起して、今度は自分が解からうと意氣込んで、「どれ。」と言つて、其の題を讀み始めた。

「この頃は米や、酒が高くなりて、十三圓なりといふが其の意如何。」と、書いてあつた。

　良治は讀み終つて、しばらく默つて考へ込んだ。

『六ケ敷いだらう？　何だらうね。』と、英吉も言つて頻りに頭を右左に傾げた。

　鶸色の沈默は、其の眼に見えぬ翼を擴げて二人の間に下りて來た。木の上では蟬の鳴く聲が

してゐた。突然分つた。」と良治が叫んだ。

『米が高くて九圓、酒が高くて四圓。』

『さうだ。さうだ。』と、これを聞いた英吉は言つて、手を叩いた。

二人は、また他の記事を讀んだりした。

英吉は、此時懷裡から別の小形なお伽噺の書物を出した。

『あゝ、僕も書物を持つて來ればよかつた。君其の書物は何が書いてあるんだい。』と、良治は英吉の手に持つてゐる綺麗な表紙の書物を見て言つた。

『これには外國の面白いのや、滑稽のや、悲しい話が澤山あるのだよ。』と、英吉は答へた。

『中に繪が入つてゐるかい。』と、良治は覗きながら問うた。

『あゝ。』と、英吉は答へて、書物を開いて、二人は初めから繪を一つ／＼見ながら行つた。

『面白いね。』と、良治は感歎して、其の繪に心を奪はれて、空想の瞳を輝かしたのであつた。

其のうちに、英吉がぱら／＼と頁を飜すと、書物の間から、紅と白の絹絲で美しく縢られた小さな栞が草の上に落ちて、ちやうど花のやうに止つた。

これを見た良治は、

『綺麗な栞だね。どうしたの？』と、無心に英吉に聞いた。

『しげちやんからもらつたのだ。』と、英吉は言つて栞を拾ひ上げて、書物の中に挿んだ。

彼女の名を聞くと、良治は胸が轟いた。頭がぐら／＼して忽ち四邊が暗くなつたやうな氣持がした。而して、急に咽喉が塞つて物が言へなかつた。

『いつ、しげちやんがくれたの？』と、良治は熱る頬を上げて、上目で友の顏を盜むやうに見て言つた。

『このあひだ。』と、英吉は簡短に答へた。

良治は、この間、途中でしげ子を見た時に、彼女が隱れるやうにして逃げたのを思ひ出した。かう思つた刹那に彼は限りない苦痛と絶望とが一時にやつて來て、彼の體を底の知れない穴の中に突き落したやうに感じた。

彼は、もう何も言ひたくなかつた。何も見たくなかつた。全く見えなかつたのである。この明るい天地が、彼には一寸先も分らない闇の如くであつた。彼は小さな溜息を吐いた。而して、たゞ一つことを思ひ込んでゐた。

其の間に、英吉はいろ／＼と何か彼に向つて言つたやうであつた。しかし、良治には何一つ耳には入らなかつた。

良治は、草の上から身を起した。其の顏色は青ざめてゐた。而して、さもたゞ一人の親友である彼をも憚るやうに、怖れと、不安に戰いた眼で英吉の顏色を覗ひながら、

『君、其の栞を僕にくれない？』と、聲を震はしながら言つた。

英吉は默つてゐた。自分の言つたことが彼に聞えないことはないと良治は思つた。しかし半信半疑の眼附をして尚ほ昵と英吉の顏を見詰めてゐた。つひに良治は堪りかねて、耳の根許まで眞赤にしながら、

『ねえ、厭？』と、小さな聲で重ねて英吉にせがんだ。

見ると、英吉の顏には當惑の色が浮んだ。而して、彼は默つて、さも聞えないやうな振を裝つて、其處にあつた竿を取り上げると立ち上つた。而して、桑圃の間の道をとぼ／＼と歩き出した。

良治には、友の承諾しない心がよく分つた。けれど、何んで返事をしないだらうか。其れは何か意味ありげで、且つ不安に思はれた。良治は、もしこの上尚ほ頼んだなら、其時は彼が自分

の望みを聞き入れてくれはしまいかといふやうな考へが起つたのを、卑屈な考へであると心で打消した。しかし返事を聞かないうちは全く思ひ切れぬやうな、何となく一種の氣がかりがあつたので、良治も默つて、其の後からついて歩いた。

二人は默つて歩いた。而して、今迄、臥轉んでゐた場處から遠ざかつた。良治はもう長い間思ふこと、考へることがつまらなかつた。しかし英吉との二人の中だけは樂しかつたのだ。今其の二人の間柄も不快なものになつてしまつたのを感じた。良治は首垂れて歩いた。彼は、この上栗のことについて友に向つて言葉が出し惡かつた。

やゝ道を歩いて、漸く彼等の村に近附いた時、不意に前になつて歩いてゐた英吉は歩みを止めた。而して、振返つて良治を見て、

『約束したのだもの。』と、言つた。

英吉が口を開いたことに、少しの元氣附いた良治は、

『どんな?』と、問ひ返しながら、今、初めてこんなにはつきりとした意識で、この友の顔を見るといふ風に英吉を見上げた。

『良ちやんに、この栗をやつてはいけないつて、しげちやんが言つたのだ。』と、英吉は告げて、流石に氣まり惡さうな樣子をした。

彼女がさう言つたと聞くと、良治は強く彈き飛されたやうな氣持がした。先刻から失意と落膽に沈んで、しかも思ひ切り甚い侮辱を忍んで倒れてゐるのを、今、またこの言葉を聞くと、彼は頭からいやといふ程踏み躙られ、尙ほ其れで飽足らずに力任せに蹴られたやうな氣持がした。

『さう。』と、良治は消えるやうな、力のない返事をした。而して、死んだ者の歩くやうに、英吉の後から遲れ勝について歩いてゐた。

村か、二人の眼前に全くその姿を見せた時に、良治は道の上に立止つた。而して、先になつて歩いてゐた英吉に聲をかけた。

『僕、竿を忘れて來た。君、先へ歸つておくれ。僕は竿を取つて來るから。』と、言つて光つた右の眼で、友を見ると、直に後を向いて、今歩いて來た道を驅け出した。英吉は何か言つた。しかし、彼には聞えなかつた。

良治は、二たび木の下に來て立つた。

もはや、あたりは一帶に日が陰つてゐた。水の面には冷たい、うす黑い色が漂つてゐた。二本の竿は先刻の處に其の儘になつてゐたが、其の中の一本は、危く岸から滑り落ちさうになつてゐた。而して僅かに太い竿の根本が、草の葉の間に懸つて、支へられながら搖いでゐた。水勢は絕えず其れを浚つて行かうとしてゐた。赤い浮標は、此時、赤黑い色に見えた。而して、微かな悲しい音を立てる水に堰かれて、赤く浮きつ沈みつしてゐた。良治は、立つてしばらく其れを眺めてゐたが、足先で、靜かに觸れるか觸れぬ程の力で、竿の根本を突くと、竿は水の中に落ちた。水は遂に志をとげて嬉しさうに笑つたやうに見えた。やがて竿はゆる〳〵と水に從つて下へ流れて行つた。

蟬の聲も遠ざかつた。其の河岸にゐるものは良治たゞ一人であつた。茫然として、彼は其處に佇んだ。

彼は、曾て、英吉が言つた言葉を思ひ出したのである。

『良ちやん、君の好い眼を不具にしたのは、君のお父さんや、お母さんの不注意なんだと僕のお母さんが言つてゐたよ。』

いつであつたか、英吉がかう言つた、其の言葉を思ひ出してゐた。

忽ち熱い涙が頰を流れて下に落ちた。言ひ現はし難い淋しさと、心細さと、賴りなさの情が

ひし〳〵と胸に迫つた。母や父ですら、この自分を可愛がつてはくれぬのか。こんなに淋しがり、常に懷かしがつてゐる自分を可哀さうだとは思つてくれぬのかと思ふと、今更、父や、母の顏があり〳〵と眼に見えて、何となく怨めしかつた。彼には、もう家まで走つて行つて、悶搔き、憤り、訴へるだけの勇氣がない。たゞ、すべてを思ふと怨めしかつた。

西の空には、夕燒の雲が爛れて、さながら眞紅の花の亂れたやうであつた。其の影は下の靜かな水に繪を見るやうに音なく映つてゐた。

良治は、いつしか丸木橋の傍に來て、獨り立つて河の面に描かれた、この自然の不可思議な光景に見とれたのである。彼は、眞に自分を愛する、誠の父母は、何處にゐるだらうと思つた。而して、其のまだ見ない父母のことを思ふと悲しかつた。彼は、其の父母を戀しく思つた。而して、其の未知の國を憧れた。この美しい雲の映つた水の中には、其の國があるやうな氣がした。

彼は忽ち身を跳らした。靜かな水面は驚いて波立つた。其の音と共に彼の姿は何處にか消えてしまつた。たゞ漣が一瞬間前の事件を語るやうに、暗くなつた岸に幽かな白い閃きを見せた。

（一九一八、四）

少年の見る人生如何（二）

私は、雪の深い北國に産れた。而して、北國は秋が早く來て、秋の末には、既に霜が降り、霙が降つて、十二月は雪の中である。彼の鈍重にして、しかも憂鬱な灰色の冬は長くつゞいて、雪が解け、二たび春が來るのは、三月の大試驗が終つてしまつてから後であつた。

其れで、東京は、十二月梅の花が咲き、一月往來に太陽が照り輝いて、埃が上つてゐるといふことを聞かされても、何うしても其れを譃だとして、信ずることが出來なかつた。『どうして、そんな筈があらう。』と、私は、疑つたのである。

尚ほ子供の時分から懷疑的な私は、果して東京と、いふ所があらうかとさへ疑はざるを得なかつたのは事實であつた。

何となれば、自分等はこんな憂鬱な天地の間に吹雪に閉ぢ籠められて、樂しみといふものも少なく日を送つてゐる。しかるに、同じ地上の一角でありながら、自分等を物憂くさせる雪といふものが全く無く、しかも花が咲いて、暖かな太陽が空に輝いてゐるとは、あまりに不公平、不平等な事實であつて信ずることが出來ないと思つたからだ。而して、其れではあまりに同じ人間に對する自然に憎惡があり過ぎるのを思はずにはゐられなかつたからだ。

やはり其頃である。東京で發刊する少年雜誌の口繪を見たり、其の中の記事を讀むたびに、いかに北國の土地に産れたことを歎じたであらう。

最近、ゾムバルトのものを讀んだ中に、かういふ一節があつた。

『自然に對しては何人も降伏するの外なきなり、其權利を主張することを得ざるなり、然るに社會の事情については或階級にして不足を感ずるときは、直ちに他の階級に對して權利侵害也として抗議することを得るなり。』（神戸博士譯）

この公平、無私の如く思はれた大自然にすら事實天惠の同じからざるもののあるのを漸く長ずるに從つて知つたのである。

（『未明感想小品集』より）

うば車

母が田舍から出て來た時、ぢみな、使ひ古した風呂敷の中から、じやが芋が轉げて出た。

『これは家でとれた芋だから持つて來た。何か土産を買つて來ようと思つたが、東京にはないものがないし、こちらで買つてやらうと思つて、何にも買はんで來た。』と、母は言つた。

Aがしげ子と結婚をして、一年半ばかり經つて、最初の子供が産れた當時のことであつて、母は東京へ來たのが初めてであつた。Aは詩を作る程の男だけに、直ちに故郷の憂鬱な圃の景色を眼に描いた。まだ若い彼の妻は大きな瞳を見張りながら、芋と、夫の母親との顏を驚いたやうに見較べてゐたが、風呂敷が母親の指で解かれて、澤山な芋が、小さな子供の頭のやうに重なり合つて轉つた時に、さも面白さうに笑つた。

母親は、あまり長く滯在する氣がなかつた。上野と、日比谷公園から銀座と、二三度出て見物をすますと、もう明日にも歸りたいと言つた。

『まだ、淺草へ行つて見ませんから、もう二三日ゐて下さい。』と、Aは言つた。

『もう、あれだけ見れば澤山だ。淺草は見なくてもいゝ。』と、母親は、火鉢の傍で、前跼みになつて答へた。

其れは、Aが何となく人込みのする處は厭はしく思はれたので、後廻しにしたためであつた。

『しかし、東京へ來て、淺草を見物せんで歸つては、話が出來ないぢやありませんか。』と、Aは言つた。

『見て來たと言ふわの。』

『どうして、分りますか。』

『何處見たつて、賑かで同じぢやないか。』と、母親は言つた。

Aは、自分が母親の立場であつたら、やはり同じい氣持になるだらうと考へられた。

『何がいゝだらうなう。來る時には何も土産を持つて來なかつたから。』と、母親は言つた。

『お母さん、そんな御心配はいりませんよ。』と、息子夫婦は口を揃へて言つた。

『お前方にはいゝが、子供に何か買つてやりたいが、これから先になるとうば車がいるが、其れでも買つてやらうと思ふ。』

二三日前のこと、町を歩いてゐる時に、何處の婦人か、二つばかりの可愛らしい子供に毛絲の帽子を被せてうば車に乘せて押して行つた。其れを振返つて見た母親は、

『ぢきに、うちの子もあんなうば車がいるやらになる。』と、感じたらしく言つた。

其の子供は、車の上で、鳩のやうに黑い眼をきよと〳〵させて、兩側の店の方を見廻しながら、安心して、母親に押されて彼方に行つた。

『お母さん、うば車は高いんですよ。』と、しげ子は言つた。

『いくら位するもんかなう。』

『いつか、妾が聞きました時に、五圓ばかりだといひました。其れで、あんまりよくないんですよ。』

『まあ、どんなのか行つて見よう。其のうば車を賣る店は、遠くないかい。』と、母親は、言ひながら立ち上つて、着物の前を直してゐた。

Aは、ついでに母親をつれて、近所の町を散歩しようと思つた。

『お前も行つて見ないか。』と、妻を顧みた。

「あゝ、皆なで行かう。戸を閉めて行つたら大丈夫だらう。」と、母親は言つたので、しげ子も喜んで、出かける支度をした。

日暮方にかけて、下の街は人通りが繁くして賑かであつた。洋服を着た、何處かの會社や役所につとめてゐる人々は、退けて勇んで歸りを急ぐらしかつた。夕日に、其の痩せた姿は、細い長い影を路の上に落した。其他、鳴物の音は處を定めずに、眠い唄となつて黄昏の空に舞ひ上り、いろ／＼な眼を娯ませ心を喜ばせるやうな色彩は、一際入日の光りに映えてはつきりと美しく浮き出て見えたのである。

角の果物屋の店には、波音の高い北國から來た林檎や、いつも空の色のよどんだ暖かな晩のつゞく南方の圃に實つて、捥ぎ取られて送られて來たネーブルや、蜜柑などがあつて、冷たい赤い色と、物憂い黄色とが相映り合つてゐた。Aは其れを見た時に、眞に心から美しいと感じた。自然は、こんなに美しいのであるが、なぜ自分の藝術は活々とせずに、鈍つてゐるのだらうと鞭打たれたやうに感じたのである。

母親と、妻とは、らば車を賣つてゐる店に、行つた時、長い間、其れを見たり、また掛合つたりするので費した。

彼は、母親の頭髪に、半分沈みかゝつた入日の光りが照らしてゐるのを見た時に思つた。あの平原に沈む日が、働いてゐる母の若い時分からの頭髪を、横顏を、夏などには毎日のやうに彩つたことはあるとしても、かうして都會の夕暮方、彼方に沈む入日に晒される母親の横顏を見ることは、恐らく、初めであつてまた永久にないことかも知れない。さう思つて見るといつの間にか、長く見ない間に母の頭髪は殆んど白くなつてゐた。

「痒くて仕方がないから、また白髪を拔いてくれないか。」

學校から歸つて來た彼を捕へて、母親がかう言つた時分のことが思ひ出された。一刻も早く外に出て皆なと遊びたいと思つてゐる彼は、どんなに面倒臭く思つたらう。而して、白髪を選りにかゝつた時は、母の頭には黒髪が澤山であつて、白髪が容易に見付からなかつたのであつた。

彼は、そんな追懐に耽ると淋しくてならなかつたが、尚ほ、ぢつと其の方を見つめてゐた。すると、母親は帶の間から多分は自身で縫つた財布であらう、昔風の大きなのを出して、眼が霞むと見えて、額際に小皺を寄せながら、其の中から紙幣を引き出してゐた。其の黄く、日に焼けて、皺が手の甲に寄つて節立つた指を見ると、Aは泣きたいやうな悲しみを感じた。而して、この光景もまたいつか永久に歸らない思ひ出となると考へた。

この母の年になるには、まだ前途の遠い彼の妻は、さも嬉しさうに、早速、ねんねこに子供を包んで其のらば車に乗せて押して行きかゝつた。彼女には、瞬間何の悲しみも他の空想もないやうであつた。而して、彼女の顏は、秋の外氣に觸れて活々しく見えた。

街をはづれた時分に、日は全く暮れた。木々の梢には、殘照も早く消えて、冴えた青黒い涯しない空が頭の上に擴がつてゐた。三人は坂を上つて行つた。地の上はうすく濕りを含んで、ひや／＼とした夜の氣は膚に沁みた。

明る日母は立つた。其後、子供が二人まで死んだけれど、年を老つた母は遂に來られなかつた。

其れは思ひ出しても胸がどき／＼することであつた。

ある夜、彼がらば車に上の子供を乗せて歸つて來ると、この坂の中途に、一臺の自動車が止つてゐた。二つの光る眼球は前方を照らさずに

斜めに、切落した片側の崖を射返して、虹のやうな幅廣な光線の帶は、地上に降りた靄の色を青白く煙らせて見えた。

ちやうど、其時、子供はうば車の上ですや／＼と心地よく眠つてゐた。而して、父親が氣を揉みつゝあるやうな何ものをも感ずる筈がなかつた。Ａは、今にも自動車が向きを換へて驀地に下つて來るのでないかと思つた。こんな時にはよく叫くことが出來ないものであるが、Ａも、たゞ氣を揉むだけで、眼前を氣遣はしげに見詰めるばかりであつた。

今まで、地の上に幽かな鳴音を立てて、靜寂の域にはてしなく消えて行くのを聞いた小さなうば車の轍の音は、此時、彼は耳に聞えなかつた。其のかはりに野獸の嘯き聲のやうなうなりを程隔つた前方に聞いた。

Ａは、この時のやうに、人間の性格といふものが其の人ばかりでなく、他人に對して重要の關係があることを事實に卽して考へたことがなかつた。この自動車を操縱する運轉手が若し細心な男であるなら、何んでもないことだけれど、彼は、同時に、毎日のやうに自動車が人を轢殺した新聞の記事を思ひ出さざるを得なかつた。

あれが、あゝして停つてゐるうちに行き越さうと彼は思つた。而して、勢を入れて車を押した。しかし、其れは、まだ自動車の處まで近付かないうちに、不意に、自動車は笛を鳴らした。而して、向きを換へた。探照燈は坂の前方を照らしたが運轉手は注意もせずに、機械的に把手を採つた。同時に、無人の境を行くやうに直下した。この刹那すら、彼は、尙ほ、どういふものか叫くことが出來なかつた。出來るだけ敏捷に、しかも慌てて避けると、自動車は、殆んど觸れんばかりに傍を通り過ぎた。

『馬鹿野郞！』と、Ａは頭から浴びせるやうに叫んだ。自動車は止らなかつた。忽ち下に霞んで、曲る時にさも嘲るやうに、ヴー、ヴーと笛を鳴らした。而して、見えなくなつた。

彼は、危かつたと思つた。もう、危險は全く去つてしまつた。何事も起らなかつた。けれど、彼は、尙ほ暫く立つて考へてゐた。もし轢かれたなら、今頃は何うなつたであらう。さう思つて、何も知らずに眠つてゐた子供の顏を覗き込むと、つく／＼生きてゐるといふことが、一つのまた異常な事實のやうに感じられた。

Ａは、車を押し始めて、また、しばらく路の上に立止つた。而して、あゝいふ場合にも、大きな聲を出し得なかつた自分の卑屈さに腹立しさを感じた。いつか皆なは、大きな聲を出さないやうに習慣付けられてゐる。而して、必要な場合にも、何をか憚り、また何をか怖れてゐる。いつたい、誰を怖れたり、誰を憚るのだらうか。

彼は、自分の頭を搔つた。

其の子供が病氣に罹つて死んだ時に、彼はやはり悔なきを得なかつた。もつと金があつたら、どうにかすることが出來たであらう。病院にも入れたり、いゝ醫者も呼ぶことが出來たであらうと考へた。けれども、また、病氣で死んだといふのであきらめることも出來た。坂を通るたびに思つた。あの時、自動車に轢かれたなら、あきらめることは決して出來ないだらう。彼は、世間で子供が自動車に轢殺されても、過失だから仕方がないとあきらめる人々の心が分らなかつた。

二番目の子供は男の兒だつた。其の子が產れた時には、うば車はもう大分使ひ古されてゐた。而して、底から釘が上に出てたとひ蒲團を敷いても、子供に痛くはないかと心配でならなかつた。ある日、Ａは鐵槌で倒まに尖つた方を上に飛び出した釘を叩き込まうとしてゐるうちに槌

が外れて、掌を傷けた。其處からは血が泌んで目的を達することが出來なかつた。ほどこれと同じ時分に、彈機を締めた捩が弛んで車を押すとガタ〳〵となつた。いくら釘拔で捩を挾んで締めても堅くならなかつた。其れも太い繩で動かぬやうに結んだ。

かうして、うば車がだん〳〵役に立たなくなると初めのやうに大事にしなかつた。Aの妻も、子供を負つて使ひに行くやうになつて、うば車を使はなくなつた。

うば車は玄關の隅に置いたまゝになつてゐた。よく其の箱の中には、汚れた脱ぎ捨てた足袋や、子供の其處に入れ忘れられた玩具などが入つてゐた。其れに、朝晩、塵埃を掃き落すのが、いつの間にか積つて綿のやうにかゝつてゐた。而して、このおいぼれたうば車が玄關にあるのが、一層外から歸つて來る時に氣持を重苦しくするやうであつた。

二番目に産れた男の子は最も薄倖であつた。長女の方は七つまで育てられたが、長男の方は僅かに三歲で死んだ。この子は男の子にかゝはらず、やさしい色の白い女の子のやうであつた。平常、紫色の着物を被せられてゐたので、いつまでも其の姿が彼の眼に映つてゐて取れなかつた。

子供が、皆な亡くなつてしまふと、もううば車の必要はなくなつてしまつた。彼等夫婦はこの次に産れた子供にまた此の車を使はうなどといふことを考へなかつた。二人まで子供を亡くした苦しみは、更に子供を設けるといふ意志をも殺したからである。生れても助からない子供等を自分達は幾人産む必要があらうかと感じたからであつた。

もうこの家庭には、用のないうば車であつたけれど、流石に他所へやつてしまふことが出來なかつた。其れには、いろ〳〵の過去の生活が殘つてゐたからだ。其れには、二人の子供が吐いた乳の香がしみてゐる筈であつたからだ。

彼等夫婦に、幾たび、其れから轉居したか知れない。Aは植木鉢や、壞れ物などをこの車に載せて、後から一人で引いて行つたこともあつた。

郊外の暮方の、だら〳〵とした路を、彼はこのうば車に物を載せて引いて行く時に、二人の子供を載せて靜かに押して行つた記憶をなんで呼び出さずにゐられよう。今も、入日は西の地平線をうす紅く染めてゐる。其の色はたまらなく、みんなが死んで行つてからの未知の國が、其の方にあるやうな氣をさしてなつかしい。二人の子供も、永久に其の方にあるかと思ふと、何となく涙ぐまれた。日はだん〳〵暮れて、其の方のうす紅い色は褪めて行つた。田圃が黑く見えて、汽車の線路に添うて、電信柱がつゞいてゐた。

春や、夏の記憶よりも、秋や冬の思ひ出の方が多かつた。過去の生活に於て、其の時節が一層傷ましい印象を殘したからである。長女の方は、長く親達といつしよにゐたから其れだけ浮世の苦しみも多く味つた譯だ。

子供のうちから、年上の子供は何かにつけて、年下の子供に兩親の愛を讓らなければならなかつた。

『お前は姉さんぢやないか。』と、弟が産れてから長女は玩具でも、お菓子でも一つしかないものを弟がせがむ時に、母親から制せられて怨めしさうに默つてゐた。

弟は弱かつたので、母親の手がかゝつた。A夫婦は貧しかつたので、下女を使ふことも出來なかつた。Aは性格から詩人風の男で、物質のために、氣に向かないことでも働いて成るべく餘計金を取るといふやうなことは出來なかつた。

田舍の母親から、もうあれだけ大きくなれば、さう手もかゝらないから長女の方を世話してやるからよこさないかと、ある時言つて來た。

「可哀さうに、どうして一人やれるものですか。」と、其の手紙を見た後で、彼の妻は涙ぐみながら言つた。

しかし、困つた時には、母親に長女を預けるといふやうな考へが、其時から二人の頭にあつた。

『さう、言ふことを聞かぬと田舍のお婆さんのところへやつてしまふぞ。』と、Aは怒鳴ることがあつた。

田舍といふところは、どんな風に小さな子供の頭に描かれたのであらうか。いつか母親に向つて、どんな處かと聞いた時に、母親はさびしい處だ、森があつて、廣い圃があつて、夜になると寂然として、あまり人も通らない。其れは、こんな賑かな處から行つたら、淋しくて可哀さうなものだと言つた。其れをまだ覺えてゐたのかも知れない。子供の顏は急に暗く不安の色を漂はした。

『お母さん、ほんたうにわたしを田舍へやつてしまふの。』と、子供は聞いた。

「あゝ、あんまり言ふことを聞かぬからやつてしまふのだ。いつ立つか日がきまつたら手紙を書いてやる。』と、Aは眞面目に言つた。

『お母さん、ほんたうに、妾を田舍へやつてしまふの。』と、子供は、前よりもやゝせつなさうに言つた。

「お前が、田舍へ行けば、どんなにお婆さんが可愛がつて下さるか知れない。家にあつてお父さんに叱られるよりかどんなに仕合せだか知れない。而して、お前の好きな、柿や、栗が澤山あるから、みんな其れをお前がもらふのだ。」と、母親は、言つた。

少女け、しばらく默つて、小さな頭で未知の國を、いろ／＼に想像に描いてゐるらしかつた。

けれど、戀しい母親から離れることによつて、どんな幸福な幻影も破壞されてしまつたのである。

『いやだ。いやだ。田舍へ行くのはいやだ。」と、不意に子供は泣き出した。其の子供の親は、平家蟹の甲良のやうに赤くなつて、苦愁を湛へた。Aはしばらく殘忍な氣持で凝視してゐた。

『なんでお前一人をやるものか。行くやうになる時は、お母さんもいつしよにお前とついて行く。』と、母親は仕事の手をちよつと休めて、溜息を洩して言つた。これを聞くと子供は、初めて安心して默つた。

弟が死んで、家内は親子三人となつたが、Aが感興の起るのを待つて、仕事をしてゐるのでは、日にまし物價が高くなつたので、生活が苦しくなつた。このことは、兩親の手から、いぢらしくも子供を奪ふやうになつた。

『お母さんは、これから出て働かなければならない。お前は田舍のお婆さんの處へ行つた方がどれだけ仕合せだか知れない。お婆さんは可愛がつて下さるとも。來年の春になつたら、きつとお母さんがお前を迎ひに行くから。』と、母親は、子供を諭した。

其れは、長女が七つの秋であつた。最初のうちは、どうしても母から離れて、一人で田舍へ行くとは言はなかつた。母親も、子供の心を思ひやると自から眼に涙が湧いた。けれど、この際やさしくしては駄目だと思つて、何んでもないのに、格別罪もない子供に苛く當つて見たりした。子供は寂しさうに、獨り物思ひに耽つた。

『田舍のお婆さんて、どんなお婆さんなの。』と、怜悧げな瞳を輝かして聞いた。

「其れはいゝ、やさしいお婆さんだよ。お前が

産れた年、東京へお出でになつて、あのうば車を買つて下さつたのだ。』と、母親は言つた。

『そんない丶お婆さんなら、妾行つてもい丶わ。』と、子供は言つた。

『お前、田舍のお婆さんの處へ行つてくれるか、來年の春、雪が消えたら、きつとお母さんがお前を迎ひに行くよ。而して東京の學校へ入れるから。』と、母親は涙を兩眼に湛へながら言つた。

『だつて行かないと、お母さんが叱るんだもの。』

『叱りはしないが、田舍のお婆さんの處へ行つた方がお前が仕合せだから言ふのさ。』と、母親は聲をやさしくした。

Aは、默つてこの有樣を見て、たゞ茫然と暗い氣持でゐた。なんで俺は、こんなに善良な妻子を苦しめなければならぬのだらう、而して、正直な人間がどうして、かう生活に困らなければならぬのだらうと考へた。

子供は、言はれた時は悲しさうであつたが、少し經つと、田舍へ行くといふことも、また母や、父の許から一人離れて、遠い淋しい知らぬ土地へ行くといふことも忘れてゐた。

秋の日は縁側に暖かさうに當つてゐた。近所の子供等が遊びに來たのといつしよになつて、おまんまごとの玩具などを並べて、罪のない笑ひを立ててゐた。何處に、小さな彼女を酷く取扱ふ運命の手が見られよう。青く、青く、空の色は安らかに冴え渡つてゐた。

Aは、やりかけてゐる仕事か濟んだら、雪の降らない間に、子供を田舍へ連れて行つて置いて來ようと心に決めてゐた。彼の妻は、其の方がきまり次第につとめ口を探すつもりであつた。

Aは頭が疲れてゐた。其のために、仕事の最中二日ばかり旅行をした。野や、圃の木々は既に色づいてゐた。某市に泊つて、其の近傍を散歩した。小さな町は、直に盡きて郊外の眺めを恣にすることが出來た。彼は、飽かずに刈り取られた畦の景色や、尙ほ刈りつ丶ある百姓の働く有樣などを眺めた。而して、瞳を遠くに馳せると、其方には國境の山脈が眞白に牙のやうに光つてゐた。

彼は何處の山々であらうと思つた。火山脈の山系は、彼の故郷をめぐる山々の形に似てゐた。ぢつと、白い牙のやうな山々を眺めてゐるうちに、暗い、凄まじい北方の冬の景色が神經を苛んだ。

赤い柿の實が尙ほ枝に殘つて、葉は大抵落ち盡して、殘つてゐるものも、ちやうど其の實のやうに赤かつた。其の木の下で隣の親爺は織兒の女の子を擲つた。秋風の吹く、空の雲の斑らな日であつた。西の方には、このやうに野を越え、圃を越えて尖つた山々が白く聳えてゐるのが見えた。學校へ行く時にも歸る時にも、皆なは路の上に立つて、だん／＼遠い山々から順次に白くなつて行くのを指したものだ。其時、女の兒の泣いた悲鳴は、ほゞ大根も黑い土から拔かれて、空漠となつた圃の上に響き渡つた。

彼は、ずつと其後、アルプス山の麓で、枯れた木の枝に女が頭髮を卷き付けて、烈風に叫んでゐる、慘ましい、セガンチニーの畫を見た。この時、隣の親爺が織兒を擲つたのと、この畫とが、一つ渦卷いて彼の眼に映つた。

彼は、旅から歸る際、汽車の中で、どんなに自分達は苦しんでも、子供だけは手放すまいと思つた。これから、田舍は毎日雲が降り雪が降る頃である。そんな淋しい、友達も、また樂しみもない處へ、どうして子供をやれようかと思つた。而して、こんなことを勝手にきめた親達の殘酷な心持を自分から呪ひ、何の罪もない、また抵抗力のない子供の心持を思ひやつた。

其時、ちやうど惡性の感冒が流行をしてゐた。都會にゐればいゝ醫者もあるが、田舍へやつて、子供が若し病氣にかゝつたらどうしよう。こんなことを考へると彼はもう子供を田舍へやらぬことにきめた。

家へ歸ると、妻は、派手な子供の着物を縫つてゐた。彼が話しかけても、彼女は其の手を休めずに、仕事を急いでゐた。

『いゝえ、きめたんですから田舍へやりませう。而して、妾も働きます。子供も田舍へ行つた方がのんびりとして、きつといゝと思ひます。』と、妻は、Aの言ふことを聞かなかつた。

彼は、平常から意志の強い女だと思つてゐた。從つて、彼女の心を飜へさせるのは、容易でないと感じた。

ある夜、三人は戶を閉めて出た。賑かで、華かな銀座を散步したのであつた。最近には二たび子供をつれて、外を步くこともなからう。ある大きな玩具店に立寄つて子供が欲しいといふものを買つてやらうとした。子供が其れを田舍に持つて行くのだ。而して其れをたゞ友達にして樂しむのだ。

子供は、はじめて大きな店に、明るい燈火に晒されて、名も知らないやうないろ／＼な美しい、輝いた玩具を見て眼をまるくした。而して、手に取つて見ることすら怖れてゐた。Aは、滅多に子供をつれて出ないからだと、何となくいぢらしい子供の樣子を見て思つた。

『何がいゝか、お前の好きなものを買つてやるから。』と、彼は言つたが、子供は何もほしくないと答へた。

Aは、心の中で、はげしい反抗と憤りを感じた。其れは、この社會に對してであつた。階級のある社會に對してであつた。

『遠慮せんでいゝんだよ。』と、Aは、悲しさを笑ひに紛らした。

『こんなにお前の欲しさうなものが澤山あるぢやないか。』と、妻は言つた。

子供は、おまんまごとの道具を默つて指した。思ふに、他にもまだ欲しいものがあつたのだらうけれど、子供は、其れを手に持つたこともなく、其の名すら知らなかつたので氣が臆したのである。

『おまんまごとの道具は、家に幾つもあるんだけれど。』と、妻は言ひながら、其の中で數の多い、好いのを選んでやつた。Aは、其の金を拂つて、三人は其處を出た。

東京にゐながら、あまりつれて出なかつたので、子供は公園も、街の賑かな處もあまり知らなかつた。而して、田舍にやられてしまつたら、つひに其等の場所を永久に見ずにしまふだらう。二たび東京へ來るといふことが、其れは全く、あてのないことだといふやうに考へられて苦しい憂鬱に陷つた。

高架線に乘つて歸るつもりで、Aは先に立つて步いた。下を向いて、頭はいろ／＼の考へに囚へられてゐた。ガードの下に來て、彼はちよつと立止つて、後れて來かゝる二人を振向いて待つた。星が水の上に、寒さうに映つてゐた。濠は地に深く付けられた傷跡のやうに食ひ込んで、兩岸は瘡蓋のやうに黑かつた。空を仰ぐと、青硝子を張つたやうに冴えてゐた。銳い星の光りはしばらく下界に落ちる時に、銀線を震はすやうに虛空で屈折した。而して、幽かな響きを立てて過ぎる風は、絕え間なく降る霜を凍て、耳や、鼻尖を氷破れさうに感じさせた。

何といふ寒い晩だ。もう冬だと彼は身震ひした。北國の冬の夜の景色が眼に浮んだ。自分の母が戶口に待つてゐてくれる、其間外に出て小便をした子供の時分のことが思ひ出された。

もう、直に雪が降るのに、子供をやるのは可哀さうだとも彼は思つた。

三人は、暗いガードの下をくゞつて、土手についで曲つて、明るく燈火の射す停車場の方へ向つた。

彼が、あの時、子供が永久に、もう二度とこの賑かな街の光景を見ることがないかも知れないと、漫然と憂を懐いたことが、箴をなして事實となつた日があつた。

田舍へ立つといふ日の二三日前から、子供は風をひいて、最初は咳をし、だん／＼熱が高くなつて、四五日も熱が下らず、醫者にもかけたけれど、子供は死んでしまつた。

かうして、二人の子供を失つたA夫婦は、この世で最も淋しい人となつた。

うす暗い、玄關の隅には、何處へ彼等夫婦が越して行つても、きつとうば車は置いてあつた。知らぬ人が前を通つて其れを見たなら其の家には、この車に乘せて歩くやうな子供があるのだらうと思つたにちがひない。

二人まで、愛する子供を失つたこと、而して其の子供に對する思ひ出と、悔恨とは、もう他に子供を持たうといふ考へを彼等の頭に描かせなかつた。

さう、まだ二人は年を老つたのでないけれど、幸福といふものは、すべて過去にあつたやうな氣がして、靜かに、淋しく暮らすといふやうな年老つた人々の抱く氣持を抱いた。

うば車に相變らず埃がかゝつた。而して、箱の中には、いくら掃除をしても直に古綿のやうな埃の塊が溜つた。いつか其れを鐵槌で叩いて掌を傷けた、底から飛び出た釘は、赤黒く錆びてゐた。また其の當時、ぐらつくので縛つた麻繩は、色が褪せて、もう其の繩には強い力があるとは見えなかつた。

人は死んでしまつても、こんなものはいつまでも後に殘つてゐるものだといふやうな感じが、Aは、玄關に立つてうば車を見る時によく頭に浮んだ。殊に雨の降る時には、狹い玄關にうば車のあるのが邪魔であつた。

二人は、郊外の淋しい處から、賑かな巷に越して來た。其の家の玄關はとりわけ狹くて、うば車があるので下駄箱を置くのが容易でなかつた。雨の降る時は、濡れて雫の滴る傘をうば車の中に立てかけた。

併し、彼等の夫婦の頭に、この邪魔な物を賣つてしまはうといふ氣は起らなかつた。其れには、二人の子供の乳の跡がついてゐる筈だ。特にAは、老母がこれを買つてくれた日からのうば車に關する思ひ出に耽ると、離し難いものの氣がして、うば車を見るたびに、憂鬱な顏をした壞れかゝつた車は、一々其れを物語るのであつた。

白い露は一面に降りてゐた。二人は、明るい室の裡に坐つてゐた。Aは雜誌を見て、妻のしげ子は冬着の支度をしてゐた。今年中の附近での祭の終りと思はれるK神社の祭日の夜であつた。晝間もさうであつたが、夜になつてからも、ワツシヨワツシヨと子供等が街の中を喚いて歩いてゐる騷々しい聲が聞えた。

『いつか、このお祭に死んだ坊を負つて見に來たことがありましたね。』と、彼女は、物尺で布をはかりながら言つた。默つてゐたが、心は、街の聲の方に取られてゐた。

『さうだつたかな。』と、Aは雜誌に眼を落しながら答へた。けれど、心はやはり遠い過去に溯つてゐた。すると、自分達も曾て、あんな二人の可愛い子供等から、お父さんお母さんと言はれて取り縋られた幸福の時代があつたのだと思はれて、何となく黯然とした。

『このうば車を賣つてしまはうぢやありませんか。』

『賣つてもいゝ。』

『ほんたうに、賣つていゝんですか。邪魔で仕

方がないけれど、賣つてしまつた後で叱られるといけませんから。』

『あつたつて仕方がない。賣つてもいゝよ。今度屑屋が來たらやつてしまへ。もう死んで行つたつて遇へるものか、遇へないものか分らないのだから思ひ出したつて仕方がない。』

ある日、二人は、うば車を見ながら玄關先で話してゐた。

大掃除の時分に、妻は埃だらけのうば車を外に引出した。而して、屑屋が來た時に呼んだ。

『こんな壞れかけたのは、修繕しなければ賣れないから、いくらにもなりません。』と、屑屋は言つた。而して、五十錢なら、いつぱいだと言つた。彼女は考へて止めてしまつた。

Aが、其のことを、妻から話された時に、この家の唯一つの寶物だと思つたものが、金にして其ればかりであると聞くと、金といふものに對して限りない反感を催した。

『さうだらう。他人には、分らないことだ。』と、自分だけの心の世界を顧みた。

『もつたいない。賣るな。』と、彼は、妻に言つた。

其後、天氣がつゞいたので、うば車は門の内に置いたまゝになつて、まだ片付けられずにゐた。

隣のペテン女工の息子で、いたづら盛りのがあつた。無邪氣でこの子はAに惡い感じを與へなかつた。ある日、其の男の子が遊びに來て、うば車をいぢつてゐた。『をばさん、このうば車は壞れてゐるのね。』と、言つた。

『あゝ、もう役に立ちませんのですよ。』と、妻は何かしながら答へてゐた。

『をばさん、貸しておくれよ。』

『あゝ、持つて行つてもいゝですよ。』

Aは仕事をして倦んだ時であつた。ちやうど、門の外で子供等の面白さうに遊んでゐる、賑かな聲を聞いた。彼は、出て見る氣になつた。子供等は、壞れかゝつたうば車の上へ三人も四人も重なり合つて乘つてゐた。其れを一人が顏を眞赤にして押してゐた。うば車はキイ〳〵と鳴つて、やゝもすると歪んで倒れさうになつた。

『オイ、あんまりひどくすると壞れるぞ。』と、彼等少年の一人が注意した。

『オイ、誰か一人降りれやい。』と彼等が叫んだけれど、なか〳〵降りなかつた。

Aは、其の重荷を乘せて、喘ぎつゝあるうば車を見てゐるうちに、何故となく其のうば車が自分であるといふやうな氣持が起つた。

故郷に年老つた母があつた。しかも最近、妻の實家にも幾つかの不幸がつゞいたことが思ひ合せられた。而して、其等は物質を得るのに不得手な自分を頼つてゐると思はれたからだ。

彼は、其れを見てゐるうちに、笑ふことも出來ず、苦しくなつて家に入つた。

其れから、二三日後であつた。彼は思ひ出したやうに、玄關へ出て眼をあたりに配つた。

『オイ、あのうば車を何うした。』と、不意に怒鳴つた。

其處へ、勝手許から、妻が前垂で手を拭き拭きやつて來た。

『其處に、ありませんか、隣の子に貸してやつたぎりなんですよ。』と、おど〳〵した調子で答へた。

『あの車を貸してやつてはいけんぢやないか。』と、彼は、むづかしい顏付をした。

『もう邪魔だから賣つてしまふといつてゐたんですから、貸してやつてもいゝと思ひました。』

『あの車は、とつて置くんだ。』

『あなたも、外に出て默つて見ていらしたではありませんか。』

『ちよつと貸してやる位はいゝが、持つて來なくちや困るぢやないか。』と、彼は、腹立しげに

言つた。

『ほんたうに困つた子ですね、使つたら、また持つて來てくれるといゝのですのに。』と、妻は、自分が貸してやつた責任があるので、當惑さうな顔付をしてゐた。『妾、探して來ます。』と、彼女は言つて、襷をはづして外へ出て行つた。

Aは、彼女の姿が見えなくなると、急に氣持が鎭まつた。而していろ／＼な光景――死んだ二人の子供等が、其のうば車に乘つて、自分が引いた――が眼に浮んだ。其時、子供は、眼を輝かして、空の下で笑つた。而して、其れも幻となつて、永久に消えた。彼は、妻が結婚當時の若々しかつた姿を思ひ出した。曾ては、さういふ時代が、現實であつたこともあつた。今は、たゞ思ひ出に過ぎない。たゞ、其の當時のまゝの形をとゞめてゐるのは、うば車だけだ。しかも其のうば車の行方が分らないので、彼は不安を感じた。

暫く經つてから、妻は、へし曲つた、もとの形のないうば車を引摺つて持つて來た。

『まあ、こんなにしてしまつたんですよ。』と、彼女は、笑ひもせず、聲を震はしながら、青褪めた面持で夫の顏を氣遣はしさうに見詰めて言つた。

Aは、默つて額際に青筋を立て、眼を三角にして、入口に置かれたうば車を凝視してゐた。

晩秋の日は、照つたり、曇つたりした。冷かな地上で、Aは鐵槌で、車や、彈機のあたりを叩いて、歪んだうば車を直してゐたけれど其れはもとのやうにならなかつた。

（一九一九、一一）

少年の見る人生如何（三）

私は、こゝで社會問題に觸れることを避けるであらう。

たゞ一事、小學校教育に對する疑問を掲げて止む。其處に集つた生徒の中には、いろ／＼な階級の家庭に育つた子供がゐて、日常の生活に對して、彼等の抱く感じが決して一つでない。ある子供は美食に飽きてゐる。ある子供は飢を忍んでゐる。ある子供は、夏休みになれば避暑に行き、さもなくば家庭にあつて母や、姉妹と樂しみを一つにしてゐるけれど、ある子供は、家庭勞働の手助けをしなければならぬものであらう。斯く差別を擧げる時は際限がない。

其等の生徒に對して、學校教師は一つの眞理なりと信ずるものを平等に頭の中に入れるべく教へる。果して、同じやうな效果が彼等の將來の人生觀や、社會觀を造る上に置かるべきであらうか。たとへば、暑中休暇後に、學校が始まつた時、教師は生徒等に向つて、

『皆さん、この夏休みに何處に行つて來ましたか、山なり、海なりについて感想をお書きなさい。』と、言つた時に、山へ行き、海へ行つた生徒等は得意になつて筆を採るだらう。しかし、海へも、山へも行くことの出來なかつた生徒等は何を書くだらう。而して、彼等の其時小さな頭の中へ抱く思想はどんなものだらう。右に掲げたのは、蓋し一例に過ぎないが、相對主義の哲學的見地に立つて見る時は、今日の教育上の幾多の缺點は明かに指摘されるのである。

こゝに至つて、私は、ハーン氏の言葉を更に意味深く思つたのである。（一九、八）

（『未明感想小品集』より）

空中の藝當

私が生活のために、いつの間にかこんな方にそれてしまつてから、いろ／＼な勞働者と交際するやうになりました。けれど、何をしても、其れが職業となつて、これによつて生活しなければならなくなると、どんなことも苦痛になり、どうかして、少しの間でも其の苦痛から脱れたくなるものです。

私が眞面目に寫生をしたり、また素描にはげんでゐました時は、路を通つても、てんで看板の繪などは、眼の中に入らなかつたものです。寧ろ、其れを見ることすら、何となく藝術的の自負心を傷はれるやうな氣がしました。而して、頭から其の勞力などについて考へたこともなかつたのです。

この頃、私は、店頭に竝べられてある雜記帖の表紙に描かれた、ちよつとした繪や、また筆入の箱などの上に書かれた燒繪や、また活動寫眞館の軒下に掲げられた看板などを見て、深く其れに氣を止めるばかりでなく、時には心を動かされることもあるのです。中には、これを專門に職業としてゐる者もありますけれど、また中には、本當に志す藝術に取りかゝることが出來ずに、いろ／＼な事情のために書いてゐる者もあると思ふからです。

しかし、私の思ふことは、單に其ればかりでありません。私が、こんなやうな仕事をしないまでは思ひもしなかつた、苦痛といふものが、どんな仕事にも、其ればかりつゞけてしてゐる時には伴ふものだといふことを知つたのであります。

このことは、考へることや、筆の上の勞働ばかりでなく、たとへば、頭を使はない手工勞働者にとつても同じことです。恐らく、いかなる仕事でも、毎日繰返してゐる時は、この苦痛に伴ふことであらうと思ひます。

彼等は、どうかして、其の單調を破りたいと思つてゐる。而して、仕事以外の何等かの手段によつて金を儲けたなら、快樂が得られるだらうと考へはじめるのです。

日が蔭ると、この邊の場末の町には、急に人聲が騷がしくなります。狹い屋内から出て、處々の露路の入口に置かれた涼臺の處に方々から、其の日の働きに疲れた人々が寄つて來て、其れに腰をかけたり、またかけ切れない時分には傍にうづくまつて團扇を使ひながらいろ／＼の世間話に時の經つのも知らず耽るのです。

其の時分になると、何處から出て來るのか、まだ年のいかない八九歲頃の男の子の角兵衞獅子が二三人太鼓を叩きながら氷屋の門口に立つたり、人の集つてゐるやうな處を覗いて行くのでした。氷屋からは、赤い帶をしめた、襷をかけてゐる少女が出て、角兵衞獅子に錢をやつてゐます。しばらくすると、三味線を彈いて、若い女が來かゝりました。其の女は櫛卷に結つて、背中には赤ん坊を負つてゐました。

『ちよつと意氣な女ぢやないか。』

『藝者上りだらうな。』

涼臺に寄つて話をしてゐる者が、彼方に行き、此方に佇みして、三味線を鳴らして行く女を見て話をしてゐました。

毎日、かうして日は暮れて行きます。ある時は、二目とは見ることの出來ないやうな汚い風をした醜い女が、しかも大きな腹を抱へて錢をもらつて歩いてゐる姿も目に止まつたのであ

ります。

『何んだつて、樂な仕事といふものはないさ。生きて行くといふことは、容易ぢやない。』

『ほんたうのことだ。博奕をするか、相場でもするかして、儲けなければ、眞面目に働いてゐるんぢや、いつになつたつて、樂なことはありやしない。』

こんなことを話してゐると、他の一人が其れに口を入れました。

『一體が下谷に住んでゐた時分に、近所に二十四五の娘さんが、いつもすばらしい風をしてゐた。たまに家の前を通るのを見ると、金鎖を胸に下げて、ちやか／＼したやはり鎖のついた革の手提鞄をぶら下げて、草履などを穿いてすまして行つた。其の娘の家では、あんまりいゝ暮しをしてゐる樣子もないので、不思議に思つたが、女で相場をしてゐるなんかといふ噂もあつたんで、さうかと思つてゐると、ある時、朝早く、濱町を歩くと、待合から出た女の後姿がどうも似てゐるので、其の後を付けて、停留場から電車に乘るのを見ると、てつきり其の娘だつた。だから、人といふものは表面ばかし見たんぢや分らない。』

『そんなことはざらにあることだ。男でも、女でも、すましてゐる奴程、腹の底が黑いんだ。さうぢやないか。博奕だ、相場だつて、いつも勝つたり、儲かつたりするもんぢやない。いつも立派にしてゐられる筈がない。さう云やあ、相場に當つて、急に貧乏人から、何十萬といふ成金になつたので、氣が違つて、自分の女房を殺したつていふことが、四五日前の新聞に出てゐた。なんでも、善いことでも、惡いことでも、尋常からあまり脫線すると、とんだことになつちまふ。やはり、かうして暮らしてゐるのが、一番いゝのかも知れない。』

他の一人が、こんなやうなことを言つた。其の男は、自分の言つたことに感心して、感に堪へないやうな風でありました。

其の男が先づ其處を去り、前に、娘のことや、金儲けのことを話してゐた男等が次ぎ／＼に去つて、夜店の支度にかゝつたり、湯にでも行くと、後には鐵葉工の長さんと、他に二三人が、まだ涼臺の傍に殘つてゐたのです。

『尺八つてものは、なか／＼覺えられないもんだらうか。俺、笛を習ひていもんだ。』と、仕事師の吉公が言ひました。

『よしねえ、お前みたいな、無器用なもんはなかなか覺えられねえ。何んでも藝といふものは、上手になるにや、二年も三年も稽古しなけれやならんぜ。』と、長さんは言つた。

『長さんは、そんなら吹けるかい。』

『聞くことは好きだが、吹けねえだ。』

『自分が無器用な癖に、人のことを言ふ奴があるかい。』

『吹けなくても、ちやんと分つてゐる。笛なんか、お前たちに、上手になれつこはない。なかなかむづかしいもんだといふことだ。』

『ぢや、長さんは、何か他に藝が出來るかい。』

『あゝ、さうだ。お前は木遣がうまいな。』と、仕事師の吉公は言ひました。

『俺、逆立ちがうまい。』と、長さんは、口の周圍に微笑を湛へて言つた。

其の微笑には、何處か自慢するやうな趣きが見えた。額の腫れぼつたい、無口の長さんは、物を言ふ時も、默つてゐる時も、何となく滑稽味が感じられて、相手に惡い感じを起させなかつた。

『逆立ちつて、妙なもんが上手なんだね。』と、私は覺えず、其れに興味を感じて言ひました。

この時、吉公も、其處に居合せた他の男も、また長さんまでが笑つたのであつた。

長さんは、ある時、見せ物で女が逆立ちをした

のを見た。また、幅の狹い、長い板の上を危げもなく、しかもずつと高い處を渡つたのを見た。其れには、手品のやうに、種子といふものがなく、全く熟練の結果から、こんなことが出來るのだと思ひました。

『俺にも、これが出來ないことはない。』と、彼は考へたのです。其れ程、この時の印象は、いつまでも彼の頭に刻まれてゐたと見えて、仕事の合間に、板の間で逆立ちの稽古をしました。少くも、其のことは、仕事の單調を破つたに相違ありません。僅かな休み時間に、食事の後に、彼は逆立ちの稽古をしました。

　しかし、彼は、幾たび絶望して、其れを止めてしまはうと思つたか知れませんでした。其れを止めずに、つゞけて來たと云ふのには、一つの原因がありました。恐らく、其れは、彼れ自身よりは知ることの出來ないものでした。其のことを長さんは、有りのまゝに話しました。

　長さんを其れまで逆立ちの稽古に執着さしたのは其時、見せ物に出て逆立ちをして見せた、やはり、其のまだ年の若い女でした。長さんは、其の女の顏が大好きでした。見てゐて、いつしか知らず自分の心が其の顏に全部惹き付けられた程に好きでした。笑ふ時分に露はれた、細かな白い齒、紅い唇、其れに底の知れない深みと祕密をさゝやく眞黒な眼が長さんの心を不思議に捉へてしまつたのであります。長さんは、其の女が好きであつたために、其の女の姿がいつまでも、或は永久に、忘れられないがために、逆立ちに絶望した時もつゞけてやる氣が起つたのであります。

　せめて自分が逆立ちが上手になることは、其の女を永久に記念するばかりでなく、もう二度と見ることがない、しかし忘れられない女に對して與へた稱讃を奪ひ返すことであつて、誰れ知らぬ自分の心の中で、其の女を苛むに足る程の親しい快味を覺えたからです。

　同樣に、其の女が、極めて幅の狹い板を渡つた其れも、自分は出來なければならぬと考へました。

　けれど、これは理論上から造作のないことのやうに思はれました。長さんが言つたのを聞くと、から其れに對しては、解釋を下してゐました。

『疊の黒い縁を、幅の狹い板と見るんだ。而して、黒い縁の左右は、幾十尺もある崖ときめるんだ。さう思つて、縁を渡るんだ。もし其れが渡れて、實際の板の上を渡ることが出來ないといふ理由がない筈だ。渡れないのは、心が臆するから出來ないんだ。いつでも疊の縁を渡つてゐるやうな氣持で、實際に狹い板を渡ることが出來たなら落ちることがない。たゞ、この心の持ち樣なんだ。』

　彼は、さう思つて、また暇には、疊の黒い縁を渡る稽古をしました。其の時は、縁の左右は、幾十尺もある崖ときめて、いろ〳〵怖ろしい幻像を自ら空想に描いて見たりしたのです。

　其のうちに、逆立ちは、兎に角危げなく出來るやうになりましたが、幅の狹い板を渡ることは、まだ實際の場合に應用をして見る機會がないから、成功したか否かは分らないと言ふのです。から彼が物語つた時、

『長さんは、女の輕業師を見て、妙なことに感奮したもんだね。』と、私が言ふと、

『畫描だつてさうでねえかい、何か見て綺麗だと思ふから、一生懸命で描くだらう。俺は畫が描けないから、其れを眞似たんだ。何かをかしいことがあるもんか。』と、長さんは、むきになつて言ひました。

　私は、成程だと思つた。

『長さん、一つ其の逆立ちをやつて見せねえか。』と、吉公は、笑ひながら、あたりを見廻し

て言つた。
　この露路の酒屋の壁板には夏の入日の餘炎がうすれてゐました。而して、空には、一面に、輝かしく光りが、風に洗はれてしまつて、青い地肌がはつきりと地上から仰がれ、光澤氣のない、五色の雲が散らばつてゐました。
　かういはれると、長さんは、惡びれずに、
『一つやつて見せようか。』
　長さんは、兩掌に唾を付けて、涼臺の上に前こゞみになつて、手をかけて搖ると、臺はギイギイと鳴つて、脚が小石の頭に乘つてゐるのが、平らかでなかつたために、其れを思ひ止つて、彼は、大地の上に其の兩掌を持つて行つて突いた。二三度足を上げては、また、もとの場所に落してゐたが、其のうちに、極めて無造作に二本の足を揃へて逆さまに直立した。草履の裏が、夕空の澄んだ面を見詰めて、長さんの太い兩つの腕はやゝ彎曲なりになつて、短い體の重みを支へた。而して、青腫れのした顏は、もはや地につく程うす暗くなつてゐるので、よく分らなかつたのであります。
『長さん、うまいもんだ。』と、吉公は、初めて驚いたやうに言つた。
　吉公ばかりでなく、居合せた者は、思はぬ藝當がこの人に出來るのを不思議に思つたのであります。
　これを見てゐた酒屋の小僧や、近所の物好きの若者がこれを眞似て、其の當座日が暮れると、露路や、店頭の往來で、白いシャツを着た姿で逆立ちの稽古をしてゐました。
　この附近には、幾つかの鐵工場があつた。長く勤續したものもあつたが、多勢のことであるから、常に出たり、入つたりしてゐます。其等の中には、これまでにいろ／＼の經驗をして來た者も少くなかつた。彼等は、ある時は、自由勞働者になり、ある時は工場につとめ、また礦山坑夫となつたやうな者もないではなかつたのであります。
　ある日、私等がいつものやうに、涼臺の處に集つてゐた時に、脊の餘り高くない、しかし何處かすばしこさうな男がやつて來ました。見なれない男だなと思ひましたが、聞くと、某鐵工場にこの頃入つて旋盤工となつたといふ旅の者で、この近所に下宿してゐる者だといふことでした。
　旅から旅へ渡つて來た者だけに、話が上手といふのではないが面白く、其れに直に皆なと親しくなつて、仲間入りをする自然の技術に長けてゐました。
　また、皆なも、仕事の單調に倦いてゐて、常に何處か知らぬ土地に憧れてゐるやうな者ばかりでしたから、この男から、其の男の經驗した苦しかつた事實や、面白かつた事實や、またある工場や、勞働者の群の內幕や、また全くさういふことでなしに、一般の他國の人情、風俗について、男が口に委せて語るのを聞くことを喜びました。
　小男は、眼を光らして、A鑛山の地下勞働について語つた。
『第一の地下坑に達するには、百五十尺エレベーターで降ります。更に、百五十尺で第二層に達します。其れが十二層あるのです。最下層は、地熱で、百度に近いのです。其處でも幾人かの人間が働いてゐます。機械の力で常に上から空氣を送つて來ますが、息苦しいなどは全く想像の他と思はなければなりません。其處で八時間勞働をすることは、ある意味に於て、青空の下で、血を流して戰爭することよりも苦しいことです。
　何しろ、すべて機械の力を賴りにしなければならないので、故障が生じないとも限りませんから、實際命といふものが賴りにならないの

です。後向きになつて、トロツコを曳いて、其處に止つてゐる筈のエレベーターに、礦石を移す時も、萬一どんな間違ひかでエレベーターが止つてゐなかつた時は、礦石を載せたトロツコと共に幾百尺の地底に墜落しなければなりません。彼等は過勞の結果、注意力が衰へ切つてゐます。礦山にゐて、自分で仕掛けたダイナマイトのために、また過失のために、或は機械の故障から慘死する者が絶えずあるのです。

其處にゐて働いてゐる者は、仕事に氣を取られることと、禍が自分の身の上でなくて仕合せだといふ喜びと、自分も今後氣を付けなければならぬといふ、眼の前のことにより多く注意力を向けられるために、社會と自分等との生活の比較といふやうなことをいたしませんが、かうして、明るい大地の表面に出て、さま〲な眼に映る人間の生活を見ます時は、一彼等だつて、同じ人間ではないのか。」といふ疑ひが起るのです。

最近のやうに、勞働問題が世間にやかましくならないうちから、礦山ばかりでなく、工場には、いくらも其の分子は入つてゐました。他のことでなく、自身の死活問題ですから、また容易にこのやうな主義は、みんなの心に入るのです。たゞ何處にも臆病者はゐるもんです。裏切者のために、何事も成功せずに終るのでした。この頃になつて、いろ〱な洋服なんか着込んだ男共が山にも入つて來て、知つたかぶりに演說をしますが、彼奴等になんで俺達のことが分るもんですか。

勞働者は學問といふものはなく、書物にはどんなことが書いてあるか知りませんけれど、本物か、まやかし物か見分けるのに敏感な直覺力があります。本物なら、眼を通し耳を通して、直にぴんと胸に言葉が衝いて來ますが、中には、勞働問題を食物にするやうな奴があります。そんな野郎は命は惜しし、名譽は取りたしといふやうな卑劣な人間であつて、何が俺達の頭に響くやうなことが言へるもんですか。そんな野郎が一番憎いのです。この野郎打ちのめしてしめえ、谷の中へ叩き込んでしめえといふ氣がむらむらと起ります。何といつたつて、實地其の仕事を毎日やつてゐる人間でなくて、なんで其の仕事の苦痛や、不平が分るもんですか。其れがなけれや、俺達のやうな苦しみを平常心の中に感じてゐる者でなけれや分るもんでありません。

何もむづかしい理窟はない。俺等も、お前達と同等の人間なんだぞ。お前達の奴隷に生れて來たのでもなけれや、やつぱりこの社會の同じ分け前を受けなけれやならん人間なんだといふことを社會の奴等に知らしてやればいゝんです。」

私は、其の男の言つてゐるのを聞いてゐるうちに、いつか其れが社會主義のプロハガンダになつてゐるのを氣付きました。

「この男は、社會主義者だな。」と、私は、心の中で思ひました。

この男がしやべつてゐるうちに、皆なは果して分るのか、何うか知りませんが、兎に角默つて聞いてゐた。分けて、物に感じ易い長さんは、折々、其の論旨に同感するものがあるらしく、溜息すら洩らしてゐたのです。

私は、日の照る街の中を歩いてゐて、ふと立止ることがあります。其れは男から聞いた話を思ひ出したがためです。私には、よくさうした不安が感ぜられるからで、たとへば、鐵橋を渡つてゐる時分に、汽車が突進して來たら何うしようかといふやうなことは、考へただけで胸がわく〱するのでした。

男は、地下に於ける廢坑のことの話をしました。もう其の坑は望みが無かつたので、坑夫等

はとつくに見捨てて他の坑に移つて働いてゐる。しかし電燈は、やはり、其の蛇のやうに曲りくねつた坑内を照らしてゐます。たま〳〵坑の中を見物に來た者が、案内者を離れて、廢坑の中に踏み込むと、迷路に入つたやうなもので、誰もゐない、うす氣味の惡い坑の中をうろ〳〵しなければならない。而して、いくら聲を立てても、地の下で、しかも、他の坑とは、どれ程とも分らない厚い壁の如くなつてゐるので、もとより聞える筈がない。さうしてうろ〳〵してゐるうちに、眞暗な、エレベーターの通ふ幾百尺かの穴の底に落込んでしまふことがあると言つた。其れを思ひ出すのでありました。

さういふことに對して、異樣に神經の苛立しさを感ずる私は、ある光景を眼に描いて、いつまでも、いつまでも考へ盡されない恐怖と不安のために心を捉へられて、茫然としてゐることがあるのであります。

いくら單調でも、また金にならなくても、私は、命の安全な、自分の從事する職業を眞に感謝する心が起つたのです。而して、思つたのです。

『何のために働くのだ。畢竟命を繋ぐためでないか。其れを命を賭けて働くといふことがあるものか、矛盾も甚しい。』

私は、よくさうした危險な職業に從事してゐる人間があることを疑はずにはゐられませんでした。

臆病な私には、命を賭けて、幸福を得ようとすることなどは、ちつとも考へが付かなかつたのであるが、人生はかうした打算と、理論の上に、いつも立つものでなく、瞬間の幸福と快樂のために、全身を擧げて冒險するものだといふことを――後になつて知つた――其時は思はなかつたのです。

いつの間に長さんは、其の小男と懇意になつたものか、ある日、私が長さんの處をたづねると、店頭に男が來てゐた。男は、私の顏を見ると笑つて目禮した。

やがて男は、懷の中から、一枚の地圖を出して、長さんの前に擴げた。

『こゝですよ、ニコリスクは。友達が行つてゐるので、來い〳〵と言つて來るのです。私は、上州の山から東京へ出て來る時にも、青い空を見て考へたのです。どうせ東京へ行つても面白いことのある筈がない。いつそ遠く樺太か、ニコリスク邊へでも出稼した方がいゝかも知れないと思つたんですが、また東京へ行けば、何といつても、物の分る勞働者がゐると思つてやつて來やした。私は、ためになる話を聞くことが、生れつき大好きなもんですから、誰か、そんな話をしてくれる友達はないかと何處へ行つても探すのです。ですが來て見ると、やつぱり面白いことはないのです。何なら、直にはニコリスクへは行けませんが、北海道にでも行つて、しばらく働いて、來年の春にでもなつたら、彼方へ渡つて見ようかなどと考へてゐます。』

男は、青い色で彩られた北方の海に突き出た陸の一角に指を置いたのでした。

『青い澄み渡つた空の色を見ると、何處にゐても心が落付きませんので、持病の放浪がしたくなる。』と、男が言つた。彼は、やがて歸つて行つた。

其のあとで、しばらく二人は、默然としてゐたが、

『俺にも、いつしよに行かねえかと言つたんだが、母親さへなけれや、何處へでも行くのだ。』

と、長さんは言ひました。

店頭にあつた、黑い素燒の鉢に、朝顏の葉が凋れてゐました。

ほんたうに、見れば、見る程、青い空の色です。海岸に、默々として連なつてゐる砂丘の如

く、黒い瓦葺の家根が、この氣味惡いまでに靑い空の下に、愁はしげに見えて、おし默つてゐました。

其後、私は、この小男をば見なかつた。大井の某工場へ行からかと或る人に話したさうだから、或は、其の方へ移つて行つたのかも知れない。さもなくば、北海道に行つたのであらう。而して、到る處で、彼一流のプロパガンダをしてゐることであらう。

『あんな男が、火を點けて歩くんだ。』と、私は思ひました。

漂浪者の瞳の中は、いつも澄んでゐます。彼等は、いつも遠い山を眺め、遙かな地平線に浮動する雲を眺め、靑い無窮の空に輝く星の光りを仰いで、時には、荒れ狂ふ寂しい暗い海の面を悄然として望むからであります。彼等は、自分のうたふ歌に疲れを癒すことを知つてゐます。

ザクセンの出稼人が、世界を跨にかけて歩くやうに、愛と幸福が何處に行つても得られなければならぬといふのが彼等の哲學であるのです。其れに較べて、この町に住む私共仲間は、何といふ冒險性に乏しい、單調な仕事を繰返して、生活に疲れた勞働者であらうと思ひました。

次のやうな事件が起るまでは――

私は、ペンキ畫をブリキ板の看板に描くことになつてゐたので、其れが出來た時分と思つて長さんの處へ出かけました。

其の日は、風が少しもなく、夏も末に近かつたけれど、まだ日當りに出るとなか／＼暑かつた。行つて見ると長さんは、シャツ一枚になつて、何か小さた光る鑵にハンダを附けてゐた。

「淺草の娘曲馬を見たことがあるかえ。」と、長さんは言つた。

『まだ見たことがない。オペラは一度見たけれど。』と、私は答へた。

『淺草へでも行つて見たいな。』と、長さんは、汗を拭いて、其の顏を上げた。

『淺草なら、わけがないぢやないか。直に行つて來られる。』と、私が言ふと、

『金持は避暑になんか出かけるが、俺等は淺草へ行つて見る暇がない。貧乏暇なしつて全くこのことだ。』と、長さんは、口に言ひながら眼には、この同じ時刻にも賑かである巷の光景を描くが如く、默つた顏に微笑をたゝへてゐたのでした。

二人が、いろ／＼な話をしてゐる時に、其處へ突然仕事師の吉公が入つて來た。

『どうだ、暑いぢやないか、何か面白いことでもあるかい。』と、印半纏を着た吉公が言つた。

「吉さん、昨日の晩方、何處へ行つたい。」と、長さんは言つた。

『あゝ仕事が終へたもんで、兩國の方へ涼みに行つた。』と、吉公は其處に腰を下した。

『お前、あの紡績工場の煙突の上に登つて見ねえかい、長さん。足場があるから、上るならいつしよに上つて見よう。遠方がよく見えるぜ。』と、吉公は言つた。

『この暑いのに。あの煙突の高さは幾尺あるえ。』と、長さんは聞いた。

『意氣地がねえな。二百五十尺ある。』

『俺、子供の時分から、高い木に登つたもんだ。高い處へ上るのは平氣なもんだ。』と、長さんは言つた。

「ぢや、上つて見ようよ。」

『お前も上るだらう。』と、長さんは、私に聞きました。

私は、ある會社の三階から、下を見た時に切石に日が當つて、其の上が白く乾き切つてゐて、火の出るやうな光景を見て、若し其の上に落ちたなら、血が燥けた石を彩るのだらうと思つて、眼の眩いたことがあつたのを思ひ出して、何とも返事をすることが出來なかつたのです。

其時、吉公は、私の額を見て笑ひながら、

『ペンキで看板の繪なんか描くより、煙突を塗る方がずつと割がいゝぜ、いつしよに上つて見て置きなさい。』と、言つた。

私は、たとひ臆病でも、この際、煙突の上には怖ろしくて登ることが出來ないと言はれなかつた。

『僕も上つて見よう。』と、私は、瘦我慢にも、言ひました。

其れから、しばらく經つて、三人は長さんの店頭から出かけた。途中、氷屋へ立寄つて、三人は氷水を飮んだ。其處を出て、町端れの廣場に建つてゐる工場を指して歩き出すと、汗が一時に額際から流れた。

蟬の聲が、鍋の中で、物を焙るやうに、耳を燒き付いてゐます。三人は、青い、雲の漂つた空に、突立つてゐる煙突を眼の前に眺めた。其れには、蛇の卷き付いたやうにまだ足場がかゝつてゐました。もとより、煙は上つてゐる筈がなかつたのです。

『あれで、二百五十尺あるかい、こゝから見ると、そんなに高いと思はないがな。』と、長さんは言ひました。

『上つて見ねえ、眼が暈つちまふから。親方は偉いもんだ、あの上で、仕事を平氣でなさるさかいな。』と、吉公は、とても自分には、まだ其の眞似が出來ないといはぬばかりに言つた。

煙突の下は、赤い煉瓦で基礎をしつかりと築き上げられてあつた。三人は、其の下で上着を脫いで、シャツ一枚になつた。而して、下駄を脫いで、兩掌に唾を付けて、粗末な、惡くすると壞れさうな足場を踏みながら、町の方を振向くと、青い日の輝く空の下に、屋根が黑く連なつて、其處の生活は、すべて安全なものだといふやうに感じられたのであります。

先頭に立つたのは吉公で、次が肥つた長さん、最後が私といふ順序に、其の梯子を登り始めました。梯子は、一直線に架けられてゐるのでなしに、螺旋狀に、煙突をめぐつてゐましたが、細い横木は、柔かな足の裏に深く喰ひ入るやうに痛かつたのです。

私は、まだ、初めのうちから、こんな氣の弱いことではならぬと思つた。しかし、二人が、ぐん〱登つて行くのに、私一人だけはだん〱後れてしまつた。中途から上に達すると、登るのにも、降りるのにも容易ではないと思つたので、たゞ、自分の手に入る力を賴りにして上つて行きましたが、兩足は、痛むといふより、だん〱震へて來て梯子の横木に着いても、體が浮き上るやうな不安を感じて來ました。

下にゐる時は、全くなかつた風までが、中空には吹いてゐたのです。而して、この危げな足場が一段でも壞れて、足を踏み外したら、眞逆樣に墜落すると思ふと、全身に冷たい汗が走りました。其ればかりでなく、掌に油汗が湧いて、横木を握ると、自ら滑るやうな感じがしたので、何か塵埃を掌に塗るか、もしくは、掌に湧き出た油汗を拭くかしたらいゝと思つても、其れをすることが出來なかつたのであります。

吉公は、眞先に、煙突の頂上に登つて、其の周圍に廻された、極めて幅の狹い板の上に立つて、危げな、低い欄干に片手をかけて四方の景色を眺めてゐました。つゞいて、長さんが、其の傍に這ひ上つた。

長さんは、吉公と竝んで立つて、やはり四方を眺めてゐたが、時々氣になると見えて、後を振向きました。私は、上つてから知つたことだが、煙突の直徑は、頂上でも六尺あまりあつたのです。私は、やつと、後れて其處に辿り付いたが、兩足が竦んでしまつて、二人と竝んで、幅の狹い板の上に立つことが出來ませんでした。しつかりと板の上に坐つたまゝ、欄干に

摑まつてがた〳〵と震へてゐました。
もはや、私は、二人に對して、外聞が惡いの、善いのといふことを氣にかける念が消え失せてしまつたのです。たゞ、正直に自分といふものを見せ付けて、憐れみを請ふ心が起りました。
二人も、不常なら、何とか言つて、からかつたのであらうが、いつになく、眞面目な顏付をして、私のこの有樣を見ても、何とも言はなかつた。寧ろ、これが當然だといふ風に、私の有樣を見ない振りをして、別に話しかけもしませんでした。
『海が近くなつて見えるな、あれ見ない、電車がちやうど、蟲の這ふやうになつて見える。あすこが淺草の十二階の塔だな。』と、長さんは吉公に言つてゐました。
私は、たゞ眞直に下を見たのです。すると、足が坐つてゐても震へて、たゞ頭が茫然として、眼が眩んだのです。其れでも、白い土の上に豆のやうに、黑くなつて人の動いてゐるのが分りました。其れを見ただけで、私の咽喉は塞つて息苦しくなり、もはや、何處をも見るといふやうな勇氣が起りませんでした。淺草の十二階の塔も、また、海も、心にとめて眺めるといふ餘裕すらなかつたのであります。
日が西に沈みかゝることだけは分りました。而して、空を一面に赤く彩つてゐるといふことが分りました。其れより、私は、何うして、あの長い〳〵足場を踏み外すことなく、二たび安全に地の上に降りることが得られようかといふ未來に對する不安と恐怖のために頭の中がいつぱいでした。
なんで、平常、あの平安な生活を呪つたであらうと、この時、私は、はじめて省ると共に、感謝しなかつたことを恥ぢ悔いたのであります。
煙突の大きな口は覗くと空虛で、眞暗で、魔物のうなるやうに轟々と鳴りつゞけて、二百五十尺の長身は、絶えず左右に微かながら動いてゐるのを感じました。私は、はじめて直立してゐる煙突が動いてゐることを知りました。
また、なんでこんな處へ上つて來たらうと思ひました。もはや、過去のすべての記憶に存するものが取り返しの付かないやうな、一種の絶望的な氣持すら感じたのであります。
この時、私は、びつくりするやうなことを聞いたのであつた。
『長さん、いくら何んでも、此處では逆立ちが出來まいな。』と、この時、一層、青褪れがして見えたやうな、長さんの顏を見ながら、半ば戲談のやうに、半ば嘲笑するやうに、吉公は言ひました。
長さんは、顏に笑ひを浮べた。其れは、彼の足許にうづくまつて見上げてゐる私の眼には、うす氣味が惡く映つた。彼は、やがて前後を見廻してゐたが、
『何處だつて出來ねえことはないが、手をかける場所がない。』と、言つた。
足場の板は、踏むたびに撓むのであつた。而して、其の幅が狹くして、欄干が障るのであつた。
『長さん賭けようか。もし逆立ちが出來たら、俺等一兩宛出すことにしよう。』と、吉公は言つた。而して、私の方を見た。
『なあ、オイ、一兩出さうぢやないか。』と、彼は、私に問ひかけた。
そんな危險な眞似が、いくら負け嫌ひな長さんにだつて出來るものかと私は思つた。間違つたら、全く命がないからだ。私は、たゞ金を出してもいゝといふだけの意味で、默つて吉公に對して頷いたのであります。
『一兩宛賭けるか、二兩になれや、まあ一日の手間賃だなあ。』と、長さんの顏の色は動いた。
『だが長さん、間違つたら命がないぜ。其の代り骨は俺が拾つてやるよ。』と、吉公は頓狂な

笑聲を立てた。

「間違つたら、命のないことは分つてらあ、ただな、手を懸ける場處がねえや。」と、長さんは言ひながら、足許を見廻してゐたが、やがて其の瞳は、煙突の口の厚みのある鐵の上に止つた。

眞黒な穴の中を覗き込んで、

「すればこの縁でやるんだな。だが滑らないかな。」と、長さんは、鐵の面を掌で撫でて見た。

私は、一つ間違つたら、煙突の口の直徑が六尺あまりあるから、彼の體はもんどり打つて二百五十尺下まで、穴の中に墜落するのだと思つて、齒の根がガチ〳〵とかち合つた。けれど、もう聲を出して、止めることも出來なかつたので、ぢつと落窪んだ眼で見詰めてゐるより仕方がなかつた。

「俺、いつも逆立ちを稽古した時には、あの綺麗な若い娘が逆立ちをした時の有樣を思ひ浮べるんだ。」と、曾て長さんが言つたことがある。

「一日暇があつたら、淺草へ遊びに行くんだがなあ。」と、此間長さんが言つたのを、同時に私は思ひ出した。

長さんが、今、しようかしまいかと迷つてゐる心の中には、この二つの幻像と、希望とがたしかに加はつてゐるといふことを、私は體が震へながらも、頭の中で思つたのでありました。

「いゝかい二兩賭けるんだぜ、俺、やつて見せるから。」と、長さんは言つた。もう顏には笑ひの跡がなかつた。

「いゝとも、だが長さん、おつこちたつて知らないぜ。俺、まだ二百五十尺の煙突の頭で逆立ちしたもんがあつたと聞いたことがない。」と、吉公もいつか眞面目な顏付になつてゐた。

「おつこちれば、死ぬまでだ。」と、長さんは、やゝ絶望的に、他に對しても、また自分に對しても、どちらにといふことなく投げるやうに言ひました。

長さんは、この世の見納めだといはぬばかりに、振向いて町の方を眺めました。恐らく、其れは意味のないことであつたらう。日が西に沈みかゝつて、空には、美しい雲が斷れて飛んでゐます。けれど、夕日に赤く彩られた煙突の上は、炎に照らされてゐるやうに明るかつた。長さんは、掌に唾を付けて、幾たびも油氣を取るやうに手拭でふいてゐました。やがて手拭を欄干に懸けると、身を締めて、兩掌を煙突の口の鐵の上に突いて、しばらく呪と盧々と鳴り音を立ててゐる、眞暗な穴の中を覗き込むやうにしてゐました。二つの大きな眼は飛び出たやうになつて短い太い頸許には肉が隆起して、びく〳〵と腕に通ずる神經は戰き、五分刈頭の地肌からは、濡れたやうに汗がにじみ出てゐました。

かうしてゐる間にも、魔物のやうな煙突は絶えず左右に動いてゐるのでした。

長さんは、出來るだけ兩方の足を揃へて小さく縮めました。其れでないと、欄干に引懸るからであります。而して、一度足を揚げたなら、二たびやり直しの出來ないことをも知つてゐました。一旦上げた足を後へも、前へも考へなしに、仕損つて落したなら、前へ落した時は、眞暗な内部へ、後へ落した時は欄干を越して外部へ、幾百尺となく體は墜落して粉微塵となつてしまふからであります。

既に、長さんの足は板の上から離れて、二三尺も高く上つたのを私は見ました。もう氣の弱い私は、注意して、この時の彼を凝視することは出來ませんでした。たとひ凝視しようと思つても、恐怖のために眼が昏んでしまつたのです。而して、氣付いた時は、長さんの足は徐々に上へと伸びて、やがて二本の足は空に向つて逆まに伸び切つたのであります。其時、安堵の豫感は私の胸を走りました。吉公は、ちよつと長さんの足が、また徐々と縮んで、舊の空中に

描いた線を辿つて、板に復するのを眼を放たずに、ある懸念をもつて見守つてゐました。足は巧みに、欄干に引かゝらずに避けて尚ほ注意深く板の方に向つてゐました。この時、私は、はじめて長さんの顔を凝視すると飛び出た眼は瞬きもせずに、全身の力は二つの腕に籠つて筋が太く腫れ上り、しかも顳顬から、肩にかけて一種の痙攣が起り、頭髪がびつしよりと濡れてゐるのを見ました。

何事もなく、逆立ちは無事に濟んだ。けれど、誰も、直には聲を立てる者がなかつた。

長さんの飛び出た二つの眼は、其儘、しばらく大きく開いたなりになつて、瞬をもせず虚空を見詰めてゐました。顔の色は死人のやうに青みすら失せて、たゞ口許に自分の魂を嘲るやうな、冷たい暗い笑ひが湛へられてゐた。

私は、この顔を見て、これと同じい笑ひを忘れてゐた記憶から思ひ出した。

其れについて、思つてゐる時、吉公の聲が耳に入つた。長さんの聲が耳に入つた。

——軌道工事をしてゐる勞働者が、電車路で、自動車に轢かれかけて、危く救はれた時の顔であつた。彼は、大きな花崗岩の敷石を抱へて、大きな眼を見開いたまゝ口邊にうす氣味の惡い笑ひを湛へて、しばらく茫然として立つてゐた。其の自動車が走り去つて、人々は歩き出して、すべてのものがもとの如く動きはじめた時でさへも、尚ほ、しばらく立つてゐた——

次の瞬間に、私は、夕空を掠めて、飛んで行く鳥の黒い影を空に見ました。

吉公が先に立つて降り、私が其の後につゞいた。振向くと、長さんは、死んだもののやうにまだ茫然として考へ込んで立つてゐたのです。

（一九二〇、八）

斷詩

血は鐵路を染めて
暁の光淡く
空は屍にかゝりて
天地白癡に似たり

星凄く
街頭の人は
犬の食を奪ひ
大厦高樓參差として墓の如し

（「未明感想小品集」より）

北と南に憧れる心

常に其の心は、南と北に憧れる。

陰慘なペトログラードや、モスクワオの生活をするものは、南露西亞の自然と生活をどんなに慕ふだらう。また、囚人の行くシベリヤをどんなに眼に描くだらう。彼等は憧れなしには生きられない人々である。

小露地方や、北コーカサスの自然は、詩趣に富んで、自由な氣が彼等の村落生活に行きわたつてゐることは、トルストイ、ゴリキイ、其他の作家の作品に描かれてゐる。フインランドは、世界中で、一番生活のしよい處だといふことであつた。而して陰慘なペトログラードの生活はドストウェスキイ、アルツイバシエフ其他の作家によつて覗はれる。

シベリヤの自然と生活は、殊に囚人の生活の慘憺たるものであることは、ドストウェスキイの作を讀んだものはすでに知るところであらう。其れに憧れる、理想主義者の心持を面白く思ふと同時に、またお伽噺の中にあるやうな黑海沿岸を慕ふ心持に於て、いつもたまらない人間性の面白味を獨り露西亞文學に感ずる。

（「未明感想小品集」より）

火を點ず

村へ石油を賣りに來る男がありました。髮の黑い蓬々とした、脊のあまり高くない、色の白い男で、石油の罐を、天秤棒の兩端に一つ宛付けて、其れを擔いでやつて來るのでした。

男は、勤勉者でありました。毎日、缺かさずに、時間も同じやうに、晝少し過ぎると村に入つて來て、一軒、一軒、『今日は石油はいりませんか？』と、言つて歩くのでした。

其の男は、たゞ忠實に仕事のことばかり考へてゐるやうでした。それには、何か、目的があつたのかも知れない。たとへば、金がいくら溜つたら、店を立派にしようかとか、また、はやく幾何かになれば幸福だと胸の中に描いてゐたのかも知れない。それとも、もつと差迫つた其日のことを考へてゐたのか？

あまり口をきかない、この男の顏を見たばかりでは、心の中を知ることが出來なかつたけれど、人間といふものは、何か目的がなければ、さういふ風に勤勉になれるものではなかつたのです。

もつとも、男には、若い嫁がありました。年をとつた母親もあつたやうです。小さな店だけで、石油を賣るのでは、暮しがたゝなかつたのかも知れない。

しかし、この村には、もつと〳〵貧乏の人達が住んでゐました。家根の低い、暗い小さな家が幾軒もあつて、家の中には竹串を造つたり、つま楊枝を削つたり、中には狀袋を貼つたりしてゐる男も女もあつた。それでなければ、一日外に出て圃で働いてゐるやうな人達でありました。

彼等は、物を問ひかけられても、手を休めて、其れに返答するだけの時すら吝んでゐましたから、頭だけを外の方に向けて、

『まだ、今日はあつたやうだ。』とか、何とか其の石油賣に言つたのでした。

『また、お願ひいたします。』と、男は、軒下を去つて隣の家の方へ歩いて行くのでした。

其の後で、家の中では仕事をしながら、家族の者が、こんな噂をしてゐます。

『賣りに來るのと、行つて買ふのとは大變な違ひだ。賣りに來るのは、きつちり一合しか量らないが、行つて買ふとずつと澤山くれる。これから夜が長くなるから、夜業をするのに少しでも多い方が有難い、晩方ちよつと行つて買へばいゝのだ。』と、母親が言ふと、

『ほんたうに、きつちり一合しか量らない、なんだか足りないやうな時もある。來たのを買ふとランプ七分目位しかないが、行つて買ふとちやうど口許までありますよ。』と、娘が返答した。

是等の人々は、かうして、何か問題が起ると互に口をきゝ合ふが、さうでもなければ一軒の家でも、めつたに話すらせずに下を向いて指先を見つめながら仕事をしてゐるのでした。頭の中では、多分娘はさま〳〵な空想に耽りながら、また母親は別のことを頭に描いて……

ちやうど其時、隣家の軒下では、男は肩から天秤棒を下して、四十前後の女房が汚れた小さな石油を入れるブリキの罐を手に下げて出て來ました。

窓の格子には、赤い唐辛子が十ばかり一房にして結び付けてあります。其處には、よく日が當るのでした。女の皮膚の色は靑ざめてたるんでゐた。そして、水腫性の症狀があるらしく

肥つて、殊に下腹が飛び出てゐました。
　男は、此方の石油罐の蓋を取りました。青々とした、强烈な香氣を發散する液體が半分程も罐の中になみなみとしてゐました。五勺の桝と石油を汲む杓があつて、男は其の杓を青く搖れる液體の中に差し込む刹那、七つ八つの少年が、熱心に罐の中を覗いて、其の强烈な香氣を嗅いでゐるのでした。
「どいておくれ。」と、男は、無愛想に言つた。少年は、一步退いて、眼を細くして、雲切れのした秋の空を仰いでゐました。
『また、油の價が上つたんですね。』と、女房は言ひました。
『また、上りました。』と、男は、答へながら、五勺の桝に殆んど過不足なく平らかに石油を滿たして漏斗にわけました。そして、もう一杯入れるために、また、杓子を石油に差し入れました。
『こんなに石油が高くなつては、夜もうつかり長く起きてゐられない。』と、女房は言ひました。
　其の言葉の調子は、かう價が上つたら、どんなに石油を賣るものは儲かるだらうといふやうに聞かれたのです。
『御問屋の方で價を上げるのですから、かうして賣る私共は、やはり儲からないのです。』
　無口な男は、言ひ譯をするやうに、たゞこれだけ言ひました。
　女房は、かう言つたら、半杓位最後に、おまけを入れてくれるだらうかと、眼を皿にして、ぢつと見てゐたのですが、男は、やはり巧妙とでもいふやうに、過不足なく平らかに桝に入れて漏斗に移すと、其れぎりでした。
　女は、むしろ男が早く漏斗を入物の口から拔いたので、青味を帶んだ、美しい雫がまだ殘つてゐて、却つて桝に移されたのだけ損をしたやうな氣すら起つたのです。
「有りがたうございます。」と、言つて、男は、其の家の前から立去りました。
『賣りに來るのを買ふものでない。これからやはり、店へ行つて買つた方が得だ。』と、女房は、獨言をしながら家へ入りました。
　窓の格子には火の燃え付いたやうに、この時唐辛子を日が照らしてゐました。
　先刻の男の子が、石油賣の後を追つて行きました。
「僕は石油の香が大好きだよ。』
　其の子供は、友達に出遇ふとさう言つてゐました。
『柿を一つあげようか。』
　友達は、懷から柿を出して、少年に渡しました。二人の子供は、乾いた往來の上で、黃色な果實を持つて樂しさうに遊んでゐました。
　其の間に、石油賣は、畑の間を通つて、彼方へ行つてしまつた。
　日暮方少し前に、この笠を被つた、草鞋を穿いて脚絆を着けた勞働者は、村を廻り盡して町に出ようとして、ある神社の傍にさしかゝり、其處に荷を下して、しばらく休んでゐました。境内の木々は黃色く色づいてゐました。
「寒くなつた。今年は夜着を造らねばなるまい。」
　無口の若い男は、あたりのさびしくなつた景色を見廻しながら獨語をしてゐました。
　やがて、彼は、家に歸つて、日暮方に近づいて店頭へ來る客に、石油を量つて渡してゐたのです。
『歩いて行つて賣る時はおまけが出來ないが、店に來る人には、少しづつおまけをしよう。』
　これが彼の心の掟となつてゐました。少しでも量の多いのを喜んだ、このあたりの貧しい生活をしてゐる人々は、わざわざ彼の店へやつ

て來ました。その中には、老人もあれば、若い女などもあつたが、日が暮れても、まだ仕事の手を放さない、ほんたうに一刻をも爭ふ其の日稼の人々は、子供を使にやるのでした。

此夜、幾百萬の燭光を消費する都會の明るい夜の光景などは、この土地に住む人々の殆んど其の話を聞いても理解することの出來ないことであつたのです。

男は、店頭に來た、汚らしい風をした子供を見て、どこかで見たことのある子供だと思ひました。しかし、彼は、晝間石油の罐を覗いた子供だといふことは思ひに浮ばなかつたのです。

子供は、一合の石油を買つて、錢を傍に重ねてあつた空箱の上にのせて、小さな姿は店頭から消えました。

男は、うす暗くなつた光線の裡で、箱の上にのせてあつた錢を手に取り上げて、しらべて見ました。

『何、これは五厘錢ぢやねえか、五厘ごまかさうと思ひやがつて……』と、いま〳〵しさうに言つて、顏の色を變へた。

『おまけをした上に、ごまかされて、一合の頭でいくら儲かるけえ。』

無口な、おとなしさうな男に似合はず、急に怖ろしい權幕となりました。男は、直樣駈け出して行きました。

『きつと、貧乏村の子供にちげえねえ。』

彼は、村の方に向つて、恐ろしい勢で走りました。小さな子供の、油壜をぶら下げて、短い着物の裾から出た二本の足に草履をはいて行く後姿を見付けると、

『オイ、餓鬼め、待て！』と、彼は、怒鳴ると殆んど同時に、子供の後襟を引捕へました。

もし、誰か村の者がこの有樣を見たら、あの平常口もきかない男に、こんな殘忍なことが出來るかと曾て想像の出來なかつただけびつくりするでせう。

『五厘ごまかさうなんて、不屆な奴だ。』

『五厘出せ、それでなければ其の壜をよこせ。』

少年は、黑い大きな眼を見張つて、顏を眞赤にして、何も言へないで震へてゐます。

『さあ、石油の壜を渡せ。』と、男は、少年の手から引つたくる途端に繩が切れて、壜は地上に落ちて、倒れると石油は惜氣もなく、口から雲母の如く流れ出ました。

『手前見たいな奴は、大きくなると泥棒になるんだ。』

男は、小さな室で兩眼を擦つて泣き出した少年を後目にかけて、罵ると町の方へ引返してしまひました。

神社の境内にあつた、銀杏樹の葉は、黄色く、ひら〳〵と、既にうす暗くなつた地の上に吸ひ込まれるやうに散つてゐました。少年は、いつまでも泣いてゐたが、急に泣き止んだ。そして、足許に倒れてゐる壜を拾つて、一目散に村の方へ走り出した。

『俺を泥棒と言つたぞ。』と、口走りながら。

町に、燈火のつく頃でした。みすぼらしい樣子をした老婆が、石油屋の入口に立つて、

『さつき、子供が、五厘足りなかつたので、泥棒だといつて叱られたと泣いて來たが、私が錢を渡した時に目が惡いもので間違つたのだ。間違ひといふことは誰にでもあることでな……』と、老婆は、眼をしばたゝきながら、主人に言つた。

『いえ、五厘足りないと追ひかけて行つて言ふと、たしかに置いて來たといひなさるから、譃を言ふことは、泥棒のはじまりだと言つたのです。』と、平常無口の男は白々しく答へた。

翌日の夕方のことです、男が、客のために石油を量つてゐると、不意に目先で火を擦つた者

がある。ハッと心臟を刺されたやらにびつくりした時は、非常な爆音と共にもう火は彼を包んでゐました。

少年の不思議な犯罪として、この話は、いまだにこの町に殘つてゐます。

單調の與ふる魔力

是を繪畫で言ふなら、白と黑の色で、力のある、深い繪を畫いて見たい。神經の纖維は細いものに感ずると同時に、太い、單調なものに盡きぬ興味と慰藉を感ずる。

單調な歌を聞いてゐると眠くなるのは事實だ。けれど、其處に快感もある。其の快感は倦怠に生じた一種の慰安といつたやうな神經の弛みであらう。呢として動かない、感情の沈滯であらう。私は其處に言ふべからざる壓し付けるやうな力と、特種の快感を覺えるのである。

北國の雪の感じは、卽ちこれだ、茫漠としてたゞ白い平野の單調は、この單調な繪畫的氣分を與へる。北國の文學に此の單調の附き纏ふのは、卽ち特色であつて、鄕土の匂ひであつて喜ぶべきものだ。

陰氣な、容易に親しみ難い、けれど其處に疎んじ難い、重みと、力と、人生に徹した悲しみがある。是れ卽ち北國の自然の色彩が與ふる氣分である。

此の氣分は、藝術上に侵入して、此の氣持のみで詩や、劇や、繪畫が出來る。單調な色彩、單調な舞臺。單調な人生。單調な會話。

而して底に滯つた力は重い、深い、暗いものであり得る。

尙ほ是を深く掘つて行つたら、凄愴の氣思はず人の心を締めるやうな、神經質の人には恐怖を感ぜしめて、長く見るに得堪へぬやうな、單調の光り、單調の神祕を感ぜしめるに相違ない。

然り、神祕的氣分は遂に此の單調によつて示されてゐる。白、黑、灰色、此の色は神祕の衣である。鈍き、盲目、倦怠、是等の心持は遂に單調の屬性に他ならぬ。

私は、この暗い、鈍い、單調の氣分を北國特有の色であると言つた。けれど、近代の神祕派は、其の劇、詩、繪畫に於て、此の單調の氣分を含んでゐないものはない。南方の文學にしろ、此の神祕派の作品は、遂に單調的氣分によつて、人心に透徹せんとしてゐる。

人間は、單調を忌むと同時に單調を怖れるものだ。單調の歌程、人を悶えしむるものはない。單調の色程、メランコリーにするものはない。何となれば單調其物は神祕的形式であると言ふを憚らぬ。誇大に言へば死其物は單調の象徵で、生其物は單調の極致である。

白と黑、其れ自身畫にせずとも此の二色のコントラストは、印象畫である。これによつて吾人の受ける氣持、神經の顫み、其れに伴ふ快感の力、私は之を引離して來て、藝術上ユニツの形式となる事を思ふ。

何等の驚愕をも感ぜず、死色彩を贅澤に抹り付けたからとて、自然は決して、活きて力あるものとなつて表現せぬのは事實だ。私は近時、自然描寫の無興味を感ずる。と共に、自然は必ずしも描寫するものでなく、其の生命を捕ふることの困難を感じた。

自然と人生とは引離して見ることが出來なくなつた。自然が人生を包んでゐるとしか思はれない。吾人は更に艶を消し、贅澤な色を去つて、長へに變らざる形を見たいと思ふ。

（『未明感想小品集』より）

譃をつかなかつたら

この町の人とは思へない男が寫眞を撮りに來た。その男は、ちよつと贅澤さうな樣子をしてゐたが、また何となくさびしさうにも見られた。

『いつ出來ますか？』と、うつしてしまつてから、その男は聞いた。前髮のちゞれた、瘦形であつた。右手の指には金の指輪をはめてゐた。寫眞師は、この男の職業は何んだらうと心の中で思つた。

『このお天氣では、どうしても四五日はかゝります。』と、寫眞師は、答へた。

家の外には、綿のやうに雪が木の枝や家根の上に積つてゐた。太陽は、雲の間から町の上を覗いたり、また、その黑い雲の褥の中に隱れたりした。寒い風が吹くと、すぐに雪がちら／＼と降つてきて、天氣が變つて、ほんたうにあてにはならないのであつた。

『そんなに手間どりますか。』と、男は、言つて魂消たやうな顏付をした。

『東京だと待つてゐて、すぐにしてくれるところがありますがね。』と、言つて、男は、さびしさうに笑つた。寫眞師も、やはり東京の生れであつた。初めに、この方に志すつもりはなかつたのが、つい從事してゐる仕事が面白くなかつたり、失敗などを重ねたりして、いままで道樂にやつてゐた方に、今度は眞劍になりだして、それでしまひには生活をするやうになつたのだ。いま、彼は、東京といふ言葉をきくとなつかしさを覺えた。

『お客さんは、東京でいらつしやいますか。この頃は電氣で乾燥をさしますから、實にその裝置には金もかゝりますが早いもんです。なんといひましても、暮らしますのも、住むのも東京でございますね。』と、寫眞師は、言つた。

男は、椅子に凭りかゝりながら、袂から煙草を出して火をつけて、吸つてゐたが、

『私は、東京ではないんですがね、長らく東京にゐたから、もう故鄕も同じことなんですよ。ほんたうに生れたところは、もつと南の方です。もう三四年、生れた家へは歸らないものだから、思ひ出したついでに寫眞を撮つて送らうと思つたのです。私の母は、もう八十になりますが、まだ達者でゐます。それに妹から、寫眞なりと送つてくれと言つて來ましたんですからね。』と、言つた。

寫眞師は、それでこの男は、かうして旅に出て何をして暮らしてゐるだらうと思つた。

『失禮ですが、お客さんの御職業は何んでございますか？　どこかお役所へでも……』と、寫眞師は、言つた。

『吳服物の出稼をやつてゐるんですが、どこも不景氣で面白く行きませんよ。』

『それは結構でございますね。澤山儲かりませう。』

かう寫眞師が言ふのを聞くと、男は、笑ひながら言つた。

『何商賣だつて、そんなに儲かるものはありません。私も、いろ／＼やりましたよ。はじめは正直に、一生懸命に働いたものです。それですら食つて行くのに困りました。これからは運命を天に委して、何んでもやつてみます。どうしたつて、人間は食はなければなりませんからね。しかし、澤山資本を持たない者が、たとひ倒さになつたつて、そんなに金の儲かる筈がな

いのです。』
　寫眞師は、默つて男の言ふことを聞いてゐた。恐らくこの男ばかりでなかつたら、みんなさうなんだらうと思はれた。しかし、それが思ふやうにならなくて、それから、自分達の生活は、はじめの目的と違ふ、あらぬ方へとそれて行つてしまつたのだと思つた。
『寫眞屋なんて、陽氣な商賣でようございますね。』と、今度は、男の方が羨ましさうに言つた。
　誰でもさう思ふにちがひない。ちよつとした外見からは、さう思ふのは無理のないことだ。そして、他人のことといふものは、みんな好きさうに考へられるからだと寫眞師は心でうなづきながら、
　職業になると厭なものです。はじめ道樂にやつてゐました時分は、私は、こんな面白いものはあるまいと考へたことさへあります。自然でも、人物でも、みんな寫しとることができるからです。そして、人間の自身氣付かないやうな刹那の體の運動すら、寫眞に、はつきりと寫るのですから、思つて見ても愉快なことにちがひありません。しかし、商賣となるとちがひます。機械は正直ですからね、花嫁の顏の傷跡も、にきびもみんな有のまゝに寫します。鼻の形も、眉毛の長短も、口付きも。併しそれをさうでないやうに、もつとずつと實物よりは、美しいやうに修正しなくてはなりません。商賣とはいひながら、眞面目に考へると、とてもたまらない程無興味なことです。そして、撮る人は、それがあたりまへに自分であると思つて、若し、醜い自分の姿をそのまゝ見て御覽なさい、寫眞屋を下手だといふのですから、仕方のないものであります。』
『成程、お前さんの言ひなさる通りですよ。外から見たやうに樂なものではありませんね。』と、男は、同情してうなづいて見せた。
　寫眞師は、これまで若い美しい娘の姿を撮つたこともあつた。また、この町の花柳界で第一番の流行妓をこの室で撮つたこともあつた。そんな時は、流石に、造化の妙技を心から讃嘆せずにはゐられなかつた。そして、たゞ、機械がこれを有のまゝ少しも間違はずに寫し取つてくれればいゝとさへ思つたこともあつた。また、ある時は、眼や、鼻に、しひて見出さうとすれば、少しの缺點はないではなかつたが、たゞ譯もなく自分の心を魅するところが、その顏付のどこかにあるやうな女の姿を撮つたこともあつた。そんな時は、この眼や、口付を修正するのに、ほんたうに創作する時に持つと同じ喜びを感じて、時の經つのを知らないことがないでもなかつたと思つた。
　しかし、彼は、最近の一事實を眼に描き出した。そして、口を開いた。
「さうです、まだ二月とは經ちません。儀式の終つたすぐ後の、私は新婚の夫婦の寫眞を撮りました。そのとき私は、ほんたうに、二人とも仕合せだと思ひました。花嫁は若くて、美人でした。眼がぱつちりとして、誰でも、男ならあの顏を好かないものはありますまい。ほんたうに人好きのする顏でした。婿さんは大學を出たといふことでありますし、私は、これから二人の樂しい長い行先きのことなどを眼に描いたり、想像せずにはゐられませんでした。しかし、その寫眞ができ上る前に、その花嫁は、殺されたのです。前の情夫から怨まれて、なんでも乳房のあたりを一突きで殺されてしまつたといひます。だから、人間の運命は分らないものだと、つくづくその時私は感じたのです。」と、寫眞師は、ストーヴの前に立ちながら話した。
『この町であつたことですか？』と、男は、驚い

て聞きかへした。

「本通りの呉服屋の娘さんです。婿さんといふのは從兄で、情夫といふのは、自分の家の番頭だつたのです。』

『ほんたうに、人の運命といふものは分らないもんですね。」と、男は、さもその話に感じたらしく溜息をついた。そして、椅子から起ち上つて、寫眞の代金を拂つて、寫眞はできた頃に取りに來ると言つて歸つて行つた。

寫眞師は、歸り際に、その男の姓をたづねた。

「Nといふが、どうせ自分が取りに來るから。」と、言つて、出て行つてしまつた。

寫眞師は、客を送り出してから、二たびストーヴの前に來た。そして、先刻、男のかけた椅子に自分が腰を下ろして、しばらく空想に耽つたのであつた。

寒く、だん／＼暗くなつて、日は暮れかゝつた。この時、戸口についた[illegible]を叩く足音がきこえた。客が來たのかと思つて、寫眞師は出て行つて見た。すると、何家かの下女らしいのが立つてゐた。

「本町の伊勢屋ですが、お年寄がお亡くなりになつたから、來て寫眞を撮つておくんなさいまし。」と、女中は言つた。

「いまですか？」と、寫眞師は聞いた。

『はあ、御都合がよかつたら、いま來て下さいまし。』

『二丁目の伊勢屋さんですね、ぢきにまゐります。」と、寫眞師は、答へた。

「どうぞおねがひいたします。」と、女中は、また雪のちら／＼降る中を歸つて行つた。

伊勢屋といふのは、この町中での金持であつた。常に戸締りを嚴重にして、人間を怖れてゐる。其の前を通つても、一種の寒氣を肌に感ずるやうな高利貸であつた。親と子の間でも金錢は別だといふのが、實に此の家であつた。三十に餘る年頃の倅があるにかゝはらず親と意見が合はずに別居してゐた。父親といふのは、もう七十に近かつた。夏、冬に拘らず、茶の間の爐邊に坐つて、煙管を時々その縁で叩く音がするばかり、笑顏一つせずに、家内の者の手の上げ下ろしから、たま／＼たづねて來る人間の足元きより着物の縞柄まで見落さずに、冷たい沈んだ眼を硝子球のやうに光らして眺めてゐた。死んだといふのは、その爺である。

寫眞師が、機械を携へて行つた時には、もう屍は棺の中に收まつてゐた。死ぬ三日前までは、少しも體に異狀がなかつた。氣分が惡いと言つて寢たのは、其の日の夕方であつた。二日目に醫者を迎ひにやつて、その醫者が見た時は、もう幾時間の後を豫め保證されない程であつた。

親戚に電報を打たうかと言つたのを、何ほ氣が確かでゐた病人は、頭を振つて、其の必要がないと言つた。雙方とも金がかゝつて、その上に迷惑である。自分は、明日になれば起きると言つたのであつた。しかし、其の明日は、彼の體は、冷たく、固つてゐた。誰の目にも、小柄の體が一層小さく、堅く、醜くなつてゐた。しかし、落窪んだ眼は、その實固ぢてゐたのであるけれど、奥深い底の方から、ぢつと、みんなのなすことを見守つてでもゐるやうに氣味惡かつた。

『なんて、やさしみのない、いやな人相だらう。』と、寫眞師は、心の中で思つた。

この醜い姿を自分は撮らなければならない。なぜそんなことをする必要があるのだ？　彼は、それが職業であるといふことを殆んど忘れてゐるのであつた。

この醜い死體は、兩手を胸のあたりで合せて、珠數さへ懸けてゐた。

傍に突立つて、手を帯の間に挾んでゐる倅の顏には、どこにも父親の死に對して傷む悲哀の色さへ見えなかつた。其處には、知り合の者や、出入りの者等が集つてゐたが、笑顏こそ見せないが、獨り、年とつた長年連れ添つて來た女房を除いては、別に泣いてゐる者を見受けなかつた。

女房は、眼を泣き腫らしてゐた。そして、棺の中を覗いては、

『一昨夜、電報を打つたのだから、すぐ來なさるものなら、今夜はこちらにお着きなされるのだが、遠いから間に合はないかも知れません。』と、彼女は、言つて、唯この世に一人生き殘つてゐる、老夫の妹のことを言つてゐるのであつた。

『何とも、返事がないのだから、來ないのでせう。』と、倅が言つた。

寫眞には、棺に臥てゐる儘の死顏を撮つた。生前に於て、極く若い時に撮つたばかり、死んだ主人は、寫眞といふものを撮らなかつたのである。

寫眞師は、自分の役目を果すと、一刻も早く、この陰氣な空氣の裡から、外へ出ようとした。そして、機械を疊んで、やがてこの家から、暗い、寒い、しかし何となく自由を感ずる外の通りへ出かゝつた時には、ちやうど棺に釘を打つてゐる其の鈍い、形容し難い感じのする響きが聞えたのであつた。

粉雪は、彼の俯向いて歩く横顏に、吹く風といつしよにかゝつた。それは、いまから三年ばかりになる。彼は、四つばかりの子供の死顏を撮つたことがある。子供は、病院で死んだのであつた。彼が行つた時は、小さな棺の中には、花がいつぱい入れてあつた。そして、白蠟で造られたやうな顏が仰向きに埋まつて居つた。子供は、何かの傳染病で死んだらしかつた。棺は、此處から、直に火葬場へ送られるのであつた。寫眞に撮る刹那には、子供の顏にかゝつてゐたガーゼや、花がすつかり除かれた。そして、年若い母親は聲を立てて泣き崩れた。彼女は、耐らなくなつて子供の顏に接吻したのである。寫眞師は、當時を追憶すると、なんといふいぢらしい場面であつたらうと、いまでも一脈の感激は、頸筋のあたりを走るのであつた。

『それに較べて、今夜のあの高利貸の死顏は何うだ？』

夜十時頃であつた。

彼は、仕事室にはひつて、藥で乾板を洗つてゐた。彼は、頭の中に、何も考へてゐなかつた。殆んど、職業的に、いつもすることをいつものやうに、たゞするのみであつた。外は、暗く、あたりは、すでに寢靜まり返つてゐるもののやうに、しんとしてゐた。折々降り積つた雪が廂から、下に崩れて落ちる音がしたのみであつた。

下を向いて、彼は、熱心に手許を見つめてゐた。彼は、びつくりした。現はれて來るものが、今のいままで、それであるとは豫期しなかつたやうに、眼の落窪んだ、頰骨の尖つた全く髑髏そつくりな顏が浮き出たのを見た。この老人は、生きてゐる間は、高利貸をしてゐたといふ記憶が、一層、この顏を冷たい、氣味惡いものに思はせた。

『職業のためとは言ひながら、もう棺の中に收まつて、釘付けになつて、いま頃、誰も、二度とはあの顏を見るものがなからうのに、自分だけは、何の緣がありもしないのに、かうして、今夜のうちに二度まで見なければならない。』

寫眞師は、誰も、こんなところに氣がつきさうもない、この職業の齎した、厭惡をしみじみと感じたのであつた。そして、旅の行商人が、

「何商賣だつていゝことがありませんよ。」と、言つたことなどを思ひ出した。

「職業となつては、みんなこんなに、厭なものかも知れない。そして、人間が機械にされていいことは決してありやうがない。」と、彼は、火鉢の火を掻き起しながら思つたのであつた。

　四五日經つた。もう、商人の寫眞は出來上つてゐた。寫眞師は、よく自分ながら撮れたと思つた。そして、この寫眞が、あの男の手から、男の年とつた母親や、妹の許に送りとゞけられた時、その人達は、どんなに、なつかしい瞳をこの上に向けて眺めるだらうかと考へた。

　彼は、この三枚の寫眞を紙の袋にいれて、いつあの男が取りに來ても渡されるやうに、テーブルの抽斗の中にいれて置いた。そして、そのまゝその寫眞のことは、彼の念頭から去つた。

　ある日の朝、彼は、起きて、まだ顏を洗つたばかりのところであつた。外から、佩劍の音をさせて、慌しげに巡査が入つて來た。

寒さのために、巡査は、鼻を赤くしてゐた。

「山城屋旅館に泊つてゐた客で、Fといふのがこの家で寫眞を撮らなかつたかね。」と、言つた。

　寫眞師には、F、といふ姓名が思ひ出されなかつた。

「いゝえ、撮りはいたしません。」と、彼は、答へた。

「たしかに撮らないね？　そんなら、別の寫眞屋かも知れない。」

　巡査は、かう言つて出て行つた。

「F？」その後で、彼は、考へた。そして、何事が起つたのだらうと思つた。もしや、新聞に、そのことが書いてはないかと思つて、すぐに來てゐた其の日の新聞を開いて見た。すると、山城屋に泊つてゐた、吳服の行商人は、一ケ月間の宿泊料を踏み倒した上に、二三軒から借金をしたまゝ逃亡したといふことが、四號の見出しで書いてあつた。

「あの男に、ちがひない。」と、寫眞師は思つた。

　そして、彼は、早速、テーブルの前に行つて抽斗の中から、この男の寫眞を取り出した。すでに出來上つてゐて、いまにもあの男が取りに來たら渡さうと思つてゐたのであつた。

「どうしたら、いゝだらう？　この寫眞を方々に廻すといふのだらう。」

　彼は、しばらく考へ、惑つてゐたが、何と思つたものか、その寫眞を袋のまゝ傍のストーヴの中に投げ入れて燃やしてしまつた。

　二たび戸口に佩劍の音がした。

「先刻Fといつたが、或は僞名してゐるかも知れない。宿屋の女中に、こゝで寫眞を撮つたとか話したさうだが、年頃、三十五六、頭髮のちよつとちゞれた、あまり背の高くない男だ。そんな男が、三四日前、或は、もつと前に、こゝへ來て寫眞を撮らなかつたかな。」と、巡査は、言つた。

　寫眞師は、額を顰め頭を傾けて、思ひ出さうとする樣子を造つた。そして、しばらくしてから、

「來はいたしません。」と、きつぱりと答へた。

「そんな男は、來たことはないね。」と、巡査は念を押した。

「ありません。」と、寫眞師は、答へた。

　巡査は、考へるやうな顏付をしてゐたが、

「や、どうもお邪魔をしました。」と、言つて、出て行つた。そして、彼の言つたことを疑はなかつたやうであつた。

　その後で、彼は、しばらく、床板の上を廻つて、室の中を往つたり、來たりしてゐた。そして、額を上げて、につと笑つた。

靴屋の主人

彼は獨り奇怪な空想を恣にすることがある――俺に、若し絕對の權利といふものがあつたなら、而して、勝手に死刑の宣告を下し、生命の與奪が出來たなら、俺は、先づ最も醜い者から殺すであらう。

「この世界中で、何が一番醜いか？」と彼は考へた。

彼の眼には、そんな遠くのものは映らなかつた。自分を離れた、遠くのものは、皆な美しいとさへ考へられた。而して、眼前に見える彼の妻、子供、犬、小僧の與作しか映らなかつた。

しかし彼は、是等の者の中に、最も醜いものを見たのである。恐らく、人生に於ての最も醜いものであつたらう。何と小言を聞いても平氣でゐるやうな、何處か低能に近い與作の顏は、時に他人の子でなかつたなら、擲り倒してやりたいと思ふ位だ。また常にいぢけた、物怖したやうに、ぶる／＼と戰いて竦んでゐる犬を見ると、「弱蟲め、意氣地なしめ、死んでしまへ。」と、罵らずにはゐられない。獨りこればかりでない。彼は病身な妻に對しても、また、活氣のない子供に對しても、其の眼付や、横顏や、其の時々の現はれに於て、限りない醜惡を感ずることがある。そんな時は、激しく頭を振つて、其等のものの、存在を呪ふことがある。而して、彼の心は、死刑の宣告を見えぬ世界で下すことがある。

實際、彼は、この世界に於ける最も卑怯なもの、醜惡なものを、未だ曾て彼の周圍に於けるより他に見たことがなかつた。

靴匠の常吉は、四十にならない男である。寒さになるとリウマチスが出て、體が自由にならない。しかし我慢をして仕事を休んだことがない。彼は、うす明りの下で、靴の裏に鋲を打ちながら、彼の前にのろ／＼として動いてゐる與作を横眼で睨んだり、片隅に竦んでゐる犬に尖つた神經を向けながら、いつもの如く殘忍な空想に耽つてゐる。而して、眼を上げて、往來を見ると、相變らず空の色は濁つて、快感を誘ひはしないが、其の下に動いてゐる人や、物は、みんなに惡い感じを惹かなかつた。彼は、自分を離れた、遠いものは、彼の周圍のものより、少くも彼の一家の中のものより、皆な愉快に、快活に見えるやうな氣持がした。

「オイ、暗くなつた、瓦斯火を點けろよ。」と、常吉は叱るやうに小僧に命じた。

青白い瓦斯の光りを掠めて、粉雪が降つた。風が出て來た。つひに天氣が變つたのである。外には、人足が杜絕えて行つた。

「故鄉の方は、雪が深山降つてゐるだらうな。」と、與作は兩手を顏の邊に持つて行つて、凍えた指頭を息で暖めようとした。

「故鄉のことなんか口に出すない。ぐづ／＼しねえで、さつさとすることをしろ。」と、主人は怒鳴つた。

偶然にも、靴屋の主人と小僧とは生國が同じであつた。このことが却つて主人を不快ならしめた。もし小僧が、初めから故鄉の者と分つてゐたら、彼は決して雇はなかつたであらう。「小僧入用」の札を戸外に貼つて置くと、其れを見て來たのがこの小僧であつた。この町に保證人があるといふので、早速使用したのであつた。後になつて、小僧が彼に生國を同じうすると聞いた時には、どういふものか好い氣持がしなか

つた。

靴屋の主人常吉には、故郷にゐる時分の記憶は、思ひ出して見て何一つ善いものはなかつた。彼は生れた時から貧困の味を知つた。父親は大酒飲みであつた。母親はヒステリーであつた。兄は放蕩者であつた。しかも彼は小學校へ行つた時分に、理由なく教師から憎まれ、仲間から馬鹿にされた。『みんなお前の親が惡いからだ。』と言つて、母は泣いたことがある。

其れに子供の時分から頭痛持で、洟を垂してゐたのを見て、近所の大人までが、子供等と混つて『洟たらし』だとか、『なめくぢ』だとか言つて綽名を附けた。

彼は後になつて物心が附いて、故郷を出る時に、『もう決して俺は國へは歸るまい。』と心に誓つた。而して、彼はいかに一家の者等が、彼等から馬鹿にされて來たかを考へて、深く心に恨みを刻んだのであつた。

彼は、故郷の人と聞くと、知ると知らぬとなく、皆な仇敵のやうに思つた。故郷を去つてから幾年後になつて、彼は奉公をしてゐた時でも、時々子供の時分のことを思ひ出すと限りない憤恨に燃えることがあつた。而して、直にも此處から忍び歸つて行つて、あの故郷の小さな村に火を附けて皆な燒き拂つてやらうかと考へることがあつた。

小僧の與作が、故郷の祭のことを思ひ出したり、其の他、何かにつけてあつたことを思ひ出して語るのが常吉の舊い傷に觸るので、突然、常吉は怒鳴り出して、與作の頭を擲ることもあつた。

『もう、故郷の話は止めないかといふに。俺は故郷の話を聞くと、何んでも腹が立つて仕方がない。』と、顏を眞赤にして、拳を固めて言つた。

小僧は默つてしまふ。而して、下を向いて寂しさうな樣子で仕事にとりかゝる。

降つた雪は翌る日になつても消えなかつた。灰色の瓦の上に降りかゝつたまゝで殘つてゐた。寒い風が空を掠めるので、曇つた空の下で其の雪は光つて見えた。太陽は顏を出さなかつた。人々の急しさうな歩きつきで、刻々に時がこの鈍色の空間の裡を過ぎつゝ經つて行くことが感ぜられた。靴屋の店では主人の常吉は神經質な眼附をして下を向いて皮を削つたり、鋲を打つたりしてゐる。小僧は修繕する靴の泥を落したり、荒い刷毛で皮を磨いたりしてゐた。犬は朝飯も食はずに寒さに慄へて片隅の處に體を竦めて呪としてゐる。折々家の内で子供の泣く聲が聞えたり、甲高な女の叱る聲がするのも昨日と變りがなかつた。

『毎日厭な天氣だな。』と、言つて主人は外の方を睨んだ。

刹那、彼は北國の冬が毎日こんなであることを思つたのである。何となく故郷にでも歸つてゐるやうな氣がして、頭を押へ附けられるやうな鬱陶しさを覺えた。而して、こんな日が毎日つゞくなら、自分は一層ピストルで自殺をしてしまつた方がましだと思つた。小僧の樣子を見ると、ちやうど猫のやうに體を圓くして、脊を屈めてゐる。頭髮が延びたのが、尙ほ重苦しい感じを與へてゐる。而して、青黑く煤けたやうな癡鈍な顏附は、其の物怖えするやうな臆病氣な眼附と共に、遺憾なく故郷の人間の醜い特長を現はしてゐるやうな氣がして、常吉は、地の底に知らず識らず惹き込まれるやうに覺えた。

『あゝ俺は何うすればいゝんだ。』と、彼は叫んだ。

彼は此處は決して故郷ではない、故郷から幾百里離れた都會である、自分とは何の恩怨の關係もない都會であると瞬間の後に思ひ返したけれど、尙ほ、小僧が故郷の者であるといふ

ことが、何となく未だ自分と故郷と全然關係が斷ち切れないやうな氣がして、容易に其の憤りが靜まらなかつた。

『オイ、使に行つて來い。』と、不意に主人は怒鳴つた。

與作は、びつくりして顏を上げると何か主人の氣を害したかと氣遣ふやうに、二つの戰く黑い瞳が顏色を覗つたのである。

『其の靴を屆けてくるんだ、而して、お錢を貰つて來るんだ。道草をとるでないぞ。いゝか、お金を落すでないぞ。』と、頭からがみ〳〵と言つた。

やがて小僧は靴を下げて、背を圓くして店頭から出て行つた。小僧が居なくなると、主人はまた寂寥を感じた。而して、犬に向つて聲をかけた。犬は日頃この機嫌買の主人の心の中を悟つてゐるといふ風で、ちらと眼を此方に向けたばかりで、また彼方を向いてしまつた。而して、わざ〳〵起つてやつて來るのが物憂さうに見えた。犬のこの心持が常吉に分ると、彼の笑も は忽ち憎惡に變つた。

『この畜生！ 横着者めが。』と、言つて手近にあつた大きな刷毛を握つて、片隅に竦んでゐた白犬を目がけて投附けた。刷毛は壁に當つて刎ね返つた。犬は驚いて、戸外へ逃げ出すと何處へか姿を隱して了つた。

其の時、店頭へ脊の高い洋服を着た男が現はれた。其の男は毛皮のむく〳〵した暖かさうな襟卷をしてゐた。而して、兩方の手は厚い外套の隱しに差込んでゐた。金縁の眼鏡が眼深に被つた異樣な冬帽の廂の下に輝いてゐた。男は絶えず、口をもぐ〳〵やつてゐる。驚いて常吉は、下から其の男を見上げた。曾て、こんな大きな人に接したことがないやうな、今にも、自分は、この男に頭から踏み潰されはしないか、また踏み潰されても何ともいふことが出來ないやうな、たゞ何となく抵抗することが出來ないやうな一種の威壓された氣持で見上げたのである。

『オイ、お前の處では、靴の修繕が出來るか。』と、男は太い聲で言つた。

『へイ、出來ます。』と、主人は殆んど頭に考へず習慣的に答へた。

『早く出來るか。』と、眞直に突立つた大男は言つた。

『何處で御座いますか。』と、主人は、初めて考へて言ふ。

『こゝだ！』と、言つて、大男は其の長い脚を突如として、主人の鼻先に差し伸した。御鉢程もある扁平な靴の裏が、急に彼の眼を蓋するやうに、また壁のやうに空間を遮つた。而して、一時に腦に刺し込むやうに、光つた、裏の鋲が視神經を刺戟した。而して、其の間は實に瞬時であつたけれど、鼠の喰ひ破つた穴のやうに、一部分が黑く濕氣ばんで破れてゐるのを見た。

『分つただらう。』と、言つて、男は脚をもとに返した。主人は、急に明るくなつたやうな、息詰つた蓋を除かれたやうな輕々した氣持がした。しばらく、彼は男の顏を見上げてから、

『分りました。』と、靜かに答へた。男は頻りに口をもぐ〳〵動かしてゐる。而して、依賴する期日を定めて、歸る時に男はカッと口を鳴らした。何か赤いものが飛び出したかと思ふと、店頭の敷居の上に其れが落ちた。

男が行つてしまつた後で、主人はさも怖る怖る四邊を憚るやうにして、屈んで何であるかと敷居の上に附いた赤いものを見た。最初は、彼は何であるか分らなかつた。彼の胸はどき〳〵した。而して、額際に靑筋を寄せて、尚ほも屈んで、其れをば凝視した。――其れは赤と乳白との柔かに調和した色を帶びてゐた。而して、齒で嚙まれた無數の凹凸した傷が附いてゐた。チ

ウインガムであることが知られたのである。

主人は、覺えず、其の正體が分ると忌々しさうに舌打をした。而して、彼は躊躇した。與作が歸つて來たら、このチウインガムを敷居の上から取らせようと思つた。しかし、彼はまだ直には歸つて來ないと考へると、其れまで、これを其の儘にして置くことが、眼障りであり、氣が濟まぬやうに感じて彼は自ら火箸を持つて來て其れを落しにかゝつた。屈んで頭を下げると、不意に先刻の御鉢のやうな踵が、ドシン！ と落ちて來て、一溜りもなく頭を踏み潰してしまふと感ずると、彼は、胸がわく／＼となつた。急いで額を上げると、光つた太い鋲が雨のやうに頭の裡へ打ち込まれた。

彼は、職業とは知りながら、今日はじめて、自分といふものが、金持の踵で、頭を踏まれたことを感じたのであつた。

正午近く、與作は背を圓くして外から歸つて來た。彼は冴えぬ顏附をして、店頭でぐづ／＼してゐた。用事に役に立たなかつた時や、何か濟まぬことをした時は、いつも彼は主人から叱られるのを怖れて、かうしてぐづ／＼してゐるのであつた。常吉は、直に其れと悟つた。而して、白眼で睨と小僧の方を見詰めながら、

「何をぐづ／＼してゐるんだ。行つて來たのか？ 何うしたんだ。」と、言つた。

「ハイ、行つて來ました。お金は留守だから分らないつて言ふんです。」と、小僧は上眼で主人の顏附を盜み見るやうにして、其の聲が震へてゐた。

「持つて行つた靴を誰に渡して來たんだ。」

「女房さんに渡して來ました。而して、女房さんがさう言ひました。」と小僧は答へた。

主人は、暫らく暗い顏をして默つてゐた。彼は自分でもこの場合どうしていゝか分らなかつたからだ。突然、彼は怒鳴つた。

「仕方がないな、先達て行つた時は、修繕した靴をとゞけた時いつしよに拂ふと言つたんぢやないか？ 何で靴を置いて來たんだ。手前に使を頼んだつて、何一つ役に立つたことがない。背中ばかり圓くしていぢけてゐやがつて……」

と、主人は、また恐ろしい眼附をして其處に立つてゐる小僧を睨んだ。

「そんなこと知りませんから、置いて來て、申譯ありません。」と、小僧は言つて頭を下げた。小僧が、何か言つたのが却つて、主人の神經を焦立たせた。彼は、この前自ら行つて約束をして來たので、小僧の知つてゐることでなかつた。

「だから、先達て、さう言つたぢやないか？」と主人は怒鳴つた。

「忘れまして……」と、小僧は下を向いて突立つてゐた。

「忘れるといふことがあるか。何一つ役に立たん癖に。手前見たいな役に立たんものは、暇をくれるから、行つてしめえ。」と、常吉は手荒く刷毛を使つて、靴を磨き出した。

小僧は、其處に立つてしく／＼と泣いてゐた。店頭を通る人は、稀に横を向いて、この意味ありげな樣子に驚異の眼を見張つて行くのであつた。

常吉は、先刻、自分は金持の踵で頭を踏まれてゐるのだと考へてから、今、先方が約束を破つたといふことを聞いて、いつになく腹立しかつた。而して、――いろ／＼のことが頭に浮んで來た。

……俺が行つた時に、取次に出た女が見てびつくりしてしまつた。俺は、またあの女を女優か知らんと思つた。なぜつて素人があんな風をするものでないから。前髮を額際で分けて、べたりと頭に喰ひ附くやうに髮を詰めて、ずつと後方で垂下るやうに結つてゐたから、而して、白粉を濃く塗つて、眉を墨で長く描いてゐ

た。着物はだらしなく引摺つてゐたし、細い柔かさうな白い指に、光る指環もはめてゐたやうだ。春だつて低い方ぢやない。それに美人だつた。けれど、俺は直に癪に障つちやつた。俺は丁寧に挨拶した。『旦那様はおいでで御座いますか。先日御用を仰せ附かつた靴屋で御座います。』と言つた時は、其の女は、ぞろりと其處に立つて見下してゐたが、ちよつと頭の附根から上だけ、形式的に下げて、

『あゝ、さう。』と言つた。さながら階級の異なる上の人間が、下の人間を見て聲をかけるといふ調子だつた。……俺は、其時、同じ人間だ、この女がそんなに威張る權利が何處にあるかと思つた。しかし、これも商賣だから仕方がないと思つた。

男といふのは、先日見た男だつた。赤ら顔な骨太の質だつた。而して、素的に大きい足だつた。(常吉は、先刻、息を塞がれさうに思つた、太い鉄の澤山光つた御鉢のやうな靴裏を此時、頭に浮べた。而して、これは圓形だが、あの男のは角ばつてゐたと思つた。)男はちやうど籐椅子に凭りかゝつて、コップで青い酒を飲んでゐた。俺は、妙な不思議な場合に來合せたものだと其の時思つた。俺は下に跪いた。

『おみ足をちよつと拜見に上りました。』と、言つた。其の時、男は手から青い酒のコップを放さずに足を交る〲俺の額先に差し出した。俺は懐裡から、巻尺を取出して男の足の寸をはかつた。……

彼奴等の足をなんで俺が頂かなければならないのか。彼奴等の足許に坐つて、なんで俺は頭を摺り附けなければならないのか。生れながら、そんな運命を俺が持つて來たといふのか? 馬鹿らしいことだ。職業と思へばこそ、そんな眞似をして來たのだ。

『金を拂はない? 約束を破つた? 其れで濟まされるとでも思ふか。此の俺は決して承知が出來ないぞ。俺は彼奴等の踵を頂いて來たのだ。其の代り金は約束通り取らなければならない。』と、彼は心で叫んだ。

『木曜日の午前だ。間違ひなく出來るな。其れを屆けてくれ。其の時、前の代價もいつしよにやる。』と、赤ら顔の男が言つたのが眼前にちらつく。

彼は、欺かれたと思ふと、火の附いたやうに憤怒した。刷毛を握る手は無意識に力強く靴の皮を擦つてゐた。彼には、もとより先刻から泣いてゐる小僧の姿も、其の泣聲も耳に入らなかつた。

『意氣地なしめが、何うして食つていきやがるんだ。』と、突然主人は怒鳴つた。而して、怖ろしく白い眼を剝いて小僧の方を睨んだ。同時に彼は手に握つてゐる刷毛を板の上に投げ附けた。

いつか外から歸つて來て、また片隅に寒さうにぶる〲と體を戰はして竦んでゐる白犬は、自身にでも打ちつけられたのかと思つて、慌てて逃げ出しにかゝつた。其の臆病な樣子を見ると、彼は一層腹を立てずにゐられなかつた。

『どうして、かう家の奴等は皆な意氣地のない、臆病者の寄り集まりだらう。而して、俺が、一人でやきもきしてゐなければならない。』から彼は心に思つた。

彼は、餘程、犬を擲り附けて、同時に背を圓くしてゐる、青腫れのした小僧の額を叩き附けてやらうかと思つた。しかし、其の反感は、これよりも一層大きい憎惡――彼の鼻先に足を附けた、而して約束を破つた――男を同時に思ひ浮べることによつて、あらゆる力が其の方に向つて突進した。

『ヨシ、俺が行つて來てやる。』と、彼は自身に言つた。而して、仕事場から起ち上つた。

外には、寒い風が、低く押し附けるやうに曇つた空の下を吹いてゐる。暗愁と、憤怒と、限りない物憂さとが常吉の心を徒らに焦立たせた。彼は、自分を取り卷く病んだ妻、痩せた子供、臆病な犬、意氣地なしの役立たぬ小僧を、出來るものなら力いつぱいに振り撒いて、彈ね飛ばしたいと思ふと同時に、嘘を付いたり、冷笑したり、輕蔑したりする、あらゆる奴等に向つて罵りかかつてやりたいと拳を固めた。

『手前のやうな、役に立たない奴は今日ぎり暇をやるから出て行つて了へよ。』と、言ひ捨てて彼は家を出た。

いつも彼が出る時に、其の後を追つて行く犬が、何となく今日の主人の様子が變つてゐるので、怖れてか行かうとはしなかつた。其のことが、更に彼の心を憤らせた。彼は戻つて犬を蹴つてやらうかと思つたが、面倒臭くも感じられて、其の儘、行つてしまつた。

彼の體は、リウマチスのために歩くのすら困難であつた。憤りに燃えてゐる時は、氣附かないが、少し氣持を靜めて、手足に心を配ると、關節の處々がずき／＼と脈を打つて肉に喰ひ入るやうな鈍い、重苦しい痛みが感じられた。

灰色の町の上の空を、幾條かの黒い電線がたるんで過ぎてゐた。ちやうどこんなやうに體の内部の關節が黒く病氣のために太くなつて、たるんでのたくつてゐるのだらう。而して、寒さのために痛み出すのだ。しかも一番痛む處が、一番黒く太くなつてゐるにちがひない。だから、こんな鈍い、重苦しいやうな痛みがして、手や、足がだるくてよく働かないのだらう。彼はいろ／＼のことを歩きながら空想した。而して、無上に路を行く人間が憎く、また病氣のある自分の體といふものが憎かつた。自動車でも、自轉車でも、何んでもやつて來い。俺は、たゞ眞直に行くばかりだ。決して避けはしないぞ！　と彼は、心で叫んだ。而して、横を向かずに憎惡に燃えた瞳を輝かしながら、前方を凝然と睨んで歩いて行つた。

稀には、彼の様子を注意して、歩いてゐる人で、振向いて見送る者もあつた。而して、

『なんだ失敬な、人に突き當るなんて……』と、彼の姿が大分隔つてから、小聲で言ふのであつた。

『主人に御用があるなら社の方へ行つて下さい。』と、取次の者に言はれたので、常吉は其の家を出た。戸口のくゞり格子も、名刺の表札もこの前來た時に見た記憶を胸に呼び起した。而して、この前の時は、これ等の心ないものに對して何の特別な印象をも持たなかつたが、今、其等を見るに當つて、一種の不快と底の知れないやうな疑惑とを感ぜずにはゐられなかつた。格子戸の木地も、名刺の紙の色も、皆な普通と異つた、虚僞と欺瞞とを語つてゐるやうな氣持がした。

彼は、賑しい、人馬の往來する通りに、いつしか出て歩いてゐた。彼の憤りの情は、いつの間にか不安の念に變つてゐた。而して、下を向いて、力のない様子で敷石の上を歩いてゐるのであつた。やがて、石造りの大きな建物の前に立つた。而して、其れを見上げた。幾つかの窓が、其の建物に附いてゐる。其れが灰色の空の下に開いてゐる底氣味の惡い眼のやうな氣がした。其の窓の中には、あの男のやうに洋服を着た、髭の生えた人間が澤山ゐるんだと思つた。彼の胸は何となく、わく／＼となつた。けれど何の窓にも一つの顏も現はれてゐなかつた。彼は、もしあの男の顏がひよこり、窓から現はれたら、俺は叫ぶだらうにと空想に耽つた。其の時、不

意に自動車が笛を鳴らして、彼の方に來かゝつた。彼は慌てて道を開くと、遂に意を決して其の建物の中に入つて行つた。

寒い、光線の通りの悪い應接室に入つて、一つの壊れかゝつた椅子に腰をかけた時、彼の體はガタ〳〵と震へてゐた――なんで俺はこんな處までやつて來たんだ。あの人はそんなに信用を置けぬ人と何うして俺が言ふことが出來るんだ。まあこれんばかしの金のために、なんであの人が不義理なことをするものだ。其れを俺は勝手に疑ひ、恨み、憎んで、たうとうこんな處まままでやつて來た。これが正しいと言へるか？少くも商賣人としてなすべき行爲？しかし、約束を破るのはたしかによくない。（彼は、脊を伸ばした。）よくないにはちがひないが、こんな處まで押しかけて來る俺のやり方は一層よくないにちがひない――彼は、かう思ふと、直に其處から飛び出してしまはうかと思つた。併し、一方には、尚ほ強く彼を捉へてゐる疑ひの手があつた。

『何も、お前は悪いことをしたのでない。お前の妻は病氣だ。お前の生活は苦しい。お前は仕事をした其の代價を取りに來たのだ。お前は其の金を持つて歸つて生活に入用のものを買はなければならない。たゞお前はあの男との約束を守つて來たのだ。』と、彼を捕へてゐる、而して、幾分かあの男の人格を疑つてゐる、一方の思想が耳許で囁く。彼は、遂に何うすればいいのだと二たび前屈みになつて體をもぢ〳〵さしてゐた。

ふと、テーブルの上に乘つてゐる新聞が眼に入つた。彼は、何の氣なしに其れを取つて直ぐ眼の下に持つて來た。其の新聞は、もう發行日から、大分期日の經つた新聞であつた。其れと知ると、彼は、改めて其れを開いて見る氣持がしなかつた。たゞ呢と一面の廣告の上を見詰めてゐた。

ある思想が、彼の頭の中に閃いた――いろいろな廣告があるもんだ。毎日、これ程の廣告があるんだ――薬の廣告――石鹸の廣告――雜誌の廣告――學校の廣告――自動車の廣告――書物の廣告――船の廣告――機械の廣告――數へ切れない程ある。考へて見ると、どれもこれも皆な人間の生活に必要なものばかりなのだ。これを見ても、人間の生活は複雜だといふことが知れる。同時に、其の生活を營むことは眞に容易のことでないことが分る。しかし、是等の廣告は、皆な其の人間の生活を當込んで、自分等が少しでもより多く利益を得て、いゝ生活をしようとする爲めである――彼は、から考へると、さながら多くの人間が、この紙面の上で戰つてゐる如く感じた。生存競爭だ、弱い、意氣地なしは負けるのだといふ考へが、彼の頭を其の刹那占領する。

『俺は、今日此處へやつて來たのは正當なことだ。よく此處へやつて來る氣になつた。』と、彼は、自身を鼓舞した。

彼は、漸く心に少しの餘裕が生じた。而して、初めて頭を廻らして、この應接室の周圍を見たり、男がなぜ早く出て來ないだらうなどと考へたりすることが出來た。

忽然、彼は、異様な靴の足音を聞いたので、頭を擡げて其の方を見た。すると、硝子戸越しに廊下を大きな男が下を向いて、ゆるやかな歩調で行く。彼はびつくりした。其の男は金緣の眼鏡をかけて、太い毛皮の襟巻をしてゐる。間違ひもなく、今日の朝、店頭であの大きな御鉢のやうな靴を鼻先に突き附けた、四角な足の男であつた。この人もこの會社に務めてゐる人だらうかと思ふ間にも、白光りのする頭の摺れて平らになつた太い鋲が、無數にさながら雨の降り込むやうに、頭の裡に突立つて眼が眩みさ

うになつた。彼は、茶色に乳白色の混じたやうなチウインガムが敷居にこびり附いてゐるのを鮮かに二たび見ることが出來た。

　彼は、言ひ知れぬ恐怖に襲はれて來た。而して、今にも大きな力强い踵が落ちて來て自分の頭を踏み碎きさうな氣がした。『もう、もう決して、あの男の顏を見たくないものだ。幾何金を貰つても、あの大きな氣味の惡い四角な靴の修繕は斷りたいものだ。』と、彼は心に言ひ乍ら頭を竦めてゐた。鈍い異樣な靴音はだん〳〵彼方に遠ざかつて行つた。

『こんな處へ金の催促に來たつて困るぢやないか。今、此處には金を持つてゐない。明日にでも家へ來てくれ。』と、言ふ聲を聞いて、常吉は顏を上げると、赤ら顏の男が前に立つてゐた。いつか彼の待つてゐた男は、この應接室に入つてゐたのであつた。

　靴屋の主人は、尙ほ、光つた鋲の澤山附いた、而して、黑く鼠の喰ひ破つた穴のやうな傷の附いてゐる鉢のやうな靴裏が、飽迄眼に附いてゐて、今にも其れがドシン！と落ちて來て自分の頭を踏み碎きさうな氣がして、今、彼が何のために此處に來て、この男と相對してゐるかといふ目的も殆んど忘れてしまつた。而して、彼は、逃げるやうにして、この會社を出たのであつた。彼は、石段を降りると、怖る〳〵振り向いて、會社の高い建物に附いてゐる幾つかの四角な窓を見ずにはゐられなかつた。灰色の空の下に、其等の窓は怪物の眼の如く、秘密を語つてゐる。其處から、あの金緣の眼鏡をかけて、太い毛皮の襟卷をした、眉毛の濃い大男が覗いてゐないかと思つたからだ。若しも、其の大男が覗いてゐたら彼は氣絕したかも知れない。

　彼は、何者かに後を追はれるやうな氣持で、街の中を驅け出した。

　橋を渡り、四つ角を曲つてから、彼はある場處に來た時に路の上に立止つた。而して、頭の上に手をやつて、全く、誰の踵も乘つてゐないことを確めた。頭の上は、空虛で無窮の大空に達して、其の間を遮るものがなかつた。

　彼は、やつと安心して二たび路を步き出した。けれど、足には力がなかつた。小さな石にでも躓いたら轉びさうであつた。づき〳〵と關節が痛む。而して萎れた花のやうに首垂れてゐた。いつしか眼からは熱い淚が溢れ出た。其の時、彼は病める妻や、子供や、先刻叱つて來た小僧の姿などを眼に描いてゐたのであつた。彼の女は、まだ起きて仕事をすることが出來ぬだらう。與作が水を汲んだり、火を焚いてゐるにちがひない。

　さう思ふと、自分等に忠實である少年をなぜあんなに叱つただらうかと後悔したのである。どんなに苦しんでも、家の者は、一緒になつて離れることでないと思つた。

　寒氣は、次第に募つた。烈風に混つて、鳥の毛を飛ばすやうに雪が降つて來た。常吉は茫然として步いてゐた。

　偶々、小さな白い影が彼の行手を掠めて、街頭に其の姿を沒したのである。

　彼は、ハッと思つた。其の時、悲しげな低い口笛が彼の脣から洩れた。けれど慘酷にも風が其れを吹き消した。

（一九一八、一）

死者の滿足

冬の薄日の下に、町は、浮き出されてゐた。ちやうど、ものの面にかゝつた埃が、白く、黃色な日の光りの裡に、浮いて見えるやうなものである。

道を挾んで、この町には、兩側に、いろ〳〵な商店が、軒を並べてゐた。そして、道の上を、人間の群が往來してゐる。殊に、日暮方になると、それが、忙しく、慌しげに見えたのであつた。

家具屋の主人は、つくねんと火鉢の前で、通りの方を向いて、何といふこともなく考へ込んでゐた。やがて、彼は、思ひ出したやうに傍の臺の上に載せてあつた、一鉢の盆栽に眼を注いだのである。二三日前の夜、外に出し忘れて置いたので、細かな葉に霜がかゝつて、その葉が、花よりも、もつと眞紅に、冷たく色づいてゐた。

彼は、細い枝の先きに至るまで、生命の宿つてゐる、そして、折つたら、青々として水を吹きさうな、聲を潛めた、自然の活々とした姿を見ると、かうして、自分も、生きてゐて、それを樂しむことのできる悅びを、眞に感ぜずにはゐられなかつた。

彼は、煙草の煙をゆるやかに、意識しながら吹いては、その煙の影が、かすかに消えて行くのを眺めてゐた。

『もうぢきに、春になる。そして、暖かになるだらう。さうするといろ〳〵な樂しいことが湧いて來るのだ。どんな樂しいこと？ それは、いまはつきりと分らないが、なんでも町の遠くから、いろ〳〵な物音が起る、その中から知らない幸福が產れて來るやうな氣もする……なんにしても、そこには強い喜びが感じられる。俺は、決して、死んではならない。死んでしまへば、もう、何もないのだ。あゝ、俺が病氣だといふのか。それは、いつも俺の心を暗くするのだ。明るく氣持をしようと思つても、病氣のことを考へると、たちまち、滅入つてしまふ。しかし、もう幾年もかうして、無事に生きてゐる。病氣といつても、それは、誰にもはつきりしたことが分るものではない。恐らく、たいして、惡いのであるまい。

それにしても、かうして生きてゐる——俺は、何といふ仕合者であらう。その強健な擢つても死にさうでなかつた、荒物屋の主人が、去年の秋チブスで死んだ。この春は、また角の豆腐屋の主人が、朝までぴん〳〵してゐたものが晩には、腦溢血で死んだ。そして、俺は、まだこのやうに生きてゐる。どうして、死んだのが俺でなくて、あの人達だつたのだらう。なにか、そこに理由でもあるのだらうか。俺にだけはさういふことのないといふ、特別の理由があるのだらうか？』

彼は、このことを誰に向つてたづね、また、感謝していゝか分らなかつた。彼は、これまで、毎日のやうに朝晩、佛壇に燈火を捧げて先祖の靈を拜んでゐるのであるが、そのお蔭であらうかと思つた。たしかに、それも一つであらう。目に見えない、靈魂の加護を否定するだけの理由を彼は、別に持たなかつた。彼は、また、別に日頃から親切に診察して、藥をくれる醫者のSに對する恩義を忘れてはならないと知つたのである。

この時、家の前を、高聲で話をしながら、三四人の者が、ぞろ〳〵とかたまつて歩いて行つた。

彼は、その人達を見た。町内の床屋の主人と、古着屋の主人に、後から行つたのが、薬屋の主人で、その他の人々等であつた。

また、衆議院の選擧日が間近くなつたので、彼等は、A派の高山候補のために、運動員となつて働いてゐるのであつた。

床屋の主人は、そのために、自分は仕事を幾日も休んでゐた。薬屋の主人は、眼付のぎよろりとした大男であるが、この頃は、誰を相手にしても、一たび話が、選擧のことになると更らに眼球を大きくして、兩方の腕をまくつて、慷慨悲憤の口調で滔々と政事を論じた。そして、相手を飽迄、自分の説に賛成せしめずには置かなかつた。また、古着屋の主人は、どこへでもゆつくりと上り込んで、腰にさした煙草入を拔いて、いつまでも話し込むといふ風であつた。

床屋と古着屋は、いはゞ物好きから、こんなことをして騒ぐのが好きだといふのにとゞまつてゐたが、薬屋の主人は、それ以上に眞劍であり、熱度が高かつた。

『いつまでも、俺は、運動員になつて働いてゐるのでない。時節が至れば、俺自ら候補に立つて出るだらう。いまは、その將來の地盤を作るためだ。』

彼は、こんなことを傲語したこともあつた。しかし、町の人々は、候補者に立つのには、澤山な金と、人望とがなければならぬと信じてゐたので、誰も、この薬屋の主人の言ふことを眞に受けて聞いてゐる者はなかつた。

内氣で、あまり町内の人達とも付き合はない家具屋の主人は、心の中で、薬屋が嫌ひでならなかつた。そして、かう思つた――

『いくら、いまの政治家に缺點が多く、非難される點はあつても、まだ、あの男よりは、いくらかましだらう。よくは、知らないが、あの男のやうに、理窟つぽく、こせ／＼はしてゐまい。どこか金持だけに、太つ腹なところはあるものだ。もし、あの男のやうな者が、政治家になつたら、どうなるだらうか。俺が、かうして、一鉢の盆栽を眺めてゐるのにも、きつと有閑税などといふやうなものを課するだらう……』

ある時、薬屋は、近所の人達のゐる前で言つた。

『いよ／＼普通選擧が實施になる――もう、金がなくともいゝ。たゞ實力のある人間が打つて出られる。さうなると、いままで隠れてゐた人物が現はれる譯だ。いつ、俺達が、どこから、どう打つて出ないものでもあるまい。』

なかには、これを聞いて、たゞ理由なしに、さういふ時代の實現するのを怖れた者があつた。また、なかには、なんといつても金だ、金力がすべてを支配する間は、なんで金のない者が威張られるものか、そんなに考へるのは、空想に過ぎないと思つたものもあつた。また、なかには、いよ／＼暴力の時代がやつて來さうな氣がする、さうなつたら、いつたい、いままでの秩序といふものは、何うなるのだらうと、徒らに疑心に囚へられる者もあつた。

家具屋の主人は、やはり、薬屋の言ふことに、理由なく、脅かされる一人だつた。彼は、薬屋を懼れるがために、反對の政黨の候補者に、投票をしようかとも考へた。

しかし、B派は、營業税や、所得税を、却つて重くした黨派である。そのことを思ふと彼は、どちらにも心からの好意が持てなかつた。

『結局、俺は、何うしたらいゝだらうか。』

彼は、それが分らなかつた。

彼の心を重い憂愁が捕へた。自分の生活が他人の手によつて、何うにでも左右されるといふことに思ひ至つたからだ。たとへば、いつ市區改正や、道路擴張がなされないでもない。自分は、いつまでもこゝにゐたいと思つても、その

時は、どうすることもできない。さういふ風に考へると、何一つ、生活の安心を保證するものがない。自分で、自分の將來の生活を、きめることができないばかりでなく、自分の死んだ後、家族のものがどうなるかといふやうなことは、まるで闇の中を覗くやうなものであつた。

　彼は、この時、頭をあげて、見るともなく往來を見た。すると、澤山な人間が、道を歩いてゐる。何も、昨日と變つたことでないが、町には、いろ／＼な商店が、軒を並べてゐる。これを見た時に、彼は、不思議にも、慰められるやうな氣がしたのであつた。

『さうだ。どちらにしても、俺一人だけの問題ではないのだ。俺一人が、どう氣を揉んだつて、仕方のないことだ。また、この世の中を、誰の力でも、さう容易に、右に向け變へたり左に向け變へたりされるものではないだらう。だが、他の人は、俺みたいに、くよ／＼思つてゐるだらうか。どの顏を見ても、愉快さうに、何も、思つてゐさうでない……』

　彼は、日光の蔭つた、窓際に行つて、そこに、春の來るのを待つてゐる、ヒヤシンスの鉢を手に取り上げて、殆んど眼球に觸れるばかりにして、そのまだ短い圓やかな葉先に宿つた、蕾のうす紫に見入つたのである。そして、指頭で、根元の土を輕く突いて、乾き加減をはかつて見た。彼は、かうして、自然に對して限りない愛を感じたのである。そして、そのことを、決して、自身は無意義であるとも思はなかつた。

　夕日は、町の西空に沈んだ。ちやうど、赤いインキを、水面に滴らしたやうに、一點を中心にして、赤い色は、四方に、にじんだのであつた。彼は、その時刻になると、體中があつく、苦しくなるのを覺えた。

『寒いからだらう。』

　彼は、檢溫器を腋にはさんで、はかつて見た。電燈の光りで、水銀をすかして見ると、彼は、びつくりした。

　その夜、醫者のSは、いつもの、しかめ面をして、家具屋へ鞄を下げてやつて來た。

『どんな工合ですか？　また、無理なことをなさつたのでせう。』

　醫者は、先達の樣子では、そんなに、急に熱の高くなる筈がないといふやうな顏付をした。

　この醫者は、愛想を言はなかつた。そのかはり、率直なところがあつて、患者は、却つて、好い感情を持つ場合の方が多かつた。

『いえ、この頃の寒さが應へたのです。で、先生、どこか、湘南か、房州へでも、冬の間だけ行つて見ようと思ひますが、どうでせうか。』と、彼は言つた。

『さう、あちらは、暖かにちがひありませんね。』と、醫者は、顏に、微笑も浮べずに、眞面目に答へた。そして、頭を傾げてよく考へて見るやうな顏付をした。

『どこですか？　お行きなさるところは。』と、醫者は、注意深い眼で主人を見ながら、たづねた。

『いえ、まだ、行くところをきめた譯ではないのです。』

　彼は、漠然として、たゞさう思つただけなことを告げた。

　醫者は、靜かな口調で言つた。

『熱のある時分に、體を動かすことは、よくありませんね。まあ、お行きなさるにしても、熱が下つてからです。みんなは、たゞ暖かな處へ行きさへすればいゝやうに思ひますが、行つてからの生活が、遽かに變つたり、また、神經をいらだたせるやうなことがあつては、なんにもなりません。それに、醫者ですね、餘程、信用の置ける醫者が、附近にない限りは、あなたの體では、見合せなければなりません。こちらに

いらしても、安靜になさつてゐれば、いまのところ、決して、惡いといふ方ではなく、だんだん落付いて來てゐるのですから……』

主人は、醫者の話に、耳を傾けてゐるうちに、いつしか、暖かな地方へ行つて見たいといふやうな考へは、うすれてしまつた。そして、波打際に、白梅が咲いて散つてゐたり、また岩鼻に、紅い椿の花が咲いてゐる光景を、この二三日來空想したことが、畢竟空しくなつてしまつたと知つても、この醫者の言葉を信頼して、それを惜しまなかつた程であつた。

『先生、この熱は、ぢきに下るでせうか？』

彼は、不意に、不安を感じたのであつた。自分ながら、體の中に起つた、變化は分らなかつたからだ。

醫者は、ちよつと、眉のあたりを曇らせた。しかし、言葉の調子は、いつもの如く、落付いてゐた。

『エルボンを上げて見ませう。たいしたことはないと思ひます。』

『それは、お薬ですか？』

『スキツルから來た、解熱の新薬です。』

醫者は、明日、また來るといつて、歸つて行つた。

熱は、つゞいて降らなかつた。そして、湯に入られるやうになるのは、またいつのことであるか分らなかつた。醫者に許されて、一週間ばかり前であつたが、湯に入つた、その時の記憶が、二たび取返しのつかない、得難い經驗であつたやうに感じられた。ちやうど午後の零時頃で、自分の他には入つてゐる客も少く、冬の日とは思はれない程の、暖かな、長閑な日の光りが、高窓から射し込んで、湯のよどんだ、湯ぶねの中にまで落ちて來てゐた。

明るい光線は、血の氣の乏しくなつた、白い體を、心持ち圓味をつけてふは〱と浮かして見せたのである。彼は、足先から、手の指さきまで上から水量を透して、しばらく見入つてゐた。

「せめて、これ程に肥つてゐたら。」と、自分ながら錯覺をば羨んでゐた。

湯から出ると、一時のやうな健康さが、もはや、腕にも、足にも、宿つてゐないのを知つた。しかし、それでも、血が、勢よくめぐると見えて、皮膚の色が、雨に褪せた、櫻の花瓣ほどに、色ついてゐた。彼は、何となく、もう一度、昔のやうな體になれるやうな氣がした。

彼は、炬燵に當りながら、その時の喜ひを思ひ出してゐた。家の外は、日が陰つて、店頭は暗く、寒い風が、吹いてゐる。

午後になると、S醫者は、いつもの如くやつて來た。そして、昨日と同じやうに、鞄を座の傍に置いて話をはじめた。

「あなたは、どちらに、ご投票をなさいますか。』と、醫者は、決して、自分は、それを口外するものでないといふやうな、謹みのある、態度で言つた。

『さあ、私は、たとひ、どちらになつても、私達の生活に、あまり變りがないと思ひますから、棄權するつもりでゐます。』と、彼は、青白い指頭で、火鉢の縁を撫でながら答へた。

醫者は、さう聞くと、ちよつと反身になつた。

『それは、いけません。さういふ考への人が多いからこそ、世の中が、いつになつても進歩しないのです。A派にせよ、B派にせよ、それぞれ立派な主義がある上は、どちらかに味方しなければなりません。しかし、まあ、さうはいひますものの、その主義が、實現される曉といふのは、遠い未來です。いまのところ、人格の高い人物を、どちらにせよ、議會へ一人でも餘計に送るといふことが肝心です。』

「人物から、いつて、野田さんと、高山さんと——

どちらでせうか。』

『どちらも立派な人物でせう。薬屋さんや、床屋さんは、高山派で、大車輪の運動をなさつてるますが、私と野田は、もう多年の商業友達でして、何かにつけて、よくあの人の人物を知つてるます。まことに、温厚な、潔白な、謙遜な人格です。醫者の私が、患家へまゐつて、かた〴〵遊説をするやうに、世間へ聞えては、まことに穩當でありませんが、友達としてです、どうか、あなたが一票をいれてくだされば嬉しいのです。』

醫者は、診察にかゝる前に、鞄から聽診器を取り出して、手で、そのしなやかな黒い蛇のやうな革紐を解いたり、また、からめたりしながら言つた。

主人は、この時、野田候補について、それ以上に深く知りたいとも思はなかつた。なぜなら、その人格に對する敬慕の念よりは、薬屋や、床屋が、彼に與へた、暴慢な感じに對する反抗心の方が強かつたからだ。それがために、たとひ野田といふ人でなくても、彼等と反對派の候補に立つた人ならば、誰でもよかつたのだ。一時は、棄權しようかと思つたのが、醫者に、かう説まれると、彼は、營業税や、所得税を重くした政黨と知るにかゝはらず、B派に、一票を入れる氣になつた。しかし、彼は、すぐに、それを肯はなかつた。醫者に向つて、考へて見ようと答へたのみだ。

選擧日が、いよ〳〵近づいたのであつた。ある日のこと、黒い毛革の襟巻をして、金縁の眼鏡をかけた、野田夫人が、家具屋の店さきへはひつたのである。ちやうど、主人が、そこに居合せた。すると、夫人は、恭しく、丁寧過ぎる程、頭を低く下げて、挨拶をした。

『最初、もつと人格の高いお方があるのだからといつて、野田は、ご辭退申したのですけれど、つい皆様から推薦されまして、いよ〳〵候補に立ちましたのでございますが、何分にも、あちらには、お金も澤山おありなされば、また、人望もおありなさる高山さんですから、こちらには、勝味は、少しもないのでございます。しかし、もう、今となつては、どうにもなりませんので、ただ皆様のお力によつて、最後まで戰つて見るより途がないのでございます。それに、噂では、高山さんのうしろには、策士の方が、澤山ついておいでなさるとかで、策戰は、十分に行き渡つてゐますさうで、いくら戰つても、十のものは、八分まで、こちらに勝味はないとおつしやる方もありますが、こちらは、輿論に訴へて、正面から、できるだけ戰つて見るつもりでゐます。野田は、もしか負けたら、皆様に對して面目がないと言つて、この頃は、それに毎日徹夜がつゞきますので、神經衰弱にかゝつてゐますので、晝間になるとぼんやりしてしまふのです。妾が、代つてお願ひに上りました譯でございますが、何分にもよろしく、お力添へ下さるやう折入つて、お願ひいたします。』

曾て、夫人は、しば〳〵この家の前を通つたことがあつた。その時分は、無關係だつたので、見向きさへもしなかつた。しかし、それは、冷淡であつたといふより、必要がなかつたのだ。主人は、たゞ、默つて、挨拶をするより仕方がなかつた。彼は、世間が、そのまゝ芝居であるやうに思はれたのであつた。夫人の歸つた後で、

『俺は、まだ、あの醫者に、承諾をした覺えはなかつたのだがなあ……』と、自分に、言つて、訝かしく感じた。

彼女は、店を出る時分に、端書大の紙に「野田義正」と、赤色に、活字で刷つた、名刺を一束ほど置いて行つた。

彼は、その名刺を手に取りあげて、何のために、こんなに澤山置いて行つたかと考へたのである。彼は、これを見てゐるうちに、命令に近

い、一種の强請を感じた。

『どうか、これを配つてくれるやうに……』

彼は、さう言つてゐるやうに聞えた。それは、不快だつた。寧ろ憎々しかつた。

『馬鹿にしてゐる。ほんたうに、馬鹿にしやがる！』

彼は、あの女の圖々しさに呆れた。『俺が、ほんたうに、尊敬をしてゐるとでも思つてゐるのか？』から、思つて、皮肉を感じた。寧ろ憤りから、その名刺を寸々に引裂いて、屑籠の中に捨ててしまつた。

選擧日の前夜であつた。

『いよ／＼明日になりましたが、お願ひいたします。何なら、俥をよこしませうか？』と、醫者が、來て言つた。

『承知いたしました。近いのですから、歩いてまゐります。』と、家具屋の主人は、答へた。

その夜から、天氣模樣は、變りかけてゐた……いよ／＼翌日の朝になると、雪になつた。當日は、近來にない寒さで北風が荒んで、雪を捲いて、往來を掠めてゐた。すべての建物は、眞白であつた。電杜も、白かつた。

『寒いから、體にさはるといけない。よしたらどう？』と、老母が、言つた。

『およしなさいまし。』と、彼の細君が言つた。

彼は、醫者との約束があつた。もう一つには、藥屋や、床屋に對して、自分は、意志の自由から、節述、反對の行動を取り得るものだといふ、自負心から、彼は、襟卷で、顏を深く包んで、俥にも乘らず、雪を冒して出かけた。

選擧場の前は、人の群で混雜してゐた。しかも、雪混りの風が、烈しく吹きつけてゐたので、人々は洋傘で顏を隱したり、外套の襟を立てて、顏を埋めてゐたりしたので、彼は、内心顏を合はせることを怖れた、藥屋にも、床屋にも、遇はずに選擧場に入ることができた。そして、彼の素志であつた、彼等と反對に立つた候補者に、一票をいれて急いで、家に歸つた。

彼は、途中、惡寒を覺えたので、家に歸ると、すぐに、炬燵にはひつて床についた。けれど、その日の午後は、ぐつと熱が高かつた。

熱は、夜中になつても、下らなかつた。これまで、夜中には、熱が大抵降るのであつたが、……そして、いままでにない、胸の苦しさを感じたのである。

老母と、細君とは、口々に、S醫者を惡く言つた。

『病人であるから、行くといつても、止めるのがほんたうだのに、醫者の分際でありながら、知つてゐる者のためだからといつて、この寒い日に病人に行つてくれいと賴むものがあらうか。』

彼は、耳に何を聞いても、それについて、口をきかなかつた。老母と、細君は、二人の意見で、彼に相談をせずに、この日限りS醫者の來診を斷つた。そして、他の醫者を呼んだのである。

けれど、熱は、翌日になつても下らなかつた。

『まだ、選擧の結果は、分らないか？』と、彼は、臥ながら、かすかな聲で、たづねた。

『選擧どころの話ぢやないでありませんか。あんな近頃にない、寒い日に外へ出て行かなければ、こんなにならなかつたのです。いまになつては、とりかへしがつかないぢやありませんか。』と、まだ年の若い、細君は、さも怨めしさうに言つた。結婚してから、二三年になるけれど、彼女には、まだ子供がなかつた。

やつと、三日目の朝、選擧の結果は、分つたのである。彼の味方した、野田は、强敵の高山を倒して當選したのであつた。

『野田さんが、當選したか？――』

彼は、床の中に臥ながら、かう言つて、感慨に打たれた。それには、一生のうちに、曾て知らな

かつた喜びが感じられた。動機はいかやうであらうとも、公衆のために投げられた自分の力が、はじめて役立つたといふことを、偶然の機會は、彼に、かく知らしたのである。彼は、心のうちで憎んだ者を負かすことができた。彼にとつては、大きな仕事でなければならなかつた。自分一人の力では、到底できないことを、多くの人といつしよであつたためになされたのだ。そして、その大きな力の一部分に、やはり自分の力が加はつてゐるといふ一種の感激に他ならなかつたのだ。歡喜も、憂愁も、いままでのすべての鍵がそこにあるやうな……。彼は、いままでに悟らなかつたものを悟つた。病氣は、そのために重くなつたけれど、誰をも怨む氣になれなかつた。たゞ、彼の心には、滿足とかすかな希望さへあつた。また、彼は、感傷的となつて、流れ出る涙の枕を濡すのに委せてゐた。

　それから、數日の後であつた。黑い毛革の襟巻をした、金縁の眼鏡をかけた、野田夫人は、きらびやかに、着飾つた姿で、ふたたびこの家の店さきに現はした。そして、彼女は、鄭重に、當選の禮を述べたのである。けれど、その態度は、どこにも、しんみりしたところはなく、前の如く謙遜には見受けられなかつた。

取次に出た家具屋の細君は、これに對して、先方で頭を下げれば、こちらでも頭を下げるだけの、挨拶はしたが、夫人が出て行く時に、冷かな、蔑むやうな眼付で、後姿を見送つてゐた。

　主人は、つひにそれ以來、床から起き上らずに、ヒヤシンスの花の咲く季節前に、この世をば去つてしまつた。

（一九二四、一）

友達に

働いて、鞭打たれ、默つて死んで行つた
人々のことを考へると
私は眼に熱い涙が湧く。

正義の前に、勇敢に鬪はなくてはいけな
い。

他の何を夢想するか?
三十年、四十年の後には、私達の誰も、
　この地上に生きてゐないのだ。
やがて、すべてが過去となる
周圍がまた昔の儘の形ではゐないだら
う。

たゞ、正しい感激のみが
民衆の胸から、胸へと傳はる。
私達は、それを信じよう。そして叫ばう
弱き者のために！
虐げらるゝ者のために！

彼等

なんで、頭で考へてゐることと口で言
　ふこととは違ふんだらう
怖れてゐるからだ。
何を?
人間を！
いや、其の人間のことをいつてゐるんだ。
やはり、怖れてゐるからだ。
何を?
……………
不思議ぢやないか。眞理をこそ怖れもす
れ、其の他に何を怖れることがあるの
だ。

長い間籠の中に飼はれた鳥のやうに、彼
等は、靑い空と自由とを怖れてゐるの
だ。

（『未明感想小品集』より）

青空に描く

將軍

將軍は、支那の女を愛してゐたが、不思議なことには、その愛してゐる女の顏を忘れることでした。

忘れるといつて、顏を見て、その女が分らないといふのでない。もしさうだつたら、全く精神に異狀のあることと知られたが、たゞ、將軍に思ひ出さうとしても、愛する女の顏が、ぼんやりとして、頭に浮んで來なかつたのでした。

しかし、そのために、彼が、ほんたうに、彼女を愛してゐるのでないといふことはできなかつた。將軍は心から愛してゐたことに、違ひはなかつたのでした。

『俺の頭が、どうかしてゐるのだ。』と、將軍はつぶやきました。

しかし、他の女のことを頭の中で空想する時は、いつでも、その女の顏や、笑ひ聲までがはつきりと思ひ出されたので、こればかりでも、自分の頭が狂つてゐるからだといふことはできない、何うしたことだらう? と、將軍は、惑はざるを得なかつた。

『私は、あの女を心から愛してゐるつもりではあるが、傍からは、さう見えないだらうか……』と、將軍は、ある日、長くから仕へてゐる年老いた支那の男にたづねました。

『將軍さま、なんで、あなたが、あの女を愛されないことがありませう。それは、もつたいない位です。私共の眼には、あなた樣のあふるゝばかりのご愛情をさとることができます。』と、老人は、答へた。

將軍は、これを聞いて、うなづきながら、

『それ程までに、愛する女の顏が、折々、自分に思ひ出されないのは、どうしたことであらう。俺の頭が狂つてゐるのか、これには、仔細がなければならない。』

老人は、兩方の瞼をしばたゝきながら、しばらく默つてゐたが、

『あなた樣、それには、誠に仔細のありますことです。眞相を知らぬ女めは、これ程までに親切にして下さるものを、あいつが、あなた樣を少しもお慕ひしてゐないからです。魂の體の中にはひつてゐない人間といふものは、幽靈に等しいもので、いくら、はつきりと思ひ出さうとしても、これを眼に描くことはできません……』

と、言ひました。

將軍は、なんとなく胸の中をかき挘られるやうな氣がした。これ程までにして來た心づくしも、彼女には、何の手應へがなかつたかと思ふと、かぎりなく悲しかつた。

『そんなことがあるものか。お前は、それについて、何か知つてゐるのか?』

老人は怖る〳〵將軍を見上げました。

『何よりも、あなた樣が、女の顏をはつきりと思ひ出されないのが、證據であります。それは、女の魂を捕へられないからです。』

將軍は、いら〳〵して來ました。老人が、たとひ謹み深く、物を言つてはゐても、何んだか、侮辱されてゐるやうに感じられたのでした。

『あの女が、まんいち俺を愛さなくてもいゝ。それは俺が、あの女を愛してゐることに關係のないことだ。彼女を愛するのは、俺の自由なのだ。』と、將軍は、言つた。

老人は、たゞ默つてゐました。すると、將軍は、返答を促すやうに、頭の上から、
「さう、思はないか？」と言つた。
老人は、さびしさうな笑ひを顏の上に浮べました。そして口をもぐ／＼してゐたが、
『あなた樣の權力は、なんでも、自由にさせます。』と答へた。
たちまち、將軍の眼は、光つて、顏の色は蒼白く變つた。
『權力によつて、服從を強ひると言ふのか？それなら、長い間お前が從つて來たのも、權力を怖れ、暴力を怖れたからであるか。しかし、曾て、俺は、誰に對しても、奴隷を、強ひたことがない！』
弱々しく見える老人は、將軍の權幕に怖れて、手足がわな／＼と震へてゐました。
『どういたしまして。私などは、何の役にも立たない人間なんです。かうして、將軍樣の靴を磨いてゐる他に、用のない人間なんです……』
と、憫みを乞ふやうに、頭を下げました。
この有樣を見ては、流石に、腹を立てても、將軍は、これ以上怒ることはできません。ぼんやりと眼を老人の禿頭から離して、何か考へてゐました。
この時、老人は、二たび顏を上げて、
「あなた樣が、もし、あの女の顏を思ひ出さうとされるなら、あの女の指にはまつてゐる黑い石の入つた指輪をお考へなさいませ。さうすると、あの女の顏が、自然に、浮んで見えて來ます。」
『……成程、どういふ譯だ。』
『あの黑い石の中に女の魂が、宿つてゐるからです。』
將軍は、眼を閉ぢて、それを試すやうに、沈默してゐましたが、不意に、非常な熱心さをもつて、
『そ、それは、何うしたことなのだ。仔細をどうか聞かしてくれ。』と、言ひました。
老人は、冷かな笑を白い頰に浮べて、遠くの雲を見るやうな眼付をしました。
『それは言へません。どうぞ、今は、聞かないで下さい。』と答へた。
將軍は、老人の哀訴を斥けることは、できなかつたのでした。
白い女の指に、食ひ込むやうにはまつてゐる、黑い石の光る指輪を眼に描くと、女の顏が、自然にはつきりと浮んだのであります。……將軍は、もはや、愛する女の姿を思ひ出すために、焦躁を感ずるやうなことはなかつた。
「これには、深い仔細があるにちがひない。それを知りたいものだ。」
彼は、これを女にたづねることの無益なのを知つてゐました。なぜなら、女は、誰に對しても、あまり口をば開かなかつた。將軍はそれを知るためには、やはり、老人を、責めなければならなかつたのです。
「私は、あの女の祕密を言ひたくありません。けれど、あなた樣の權力は、それを言はせるのであります。」と、老人は、言つた。
ある日のこと、將軍の前に坐つた老人は、次のやうなことを物語りました。それを、將軍は、默つて聞いてゐました。
……彼女には、相思の青年があつた。青年は、志士であつたから、常に一緒にゐることが出來なかつた。そして、今日あつて、明日ない命であつたから、樂しくいつしよに暮らすことができなかつた。僅かな逢瀬をたのしみにしてゐた。青年は、南方支那の生れであつた。どこで何うして手にいれたか、珍らしい石のはひつた指輪を彼女に贈つた。その石は、黑かつたが、ある時分には、それが夏の夜の空色に、青くなつて見えた。また、ある時は、曇つた暮方のやうに灰色

になつて見えた。また、ある時は、赤酒の罎を透かして見るやうに紅かつたのである。その上、青年は彼女に向つて、

『この石は、なんでも、あなたの心の影をうつします。悲しめば、悲しみの色に變り、喜べば喜びの色となる。もし、私のことを思つて下されば、いつでも私は、この石の中に現はれて來ます。』と言つた。

女は、この指輪を大事にしてゐる。そして、さびしい時には、ぢつと、自分の指に見入るのであつた。

これが、老人の將軍に、話したことであります。

『その青年は、死んでしまひました　あの女は全くあなた樣のものであります。』

かう老人は、言つたけれど、將軍は、何となくさびしかつた。それからといふもの、女に遇ふたびに、黑い石のはひつた指輪が眼についた。

彼は、いつでも、女の姿を眼の前に呼び出さうとした時は、白い、痩せた指にはまつた——いくらか、その黑い石は、四角といふより、長方形をしてゐたが——指輪を思ひ出したのでした。すると、瞼の腫れぼつたい、平常ぢつと、うつむいてゐる時は、大きな黑眼にそれが被さつてゐる、どこか、憂へを帶びてゐる顏が浮んだ。

『成程、老人が言つたやうに、あの指輪の中に、女の魂がはひつてゐる。』

將軍は、時に、その指輪を見て、妬ましく感ずることがあつた。しかし、その青年は、死んでしまつた。それを、いまさら口に出すのは、自分に恥ぢなければならない。かう思つて、將軍は、すべてを心に隱して、彼女の指輪について、何も語らなかつたのでした。

ちやうど、將軍は、南清にゐました。秋にはひつて、頭の上の空には、雲行が、亂れ勝であつた。四方の山には、風が吹いて、木々の枝葉は、夜となく、晝となく鳴つたのである。

何となく、季節ばかりでない、世界が不安になつたと將軍は、思つてゐました。一日、彼の愛する女は、故郷の遼東へ、ちよつと歸してくれいと言つて、將軍に賴んだ。

將軍は、永久に、彼女が、彼から去つて行くのでないかと疑つた。そして、返事を躊躇してゐた。

『妾は、ぢきに戻つてまゐります。冬にならない前に、必ず、こゝへ歸つて來ますから……』

と、彼女は、言ひました。

遼東には、年老いた父母と、それに、青年との間に生れた、男の子が生活してゐる筈であつた。子供のことは、曾て、女の口から言はれなかつたが、將軍は、これも、老人から、聞いてゐたのである。

『お前が指輪を私に渡して行くなら、許してやらう……』と、將軍は、言つて、女の眼の中を讀まうとしました。

女は、すなほに、指輪を拔いて、これを將軍に渡しながら、

『妾が、戻つて來ましたら、この指輪をもらひます。』と、言つた。

南方の海の色を、北方の夕暮方の空の色を、炎の光りを、時に匕首の鋭い閃きと、戀しい人の笑顏をその裡に寫し出した、黑い石も、それは彼女に限つてゐたことでした。彼女の去つた後、將軍は、指輪を出して、日の射す窓の下で透かし、または燈火の影に、翳してそれを眺めたが、彼の眼に映るものは、獨り彼女の姿ばかりであつた。彼は他のものを見ようとしなかつたから、それで、滿足してゐたのである。

山は荒びて、雪を催す冬に近づいて來ました。將軍は、毎日、彼女の歸るのを待つやうになつた。彼女は約束に違はずに、戻つたのであり

ます。
『何か、故郷では、變つたことがなかつたか？』
將軍は、さらに、無口になつて、旅疲れの見える彼女にたづねた。
彼女は、眼の中に、硝子のやうに、冷たい光りをたゝへながら、
『妾には、前夫の間に子供があります。やつと十にしかなりませんが、頭の髪の縮れ工合から、眼付が、夫を生寫しにしたやうです。祖母は、どういふものか、この孫をあまり可愛がりません。その子は、至つて我慢強くて、何か辛いことがあつても、それを人に悟られまいとして、大きな口を開けて笑つて見せる。そんなことまでが、全く、死んだ父親に似てゐます。あまりよく似てゐるので、妾は、氣味の惡い程びつくりしました。そして、いぢらしく思ひました。妾が、立つ時に、どんなに怨めしさうな顏付をして、妾を眺めたでせう……』と、言ひ終つて、彼女は、涙を拭きました。
將軍は、彼女の指に、指輪のないのを知つてゐたが、意識して、そのことを考へまいとした。
『私が、子供から、お前を奪つたやうなものだな。』
『左樣でございます。』
將軍は、しばらく、默つてゐました。
『それに、子供は、病氣であります。もう長い間、患つてゐるので、體が痩せて、頭だけ大きく見えるのです。』
『お前は、その子供のことを忘れられまい。』
『どうして、思はずにゐられませう……』
『すぐに、歸つて、看病をしてやつたら何うだ……』
『途が、遠方でございます。もう、歸る時分には、氣候が寒うございますから、子供は、死んでゐるかも知れません。死んだら、鴉になると言つてゐました』
『鴉に？……』と、將軍は、頭を傾けた。
彼女は、將軍をきつと見つめました。
『雪が降る前に、妾は、歸るとお約束いたしました。それで、妾は、戻つてまゐりました。どうぞ、あの指輪をお返し下さいまし。』と、言つた。
將軍は、ちよつと返答に躊躇したが、忽ち、笑ひ崩れた。
『指輪は？……さうだ。そんなものを預かつたやうだつたが、どこへか失くしてしまつた。よし、代りに、俺が、お前の好きない〻指輪を買つてやらう。』
これを聞いた時に、彼女の顏は、花瓣の褪せたやうに青白く見えた。力の強い者は、常に、弱い者に對して、約束の義務を果さずに濟むものです。そして、權力によつて、自由に振舞ふものです。誰も、將軍の行爲を咎めるものはなかつたでせう。

* * * *

有史以來、曾て見なかつた程の戰爭が起つたのは、それから、間のないことでした。
そこは、荒涼とした、廣い野原であつて、激しい、戰ひの跡をとゞめてゐます。四方の木立は、砲火のために、裂かれたり、また赤く、焦げてゐました。草は、黑く血に濡れて、見渡すかぎり、人間の屍で埋まつてゐる。敵も味方も別がなく入り混つてゐた。うつぶしたもの、仰向いたもの、拳を高く上げたもの、重なり合つてゐる者、いづれも苦痛の名殘を見せて、齒を喰ひしばつてゐた。いままで、聲を限りに喚いたものの上へ、氣味惡い沈默が襲つてゐたのでした。
たま〳〵遠方にあたつて、大砲の轟きが聞えるばかり。廣野の上の空は、平常と何の變りがなかつたやうに、白い雲が、結ばれて、又いつしか解けてゐた。その間に、すが〳〵しい青い色

ず、自然の悠久を思はせるのでありました。誰が、そこに斃れてゐる者が、國にゐる時分には、善良な父親であり、よく働いた息子等であつたことを思ふものがあらう。すべてが、腐れ、朽ちて行くのでした。この時、多くの死骸の中で、たゞ一つ動いてゐる、まだ、呼吸の通つてゐるらしいのがあつた。

それは、服裝から見ると、將校であつたが、腰のあたりを彈丸が貫通したらしく、起たれなかつた。とつくから、正氣づいてゐたが、ぢつとして、救ひの來るのを待つてゐたのでした。彼は、かくしの中を探つて、一個の黑い石のはひつてゐる、婦人持の指輪を取り出した。そして、それを、ぢつと眺めてゐたのである。彼は、卽ち、將軍でありました。

黑い石の裡に、ある日の光景が、ありありと浮んだ。――しかも、彼女と別れた、一月ばかり前のことであつた。

「さうです。妾を、子供から奪つたものは、あなたでした。わたしの男の子は、十にたつたばかりです。長らく病んで、頭だけが大きくて、體は瘦せてゐます。怨めしさうに、別れる時に、妾を見て、死んだら、鴉になるといひました。」……と、彼女は、言つたのであつた。

この時、鴉の聲がどこかでしました。たちまち、黑い影が、彈丸のやうに、前後に飛ぶのが見えた。黑い鳥は、屍の上に止つて、何かつゝいてゐる。將軍は、辛うじて伸び上つて、それを見ようとして、

「あ！ 眼球をつゝいてゐる！」と、いつて叫んだ！

いままで、死んだ人間ばかりと思つたのを、たまたま生きてゐる人間の聲を聞きつけると黑い鳥達は、却つて、その方へと襲つて來ました。

將軍は、鴉たちに殺されるのだと思つた。しかし、この時、それが、運命のやうにも感じられた。彼は、劍を拔いたけれど、無數に身のまはりに集つて來た、鴉を追ひ拂ふことができなかつた。一羽の瘦せた頭の大きい鴉は、先刻から、彼方の立木に止つて、虛を狙つてゐたが、箭のやうに飛んで來て、將軍の片眼を突いて閉してしまつた。黑い血は、顏を流れた。戰ひに疲れた、負傷した將軍は、仰向になつて斃れた。その時、黑い鳥達は、その肉を飽かずに突いては喰ひはじめたのであります。

女の笑つた時

父親と娘の二人が、つゝましやかな生活を營んでゐた。

父親は、ある機械工場につとめてゐる、勤勉な職工だつたのです。――昨日と今日に、變りのあらう筈がなかつた。やはり、街には、ぞろぞろと人間が歩いてゐた。電車は、軌道の上を走つてゐたし、カーヴの處に來ると、鐵と鐵の摺れ合ふ音を立ててゐた。そして、やがて、みんなから、その日は忘れられて行くのでした……。

少くも、その日は、彼女にだけは忘れられなかつた。午後のこと、父親は、工場で過つて齒車にかゝつた。無神經の機械は、引かゝつた人間をそのまゝ卷き込んでしまつた。齒車の間から、赤黑い血がたらたらと流れるのが、硝子のはまつた窓を透して、射し込む黃色の光線に照らされて見えた。そして、齒車は、片腕と隻脚をもぎ取ると、氣絶した人間を冷たいコンクリートの上へ投り出した。それも、暫くして仲間が、機械の運轉を止めたからでした。

「ほんたうに、俺達は、ごまかした生活にしないんだ。眞面目に働いてゐるのになあ……」と、大騷ぎをした後で、仲間の者が溜息をついた。

他人には、平素と變りないその日が、娘には、永久に深い印象を殘したのでした。なぜな

ら……ちやうど、工場に、悲劇の起つた時分、街の貴金屬店では、自動車から降りた夫人が、ダイヤのついてゐる、襟にさすピンを物色してゐました。また、ある一軒の美食家達の集まる、料理店では、一人の紳士がメニュをながめて、なんでも腹いつぱいうまいものを詰め込んで、そして、滋養分を貯藏して置いて、徹夜する時にへこたれないことを考へてゐました。また、銀行の出納口では、札束が、こゝでは一二圓の賃金を得るために、勞働者が命がけで働いてゐることなどは、全く問題になつてゐないやうな無造作な調子で、手から、手へ渡されてゐたのでした。……娘が、何うして、自分達の身の上を考へずにゐられませう。

彼女は、それから、以前のやうに笑はない女になつてしまつた。

小さな、手で押す車の中へ、不具者になつた父親をいれて、彼女は、町の方へ引いて行つた。賑やかな通りへ出て、そこで二人は、場處を別れて、前へ蓆を敷き、娘は、その上に子供の玩具を、父親は、その日の新聞などを並べて、通る人に商つたのであります。

父親は、あちらの赤い電柱の蔭に、娘は、露路のはひり口に、ぢつと一處を見つめてゐた。

「お母さん、水鐵砲を買つておくれよ。」と、前を通りかゝつた時に、子供は、母親に手を引かれながら、眼を蓆の上へ落して言つた。

若い母親は、無理に、強く子供の手を引張つて、叱るやうに、

「さう、買ひたがるものでありません。家に鐵砲があるぢやありませんか？」

「水鐵砲を買つておくれよ。」

しかし、子供は、つひに引かれて行つてしまつた。獨り、娘は、いましがた、若い母が子供に言つた言葉を、すぐに忘れてしまふことができなかつた。……世間の人達が、こんな玩具に拂ふ金まで儉約をしたなら、いつたい自分達の生活は何うなるのだらう？　ふと、そんなことが考へられたからでした。

彼女は、しばらく、無心に、眼前を去來する、女や、男の、足先を眺めてゐました。白い足や、黒い足が、面白さうに動いてゐる。しまひに、それ等が、人間から離れて、勝手に生きてゐるやうにあたりを泳ぎ廻つた。たちまち、彼女は、その渦卷の裡へ、頭を突込むと、無數の足が、待つてゐたやうに、彼女の頭を踏み付けた。――こんなやうな幻想に耽つたのでした。

ある夜、賣れ殘つた品物をまとめて、父親の乘つてゐる車にいれて、それを押しながら、暗い路を家の方へ歸つて行きました。巷のどよめきが、だん〳〵後方に遠のいて、片町の商家は、大抵戸を閉めてしまつた。一方は、大きな邸宅の外側の塀になつてゐて、其處に繁つた林の枝葉は高く空を遮つてゐます。

ぐわう、ぐわうといつて、夜風が、林に當つてゐる。星の光りの稀れな、曇つた空に、黒く天蓋のやうな木の頭が、搖れつゝありました。父親の乘つてゐる車は、甲蟲が地面を這つてゐる程にしか、夜の底に見えなかつた。そして、かすかな車のきしり音は、しんとした周圍の靜寂に吸ひ取られてしまつてゐるとしか思はれなかつた。

この時、前方の曲り角を遶つて疾走して來た自動車があつた。眩しい照燈に、彼女の眼はくらんだ。父親の乘つてゐる車を無理に横へ押して、片方に避けようとした刹那、野獸のやうな自動車は、車の上へのしかゝつて、それを粉碎して、なほ五六尺もあちらへ引摺つて行つた。父親の悲鳴につゞいて、運轉手の頓狂なわめき聲が、彼女の耳に聞かれたが、そのわめき聲が、轢いてしまつた後であるやうな氣がするので、たしかに、運轉手は、この時、居眠りをしてゐた

と思はれたのでした。

＊　＊　＊　＊

彼女が、カフェーの女給となつたのは、それから後であつた。心の痛みは、長く、いつまでも癒えなかつた。そして、それは、いつしか彼女の性質までも變へてしまつた。彼女の、過去に起つた、悲慘な事件について知らないものは、『あんなに、美しい顏付をしながら、なぜもつと愛嬌がないものだらう……』と、言つた。

いつも彼女は、腰をかけて、ぢつと一處を見つめてゐました。窓の上に、いろ／＼な色彩を映して、面白く、をかしく、人生の影は流れて行つた。また、拭き清められた鏡の面に、仲間の女達が青春の血に燃えた脣を、花のやうに寫すことがあつても、彼女ばかりは笑ひを忘れたごとく、何か考へても、考へても思ひ出せないものに、氣を取られてゐるやうに默つてゐました。

社會には、常識で理解されないことが多かつた。無口の女を自分だけにはしやべらせようとして、また笑はせるために、自惚からやつて來る客もあつたからです。

彼女は、さうした目的でやつて來る男達には、少しの興味を惹かなかつたけれど、いま傍のテーブルで、顏染みの客が、友達に話してゐるのを聞いてゐるうちに、いつしか、その話題になつた男を變つた人であると思つたのでした。

『……なか／＼あの男の望むやうな口が見附かるものでないさ。氣儘に本を讀んだり、旅行をしたり、勤めの體で、できるものでない。それをあの男は、毎日、下宿から飛び出すと、街の中をぶら／＼歩いて、そんな口がないかと探してゐたのだ。そんな口のありつこはないさ。たうとう下宿屋を食ひつめてしまつたのだ。追ひ出されては、他を探して移つて行く……。

ちやうど、そこへ、あの男の叔父から、相談をして來たのだ。あの男にとつて、こんな幸福はなかつたのさ。なんでも遠い親類筋に當る者だとかいふのだが、數年前、若夫婦で、南洋へ出稼に行つたのだ。そして、二人は、一生懸命に働き、やつと廣い土地を耕し、いまでは、子供が一人生れて、何不足なく暮らせるやうになつて、急に、夫が死んだのだ。いまさら、年若い細君が、その土地を捨てて歸ることもできない。そこで、彼に縁談の口がかゝつたのだ。困つてゐる最中ではあるし、勞さずに、富めるのだから、こんないゝことはないのだが、あの男は、斷つてしまつたのだ……』

『變り者だね。しかし、偉いな。』

『いくら偉くても食つて行けなくては、仕方がないでないか。まあ、聞きたまへ、たうとう困つた末に、何を考へたか、賣卜者になつたのだ。自分の運命が何うにもならないくせに、他人の運勢を見てやるといふのだから、圖々しいものだ。あのＦ公園前の三階建のボロ家屋の一番上の家根裏に間借りをして、雲を見て笑つたり、風の聲を聞いて考へてゐるのさ……』

『そんな處で、生活が立つものだらうか。しかし、却つて、人間ばなれをしてゐるので、そんな商賣にはいゝのかも知れないな。』

『あの男などは、この世界を、僕たちなどと、たしかに異つて、見てゐるのだね。』

この時、この話を聞いてゐた彼女は、顏を上げて、客の方を見ました。

『誰が行つても、その方は見て下さるでせうか。』

二人の客は、女の方を向いて。

『それは、商賣だもの、……君に、見てもらふことがあるのかね。』

『あゝ、それで、君は、いつも鬱いでゐるのだな。』

＊　＊　＊　＊

その男は、自ら求めて、三階の家根裏に住ん

だのだけれど、畢竟、大地の外へ追ひやられた形だつたのでした。狹苦しい、埃だらけの室の眞中に、經机のやうな、小さな臺を据ゑて、その上に算木と筮竹と、人相を見る大きな眼鏡を乘せてゐました。

かうした、運命を占ふといふやうな職業は、たしかに、世界戰爭以後めつきり增えたので、世の中が、二たび迷信時代にはひつたやうにさへ思はれたのです。しかし、こゝへは、あまり、客がやつて來なかつた。

その稀にしかない客を待ちつゝ、彼は、ぢつと机の前に坐つてゐるうちに脚氣にかゝつた。そして、兩足がだん／＼重く、腫れて來た。さうなつてから、彼は、どんなに大地の上を戀しく思つたでせう。

『冷たい地面を素足で步けば、この病氣は癒つてしまふのだが……』と幾たびとなく思つたか知れない。

しかし、いまは、容易に、この三階から降りることができなかつた。職業と生活が、しつかと家根裏に彼を囚へてゐたからです。彼は、細長い、ギチ／＼と鳴る、しかも暗い梯子段を下りて、町へ出るのは、日が暮れてから、公衆食堂へ行く時位のものでした。それも、そこ／＼に食事を濟ませると、この三階へ上つてしまつた。

室には小さな窓がついてゐた。雀の鳴聲が、その廂でしたことがある。あらしの日には、凄まじい風の叫びが、そこから聞えた。けれど、天氣のいゝ晚方には、石竹の花のやうな、赤い雲が、小窓から覗いて話しかけたのです。

『南洋の島へ行けば、波が白く光つてゐますよ。椰子の木は、青々としてゐるし、香ひする花ばかりで埋つてゐる廣い廣い圃がある……なぜ、行つて見る氣にならなかつたのですか？』

その雲は、西日に、片方の翼を金色に緣取られて、大きな鳥が飛んでゐるやうに、いつしか何處へか見えなくなつてしまひました。

彼は、叔父から、緣談の話があつた時に、――絕海の彼方の島にある、さびしい森を夢想した。その森の中にある、たゞ一つの建てられた家を眼に描かずにゐられなかつた。そして、その下にゐる人は、そこへ渡つた日から、死ぬ月まで、眞黑く日に燒け、土に塗れて働いた。その土地を、勞さずに、どうして自分のものとすることができよう……と、思つたのでした。

『俺には、そんな欲がない。だから、馬鹿に見えるだらう。俺には、この世の中のことが、何一つ眞劍になつて、打つかつて行く氣になれないのだ……』

公園近くで、いろ／＼な人間が通るけれど、看板が小さいので、眼につかないせゐか、あまり身の上を見てもらひに來る者がなかつた。彼は、つくねんとして、机に向つて、待つてゐました。

たま／＼、梯子段のあたりで、音がした。誰か上つて來たのではないかと、思つて振向くと、後方の破れた襖の間から、鼠が顏を出して、室の片隅にあつた、新聞紙に包んだ、食ひ殘しの麵麭の屑を引いて行かうとしてゐた。恐らく、こゝに棲む鼠は、うまい臭をかいだことがなく、いつも飢ゑてゐるのでした。

彼は、それを知つたけれども、別に、鼠を追はうとする意志もなく、向き直ると、窓の方を見つめて、憂鬱な顏付をしてゐました。

『あゝ脚が痛い。』

思ひ出したやうに、かう言つた。そして、足を伸ばして、痛むあたりを擦りはじめる。彼が、かうする時、ほんたうに、土を戀しく思つた。自分で、選んでこゝに移つた生活であつたが、土を踏めないばかりに不幸を感じた。窓際へ行つて、見下すと、眩しい日の光りを浴びて、アスファルトの面に小さな影を落して、無數の人間

が、蟻の子を散らしたやうに、その人達は、幸福を意識してゐるとも思はれなく、動いてゐました。
　彼は、しばらく、眺めてゐた。ちやうど、その時でした。派手なパラソルを翳した若い女が群集の中から離れて、一人、この建物の入口をはひつた。
『こゝへ來たのだらうか？　それとも、二階にゐる、あの裁縫師のところへ……』
　不思議に、なんだか、異常な經驗が起りつゝあるやうな氣がした。もし、この室へあの女がやつて來るなら……彼は、机の前へ戻つて、頭の中で、空想をつゞけた。
『……なぜ、俺は、こんなことを、感ずるのだらう？　六感が……あの女の姿が……歩きつきが……』
　彼は、當然、其處へやつて來るものを待つやうに、耳を傾けてゐました。それが、長い間の約束であつたやうな氣さへされた。
　果して、小さな、一段、一段、拾ふやうな女の足音が、上つて、近づいた。そのたびに彼の胸は、いつになく怪しくふるへたのでした。

＊　＊　＊　＊　＊

　女は、よく店へやつて來る男の友達といふのは、この人であるかと、しみ〴〵彼を眺めたのである。男は、筮竹を鳴らして、卦を置きました。
『これから、貴女の運勢は、だん〴〵いゝ方に向いて來ます。』と、言つた。
『どうしたら、その、いゝ運勢になりますかしらん。』
『やはり、働くのですな。眞面目に働いてゐるうちに、だん〴〵幸福が向いて來るのですね。』
『それが分らないのです。みんな、眞面目に働いてゐるぢやありませんか。ごまかしたり、拾ひ物でもしなくて、どうして、幸福になれるか、それが分らないのです。』
『あゝ、さういふことは、易では、分りませんな。』
『妾は、さういふことが、易で分ると思つて來たのですの……』
　男の眼は、光つて、青白い顏に血の氣が生じた。
『ほんたうです。貴女のおつしやることは、道理です。しかし、易には、それが分らない。あゝ、私は、もうこの職業がいやになりました……』
『かうして、氣儘にお暮らしなさればいゝぢやありませんか。あなたは、お金持になれるのを自分から斷つて、人間よりも、雲や、鳥や、風を相手にお話なさるといふ、變つたお方だと聞いた時、妾は、なんだか、嬉しかつたのです。』
『さうぢやありません。やはり、私は、地の上が戀しいのだ！』と、男は、言つた。
　女は、あきれた顏付をして、
『あゝ……』と、ため息をついた。
　男は、女の手をしつかりと握りました。
『私は、あなたのために、さう決心したのです。私は、自分のためには、何事もできない人間なんですが……』
『いつ、あなたは、それを決心なさつたのですか？』
『先刻、三階から街を見下して、貴女のはひつて來られる姿を見た刹那からです……』
『まあ……』
　彼女は、眼を見張つた。そして、無邪氣に、滿足したやうに、はじめて、につこりと笑ひました。

（一九二七、九）

山の上の木と雲の話

山の上に、一本の木が立つてゐました。木はまだこの世の中に生れて來てから、何も見たことがありません。そんなに高い山ですから、人間も登つて來ることもなければ、めつたに獸物も上つて來るやうなこともなかつたのです。

たゞ、毎日聞くものは、風の音ばかりでありました。木は別に話をするものもなければ、また心をなぐさめてくれるものもなく、朝から夜まで、さびしくその山の上に立つてゐました。同じ木でも賑かな都會の中にある公園にあつたならば、毎日、いろ〳〵な物を見、またいろいろな音を聞いたでありませう。しかし、この木にそんなことがなかつたのであります。

夜になると、遠くで獸物の吠える聲と、永久に默つて冷たく輝く星の光りと、何處へともなく驅けて行く、無情の風の音を聞いたばかりであります。

しかし、この木にたゞ一度忘れ難い思ひ出があるのでありました。それは、ある年の夏の夕暮方のことであります。あんなに美しい雲を見たことがありません。その雲は、實に美しい雲でした。にこやかに笑つてゐました。體には、紅、紫、黃、金、銀、あらゆる眩いほどの華やかな色彩で織られた着物を纏つてゐました。髮は、長く、黃金色の波のやうに捲き上つてゐました。その雲は、恐らく大空の年若い女王でありましたでせう。悠々と空を漂つて、この山を過ぎるのでした。

木は、魂まで、ぼんやりとして、たゞ夢心地になつて、空を見上げてゐました。

『何といふ美しい雲だらう。あんな美しい姿のものが、この宇宙には住んでゐるのだらうか?』と、木は、思つて眺めてゐました。

すると、その雲は、ちやうど木の立つてゐる山の上に差し懸りました。木は、見上げれば、見上げる程美しいので、氣も遠くなるばかりでした。この時、ちやうど、鈴を振るやうな、やさしい聲をして、雲は下を見て、

『あゝ眞直ないゝ木だこと。風にも、雪にも折れないで、よく育ちましたね。ほんたうに強い、雄々しい若い木ですこと。どんなにこの山の上に一人で立つてゐるのではさびしいでせうね。しかし、忍耐をしなければなりません。妾は、また、きつと、もう一度此處へやつて來ますよ。それまでは、達者でゐて下さい。いろ〳〵の面白い話や、珍らしいこの世界中で妾の見て來た話をしてあげますよ。』と、木に向つて雲は言ひました。

木は、ほんたうに夢とばかり思つたのです。そして、この時ばかりは、自分程、幸福なものは世の中にないと思ひました。いつまでも木は、この美しい雲をば見てゐたかつたのです。また、翼があつたら、自分も飛んで雲の後を追つて、いつしよに旅をしたいと思ひました。しかし、木には、もとよりそれが出來なかつたのです。そのうちに、だん〳〵雲の姿は、遠ざかつてしまひました。

その日から、木は、この雲の姿を忘れる事が出來ませんでした。そして、もう一度こゝへやつて來るといつた雲の言葉を思ひ出して、毎日さびしい日を送つてゐました。

しかし、それからといふものは、決して、そのやうな美しい雲をば木は見なかつたのです。夏も去つてしまひ、秋にもなつたけれど、この

美しい雲は、二たび眼のとゞく限り、空に姿を現はしませんでした。

木は、深い、深い、愁ひに沈みました。毎日、山の頂きを通る雲は、灰色の物悲しいものばかりでありました。

木が、かうして悲しみに沈んでゐました時、鴉がやつて來て、

「なんで、そんなに悲しんでゐるのですか?」と、木に向つて聞いたのであります。

木は、心の中の悲しみを隠してゐることが出來ませんでした。そして、鴉が、さも親切に言つてくれましたので、木は雲の話をして、

「お前さんは、羽根があつて、遠い處まで旅をしなさるから、もし、その雲を御覧になつたら、私に教へて下さい。」と、木は鴉に向つて頼みました。すると、鴉は、

『さうです。私は、海の方へも飛んで行きます。また廣い野原へも、時には、村へも飛んで行きます。けれど、この頃は何處へ行つても、これと同じ曇つた空色で、曾てそんな美しい雲を見たことがありません。私も氣を付けてゐますが、もし鶫がこゝに來ましたら、よく聞いてごらんなさい。あの鳥は、諸國を飛び廻りますから……』と、木に向つて言ひました。

哀れな木立は、さも頼りなささうに見えました。鴉は、やがて別れを告げて去つて了ひました。それから幾日も經つた冬のはじめです。鶫が、どこからかやつて來てこの木の枝に止まりました。木は鴉の言つたことを忘れずに、早速雲の話をしました。

『鶫さん、どこかでこんなやうな雲をご覧になりましたか?』と、木は、鳥に向つて聞きました。

敏捷さうな鶫は、小さな首を傾げながら、考へてゐましたが、

『あ、見ましたよ。それは、こゝからは、大そう遠い處であります。海を越えて、あちらの賑かな都會でありました。ある日の晩方、私は、その都會の空を、急いで此方に向つて旅をしてゐますと、ちやうどあなたのおつしやる美しい雲が、都會の空に浮んでゐました。下には、尖つた塔や、高い建物などが重なり合つて、馬車や、自轉車などが往來の上を走つてゐました。そして、街の中は、たそがれかゝつて、燈火が、ちらちらと水玉のやうに閃いてゐました。』と、鶫は言ひました。

これを聞いてゐた木は、深い溜息を洩しました。

『いまは、そんなに遠い處に、雲は行つてしまつたのですか。』と、木は、さびしさに堪へられなかつたけれど、雲の無事なのを聞いて安心いたしました。

「どうか、また、その雲をご覧になつたら、私のことをよく告げて下さい。」と、木は、鶫に頼みました。

『きつと、あなたのことを雲に告げますよ。私は、もう明日は此處を去つて、遠くへ行きますから、また、どこかで、あの雲を見ますでせう。』と、鶫は言ひました。

木はまたこの鶫とも別れなければなりませんでした。かうして、さびしく山の上に一人いつまでも殘されたのであります。

それからも毎日、情ない風は木を搖りました。雪は、舞つて來て枝にかゝりました。そして、明けても暮れても、灰色の雲は、頭の上を行きました。

いつになつたら、木は、あの美しい雲の姿を見るでありませう。また、夏がめぐつて來るには、長い間があつたのです。

河水の話

河水は、行方も知らずに流れて行きました。前にも、また、後にも、自分達の仲間は、しつきりなしにつゞいてゐるのでした。そして、どこへ行くといふ、あてもなしに、たゞ、流れてゐる方に、みんなは行くばかりでした。

前に行つたものは、笑つたり、叫いたり、喜ばしさうに踊つたりしてゐました。はやく、まだ見ない、めづらしいことの澤山ある世界へ行きたいと、あせつてゐるやうにも思はれたのです。

ほんたうに、それは、遠い、また、長い旅でありました。しかし、すべてのことに終りがあるやうに、この旅も、いつかは盡くる時があるでありませう。

河水は、晝となく、夜となく、流れて行くのでした。

ある日のことです。不意に、黄色な、破れた袋のやうなものが、飛び込んできました。それは、バナヽの皮でした。

『あゝびつくりした。やつと、私は、眼がさめたやうな氣がする。』と、バナヽの皮は、言ひました。

南洋の林の中に、あつた頃のさわやかな香が、まだ殘つてゐて、この時、ふたゝび冷かな水の上で、したのでした。

『お前さんは、いままで眠つてゐたのかね。』と、水は、たづねました。

『こゝは、どこですか？』と、バナヽの皮は、驚いた樣子をして、聞きました。

『こゝは、どこだか俺にも分らない。だが、この歩いてゐる幅の廣い一筋の道は、俺達の領分だといふことができる。お前さんは、これから、こゝへ飛び込んできたからは、俺達の行くところまで、いつしよに、ついて來なければならない。』と、水は、答へたのであります。

バナヽの皮は、しばらく考へてゐたが、

『あゝ、私は、まだ、船に乘つてゐるやうな氣もしたが、それは、ずつと昔のことだつた。あれから、きつと、どこかの港に着いたのだらう！　そして、どこかの町へ運ばれて、人間の手にかゝつて、こんなに着物ばかりにされてしまつたのだらう。しかし、もし、私に、あの甘い中身があつたなら、私の眠りは、いつまでもさめずに、しまひに、好い氣持のまゝ私の體がすつかり、酒のやうに、醸されて溶けてしまつたかも知れない。だから、何が、幸となるか分るものでない。中身を取られて、水の中に捨てられたので、もう一度私は、氣がついて、眼がさめたのだ。まだ、私の皮膚には、あの林の中にあつた頃を思はせるやうな、青い部分が殘つてゐる。實に、あの林の中にあつた時分は、私は、何といふ、青々とした體であつたらう……。』

バナヽは、獨りごとをしながら、追懐に耽つてゐました。

河水は、その言葉をきいてゐました。そして、それに同情をしてか、また、あざけるのか、分らないやうな、さゝやかな笑ひ聲を立てたのであります。

『いくら眠るからといつて、そんなによくも眠れたものだ。俺達は、まだ、十分間と一處にぢつとして眠つた覺えがない。』と、河水は、言ひました。

『南の熱い、森の中に咲いてゐる花や、また、木の葉は、それは、ぢつとしてよく眠ります。なか

には、あまり眠りすぎて、自然に溶けてしまふものもあります。」と、バナヽは、答へました。
それから、バナヽは、河水について、流れて行きました。すると、突然、そこへ一本の杖が落ちて來ました。
「あゝ、やつと、私は、盲人の手から、脱け出て來た。一刻も、休みなく、堅い石の上や土の面を、こつ〱やられたのでは、私の身がたまつたものでないからな。」と、杖は、獨言のやうに言ひました。
「お前さんは、どこから、どうして、こゝへ來たのです。」と、河水は、問うたのです。
杖は、長い體を、水の上で、ぐる〱と振りながら、
「按摩に、長いこと、私は、つかはれてゐたのです。どうかして、少し體を休めたいと思つてゐましたが、一日として、その暇がありませんので、はやく、按摩の手から脱れて、どこかへ身を隱して、ぐつすりと眠りたいと思ひました。けれど、按摩は、私がなくつては、ちつとも歩けませんので、どこへ行くにも、私をつれて行きました。私の體は日夜の過勞のために、だんだんやせて行きました。私は、逃げ出す機會を、待つてゐました。ところが、今日、ちやうど橋の上で按摩の下駄の鼻緒がゆるみました。按摩は、橋の欄干に私の體をもたせかけて、下駄の鼻緒をしめてゐました。私は、この時と思つて、する〱と欄干から下へ、ぬけ落ちたのであります……」と、杖は、物語りました。
この話を、河水は、默つて、聞いてゐました。傍で、バナヽの皮も、聞いてゐたのです。
「お前さんは、水の上へ落ちるといふことが分らなかつたか？ 俺達はこれから、どこへ行くか分らないのだ。」と、河水は、言ひました。
バナヽは、いま、うす暗いところを通つたが、あすこは、橋のかゝつてゐる下であつたのかと思ひ返しました。
「私は、どこへ落ちても、按摩に、休みなく使はれてゐる境遇よりは、ましだと思ひました。」と、杖は、答へたのです。
水は、だまつて、きいてゐましたが、二三度、大きく體をゆすつて、
「しかし、これからは、否應なしに、お前方は、俺達の行くところへついて來なければならない。」と、言ひました。
バナヽも、杖も、その言葉を聞くと、いつたい、どこへ行くのだらうかと思ひました。そして、それに對して、多少不安を感じないではゐられませんでした。
河水は、ある時は、ゆるやかに、ある時は驅足でもするやうに、速かに走りました。ゆるやかな時分には、バナヽの皮も、杖も、ゆるやかに流れて、互の身の上話でもするやうに附いたり、離れたりして行きましたが、速かに流れる時は、やはり、バナヽの皮も、杖も、驅足をしたのでした。そして日の輝く下の、野原の中を流れたり、右や、左に、野菜畑の繁つたのなどを見ながら行つたのです。また、さびしい林の中を通つたこともありました。
「あなたの產れた林といふのは、こんなところでしたか？」と、林の中を行く時に、杖はバナヽの皮にたづねました。
バナヽの皮は、半分黑くなつた頭を振りながら、
「全くちがつてゐます。もつと、太陽は、大きく、そして、林の中は、ぎら〱と明るく光つてゐました。」と、答へました。
寒い國の山で、子供の時分に育つた、杖には、それを想像することができなかつたのです。
そのうちに、水の上が、紅く色づいて、夏の日は、だん〱暮れかゝりました。林のなかで、鳴いてゐた蜩の聲も靜まると、星の影が映つ

たのであります。ふたりは、暗くなつてしまひました。

しかし、河水は、休まずに、流れて行きました。日は暮れても、空の色は、ほんのりと明るく、土手の下を流れて行くと、螢などが飛んでゐました。なんでもその土手へは、近所の人々が涼みにきてゐるやうに、思はれました。バナヽの皮は、若い男と女とが、樂しさうに語り合ひ、笑つてゐる聲をきゝますと、急に産れた、南の故鄕が戀しくなりました。自分のなつてゐた木の下で、ちやうど、これと、同じ笑ひ聲や、さゝやき聲を聞いたことがあつたからです。

『どうか、私をこの土手の岸へ上げて下さい。私は、せめて、こゝで故鄕を偲びながら、果てたいと思ひますから……』と、いつて、バナヽの皮は、河水に向つて、たのみました。

『俺達は、そんな約束までしなかつた筈だ。』と、いつて、河水は、さつさと流れて行つてしまひました。バナヽの皮も、それに、ついて行かなければなりませんでした。

バナヽの皮も、杖も、今更河水の無情なことを悟りました。そしてこれからどうなることだらうと思つてゐました。

もはや、夜も、大分更けた頃であります。河水は、町の間を流れて行きました。どの家も戸をしめて、町は、しんとしてゐます。たま〳〵あちらの町の裏から、按摩の笛の音が聞えてきました。杖は、それをきくと、急に、いままでの生活が戀しくなりました。かうして、たよりない身の上よりか、たとひつらくても、賑かな町の中を歩いて、いろ〳〵なものを見たり、聞いたりする方が、どれ程、ましであつたか知れなかつたからです。

『どうか、私を、この町の岸に附けて下さい。』と、杖は、河水に向つて賴みました。

けれど、河水は、振向きもしませんでした。そして、一層速力をはやめて、町の間を過ぎて行つてしまつたのです。

バナヽの皮と、杖は、後になつたり、先になつたりしました。體の弱いバナヽの皮は、ぐつたりとしてしまつて、もはや、何事も、あきらめてゐたやうです。獨り、杖は、どうしても、このまゝ流れて行くことが、不安でたまりませんでした。

『これから、私達は、どこまで行くのでせうか。』と、河水に向つて、たづねました。

『それを、どうして俺が知るものか。』と、河水は、言ひました。

「あなたにも、それは、分らないのですか？」と、杖は、驚いて叫びました。

バナヽの皮と杖とは、それからも、まだ河水について流されて行つたのです。しかし、彼等は、まだ希望を捨てませんでした。

無題

兄弟、聲が低くて聞えないと言ふのか。
あまり、風がひどいからだ。
もつと近く寄つて、手を握り合つて行かう。

ほんたうに、ひどい風だ。
石を飛ばし、樹を折り、家を倒しさうだ。
なんといふ日に、俺達は出遇つたのだらう。

兄弟、あの鳥を見るがいゝ。
友は友を援け、子は親を援けて行く。
西の方は、だん〳〵明るくなつた。

（『未明感想小品集』より）

年譜

明治十五年（一八八二年）
四月七日、越後、高田に生る。健作と名づけらる。父、澄晴。母、千代。

明治二十一年
田島小學校へ入學す。

明治二十五年
高田尋常小學校に入る。
父、上杉謙信を崇拜し、春日山古城趾に、神社を創設したので、幾十度か、五智街道を往來する。越後の自然が、少年時代の自分の頭に、深く浸み込んだのは、この時である。

明治二十六年
母につれられて、燕温泉に行つたのは、この年と記憶する。浴客等は、いまだ行燈の下で將棋をさしてゐた。

明治二十八年
高田中學に入る。江坂香堂先生を識る。

明治三十年
この頃、一家春日山に移る。修學旅行に佐渡へ行く。學校にて、相馬御風氏と學友たり。

明治三十一年
象山の高弟、北澤乾堂氏高田中學に來りて教鞭を執る。氏について、漢詩を學ぶ。

明治三十三年
學校の空氣に慊らず、文藝雜誌、政治雜誌等を亂讀して、上京の志切なり。

明治三十四年
四月上京。早稻田大學豫備校の試驗を受け入學。專門部英文哲學科より、轉じて、大學部英文科に修學す。その間、學校よりも、恩師坪内逍遙氏の指導を受けたり。小泉八雲氏英文學史を講ず。この頃より、ロシア文學を愛讀し、また、ナロードニキの思想を好めり。在學中、西村醉夢氏、高須梅溪氏、吉江孤雁氏、相馬御風氏、片上天弦氏等と親しくす。

明治三十八年
早稻田大學卒業。卒業論文に、ラフカディオ・ハーンを論ず。

明治三十九年
越後長岡市、山田藤次郎長女吉子と結婚す。
早稻田文學社に入り、島村抱月氏の指導の下に、『少年文庫』を編輯す。新しい童話運動を起さんためであつた。この頃、戸張孤雁氏と交り、氏の紹介にて、東洋經濟新報社に片山潛氏を訪うた。

明治四十年
長女晴代生る。
正宗白鳥氏の紹介にて、讀賣新聞社に入り、社會部夜勤の編輯記者となつた。上司小劍氏が、當時の主任であつた。

明治四十一年
第一短篇集『愁人』（隆文館）を出版す。坪内逍遙先生が序文を下さる。十二月『綠髮』出づ。
新ロマンチシズムの文學を研究する「青鳥會」を起す。秀才文壇記者となり、矢部白雨氏と編輯に從事す。
十二月一日、長男哲文生る。

明治四十二年
雜誌記者をやめて、專ら文筆にて立たんと決心した。『惑星』（春陽堂）を出版する。秋、甲信に旅行す。

明治四十三年
生活貧困を極めた。二兒營養不良に陷る。
『闇』（新潮社）、童話集『赤い船』（京文館）を出す。

明治四十四年
『物言はぬ顔』を書く。

明治四十五年
自然主義と戰ひ、新ロマンチシズムの先驅者として、「早稻田文學」より、推讃の辭を受く。
この年、「讀賣新聞」に、短篇作家としての、自分の唯一の長篇『魯鈍な猫』を書く。
短篇集『物言はぬ顔』（春陽堂）、『少年の笛』（新潮社）、『魯鈍な猫』（春陽堂）、感想小品集『北國の鴉より』（岡村書店）を出す。

大正二年（一九一三年）
三月、『白痴』（文影堂）を、十月、『廢墟』（新潮社）を出版す。
四月、二女鈴江生る。
大杉榮氏「近代思想」にて、余の作について批評す。この頃、氏と知る。
十二月二十三日、長男哲文六歳にて死す。

大正三年
一月、詩集『あの山越えて』（尚榮堂）、感想小品集『夜の街にて』（岡村書店）、三月、「少女文學叢書」の一篇『美しき空へ』（阿文館）、九月、短篇集『底の社會へ』（岡村書店）、十二月、『石炭の火』（千章館）等出づ。

大正四年
一月、『紫のダリヤ』（赤い鳥社）、四月、『雪の線路を歩いて』（岡村書店）。

大正五年
文化學會員となり、島中雄三氏等と知る。
十二月、三男哲郎生る。

大正六年
『物言はぬ顔』（新潮社）を出版す。

大正七年
二月、『小作人の死』（春陽堂）、三月、小品集『青白む都會』（春陽堂）、四月、『描寫の心得』（春陽堂）、十月、『血で描いた畫』（新潮社）、十二月、童話集『星の世界から』（岡村書店）等を出版す。
十一月四日、長女晴代、十二歳にて死す。貧困時代の二兒を失うて、悲しみ骨に徹し、甚しく鞭打たる。

大正八年
著作家組合會員となり、大庭柯公氏、堺利彦氏、長谷川如是閑氏、有島武郎氏等と知る。
八月、『惱ましき外景』（天佑社）、十二月、童話集『金の輪』（南北社）出づ。

大正九年
一月、一家流感に襲はれ、悉く死に瀕す。
文壇諸家より『十六人集』を贈らる。
『不幸な戀人』（春陽堂）を出す。
日本社會主義同盟の發起に參加す。

大正十年
一月、短篇集『赤き地平線』（新潮社）を出す。
二月、三男英二生る。
四月、童話集『赤い蠟燭と人魚』（天佑社）、九月、『雨を呼ぶ樹』（法制時報社）、十一月、童話集『港についた黑んぼ』（精華書院）を出版。

大正十一年
二月、『血に染む夕陽』（一歩堂）を出す。
出版從業員組合員として、勞働祭に加はる。
七月、感想集『生活の火』（精華書院）、童話集『小さな草と太陽』（赤い鳥社）を出版す。

大正十二年
二月、『彼等の行く方へ』（阿文館）、感想集『人間性のために』（二松堂）、三月、童話集『氣まぐれの人形師』（七星社）、五月、童話集『紅雀』（集成社）出づ。
六月、『種蒔き社』發起にて、中村吉藏氏、秋田雨雀氏、自分のために、「三人の會」開かる。
九月、大震災の時、小石川區雜司ケ谷町に居れり。

大正十三年
日本フェビアン協會に入り、「社會主義研究」に寄稿。三月、童話集『飴チョコの天使』（イデア書院）、七月、感想集『藝術の不安と恐怖』（[illegible]社）、九月、童話集『赤い魚』（研究社）出づ。

大正十四年

日本小説家協會員となる。十一月、島中雄三氏の厚意にて、『小川未明選集』豫約出版さる。一卷、二卷、三卷、四卷、小説集、五卷、六卷、童話集なり。

大正十五年

三月、四男優生る。

四月、『小川未明選集』完了。選集の完結と共に、筆を小説に絶ち、專心童話に行く決心をなし、「東京日々」「早稻田文學」にて、聲明す。

故郷の實家にて、夫婦養子をなす。神社の後を繼がしめんがためなり。

同志と日本無産派藝術聯盟を組織す。この頃より、マルキシストと袂を分つ。機關誌「解放」に寄稿す。四月、『未明感想小品集』(創生堂)、童話集『兄弟の山鳩』(アテネ書院)、七月、短篇集『堤防を突破する浪』(創生堂)、童話集『海から來た使』(創生堂)、十二月、童話集『蜻蛉のお爺さん』(創生堂)の出版をなす。

『薔薇と巫女』、アメリカ、桑港にて、英譯出版さる。

昭和二年(一九二七年)

一月、『未明童話集』第一卷(丸善株式會社)出版さる。

春、『兒童文庫』のために、京阪にて講演す。

夏、春日山の實家火災に罹る。

九月、『未明童話集』第二卷出づ。

秋、聯盟の同志等と伊勢山田にて文藝講演をなす。

十月、『彼等甦らば』(解放社)を出す。

昭和三年

七月、『未明童話集』第三卷出づ。十月、「新興文學全集」第一編の中に、「未明集」出づ。

昭和四年

九月、文士、畫家と共に、伊豆下田、大島に遊ぶ。往路大に船に醉ふ。

十月、父八十四歳、母七十六歳、相携へて上京し、二十日ばかり滯在す。その間、東京を方々見物なさしむ。

「矛盾」に寄稿す。十二月、自由藝術家聯盟の組織に加はり、童話と童詩の革新を期す。

刹那に起り來る
色と官能と思想の印象

自分が藝術に於て書きたいと思ふところは、或る物象に對して起るところの心的現象と、其の物象とが相混交し、相錯綜する姿である。一つの物象に對して我々の心の上に起つて來るところの活動は、決して單一なものではない。過去の記憶もあれば、神經や、官能も働いて來れば、時間もあり、知識もあり肉體的の官能も働いて來る。一つの刺戟に依つて自己全體が活動して來る。其の活動を紙の上に再現したい。

自分の欲する藝術は、靜的のものではない、動的のものである。其の動的も一本の線ではなくて、雜多なものの活動である。一本の筋の運動ではない、斷片的に複雜したものである。其の斷片的のものが、謂ゆるセルフ全部の刹那に於ける活動であつて、縱し切れ切れではあつても、其の底に存在するセルフが卽ち其の切れ〲なものを統一して居るのである。刹那に[illegible]り起る印象――色と、官能と、思想の印象を其の儘寫したい。斯う云ふ刹那的にして、而も全我的の藝術を書きたい。

(『未明感想小品集』より)

昭和五年四月　十　日印刷
昭和五年四月十三日發行

現代日本文學全集　第二十三篇

著作者　岩野泡鳴
　　　　上司小劍
　　　　小川未明

發行者　山本美
東京市芝區愛宕下町四丁目四〇番地

印刷者　杉山愛二
東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二

發兌　東京市芝區愛宕下町四丁目四〇番地
改造社
振替東京八四〇二番
電話芝（[illegible]）一一二一番　一一二二番　一一二三番　一一二四番

株式會社秀美舍印刷